

東方～もう一人の巫女～

ルミナス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想郷には『博麗の巫女』がいる。

博麗の巫女は、人と妖怪のバランスをとる者。つまりは、人間の中では最強の人だ。

そんな、世界の一つの物語。

もし、そんな巫女の他にもう一人巫女が居たら？

コレから始まるのは、もう一人の巫女『神無月 葵（かんなづき あおい）』話である。

\*この作品には隼さんのキャラを委託されております

目次

少女の日常

プロローグ

第一話

第二話

第三話

設定

紅魔郷

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

第九話

第十話

第十一話

第十二話

第十三話

第十四話

葵の日常1

第十五話

第十六話

第十七話

第十八話

第十九話

108 100 95 89 84 78 72 62 57 53 49 44 37 33 28 25 15 11 8 3 1

第二十話

116

第二十一話

123

第二十二話

129

妖々夢

第二十三話

134

第二十四話

140

第二十五話

143

第二十六話

150

第二十七話

156

ルカの日常1

第二十八話

159

第二十九話

166

第三十話

173

第三十一話

179

第三十二話

184

第三十三話

187

閑話〜ルカの過去〜

192

第三十四話

198

第三十五話

203

萃夢想

第三十六話

206

第三十七話

212

第三十八話

217

第三十九話

222

第四十話

229

第四十一話

234

レテイシアの日常1

第四十二話

238

第四十三話

242

第四十四話

245

第四十五話

250

第四十六話

254

第四十七話

258

第四十八話

262

人石異変

第四十九話

267

第五十話

270

第五十一話

274

第五十二話

278

第五十三話

284

第五十四話

287

第五十五話

291

永夜抄

第五十六話

295

第五十七話

298

第五十八話

303

第五十九話

308

第六十話

313

第六十一話

317

第六十二話

323

第六十三話

鬼灯の日常1

第六十四話

第六十五話

第六十六話

第六十七話

第六十八話

第六十九話

閑話〜葵日記〜

第七十話

閑話〜鬼灯の過去〜

花映塚

閑話〜葵の過去〜

第七十一話

第七十二話

第七十三話

第七十四話

第七十五話

第七十六話

第七十七話

第七十八話

第七十九話

第八十話

第八十一話

第八十二話

328

333

338

342

345

348

351

354

358

363

366

369

372

376

382

387

390

397

401

405

408

413

417

第八十三話

421

第八十四話

427

黒竜異変

閑話〜幻想入りした少年〜

432

第八十五話

435

第八十六話

438

第八十七話

441

第八十八話

445

第八十八話

450

第八十九話

454

第九十話

459

葵の日常2

第九十一話

464

第九十二話

467

第九十三話

470

第九十四話

474

第九十五話

477

第九十六話

481

コラボ企画〜第二段〜

486

コラボ企画2〜第二段〜

489

第九十七話

496

第九十八話

499

第九十九話

507

第一百話

509

座談会

514

風神録

第一百一話

第一百二話

第一百三話

第一百四話

第一百五話

第一百六話

第一百七話

第一百八話

第一百九話

第一百十話

第一百十一話

第一百十二話

想起の日常1

第一百三話

第一百四話

第一百五話

第一百六話

第一百七話

第一百八話

第一百九話

第一百十話

コラボ企画く第三段く

コラボ企画く第三段く

コラボ企画く第三段く

518

522

526

532

535

541

547

552

559

564

569

576

581

587

593

597

601

604

608

613

622

626

634



第二百一十一話

地靈殿

第二百一十二話

第二百一十三話

第二百一十四話

第二百一十五話

第二百一十六話

第二百一十七話

第二百一十八話

第二百一十九話

第二百二十話

第二百二十一話

第二百二十二話

レティシアの日常2

第二百二十三話

第二百二十四話

第二百二十五話

第二百二十六話

第二百二十七話

第二百二十八話

第二百二十九話

第二百三十話

第二百三十一話

第二百三十二話

850 831 821 804 785 773 754 736 720 716 708 702 698 687 680 675 670 666 660 655 652 648 642

第四百四十四話

緋想天

第四百四十五話

第四百四十六話

第四百四十七話

第四百四十八話

第四百四十九話

第四百五十話

第四百五十一話

第四百五十二話

第四百五十三話

靈夢の日常

第四百五十四話

第四百五十五話

第四百五十六話

第四百五十七話

第四百五十八話

第四百五十九話

儂月抄

第四百六十話

第四百六十一話

第四百六十二話

第四百六十三話

第四百六十四話

第四百六十五話

874

877

881

887

891

895

899

905

912

918

924

933

936

943

952

960

965

970

976

981

984

989

第百六十六話

第百六十七話

第百六十八話

第百六十九話

第百七十話

第百七十一話

第百七十二話

第百七十三話

第百七十四話

第百七十五話

咲夜の日常

コラボ企画〜第四段〜

コラボ企画〜第四段〜

コラボ企画〜第五段〜

コラボ企画〜第五段〜

コラボ企画〜第五段〜

コラボ企画〜第六段〜

コラボ企画〜第六段〜

第百七十七話

第百七十八話

第百七十九話

第百八十話

第百八十一話

第百八十二話

11171112110711021098109310871082107810691062105610521047

10381033102910231019101410101007 999 995

星蓮船

第一百八十三話

第一百八十四話

第一百八十五話

第一百八十六話

第一百八十七話

第一百八十八話

第一百八十九話

第一百九十話

第一百九十一話

第一百九十二話

第一百九十三話

第一百九十四話

魔理沙の日常

第一百九十五話

第一百九十六話

第一百九十七話

第一百九十八話

第一百九十九話

第二百話

神靈廟

第二百一話

第二百二話

第二百三話

第二百四話

1231122612181215

121312041199119511911185

117711721168116311591156115211431139113311281124

特別編〜元旦〜	1334
特別編〜クリスマス〜	1331
第二百二十二話	1327
第二百二十一話	1323
第二百二十話	1318
第二百十九話	1316
第二百十八話	1310
第二百十七話	1304
第二百十六話	1300
第二百十五話	1296
第二百十四話	1289
第二百十三話	1282
日常	
第二百十二話	1278
第二百十一話	1272
第二百十話	1266
第二百九話	1262
第二百八話	1257
第二百七話	1251
第二百六話	1246
第二百五話	1239

## 少女の日常 プロローグ

～葵side～

「うん！やっぱり、朝は気持ちいいな。気分爽快とはこのことだよ！……さてと、朝が弱い『ルカ』と『鬼灯』を起こして、畑から食材を取って、川から魚を捕らないとお昼ごはんがなくなっちゃう。早く起こさなきゃ！」

ここは人里近くの山。その少し登った所にある神社、その名も『神無月神社』。私はその神社の主人です。

私の朝はとても忙しいです。行動を書くところになりますね。

同居人を起こす↓朝ごはんを作る↓朝食を食べた後は神社の掃除・洗濯

一見そこまで忙しくは見えませんが、神無月神社はそれなりに広い為大変なんです。苦労しますよ、本当。

……でも、それが一番の幸せでもありますかね。

「ルカ！起きて〜朝だよ！朝食はいらないの？」

「……」

今、私が起こそうとしているのは同居人の一人『霜月 ルカ』。

彼女は半人半吸血鬼。その為なのか、この様に朝が苦手を起こすのに苦労します。

「起きて〜！朝ごはんはどうするの？」

「……分かった。もう起きたからゆさゆさ揺らすな。寝起きで目眩がする」

「分かったよ。ちゃんと顔を洗って来てね！」

「……了解」

此処にはあと二人住んでいる（というか祀られてる）人がいますが、後で紹介します。先にご飯の用意をしなければいけませんので。

～少女準備中～

さて、朝ご飯が完成しましたので食卓に持って行かなければいけま

せん。

因みに、朝ご飯の内容は至って普通ですよ。白ご飯に焼き魚、お味噌汁に漬け物ですからね。

まあ、それも三人分となれば大変ですが……その辺は大丈夫です。なんとたつて……、

「葵、大丈夫……じゃなさそうだな。手伝う」

私には頼りになる親友がいますから。

「ありがとう！ルカ！じゃあ、こっちお願い！」

「分かった」

く少女達準備中く

「ふむ、いつも通りの美味しい朝食の用意が出来てるな」

今、喋ったのが此処に祀られている神様『孤天 鬼灯』。豊穰の神様です。

だけど、それ以外にも狐達の産みの親だそうです。狐達の範囲は神様から妖怪、はたまた動物の狐までと広いです……流石というかなんというか……。

「……鬼灯は準備の手伝いをしてないだろ」

「それは確かにと言わざるおえないが、私は豊穰の神。間接的には手伝っている」

「物は言いようとはこのことだな……」

「あ、あはは……。ま、まあ、食べようよ！ご飯が冷めたら折角の美味しいご飯が勿体無いよ？」

「分かってる」

「じゃあ、頂きます」

「頂きますー！」

こうして私の朝は始まります。至って普通の朝が、ね。

## 第一話

〈葵 side〉

私は神社の裏手の方にある畑で育てている野菜を取っています。

わざわざ畑を作って育てなくても人里に行けばいい、と考えるかもしれませんね。確かにその方が効率はいいのですが、無理です。

……私は人里には行きませんから。

まあ、話が暗い方向に行く前に話を戻して、私が収穫しようとしてるのは、カボチャ、トマト、キュウリにナスです。あ、それと、枝豆も欲しいところですね。

因みに、キュウリとナスは霊夢にあげる為に収穫するので、今日の私達の食卓には上がりません。

そんな風に考えていると、時間になった様ですね。

「何処に居ますか？出て来て下さい……紫さん」

ーふふふ、流石に貴女の能力の前では通用しないわねー

後ろからそんな声が聞こえた為、其方に顔を向けると空中に『何か』が開いており、その中には沢山の目があり、その中に『それ』を気にしないで立っている人物が一人います。

金髪の長髪で白の帽子を被っており、後ろの髪は帽子の中に入れていて（どうやって入れているのでしょうか？）白と紫の不思議な服を着ている綺麗な女性。この人がここ幻想郷を作った大妖怪で

妖怪賢者の一人『八雲 紫』さん。

彼女が今も居る目ばかりの空間は『隙間』と呼ばれており、そのことから彼女は『スキマ妖怪』とも呼ばれています。

……でも、コレがスキマと呼ばれても「え？そうなの？」てなるのは私だけでしょうか？

「私が来た要件は分かっているわね？」

「はい、分かっています……あの、紫さん。申し訳ないですが、客間の方でお待ち頂けませんか？」

「どうしてかしら？別に此処で話してもいいのよっ。」

「お客様にそんなこと出来ませんよ。ですから、客間でお待ち頂いて



も構いませんか？此処の仕事をルカに頼まなければいけませんから」  
「分かったわ」

その一言を言って、スキマは閉じました。  
まるで、そんなの無かったかのように……。

どうやら、素直に客間に行ってくれたみたいですね。それで  
は、ルカに此処の事を頼みますか……心苦しいけれど。

（ルカ side）

私は境内の掃除をしている。

私達の役割は決まってるから、ローテーションで仕事をやって  
いる。

因みに、この神社には果樹園もあるが、果物の収穫は全員でやるこ  
とに決まっている。

で、今日は鬼灯がすぐその川で魚を獲って、葵が野菜の収穫、私  
が掃除ということだ。

……別に嫌いではない。ただ、なんか絵にならない気がする  
が、気にしないでおう。

さて、後少しで終わるといふ時に葵が来た。

……なんとなくだが、良い事ではなさそうだ。

まあ、葵の頼みは大抵聞くがな。

「どうした？野菜を収穫してたんじゃないのか？」

「紫さんが来て、話があるからって言ってたから私も行かないと行け  
ないんだけど……、境内の掃除はもう大丈夫だよ！綺麗だからね。だ  
から、野菜の方もお願いしてもいいかな？」

……顔から申し訳ないというのが出てるぞ。

隠そうとしているみたいだが隠しきれていない。典型的な嘘  
がつかない人間なのだ、葵は。

まあ、答えは決まってるがな。

「いいぞ」

「……本当に？いいの？ありがとう！ルカ！迷惑かけてごめんね？」

「大丈夫だ。だから、紫のここに行ってくればいい。迷惑掛けられた  
なんて思ってるないしな」

「本当にありがとう！ルカ！じゃあ、行って来るね！」

……行つたな。さてと、道具を片付けて野菜の収穫といきますか。

〈葵 side〉

ルカから許可をもらった私は靴を脱ぎ、客間へと向かっているのですが……、

「なんで鬼灯がいるの？」

そう、隣には何故か鬼灯がいるのです。何ででしょう？

「そんなの決まってるだろう？話が終わった後で、少し紫と囲碁で遊ぼうと思つてな。別にそれぐらいなら構わないだろう？」

「大丈夫だよ、ちよつと気になつただけだから。ありがとう」

「……何故、お礼を言われたのかサツパリだな」

鬼灯は時々遊びに来る紫さんと客間で囲碁をしていたりしている（たまに紫さんが持つてきた物で遊んだりもする）。

今回もそれなのだろうけど、先に話が優先だ。

……私自身はちゃんと納得している。ただ、霊夢を騙す様な事をするのが嫌なだけ。

だって、今からする話は、幻想郷の未来に関する話だから。

そんな風に考え事をしてしていると、客間についていた。私は迷わずに客間の扉を開ける。

「来たわね。あら？鬼灯もいるのね。鬼灯には悪いけど、今日は遊び目的で来たわけじゃないから無理よ」

紫さんはちゃんと客間に居た。

「……鬼灯、ダメつて言われたけれど、どうする？」

「仕方ないだろう？諦めるさ。だが紫。何を企んでるのか知らないが、何を話したかは後で葵から聞かせてもらおうからな。それでいいな？」

「ええ、いいわよ」

「ということだ、葵。後で話の内容をルカと共に聞かせてもらおうからな」

「うん」

私が承諾したのを見て、鬼灯はそのまま客間から出た。……あ。

「鬼灯！果物の収穫をお願いできる？」

「分かった。ルカと共にやっておこう」

「ありがとう！鬼灯！」

今度こそ行きましました。

頼み事をする時には何時も心苦しくなる。

二人は何時も二つ返事で返してくれるけど、私は二人に何かしてあげれているだろうか……。

……今は、紫さんとの話に集中しなければいけない。私は客間に戻って紫さんの対面へと座った。

「話というのは、近々起こるあの紅い館の異変ですよ？」

「ええ、そうよ。やっぱり分かっていたのね」

「はい、そして紫さんの用事も。……私にこの事についてはまだ霊夢に伝えるなど言いに来た。ですよ？」

「ええ、そうよ。この異変は絶対に必要な異変なの。新たなルールをこの幻想郷に広める為だね」

「新しいルールですか？」

「ええ、その辺は分かっていたのね」

「私の能力は重要なことしか分かりませんから。でも、そのルールが大事じゃないと言うわけではありません。多分、すぐに知ることになるから見れなかつたんだと思つてます」

「そう、ならいいのよ。もう一度、念押しをするけれど、絶対に霊夢には言わないで頂戴。いいわね？」

「分かっています。絶対に霊夢には言いません。……騙しているようで気分が良いものではありませんが」

「仕方ないわ。諦めて」

「……分かっています」

そう、私が……いや、ルカと鬼灯にも教えることになるから私達か。私達が異変に協力する事になるのはコレが最初で最後の筈。今回、目を瞑ればいいだけ。それだけなんですから。

でも、霊夢は勘が鋭いから（百発百中で当たる）から、直ぐに暴露するんだろうな。

……騙せる気が全然しない。

## 第二話

〈葵side〉

紫さんの話が終わった私は、ルカと共に空を飛んで、ある場所を目指しています。理由はその人の補助。その人は此処、幻想郷にとつてなくてはならない存在。いなくなってしまうたら幻想郷が崩壊するかもしれない存在。そんな人の元に私とルカは少し前に獲れた魚と野菜、果物を持って行こうとしています。

「はあ、なんであの巫女は自分でしないんだ」

「あ、あはは……」

……乾いた笑いしか出てきません。

そうそう。何故、鬼灯がいないかと言いますと、あの後、紫さんは帰らずに鬼灯と囲碁の勝負をしていました。

後から来るとは言っていましたから大丈夫でしょう。

因みに、結果は鬼灯の方が勝ち星が多いそうです。

私は囲碁は出来ないので正直、羨ましいです。

……そんな事を考えていたらいつの間にもやら着いていました。やはり、空を飛ぶのが一番早く此処に着く方法ですね。

「霊夢〜！食べ物を持って来たよ〜！」

私がそう言うと、何やら奥の方から走る音が聞こえてきました。これは確実に走って来てますね。そんなに楽しみなんですか？

自画自賛するようであまり言いたくはない事ですが、確かに美味しいとは思っています。しかし、走って来る程ですか？

そんな事を考えていると、縁側の方から来たようです。

「葵〜！！？いつもありがとうございます〜！」

「敬語かよ……」

今、縁側から走ってきたのは此処、幻想郷の巫女で現博麗の巫女『博麗霊夢』。

黒髪の長髪で、頭に赤い大きなリボンをつけており、巫女服を着てはいるけど、袴ではなく赤いスカートで脇出しという服装をしています。

す。

「あなたにはお礼を言っていないから黙ってて」

「はあ、分かった」

「ま、まあまあ、喧嘩はだめだよ。仲良くしなきゃいけないよ?」

「……分かったわよ。考えとくわ」

(考えるだけで約束はしないんだね)

コレが何時もの私達の日常風景。とても平穏な日常ですよ。私はこの日常が大好きです。

……変わって欲しくないですね。

「あ、そういうえば魔理沙は?」

魔理沙とは私のもう一人の友人で、本名は『霧雨魔理沙』。霊夢経由で知り合いました。

私から見た印象は、元気な女の子。

霊夢と違って努力をしている人一倍頑張り屋の女の子。

魔理沙は魔法使いとのこと。でも、魔女ではないそうなので、人間に分類されるのでしょうか。

私は、彼女はいつか、とても凄い魔法使いになると思っています。

私は努力をして強くなっていくのを見るのが好きですから応援しなくなりませんし、そういう風に信じたくもなりません。

因みに、霊夢はどうなのかといいますと、努力はしてませんが才能があるからなのか、負ける姿が想像出来ないんですよ。

「魔理沙ならまだ来てないわよ。でも、もうすぐ来るわ」

「一応聞くけど、根拠は?」

「私の勘よ」

「これは当たるな」

「そうだね。それに、もう姿が見えたから」

「……本当だな。それも相当スピードをだしてるな、アレは」

「霊夢……!この私、魔理沙様が来てやったぜ!」

そう言いながら此方に突っ込んできそうな勢いをだしている、いかにも魔法使いですと言いたげな服装で箒に跨ってる女の子。この子が丁度話してた魔理沙です。でも……、

「スピード出しすぎだよー！ー！」

\*\*\*

あの後、結局あのスピードのまま神社内に入ってきて、境内は汚れてしまいました。今は私が掃除しています。

え？他の皆ですか？霊夢は縁側でお茶を飲んでます。

ルカは私の代わりに魔理沙を叱り中です。

……私がすると言ったんですが、「お前じゃ怒っても怖くないから私がする」と言われ、私の提案を一蹴されました。私、そんなに怒っても怖くないんでしょうか……。

ああ、魔理沙がどのように怒られてるかといいますと、正座をさせて、その上に氷塊を二つ膝の上に乗せられたまま叱られ中です。……ある意味、拷問ですね。

「あ、そうそう。葵、話があるんだけど、いいかしら？」

「え？別にいいけど、ちよっと待って！ある程度綺麗にして、それから道具を直してからにしようよ。ね？」

「分かったわ」

話というのは多分、新しいルールのことでしょう。それぐらいなら予想がつきます。

……魔理沙はどうやら知ってるみたいですね。

この場で知らなかったのは私とルカだけです。

まあ仕方ないです。なにせ、昨日は此処に来ることが出来ませんでしたからね。魔理沙が知ってるということは昨日聞いたのでしよう。

私も新しい幻想郷のルールは気になりますし、境内を綺麗にしたら聞かなければいけませんね。

どんなルールでしょうか？とても気になります。あの霊夢のことですから、人間と妖怪が平等に生活できるようなルールでしょうか。それだと私は嬉しいです。

……そのようなルールであって欲しいですね。

### 第三話

境内の掃除を終え、道具を片付けた葵と、魔理沙を叱り終えたルカは、霊夢から新しいルールの説明を聞こうとしていた。

そして、丁度その頃、鬼灯も紫からルールの説明を受けていた。

く鬼灯sideく

私は紫とトランプをしている。

囲碁の方は少し飽きたからな。だから、紫が持ってきた外のカードゲームをしている訳だ。

今はババ抜きという遊びをしている。

そして、この遊びの中で紫に説明してもらったことになった。

「それで？幻想郷の新しいルールとはなんなんだ？……あ、ペアがあつた」

「ふふふ、きつと貴方のお気に入りのあの子も気に入ってくれるルールよ。なにせ妖怪と人間が対等になれるルールですもの。……もう、中々捨てれないわね」

「む？そうなのか？良かったじゃないか。長年の願いが叶って。それに、確かにそんな事が出来るルールなら葵も喜ぶ。……あ！ババを引いてしまったー！」

「ふふふ♪良かったわ♪ババがなくなってくれて」  
「くっ……」

「まあ話を戻すと、そのルールの名前は『スペルカードルール』よ。……あ！ババが戻ってきちゃった！」

「ふ、どうやらババに好かれてる様だな。紫」

「ふ、まだまだ、これからよ！」

く葵sideく

「スペルカードルール☒」

「そう、スペルカードルールよ」

私とルカは、霊夢から幻想郷の新しいルール『スペルカードルール』というものを教えてもらってます。

そのルールは、スペルカードという、いうなれば私達が得意として



いる技をカードにして決闘をするルールだそうです。

つまりは、弾幕と技を使った『遊び』ってことでしょうかね。

そして、このルールにはいくつか約束事のようなことがあり、一つ目がスペルカードの技には隙間を少しは開けておくこと。

これは相手が絶対に避けきれないような事がないようにというルールでしょうかね。

そして、二つ目がスペルカードを使用しての決闘の後には、どちらが勝っても後腐れなしということ。

まあ、それが決闘ですからこれには余り触れないでおきましょう。確かにこのルールなら妖怪と人間は対等な立場になれるですね。

何故なら、このルールには使う人の全力が出せないようにしているルールだからです。

流石、霊夢です。こんなルールを思い付くなんて。……ですが、

「あの、霊夢?」

「何? 葵。質問でもあるわけ?」

「あの、私、弾幕は出せないんだけど、この場合はどうすればいいの?」

「確かに葵は弾幕出せないな」

そう、私は弾幕が出せません。私には弾幕を出す才能が無いのです。

……お母さんは、そこまで出せたわけではないけれど、それでも少しは出せてましたからね。

それなのに、何故、私には出せないのでしょうか?

……才能がないということですかね。

「その場合は葵が得意としている『結界』をスペルカードにすればいいのよ」

く 鬼灯side

「『結界』もスペルカードに出来るのか? 弾幕だけかと思ったが。……よし! 上がり!」

「あー……もう一度、勝負よ!」

「ああ、いいぞ? 負けるつもりはないがな」

私達のババ抜き勝負の一回戦が終わり、二回戦へと突入しようとし

ていた。

「よし、配り終えたぞ。さあ始めようか。先行は私からか？」

「ええ、勿論。……それで、貴方の疑問は最もね。でも、その辺は大丈夫よ。現に、霊夢のスペルカードにも、私のスペルカードにも、『結界』のスペルカードは入っていますからね」

「そうか。なら葬も参加は出来るな。良かったよ。……ほいっとな」  
「……貴方、どうしてそこまであの子に肩入れしてるのかしら？……理由は分かるけれど、それだけじゃ無い気がするのよね。……はいっ」と

「まあ、いつか時間があつたら話してやるさ。気分もあるがな。……よし、ここまで順調だな」

「もう、ババを一回ぐらい取つてよ」

「まだ始まったばかりなんだが……」

〈葬side〉

「そっか、分かったよ。説明してくれてありがとう、霊夢！お陰で理解出来たよ！」

「そう、なら今後も食べ物を持ってきて頂戴」

別にそれぐらいのことは何時もしているけれど、魚はどうしよう？ 私達の方だけしか取れない時もあるからなく。

そんな事を考えていると……

「魚ぐらいは自分で買いに行け。私達の分しか取れない時もある事、分かってるのか？」

ルカが私の心の中の考えを代弁してくれたかのようなタイミングで霊夢に言ってくれた。

「分かってるわよ、それぐらい。だから、その時は仕方ないから自分で買いに行くわ」

「え？あの霊夢が……」

「自分で、だと……？」

「何よ、あんたら。文句がある訳？」

「明日の天気は雨になるのか？」

「いや、雹でも降るんじゃないか？」

二人とも、それは酷すぎると思うんだけどな……。

霊夢だつて、自分のことはしてると思うよ。……多分。

「いいわよ、あんたら！表に出なさい!!? 弾幕ごっこをして叩きのめしてやるわ！」

「望むところだぜ!!?」

「いや霊夢。ルカはまだ作ってないから、無理だよ？」

「じゃあ魔理沙！弾幕ごっこ、始めるわよ!!? 撃ち落としてやるわ！」

「おう！いいぜ！勝つてやる！お前ら！今から手本を見せてやるからそこで見てろ！いいな？」

「……見ておかないといけないからな、見学させてもらう」

「霊夢～！魔理沙～！両方とも頑張つてね！」

こうして、霊夢と魔理沙の『弾幕ごっこ』が始まつて、終わった時に勝ったのは霊夢だつた。

「くっそく、負けちまつたぜ」

「当然の結果ね。で、どう?初めて弾幕ごっこを見た感想は？」

「凄く綺麗だつたよ！」

「確かに。なるほど、弾幕ごっこは綺麗さも競うものなのか……」

「まあ、そうね。その解釈でも合ってるからいいわ」

これからこのスペルカードが幻想郷のルールになる。そうすれば、いつかは人間と妖怪の共存の日は来るかもしれませんね。

……そして、私達がこうやってる間も、あの紅い館の異変は刻々と近付いていた

## 設定

神無月 葵（かんなづき あおい）

幻想郷にあるもう一つの神社『神無月神社』の巫女。

性格は聖人の様な人。だが、だからといって怒らないわけではない。しかし、ルカ曰く「怒っても怖くない。むしろ、此方に罪悪感が生まれる」とのことから怒っても怖くはない様だ。

真面目な性格でもあり、修行は怠らない。けれど、『博麗の巫女の補助』としての役目もあり、修行の時間は雀の涙ほど。才能は神無月の巫女の中では秀でているが、その反動で攻撃などの才能は皆無である。

家族は父親は持病で死に、母親はルカによつて殺されている（本人はルカを恨んでいない）。ある能力のせいで人里の大多数の人から嫌われていたが、想起から話を聞き、自分から歩み寄ることにした。

神無月神社の神様である鬼灯と親友のルカと想起と一緒に住んでいる。

能力 「癒し、治す程度の能力」

生物の傷や病気を治すことが出来る能力。しかし、病気の場合はまた再発する。

「未来と過去を見る程度の能力」

未来を見たり、初対面であれば勝手に過去を覗いてしまう能力。ちなみに、この能力は勝手に発動することは多いが、コントロールは出来ていて、使おうと思えば使える。

姿：空色の髪と目をしており、髪型は腰ぐらゐまである髪をポニーテールにしている。

服装は、上が早苗の巫女服の淵を淡い水色で、勿論、脇がでていて、下は現代の巫女服を水色にしたもの。身長は163cm

霜月 ルカ（しもつき るか）

人間と吸血鬼の間に産まれた半人半吸血鬼。冷血で冷徹で冷酷な部分があるが普段はそこまで冷たくない。

自分の知り合いと自分、特に親友の葵を馬鹿にする奴が大っ嫌いで、そんな奴にだけ態度が他の人より冷たい。

家族は小さな頃に、人間によって自身の目の前で殺された。そのため、一部の者以外を余り信用出来ないでいる。

葵と鬼灯と想起と一緒に住んでいる。

能力 「氷を創造する程度の能力」

どんな氷でもどんな場所（流石に炎の上とかは無理）でも、氷を創り出す事が出来る能力。水や冷気が無くても可能。

「氷を操る程度の能力」

文字通りで、氷ならなんでも操る事が出来る能力。

「嘘を見破る程度の能力」

相手の嘘を見破る能力。その際、相手が嘘をついていたら、相手の本音が自身に聞こえてくる。ただ、相手がそれが真実だと信じ込んでいれば『嘘』だと判断されない。

例 誰かが嘘の情報を渡す↓渡された人はそれが嘘だと思っていない||『嘘』と判断されない

姿：綺麗な金髪の髪を背中まで伸ばしており、目の色は赤く、少つり目。

服装は、ボタン付きの長袖Tシャツを黒いロングスカートの中に少し入れている。身長は170cm

孤天 鬼灯（みてん ほおずき）

『神無月神社』に豊穰の神として祀られている。神々が大地を作った時から既に居た為、狐達の産みの親のような存在（神様や妖怪、動物

の狐など)となっている。信仰も高く、それも合間って妖力・神力は共に高い。普段は九尾の狐になっており、人型には余りならない(なる時は大抵、家の手伝いとご飯を食べるとき)。

紫とレティシアとは親友の様な仲。妖怪賢者の一人でもある。賢者になった理由は「紫から必死で頼まれた為、断り切れなかった」とのこと。

葵とは巫女と神との関係もあるが、友としての関係の方が一番である。その為か、葵と知り合いを傷つけられることが一番許せない。

過去に人間達が妖怪という理由だけで迫害を受け、葵の虐待を見たことから、余り人間を信用出来ないでいる、

今は葵とルカと想起と一緒に住んでいる。

能力 「自然を操る程度の能力」

自然の全てを操る事が可能な能力。外だとチート。

「超能力を扱う程度の能力」

名前の通りの能力。(パイロキネシスは要らない子扱いされている)

「ありとあらゆるものを無に返す・再生させる程度の能力」

全てを無に返したり、再生させたりすることが可能な能力。いのちも蘇生出来るがその為には滅多に使わない。

姿：太陽の様に綺麗な毛並みをした大きい九尾ver (子供の九尾verにもなれる)

人の姿となったときは、顔は九怨の安倍晴明さんに似ていおり、髪は金髪のめだかボックスの安心院さんのような髪型で、服装は陰陽師の服から九本の狐の尻尾と頭から狐耳がある(子供の姿にもなれるが服装は変わらない)。人型時の身長は175cm (子供の時は130cm)

幻現 想起（碎牙）（うつつ そうき（さいが））

幻想入りしてきた外の世界の男性。

能力を持つていた所為で外の世界の人間達から虐げられ、忘れ去られた時に紫の手によって幻想入りを果たした。

その際に葵の神社で倒れていた為に、葵が助けた。

とても優しい性格の持ち主である。

二重人格者で、もう一つの人格である碎牙はその性格とは真逆で冷徹非道で、想起を誰よりも想っている。

異変を一度起こしている。

能力 「黒龍を操る程度の能力」  
そのままの意味

「幻と現を操る程度の能力」

幻影を見せたり、無いと言われるものと人物を出すことが出来る能力。逆に消したりも出来る。

「あの世とこの世を操る程度の能力」

英霊を召喚出来る。人を死に追いやることも出来るが、手順が必要  
な為に使っていない。

姿：漆の様に黒い髪で瞳の色は深い蒼色（服は皆さん自由に考えて  
ください）。碎牙の時は深い紅色。身長178cm

レティシア・スカーレット

スカーレット家の『一応』長女。実際はスカーレット家の始祖。ブ  
ラド・ツエペシユ公とも会ったことがある。

純血の吸血鬼だが、太陽の下でも平気で外に出られる（能力が関係  
している）。レミリア達の事を大事にしている部分が多々見られる。  
幻想郷を愛しているが、それよりも家族を愛している。

紫と鬼灯とは親友の様な仲で、妖怪賢者の一人でもある。賢者になった理由は本人曰く「紫から頼まれたから」とのこと。

話すときはよく冒頭に「クスクス」と笑っているが、真剣な時はそれが抜けている。マジギレした時は怖い。S気がある。

本人の力は博麗大結界を壊せるほどに力が強い為、その力を封印している。

能力 「見透かす程度の能力」

相手の考えが分かったり、相手が来ることが分かったりと先読みする様な能力でもあるが、葵の予知すらも看破することも出来ている。

本当の能力は「ありとあらゆるものを見透かし、その全てを自分のモノにする程度の能力」である。

相手の『全て』を見透かすというのは、その能力・武器・スペルカードなど全てである。

それら全てを自分のモノに出来る能力。しかし、弱点は自分と相性が合わなければ使えない。

「物を創造する程度の能力」

名前の通り、物質を創り出すことが出来る。材料が無くても可能。どうやら、命すらも創れるらしい。

本当の能力は「能力を創る程度の能力」を足した様な能力で、「出来ないことが無い程度の能力」

本人に聞くと、これはもう程度ではないとのこと。

弱点は無い。出来ないことが無いのだから仕方ないのかもしれない。

この能力のお陰で相性が悪くて使えない能力なども使える。

「能力を創る程度の能力」

名前の通り、能力を創ることが出来る。この能力を使って、不老不死の能力を創って今の不老不死の状態になっている。が、本当はこの能力ではなく、「出来ないことが無い程度の能力」で寿命をなくした所



為である。

姿：髪は金髪で、膝裏まで伸びており、先つちよがはねている金髪ロリ。つまりは問題児のレティシアさんや化物語の忍さんそのもの。服は黒のゴスロリを着ていて、日傘をさしている（この姿は力を封印している時の姿で、少し封印を解くとレミリアと同じ羽が生える）。此方は封印時の姿である。

封印を全て解くと、身長が紫と同じぐらいの背になり、背中からレミリアと同じ蝙蝠の羽が生える。この姿が本来の姿である。

穀月 くおん（こくづき くおん）

九尾の妖怪。鬼灯とは違い、常日頃から人型をしている。紅魔館でメイドをしている。

鬼灯の事は「産みの親」として好んでいる。決して百合百合展開があるわけではない。

よく美鈴と一緒に花の手入れをしているのを見掛ける。

紅霧異変の前までは外の世界に住んでいた。紅魔館で働いている理由はレティシアに誘われたから。

能力 「自然を操る程度の能力」

鬼灯と同じ能力

姿：白銀の髪をショートにしており、頭から狐耳が生えており、顔は鬼灯と似ている

咲夜さんと同じメイド服を着ており、そこから九本の尻尾が生えている。身長は172cm

八神 狼（やがみ ろう）

紅魔館ではたった一人の執事。犬の妖怪であり、ヤツフサでもある。結構大きい。

完璧な人型をしているが、外に出る時などはオオカミに似た犬の姿

になっていることが多い。

よくマリアと一緒にいるのを見掛けるが、近くにいる理由は『本来のマリアを封印し続ける為』。

紅霧異変の前までは外の世界に住んでいた。

マリアが外の世界の人間に襲われ、その時にいた人間全てを石に変えて以来、能力を封印し続けている。

紅魔館で働いている理由はレティシアに誘われたから。

能力 「能力が効かない程度の能力」

名前の通り、能力が効かない。この能力により、フランにも容易に近付ける。ただし、能力により創られた武器などは効く。

「能力を封じる程度の能力」

名前の通り、能力そのものを封じる。コレは、狼自身が封じる距離を変える事が出来る。そして、封じる相手を決める事も出来る。これにより、マリアの能力を封じている。

姿：髪は黒色でリリカルなのは s t s のクロノをもっと大人っぽくした感じで、ヤツフサの時は髪の色は白になる。身長は178cm

犬の時は、黒に近い青色の毛並みをしており、人一人（頑張れば二人）乗れるぐらいの大きさをしているが、ヤツフサの時には毛並みが白に変わる

マリア・ドロワーズ

人見知りが激しい女の子、と思いきやそれは封印されている時の性格で、封印が解かれると途端に性格が冷酷になる（ただ、卑怯な真似だけはしない）。種族はメデューサ。

よく狼と一緒にいる姿を見掛ける。が、それは狼が『本来のマリアを封印する為』に近くにいる。

紅霧異変の前までは外の世界に住んでいた。

外の世界で人に襲われ、その時にいた人間全てを石に変えた過去を

持つ（封印されている時は記憶自体がない）。人に対して憎悪を抱いている。

紅魔館で働いている理由はレティシアに誘われたから。

能力 「石に変える程度の能力」

自身の目を見たものを全て石に変える（コントロールは既に出来ている為、見たとしても石に変えない事も出来る）。自分の意思で目を見てない物も石に変えることが可能。一部だけ石に変えることも出来る。

「蛇を操る程度の能力」

全ての蛇を操る事が可能。種類、大きさ、数関係なく出来る。ただし、数が多ければ多い程操る事が大変になっていく。ただ、本人はその事をあまり気にしていない。

姿：カゲプロのマリーさんそのままの姿。身長までも同じ

ユニ・ランガー

紅魔館で姉のペスと共にメイドとして働いている。種族は姉とは違いユニコーン。

紅霧異変の前までは外の世界に住んでいた。

紅魔館で働いている理由はレティシアに誘われたから。

能力 「願いを叶える程度の能力」

願いを叶える能力。他人の願いだけでなく、自分の願いも叶えることが出来る。能力を使えば人一人の命を犠牲無しで復活させる事も出来る。普段は「人一人の命を復活させる為には犠牲が必要」と嘘をついている。

姿・銀髪のをポニーテールにしており、顔はルーミアに似ている。

咲夜さんと同じメイド服を着ている。身長は172cm

ペス・ランガー

紅魔館で妹のユニと共にメイドとして働いている。種族は妹とは違いペガサス。雰囲気は咲夜さんとよく似ている。

紅霧異変の前までは外の世界に住んでいた。

紅魔館で働いている理由はレティシアに誘われたから。

能力 「流れ星を降らす程度の能力」

流れ星を流す能力。流す量は調整できる為、流星群にすることも可能。ただし、流れる速さは調整できない

姿・銀髪の長髪にウェーブをかけており、顔は咲夜さんに似ている。

咲夜さんと同じメイド服を着ている。身長は177cm

枢木 朱鳥 (くるるぎ あすか)

紅魔館でメイドをしている。今の所は目立った特徴はない(今後もないかも?)。種族は不死鳥(フェニックス)。

紅霧異変の前までは外の世界に住んでいた。

紅魔館で働いている理由はレティシアに誘われたから。

能力 「炎を操る程度の能力」

炎を操る事が出来る能力。

「再生する程度の能力」

怪我しても折られても直ぐに治る能力。ただ、死んだとしても生き返る事が可能。

姿・赤とオレンジのグラデーションの腰ぐらゐまで伸ばしている髪をポニーテールにしており、髪はつり目で、問題児の白夜叉に似ている。

咲夜さんと同じメイド服を着ている。身長は171cm

夢川 獺（ゆめがわ ばく）

『夢の館』をサリアと共に経営している。夢を喰べる担当。のんびり口調でマイペースな性格なのんびり屋。

姿が子供の様に小さい所為か、普通に子供と間違えられる。種族は獺。

能力 「夢を喰べる程度の能力」

そのままの意味の能力

姿：灰色の短髪に目は垂れ目で瞳の色も灰色で灰色の着物を着ている。身長138cm

サリア・モルフィウム

『夢の館』を獺と共に経営している。夢を見せる担当。

獺とは反対の性格。そのため、口調がキツイ。しかし、悪気は一切ない。

獺と比べると普通に高いので親子と見られることの方が多い。

能力 「夢を操る程度の能力」

夢を操って、良い夢を見せたり悪夢を見せたりすることが出来る

「眠らせる程度の能力」

そのままの能力

姿：金髪の長髪、瞳の色は紅色、吊り目。黒の肩だしの振袖付きワンピース。身長176cm

## 紅魔郷 第四話

〈葵side〉

あの日から数日経ちました。

私は博麗神社の境内の掃除をしています。

霊夢は縁側でお茶を飲んでますがね。

鬼灯は霊夢の近くでお昼寝中。ルカは洗濯物を干しています。これだけ天気がいいと、きつとすぐに乾くでしょう。

……この日でなければ。

そう、今日のはあの紅い館の異変が起こる日。気を引き締めなければいけませんね。

そして、ついに異変の時間になりました。博麗神社にも紅い霧が近付いてきて、ついには覆われてしまいました。

「何よ？この霧。これじゃあ、お茶が不味くなるじゃない」

「霊夢！これは異変だよ！そんな事を言ってる場合じゃないでしょ？！」

「どれだけ呑気なんですか！」

「何ですか？異変よりもお茶が大事なんですか？」

……まあ、そういう所が霊夢らしいのですが、もっと、こう、博麗の巫女としての自覚を持って欲しいといいますが。

「そんなの、異変よりもお茶の方が大事に決まってるでしょ？」

「何故、今それを言ったんですか？」

「あんたが『異変よりもお茶が大事なのか？』とか考えたからよ」

「……そう思った根拠は？」

「勘」

「……」

……もうここまでくると黙るしかありませんね。

〈霊夢side〉

(まあ、勘だけじゃないんだけどね)

私はさっきの会話の事を考えていた。そう、私がああいう風に言ったのは勘だけじゃない。

私と葵は長年一緒にいる。だから、葵がどう考えてるかなんてすぐ分かる。

葵は真面目だからね。

だけど……

(だからこそ変なのよね。どうして異変が起こることを前もって私に言わなかったのかしら?)

そう、葵の能力があればこの異変が起こることなんてすぐに分かったでしょうに、なんで私にだけその事を言わなかったのか。

一緒に住んでるルカと鬼灯は確実に知ってる。

なんでそう思うかって? 勘よ。

まあ、あの二人が私には言わないとかはあるでしょうけど、真面目な葵なら確実に言うはずの事だ。とすると……

(紫ね……)

あのスキマ妖怪が確実に絡んでるわね。

どうせ『この日に異変が起こることを私に言うな』とでも言ったんでしょ。

葵は紫の言うことは絶対に逆らえないからね。

……まるで、式神にされたみたいに。

まあ、そんな事を一々考えてたって意味がない。早くこの異変を解決してお茶の続きといかなければ!

〜葵 side〜

(なんだか、紫さんとの事がバレた気がする……)

ん? 何故そう思うかって? 勘です。

まあ、私の勘は当たってるでしょう。

私も霊夢程ではないにしろ勘は鋭い方ですから。

……それに、長い付き合いですから、霊夢ならこれぐらいのこと、すぐに気付くことは分かっています。

まあ、そんな事は今は置いておきましょう。それよりも……

「鬼灯、起きてる?」

「ああ、起きています」

「どうやら起きていたようです。どの辺りから起きてたのでしょうか。」

「まあ、起きてくれていただけで有難いですし、考えないでおきましよう。それと……」

「ルカ！」

「分かっている。今、来た」

「ルカも異変が起きたことに気付いて戻って来ました。後は……」

「もうすぐ魔理沙が来るでしょうから待ちましょう」

「え？あいつを連れて行くつもり？足手まといよ」

「本当はそうは思っていないでしょ？」

「……根拠は？」

「勘です♪」

「……」

「……今回の勝負は私の勝ちのようですね。」

「やりました！今まで勝てた数が少ない分凄く嬉しいです！」

「と、そんな事をしていたら来たようです。」

「霊夢ー！葵ー！異変だぜー！今すぐ解決しに行くぞー！」

「はい！勿論！」

「はあ、面倒くさいわね……」

「じゃあ、行くか」

「そうだな。行こう」

「こうして、私達は湖の方へと飛んで行きました。」



## 第五話

〈葵side〉

私達は空を飛んで湖へと向かっています。  
その理由は、紅い霧が発生したからです。  
つまりは『異変』です。

前回、異変の説明をしていなかったなので今の内にしておきます。  
『異変』とは、妖怪たちが起こす事件のようなものです。

小さなものから大きなものまであります。

今回の異変は大きなものだと思つてます。

何故なら、この霧は人に害をもたらすものだから。

そういうものを放っておくと、この幻想郷は確実に崩壊します。

だから、私達が解決する。それが『博麗の巫女』と『神無月の巫女』  
の役目だから。

「……ん？アレはなんだ？」

「!!？霊夢！魔理沙！絶対に攻撃しないで！あの子は私達の知り合い  
だから！」

「……ああ、なるほど。彼奴か」

「まさか此処で会うとはな。彼奴の住処は此処だったのか」  
「?？」

私は前から来ている黒い塊に近づきました。もうここまで近付い  
てくれると中が分かります。その黒い塊の中には金髪のシヨートへ  
アに赤いリボンを付けており、黒い服にスカートを着ている小さな女  
の子がいました。

「ルーミア!!？」

「ん？葵なのか？？」

そう、彼女の名前はルーミア。妖怪だが、私の友達でもあります。  
妖怪といっても彼女の正体は人食い妖怪であり、宵闇の妖怪。

人食い妖怪と呼ばれているのは、彼女の生きる糧が人の闇だからで  
す。

まあ、今は衝動はあっても食べなくても大丈夫なように封印されて

います。……私が封印したんじゃありませんよ？会った当初からリボンが付いていましたから。

「なあなあ、葵、ルカ、鬼灯。後ろにいる人間は食べてもいい人間か？」  
ルーミアがそういうと、霊夢と魔理沙が何時でも戦えるような状態になってしまいました。……別に警戒しなくても大丈夫なのに。」

「ルーミア。あの二人は食べたらダメな人間だよ。特に、彼処にいる紅白の巫女さんは絶対にダメだよ？食べちゃったらこの幻想郷が崩壊しちゃうから。ルーミアもそれは嫌でしょ？」

「そんなの、嫌なのだよ！分かったのだよ！でもお腹が空いたのだよ」  
やっぱり、そうだと思います。だから用意は万全です。

「はい、ルーミア！これで我慢してくれないかな？」

「？これは何なのだよ？」

「クツキーだよ！とつても美味しいお菓子だよ！」

「そーなのかー！ありがとうなのだよー！」

そう言っつて、ルーミアは行っつてくれました。良かった。友達と戦うような事だけは避けたいですからね。

「それじゃあ、行こう！霊夢！魔理沙！ルカ！鬼灯！」

「ちよつと待て」

？何故か霊夢と魔理沙に呼び止められてしまいました。何故でしょうか？

「どうしたの、二人とも？早く異変を解決しに行かないと……」

「あの妖怪とどういう経緯で会ったのか説明してくれないかしら？」

「そうだぜ？じゃないとモヤモヤして集中出来なくなるぜ」

ああ、なるほど。そういえば、説明したことはありませんでしたね。

「ルーミアとは私が神社の掃除をした時に会ったんだよ」

いや、あの時は本当にビックリしました。

なにせ、お腹が空き過ぎていたようで、危なく襲われそうになりましたから。

あの時も食事を食べさせてなんとかなっただですよ。

それからはよく遊びに来てくれます。

スペルカードの説明を受けた前の日に博麗神社に行けなかったの

も、ルーミアが遊びに来てたからです。いや、可愛いは正義ですね  
♪  
……とまあ、そう説明したら二人共納得してくれました。良かった  
です。

「さあ、行くわよ」

霊夢の一言で私達はまた進もうとしたら……、

「お前達！止まれ！」

何やら水色のショートの髪と青いワンピースを着た妖精とその近くには緑の髪で長い髪をサイドテールにしている青いワンピースを着た妖精に止められてしまいました。

「あんた何よ。邪魔する気？」

「へん！アタイはチルノだ！」

「は、始めまして！大妖精といいます！よろしくお願いします！」

「あんた達、そこをどきなさい。邪魔よ」

……まるで、今の自己紹介を聞いてなかったかのようなスルーです。それだけお茶を飲みたいんですか？

……いや、これは巫女としての責任感からですかね。

霊夢は面倒くさがりやではありませんが、やる時はやる人ですからね。

「ふん！アタイはサイキョーなんだ!!？お前なんかには負けないんだからな!!？」

「……」

ああ、どんどんと霊夢のイラだちメーターが募っていつてる。なんとかしないと……。

「……霊夢。ここは私にやらせろ」

「ルカ？」

何故かルカがやると言い出しました。まあ、理由は予想が付きません。

スペルカードを試す時とかですね、絶対。

「ちよつと、スペルカードを試してみたいんだ。別にいいな？」  
ほらね。

「……いいわ。ただし、ボコボコにしなさい」  
「分かった」

ああ、ルカのスイッチが入っちゃった。これは途中で止めないと不味いですね。

まあ、妖精に死の概念はないんですが、それでも不味いです。  
弾幕ごっこ終了と同時に止めないと……。

「ということだ。悪いがまだ弾幕ごっこに慣れてなくてな。やり過ぎても文句を言うな。いいな？」

「ふん！アタイは天才でサイキョーなんだ！あんたなんかには負けないんだ！いくぞ！氷符『アイシクルフォール』!!?」

「……」

チルノさんの言葉とともに始まった弾幕ごっこ。

チルノさんのスペルカードをルカは何事もなく『安全地帯』へと移動した。

まあ、その安全地帯というのがチルノさんの正面なんですけどね。

「なんでアンタあたんのよ!!?」

「……楽に避けれるし、安全地帯もあったからだか？」

「ふざけるな!!?」

「巫山戯てはないが、まあいい。じゃあ、此方からも邪魔をしてくれたお礼だ。受け取れ。氷符『氷の牢獄』」

ルカがスペルカードを宣言すると、チルノさんの上下左右、前後と数百を超える水色の弾幕がありました。

そう、まるで弾幕達が牢獄で、チルノさんが監禁された囚人のように……。

まあ、このスペルカードを使ったという事は『大丈夫』のようです。  
「うあー！」

チルノさんはそのまま避けずに落ちてしまいました。

……チルノさんのサイズだったら避けるのは楽だったんですが……。

「チルノちゃん!!?」

そう言つて、大妖精さんは落ちていったチルノさんを追いかけてい

きました。……こう言うのは酷いですが、一体何だったのでしょうか？

「行くぞ」

「分かってるわよ」

「今さっきのは何だったんだ？」

「さあな？ 気にしない方がいいということだろう」

「あ、アハハ（汗）」

……今度、会った時には謝罪した方がいいかもしれませんね。……  
今は異変の方に集中しましょう。

私達は湖へと再度向かいました。

## 第六話

〈葵side〉

私達は、湖の上に建つ紅い館の前まで来ました。そして、その館の門の前には……、

「……Zzz」

……椅子に座って寝ている緑の中華服を着て、緑の帽子をかぶっている人がいました。

あの人、多分、門番さんですよ？なんで寝ているのでしょうか？門番の役割ってなんでしたっけ？そう疑問に思わされます。

「どうしよう？あの門番さん、寝てるけど」

私はルカに小声で話しかけました。

すると、ルカも小声で話してくれました。

「無視して館に入ればいいと思うぞ？」

「え!?？」

私は思わず大きな声を出してしまいました。

「シッ！声大きい！起きたらどうするんだ」

私は慌てて門番さんの方を向くと、まだ寝ていました。

「ご、ごめん。で、でも、それは不法侵入だよ？」

「というか、私達は今からこの館を荒らそうとしている侵入者になるんじゃないか？異変を解決するなら」

「……あ」

確かにそうですね。私達は異変解決の為にここに来たのですから、この館の人からしたら、私達は館を荒らしにきた不法侵入ですね。そんな風に私達が相談していると……、

「霊符『夢想封印』!!？」

ドガンッ！

……霊夢が問答無用で夢想封印を撃ってしまいました。

「れ、霊夢……なにしてるの……！」

「何よ。手っ取り早く入れるようにしただけでしょ？何処に悪い所があるわけ？」

「い、いや、まあ、無いけど……」

「そう、なら行くわよ」

門番さんは目を回しちゃってます。……門番さん、ごめんなさい。

「クスクス、寝てる人に撃つなんて酷いわねー」

（!!?今のは……）

私達は声をした後ろに振り向きました。そこには……、

「クスクス♪まあ、貴方の言うことは最もだけどね♪」

綺麗な金髪の長髪でその先が少し跳ねており、服装はで黒のゴスロリを着て、日傘をさしている少しつり目の綺麗な小さな女の子がいました。

（霊夢side）

（何よ、あいつ）

私は少し混乱している。理由は簡単だ。気配を感じなかったからだ。

（どうやって、あいつは私達の後ろに立ったわけ?）

私は、何時でも、何処からでも対処が出来るように辺りを警戒していた。なのに、こいつは、いとも容易く私の背後をとった。……まるで、紫のように。どうやって……、

「クスクス、そんなの簡単よ」

え!?

「クスクス、私は吸血鬼。闇に紛れる者。闇を滑る者。これぐらいはお手の物よ」

そう言って、あいつは自分の口に手を当てながらクスクスと笑っていた。ムカつくところだけど、それよりも疑問に思うことがある。

なんで、私の考えがバレた?

もしかして、それがあいつの能力?

「クスクス、少しは正解してるわ、その考えは、ね」

また読まれた!?? 一体、どんな能力を……いや、それよりも、こいつは敵なのかしら? だったら巫女としての仕事を果たす。それだけよ。

「クスクス、そう。私は貴方達の敵じゃないわ。……けれど、味方でも

ない」

……傍観者つてことか。なら、問題ないわね

「……あんだ、名前は？それと能力は？」

「おい、霊夢！彼奴が何者かも分からないのに聞いてどうする！それに、そう簡単に教えてくれるわけ……」

「クスクス、私はここ『紅魔館』の当主をしている子の姉のような存在のレティシア・スカーレットよ。能力は『見透かす程度の能力』。以後よろしくね、博麗の巫女さんと神無月の巫女さん♪」

「つて、教えるのかよ！」

「……そう、分かったわ」

彼奴はまだ隠してる事がある。根拠は勘よ。

「クスクス、そう簡単に全てを教えちゃうとゲームが簡単に終わってしまうからね♪簡単なゲームほどつまらないのはないのよ？クスクス」

……もう驚かなくなったわ。というか、慣れたと言うべきね。

「そう、私は博麗霊夢よ。霊夢と呼んでちょうだい。博麗だと呼びにくいでしょうしね」

「おまーなんで「少し黙ってて。後で説明するから」……分かった。私は、霧雨魔理沙だ。魔理沙と呼んでくれ！よろしくな！」

「私は、神無月葵です。葵と呼んで下さい」

「霜月ルカ。よろしく」

「……」

「？鬼灯？名乗らない「鬼灯は大丈夫だよ。もう既に二人は知り合いだから」そうなのか。分かった」

「いやいや！そこはツツコめよ！なんで鬼灯が知ってるのかとか！」

「この異変が終わればすぐに分かることだと思ってるからだ」

「……分かった。今は納得しといてやるが、この異変が終われば説明しろよ？鬼灯」

「分かっている」

ということとは、鬼灯は彼奴の能力を全て知っているとということね。後で聞いてみましょうか。



「クスクス、分かったわ。よろしくね、霊夢、魔理沙、葵、鬼灯、それと、半吸血鬼さん♪」

……そこまで分かるわけね

「……ルカでいい」

「クスクス、分かったわ、ルカ♪……それじゃあ、頑張つてちょうだい♪それでは、さようなら」

そうして、レティシアは闇に溶けて消えた。まるで、最初からそこにはいなかったかのように。

「……本当に何だったんだ？ 彼奴は」

「さあ？ それは、異変を解決した後でも鬼灯に聞けばいいだけよ」

さてと、館に入る前に……、

「お前達。侵入者か」

どうやら、面倒臭くなるみたいね。

## 第七話

（葵 side）

私達の目の前には、白銀の髪をショートにしている、頭には狐の耳、顔は鬼灯と似てるけど違う、服装はこの館のメイド服と思う服を着ていて、その服から九本の狐の尻尾が出ている人が立っていた。……顔と目で私達を警戒しているのが分かります。

「お前達は侵入者だな。その紅白の巫女と青白の巫女がいるから異変解決者御一行か」

「そうよ、分かってんじゃない。だったら、さっさとこの異変をやめてくれない？ハッキリ言って迷惑なのよね」

「そうだぜ！こんな天気じゃキノコが育たなし、私のとこの商売も上がったりだぜ！」

「……」

狐メイドさんは少し考え込んでいる。もしかして、可能性があるかも……。

「……それは無理だな」

「は？今、アンタなんて言った？」

「だから無理だと言ったんだ」

「……理由は？」

ああ、霊夢がまたイラついてるよ。このまま落ち着いて話し合い出来るのかな？

「そもそも、私はこんな異変はどうでもいいと思っっている」

「……」

「だがな、私がこの異変を起こしたわけでもないから止める術もない」「そんなの、あんたの主人にでも意見したらどうなのよ？」

「私が仕えるのと決めているのはただ一人。今の当主ではない。だから、あの当主が何をしようとか関係ない」

「……そう、分かったわ。アンタをぶっ飛ばして先に進んでやるわよ！」

「待て、霊夢」

鬼灯が霊夢に待ったをかけました。この先の展開を私はよく知っています。だって、私はもう、見たから……。

「ここは私にやらせてくれないか？」

「……」

「彼奴は九尾。つまりは私の血縁に入る。だから、血縁の誰かが間違った事をするなら私が正す。それは随分前から決めていたルールだ」

「……」

「頼む」

霊夢が鬼灯の言葉を聞いて考えています。内容は絶対に鬼灯の頼みを聞き入れるかどうかでしょう。……霊夢だったら、聞き入れてますよね？

「……はあ、分かったわよ。鬼灯がやっていいわよ」

「……ありがとう」

「その代わり」

「??」

「……絶対に負けないこと。いいわね」

「……ああ、勿論だ」

……、  
そう言って、鬼灯は狐メイドさんの前まで移動して行きました、が

「鬼灯！」

私はまだ言っていないことがあります。

「?どうした?葵」

「私も一緒に、『ダメだ』どうして！」

「私がやると決めたからだ」

「……分かった。だけど、絶対に怪我をしないこと。それと、無茶をしないこと。これだけは守って。いい?」

「……怪我はともかく、無茶をするつもりはない。だから、安心しろ」

「……分かったよ」

怪我の件も約束してほしかったのですが……鬼灯を信じましょう。

〈鬼灯side〉

「相手は鬼灯様ですか」

「なんだ、私の事を知っているのか」

「ええ。母に聞かされましたので、貴方のことを」

成る程。それならば私の事を知っているのは当然か。

「それに」

？まだ、あるのか？

「貴方の事を伝えない狐は動物達ぐらいですから」

……通りで、狐達に私を知ってるか聞いても知らないと答えるわけだ。そもそも教えてもらってすらないとはな。まあ、今はそんな事は関係ない。

「さて、じゃあ始めるとするか。お前の名前は？」

「穀月くおんと申します。どうぞよろしくお願いします」

「そうか、良い名だな」

「お褒め頂きありがとうございます。ですが、今は敵同士。それをお忘れなく」

そんな大事なことを忘れるわけがない。

「では、始めよう。お遊びを」

く葵sideく

鬼灯とくおんさんは上空で戦っています。お互いに、弾幕で牽制しながら。

「こちらから行きます！式神『二尾狐』!!?」

そうくおんさんが言うのと、くおんさんの隣に二匹の二つの尾がある狐が現れました。

「ほう、式神を出せるのか。流石だな」

「二尾狐！行きますよ！火符『狐火』!!?」

くおんさんがスペルカードを宣言すると、くおんさんと二匹の二尾の狐は自分達の周りに狐火を出しました。そして、それを鬼灯に向かって放ちました。

「良い腕だがまだまだだ」

そう言っつて、鬼灯は余裕淡々と避けました。でも、鬼灯。相手を舐めると終わってしまいますよ?..

く鬼灯sideく

(今、なんだか癩に舐めるなど言われた気がするな)

私は舐めているつもりはない。だが、どうやら親の目線で見てしまっているようで、あちらからはそれが舐めているように見えたようだな。

(さて、此方からも反撃しなければいけないな)

まずは、このスペルカードからだな。

「お前にお返ししよう！火符『狐火』!!?」

私はくおんのよりも多くの狐火を出した。これが私の『狐火』。

「な!??...やはり、貴方は凄い方ですね、ですが」

私がかくおんに向けて狐火を放つが、くおんとその式神はそれを軽々と避けてしまった。結構沢山あつたんだがな。

「私だって、ここで負けるつもりはありません!!?」

「それは私にも言えることだ!!?」

私も、この弾幕ぶっここで負けるつもりなど毛頭ない。ここで負けてしまうと、霊夢に代わってもらった意味がない。それに.....、

(神社の神がその巫女の前で負けるなど、言語道断!)

「これはどうですか？花符『花卉の舞』!!?」

くおんの奴がスペル宣言をすると、私の周りに花卉が舞っていた。まるで、踊っているかのように。

「これで私を捉えたと思うなよ!!?火符『鳳仙火』!!?」

私がスペル宣言をすると、周りに小さな炎が出てきて私を囲む。そして、炎は散り散りになって飛んでいき、花卉を跡形もなく燃やし尽くした。

「え!??...そんな、捉えたと思ったのに.....」

「さて、お前には悪いが少し、地獄を見てもらうとするか」

「え」

「心して掛かれよ？式神『ゾンビ狐』」

く葵sideく

「な、何なんだぜ？アレは」

「.....」

私達が目にしている光景は、土から出てきた沢山の狐達。ただ、その体はボロボロでドロドロで、目が無く、今にも体が壊れてしまいうな姿。

「うっ……」

「……」

ルカはもう慣れたみたいですが、私は今だに慣れません。今にも吐きそうです。皆さんは耐えられますか？そんな光景を見たら。

「……アレは、ゾンビね」

「そう。アレは鬼灯のスペルの一つ。式神『ゾンビ狐』。死んで土に還った狐達。まあ、あのゾンビ達を動かすのは鬼灯で、動かすにあたって必要な力は鬼灯の妖力だ。鬼灯の妖力は高いから、そう簡単には倒せない」

「……それに、ゾンビだから、たとえ体を攻撃されても体が再生する。そのループの繰り返しが待ってるだけ」

「葵、顔が青いぞ？大丈夫か？」

「大丈夫。まだ慣れてないだけ」

「そうか」

あのスペルを使うということは、決めるんですね。鬼灯。

く 鬼灯 side く

「な、何なんですか？それは」

「私の式神の一つだ」

「式神？そのゾンビ達ですか!?？」

「そうだ」

そう、コレが私の式神の一つだ。見るもの全てに嫌悪感を与える存在。醜悪な匂いを発する醜い存在。

……この技をスペルにするかどうか悩んだものだ。なにせ、この技は狐達の命を弄んでいるような技だ。本来は余り使わないが、先に進まないといけないし、何より葵との約束がある以上、使わざるおえなかった。

「さて、私はこの狐達にお前達を喰らえと命令することが出来るが、どうする？」

「……この子達を食べられたくありませんし、私も死ぬ気はありません。ですから、私の負けです」

「そうか。良かったよ、私もこいつらに食べろと命令せずにすんで」

私はこのゾンビ達への妖力の供給を辞めた。すると、ゾンビ達は形が保てなくなり、そのまま土へと還った。

「それでは先に進ませて貰う。いいな？」

「どうぞ」

く葵sideく

「鬼灯!!？」

私は鬼灯が怪我をしてないか心配になって、降りてきた鬼灯に真っ先に駆けつけました。

「大丈夫？ 怪我はしてない？」

「大丈夫だ。怪我は何処もしてない」

「そっか、良かった。本当に心配したんだから！」

「すまない。でも、無茶も怪我もしてない。約束は守ったぞ？」

「うん！ そうだね！」

そう、鬼灯は私との約束を守ってくれた。私が見たものとは違った結果になったということ。本当に、良かった。

「それじゃあ、行くわよ」

「おう！ 遂にこの館に忍び込むのか！」

「本当にようやくだな」

「そうだね」

「さあ、行くわよ」

私達は霊夢の言葉を最後に先に進みました。

くくおんsideく

「これでよろしかったのですか？ レティシア様」

「クスクス、ええ、上出来よ、くおん。それにしても、あのゾンビの狐達には流石に驚いたわ♪」

「……本当は、鬼灯様の考えはお見通しだったのではないですか？」

「クスクス、どうかしらね？ クスクス」

……この人は本当に食えない人だ。絶対に使うことを知っていた。

「それにしても、何故この様なことを命じたのですか？」

「クスクス、ただ彼女達の力を見たかっただけ。まあ、鬼灯はそれに気付いていたみたいだけど」

「え？でも、あの時……」

「アレは霊夢達や貴方を納得させるための言葉。まあ、本心でもあるけれど、ね。それにしても、葵さんは何と無く勘付いていたけれど一応納得していたみたいね。だけど、霊夢は納得すらもしてないわ」

「……」

「クスクス、まあ、この後は必ず霊夢と葵は戦う事になる。その時にでも実力を計らせてもらいましょう。クスクス」

「……そう言っつて、私の主人は闇に溶けて消えた。これは館に入りましたね。」

それにしても、流石は鬼灯様。気付いておられたとは。あの巫女達は気付いていたのでしょうか？……いつか、聞いてみたいものですね。



## 第八話

く葵 side

くおんさんを倒した魔理沙を除いた私達は、館へと入りました。魔理沙ですか？途中から何処かに行きましたよ？気を付ける様に言っておきましたから大丈夫です。

そして、その館の中はとて真つ赤でした。そう、血を連想させるぐらいの真つ赤さでした。そして、私達の目の前に現れたのは……、「あら？本当に来たのね」

銀髪の髪で、左右の前髪を三つ編みにして、緑のリボンで止めた、くおんさんと同じメイド服を着た人がいた。そう、普通の人が。

「あんた、人間よね？なんであんたみたいなのがいるわけ？」

「私はお嬢様に使えている身。ここに居るのは当然でしょ？それよりも、そのの貴方」

そう言つてメイドさんが指を指した相手は……、

「……なんだ？」

ルカだった。

くルカ side

私は今、メイドに何故か指を指されている。一体、何故なんだ？

「お嬢様様が貴方と話したいそうだから、貴方だけは通してあげるわ」

「……この異変を起こした奴が、私に？」

本当に何なんだ？私と一体何の話を……？

……兎に角、行つてみるしかないな。

「分かった」

「ルカ……」

葵が心配そうに私を見ていた。だから、私が言う言葉は一つだけだ。

「大丈夫だ。これぐらい、葵も分かってた事だろ？」

「……確かにそうだけど、心配なものは心配なんだよ？でも、ルカがそう言うなら大丈夫って信じるよ」

「ああ」

さて、この異変主は私に何の用があるのかな？

〈葵 side〉

「……行つたわね。さて、貴方達はお呼びじゃないの。さっさと出て行つてくれないかしら？さもなければ……」

メイドさんはそう言いながら脚に着けているホルダーに手を伸ばして、ホルダーに入っていたナイフを手に取り……、

「排除するわよ」

私達を脅してきた。でも、そんなので引く霊夢ではないし、私も此処は絶対に引けない。私達は巫女としての仕事を果たしに来たのだから。

「そうね、早くこの紅い霧をどうにかしてくれるならさっさと帰ってあげるわ」

「そんなこと、出来る訳ないでしょ？これはお嬢様の願い。私はその願いを叶える為に、願いを阻むものを排除する。それが私の仕事よ。だから、帰らないと言うなら……ここで死んでもらうだけよ」

メイドさんはそう言うと、先程よりも強い殺気を私達に浴びせて来た。でも……、

「そうですか、でしたら、私達もこの異変を解決する為に貴方と戦うしかありません。霊夢、準備はいい？」

「ええ、そんなの随分前から出来てるわ」

「良かった。じゃあ、いつも通り……」

「私達が相手になるわ（なります）!!？」

\*\*\*

「あの、戦う前に、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「……何故かしら？」

警戒心が強いですね。でも、何故って……、

「貴方の名前を私も霊夢も知らないからです」

「……」

「別に、いいですよ？教えて頂いても」

……メイドさんは黙ったままです。ダメなんでしょうか。

「……相手の名前を聞く前には、まず自分からでしょ？」

まさかの返しです。でも、確かにそれが礼儀ですね。失念していました。

「すみません。私の名前は、神無月葵です」

「博麗霊夢よ」

「そう。私は十六夜咲夜よ」

私達はお互いの挨拶を終えて、そのまま戦いに入りました。

「まずは私の攻撃を受けてみなさい！封魔針！」

私はこれで終わりとは思っていませんでしたが、少しは当たると思っていました。ですが、

「何処に投げてるのかしら？」

咲夜さんはその場には居ませんでした。

「な!？」

これには驚きました。が……、

(なんででしょう、この違和感。……それよりも、咲夜さんはどうやって移動したの?)

私がそんな風に考えて居ても時間は止まってはくれません。

「次は此方の番よ。奇術『ミスディレクション』」

咲夜さんがスペル宣言をすると、ナイフが何故か沢山私達に向かって投げられていました。

それにも驚きましたけど、咲夜さん。忘れてますよね？

「結界『二重結界』!!？」

私の存在を。

「やっぱり、貴方が『守りの巫女』ね。だったら、貴方から先に狙うまでのこと!!？」

確かに、戦う人からしたら補助の人を狙うのは鉄則ですが、私はそんな心配はしません。

「あんたの相手は私よ!!？」

(こんな風に私の信頼できるパートナーがいますからね)

霊夢は咲夜さんに向かって虹色の弾幕を放ったけれど、また咲夜さんに避けられてしまった。

「なら、これならどうかしら？」

「ツ!!? 結界『三重結界』!!?」

咲夜さんの言葉を聞いたあと、急に現れたナイフが私達に向かつていました。私もう少し遅く気付いていたら。……恐ろしいですね。

「葵、ありがとう」

「お礼はいいよ。これが私の役目だからね」

そう、これが私の役目。霊夢（博麗の巫女）を守るのが私（神無月の巫女）の役目。だから、お礼はいらない。当たり前のことだから。それよりも……、

（さっきの動きといい、急に現れたナイフといい、どういう仕組み……あれ?）

あれ? ちょっと待って下さい。その能力に酷似している人が居るじゃないですか。ということは……、

（紫さんと同じ能力? いや、でも）

それだと、私が見たものと辻褄が合いません。だって、あの人は人の前に現れていた。紫さんと同じならそんな手間はいりませんか。じゃあ何故?

（理由は簡単だ。『姿を隠す事が出来ないから』。となると、まさか）

でも、それがあの人の能力? ……いえ、これしか答えはありえませんが。なら話は簡単です

（私が見たあの人の能力の『弱点』を見つけばいい!!?）

「霊夢!」

「何よ? 葵」

私は霊夢にある一つのお願いをしました。

「それでこの戦いは終わるはずだよ!」

「分かったわ。やってやるわよ!」

霊夢は私の作戦を信じてくれました。これが当たっているかは分からない。けれど……、

（やってみなければ分かりませんが、当たってる自信があります）

「あら? 作戦会議をしている暇があるのね。ならこれを防いでみなさい! メイド秘技『殺人ドール』!!?」

すると、ナイフがまた目の前に広がっていました。けれど、問題は

ありません。

「霊夢！」

「分かってるわよー！」

霊夢はそんなの気にしないで突っ込んでくれました。

↳ 霊夢 side

「まずは一人」

あいつはそう呟いたけど、私はここで倒れない。だって……、

「結界『四重結界』!!?」

私には信頼できる相棒がいる！葵がいる限り、私が負けることなんて、ない！

「な!?!」

「葵の存在を少しでも忘れていたあなたの負けよ！くらいなさい！」

私はメイドの至近距離まで行き、そのままスペルカードを撃った。

「霊符『夢想封印』!!?」

↳ 葵 side

(これで、この戦いは終わりですね)

そう私は思っていたけれど、違った。だって、そこに居たのは、咲夜さんと霊夢。そして……、

「クスクス、この子はレミィのお気に入りの子なの。だから、これ以上、攻撃をしないでくれるかしら?」

ケガも汚れもついておらず、まるで何事も起こらなかったと言いたげに平気で咲夜さんの前に立っているレティシアさんがいたから。

## 第九話

今から始まるのは、咲夜対靈夢と葵が戦っている時、別の所での話。  
（ルカ side）

「お前が霜月ルカか？」

私が紅い階段を登って少し歩いた場所に執事服を着た背の高い黒髪の男と、さっきのメイドとは違う服（不思議の国のアリスが着ているアリスの服そのもの）を着てガタガタ震えている男と比べると一回り小さい白髪のウェーブがかかっている女の子が居た。……というか、何で女の子の方は震えているんだ？

最初に思った疑問がまるで聞こえていたかのようなタイミングで男の方が答えた。

「申し訳ないな。この子は人見知りか激しいんだ。私はこの館で執事をしている。『八神狼』だ。そして、こつちが……」

「ま、ま、ま、『マリア・ドロワーズ』です！よ、よろしく、お、お、お願いします!!？」

すごいカミカミだな、自己紹介が。でも、向こうは名前を名乗ったのだから此方が名乗らないわけにはいかなくなってしまった。いや、確か向こうは私に確認していたということ、名乗らなくてもいいということだな。なら良かった。

「そうか。で、お前達の主が私に話があるからと通されたわけだが」

「ああ、こつちだ。ついて来い」

そういつて、狼とマリアとかいう二人組は先に進んで行ったため、私も進む。

……それにしても、

「……」

なんなんだ？このマリアっていう女の子は。人見知り過ぎないか？さっきから私を何度もチラチラ見ているんだが。そして、私がマリアを見れば、

「ヒツ!!？」

……怯えた顔をされる。一体、何だっていうんだ？

「……………ここだ。着いたぞ」

「……………そうか」

「ここが、私を呼んでいるというこの館の主人がいる部屋ね。……………なんか、食べ物の匂いがあるのは気のせいかな？」

「私が頭の中でそんな事を考えていると、狼は扉を叩いていた。」

「レミリアお嬢様。霜月ルカを連れてきました」

「狼がそう言うのと、中から返事が聞こえた。」

「部屋に入る許可が降りたと同時に私達はそのまま入って行った。」

「そして、その部屋は広間のような所で、中央にでかいテーブルがあり、その奥の方で優雅に座って私を待っていたのは……………」

「ルカ。一緒に食べながら話でもしましょう」

「背中から蝙蝠の羽をはやしている水色の髪をした小さな女の子。ただ、その雰囲気からはカリスマ性を感じる気がする。」

「……………」

「相手の狙い通りというのはシヤクなのだが、今はそうする他ない為、相手の真つ正面に位置する椅子に座った。」

「さて、このテーブルの上にある食べ物は幾らでも食べていいわ。私が貴方と話す為に咲夜に用意させた物だからね」

『咲夜』というのは、多分、あのメイドだろうと私は予想をつけた。」

「……………悪いがさつさと終わらせたいんでな。要件を言ってくれ」

「ふふふ、強気なのね。貴方は半吸血鬼とはいえ、もう半分は人間。そんな貴方が私に勝てるんでも？」

「勝てはしないだろうが、お前の行動を一瞬は止められるという自信がある」

「……………どうしてかしら？」

「こいつ、私の正体は知っていても、能力までは知らないようだな。そんな相手に能力を教えるというのは自殺行為に等しいが、多分、大丈夫だろう。」

「私の能力は二つある」

「そう、二つね。続きを」

「ああ」

そうして私は自分の能力の事を話した。理由は、こいつと戦うことではないと思っているからだ。別に、私がレミリアの元に行くって意味じゃないからな。

「……それで？私を呼んだ本当の理由は何だ？」

そう、こいつが私を呼んだ理由はまだ聞いていない。私の能力を聞くだけならこんな事をしなくてもいい。ということは、他に理由がある。そう考えるのが妥当だろ？

「そうね。単刀直入に言いましょう」

そいつはその一言を言うと一度区切ってから、私にこう言った。

「貴方。私の仲間にならないかしら？」

「断る」

「……へ？」

私は相手からの質問に即答してやった。

「……何が不満なのかしら？貴方は半分とはいえ吸血鬼。朝は弱いのですよ？なのに、どうして断ったのかしら？理由は？」

そんなもの、決まっている。

「確かに私は朝が弱い。それは認めるが、だからといって、そんな理由で葵を裏切るなんてこと、するわけないだろ。彼奴は私を救ってくれた。私の『心』を救ってくれた。だから私は葵を裏切るような事はない。まあ、葵が間違っている事をしている場合は話が別だが」

「……そう。残念ね」

相手はそう言っていた。嘘は言っていない、ということとは本心か。

「この話はこれで終わりだ。私はもう行くぞ」

「ええ、どうぞ」

相手の許可を貰い、私は立ち去る。…つもりだったが、一つ忘れていた。

「なあ、お前の名前はなんだ？」

「名前？聞く必要はないと思うけれど？」

理由ね。たった一つしかないんだが。

「お前だけが私の名前を知っていて、私だけがお前の名前を知らないとか、なんだかストーカーにでもあった気分がして気持ち悪いから



だ」

「ストーカーじゃないわよ!!?」

いや、お前のことをストーカーとは言っていないと思うが。あと、後ろにいる狼とマリア。なに隠れて笑っているんだ。お前達の主だろ。笑ってやるなよ。

「ちよつとー!そこの二人!笑わない!!?」

「ヒツ!!?ご、ごめんなさい!!?」

「す、すみません……ククツ」

ああ、まだ狼は笑ってるよ。ほら、お前の主が涙目だぞ?慰めてやれよ。

「……ご、コホンツ。それで、私の名前だったわね。私は『レミリア・スカーレット』。この紅魔館の現当主よ。よろしく」

「レミリアか。お前達は知っているみたいだから名乗っても意味はないんだが、一応名乗っておこう。私は霜月ルカ。よろしく」

私は自分の名前を名乗ってからその場を立ち去り、葵達がいるであろう玄関ホールへと向かった。

## 第十話

〈葵side〉

「あんた、なんでどうやって私達の間に入ったわけ？それに、どうして傷や汚れが付いてないわけ？答えなさい！」

私も、そして霊夢も少し混乱しています。いや、霊夢は違うかもしれませんがね。理由は霊夢が言ってくれた内容そのままです。アレが、レティシアさんの持つている能力なんでしょうか？

「クスクス、少し落ち着きなさい、霊夢。この場を納めてくれるだけでいいわ。だから……落ち着きなさい」

「!!」

今、雰囲気が変わった？いや、でも、もう元に戻ってる。

……気のせい、だったのかな？

「……分かったわよ。それで？質問に答えてくれるわよね？」

「クスクス、どうしてかしら？」

「どうしてって」

「正体不明の相手が怖いから？」

「……は？」

「クスクス♪冗談よ」

霊夢がレティシアさんの一言に反応して睨むも、レティシアさんは同じ様に笑っていました。

霊夢が睨んでも怖くない様です。

「……いいから、言いなさい」

「クスクス、分かったわ」

レティシアさんの能力を私はなんとなくは理解しています。けど、それが当たっているかは分かりません。ですから、私もレティシアさんの能力に興味があります。一体、どんな能力なのでしょう？

「……クスクス、なんてね♪」

ガクッ！

私達は一斉にずっこけました。いや、これはずっこけますよ？教えてくれると言いなから教えてくれないんですから。

「クスクス、でも、折角やめてくれたのだから一つぐらいいいかしらね」

「つまり、あんたには他にも能力が有るのね」

「クスクス、ええ、そうよ♪言葉の裏の意味を取るとはさすがね♪」

「そりやどうも。で？能力は何よ」

「クスクス、私のもう一つの能力は『物を創る程度の能力』よ」

『『物を創る程度の能力』？』

「クスクス、ええ、そうよ♪私の手を見ていなさい」

私達はレティシアさんにそう言われたのでレティシアさんの手を見ました。すると……、

「え!？」

「な!？」

手の上には何も無かったのに、急にルビーが出てきました。というか、何故ルビー？

「クスクス、私の能力は何も無い所でも物を創造する事が出来る能力よ。あ、あと、このルビーは霊夢にあげるわ。どうぞ♪」

「え？本当に！ありがとうございます！」

……霊夢の目にお金のマークが見える気がするのですが、私の目がおかしくなったのでしょうか？

それにしても、この人が持っている能力は少なくともあと一つは有るということですね。

え？何故分かるのかですか？いつかは話しますよ。ヒントは私には能力が二つあります。ただ、一つはあまりいい能力ではないですがね。

「レティシア様、このような無様な姿をお見せしてしまい申し訳ございません。そして、巫女からの攻撃を防いで下さり有難うございました」

「クスクス、人が傷付く姿を傍観する趣味は私には無いわ。それに、貴方が傷付くとレミイが悲しむわ」

「有難うございます」

「クスクス、頭を上げなさいな」

「……」

「クスクス、鬼灯。そんな目で見なくても私は手を出さないわ。私はあくまで傍観するだけよ？この異変が終わるまでね♪」

「……まるで、異変が終わろうと何かが有るような言い方だな」

「クスクス、それはどうかしらね？どうとつてもらつても構わないわ」

「……そうか」

「……一体、何があるというのでしょうか？なんだか、嫌な予感がするのですが……」

「霊夢、葵、鬼灯」

「ルカ！」

「……お前」

「クスクス、先程振りね。ルカ♪」

「……そうだな。先程振りだな」

「クスクス、それでは、私はこれで。咲夜」

「はい、なんででしょう？レティシア様」

「貴方は私が止めなかつたら確実にやられてたわ。つまりは貴方は負けた」

「……」

「だから、この御一行をレミイの元まで案内してあげてくれないかしら？」

「分かりました」

「クスクス、有難う、咲夜」

「私には勿体無いお言葉です」

「クスクス、謙遜しなくていいのよ？それでは、また会いましょう。クスクス」

「そう言うと、レティシアさんはまた闇の中に溶けて消えてしまいました。」

「貴方達、案内するからついて来なさい」

咲夜さんは、私達をこの異変主の元まで案内してくれました。案内している間は話は一切ありません。

そして、異変主がいる部屋まで辿り着きました。

「お嬢様、お客様達を連れて来ました」

咲夜さんが扉をノックしながらそう言うと、中から許可が下りました。

そして、扉が開かれた先には、

「ふふふ、貴方の後ろにいるのが今代の博麗の巫女と神無月の巫女ね。初めまして、私はこの紅魔館の現当主のレミリア・スカーレットよ。よろしく」

広間の奥で優雅に座っているカリスマ溢れた少女が座っていた。

この異変は、もうすぐ終わる。けど、私が『未来』を少し変えてしまったせいで、待っていた『未来』が変わったことなど、この時の私は知らなかった。

## 第十一話

〈葵 side〉

私達は異変主の居る部屋にいる。そして、私と霊夢と鬼灯は初めて異変主と対面しました。

それにしても、こんなに小さな少女から凄いカリスマを感じます。吸血鬼は皆、こんなにカリスマ性を持ち合わせているのかもしれない。

「あんたがあああの紅い霧をだした奴ね。さっさとあの霧を消してくれない？正直、迷惑よ」

「それは無理な願いね。私にとって太陽は敵。太陽が出ているときに私達は出歩けない。だから、この霧は私達吸血鬼にとっては必要な物よ。貴方もそう思わない？ルカ」

「……悪いが、私はそうは思わない」  
「……」

「太陽が出てくれないと洗濯物が乾かないんだ。洗濯物が乾いてくれないと葵が迷惑する。だから、この異変を解決する。それだけだ」  
「ルカ……」

「……そう、残念ね」  
「というか、お前それについてはさつきも断った筈だが？」

えッ!??異変主が呼んだ理由ってルカを誘ってたの!??この異変に加担しろって誘ったの!??でも、ルカはそれを断ったんだよね?異変解決する巫女が言うことじゃないけど、何でだろ?その誘いはルカにとってはメリットになる筈なのに……。

(そういうえば、さつき『葵が迷惑する』って言っていたような……)  
ということは、私がいたから断ったのかな?……でも、どちらにしても、ルカと戦うことにならなくて良かった。

(……まあ、戦うのはあくまで霊夢で私は補助。力になれない。私が居る意味ってあるのかな?)

時々そう考えてしまう。私は弾幕が出せないし、スペルカードも補助・回復しかなくて、攻撃できる物は一切ない。いや、私には、攻撃

系統の『才能がない』。……そんな私って……。

(……いや、今は異変解決に集中するんだ!)

私は神無月の巫女。もう一人の異変解決者。霊夢の補助。それが私の役目であり仕事だ。こんな事を考えてはいられない!

「……どうしても、この霧を辞めるつもりわない様ね」

「ええ、辞めるつもりなどないわ」

「だったら」

「だったら? どうするのかしら?」

「あんたをぶっ飛ばして異変解決してやるわ!」

「そうだね! 早く異変解決して、元の日常に私は戻りたいんです。だから、ここで貴方の野望には潰してもらいます!」

私と霊夢はお祓い棒を構えて、レミリアさんに向かってそう言った。

「ふふふ、そうね、戦いましょうか。なにせ今は夜。これだけ綺麗な月が出てるいるのだから、今日は楽しくなりそうね」

\*\*\*

私達は飛んでお互いに弾幕で攻撃していた。でも、どちらも当たらない。そして最初に攻撃を仕掛けてきたのは、レミリアさん。

「まずはこれよ! 天罰『スターオブダビデ』!!?」

すると、弾幕が出てきて、そこからレーザーが発射された。

私達はそのレーザーに当たらない様にして避けた。

「そんなレーザー、私には当たらないわ! 霊符『夢想封印 集』!!?」

この『夢想封印 集』は、夢想封印とよく似ている。けれど、技の威力で考えると多分、こっちの方が威力は大きい。

でも、さすが異変主。そう簡単には倒れてくれず、避けられてしまいました。

「あら? 貴方は攻撃をしないのね。ということは、貴方が『守りの巫女』の様ね。補助ほど厄介なものはないの。だから、貴方には早々に退場してもらおうわ! 紅符『スカーレットシユート』!!?」

レミリアさんの技は私から見るととても避けにくい。それがこの技でも良く分かる。だから、守る!

「避けられないなら、結界『二重結界』!!?」

私は近くにいた霊夢も守るようにして結界を張りました。

そして、私は霊夢と目を合わせた

「次は私よ！境界『二重弾幕結界』!!?」

すると、レミリアさんの周りに結界が張られ、その中には無数の弾幕があつた。というか、これ、避けるの大変な技じゃないですか！境界が張られて外には出れないし、中は弾幕だらけ。これで避けるの簡単とか言う人がいたらある意味尊敬します。

「くっ!!?避けるのが大変ね。だったら……」

「??」

レミリアさんはスペルカードを取り出すと、

「結界を壊すまで！神槍『スピア・ザ・グングニル』!!?」

そして、そのグングニルという武器をぶん投げて、結界を壊してしまいました。どうやら、結構な威力があるみたいですね。ですが、

「少し大人しくしてもらいます！呪術『鬼呪封印』!!?」

私は人の動きを止める為のスペルカードを宣言しました（幻想万華鏡で霊夢さんが咲夜さんにやった様な感じの技です by主）。

「なっ！くそっ！解けない！」

まあ、その技は鬼すらも動けなくなる程のものですから仕方ありませんね。ということ、終わりです。

「これで終了よ！霊符『夢想封印』!!?」

「……そんな、私が、人間に負けるなんて」

レミリアさんの眩きの様なものは、夢想封印によって飲み込まれてしまいました。

\*\*\*

「お嬢さま！大丈夫ですか！お怪我は！」

「大丈夫よ、咲夜。何処も怪我をしていないわ。それに、していたらその巫女が治しているでしょうしね」

「なんだレミリア。私の能力は知らなくて、葵の能力は知っていたのか？」

「当たり前よ。彼女は有名だからね」



「え？そうだったんですか？」

私が有名だったなんて、初めて知りました。でも、多分悪い方でつて事なんでしょうがね。

「……一応、聞いておきますが、どんな風に言われているのでしょうか？」

「人が怪我をしている所を見ると、その怪我を絶対に治してくれる空色の巫女。そう言われているけれど」

「確かに、あんた、人が怪我をすると絶対に治すわよね、敵味方関係なく」

「だって！怪我しているのを放っておくなんて出来ないよ！」

私の能力の一つ『癒し、治す程度の能力』。この能力は、生物が怪我や病気になった場合、その傷や病気を治すことが出来る能力です。だから、私なら出来ることをしているだけなのにな……。

「さて、レミリア。さっさとこの紅い霧を（ドガンツ!!?）！一体、何が起こったってのよ！」

「分からないわ！私達は、知らない！」

「レミリア達も知らないのか？」

「……（いや、レティシアが傍観するのは終わったとはいえ、こういうことをする様な奴ではない。となると、別の要因か？）」

「……」

「……葵？どうした？」

「……ない」

「え？」

「私、こんなの『見てない』。一体、何が……」

そう、私はこの展開を見ていない。何処かで歯車が変わるような要因があったということになります。一体、何処で。

「……ゲホツ!!?」

「！魔理沙！大丈夫!?!?」

「魔理沙！あんた、その怪我、どうしたっていうのよ！」

「！誰か来るぞ！」

ルカの声を聞き、ドアの方を向くと、そこには枯れ枝の様なものに

七色の宝石の様なものがついている羽を生やし、金髪の髪をサイドテールにした小さな女の子がいた。その顔から見ると、レミリアさんに似ている気がしないでもない

「！フラン！どうして貴方がここにいるの！早く、屋に戻りなさい！」  
「……お姉さまだけ遊ぶなんてズルいわ。私も一緒に遊びたい。ねえ？早く、一緒に遊びましょう？魔理沙。それとも……もう、壊れちゃう？」

紅い霧の異変は間もなく終わろうとしていた。

## 第十二話

〈葵side〉

「フラン！部屋に戻りなさい！今すぐに！」

「どうして？私も遊びたいのに、どうして私だけ除け者にするの？一人だけ楽しむなんて、酷いわ、お姉様」

これは、姉妹喧嘩、の筈ですが、いつも出てくる物騒な言葉。

「ねえ？私と一緒に遊ぼうよ！ルールは簡単だよ！私の攻撃で壊れないこと。これだけだから！ね？遊ぼう、遊ぼう！」

「くっ……!!？」

「魔理沙!?大丈夫？」

「酷い怪我だな。これが弾幕ごっこではなく、一代前の巫女の時の戦いだったら確実に死んでいた。良かったな、霊夢が考えた新たなルールで」

「だが」

「ねえねえ！遊ぼうよ！ふふ、ふふふふ、アハハハハハハ！」

「彼方は殺る気らしいが」

「つまりこのルールを破ることになる。……紫のやつが黙っていないぞ？」

「アハハハハハハハ！早くしようよ！」

どうすれば！私は魔理沙の治療が出来るけれど、このままだとそれも出来ない。かといって今の状況は好ましくない。私達も、まだ霊力が有るとはいえ連戦した。このままあの子と戦うとなると厳しい。けど……、

（私はあの子を見捨てたくない！私はあの子の狂気からあの子自身を救ってあげたい！）

でも、どうする？ずっとその考えが頭の中に浮かぶ。けれど、いい答えは出てこない。

（誰か、少しでもいい。少しでも介入してくれれば……）

ークスクス、だったら、私が介入してあげるわー

！このクスクス笑いは！

私達がこの笑い方の人物を思い浮かべようとしていたら、

「な！う、動けない！」

フランさんに突如、鉄の鎖が出てきて体を抑えた。

「クスクス、フラン。ちよつと大人しくしてくれないかしら？」

「レティシアお姉様！」

「レティシアお姉様！何故、此処に！貴方は傍観者に徹する筈じゃ……」

「クスクス、私は『この異変が終わるまで傍観している』と言っただけよ？そして、貴方の異変はもう、終わっている。だから、傍観者に徹するのを辞めるのは当たり前よ？……それよりも……」

ここでレティシアさんの纏う空気が変わった。勘違いとか気のせいとかではなく、確実に変わった。そう……怒りに。

「レミリア・スカーレット。私は貴方に言った筈よね？『フランを地下からこの家の範囲だけでもいいから出してあげて』って。どうして、今まで地下に閉じ込めていたのかしら？」

「そ、それは……」

「フランの能力が危険だから？だったら、私の能力も危険な領域に入るのよ？私はいくらだって能力を創れるのだから。この子の能力は私に比べると、まだ危険ではないのよ？」

「……」

「それでも、貴方はフランを『危険だから』と言って地下に閉じ込めた。その結果がこれよ。どうするつもり？貴方は責任を取れるの？」

「そ、そんなこと……」

「出来ないなんて言わないわよね？」

「！……」

「……………」

レティシアさんがレミリアさんを責めるような目を向けている。けれど、真実は違う。

レミリアさんはフランさんの事を思って地下に閉じ込めていた。そして、それをレティシアさんも分かっている。ただ、レミリアさんからその事を口にさせないと、フランさんの暴走は止まらないことも

分かっている。だから、敢えてあの口ぶりにしていた。

この吸血鬼一族は、道が間違っているだけで本当は……。

(……だったら)

私は二人の会話を聞いていながらも、魔理沙の怪我を治していた。が、私は霊夢とルカに頼み事をした。

「……別に、いいぞ」

「私もいいけど、葵、無茶しないと約束できる?」

「大丈夫だよ……多分」

「多分って、あんたね……」

「まあ、いいだろ? 説教は葵が無茶したときにでもしよう。ただし、その時は鬼灯にも加わってもらうがな」

(……あれ? それ、説教が長引くんじゃ……)

どうやら、私はこの後に説教が待っているのかもしれない。

「……さて、フラン。そんなに遊びたいのなら、私と一緒に遊ばないかしら?」

「! 本当! 私、レテイシアお姉様と遊ぶわ!」

「待って!」

私は二人の会話に待ったをかけた。

「……」

「フランさん! 私達が遊んであげる! だから、弾幕ごっこ……一緒にしない?」

私はフランさんに優しく声をかけたつもりです。

「本当! 分かった! 私、葵達と遊ぶわ! だから……すぐに壊れたりしないでね?」

「クスクス、ならこの鎖を外してあげるわ。その状態だと、満足に遊べないでしょうから」

そうして、フランさんの鎖は外されて自由になった。そう、この異変の最後の弾幕ごっこが始まる。

\*\*\*

「お姉様!」

「クスクス、レミイ、少し黙りなさいな」

「ですが！」

「黙りなさいと言っているのが分からないのかしら？」

後ろで、レティシアさんが殺気を出しているのが嫌でも分かりま  
す。

「！……」

「クスクス、そう、それでいいのよ。大丈夫よ。あの子達は負けないか  
ら。でしよ？ 鬼灯」

「ああ、霊夢と葵、そこにルカも加わった。そうそうは負けないだろ  
う」

「クスクス、そこに貴方も加われれば、確実に負けなしね♪」

「チート能力者のお前に言われてもな」

「クスクス、そうは言うけれど、貴方もでしょ？ それもフランよりも危  
険な能力だしね」

「な!？」

「……」

「クスクス♪」

何やら後ろが騒がしいですが、気にしないでおきましょう。さて、

「ふふふ、じゃあ、これを避けてみてよー・禁忌『カゴメカゴメ』!!？」

すると、弾幕が出てきたが、いくつかはどうやら適当に放たれてい  
るようで、私達のいない所にもいっています。が、私達に向かって来  
ている弾幕もあり、その適当に放たれて弾幕もあつてかなり避けずら  
い。霊夢たちも苦戦しているみたいですね。

「くっ！ 何なのよ、この技！ 避けずらいわね！」

「……」

ルカは何も言わなかったが、顔は苦渋の色を出している。そして、  
私も。

（避けずらい！ でも、何とかしてフランさんに近付かないといけない  
のに！）

このままでは私達の方が負けてしまう。

私達（特に私と霊夢）は連戦をした。その時の疲れは溜まっている。  
持久戦は不味い。

(だからお願い！ルカ！)

私は最初に行動を取ることになっているルカを見た。

「……」

ルカは相手を観察していた。どうやら隙を伺っているみたいだけれど……。

「アハハハハハハ！すごいすごい！だったら……」

「悪いが、私達もそうは付き合っていられないんだ。だから、お前の動きを止めさせてもらう！」

ルカが能力を発動した。どうしてわかるのかというと、

「えー！一体、何処から『氷』が……」

フランさんの体を氷が抑えたからです。

「私の能力の一つ『氷を創造する程度の能力』。まあ『氷を操る程度の能力』と合体させて話す時の方が多い能力だが、やはりこの方がしつくりくるな。今後は別々にして説明するか」

「くっ！だったら……」

「やらせない！霊符『夢想封印』!!?」

「へ？きやあー！」

霊夢の技が直撃し、フランさんを抑えていた氷も粉々になりました。

これでフランさんは自由の身になってしまったわけですね。

ですがもう一度、動きを止めさせてもらいますね？フランさん。

「呪術『鬼呪封印』!!?」

「えー！」

今度は私の技で動きを止めます。

「うそ!??解けない!」

「それは鬼すらも苦戦する程の強行な封印。そうそうは解けませんよ」

「だったら壊すまで！『キュツとして……』」

フランさんは手を握りしめて……、

「『ドツカーン』!!?」

そう言つて、握った手を開いた。すると、鬼呪封印の為に使われて

いたお札の一部が破壊されました。

「え!？」

「……なるほど。だから危険視されて地下に監禁って訳か」

「そうよ。フランの能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。フランに破壊出来ない物はそうそうないのよ」

「まるでフランでも壊せない物が有るような言い方だな」

「ええ、そういう能力を持っている奴がウチの執事として働いているからね」

(あの八神狼とか言っていた奴か)

どうやらルカは会っていたのでしよう。誰のことか分かったような顔をしていますから。

(それよりも……)

私はフランさんに近付きます。

「何?なんで近付いてくるの?来ないで!」

「……」

私は近付くのをやめません。

「だったら、禁弾『スターボウブレイク』!!?」

フランさんはスペル宣言をし、私に技を放ってきました。けれど、

「結界『二重結界』」

私の得意技は結界。私は自分の身ぐらい守れます。

「やだ!近付いて来ないでってば!!?」

「どうしてですか?」

「どうしてって……」

「私を壊したいなら、その能力で壊せばいいだけですよ?」

「……」

「……やっぱり、本当はそんなことしたくないんですね。フランさんは優しい子だから」

「……にが分かるの?」

「……え?」

「私の何が分かるっていうの!?!?貴方じゃ私の苦しみは分からない!!?私は壊したくないのに、どうしても壊したくなる衝動に駆られてし



まう!!?イヤなのに、体が衝動に負けてしまう!!? 貴方じゃこの苦し  
みは分からない!!?」

「……分かりますよ」

「……え?」

「私は、貴方の苦しみが分かります」

「そんなわけ……」

「私のもう一つの能力『未来や過去を見る程度の能力』。この能力は未  
来を見たり、初対面の人であれば相手の過去が見れる。私はそういう  
能力を持っているんです。だから、私は貴方の過去を知っています」  
「……」

そう、私はこの能力が勝手に発動した為に、フランさんの過去を知  
ることになった。初対面だと必ず勝手に発動する能力。私はこの能  
力は好きではないですが……、

どうやら、今回は役立つてくれたみたいです。

「フランさん。今まで苦しかったですよ? 衝動に負けてしまって、  
本心は壊したくないのに壊してしまう。そして、危険視されて地下に  
監禁されてしまって、寂しかったですよ? でも、大丈夫です。貴方  
は自分は一人だと感じているみたいですが、一人じゃありません」  
「……え? どういうことなの?」

「貴方のお姉さんのレミアさんはですね、貴方の能力を怖がったか  
ら貴方を監禁したのではなく、貴方を守る為に監禁したんですよ?」  
「え? そうなの?」

そう、フランさんは勘違いをしてしていた。私がレミアさんの過去  
を覗いてしまった時に見たのは、泣いていたレミアさんだった。何  
が悲しくて泣いていたのかは一目瞭然で、フランさんを監禁したのが  
苦しかったのだ。でも、フランさんの能力は危なく、そして、フラン  
さん自身は優しい子だ。そんな子が、そんな能力に耐えられる訳が無  
い。だから、レミアさんは監禁して、もう壊さなくて済むようにし  
た。……結果はこのようになってしまったけれど。

私は今の事をそのままフランさんに話した。

「お、お姉様……」

「……」

「クスクス、レミイ、行きなさい」

「そうだな、お前の気持ちをちゃんと伝えてこい」

「分かっているわ」

そうして、レミリアさんはフランさんに近付き、こう言った。

「フラン、今までごめんなさい。貴方の為と思っていたことが、全て間違っていた。貴方は寂しい思いをしていたのに、姉である私はそれに気付けなかった。本当に、ごめんなさい」

そして、フランさんに頭を下げていた。

「お姉様……。もう、いいんです。私はお姉様の気持ちがよく、分かったから」

フランさんはそこで堪えきれなくなったのか、涙を流し始めました。

「！フラン……」

レミリアさんもフランさんと同じく涙を流し始め、そして、

「うわ~~~~~ん!!?」

泣きながらお互いを抱き締めながら号泣していました。

「……良かったですね、フランさん」

こうして、『紅い霧の異変』は幕を閉じました。

そして、この異変は、姉妹の気持ちをお互いに知ることが出来た良い異変でもありました。

……私は少し、疲れてしまったようです。少し、眠いです。

(あ、不味い、倒れる……)

そう考えていると、

ボフッ

「……全く。無茶をするな、お前は」

「鬼灯、すまない。葵！大丈夫か？」

「うん、大丈夫……。でも、眠い」

もう、ダメそうです。

私はそこで意識を手放しました。

く鬼灯sideく

葵は疲れてしまったのか寝てしまった。よっぽど魔理沙の怪我が酷かったのだろう。まあ、葵が治したおかげか魔理沙には傷跡すら残っていないかったが。

「葵！鬼灯、葵は大丈夫なの！？ねえ！」

「安心しろ。その魔法使いの怪我がよっぽど酷かったのだらうな、疲れて寝てしまっている。見た目からしたらそこまで見えなかったが、本当は骨まで折れていたのかもな」

「え！マジかよ！」

「……あんた、自分の事なのに気付かなかったわけ？」

「いや、フランとの弾幕ごっこに集中してたからな。あ、そういえば、なんか痛かったような……」

「……」

「ちよ！？？そんな避難の目を私に向けるなよ！！？本当に気付かなかっただけなんだ！」

「だったら、そんな怪我を負うようなことをしなければいいだけだ」

「なーに言ってるんだ？弾幕ごっこを楽しむことの何が悪いって言うんだよ？」

「骨を折る。その怪我を連戦で疲れていた葵が治す」

「うっ……」

「……」

「……ごめんなさい」

魔理沙はルカのジト目に負けたらしく、謝った。

「はあ、まあ葵は魔理沙が死なないようになら怒らないだろう。多分」

「そうだよな！よっしゃー！」

……あれはまたいつか無茶することになるな、まあ、魔理沙らしいんだが。

それよりもだ、

「レテイシア」

「クスクス、大丈夫よ。そこまで私は冷たくないから。部屋を貸してあげるわ。貴方達も泊まってゆきなさい」

「いいの？」

「クスクス、この子も眠っているのだから良いわよ。それに……」  
「？」

「フランを狂気から救ってくれた恩もあるからね♪」

「……そうか、ありがとう」

「クスクス、お礼を言うのはこちらだけだね」

こうして私達は紅魔館に泊まることとなった。

## 第十三話

〈靈夢side〉

私達は今、レミリア達に泊まっていけと言われ、まだ紅魔館にいた。まあ大幅な理由は、葵が眠ってしまったからだけど。

「どうぞ」

「あ、ありがとう……て、何？これ」

「何って、ワインだけど？」

ワイン？お酒の類かしら。まあ、頂ける物はもらつとかなないと損よね♪

「ああ、そう。ありがとう」

「お嬢様から言われたからね、仕方なくよ」

「私はワインは少し苦手なんだが……」

「鬼灯、苦手だったのか？私は好きだが」

「あら？そうだったの？咲夜、日本酒は有るかしら？」

「はい、レティシア様が時々、飲んでおられましたから有ります。取つてまいります」

「そういえば……、」

「ねえ、レミリア」

「何かしら？靈夢」

「レティシアは何処にいるのかしら？」

〈レティシアside〉

私は紅魔館の屋根にいて、夜風に当たりながらワインを飲んでいゝる。どうも、ああ言う所は苦手だからね。彼処には早々のことがない限りは留まらない。

「いつかレミイ達は……。」

「……貴方もそんな所で見てないで一緒に飲まないかしら？紫」

私はさつきからずっと私の事を見ていた紫を呼んだ。すると、目が沢山ある空間が開き、その中に、私の親友の紫がいた。

「あら？バレていたのね。いつ頃から分かっていたのかしら？」

「クスクス、それぐらい、貴方だったら気付いているでしょ？最初から

よ」

そう、霊夢達と初めて会ったあの時から気付いていた。私も、そして紫も。

「クスクス、で？今回、貴方がレミイに頼んだ異変はどうだったかしら？満足な結果だったかしら？」

「ええ、満足な結果よ。それにしても、貴方は今回の異変には参加しなかったわね。どうしてかしら？教えて下さる？」

「それについてはワインを飲みながらも話すわ♪貴方の事だから、どうせうちの食器棚からワイングラスを借りてきたんでしょ？」

「ふふふ、ええ、そうよ。レティシア」

「クスクス、分かっているわ。入れてあげるから、ワイングラスを出してくれないかしら？」

私がそう頼むと、紫はワイングラスを出した。だから、私は彼女のワイングラスに赤ワインを入れた。

「ふふふ、ありがとう。で？どうしてかしら？」

「クスクス、だって、私が入ってしまったら、異変解決の難易度が相当上がるわよ？貴方はそれを望んではいないでしょ？それに、私も望んでいたわけではないしね」

「そう、だったらいいのよ」

「クスクス、それにしても、この異変からスペルカードルールが広がっていくのね。貴方の目標に一步、近付いたわね♪」

「ええ、でも、まだ課題はあるわ。そして、難しい課題も」

「……そうね」

私達妖怪は、人から恐れられなければ存在出来なくなってしまう。まあ、私のような異例の存在や、鬼灯のように神様にでもなれば話は別だけれど。

「そういえば、どうして貴方はあの子達が飲んでいる場所から離れたのかしら？」

「クスクス、それぐらい、私にあんな頼み事をしてきた貴方なら分かることでしょう？」

アレには最初、吃驚したわ。なにせ、『不老不死となって、私とともに

に幻想郷の賢者をしてくれ』なんて頼み事、誰でも驚くでしょ？

まあ、紫がそんな頼み事を私にした理由は、私の強力すぎる能力にあるのでしょうけどね。あ、因みに、鬼灯も幻想郷の賢者の一人よ。鬼灯も鬼灯で危険な能力を持っているからね、紫からしてみれば、危険な能力者を野に放つとくよりも、自分の近くに置いとく方が危険性はないと考えたのでしょね。

まあ、私は人間は好きだし、鬼灯は元より豊穰の神でもあるから問題はなかったしね。

そして私は、『能力を創る程度の能力』で不老不死の能力を作り、不老不死になったわけだけれどね。

「ふふふ、そうね。貴方は彼女達とは違って、悠久の時を生きることになるからね。……ねえ、レティシア」

「クスクス、どうしたのよ紫。そんな顔をして、何か私に聞きたいことでもあるみたいだけれど……先に答えるわね」

「……」

私は紫の疑問を見透かし、答えてあげた。

「私は、あの頼み事をした貴方を……」

恨んでなんかいないわよ」

そう、私は紫の事を恨んでなんかいない。ちつともね。

「……え？恨んでないの？どうして？」

「クスクス、貴方があの提案をしてくれて、私の視野は広がったからよ。不老不死は確かに私だけを置いて私の周りの人が死んでいくのを見るしかないけれど、それ以上に、私には、良いことがあったから

ね」

「?良いこと?そんなの、あつたかしら……」

「クスクス、貴方、私が吸血鬼であること忘れたのかしら?」

「あ、そうだったわね。ごめんなさい、忘れていたわ」

「クスクス、酷いわね、まあいいわ。私は不老不死になったからこそ、今は太陽が出ている時に外に平気で出られるの。だから、私に恩恵を与えてくれているわ」

そう、不老不死になったからこそ、私は太陽の下でも生きる事が出来る。だから、私は……。

「だからこそ、私は昔からの趣味である紅茶を飲みながら本を読むことに加えて、放浪する事も趣味の一つになったわ。外に出られる様に促してくれた貴方を私が恨む理由なんて、何処にも無いのよ」

「……そう、分かったわ。ありがとう」

「クスクス、さあ、湿っぽくなったから飲みましょう……と、言いたいけれど、霊夢が来るわ。紫、貴方はどうするのかしら?」

「ふふふ、本当に貴方の『見透かす程度の能力』は便利ね。私は先に立ち去るわ。どうせ霊夢の事だから気付いてはいるのでしようけど、だからって、今私が居此処にるのはおかしいもの」

「クスクス、分かったわ。じゃあ、いつかまた一緒に飲みましょうか」  
「ふふふ、そうさせていただけますわ♪それでは、さようなら」

……さて、来たわね。

「あんた、こんなところで何一人で飲んでんのよ?彼奴らと一緒に飲めば?」

「クスクス、そうね、考えておくわ。でも、貴方の用事は別でしょう?」

「……本当にその能力は厄介ね」

「クスクス、褒めても出てくるのはお金ぐらいよ?まあ、そんな事は置いておくとして……それで?私も分かっているとはいえ一応聞くわ。私に何の用かしら?」

「あんたが、あのフランに私達の名前を教えて、魔理沙には地下のフランの事を教えて、彼奴に出させるように導いたんでしょ?」

「クスクス、どうしてそう思うのかしら?」



「勘よ」

あらま、今代の博麗の巫女は勘頼りみたいね。

「クスクス、そう、まあ正解なんだけれどね」

「……あんた、私が勘が良い事、知っていたみたいね」

「クスクス、そうじゃないわよ。もう異変も終わったからね。それに、別に隠す程の事でもないでしょう?」

「……そうね。で?何が目的でそんな事をしたわけ?理由次第じゃあ……」

そう言つて、霊夢はお祓い棒とお札を出した。理由ねえ。

「クスクス、私は、フランの為にしただけよ?」

「……」

「クスクス、フランはね、あの時も言ったように何年も地下に幽閉されていたわ。だから、貴方達にフランという子がこの館に居ることを知ってもらうには丁度いいでしょう?」

「……そうね、今はそういうことにしといてあげるわ」

「クスクス、嘘なんて言っていないのだけれどね♪」

「……そう、で?あんたはそのまま一人で飲むわけ?」

「クスクス、ええ、しばらくは一人で飲んでおくわ。心配しなくとも何処にも逃げないわ♪」

「そうね。じゃあ、私は行くわ」

「クスクス、ええ、後でね♪」

私がそう言つと、霊夢は納得してないような顔をしながらも戻つて行つた。

……さて、もう少し、月を見ながら飲みましようか。

〈霊夢 side〉

彼奴、絶対に何か隠してるわね。なんでそう思うのかつて?勘よ。

(でも、彼奴が話した理由も嘘には思えない……。彼奴、一体、何考え  
ているわけ?)

私が彼奴を怪しいと思ったわけは、フランの言動だ。

フランは私達とはあの時が初対面だった。にも関わらず、私達の名前を知っていた。これは魔理沙が弾幕ごっこをするにあたって名前

を名乗ったことで納得出来るけど、私達の名前を知るのは無理に近い。

私達がお互いの名前を名乗ったのが聞こえたと言うなら仕方ないけれど、それも無理。私達が葵から頼み事をされたあの時、小声で話していた。だから私達の話の話を聞くとしたら、相当耳が良くないといけないけど、フランはそんな風には見えなかった。とすると、あいつが特徴と名前を教えたことでなら疑問は解決する。

だけど、問題は『どうしてそんな事をしたか』だ。

単純にフランを紹介する為？それもあるのでしょうか、それだけじゃない気もする……。

(……もしかして、葵が見た未来を知っていた?)

葵のあの『見てない』っていう言動から、葵が見た未来の中にフランという存在はあの時は出て来て無かったんでしようね。でも、未来が変わった。彼奴が意図的に変えたんでしようね。

(彼奴はどうやって知った?……もしかして、それが彼奴の『見透かす程度の能力』?)

彼奴はあの能力で私が頭で考えていたことを見透かした。とすると、有り得ない話でもない。

(今度、紫か鬼灯にでも聞いてみましょうか。それよりも……お酒、まだあるかしら?)

なくなったらマズイわね。急がないと!

私は少しの疑問を抱えながらも、魔理沙達がいる広間まで向かった。

## 第十四話

（葵 side）

「……………ん？あれ？」

私が目を覚ますと知らない天井が見えました。

「……………知らない天井、ですね。でも、周りの壁が真っ赤ということは、ここは紅魔館の部屋ということでしょうか」

私が周囲を見渡していると、ガチャツと扉の方から音がなりました。誰かが入って来たようです。

咲夜さんでしょうか？それとも、ルカや鬼灯、それから霊夢でしょうか？

私は入って来た人を待っている、

「葵、起きたか！心配したぞ！」

「葵！よかった！目が覚めたのね！」

ルカと霊夢が入ってきました。

「二人共、心配かけてごめんね。でも、もう大丈夫だよ！よく寝たからね！」

やせ我慢ではないですよ？私は重症ではないですから。傷一つ負っていませんしね。

「そうか、なら良かった。朝食は出来ているそうだ。葵、どうする？疲れが残っているようなら咲夜に此処に持って行ってもらうよう頼むが……………」

「ううん、大丈夫。疲れもないから行くよ。何処で食べるの？」

「私達についてくれば大丈夫よ。さあ、行きましょう！」

霊夢はそう言うと、そのまま行ってしまいました。私、まだ身だしなみとかちゃんとなっていないのですが……………。

「はあ、彼奴、葵が目覚めて安心したのは分かるが、葵の身だしなみとかを少しは考えろよ……………」

「あ、あはは……………あ、ルカ。悪いんだけど、外で待っててもらえないかな？髪を梳かすだけだからね。いいかな？」

「分かった。じゃあ、外で待っておく」

そう言うと、ルカは出て行きました。

さて、余りルカを待たせるのも良くはないのでさっさと髪を梳かしますか。

\*\*\*

「此処で食べることになっている」

私達は朝食を食べる為に皆が集まっている場所へと向かい、その場所に辿り着きました。

ルカは躊躇もなくドアを開けて入り、私もそれに続いて入りました。

「あ、葵！目が覚めたのね！良かった〜！」

「わっ！ふ、フランさん!!?どうしたの?いきなり飛びついてきて……」

「あ、こちら！フラン！急に飛びつくのは相手が危ないからやめなさい！心配だったのは分かるけれど」

「ごめんなさい、お姉様、葵」

「私は大丈夫です。フランさん、心配してくれて有難うございます。けれど、もう回復しましたから大丈夫ですよ」

「……本当に?」

「ああ、葵は嘘をついていないから安心しろ、フラン」

「……なんで、貴女が分かるの?」

ああ、そういえば、フランさんは知らないのでしたね。

「フランさん」

「どうしたの?葵」

「ルカにはですね、相手の嘘を見破る能力があるんです。」

「え?そうなの?」

「……ああ、『嘘を見破る程度の能力』。私の前では嘘なんてあってないようなモノだ。だから、私が『嘘をついていない』と言えば相手は絶対に嘘をついていない事になる。私の能力で保障が確定されるからな」

そう、これがルカの最後の能力『嘘を見破る程度の能力』

けれど、この能力の補足を私がさせてもらいますと、相手が嘘をつ

いていた場合、ルカにはその相手の本心が聞こえてくるのです。どれだけ厄介な能力かは分かりますよね？

昔のルカは、この能力によって苦しめられていましたが、今はそうでもないようですが……。私にはルカのような能力はないので、ルカが本当の事を言っているのかは勘でしか判断出来ない状態です。

「そうなんだ！分かったわ！それじゃあ、葵、一緒にご飯を食べましょうよ！」

「そうだな。折角、咲夜が作ってくれた朝ごはんだ。冷めてしまったら勿体無い。早速、頂こう」

「てか、またレティシアの奴がないじゃない。彼奴、何処に行ったのよ？」

「さあな？私にも分からんよ。レミアア達はどうかだ？」

「この時間なら……時々だけけれど、パチュリーと一緒に食べてるわ。今この場に居ないっていうことはパチュリーの方に居るのでしょね」

「ああ、彼奴の所にいるのか。……帰りにでも本を借りてくか」

どうやら、魔理沙はパチュリーという人を知っているようです。後でどんな人なのか聞いてみましょうか。でも、多分、余り良い情報はないと思います……。

「借りるねえ……。パチュリーがそう簡単に貸してくれるかしらね」

「へ？本を貸してくれないんですか？」

「ええ。お姉様には特別に貸しているようだけれどね。まあ、お姉様はよく外の世界に出ているからそのお返しとか、後は、ちゃんと返しているから信用性が有るのでしょね」

「そうなんですか……」

私も本を借してもらおうと思っていたのですが、少し考え直した方がいいのかもしれないね。

「……彼奴、よく外の世界に行ってるのね。でも、今まで博麗大結界には何も反応もなかったけれど？これはどういうことよ？」

？霊夢はレティシアさんの話になった途端に警戒心が強まりました。そんなにレティシアさんの事が信用出来ないのでしょうか？私

は凄く信用出来る人だと思っっているのですが……。

「ああ、それは……」

「彼奴が能力を作って外の世界に出て行ってるからだな。まあ、外の世界に出る時はちゃんと紫からの許可を取っているから問題はない」  
「……そういうことよ」

……レミリアさんが何故か凄く悔しそうです。何ででしょう？

「……そう、なら良いのよ」

「あ！ということとは、外の世界の本とかがあるということですよね？」  
「ええ。あら？貴女、本を読むのが好きなのかしら？」

「はい！よく紫さんから外の世界の小説を貰っています!!？」

小説って結構面白いのですよ？皆さんも一度、読んでみてはいかがですか？因みに、私が好きなのは推理モノですね！

謎の事件が発生して、そこから謎を解決していくあの面白さ！外の世界は本当に凄いですね！

「……貴女」

「？はい？」

「今までの中で凄く顔がキラキラしてるわよ？自分で気付いているのかしら？」

「え!!？」

……どうやら、本の話題で熱が入ってしまったみたいです。今後は気を付けなければなりませんね。

\*\*\*

紅魔館で朝食をとった私達はそのまま帰ることにしました。まあ、異変も解決しましたから当然ではあるのですが、少し寂しいですね。

「葬ー！」

「？フランさん？どうしました？」

「また遊びに来てね！約束だよ！」

そういうと、フランさんは小指を出してきました。

「……」

私はフランさんに笑顔を向けながら、その小指に自分の小指を絡ませました。

「ええ、約束です！でも、近いウチに来ますから、直ぐに約束は果たされますよっ！」

「それでもいいの！やろう！」

「分かりました。では……」

「ゆ〜びき〜りげ〜んま〜ん、う〜そつ〜いた〜ら、は〜り千本の〜ます〜！ゆ〜び切った！」

「葵……」

「まあ、いいじゃないか。約束は大事だぞ？」

「でも……。そのせいで、ウチに来る回数が減っちゃったじゃない！」

「いや、毎週つてわけじゃないと思うが……」

「……いや、毎週になるかもな」

「えっ？」

「葵の読むスピードが関係してくるからな。まあ、多分だ。そこまで気にすることでもないだろう。……というか、今回で葵に家事を頼るのをやめたらどうなんだ？良い経験になるぞ？」

「いやよ、面倒臭い」

「霊夢、それはないぜ……」

「はあ……」

「ま、まあこれぐらいにして、それでは行きましょうか」

「葵！約束、守ってね！」

「ええ！近いウチに来るつもりですから安心して下さい！」

「バイバーイ！」

「ふふふ、また遊びにいらっしやい。私達は（白黒魔法使い以外）歓迎するわ」

「おいおい、なんか私は歓迎されてない気がするぜ。まあ、来るんだがな。本を借りに」

「それでは、さようなら！」

こうして、今回の異変は終わりました。

……そして、新たな異変がまたあるとは、この時には気付いていませんでした。

〜レティシアside〜

「クスクス」

「……どうしたの、レティシア？嬉しそうだけれど」

私が幻想郷の未来を考えていると、パチュリーが話しかけてきた。「クスクス、いえね、幻想郷の未来が楽しみなだけよ♪気にしなくていいわ♪」

「……そう。分かったわ」

私がそう言うと、パチュリーは奥に引っ込んでしまった。

……さて、近いうちにまた異変が起こるわね。それも、異変を解決出来なければ大変な事になってしまうような異変が。

(……次の異変には私も行きましようかね。霊夢達だけでは心配だからね)

あの子達の連携は凄く良かった。期待以上という結果ね。

特に霊夢。あの子には今までの博麗の巫女以上の実力がある。まさに天才ね。

そして、葵もまた、補助の才能に特化している。でも……、

(弾幕の才能がないというのは少しマズイかもしれないわね……)

でも、こればかりは本人の才能。私ならどうにか出来るけれど、するつもりなど毛頭ない。

私が弄ってしまったばかりに、あの子の才能が無くなるなんて事も有り得る話だ。

だから、私が出すことは出来ない。可能性が0じゃない以上、下手な動きは出来ないからね。

(まあ、まだ次の異変まで時間はあるわ。それまでにどうするかはあの子達次第。葵の能力なら、必ず異変が起こることを察知出来るからね。その辺の心配はしなくて済むわね)

私は考えるのを一度やめ、紅茶を飲みながら読書に集中することにしました。



## 葵の日常1 第十五話

く葵sideく

ー……ん………らー

私は夢を見ている。

私が夢を見る時は大抵三つのパターンのどれかです。

一つ目は、普通の夢。

よくある『有り得ることがない』夢です。

幻想郷だとそれはないように思われるかもしれませんが、実際はあります。例えると、人の顔が目の前で犬の顔になったりだとか、そういう夢。

二つ目は、予知夢。

これは私の能力が関係している為、私が見る夢の大半はコレです。

そして、三つ目の夢は……、

ーあ………んて、ら………いこ………ー

ーあんだなんて、私の子じゃない！この世にはいらな子なのよ  
!!?ー

『過去』の夢

\*\*\*

「……はっー!」

……私はどうやら魘されていたようですね。でも、もう慣れたものですね、あの夢を見るのは。

「……いない子、か」

母にとって、必要だった子は『私』のような『化け物』ではないのです。『普通の能力を持った子』なのです。……それぐらい、小さな頃には気付いていた事でしょうに……。

(……私は)

……考えても切りがありませんね。私は私に出来ることをしなければ!!?

まずはルカを起さなければいけませんね。

\*\*\*

私が今日、担当する所は境内です。ですから、今は掃き掃除中です。(やっぱり、掃除というのはいいですね。心も洗われた様な気がします)

私が掃除に集中していると、

「……葵」

「ん?どうしたの?ルカ」

今日の魚を取る当番だったルカが何故かドヨンとした状態できました。まあ、この状態から察するに……。

「魚、取れなかったんですね」

「……すまない、その通りなんだ」

さて、魚が取れなかったとなると、

「……人里に降りて、魚を買いに行くしかないね」

「!!?葵、無理していかなくとも私が行く。だから、お前は此処で待ってろ」

「大丈夫だよ!私一人でも行けるから!」

「……そっちの心配じゃないんだが」

「大丈夫だから！だから、ルカ！此処をお願いね！準備をしてくるからー！」

「……」

「お願い、出来るかな？」

「………分かった」

「ありがとう、ルカ！それじゃあ、準備してくるね！」

「……葵」

「??」

「……無理は、するなよ」

「……大丈夫だよ！無理はしてないから！それじゃあ、行くね」

……私が『嘘』を吐いてる事など、ルカには暴露しているのでしようが、何も言わないのは有難いですね。特に、今の私には。

\*\*\*

「さて、鮭は有りますかね」

出かける準備を終えた私は人里にいます。前に人里に降りた時は何時だったでしょうか？……忘れてしまいうぐらい前という事でしょうね。

(……さて、鮭を買いに来たのですから、早く用事を済まさなければいけませんね。人里の皆さんの為にも)

私は久振りに来た人里で、魚屋さんをを探す事になりました。

「……あ、有りました」

さて、早めに買い物が終わらせなければいけませんね。霊夢の分も取れなかったので、霊夢に説明して、自分で買ってもらうことにしましょうか。

「あの……」

「はいーいらつしゃ……!?……」

「あの、鮭を三つお願いします……」

「………待ってな」

……今の様子から分かるでしょうが、私はこの魚屋さんに……いえ、

『人里の皆さん』から余り良く思われていません。

……理由は分かり切っていることです。私の能力が原因です。人なら誰しも、見られたくない過去というものがありますよね？私の『未来と過去を見る程度の能力』は、見られたくない過去すら見ることになります。

相手に無断で過去を見られて気分の良い人はいませんか？いえ、例え見られたくない過去でなくとも、過去を無断で見られるのは嫌ではないですか？……私なら、嫌です。

でも、私の能力はそれが出来てしまう。

だから、私は人里の皆さんから嫌われています。私が今まで人里に降りようとしなかったのはコレが原因です。私は、皆さんにそんな気持ちを持たせたくはありませんから。

……いえ、それも有りますが、最もな理由は……。

――私が皆さんに嫌われている事を実感したくないから――

――私だけが、人里で一人なのが寂しくて、それを実感したくないから――

「……」

「……おい」

「……え？」

「ほら、鮭だ。さっさと代金払って帰ってくれ。客が減って商売上がったりだ」

「……分かりました」

私はそのお店の店主さんに代金を払ってその場を立ち去りました。そして、神社に帰る途中に、

「……痛てっ！」

「！君、大丈夫？何処か痛い所あるかな？」

「うう、膝が……」

「分かった、じゃあ治すから、膝を出してくれるかな？」

「へ？う、うん」

私は能力を使い、その男の子の怪我を治しました。

「わあ！お姉ちゃん、すごい！」

「ありがとうございます！私に出来るのはこれぐらいですから……」  
「この子の過去も勝手に見てしまった私には、お礼なんて本当はしてはいけないんですよ？」

「……でも、この子は知らない様ですね。……少しぐらいならいいですよ？」

「あ！幸多！大丈夫……!!?幸多!!?その人から離れなさい!!?」

「え?なんで?この女の人は僕の傷を治してくれたんだよ?」

「……幸多君、お母さんの言うことを聞いてあげて下さい」

「?何で?」

「何ででもですよ」

少しの幸せの時間を貰えたんですから、それで十分なんです。この日の事は私の心の奥底に封印しておきましょう。

「お姉ちゃん」

「?何でしょうか?」

「また、会える?」

「……分かりません」

「……そっか、だったら！何処に住んでるのか僕に教えて！」

「え?」

「幸多!!?早くその人から離れなさい!!?今すぐに!!?」

「はーい……お姉ちゃん！また会った時には住んでる場所を教えてください」

!!?絶対だよ!!?バイバーイ!」

こうして、幸多君はお母さんの元に走って行きました。

(……お母さん)

私にこの能力がなければ、あんな風になっていたのでしょうか……。

今は分からない事ですが、きっと……。

(……。さて、早く帰らなければ。遅めのお昼ご飯は確定ですね)

私は何時もよりかは幾分軽い気持ちで神社へと帰りました。

## 第十六話

（葵 side）

私は今、紅魔館に向かっています。理由は、本の事もありますが、フランさんとの約束を果たしに来ました。

フランさんとした約束は、また紅魔館に来ることですからね。その時にでも一緒に遊ぼうと考えているのですが……生憎、良い考えが浮かびません。

ルカの時は人形遊びをしていましたが、フランさんも楽しんでくれるのか分かりません。……今まで、ルカ以外との子供と一緒に遊んでこなかったのが原因でしょう。

（……まあ、フランさんと遊んでから本を読みましようかね）

一体、どんな本があるのでしょうか？小説とかですかね？それだと凄く嬉しいのですが、多分、違いますね。勘ですが。

（あ、見えてきましたね）

あの紅魔館での異変からまだそんなに経っていないのに、久し振りに来た感じがします。

さて、兎に角、入らせてもらいましょうか。

\*\*\*

「門番さん、こんにちは」

「ふにゃ？……は？！？ね、寝ていませんよ！！？咲夜さん！！？これはですぬ……て、あれ？お客様か、驚かさないで下さいよ」

「え？す、すみません」

どうやら驚かせてしまった様です。今後は気を付けなければいけませんね。

「え？あ、いや、そういうつもりは……。あ！！？そ、そういえば初対面でしたね。私は此処、紅魔館で門番をしている『紅 美鈴』と申します。貴女のお名前は？」

「あ、そうでしたね、私は神無月神社で巫女をやっております。神無月葵と申します。どうぞよろしくお願いします」

「分かりました。それで、何の御用で此処に来られたのでしょうか？」

「フランさんと遊びに来たのと、図書館の本を少し読みに来ました」  
「そうだったのですか!!? フランお嬢様もお喜びになります!!? あ、それと……」

「? 何ででしょうか?」

「絶対に、図書館の本を盗んだりしないで下さいね! お願いしますよ!」

え? ぬ、盗む!? 私、そんな事をするつもりないのですが、借りれたら借りるだけで、読みを終わったら返すつもりですし……。

……あれ? って事は、誰かが図書館の本を盗んでいることになりますよね? 一体、誰でしょうか?

「それでは、どうぞお入り下さい!」

「え? あ、はい!!? 有難うございます!」

まあ、その泥棒さんと鉢合わせたら叱るということにしておきましようかね。

\*\*\*

「? あれ? どちら様でしょうか?」

☒

館の中に入ると、異変の時には見なかったメイドさんがいました。容姿は銀髪の髪をポニーテールにして、顔はルーミアに似ている童顔で、咲夜さんと同じメイド服を着ています。

私はその方に、美鈴さんと同じ自己紹介をしました。

「あ、御丁寧にどうも。私は此処で姉と一緒にメイドをやらせてもらっている『ユニ・ランガー』と言います。どうぞよろしくお願いします」

ユニさんは私が挨拶をすると、挨拶をしてくれました。やっぱり、これが『普通』なのでしょうね……。

そういえば、ユニさんは姉がいると今言っていたような……。

「何をしているの? ユニ」

「あ、姉さん」

階段の方から聞こえてきたので其方に顔を向けて見ると、そこにはユニさんと同じ銀髪で、長髪にウェーブをかけていて、顔は咲夜さん

に似ている、少しつり目の女性が下りて来ていました。

「この人はお客さんだよ。だから話していただけ」

「そう、ならいいのよ。初めまして、私はユニの姉であります『ペス・ランガー』と申します。どうぞよろしくお願いします」

「あ、はい、分かりました」

顔が似ているのは分かりませんが、雰囲気まで咲夜さんに似ている気がするのですが……気の所為でしょうか？

「それで？貴方は何の御用で紅魔館に？」

「あ、フランさんと遊びに。それと、少し図書館の本を読み」

「……そう。なら、図書館の本は必ず返して下さい。どっかのネズミみたいに盗もうなんてしないで下さい。お願いします」

また泥棒さんですか。本当に一体、誰なんでしょうか？その泥棒さんは。

「それでは此方です。着いて来て下さい」

「はい、分かりました」

「ユニ」

「うん？何、姉さん」

「貴女は掃除の続きを下さい。いいわね？」

「うん、分かっているよ。だから大丈夫」

「そう、それでは此方です」

私はペスさんに連れられて、フランさんが居るであろう場所に向かいました。

……そういえば、今回、ルカに霊夢の世話を頼みましたが……大丈夫でしょうか？

—————

一方、ルカ達は……。

「はあ!!？なんであんた一人なのよ!!？葵は!!？」

「葵は紅魔館に行っている。フランとの約束があっただろう？」

「そんなもの、覚えてないわよ!!？」

「覚えておけ、全く」

「はあ、じゃあ、葵がいなかったら、境内とかの掃除はあんたがやるわ



「けね?」

「何を言っている?」

「え?」

「お前がやるに決まっているだろ?」

「嫌よ。面倒臭い」

「そうやって面倒臭い事から逃げる気か?言っとくが、私もやるつもりは無いからな」

「あんたがやらなきや誰がやるのよ。私も嫌」

「そうか、なら今後は野菜をお前に渡すことを辞めてもいいんだな?」

「……は?」

「お前も知っての通り、私は嘘が嫌いだ。だがな、私は一生、嘘を付かないつもりは無い」

「……ま、まさか」

「さて、お前も気付いたからな、もう一度聞こうか。誰が掃除・洗濯をする?」

「そ、そんな脅しをしたって、葵はすぐに気付くわよ?」

「葵には私から『このままでは霊夢は成長しない』というような説得でもすれば確実に分かってくれるので心配するな」

「くっ!!?」

「さて、どうする?」

「……分かったわよ。私がやる」

「それでいい。洗濯は私がやってやるからお前は掃除だ」

「はいはい」

言い争っていました。

—————

「此処です」

「あれ?此処って」

ペスさんが連れて来てくれたのは、私達が食事を摂った場所です。

「此処に居るのですか?」

「はい。それでは」

ペスさんが扉をノックして要件を話すと、中から「入りなさい」と

の言葉が聞こえてきました。

「失礼します」

扉が開かれ、其処に居たのは、レミリアさんとフランさんでした。

「あー！葵だー！」

「フランさん。約束を果たしに来ましたよ」

「わーい！」

「葵、フランと遊んでくれて有難う。あら？ルカは？」

「ルカなら、霊夢の方の世話を任せているからいません」

「そう、分かったわ」

「ねえねえ！葵！これで遊ばない？」

「？これは？」

フランさんが持っていた物には『人生ゲーム』と書いてありました。

「これ、凄く面白いのよ！それか、これ！」

もう一つには『ドンジャラ』と書いてありました。

「えっと……？」

「これも面白いのよ！でも、両方人数が多ければ多いほど面白い物なのよ！」

成る程、だからレミリアさんも居たのですか、納得です。

「私は外の世界の事は良く知りませんが、フランさんが面白いと思っただ方をやりませんか？」

「えー？私は何方も面白いと思うけどなー？」

「そうですね、でしたら、此方の『ドンジャラ』をしませんか？」

「分かったわ！レミリアお姉様もやりましょう♪」

「ええ、そうですね。でも、レティシアお姉様も呼びましょう？」

「クスクス、私なら居るわよ？」

「え？」

そこには、何時の間にかいたのか、レティシアさんが立って居ました。

「え？何時の間に？」

「クスクス、人生ゲームかドンジャラかの辺りからいたわよ？」

「そ、そうだったんですか……」

紫さんの能力に慣れていなかったら、今頃、大きな叫び声がこの館

中に響いてましたね、本当に良かったです。

「なら四人でやりましょうか。ペス」

「はい、お嬢様」

「紅茶をお願い出来るかしら？」

「畏まりました」

そう言うと、ペスさんは部屋を出て行きました。

「さて、やりましょうか」

「やったー！」

「クスクス」

「そうですね、やりましょう！」

私たちは『ドンジャラ』というゲームをし始めました。

## 第十七話

〈葵 side〉

『ドンジャラ』で遊び終えた私は、レティシアさんと共に図書館の方へと歩いていきます。

(それにしても、またフランさんと約束しちゃったけど、今度は何時来ようかな?)

そう、私は『ドンジャラ』のルールを知らなかった為、ルールを理解する為に何回か教えられながらの勝負をして、その後は普通に勝負をしていました。

それにしても、『ドンジャラ』とは面白い物ですね! 本当に外の世界は凄いです!

あ、話が逸れましたね。

それで、『ドンジャラ』を終えた後の事なのですが……。

〈回想〉

「私、まだ葵と遊びたい! だから、もっと一緒に遊びましょうよ! ねえねえ!」

「え、えつと……」

「葵は私と遊びたくないの?」

「いえ、そういうわけでは……」

「だったら! もっと一緒に遊びましょうよ!」

「フラン! 我儘を言うのはよしなさい! 葵が困ってるでしょ?」

「だつて〜!」

「クスクス、フラン。別に葵は二度と此処に来ない訳ではないのよ?」

「それは、分かっていますけど……」

「……フランさん」

「? 葵? どうしたの?」

「いつかは分かりませんが、私はまた、此処に来ますよ。その時に、また一緒に遊びませんか? 今度は、今日遊ばなかった『人生ゲーム』と  
いうので」

「……」

「その時には、またルールを教えてくださいませんか？私は外の世界の遊びを知りませんので、色々、勉強になりますから」

「……」

「ね？お願い出来ますか？」

「……うん、分かった。じゃあ、また遊びに来てね？絶対だよ！」

「はい！」

「クスクス、フランだったら、さっきまでの悲しそうな顔から一転、嬉しそうな顔になったわね♪お姉ちゃん、嬉しいわ♪貴女もそう思わない？レミイ」

「ええ、本当に」

〜回想終了〜

と、こんな事がありました。まあ、何時また此処に来るかは、本を貸してもらえなかったらちゃんと決めて、貸してもらえようなら、返す日ということにしましょうかね。

「クスクス、着いたわよ」

「あ、有難うございます。レテイシアさん」

「クスクス、別に良いのよ♪私もこの図書館に用が有った訳だしね」

「え？そうだったんですか？」

「クスクス、ええ。私はパチュリーに貸してもらっていた本を読み終わったからね。返すのが常識よ」

「レテイシアさんも借りていたんですか……あ」

そういえば、確かレミリアさんが言っていましたね。レテイシアさんは紅茶を飲みながら図書館で借りた本を読む、と。少し忘れていました。

「クスクス、どうしたの？」

「☒」

「クスクス、入らないのかしら？」

「あ、いえ、入ります」

私は図書館に入りました。

\*\*\*

「……」

図書館に入って周りを見渡した私は、言葉が出てきませんでした。何故なら、周りは、本、本、本。つまりは本ばかり。

此処、図書館というよりかは、前に大を付けて大図書館という呼び方の方が合っていますね。

「クスクス、小悪魔。何処にいるかしら？」

「はい！直ぐに行きますので少々お待ちください！」

レイシアさんが『小悪魔』さんという方を呼んだ後、直ぐに返事が返ってきました。

(ということは、恐らく直ぐ近くにいますね)

私達が『小悪魔』さんを待っていると……、

「おや？貴女は……」

「？どうした？くおん」

「え？」

後ろから声が聞こえてきたので振り向くと、其処には、くおんさんともう一人、知らない人が居ました。

その容姿は、赤からオレンジへと変わっている髪をポニーテールにしている、顔は吊り目だけれど少し幼さを残している、服はメイド服を着た女性がいました。背はくおんさんと変わらない様に見えます。

「クスクス、いらっしやい、くおん、朱鳥。パチユリーの手伝いかしら？」

「はい、その通りです」

「まあ、これだけの数の本があると、小悪魔だけでは人手不足なので手伝いに」

「クスクス、確かにそうね」

「えっと……」

「クスクス、ごめんなさいね。貴女はくおんとは会っているけれど、朱鳥の方とはまだだつたわね。朱鳥、挨拶をしなさい」

「はい、分かりました。私は此処、紅魔館でメイドを務めさせて頂いている『枢木 朱鳥』と言います。どうぞよろしく願います」

「あ、ご丁寧にどうも。私は、神無月神社の巫女をしています。神無月葵といいます。よろしく願います」

「そうでしたか、貴方が神無月の巫女でしたか。確かに巫女服を着ていますね」

「?今日は鬼灯様と一緒にではないのか?」

「あ、はい。一緒ではありません」

「鬼灯様は何処に?」

「クスクス、くおん。貴女、鬼灯が好きなのかしら?」

「それはそうですよ? 私達の産みの親でもある方を嫌いになるはずありません」

「クスクス、それもそうね♪」

「それで? 鬼灯様は?」

「鬼灯なら神社にいますよ」

多分、今頃は、参拝客の方々が私が居ないということ一杯来ているのでしようね。

—————

一方、その頃の鬼灯は……、

「……」

(はあ、葵とルカが神社から居なくなった途端に参拝客が一杯来るとはな。……嬉しくないな、本当に)

「……ん? お前」

「わあ! 狐さんだ〜!」

「初めて見る顔だな。お前、名前は?」

「僕、幸多って言うの! よろしくね! 狐さん!」

「そうか、分かった。それで? 幸多は何しに此処に来たのだ?」

(こいつがこの前、葵が言っていた幸多という少年なら……)

「あ、そうそう! この前、僕のケガを治してくれたお姉ちゃんを知らない? 僕、そのお姉ちゃんに会いに来たんだ! ねえ、お姉ちゃんは何処にいるの? 狐さん!」

「葵なら、今は別の所に行っている。今日はまだ返って来ないだろう」

「そうなの? ……会いたかったな」

「……幸多」

「☒」

「何時返つて来るかは分からんが、お前が遊べる時間帯まで此処で私と待つておくか？それとも、私と遊ぶか？どうする？」

「!!？僕、狐さんと一緒に遊ぶ！」

「そうか、なら、遊ぶか」

少年と遊ぼうとしていた。

—————

「お待たせして申し訳ありません！……て、あれ？くおんさんと朱鳥さん？また手伝いに来て下さったんですか？」

私が鬼灯の事で予想をしていると、赤色の長い髪に羽の様なものが付いており、可愛い顔をしていて、黒の上着と長いスカートを着ている、背中には大きな羽が生えている女の子がいました。

「ああ、その通りだ」

「私もそのつもりだったが、レイシア様の事だから、此処で本を読むだろう。だから、私は紅茶を持ってくる。私がいなくても朱鳥だけになんとかなるだろう。……多分」

「おい、ちよつと待て。多分ってなんだ？」

「そのままの意味だ。それでは」

「あ！ちよつと、まつ……行つてしまった」

「あ、あはは……」

「えつと……」

「あ、すみません。挨拶がまだでしたね。私は神無月葵です」

「あ、此方こそすみません。私は小悪魔と申します。どうぞ、よろしく願います」

「クスクス、冒頭が同じね♪」

「其処ですか？」

そんな風に話をしながら、私達は小悪魔さんに連れられて、この大図書館の主であるパチュリー・ノーレッジ（小悪魔さんから名前を聞きました）さんの所へと向かいました。



## 第十八話

（葬side）

「パチュリー様！レテイシア様達がいらっしやいました！」

「そう、分かったわ、小悪魔。……あら？貴女は誰かしら？」

今、私に話し掛けてきた人は不思議な帽子を被っており、その帽子には月の飾りがついていて、服はパジャマの様な服を着ている紫の髪をした女の人。この人が『パチュリー・ノーレッジ』さんですね。

「初めまして、神無月葵です。よろしくお願いします」

「そう、よろしく。私はパチュリー・ノーレッジ。この図書館に住んでいるわ。よろしく」

……え？住んでいる？

私は周りを見渡しましたが、一面本、本、本。つまりは本だらけ。

……一体、何処で寝ているのでしょうか？

「……流石に、此処では寝ないわよ。……時々寝ちやうけど」

パチュリーさんから、まるで私の考えを読んだかの様な言葉が聞こえました。それにしても、此処では寝ていないのですね、寝ているのかと本気で思ってしまった。

……最後に小さな声で何か言った気もしますが、多分、気の所為でしょう。

「クスクス、パチュリーは人が考えている事は分からないわよ。流石にね。私じゃないんだから」

「え？じゃあ、なんで……」

「……貴女が分かりやすいからよ」

「……？」

「……だから、キョロキョロ見ていたら考えている事ぐらい大体分かるわよ」

「え？私、キョロキョロ見渡してました？」

「クスクス、ええ」

「分かりやすく見渡していたぞ」

「皆さんと同じ意見です」

「そ、そうですか……」

私って、そんなに分かりやすいんですね。気を付けなければいけませんね。

「クスクス、別に良いんじゃないかしら?」

「え?」

「クスクス、だからね、気を付けなくてもいいと思うわよ? まあ、確かにある程度は気を付けた方がいいけれど、今はそんな気を付けるべき時じゃないもの」

「……そうですね」

成る程、これが霊夢が言っていた事ですか。確かに、私の頭の中で考えていたことが読まれてしまった様ですね。

「クスクス、それでパチュリー。はい、これ♪」

「……どうも。貴女はあの泥棒と違って必ず返してくれるから有難いわ」

「あの〜……」

「?なんででしょうか?」

「この館に来た時から気になっていたのですが、『泥棒』とか『ネズミ』とか、一体、誰がしているんですか?」

「クスクス、それはね、貴女もよく知っている人物よ」

「え?」

と、そんな話をしていたら『ドガンツ』と何やら大きな音が聞こえてきました。

「え!? な、なんの音ですか!」

「……どうやら、その泥棒が入り込んで来たようね」

「はい。パチュリー様! 対処してきます!」

「……お願いね。私も準備をしたら直ぐ行くわ」

「かしこまりました!」

「……レティシア」

「クスクス、何かしら?」

「……貴女、あの泥棒が来ることを分かっていたでしょ?」

「クスクス、さあ? どうかしらね? クスクス♪」

「……まあ、いいわ。じゃあ悪いけど、行くわね」

「クスクス、パチユリー、嘆息には気を付けなさいね〜」

「……はあ、じゃあ、早めに終わらせないといけないわね」

そう言うのと、パチユリーさんは奥へと消えてしまいました。

「えっと、私達はどうしたら?」

「クスクス、大丈夫よ♪」

「……レティシア様が言うなら大丈夫ですね」

「え?何が大丈夫なんですか?泥棒さんがいるんですよ!」

「クスクス、だって……その泥棒は此方に来るもの♪」

「……へ?」

え?泥棒さんが、此方に来る?

\*\*\*

そうして待つこと約二分。

此方に来るとレティシアさんが断言した泥棒さんは、本当に此方に  
来ました!!?

そして、その人は……、

「……え?魔理沙?」

「ん?おう!葵じゃねえか!どうしたんだ?こんな所で」

私がよく知っている人物の魔理沙が箒に跨がり飛んで来ました。

「いや、私はフランさんと遊ん後に此処に……って、違う!魔理沙こそ  
なんで此処に?」

「ん?そんなの決まってるぜ!本を借りに来たんだぜ!」

「本を借りる、ね。やってることは泥棒だがな」

「え?どういうこと?魔理沙」

「盗んでなんかないぜ!借りてるだけだぜ!私が死ぬまでな」

いや、それを世の中では泥棒というのでは?

いや、そんな事を考えてる場合じゃありません!

「魔理沙!」

「ん?なんだぜ?葵」

「今すぐ本を返しなさい!」

「だから、借りてるだけだぜ?」

「死ぬまでなんて！それを世の中では『泥棒』と……」

「じゃあな！」

「あ！待ちなさい！」

魔理沙がそのまま逃げき……れませんでした。何故なら……、

「ふべしっ!!」

壁が魔理沙の目の前に突如として現れましたから。

「クスクス、この私がいるのに逃がすわけないじゃない♪」

と、何やら黒い笑みを浮かべているレティシアさんがいました。

「さてと……」

そして、そう一区切りをつけると、

「魔理沙、少しO☆H A☆N A☆S H Iといきましょうか♪」

……何ででしょう？何か、寒気を感じます。

朱鳥さんを見ると……、

「……」

微かに冷や汗をかいていました。

「……葵」

「は、はい!!?」

「鬼呪封印をお願い出来るかしら?」

と、レティシアさんは微笑を此方に向けながらそう言いました。

……今のレティシアさんは、微笑ですら寒気を感じます。

「……はい」

\*\*\*

魔理沙はレティシアさんに半強制的に正座をさせられました。そして、これから魔理沙を叱る時間です。

「さてと、魔理沙」

「なんだぜ？私は何にも悪い事なんてしてないぜ？」

「クスクスクスクス、そう、まだそんな事を言うのね♪」

あれ？今、何時ものクスクスが増えていたような……。

「クスクスクスクス、それじゃあ、貴女に聞くけれど、人の大事な物を取っても自分は悪くないと言うのね？そう、貴女、そんな最低な人だったのね。貴女は考えないのかしら？もし自分の大事な物が取ら

れて、返して欲しいというのに死ぬまで返さないなんて言われた時の相手の気持ちに分からないのかしら？ ああ、分かるわよねそれぐらい。なら、どうしてこんなことをしているのか教えてくださる？ どうしてもだとか、また、借りてるだけだとか、そんな巫山戯たことだったら、どうなるか分かるわよね？ クスクスクスクス」

「そ、それは……」

……レティシアさんが、怖いです。

「クスクスクスクス、あら？ 答えられないのかしら？ もしかして、ただ泥棒がしたかっただけかしら？ そんなことないわよね？ だったら死ぬまでとか巫山戯た事は言わないからね？ だから、どうしてか教えてください。私は理由を聞きたいだけよ？ クスクスクスクス」

「……」

「クスクスクスクス、黙らないで理由を言いなさいと私は言っているだけなのだけれど？ そこまで難しい事なんて言っていないわよね？ こんな事、小さな子供でも分かることよ？ 貴女はそれ以下ってことかしら？ クスクスクスクス」

「……」

「レティシア様、もうお辞めになった方が……」

「あら？ 何でかしら？ 私はこの子にO☆H A☆N A☆S H Iをしているだけだけれど？」

「いや、あの、魔理沙も反省してますし、ね？ 魔理沙」

「あ、ああ、グズっ。ば、ばんぜいじでるがらゆるじでぐれ」

「……レティシア、私はもう良いから許してあげて」

「……そう、分かったわ。でも罰として、本はちゃんと全部、一人で、返しなさい。いいわね？ 誰かが手伝った時点でまたO☆H A☆N A☆S H Iよ？ いいわね？」

「……はい」

「クスクス、なら良いのよ。さて、くおんも来るから紅茶でも飲みながら読書をしましょうか♪」

「なら私も「魔理沙♪」……いえ、なんでもありません。家に一旦帰って本を返しに来させてもらいます。ハイ」

「クスクス、なら良いのよ。それでは、さようなら♪」  
「……」

……魔理沙、ご愁傷様です。でも、自業自得ですからね？

\*\*\*

その後、魔理沙は家に一旦帰り、くおんさんは紅茶を人数分持つて来てくれました。そして今は紅茶を飲みながら本を読んでいます。でも、時間は直ぐに経ってしまい、帰らなければならなくなりました。さて、パチユリーさんに聞きましょうか。

「あの、パチユリーさん？」

「……何かしら？ケホツケホツ」

パチユリーさんは咳き込んでいました。……心配なので治しましょうかね。

「あ、いえ、話があるんですけど、その前に……」  
「??」

「嘆息、治しましょうか？」

「あら？貴女、治せるの？」

「はい、多分」

「……そう、ありがとう。レティシアも治せる筈なのだけれど、今までしてくれなかったのよ。だから、有難いわ」

素晴らしいながら、パチユリーさんはレティシアさんを横目で見ていました。

……レティシアさん、治すことが出来るなら治してあげましょうよ。

「クスクス、確かに私なら治せるけれど、貴女がまた嘆息を発症するのは見えているもの。だから、治さなかつただけよ」

と、レティシアさんは本を閉じながら返事をしていました

「……そう。貴女、葵さんと言ったかしら？」

「え？あ、はい。そうです」

「……治して頂戴」

「クスクス、あら？また嘆息になるだけよ？」

「……それでも、少しの間はならないんでしょう？なら、少しの間でも

楽になる方にするわ」

「クスクス、分かったわ。じゃあ今後は頼まれれば治してあげましよう」

「……お願いするわ。ということで、お願い」

「はい！」

私は能力を使用してパチユリーさんの嘆息を治しました。すると……、

「……確かに、怠くなくなったわ」

「そうですか、良かった」

「……葵、ありがとう」

「!!」

……お礼を言われるのって、本当に、幸せな事なんですね。でも私は、自己満足の為にやっていることなのに……。

「……いえ、大した事はしてませんよ」

「……クスクス、謙遜しなくて良いのよ？お礼の言葉は有難く貰っておきなさい♪」

「はあ……」

「……それで？葵」

「??」

パチユリーさんが話し掛けてきました。何か用でしょうか？

「……私に何か、用があったんじゃないかかしら？」

「……あー！」

完全に忘れていました！さっきまで覚えていたのに、なんで大事な事を忘れてるんですか、私は！

「クスクス、忘れていたのね」

「……貴女ね」

「あ、あはは……」

もう、笑うしかありません。

「そ、それですね、パチユリーさん」

「何かしら？」

「出来れば、本を貸していただけたらなと……」

「良いわよ」

「……え？良いんですか？でも、なんで？」

私とパチユリーさんは今回が初対面なのに、どうしてでしょう？

「……貴女なら、何故か信用出来るのよね。どうしてかしら？」

「そ、そうなんですか？」

「……ええ、だから、良いわよ」

「あ、ありがとうございます！では、コレを借りていきますね！」

「ええ、どうぞ」

「それでは！さようなら！」

こうして私はパチユリーさんから本を貸してもらい、そのまま家に帰りました。



## 第十九話

く葵 side

あれから少し日にちが経ち、少しずつ肌寒くなってきた今日この頃。私は境内の掃除をしていました。落ち葉が少しずつ増えてきましたので掃く必要があるのです。

そして、私が掃除をしている所に一人の来訪者が来ました。空から。

「こんにちはー！文々。新聞をお届けに来ましたー！」

「あ！文さん、こんにちは！でも、私の所も新聞は取っていない筈では？」

この方は『射命丸 文』さん。姿は黒い髪で目が赤く、頭の上には赤い山伏風の帽子。服装は白のTシャツに黒のスカート。そして背中からは黒いカラスの羽が生えていて、靴もまた天狗が履いている様な靴の綺麗な女性です。

「いいじゃないですか、受け取ってくださいよ！そして愛読者になってあの博麗の巫女にも面白さを語って下さい!!」

つまりは霊夢に愛読者になって欲しいと……無理な気がします。

「それ、無理だと思いますよ？」

「あやや！何故ですか？」

「いやだって、霊夢はそう言うのに余り興味を示しませんし……」

まあ、興味を示さない理由は、あの子の能力も関係してくるのでしようね、この場合。

霊夢の能力は『空を飛ぶ程度の能力』。一見するとこの幻想郷では誰も(普通の人以上)飛べる事から意味をなさない様な能力ですが、実は違います。

『空を飛ぶ程度の能力』。この能力の本領は広く、何事からも浮く事が出来る能力です。例えるとですね、皆さんは厳つい顔の男の人から脅されたら、萎縮してしまいませんか？まあ、萎縮すると想定して話を進めるとですね、そんな時でもこの能力があると、その脅しも無意味になってしまいます。つまりは、霊夢は怖くないんです。それに先

程言いましたように、この能力は何事からも浮きますので重力だろうとハツチャラなんです。これが霊夢の能力です。

「いや、興味を持つ持たないの前に、まず霊夢はお前に目を覚ませと呼びかけると思うが？」

「あ、ルカ」

「あやや！ルカさんではないですか！新聞を一つ、どうですか？」

「貰っておくよ。新聞とは本当に便利だからな、窓拭きとかに」

「うんうん、そうなんですよね、窓拭きとかに……て、え？」

る、ルカ。新聞を売ってる人の目の前でなんて無情な一言を……。

「あ、今日はまだ居たのか。良かった」

ふと、そんな声が聞こえた為、其方に顔を向けると、そこに居た人はお弁当の様な帽子に赤いリボンが付いており、腰まで届くのではないかと思われるほどに長い青色がかった銀髪。そして青色のワンピースを着た人が居た。

「あれ？慧音さん、どうしたのですか？」

この人は『上白沢 慧音』さん。人里で寺子屋を開いており、子供達に勉強を教えている人です。ただ慧音先生は半人半妖……いえ、半人人間でもう半分はワーハクタクのちよつと人とは違うだけの人間です。

そう、満月になるとワーハクタクの姿になるだけなので、そこまで問題でもありません。

「えつと……」

「すまない、葵。君に話があるのだが、今いいかな？」

え？私に話、ですか……。

「いいですよ。ですが、申し訳ないとは思いますが、此処の掃き掃除を切りの良い所までやらせてもらってもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わない」

「有難うございます。ルカ、慧音さんを客間まで連れて行ってあげてくれないかな？」

「分かった」

「ちよつと待ったー！ー！」

という声にビツクリしてしまい、何かと思い顔を向けると……、

「私もそのお話を聞かせてもらってもよろしいでしょうか!!?」

凄く目をランランと輝かせている文さんがいました。

「それは別にいいが、お前にとってはそこまで面白い話ではないと思うぞ? それでもいいのか?」

「はい! 面白いか面白くないかは私が決める問題ですから、良いんですー!」

「ということ、私は了承するが、葵はどうする?」

「私も、別に「断つ」といた方がいい」え?」

「だから、其奴の頼みは断った方がいい。後で新聞に何書かれるか分かったもんじゃないぞ」

「え? ど、どういうこと? ルカ」

「私が説明するより、読んだ方が早い」

と言うと、先程文さんがルカに渡した新聞を此方に見せてきました。

そしてその新聞の内容には有ること無いことが書かれていました。

「……成る程、これはルカがそういうのも分かるな」

「……えっと」

「葵さん! これは違うんです! 信じてください!」

信じてください、と言われましても……この内容では流石に……。

「……」

「……」

チラツと文さんを見てみると、目がウルウルして祈るように両手を組んでいる文さんが見えました。

……はあ、仕方ありませんね。

「分かりました、信じます」

「!!? 葵さん!」

「葵、こんな奴を信じるのか?」

「うん、なんか、いたたまれなくなっちゃって……」

「はあ、まあお前がそれで良いのならいいが」

「そうだな、君がそれで良いのならよしよし」

こうして私達の中では、文さんは一時的にはありますが無罪になりました。

「じゃあ慧音、中へと案内するから着いて来てくれ」

「分かった。お願いする」

話が終わって直ぐにルカは私がお願いをしたことを行動に移してくれた。

慧音さんと文さんはルカに着いて行きました。

さて、私も切りが良い所まで掃き掃除をしましよかね。

\*\*\*

客間には私、ルカ、文さん、慧音さん、そして、鬼灯がいた。

因みに、私達の対面に文さんと慧音さんがいますよ。

「何故お前がいるんだ、鬼灯」

「別に構わないだろ？それで一体、何の用で来た？慧音」

「それはな、葵に頼みたいことがあるんだ」

「？私に、ですか？」

「ああ」

「鬼灯ではなくて？」

「そうだ」

「そうですか、それで私に用とは？」

すると慧音さんは頭を下げて私にこう言いました。

「頼む!! 一日だけでもいいんだ!! 寺子屋で子供達に勉強を教えるてやっ  
てくれ!!」

「断る」

「え!! ルカ？鬼灯？なんで二人が断ってるの？」

「だったら葵。お前は断るつもりだったのか？」

「うっ、そ、それは……」

実際、私には断るつもりなどありませんでした。寺子屋が人里にあるにも関わらずに。

「慧音も知っているだろう？人里の者たちから葵への対応を」

「ああ、知っている。それを知っているの頼みなんだ」

「……」

「?ルカさ……ヒツ!!?」

文さんが小さな悲鳴をあげるのも仕方のないことです。今のルカの目は凄く冷たい、まるで絶対零度を思わせるような目で慧音さんを睨んでいますから……。

「……ルカ、落ち着け」

「だがな」

「落ち着けと言っている」

「……」

……ルカの冷たい目はまだ残っていますが、幾分が良くなったみたいです。

「それで?葵はどうしたいんだ?」

「……え?」

「だから、葵はどうしたいんだと聞いているのだ。これはお前の問題だ。最終決定権はお前が握っている。だからお前が決めろ」

「鬼灯!!?」

「ルカ、私達に決定権はない。私達がこの場で出来るのはあくまで意見だ。それ以上の事は出来ない」

「……さつき私と一緒に断ると言った奴の言葉か?それが」

「ルカの気持ちは分かる。私も同じ気持ちだからな。だが、私は葵の気持ちも尊重してやりたい。それだけだ」

「……」

ルカは話す事を止めて私の方に目を向けました。

私の意見ですか。……もう、決まっていることなのですがね。

「慧音さん、顔を上げて下さい」

「……」

慧音さんは顔を上げてくれました。だから、私の意見を言いました。

「慧音さん。その話、受けます」

「!!?本当か!?!」

「はっ」

「葵……」

「大丈夫だよ。安心して？ルカ」

「だがな……」

「ルカ、そこまで心配するなら私達も付き添いとして行かせてもらえばいいだけだろう？」

「……そうだが」

「私は両方の過去を知っているからな、気持ちは分かるが、葬が心配な様ならそうするか？っとお前に提案をしているだけだぞ？私は」

「……そうだな、分かった。慧音」

「付き添いなら構わんぞ」

「そうか、ありがとう」

「あやや!!ちよつと待って下さい!!」

と、此処までルカの睨みで萎縮していた文さんが待ったを掛けました。

「私もその現場に立ち会わせてもらいます!」

「ダメだ」

「えー！なんでですか!」

流石は記者という一言からのルカ、鬼灯、慧音さんからのダメ発言。

……文さんが可哀想になってきました。

「どうせお前の事だ。またあることないこと書くつもりだろう？」

「うっ……」

「悪いが、私もそれを知っているのにな。お前の事を信用など出来ん」

「ぐっ……!」

「あの新聞を見せられてはな、一体君の何処を信用すれば良いのか分からなくなった」

「うう……あ、葬さー！ん!!?」

「えっ!あ、文さん!」

「皆さんが〜!」

文さんが遂には私に助けを求めてきました。

……仕方ありませんね。

「あ、あのく、三人共?」

「なんだ?」

「許して上げませんか？取材許可」

「……は？」

「!!あ、葵さん！」

……何故だか文さんから女神を見る様な目で見られています。何故でしょうか？

「だがな……葵も読んだだろう？あの新聞を。アレを書いた其奴の何処を信用して許可しろと？」

「そ、そうだけど……」

「……はあ、仕方ない。ルカ、こういうのはどうだ？」

「？なんだ？鬼灯」

「葵はもう無理だから。だから、まだ教えると決まっていけない私とお前の何方か、あるいは両方で其処の力鴉を見張る。これならどうだ？」

「……そうだな。私は良いが、慧音はどうする？」

「そうしてくれるなら私も構わない。許可しよう」

「やったー！ー！ー！やりましたよー！ー！」

文さんは許可を貰えた途端に嬉しそうにしています。

「良かったですね、文さん!!」

「はい！本当に良かったですよ！それで？その授業の担当は何時になるのですか？」

「あ、そういえば聞いていませんでした。慧音さん、何時でしょうかな？」

「ああ、二日後にする予定だが、良いか？」

「明日ではないんですか？」

「ん？明日でも良かったですよのか？」

「まあ、書物を見ればある程度は……」

多分、いけるでしょうね。

「そうか、なら明日にしよう」

「了解です!!それでは私はこれで!!準備をしなくてはなりませんので!!」

そう言う文さんは客間の障子を開けて、空へと飛んで行きました

た。

「それでは私もこれで失礼しよう。葵、これが子供達も使っている物だ」

慧音さんはそう言うと、私に子供達も使っている書物を渡して「よろしく頼む」と言い帰って行きました。

私は慧音先生を見送った後、家に入りました。すると……、

「さて……私達もどうするか決めようか、ルカ」

「そうだな、早めに決めよう」

……今のような話をしていたルカと鬼灯がいた。

……文さん、本当にご愁傷さまです。



## 第二十話

〈葵side〉

「……という事だから、明日は此処に来れないかもしれないけど、良いかな？」

「ダメ」

「え？」

私は霊夢に今日あった事を話して、明日は無理かもと言ったら断られてしまいました。何故でしょう？

「まず一つ、文が信用ならない」

「……根拠は？」

「勘とさっきの話」

勘が出ちゃうと引く可能性が低いですね。

「二つ、その寺子屋が人里にあること」

「……」

「私が頼まれたと言うなら別に問題ないけど……葵、あんたでしょ？人里からあんたへの扱い、どれだけ酷いか分からないわけじゃないわよね？」

「……分かってる、けど」

「頼まれたから断りきれなかった、でしょ？」

「……うん」

「はあく、あんたね」

「……それで、三つ目は？」

「私の世話は誰がやってくれるわけ？」

「まさかの答えですね」

最後が一番、精神にきましたよ。

「まあ、最後のは面倒臭いと言わずに私がやればいいだけの話だけど、問題は二番よ」

「……」

そう、問題は二番です。人里の人達から私への対応。……でも。

「……私なら、もう慣れてるよ？」

「それでも、あんたは優し過ぎるから傷付くだけよ」

「……それでも」

それでも、私は。

「私はやりたい。私は、自分が満足出来るなら、やるよ」

「……」

「確かに私は人里の皆から嫌われてるし、いらぬ子扱いされてるけど、私は自己満足の為に今回の事を引き受けたの。だから、やる。霊夢になんて言われても、結界を張られたりとか私が身動き出来ない様な事をされたとしても、やる」

私は私がどれぐらい真剣なのかを霊夢に伝わる様に、霊夢の目から逃げないようにしました。

すると……。

「……はあ、分かったわよ」

「!霊夢!!?」

「ただし、何があったかは教えて貰うからね」

「うん!分かった!!」

\*\*\*

次の日、私達は神社に来た文さんと慧音さんと共に人里に向かいま  
した。

『ねえ?アレって……』

『あら?あの巫女ね。よく人里に来ることが出来るわよね』

『本当に。しかもあの冷徹半吸血鬼までいるじゃない』

『よくもまあ、姿を……』

……小声ではありますがそんな声が聞こえてきました。けれど、そんな事を気にしているような余裕が今、無くなりました。

「……あいつら」

「ひっ!!」

「ルカ!落ち着いて!」

底冷えする様な声、絶対零度を思わせるような目。

その目で、先程まで小声で話していた人達を睨みつけていました。

……いえ、それだけではありません。

ルカの周りに、簡単には折れない様に見える氷柱が浮いていました。

その方向は、さつきまで小声で話していた女性二人組に向いていました。

「……」

「落ち着け、ルカ」

「!!」

鬼灯がルカに声を掛けると、ルカの周りにあった氷柱は溶けて……いえ。

『炎』が氷柱を覆い、溶かしました。

「……鬼灯」

「全く……お前は私が能力を使わない限りはその氷柱を消すことが出来ない事を忘れたのか？」

鬼灯の能力は全部で三つ。今回使った一つは『自然を操る程度の能力』。

私が辺りを見てみると、火を焚いて焼き魚をしている人が見えたので、その火を少し操った様です。

まあ、自然ですからね、外だとあまり敵いませんが、中では……。

まあ、鬼灯が本当にチートだと思う日は必ず来ますよ。私もそうですすし。

残り二つが本当にチートなので。

「……」

「よ、良かった〜……」

「ルカ、少し落ち着け」

「ルカ……」

「……もう、大丈夫だ」

本当に大丈夫なのかと思いい目を見ると、あの絶対零度の様な目は普通の目に戻っていました。良かったです。死人が出なくて。それに……。

ルカがまた、人殺しにならなくて、本当に良かった。

「葬？どうした？」

「??」

「慧音達はもう歩いてるぞ?」

「あ!!ご、ごめん!すぐ行く!!」

私は考え事を辞止めて、ルカ達を追いかけました。

\*\*\*

「此処だ、入ってくれ」

「はい」

私達は寺子屋に入り、子供達の教室へと向かいました。

「此処だ。少しの間待っていてくれ」

「はい、わかりました」

そして待つこと数分……。

「入ってくれ」との声が聞こえたので、私達は入りました。

「それでは今日、特別に皆を教えてください先生だ。葵」

「はい。こんにちは!初めまして!神無月葵と言います!今日限りで

すが、よろしくお願いしますね!!」

「よろしくね!葵先生!」

「よろしく願います!」

そんな声が聞こえる中、二人だけは違いました。

一人はこんな反応です。

「あれ?もしかして、あの時のお姉ちゃん?」

「え?」

私はそんな声が聞こえた方を向くと、前、ケガをしていた現場を私

が見かけて、そのケガを治した時の子がいました。

「あれ?幸多君?」

「わあ〜!本当に会えた!」

幸多君は凄く嬉しそうな顔をして、此方に手を振ってくれていま

す。

私も手を振りかえました。

ただ、もう一人の反応が……。

「幸多!!その人に手を振るの辞めとけ!!」

「え?なんで?」

「俺、父ちゃんとお母ちゃんに聞いたけど、神無月神社の巫女さんは、人の昔の事を見れる化け物だって言ってたぞ!!」

「!?!?!?!?!子供にも、暴露しているのですね。私が、化け物で有ることが……。」

「化け物じゃないよ!!お姉ちゃんは化け物なんかじゃない!!」

「……幸多君、もういいよ」

「だって!!本当に化け物だったら僕のケガを治してくれないもん!!優しくもないもん!!?僕をきつと食べてたもん!!」

いや、食べるって……。私、これでも人間なのですが。

「だったら!!昔を見れる人は違うってのかわ!!」

「治してくれる人が化け物なわけないもん!!」

と、ついには取っ組み合いの喧嘩になりました。

「ちよつと!二人とも!辞めなさい!」

あ、慧音さんが近づいていき……、

「二人共、辞めんか!!?」

と言いながら、二人の頭にそれぞれ頭突きをしていました。……ア  
レはいたそうですね。

「いたらい!!?」

「二人とも、大丈夫?直ぐに治すから、泣かないで?」

私は二人を治しました(能力で)。

「……あ、痛みがなくなった!!やっぱり凄いね!!お姉ちゃん!!」

「……」

「??」

さつきまで、幸多君と取っ組み合いの喧嘩をしていた子が、顔を俯かせていました。何処か悪いのでしょうか?

「どうしたの?」

私はその子と目が合う様に屈みました。すると、その子は泣き出してしまいました……って、

「え?えつと、どうしたの?え?あの?えーつと、慧音さん!!助けてください!!」

「いや、葵がなんとかしろ」

「え？る、ルカ!!」

「私に子供をあやせと?」

「鬼灯!!」

「慧音と以下同文」

「文さん!!」

「イヤー! いいシャッターチャンスじゃないですか!!」

誰も助けてくれません!

「ひつく、お、お姉ちゃん……」

「な、なんででしょうか?」

「……なさい」

「え?」

「ごめんなさい、ごめんなさい。化け物なんて言つて、ごめんなさい

……」

「……」

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

その子はずっとその言葉を泣きながら言いました。けど、

「いいんです。だからもう、泣かないで下さい」

「ひつく!!?」

「私は貴方の言う通り、化け物なんですから、謝らなくていいんですよ?」

「ひつく、でも! ひつく」

「ね? もう泣き止んで下さい。私は怒ってませんから、だから、笑つて

下さい」

「……うん、ひつく」

その子はようやく泣き止み、私が言った通り、笑つてくれました。

「さて、時間が相当押してしまつたからな、早く始めよう。葵」

「わかりました。さて、では皆さん。今日は算数の授業ですよ!! 皆、しっかりと勉強していきましょね!!」

『はいー!』

こうして私の寺子屋授業はスムーズに進みました。割り算が分からない子供が多かつた為にクツキーを使つて割り算とはどういうも

のかを教えながらでしたけど、分かりやすいと言ってくれた子が多くて良かったです。

そして、寺子屋から帰ろうとした時……。

「お姉ちゃん！」

「うん？幸多君？どうしたの？」

「えつとね……あつた！はい！コレ！」

「……え？」

幸多君が渡してくれたのは、綺麗なビーズで作られた腕輪でした。

「僕、お姉ちゃんと何時会えてもいいようにそれをずっと持ってたんだ!!だから、受け取ってくれる？」

「……」

……何故でしょう？とても、泣きそうです。

「？お姉ちゃん？どうしたの？何処か痛いの？」

「……いえ、それに、幸多君も知つての通り、私が何処か痛かったら、自分で治せますから」

「そっか！じゃあ、どうして？」

「……幸多君からの贈り物が嬉しかったからですよ。ありがとうございます！」

私は幸多君を思わず抱きしめてしまいました。

「……良かったな、葵」

「ああ、そうだな。本当に良かったよ」

ルカと鬼灯がそんな事を言っていたのが微かに聞こえました。

こうして、私の初めての寺子屋授業は終わりました。

\*\*\*

翌朝。

「……えつと」

「……あのカラス」

「……どうやら氷漬けにされたいようだな」

その新聞の内容には、慧音先生の頭突きの記事を『鬼教師の指導』と書かれていたり、私と幸多君との事は『小さな男の子に恋愛か!』とか書かれていたり……まあ、酷いありさまでしたとさ。

## 第二十一話

（noside）

今から見せる夢は葵が見ている夢

銀色の世界

一面、雪景色の幻想郷

灯籠が並んだ段数が多い階段

そして、『何か』が集まっている不気味な木

その木の前に佇んでいるピンクの髪に青い着物のようなモノを着た女性

—————

（葵side）

「・・・今のは」

アレは、異変の兆候・・・ですよ？絶対

けれど、よく分かりません

まあ、私が最初に見る異変の兆候を示す夢は必ず分かりにくいのですが・・・

（アレは、一体、何処なのでしょう？）

レティシアさん達が住んでいるあの紅い館でさえ、湖があつたからこそ何処にあるのか分かったというのに、今回は、本当に分からない。

あの場所は、一体、何処なのでしょう？

「・・・鬼灯達に相談してみますか」

\*\*\*

「さあ？私もそんな場所は知らないな」

私は、朝食を食べ終わり、ルカと鬼灯に先程の予知夢で見た場所を聞いてみましたが、ルカは知らないみたいです。ですが・・・

「・・・・・・・・」

鬼灯は知っているようですね

「・・・鬼灯。お前、知ってるのか？」

「ああ、だが、この事は私から紫とレティシアに話しておこう」



「え？あ、あの、場所は？」

「・・・名前だけならいいのか？」

鬼灯は何かを悩んでいるようですね。一体、何に悩んでいるのでしょうか？

「・・・すまない、少し時間をくれ。私一人ではどうすれば良いかわからない」

「え？・・・うん、分かった」

・・・鬼灯、どうしたというのでしょうか？

まあ、兎も角、私達はこの事を霊夢に話さなければいけませんね

\*\*\*

「ふーん、そう。まあ、その異変を感じ取ったらって事で良いんじゃないかしら？」

「え？それで良いの？（汗）」

私とルカは、さっきの事を霊夢にも話していますが、そんな返答が返ってきました

「良いのよ。だって、今はそんな事、起こってないもの。今の所は無害よ、無害」

「それで良いのか？博麗の巫女が」

ルカが頭を抱えています。霊夢はどこ吹く風という感じでお茶を啜っていました

まあ、それが霊夢らしいといえは霊夢らしいのですが・・・

「・・・あ、霊夢。一つ聞きたい事が有るんだけど、いいかな？」

「ん？何よ」

「筍、いる？」

\*\*\*

「・・・まあ、確かに筍と言えば竹だがな・・・なんで、此処なんだ？」

「いや、だって・・・私達の近くに竹林なんてないでしょ？仕方ないよ（汗）」

私達は、竹林に來ています。まあ、理由が筍を取る為なんです。なんだか、この竹林は変ですね

「・・・ルカ」

「ああ、分かっている。一旦、戻るぞ」

「うん……って、どっちに?」

「……」

「……どうやら迷子になってしまったようです(汗

「と、兎に角、進もうか?」

「そう言つて、私が進もうとすると

「待て」

ルカが私の手をとり止めてきました

「?ルカ?」

「……違和感を感じるんだ、その土から」

「違和感?」

私は、ルカが指を指した方に顔を向けると、勘が『進むな』という警告をしてみました

そして、私の目には、確かに違和感がある土が……

「あ、ありがとう、ルカ」

「ああ、さて」

ルカは能力で氷柱を創り、それを自分の周りに展開して

「そこにいる奴、出てこい」

と言つて、私達の後ろの方に投げました

そしたら、「うわあ!!」と言う叫び声と共に出てきたのは……

「ん?兎?」

兎の耳と兎の尻尾が生えていて、ピンクのワンピースを着た黒髪の女の子が居た

「……いや、この場合は『兎』というよりも『妖怪兎』だろ」

「お前ら!なんで私が仕掛けた罠に引っかかってくれないんだよ!」

え?な、何故かキレられました……(汗

「いや、何故つて……違和感があったからよく見てみたら、あつただけだが?」

「む……」

えっと、今度は拗ねちゃいました……(汗

「え、えっと、ごめんなさい?」

「いや、何故謝るんだ？寧ろ、あつちが悪いだろ」

「え!?いや、だつて・・・」

拗ねられると、何だか罪悪感が・・・

「それで？お前らはどうして此処にいるんだ？迷子か？」

「まあ、迷子には変わりないんだが・・・」

「よし！なら私について来い！出口まで案内してやるから！」

「あ、いや、私達は・・・」

「ん？なんだ？まだ用事があるのか？」

私は、その妖怪兎の女の子に事情を話しました

「へえ、そうだったんだ。でも、諦めた方がいいかもね？」

「え？」

「いや、だつてさ、ほれ」

その女の子がゆび指した方に顔を向けると・・・

「え？うそー！」

「・・・なるほど、だからか」

「そういうこと、だから辞めといた方がいいよ」

私達が目にしたものは、筍だったものから竹になるまでの過程が早

い筍でした

「こ、これだけが特別ってわけじゃないんですよね？」

「そ、コレだけが特別ってわけじゃないよ。この竹林にある筍は全て

この速さで成長するのさ。だから、諦めた方がいい」

・・・諦めますかね、筍が入った筍ご飯を作って食べようと思った

のですが

「葵、家の山で松茸でも探すか？」

「うーん、探せばあるかもしれないけど・・・そうしようか」

「ということだから、案内、頼めるか？」

「ああ、最初からそのつもりさ。さあ、コツチだ」

私達は、その子について行き、ようやく竹林から外に出ることが出

来ました

「ありがとうございます！えつと・・・」

「ん？ああ、名前か？私の名前は因幡 てる。よろしくな」

「はい、よろしくお願いします。私は神無月葵といいます」

「霜月ルカ。よろしく」

「そうか、分かった。それじゃあな！」

私達は、そのままてゐさんと別れて、自分の山に戻り、松茸を探しました

以外な事に、結構見つかりましたよ？松茸

\*\*\*

「はい、霊夢。予定と違って筍じゃなくて松茸になっちゃったけど・・・」

「うそ！いや、え？夢じゃないわよね？」

「なんなら、お前の頭を氷漬けにしてやろうか？」

「いや、せめて氷を頭に乘せるとかにしようよ・・・(汗)」

まあ、霊夢は大喜びみたいですから良しとしましょうかね

\*\*\*

「ほう？今日のご飯には松茸が入っているのか」

「ああ、本当は筍の筈だったんだが、入った竹林の異様さで無理だった」

「??異様な竹林？」

「まあ、後で話すよ。それで？紫さんたちと何を話してたの？」

私がそう鬼灯に質問すると、顔が少し曇りました。嫌だったので  
しょうか？

「・・・冥界」

「え？」

鬼灯は、急に『冥界』と言葉にしましたが、私には何のことか、一瞬、分かりませんでした

「・・・夢の場所のこと？」

「ああ、今日、紫達と話して場所を言うように言われた」

「それが冥界って場所か・・・」

「冥界・・・」

どうしてでしょうか？何かモヤモヤした感じがします。

・・・昔、何かで読んだような・・・

「・・・」

「葵？」

「え？何？ルカ」

「何かを考えていたようだが、どうした？」

「いや、何でもないよ」

「・・・時間がある時にでも、神社の中にある蔵書を調べてみましようかね」

「まあ、兎も角。お前が見た異変の兆候がある場所は『冥界』と言う場所だ。流石に、場所については自分達で探してくれ」

「？なんで？」

「私ですらそう簡単に行けないからだ」

「鬼灯でも行けない所ということか・・・」

「ああ、あの紫のスキマを使わなければ無理だ」

「そんな場所での異変。・・・結構、骨が折れる場所搜索になるかもしれないですね」

## 第二十二話

く葵side)

アレから時間が経ち、今では冬。雪が降り、神社にも積もってしまいました

私は、雪掻き真つ最中です・・・博麗神社の

「・・・ふう、コレでいいですね」

「お姉ちゃん!」

「あ、幸多君もお疲れ様。手伝ってくれて有難う!」

「ううん!平気だよ!」

幸多君が此処にいる理由は、鬼灯に乗せて連れきました。まあ、それまでの間の回想をしましょうか

く回想く

私は、自分の神社にも雪が積もったので、暖かそうな着て雪掻きをしています。すると

「お姉ちゃん!」

「え?あれ?幸多君?こんな寒いのに来てくれたの?風邪引かない?」

幸多君が遊びに来てくれましたが、私は幸多君が風邪を引かないか心配で仕方有りません

「ううん!大丈夫だよ!ほら?暖かそうでしょ?」

まあ、確かに、チャンチャンコを着ていますから暖かそうではありますが・・・

「本当に平気?」

「うん!ねえ、お姉ちゃん!雪だるまを一緒に作ろ!」

「え?雪だるまをですか?」

「うん!・・・ダメかな?」

雪だるまですか・・・まあ、作るのには良いのですが、何処に作りましょう?

・・・あ、良いところがありました

「幸多君、ちよつと来てくれるかな?」

「??」

私は、幸多君を裏の方まで連れて行きました

「此処なら大丈夫でしょう。さて、此処で作りますか!」

「うん!作ろう!」

そうして、少し時間が経ち、雪だるまを作り終えました!

「やったー!」

「上手に出来ましたね♪」

「うん!そうだね!」

「葬」

「うん?どうしたの?ルカ」

そこにルカが来ました。まあ、大体、要件は分かっています。私も忘れていたわけでは有りませんからね

「行くよ、大丈夫」

「そうか」

「?お姉ちゃん。何処に行くの?」

「はい、すみません。私は他にも仕事があるので・・・」

「だったら!僕もその仕事手伝う!」

〜回想終了〜

まあ、最初は私もルカも反対しましたが最終的には押し負けて、鬼灯に乗せてもらって連れて来てしまいました。まあ、博麗神社の敷地内から出なければ無害な妖怪しか来ないので大丈夫だとは思いますが、一樣、博麗神社からは出ない様に言っておきましたし、大丈夫ですよね?

うん、大丈夫です。あの子は物分りの良い子なので大丈夫

「?お姉ちゃん?どうしたの?」

「え?あ、いえ、大丈夫です。さて、雪掻きも終わりましたし、家に上がらせてもらいましょうか!」

「うん!」

\*\*\*

私達が雪掻きを終えて霊夢達がいる部屋へ行くと、魔理沙も炬燵に入っていました

「あれ？魔理沙。何時の間に来たんですか？」

「うん？おう！葵！何時の間にかつて？ついさつきだぜ！」

と、返答しながら炬燵の上に載せてあるミカンを食べながら答えてくれました

「そうですか、幸多君。先に炬燵に入っていて下さい。私は、追加のミカンを持って来ますから」

「あら？ありがとう、葵。お願いね」

「はい」

霊夢は、炬燵に入った状態のまま寝転がっています。その状態で先程の言葉をかけてきました。何時もの通りですね

そうして、私はミカンを取りにその場を離れました

〜ルカside〜

「なあ、霊夢」

「ん？何よ」

「前々から聞きたいと思っていたんだが・・・」

私は、前々から持っていた疑問を霊夢にぶつけた

「お前、葵の事を雑用係か何かと勘違いしてないよな？」

「失礼な。してないわよ」

嘘はついていない。本当らしいが、私には、どうもそうは見えない  
境内の掃除も、今回の雪掻きも、全部葵がやっている。だから、どうしてもそう見えてしまう

「じゃあ、どう思っているんだ？」

「・・・それを言わせたいの？」

「奇遇だな。私も聞きたいところだ」

「鬼灯、あんたまで」

「私も聞きたいぜ！」

「魔理沙、あんたもか・・・」

「??」

「あー、幸多だっけ？あんたはいいのよ、分からなくて」

「で？どうなんだ？」

「私はね、葵の事は大切なパートナー、相棒の一人だと思ってる」



「・・・」

「ちよつと、黙らないですよ」

「いや、ちよつとな」

あの扱いをされていてパートナーと言われても・・・と言う感じなんだが、私は

「・・・それで？」

「ああ、ハイハイ、続きね。確かに、はたから見たらあんな扱いは家政婦みたいに見えるんでしようけどね・・・本当は結構、感謝してるのよ」

「「・・・え？」」

「え？い、今、霊夢の口から有り得ない文字が出てきた様な気がするんだが？」

「ああ、そうだな。あのグータラ巫女から有り得ない文字が飛び出して来た気がしたが・・・すまん、もう一回」

「あんたら！私に恥ずかしい思いをさせる気か！」

「いや、だつてな・・・」

「いいわよ！やつてやろうじゃない！戦争よ！魔理沙！鬼灯！外でなさい！相手してやるわ！」

「よつしや！かかって来い！」

「その前に、お前は炬燵から出ることが出来るのか？」

「そんなこと、楽勝・・・あ、無理、寒い」

「結局、ダメじゃないか」

それにしても、パートナーか・・・まあ、そうだな。確かに、信用していない人と、アレだけの連携は出来ないよな

・・・良かった。もし、最悪な答えが出て来ていたら、私は・・・（・・・いや、考えないようにしておこう）

私は、もう、そう簡単に『あんな事』してはいけない。特に、博麗の巫女である霊夢には

「おいおい、結局しないのか？弾幕ごっこ」

「？弾幕ごっこ？何それ？」

「ああ、そういえば、幸多は知らないんだつたな」

「あら？見せたことないの？」

「ああ、ない」

「よーし！なら幸多！見とけよ！コレが弾幕ごっこだぜ！鬼灯！やるぞー！」

「はあ、仕方ないな。・・・魔理沙、お前は神に勝てるかな？」

そうして、魔理沙と鬼灯の弾幕ごっこが始まって直ぐに葵が帰ってきた

「あれ？魔理沙と鬼灯。寒いのに弾幕ごっこをしてるの？風邪引かないよね？」

「大丈夫よ、あいつはバカだし、鬼灯は炎の膜でも体に張ってんじやない？」

「それは、そうかもしれないけど・・・」

「とにかく、大丈夫よ。黙ってミカンでも食べてましょ」

「・・・うん、分かったよ」

「お姉ちゃん！このミカン美味しいね！」

「そう？ありがとう！」

「お姉ちゃんが作ったの？」

「正確に言うなら、私とルカと鬼灯だよ」

「すごい！お姉ちゃん達、すごいね！」

幸多は、目を輝かせている。まあ、確かに凄いだろうな。アレ、育てるの本当に苦労した

こうして、この日を終えた。あ、幸多は弾幕ごっこも見ていたからな？感想は綺麗とのことだったが

因みに、弾幕ごっここの勝者は鬼灯だ。まあ、雪で固められたらそりゃあ、動けなくなるわな、うん

## 妖々夢

### 第二十三話

〔葵 side〕

アレから時間も経ち、もう春だという時期なのにまだ雪が降っています

それで、霊夢はというと・・・

「葵！準備は出来たかしら？」

・・・何故かやる気です。そして逆に私はやる気ではありません。まあ、理由が私欲ですのでそんなの関係ないのですが・・・

まあ、やる気がある理由ぐらい分かっていますですがそれでも聞かすにはいられませんので聞きましょうか

「・・・霊夢、何で今回の異変を解決することにそれだけやる気があるんですか？何時もはめんどくさいと言っているのに」

「そんなの、決まってるでしょ！このまま春がこないと・・・あなたの歌が聞けないからに決まってるじゃない！」

「はあく・・・」

そう、これが霊夢が異変解決にやる気が出ている理由

私の歌が聞きたいからっていう私利私欲のためです。まあ、私も人の事は言えないのですけどね・・・

「兎も角、行くわよ！」

「おっしやー！異変解決しに行くぜ!!？」

「そうだな。さつさとこの異変を解決しないとな」

「全く、幽々子は何をしたんだ・・・」

「・・・はあく」

ダメですね、こんな状態では・・・そうですよ、もう、諦めましょう。人というのは諦めが肝心ですよ

\*\*\*

そうして、私達は空を飛んで搜索しているのですが・・・

「で？霊夢。何処に向かっているんだ？」

「冥界よ」

「へえー、冥界ね・・・え？マジか!？」

「ええ、マジよ」

そう、私の見た予知夢の場所は冥界。死んだものが最後にたどり着く場所。死者の園

「で？その冥界の場所は分かっているのか？」

「知らないわよ、そんな場所」

「へ？じゃあ、なんで飛んでるんだぜ？」

「私の勘がそういつてるからよ」

「ああ、そうか！なら当たるな！」

「はあ、この巫女は・・・」

「あ、あはは・・・(汗)」

最近、ルカと鬼灯の息がぴったりな様に感じるのですが、気のせいでしょうか？

まあ、良いことなので気にしないでおきましょうか

そんな事を思っていると、進行方向に誰かがいました。そして、その人の正体は・・・

「お前ら！この前はちよつと調子が悪かったただけだかな！今回は最強のアタイが勝つ!!？」

チルノさんがいました。そして、その隣には

「貴方達が私の友達を倒した人？チルノを傷付けた貴方達を私は許さないわ！」

薄紫の短い髪に、白いマフラー（暖かそうだな）を首に巻いていて、青色が主な色となっている服装に白いエプロンの様なものがついている、ゆったりというのが頭に浮かんでくる服装をした女性がいた「チルノ？ああ、そこよ妖精ね。私達が異変解決に乗り出していたのに邪魔したから退治しただけよ。何か文句があるわけ？」

いや、それは文句があると思いますよ？友達を倒されるは、理由がそれじゃあ・・・(汗)

「それとも何？あんたも邪魔する気？なら、容赦なく退治を・・・」  
すると霊夢が言おうとしたまさにその時！横から弾幕がとんでき

ました・・・チルノさん達に  
「きやあ！」

・・・容赦がない弾幕ですね（汗）  
けれど、チルノさんは兎も角、あの女性は何とか掻い潜っていました

「うわあー！」

「チルノ！・・・（キツ）」

その女性は、これをやった犯人を睨みつけました。その目の先に居たのは、レティシアさんでした

「クスクス、ごめんなさいね。私達も急いでいるの。だから、そこをどいてもらえる嬉しいのだけれど」

「レティシア。お前・・・本当に容赦ないな」

「クスクス、褒め言葉として受け取っておくわ♪」

「レティシア様。早く急がねば・・・」

と、そんな会話をしていたら、レティシアさんの後ろから咲夜さんが現れました

「クスクス、分かっているわ。咲夜。けれど・・・」

「お前達！もう許さない！」

「彼方はそれを許してくれないみたいだけれどね」

「・・・お前の所為だぞ？レティシア」

「そうだな。お前の所為だな」

「クスクス、あら？別にいいでしょう？どうせ、最初っから戦うつもりだったのでしょうか？・・・その葵さん以外」

「「「「」」」」」

「クスクス、沈黙は肯定よ♪」

「・・・はあ、じゃあ、私が行こう」

と、ルカが自分が戦うと言い出しました

「え？どうして？ルカ」

「あの妖精を倒したのは私だ。私がやるのは当然だ」

「そう、貴方が・・・いいわ！かかってきなさい！」

こうして、ルカの弾幕ごっこが始まりました

ルカside

「一応、お互い名乗っておこうか」

「ええ、それぐらいなら別に構わないわよ。私は、レティ・ホワイトロックよ」

「そうか、私は霜月ルカ。よろしく」

「そう、じゃあ、始めましょうか！」

こうして始まった段幕ごっこ。最初は、お互い弾幕で牽制しあっていたが、レティが先に動いた

「これでも食らいなさい！寒符『リングリングゴールド』！」

レティがスペル宣言をしたと同時に、鳥の形をした弾幕が私に向かってきた

だが、私はそれを少しよけたり、左右によけたりとしながら回避した

「次は此方だ。氷符『氷柱雨』」

相手は身構えたが、弾幕がこないことに訝しんだ

「あなた、弾幕は？」

「もう出ているが」

「はあ？何処に・・・」

相手は疑問を言う前に氷柱によって落とされた。まあ、そう簡単には気付かないだろうな。なんせ、これは氷柱雨

雨とついているのに上からくると思わないのか？あいつは

こうして、私とレティの弾幕ごっこは早々にケリがついた

ルカside

ルカのスペルで弾幕ごっこは終わり、私達はレティさん（ルカから聞いた）達が異変の黒幕ではないことには気付いていたので、ほっといて行き、私はレティさん達に謝罪をしてから皆の元に向かった

「さて、で？冥界へは何処に向かって行けばいいのかしらね」

「レティシア。お前が紫と同じ能力を創ってスキマで行けばいいのではないか？」

「クスクス、それは最終手段よ。それに、そんな簡単に頼ると頼りグセが付いちやうわよ？それでもいいならどうぞ？」

「いや、遠慮しておく。それはマズイからな」  
「ええ〜」

「文句を言うな霊夢。諦めろ」

「はいはい、分かったわよ」

私達は、また冥界への入り口を探していると、前の方から見覚えのある姿が見えた

「あれ？アリス？」

「あら、葵じゃない。こんなところでどうしたわけ？」

「いえ、異変を（渋々）解決しに」

「・・・何故かしら？今、仕方なくっていう感情が見え隠れしていた様な」

「そ、そんなこと無いよ？（汗）」

「」「」「嘘ね（だぜ）（だな）」「」「」

何故でしょう？今、嘘とバレた気がします。そして・・・  
「・・・」

後ろからルカの視線を感じます（汗）

「で？その人達は？」

「それは、こっちのセリフよ」

「ああ、じゃあ紹介するね。この人はアリス・マーガトロイドさん。よく、可愛い人形を創ってくれて、時々、その人形を渡してくれているの」

「よろしく。アリス・マーガトロイドよ」

「それで、この紅白の巫女が博麗霊夢」

「一応よろしくしとくわ」

「ええ、そうね。一応よろしく」

「で、こっちの黒白の魔法使いが霧雨魔理沙」

「（ピクツ）・・・魔法使い？」

「そうだぜ！私は魔法使いだぜ！」

「・・・そう」

「それで、こっちの九尾が孤天鬼灯」

「鬼灯だ。葵の神社の神様をやっている」

「そう、よろしく（この子、可愛いわね。人形として作ってあげたら、葵、絶対喜ぶわね）」

「こつちが霜月ルカ。私の親友だよ」

「よろしく」

「ええ、よろしく」

「此方がレティシア・スカレットさん。この前、紅い霧の異変があったでしょ？その異変場所の家に住んでいる当主さんの・・・お姉さん？かな」

「なんでそこに疑問がつくのよ（汗）」

「クスクス、レティシアよ。よろしく」

「ええ、よろしく」

「最後に、その館でメイドさんとして働いている十六夜咲夜さん」

「十六夜咲夜と申します。どうぞよろしくお願いします」

「よろしく願いますわ」

「もういいわね？それじゃあ「ちよつと待ちなさい」・・・何よ」

「？アリス、どうしたのでしょうか？イキナリ待たをかけるなんて。

何か、あるのでしょうか？

「その魔理沙とかいった魔法使い」

「ん？なんだぜ？」

「私と弾幕ごっこをしなさい」

「「「・・・はあ？（え？）」「」」」

「クスクス、面白そうね」

「いいぜ！その勝負、受けてやるぜ！」

こうして、魔理沙とアリスの弾幕ごっこが始まろうとしていた



## 第二十四話

く魔理沙sideく

私は、今からアリスとかいうやつと弾幕ごっこをするんだぜ！  
すげー楽しみなんだぜ!!?」

「それじゃあ、始めましょうか」

「おうーいいぜー!」

私が了承すると、アリスは手を出してきた・・・て、何で手？

そんな事を思っていると、アリスの近くに何時の間にか人形が浮かんでいた

「お前も魔法使いか!」

「ええ、そうよ。私は人形を操る魔法使い。だから、貴方の実力、試させてもらおうわ!!? 操符『乙女文楽』!!?」

アリスがスペルを宣言すると、青弾幕とレーザーが飛んできやがった!!?」

私はそれを避けたが、危なくレーザーに当たりそうだったぜ・・・

「やるわね、あなた」

「そっちこそー!それじゃあ、お返しだぜ!!? 魔符『スターダストレヴァリエ』!!?」

私はスペル宣言をし、私の星型弾幕が出てきて、それが私の周りを旋回している。その弾幕はアリスには当たらなかったがな

まあ、これは違う使い方もあるんだぜ?

「ふーん、貴方は確かに凄いいけどこれじゃあ私には当てられないわよ?」

「ならー!こうするだけだぜー!」

私は、アリスの目を盗み、アリスの頭上へと移動していたのさ!

「え!?何時の間に!」

私は、ミニ八卦路を出して、必殺技を使ってやった!

「くらいやがれ!恋符『マスタースパーク』!!?」

く葵sideく

結果は、魔理沙の勝ちですね

だって、魔理沙が使ったマスタースパークが作った砂煙から出てきたのは笑顔の魔理沙でしたから

「魔理沙！怪我とかしてない？大丈夫？」

「ああ！平気だぜ！何処も怪我してないぜ！」

「良かった〜」

私は、魔理沙が怪我をしてないことに安堵のため息が出ました

「クスクス、まあまあね」

「ええー、それは評価ぎ厳しい気がするぜ」

「クスクス、でも、伸び代は大きいから、努力をし続けたらいいわ♪  
きつと、貴方だったらいつか、霊夢並みに強くなると私は思うわよ？」

「え？そ、そうか？照れるぜ／＼」

そう言つて、魔理沙は自分の頬を搔いていました

「あくあ、やられちゃった」

そう言つて出てきたのは悔しそうな顔をしたアリスでした

「アリス、大丈夫？今から治すね」

「ああ、大丈夫よ。怪我なんて何処もしてないから」

「そう？ならよかった〜」

「貴方は相変わらずね」

「ねえ、さつきから気になってたんだけど、あんた達つて何処で会つたわけ？」

霊夢が唐突に質問してきました。皆の顔から察するに、皆、気になつている様ですね

「わたしとアリスが出会つたのは人里だよ」

「え？人里？え、それ何時のことよ」

「・・・そういえば、随分前にも一回、魚が取れなくて、人里に買いに行つたことがあつたが・・・」

「うん、その時だよ」

「あの時は、私も人里で人形劇をしていて、そこで偶々会つたのよ。  
で、人形の話で盛り上がつてね」

「そうそう！あの時の人形劇に使つた人形・・・上海人形だったかな？  
その上海人形が可愛くて可愛くて可愛くて!!？」

「クスクス、すごく目が輝いているわね♪」

「え？」

「クスクス、その上海人形がもしかして、人形使いさんの隣にいる人形かしら？」

「ええ、そうよ。あと、私はアリスよ。アリスと読んで頂戴」

「クスクス、分かったわ。アリス」

「へえ、そう。分かったわ。それじゃあ、異変解決に行きましようか」

「ああ、この長い冬ね。早くこの冬を終わらせて頂戴。寒いから」

「ああ！勿論だぜ！その後はお楽しみの宴会だぜ！」

「？宴会？そんなものがあつたの？」

「あれ？アリスは知らなかったっけ？」

「ええ、知らないわ」

「宴会っていうのはな、異変を解決した後に関われるやつのことだぜ！酒飲み放題なんだぜ！しかも！その時には、いつも葵の歌が聞けるんだ！」

「ちよつ!!？それを言わないで！」

そう、宴会の時にはいつも歌わされます。まあ、嫌ではないのですが、恥ずかしいんですよ。私は、目立つことには慣れていないのでへえ、そう。それはいつも何処でやってるの？」

「アリス！興味を持たないでよ!!？」

「博麗神社だぜ！」

「魔理沙！」

あ、もう、私抜きでドンドンと話が進んで行ってます・・・

「まあ、そういうことだから！じゃあな！」

「ええ、貴方達も、異変解決、頑張つて頂戴」

私たちは、アリスと別れて、冥界への入り口を見つけた為、そこに入つて行つた

## 第二十五話

（裏side）

私達は、長い階段を飛んで進んでいます。アレは流石に登る事は無理ですからね（汗）

そして、その途中

「♪♪♪」

「ん？何の音かしら？」

「演奏じゃないかな？」

「ちよつと、行ってみようぜ！」

そして、音がなっている方へ来てみると、そこには、楽しそうに音楽を奏でている三人組がいました。あの子達、どうやら姉妹の様ですね

「クスクス、綺麗な演奏ね」

「はい、そうですね、レティシア様」

「そうだな、聞き惚れる程綺麗だぜ」

「葵、あんた、あの中へ入って歌ってきなさい」

「嫌だよ!?宴会で歌わされるんだからそれでいいでしょ！」

「いや、あれだけじゃな・・・恥ずかしがって、いつも一曲しか歌わないじゃないか」

「うっ!!？」

「はあ、どうするんだ？」

「・・・お、お願いだから、宴会の時だけにして下さい」

私は、本気で頼みました。すると、その本気が伝わったのか、しようがないわねと言って諦めてくれました

そして、その後、その三姉妹が此方に気付き、演奏はどうだった？と聞いてきたので、上手だった。とと綺麗で聞き惚れたと返したら、嬉しそうにしていたので、挨拶をして先に進みました

そして、ついに階段の終点が見えるところに、白髪の髪をショートにして、緑のベストにスカート、白のブラウスを着ている、人にしては白すぎる顔をした女の子がいました

「貴方達、冥界に何の様ですか？ここは、生きている人が来るべき場所ではありませんよ？」

「・・・言いながら、私とレティシアは時々、紫に連れてきてもらっているがな」

「！鬼灯様！それに、レティシア様まで！どうしてここに！」

「クスクス、鬼灯達の場合は長い冬の終わらせる為よ」

「・・・それって、言い方変えればあんたは違う目的があるみたいな言い方だけど、あんたは何の目的で異変解決に来たわけ？」

霊夢がレティシアさんの発言にまた強い警戒心を持ちながら質問しました。でも、確かに、裏を返せばそうなりますね。レティシアさん達は、どの様な理由で・・・あれ？

「霊夢、この場合、レティシアさんだけじゃなくて咲夜さんもじゃあ・・・」

「そのメイドは私達と同じ理由よ。飛んでる途中で聞いたわ」

ああ、道理で飛んでる途中、話しているなど思ったら、その事だったのですか

「で？あんたはどういう理由なわけ？」

「クスクス、鬼灯ならこの名前を聞けば意味が分かるでしょうね」  
「??」

「・・・西行妖」

「な!？」

「「「「??」」」」

「・・・まさか、幽々子のやつ・・・あいつ！なんて馬鹿な事を!!？」  
「クスクス、そういうことよ。ということ、貴方には早々にそこをどいてもらいたいところなのだけれど・・・無理よね？」

「はい、私は幽々子様から侵入者を追い出せと命じられました。ですから、先には行かせません!!？」

そう言う、その人は刀を抜き、此方にその切っ先を向けてきました  
た

「・・・全員、先に行け。こいつは私が相手をする」

そう言う、鬼灯は変化をして、大人の間人（勿論、狐耳と九本の

尻尾はでています) になっていた

「クスクス、分かったわ。任せたわよ、鬼灯」

「気を付けてね、鬼灯」

「大丈夫だ。能力しか使うつもりはない」

「そっか！分かったよ!!?それじゃあ、先に行くね!」

私達は、あの剣士さんを鬼灯に任せて、先を急ぎました

↳ 鬼灯side↳

「相手は鬼灯様ですか」

「ああ、そうだ。そして、お前のような剣士に敬意を払わないようで申し訳ないのだが・・・」

「??」

私は、一枚のスペルカードを出し

「スペルカード。名刀『小狐丸』」

私は、自分の愛刀・小狐丸を出した。構えも一応、した

「妖夢、お前にハンデをつけてやる」

「・・・ハンデなんていりません」

まあ、それはそうだろうな。しかも、機嫌も悪くなっている。だがな、こうしないと、お前は私には勝てないぞ?・・・いや、今からやることの方が勝てないか

「私は、スペルカードも弾幕も使わない」

「え?」

「私が使うのは、この小狐丸と自身の能力だけだ。だが、お前はスペルカードも弾幕も使っている。自分にあるだけの力を持って私にかかってこい」

私は、妖夢に対してそう言った

妖夢、分かっているよな?お前が今まで、一度たりとも刀で私に勝てたことがないことを

「・・・本当に、それでよろしいのですか?この勝負を、その様に手抜きの勝負にしたしまった」

「手抜きか・・・まあ、そう言われても仕方ないな。だが、こうしないと」

いや、何方の方法をとつても

―妖夢、お前はズタボロに負けるぞ?―

「ツ・・・分かりました。では、魂魄　妖夢。私に切れぬモノなど・・・あんまりない!」

「それはまだ言っているんだな・・・」

私が呆れながら発言するやいなや、妖夢は抜刀し、わたしに向かって振り下ろそうとした・・・が

「・・・え? な、なぜ? 何故、動かない!？」

「・・・」

そう、妖夢はその振り下ろそうとした状態のまま止まっていた。・・・いや

私が、妖夢の止めた

「・・・妖夢、一つ、質問していいか?」

「くっ・・・!!?」

「私は、お前に、私の能力を話したことがあったか?」

「な、なんで、動けない!!?」

「私の記憶が正しければ、『自然を操る程度の能力』は教えたはずだな」

「くっ・・・!!?」

「妖夢、すまない。お前に教えていない能力があと二つある。そして、今、その能力を使っている」

「くっ・・・え?・・・!!? うわあ!!?」

状況説明をすると、妖夢は何故か、灯籠の方に投げ飛ばされた・・・大丈夫だろうか? まあ、能力の応用で灯籠を(なんとか)柔らかいクッションの様にしておいたが

「くっ・・・ほ、鬼灯様の能力?」

「ああ、私の能力の一つ。・・・ところで、妖夢。お前は『超能力』とはどんなものか知っているか?」

「超能力、ですか?・・・いえ、知りません」

妖夢は少し考えていたが、知らないとの返答が返ってきた

「超能力というのはな、外の世界では人や物を宙に浮かせたり、動かしたり、そして、相手の動きを制限したりするような能力らしい」

まあ、私もそこまで知っている知識ではないんだがな

「え？」

そして、妖夢も気がついたらしいな。そう、今言った内容の中に、一つだけ自分がその目にあっていることを

「私の能力の一つ、『超能力を扱う程度の能力』まあ、外の世界ではパイロキネシス？だったかな。まあ、炎を自身の意思でその場に出すことも可能らしいが、生憎、私は九尾。狐火ぐらいならその場に出せる。あと、テレパシーというものもあるらしい。確か、それは、相手と頭の中で会話をするのだったかな？」

「・・・なるほど、私はその能力によって貴方に動きを封じられたということですか・・・でしたら！」

そういうや否や、妖夢は弾幕を放ってきたが・・・妖夢、言ったよな？

私には、もう一つ能力が有ることを

「なっ!？」

妖夢の弾幕は、私に当たる直前で消えた。まるで最初から無かった様に

「私の最後の能力『ありとあらゆるものを無に返す・再生させる程度の能力』」

「え？無に・・・返す？」

「そう、私の持っている能力の中で一番大っ嫌いで、そして、大好きな能力だ」

そう、この能力は、私の意思次第で全てを無に返し、全てを再生させる

だから、大っ嫌いで、そして、大好きな能力

「・・・さて、もう終わりにしようか」

結局、私は向きを変える時以外はこの場所を動いていなかったな・・・

そう思いながら、桜並木の桜の枝を操り、妖夢を拘束した

「しまった!？」

「さて、妖夢、答えてもらおうか。どうして、こんな事をした？西行妖



を満開にさせたらどうなるか、知らないのか？」

「・・・」

あ、妖夢のやつ、どうやら知らないらしいな。幽々子の奴、妖夢に  
どう言って協力させたんだ、全く・・・(汗)

「いいか？西行妖を満開にすると、西行妖は復活してしまい・・・生き  
とし生けるものは全て死に絶える事になるんだぞ」

「えっ！」

「お前は知らずにはいえその協力をしていた。覚悟はしておいた方  
がいいかもな」

「・・・あの」

「??」

妖夢は私に顔を向ける。その顔は真剣な表情だった

「・・・」

「幽々子様には、罰を与えないで下さい!!？私が、その全ての罪を請け  
負いますから！どうか・・・」

パンツ！

「・・・え？」

「・・・」

思わず平手打ちをしてしまった。それでも思う。馬鹿か？こいつ  
は

「・・・私がお前達への罰を決める訳ではないとはいえ、その罰が酷い  
ものだったらどうするつもりだ？お前が全ての罪を請け負う？馬鹿  
を言うなよ、小娘！」

「ひっ！」

この時の事を後から妖夢に聞いたら、般若の様に見えたらしい・・・  
まあ、今の所はよくは分からないがな

「今の霊夢が言うことではないだろうが、それが死刑判決だったとした  
らどうするつもりだった？幽々子の気持ちを考えろ。全く、幽々子の  
奴・・・ちゃんとしろ」

「・・・」

ドォーン!!？

そんな音が遠く・・・いや、西行妖の方から聞こえた事から、多分、決着がついたのだろう

まあ、闘っていたのは彼奴だろうがな

「さて、妖夢。歩けるか？」

「え？」

「多分、彼方も決着がついている。だから、行くぞ」

「・・・はい。それと、一人でも歩けます」

「そうか、なら、行くぞ」

「はい」

私達は、決着が着いたであろう西行妖の近くまで向かった

## 第二十六話

今から話すのは、鬼灯が妖夢と戦っている最中の葵達の様子である  
　　＼葵 side＼

私達は、西行妖の近くまで来た。そして、そこには、夢で見た同じ人が立っていた。ピンクの髪に青い着物の様な服。今、鬼灯に任せている人の様に、人にしては白すぎる肌

この人が、この異変主。男性だったら誰でも一目惚れしそうな人です  
すね

「ふふ、貴方達は？」

「私達は、この異変を解決しに来たのよ。さあ、さっさとこの冬を終わらせなさい！」

「そうね、私も早く終わらせたいところなのだけれど、この西行妖が満開になってくれないのよ……。だから、まだ無理ね」

「そんな！その西行妖がどれだけ危ないものか分からないんですか  
!？」

先ほどの時は、思い出せませんでした。今、ようやく思い出せました

西行妖。妖怪桜。人の精気を吸い取る妖怪とかした木。あの木はもう随分昔に封印されていると書物には書かれていた。となると、今封印を解くとどれだけの被害になるのか計り知れない！

「・・・分かってるわよ？それぐらい」

「え？」

「けれどね、私は西行妖の満開した姿を見て見たいの。だから・・・」

幽々子さんがその先を言おうとした時、氷柱が幽々子さんに向かって投げられました。が、幽々子さんはそれをアツサリと避けました

「あらあら、酷いわね。でも、それだけの殺気をだして気付かないわけではないでしょ？」

「・・・」

ルカは人の話を最後までちゃんと聞く人だ。でも、ルカがちゃんと人の話を最後まで聞かない時がある。それは・・・相手が嘘について

いた時

「・・・幽々子さん。貴方は、本当に、西行妖の満開になった姿を見たんですか?」

「ええ、そうよ? 西行妖の満開になった姿はきつと綺麗な・・・」

「嘘ですよね?」

「あら? どうしてそう言えるのかしら?」

「ルカは、つまりは、殺気を貴方に向けていた人は嘘を見破る事が可能なんです。そして、いつもは人の話を最後まで聞くのに、今回はそれを途中でやめさせる様な行動をとった。この行動をする時は、大抵、相手が嘘をついている時にする行動です。ですから、貴方は嘘をついていることになる。どうなんですか? 幽々子さん」

「・・・あらあら、厄介な能力ね」

幽々子さんはそう言っているけれど、様子からはそうは見えない

「そうよ? 私の本当の目的は、西行妖を満開にして、この木の下に眠っている人の姿を見る為よ」

「はあ!? そんな事の為だけに私達は今、命の危機になってるのか? ぶざけるな!」

魔理沙が怒るのも無理はありませんが、人には、他人を犠牲にしても会いたい人というのはいるのですよ? 私は、違いますが

「クスクス、あら? それを何処で知ったのかしら? 幽々子」

「あら? レティシア、いたの?」

「クスクス、居たわよ? 背が小さくて見えなかったのでしょうね。で? 何処でそれを知ったのかしら?」

「屋敷の中にあつた書物に書いてあつたのよ。この西行妖を封印した人がこの木の下で眠っているってね」

「・・・(確か、それって・・・)」

私の記憶(最近、マズイですが)が正しければ、その封印した人つて、幽々子さんでは?

本人が本人を掘り出そうとしているってことになりますよね? それって

・・・もしかして、記憶喪失?

死者になってしまうと記憶も無くなってしまおうのでしょうか？

・・・その辺の事情はよく知りませんが、やることは決まっています  
ます

幽々子さんがやろうとしていることを止めるだけ！

・・・て、言っても、今回は私達、活躍しないんですけどね（汗

「・・・レティシア」

「クスクス、何かしら？ 霊夢」

「分かってんでしょ？ 私の考えてることぐらい」

「クスクス、ええ、分かっているわよ？ でも、言わなきゃやらないわよ？」

「・・・レティシア、あんたがああの亡霊の相手をして」

「クスクス、いや♪」

「「「「・・・え？」」」」

「えつと？ あら、どうしちやったのかしら？ レティシア。貴方、そんな風に断る人だったかしら？（汗）」

幽々子さんも焦ってますね。実際、私も焦ってます（汗

だって、私が予知夢で見たのは「クスクス、勿論いいわよ。そもそも私がやるつもりだったしね♪」と言って幽々子さんと戦うレティシアさんで、ここで断るような展開は見えていけませんので・・・（汗  
「・・・なんでよ？」

「クスクス、霊夢。それが人に物事を頼むときの礼儀かしら？ へへ」

あ、これ・・・

(((((絶対楽しんでる!!?))))))

「(こいつ・・・ムカつく!)・・・お、お願いします。あの亡霊と、戦つてく・・・」

「(ニコニコ)」

「・・・下さい」

「クスクス、ええ、了解。任せられたわ♪」

ああ、すごいホクホクとした笑顔ですね

霊夢、ドンマイです・・・（汗

く幽々子 side く

あらま、あの博麗の巫女、レティシアに遊ばれてるわね、可哀想

に・・・

まあ、今は関係ないわ

私は、私の目的を完遂させる。それだけよ

「さて、レティシア。久々に勝負と行きましようか♪」

「クスクス、そうね。そうしましよう♪」

レティシアは今もクスクスと笑いながら私と向かい合っている

・・・余裕そうね

私はそう思っていたら・・・

「クスクス、何処を向いているのかしら?」

「え?」

いつの間にか私の後ろにレティシアはいた

「くっ!!?」

私はレティシアを自分のそばから離そうと弾幕を放とうとしたけれど・・・

「え!?!なんで出ないの!?!」

弾幕が出てこない

「クスクス、私が貴方の攻撃方法を全て封じたからよ」

レティシアは、また、いつの間にか元の位置に戻っていたけれど、その顔は一段と余裕そうに感じれた

・・・まあ、私がそう感じているだけで、彼女が本当にあの姿での本気をだしていないのかは定かではないのだけれどね

「クスクス、因みに、能力も封じさせてもらったわ♪これで後ろの子達が死ぬ可能性も無くなったわけね♪」

「・・・レティシア、貴方、本当に用心深いわね」

このレティシアがやった事を私が整理するのは可笑しいけれど、つまりはこういうこと

私がいっつの間にかしていたであろう瞬き(あるいは能力を作って消えたことを認識させない様にしたか)をした瞬間に闇に溶けて消え、そのあと、私の後ろに姿を再び表し、新たに能力を四つ作り、私の動きを封じたってことね

この時の事を後でレティシアに聞いたら、能力に名前を付けるなら

『能力を渡す程度の能力』と『自身の能力を封じる程度の能力』と『弾幕が使えなくなる程度の能力』と『空を飛べなくなる程度の能力』らしい

「クスクス、まあ、そういうことよ。けど、スペルカードは使える様に設定してあげたから安心しなさい♪」

「・・・貴方、変なところで気遣いができるのね」

「クスクス、褒めてもらって光栄よ♪」

「それじゃあ、遠慮無く使わせてもらおうわ！亡郷『亡我郷―さまよえる魂―』!!?」

私が弾幕（本当に放てた）を放つ・・・が、レティシアはよけようともせずに、スペル宣言をした

「風符『風の防壁』」

すると、レティシアの前に風がその場を固まる様にして壁となっていた

「・・・貴方ねえ（汗）」

「クスクス、こんな事した自分を恨みなさい♪自然『大地の異変』」

すると、レティシアが私へと放った大量の弾幕はばら撒かれて放たれていた。しかも、結構早くて、なんというか、重そう？これだけだったら、まあ、頑張れば避けれたと思うけれど、大地まで揺れているとねえ

まあ、レティシアがまた別の能力でも作ったのでしょいうね

そのせいで、私以外の全員は空を飛んでいる。・・・レティシア、貴方、最初からこうするつもりだったでしょう

結局、私は負けてしまった。それはそうでしょう？地面を走って避けなきゃいけないのよ？私の服じゃあ走りにくいわ

そして、この異変は終わってしまったわ。残念

　　＼葵 side 　　

「「「「・・・」」」」

「クスクス、はい、終わり♪」

私達は、なんとというか、その、不条理を見た様な気分になっていました

だって、酷いでもん。相手に同情しますよ、あれ見たら

相手は飛べなくされているのに地面を揺らされるは、それを見ていたレティシアさんの顔はすごくニコニコとして、ホクホク顔ですし……

幽々子さん、可哀想に。同情します

「幽々子様！今の地震は何事ですか!?!…って、幽々子様！」

「……レティシア」

「クスクス、いいでしょう?終わったのだから♪」

「……」

鬼灯は、私達……いえ、私達の二人を見ていましたので私もそちらに顔を向けてみると

「な、なあ、咲夜。あ、アレがレティシアの力なのか? (ガクガク)」

「え、ええ、そ、そうよ。あ、相手の様子を楽しみながらやるのがレ、レティシア様なのよ (ガクガク)」

……震えていました。まあ、今でもすごく顔がニコニコとしていますからね、アレは逆に怖いです

「……あいつ、Sね」

「……そうだね (そうだな)」

霊夢と同意見の私とルカでした



## 第二十七話

〜葵side〜

「・・・はあ」

私達は、今回の異変を解決し、宴会を開いています

私以外の全員は、この宴会にはしゃいでいますが、私の気分は落ちています

だって、宴会を開かれると必ずと言っていいほど・・・

「葵〜！早く歌ってよ！もう待ちくたびれたわ!!？」

「早くしろよ！葵！」

・・・この様に、歌を聴きたがりますから

私、目立つ事には慣れていないのに・・・

「葵、早く皆の期待に応えてやれ」

「無理」

「・・・はあ」

即答しましたよ。ええ

「クスクス、あら？いいのかしら？葵さん」

「？レテイシアさん？」

今、私の目の前にすぐニコニコした顔のレテイシアさんがいます。ってこの顔は・・・

(あ、まずい)

「クスクス、貴方がもし歌わなかったら貴方のこと顔の写真、ばら撒いてもいいのよ？(ニコニコ)」

私は、その写真を見て・・・絶句しました

「え？こ、コレいつ撮ったんですか？あの時、レテイシアさん、いませんでしたよね？(汗)」

「クスクス、さあ？何時かしらねえ〜♪」

この人、本当にどうやって撮ったんですか!?あの時、すぐに周りを見渡しましたが誰もいませんでしたよ！え？どうやって!?

「クスクス、さて？どうする？葵。歌を歌うか、この写真をばら撒かれるか・・・どちらかしら♪」

こ、この人・・・

((本当にドSだ!!?))

\*\*\*

「え、えっと・・・(汗)」

あの後、結局歌うことを選びました。誰でもあるでしょう？恥ずかしい時の写真が!!?

「な、何を歌えば・・・(汗)」

「そんなの、あんたが得意としてるあの歌でお願いしますわ！雰囲気的にもあっているでしょ?」

それもそうですね。これだけ桜が咲いていますし、雰囲気的にもあってますね

「それでは！歌わせて頂きます!」

でも、ヤケクソですがね(汗)

レテイシア side

「クスクス、本当にいい歌声ね」

私は、あの神無月神社の巫女、葵の歌を聴いている  
聴き惚れるわね、この歌声は

とても優しく、綺麗で・・・そして切なく、儂くて  
命を思わせるわね

「あらあら、また一人で飲んでるのね。そんなに一人が好きなのかしら?」

その声が聞こえたと同時に、スキマが開き、紫と藍が出てきた

「クスクス、むしろ、この場に留まっているのだからいいでしょ?紫」

「ふふ、そうね。藍、貴方も楽しんで来てもいいわよ?」

「分かりました。でしたら、鬼灯様と話をしてきます」

そういうと、藍は鬼灯の元へと向かって行った

「ふふ、で、どう?葵の歌は。貴方達は初めて聴いたでしょう?」

そう、私達、紅魔館組と白玉楼組は今回が初めて

レミリアが起こした紅霧異変の時の宴会では、歌われなかった

まあ、あの子が倒れたのもあって様子見だったのでしょうけどね

「それで?感想はどうかしら?レテイシア」

「クスクス、綺麗な歌声ね。聴き惚れるわ♪」

「ふふ、そうね。私も何回か聴いているけれど、何度聴いても飽きないのよね」

「クスクス、そうなの？何回も聴いているなんて羨ましいわね♪」

私達はそんなふうには談笑しながらお酒を飲んで、歌を聴いていた

他の歌を聴いている人達の様子を見てみると、皆、聞き惚れていてお酒を飲むのも忘れていて

勿体ないわよ？お酒が

まあ、それほどまでに綺麗だったってことよ

「・・・あら？クスクス」

ふと気付くと、私のお酒に桜の花弁が乗っていた

「クスクス、春の一つの風物詩ね♪そう思わない？幽々子」

私は、隣に来ていた幽々子にそう尋ねた

「ん？そうね」

・・・まあ、幽々子は団子を頬張っていたのだけれどね

アレよね？花より団子状態ね。まあ、幽々子らしいけど♪

さて、今度の異変は大丈夫かしらね？

「あまりやり過ぎないですよ？小さな鬼さん（ボソツ）」

私は、今度、異変を起こす異変主に向かって小さな声でそう忠告をしました

## ルカの日常1 第二十八話

（ルカside）

私は、今だ寝ている。朝が弱いからだけれど、それを叩き起こす奴がいる

「起きて！ルカ！朝だから、起きて！」

・・・一度くらい、ちゃんと寝たい

「・・・分かった。起きる」

「うん！分かった！じゃあ、先に行くね！ちゃんと顔を洗ってくるんだよ？」

何時もの朝の会話をしてから葵は出て行った。・・・時々思うのだが、彼奴の中の母性本能は高いと思う。言うことが母親だ

まあ、私が子供だとすると、彼方からすれば手のかかる子供だろうな

\*\*\*

私は、アレからちゃんと起きて、顔を洗い、三人分の食事を一人で持って行こうとする葵の手伝いをして、朝食を食べる為に食卓についたが、運んでいる途中で気が付いたことがある。それは、葵の巫女服が結構、ボロボロだったことだ

霊夢と違い、葵は補助の為、汚れ事はあってもボロボロになることは少ない・・・訳でも無いか

まあ、兎に角、ボロボロなのだ

「葵、巫女服がボロボロだが・・・」

「ん？ああ、コレ？まあ、長年使ってたらいつかはボロボロになっちゃうだろうなとは思っていたんだけど、どうしようか？」

「いや、どうしようかじゃなく、霖之助に頼めばいいだけだろ」

「ま、まあ、そうだけど・・・／＼／＼」

・・・今ので気付いた方もいるだろうが、今はまだ、その時じゃないので抑えてくれ

とにかく、だ

「今日行くぞ。香霖堂へ」

「う、うん」

こうして、私達は香霖堂へと行くことにした

\*\*\*

魔法の森は、人里から距離がある為、行く時はいつも飛んでいる。まあ、何時もならるときどき、魔理沙を見かける程度なのだが、今日は違った

「んー？葵なのかー？」

「ルーミア！そうだよ、葵だよ！」

ルーミアと会った。こんなところで会うなんて、本当に珍しい

「何処に行くのだー？」

「香霖堂だよ！ルーミアも行く？」

「おい、ルーミアを連れて行ってどうする。彼処にはルーミアにとって面白いものは無いと思うが？」

「まあ、そうだけど、人数が多いので方が楽しいし！ね？」

「考え方が遠足に行く子供だ」

「うっ！！？」

「私も行くのだー」

「本当？うん！一緒に行こう！ゝゝゝ」

こうして、ルーミアも一緒に香霖堂へと飛んで、着いた

「霖之助さん！入りますね？」

「いや、ココは店だろ。その他人の家に行く様な挨拶はいらないだろ」

「え？でも、此処って霖之助さんの家でもあるんだよね？」

「・・・まあ、否定はしない」

確かに、そう考えると葵のやり方はあっているのか？・・・よく分からんな

「い、いらっしやい！！？」

私がそんな風に考えていると、顔が赤い森近霖之助が出てきた

・・・皆、抑えろよ？いいな？

まだ説明時ではないんだ、分かったな？

「それで?どうしたんだい?」

なんとか平常運転をしている霖之助は、そう尋ねてきた。まあ、なんとなくは分かっているんだろうが、間違っていたら不味いからだろう。流石、店主。店の鏡だな

「私の巫女服がボロボロになっちゃったので、新しいのを取りに・・・」

「ああ、やっぱりか。いいよ、入って。多分、もうそろそろ、ボロボロになるだろうとおもって新しいのを作って置いたから。待ってて、今、取ってくるから」

そういって、霖之助は私達を店へと招き入れ、奥へと入って行った。というか、ボロボロになることが分かるって、お前は葵同様未来でも見えるのか?それとも葵への愛情か?・・・いや、この場合は後者だろう。というか、そう信じたい

「ん?・・・コレは」

「うん?どうしたの?鬼灯」

「いや、コレは綺麗だなと思っただけ」

鬼灯が前足で指しているのは、扇子だ。その模様は桜の花弁が描かれていた

「それと、この扇子も」

次に指したのは、蛍がと奥で船を漕いでいる人が描かれていた

「二つ共買う?」

「いや、だがな・・・」

「葵、何方かはお前が貰ってやればいい。それならいいだろう?鬼灯」

私は、鬼灯に助け舟を出してやった。というか、この辺は流石、神。余り、自分の欲の為には動かない。・・・いや、実際は動いているか。二つ買える可能性が出てきたことで、顔は変わってないが尻尾が振られている。嬉しいんだな、鬼灯

それに、葵も気付いたようで・・・

「ふふ、鬼灯、本当は欲しいんですよ?いいよ、買ってあげるから」  
「え?いい、いや、だが」

「一つは私の分として買うから、いいですよ?それに、コレは何時もの

お礼として鬼灯にあげるの。いいでしょ？鬼灯」

「・・・お礼は此方がしないといけないのにな」

「?なんで?」

「いや、まあ、いい。では、すまないが頼む」

「ふふ、了解」

「話は決まったかい?」

買うことが決まった瞬間に、霖之助が話に入ってきた。・・・まあ、葵の買ってあげるから宣言の時からいたんだがな

「はい。コレと・・・ルーミアはどうする?欲しいのある?」

「ないのだー」

「分かった。じゃあ、この扇子二つを下さい、」

「あ、ああ」

そうして、扇子を取ったが、その時に二人の手が当たったらしい。二人して顔が赤い

・・・ラブコメか?

「あ、えつと・・・兎に角、お金ですね」

「あ、うん、それと、ハイ。君の巫女服」

「ありがとうございます。霖之助さん」

そうして、何とか二人は平常運転に戻って、店主と客の関係に戻った

・・・が

「あ、そ、それと、葵」

「!!?は、はい!」

「そこで上がるな、落ち着け」

「う、うう・・・／＼／＼」

「あ、えつと?」

・・・もういいかな?まあ、今まで見てきた通り、この二人は好きになっっているのだが、問題がある。その問題の比率をみると、霖之助が二割、葵が八割ぐらいかな

まあ、その二割が、今、発揮された訳だがな

霖之助は、鈍感なんだ。だから、葵が赤い理由が分からない。まあ、

分かっていても、自分の中で否定している可能性も無きにしも非ずだが、その辺は私にも分からない

「それで？霖之助。何かあるんじゃないのか？」

話が進まないから、仕方なく私が助け舟を出した。コレで二回目だ

「あ、ああ。あ、あの、葵。コレを受け取ってくれないかな？」

「？コレは？」

霖之助から小さな箱を渡された

「開けて見てくれないかな？」

葵は、そう言われた為か、その箱を開けると、中には、淡いピンク色のリボンが入っていた

・・・白か黄色の方が良かったんじゃないか？

・・・この考えは、空気を読めてないから無しにしておこう

それで、受け取った葵の顔は、赤くなっていたが、嬉しそうだった

「え？いい、いいんですか？貰って」

「あ、ああ」

「あ、ありがとうございます^^」

「!!？ど、どういたしまして／＼」

・・・最後までラブコメの二人だったな

\*\*\*

その日の夜。私は、葵が必ずいるであろう、裏庭の方の縁側（この前、葵と幸多が雪だるまを作っていたところだ）に向かっていた

あんな事がある日は必ず、いる。何時もの事だからな

私がそんな事を考えながら歩き、縁側まで着いた。葵はやっぱり、いた

邪魔な光も無い、綺麗な夜空に浮かぶ月を見ながら考え事をしていく。コレも何時もの事だ

そして、考えてる内容もな

私は、葵の隣に座った

「・・・ルカ」

「なんだ？葵」

「・・・コレ、霖之助さんから貰ったけど、どうしようか？」



「どうしようかって、着ければいいだろ？」

まあ、こう言っても、帰ってくるのは同じ言葉で

「無理だよ。霖之助さんを諦められなくなっちゃう」

「・・・そんなに好きなら、付き合えばいい」

「それも無理だよ。・・・霖之助さんは、優しいし、私の事も好きでいてくれるけれど、ダメだよ」

・・・そう、この様に、葵は本当は鋭い。だから、葵は霖之助が自分の事をどう思っているのかを知っている。・・・知っていて、こう話している

「・・・」

「ルカも知ってるでしょ？人里の人からの私の扱い。霖之助さんと付き合うってことは、その扱いが、霖之助さんにも行くってことでしょ？・・・私は、そんなの嫌だから」

「・・・好きな人だから、傷付いて欲しく無いってことだろ？」

「・・・うん」

「・・・それは、霖之助にも言えることだが？」

「うん、それも分かってる。だから、コレはただの自分勝手な自己満足。分かってるよ、それぐらい」

「・・・」

・・・葵は、本当の意味での『恋愛』を分かっている様で分かっていない気がする

好きな人と苦難を乗り越える。それが恋だと私は思っている。だが、葵は優しい子だ。自分だけなら兎も角、好きな相手にまで、苦難を・・・傷付く様なことになって欲しくない。それが、葵の考え。葵の自分勝手に自己満足な考え

「・・・だが、そのリボンくらいは着けてやれよ？」

「・・・大切には保管しておくよ」

「はあ」

もう、溜息しか出てこない

「それじゃあ、私は先に寝る。葵はどうする？」

「私はもうちよつと、こうしておく」

「分かった。じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

私は、そのまま自分の部屋へと戻り、布団に入った

葵がああ考えのままじゃ、ああ二人の恋愛は止まったままだろう。

私は、それは嫌だ

葵には幸せになって貰いたい。私はそう願っているのに……

……今は、何をすればいいのかわからないな、本当……

「……どうすればいいんだ？」

私は、そんな風に眩き、そのまま寝てしまった

その眩きは、夜の闇に消えてしまったがな

## 第二十九話

（ルカside）

翌日、私は、また香霖堂へと向かっていた。一人で

霖之助の気持ちは大体分かっているが、直接、本人から聞いたわけではない。だから、確信を持つ為に向かっている

（墓から告白するつもりは無いのは明白だ。だったら、霖之助からやらせればいい）

私は、そんなどうやって霖之助から告白させるかを考えながら向かった

\*\*\*

「入るぞ？霖之助」

「！・・・そう、いいながらも既に入ってるじゃないか（汗）」

私が入ると、霖之助は少し焦っていたが、直ぐに平常運転で店主に戻った。・・・いや、何故焦った？声で分からないのか？

私はそんな疑問を抱えていたが、周りを見渡せば直ぐに分かった

霖之助が何かを作っていたからだ

「・・・めずらしい」

「え？」

「いや、お前が奥で作らず此処で何かを作っているなんて、めずらしいと思っただけ」

「いや、流石に店を開いているときに、物作りで集中してしまって、お客を待たせる様なことになりたくないしね」

「なるほど」

「それで？今日は何の用かな？」

霖之助は店主のまままで話しかけてきたが、悪いが私は今日、客として来たわけじゃないからな？

「霖之助」

「ん？なんだい？」

「お前と少し話がしたい。いいか？」

「??」

\*\*\*

私は、それから店にある椅子に座ってお茶を飲んでいる。．．．こ  
う言ってはなんだが、葵が出してくれるお茶の方が美味しい  
「で？話つてのはなんだい？」

霖之助は、そう言うとお茶を飲んだ

「霖之助は、葵の事をどう思っているんだ？」

「ぶっ!!？」

「うわ！汚い!!？」

霖之助は、お茶を噴いた。本当に汚いな

「し、仕方ないだろう!?驚いたんだから!!？」

「いや、だってな．．．」

まあ、驚いて噴くっていうのは普通か。．．．普通だよな？

「コホンツ！それで、なんで急にそれを？」

「いや、霖之助の態度は分かりやすいが、確信が欲しいんだ」

「確信、ね」

「ああ」

「．．．僕は「香霖！来たぜ！（パンツ）」魔理沙、また君は．．．」

私が、今、聞けると思つた所でこの登場か．．．ゆるさん

「イヤー、やっぱりここの品揃えはすごい．．．って、うお!?危な!?何  
すんだ!．．．って、ルカ?なんだ、お前か．．．て、なんで怒つて  
るんだ?」

「当たり前だ。今から霖之助と大事な話があつたのに、邪魔をされた  
からだ」

「大事な話?なんだ?それ!面白そうだな!私にも聞かせろ!!？」

．．．まあ、魔理沙ならいいか。こいつ、確か『恋の魔法使い』だつ  
たし

でも、この性格で『恋の魔法使い』と言われてもな．．．

まあ、気にしないでおこうか

「実はな．．．」

私は、魔理沙を連れて離れて、霖之助には聞こえない様に小声で説  
明をすることにした

少女説明中

「よし、人里に行ってくる」

「ちよつと待て、何しに行くつもりだ？」

魔理沙が出て行くこうとしたので、私は捕まえた

「なーに、ちよつと人里にマスタースパークを撃ってくるだけだぜ！」

そう言つて、此方にサムズアップしてきた

いや、だからつてダメだろ、それ。間違つたら・・・いや、間違わなくとも霊夢達と戦う事になるな。しかも、必ず紫達も出張ってくるだろう

「お前は、幻想郷の上位ランカーを相手にしたいのか？」

「・・・霊夢だけならまだしも、それは困るぜ」

魔法の研究や本を借りれなくなる、とか言っている

それで済めばいいんだがな

というか、今、何故か『借りる』という言葉が不穏だったんだが？

あと、私の能力が反応した様な気がしたが、気のせいか？

「じゃあ、どうするんだぜ？」

「何とか霖之助の方から告白させるつもりでいるが・・・されたとしても、あいつは断るだろうな」

「え？本当か？それ」

「ああ、あいつは諦めるつもりでいるらしい」

まあ、その言葉は何回も聞いてきたが、ちゃんと諦めれていることなんてなかったから大丈夫だろうとは思うんだが、私の能力も反応しなかったからな。あの言葉事態にも嘘偽りは無いということになる

「じ、じゃあ、香霖に葵の気持ち私達が伝えてやれば・・・」

「いや、それはあくまで葵や霖之助の仕事だ。私達がやるべきことじゃない」

「なんでだよ!!」

「私達は、あくまで外野。恋愛をしている本人達でも無いのに言うなんて、タブーだろ」

まあ、最終的にはするかもだがな

「そ、そうか・・・じゃあ、本当にどうするんだぜ？」

「・・・霖之助に気持ちを開くしか今の所は手立てがない」

「おいおい・・・」

と魔理沙は呆れていたが、本人もそれ以上の手立てが無い様で、賛成してくれた

「霖之助。すまない」

「話は終わったかい？」

霖之助に話が終わった事を知らせたが、本人はまた、何かを作っていた

「なあ、霖之助」

「ん？」

「ここに来た時から気になってたが、何を作ってるんだ？」

「ああ、これかい？・・・葵には言わないでくれるかな？／＼／＼」

つまりは、葵へのプレゼントか。しまったな、聞くんじゃないか

か  
・・・だが、気になるからな、仕方ない

「ああ、言わない。魔理沙もだろ？」

「ああ！勿論だぜ！」

「そうか」

そう言うと、霖之助はそれを愛おしそうに見ながら説明してくれた

「僕は、今、万華鏡を作っているんだ」

「ま、万華鏡!？」

え？いや、だって、アレって難しいんじゃないか？何と無く、そう思っているだけだが

「・・・つ、作れるのか？」

「うん、今の所は何の問題もなく作れているよ」

・・・霖之助のハイスペックな技量に、空いた口が塞がらなかった

\*\*\*

そうして数分後、私は復活して、今は気持ちを聞こうとしていた

「それで、僕の気持ちだったね？」

「ああ」

「・・・そ、その。僕は葵の事がだ、大好きだ」

・・・ダメだ。ラブコメにしか感じられない

「じゃあ、なんで告白しないんだぜ？」

「だって、断られるかもしれないじゃないか」

「お前は乙女か!？」

ついツツコミを入れてしまった私と魔理沙は悪くない

「それに・・・」

「??」

「・・・」

魔理沙は続きがあるとは思ってなかったらしく、なんだ？って顔をしましたが、私は違った。能力が反応したからだ。そして、本音も聞こえてきた

「・・・まだ、このお店を畳む様な決心がついていないんだ」

「・・・はあ!？」

これがどうもよく分からない。別に畳まなくとも、葵の神社から飛んで行けば良いことじゃないか？

「そんなの、葵の神社から行けば良いことだろ!？」

と、魔理沙が私の心中を察してくれたかの様なタイミングで言ってくれた

魔理沙、ナイスだ

「でも、無理じゃないかな？」

「はあ!?!何処がだよ!？」

「葵と結婚したとして・・・あ、ダメだ。想像したら恥ずかしい／＼／＼」

「だからお前は乙女か!？」

二度目の同じツツコミを入れた私と魔理沙は何も悪くない

「まあ、兎も角。僕は神主にならなくちゃいけないんじゃないかな？」

「・・・いや、それは」

いや、可能性はあるか

神無月の巫女は、博麗の巫女とは違って、才能があるものがやる訳ではなく、ずっと、あの家系でやって来ている。もし、霖之助と葵が付き合ったとしたら、霖之助はここを畳むしかない

「・・・だが、もう大体はついてるんだろ?？」

「・・・どうしてそう思うんだい？」

「そうだぜ？」

霖之助は兎も角（本人だからな）、魔理沙、お前は気がつけ。話してやったらろ

「全然ついていなかったとしたら、お前は葵にプレゼントなんてした  
いだろ？」

「あーそうか！」

「・・・まあ、その通り。大体は、着いてある。だけど、断られるのが  
怖いんだ」

「・・・」

「そんなもん！当たって砕けろ・・・むぐっ！」

私は魔理沙を黙らせることにした

「??」

「魔理沙、さっき言ったよな？あいつは今は諦めるつもりでいるって。  
今ここで告白させてみる。見事に撃墜されるだけだぞ」

私は、魔理沙にだけ聞こえるぐらいの声でそう言っただけだぞ

「・・・(コクコク)」

どうやら理解してくれたようで、頷いてくれた

「あ、えっと？」

「ああ、いや、気にするな」

「あ、ああ、そう？」

「ああ、これで私が聞きたいことは終わりだ。じゃあな」

「ああ、じゃあね」

そう言っただけ、霖之助は手を振ってくれていたんで、私も振りかえし  
た

魔理沙はあの場に留まったようだな。余計なことを言わなければ  
いいが・・・

兎も角、一番の問題は、葵と人里の奴らだろうな。コレを解決しな  
い限りは、あの二人が結ばれる事はないな

「さて、どうしたものか・・・」

私も、人里の奴らは嫌いだ（幸多などの一部は除外されるが）。だか



ら、私が人里に降りて、あいつらと対話ということも出来ない  
さて、どうしたものかな？

## 第三十話

（ルカ side）

私と葵、そして鬼灯は妖怪の山に向かっている

理由は、葵が予知夢を見たからだ

その予知夢の内容はこうだ

私達と同じくらいの背の女の子三人組が幻想入りをしてしまい、その内の一人が妖怪の山で妖怪に食べられそうになるが、何故だか妖怪の方が倒される。が、帰る方法が分からず、空を飛んで人里に行くという内容だ

私も鬼灯も女の子一人だけでどうやって倒したんだと言いたくなつたが、まあ、攻撃方法があつたのだろう。空を飛べるのも気になる所だがな

そんな風に考えていると妖怪の山に着いていた

今は、葵が予知夢でみた場所を搜索中だ

「あー此処だ！あつたよー！」

どうやら、あつたらしい。良かった

私達は、葵が見つけた場所から辺りを見渡してみたが、今の所は誰もいなかつた。予知夢で見た妖怪すらもだ

「まだみたいだね。良かった。間に合つたってことだね」

葵はホツとしているが、どうだろう？

私がそういう心配をしていると、葵が心でも読んだかのようなタイミングで

「でも、油断しちゃダメだね。未来っていうのは少しの要因でも変わっちゃうものだから」

そう言葉にした

私達は、しばらくそこに留まっていると、見慣れない一人の女の子がやって来た

「あ、あの〜」

話しかけてきたのは、茶髪の長い髪をフランのようにサイドテールにしている女の子だった

「??? side」

私達は、久々に貰った休日で里帰りをして休みを満喫していたのに、いつの間にか変な所に入っちゃった。フェイトちゃん、はやてちゃん。二人とも、大丈夫かな？

私は、今この場にいない、友達の二人が心配だ  
そもそも、どうしてこうなったっけ？

確か、小旅行って名目でちよつとした肝試し(でも明るい時間に?)をやることになって、博麗神社って所に来たけど、鳥居に入ったらいつの間にか山の中。フェイトちゃん達ともはぐれちゃったし、どうしよう

私は、これからどうするべきか考えていると、前方に空色の長い髪をポニーテールにした女性(あの姿は巫女さんかな?)と、金髪の長髪のフェイトちゃんと同じ髪型をしている女性と何故か尻尾が九本ある狐さん(綺麗だな)がいました

もしかしたら、この辺に住んでいる人かも！

そう期待を込めて、私はその人達に話しかけました

「あ、あの〜」

すると、その声が聞こえたようで、二人と狐さんは此方に顔を向けてくれました

「あの〜、此処は何処でしょうか？」

「ルカ side」

(成る程、こいつか・・・)

普通に見ればただの女の子だが、この女の子が首に掛けている宝石の様なものからは普通の宝石とは違ったものが感じられる

「あの〜、此処は何処でしょうか？」

相手がそう話しかけてきた

・・・私は、普通の人間(違うんだろうが)と話すのは嫌だ  
随分前に、人間から酷い事をされて以来、そうだった

「こんにちは。初めましてですね。私は神無月葵といいます。よろしくお願ひします」

葵は、初対面の相手に行儀よく挨拶をした

「あ！すいません！初めまして！私、高町なのはつていいいます。よろしく願います」

すると、相手も挨拶を返してきた。・・・これは、私達もやらなければならぬ空気になってきたな

・・・仕方ない

「初めましてだな。霜月ルカ。よろしく」

「同じく初めましてだな。孤天鬼灯だ。よろしく」

「はい！よろしく願います」

私達の自己紹介が終わると、タイミング良く妖怪のが現れた。：狙ったわけじゃないよな？

「え？き、きやあー！」

まあ、相手はそんなもの見たことがないらしい。まあ、当然かそして、その妖怪は迷わずに、その女の子に向かっていこうとしたが、そんな事させるわけがないだろ？

「結界『二重結界』!!?」

葵は、なのはの目の前に立ち、結界を張って守った

「大丈夫だった？」

「は、はい。大丈夫です」

そして、私は、何の躊躇も無く、妖怪を大量の氷柱で串刺しにした  
「・・・え？」

まあ、流石に妖怪はそう簡単に絶命しない。今だに食べる意志が消えていない

だから、私は自分の妖力を全部解放した

「・・・!!?」

相手は、ただそれだけで怯み、私は、妖怪の顔を氷柱で貫いた  
それによって、妖怪は絶命した

・・・女の子の方については、ちよつと放心状態だ

まあ、当たり前か

人間でないとはいえ、相手が生きてると認識してしまえば、優しい性格の外の人間から来た奴ならコレは仕方ないかもな

だが、此処でやらなければ、この人間は死んでいた可能性がある

まあ、予知夢では死んでいなかったから大丈夫だろうがな

「・・・大丈夫？なのはさん」

「・・・あ、えっと、はい。大丈夫、です」

「顔が青いから、大丈夫じゃないね、うん」

そう言ってる葵も、死なない為には殺すしか無かったなんて、言い  
たく無いのだろう

だから、私が言う。こういう役が慣れてる私が

「・・・お前、あの時、ああしてなかったら死んでたんだぞ？それでも、  
まだそんな風な顔をするのか？」

「で、でも！今の生き物だって生きてました・・・。なのに、あんな・・・」  
「言ったろ？ああする他、生きる術はない。ここはそういう風にする  
ことで成り立っている様なものだ。諦めろ」

「・・・」

「・・・なのはさん」

「・・・すみません。もう、大丈夫です」

・・・少し、嘘をついているな。やせ我慢の様なものか

だが、少し無理をして貰ってでも此処から出なければ、また襲われ  
る可能性があるからな。仕方ない

「とにかく、この山から出るか。鬼灯。その子に乗せろ」

「命令しなくともそうするつもりだ」

鬼灯は人に乗せやすい態勢をとった

私は、なのはを呼ぼうとしたが、そうしなくても良くなった

葵が連れて来てくれていた

だから、なのはは鬼灯に乗せて、私達は空を飛んだ

・・・まあ、なのはが何かに驚いていることが気になったがな

くなのは side

私が鬼灯さんに乗せてもらう少し前、私は、ルカさんと此処の事を  
考えていた

さつきまで生きていたのに、何の躊躇もなく殺していたルカさん

あの時の目はとても冷たい様に見えた

そして、此処は、そうすることで成り立っている様なものだとも教

えられた

此処は、お話をして、相手に分かってもらおうとしないの？

「・・・さん」

なんで？どうして？どうしてそんな簡単に殺せるの？・・・私じゃあ、分からないよ

「なのはさん！」

「は！あ、えっと、すみません。葵さん。それで、何でしょう？」

「・・・今さっきのルカを見て、どう思いました？」

「・・・」

私は、何も言えなかった。葵さんにこの印象を言ったら、友達の間を言われた様な気分になるはずだから

「・・・なのはさん。誤解はしないであげて下さい」

「・・・え？」

「ルカは、何時も汚れ役を買って出てくれるんです。私や鬼灯では出来ません。さつきだって、ルカが言った事実をあの状態のなのはさんに言うことが出来ませんでしたから」

葵さんは、少し、悲しそうな顔をしていた

「何時も何時も、人のことばかりで自分は汚れ役ばかりを買って出て傷付いて・・・。ルカは、本当は優しい子なんです。なのはさんにとっては衝撃の事実を言ったのがルカなら、妖怪を・・・あの化け物をもう襲わせない様にしたのもルカです」

「・・・あ」

そう、確かに、結果は私にとっては受け止めきれないものだったけれど、確かに、考えれば、ルカさんは私を助けてくれたも同然だ

それなのに、私は・・・

(ルカさんを責めてばかりで、私・・・)

「・・・なのはさん。お願いしますから、自分を責めないで下さいね」  
「え？」

葵さんは、私の心を読んだのか、そう言ってきた

「ルカは、なのはさん。貴女が貴女自身を責めることを望んでいません。ですから、お願いします。自分を責めないで下さい」

・・・お願い、されちやったな

そうだね、ルカさんは、きつと、そんな事、望んでないよね？なら・・・

「分かりました」

「・・・それでいいです、」

葵さんは、微笑み返してくれました

「それでは、行きましようか。鬼灯が乗せてくれるみたいですから」

私も、葵さんが見ている方を見てみると、ルカさんと少し言い合いながらも人を乗せやすい態勢になっている鬼灯さんがいた

「それじゃあ、行きましよう。一応、私達の家でいいのかな？」

「その方がいいだろう。まだ他の奴が幻想入りしている今、そうした方がいいだろう」

「うん、そうだね。そうしようか」

葵さん達が話し合った結果、葵さん達が住んでいる所になったみたい

い こうして、私は鬼灯さんに乗せて貰って、葵さん達が住んでいる家に行くことになった

・・・けど、葵さん達はデバイスも持ってないし、バリアジャケットも着ていないのに、どうやって飛んだり、プロテクションを張ったり、どうやったのかな？

## 第三十一話

くルカ side

私達は、それから神社に戻ってきた

「此処が、葵さん達の家ですか？神社ですよね？ここ」

「はい。私は此処、神無月神社で巫女をしています」

「あ、やっぱりそれ、巫女服だったんですね」

「はい^^」

「兎に角、入るぞ。これから話し合わないといけないんだからな」

「話し合い、ですか？」

「ああ」

そう、私達はなのはに此処のことを説明して、これからどうするかを決めなくてはならない

「あ、待って」

「どうした？葵」

「もうすぐ、幸多君が人を連れてくるから」

「・・・人？」

多分、今の私の顔は思いっきり嫌そうな顔をしていると思う

現に、葵は苦笑しているからな

「違うよ、連れてくるのは人里の人じゃないから」

「・・・ということとは、幻想入りをした一人か」

「良かったな、なのは。友達にもう会えるぞ」

「・・・え？」

なのはの顔は驚きの顔だった

まあ、当然か。こんな早く会えるとは思っていなかったのだらう。流石の私達も内心ではびつくりだ

「・・・あ！ついたよ！金髪のお姉ちゃん！あ！葵お姉ちゃん！困っている人がいたから、僕、連れて来たよ！偉いでしょ？」

「うん！幸多君、偉いね！」

葵は屈み、幸多の頭を撫でていた

「えへへ・・・／＼／＼」



「あの」

「あ、すみません！・・・幸多君。もうちよつといる？私は遊べないけど」

「ううん。僕、もう帰らないと！お母さんにお使いを任されてるから！」

「そつか！本当に幸多君は偉いね！」

すると、また葵は頭を撫でた。幸多も頭を撫でられて嬉しそうだ

「それじゃあね！お姉ちゃん達！バイバイ！！？」

「うん！バイバイ！！？」

幸多は、手を振ると、そのまま帰ってしまった。・・・本当に、人里の人間で信じられるのは幸多ぐらいだな

「・・・さて」

そして、幸多が見えなくなると、葵は金髪の女に顔を向けた

「挨拶は後ほどしますので、中に入りましょう。貴女の場合は初対面で信じられないかもしれませんが、どうか、信じて入って下さいませんか？」

「いえ、なのはが何とも無い状態を見た時点でもう信じてます。それに・・・」

「？それに？どうしました？」

「あの幸多君が『此処のお姉ちゃん達と神様は優しいんだ！』って言うてましたから」

「・・・幸多君が、そんな事を」

「そうか」

「・・・」

・・・幸多、間違ってるぞ？私は、優しくなんか無い。ただ、お前が人里の中で例外なだけなんだ

「・・・ありがとうございます。それでは、中へどうぞ」

葵は、元に戻り、なのはと金髪の女を神社の中へ案内した

\*\*\*

二人を客間に案内した私達は、幻想郷の説明をした

「此処が、そんな所だったなんて・・・」

「・・・」

二人とも、信じられないという顔をしている。・・・まあ、当然か  
外の世界では幻想となった私達の様な存在を信じろというのは無  
茶な話だ

「・・・お二人からしたら巫山戯た話に聞こえるかもしれませんが、だつ  
たら、なのはさん。貴女が見たあの生き物は外の世界にいましたか？  
フェイトさん。幸多君の服装を見て、人里の住居を見てどう思いまし  
たか？」

「・・・元の世界には、あの生き物はいなかったよ」

「・・・なんだか、昔の服装や家だなんて」

「そうですね。此処は昔のまま時間が止まっている様なものでは  
から。・・・それで、納得していただけましたか？」

「はい」

二人は、ちゃんと理解してくれた。・・・さて

「葵、私と鬼灯はもうそろそろ・・・」

「あ、うん。お願いするね。いつてらっしゃい」

「ああ、行ってくる」

私達は、もう一人の幻想入りをした女がいる紅魔館へと向かった  
くフェイトsideく

私が最初に目が覚めたのは、何処かの家だった

布団がひかれています、私はそこに寝かされている状態だった

「・・・え？（こ）はどこ？」

私は布団から体を起こし、周りを見渡したが、何処は分からなかつ  
た。この時点で、もう異世界だと分かる

（確か、私達は博麗神社って所に来て、それから・・・）

そう、鳥居を潜ったら・・・あれ？どうなったんだっけ？

「お？起きてても大丈夫なのか？」

私が、どうしてこうなったのか考えていると、人が入って来た。こ  
の家の人だろう

「あ、はい。平気です。ありがとうございます」

私は、その人の方に顔を向けると、お弁当箱の様なものがついてい

る（のってるのかな？）帽子に青が主な服装の青色がかった銀髪の女性だった

「そうか。良かったな。ここ寺子屋で勉強をしている子供が君を見つけてくれたんだぞ？」

「え？そうなんですか？」

ん？待って。今、寺子屋って言わなかった？・・・確か、寺子屋って昔で言う所の学校の名前だったよね？どうしてこの人、学校って言わずに寺子屋なんて言ったんだろう？

・・・今は、その疑問は置いておこう

「あ、あの」

「ん？なんだい？」

「その子にお礼がしたいのですが、いいでしょうか？」

「ああ、いいぞ。・・・すまない。その前に君の名前は？」

「あ、すみません。私は、フェイト・T・ハラウンといいます。よろしくお願ひします」

「そうか。私は上白沢慧音だ。よろしく」

私は、上白沢さんに自己紹介をして、そのまま、上白沢さんが連れて来てくれる私を見つけてくれた子供を待っていた。そして

「フェイト。入るぞ？」

「はい。どうぞ」

上白沢さんが帰って来た。男の子と共に

「あ！金髪のお姉ちゃん、大丈夫？怪我はない？」

「うん。私は大丈夫だよ。君のおかげでね。ありがとう」

私は、その男の子にお礼を言った。すると、男の子は嬉しそうに笑顔になった

「良かった！僕、幸多って名前なんだ！金髪のお姉ちゃんは？」

私は、上白沢さんにした様な自己紹介を幸多君にした

そして、その後、上白沢さんから事情を聞かれ、それを聞いていた幸多君が『人里の近くの神社に住んでいるお姉ちゃん達と神様なら何とかしてくれるはずだよ！』と言ってきて、私は、幸多君に連れられて神社へと向かい、今は、その神社の巫女さんと話をしている

空色の髪と目。綺麗な顔。脇が出ているし、色も違うけれど、それでも私達が知っている巫女さんの服装とはそんなにかげ離れていない服。私の第一印象は、優しそうで責任感がある人だった。そして、その第一印象は当たっていた

「・・・けど、この時の私達は、まだここ幻想郷の事を理解していなかった」

「・・・その」

葵さんは、とても言いにくそうに口籠っている。何かを聞きたいみたい

「?どうしたの?」

なのはが聞いてくれた。けれど、それでも、どうしようか迷っているみたいで、結局

「いえ、何でもありません。・・・お二人とも、無理はしないで下さいね」

「・・・え?」

「いえ、疲れている様に見えましたので」

「え?そうかな?」

「はい・・・」

「・・・なんだろう?葵さん。何かを隠してる?」

私は、そんな風を感じたけど、それを追求することはしなかった  
隠すと言うことは言いたく無いことなのだろうから・・・

私は、そのまま疑問を封印することにした

「・・・大怪我なんて、しないで下さいね。お二人とも(ボソツ)」

「・・・その眩きも、その時の私には聞こえていなかった」

## 第三十二話

くルカside

私達は、紅魔館に入っている。勿論、門番の美鈴は無視してな寝ている奴が悪い。・・・というか、彼奴がちゃんと起きてる所なんて、咲夜に怒られている時しか見たことないが、他に起きてる時なんてあるのか？

まあ、いい

そして、中に入ると・・・

「アハハハハ！どうしたの？はやて！私ともっと遊ぼうよ！」

「確かに遊ぶとは言うけれど、まさかこんな風になるなんて思ってたなかったんやで!?勘弁してや！」

「アハハハハ！」

狂気に染まっているフランと、何か、魔導師の様な服を着て、後ろには黒い羽根が生えている女がいた

彼奴が最後の幻想入りした一人か。・・・となると、此処のルールも知らないままの弾幕ごっこ。これはマズイだろうな

「・・・鬼灯、頼めるか？」

「・・・はあ、分かった」

そうして鬼灯が止めようとしたが、無意味になった

「・・・大丈夫か？」

「・・・あ、はい。大丈夫です」

この紅魔館で唯一の執事。八神狼が現れたからだ  
くはやてside

執事さんが来てくれる一、二時間前のことや

私は、この真つ赤な館の庭で倒れてたらしく、博麗神社（外のではないらしいんやけど、どういうことや？）に行くことになったんやけどな

「私！最後にこの館を探検してみたいんや！」

私がそう言うと、それならと許可してくれたレミリアちゃん！

レミリアちゃんは吸血鬼らしいんやで？私は信じるけどな。なん

でかつて？背中に蝙蝠みたいな羽根が生えているのをみて何を信じるなどというんや？

まあ、前住注意で、地下には今は行くなと言われたんやけど、人はな？行くな言われたらいきたくなる生き物やで！

ということ、最初に地下に行ったんやけど、そこに居たのはレミアちゃん顔が似ている金髪のサイドテールにしている小さな女の子が居たんや

・・・けどな

「お姉さん？誰？」

この時はな・・・

「私は八神はやてって名前や！あんたは？」

「私、フランドール・スカーレット。ねえ、はやて。私と一緒に遊ばない？」

「いいで！何して遊ぶんや？ゲームか？」

「弾幕ごっこ・・・だから、はやて。コワレナイデネ？」

こうなるなんて、思ってたかったんや！

いきなりの弾幕になんとか避けてデバイスを起動して、玄関前ホールまで逃げたんやけど、フランちゃんはまだ逃がしてくれないみたいなんや！ほんま、勘弁して！

玄関が開いた音がしたけど、今は気にしてられんのか！

そして、遂に当たるかと思った時に、執事さんが助けてくれたんや・・・ほんま、生きてるって素晴らしいんやな

そう感じた瞬間やわ。本当

くルカsideく

女とフランとの弾幕ごっこ（一方的な）に割って入った狼

そして、本当の弾幕ごっこが始まると思ったが、そうはならなかった

「人心『安らぎの心』」

すると、フランの周りに淡いピンク色の何かが覆った

そして、しばらくしてフランが降り立った。・・・寝た状態で

「すう・・・すう・・・」

「・・・何とかなったか」

「あの、ありがとうございま・・・いたっ！」

狼の奴が女を何の躊躇も頭に拳骨をいれた

「・・・地下には行くと言わなかったか？」

「すみません」

「・・・まあ、いい。反省した様ならな。さて、はやて。お迎えだ」  
「え？」

ようやく、女は此方を向いた。本当にようやくな

「お前を迎えに来た。お前の友達もいるから安心しろ」

「!!?なのはちゃんとフェイトちゃんか!？」

「ああ、そういえばそんな名前だったな」

「覚えておいてやれ、全く」

「覚えておく必要があるのか?どうせ、外に戻るんだろ?」

「まあ、そうだろうな。だがな・・・」

「・・・はあ、分かった。覚えておくよ」

「・・・そうか、ならいい」

「あの・・・」

「あ・・・」

すっかり、自分達の話に夢中で女の存在が消えていた

そして、その反応で気付いたらしく、その女は涙目だった

「ひ、ひどい・・・私を忘れるなんて、ひどい(泣)」

「すまない」

「・・・はあ」

それから、名前を聞き、此方も自己紹介をして、はやてと共に神社  
へと戻ることとなった

「ほんま、ひどい・・・。この事は一生、忘れへんで！」

・・・最後の最後までこの状態が続いたがな

### 第三十三話

くルカ side)

私と鬼灯は、はやてを葵の神社まで連れていき、なのは達と合流させて、博麗神社へと連れて来た

「ここが、博麗神社？」

「向こうとは全然違うね」

「む？ そうなのか？」

「そうやで？ 向こうの博麗神社はな？ もう、本当にボロボロやねん」

話を聞く限り、どうやら外の博麗神社は、雑草ばかりになっており、神社も屋根が壊れていたり悲惨な現状らしい

まあ、ここには神様がいないも同然だから仕方は無いのだろうが……

「……」

葵は、悲しそうな顔をしている。……当然か

葵にとつては、自分の親友で相棒でもある霊夢の家がそんな状態だと聞かされれば悲しむのは当たり前だ

「あ、ごめんな？ こんな話をしてしもうて……」

「……いえ、分かっていることでもありますから。外の博麗神社がボロボロなのは」

「え？ そうなん？」

「はい。なのはさん達の過去を見ましたから」

「？ 過去を見た？ それ、どういうことや？」

「教える義理はない。お前達は、もう此処に来ることもないからな」

「そんな……」

そう。こいつらが幻想郷に来ることなど、もう無いだろう

今回、幻想入りをしてしまった理由だって、多分だが、結界が不安定だったのだろう

そして、そんな時に来てしまったなのは達はそのまま幻想入り

……コレが理由で合っているはずだ

「霊夢！ 出て来て！ 霊夢に頼みたいことがあるんだけど！」



すると、少し経って霊夢がやって来た

「はあ、来ることは分かってたわ。で？そいつらは？」

「え？あ、あの。分かっていたって、どうやって分かったの？」

「勘よ」

「二か、勘!?!」

・・・まあ、霊夢の事を知らない奴らが勘だと言われれば、驚くよな、普通

「あ、あはは。その、霊夢の勘は100%当たりますから、コレが普通なんですよ」

「え？それ本当なん？」

「ええ、そうよ」

「なら・・・」

と、はやてはポケットからアメを取り出して、手に隠した後、後ろを向き、何度も入れ替えてようやく霊夢の方を向き

「どっちにアメが入ってるか分かるか？」

と、まあ、よくある『どっちにあるでしょうか？ゲーム』をしていた

・・・そんな事しても、霊夢の勘は外れないのにな

「右よ」

霊夢は迷い無くそう答えた

「なんでや？理由は？」

「勘よ」

「また、勘なんだね・・・(汗)」

こいつら（私達とはやて以外の二人）は外れると思ってるんだろうな

だが、悪いが外れないぞ？

「あ、当たりや・・・(汗)」

「え!?!」

「ま、当然の結果ね」

「おーい！霊夢ー！遊びに来たぜ！・・・て？誰だ？お前ら」

「二え?」

後ろの方から声が聞こえ、そちらに顔を向けると、魔理沙がいた

「魔理沙。その人達は、外から来ちゃった外来人だよ」

「お？そうなのか？なら、一応、自己紹介をしておくか！私の名前は霧雨魔理沙だ！普通の魔法使いだぜ！」

「魔法使い？」

まあ、早々は信じれな「え？本当なん？それ？」でも、姿は魔法使いの印象その物だよ？」「つまりは、私達とは違うって事だね」・・・驚いていない？信じれないという様な顔をしている。・・・似ているのを知っているのか？

「・・・葵」

「？どうしたの？ルカ」

「後であの三人がどういった人物なのか教えてくれないか？」

「うん。分かった」

「あ、私にも頼む」

「分かったよ、鬼灯」

そんな話をした後、紫を呼んで外の世界へと返す事になった

「そう、分かったわ。なら、貴女達の記憶から此処の事を消させてもらうわね」

「「え!?!」」

「・・・」

私達は、その事を知っていた為、何も反論しない

・・・葵は、反論はしないが悲しそうな顔をしているが

「なんで消しちゃうんですか！私達は嫌です！そんなの！」

「それはね、此処の事がバレるのはマズイからよ」

「まずいって、何がですか!?!」

「此処は幻想になった者達が集う場所。その場所を知られるということは、その者達は居場所を失うのと同じ様な物なのよ」

「だから、消す言うんですか？私達は絶対に誰にも話さへん！だから！」

「話さなかったとしても、バレるだけでアウトなの。諦めなさい」

「そんな!!?葵ちゃん達からも何とか言ってよ、ねえ！」

なのはは、葵にそう言った。が、葵は何も言わなかった

「・・・そんな」

「・・・ごめんなさい。でも、それが此処のルールなんです」  
「・・・」

「さあ、私が向こうに送り届けるわ」

紫は、スキマを開き、その中なのは達も入ろうとした。が

「葵ちゃん!!?」

「!!?」

「私は、忘れちゃうかもしれないけど、葵ちゃんは忘れないでくれるかな?葵ちゃん達まで忘れちゃうと、私、寂しいから・・・」

「私も、寂しくなるよ」

「私もや。だから、忘れへんといってくれへん?」

葵は、その言葉を聞くと嬉しそうな顔になった

「勿論です!絶対に忘れません!だから、安心してください!」

「そっか。ありがとう!」

そして、なのは達はスキマに入り、外の世界へと帰って行った

「・・・」

「・・・葵」

「・・・大丈夫だよ」

「寂しいんだろ?本当は。隠さなくてもいい」

「・・・うん」

そして、そのまま神社へと帰り、葵は寂しさから泣いていた

・・・私は、慰めるべきじゃないと判断し、ほつとき、鬼灯と一緒に葵が戻るのを縁側で待っていた

くなのはside

「・・・あれ?」

私達は、何故か博麗神社の階段の所に座っていた

確か、神社の鳥居を潜ったはずなんだけどな・・・

・・・それに

「なんでだろ?何かを忘れてる様な・・・」

「ん・・・?なのは?あれ?なんで階段に・・・」

「あ、フェイトちゃん」

「ん？なんで私ら階段に座つとるんや？」

「はやてちゃん」

・・・やっぱり、私の勘違いじゃなくて、本当に鳥居を潜っていた  
・・・じゃあ、なんで？

「……………」

・・・本当に、私は何を忘れちゃったの？

とつても大事な事のはずだったんだけど・・・

「……………」

「？どうしたんや？フェイトちゃん」

「……………」

「……………」

まずい！早く帰らないと！

私達は、その場から立ち去り、なんとか電車に間に合い、家へと帰つ  
た

(……………本当に、何を忘れたの？私)

そんな疑問を残したまま

## 閑話くルカの過去く

私は、吸血鬼の父と人間の母の間に産まれた  
流石に、何年前に産まれたかは覚えていないが結構前とだけ言わせ  
てもらおう

私の家庭は、幸せだった  
父が生きる為に母の血を飲む以外は、平凡だったと思う  
だけど、私達は人に追われた  
理由は、父が吸血鬼だから  
人を襲う悪魔だから  
それが理由だった

私達は何年も逃げ続けた

逃げて逃げて、逃げて続けて・・・  
結局、私達は追い込まれてしまった  
どっかの奥深い森の中。岩の壁があつたせいで逃げる事が出来な  
かつた

私は怖かつた。怖くて母の背に隠れていた

この時に、勇気があれば良かった

勇気を振り絞っておけば、この後に、あんな事にならなかつたんだ

「・・・お母さん」

「大丈夫。貴女は私達が護るから」

「そうだ。俺は吸血鬼なんだぞ？負けはしないさ」

父も母も生きる事を諦めてはいなかつた

この先の幸せな未来を夢見ていた

・・・なのに

「吸血鬼を退治しろ！その吸血鬼を愛した女と子供もだ！」

「おー！」

・・・父と母は、私の目の前で惨殺された

「・・・お父さん？お母さん？」

答えてくれる声は、あの優しく暖かな声は聞こえなかつた

「・・・ない」

私は・・・泣いて、怒った

「・・・許さない！お父さんとお母さんを殺したお前達を許しはしない！」

その先は、私の能力で串刺しにし、氷漬けにし、氷で動きを止め首をはね、そんな風にして殺していった

・・・そして、対には一人を残して全員が死んだ

「あ、あ・・・」

「お前も、死ね」

「ま、待つてくれ！俺は、こんな事、したくはな・・・」

私は、そいつの言葉を聞くことなく殺した

・・・何も感じず、何も思わず殺した

感情なんて、無かった

まるで無くなったかと思うぐらいに何も感じ無かった

「・・・お父さん、お母さん。私は、どうすればいいの？」

それから、私は彷徨った

私が、当時着ていた服は赤に染まっていたため、人から恐れられた逆の立場だったら、私もそうしていただろう。その反応が普通だ

私は、何年か経って、何処かの人里に辿りついた

その人達から、何があつたのかと心配された

・・・だけど、それは表の声

裏の声は違った

どうやら、私の存在はバレていたらしくて、半分吸血鬼だからと恐れられていた

(・・・何もしないのに)

私は、寂しくなった

・・・だけど、私はそんな事を思っていないと自分に暗示を掛けた

(私は寂しくなんかない！一人でも大丈夫なんだ！こんな奴らに・・・家族を持つてる奴らなんかに嫉妬なんてしていない！)

寂しさを感じたくなくて、一人でも大丈夫だと思いたくて、嫉妬してる自分が嫌いで・・・

そんな風に自己暗示をしていると、本当に何も感じなくなつた

だけど、人里の人達はどんどん変わっていった  
ある日の夜

その人里の人達が私を殺しに来た

当然、私には本音が聞こえていたため、その作戦も分かっていた

「……………」

私は、生き延びるために、自分を進ませないと阻もうとした奴らだけ  
を殺し、人里から出た

そこからまた旅に出た

妖怪に襲われそうになったら殺し、死なないために食料を見つけ、  
山賊に襲われそうになれば、そいつ等を逆に惨殺し……

そんな風にまた何年も過ごした

そして、あの人里について

人里の奴らは、やっぱり、私の様子をみて気味悪がった

何人かは優しく声を掛けて来たが、そいつ等の裏の声は最低だった  
私は、直ぐにその人里から出て行ったが、その時は生憎と食料がと  
れず、今までの疲れもあって、歩くのがやっとだった

私は、ただ休む目的の為に神社まで頑張って登り、鳥居を背もたれ  
にして休もうとした

……だけど、そこに居たのは私だけでは無かった

「……あの？大丈夫ですか？」

此方を心配そうに見ている空色の髪の女の子と

「……………」

私を訝しげに見ている九本の尻尾を持った狐

この二人がその場に居た

(……はあ、此処に来たのは失敗だったか)

私は、そう思っていた

「……………」

その時に、少し見えたその空色の髪の女の子は、何かを決意した様  
な顔をしていた

「鬼灯、この人をこの家に住まわせよう」

「……私は別にいいが、あの親が許すのか？」

「私が必死に頼むよ。住まわせると言うまで必死に」

「・・・そうか。分かった。私が巫女を呼んでこよう」

狐は、神社の奥へと入って行った

「大丈夫ですか？」

(・・・こいつ)

私は、その空色の髪の女の子の言葉を信じる事が出来なかった

「・・・」

「あの・・・」

「・・・何を企んでいる？」

「・・・え？」

私は、もう正直、この状態では殺される他ないと思っていた

私には、その時、能力を発動される程の体力も気力も無かった

だから、殺される覚悟をしていた

「・・・だから、私をどうするつもりなのかと言っている」

「どうするつもりって、この家に住んでもらおうと思って・・・」

「どうして？何故、そんな事をする？」

「貴女がこのままだと死にそうだから」

(・・・どうせ、嘘。私を殺す機会を伺っているだけだ。私には嘘なんて通じない・・・)

だけど、そんな反応は無かった

(・・・え?)

私は、その時、本気で驚いた

今迄、私に優しくしてきた奴らは、裏では気味悪がったり、殺す計画をたてていたり・・・

なのに、その子はそんな事を考えていなかった。私を気味悪がらなかった

(・・・この子、本気で・・・)

「！え？ど、どうしたの？」

「・・・え？」

「いや、えって・・・だって、泣いてるから」

私は、その子に言われてようやく自分が泣いていることに気付いた



両親が殺されて以来、一度も泣かなかったのに・・・  
どうして？なんで？そんな疑問が頭を駆け巡った

「・・・」

「えっと・・・？」

女の子は戸惑っている。どうすればいいのか分からない様子だ  
・・・私は、何も言わなかった

(・・・この子なら)

この子だけは、信じてもいいのかもしれない。そう感じた

「・・・ねえ」

「な、なんででしょうか？」

「・・・敬語はやめて」

「え？で、でも」

「やめて」

「は、あ、違った。・・・う、うん。分かった」

「ありがとう。それで、質問なんだけど」

「？なんでしよう・・・あ(汗)」

「・・・はあ、敬語に付いては諦める」

「ご、ごめんね？」

「それで、質問していい？」

「は、はい」

私は、その時の最大の疑問をぶつけた

「どうして見ず知らずの私を家に上げることが出来るの？」

「その答えはさつき、言ったよ？」

その子は、そう答えた

「・・・それだけじゃないよね？」

「!!?・・・」

「・・・それだけだったなら、私を上げるちゃんとした理由にはなっ  
てないよ?どうして?」

そう、何故なのか?私はその子にそう質問した

「・・・過去を、見れるから」

「過去を？」

「はい。私は、他人の、それも初対面だと勝手に能力が発動して過去を見てしまう。だから、貴女の過去を見て、その時に決心しました」

「・・・そっか」

それでも私を気味悪がらなかったこの子に、私は安心した

「・・・名前は？」

「え？」

「だから、名前は？」

「！か、神無月葵です！よろしくお願いします！」

「そう、私は霜月ルカ。よろしく」

その後、葵の母親が来て、少し揉めていたが最終的に私は住まわせ  
てもらったことが出来た

そして、私は、今は神無月神社に住んでいる

最初は、葵や鬼灯以外を信じる気は無かったが、霊夢や魔理沙にも  
出会うことが出来た

私は、自分の氷の様な『心』を救ってくれた葵に感謝している

だから、これからもずっと、葵を助けて行く。葵が間違ったことを  
する様なら間違いを正す

私は、葵の親友として、友達として、家族として、これからも過ご  
して行く

ずっと・・・

## 第三十四話

くルカ side

私達は人里にいる

理由はまた魚が取れなかったからだ

まあ、川から取る以上、取れない日があるのは仕方が無いことだ  
ただ・・・

「・・・」

「・・・ 葵、無理して来なくても良かったんじゃないか？」

「ううん。大丈夫だよ、」

やはり、人里の連中からの目は変わっていない

・・・ 本当に最低な奴らだな

\*\*\*

それから、魚を買い終えた私と葵は神社へと戻ろうとしていた。が  
「お願いです！この子を助けて下さい！」

「そんな！お願いしますから！」

どうやら、あの母親の子供が病気ににかかったらしい。衰弱している

・・・だが、私はさっさと帰る

人はいつか死ぬ。それが早いか遅いかの違いだけ

それしか人の死には差は無い

「葵、帰るぞ」

「待って」

「・・・ 葵」

葵は、私に待ったを掛けた。その目を見ると、あの子供を治す気で  
いるようだ

・・・ 散々、人間達にやられたことを忘れたのかと聞きたくなる

「・・・ 助けて何の価値になるんだ？ 私達があいつらにどんな事をされ  
てきたのか、忘れたのか？」

「・・・ 忘れてはいないよ」

「なら・・・」

「けどね」

そこで葵は言葉を区切り……

「私に治せる力があるのに、それを使わないでほつといて……後から後悔するなんて、したくない。それに、私は自分が満足出来ることをしたいの」

そう言ってきた

「……」

……葵、お前は本当に変わらないな。あの頃から

「……」

「ダメかな？」

「……はあ。分かった」

「!!?ありがとう!ルカ!」

葵は、笑顔でそう言った

そして、私達は、その二人の元まで近付いた

「……あの」

「はい、なんで……!あ、あんた……」

「おお!守りの巫女じゃないか!あんたなら治せるよな!!?頼む!治してやってくれ!この通りだ!」

その医者の方は此方に土下座をしてきた

「私からも、お願いします!!?」

その女も同じく土下座をしてきた

「頭を上げてください!土下座なんてしなくても、元々、そのつもりですから」

「本当か!?!有難う!!?」

「有難うございます!本当に!有難うございます!!?」

「いえ、自分が満足することをしていただけです。お礼なんでもらう様な理由ではないですから……」

葵はそうやって謙遜するが、どんな理由であっても、無償で治すのは凄いことだと思うがな

そうして、葵は能力を使い、その子の病気を治した

\*\*\*

「本当に有難うございます。なんとお礼をしていいやら・・・」

「ですから、お礼なんていりません。先程も言いましたとおり、自分が満足することをしていただいだけですから・・・」

「・・・すまない」

「・・・え?」

「・・・」

男は急に謝ってきた。この謝りの意味は、多分・・・

「俺たちは、あんたの能力で過去を無断で見られるのを恐れてあんな風にあんたに・・・あんた達に酷い事をしてしまっていた。本当に申し訳ない」

男は、また此方に頭を下げてきた

「許されるとは思ってない。それでも、謝らせてくれ。本当にすまなかった」

「私からも、本当にごめんなさい。能力に怯えて、貴女のことを何も知ろうとしなかった。本当にごめんなさい」

「お母さん。何を謝ってるの?」

「お母さんね、このお姉ちゃん達に悪い事してたの。だから、謝ってるの」

「そうなの?だったら、私も謝る!お姉ちゃん!お母さんが悪い事してごめんなさい!だから、許して下さい!」

「・・・頭を上げてください」

三人は、頭を上げた。そこには、微笑みを浮かべた葵の顔があった

「私は、怒っていませんよ」

「え?だ、だけど・・・」

「私だって、自分の過去を無断で見られると、どんな気持ちになるのかわかりますから。だから、怒っていません」

「!!?本当に、今まで、すまなかった!」

そして、ついには大人二人は泣き崩れてしまった

\*\*\*

あの後、里の奴らが騒ぎを聞きつけてやって来た為、私達は早々に退散した

あいつらならともかく、私達はダメだ

だから、あいつらがあの後、どういう行動をとったのかは知らない

・・・ただ

「・・・少しは、葵の事を認めてくれる奴が出来て、良かったよ」

「そうか。そんな事があつたのか」

「ああ」

私は、鬼灯にその事を話していた

鬼灯の顔は嬉しそうだった

「ようやく、一歩前進だな」

「ああ、そうだな」

私は、人里の奴らからどう思われ様と構わない。だが、葵だけは違う

私は、あいつが傷付くのは嫌だ

だから、葵を傷付ける人里の奴らを許せない

・・・だが、認めてくれる奴なら、信用できる

(・・・いつか、葵が堂々と人里に降りれる様になる日が来るのだろうか?)

・・・いや、きっと来るのだろうか。来ないのは許さない

私は、何よりも私を救ってくれた彼奴の幸せを願っている

あいつが不幸になるなら、私はそれを排除する

私はもう汚れている。これ以上、汚れたって変わらない

だから・・・

(安心して、幸せになってくれ。葵)

私は、そう願っていた

く鬼灯sideく

(こいつ、今、多分だが、自分は不幸でもいいとか考えているのだろうか)

私とルカは、夜、縁側で話をしていた

・・・いや、私がルカから、今日あつたことを聞いていた

まあ、それは私にとっては重要事項だが、今は置いておこう

問題はルカだ

こいつは、葵の幸せの為に自分が汚れることを厭わない  
まあ、それが単に汚れ仕事『だけ』なら構わないが・・・  
いつか、葵の幸せを邪魔するような奴をまた排除してしまうだろう  
だが、ルカは、その行動が葵を悲しませると分かっている  
葵もまた、ルカの幸せを願っている。そして、不幸になってしまう  
ことを恐れている

ルカに汚れ仕事をして欲しくないと思っている  
だが、どうすればいいのかわかっていない  
生きとし生けるものは、不幸になることは必ずある  
多少の不幸ならいいだろう。だが、自分から不幸への道に行こうと  
するのはダメだ

ルカは、今、自分が不幸への道へと進んでいることに気付いていな  
い

私から言えばいいのだろうが、それではダメだ  
本人が気付かなければならないことだ

だから、私が言えることはただ一つ

「・・・ルカ」

「なんだ？ 鬼灯」

「自分を蔑ろにするなよ？ それが一番、葵が悲しむからな」

「分かっている。それぐらい」

「そうか」

・・・分かっていないな。この馬鹿は  
だが、それは私にも言えるのだろうか

・・・気を付けなければいけないな

私達は、そこから話すこともなく、部屋へと戻った

## 第三十五話

（ルカ side）

私は、今、博麗神社の境内を掃いている

何時もなら葵がしていることなのだが、葵は何処かに行ってしまった  
ている

まあ、私も行こうとしたんだが、一人で行きたいと言われ、理由を聞くと、今朝見たという予知夢と関係があることだからと言われた。まあ、余計に心配になったが平気だと言われてしまえば、私はそれ以上何も言えなくなるのだが

私は、今回、葵からは予知夢を見たと言われただけで、内容までは聞かされなかったがな

そして、私は、葵の代わりに境内を掃いているわけだ

勿論、霊夢にもさせてるぞ？洗濯をな

「はあ・・・終わったわよ」

「そうか、なら、今度は神社の床掃除だな」

「はあ!?そんなのやってられないわよ!」

「はあ、ならゴミを掃くだけでいい。私が雑巾がけをしよう」

「そうしてちょうだい」

はあ、本当にこの脇巫女は・・・まあ、霊夢らしいと言えば霊夢らしいんだがな

\*\*\*

その日の夜

「いけ!氷柱達!」

「二重結界!!?」

私達は、修行をしている

私が氷柱を葵に向けて投げ、それを葵が結界で防ぐ

「此方も忘れるな!!?」

「!!?三重結界!」

鬼灯が別方向から攻撃をして、また葵が防ぐ・・・だが

「くっ!!?」



私の方は兎も角、鬼灯の方からの炎の攻撃のせいで、結界が一枚壊れてしまった

そして、そつちに集中していたせいなのか、此方の方も一枚割れてしまった

「・・・！」

「よし、やめよう」

そして、鬼灯のその声が聞こえると同時に、私の氷柱は鬼灯の炎によつて溶けて消えた。勿論、炎も消えている

「ふう・・・」

「ふむ、やはり一方向に集中してしまう癖をなんとかしなければな」

「うん、そうだね。そのせいで別の方向の結界が疎かになっちゃったら意味ないからね」

「ああ。まあ、それもあるんだろうが、即興で作ったというのもあるんだろうがな」

「あ、あはは（汗）」

「だが、前よりかは改善もされているよな」

「ああ。前と比べるとな」

そう。前に今回と同じ事をしたことがあったが、その時は結界が二枚割れて、一枚はひび割れていた。あと一回攻撃すれば割れるぐらいに

私の方は今回と同じで一枚だけだったがな

「まあ、でも、前と違うところもあるけどね」

「・・・ああ、弾幕か」

そう、ここ最近出来るようになった弾幕

だが、攻撃系統ではなく補助系統ののだが

まあ、つまりはダメージを与えるものではないということだ

「弾幕が出た時には驚いたけどね・・・（汗）」

「私も、葵には弾幕を出す才能は無いと思っていたからな。正直、驚いた」

「・・・同じく」

それ程までに、葵の補助系統の才能は大きいのだ

ただ、その反動で、攻撃系統の才能は無いのだが

「まあ、それをどう使うかだな」

「うん」

「それで、話を戻すが、結界は……」

「……」

葵は考え込んでいる。そして……

「……いつもより結界を増やして、それで結界維持の練習と結界強固の練習を並行ですよ」

「分かった。だが、それは明日にしよう。もう、夜も遅い。このままだと、明日に響くだろう」

「うん。分かったよ」

こうして、私達はこの日を終えた

\*\*\*

次の日、私達は朝食を食べていた。そして、食べ終えた時に、葵が新聞を出してきた

「ねえ、コレを読んでみて」

「ん？……なんで文々。新聞なんだ」

「そこじゃなくて……(汗)」

「……博麗神社で宴会か」

「うん。どうする？行く？」

「勿論、行くに決まっているだろ」

「そうだな。日付は？」

「今日から三日後だな」

「そうか」

この時、葵以外の私達は、この宴会が異変の始まりだとは思っていなかった

## 萃夢想

### 第三十六話

〔葵 side〕

あれから三日後

私達は、宴会会場に来ていた

沢山の妖怪達や少数の人間がお酒を飲み、言葉を交わしている

それにしても・・・

「珍しいよね。霊夢から宴会をやるって言うなんて」

私は、近くにいた霊夢に話しかけました

霊夢が自分から宴会をするなんて、普通は有りません

異変解決後なら兎も角、片付けとかがめんどくさいといつも言っているあの霊夢が

「仕方ないでしょ？何だか宴会をやりたくなつたんだから」

「え？そうなの？」

「ええ。まあ、そんな話は終わりにしておきましょう！さあ！飲むわよ！」

「霊夢、飲み過ぎないでね（汗）」

まあ、霊夢はお酒は強い方ですし、大丈夫でしょう

「葵〜！」

すると、今度は右方向から声が聞こえた為、そちらに顔を向けると、フランさんが走って来ていました。勿論、日傘も持っています

「フランさん！遊びに来てくれたんですか？」

「うん！葵にも会いたかったから！」

「ふふ、フランったら、貴女にすごく懐いているわね」

「レミリアさん！」

紅魔館組が勢揃い・・・あれ？

「レミリアさん、フランさん。レティシアさんとパチュリーさんは？」

そう、その中に、レティシアさんとパチュリーさんと小悪魔さんが何故かいませんでした。どうしたのでしょうか？

「レティシアお姉様とパチエ達なら屋敷にいるわ」

「え？どうしてですか？」

「パチエ達は図書館に引きこもっていて、レティシアお姉様なら遊ぶ約束があるから、だそうよ」

「だから、自分が行けない分、私達は楽しんできなさいってレティシアお姉様に言われたの！私、外に出るのは初めてなの！だから！今、すぐく嬉しい！」

フランさんは、満面の笑みを浮かべています。狂気の笑みではなく、年相応の笑顔です

（良かった。フランさんがこんな綺麗な笑顔を出来るようになってくれて）

私は、嬉しくなりました

「そうですか。良かったですね、フランさん！ゝゝ」

「うん！」

「ふふ、あらあら、フランったら本当に葵が好きなのね。嫉妬しちゃうわ」

「え？嫉妬ですか？」

「ええ。だって、私はフランの姉なのよ？大好きな妹がコレだけ懐いてる姿を見るのはすごく嬉しいことだけれど、私にもして欲しいとも思っちゃうのよ」

「なら！お姉様にも！」

そういって、フランさんはレミリアさんに抱きつきました

「あ！ちよつと、フラン！確かに嬉しいとは言ったけれど、急にするのは危ないでしょう？」

「うう、ごめんなさい」

「ふふ、でも、本当に嬉しいわ。ありがとう、フラン」

「！お姉様！」

フランさんは、またおもいつきりレミリアさんを抱きしめました

本当に、良い姉妹ですね

「さて、それで葵」

「？なんででしょうか？レミリアさん」

私がそう言うと、レミリアさんは杯とお酒を出してきて・・・

「私と話をしながら飲まないかしらっ?」

と、言ってきました

「あ、その・・・」

「どうしたの? 私とはお酒が飲めないと言うのかしら?」

「いえ、そういうわけではないんですが・・・」

「なら、どうしたのかしら?」

「・・・お酒があまり飲めなくて」

そう。私は、お酒があまり好きではありません

嫌い、というわけでもないのですが、苦手なのです。まあ、口に合わないだけなのでしょうがね

「そう。まあ、飲めるだけで良いのよ。だから、飲みましょう」

「分かりました。それで良いのでしたら」

「私もそうする!」

こうして、私とレミリアさん達は一緒に飲むこととなりました。・・・私は、あまり飲めませんでしたかね

くルカsideく

私は、一人でお酒を飲もうとしていたのだが・・・

「あんた! アタイと勝負しろ!!?」

「ち、チルノちゃん、やめた方が良いよ・・・」

「・・・はあ」

何故か妖精に、しかも、私に何回も負けているチルノが弾幕ごっこをしると言ってきた

何でだ? 私は、するつもりなんてないんだが・・・

「・・・理由は?」

「アタイがサイキョーって事を見せつける為だ!」

まだ、自分が最強だと思っっているらしい。・・・まあ、チルノの實力を考えると、妖精の中ではそうかもな

だが、それはあくまで妖精の中だけだ。妖精の枠組みから外して考えると私の足元にも及ばない

「・・・はあ」

さて、この勝負、どうやって回避しようか？

私がそんな風に考えようとしていたが、チルの能力で作られたであろう氷柱を能力で止めた

「なっ!？」

「・・・私が考え事をしていると時に攻撃か」

「あんたが考え事をしているのが悪いんだ！アタイと戦え!!？」

・・・私も、さっきのは少タイラつときたしな。仕方ないか

「いいだろう。全力でかかってこい。お前を撃墜させてやるから」

「サイキョーのアタイを舐めるな！」

こうして、弾幕ごっこが始まった訳だが・・・結果はもう分かるだろう？私の勝ちだよ

勿論、容赦なくやったからな。妖精相手ならコレは当たり前前の結果だ

「くっそー！き、今日は調子が悪かったただけなんだから！次やったら負けないからな！」

そう捨て台詞を言いながら、チルノは去って行った

勿論、あの大妖精とか言っていた妖精も一緒にな

「・・・はあ。何だったんだ？アレは」

さて、いつも通り、一人で飲むとするか

私は、近くの木にもたれながらお酒を飲んでいた

く鬼灯sideく

私は、今は、藍とくおんと一緒に飲んでる。最初は藍だけだったのだが、紅魔館組が来たようで、くおんも来たのだ

「それで、紫様は働かないのです・・・」

今は、愚痴を聞いている

「まあ、それが紫だから仕方ないと言う他ないな」

実際、他の手も思い付かないからな

「藍さんは苦労しているのですか」

「ん？くおんは苦労していないのか？」

「はい。私の主であるレティシア様は素晴らしい方ですから」

「ほう？紫様だって素晴らしい方だと私は思うがな」

「あ、いえ、そう言うわけではありませんよ」

「そうか。ならいいが」

「．．．一瞬だったが、危なく一色触発状態だったな  
「それで？レティシアがどう素晴らしいんだ？」

まあ、私も分からんでもないのだが、一応、聞いておこう

「はい。フラン様が地下に監禁されていた時だって、外に旅に出ている時以外毎日顔を出しに行っていましたし、旅から帰って来た時だって、そのお土産を紅魔館の全員に、一人も漏れずに全員に渡していましたし、何よりも、花の世話も手伝ってくれたりと．．．」

「ゆ、紫様とは大違いだな．．．(汗)」

まあ、それがレティシアだからな。家族想いで、働いているメイド達だって家族と考えるような奴だからな

「まあ、紫は紫で良いところはあると思うが？」

私は、仕方なく、紫のフォローをしてやることにした

「と、言いますと？」

「確かに、いつもはグータラしている紫だが、ここ幻想郷の事は誰よりも想っていると思うぞ？」

私では無理だ。人里の奴らを好きになどなれない限りはな．．．

そして、その日は当分、来ないだろう

「．．．それもそうですね」

こうして、私達は話題が変わりながらも一緒に飲み続けた  
ただ、最初にくおんが倒れて、藍も倒れてしまったがな

\*\*\*

〈葵side〉

あの後、宴会が終わり、私達は片付けを終えて帰った．．．のだが

「．．．コレは」

「．．．一体、どういうことなんだ？」

新聞には、また三日後に博麗神社で宴会が行われると書いてありま  
した

「．．．．．」

・・・本当に、やるんですね？萃香さん

私は、顔や言葉には出さずにそう考えていた

「・・・」

・・・二人が不審な目で私を見ていることに、私は気付いていなかった



## 第三十七話

（葵 side）

アレからまた三日後

私達は、宴会会場へと足を運んでいた

「はあ、あの巫女、一体、どれだけ鬱憤が溜まっているんだ」  
「いや、鬱憤のせいではない気がするんだけど・・・（汗）」

もし霊夢に鬱憤が溜まっていたら、宴会ではなくて妖怪退治に精を出すからね（汗）

「まあいい。着いたぞ」

話している間に着いていました。博麗神社の宴会会場

「霊夢ー！来たよー！」

「ようやく来たわね。葵」

「私達もいるがな」

「あー、ハイハイ。ソウデスネー」

「・・・凍らせてやる」

「ルカ！落ち着いて!!?」

と、まあ、着いた早々からの騒ぎでした

\*\*\*

そうして、私達が宴会を楽しんでいると・・・

「霊夢。食べ物がないぞ?」

「あら?分かったわ。作ってくる」

「あ、待って。私も手伝うよ!!?」

「ありがとう。お願いするわね」

「もちろん!」

私と霊夢は、一体、家に入り料理を作ることになりました

「えっと、お団子と鬼灯が好きなお稲荷さんとそれから・・・」

そうして、団子などを沢山作り（この量、食べ切れるのかな?）持つて行くことにしました。が

「・・・ねえ、葵」

「?どうしたの?霊夢」

霊夢が話し掛けてきました。どうしたのでしょうか？

「あんた、私に隠してることに、無いわよね？」

「……無いよ？」

「……そう」

……霊夢、ごめんなさい。まだ、言えません。言えないんです。霊夢が異変だと勘付いた時にでも事情は説明します。だから、今の段階では、まだ言えないんです。ごめんなさい、霊夢

私も、この異変の未来が変わる可能性にかけているから……  
だから、あと少し、耐えてくれませんか？

〈霊夢 side〉

葵は、嘘をつくのが下手だ。葵が嘘をつくと直ぐに分かる

そして、葵は、今、嘘をついた

(……何を隠してるわけ？葵)

葵が隠し事をする時は、状況によっては違うけど二つぐらいある

一つは、紫から言うなと言われたとき

でも、コレの可能性が大きいのは異変の時。それに、今回は紫は関与していない

理由？勘に決まってるでしょ

それで、二つ目だけれど、何かに私達を巻き込む、もしくは、巻き込ませない為。そして、自分の事で心配させないため

今は、この二つ目の理由のどれかで隠したのだろう

……もし、巻き込ませない為だった場合は無理矢理にでも巻き込まれてやるんだけど、違う気がする

自分の事で心配させない為というのにも無いだろう

となると……私達を何かに巻き込ませる為？

その場合は、なんで？

(……現状じゃあ、分かんないわね)

でも、葵が私達を何かに巻き込もうとしているのはあからさまだ

今までは、この理由で葵が動く事は少なかったけれど……まあ、進歩したと考えればいいでしょうね

(だけど、葵。流石に我慢の限界がきたら、動くからね？覚悟し時なさ

い)

私は、私の前を歩いて宴会会場に食事を運んでいる葵を見ながら、  
そう考えていた

（ルカ side）

私と鬼灯は、葵の事で話し合っていた

「・・・鬼灯、どう思う？」

「葵がこの事に勘付ない訳がない。となると・・・」

「・・・だよな」

そう。葵は未来が視れる。なら、この異常に勘付ない訳がないのだ

・・・まあ、本当に霊夢が宴会をしただけなのかもしれないがな

「・・・もしかして、あいつか？（ボソツ）」

「？鬼灯、今、なんて・・・」

鬼灯は、今、小さな声だったが『あいつ』と言った。となると、鬼  
灯の知り合いか？

「クスクス、鬼灯」

私が、鬼灯に誰かと聞こうとした丁度その瞬間に、レティシアが来  
た。・・・こいつ、狙って来ただろ

「・・・なんだ？レティシア」

「クスクス、少し、話があるのだけれど、いいかしら？」

「・・・分かった、いいだろう。ということで、すまないが、私は離れ  
る」

「ああ」

「クスクス、話の途中でごめんなさいね♪けれど、これは賢者クラスの  
者には知っておいてもらわないといけない話だからね」

「・・・」

賢者クラスの者か・・・。となると、紫や幽々子もか？・・・いや、  
違うな。少しだが嘘をついていた

・・・萃香？誰だ？そいつ。鬼灯も知り合いらしいが・・・

「クスクス、あらあら♪ウソがばれちゃったみたいね♪」

「・・・ワザとだろ」

「クスクス、ワザとじゃないわよ♪」

「ワザとじゃないなら脳を創って嘘をついたことすら見破れなくすることがお前なら可能だろう。それをしなかったお前の何処にワザとじゃないという証拠がある？」

「クスクス♪」

「……とにかく、この萃香とかいう名前の奴が何か関わっているの  
だろう。だったら……」

「クスクス、兎に角、行きましようか♪」

「はあ、分かった」

そう言うと、鬼灯とレティシアは去って行った

私は必然的に一人に「お前！アタイと勝負しろ！」……なれなかった。  
むしろ、またかこの展開

少しは一人で飲ませてくれ

〈葵 side〉

あの後、私達は食事を持って行き、また宴会を楽しんだ

一番驚いたのは、幽々子さんの食べる量だった

とても多く作ってしまったお団子が、みるみる内に無くなっていつ  
てしまったのだから

正直、幽々子さんがアレだけ食べる人だとは思っていなかったの  
で  
呆然としてしまった

そして、今は宴会があった日の夜

私は寝ようと思い、自身の部屋へと向かっている。けれど

「葵」

「？ルカ？どうしたの？」

ルカに話し掛けられた。どうしたのでしょうか？理由が分かりませ  
ん

「葵、話がある」

「話……？」

「……一体、何の話でしょうか？」

\*\*\*

そして、夜が明けて今は朝です

「……はあ、やっぱりか」

「・・・」

正直、一体何人の人が飽きたでしょうかね？宴会

でも、もう少しだけ付き合って下さいね、皆さん

この異変は、もう間も無くで終わりを迎えますから・・・

だから、私が祈るのは一つだけ

(どうか、私が視た未来通りになりませんように・・・)

## 第三十八話

〈葵side〉

アレからまたまた三日後

流石に皆さん、飽きてきた様で、皆さんの雰囲気も沈んでいます  
「おい、霊夢！コレは絶対に異変だって!!?解決するぞ!」

魔理沙が霊夢に異変だと叫ぶ言葉が聞こえてきました

私達は、その声の方向へと足を向けました

「そうとも限らないでしょ?私が宴会をしたいと思ってるだけなんだから……」

「確かに一回なら分かるが、もう何回だ?三回だぞ!!?もう異変だって認めろよ!」

「そうね、また宴会したいと思ったら異変だって認めるわよ」

「……そうかよ!そんなに異変を解決したくないってことかよ!!?博麗の巫女が聞いて呆れるぜ!」

……マズイですね。私の我儘のせいで二人が喧嘩してしまっています

でも、萃香さんの願いの事もありますし……

(萃香さん、どうすればいいんですか?)

私個人の願いは、二人が喧嘩するぐらいなら異変を解決したいと思っっていますが、一番は未来のことです

……私が、萃香さんに協力する切っ掛けになった、私の願い

萃香さん、私も、貴方が言った可能性に掛けてみたいとは言いませんが、二人が喧嘩する姿を見たい訳ではないんです

……本当に、どうすればいいんですか?

「……はあ、二人とも落ち着け」

「そうだぞ。折角の宴会の雰囲気もこれ以上悪くして、どうするつもりだ?」

私がどうしようか考えていると、ルカと鬼灯が二人の喧嘩を止めようとしてくれた

「お前らだって、おかしいと思ってるだろ!?!なんで解決しようとしな

「いんだぜ!!?」

「だが、実際、私も宴会をやりたい気分でもあるんだ。魔理沙もそうだろう?」

「うっ!!?・・・否定はしないぜ」

「だろ?・・・まあ、異変だと思えば、今回は様子を見よう」

「・・・分かったぜ。そうするぜ」

鬼灯が魔理沙を説得していました

霊夢の様子は別に変わっていませんでしたので大丈夫ですね

・・・今晚にでも萃香さんと話してみますか

「クスクス、ねえ?私はまだ二回目なのだけれど?」

「・・・レティシア」

霊夢と魔理沙の騒動が治まって、すぐにレティシアさんが此方に来ました

「それはあんたが来なかっただけでしょ?自業自得よ」

「クスクス、酷いわね♪」

「酷いと思うならそういう反応をしろ」

「クスクス♪」

レティシアさんは相変わらずの様ですね・・・あれ?

「あの、レミリアさん達は?」

「クスクス、レミィとフランならそこで気持ち良さそうに寝ているわ♪」

そう言われ、その方向を見てみると、二人が日傘の下でグツスリと寝ていました。その顔はまるで天使の寝顔の様で・・・

「・・・可愛い寝顔ですね^^」

私は、近くで二人の顔を見ていました

「クスクス、そうでしょ?自慢の妹達ですもの。当たり前よ♪」

そこにレティシアさんが近付いて来ました

「そうですね・・・」

もしかしたら、フランさん達とも戦うことになるんですね

「クスクス、だからね・・・」

レティシアさんはそこで言葉を切り

「その笑顔を浮かべる二人と戦いたくないなら、もうそろそろやめた方がいいわよ？ 異変関係者さん♪」

私の耳元で、私に聞こえるぐらいの声で、そう言ってきました

「・・・え？」

私は、すぐにレテイシアさんの方へと振り向きましたが、レテイシアさんはもういません

「・・・霊夢」

「ん？ どうしたのよ？ 葵」

「レテイシアさんは、何処にいるの？」

「え？ レテイシアなら、あんたが振り向く少し前に、何時もの方法で消えたわよ」

「そう。ありがとう」

レテイシアさん、気付いてたんですね。まあ、霊夢も気付いている様ですが、今の所は知らんぷりしてくれている事に感謝しなくてはいけませんね

「ねえ、葵。一緒に食べない？ 続けざまの宴会で貴方とルカだけ一緒に食べてないのよ。それに、妖夢とも話が合いそうだし、どうかしら？」

「そうですね。それに、幽々子様がそう仰るなら私はそれで構いません」

「分かりました。そのお誘い、お受けいたします」

さて、私も楽しめますか

もうすぐ終わる、この異変の宴会を

\*\*\*

その日の夜

私は、一人で人気の無い場所にいました

理由は、ある人物と話をする為です

「・・・萃香さん。話があるので出て来てくれませんか？」

すると、霧の様なものが集まり、形を創っていました

その姿は小さな女の子ですが、頭からは鬼の角が二本生えています



そして、両手首には、何故か鎖がついていました

「やあ！葵！どうしたんだい？私に話って」

この人が伊吹萃香さん。種族は鬼

鬼という種族は、昔に地下へと去って行ってしまった種族です

まあ、その原因は人間にあるのですがね

「・・・あの、もうそろそろ宴会もやめませんか？霊夢達の様子、見ていましたよね？」

「ああ、やっぱりバレてたか」

もちろんです。萃香さんがこの異変を起こす理由を聞けば、察することぐらい出来ますよ

「・・・ダメですか？」

「やだ！まだ酔い足りないんだ！このままじゃあ・・・」

「・・・」  
さて、どうしましょうか？・・・答えは、一つですね

「はあ、分かりました」

「！葵!!？」

「ただし」

「？ただし？何かあるのか？」

「ええ、勿論」

だって、私の能力は未来も見れるのですよ？予知夢だと強制的に全部見ることになりますが、自分の意思で見えるなら、どの部分とかを決めることが出来ます

・・・まあ、それで分かった事ですがね

「次の宴会を開いた時点で、霊夢は乗り出します」

「へえー、あの博麗の巫女がか。・・・戦ってみたいね!!？」

流石、鬼ですね。戦いが大好きな様です

「だから、今回がちゃんした宴会の最後だった事は理解してくれませんか？」

「・・・仕方ないね。分かったよ」

「ありがとうございます、^^」

さて、どうやら次の宴会は大変な事になるのが決定されてしまいま

したね

一体、どうなるんですかね？その部分を私は見ていませんから、どんな展開になって、どんな結果になるのか、私は知りません

・・・ですが、萃香さんの最後の願いは全力を出すこと

私は、その願いを叶えるだけです

・・・未来は、変わってくれてますかね？どんな結果になるのか見れば良かったかもしれませんね

## 第三十九話

〈葵 side〉

またまた三日後

もうお分かりの通り、皆さんの気分は底辺です

・・・まあ、今日をもってこの異変は終わるのですがね

「おい、霊夢」

「言わなくても流石に分かるわよ」

「ようやくかよ!!?じゃあ、異変主を探し「その必要はないわ」はあ?

その必要は無いつて、どういうことなんだ?霊夢」

「そのままの意味よ」

そして、私達を見つけた霊夢が立ち上がり

「それじゃあ、話してもらおうわよ?・・・葵」

「・・・は?何言ってるんだ?霊夢。どういうことなんだぜ?」

「魔理沙、葵の能力を忘れたわけ?」

「葵の能力?・・・あ!」

「思い出した?そうよ。葵がこの異変を気付けないはずがないのよ。

なのに、私達に異変の事なんて言わなかった。どういうことか、説明

してもらおうわよ」

・・・皆さんの目が一瞬で厳しいモノに変わりました。まあ、当然

ですわ

「・・・分かった。説明するよ。もともと、そのつもりだったから」

「あら?そうだったの?」

「うん。霊夢が気付いた時点で・・・私にその事を聞く時点でバラすこ

とにしていたからね」

「ふーん、で?一体、どうして私達を異変に巻き込んだわけ?」

「それは、ある人の願いを叶える為だよ」

「ある人?誰だ?それ」

「クスクス、それは私から言うわ」

私が、魔理沙からの質問に答えようとした時に、レテイシアさんが横槍を入れました

まあ、レティシアさんも気付いてましたし、萃香さんとも知り合いですから当たり前ですかね

「レティシア。やっぱり、あんたも知ってるのね」

「クスクス、ええ、勿論よ。私の知り合いですもの」

「て、事は、紫達もなのね・・・そこにいる幽々子もかしら？」

「クスクス、幽々子は知らないわ。知ってるのは、私や紫、それに、鬼灯にもう一人いるけれど、多分、貴方達はまだ会ってないでしょうから此処では言わないでおくわ」

「あら？ 私は知らなくて、貴方や紫に鬼灯は知ってる人？ 私だけ仲間外れね。私、悲しいわ。シクシク」

幽々子さんは、明らかに泣き真似をしていました。まあ、皆さんも泣き真似である事に気付いてますから、妖夢さん以外は無視してますが

・・・幽々子さん、ご愁傷様です

「そう、で？ 誰よ、そいつは」

「クスクス、名前は伊吹萃香。どんな姿をしているのかは、自分の目で見て頂戴♪って事で、出てきなさい、萃香」

レティシアさんが、萃香さんと呼ぶと、霧が集まり、どんどんと、小さな女の子の姿を形作っていつてます。そして、完全に姿を現しました

「やあく、やっぱレティシアにもバレてたか。紫にもバレてたし、鬼灯は途中で気付いたし・・・でも、やっぱ、レティシアが一番、侮れないね」

「クスクス、褒めても何も出ないわよ♪」

「・・・その角、あんた、鬼？」

「ああ、そうさ。私は鬼の萃香。伊吹萃香さ。よろしくな！」

萃香さんは、その場にいる全員に向かって挨拶をしました

「そう。で？何が目的でこんな事したわけ？」

「・・・仲間に戻って来てほしかったからさ」

「仲間？」

「・・・」

萃香さんの仲間である、鬼の皆さんは、全員、地下へと身を隠しています。昔の人達の所為で

・・・でも、その人達がやったことも理解は出来ず

嘘が嫌いな鬼の種族。だから、鬼達はいつも正々堂々と真つ向勝負をしていた

けれど、人は鬼と真つ向勝負をしても絶対に勝てないことを知っていた

だから、鬼を騙して勝負をしていた

だから、鬼達は姿を消した

・・・萃香さんを残して

だから、萃香さんの願いは・・・

「私は、宴会を開いて、飲んで騒いでる姿を皆に見せて、戻って来てもらう為に、私は、この異変を起こしたんだ」

「・・・葵を巻き込んだ理由は？」

「霊夢、それは、私が手伝いたって自分で・・・」

「葵には今は聞いてない。私は、この鬼に聞いてんの・・・」

「いいから、聞いて！霊夢！」

「・・・分かったわよ。で？なんで？葵」

私が、異変に協力した理由。それは・・・

「未来が変わる可能性に賭けてみたかったから」

「未来が変わる、可能性？」

「そう」

私は、萃香さんが言ったことに賭けてみたかったから・・・

く回想く

私は、予知夢を見たけれど、その異変の全貌を見た私は、異変主の鬼の女の子を探している

「多分、この辺にいると思うんだけど・・・」

私は、いつも宴会が開かれる会場へと足を運んでいる

そして、木の上に寝転んでいた・・・お酒を飲みながら（汗）

（こ）、こんな昼間から飲むの？（汗）

私は、その子を見た。そして、過去を見た

(！・・・なるほど、けど)

私は、私と似たその子を見捨てる様な行動を取るしかありません。今回の異変は、有る意味で、皆に迷惑を掛けてしまうから

「あのく・・・」

「ん？お前は？」

「あ、すみません。私は、神無月葵といいます。神無月神社の巫女をやっています」

「へえ、あなたが神無月の巫女か。・・・葵、私と戦わないか？」

「え？わ、私だけでは無理です・・・」

「ん？なんでだい？」

「・・・攻撃系の才能が無くて」

「あく、分かった。それは悪いことしたね」

「いえ、いいんです。それで、あの、名前は・・・」

「あく、私は伊吹萃香。鬼さ」

「え？鬼？」

鬼って、確か、書物に書いてある限りでは地上から去ったんじゃないか？

「ああ、鬼さ。どうだい？怖いだろう？」

「え？なんでですか？」

「いや、私が鬼だからさ」

「・・・怖がる理由になつてない様な（汗）」

「ん？十分なつてると思うけどね・・・」

と、そういういながら、萃香さんは、またお酒を飲みました

「んで？私に何の様だい？」

あ、そうでした

「・・・萃香さんは、近々、異変を起こす気でいますよね」

「・・・なんで、分かるんだい？」

「私の能力です。私は、未来と過去が見れますから。過去の場合は、初対面の相手だと強制的ですが・・・」

「・・・私の過去を見たって事か」

「・・・すみません。嫌ですよね」

「まあ、ワザとじゃないんだ。許すさ」

「は、はあ・・・」

「ん？なんか腑に落ちないかい？」

「あ、いえ。別に・・・」

今まで、嫌われてばかりでしたからね。どうしても、今の反応は珍しく感じてしまいます

「・・・それで、私は貴方に言うことがあります」

「私に言うことかい？」

「はい。率直に言わせて頂きます。異変を起こすのをやめて下さい」

「・・・なんでだい？」

「その、萃香さんにこの事を言うのは心苦しいのですが・・・」

「いや、言ってくれ」

「・・・分かりました」

そこで、私は深呼吸を少ししてから・・・

「私が見た未来では、この異変を起こしても、萃香さんの仲間は来ませんでした」

「・・・」

「だから・・・」

「だから、異変を起こすのをやめろってかい？」

「・・・」

私は、何も言えませんでした

「沈黙は肯定だ」

「・・・そうですね」

「・・・そうかい」

萃香さんは、そう言葉にだして、お酒を一口飲むと

「だからってやめるつもりはないよ」

「！どうしてですか!？」

「未来が変わる可能性だってあるだろう？私は、未来が変わる可能性に賭けたいのさ。いや、私が未来を変えてみせる。この手で！」

その言葉を聞いた私は、萃香さんがカッコ良く見えました

そして、未来が変わることぐらい分かっているはずの私が、変わると信じれていなかった私が、かつこ悪く思えました

「未来が、変わる可能性・・・」

「ああ、だから、私は異変を起こす！皆に会う為に!!？」

「・・・」

・・・なら、賭けてみましょうか。未来が変わる事に対して

「萃香さん」

「ん？なんだい？葵」

「私に、その異変の手伝いをさせて下さい！」

～回想終了～

「ふーん、そんな事があったのね」

「ごめんね？霊夢。こんな事、相談なしに決めちゃって。でも、時間も無かったから・・・」

「・・・葵」

「な、なに？」

「一週間、ウチの夕食を用意すること。それで許すわ」

「あ、ありがとう・・・」

「ん？どうしたのよ」

「いや、あのね、霊夢。・・・まだ、萃香さんの用事は終わってないんだけど」

「・・・は？」

「いや、だからね？萃香さんの用事はまだ終わってないんだよ（汗）」

「・・・はあーーーー！！」

「クスクス、そういうことよ♪」

「レティシア！あんたも知ってたのね!!？」

「クスクス、萃香が異変主と知っていた時点で疑うべきよ♪それと、葵さんの説明を聞いてね♪」

「鬼灯！てことは、あんたも・・・」

「・・・すまない」

「あんたらー！！」

ああ、霊夢が何故だか暴れています。どうやら、今までの我慢がこのタイミングで限界に達したみたいですね（汗）

「あー、もう！それで！私は、一体、何すればいいわけ？」



「私と戦え！」

「分かったわよ！」

「それじゃあ、私と霊夢と、ルカ」

「別にいいぞ」

「魔理沙はどうする？」

「勿論！参加するぜ！ここまで宴会続けられて、鬱憤が溜まってるとだぜーというわけで！私も参加するぜ！」

魔理沙とルカが参加決定ですね。この人数でいいですかね

「じゃあ、この四人で萃香さん。貴方の相手をさせて頂きます。いいですか？」

「レテイシアと鬼灯は参加しないのかい？」

「私はパスだ。葵達が負けるとも思えないしな」

「クスクス、私もやめておくわ♪今は、そんな気分じゃないしね♪」

「そうかい！だったら！お前達、四人で、私にかかってこい！」

こうして、私達四人と萃香さんの戦いが開始されることとなった

## 第四十話

く葵sideく

私達が戦う為の準備を終えて、すぐに萃香さんとの戦いが開始した初めに、霊夢が弾幕を萃香さんに向けて撃つたが、萃香さんはそれを笑いながら全て避けていた

「ははー楽しいねー!」

「くっ! 当たらないわね!」

まあ、そう簡単に当たりませんよね・・・なら

「呪術『鳶絡み』!!?」

この技で、動きに制限を掛けましょう

「おや?」

お札が、萃香さんの動きを抑えました

まあ、この技は、鬼呪封印の力が落ちた様な技ですから、そこまで抑えてられません。ので

「魔理沙!」

「分かってるぜ! 恋符『マスタースパーク』!!?」

魔理沙が、動きを抑えられている萃香さんに向かってマスタースパークを放ちました。そして、当たりました・・・が

「・・・やっぱりですか」

萃香さんがいた場所には、地面が抉れており、私が、技に使用したお札しか残っていませんでした

どうやら、マスタースパークが当たる数秒前に地面を殴って抉り、お札も力技で解き、避けた様です

その証拠に・・・

「いや、今のは危なかったね。避けるのが遅れてたら終わってたよ」

と、萃香さんが笑いながらその場にいましたから

「あー、当たったかと思っただけだな・・・。やっぱ、そう簡単にはいかないか!!?」

「次は、私からだ! 萃符『戸隠山投げ』!」

すると、萃香さんは此方に勢いよく飛んで来ました

そして、萃香さんが捕まえたのは、ルカと霊夢でした

「しまった!!?」

「油断してたのかい?ダメだね、戦ってる途中で油断なんて、さー!」

そういいながら、萃香さんはルカと霊夢を投げ飛ばしました

「ルカ!霊夢!」

そして、萃香さんは岩を萃めて、大きくし、それを霊夢達に向かって投げました

「!氷符『氷の槍投げ』!」

ルカがそれを見て、すぐにスペル宣言をしました

そして、氷で出来た槍をその岩に向かって、勢いよく投げつけました

「宝具『陰陽宝玉』!」

霊夢もルカ同様、スペル宣言をしました

すると、霊夢の周りに陰陽玉が何個も出て来て、それが岩に向かって行き、当たりました

すると、岩がその攻撃に耐えられなかったのか、粉々になってしまいました

「ほお、あの岩を砕く程の威力かい。凄いね!ますます、面白くなってきましたね!」

「いや、私一人だったらアレは砕けなかった」

「私だけだったら、砕けたわね」

「・・・少しは、謙遜するとかしないのか?お前は」

「謙遜してお金が貰えるならしてあげるわ」

「はあ・・・」

「あはは!面白いね!お前達は!」

・・・あの、私達、戦ってますよね? (汗)

「それじゃあ!続きと行こうか!鬼神『ミッシングフルパワー』!」

すると、萃香さんが大きくなりました

私達の何倍も大きいです

「て、こんなのありなのか!」

「うん、アリだよ。だって、アレは能力で大きくなってるから」  
「アレが、あいつの能力、ね」

萃香さんの能力『密と疎を操る程度の能力』。つまりは、密度を操る能力です

だから、さつき、岩の密度を操り、大きな岩を作りあげました  
そして、大きくなった萃香さんは、その手を此方に振り下ろしてきました

「！結界『反射結界』！」

私は、近くにいる魔理沙も守る様にして、結界を張りました。けれど、コレは唯の結界ではないのですがね

「！うわっ！痛ッ！え？なんでだい？」

「萃香さん。コレは、『反射』・・・つまりは、カウンターですよ」

そう、この『反射結界』は、カウンター技。相手の攻撃の威力をそのままにして返しました

「なるほど！つまりは、私の攻撃をそのまま返されたのか。こりゃあ、一本、取られたね！今まで、そんな技をしてきた奴はいなかったからね！だけど、私は、これぐらいじゃあ倒れないよ！」

「・・・分かってますよ。それぐらい」

だから・・・

「治癒『太陽鳥』！」

私は、自分の周りに鳥型の弾幕を出しました

その弾幕の色は、太陽のような温かみのある色です

そして、その鳥達は、それぞれ、霊夢、魔理沙、ルカに向かい、体の中に入りました

「！疲れが、なくなっただぜ！」

「それだけじゃないわ。何でかしら？なんだかやる気が・・・」

「・・・そうだな。力が増した感じだ」

そう、この技の副作用の様なもので、その人達の体力を回復させるとともに、力も漲らせます

「よっしゃ！いくぜ！彗星『ブレイジングスター』！」

魔理沙は、ミニ八卦路を箒の後ろに付けて、箒のスピードをあげま

した。そのスピードは、何時もの私達が見ているスピードよりも早かったです

萃香さんは、魔理沙を捕まえようとしていますが、大きくなった所為なのか、動きが遅いです

その所為で、魔理沙を捕まえることが出来なっています

そして、魔理沙もミニ八卦路を箒に付けている所為か、反撃が出来なっています

ので、私が萃香さんの動きを完全に封じましょう

「呪術『鬼呪封印』！」

私は、萃香さんの動きを完全に封じました

「な！う、動けない！」

「霊夢！ルカ！魔理沙！今だよ！！？」

「分かってるわよ！霊符『夢想封印』！！？」

「氷符『氷翼の舞』！！？」

「いくぜ！魔砲『ファイナルスパーク』！！？」

霊夢は、何時もの強力な技を出し

ルカは、氷の羽を自身の背から出し、その翼の欠片を飛ばし

魔理沙は、マスタースパークよりも威力が大きそうな砲撃をミニ八卦路から出していました

そして、それら全てが、避けることが出来ないでいる萃香さんに向かい、そして、当たりました

\*\*\*

結果から言えば、私達の勝ちです

流石の萃香さんも、あの威力が高い攻撃を三つ同時に受けたのはダメだったらしく、倒れていました

ルカも、最後に使ったあの技が結構きたらしく、疲れ切っていました

た  
・・・あの技は、威力が高い代わりに力を凄く消費してしまいます  
いつも、そう簡単に倒れない様に訓練しているだけあって、今回は倒れずに座り込むだけに止まりましたが、様子から見て、いつ倒れてもおかしくない状態です

「ルカ、体力を回復させるね」

「はあ、はあ・・・頼む」

私は、能力を使って、ルカを回復させた後、萃香さんも回復させました

その後は、皆さんは宴会をやめて、それぞれの家へと帰りました

私は、残って、霊夢と共にその後片付けをしています

・・・ルカは残って手伝おうとしていましたが、私がさつきまで疲れ切っていた状態のルカを心配して、鬼灯に無理に連れて行ってもらいました

萃香さんの処置は、霊夢に任せることとなっていますので、大丈夫でしょう

私は、片付けを終えて、そのまま帰りました

・・・暫く後に、また宴会が開かれますがね。勿論、萃香さんの能力とは関係なく、異変を解決したためですがね

## 第四十一話

〈葵side〉

アレから数日後

私達は、宴会に来ていた

宴会が開かれている理由は、勿論、異変を解決したからだ

その異変を起こした異変主の萃香さんは、霊夢の家に居候することとなった

・・・心配事はありませんが、大丈夫です、よね？（汗）

そして、私は、ルカと二人でお酒を飲んでいきます。・・・私は、余り飲めていませんが

「本当に、宴会地獄から解放されて良かったよ」

「あ、あはは（汗）」

まあ、普通はそう思いますよね・・・（汗）

それにしても、私には一つ、意外に思う事があります

「それにしても、意外だったな〜」

「ん？何がだ？」

「ルカが途中から異変を協力するって言ったことだよ」

そう。ルカは、あの日の夜に、私にそう言ってきました

〜回想〜

「話・・・？」

「ああ。お前、何か私達に隠していることがあるだろう？」

ルカは、腕を組みながらそう話してきた

・・・でも、話すことなんて出来ません

けれど、どうしましょうか？ルカの能力は嘘を見破る。結果的には、同じなんですが・・・

「・・・隠してる事なんて、無いよっ〜」

「・・・そうか。嘘だな。ふーん、この角は鬼か。こいつが萃香ね。で

？ふーん、な「ごめん！謝るから！話すからそれ以上は！」分かった。というか、最初からそうしろ」

「・・・はい」

\*\*\*

「・・・と、いうことなの」

「・・・なるほどな」

私は、結局、ルカに話しました。でも、ルカまで異変協力者にはなつて欲しくない。だから

「・・・ルカ」

「悪いが、私は無理矢理にでも異変に協力するからな」

「・・・え？」

思わず聞き返してしまいました。え？だって、協力するって・・・  
「だ、ダメだよ!?ルカまで協力するなんて!」

確かに、最後には萃香さんと戦って貰いたいとは思っていますが、それ以外でなんて・・・

「他の奴らは、コレが異変だって何と無く分かっている。それを葵は収めることができるのか?」

「うつ・・・」

・・・無理かもですね（汗）

「それで?私は協力するつもりだが、というか、無理矢理協力させてもらうが、どうする?葵」

「・・・」

この雰囲気だと、何を言っても諦めてくれそうにありませんね

「・・・分かったよ。協力してくれる?ルカ」  
「勿論だ」

〜回想終了〜

「・・・当然だろ?今回の異変は、決して悪いことじゃないんだ。寧ろ、あの鬼を救える。というか、結果は救えただろ?私は、悪い事で無ければ協力するさ」

「・・・そうだね」

「?なんだ?何か不満があるのか?」

「・・・ううん、別に無いよ?」

・・・嘘です。不満はあります

不満の理由は、萃香さんの友達が、仲間が来なかったことです



結局、今回の異変は、私の予知夢通りになってしまいました

私は、未来が変わる事を願っていたのに・・・

萃香さんの願いを叶えてあげたかったのに・・・

「・・・願いは叶ってると思うが？」

「・・・え？」

どうやら、私の本心が聞こえた様で、そう言ってくれました

「ほら、萃香を見てみる」

私は、萃香さんがいる方へと顔を向けました

そして、私が見た光景は・・・

「ほらほら！もう飲めないのかい？情けないね。さて、次は誰が相手だい？」

「なら、私が飲み比べの相手をしよう」

「お？鬼灯がかい？いいね！それじゃあ！やろうかい！」

鬼灯と飲み比べをしようとしている萃香さんでした。・・・その顔に浮かべている表情は笑顔で、とても楽しそうに見えました

「・・・」

「・・・な？私は、萃香はもう幸せだと思ってる。これで少しは寂しさも紛れるだろう」

「・・・そうだね、」

萃香さんが幸せそうなのを見た私は、嬉しくなりました

(本当に、良かったですね。萃香さん)

「・・・さて、私達も行くか？」

「うん！行こう！」

私達は、萃香さん達の元へと向かった

↳レティシアside↳

さて、萃香はもう大丈夫ね

あの子は、今まで寂しい想いをして来た人に恐れられて、妖怪にも同様に恐れられて・・・

私達が初めて萃香に会った時だって、最初の一言が「お前達も、私を恐れるんだろ？」だったからね

あの一言には正直、ビツクリしたはね

・・・さて、と

(次の異変はどうするべきかしら・・・?)

異変解決は巫女の仕事

けれど、コレは・・・

(・・・まあ、異変前までに気が向いたら・・・)

それに、そうすれば、久々に戦えるものね♪楽しみだわ

(もし、そうなった時は、私にどれぐらい力を出させるのかしらね? 霊夢? 葵?)

私は、私がいる木の下で騒いでいる霊夢達を見ながら、そう思った

# レティシアの日常1

## 第四十二話

レティシア side

あの宴会から数日後

私は、図書館で本を借りた後、自身の部屋へと戻り、本を読んでいる

今、私が読んでいるのは、何処かの学者の伝記よ。ただ！文字が英語で書かれているだけで、他は何の変哲もない本ね

さて……

「咲夜」

「はい。レティシア様。何の御用でしょうか？」

普段、マリアが近くにいたらマリアに頼むのだけど、近くにいないなら、この様に咲夜を呼んでいる

「クスクス、紅茶をお願いできるかしら？二人分」

「二人分……ですか？」

「クスクス、ええ、そうよ。もうすぐ、お客さんが来るからね♪」

「分かりました」

咲夜は、そう言うで一瞬でいなくなった。時を止めて移動したみたいね

さて、来るまで本を読みながら待ちましようか

\*\*\*

咲夜に紅茶を頼んでから、数分後

咲夜の淹れた紅茶が届き、咲夜は仕事に戻った

そして、それから数秒後

「クスクス、来たわね、紫」

そう言うのと、私の後ろにスキマが開き、中から紫が出てきた

「あら？やっぱり、来ることはバレていたのね」

「クスクス、ええ♪」

私は、読んでいる途中の本に葉を挟み、閉じた

「クスクス、それで？紫。何の用かしら？」

「ふふふ、貴方が喜ぶような話よ」

「クスクス、あら？そうなの？是非効かせて貰いたいわね♪」

そして、紫が話した内容は、外の世界に、一つ、面白い場所があるとの事だった

その場所は、幻想郷よりは現代に近いけれど、それでも田舎町には代わりがない街らしい

そして、その町には、沢山の妖怪達が住んでいるとのこと

「クスクス、本当に面白い話ね♪いつか行ってみるわ♪」

「やっぱりね。貴方ならそう言うと思っただわ」

紫は扇で口元を隠しながらそう言った

「クスクス、さて、その事については行く日が決まったら言うわ。さてと、少し雑談でもしないかしら？紫」

「ええ♪勿論よ」

そして、私は紫との雑談を楽しんだ

昔の出来事からその時の失敗談、そして、私が外の世界で見てきたことなど、色々ね

ただ、失敗談の時は、紫の失敗談しかなくて、紫が顔を赤くしていたのは面白かったわね♪

そして、そんな風に過ごしていたら・・・

「クスクス、紫、戻った方がいいみたいよ」

「あら？理由は？」

顔が明らかに不機嫌になっているわね。まあ、当然ね。楽しんでいる時に、相手から帰れという意味にも似た言葉を言われたら

「クスクス、此処にもうすぐフランが来るわ」

「ああ、そういうことだったのね。分かったわ。ありがとう、レティシア」

「クスクス、お礼を言われる様なことはしていないのだけれどね♪それじゃあ、また遊びに来て頂戴♪」

「ふふ、ええ。来させていただきますわ」

最後の最後で妖怪の賢者らしく振舞った紫は、スキマを開けて、そ

の場から立ち去った

「クスクス、さて。フランが来るまで読んでいきましょうか」

そして、また数分後

「レティシアお姉様！」

フランが扉を勢いよく開けて入って来た

そして、私に思いっきり抱きついてきた

「クスクス、フラン。遊びに来たのでしょうか？何をして遊ぶのかしら？」

「お人形遊び！」

「クスクス、分かったわ。それじゃあ、遊びましょうか」

そして、フランが持ってきたお人形で遊ぶこととなった

その途中で、レミイも来たから入れて、一緒に遊んだわ

そして、結構はしゃいでいたせいか、フランとレミイは眠ってしまっている

「クスクス、二人とも、寝ちゃってるわね」

私は、部屋の中にあるソファで気持ち良さそうに寝ている二人にタオルケットを掛けて、その場を立ち去った

\*\*\*

夕食の時間となり、一緒に食べた後、私は一人で紅魔館の屋根に座っている

何時もは部屋で一人、ワインを飲んでいるのだけれど、今夜は満月。綺麗な月が出ている時に外で飲まないなんて、ないわ

「クスクス、綺麗ね。そう思わない？レミイ」

「そうですね、お姉様」

私は、後ろにいたレミイに声を掛けた

まあ、本人は私の能力を知っているせいで驚きは無かったけれどね

「クスクス、久し振りね。貴方と一緒にこうやって飲むのも」

「そうですね。・・・何時も、お姉様は一人でいるもの」

「クスクス、そうだったかしら？」

「ええ。食事の時は兎も角、それ以外は何時も・・・どうしてですか？」

「・・・どうして、ね」

その答えは、貴方も知っていることでしょうか？レミイ

「・・・クスクス、さあね？気分かしら？」

「お姉様、私は真剣なんですけど・・・」

「クスクス、こんな綺麗な満月の日に、こんな話は合わないわ。それに、話す気もないしね♪ということ、諦めなさい♪」

「はあ・・・分かりました。それでは、飲みましょうか」

「クスクス、ええ。勿論よ♪」

こうして、私とレミイはこの日は、レミイが酔いつぶれるまで飲み続けた

## 第四十三話

↳レテイシアside↳

私は、今、紫に外の世界へと行くことを話している

「・・・ということだから、貴方が言っていた世界に行ってみたいのだけれど、いいかしら？」

「ええ、勿論よ。楽しんで来て頂戴。けど、その姿は流石に目立つわよ？」

「クスクス、ええ、分かっているわ」

私の服は、外の世界では流石に目立ち過ぎている

黒のゴスロリよ？目立つのは当然でしょ？

「クスクス、心配しなくても着替えるから、安心して頂戴♪」

「そう、ならいいのよ。それで？いつ、行くのかしら？」

「クスクス、早くて明日、遅くて明後日よ♪」

「・・・早いわね」

「クスクス、行動は早めにするべきよ♪」

「そう、分かったわ。お土産をお願いするわ」

「クスクス、あら？貴方の能力を使えば簡単でしょ？」

「ふふ、そうね♪」

その後、一言二言話した後、紫は帰ってしまった

・・・さて、お土産の内容を考えておきましょうか

\*\*\*

その次の日

私は、図書館にいた

本を読み終わってしまったから、返さないといけないからね

「クスクス、パチュリー。本を返しに来たわよ♪」

「・・・そう。分かったわ」

パチュリーは、葵が一度、治してくれたのだけれど、また嘆息が再発した

まあ、分かっていたことなのだけれどね

「クスクス、パチュリー。体調はどうかしら？」

「・・・今日は大丈夫みたいよ」

「クスクス、そう。あ、それからね」

私は、今日、この図書館に魔理沙がまた来ることを言った

「・・・はあ、本当にあのネズミは諦めないわね」

「クスクス、まあ、今回は私もいるから安心しなさい♪」

・・・さて、あのネズミをどう躡てやろうかしら？クスクスクスクス♪

\*\*\*

そして、数分後

「日符『ロイヤルフレア』!!?」

「へっ！甘いぜ!!?」

今は、パチュリーと魔理沙の弾幕ごっこが展開されている  
私は今の所は傍観している

・・・パチュリーには悪いけれど、パチュリーが負けてしまったら動くつもりでいるわ

「これでもくらえ！恋符『マスタースパーク』!!?」

「えっ！きやあ!!?」

魔理沙がマスタースパークを撃ち、パチュリーは撃墜されてしまった

た  
・・・さて、動くとしますか

「クスクス、魔理沙♪」

「げっ！いたのかよ!!?」

「クスクス、ええ、いたわよ♪貴方が本を盗ろうとしてパチュリーと弾幕ごっこをしている前からね♪」

「だったら・・・」

「クスクス、逃がすと思っっているのかしら♪（黒笑）」

私は、魔理沙の箒に、以前、フランにも使った鎖を創り、その鎖で動けないように絡めた

「あっ!!?私の箒が!」

「クスクスクスクス、さて、魔理沙。O☆H A☆N A☆S H I、しましよう♪（黒笑）」



「……(ダラダラと汗を流している)」

何でかしらね？魔理沙は顔を引きつらせているのだけれど……そんなに怖くないでしょう？だって……こうなることぐらい、予想、できていたでしょう？ね？魔理沙♪

\*\*\*

「クスクス、楽しかったわ♪」

あの後、魔理沙にO☆HA☆NA☆SHIをしたのだけれど、魔理沙は途中から涙目。面白かったわね♪

まあ、今迄盗った本を返すと言っていたから一先ず、安心ね

「クスクス、さてつと……久々に流れ星が見たいわね」

外の世界に遊びに出る前に、あの子に頼んでみましょうか

\*\*\*

「……流れ星、ですか」

「クスクス、ええ、そうよ。お願い出来るかしら？ペス」

私は、ペスにさっきの考えを話し、頼んでいる

……まあ、この子の能力を知らない人が聞いたら、無理難題を押し付けられている可哀想なメイドに見えるのでしょうかね

この子の能力があれば、流れ星なんて簡単に降らせるのだけれどね  
「分かりました。でしたら、夕食は外でとるといふことでよろしいのでしょうか？」

「クスクス、ええ♪構わないわ♪私から、レミイとフランに聞いてみるから、貴方はパチュリーに聞いてくれないかしら？」

図書館の方にはもう行ってしまったからね。流石の私も行きずらいわ

「分かりました。それでは、聞いてまいります」

ペスは、そう言って図書館の方へと歩いて行った

「クスクス、さて、私も行きますかね♪」

私は、レミイがいるであろう、レミイの部屋へと向かった

## 第四十四話

レテイシア side

私は、レミイの部屋を訪れている

理由は、今日の夕食を外で食べることにしてもいいか、どうか  
コレを聞きに来たのだ

まあ、私がこの館の中では最年長なのだけれど、今、一番権力があ  
るのは、私じゃなくてレミイ。この紅魔館の当主だからね。この館の  
中では一番偉いから聞きに来た

私一人で決めていい問題でもないしね

「レミイ」

「?お姉様?どうなされたのですか?」

「クスクス、ちよつとね。貴方に聞きたいことがあってね♪」

「聞きたい事、ですか?何でしょう?」

「クスクス、いえね、私の気分で流れ星が見たくなったから外で食べた  
いのだけれど、いいかしら?」

「いいですよ。分かりました。咲夜」

レミイが咲夜を呼ぶと、一瞬で現れた。まあ、何時ものことね

「何の御用でしょうか?お嬢様」

「今日は、外で食べたいわ。だから、用意してくれないかしら?」

「分かりました。それでは、早速用意をしてきます」

そう言うと、咲夜は一瞬で居なくなった

本当に、あの子の能力は便利ね

「クスクス、ありがとう。レミイ」

「いいえ、構いません。それで?他にもあるのですよね?お姉様」

「クスクス、あら?やっぱりバレていたのね♪」

流石、レミイ。これぐらいはお手の物ね♪

「それで?一体、何の用でしょうか?」

「クスクス、いえね、明日、また外の世界に遊びに行く事になったの。  
それを貴方に伝えるためにも来たのよ♪」

「・・・また、ですか」

レミイの顔は、寂しそうな顔になっていた

まあ、一度だけってわけじゃないけれど、数百年経っても帰らなかった時があったからね

ここ最近で言えば、百年ぐらい前に出て行って、紅霧異変の少し前に帰って来たのよね

まあ、その時にマリア達を連れて帰って来たのだけだね♪

だから、あの子達は、まだこの館に慣れていないわ

「クスクス、大丈夫よ♪今回はそんなに時間は経たずに帰って来るつもりだからね♪」

「・・・そうなのですか？」

「クスクス、ええ、勿論♪だから、心配しなくてもいいわ♪」

「分かりました。それでは、お土産を楽しみにしておきますね」

「クスクス、分かったわ♪」

私は、椅子から立ち上がりながら言った

そして、部屋を出て行った

\*\*\*

「クスクス、フラン♪話したいことがあるから入るわよ♪」

「はい！どうぞ！」

私は、その声を聞き、部屋へと入った。すると・・・

「レティシアお姉様〜！」

フランが飛びついてきた

「ふ、フラン様！き、き、急に飛びつくのは、あ、危ないですよ！」

「レティシア様だから良かったものの、コレがああ白黒魔法使いだつたら骨の一本や二本、折れていたかもしれないですよ？」

そして、マリアと狼も近付いて来た

フランとマリアは仲がとても良いから、空いた時間によく遊びに来ている。狼は、マリアの従者の様なものだから、何時もマリアの近くにいる

・・・マリアの能力は、少々、危険だからね

だから、『能力が効かない程度の能力』と『能力を封じる程度の能力』を持つ狼が何時も近くにいる

「クスクス、フラン♪遊びたいという気持ちを汲みたいところだけど、ちよつと話があるの。いいかしら?」

「?お話?どんなお話?」

私は、レミイに言った事と同じ事をフランに伝えた

すると、フランの顔はみるみるウチに笑顔になっていった

「流れ星!?!私も見たい!!?」

「クスクス、いいってことね♪」

今日の夕食は、外で食べることが決定されたわね。楽しみだわ♪

\*\*\*

さて、アレから時間が経ったのだけれど...

「クスクス、ちよつと特別な夕食からパーティーになっちゃったわね♪」

「何よ?文句があるわけ?」

「霊夢、レティシアさんはそういう意味で言った訳じゃないと思うよ

(汗)

「このキノコ料理美味しいな!」

「稲荷寿司はないのか?」

「あるわけないだろ。あのメイドにでも頼め」

「ふふ、料理が一杯ね♪(モグモグ)」

「幽々子様。お食事中に喋るなんて、汚いですよ」

「おー!酒も一杯あるね〜!一杯、飲むぞ!!?」

今の声だけではなくて、まだ沢山いるわよ?あ、勿論、パチユリもいるからね♪

...さて、大分暗くなってきたわね。もういいでしょう

「クスクス、ペス。お願いするわ」

「分かりました」

「クスクス、全員、私の話を聞きなさい!」

すると、全員の顔が此方を向いた。それを見た私は、今回の特別なショーを見せるために、全員にこう言った

「今から綺麗なものが見れるから、上を見なさい♪」

「?綺麗なものですか?」

紅魔館に住んでいる者以外の全員の顔は、綺麗なものか何なのか分かっていないみたい

まあ、疑問を持ちながらも上を見たことについては良かったわ

「……綺麗」

「……そうだな」

「流れ星だぜ！」

「……これも、あんたが能力を創ってやったわけ？」

「クスクス、私じゃないわ。私がペスに頼んでやってもらってるのよ」

「ペス？誰よそいつ」

ああ、そういえば、霊夢には、まだ紹介していなかったわね

「クスクス、ペス、ちよつと来て頂戴♪」

「……何の御用でしょうか？」

「クスクス、いえね、この子に貴方を紹介しようと思つてね♪自己紹介をしてちょうだい♪」

「分かりました。初めまして、ペス・ランガーと申します」

「……あんた、人間じゃ無いわね」

「どうしてそう思うのかしら？」

「人間特有の霊力を感じとれないからよ。感じるのは、神力かしらね？コレだけ清らかだから、妖力ではないでしょう」

「……流石ね。そうよ、私は人間じゃないわ」

「クスクス、やっぱり、貴方は面白いわね♪霊夢」

「あんたに言われても嬉しくないわ」

「クスクス、酷いわね」

「酷いと思うなら、そのクスクス笑うのを辞めたら？」

「クスクス、嫌よ♪」

「……それで？あんたの正体は何？」

霊夢は、私との話をやめて、本題に戻った

「私は、ペガサスよ」

「……ペガサス？ペガサスって、あの？」

「ええ、そうよ」

そう、ペスの本来の姿はペガサス。誰でも知ってる有名な神獣よ

「ふーん、で？あんたの能力は何？星を降らせることが出来るなんて、そいつや鬼灯みたいに強力な能力なわけ？」

「いえ、そこまで強力ではないわ。私の能力はこれぐらいしか出来ないわ」

「・・・は？」

「まあ、そういう反応になるわよね、普通」

ペスの能力は『流れ星を降らす程度の能力』。コレは、能力名の通り、流れ星を流すだけの能力。ただ、どのくらいの量の流れ星を流すかは調整できるけれどね

ただ、私は『星を操る程度の能力』じゃないかと思っているわ

ただ、本人が星を流す事以外に出来ることはなかったと言っていたから、そうなのかもしれないけれどね

「・・・それ、割に合わない？」

「だけど、事実よ」

「・・・そう。そういうことにしておくわ」

「言つとくけど、隠してないわよ」

「分かってるわよ、それぐらい。私の勘も、あんたが嘘を言っていないっていつてるもの」

「クスクス、本当に貴方は勘だよりね♪」

そうして、全員、流星群（流れ星にしては量が多いからね）を見ながらパーティーに出された料理を食べていた

クスクス、本当に、外の世界に遊びに行く前に良いものが見れて、良かったわ♪

## 第四十五話

レテイシア side

私は外の世界に出ようとしている

ちなみに、服装は白のノースリーブのワンピースに麦わら帽子よ

(偽物語の忍さんの服装です by主)

「クスクス、それじゃあ、行ってくるわね」

「はい、楽しんできて下さいね。お姉様」

「・・・」

「クスクス、フラン。そんなに不貞腐れないでちょうだい。今回は、そんなに時間も掛からずに帰ってこれるから」

「・・・本当？」

「クスクス、ええ♪本当よ」

「・・・分かった。楽しんできて下さいね！レテイシアお姉様！」

フランは笑顔でそう言ってくれた

ふふ、行く前にフランの笑顔を見れるなんて、幸せね

「クスクス、勿論よ♪それに、ちゃんとお土産も買ってくるから、待ってて頂戴♪それじゃあ、行ってくるわ」

「行つてらっしゃい!!？」

そして、私は、紫の能力を使って移動した

\*\*\*

隙間の出口は、木が生い茂った森だった

「クスクス、それじゃあ、森の外に出ますか♪」

私は森の外に出ることにした。勿論、空は飛んでいない

外の世界では人間は飛べないもの

今の私は人間。年も、見た目でいうなら八歳ぐらいかしらね  
なら、年相応の口調にもしないとね

「クスクス、まあ兎に角、出ましょう」

森の中を歩き続けて数分

森の外に出ることが出来たけれど

(確かに、出るまでに何匹か妖怪がいたわね)

外の世界では、もう殆ど妖怪の存在を認められていない  
まあ、それでも妖怪達はいるけれど、妖力が落ちていくだけ  
・・・まあ、平気そうだし、今は放つときましよう

「クスクス、さて、町案内の看板は何処にあるかしらね？」

「?? side」

俺は、今、友人達と歩いていて

折角の夏休みだ。遊ばなくちゃ損だろ？

今から川に行つて、魚釣りをすることになっている

そして、友人達と話している途中のことだ

「へえ〜・・・ん？」

俺の目に見えたのは、金髪の長髪の先が跳ねており、白のワンピースを着ている麦わら帽子を被った小さな女の子が町案内の看板を見  
ていた

（金髪？珍しいな・・・妖怪か？）

俺は、小さな頃から妖怪と呼ばれるモノが見える

小さな頃の俺は、見えるのが当たり前と思つていた為に、周りの人  
達から嘘つき呼ばわりをされていた

だけど、この町に来て、優しい人達と出会つて、俺は自分が見える  
ことをバレない様になっている

・・・心配を掛けたくないからな

「ん？へえ、珍しいな。こんな所に外人の観光客なんて」

！見えてるのか？

「西村、北本、二人にも見えてるのか？」

俺は、友人の二人に聞いてみた

「？見えてるのかつて、夏目、どうした？そんな事聞いて」

「あ、いや。気にしないでくれ」

「そうか？分かったよ」

・・・二人にも見えてるということは、妖怪じゃないみたいだな。よ  
かった

「ねえ、君。どうしたの？迷子かい？」

「うん？お兄ちゃん達、だあれ？」



「あ、俺たちはこの町に住んでる人だよ。お嬢ちゃんは？」

「あのね！遊びに来たの！」

その女の子は、笑顔でそう言った

「遊びに？家族とかい？」

「ううん、一人で」

「ひ、一人で!?お嬢ちゃん、危なくないかい？」

「?大丈夫だよ?ここに来るまで平気だったよ?」

「そ、そうか・・・」

北本は、その言葉を聞いて安心したらしい

まあ、こんな小さな女の子が一人でなんて聞いたら、心配にもなるよな

「それで?君は何をしていたんだい?」

俺は、その子と目を合わせる様にして屈み、聞いてみた

「あのね、私、この町に来たばかりなんだけどね、よく分からなくて・・・優しいお婆さんに聞いたら、コレを見たら良いつて言われたから見たんだけど・・・」

「・・・ああ、分からなかったんだ」

「・・・うん」

その女の子は涙目で頷いた

まあ、見た目で年を予測するなら、まだ小学校にも行ってないんじゃないか?だったら、地図の見方なんて分からないよな

「分かったよ。なら、俺達が案内してあげるよ」

「・・・本当に?」

「ああ。良いか?西村、北本」

「勿論だ!」

「当然だな!」

「よし、なら、君がどこに行きたいのか言ってくれるかい?俺達が連れて行ってあげるから」

「うん!あのね!川に行きたい!!?」

「川に?なら、俺達も丁度行こうとしてたから、一緒に行こうか」

「うん!・・・」

俺は、その子の手を握って、一緒に歩いた

↳レティシアside↳

(はあ、川は別に見たいわけではないのだけどね・・・)

「私は、普通に地図も読める

だけど、あの時、私が本当に見ていたのは地図じゃない

その隣にあった祭りのポスター

この町では、もうすぐ秋祭りというものが始まるらしい

その日に、レミイ達(妖精メイド以外)を連れて行こうと考えていたら、声を掛けられてしまった

だから、迷わずに演技をしたわけだけれど・・・

(はあ、私の手を握ってるこの男の考えを読んで川なんて答えちゃったけど・・・まあ、良いでしょう。一応、目的にも入っていたわけだしね)

といっても、時間があつたら程度の予定だったんだけどね

それにしても・・・

(この人間、不思議な感じがするわね。妖怪を見れるし、妖怪達を素手で殴れるほどの力を持つてるし・・・どちらかというと、幻想郷寄りの人間ね)

・・・絶対、肩身の狭い思いをしてるわね

外の世界は、妖怪が見えない人間が多数の世界

妖怪が見れるものは差別される世界

・・・絶対に、悲しい思いをしてきている

まあ、だからといって、幻想郷に来ない？なんて、誘うつもりはないのだけどね

幻想郷に誘うかどうかは紫次第

幻想郷に来るかどうかはその人次第

私の仕事なんて、ないわ

だから、どれだけ悲しい思いをしてきて様と、私の知ったこつちやないわ

せいぜい、足掻きなさい♪残酷な世界でね♪

## 第四十六話

レティシア side

男三人組に連れられて川まで来たのだけれど・・・

「お兄ちゃん達は何をしてるの?」

「ん?お嬢ちゃん、釣りを知らないのかい?」

いや、知ってるわよそれぐらい

知ってるけどね・・・

「お兄ちゃんは何をしてるの?」

「ん?君に釣りを教えようかな?と思つて、その準備中」

誰が教えて欲しいと言つた?

一言も言つてないわよ?私

「お!釣れたぞ!」

「おー!結構大きいな!」

「わあ!本当だ!すごいね!お兄ちゃん!!?」

「・・・全員お兄ちゃんだと分かりにくいな」

まあ、それもそうね。でも、今の私はただの人間(のフリ)。名前を

聞いてないのに言うのはおかしいわよね

「そうだね。お兄ちゃん達の名前はなあに?」

私は、首を傾げて聞いた

音をつけるならコテンツかしらね

「俺の名前は北本篤史だ!よろしくな」

「俺は西村悟だ!よろしく」

「俺の名前は夏目貴志。よろしくね」

「うん!私はレティシア・スカーレット!よろしくね!お兄ちゃん達

!」

私も名乗つておいた

相手が名乗つたのに私が名乗らないっていうのはマナー違反だからね

らね

まあ、この世界での用事が終わればもう合わないし、此処にいる間は覚えておいて、戻った際には頭の片隅にでも追いやりましょうか

「あー、やっぱりお嬢ちゃんは外国人だったのか・・・」

「うん！私は此処に住んでる親戚の人の所に遊びに来たんだ！その人から、此処は綺麗な場所で面白い場所でもあるからあそびにおいでつて言われたから来たの!!?」

「そうだったんだ」

嘘は言っていないわよ

実際、知り合い（紫）から綺麗な場所で面白い場所と聞いてるんだから

「それにしても、レティシアちゃんは日本語が上手だね！勉強したのかな?」

「うん！頑張ったんだ！すごいでしょ!!?」

「ああ、そうだね。すごいね、レティシアちゃんは」

日本語が話せるのも当たり前。幻想郷は日本にあるもの

それに、咲夜の言葉を理解するには絶対条件だからね

後一つ言えば、私は誇り高き吸血鬼で妖怪賢者よ。これぐらい出来ないといね♪

まあ、最後のは忘れておくとして

「それじゃあ俺が釣りを教えてあげるよ!」

「うん！お願いします！西村お兄ちゃん!」

「おう！まっかせとけ!」

早く終えて、観光しないかね

\*\*\*

結局、あの後途中まで釣りを（知ってるのに）教えてもらい、途中から一人でやることになり、終わったのが夕方だった

「どうだった?レティシアちゃん。初めての釣りは」

「うん！楽しかった！またやりたいな!」

知ってるのにやらされて、気持ち的には落ちてるけどね

まあ、楽しかったというのは本心だけだね

「あ！もう帰らないと」

「そっか、一人で帰れるかな?」

「うん！大丈夫だよ!」

「そっか、じゃあ、また会えたら遊ぼうね！」

「本当！約束だよ!!?またね~!」

私は、走りながら手を振りかえした

・・・さて、早く山に入って寝床を探さないかね

家ぐらい私の能力で作れるから平気だしね♪

妖怪に人間と間違えられて襲われても返り討ちにすればいい

密かに出していた妖力にも勘付けない妖怪は低級妖怪だからね

弱い者は幻想郷じゃあ、そう簡単に生きられない

まあ、それは昔で今は違うから、比較しないで考えると気付けないのは普通ね

・・・この話は終えましょうか。明日はもう、あんな疫病神達に会わない事を祈るわ

〜夏目 side〜

俺は、藤原家に帰り着き、自失へと戻った

「む?帰ったか、夏目」

「・・・ニャンコ先生か」

ニャンコ先生は俺の用心棒をしている妖怪だ

用心棒と言うと良い妖怪と感じるかもしれないが、実態は違う

俺が持つてる『友人帳』を狙ってる妖怪だ

『友人帳』

俺の祖母、夏目レイコが妖怪達と勝負をし、負けた妖から名前を集めていったもの

そして、奪い集めたものがこの『友人帳』だ

ニャンコ先生の話の聞くと、この友人帳を手に入れると妖怪達を統べる事が出来るらしい

俺は、そんな事をしたくないから妖怪達に名前を返してるがな

「・・・む?夏目、お前また妖怪に名前を返したのか!？」

「・・・え?」

「白を切るな!!?お前から微妙だが、妖力を感じるぞ!」

妖怪?今日、妖怪とは会ってない筈だ

「・・・何を言ってるんだ?ニャンコ先生。今日、俺は妖怪と会ってな

いぞ?」

「何?じゃあ、何故お前から妖力を感じる?本当に身に覚えがないのか?」

「ああ。だって、俺が会ったのは金髪の髪をした小さな女の子だけだぞ?」

「ふむ、どういうことだ?」

ニヤンコ先生は考え混んでいるようだ

・・・本当にどういうことだ?

俺が会ったのはあの女の子だけの筈だ

・・・あの女の子が妖怪?

いや、違う

それだと、どうして北本達にも見えていたんだ?

妖怪だったら北本達には見えない筈だ

・・・分からない

結局、俺とニヤンコ先生はどれだけ考えても答えが出ず、その日を  
終えた

・・・本当に、いつ妖怪と会ったんだろう?

## 第四十七話

くレテイシア side

アレから二日経った

その間に一つ心配事が出来たけれど、まあ、信じるしか出来ないの  
でこの話は終わり

まあ、それ以外で二日間、何があつたかと聞かれれば、この山を歩  
いて見て回つたり、唯の人間と思ひ、襲つて来た妖怪を返り討ちにし  
たりしていた

妖怪の血を今回、初めて飲んでみたけれど、美味しくなかつたわ。  
やっぱり、人間の血じゃないとね♪

まあ、血を飲むためとはいえ襲うことはないけどね  
そして、また歩いていると・・・あの夏目と会つた

まあ、その隣に太つた猫、もとい、招き猫に封印されている上級の  
妖獣もいたけれどね

「あれ？お兄ちゃん？こんな所でどうしたの？」

「それはこっちのセリフだよ。どうして君が此処に？」

逆に心配された

それと、此処にいる理由は、自然巡りとこの辺で寝ているからよ

「あのね！自然巡りしてるんだ！」

「し、自然巡り？」

「うん！私ね、自然が大好きなんだ！」

「どうしてだい？」

「綺麗だから！」

色々ね

「そっか。そうだね」

・・・さて、もうお遊びはやめましょうか

猫が微量の妖力を感じて怪しんでるし、もう飽きたしね

私は、自分の妖力を少しづつ解放していった

夏目の方は気付いていないが、妖怪の方は違う

だって、顔を見ると、どんどんと青褪めていつてるもの

「!夏目!そいつから離れろ!」

そういうなり、妖怪は招き猫の姿から本来の姿に戻った

「!ニャンコ先生!何を言ってるんだ!!?この子は・・・」

ニャンコ先生と呼ばれているらしい妖怪は、その前足を私に向けて振り下ろした

私は、すぐに後ろに飛び退いたけどね

夏目についても、スレスレではあるけど問題ないみたいね

「・・・レティシア?」

夏目は、驚いた顔をしている

「クスクス、面白い顔をしているわよ?夏目」

私は、話し方を戻した。小さな子供の話し方から本来の私の話し方にね

「!ほ、本当に、妖怪なのか?だったら、なんで北本達にも・・・」

「クスクス、私は吸血鬼よ♪普通の妖怪ではないわ」

「え?き、吸血鬼?」

夏目は驚きと疑問が混ざった様な顔をしていた

く夏目sideく

吸血鬼

それぐらいなら、妖怪の知識がない人でも分かる

吸血鬼は、人の血を吸う妖怪

でも、確か弱点があつて、その弱点の一つに太陽がダメだったはずなのだが・・・

「クスクス、その考えで当たってるわ」

!い、今、考えを読まれたのか?それとも、何時の間にか口から出てたのか?

「クスクス、前者で正解よ♪偉いわね♪」

・・・どう考えても自分より子供の子に褒められてしまったよな?嬉しくないな

「クスクス、私は貴方より何倍も年上よ♪後、夏目。さつきから貴方の後ろで私を威嚇してるその獣を何とかしてくれないかしら?耳障りだから」



「私は獣ではない！高貴な妖怪だ！」

「クスクス、どう見ても獣にしか見えないけどね♪」

「貴様！言わせておけば!!？」

「先生！落ち着いてくれ！」

分かりやすく一色触発状態になってしまった

まあ、冷静になってなかったのはニヤンコ先生だが

「クスクス♪」

「・・・それで？君は俺に名前を返して欲しいのか？」

俺は、レテイシアにそう聞いた

友人帳に自分の名前が載ってるから、俺に近づいたのだろうか？

それとも、俺を食うために？

「クスクス、残念だけど、私の名前はその友人帳というものには載ってないし、貴方を食べるつもりもないわ」

「の、載ってないのか!？」

俺は、その真実に驚いてしまった

じゃあ、どうしてなんだ？

「クスクス、勝手に思い違いをしてるみたいだから言っちゃうとね、唯の自然巡りよ。初めから言ってるでしょ？それと、私は貴方に近付いたつもりはないわ。貴方達が初めに近付いて来たんでしよう？」

「ま、まあ、そうだけど・・・」

反論の余地が無かった。だけど

「だったら、初めに自分の正体を明かしてくれれば・・・」

「クスクス、貴方の友人達の前で？貴方はそれを望んではいないでしょう？あと、私が楽しむためにね♪」

「・・・」

確かに、俺は北本達にバレたくはない。バレたら、きっと心配させてしまうから

・・・でも、最後のは理由としてどうなんだろうか？

「クスクス♪」

「・・・なら、貴様は友人帳の話を聞いて、狙う気になったか？」

ニヤンコ先生が警戒しながら聞いていた。が

「クスクス、いいえ♪正直、どうでもいいわね、そんなもの」

一刀両断された

「ど、どうでもいい?」

「クスクス、ええ。貴方にとっては大切なものでしょうけど、妖怪達の名前が書いてあるそれがどれほど大切なものかも分かっているけど、別に欲しいと思わないわ」

「・・・そうか。ならいい」

ニャンコ先生は、それを聞くと元に戻った

ふう、これで一安心だな

くレテイシア side く

そして、取り敢えず今回はその場を納めて、また明日、話すこととなった

まあ、幻想郷の事を話すつもりはないけど・・・まあ、私が住んでる家と妖怪達の事だけ話しておきましょうか。そうすれば、あっちも不自然には思はないでしょう

・・・それにしても、名前が書かれた友人帳をいらないと云ったら驚かれたはね

まあ、それさえあれば妖怪達を統べれるんだから、妖怪達が欲しがるのは仕方のないことかもね

・・・けど、私の中では、やっぱりそれより幻想郷の方がいいわね  
あそこは妖怪も人間も住みやすい場所だもの

「クスクス、まあいいでしょう。今日はこれで帰りましょうか」

私は、今寝ている場所へと戻っていった

・・・結局、今日は見ることは出来なかったわね。自然

この状態だと、明日も見れないわね。残念

## 第四十八話

くレティシア side く

アレから五日後

私は、レミイ達を連れて秋祭りの会場となっている神社に来ている幻想郷については、夏目と斑（説明時に聞いたわ）に話しているわその時の質問の中に「どうして吸血鬼なのに太陽が平気なんだ？」と聞かれたから理由は教えないけど、不老不死だからと答えてあげたわ

納得していない顔だったけれど、追求はしてこなかったわ。どうやら、何かを察してくれたみたいね

ちなみに、お祭りということで私達の服は浴衣よ♪

私が黒の浴衣でレミイが白色、フランが赤色よ。紅じゃなくてね♪  
咲夜とペスは水色、マリアが薄ピンク、ユニは薄紫、朱鳥が朱色、くおんが薄黄色よ

狼もいるけれど、ラフな格好よ

美鈴とパチュリー達は来てないわ

パチュリー達は大体想像がつくでしょ？

美鈴は門番の仕事よ

私的には連れて来たかったのだけど、美鈴が咲夜に「門番の仕事をしなさい」とナイフで脅されたから無理だったわ。残念

まあ、言つては悪いけど、常日頃から仕事をしてないとああ言われでも仕方ないのよね

まあ、この話はコレでおしまい

私達は神社へと着いたけど・・・厄介になりそうね  
なぜかって？そんなの決まってるでしょ？

「・・・主様、彼処に妖怪達が」

「・・・あの子達が？」

退治屋に見つかつたからよ

全く、面倒ね。無視しましょうか

「君達、ちよつといいいかな？」

あら、笑顔で話しかけられちゃったわ。本当に面倒だわ

「なあに？おじさん」

「お、おじ、おじさん!？」

面倒な事をしてきているお返しよ♪有難く貰っておきなさい

あ、今頃だけれど、レミイ達には説明してるから大丈夫よ

フランは話し方はあのままで良いけれど、レミイはちよつとね

まあ、説明したお陰で了承してくれたけどね

「ぼ、僕の事を知らないのかい？」

あら？ナルシストにとつて一番ダメージを与える言葉『おじさん』  
を言ったのに笑顔を絶やさないなんて、すごいわね

まあ、頬がヒクついてるけどね

あなた、俳優でしょう？それぐらいの演技、完璧にこなさないよ。  
俳優として失格よ？

「知らなくい。おじさん、有名人？」

「そ、そうだよ・・・」

クスクス、楽しくなってきたわ♪もうちよつと続けましようか♪

「そうだったんだく！知らなかった！おじさん、有名人さんだったんだ！へえく！・・・地味だね！」

私は、満面の笑みで言っただけ

「うっ!!？」

グサつと何かの音が聞こえたと思ったら、相手は、胸を抑えていた。  
なぜか知らないけれど、胸に何か刺さってるのよね、何かしらね、アレ

「・・・」

そして、弄っていた男の後ろの方にいる妖怪から睨まれているけれど、今の私は妖怪なんて見えない子供。一体、何処から視線がきているのかしらね♪

(((((レティシア(お姉様)(様)、楽しんでる(わね)(いますね)  
ね))))))

今、後ろにいる全員の心が一致した気がするけど気にしないわ♪  
「・・・」

男は、ついに膝と手を地面につけて涙を流していた。本当に面白い男ね♪

「お兄さん、大丈夫？」

優しいフランは、その男に手を差し伸べてあげていた。本当に優しいわね、フラン

「あ、ああ、大丈夫だよ」

まだダメージが残ってるらしい男は、ヨロヨロと起き上がった。起き上がるのが遅いわよ、もつと早く立ち上がりなさいよ。私達の楽しみを取らないでくれるかしらね？

まあ、私は子供の演技をしてるから、そんな事を一言も言わなかったけどね

「こ、コホンッ！それでね、君達に聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

あら？そんなのでいいの？答えが決まってるもので

まあ、答えるけどね♪

「イヤだ！」

「え？な、なんでだい？」

「お祭りを楽しみたいもん！それに、怪しい人に着いて行っちゃ駄目だって言われたもん！話も聞いちゃ駄目って言われたもん！だから、イヤだ!!？」

すると、男は「あ、怪しい人・・・」と言いながら、また膝を着いてシクシクと泣いていた。男なのに情けないわね

「咲夜お姉ちゃん！行こうよ！」

「分かったわ」

私達は、その場を離れた

・・・最後の最後まで面白いものを提供してくれてありがとう♪名

取 周一さん♪

\*\*\*

それから、屋台を見回り、花火が上がると聞き、私達は、見やすい所まで移動した

でも、そこには先客がいた

「クスクス、夏目、貴方も此処に来たのね♪」  
「レティシア。・・・ん？後ろにいるのは？」

ああ、説明はしたけど会ったのは初めてね

「貴方から見て右からレミイ、咲夜、フラン、マリア、狼、ペス、ユニ、  
朱鳥、くおんよ」

「ああ、レティシアの二人の妹とメイドさん達か」

「夏目、その人達は？」

あら、もう一人いたのね

「クスクス、初めましてね♪私はレティシア・スカーレット。よろしく  
ね♪住職の息子さん♪」

「え？なんで俺が住職の息子って・・・」

「クスクス、私の能力だからね♪」

「そうか、でも、俺の名前は田沼 要だ。よろしくな」

「クスクス、よろしくね♪住職の息子さん♪」

「・・・頼む、田沼と呼んでくれ」

「クスクス、分かったわ♪田沼。それで？夏目、貴方が抱えているその  
狐は？」

「ああ、この子は子狐だよ。今は寝てるけどね」

「クスクス、そうみたいね♪可愛い顔で寝てるわね♪」

そんな事を話していると、バーン！と鳴った

どうやら、花火が上がったみたいね

・・・私達は見れないけれど

何故かって？見ようと思っても、目の前に大きな、それこそ、萃香  
が大きくなつた時ぐらいの大きさの妖怪がいたら、見えるわけないで  
しょう？

「綺麗だな」

「ああ、そうだな・・・」

夏目も見えてるわけがないから曖昧な返事になっているわね

というか、見えないところ正直に言えばいいじゃない

「・・・悪い、本当は見えないんだ」

田沼がじーつと見ているとようやく白状したわ

私達が言っても良かったんだろうけど、コレは彼の問題。私達が言うわけにはいかないわ

そして、事情を話し、場所移動をして、今度こそ見る事が出来る場所へと移動した

「ああ、此処ならちゃんと見えるよ」

そして、子狐も起きて、私達は暫く見ていた

すると、下から何か、登ってくる音が聞こえたから見てみると、豚猫が登って来ていた

面白そうだから落としてみましようか？

・・・いえ、それは流石に駄目ね。やってはいけないことね

「な、夏目、この私の事を忘れおって・・・」

「に、ニャンコ先生!？」

「ポンター!」

「ぷっ」

ほ、ポンタって、それ、狸に付ける様な名前じゃ・・・ww

「お前!今笑ったな!!？」

「だ、だって、ポンタって・・・アハハ!!？」

だ、ダメ!お腹が痛いわ!!?ポンタって、ポンタって・・・見たまんまじゃない!

でも、見た目は招き猫なのに、ポンタと呼ばれるなんて、太り過ぎよ!!?

「ポンタではないわ!ニャンコ先生だ!」

だ、ダメ!今やってる行動も、狸が自分のお腹を叩いている様にか見えないわww

私は、その後、笑い続けてしまった

勿論、所々見てたわよ?本当に綺麗な花火が上がってたわ

そして、花火が終わるまで見た私達は、夏目と別れの言葉を言って、幻想郷へと帰ったわ

本当に、今日は良い日だったわね♪

## 人石異変

### 第四十九話

（霊夢 side）

私は、自分の勘が異変が始まったと言っていたから、勘が指し示す場所、人里へと来ていた

そして、私の目に見えたのは・・・石に変えられている人里の人間だった

「・・・これは」

別に、人里の人全員というわけじゃなく、八人ぐらいの人間が石像に変えられているのだ

「・・・慧音にでも聞いてみましようか」

私は、慧音がいるであろう寺子屋へと向かった

\*\*\*

「慧音？いる？」

私は、ノックしながらいるかどうかを確かめてみた

「いるぞ。入れ」

その言葉を聞き、私は入った

「ちよつと聞きたいことがあるのよ、いいかしら？」

「ああ、いいぞ。それで？何を聞きたいんだ？」

「外で石像と化してるあの人里の人間は、何をしてたか分かる？」

「いや、分からん。だが、あの人達の家族なら知ってるかもしれない。

聞いてみよう」

「お願いするわ。私は、葵を迎えに行くから」

「そういえば、葵がいないな。どうしていないんだ？」

「そんなの、私が聞きたいわよ」

この異変を予知してる筈の葵が、今、この場にはいない

昨日も神社に来たのはルカだけ

ルカの話だと、用事が有るからと外に出かけたらしいけど・・・

（・・・何でかしら？嫌な予感がする）



私は、神無月神社へと向かいながら、葵の身の心配をしていた

\*\*\*

私が神無月神社に着くと、鬼灯とルカが話し合っていた

「だから、葵を探しに行くべきだろ!? どうして止める!!?」

「とりあえず落ち着け。じゃあ、ルカ。お前に聞くが、探す当てがあるのか? 葵は何処に行くとも言わずに消えたんだぞ? 当ても無いのに探すのは無謀だ」

「幻想郷は狭い! 当てずっぽうでも探せば何とかなるだろ!」

「落ち着けと言っている。確かに狭いが探す場所が多いだろ。第一、当てずっぽうほどマズイのではないと思うが?」

「・・・くそっ」

「話し合いは終わった?」

「ああ、すまない。待たせたな」

「別にいいわよ。で? あんた達の話聞く限り、まだ葵は帰って来ない様ね」

「・・・ああ。一日だけならそんな気分の時なんだろうとなるんだが」

「・・・まあ、葵が一日いないというのも、今まで無かったがな」

そう。鬼灯の言う通り、今まで葵が一日いないというのは無かった  
この前の異変の時だって、帰って来ていたのに・・・

・・・本当に嫌な予感しかしないわ

「・・・まあ、異変に関わってるでしょうし、異変を解決しながら探しましょうか」

「そうだな」

「・・・分かった」

そうして、私達は人里へと一度、降りることにした

\*\*\*

「慧音、話は聞いてくれた?」

私達は、慧音に私が頼んだ事に関して聞きに来た

「ああ。といっても、まだ全員じゃないぞ? それでもいいのか?」

「いいわ。で? 何て言ってた?」

「被害にあった男の娘からの情報だが『家に急に蛇が入って来て、お父

「さんはその蛇を外に捨てに行ってくれただけなのに……』と言っていた」

「……蛇か。関係があるのか？」

「あるだろう。蛇が家に入ったタイミングが偶然にしては良すぎる」

「だが、本当に偶然という可能性もあるが？」

「まあな、その可能性も否定はしない」

「……それで？他には？」

「いや、まだコレだけだ。すまない」

「いえ、良いわ。ありがとう」

私達は、そこから一旦離れて、魔理沙の元へと行くこととなった理由？鬼灯とルカが連れて行くぞってうるさいのよ。だからよ

……まあ、いいんだけどね

## 第五十話

（霊夢 side）

私達は、魔法の森にある魔理沙の家に来ている

私は、ノックせずに入ってやったわ

「おい、ノックぐらいしろ」

「いいのよ、これで。魔理沙ー！いるでしょ！出て来なさい！」

「ん？霊夢、どうしたんだぜ？」

「異変よ」

「お？てことは、解決しに行くのか！なんだ！やっぱり私がいないと駄目なんじゃないか！」

「違うわよ。ルカと鬼灯が連れて行けっつてうるさいからよ」

「戦力が欲しいからな」

「そうなのか？ん？葵は何処にいるんだ？」

「・・・葵なら、神社にも帰って来ていない」

「はあ!?彼奴が一日経っても帰ってこなかった時なんてないのに・・・何かしたのか？」

「するわけないだろ」

ルカが不機嫌な顔を隠さずに、魔理沙の質問に答えた

「それもそうだな。すまないんだぜ」

「・・・別に」

「ちよつと待ってろ！準備してくるぜ！」

魔理沙はそう言うと、奥へと入っていった

「・・・それにしても、この家、なんとかならないわけ？」

「無理だろ。彼奴は収集家だで片付けられない奴だ。葵が一度言ったことがあったが、聞かなかつたしな」

「・・・はあ」

ため息が出て来てしまったわ

「待たせたんだぜ！行くぜ!!？」

「はいはい・・・」

「それで？何処に向かうんだ？」

「紅魔館よ」

「『紅魔館?』」

「ええ。私の勘が、彼処が関係してるっていつてるのよ。だから行くわよ」

「・・・いいだろう。行くぞ」

私達は空を飛び、紅魔館の方角へと向かっていった

\*\*\*

「お前ら！最強の私と戦「そこをどけ！」うわあ！」

私達の進路を邪魔しに来たチルノを、何の躊躇もなく氷柱で落としたりルカ。・・・こいつ、大分焦ってるわね

まあ、それだけ葵の事が心配なのね。気持ちは分かるけど

「・・・ちよつと落ち着きなさいよ」

「私は、早く解決して葵を探しに行きたいだけだ」

「それは私も同じだけどね・・・はあ、兎に角行きましようか」

「・・・ルカ。少し落ち着いて行動しろ。今此処で怪我でもしてみろ。葵が心配するだけだぞ」

「・・・そうだな。すまない」

鬼灯の言葉を聞いたルカは、深呼吸を二、三回して気持ちを落ち着かせていた

「・・・もう行くわよ?」

「ああ。行こう」

そして、私達は進んだけれど・・・

「・・・何よ、コレ」

私達の目に最初に飛び込んできたのは、あの門番が石像にされている姿だった

・・・寝起きの様な顔で

「・・・こいつ、石像にされる直前まで寝ていたのか」

「ある意味では、大した奴だな」

「ああ、本当にな」

「ほら、話してないで行くわよ?」

「そうだぜ！先に進むんだぜ！」

そして、私達は紅魔館に入っていた

\*\*\*

「まあ、あの門番が石像になってるのを見たから、これは予想していたけど……」

「……この量はな」

そう、入った瞬間に目に見えた石像は約十体

その全てが妖精メイドだったけどね

「……これは、もしかすると紅魔館の奴ら全員、石像にされてるんじゃないか？」

「はあ？それ、あの吸血鬼もってこと？ありえないでしょ。葵から聞いたけど、あの吸血鬼の能力は『運命を操る程度の能力』。そんな能力なのに、この自体に気付けないなんて自体……」

いや、あり得るかもしれないわね

例えば、この運命を見ていなかったとか……

それなら、石像になってる可能性もあるわね

「……兎に角、紅魔館の奴らの石像を探しましょうか」

「それじゃあ！先に図書館に行こうぜ！パチュリーなら石像になってないかもしれないぜ？」

「それもそうね。行ってみましょうか」

\*\*\*

私達は、パチュリーがいる大図書館に来ているけれど

「……パチュリー」

「どうやら、駄目だったみたいね」

「……」

パチュリーは、此方の姿を見る様にして石像にされていた

小悪魔についても同様ね。本が石にされていない以外は

「次、行くわよ」

\*\*\*

「結局、レミリアとフランも石像にされていたわね」

私達は、あの後、レミリアもフランのいる場所に向かい、部屋へ入ると、二人とも石像にされていた

レミリアの部屋へと向かう途中にあった咲夜の石像もね

ただ、レミリアは全然変わりがなかったけど、フランは誰かと弾幕ごっこでもやってたのか、あの時に見た狂気に染まった顔をしていた  
「・・・本当に、何があったのよ」

私達は、手近にあった部屋の扉を開けた

「・・・え？」

そして、その扉の向こうには、私達が探していた葵が足を抑える様にして倒れてる姿があった

・・・石像になった状態で

「あ、葵？」

「葵、なんで・・・」

「う、嘘だろ。おい！」

「・・・」

私の頭に疑問が湧いてきた

なんで此処に葵がいたのか？

なんでこの部屋にいるのか？

・・・何故、紅魔館で石像になってるのか？

私達は、石像とされた葵の姿を見たまま呆然としてしまっていた

## 第五十一話

（霊夢 side）

私達は、石像と化していた葵の姿を見た後、暫くそこで呆然としてしまっていた

・・・けど、何時までもそんな事してられない

「あんた達、次に行くわよ」

「・・・ああ」

「・・・おう」

「そうだな」

この中で割と平気そうなのは鬼灯ぐらいかしらね

私？私ほこんな感じだけど、結構怒ってるわよ

だって、葵にあんな事したのよ？許せるわけがないわ

絶対に、この異変主をボコボコにしてやる！

\*\*\*

私達は、また人里へと来ていた

慧音にまた聞く為にね

私達が離れてる間に、新しい情報が入ってるかもしれないからね

・・・といつても、紅魔館を調べたお陰で、大体異変主が絞られた

けどね

「慧音」

「ん？どうした？霊夢。妙に厳しそうな顔をしているが・・・何かあったのか？」

「ええ、思いつきりね」

私は、紅魔館での話を聞かせてやった

「・・・なるほど。なら、この話は辻褄が合うな」

「？話？」

「ああ、実はな、石像にされた女の夫が言っていたんだが『石像にされる前日、誰かが扉を叩いて、妻がその人と話をして、その後、道を教える為にちよつと出てくると言っていて出て行ったんだが・・・』と言っていたんだ」

「・・・声は？」

「鋭いな。声は女の声だったそうだ」

「・・・そう」

なら、もう彼奴で決定ね

絶対に、見つけてやるわ！

\*\*\*

「あら？文、丁度よかったわ。聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」

「あれ？霊夢さんが私にですか!?何でしょう？ネタにしてもよろしいですか!？」

「いや、聞かなくてもするつもりだろ、この鴉」

ル力が最もな意見を言ったはずなのに、全く聞いてないかの様な態度だったわ

「実は・・・」

↳少女説明・質問中

「ふむふむ、その人なら、魔法の森で見ましたよ」

「本当!?分かったわ。ありがとう」

「でも、本当にその人が今回の異変主なんですか？一番、ありえそうにないんですが・・・」

「だけど、一番怪しいんだぜ？それに、証拠も集まってるしな」

「そうだな。ただ、こんな事した理由は分からんが・・・」

「・・・そうね」

そう、彼奴がこんな事して何の得になるのかが分からない

「・・・そんな事はどうでもいい。さっさと見つけるぞ」

「・・・そうね」

そうよ。今は一刻も早く見つけて、葬を戻させないと！

「行くわよ！」

「ああ」

「おう！絶対に倒してやるんだぜ！」

「すまないな文。今回は助かった。ありがとう」

「いえいえ！今度取材させて頂きます！」



「・・・はあ、まあ、今回は助かったし、仕方ないか。ただし、霊夢も巻き添えだ」

「はあ!?ちよつと待ちなさいよ!何で私まで・・・」

「私の情報、役に立ったと言いましたよね?」

「・・・分かったわよ」

「やったー!やりました!それでは!頑張ってきてくださいね!」

こうして、ようやく文と別れることが出来た

・・・あの鴉め!

\*\*\*

私達は魔法の森を歩いていた

瘴気に関しては大丈夫よ。問題ないわ

・・・さて

「ようやく見つけたわよ、今回の異変、あんたが起こしたのよね?」

「・・・ええ。そうよ」

私達の前にいる奴は、私達に背を向け、顔を上に向けたまま、そう答えた

・・・その顔から読み取れたのは、懐かしいという感じかしらね

「・・・どうしてこんな異変をおこしたのかしら?」

「・・・どうして、ね。そんな事を聞いて、貴方は・・・いえ、貴方達は私をどうするつもりかしら?」

「そんなの、決まってるだろ?」

「そうだぜ!お前をぶっ飛ばす!!?それだけだ!」

「・・・そう」

そして、そいつはようやく此方を向いた

「さて、じゃあ話してもらおうわよ

「マリア」

「そうね、まだ私の目的は終わってないけど、いいわ」  
話してあげる

マリアは私達に向かってそう言った

特徴的な白髪の色

紅魔館のメイドの癖に、他の奴らとは違う服装

そして、人見知りか激しい奴

・・・それなのに、最初から気になっている事がある

それは、こいつの雰囲気が違うところ

一体、どうしてこんなに変わったのかしらね

・・・まあいいわ。葵を石にした罪。払ってもらわ!

## 第五十二話

（霊夢 side）

今からマリアが異変を起こした理由を聞こうとしている私達。  
私じやマリアにどんな得があるのか分からないからね。

……まあ、理由なんて聞かなくてもいいんだけど、気になるものは  
気になるんだから仕方ないでしょ？

「で？あんたがこの異変を起こした理由は？」

「……人間への、復讐よ」

「……は？」

今、何て言った？復讐？

「人間達がお前に何かしたのか？」

「ええ、そうよ」

そして、マリアは自分の過去を語り出した。

\*\*\*

私は、紅霧異変が起こる前に幻想郷に来たわ。

レティシア様に連れられてね。

でも、その前まではずっと外の世界にいたわ。

ここ以上に汚い世界にね。

私は随分前まで人が来ないぐらい奥深い森に母と一緒に住んで  
いたわ。

だけど、母は持病で死んでしまった。

そこからは私一人だけの生活。

別に寂しくなかった訳ではないけど、それでも一人で生活出来て  
いたわ。

だけど、ある時、私が住んでいた森に一人の男の子が来た。

私とその男の子はすぐ仲良くなったわ。

何時もとは言わないけど、二日に一回の割合で遊びに来てくれた。

私は、その男の子と遊ぶのが楽しかった。

……でも、私には隠し事があったわ。

それは自分がメデューサであること。

だから、その時は私は相手と目を合わせない様にしてたわ。

私が見たところも石にすることは出来るけど、というか、コントロール出来てなかったら勝手になるけど、その時はちゃんと出来ていたわ。

だから、男の子は石にならなかった。

私と目さえ合わせなければ石にはならないからね。

私はその男の子が大切で、友達だと思っていた。

母から話を聞いた中に、最も大切な友人は、隠し事をしても受け入れてくれる人、そして、真実を知つても受け入れてくれる人、というのがあったことを、私はその時思い出した。

だから、私はその男の子に自分の正体を明かした。

この男の子なら大丈夫。

私とその子は友達だから。

私にとっては最も大切な友人だから。

……でも、世界は残酷だった。

その男の子は、私の言葉を信じなかったから、私は自分の髪の毛を蛇に変えた。

そしたら、その男の子は怯え、出て行ってしまったわ。

……私に『怪物』って言葉を投げかけながらね。

その日から男の子は来なかった。

狼は途中から来たけど、その時、私は封印されていなかった。

だから能力は使えていた。

そして、私にとっては思い出さたくないぐらいに最悪の日が来た。

その日、男の子が久しぶりに来てくれた。それも笑顔でね。

男の子は私に外で遊ぼうと言ってくれた。

私はその男の子に会えた嬉しさで、久しぶりに一緒に遊べる嬉しさで考えもしなかった。

どうして私から逃げたのにまた来たのか？

前は最初の中で遊んでその後外だったのに、いきなり笑顔で外に呼び出したのか。

……考えておけば、すぐに分かった事だったわ。

でも、もう遅かった。

私が外に出ると、男の子は目を瞑って待つて欲しいと言ってきた。

私は了承したわ。

それ程にその子の事を信用してたからね。

……私から逃げたのによ。

でも、それでも可笑しいとはすぐに気付いた。

だって、複数人の足音が聞こえたから。

私は目を開けて足音の原因を見ようとした時に、殴られた。思いつきりね。

私は痛くて悲鳴をあげたわ。

だけど、私を殴った人も、それを見ていた人達も大喜び。

『怪物が悲鳴をあげた！』

『化け物退治が出来ることが証明された！』

そんな声が聞こえてきた。

……その声の中に、その男の子の声も聞こえた。

私は絶望したわ。

私は何をした？私は人間達に迷惑な事を何時した？

どうして化け物と、怪物と呼ばれなければならない？

どうして私も生きてるのに、人間達に被害をもたらししていないのに、怪物退治をされなければならない？

どうしてあの男の子は、私がこんな風になってるのに、喜んでいるの？

なんで？

なんで、なんで、なんで、なんで、なんで、なんで……なんで！

私は怒りがこみ上げてきた。

憎しみがこみ上げてきた。

だから、私は能力を、幻想郷の言い方で言えば『石に変える程度の能力』を使い、全員を石に変えた。

だけど、私の怒りは……憎しみは消えなかった。  
私は人に復讐しようと決めた。

……だけど、狼によりそれを断念せざる終えなかったわ。  
狼は『私』もろとも封印したからね。

私と能力は繋がっている。

だから、能力を封印されると私も封印される。

そして、私は人見知りの激しい女の子になってしまったわ。

……過去も全て忘れてしまったからね。

何も分からなくて、それが怖くて、世界の全てに恐怖した。  
でも、それでも生活は出来ていたわ。

ペス達とも途中から一緒に住む様になった。

そんな生活の途中でレティシア様に見つけてもらい……紅魔館の  
メイドをすることになった。

\*\*\*

「……これが私の過去であり、この異変を起こした理由よ」

「……てことは、あんたはあの執事に今まで封印されてたんでしょ？  
なのに、なんで今こうして出てきてるのよ。その執事は？」

「私が出てきた理由は、レティシア様が外に遊びに行ってしまった、寂し  
さの所為で精神が不安定になってしまったフランお嬢様が狂気に飲  
み込まれて、ちようどその時に遊びに来ていた私と狼は被害にあつた  
のよ。その時に狼が弾幕に当たってしまったって、吹っ飛ばされてしま  
い、その時に壁に勢い良く頭をぶつけてしまい、気絶した」

「……成る程。気絶した所為で能力が切れ、お前が出て来たのか」

「ええ、そうよ」

「は？だったら、狼が寝てる時だって……」

「その時はもう既に私は寝てるのよ？無理に決まってるでしょ？」

「そ、そうだったのか」

はあ、魔理沙は少し考えた方がいいと思うんだけどね。

……まあ、それが魔理沙らしいといえらしいんだけどね。

「だったら、なんで紅魔館の奴らも石にした？」

「追いかけてくるのは目に見えていたからね。それが面倒で石にした

「だけよ」

「……なら、なんで葵まで石にした」

ルカは殺気を抑えずに質問した。

「……少しぐらい隠しなさいよ。」

「……あの子は」

「回想」

「マリアさん。貴方は今度、異変を起こすつもりですよね？」

「え？あ、あの、な、な、なんのこと？」

「それが演技なのは分かっています」

「……はあ、ええ、そうよ。人間達に復讐する為にね」

「なんで!?! そんな事しても意味なんて無いんですよ!?!」

葵は勢い良く立ち上がって、私にそう言った。

「……そうかもね」

「だったら!」

「だけど、私の憎しみは収まらない。だから私は復讐する」

「そんな! 辞めて……」

「だから、少し大人しくしてくれないかしら？」

「え?……痛っ! うっ」

葵は痛いと言ったあとに倒れた。……どうやら効いたみたいね。

「へ、蛇……?」

そう、私は蛇を操り、噛ませた。

「ええ、即効性の麻痺毒を持つ蛇よ。これで貴方は身動き出来ない。

貴方も石になりなさい」

「……ごめん、霊夢、ルカ、鬼灯、魔理沙。今日は、帰れそうに、ないや」

そして、葵は石像になった。

「……さて、狼が何時目覚めても可笑しくないわね。さっさとこの連中を石に変えましょう」

「回想終了」

「……やっぱりね」

やっぱり、葵は予知夢を見ていたのね。そして、止める為に行動し

た。

「……なんで私達にも言ってくれなかったのよ！葵！」

「……それで？貴方達も私を止めるの？」

「ええ、勿論よ。そして、石になった奴らを戻してもらおう」

「そうだな」

「……私は貴方達に勝てないでしょうけど、それでも、目的を果たす為なら、戦うわ。来なさい」

「なら、俺も参加させてもらおう」

すると私達の後ろからその声が聞こえ、振り向くと、あの執事がいた。

「……狼。私を封印しに来たの？」

「ああ、ただし、マリアが石像に変えた人達を戻した後にな」

「そう」

「……悪いけど、やらせないわよ」

「……」

「だって……、」

「貴方は異変を起こしたこいつの身内でしょ？やらせるわけじゃないじゃない」

「……」

「それにね」

「？まだあるのか？」

私にとって、これが一番の理由。

「葵にあんな事したあいつを許せない。私達の手で倒したい。だから、やらせない」

「……ふっ、分かった。いいだろう」

そういうと、狼は一步下がった。

これで良いわ。

さて、絶対に勝って、葵を戻させる！絶対に！



## 第五十三話

霊夢達はマリアに向け弾幕を放ち、マリアはその弾幕の数が多すぎる為か避けるばかり。

弾幕ごっこが始まってからこればかりが続けられている。

「避けてばかりでいいのかしら？封魔針！」

「……」

霊夢の封魔針はマリアに向けて投げられたが、マリアはそれを簡単に避けてしまった。

「……悔しそうじゃないわね」

「これぐらいなら、避けられて当然と思ってたからよ」

「そうね。あんな単調な攻撃を避けない奴は、戦闘慣れしてない奴ぐらいね」

そんな会話を交わす二人。

「此方にも気を向けていなくていいのか？氷符『ダイヤモンドダスト』！」

ルカがスペル宣言をすると、小さい氷がいくつも空中を浮遊していた。

それらはバラバラに動いているものもあれば、マリアに向かっていくものもあった。

「……避けるのが大変な技ね。なら、式神『大蛇』」

マリアは自身の仲間の大きさに言えば人間の約三倍はあるだろう大蛇を呼び出した。

『お久しゅうございます。そのお姿を見たのは何年ぶりでございますしょう』

「悪いけど、話してられる場合じゃないの。手伝ってくれる？」

『勿論でございます』

「ありがとう。なら、蛇符『スネーク・ダンス』！」

マリアがスペル宣言をすると、大蛇はまるでダンスをするかの様に暴れだし、氷を全て砕いてしまった。

「……ちっ」

「さて、次は誰？」

「私だけ！魔符『ミルクィウェイ』！」

魔理沙の弾幕は、またもや大蛇により阻まれた。

『ご主人様をやらせるわけがないでしょう？』

「確かにそうだな！」

「……」

マリアは魔理沙が攻撃を阻まれたのに何故嬉しそうなのか、そんな疑問が頭の中に浮かんでいたが、すぐにその考えを消した。

「気が散っているぞ？火符『狐火』！」

「!!?」

『ご主人様!!?……くっ!』

「行かせるわけないでしょ！」

大蛇はマリアを守ろうと移動しようとしたが、霊夢の弾幕により出来なかった。

鬼灯の炎がマリアに当たりそうになっていたが、

「蛇符『蛇の捕食』」

マリアの髪が蛇に変わり、その蛇が口を大きく開けて炎を食べてしまった。

「な!?!」

「そんなのありかよ!?!」

「悪いけど、これも私の技だから、アリよ」

「……（迂闊に弾幕を撃てないな）」

「攻撃してこないのかしら？なら、此方からやらせてもらおうわ。蛇符『毒蛇達の宴』」

すると、何処にいたのかというほどの数の蛇が出て来た。

そして、その蛇達全てが霊夢達へと襲いかかる。

「!!!!」

霊夢達は自身の身の危険を感じ取ったのか、飛んでしまった。

そして、先程まで霊夢達がいた場所には蛇達が飛び込んできた。

「……」いつら、毒蛇か?」

「ええ、そうよ。ただし、人を殺す様な毒じゃなくて、麻痺させる程度

のだけどね」

そして、いつの間にか地面は蛇で覆い尽くされてしまっていた。シウルシウル、シウルシウル。そんな音が全ての方向から聞こえてきている。

「おいおい……流石にこの数は気持ち悪いぜ？」

「仕方ないでしょ？この森にいる全ての毒蛇を『集めた』んだから」  
「集めた……？」

「そう。私のもう一つの能力。『蛇を操る程度の能力』。この蛇達を操ってるのよ、私は。だから、この子達を退かせたいなら私を倒さないどね」

そう言いながら、マリアは蛇と化した自身の髪をウネウネと動かし

た。  
「貴方達がここで私に負けたなら、人間は全て死に絶えると思いなさい」

「そんなこと、させるわけないでしょ！霊符『夢想封印 集』！」

「そうだぜ！そんな事させる訳にはいかないぜ！恋符『マスタースパーク』！」

「……残念ね。その攻撃は私には当たらない。蛇符『大蛇の食事』」  
すると、大蛇は大きく口を開けると、『夢想封印 集』と『マスター

スパーク』を呑み込んでしまった。  
「な!？」

「蛇の力を思い知ったかしら？蛇達は大抵、人から嫌われ、疎まれる存在。だけど、蛇は貴方達よりも強くなれるのよ。何せ、こうやって私が力を与えれば、貴方達の技さえ呑み込む事が出来る。……貴方達に勝利はないわ」

マリアは顔を変えずに淡々と告げた。

「……私達は負けられない。負けられないのよ。だから、絶対にあんたに勝って、石化を解かせる！絶対に！」

霊夢がそう言うと、全員頷いた。

……弾幕ごっこはまだ終わらない。

## 第五十四話

霊夢達は、マリアに近付く機会を伺っているが、弾幕を撃てない状況である今、窮地に陥っていた

「どうしたの？反撃は？」

「・・・」

それを見ているマリアの顔はやはり変わらず、油断していなかった  
マリアは知っているからだ。霊夢の才能に、霊夢の強さに

「・・・なら、神技『八方鬼縛陣』！」

霊夢は大蛇の近くでスペル宣言をすると、その周りに天に登るように張られた結界が表れた

『なっ!?』

「これであんたは終わりよ!!?神技『天覇風神脚』！」

霊夢は、スペル宣言をし、大蛇の体にサマーソルトを決めた

流星に弾幕ではなく打撃の為か、素直に受けるしか出来ない大蛇

しかし、流星に反撃をしないのはとても思ったのか、自身の尻尾を使い、霊夢に攻撃を仕掛けようとしたが、『氷』により出来なくされてしまった

「やらせるわけがないだろ」

『くっ!この!』

大蛇は口を開け、霊夢を食おうとしたが

「食われるわけにはいかないわ!神霊『夢想封印 瞬』！」

『なっ!?!しまった!』

大蛇の周りにお札が投げられ、それらが全て大蛇に向かった

大蛇は、食おうとしている大勢の為に避けれず、諸にくらってしまった

『ぐおっ!』

「大蛇!」

大蛇は飛ばされ、マリアの横を通り過ぎてしまった

「これで残りはあるただけよ。諦めなさい」

「・・・ない」

「??」

「私の復讐が果たされていない今、諦めるわけにはいかない！博麗の巫女だからと使わないでいたけど、私の目的を果たす為に、犠牲になってもらうわ！邪目『ゴルゴンの目』！」

すると、マリアの髪は普通の髪に戻っていたのがまた蛇に戻り、目の色も、薄いピンクから赤色へと変わっていった

とても汚く濁った赤色に

「！全員散るわよ！」

「わ、分かったぜ！」

「ああ！」

「流石に、本気なのは伝わってくるからな。いいだろう」

そして、霊夢達は四方へと散らばった

「・・・逃がさない。絶対に全員を石像に変えてあげる。さて、まずは誰が見つかるかしらね」

マリアはそう呟くと、蛇を操り、霊夢達を探し始めた

・・・が

「！」

マリアは何かを察知し、避けた

そして、そちらを見ると

「・・・」

誰もいなかった

（・・・すぐに逃げたのでしようね。賢明な判断ね・・・でも）

「逃がすわけ、ないでしょ？」

\*\*\*

マリアは、蛇の報告を受け、ある木を指していた

蛇の話では、その木の上に人がいるらしい

「・・・見つけた」

そして、マリアが見つけたのは

「あいつ、まだあの場に残ってるのか？」

魔理沙だった

魔理沙はあの場所を監視し続けている訳ではないが、そういうふう

に考えているだけである

「まずは一人目」

そして、マリアが魔理沙を石像に変えようとした・・・が

「霊符『夢想封印』！」

「な！しまっ・・・きゃああああ！」

後ろから攻撃されてしまい、倒れてしまった

「ふう、ようやく終わりね」

「ん？どうしたんだぜ？霊夢」

「あんた、私が弾幕撃つてなかったら今頃石像だったわよ？」

「マジかよ!?!」

こうして、マリアとの弾幕ごっこは終わった

くマリアsideく

「・・・ん」

「マリア、起きたか」

「・・・狼？」

「ああ」

私は何故か狼に抱えられていた。お姫様抱っこに似たような抱え方で

えっと、どうして私はこうなってるんだっけ？

確か・・・あの時、私は人間に復讐しようとして、それで、弾幕ごっこをして、大蛇が倒れて、それからゴルゴンの目を使って、魔理沙を見つけて・・・

「・・・そっか、負けたのか、私」

「ああ、だからコレで異変は終わりだ」

「・・・そうね」

「あら？起きたの？マリア」

「・・・博麗の巫女」

「霊夢よ。起きたのなら、さっさと葵を石像から戻してくれないかしら？」

「・・・それは」

「何よ？戻せるでしょ？」

まあ、戻せない訳ではないけど……

「……時間がかかるかもしれないけれど、いいかしら？」

「……はあ？」

まあ、そうなるわよね

「……どうして、理由は？」

霊夢は明らかに不機嫌な顔をしている。嘘をついたらまた弾幕を撃たれそうね。まあ、嘘を付くつもりはないんだけど

「石像になった人を解放するには、私の涙が必要だからよ」

「？涙を？自然に出せないのか？」

「それが難しいから時間が掛かると言ってるのよ」

「……何時まで掛かるわけ？」

「分からないわよ、そんな事」

「……」

さて、どうする？博麗の巫女？

## 第五十五話

（霊夢 side）

アレから約四日が経った

今だにマリアは葵達を戻せずにいた

「あんた！早く戻しなさいよ！」

私達も流石に我慢の限界がきた

だから、今マリアに催促をしているけど・・・

「だから、涙を流せないから仕方ないでしょう？」

この返答よ

「あんた、最初から戻す気あったの？」

「まあ、そう言いたくなるでしょうね。だから、私の返事は・・・NOよ」

「！お前！巫山戯るな！」

「貴方達と対峙した時に言ったでしょ？私の目的は『人間への、復讐よ』と。だから、戻す気なんてさらさら無かったわよ」

「・・・つまり、今はあるんだな？」

「・・・鬼灯、どういうことよ」

「こいつは、今『無かった』と言った。つまり今は有るということだ・・・だろ？マリア」

「ええ、私は貴方達に負けた。なら、被害を齎した私が貴方達の言うことを聞くのは当たり前でしょ？ただ、どうやって涙を流すか考えてるけど思い付かないのよ・・・」

マリアのその言葉は嘘に思えなかった

「・・・」

ルカも反応しないとなると、本当に嘘はついていない

・・・一体、どうすれば

「マリア、入るぞ。いいいな？」

「ええ、いいわよ」

マリアが了承すると同時に入って来たのは、狼と・・・

「あんた、一体今まで何処に・・・」



「クスクス、外の世界よ♪」

レテイシアがいた

↳レテイシアside↳

「・・・そう、そんな事があったのね」

「はい。レテイシア様、私の涙を『強制的』に流させる事って、出来ませよな？やっつけて頂けますか？」

　　マリアは真剣な表情でそう言ってきた

「クスクス、良いわよ♪・・・それにしても、メデューサとしての貴方は初めてね」

「そうですね。初めて会った時だって、狼に封印されてましたから」

　　まさか、封印が解けるとこんな風な性格・口調になるとは、思わなかつわね

「クスクス、それじゃあ、流させるわよ♪」

　　そして、私はマリアに強制的に流させた

↳葵side↳

「・・・あれ？」

　　私は、その場で目を開けた

　　なんで目が開くの？私は、確かマリアさんの能力で石像に変えられていたような「葵〜！」

「うわっ！霊夢！どうしたの？」

　　霊夢が私に抱きついてきました

「葵！あんた、なんで勝手に一人で行くのよ!?少しは私達を頼りなさいよ!!？」

「ご、ごめん・・・」

　　・・・罪悪感が込み上げてきますね

「はあ、全く・・・」

「葵、お前な・・・」

「おおー！葵が本当に戻ったぜ！」

「だから戻るって言ったでしょ？」

「いや、信じて無かった訳じゃないんだぜ？」

「本当かしらね？」

「マリアさん、異変は・・・」

「もう終わったわよ。私の負けでね」

「そうですか、良かったです!」

本当に良かったです。マリアさんがこれ以上、罪を犯さなくて・・・

「・・・言っとくけれど、私の憎しみは一生消えないわよ」

「・・・」

「まあ、暫くは大人しくしておくわよ。また狼に封印されるんだからね」

「そんな・・・」

「悪いけど、私の目を見るのは辞めなさい。また石像に戻っても、今度は知らないわよ」

「・・・」

「それじゃあ、狼。もう良いわ。封印して頂戴」

「分かった」

そう言うと、マリアさんが目を瞑ると、少しして崩れ落ちるようになり倒れてしまった

「!マリアさん!」

「安心しろ。一時的に眠ってるだけだ。起きればお前達が知ってるマリアに戻っている」

「・・・そうですか」

マリアさんは、また自由を失ってしまうんですね。・・・本当にコレで良かったんでしょうか？

「クスクス、これで良かったのよ♪葬」

「・・・え?レティシアさん?」

え?確か、レティシアさんは外の世界に遊びに行ってたはずじゃ・・・

「クスクス、一旦、戻ってきたのよ。もうすぐ、私が遊びに行った場所で秋祭りっていうお祭りが始まるからレミイ達を誘おうと思ってね♪」

「そ、そうだったんですか!レミリアさん達が喜ぶますね!・・・!霊夢!レミリアさん達は?」

「ああ、それなら今から戻しに行く所よ」

「私も行くよ!」

「・・・はあ、どうせ来るなど言っても聞かないんでしょう? 良いわよ」  
「ありがとう! 霊夢!」

私は、久々に見た霊夢に向かって笑顔でお礼を言いました

そして、紅魔館の皆さんを戻したあと、私達は人里にも行き、石像と化した人達を戻しました

・・・霊夢が宴会の準備をするから、待って欲しいと言っていましたね。そして、私もその手伝いをします。宴会の準備を霊夢一人に任せるのは気が引けるので

宴会の日には、レティシアさん達が秋祭りから戻ってきて二日後ぐらいとなりました

・・・けれど、この時の私は忘れていました

宴会の一日前に、もう一つ、異変が起こることに

## 永夜抄

### 第五十六話

〈葵 side〉

宴会一日前・・・というよりも、あともうすぐで明日になるという時間に、私達は博麗神社に向けて飛んで向かっています

理由は二つ

一つ目は、人里がなくなっていたこと

・・・まあ、これについては大体、想像が付きますけどね

二つ目は、これはルカと鬼灯が気付いたのですが、月が『本物』の月ではないこと

これについてはよく分かりません

妖怪達にとっては死活問題だということは分かるのですが、『誰がやったのか分からない』んです。容姿も場所も

・・・これを入れると、もう一つ、不思議な事があります

それは、『私がこの未来を予知出来なかったこと』

まあ、この前の事もあつて忘れてる可能性もありますが、それはそれでおかしいんです

私の予知夢は、異変が終わるまで何度だつて見ることになります

最初はよく分からない所から始まり、最後には、どういう展開になるのかを見ることとなります。が、それすらありません。今回の事がなければ異変だということに気付きませんでした・・・何故でしょうか？

「葵、着いたぞ」

「あ、うん」

考えているうちに着いてしまいましたね。まあ、霊夢にも事情を説明しておきましょう

だって、絶対に問い詰められますから・・・(汗)

「霊夢！異変だよ！」

「ええ、気付いてるわよ。というか、紫から言われるまで気付かなかつ

たわよ。・・・葵、なんで言わなかったわけ？」

ああ、凄く怒ってますね、霊夢。でも

「ごめん、私も分からなかったんだよ」

「・・・は？葵も？でも、あんたの能力は」

「うん、私の能力なら予知出来たはずなのに、見なかったんだよ。この未来は」

「・・・忘れたって可能性は？」

紫さんが真剣な顔で聞いてきました

「その可能性もありますが、さつき見たばかりなのに、忘れたって可能性はありませんよ。私の能力は、異変が終わるまで続きますから」

「そうね。ごめんなさいね、疑ったりして」

「いえ、分かっていますから謝らないで下さい」

「そう？なら有難いのだけけれど」

そう言うと、紫さんは霊夢とまた話し出しました

私は、鬼灯達の方に顔を向けると

「・・・」

「鬼灯？どうしたの？」

鬼灯が何か考え込んでいました

「・・・いや、何でもない。気にするな」

そう言うと、鬼灯は考えていたことを振り払うかのように頭を振っていました

「??」

一体、何を考えていたのでしょうか？

〈霊夢side〉

葵の能力が気付けない異変なんて、無いに等しい。にも関わらず、今回の異変を今さつき気付いた葵。この言葉が嘘とは思えなかった。というか、葵が嘘をついていたら分かる

なら、なんで葵は気付かなかったのかしら？

今回はヒント無しで異変を解決しに行くしかないのよね・・・面倒臭いわね

「はあ・・・」

「こら、溜息なんてついてないで行くわよ？ 霊夢」

紫は何時になくやる気だ。まあ、妖怪からしたら死活問題だから仕方のないことかもね

まあ、いいわ

「そうね。じゃあ、行くわよ？ あんた達？」

「ええ」

「ああ」

「勿論だ」

「うん！ 行こう！ 霊夢！」

そして、私達は異変を解決する為に、空を飛んで異変主を探す事にした

## 第五十七話

く葵sideく

私達はまず、消えた人里の理由を知る為に人里があつた場所へと向かつています

そして、飛び始めてから数分後

「?アレなんだろ?鬼灯」

私達の前方に、綺麗に光る小さな光が見えました

「・・・蛍の光だろ」

「え?でも、蛍ってここで生息してるんだっけ?綺麗な川じゃなかった?」

「となると、妖怪と化した蛍だな」

「なるほど」

確かに、それならここにおいても不思議はありませんね。納得です

そして、近付くと容姿が分かりました

触覚が二本頭から生えていて、髪は緑のショート。虫の羽に似た形をしている黒のマントを着ている男の子に見える女の子がいました

「その妖怪。邪魔だからどきなさい」

「お前達!月を返せ!」

「どくつもりはないみたいね。なら、容赦しないわ!霊符『夢想封印』!」

「そうだな。氷符『氷針』!」

「えっ?ちよ、ちよっと!ま・・・うわああああ!」

彼女は霊夢とルカの容赦の無い弾幕を受けて、落ちてしまいました。大丈夫でしょうか?心配です

「ちよっと待ってて!私、治して!後にしなさい。今は異変を解決することが先決よ」わ、分かりました。紫さん」

彼女を治しに行こうとしたら、紫さんから鋭い目を向けられてしまいました。・・・怖いです

「それじゃあ、行くわよ」

「ああ、そうだな」

そして、私達は先へと進みました

・・・といつても、もう直ぐそこなんですけどね

\*\*\*

人里があつた場所へと着くと、慧音さんが何かを守るようにして立っていました

そして、私達を見つけると、何時でも攻撃出来る様な体制へと変わりましたが、私達や霊夢を見ると、どうして来たのかを察してくれた様で、体制を戻してくれました

「なんだ、お前達だったか・・・」

「なによ？文句があるわけ？」

「いや、ない。それで？何の用だ？」

「要件は二つよ。一つは、人里が何処にいったか。もう一つは、今回の異変を起こした奴に心当たりは？」

「二つ目ののは、私の能力で隠してある。だから、人里は何処にもいっていない。そして、二つ目だが・・・」

そう言うと、慧音さんは少し考えてから、何かを思い出したような顔をして

「そうだ。多分だが、あの竹林の奥に住んでいる者たちが関与しているかもしれない。話を聞いて来たらどうだ？」

そう言ってくれました。それよりも・・・

「え？あの竹林の奥に住んでる人がいるんですか？彼処って、外に出るのも一苦労するんじゃないか・・・」

「ああ、だが、実際にいる。私の友人が前に言っていてな、『私のライバルが住んでいるんだ！私は其奴を殺してやりたい！』と言つてたな」

「こ、殺す!?慧音さん！止めなくていいんですか!？」

私は、物騒な一言を聞き、慧音さんにそう聞くと、慧音さんは困つた顔をしながら

「ああ、大丈夫だろう。なにせ、彼奴も、相手も、『死なない』からな」

「し、『死なない』？えつと、それはどう言う・・・」

「話すと長くなるからな、ここまです。それで？行かなくていいのか



？」

「いえ、行くわよ。情報をありがとう」

「いや、いいんだ。早く異変を解決してくれるならな」

そこで慧音さんとは別れました。最後に慧音さんを見ると、手を振ってくれていましたので、私も振り替えてから離れ、竹林へと入りました

\*\*\*

私とルカはこの竹林に入るのは二度目ですが、やはり変わらず迷いやすい場所した

私達は霊夢の勘がなければ迷っていたでしょう。．．．霊夢の勘は本当に万能というか、なんというか

「．．．」

「？霊夢？どうしたの？」

霊夢が急に止まりました。どうしたのでしょうか？

「そこにいる奴、出て来なさい」

霊夢がそういうと．．．

「クスクス、やっぱりバレちゃったのね。凄いわね♪霊夢」

特徴的なクスクス笑いが聞こえてきました

「．．．え？」

そして、竹林に入る少しの月の光のお陰で見えた容姿は、金髪の長髪で、その先が跳ねていて、黒のゴスロリを着た小さな女の子．．．つまりは、見覚えのある姿の人が出てきました

「れ、レティシアさん？」

そう、奥から出て来たのは、紛れも無く、レティシアさんでした

「クスクス、ええ♪そうよ♪それにしても、本当によく分かったわね♪  
霊夢」

「アレだけ分かりやすく『私だけ』に殺気を向けてたら、そりや分かるわよ」

「クスクス♪そうね」

「レティシア、あなた、何で此処にいるのかしら？」

紫さんは、嫌な想像でもしたようで、顔からは『当たって欲しくな

い』と言うような感じの考えが読み取れます。そして、冷や汗も流れています

「クスクス、何でか？そんなの決まってるでしょ？その二人の実力を知ろうと思ってるね♪だから、もともとこの異変を起こそうとした人達にわざわざ頼んだのよ♪『異変を起こしてくれないか？』ってね♪」  
「・・・つまりは、本来は起こらなくてもよかった異変を起こした主犯はあんたってことね？なら、あんたを退治すればいいわけね」

そう言うと、霊夢はお祓い棒やお札を構えました

「クスクス、ええ♪といっても、別に私を倒さなくても、私が満足すればこの異変は終了よ♪まあ、そんなつもりはないけれどね♪」

そういうと、レティシアさんは少し空に浮かびました

「クスクス、あ、此処でいうのもなんだけれど、葵、貴方、未来を予知出来なかったでしょ？それね、私が貴方に予知させない為に狼と同じ能力を作って封印していたからよ♪」

「・・・え？そうだったんですか!？」

私が未来を見れなかったのは、そのせいだったんですか・・・

「クスクス、ええ♪そして、貴方達は知らないでしょうけど、他にも、この異変を解決しようとしている人達がいるのよ」

「そう、で？」

「クスクス、だからね♪私が信用している従者達に、その人達の事を任せてるのよ♪」

\*\*\*

その頃の魔理沙とアリスも、また相對していた

「おいおい、なんの冗談だぜ？」

魔理沙達が相對しているのは、くおんと朱鳥だ

「冗談だと思うのか？悪いが、冗談ではない」

「私達は、レティシア様からお前達を自分の合図があるまで足止めをして欲しいと頼まれたからやってるんだ」

「まあ、そういうことだ。諦めろ。さて、無駄話をしていないで・・・やろうか」

\*\*\*

幽々子と妖夢はというと・・・

「あらあら？ 貴方達が相手かしら？ ペス？ ユニ？」

「はい。その通りです」

「まあ、レティシア様の言うことに私達はある程度は逆らわないからね。それに、今回は面白そうだったからね」

「貴方達にとっても有害じゃないかしら？」

「大丈夫です。危なくなったら私達の負けと認めて、去りますので」

「さて！ じゃあ、やろうか！」

\*\*\*

レミリアと咲夜の方では・・・

「はあ、どうしてこの前『封印』され直されたばかりなのに、また解かれたのかしら？」

「しよがないだろ？ レティシア様からのご要望だ。諦めろ」

「・・・貴方達、お嬢様に逆らうつもりかしら？」

「悪いが、俺達の中での命令の優先順位は、レティシア様が一番だ。諦めてくれ」

「そう、なら、やりましょうか？ マリア、狼」

「そうね。やりましょうか」

\*\*\*

霊夢と葵はレティシアに指名された為に、二人で戦うしかなくなっ  
てしまった

そして、レティシアは何時通りの笑顔を浮かべながら

「クスクス、それじゃあ、始めましょうか？ 妖怪賢者の一人。レティシア・スカーレット。貴方達の実力を凶らせてもらうわ。そして、貴方達は、私の『本気』をどれだけ出せるのかしらね？ クスクス♪」

レティシア対霊夢と葵の戦いが、始まろうとしていた

## 第五十八話

くおんside)

私達は、魔理沙と前にレティシア様が話していた少女、アリスと戦っている

理由は単純で、レティシア様からのご命令だ

別に、拒否権もあったが、断るような命令でもなかったから受けた  
そして、今は、お互いに弾幕を撃ちあっている

「埒が明かないわね！スペルカード！」

アリスという少女は、どうやらスペル宣言をするらしい。さて、どんなスペルなのだろうか？

「紅符『赤毛の和蘭人形』！」

そして、出てきたのは人形だった

「・・・人形か。精巧に出来ているな」

「今は褒めてる場合じゃないだろ。来るぞ！」

私がそう言うと、人形から沢山の青と赤の弾幕が出てきたが、それら全て、周りに拡散された

・・・だが

「朱鳥」

「分かっている。ちゃんとよく見て避けた方がいいだろう」

そう言うと、私達は弾幕が来る方をよく見て、避けた。一つも当たらずにね

「やっぱり、当たらないわね」

「当然だ。なら、今度は此方からだ」

今度は朱鳥がスペル宣言をした

「炎符『炎舞神楽』！」

すると、炎が幾つも飛び交い、拡散した

それら全てがバラバラに飛んでいた・・・が、弾幕と弾幕の隙間が狭いためか、魔理沙達は避けにくそうだった

「くっ！」

「ちよっと！人形に当たったら燃えるじゃない！」

「ちよつと待て。心配するのはそこか？」

私は呆れてしまった

朱鳥を見たが、朱鳥も同様のようだ

「次は私だぜ！一気に決めるぜ！恋符『マスタースパーク』！」  
すると、彼奴は私に向かってマスタースパークを撃つてきた

「花符『花の守り』」

だが、私は花で自身を守った

・・・まあ、花は当然散ってしまったが

「私のマスタースパークが防がれちゃったぜ！」

「しかも、花で・・・」

「さて、次は私だ。武神『二尾狐』」

私は、二尾の狐を呼び出し、何時もと同じ行動をすることにした  
・・・同じ行動をすれば、相手は避けやすくなるが、あの二人は私  
が同じ作戦を毎回取ることを知らないからな。大丈夫だ

「行くぞ、二尾狐。火符『狐火』！」

「！アリス！避けるぞ！」

「言われなくても、分かってるわよ！」

そして、私達の周りに狐火が出され、魔理沙達に向かった・・・が、  
簡単躲されてしまった。まあ、当然か

「次！花符『花弁の舞』！」

次もまた同じのを使ったが、やはり躲された

「おいおい、同じ行動しても、私には当たらないぜ？」

「私達ね」

魔理沙にやれやれ、みたいな反応をされてしまった。が、これでい  
い

「・・・そうだな。だが、少しは周りを見たらどうだ？」

「?・・・!」

そう、彼奴らは今まで気付いていなかったが、朱鳥がいなくなつて  
いるのだ

「何処に！」

「ここだ」

その声を聞いた魔理沙達は声が聞こえた後ろに振り向いた

「スペル！」

「やっべー！避けるぞー！」

「分かってるわよー！」

「逃がすわけないだろう？」

私は、避けようとした魔理沙とアリスを竹を操り、動きを封じた

「な!?!これは鬼灯と同じー！」

「ああ、そうだ。私の能力は『自然を操る程度の能力』。つまりは鬼灯様と同じ能力だ。私は、この能力を誇りに思っているよ。なにせ、鬼灯様と同じ能力だからな」

私は二人にそう説明した。そして・・・

「炎符『ファイヤー・ロード』！」

そして、炎の様に赤いレーザーが二人を襲った

ここで炎ではないのは、燃えてしまうからだろうか

炎の弾幕も、当たれば火傷だからな

そして、勝負が終わっ・・・

「・・・彗星『ブレイジングスター』！」

・・・てなかった

魔理沙は自分が持つ箒に捕まり、朱鳥に突撃した

朱鳥は避けようとしたが、回避するのが遅かった様だ。腕が一本折れてしまった音がした

「うっ・・・」

「うお！すまねえ！折るつもりはなかったんだ！」

「・・・いや、それは分かっている。そして、これぐらいなら平気だ」

「はあ!?!いや、折れたんだぜ！弾幕ごっこは諦めた方が・・・」

そう言った魔理沙の心配そうな顔は、朱鳥の腕を見て驚きの顔となった

「お、おい・・・。なんで腕が治ってるんだ？」

「ああ、私の能力は『再生する程度の能力』。この能力は私が『不死鳥（フェニックス）』だからある能力だ。再生するスピードが尋常じゃ無く早いし、たとえば死んだとしても生き返る事が出来る能力だ」

「へエ、そうなのか」

「ああ。そして、もう一つは『炎を操る程度の能力』。だから・・・」

そして、最初に飛ばした炎を操り・・・

「こういうことも出来る」

「な!？」

「え!？」

魔理沙とアリスの体に当たるか当たらないかの瀬戸際のような感じで炎を周りに浮かせていた

「・・・な？アリス。お前は私が気付いていないとでも思ったのか？」  
「くっ!」

アリスは、スペルカードを持った状態のまま動けなくされていた

「はあ、まあ、こういう状態になったんだ。負けを認めた方がいい。下手すれば火傷じゃすまないぞ?」

私は、腰に手を当てながら、魔理沙達にそう問いかけた

「・・・嫌だぜ」

「・・・何?」

「私は諦めない!絶対に!アリス!」

魔理沙はそう言うと、アリスの名前を呼んだ

「・・・はあ、分かったわよ。トコトン付き合ってあげるわ!スペル!」  
そう言うと、アリスは持っていたスペルの名前を言った

「蒼符『博愛の仏蘭西人形』!」

すると、六体の人形が出て来てアリスの周りを回り、青色の鱗型の弾幕を飛ばして来た

私達は最初は避けたが、そこから弾幕が向きを変え、数も増え、色も青から白へと変わり、また私達を襲った

避けるのは難しかったが何とか避けた・・・と思ったら、また向きを変え、数も増えに増え、白から赤へと変わった

「くっ!」

私達は避けようとしたが・・・

「おっと!移動はダメだぜ!魔符『スターダストレヴアリエ』!」  
さらに魔理沙のスペルまで出されて、よけい避けずらくなっ

まった

「うわ！」

「！朱鳥！」

どちらの弾幕なのかは分からないが、朱鳥に当たってしまった様だ  
「大丈夫か？」

「なんとか・・・」

そして、弾幕が消えた・・・と思ったら

「魔砲『ファイナルスパーク』！」

本当にあのミニ八卦路から出てるのか？と疑問に思うような極太  
レーザーが撃たれた

「・・・はあ、仕方ない」

そう言つて、朱鳥はスペルカードを出した

「スペルカード。聖炎『浄化の炎』」

すると、大きな炎がファイナルスパークを受け、消し去ってしまった  
た

「はあ!？」

「さて、じゃあ、今度こそ大人しくしてもらおうか。草符『草締め』」  
すると、技名の通り、草が二人の動きを封じるかのように、体を縛つ  
た

「くっ!!?」

「・・・魔理沙」

「・・・ちっ、仕方ないぜ」

そう言つたのを聞いた私は、締めるのを辞めた

すると、魔理沙は私達に指をビシツと指しながら

「今回は私達の負けだぜ。だがな、私は諦めないぜ？次に戦う時は絶  
対に勝つんだぜ！」

「そうか。私も負けるつもりはないがな」

こうして、私達と魔理沙達の弾幕ごっこは、私達の勝ちで終わった



## 第五十九話

く幽々子sideく

「これでどうですか！幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

「甘いよー！」

妖夢はユニに横一線に切ったけれど、ユニはそれを後ろに後退して避けた

「次は私の番だよ！童話『オオカミと七匹の子山羊』！」

ユニがスペル名を宣言すると、とても獰猛そうな顔をした二本足で立つオオカミと、七匹の此方も二本足で立つ子山羊が出てきて、子山羊は妖夢の足を抑えて逃げられなくさせ、オオカミは妖夢を襲った  
「そちらも甘いですよ！」

けれど、妖夢はそのオオカミを斬って、スペルブレイクした。勿論、子山羊もいなくなったわよ

「ちよつと、あんまりだと思おうよ？オオカミを斬るなんてさく」

「ですが、こうしなければあのオオカミは私を追いかけてくるでしょう？？」

「まあ、そうだけどき・・・」

「ということ、続けますよ！」

そして、妖夢達は弾幕ごっこの続きをし始めた

その間の私とペスはというとね

「・・・てことがあって、結局、妖夢にダメって言われちゃって、焼き鳥を食べ損ねたのよく！もう、あの焼き鳥、食べたかったわく」

「仕方ありませんね。それに、その焼き鳥は妖怪だったんでしょう？食べてもまずいだけでは？」

「もしかしたら美味しいかもしれないわよく？」

「それもそうですね。でしたら、今度、紅魔館に遊びにいらして下さい。その時にでも、焼き鳥をご用意しましょう」

「本当？ありがとうね♪ペス」

楽しく談笑しているわ♪

それにしても、ペスとの談笑は意外と面白いのよね。もう、本当に

意外だったわ

「それでねく……」

「ほうほう……」

「だからねく……」

「そうですね……」

「……てか貴方達！いい加減に談笑するのはやめて（下さい）！」

あらま、結局妖夢達に怒られちゃったわ

「えく、面白いのにやめろというの？貴方達、酷いわねく……シクシク」

「幽々子様、泣かないで下さい。貴方達、幽々子様を泣かしてそんなに楽しいのかしら？ほら、謝りなさい」

「いや、ここで謝るのはなんか理不尽な気がするんだけど!？」

ペスは冗談で言った言葉に、ユニはツツコミを入れた。けれど

「幽々子様。私が悪かったです。すみませんでした!!？」

「いいわよ♪妖夢」

「ちよつと待って!?!なんで謝るのが妖夢で許すのが幽々子なの!?!普通、逆な気がするんだけど!？」

妖夢は私に謝ってきたから、私は許してあげたわ。……ユニが突っ込んだみたいだけれど、私には聞こえないわ♪

「あー、もう！妖夢！この二人は放つといて、私と妖夢の二人での弾幕ごっこだよ！私が負けたら通っていいからね！」

「勿論です！それでは！魂魄妖夢！私に斬れぬものなど、あんまりない！」

そう言って、妖夢は突っ込んだけれど、アレじゃあダメね

「妖夢の奴、アレじゃあユニに勝てないぞ」

ほら、姉であるペスも言ってるわ。まあ、聞こえていないのだけれどね

「そういえば、ユニの能力と正体を私は知らないのだけれど？」

「え？レティシア様から聞いていないのですか？」

「ええ」

「そうですか。でしたら、お教えしましょう」

そして、妖夢はユニを斬ろうとしたけれど『何故か斬れなかった』  
どうしてかは分かるけれどね

「な!？」

「どう?この透明な盾の頑丈さは。私はそう簡単に斬られはしないよ  
!」

そして、ユニは盾を勢い良く押し出して、妖夢を飛ばした

「くっ!」

けれど、妖夢は受け身を上手くとって、直ぐに体制を立て直した

「・・・それで?あの子の正体は?」

「・・・あの子はペガサスではなく、ユニコーンなんです。そして、能  
力は『願いを叶える程度の能力』です」

「それって、自分の願いだけ叶えるのかしら?」

私がそう疑問を投げかけると、ペスは首を横に振った

「いえ、自分の願いだけではなく、他人の願いも叶えることが出来ま  
す。ただ、一つの命を復活させるような願いは・・・まあ、多少の代  
償が必要になりますが出来ます」

「・・・その多少の代償って?」

私は、聞いてみた。でも、聞いてはいけないと直ぐに分かったわ  
・・・だって

「・・・」

ペスの顔が、凄く、悲しそうだったから

「・・・代償という言い方が違いましたね」

代償ではなくて、犠牲があつてましたね

ペスは私にそう言った

そして、その言葉で、私は全てを理解した

「・・・そう」

私とペスは、妖夢達の決着がつくまで、言葉を交わすことはなかつ  
たわ

くユニsideく

姉さんが幽々子と私の能力について話してるのが聞こえたけど、今  
はその話し声がやんでる

はあ、全く

その話をして、私の気分が落ちるって言うなら分かるけど、姉さんの気分が落ちてちや意味がないじゃん

「全く、私の能力を無闇矢鱈に使わせないための嘘をなんで姉さんが言うのかな？（ボソツ）」

そう、別に私の能力を使って人を生き返らせるのに代償はないただ、昔、それを知った奴らが、私の能力を使って命を復活させようとする事が多くなった為に、今はああやって嘘を言っている

ちなみに、本当に犠牲を払ってでも願いを叶えようとした奴には、逆に災厄を振りまいてやった

「だったらー畜趣剣『無為無策の冥罰』！」

妖夢の奴は、何度も縦に斬って私に斬撃を浴びせてきたけれど、私はその全てを交わした

「そんなんじゃないよ！妖夢！童話『ラプンツェル』！」

妖夢はとても驚いている。まあ、仕方ないだろうね。だって「くっ！何処に！」

今の妖夢は何も見えていない。見えているのは、多分、暗闇だけラプンツェル

この童話は、ラプンツェルというお姫様とそのお姫様に恋をした王子のお話で、一時期、王子の目は見えなくなるけれど、最終的にはラプンツェルが流した涙によって目が見えるようになる

詳しい話はその童話を読んだ方が早いよ

そして、今の妖夢はその王子の状態

だから、妖夢には何も見えていない

まあ、勿論、このスペルは時間制限があるから早めに決着をつけなくてはいけないけどね

「神槍『一角獣の角』」

私は、一角獣の角で作られた槍を両手で持ち、妖夢のお腹を思いっきり殴った。あ、尖った方じゃなくて、刃が付いてないのね

「うっ！」

そして、その力が強かったせいか、妖夢は飛ばされて、竹に思いつきり背をぶつけて気絶してしまった

「・・・ふう、これで終了つと」

「お疲れ様、ユニ」

「あ、姉さん」

姉さんと幽々子が此方に来た

「妖夢もまだまだね」

「いえ、妖夢は強いと思いますよ。ただ、まだ修練が必要とも思いますが」

「ふふ♪ありがとう♪」

そして、この弾幕ごっこは私達の勝利で終わった

・・・でも、幽々子も姉さんも戦ってないけど、いいのかな？

## 第六十話

くレミリア side

メデューサと妖狼

初めて会った時、私はこの二人と戦う運命を見た

けれど、狼の方ならいざ知らず、マリアの性格じゃあ戦う事は無理だと、私は心の何処かで勝手に決めつけていた

けれど、それは違った

あの人石異変の時、私は油断していたからこそ石化されてしまった  
・・・いつもの雰囲気纏っていないマリアにね

あの時、私が油断していなかったら、私は石化されていなかったでしょう

だから・・・

「天罰『スターオブダビデ』！」

「・・・」

「！」

狼は普通によけたけれど、マリアはとても辛そうに避けた

「・・・やっぱりね」

「・・・」

「貴方に石化にされて、それから戻った後、すぐにメデューサについて調べてみたのよ。そしたら、メデューサは体が弱いらしいわね」

「！・・・ええ、そうよ」

メデューサの事はこう書かれていた

メデューサは、ステンノー、エウリュアレー、つまりはゴルゴン三姉妹の末っ子

その上の姉妹二人は不死だったが、メデューサだけは不死ではなかった

元はとても美しい三姉妹だったけれど、その末であるメデューサはアテナの怒りを買って、三姉妹はとも醜い姿へと変えられてしまった。それがゴルゴン

ゴルゴン三姉妹はひっそりと暮らしていたけれど、ある時、ペルセ

ウスが来て、ゴルゴンとなつてしまったメデューサの首を切り落としてしまった

残った二人の姉妹は行方知れずとなっていると書かれていた

そして、それを読んで私が建てた仮説が『メデューサは体が弱い』ということ

上の二人が不死なのに、メデューサだけが不死じゃないなら、それが一番しつくりくるでしょ？

「それで？答えはどうなのかしら？マリア」

「・・・正解よ。私は身体能力は低いわ。けれど、それだけ。別に避けられないほど体は弱くないわ」

「・・・そう、なら咲夜」

「はい」

↳ 咲夜 side

私はお嬢様から命を受け、時間を止めてナイフを投げようとしたけれど、それは出来なかった

「・・・やっぱり、貴方は動けるのね、狼」

「当たり前だ。俺に能力は効かないからな。だから、お前が時間を止めていても動ける」

「・・・本当に厄介ね」

時間を止めれる私が優位に立てなくなる。これは結構痛いよ？

「素直に時間を止めるのをやめたらどうだ？」

「・・・そうね」

私は空に飛び、手にナイフを持ちながら

「コレをした後にね！幻符『殺人ドール』！」

マリアに向かってナイフを投げつけた

そして、私は時間を進め出した

「！幻符『蛇の脱皮』！」

そして、ナイフがマリアに刺さった・・・と思ったけれど違った

そこには、マリアの形をした皮があった

「・・・蛇の抜け殻ね」

「そういうことよ」

「……」

マリアはその皮の直ぐそばから出てきた

「さて、此方もやろうか。幻視『オオカミの集団』」

狼がスペル宣言をすると、数匹のオオカミの『幻』が出てきた  
「やれ」

狼のその一言で、『幻』のオオカミ達は私達を襲って来た

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

お嬢様がグングニルを出すと、いつもなら投げる所を、今回は『幻』を消すために、横薙ぎに振り払った

勿論、『幻』は消えたは

「……やっぱり、ダメか」

「ええ、だって、私達はお互い、どんなスペルを持っているか知っているもの。そうそうに勝負が決まるとは思っていないわ」

お嬢様はそう言いながらも、お嬢様は自身が出せるMAXスピードでマリアに向かい、グングニルでお腹を殴打した

「うっ……」

マリアは目で追うことが出来ず、後ろに吹っ飛ばされたけれど、なんとか気絶しないように自分の力で立ち上がった

「あら、立ち上がったのね。でも、コレで終わりよ！」

「何をするかは知らないけど、させない！式神『大蛇』！」

すると、とても大きな大蛇が何処からともなく出てきた

『ご主人様は私がお守りします！』

「ええ、お願い……」

マリアはそう弱々しく言った。どうやら、やっぱりアレが効いていたみたいね。フラフラしているわ

「マリア、大丈夫か？俺達の負けと言ってもいいんだぞ？」

「いえ、やるわ」

……何かの意地なのかもしれないわね

「なら、コレを受けて見なさい！魔符『全世界ナイトメア』！」

すると、三方向にクナイ型弾幕が高速で撃たれ、波紋状にゆっくりとだけけれど、中型弾幕が撃たれた



「くっ！」

『ご主人様！』

狼は直ぐ様回避行動をとって、大蛇は自分を盾にしてマリアを守っていた

・・・けれど、それでもダメだったらしく、大蛇は流石にやられ過ぎて倒れてしまい、マリアもまた、気絶してしまった

狼はというと・・・

「・・・あら？あなた、その姿は」

「ああ、そうか。この姿を見せたことはなかったな」

狼の黒い髪は白くなっていた

「あなた、何者？」

「・・・咲夜は日本人だったよな」

「そうだけど、それが何か？」

「なら、分かるかな。『八犬伝』って本を」

「それが何よ」

すると、狼は少し息をついた。どうやら、さつき避けたばかりで少し疲れているみたいね

「八房（ヤツフサ）って知ってるか？」

「ええ、知っているけれど・・・！あなた、まさか・・・」

「その通り、俺は八房だ。まあ、普段はオオカミの姿でいるがな。あ、レミリア様は図書館でも調べて下さいね。説明が面倒なんで」

「・・・」

こ、これがあの八房？全然印象が違うのだけれど・・・

「まあ、そういうことだ。そして、今回の勝負は俺達の負けだ。通ればいいや」

「そ、そう。ありがとう」

こうして、私とお嬢様は先に向かった

## 第六十一話

（葵 side）

私と霊夢は、レティシアさんと弾幕ごっこをしている……のですが

「なんであんたは弾幕撃ってこないのよ!」

そう、レティシアさんは私達に向かって全くと言っていいほど弾幕を撃ってきていません

「クスクス、『絶対に撃たなきゃいけない』なんてルールは何処にもないでしょ?」

「だったら、私から撃ってやる気にさせてやるわ! 霊符『陰陽印』!」  
すると、レティシアさんの周りに沢山の陰陽玉が浮かび、それが全てレティシアさんに向かって行きました

「クスクス、甘いわよ♪」

けれど、それら全てを後ろに後退して避けたり、右に避けたりして、その全てを避けてしまいました

「くっ! なら! 葵、お願い!」

「分かったよ! 呪術『鬼呪封印』!」

私はスペルでレティシアさんの動きを封じました

そして、そこに霊夢がスペルを撃ちます

「夢符『封魔陣』!」

そして、それはレティシアさんに直撃したと思いましたが、妙に手応えがありません

霊夢もどうやら同じ様で、警戒心を解いていません

「……きやあ!」

「! 葵!」

私は後ろから『誰か』に思いつき蹴られてしまいました

……まあ、誰かは分かるのですが

そして、身近にあった竹に思いつきりぶつかってしまいました。……痛いです

「クスクス、あら? 気絶しなかったわね♪ 良かったわ。打ち所が悪

かったら一発で気絶だもの♪クスクス」

「うっ・・・、それでも、痛いものは痛いのですが・・・」

「クスクス、それは我慢しなさい♪葵」

「分かっていますよ。レティシアさん」

まあ、当然この場で私を蹴るのはレティシアさんだけですな

「クスクス・・・あら？」

レティシアさんが話に夢中になっている間に結界が張られていました

「境界『二重弾幕結界』！」

・・・あのく、話している途中にそれは酷い気がするのですが？

ま、まあ、私も何も言わないので同罪ですがね

「クスクス、なら、レミイと同じ方法で脱出しましょうか」

弾幕が結界内で縦横無尽に飛び交っている中、とても余裕そうにしながらそんな言葉を発したレティシアさん

レミリアさんと同じ脱出方法となると・・・

「神弓『アルテミスの弓』」

そして、真横に回避しながらも結界にむけて、矢を撃ちました

すると、結界はたった一撃で壊れてしまいました

「な!?!」

「そんな!?!結界が!」

「クスクス、この一撃だけで壊れるなんて、まだまだ甘いわね♪ね? 霊夢?」

レティシアさんはとても分かりやすく挑発をってきます

対して霊夢はというと・・・

「はあ!?!甘い?この私が!悔しい!絶対にあんたに一撃を入れてみせるわ!」

「クスクス、頑張つて頂戴♪」

レティシアさんの態度は相変わらずです

「なら!神技『八方鬼縛陣』!」

今使用したスペルで、霊夢を中心として結界が上空へと張られました

つまりは、若干、閉じ込められました

ま、まあ、私達やル力達に被害はないので、大丈夫、ですよね？

「神霊『夢想封印・瞬』！」

霊夢がスペル宣言をすると、四方八方に扇に見える形で弾幕が置かれていました

それも、一瞬で

霊夢の得意とする『瞬間移動』を使って配置したのでしようね、きつと

・・・けれど、レティシアさんは笑みを絶やしてはいません

いえ、寧ろ、さつきからの笑顔と比べるとより笑っている様な・・・

「クスクス、いい技ね。だけど、まだ甘いわよ。スペル」

ここでようやく初めてレティシアさんはスペル宣言をしました

「神風『嵐の神の風』！」

すると、結界内に嵐と思ってしまうほどの強い風が吹きすさびました

私も思わず目を瞑り、手で顔を守る様にしていました

パリーン！っと、そんな音も聞こえてきました

そして、風が止んだのに気付いた私は、手をどけ、目を開けてみると

「・・・え」

霊夢が弾幕として使っていたお札は全て地面に突き刺さり、結界は壊れていました

「クスクス、はい♪二枚スペルブレイクね♪次は何かしら？」

「・・・くっ！」

霊夢の顔はとても悔しそうでした

「・・・霊夢」

「・・・葵」

私と霊夢は目を合わせました

・・・たったコレだけで霊夢の考えが分かってしまうのは、おかしいんでしょか？それとも、長年、一緒にいるから身に付いたのかな？

「・・・スペル！」

私は、霊夢の補助の為に、スペル宣言をしました

「治癒『太陽鳥』！」

私は霊夢の体力を回復させる為というわけではなく、霊夢の攻撃力を上げる為にこのスペルを使いました

「ありがとう、葵。さて、コレが私のラストスペルよ！『夢想天生』！」

霊夢が持つスペルの中でも最強のスペル

とても鬼畜なスペルのうえ、霊夢に攻撃は当たらない

だから、これはラストスペル

これ以上、スペルを使えない

「クスクス♪」

「・・・あんた、なんで笑ってられるわけ？」

そう、霊夢の言うとおり、どうして笑っていられるのでしょうか？

私だったら流石に笑っていられなくなるのですが・・・

「クスクス、さあ？何でかしらね？その答えを・・・」

教えてあげるわ

その言葉を聞いた時、私は背中ぎ寒くなりました。どうして？

「！レティシア！貴方、本気を出すつもり！」

紫さんの声は何処か焦っている様に聞こえました

鬼灯の方を見てみると

「・・・」

何も言わないけれど、何処か険しい顔をしています

「クスクス、大丈夫よ、紫。本気を出すつもりはないから♪安心して頂戴」

そして、レティシアさんが一枚のスペルカードを持ちました

「クスクス、模倣『鏡写し』」

すると、そのスペルカードが、私も、そして霊夢も、見覚えのあるものへと変わりました

「『夢想天生』」

「！くっ！」

霊夢が弾幕を撃つと同時に、レティシアさんも弾幕を撃ちました

どちらも、相手を狙う弾幕の為に中々終わらず、結局、時間が来てしまいました

「ハア、ハア・・・」

「霊夢ー!」

私は霊夢に近付き、霊夢の状態を見ました

霊夢は疲れ切っているのに対して・・・

「クスクス、どうしたの?そんなに疲れ切って♪」

レティシアさんは今だに余裕そうです

「クスクス、さて、終わらせてあげましょう」

レティシアさんがもう一枚スペルカードを持つと

「暗黒『絶望の闇』」

その瞬間、私達の周りが真っ暗闇になりました

そう、本気に真っ暗に

光が全くないのです。月明かりもありません

・・・あの竹林ですら月明かりが多少入っていたのにです

「クスクス♪」

そんな楽しそうな声が、全方位から聞こえて来て、何処にいるのか

も予想がつきません

「ハア、あいつ、何処に・・・」

「クスクス、ハイ♪終了♪」

「・・・え?」

「神槍『ゲイボルグ』」

後ろからそんな声が聞こえたと思ったたら何かに殴打されてしまい

ました

「きゃあああー!」

そして、何かにまた思いっきり当たってしまいました

私が気絶しそうになりましたが、ギリギリ意識を留めています

けれど、余り保っていただけません

なので、周りを見てみました

隣には私と同じ様に勢い良く竹に背中をうったであろう霊夢がいました

・・・ん？あれ？

なんで私はアレが竹だと分かったんでしょう？

答えは簡単です。周りの風景が見えているからです

・・・どうやら、あの暗闇からは解放されたみたいですね。良かったです

私は暗闇が怖いですからね

「・・・」

「クスクス、ちよつとやり過ぎたみたいね」

レテイシアさんの声が聞こえた為にそちらを見ると、弓とは別の武器を持っていました

どうやら、槍の様です

そして、それを確認した直後、私の意識はなくなりました

## 第六十二話

く葵 side

私が目を覚ますと、辺りは真つ暗でした。それこそ、光が全くないぐらいに

にも関わらず、私自身の体はよく見えます

手も普通に見えますし、服も普段から着ている巫女服です

「・・・ここは、何処なのでしょうか？」

私は取り敢えず、歩いてみることにしました

もしかしたら、霊夢やルカ、鬼灯や紫さんが居るかもしれないので

・・・怖いと思う気持ちを抑えてですよ

そして、そうやって探してみても、誰もいませんし、何処にも着きません

ここで漸くですが、これはもしかしたら、夢なのかもしれないね。

私の

久し振りに、アレだけの暗闇を体験してしまったからでしょう

私の中の恐怖が大き過ぎたせいで、夢でもこうやって経験してしまうことになるとは・・・

・・・それでも

「・・・どうしよう。霊夢！ルカ！鬼灯！紫さん！魔理沙！誰かいないの！ねえ！」

私は自分が出せる声量で出しましたが、誰の声も聞こえませんでした

「・・・どうしよう。本当に、どうすればいいの？」

私の心は、もう恐怖に負けてしまい、体も震えています

そして、ついには立っていられなくなり、体の震えを止める様にして包み込みながら、座り込みました

「・・・怖いよ、霊夢、ルカ。誰か、助けて・・・」

この暗闇の中にいると、今にも、聞こえてきそうです

母の怒鳴り声が



『葵!?!何処にいるの!?!出てきなさい!』

その声が聞こえたと思つた瞬間、私の体は強張りました

私は、直ぐに耳を塞いでしまいました

母の怒鳴り声が聞こえない様に。聞こえていない振りをして

『葵!そこにいたのね! 貴方は何で家事も出来ないの! この出来損ない! そんな能力持っても唯の疫病神なのよ!』

私は、後ろから聞こえてきている声を聞きたくなくて、耳を塞いだままにしていました

『そんな疫病神を置いてあげている私に感謝はないのかしら? 貴方を産んであげた私に感謝は? . . . お母さんの声が聞きたくないほどに私が嫌いなのかしら?』

『そんな事はないよ! お母さん!』

私は、自分はそんな風に思っていないと伝える為に、お母さんの方に振り向きしました。勿論、耳に当てていた手も退けて

そして、久方ぶりに見た母の顔は、歪に笑っていました

『なら、なんで食器を割つたの! そんな事も出来ないほどにグズなの! 貴方は?』

『いえ、割ってしまったのは手が滑ってしまつて. . .』

『言い訳なんていらないわ!』

そう言うと、母は私の頬を思いつきり叩きました

そして、その勢いに負けてしまい、倒れこんでしまった私に（正確にはお腹に）蹴りを入れました

「うつ. . .」

『そんなグズにはコレだけのお仕置きじゃあ足りないわ。来なさい!』

そういうと、母は私の髪を引っ張りながら、近くにある私の嫌いな物置小屋へと連れて行くとうとうしました

「! いや! 彼処だけはいやだ! 行きたくない!」

私は抵抗したけれど、抵抗も虚しくそのまま物置小屋へと押し込められてしまいました

『そこで一晩暮らさない! いいわね!』

そう言うと、母は扉を閉めてしまいました

「お母さん！開けて！お願い！嫌だよ！此処にはいたくない！ねえ！  
お願いだから！開けて！お母さん！」

私は扉を叩きましたが、そんな事で開く扉はありません

物置小屋の扉も、板で塞がれています。その板を退ければ開けることは可能ですが、中からでは無理です

「ルカ、霊夢、鬼灯、魔理沙。誰か、此処から、私を、出して、お願いだから……」

私は、涙を流しながらも、仲のいい四人の名前を呼びましたが、開けられる気配はありません

……そんなの、分かっていることなんです。何せコレは

私の『悪夢』だから

「……うっ、うっ、ひっく、ルカ、霊夢、鬼灯、魔理沙……誰か……」

そして、私が見ていた夢はそこで終わりました

\*\*\*

「……ん」

私が目を覚ました際に最初に見た光景は白い天井でした

そして、お腹の辺りに重さを感じた私はそこを見ると……

「え？り、霖之助さん？」

私の横で寝ている霖之助さんがいました。手も握られていました

「……なんで、此処に霖之助さんが」

「……ん？……あ、葵！起きたのかい！大丈夫かい？怪我は!？」

霖之助さんは、起きた途端に私の体を心配し始めました

「わ、私は大丈夫ですよ！怪我だって、自分で治せますし……」

私は霖之助さんに大丈夫だと言うことを分かって貰う様に、そう言いました

「そ、そうか……。良かった」

そして、霖之助さんはそう言いながらも、顔は何かを決心したかの様な顔をして、私に向きました

……もしかして

「……」

「あ、葵、こんな状況で、しかも、君はこうして倒れていて、起きたばかりでこんな事を言うのも可笑しいとは思う。けど、聞いてくれないか？僕は・・・」

霖之助さんが何かを言おうとした瞬間、扉が大きな音を立てて開きました

「クスクス、葵、大丈夫・・・」

扉を開いて入って来たのはレティシアさんでした

「・・・あ」

「・・・え、えつと」

「クスクス、ごめんなさいね？何かお邪魔してしまったみたいね♪」

レティシアさんは本当に謝っている様に思えないような感じです  
う言いました

「あ、いや、邪魔と言うわけじゃあ・・・」

「クスクス、そう。なら、霖之助。一旦外に出なさいな。もう居ては駄目だつてこのの医者が言っていたわよ」

「え!? そうなのかい？わ、分かったよ・・・」

そう言う霖之助さんの顔はとても残念そうな顔をしていました

その顔のまま、外に出て行きました

「クスクス、葵。大丈夫かしら？」

「え？あ、はい。大丈夫です。・・・あの」

「クスクス、何かしら？葵」

私は、一つの疑問をぶつけてみました

「異変の方は・・・」

「クスクス、異変は解決よ♪」

「・・・え？で、でも、私達は負けましたよ？」

「クスクス、最初に言ったでしょ？『二人の実力を知る為』つてね♪そして、私は二人の実力を知れた。それでこの異変は解決よ♪宴会については日が伸びちゃったけどね♪まあでも、お疲れ様♪」

「わ、分かりました」

・・・まあ、異変が解決したことは良いことですね。これ以上の事は何も言わないでおきましょう

「クスクス、それじゃあね・・・あ、一つ言い忘れていたわ」

レティシアさんは扉の付近まで行つてから此方に振り向きましました。どうしたのでしょうか？

「?どうしました?レティシアさ」貴方、霖之助が告白してきたら断るつもりだったんでしょ?」・・・」

・・・どうやら、レティシアさんには全てお見通しの様ですな

「・・・はい」

「・・・葵。私は貴方の過去を紫や鬼灯からしか聞いていないけれど、コレだけは言わせてもらおうわ。・・・少しぐらい、幸せになつても良いんじゃないかしら?そんなに他人の幸せばかり気にして自分の幸せを蔑ろにしていたら、一生幸せになれないわよ?」

「・・・」

「・・・まあ、あくまで私の意見で貴方がどう考えるかは私の知ったことではないけれどね。それじゃあ、今度こそ、さようなら」

そう言いながらレティシアさんは今度こそ帰っていきました

「・・・幸せ、ですか。私はもう、今の生活で幸せを感じているのです  
がね」

私はそう呟き終わると、また横になりました

・・・今度は、悪夢を見ずにすみました

## 第六十三話

（葬side）

私は、宴会会場となつている博麗神社へと来ています

そして、私の目の前にはレティシアさんと一人の見知らぬ人達がおり、その隣に何故かてゐさんや私が寝ていたベットに来てくれたいた鈴仙さんや永琳さんもいました

「あの、レティシアさん。てゐさん達は分かりませんが後の人は・・・」  
「クスクス、紹介するわね♪この子は蓬莱山 輝夜さん。蓬莱人であり、元・月の民よ」

「わかりました。初めまして輝夜さん。私は神無月葵といいます。よろしくお願いします」

「ええ、よろしく」

私は輝夜さんに挨拶し、彼方も仕返してくれました

「クスクス、コレでいいわね。それじゃあ、後は貴方達で楽しんで頂戴♪」

レティシアさんはそういうと、別の場所へと行きました

「・・・貴方」

「?何でしょう?永琳さん」

永琳さんが何故か真剣な顔をして此方を見てきました

「・・・ちよつとこつちに来なさい」

「・・・え?」

そう言われると、永琳さんは私の腕を掴んで移動し始めました

「お、お師匠様!」

「永琳ならすぐ戻ってくるでしょ。私達はその間、飲むわよ!」

・・・そんな声が後ろから聞こえてきた気がします

\*\*\*

私達が歩き始めて数分後、もう宴会会場から離れてしまいました。勿論、会場から離れたということは、周りには私たち以外誰もいないと言つことです

「あ、あの、どうしました?永琳さん」

「・・・貴方、虐待を受けていたんじゃない?」

「!いい、いえ、受けていませんよ?」

私は必死に隠そうとしましたが、永琳さんの目はその言葉を聞くと先程より鋭くなりました

「・・・嘘おつしやい。貴方、嘘を付けないタイプの人ね」

そう言われると、もう観念するしかありません

「・・・はい。でも、どうして分かったんですか?私、その時の傷は全て能力を使って治したはずなんですが」

「何と無く分かるのよ、私にはね」

・・・霊夢みたいな勘って事でしようかね?

「・・・」

「・・・貴方、どうして虐待を受けていたわけ?周りの人達は?」

「・・・」

「・・・答えたくないって事かしら?」

「・・・はい」

「・・・そう」

私がそういうと、永琳さんは諦めてくれた様です。良かった

「まあ、いつかは話してくれると信じておくわ」

「・・・はい。ありがとうございます」

・・・私は、いつか話せる日がくるのでしょうか?

いえ、来て欲しくないですね

これは、私が抱え込むべき物ですから

「さて、じゃあ戻りましょう。貴方、お酒は飲めるかしら?出来れば一緒に飲んで欲しいのだけれど?」

「あ、はい。一応は飲めます。苦手ではありませんけどね。でも、いいですね!一緒に飲みましょうか!」

私は永琳さんの提案に乗り、宴会会場へと戻りました。すると

「!あ、葵!」

「!り、霖之助さん!?どうして此処に?」

霖之助さんが何故か宴会会場にいました

「い、いや、君にこの前渡すのを忘れてしまっていたプレゼントがあつ

てね、それを渡しに来たんだ。ち、ちよつといいかな？」

「は、はい！」

霖之助さんは顔を少し赤くしながらそう言いました。そして、私も多分、頬が赤くなっているのでしょうね。後ろで永琳さんがニヤニヤしている気がしますので

「すみません。永琳さん。先に飲んでいて貰っても構いませんか？」

「ええ、私は別に構わないわよ。貴方達の状態を見ただけで満足だからね」

「え、永琳さん・・・」

「ふふ♪」

永琳さんは私の態度を見て微笑んでいました

でも、私としては居ずらくなってしまうので、兎に角、霖之助さんについて行くことにしました

\*\*\*

今度は宴会会場からそう離れて居ない所に私達はいました

「あ、葵・・・」

「な、何でしょうか？霖之助さん」

・・・駄目ですね。どうしても緊張してしまいます。告白ではないにしろ、された時は断ると決めているのに

「こ、コレを君に渡そうと思つて・・・」

霖之助さんが私に渡してくれた物は、万華鏡でした

「・・・え？いいんですか？」

「あ、ああ。君に渡そうと思つて、その、手作りだから悪いところとかあるだろうけど、いいかな？」

「・・・え？手作り？万華鏡を手で作ったんですか!？」

「あ、うん。そうだよ」

ま、万華鏡を手で作るつて、それも職人さんというわけでもないはずの霖之助さんが、私の為に？

こんな、霖之助さんの気持ちを知っていながら、自分の気持ちを偽つて、断ろうと決めているのに私に？

私は、自然と涙が出てしまいました

「え!? あ、葵、どうしたんだい? 気に入らなかつたのかい?」

「い、いえ、ただ、嬉しくて」

「・・・え?」

私は、ちゃんと涙を拭き取り、霖之助さんの手を握りながらお礼を言いました

「霖之助さん。万華鏡、ありがとうございます。大切に使用させていただきますね!」

「! あ、あ、ああ、そそ、そうして欲しい。ど、道具達も、よろ、喜ぶだろうからね」

霖之助さんは、顔を赤くして、すぐどもりながらもそう言ってくれました

そして、私は霖之助さん手作りの万華鏡をもらう事が出来ました

・・・初めて、未来を見れなくて良かったと感じた日でした

↳レティシア side↳

さて、今回の異変の始まりの説明ぐらいしておいた方がいいのでしょうかね

私は、あの永遠亭で異変が起こることを見透かし、異変が起こる少し前・・・というか、昼頃の事よ

私は、あの日直ぐに永遠亭に向かったわ

この幻想郷の結界の事、そして、私の目的を話にね

そして、話をして、自分達が月の民から見つからないと分かると、とてもホッとしていたわね

けれど、教えた後に私は彼女達に私の目的を果たす為にその異変を起こして欲しいと頼んだわ

勿論、反対していたわよ?・・・約一名を除いてね

「あら? 面白そうね。それじゃあ、もし貴方の所の従者が負けたとして、私達の元に来た奴がいたとしたら、弾幕ごっこ、してもいいわよね?」

「クスクス、勿論よ!」

こうして輝夜達は私の目的の手伝いをしてくれたってわけよ

それに、あの後、楽しかったか聞いたら楽しかったと言っていたし、



結界オーライね♪

あ、ちなみに言うなら、私は葵の見ていた夢を知っているわよ？見透かしたからね

でも、その事については葵に何も言っていないけれどね

一生、言うつもりもないのだけれどね

だって、あの子の問題に部外者同然の私が突っ込んでいい話でもないしね

・・・さて、次の異変はまだ随分先ね

「・・・あ、そう言えば、もう直ぐあの周期が来るわね」

まあ、でも、言わなくてもいいでしょう

あの子達がどう動くかも、私は見て見たいしね♪

さて、楽しみにしているわよ？ 霊夢、葵

# 鬼灯の日常1

## 第六十四話

（鬼灯side）  
神無月神社

この神社では、少し不思議な事がある  
今回の話はそれが関連した私の日常を話そう  
そう、その日はあの異変が終わってから少し経った頃のこと

\*\*\*

私と葵は、神社からまた石段を登った場所に行こうとしていた  
ルカはその場所に限り着いてこない

彼奴は、嫌いだからな。『アレ』がいるというだけで嫌気がさしている  
みたいだからな。仕方がない

「……着いたね、鬼灯」

「ああ、そうだな。此処は何時も変わらないな」

石段を登りきると、私達の目の前には一面のピンク色  
まあ、つまりは桜だ

何故かこの場所にある桜は全部散ることが無い。だから、ずっと咲  
いている

ちなみに、この場所の他にも、神社の横にも咲き続けている桜が沢  
山ある。勿論、その場所にも縁側があるがな

「……それじゃあ、行こうか、鬼灯」

「……そうだな」

はあ、私も行くのは億劫だが、仕方ない  
あんな奴でも、元は神社の巫女だったんだ。私が行かなくてどうす  
る

そう自分を焚きつけて、葵に着いて行くことにした

\*\*\*

「今回も来たよ……お母さん」

私達は、桜ばかりの道を歩き、その奥にある先代巫女の墓へと来た

・・・本当に億劫だ。なんでこの巫女の為に来なければ行かんのだ  
・・・いやいや、ダメだ。仮にも私は神社の神だろ。巫女の墓参り  
もしなければいけないだろ

「・・・」

そういえば、離れたことがなかったな

先代の名前は神無月蒼華（かんなづき あおか）。それが葵の母親  
の名前だ

能力は『癒し、治す程度の能力』のみ

葵がもし、『未来と過去を見る程度の能力』が無かったら、葵の事を  
愛してやれた哀れな巫女

葵の事を愛しておけば、私もルカも、好きで入れたであろう哀れす  
ぎる巫女

まあ、だからと言って、それが葵を虐待してもいい理由にはならな  
いかな

「はい、コレ。お母さんが好きだったキキョウの花束だよ」

そう言うと、葵はしゃがみ込み、蒼華の墓に丁寧に花束を置いた

「・・・」

「お母さん、今回の異変でね、私、初めて蓬莱人を見たんだよ。って、  
コレは輝夜さん達に失礼かな？お母さんはどう思う？」

・・・葵は、どれだけ蒼華に虐待されても、母親を嫌うことは無かつ  
た

多分、葵は嫌ったら最後、蒼華に二度と愛されることは無いと思っ  
たからだろう

だから、母親の虐待には耐えたし、母親の言うことは全て聞いた  
どれだけの無茶振りをされたとしても、それを失敗したら自分の所  
為だと考えた

・・・だが、結局は葵は愛されずに蒼華は死んだ

私とルカは死んだ時も泣かなかったが、葵は泣いた  
だが、すぐに泣き止んだ。自分のすべきことを悟ってな

・・・満身に泣けないままにな

「・・・葵」

「ん？どうしたの？鬼灯・・・」

葵はそこから立ち上がり、此方に顔を向けたと思ったら、動きが止まった

「？どうした？何かあるのか・・・」

私も気になり、後ろを振り向いて見ると・・・

「ん？もしかして、葵か？」

蒼華のパートナーでもあり、霊夢の母親でもある霊紗がいた

\*\*\*

その後、霊紗は蒼華の墓参りをし終え、そのまま神社に来た

「はい、霊紗さん。粗茶ですが・・・」

「ああ、ありがとう、葵」

そう言うと、霊紗はお茶を少し飲み、私達に顔を向けながら話しかけてきた

「いや、それにしても、葵も大きくなったな。蒼華の葬式以来会ってないが、いや本当に大きくなったな」

「そうですね？まあ、年は重ねていきますからそうなのかもしれませんね」

葵は少し笑みを浮かべながらそう言った

そうして、葵が少しお茶を飲もうとした時

「そういうえば、葵達は全然人里に来ていない様だが・・・」

この話題が出た途端に葵の動きがピタツと止まった

「・・・まだ、人里の奴らの対応は変わらないか。全く」

「い、いえ！人里の皆さんの対応は大丈夫ですよ！皆さん、優しいですし・・・」

葵が慌てながらそう言うが、霊紗は目つきを鋭くして葵を一度見ると、今度はルカを見て

「ルカ、葵の言っていることは本当か？」

「いや、嘘だ」

霊紗はルカにそう問いかけると、一秒と経たずにルカは答えた

「ルカ！」

「葵」

葵はルカに何で言ったのか聞こうとしたが、靈紗のたった一言で葵は動きを止めた

「れ、靈紗さん?」

葵は靈紗の方を見ると、靈紗は鋭い目つきで葵を見ていた

それを見た葵は、怒られるとも思ったのか、目を瞑ったが、すぐに暖かい体温を感じた様だ。目を開けて自分の状況を見た

そして、今の状況は、葵は靈紗に優しく抱擁されていた

「れ、靈紗さん・・・?」

「葵、無理はするな。お前は一人じゃない。お前のそばにはルカや鬼灯、それに私の娘の靈夢やその親友の魔理沙だっている。だから、少しぐらい甘えてくれ」

「あ、あの、私は自分が一人だとは・・・」

「ああ、お前ならそうは思っていないだろう。だがな、お前は周りに甘えているか?」

「!!」

・・・葵は確かに、周りに甘える事がない

周りに甘えさせてばかりで、自分が甘えることをやめている

「少しぐらい、甘えてもいいんだぞ?特に、今の場合は私がいる。一時期、お前の母代わりでもあった私にぐらい、甘えてくれないか?私が寂しくなる」

「れ、靈紗さん・・・」

靈紗はそれだけというと、葵に抱きつくのをやめた

「さて、それじゃあ、今回は私が料理を作ろう」

「・・・え!で、でも、それは靈紗さんに悪いですから私が・・・」

「さっき言ったばかりだろ?『少しぐらい甘えてくれないか?』って。

まあ、葵の正確じゃあ、自分から甘えに行くのは無理だろうから私が甘えられる様にしてやろうと思ってるな。だから、今回は葵は待ってる。いいな?」

靈紗が少し語彙を強くして言うと、葵は渋々了承した・・・が、心なしか嬉しそうだ

「それじゃあ、作るぞ!」

そして、靈紗が夕食を作り、私達はそれを囲んで少し騒がしくしながらも一緒に食べた

・・・もし蒼華があんな奴でなければ、こんな未来もあつたのだからな

私は、そう考えながら食べていた

## 第六十五話

く鬼灯sideく

時間は昼頃

私は、白玉楼にいる

その理由は、妖夢の修行に付き合っているのだ

まあ、私は仮にも妖夢の師匠だ。前任に任された形でだがな

「はああああー！」

「……」

妖夢は剣を上段から振り下ろすが、私はそれを右に避けてかわした  
そして、その勢いに乗り、後ろ回し蹴りのような形で妖夢の脇腹に  
蹴りを入れた

「うっ……」

妖夢は少し呻き、後ろに後退しながらもなんとか立っていた

「ふむ、なんとか持ちこたえたか」

「ええ、なんとか」

「……妖夢、少し休むか？」

「いえーまだ行けます！はあああああー！」

妖夢は自身が出せるトップスピードで私に向かって来て、横一線に  
切ろうとした……が

私は自身の愛刀でそれを受け止めた

「えっ」

「はあ、仕方がないか」

そして、私は自分の力を少し出して、その剣を押し返し、体制を崩  
した妖夢の腹目掛けて思いっきり蹴りを入れた

「うわー！」

すると、妖夢は近くにあった木へと飛ばされ、背中をぶつけた

そして、妖夢がまた起き上がろうとした所で、私は妖夢の首スレス  
レに剣を向けた

「動くな。少しでも動くと言を飛ばすぞ」

私は、殺気を少し出して妖夢を脅した

すると、妖夢は冷や汗を出して、動くのをやめた

「はい！鬼灯の勝ち〜！」

と、こんな状態でさつきまで私達の修行をお茶菓子を食べながら見ていた幽々子がそう言った

近くにはレティシアもいる

「クスクス、まあ、コレばかりは仕方ないわね。鬼灯の方が剣士としても実力が上だものね♪しかも、私達の中でも剣を使えるのは鬼灯だけだから、教えられる人もいないしね♪」

「…嘘つくな。本気状態のお前ならそれぐらいたやすく出来るだろ。なんせ、お前の本気状態の能力は「クスクス、鬼灯。今はそれを言う時では無いと私は思うのだけれど？」…それもそうだな」

言ってしまうえば、こいつは自身の力を封印した際、もう二つあった能力を封印している

…まあ、あんな能力は反則だと私は思うがな

まあ、兎も角だ。その力を封印しているお陰で、こいつは今は弱体化している

だが、それでも妖怪賢者としての実力は持つてるあたり、恐ろしいと思う

本当に、こいつが敵じゃなくてよかったよ

「さて、それじゃあご飯にしましょうよ、私、お腹空いちやったわ〜」

「お前は常時空いてるだろ」

「まあ、今日はレティシア様もいらっしやいますし、食料の心配はしなくて済みそうですね」

妖夢は、レティシアがいると言うことでホツとしていたが、私は見た

レティシアの顔が何時もより二割まし笑っている事に

「クスクス、何を言っているの？妖夢」

「…え？」

「クスクス、私が、何時、食料を出してあげると言ったかしら？」

「え…そ、そんな、まさか…」

妖夢の顔はとても絶望しきった顔をしている。はあ、仕方ない



「おい、レティシア。お前も一緒に昼を食べるんだ。その礼も兼ねて何かしてやっても・・・」

私がそう言うと、レティシアは

「クスクス、私は食べないわよ?」

と、首を傾げながらそう言った

「・・・はあ?だが」

「クスクス、私は吸血鬼よ。料理に血を入れてくれるなら話は別だけれど、そんなの、無理でしょう?だから、私は私の能力を使って、人間の血をだしてそれを食べるのよ。だから、私は関係無いわ」

・・・反論の余地が無い

「・・・はあ、仕方ないか」

「ええ!?鬼灯様!」

・・・妖夢、頼むからそんな捨てられた子供の様な目をするな。後、レティシア。お前も嬉しそうに笑うな

「クスクス、他人の不幸は蜜の味よ♪」

「お前の場合は血の味だろ」

「クスクス、上手いわね♪鬼灯」

そんなところ褒められても私は嬉しく無いぞ

「妖夢、安心しろ。私も手伝うから」

私は、妖夢にそう伝えると、途端に嬉しそうな顔になった

「え?!ほ、本当ですか!?!鬼灯様!」

「ああ、本当だ。どっかの最低な吸血鬼と違って私は食べさせてもらう側だ。何か手伝わなければいけないだろう?」

「クスクス、あら?その最低な吸血鬼って誰かしらね?」

お前の事だよ、レティシア

「それじゃあ、行こうか、妖夢」

「はい!」

そして、私達は人里へと降りて、食料を買い、冥界で食事をさせてもらった

・・・ちなみに、私は人里の者達から嫌われているわけではないからな

・・・はあ、そう考えると本当に憂鬱だ

まあ、兎も角、その日はもう一回、稽古をして終えた

最後に、幽々子の食べた量は普通の人が食べる食事の量の約五倍であつたと表記しておこう

## 第六十六話

く鬼灯sideく

今、私は神社から移動している

目指す場所は太陽の花畑だ

「久々に会うな。彼奴とは・・・」

(・・・それにしても、一体、何が起ころうとしているのだろうか?)

私が悩んでいることは、今朝の葵との会話にある

く回想く

「・・・」

「・・・葵、どうした?」

「・・・へ?」

「何時もより元気がないが」

葵の能力なら、例えば病気に掛かったとしても直ぐに治るから、病気ではないのだろうが、何故か葵は目に見えて元気がない。箸も進んでいないからな

ついでに言うなら、目の下に隈も出来ている

「・・・ごめん」

「葵、なんで謝るんだ?」

ルカが首を傾げながらそう聞いた

葵は少しの間、熟考していたが

「・・・その、今朝見た夢なんだけど」

話してくれたが、夢?

「夢って、予知夢か?」

だが、異変らしきものは無いはずだが、あるとしても、あの周期だけだ

「・・・予知夢ってわけじゃないと思うけど」

「・・・なんだ?どうした?葵」

葵の顔は途端に暗くなってしまった

「・・・葵、話したくなければそれ以上、話さなくてもいいんだぞ?話せと催促した私が言える立場ではないがな」

「ううん、大丈夫だよ、鬼灯」

そう言うと、口を開けて話してくれた

「・・・過去の夢を見たの」

「・・・」

しまった、聞くべきではなかったか。だが、もう遅いな

「・・・それで？」

「家事をちゃんと出来なくて、殴られたり、蹴られたり・・・その繰り返しの夢とか、お母さんから罵詈雑言を浴びせられたりとか・・・物置小屋に閉じ込められたりとか。ここ最近、そういう夢ばかり見るの」

「蒼華の？人里の奴らの夢は見ないのか？」

「ううん、見てない。全部、お母さんの夢だった」

・・・まあ、コレは度々起こることだが、それでも、蒼華ばかりが連続でというのは珍しい

「・・・」

「・・・でも、直ぐに収まると思うよ？ほら、最近一度お母さんのお墓参りに行ったからその影響だよ、きつと」

葵は、作り笑いをしながらそう言うと、この話は終わりとばかりに食事に戻った

・・・墓参りは、確かにこと前に入れていいのだろうが、三週間前だぞ？その出来事は

なのに、今影響を受けるといえるのはおかしな話だ

だが、その他に続けて見る様な理由が思い当たらない

(・・・仕方ない。ここは一度、様子を見ておくか)

私はそう決めると、食事に戻った

〜回想終了〜

ああ決めたは良いものの、葵の為に早く解決してやりたいだが、何が原因なのかも掴めない

「・・・ダメだ。本当に思いつかないな」

兎も角、今はリフレッシュしよう。太陽の花畑で

そうして、私は友人が住んでいる花畑へと向かった

\*\*\*

空を飛び続けて数分後、私は太陽の花畑に着いた

そして、そこにはやはり、幽香がいた

「幽香」

「あら？いらつしやい鬼灯」

風見幽香。花を愛する花の妖怪で、太陽の花畑の管理者のような存在だ

まあ、単に住んでるだけなんだがな

「・・・はあ、やはり枯れていたか」

「ええ、それはそうでしょう？時期が時期なもの。貴方の所にある、一年中咲き続ける桜とは違うわよ」

「まあ、そうだがな」

コレばかりは仕方が無いな

「それで？今日はどうしてきたのかしら？ようやく私と戦う気になったの？」

「それは違うからな。私はどつかの吸血鬼賢者とは違って、理由がなければ戦わんぞ」

「あら、残念」

幽香は本当に残念そうな顔でそう言った

「悪いが、そんな顔をしても応えんぞ」

「分かってるわよ」

幽香の言葉を聞いた私は幽香の隣に寝そべり、寝ることにした

ここに来た時は、向日葵が咲いていない限り、寝ている

ここは、私にとって、リラックス出来るもう一つの居場所だからな  
そうして、私の意識は途切れた。つまりは寝たのだ

・・・ちなみに、起きた時は夕方だったがな

## 第六十七話

〈鬼灯side〉

「はあ？温泉？」

「クスクス、そう、温泉♪」

レティシアが急に神社に現れて、そんな事を言い出したが、何がどうしてそんな発想に至ったんだ・・・

「・・・ちなみに、誰が行くんだ？」

私は、自分の前足で頭を押さえながらそう聞いた

何で、妖怪賢者である紫もレティシアも、こんな感じなんだ、全く。

時々、頭が痛くなるんだが

「クスクス、まず紅魔館の全員を予定しているわ。まあ、無理そうなら紫が来るけどね♪」

「・・・拒否権は無い様だな」

無理そうの中に私が入っていなかった所を見ると、私には拒否権は無い様だ

「クスクス、ええ、そうよ。出来れば葵も連れていきたくったのだけけど・・・流星にね」

「・・・なんでだ？」

私は、少しレティシアを睨みながら疑問を言った  
葵を省きたいからだとかそんな理由なら・・・

「クスクス、安心しなさいな♪そんな屑な考えじゃないから。人数の問題よ」

「なんだ、そうだったのか」

そうか、確かに人数が多過ぎるな。葵は確かに誘えない訳だな・・・ん？

「だったら、私を誘わずに葵を誘えばよかつたんじゃないか？」

ちよつとした疑問を言ってみたが、レティシアは首を振った

「クスクス、あの子がそれを素直に了承すると、本気で思ってるの？」

「・・・無理だな」

葵なら必ず、拒否するだろう

ある程度なら霊夢の世話とかを放り出して行動するが、今回は違う  
葵は必ず拒否をする。外の世界に興味を持ってはいるが、それが仕  
事を放り出す理由にならないと考えているからな

「・・・はあ、分かった。なら、その提案、受けさせてもらおう」

「クスクス、ありがとう♪鬼灯」

そして、少しレティシアと将棋をしてからレティシアは帰って行っ  
た

ちなみに、何度も勝負をしたが、一度もレティシアに勝てなかった。  
あいつは、こういうゲームは得意中の得意だからな

\*\*\*

そして、アレから数日が経ち、温泉旅行当日

私は、紅魔館に来了。レティシアのスキマで移動するからな。私が  
紅魔館まで来なければならぬ

「クスクス、鬼灯、準備は出来ているかしら？」

「ああ、出来ている」

その場には、レティシアの他に、レミリア、フラン、咲夜、美鈴、パ  
チユリー、小悪魔がいた

レミリアとフラン、そして小悪魔の羽とかは全て無くなっている。  
レティシアが能力を使用して隠したのだろう

「ん？マリア達はどうしたんだ？連れて行かないのか？」

「クスクス、マリアは寝込んでいる、というより冬眠中よ。蛇は寒いのが  
苦手だからね。狼はマリアの従者だから側にいるわ。狼がいれば敵  
がくればすぐに撃退出来るわ。朱鳥はパチユリー達の代わりに本の  
整理、くおんは美鈴の代わりに門番、ペスとユニはいつも通り館の掃  
除よ」

「・・・なあ？前から気になっていたんだが、狼から何か異質な力を感  
じたんだが、アレは？」

私は前からの疑問をレティシアに聞いてみた

「クスクス、それは、狼がヤツフサだからよ」

「ああ、なるほど」

初めて狼と会った時に感じた異質な力はそういうことか

・・・というか、ヤツフサって確か犬じゃなかったか？

「クスクス、ええ。だから、オオカミじゃなくて犬よ、狼は」

・・・

「はあ？」

「クスクス、だからね、狼はオオカミに見える犬の妖怪よ。本人も言っていたわよ？ 『自分が一度でもオオカミの妖怪だと言ったか？』 って」

「そうか。それで？もう行くのか？」

「クスクス、ええ♪行きましようか♪」

こうして、私は久し振りに外に出ることとなった



## 第六十八話

（鬼灯side）

さて、私達は宿へと向かっているわけだが・・・

「・・・ハア」

「クスクス、どうしたの？鬼灯。そんなに疲れた顔をして」

「・・・理由ぐらい分かっているんだらう？」

「クスクス、さあ？私には分からないわね♪」

こいつ、確実に分かっているな

私がこれだけ疲れている理由を

私は、人間達の前に姿を表すことになる為、人間に化けている。勿論、尻尾とかもない状態だ。服装も怪しまれない様に変えている。全員な

それで、宿に向かって歩いてきたわけだが、そこまでの間、人間の男共からの視線が絶えなかったのだ

別に視線だけなら気持ち悪いです済むのだが、一緒に遊びに行かないか？とかの誘いまでする奴がいたのだ

いつも私が九尾でいるのはコレが理由だ

人里の奴らも全くと云つていいほど同じだからな。ただ、気持ち悪さで比べれば、まだこちらの方がマシか

あんな奴らからの視線など、受けたくもない

「クスクス、さて、着いたわよ♪」

「・・・ここか」

私達はようやく、宿へと着いた

「レミリアお姉様！温泉だよ！」

「ふふ、そうね、フラン。楽しみね♪」

「うん！私、楽しみー！」

レミリアもフランも楽しみな様だ

ただ、フランは物凄く楽しみな様で、ぴよんぴよん跳ねている

「クスクス、フラン。楽しみなのは分かるけれど、少しは落ち着きなさい。まだ温泉にも入っていないのだから♪」

レティシアはフランにそう言ったが、それは、裏を返せば温泉に入れば騒いで良いのか？

まあ、こんな揚げ足取りは辞めておこう

「じゃあ、入るか」

私達は宿へと入った

\*\*\*

宿でチェックし終えた私達は、それぞれの割り振られた部屋へと入った

部屋の割り振りを教えると・・・

レミリア&フランペア

私&レティシアペア

パチユリー&小悪魔ペア

咲夜&美鈴ペア

となる

「何で私とお前のペアなんだ・・・」

私はそう言うが

「クスクス、別にいいじゃない。久し振りに沢山話しましょうよ♪」

「幻想郷でも結構話していると思うのは私だけか？」

「クスクス、そうね♪」

「こいつはどこ吹く風で気にしていない」

「・・・はあ」

「クスクス、まあいいじゃない♪それよりも、温泉に行きましょう？この時間なら空いてるでしょうから」

今の時間は昼だ。まあ、大抵の人間は夜だよな

「・・・そうだな。じゃあ、レミリア達も誘うぞ」

「クスクス、勿論よ♪と言うか、そうじゃないと、私は怒るわよ」

レティシアは、最初はいつも通り笑いながらそう言ったが、途中から目だけが真剣になった

「・・・それじゃあ、誘ってこよう」

「クスクス、ええ♪」

私達はレミリア達を誘い、風呂へと入った

そして、風呂から上がり、部屋へと戻ろうとすると・・・

「・・・ん？君は」

「？レテイシア？何でここに・・・」

「あ！お兄ちゃんだ！あと、変なおじさん！」

「ま、まだおじさんなんだね・・・」

何やら不思議なものを感じるひよろそいな男と、世に言うイケメン？な奴がいた。妖怪の猫を連れて

・・・私には、イケメンの線引きは分からんがな

## 第六十九話

く鬼灯sideく

あの後、私や美鈴達、そして、あの二人はお互いに自己紹介した  
まあ、あの名取とかいうウザ男は私や美鈴、小悪魔を訝しんでいた  
がな

「(クスクス、ウザ男っていうのは同意するけれど、流石に本人の目の  
前で言うのは辞めた方が良いわよ♪)」

「(とか言いながら、お前は本人の前でおじさんと言っていたが?)」

私達は、テレパシーを介して言葉を交わしている

事実、テレパシー無しで私達の行動を公開すると

「むく」

「おいおい、全然ババを取られないからって膨れるなよ」

「うく、だつてく」

と、こんな風にババ抜きをしている

別に言葉を交わしても良いだろうと思うだろう?だが、それは無理  
だ

何故かって?それはな・・・

「・・・」

あのウザ男の黒髪の長髪の式神がさつきから私達を見張っている  
からだ

私もレテイシアも、自分達の正体を、退治屋に暴露たいわけではな  
いんだ

・・・まあ、レテイシアは不老不死だから死なないんだがな

「(クスクスクスクス、あの式神の所為で迂闊に話すことも出来ない  
じゃない。もし、私の正体が暴露した暁には、絶対に心を折りにいつて  
あげるわ♪クスクスクスクス)」

「(おい馬鹿やめろ。お前じゃシャレにならん)」

はあ、まあ、でも、確かにこの状態はストレスが掛かるのは分かる  
な

全く、レテイシアの代わりに私が折りに行ってやろうか・・・

「(クスクス、私の楽しみがなくなるから辞めて頂戴ね)」

「(ハア、分かった)」

・・・この状態、本当に何時まで続くんだ？

↳夏目side

俺達は、今は泊まる部屋に居るが・・・

「僕なんて、僕なんて・・・」

「名取さん、何時まで部屋の隅に座ってるつもりですか・・・」

名取さんは、レティシアになんとか『お兄さん』と呼んで貰おうと、何度も何度も教えていたが、全然成果は上がらなかった。一回レティシアが『お兄さん』というと、これでイイと思っただのか、話を進めようとしていたが、結局、『お兄さん』に逆戻りし、最終的には何故か『オジちゃん』になってしまっていた

・・・何と無くだけど、レティシアが内心で笑っていた様な気がする

「はあ、名取さん。レティシアはまだ小さな女の子なんですから、仕方ないじゃないですか」

レティシアが前に、俺以外の他人の前では余り、自分の正体を言わないでほしいと、特に退治屋には言うなど釘を刺されていた為、俺はレティシアを『小さな女の子』と言った、が

「・・・夏目、君は本当にあの子が『ただの小さな女の子』だと思ってるのかい？」

名取さんは少し厳しい目で俺を見てきた

「・・・」

「いや、彼女だけじゃない。その周りのあの子達だってそうだ。何故だか妙な感じがするんだ。・・・なあ、夏目。彼女達は、本当は「名取さん、お風呂入りませんか？俺、ちよつと疲れたんで入りたいんですけど」ああ、そうだね。でも、その前にちよつとマネージャーの元に電話してくるよ。連絡し忘れた」

そう言うと、名取さんは部屋を出て行った

「・・・ふう」

危なかった。なんとか話を荆らせた

名取さんにレティシア達の正体が暴露たらどうなるか・・・

・・・まあ、正直、それよりも、何だか、レティシアの正体が名取さんに暴露たら、酷いことが起きそうな気がするんだよな。何でだろうか？

・・・気にしないでおこう

俺は名取さんが戻ってくるまで部屋で待機していた

↳鬼灯side↳

・・・さて、アレから私達は人数を増やしてトランプをしていた  
ただし、テレパシーで会話をしているが

「(・・・)」

「(・・・?どうした?レティシア)」

私は、様子が変わったレティシアに疑問を抱き、聞いて見た

「(クスクス、何でもないわ♪)」

だが、レティシアは雰囲気を元に戻したが、私には分かる

「(・・・この宿にある妖気のことか?)」

「(妖気ですか?彼処にいる式神ではなくですか?)」

「(ああ、彼奴とは違う。それとは別物の妖気だ。お前が気にしている

のはその妖気だろう?)」

「(・・・クスクス、本当になわなないわね。ええ、そうよ)」

レティシアは白状した

全く、何年の付き合いか分かってるのか?相当な長さの付き合いだぞ。自然と分かる様になるさ

「(それでしたら、後ほど私が見回りして来ましようか?)」

美鈴が珍しくそう言った

「(クスクス、お願いするわ。美鈴)」

「(分かりました!)」

レティシアはその提案にのり、美鈴に頼んだ  
・・・一体、この妖気の持ち主は誰なんだ?

## 閑話く葵日記く

く鬼灯sideく

私は、葵の部屋に向かっている

まあ、理由は気分だ

「葵、いるだろう？入っていい・・・」

私は、開いていた障子に手をかけて、部屋の中を覗いて見ると・・・

「すう・・・すう・・・」

葵が卓状の机に突っ伏して寝ていた

「・・・まあ、コレだけ気持ちのいいポカポカ陽気なら、眠くなっても仕方ないか」

葵の部屋は、外の光が入りやすい方向にある

幻想郷・・・というよりも、この神社には電気というものは通っていないからな

私は、少し微笑みながら葵に足音を立てずに近付き、頭を優しく撫でた

「・・・ん？」

私がふと、視界の端に見えたものに目を移した

そして、それに手を伸ばし、持ってみた

「・・・ああ、葵の日記か」

私は、それが日記であることに気づき、元の場所に戻そうとした、が「・・・」

私は、好奇心に負けてしまい、結局は見てしまった。ダメだな、私も

\*\*\*

(毎日書かれている為、印象深い物だけを書きます)

○月○日

コレで何冊目かな？日記帳は。もう分からないぐらいには書いたって事だね。後で何冊あるか数えてみよう

今日もいつも通り、境内の掃除を霊夢に代わって掃除した。霊夢はその間に洗濯していたな

そういえば、妖怪達が霊夢の元に何かを話しに来ていたけれど、どんな内容だったのだろうか？少し、気になる

まあ、いつか霊夢が話してくれるだろうから、その時まで待つておこう

○月○日

今日はちよつとした事件があった為、日記帳の数を数えることが出来なかった。ちよつと残念

ちよつとした事件というのは、霊夢が何かを封印していた壺の封印を解いてしまったのだ

もう、なんで封印していたものを解いちやうのかな、霊夢は

まあ、その後、その壺から出てきた魅魔さんという怨霊？の方が霊夢と私に恨み言を吐いた後に、何処かに行ってしまったけれど、良いのだろうか？何だか、嫌な予感がするのだけれど・・・

それに、まだよく分からない予知夢も見たから、少し、警戒しておいた方が良いのかもしれない

○月○日

今日、今迄封印されていた魅魔さんがまた来たけれど、今回は一人多かった

名前は魔理沙さん。苗字は分からなかった。魅魔さんにそう呼ばれていたから分かっただけっていうね

魔理沙さんは至つて普通の人間の女の子だった

ただ、魔法を使えるところを見ると、それが能力の様に感じられたけど、魅魔さんと魔理沙さんはすぐにやられてしまった

まあ、霊夢だけでなく、ルカや鬼灯までいたら仕方ないよね。・・・同情してしまうけど

○月☆日

今日、魚が取れなくて人里に買いに行くことになった

・・・人里の皆さんの対応は変わってなかったのが悲しかったな



それで、その時にちよつとした出会いがあった

人里の子供達に人形劇を見せていた金髪の少女がいた

その子も人形みたいな子で、可愛かったな

名前はアリス・マーガトロイドさん。魔法使いとのこと

まあ、それはアレだけ自由に人形を動かさせていたらね、信じるしかないよ

アリスさんとは人形の話で意気投合した。とても楽しかった時間だったな

また会えたらいいな

○月\*日

今日は紫さんから野菜の種を貰う日だ

私は自分で作らないといけないから、定期的に野菜の種を貰わないと、ご飯ができなくなってしまう

けど、今日はそれだけじゃなかったのが気になる

紫さんは鬼灯に「話がある」と言っていたけれど、どうしたのだろう？

大丈夫そうであれば、後で聞いてみよう

○月\*日

今日、裁縫に使っていた糸がなくなった為に、また人里に降りた  
そこで、久し振りにアリスに出会った

・・・ただ、『アリスさん』って呼んだら怒られてしまったから、ここからは頑張つて『アリス』と呼ぼう

それで、アリスにどうしたのか聞かれたから、事情を話すと、アリスさんが糸を選んでくれた

最初は悪いからと、大丈夫だと断っていたけど何故か暴露してしまった。どうしてだろう？そんなに分かりやすいのかな？私は

そして、流石にアリスさんに買って貰うのは悪いので、それは流石に私が買った

それから、人形の作り方を教わって、人形を作るのに必要な材料も

買ってからアリスさんとは別れた

・・・もし、人形を作るのに慣れたら、アリスさんに最初の人形を渡そう

\*月☆日

スperlカードルールというものを霊夢が制定してから始めての異変を解決した

私は、その異変を起こした館『紅魔館』に住む吸血鬼、フランちゃんと遊ぶ約束をして館から離れましたが、もう既に寂しいです

でも、約束もしましたし、大丈夫でしょう

それにしても、フランさんから少し聞いた事ですが、レティシアさんはフランさん達の実の姉というわけではなく、フランさん達のお父さんよりも前から生きていると聞きました。が、どうということでしょうか？

・・・コレはあまり考えない方が良くのかもしれないね。忘れましょう

フランさんとの約束を果たす日がとても楽しみです！

\*\*\*

まあ、こんな感じで書いてあり、昨日までの事が書いてあった  
葵は日記を読んでいる途中で眠くなり、眠ってしまったようだ  
「・・・さて。日記帳を元に戻しておかねばな」

そして、私は日記帳を元に戻し、葵に毛布をかけて、その場を立ち去った

幾ら春の陽気で気持ちがいいとはいえ、流石に何もかけなければ寒いだろう？

そして、あの日記の中身は誰にも言わないでおこう

やった私が言うのもアレだが、日記を見られてもいいと感じる奴ではないからな、葵は

だから、私は誰にも言わないでおく

そして、私は神社にある桜の木の下で、夕食の時間になるまで寝ることにした

## 第七十話

く鬼灯sideく

さて、アレからババ抜きを終えた私達は、テレパシー内での事を美鈴にってもらうことにした。勿論、暴露ないように建前も必要になるが、それも話しているから大丈夫だろう

「すみません、鬼灯さん。私はちよつと、おトイレに・・・」

「ああ、分かった。行つてこい」

・・・これ以上の建前が思いつかなかつたんだ。察してくれ

「それでは、外します「美鈴！私、探検したい！」え、ええええ！それ、レティシアお嬢様!？」

!?!お、おい！

「ちよちよ！ええええ！まま、待つてください！話と全然違うじゃないですかー!」

美鈴が戸惑っているが、レティシアを除く私達も同様だ

「おい！どういうつもりだ！レティシア！話と違うぞ！」

「クスクス、仕方ないでしょう♪今、思いついたことなんだから♪」

「(はあ!?)」

私がレティシアに反論するが、レティシアは『今思い付いた』という嘘を普通に言ってきた

「(お前！この反応で怪しまれたら・・・)」

「クスクス、それはもうとつくの前から怪しまれてるでしょう？そんなの、今更よ♪」

「(だが！それ以上、怪しまれないようにするためのこの行動だろ!?)」

「(クスクス、だって、もう面倒臭くなっちゃったしね♪)」

「(お前ーーーーー!)」

もうやだ、こいつ。長年、こいつ付き合ってきたが、どうしてもこいつのこういう考えは読めない

「(鬼灯様、キャラが崩壊しております)」

「(おっと、すまない。咲夜)」

どうやら、レティシアの所為で私自身が壊れていたらしい。気を付

けなければ

「(クスクス、それじゃあ、いいわね?別にこっちの方が不自然ではないと思うけど?)」

レテイシアは自分の案の了承を促してきた。・・・まあ、実際、レテイシアの今の外見年齢は子供だから、おかしくはないか

「・・・ああ、大丈夫だろう。美鈴、合わせてやってくれ」

「(わ、分かりました)」

美鈴に合わせてくれるよう頼み、結局はトイレと宿探検つというこ  
とにして、美鈴とレテイシアは部屋から出て行った

「・・・さて、私達はどのようなか?」

「鬼灯!パズルしようよ!ね?レミリアお姉様も!」

「ふふ、そうね。いいわよ」

「よし、やろうか」

フランの提案により、レテイシア達が帰ってくるまでの間、パズル  
をすることにした

ピースが結構、多かつたことには吃驚したな

レテイシア side

「あの、レテイシア様。どうして急にあんな事を?鬼灯様の言うとお  
り、バレルの可能性もありましたが・・・」

「クスクス、子供って言うのはそんなものよ。急に行動を起こすから  
ね」

「は、はあ〜」

今、私達はこの宿を探検もとい原因探しをしている

まあ、彼処であんな風にしなくても良かったのだけれど、美鈴一人  
は心配だからね

この子の実力は知ってるけれど、それでもよ

「・・・美鈴、もうすぐである二人と会うことになるから」

「分かりました」

私は、美鈴に見透かした先の事を話し、伝えた

「それから、この妖気の持ち主にも会うことになるけれど、驚いちゃだ  
めよ?いいわね?」

「了解しました」

さて、まあ、コレで大丈夫でしょう

私達はそのまま歩き、夏目達と会うこととなった

「・・・おや？君達はさっきの」

初めに私達に話しかけてきたのは、自称イケメン俳優で、退治屋の名取周一だった

彼には、前から気になっているものが体をあつた

それは、黒いトカゲの痣だ

多分、アレは一種の呪いだろう。けど、今の私じゃあそれぐらいしか分からない

というか、分かったとしても放っとくわね

「あ！オジちゃんだ！」

「・・・頼むから『オジちゃん』はやめてくれ」

私が笑顔でそう言うと、退治屋はまた落ち込んでしまった。クスクス、面白いわね♪

「レティシアお嬢様。『オジちゃん』ではなく『お兄さん』ですよ？『オジちゃん』は可哀想ですからね」

私が退治屋をいじめてやろうとしたら、美鈴に止められてしまった。残念

「分かったよ！美鈴！」

そう話していると・・・

「うわああああー！」

夏目が私達の隣にある部屋を見て驚いていた

「・・・いや、この場合は、その部屋にいる『何か』に驚いたのでしようね

現に、この宿にある妖気は段々と強くなっているし、隣の部屋から一番強く感じるからね

・・・それにしても、この妖気の量は、並大抵の妖怪じゃないわね。まず低級の妖怪ではないことが判明したわ

「夏目!?!どうしたんだい?！」

「お兄ちゃん?どうしたの?そこに何かいるの?！」

「どうしましたか!？」

私達は一斉に喋り始めた

そして、私は隣の部屋に視線を向けるが、そこには何もいなかった  
「・・・あれ?。」

その後、夏目から話を聞こうとしたが、あの退治屋に『駄目だ』と言われ、結局は聞けなかった

・・・まあ、何かあったとしても、分かるでしょうし、私達に危害を加えようものなら・・・

「絶対に消してやるわ」

私は、眩くようにして言った

　　＼鬼灯side＼

パズルを終えてから少しして、レテイシア達が帰ってきた

そして、テレパシーで何があったか聞いた後、今の所は現状放置としておくことにした

まあ、妖気を撒き散らしているだけだからな、その妖怪がしているのは

まあ、それもそれで傍迷惑なのだが

「(兎に角、もう夜も遅い。寝るとしよう)」

「(クスクス、吸血鬼が夜に寝るっていうのもおかしいけどね♪)」

その言葉に、実際してるだろと突っ込みたかったが言わなかった

そして、私達が寝ている途中で、妖気が一段と強くなった

「!!?。」

それを感じ取った私達は一斉に起きた。あの見張りもいない

「レテイシア」

「・・・いえ、行かないでお願いします。私達が居なくても大丈夫そうだからね」

「そうか」

レテイシアがこう言うなら大丈夫だろう

私達はそう思い、また寝ることにした

そして、次の朝、何事もなく私達は起きた

そして、入り口前で、また夏目達にあった

「おや？君達ももう帰るのかい？」

「ああ、その通りだ」

「そうか」

ウザ男は笑みを浮かべながらそう言ったが、目だけは、まだ私達を探っていた

「・・・なんだ？」

「いや、何でもないよ。気にしないで欲しいな」

ウザ男はキザな笑みを浮かべながらそう言った

なんだか、周りがキラキラしている気がするが、それは気のせいということにしておこう

「それじゃあね！お兄ちゃん！」

「ああ、じゃあな、レティシア」

あつちもあつちで挨拶が終わったようだな

「あ！それじゃあね！おじさん！」

「さ、最後の最後までおじさん・・・」

レティシアの一言により、ウザ男はまた膝をついて落ち込んでいただが、私達はそれを見て見ぬ振りをして、宿の外に出た

ちなみに、宿にあった妖気はもう感じなかったことから、あのウザ男が退治でもしたのだろう

実際の真実は知らんがな

そして、私達は幻想郷へと戻った

## 閑話く鬼灯の過去く

何時生まれたのかと問われれば、私は『分からない』という他ない何故なら、私という存在は、何時の間にかあり、私という意識も、何時の間にか備わっていた

だが、それでも私がどういう存在かは直ぐに分かった

『狐の祖』『自然と豊穰の神』『無と再生を司る者』

私は、葵の神社に祀られるまでは、神の狐だった

私という意識が生まれたのは、まだ『無』の世界の頃

私は、私以外の神々が大地を創っているのを、只々側で見ていただけだった

そして、神々が大地を創り終わると、私に『自然と豊穰の神』『無と再生を司る者』としての力を与え、そのまま大地に降ろした

私は、自身に与えられた使命を果たすと、次に使命を果たすまでの間、永久とも思える時間を自然そのものが死なない様に調整しつつ過ぎた

そして、時間が経ち、人間達が生まれ、農業をし始めた

この頃には、もう既に私の子供（狐達）は其々の方法で生きているそして、一度目の飢餓が来た頃、私は人の目の前に表れた

『自然と豊穰の神』としての使命を果たす為に

・・・だが、人は私を恐れた

それもそのはずだ。旗から見れば、私は九尾だ

人間からしたら、自分達を襲いに来た妖怪だ

私は、そんな人間達の様子を初めて見て、何かモヤツとしたものを感じたが、そんな事を考えるよりも使命が先だと考え、実行した

飢餓の所為で死にそうになっていた穀物達に私の力の一端を注ぎ込んだ

すると、穀物達は見る見るウチに蘇り、瑞々しい姿になった

それをして、私は人間達から崇められた

・・・だが、それでも私のモヤツとしたものは晴れなかった

そして、それからまた年月が経ち、人間達が月へと移住し、また人



間が元の暮らしに戻った頃、第二の飢餓が訪れた

私は、また使命を果たす為に動いたが、人間達の対応は最初と同じだった

そして、穀物を復活させると崇められた

この時によく気付いた

——私は『嬉しくない』のだと

私は、今まで『自分』というものを持たずに、ただ時の流れに身を任せて生きてきた

そう、まるで機械の様に、与えられた使命だけを行ってきた

だが、『自分』を持たずに使命だけ遂行してきた私に人間達は崇めた  
だが、『自分』がない私は、それが『嬉しくない』のだと

それ以来、私は『自分』という存在をちゃんと得る為に旅をした  
旅をする前に私の神社が出来ていたからそっちにも寄った

そして、世界を巡り終え、私は神社に戻って来た

その頃には、今の私は出来上がっていた。人間不信というのは無かったがな

そして、私が神社でゆっくりしている頃に、スキマ妖怪、現在で言うなら紫が会いに来た

紫は私に『理想』を語り、その実現の為に力を貸して欲しいと言ってきた

それも必死に。大妖怪のプライドを捨ててまで、私に頼み込んできた

その姿を見た私はこと割り切れず、結局は了承した

そして、月日が経ち、幻想郷が出来、レティシアにも出会い、蒼華が生まれたと思ったらもう既に子供が生まれていた

そんな風に感慨ふけていたが、私は、その頃に多少不満を抱えていた

私は、人間の汚きを目撃した

……いや、これについては初めて見た時から気付いていたが、コレが親が、人間がすることかという様なことを目にした

葵の父親が持病で死に、葵は元々持っていた能力が暴露てしまい、

蒼華は紫に葵の能力のちゃんとした説明を受けた

それ以来、葵を可愛がっていた人里の連中は葵から離れ、蒼華は葵を傷付け始めた

私は、蒼華にやめろと言ったが、辞める気配などなかった

私にとって、葵は私を理解してくれる唯一の人間

人間達が仲良くしているのを見て、羨ましいと思いつつも、それを言えずにいた私に、友として接してくれた初めての人間

歴代の巫女達ですらそんなことしなかったのにだ

だから、私は、葵を傷付けた奴らを、傷付ける奴らを許さない

私の力だけを欲する奴らもだ

・・・だが、それでも私の使命は変わらない。だから、今も私は仕方なく使命を果たしている

## 花映塚

### 閑話く葵の過去く

私が幼い頃、母や人里の人との関係はとても良好でした

その頃には父もいました

とても、幸せに暮らしていました

・・・ただ、私以外の誰も、もう一つ能力があることに気付きませんでした

・・・いえ、私も気付いていませんでしたね。『何か』が見える事は普通の事だと思っていましたから

昔は、私が良い事をしたら、父も母も、私を撫でて褒めてくれました

いけないことをしたら、叱ってくれました

人里の皆さんも、優しくかったです

けれど、ある時事件が起きました

その事件の頃には既に、自分が見た『夢』が実現する事に気付いていました

ですが、その事件の時、私は『夢』を見ませんでした

その次の日、母が泣いていたのを見た私は、母に「どうしたの？」と問いかけました

すると、母は涙を拭いながら「大丈夫」だと答えた後、私に

「お父さんはね、暫く家に帰れなくなっちゃったの」と、言いました

けれど、その嘘は私に効きませんでした

その頃の私の能力はコントロール出来ておらず、初対面でなくとも勝手に過去を見てしまうような状態でした

ですから、私は父が死んでしまった事が分かりました

私は母に率直に聞きました。「お父さん、死んじゃったの？」と

母はその言葉に驚き、紫さんを直ぐ様呼びました

そして、能力を聞いてみると、私の能力が未来や他人の過去を見る

能力だと分かりました

「……全ての過去を強制的に見る能力であることも教えてもらいました」

それを知った母は、驚愕の顔をしていました

そして、紫さんが帰った後

「……そんな能力持ってたのに、どうして」

母は私を睨みつけました

当然の結果ですが、私も父が死ぬことを予知出来ていませんでした  
ですが、母にそんな事は関係ありません

私は、母に殴られてしまいました

「そんな能力持ってたのに、どうして教えてくれなかったのよ！そんな能力持ってても役に立たないなら、ただの疫病神よ！」

そこからは母の罵倒が私に浴びせられました

ですが、私は反論などしませんでした

私も実際、そうだと思っていたからです

この能力を持つてるのに、使えないなら疫病神じゃないかと

その次の日には、人里の皆さんにも伝わったようで、態度は一変して、私を遠ざけるようになりました

だから、私は何とか同年代の子を捕まえて、どうして態度が違うのか聞いてみました。すると

「だ……だって、君は過去を強制的に、無断で見ちやうから……」

そう言われました

私は、そう言われて以来、人里には極力降りないようにしました  
その頃にはもう鬼灯とは友達のような関係でしたから寂しくは……

無かった筈です

ですが、母からの罵倒は続きました

家事も私がやることになりました。家事全てを

初めて料理をしたとき、料理が焦げてしまつて、どうしようか悩んでいたときに母が来て、それを見ると、私を殴りました

「こんな事も出来ないの!? あんたはーこれぐらい出来なさい！」

食器を割ってしまった時も……

「なんで割ったの!?!なんでそんなにグズなの、あんたは! 本当に何も出来ない役立たずな奴ね!」

掃除が母が提示した時間と違ったら

「さっさと終わらせな! これぐらい簡単に終わるだろ! このノロマ!」

その全てが殴られたり、蹴られたりとされました

・・・酷い時は、光も入らない物置小屋に入れられて、危うく一晩過ごしそうになりました

あの頃の私の味方は鬼灯だけでした

鬼灯は何時も私を助けてくれました

物置小屋の件についても、私が閉じ込められていると、解放してくれました

そんな事があつてから一年後、私は家事を全て出来る様になりました

料理も作れる様になりましたが、母が褒めてくれることはありませんでした

そして、また日が流れて、ある時、神社の鳥居に金髪の女性がもたれかかっているのを目撃しました

ルカとの出会いです

そして、それからはルカも一緒に過ごす様になりました

そして、母が死んでしまい、霊夢の所で一時期お世話になったりしながら、今の状態があります

人里の皆さんとの関係は今だに直っていませんが、きっと、いつかは・・・

私は、いつもそう思っています

## 第七十一話

（カside）

最近よく見るようになった悪夢から目が覚めた私は、外を見てもうすぐ夜明けである事を知って起き上がり、朝食の用意をし始めました。

ルカは朝が弱いですから、朝食の用意が終わってから起こしに行くまでは寝かせておいてあげたいので、起こしません。

ちなみに、この時間の間の鬼灯は 剣の修行をしていますよ

「・・・よし。準備も出来た・・・けど」

私は、台所に来るまでに見た外の現象に驚きつつも、あの現象が何なのか、イマイチよく分からずにいました。

「何であんなに花が開花してたんだろう・・・」

今は春ですからある意味では当然なのでしょうけど、季節外れの花まで咲いていたら驚きませんか？

それで異変かとも思いましたが、異変だった場合、私が直ぐに分かりますから、多分違うのでしょうか。

「・・・まあ、綺麗だから、気にしない方がいいのかな？」

私は、その状態を放置することに決め、ルカを起こしに行きました。

\*\*\*

今、私は幸多君と遊んでいます。

・・・と言つても、沢山の花で何かを作っている幸多君を眺めているだけなのですがね。

「幸多くくん。本当に何を作ってるの？」

「ダメーまだお姉ちゃんには秘密なの！」

何を作っているのか聞いて見ましたが、答えてはくれませんでした。すぐく気になります。

そんな時に・・・

「葬ー！行くわよー！」

「え？霊夢？どうしたの？」

霊夢が飛んできました。どうしたのでしょうか？

『どうしたの?』じゃないわよ! 異変よ、異変! さあ! 解決しに行くわよ!」

「え? これ、異変なの?」

まあ、そうかもしれないとは思っていましたが……

「はあ? そうでしょ? ほら! 行くわよ!」

「え? ちよつと、ルカ達がまだ……」

「あ、それなら大丈夫よ。魔理沙に行かせてるから」

(ま、魔理沙に行かせたのですか、霊夢は……)

少しして、私達の後ろから声が聞こえてきました。

「なあ? 本当に異変なのか? 実害が出てないんだが……」

「異変だぜ! きつと! だって、季節外れの花まで咲いてるんだぜ! コ

レが異変じゃなくてなんだって言うんだ?」

「まあ、それもそうか……」

魔理沙とルカがやって来ました……あれ?

「魔理沙、鬼灯は?」

私は、魔理沙に聞いてみましたが、

「いや、何処にも居なかったぜ?」

と、返答が帰ってきました。

「うーん、何処にいったのかな?」

私が鬼灯がいそうな場所を頭の中で考えていると……

「ん? お前達、コレから何処かに行くのか?」

「あ、鬼灯」

鬼灯がやって来ました。

「それじゃあ! 行くわよ!」

「おー!」

「おい待て、行くって何をしにだ」

「異変解決だって、鬼灯」

「異変? そんなのあるのか?」

鬼灯が首を傾げて聞くと、その答えを霊夢が言いました。

「現在進行中じゃない!」

「……おい待て。もしかして、この季節外れの花達のことか?」

「ええ、そうよ。じゃあ、行くわよ！」

「あ！おい待て！これは・・・はあ、霊夢達の奴、勝手に」

「葵」

「うん、そうだね。幸多君」

私は、後ろで私達の話を少なからず聞いていた幸多君に言いました。

「お姉ちゃん、ちよつと異変解決に行ってくるね」

「うん！行ってらっしゃい、お姉ちゃん！異変解決、頑張つてね！僕はお姉ちゃん達が解決する前までに絶対に完成させてみせるよ！」

「うん！私は何を作ってるかよく分からないけど、頑張つてね！幸多君！」

私は、幸多君に最後に声を掛けてから、霊夢達が行った方向へと飛びました。

「・・・はあ、葵達までもか。コレは異変じゃなくて、自然現象なんだが・・・」

鬼灯の眩きは、誰にも聞こえていませんでした。



## 第七十二話

（葵 side）

え、私達は今、紅魔館方面へと飛んでいますけど・・・

「えつと、霊夢？なんでこっちに飛んでるの？」

絶対に無理ですよ？レティシアさんなら出来るかもしれませんが、それをしたとしても、何の得になるのかが分かりませんし・・・

「・・・」

「？霊夢？」

「どうしたんだぜ？霊夢」

何時もなら私の質問に答えてくれる霊夢ですが、今回は何故か答えてくれませんでした。どうしたのでしょうか？

「・・・いのよ」

「え？」

「勘が働いてないのよ、今回は」

「・・・え」

え？なんで？え？え？

「え、じ、じゃあ、何で私達は紅魔館方面へと飛んでいるんですか？」

「・・・な、なんとなくよ」

つまりは行く当てがないから適当に飛んでるんですね。ハッキリとそう言えばいいのでは・・・

「・・・葵、霊夢、コレは」

鬼灯が私達に何かを言おうとした時・・・

「やい！お前ら！」

私達の目の前にチルノさんと大妖精さんがいました。

「はあく、またあんた達？何の用よ」

霊夢がとてもめんどくさそうにしながらそう言いました

「アタイと戦え！」

「あんた、アレだけ毎回負けてるのに、本当に飽きないわよね」

霊夢はそう言いながらスペルカードを構えると・・・

「夢符『封魔陣』！」

そのまま無情にも撃つてしまいました  
勿論、構えてもいないチルノさんは・・・

「え？きやああああ！」

「チルノちゃーローん！」

そのまま落ちてしまいました。大妖精さんは落ちてしまったチルノさんを助けに行きました。

・・・本当にすみません。チルノさん。

「さ！次に行くわよ！」

霊夢はそのまま身を翻してまた別の場所に行こうとしたら・・・  
「だったら、私も行ってもいいわよね？」

そんな声が後ろから聞こえ、後ろを見ると咲夜さんがいました。

「あれ？咲夜さん、どうして・・・」

「私もこの異変を解決しようと思ってるね。だから、いいでしょう？」

「・・・勝手にすれば？」

霊夢はそう言いながら、前を向いて飛び始めました。

「おいおい、私達を置いてくくなよな！」

魔理沙もまた、霊夢を追うようにして飛んで行きました。

「・・・私達も行きましようか、ルカ、咲夜さん」

「ああ、そうだな」

「そうしましよう」

そして、私達も飛び始めました。

「・・・ハア、また言えなかった」

鬼灯がそんな風に呟いたのも知らずに。

\*\*\*

「それで、次は何処に？」

「さあ？」

「まあ、そうだとは思ったよ・・・」

やっぱり、勘が働いてないとあっちこっちに行くしかないですよね。

「・・・てかさ、葵の能力で見なかったの？」

あ、そう言えば言ってますでしたね。

「ごめん、霊夢。私はこの未来を見てないの」

「え？嘘でしょ？」

「いや、本当だ。私の前じゃ、嘘が意味無いこと、分かるだろう？」

私の言葉が信じられず、霊夢はそう言うのと、ルカがそう返答しました。

「巫女の勘も働かない。葵の能力もダメとなると・・・」

「本当に適当に行くしかないな」

私達の後ろで、咲夜さんと魔理沙がそう言っていました

そして、しばらく飛んでいると・・・

「・・・ん？何か聞こえない？」

「・・・ああ、そうだな」

「歌かしら？」

「そうですね。歌が聞こえてきます。それも、とても上手な」

その歌は本当にとても上手くて、思わず聞き惚れそうになります。

「・・・彼奴か？」

私達はその歌が聞こえる方に飛び続けると、一人の少女がいました。

服装は、茶色のジャンパースカート（レティシアさんから色々な服の種類を教えてもらいました）で、帽子と靴には同じような羽が付いています。

一見したら人間なのでしょうが、背中から羽が生えていますので妖怪のようです

「あんだ、妖怪ね」

「あら？あんだ達は誰よ」

その妖怪は歌を中断されたからか、とても不機嫌そうな顔で私達を見ってきました。

「普通、人に名を尋ねる時は自分からだか？」

ルカがそう言うのと、その妖怪はますます不機嫌になりながらも、

「ミスティア・ローレライよ」

と、名乗ってくれました。

「そう。私は博麗霊夢よ」

「霧雨魔理沙だぜ！」

「神無月葵といます。よろしくお願いします」

「霜月ルカだ」

「十六夜咲夜よ」

「孤天鬼灯だ」

「そう。博麗霊夢、霧雨魔理沙、神無月葵、霜月ルカ、十六夜咲夜、孤天（こてん）鬼灯ね」

「『こてん』じゃなくて『みてん』だ！」

「ミステイアさんは私達の名前を復唱しますが、鬼灯の名前だけ間違えてしまいました。まあ、間違えますよね、流石に。」

「それで？あんた、この異変の事、何か知らない？」

「霊夢がミステイアさんに聞くと・・・」

「知ってるっていったら？」

「と、言ってきました」

「なら教えてもらうだけよ！」

「そう言うと、霊夢は一人でミステイアさんに挑んで行きました。」

「私はというと、ルカに止められてしまいました。」

「あの、ルカ？何で止めたの？」

「無駄だからだ。彼奴は何も知らない」

「・・・あらら」

「霊夢、ごめんなさい。一人で頑張ってください。ルカから今だに止められている状態なので・・・。」

「そして、ミステイアさんと霊夢の弾幕ごっこが始まりました。」

## 第七十三話

（霊夢 side）

ミスティアが私に向かって撃ってくる弾幕を私は全て交わし、隙については弾幕を撃って攻撃していた。

・・・それも当たってないけどね。

「あー、もうーなんで当たらないのよーあんた！」

ミスティアはついに耐え切れずに怒鳴ってきたけれど・・・

「避けなきゃ当たるでしょ。何を当たり前な事を言ってるわけ？」

私はそう言い返した。

「くっーだったら・・・、声符『梟の夜鳴声』！」

すると、紫色と緑色の鱗型弾幕が配置され、バラバラではあるけれど、とてもゆっくと交差しながら飛んできた。

交差して飛んでくるって事は、それだけ避ける事が難しいけど、冷静に見極めれば難なく避ける事が出来た。

「はい。スペルブレイク」

「くっ・・・！」

そう言えば、葵がいない状態での弾幕ごっこは初めてかもしれない。い。・・・なんでか、隣にいないってだけで安心出来ないでいる自分がいる。どうして？

今、此処で加勢なんてしてきたら無粋だ。それは分かっている。それでも、何でかしら？どうして安心出来ないでいるの？

「・・・ああ、そういうことか」

なんだ。答えは簡単じゃない。あんまり気にしてなかったけど、こんな時になるまで気づかないなんて、私も馬鹿ね。

「あんた！何笑ってんのよー！」

私が自分の滑稽さに笑っていると、ミスティアに怒鳴られた。まあ、コレばかりは仕方ないわね。

「いえ、私はあんたに簡単に勝てそうだなって思ってたね」

私は軽くミスティアを挑発してみると・・・

「・・・そう、だったら、コレを避けてみなさい！『ブラインドナイトバード』！」

私の挑発に簡単に乗ってくれた。ふ、簡単な奴ね。

ミスティアが撃ってきた弾幕は鱗型弾幕で、それが私に向かって来ていた。

私はそれを見ると避けようとしたけれど・・・

「♪♪♪」

ミスティアが歌い出した途端、私の視界が一気に狭くなってしまった。

「・・・」

けど、それでも私は焦らなかった。自分でも吃驚するぐらいに。

私がコレだけ冷静で居られるのは『葵が居なくて安心出来ない』でいるからよ。

何時もは後方支援の葵と一緒にいるから背中を安心して預けてられるけど、今はいないからね。

『安心出来ない』って事は『余裕でいられない』って事でもあるからね。でも、視界が狭いと結構避けにくい。けど、私は全て避けている。

理由？勘で避けてるのよ

そして、そのままスペルブレイクした。

「あ・・・」

「さて、コレで終わりよ！霊符『夢想封印』！」

私は、妖怪に向かって私の得意技を撃ってやった。

♪ 葵 side ♪

弾幕ごっこの結果から言えば、霊夢の勝ちです。

ただ、此方に戻って来た時、霊夢の目が鳥目になっていたのはとても驚きました。弾幕ごっこの途中でミスティアさんが歌いましたが、アレが原因でしょうか？

・・・ちなみに、私と本人である霊夢以外は全員、その状態の霊夢を見て吹き出していました。

霊夢が夢想封印を撃ちそうになっていたので必死に止めましたよ、私。

それにしても、ミスティアさんが歌ってから鳥目になったとしたら、どうやって避けていたのでしょうか？

・・・勘ですわね、絶対。

「あゝ、もう。私は気持ち良く歌ってただけなのに〜」

今にも夢想封印を撃ちそうな霊夢を必死に止めてる時に、ミスティアさんが起き上がりました。

「れ、霊夢！ほら、落ち着いて！話を聞くんではしょ？」

「・・・それもそうね」

私が霊夢を落ち着かせようとそう言うと、なんとか落ち着いてくれました。良かったです。本当に。

「ねえ？あんた。この異変の事を教えなさいよ。知ってるんでしょ？」

霊夢がそう聞きますが、私は追求しません。

というか、今のこの場でミスティアさんが何も知らないことを知らないのは霊夢だけです。

「知らないわよ、そんなの」

「霊符『夢想・・・』」

「ダメだからね!」

霊夢がミスティアさんにまた夢想封印を撃ちそうになっていたの、私はまた止めに入りました。

仕方ないじゃないですか！ミスティアさん、涙目になってるんですから！

そのままなんとか霊夢を宥めて、私達はまた移動し始めました。

\*\*\*

今度は迷いの竹林にいます。

ですが、迷いの竹林ではあまり飛ばませんので、此処では歩いています。

飛ぶにしても、竹が沢山あって飛びずらいですよね・・・。

「・・・ストップ」

「?どうしたの?霊夢?」

私達の先頭を歩いていた霊夢が、私達を手で制しました。どうした

のでしょうか？

「ここ、罨があるわ」

「え？罨!？」

私は、霊夢の横から見るようにして地面を見ると、何かを上に乗せたような後が残っていました。

「本当だ・・・」

私がそう呟くと、視界の端に見慣れた黒色が映りました

「え？魔理沙?」

「おいおい、何で止まってるんだ？早く行こうぜ!」

どうやら、魔理沙には霊夢の声が届いていなかったようで、そのまま歩いて行ってしまいました。

「あ!待っ・・・」

私が待ったを掛けようとしたが遅かったようで、魔理沙は落とし穴に引っかかってしまいました。

「ま、魔理沙!」

私はその落とし穴に近付き、落ちてしまった魔理沙を引っ張り上げようとしたのですが、私の力が弱い所為で、中々引っ張り上げることが出来ません。

「う〜ん!」

「・・・ハア、私も手伝おう」

私の後ろからそんな声が聞こえたと思うと、人型となった鬼灯が私の隣に来て、魔理沙を引っ張り上げる手伝いしてくれました。

そして、そのお陰で魔理沙を引っ張り上げる事が出来ました。

「ハア、ハア・・・」

「鬼灯、ありがとう」

「いや、これぐらいなら別に構わないさ」

私が鬼灯にお礼を言っている隣で、魔理沙は疲れて座りこんでいました。

「・・・こんな事をする奴は、彼奴だけだな」

私達の様子を見て安堵したルカは、すぐに目を瞑って辺りにある気配を探っていました。



少ししてからルカは目を開けました。

「・・・そこか」

ルカは私達から見て右側に生成した氷柱を飛ばしました。  
すると・・・

「きやあ!」と、そんな声が聞こえ、出て来たのは、やっぱり・・・

「てるさん・・・」

「あ、あはは、ゴメンね」

てるさんは私達から目を逸らしながらも謝って来ました。・・・ルカが反応しないところを見ると、嘘ではないようです。

「それにしても、何であんた達は此処に来たんだい? 姫様達は何もしてないよ?」

てるさんは顔を私達に向けると、そう質問してきました。

「異変を調べてんのよ」

「異変? もしかして、花の異変のこと?」

「え? 知ってるんですか!? てるさん!」

私はとても驚きました。が・・・

「いや、知ってるかって言われても、それだけだよ? 何が原因でこんな事が起こってるのかは知らないよ」

と、言われました。

「え? でも・・・」

「いやだってさ・・・竹の花が咲いてるんだよ? こんな事、異変じゃない限りないだろ?」

「そうですね・・・」

確かに、そう言われればそうですね。頭が回っていませんでした。  
「そ、ならこの先に進むだけよ」

霊夢がそう言うと、

「姫様達のところに行くのかい? だったら、私と弾幕ごっこをしてからにしろ!」

と、てるさんが言ってきました・・・て、え?

「え? てるさん、弾幕ごっこをしたいんですか?」

「そ。だって退屈だったからさ! 良いだろ?」

「てゐさんの頼みを私はどうしようかと迷っていると、二人が前に出て行きました。」

「そうだなー！それに、私はさっきの事もあるからな！さっきのお礼も兼ねてやってやるぜ！」

「アレはお前が止まらなかつただけだろ」

「うっ・・・な、なら！何でお前も出てるんだよ！」

「私は、ちよつと此奴には『お仕置き』が必要だと思つてな。だから参加するんだ」

「え？お仕置き？え？え？」

「てゐさんがルカの言葉を聞き、少し戸惑つてる間にも話が纏まり、魔理沙とルカがてゐさんの相手をする事になりました。」

「と、いうことで、私と魔理沙がお前の相手をする事となつた。それで良いな？てゐ」

「その言葉を聞いたてゐさんがハツとして意識を此方に戻し、ルカと魔理沙を見て、遊ぶのを待ちきれない子供の様な顔をして、

「いいよーさあ、始めようか！」

と、言いました。

そして、てゐさん対ルカと魔理沙の弾幕ごっこが始まりました。

## 第七十四話

（ルカ side）

私と魔理沙は、悪戯大好き鬼であるてゐを懲らしめるために弾幕ごっつこに自主参加した。

そして、今、てゐと対峙しているわけだが・・・

「なんで逃げてばかりいるんだ？反撃してこいよ！」

「反撃したくても出来ないから逃げてるんだよー！」

魔理沙の弾幕から多分、全速力で逃げているてゐ。少し可哀想に見える。

仕方ないだろ？てゐの奴、涙目状態で逃げてるんだぞ？私はレティシアみたいな鬼畜さは持ち合わせて居ないからな、今は傍観に徹している。

しかし、絶対魔力の消費も激しいな、アレ。

・・・仕方ないか。

「魔理沙、もうやめろ」

私は一旦、魔理沙を止めることにした。

「ハア!?何だよー！」

「お前、まだ異変も解決出来てないのに魔力切れで足手まといになるつもりか？」

「うっ・・・」

魔理沙は私の言葉は正論だと思った様で、てゐへの弾幕攻撃をやめた。

「ほっ」

てゐの奴がほっと胸を撫で下ろしているのが視界の端で微かに見えた。

「さて、ここからは私も参加する。魔理沙は余りスペルを使うなよ。さっきのでどれだけ魔力を消費したか分からないからな」

「いや、まだいけるぜー」

私が珍しく魔理沙（の魔力）を心配すると、魔理沙はそう答えた。

・・・私が弾幕ごっこをしている時には無理矢理休ませるか。

私が魔理沙と会話しながらそう考えていると・・・

「あんた達！余所見は禁物だよ！『エンシエントデューパー！』」

てゐはスペル宣言をした。

・・・まあ、確かに、弾幕ごっこ中に余所見をしていた私や魔理沙が悪いな、今回は。

私達は何時でも避けれるように構えていたが、直ぐに無理だと分かった。

てゐの左右からレーザーが放たれ左右に逃げれなくなってしまい、そのレーザーの横をまるで兎が跳んでいるかのような動きで配置された赤い弾幕、てゐの方からは全体的に行き渡らせるかのように次々と飛ばされている青い弾幕があった。

青い弾幕だけなら対処は出来るが、赤い弾幕がてゐを中心としながら此方に飛んでくる為に余計に避けずらい。

・・・だが、私はこのスペルを見て一つ良いことを思い付いた。

まあ、魔理沙の協力が必要不可欠なんだが、運が良ければ一発で終わる。

「魔理沙」

私は、隣で必死に避けてる魔理沙に話し掛けた。

「なんだぜー！ルカー！」

魔理沙が私に返答した時、レーザー等が全て消えた。

まあ、理由はてゐが移動したからなんだがな。

だが、少しの間でも話せる時間があるなら大丈夫だ。

「魔理沙、『ファイナルスパーク』は撃てるか？」

「ああ、撃てるがそれがどうしたんだぜ？」

「だったら、私が合図した時に撃つてくれないか？」

「分かったぜー！」

そして、またレーザーを放ち、赤弾と青弾を放ち始めた。

てゐの顔からは余裕の笑みにも見える笑顔が浮かんでいたが、おしまいにさせてもらおう。

流石に余裕が無くなってきたな。だったら・・・

「今だ！魔理沙！」

「分かったぜ！魔砲『ファイナルスパーク』！」

私達はレーザーで身動きが取れない状態だが、相手もまた、そのレーザーからは逃れられない。

自分の弾幕だからといって当たらないわけじゃ無いんだ。

それに、そのレーザーがあるからの的（てゐ）を狙い定めることなんて簡単だ。

つまり、何が言いたいかというところ・・・

「え？きやあああああ！」

魔理沙の様な直線的なスペルを使える奴がこのスペルでは勝てるって事だ。

そして、魔理沙のスペルは狙い通りてゐに当たり、そのままてゐは倒れてしまった。

（葵 side）

てゐさんを倒した後、ルカは宣言した通り、ちよつとした『お仕置き』をしました。

別にそこまで酷いものではありませんよ？魔理沙にお仕置きした時の強化版みたいなものですよ？

その場で正座させた上、足を凍らせて動けなくし、脚の上に氷塊を五個乗せて（どうやって乗せたんでしょうか？）、その上、頭にも氷塊を乗せた状態での説教をしているだけです。ハイ。

・・・すみません。ちよつと、それを受けてるてゐさんの顔を見てルカを止めようとしたんですが、鬼灯に止められてしまい、止めれずにいます。

てゐさん、ごめんなさい。

私達は、ルカがてゐさんへの説教が終わるまでその場に留まり、その後はてゐさんに連れられて迷いの竹林から永遠亭へと移動しています。

「・・・本当に大丈夫なのよね？」

咲夜さんがてゐさんを訝しげな顔で見ながらそう言いました。

まあ、さっきのアレを見たらそうなるかもしれないですね。

「大丈夫ですよ。てゐさんを信じてください」

「あら？貴女は信じてるのかしら？その妖怪兔の事を」

「はい。信じていますよ」

私は少し笑顔を見せながらそう言いました。

「・・・そう。分かったわ。貴女が言うなら信じましょう」

「ありがとうございます！」

「・・・貴女、まるで自分が褒められた様に笑えるのね。不思議ね」

「え？そうですか？友達が褒められたら嬉しくありませんか？」

私は咲夜さんに聞いてみました。私の考えはおかしいのでしょうか？

「いえ、それは素敵な考えよ。だから、変えたら駄目よ」

「！はいー」

私は咲夜さんに笑顔でそう返事しました。

\*\*\*

迷いの竹林を歩き始めて数分後、私達は永遠亭に着くことが出来ませんでした。

永遠亭の門には周りをキョロキョロと見渡している鈴仙さんがいました。

そして、鈴仙さんが此方を見ると何かを見つけたかのような顔をして此方に走って近付いて来ました。

「てる！今まで何処に居たの!?!」

「い、いや、竹林の散歩に・・・」

鈴仙さんがてるさんを問い詰めています。てるさんは何かを隠そうとしているのか、口籠っていました。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、良いわよね？」

「え？何を？」

鈴仙さんがてるさんにまだ何かを言おうとしましたが、それを霊夢が無理矢理にも近い方法で止めました。

「というか、今の聞き方は却下出来ない聞き方じゃないですか。決め付けられていますもん。「聞けるわよね？」みたいな感じで。」

「あんだ、花の異変について何か知らないかしら？」

「花の？ああ、竹の花が何故か咲いてる理由の事？」

「それもあるんですが、竹だけじゃなくて色々な四季の花が全て咲いているんです。それについて、何か知りませんか？」

「え？・そうなの!？」

鈴仙さんはこの事については本当に知らない様ですわね。

「ああ。それでだ。お前が何も知らないのは分かった。だから、永琳に合わせてくれないか？何億年も生きてるなら何か知ってるかもしれないからな」

ルカは鈴仙さんにそう頼むと、鈴仙さんは入れてくれました。

そして、永遠亭の中を歩いて進み、ある部屋で止まりました。

鈴仙さんはその扉をノックすると中から「どうぞ」という声が聞こえ、入ると、永琳さんが何かをしていました。

「あら？博麗の巫女御一行じゃない。どうしたのかしら？」

「今起きてる花の異変の事なんですけど・・・」

「花？ああ、竹の花が咲いてる異変ね。咲く時期が全然違うからもうそろそろ鈴仙に行かせようかと考えてたから丁度良いわ」

「え？」

私は永琳さんに質問すると、そう返って来ました。

「えっと、つまりは・・・？」

「鈴仙を連れて行きなさい。私は忙しいから鈴仙に後は頼むは。あ、さっきの貴女からの質問だけど、私は何も分からないわ」

「お師匠様〜！」

「えっと、ご愁傷様です・・・」

結局は何も情報は得られず、鈴仙さんも一緒に異変解決をすることになりました。

・・・鈴仙さん、本当にご愁傷様です。

## 第七十五話

（葵 side）

永遠亭から離れた私達の次に向かう場所は・・・

「なんで冥界なの？霊夢」

「適当よ。私の勘が働かないから適当に行けば何とかなるでしょ」

「霊夢が言うのと本当になりそうだから怖い」

「だな」

そんな話をしていると、後ろから視線を感じたので振り向いて見ると、鈴仙さんが見ていました。

「どうしましたか？鈴仙さん」

「やつぱり」

「え？」

「霊夢さん達には『タメ口』なのに、私には・・・いえ、霊夢さん達以外には『敬語』なんですネ」

あ、その事ですか。鈴仙さんが私を見ていたのは。

「いえ、始めは霊夢達にも『敬語』で話してましたよ」

「そうなんですか？」

「そ、やめてって言っても暫くは『敬語』で話してたのよ？こいつ」

「私の時もだ。『敬語』じゃなくていいと言ったのに『敬語』だったからな。暫くは」

「あ、あはは・・・」

「何か理由でもあるんですか？」

「理由、ですか・・・いえ、ないですね」

・・・私の『能力』で心の距離が開いてしまって、いつの間にか、なんて、言えません。絶対に。

ルカ達にも迷惑を掛けてしまっているのに、これ以上、迷惑を掛けられませんからね。

「・・・」

私が鈴仙さんにそう言うてからルカがずっと私を見ているのが気になります。きっと、さっきの嘘の事でしょう。



これぐらいは許してね？ルカ。

\*\*\*

そのまま空を飛び続けて、冥界へと入り口を見つけました。そのまま入って行くと、何かの音が聞こえてきました。

「・・・あれ？この音楽、前に一度聞いたことがあるような・・・」

「ああ、プリズムリバー三姉妹か。いや、確かに懐かしいな！」

「そうね。あの時も冥界で演奏してたわよね」

プリズムリバー三姉妹

長女・ルナサさん。次女・メルランさん。三女・リリカさん。その三人をまとめて呼ぶ通称がプリズムリバー三姉妹。

前回会った時も、咲夜さんの言う通り此処、冥界で会いました。

あの時の演奏もとても綺麗でした。

「行ってみましようか」

「そうですね」

私達は音を頼りに長い階段を飛んで移動し始めました。

\*\*\*

「あ、居ました！」

飛び始めてから数分後、私達はプリズムリバー三姉妹を見つけました。三人とも、演奏をしています。

「♪♪♪」

「相変わらず良い音ね」

「そうだね、霊夢」

「私も初めて聞きますが、これは確かに感動しますね」  
「だろう？」

暫く曲を聞いていると、ふいに曲が止まりました。

私達がどうしたのかと見て見ると、ルナサさん達が此方を見えていました。

「どうしたの？」

「ルナサさん達の曲がとても素敵で、また聞き惚れてたんです」

私が素直にそう言うと、赤い服装で、ルナサさんとメルランさんと

は違いズボン着ている『リリカ・プリズムリバー』さんが尋ねてきました。

「実は、今起こってる花の異変の調査をしているのですが、心当たりはないですか？」

私がそう言うと、ルナサさん達は考え始めました。が  
「ううん、知らないよ」

答えはやっぱりの解答でした。

「そうですか。すみません、演奏練習中に・・・」

「そう思うなら！私達と弾幕ごっこしようよ！」

「「「「「・・・え？」」」」」」

「どうやら、この異変の間は何回も弾幕ごっこをすることになりそうです。」

## 第七十六話

（鈴仙side）

「それでは、私と鈴仙ですね。よろしくお願いします鈴仙さん」

「あ、ハイ。よろしく願います」

プリズムリバー三姉妹の相手は、私と葵さんになりました。

別に嫌と言うわけではありませんが、大丈夫なんでしょうか？

私達は今回、初めて一緒に戦います。コンビネーションが合うわけがないです。

「鈴仙さん」

「？どうしました？葵さん」

葵さんが私に話しかけてきました。どうしたのでしょうか？

「鈴仙さんは『攻撃』にだけ集中して下さい」

「・・・え？」

え？この人は何を言ってるの？私に弾幕に当たってさっさと退場しろって言いたいのか？

「・・・」

私は葵さんを睨みつけると、葵さんは苦笑していました。

『守り』の方なら安心して下さい。・・・今回は初めてのタッグでの弾幕ごっこですから信用ならないのは分かりますが、願います」

葵さんはそう言うと、私に頭を下げてきました。

・・・これじゃあ、反論なんて出来ないじゃないですか

「分かりました」

「！有難うございます!!」

葵さんは笑顔をみせながら私にお礼を言いました。・・・これぐらいのことでお礼を言いますか？

「あんた達！早くやるわよ！」

「あ、はい！」

葵さんはそう言うと、私より後ろへと移動しました。

「・・・え？」

「大丈夫です。ですので、鈴仙さんは『攻撃』にだけ専念して下さい。

回避も確かに必要ですが、今は安心して『攻撃』に集中して下さい」  
「・・・分かりました」

私は視線を葵さんからプリズムリバー三姉妹に戻しました。

「それじゃあー私から行くよー冥鍵『ファツイオーリ冥奏』！」

リリカさんがスperl宣言をすると、彼女を中心として赤色が四本、青色が四本、計八本の楔型弾幕が回転し始めました。それを避けようとする、曲線を描いた状態のまま、全方向へと曲がった横長の弾列が放たれました。

私はそれらを避けようとしていますが、赤と青の弾幕は逆に回っている為に避けにくくなっています。決して避けられないわけじゃありません。

「・・・あ」

私が避けていると、プリズムリバー三姉妹の誰かが撃つたのでしよう。別方向から弾幕が飛んできました。

私は覚悟をしてたけど、少ししても体に当たりません。私は目を開けて見ると・・・

「・・・え？」

私の周りには結界が張られていました。

「結界『二重結界』！」

どうやら、葵さんがこの結界を張ってくれたようです。とすると、葵さんが『守りの巫女』？

「いえ、そんな事は気にしてられない。後で本人に確認すれば良いだけよ」

私はそのまま三姉妹の方に向かって走り出した。

「だったら、大合葬『霊車コンチエルトグロツソ』！」

ルナサさんはそう宣言すると、三人が三角形の形になる位置へと移動しました。

すると、何故か回り始めました。

だけど、それと同時に弾幕が全方向へと飛ばされています。

「これぐらいだったらー！」

私はそれを避けてドンドンと近付きます。

すると、ルナサさんが緑色、メルランさんが青色、リリカさんは赤色のレーザーブレードの様なものを出して、完璧な三角形を作っていました。

そして、さつきから飛ばされていた米粒弾がそのレーザーの上を通ると、色が変わり、軌道まで変わりました。

「・・・」

私は怯むことなくそのまま進みました。

だって、私は『攻撃』にだけ専念しているから。

「結界『三重結界』！」

私の周りに葵さんが張った結界が現れ、私は弾幕に当たらずにプリズムリバー三姉妹の近くまで移動出来ました。

「これで終わりよ！狂符『幻視調律（ビジョナリチューニング）』！」

私はスperl宣言をした。

すると、沢山の弾丸型弾幕が隙間無く並び、それが上下に移動しながら相手を追い詰めて行きます。

「うわわ！これ反則じゃ・・・」

「残念ですが、反則じゃありません」

私はこの能力『狂気を操る程度の能力』。

私はこの能力を使って、時々、弾幕を透明にしています。

それに気付いたのか、透明化している時に移動している三姉妹：：ですが。

「ちゃんと見てないと当たりますよ？」

私の能力で弾幕を分裂させ、透明化を解きます。

「うわわ！ちよ、当たる！」

「不味いな」

「当たっちゃうわね〜」

そして、三姉妹は仲良く弾幕に当たり、弾幕ごっこは私達の勝ちで終わりました。

\*\*\*

「大丈夫ですか？プリズムリバー三姉妹さん」

「大丈夫よ〜」

「ああ、大丈夫だ」

弾幕ごっこが終わった後、直ぐに葵さんはプリズムリバー三姉妹を治し、今は心配をしています。

「・・・」

「どうだった？一緒にタッグを組んで戦ってみた感想は」

そんな声が後ろから聞こえ、後ろを振り向くと、鬼灯さんが居ました。

「とても戦いやすかったです」

私が素直な感想を言うと、鬼灯さんはとても嬉しそうな顔をしました。

「だろうな。彼奴は『補助特化』だからな」

『補助特化』って事は、『攻撃』が出来ないんですか？」

「ああ。全くと言っていいほどに出来ない。彼奴にはそんな才能は無いんだ」

「武器での攻撃も？」

「ああ。彼奴が一度、自分が得意とする弓で妖怪を攻撃しようとしたことがあるが、全く当たらなかった。どうしてかその時だけ集中が切れるんだ。まぐれで当たったこともあるが、その後からは弓すら向けられなくなった」

・・・それは、葵さんが優しすぎるからなんでしょうね。

まぐれでも当たったのに喜ばなかったんでしょう。弓を向けられなくなったのが良い証拠。

「・・・そう」

「だが、彼奴が後ろに居てくれただけで、私達は安心して攻撃に集中出来るんだ」

・・・それは、私も今回、初めて体験した。

本当にとっても戦いやすかった。

攻撃にだけ集中すると、本当にやりやすかった。

「・・・」

私は、少しの間、葵さんを見ていました。

〈鬼灯side〉

葵と鈴仙の弾幕ごっこが終わり、今、私達はとてつもなく長い階段を飛んで登って行った。

流石にアレだけ長い階段を歩きで登るのは時間が掛かるからな。

「おや？霊夢さん達じゃないですか。それに鬼灯様も。おや？その兎は誰ですか？」

一番上に着くと、妖夢が居た。

「ああ、妖夢か。その兎は・・・」

「初めまして。鈴仙・優曇華院・イナバと言います」

「どうも。魂魄妖夢と言います」

鈴仙と妖夢は互いに挨拶をすると、顔を此方に戻した。

「それで、何か御用でしょうか？」

「ああ、外の異変の事であの亡霊に話を聞きに来たのよ」

「異変ですか？」

「そ、だから亡霊のとこまで案内しなさい」

霊夢がそう言うと、妖夢は「分かりました」と言い、案内してくれることとなった。

\*\*\*

「暫く此処でお待ちください」

妖夢は私達を客間に案内すると、幽々子を呼びに座敷から出てしまった。

「それにしても、此処で何か情報を得られるかしらね？」

「どうなんだろう？」

「ま！得られなかったらまた色んなとこに移動するだけだぜ！」

「それしか方法はないな」

「そんな行き当たりばったりでいいの？」

「そんな行き当たりばったりでも異変を解決できるから良いのよ」

「・・・え？」

・・・実際問題、私に聞けばこんな異変は直ぐに終わる。

『異変ではなく自然現象だ』と言えば良いからな。

・・・いや、言おう。もう言ってしまうおう。

「なあ、葵」

「ん?どうしたの?鬼灯」

私は近くにいた葵に告げることにした。

「コレはいh「お待たせく。ごめんなさいね」・・・幽々子」

私は測ったのでは無いかと思うぐらいのバッドタイミングで現れた幽々子に溜息を漏らした。

「あら?どうしたのかしら?鬼灯」

「・・・いや、なんでもない。気にするな」

私はもう一度溜息を漏らし、姿勢を正した。

「それで?貴方達は私に何を聞きに来たのかしら?」

「花の異変についてよ」

「花の異変?それって・・・」

!ようやく言ってくれるのか!?

私は期待を込めた目で幽々子を見ると、幽々子は少し笑みを浮かべて・・・

「ごめんなさいね。全くと言って良いほどに心当たりがないわ」

(幽々子「……………」)

「あ、そうなの?なら何も聞くことはないわ」

霊夢はそう言うのと立ち上がり、部屋から出て行こうとした。

「あ、ちよつと待ちなさい。妖夢、貴女も着いて行きなさい」

「え!?!」

「は!?!」

幽々子の言葉に驚いたのは妖夢と霊夢。

私以外のその他は声に出さなかったものの、驚いたような顔をしている。

「・・・なんでよ」

「妖夢の修行の為よ♪異変解決なんて、修行にピッタリじゃないの」

幽々子はそう言うのと、妖夢を私の方へと押し出した。

「わあ!?!」

「おっと、大丈夫か?妖夢」

「はい。大丈夫です」

私は妖夢を受け止めた後、幽々子をジト目で見た。



「ふふ、鬼灯。そんな目で見たって意見を変えるつもりは無いわよ」  
幽々子はそう言いながら、自分の手前に置いてあるお茶を手に取り、少し飲んだ。

「・・・マジで変えるつもりはなさそうね」

「だったらどうする？・霊夢」

葵が霊夢にそう聞くと、

「仕方ないから連れてくわよ」

妖夢が着いてくることになった。

「それじゃあ！行くわよ！」

霊夢がそう言うと、全員返事をし、屋敷を出て行った。

・・・ただ、ルカが最後の最後で私を睨みつけたが、幽々子の嘘から聞こえた本音の所為だろうな。

どうしていつもこうなるんだ？

私は少し溜息を吐くと、霊夢達を追うようにして移動した。

## 第七十七話

〈葵side〉

「あー、もう！なんで全然情報が集まらないのよ!!？」

霊夢は遂に我慢の限界に達してしまった様です。

・・・まあ、確かに関係しているかもしれない情報は集まってませんから仕方ないのかもしれないね。

「ちよつと何か良い提案ない？」

「ええ!?! 私達に振りますか？それを」

「呆れたわ」

「そうね」

「だな」

「・・・」

霊夢からの振りに妖夢さんは慌て、咲夜さん、鈴仙さん、ルカ、鬼灯は呆れていました。

魔理沙は「霊夢らしいぜ！」と言って笑っていましたが。

「あやや！皆さん、こんな所でどうしましたか？」

「あー文さんー！」

そんな時に文さんが此方に近付いて来ました。

「いえ、実はこの異変を解決しようとしているのですが、何処へ行けばいいのか分からなくて・・・」

「葵、なんで文に話してるのよ」

「え？だって、文さんなら何か知ってると思ってる・・・」

「そうだな！文は新聞記者だから何か良い情報を持つてるかもしれないぜー！」

私の言葉に賛同してくれた魔理沙。そのおかげで、霊夢は「それもそうね」と言つて了承してくれました。魔理沙、ありがとうございませぬ。

「それで、何か情報はないか？文」

ルカがそう聞くと、文さんは待つてました！と言わんばかりの笑顔になり、私達に手掛かりを与えてくれました。

\*\*\*

「・・・で、文、あんたの言う通りに此処に来て見たけど、本当に何かあるんでしょうね?」

「はい! 此処には沢山の鈴蘭がありますので!」

「それにしても、私、此処に山がある事を初めて知りましたよ・・・」  
私達が今居る場所は妖怪の山とは正反対の方向にある山です。

「それでは! また何かありましたら呼んでください!」

「あ! ちよつと待ちなさい!・・・はあ、見えなくなつたわ」

「あ、あはは・・・。流石、文さんだね」

文さんは『風を操る程度の能力』を持つてる為か、幻想郷一早く飛ぶことが出来ます。

文さんより早く飛べる人を、私は見たことがありません。

「仕方が無いわね。先に進みましょう」

鈴仙さんのそんな言葉で、全員先に進むことにしました。

そして、進み続けること約二分。私達の目に沢山の鈴蘭が映りました。

「あの鈴蘭が文さんが言つてた鈴蘭だよね?」

「でしょうね。というか、それ以外に見当たらないわ」

私と霊夢がそう話していると・・・

「貴方達、どうして此処にいるの?」

前から一人の女の子が近付いて来ました。

姿は金髪のウェーブのショート、赤いリボン、青い瞳をしており、黒い洋服で赤いスカートを着た女の子がいました。

「あ、すみません。実は異変を解決しようとして動いているのですが、有力な情報が集まらなくて、何か知りませんか?」

私とその女の子にそう聞くと・・・

「知らないわよ。でも、知つてたとしても教えない」

そう言われました。

「・・・え? どうしてですか?」

「だって、貴女達は此処で死ぬんだもの」

「・・・え? 死ぬ? 私達がですか? でも、どうして」

「・・・葬、後ろを見てみなさい」

私はそう言われたので見てみると・・・

「うっ・・・」

「なんだか、調子が・・・」

「皆さん!」

私と霊夢以外の全員の様子が悪そうでした。

「え?ど、どうして・・・」

「それは寧ろ私が聞きたいよ。どうして『貴女達はスーさんの毒が効かないの?』」

「・・・え、スーさん?毒?」

「どうか、どう言うことですか?どうして私と霊夢には・・・いや、もしかすると・・・」

「知らないの?スーさんは鈴蘭達のこと。私の命を留めてくれるものでもあるの。それで、貴女達はどうして毒が効かないの?」

私は女の子の答えに自分の答えを言うことにしました。

「私達の能力が関係しているのだと思います」

「貴女達の能力?」

「はい。私の能力は『癒し、治す程度の能力』です。この能力のお蔭で私は毒が効かないんだと思います」

「成る程ね。で?貴方は?」

「私は何にでも浮く事が出来るのよ」

「へえー、そうなんだ。まあいいや。貴女達は殺せないけど、他の人は死ぬだろうしね」

「・・・そんな事、させません!」

私は直ぐに全員に近寄り、能力を使って毒を治しました。

「ふう、少し楽になったぜ!ありがとな!葵」

「魔理沙、お礼を言わないで。私は当たり前前の事をやっただけだから。それに、今はそんな時じゃないよ」

「そうか?まあ、そう言うなら・・・」

「あら?残念。死ななかつたんだ」

「あんた・・・」

霊夢がとても怒っています。・・・仕方ないですね、コレばかりは。私だって、怒ってますから。

「ちよつと待ちなさい。霊夢」

霊夢が女の子に攻撃しそうな雰囲気醸し出している時に、咲夜さんが霊夢に話しかけました。

「何よ」

「此処は私にやらせなさい」

「はあ?」

「別に良いでしょ?」

咲夜さんの目を見ると、意見を変えるつもりはないという決心している様な目をしていました。

「・・・分かったわよ」

霊夢はその目を見て、咲夜さんに譲りました。

けれど、私は下がりませんでした。

「あら? 貴女は下がらないの? 葵」

「はい。私が咲夜さんの手伝いをします」

「分かったわ。お願いするわね」

私の言葉に咲夜さんはそう言ってくれました。

「そう。貴女達から先に死ぬのね。ま、どんな順番で来ようとも先か後かの問題だけだね。でも良いわ。私、『メデイスン・メランコリー』が相手をしてあげる」

そして、メデイスンさん対咲夜さんと私の弾幕ごっこが始まりました。

## 第七十八話

（咲夜 side）

私はこの異変を解決するために霊夢ついて来た。

そして、この綺麗な鈴蘭が咲く山まで来て、目の前の少女に殺されかけた。

まあ、葵が能力で治してくれたからまだお嬢様のメイドをすることが出来るけれど、殺されかけて「はい、そうですか」と言っただけで帰れるほど私は弱虫じゃない。

だから、私は自分から弾幕ごっこをしようと言った。

葵も私の手伝いをしてくれることになり、今はその弾幕ごっこをしている途中だけれど……

「くっ!!? だったら! 毒符『ポイズンブレス』!」

少女を中心として、四色の色の弾幕がぐるぐると回って私達を襲うけれど、それはその弾幕の動きに合わせて私達が動けばいいだけだから何も問題無かった。

「はい、スペルブレイクよ」

「……だったら! 霧符『ガシングガードン』!」

彼女がまたスペル宣言をすると、米粒弾の弾幕がばら撒かれ、毒霧は私達に向かって来ようとしていた。

……けれど

「防结界『二重结界』!」

葵がそう宣言すると『相手』に结界が張られた。

そのお蔭で、弾幕も毒霧も此方には来なかった。

それに、米粒弾の弾幕は全て相手に跳ね返っていたわね。

「うわわ!」

相手は自分の弾幕に苦しめられていたけれど、私はそこで手を休めるわけにはいかない。

ここで決めるわ!

「幻葬『夜霧の幻想殺人鬼』!」

私の周りには沢山の……それこそ、私が持つスペルの一つ『幻符

『殺人ドール』よりも多くのナイフを相手に投げつけた。

勿論、時間も止めてね。

そして、それらは相手に当たり、私達の勝ちとなったわ。

〈葵side〉

メデイスンさんはあの後、気絶してしまいましたので、私が少し、メデイスンさんの事を話すことにしました。

「私がメデイスンさんの過去を見てしまった時に分かったことですが？メデイスンさんは元々は『人形』だったんです」

「は？人形？」

「その人形がどうしてこうなったんだぜ？」

魔理沙が疑問を投げかけてきたので、答えました。

「メデイスンさんになる前の『人形』だった頃に、人によってこの山に捨てられてしまったようです。それから捨てた人に恨みを持つて……」

「……人間そのものに恨みを持って『妖怪化』したのですか」  
「そう言うことです。妖夢さん」

「……私は、メデイスンさんにもつとこの世界を知ってもらいたいと思っています。が、メデイスンさんはこの鈴蘭達がいないと生きてはいけません。」

「一体、どうすれば……」

「うっ……」

「!!？メデイスンさん、気付きましたか？体は大丈夫ですか？」

「……平気よ。というか、近寄らないで」

メデイスンさんは私にそう言ってきました。ですが、私はメデイスンさんに近寄り、治しました。

「ちよつと！」

「メデイスンさん。先に謝ります。ごめんなさい」

「……は？」

メデイスンさんは私が謝った理由が分からない為に首を傾げていました。

「私は、私の能力で貴女の『過去』を見てしまいました」

「・・・」

私はそのまま続けます。

「私の親友には人形をこよなく愛する人がいます。それはもう本当に大好きで、私はその人が人形を乱雑に扱っているのを見たことがあります」

「・・・！」

「メディスンさんは確かに捨てられてしまっただけで悲しかったですよ？ですが、全ての人が人形を簡単に捨てる訳ではありません。ですから、一度、様子を見てくれませんか？」

私はメディスンさんにそう言うと、メディスンさんは少し考えて・・・

「・・・分かったわ」

と言ってくれました。

「良かったです。でしたら、私達はこれで失礼しますね」

「そうね、異変を解決しないといけないからね」

私達が移動しようとする・・・

「待つて！」

メディスンさんが待ったを掛けました。

「?どうしました？」

私はメディスンさんの方に振り向いてからそう言いました。

「私も此処から移動したい！」

「・・・え?で、ですが」

「お願い！」

メディスンさんの必死の頼みに私は断れず、頷いてしまいました。

「やった！」

その返答にメディスンさんは喜んでくれましたが・・・

「・・・どうでしょう?」

「おい、考えてなかったのか」

「うっ・・・」

私は目を逸らしてしまいました。

そして、数分の沈黙の後



「・・・ハア、本当は嫌だが、『彼奴』に相談するか」

鬼灯が口を開いてそう言いました。

『彼奴』？ 『彼奴』って誰？ 鬼灯」

私がそう聞くと、鬼灯はこう答えました。

『太陽の畑』に住んでいる私の友人の一人だ。植物の事なら彼奴の方が詳しい」

私達はそれを聞くと、私達は少し移動することにしました。

メデイスンさんの為に数本ではありますが、鈴蘭も持ってです。

## 第七十九話

（カサシデ）

私達は、鬼灯に連れられるようにして『無名の丘』から『太陽の畑』というところに移動しています。

山の名前についてはメディスンさんに教えてもらいました。誰も来ないから『無名の丘』という名前が付いたそうです。

メディスンさんについては、最初は緊張していましたが、今は大丈夫そうです。

そして、飛び続けて数分後、『無名の丘』とは正反対の方向に『太陽の畑』がありました。

「ここだ」

「すごい・・・」

「確かに、凄いですね・・・」

私達はその景色に見惚れてしまいました。

私達が見た景色は、一面向日葵だらけの花畑です。

私達は、その花畑に降りてみると・・・

「ま、全く方角が分からないぜ・・・」

「ここまで向日葵ばかりだと、仕方ないわね」

本当に向日葵ばかり・・・というよりも、向日葵しかなく、そのため方角が分からない状態です。

「鬼灯、どっちに進めばいいの？」

私が鬼灯に尋ねると、鬼灯は歩いて行ってしまいました。

私達はその後を追うような状態です。

・・・それにしても、鬼灯の歩きに全くと言って良いほどに迷いが無いように見えますが、ここに通り慣れているのでしょうか？

となると、時々、何処かに出かけているのは、妖夢さんの修行と此処に来てたんでしょうか？

・・・分かりませんが、当たっているのでしょうかね。

暫く向日葵畑を歩いて居ると、開けた場所に出ました。

鬼灯が止まったために此処に誰か居るのだと思い、顔を向けてみる

と・・・

「花符『ローズガーデン』!」

私達の周りにあった向日葵が私達の『盾』になっていました。今のスペル、どうやら、鬼灯が宣言した様ですが・・・

「・・・ど、どういふことですか!?!」

メデイスンさんが慌ててますが、それは私も聞きたいです。

「鬼灯! どういふこと!?! なんて防御のスペルを・・・」

私がそう聞くと、鬼灯は此方の顔を見ずに・・・

「さあな? その変は『目の前の奴』に聴いた方が早いぞ」  
そう言いました。

そう言われた私達は、前の方を向いてみると、癖のある緑髪のショートで真紅の瞳、白のシャツを着て、上着と長いロングスカートは同じチエック柄をしたのを着ている女性がいました。

「あら? そんなの簡単でしょ? 貴女が中々私と戦ってくれないからよ」

「・・・私は戦いたくないとアレほど言ってるだろ」

「そんなの私には関係ないわ。私はもう我慢の限界・・・あら? その子達は誰かしら?」

その女性は私達の存在に気付き、聞いてきました。

「私は博麗霊夢よ」

「霧雨魔理沙だぜ! 普通の魔法使いだぜ!」

「神無月葵です。よろしくお願いします」

「霜月ルカだ」

「十六夜咲夜と申します」

「魂魄妖夢です」

「鈴仙・優曇華院・イナバです」

「め、メデイスン・メランコリーよ」

私達はそう自己紹介をしましたが、その女性は「ふーん、そう」というと、興味を無くしたかの様に鬼灯を見ていました。

「・・・ハア、まあ、戦わなくもないが」

「!ヘエ、貴女がそう言うなんて珍しいわね。貴女がそんな事を言

う時は大抵何かある時よ。それで？私に何か頼みたいんでしょ？」

女性がそう言うと、鬼灯は頷きました。

「ああ、そうだ『幽香』。実は、そこにいるメデイスンを此処で住まわせてやってくれないか？」

「・・・その妖怪を？」

「ああ、そうだ。メデイスンは鈴蘭の毒が無いと生きてはいけない。だが、住んでいた場所とは別の場所にも生きたい。『幽香』お前は大妖怪だから、鈴蘭の毒ぐらいなら平気だと思っとな。あと、私よりもそういうのは詳しいだろ？」

鬼灯が『幽香』さんという女性にそう言うと、女性は少し考えたのち、笑みを浮かべました。

「ええ、良いわよ。住まわせてあげる。毒を無くすことは出来なくても、住まわせる方法ぐらいはあるからね。ただし、私に勝ったらよ」

「分かっている。・・・『幽香』、一ついいか？」

「？何かしら？」

「妖夢も参加させて欲しい」

「え！？師匠!？」

妖夢さんは鬼灯の言葉に驚きました。

勿論、私達もです。

ですが、『幽香』さんはさらに笑みを浮かべました。

「あら？貴方の弟子なの？なら、楽しめそうね。良いわよ。それじゃあ、やりましょうか。あ、貴方は私を知らなかったわね。私は『風見

幽香』。よろしくね♪」

そして、幽香さんとの戦いが始まりました。

## 第八十話

く鬼灯sideく

・・・どうしてこうなった？

まあ、初めから気付いていた私が教えなかったのが悪いんだ。うん。

タイミングを見計らって言おうとすると何故か邪魔されるし、もう最悪『彼奴』に説教されない未来を考えずにいた。だがしかし、希望を見出すことが出来た！

幽香ならこの異変の原因を知っている！

私とは違ってスパツと言ってくれる！

・・・そう思っていたのだが、

「考え事？・余裕ね」

「！」

私は後ろからの声を聞くと、直ぐに右に回避した。

すると、私がいいたところには向日葵型の弾幕が通った。

「・・・幽香、少しぐらい手加減を」

「するわけ無いでしょ♪私は貴女に何度も何度も負けてきた。それが悔しいから何度も何度も貴女に戦えと言った。なのに、貴女はずつと断ってきたでしょ？こんな絶好の機会に『手加減』なんていららないでしょ？」

幽香はそう言うのと、また弾幕を放ってきた。

私も妖夢もそれを避けた。

「貴女ばかりに攻撃させません！幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

妖夢がスペル宣言した。

そして、楼観剣を横一線に斬って、その斬撃を幽香に飛ばした。

その斬撃の後ろからは楔型弾幕が放射線状に放たれながらも幽香を襲った。

・・・だが、私は知っている。

彼奴がこんなので倒れるやつじゃないことを。

「あら？・こんなじゃ私に傷を負わすことなんて不可能よ」

幽香は、自分が持っていた傘を一振りして、斬撃と弾幕を撃ち落としました。

勿論、撃ち落とされた弾幕は向日葵達に当たったが。

「おい幽香。お前が好きな花が傷付いてるがいいのか？」

「良くはないわよ。でも、貴女が再生してくれるでしょ？勿論、私も手伝うわ」

幽香はにこやかに笑いながらそう言った。

・・・今の私からすれば、その笑顔からも薄ら寒いものを感じるがな。

「鬼灯。貴女も攻撃しないのかしら？」

「・・・ハア、仕方ない。やるしかないか」

私は早々に決着を着ける為に、あるスペルを宣言した。

「植物『食全植物』！」

すると、下にあつた向日葵達に口が付き・・・

『GYAAAAAAA!』

そんな風に吠えた。

「さて、喰らえ。向日葵達」

私がそう命令すると、『何でも食べる』事が出来るようになった向日葵達は幽香を襲った。

「くっ!!?」

幽香はそれを全て避けていた。

・・・彼奴の能力は『花を操る能力』。

こんな風が変わったところで本質は向日葵。操ろうと思えば出来なくもないだろう。

だが、それは『自分よりもレベルが低い者』が操っていた場合だ。

こんな事を言うのもなんだが、私は幽香よりも強いと思っている。

妖怪としての年月も違う。妖力の量も私が上。

・・・もつと言うと、私が勝てないのはこの世界だけで言うところ『レティシア』だけだろう。

彼奴は強いとかの次元じゃない。間違いなくチートだ。

今はそのチートな力を『封印』してあの姿になっているが・・・久々

に見たいな。『本当』の姿を。

私が少しそんな事を考え、戦いに意識を戻すと、まだ幽香は向日葵達に襲われていた。

・・・弾幕も使っているが、それすらも『食べて』しまうのだから達が悪い。

結局、幽香は時間が切れる迄逃げるしかない。

・・・だが、私はさっさと終わらせたいんだ。

「妖夢、決めろ。私が追い込む」

「・・・分かりました」

・・・どうやら余り納得がいつてないが、コレばかりは仕方ない。割り切るしかないだろう。

私は向日葵達を操り、幽香を追い込んだ。

そして・・・

「迷符『半身大悟』！」

妖夢は剣を使わず、ナイフ型の弾幕を幽香に向けて放ち、その後から、最初とは違い数十本のナイフ型弾幕を幽香に向けて放った。

それら全てが放射線状だったがな。

幽香は目の前にいる向日葵達に意識がいつている所為で後ろから弾幕が来ていることに気付かずに当たり、向日葵達で体を思いつきり殴った。

そのお陰か、幽香はそのまま墜落し、この弾幕ごっこは幕を閉じた。

く葵 side

「大丈夫ですか!?!幽香さん!」

私は傷付いた幽香さんを見て、直ぐに近付いて傷を治し始めました。

傷は全て治りました。勿論、傷跡も残っていません。

「・・・ハア、また負けたのね」

私が幽香さんを治し終わると直ぐにそう口にした幽香さん。

「・・・」

「あーあ、貴女のラストスペルも使わすことが出来なかったわね、また」

「・・・お前から見て、妖夢はどうだった？」

鬼灯はそう幽香さんに聞きました。

「まだまだ実力が足りないわね。私が傘を一振りしただけで撃ち落とせたり消したり出来たことが良い証拠よ」

「・・・」

その言葉を聞いた妖夢さんは顔を俯かせてしまいました。

「よ、妖夢さん・・・」

「・・・そうか。これはまだまだ修行が必要だな」

私かなんとか妖夢さんをフオローしようとした途端に鬼灯がそう言いました。

「！い、いいんですか？師匠」

「ああ、別に構わないさ。というか、なんで師匠なんだ？」

「いえ、すみません。今は白玉楼のお客様と言うわけではないのでこの様な呼び方にしました」

「・・・そうか。分かった」

鬼灯は妖夢さんと話し終わると、幽香さんに顔を向けました。

「幽香、頼みがある」

「何かしら？鬼灯」

「メデイスンを此処に住まわせてやってくれないか？」

「別に構わないわよ。と言うよりも、それが貴女が勝った時の要望だものね」

その言葉を聞いたメデイスンさんはとても驚いた顔をしていました。

「え？いいの？」

「別にいいわよそれぐらい。それに、話し相手も欲しかったところだからね」

「！ありがとうございます！幽香！」

メデイスンさんは本当に嬉しそうな顔をして、幽香さんに飛び付きました。

「ええ、どういたしまして」

\*\*\*



「・・・で、もう行くのかしら?」

弾幕ごっこの後の向日葵の現状を見た鬼灯は、直ぐに自分の能力で『再生』して、元通り、元気な向日葵達に戻しました。

「ええ、もう行くわ。それじゃあね」

霊夢はそう言うのと、さっさと飛んでいってしまいました。

「あ!待つんだぜ!霊夢!」

「私達を置いて行かないでくれないかしら?」

魔理沙と咲夜さんはそう文句を言いながらも着いて行きました。

妖夢さんと鈴仙さんはそれを見て慌てながらも続きました。

(さて、私も・・・)

そう思った時に、私の背中ぎ何故か『ゾワツ』としました。

まるで『この先に行つてはいけない』と注意するかの様に・・・

(・・・?)

ですが、それも直ぐに収まりました。

(・・・気のせいだったのかな?)

「?どうした?葵」

「早く行くぞ?」

私が考え事をしてっていると、ルカと鬼灯が呼びかけてきました。

「あ、うん。ごめん、行こう!」

私は今さっきあったことを忘れる為に、飛んで行くことにしました。

## 第八十一話

（葵side）

現在、私達は彼岸花が沢山咲いている道を通っています。

理由は、霊夢が・・・

「よくよく考えれば、もう一つ異常があったのよね。だって、花の異常もあるけど、幽霊が多すぎるっていう異常もあるもの！」

と言ったからです。

ということ、死者に関係する場所である、此处『再思の道』に来ています。

私は彼岸花はとても好きです。だって、彼岸花は綺麗ですからね。

・・・それにしても、

（さつきから何かの予感がするけど、全く分からない。こんなに中途半端なことは今迄無かったのに・・・）

私の能力の影響からか、何か起ころうとすると大抵その内容まで全て分かるのですが、今回は『予感』だけで内容が全く分かりません。こんな事、一度たりとも無かったのですが・・・。

私がそんな風に考えていると・・・

「お？誰かいるぞー！」

魔理沙のそんな声が聞こえてきました。

私達は魔理沙が指差した方を見て見ると、ピンクの髪をツインテールにした、青い服を着た女性がいました。

私達が少しづつその女性に近付くと、女性が此方に振り向き、私達に気付きました。

「おや？まだ死人でもないのにこんなところ来ちゃダメだよ？」

「来たくて来たんじゃないわよ」

「私達は異変を解決しに来ました」

「は？異変？」

その人は全く分かっていないのか首を傾げています。

「季節外れの花が咲いている異変・・・だと思っていましたけど、多分、幽霊が異常発生したのが原因ですね」

「は？幽霊が異常発生？それはないない！私、ちゃんと仕事してたからね！」

「・・・はあ、だったら周りを見てみる」

鬼灯が溜息を吐きながらそう言うと、女性は言う通りに周りを見渡していました。

「あれ？あれあれ？なんで彼岸花が咲いてるんだ!？」

「それを解決しに来たんだが、それを聞かれても困る」

その女性の言葉に頭に手を起きながらそう答えたルカ。

「うわー、やっぱ。『映姫様』に怒られる・・・」

「？『映姫様』？」

「しっかりと叱られる。説教を受けておけ。私達もどうせ後で受けることになるからな・・・」

私が女性が言った名前を言うと、隣にいた鬼灯がそう言いました。・・・て、あれ？

「鬼灯、もしかして、何かこの異変の事を知ってるの？」

私がそう効くと、鬼灯は「やつとか・・・」といって、息を吐きました。

「ああ、知っている。というか、葬も一度見たことがあるだろ？私の過去を」

「え？ま、まあそうだけど、流石に長時間覚えていられるわけでもないから・・・」

あれ？てことは・・・覚えていたらすぐ此処にたどり着けていたということですか!？」

「てか、あんた知ってたんなら最初から言いなさいよ！言ってくれたら最初から此処に来てたじゃないの!!？」

「言うタイミングを計っていたら、こうなっちゃった」

「師匠・・・」

「あー、どんまいだね、あんたも」

何故か見知らぬ女性に同情されていた鬼灯でした。

「で？あんた達はその異変を解決する為にこれからどうするんだい？」

「勿論、この先に行くのよ」

「それはお勧め出来ないよ」

「・・・なんでよ」

霊夢が不機嫌そうにしながらも女性にそう聞きました。

「なにせこの先は『彼岸』。生きてる者が行くべき場所じゃ無いよ」

「・・・そうだとしても、私達は異変を解決するわ!」

霊夢はそう言うのと、お札を構えました。

「お?戦うのかい?私は別に良いが・・・なんとなく、そこの二人のペアと戦ってみたいね」

そう言って、その女性がある二人を指差しました。

その二人と言うのが・・・

「は?こいつと?」

ルカと鬼灯でした。

「そうさ!別に良いだろう?」

その女性は笑顔でそう言いました。

ルカと鬼灯はその言葉など聞こえていないのか、お互いを睨み合っていました。

「・・・足を引つ張るなよ、ルカ」

「・・・」

鬼灯はそういい、ルカは無言で女性の前に立ちました。

「やったね!さて、じゃあ自己紹介しておこうか!私は一級渡し人!

『小野塚 小町』!死神さ!よろしくな!」

こうして弾幕勝負が始まりました。

「……アレは……あの子は……『葵』？」  
……遠くから私を見ていた人に、私は気付いていませんでした。

## 第八十二話

↳ no sides

弾幕ごっこが始まってから少し経った。

その間、ずっと弾幕を撃っては避け、撃っては避けの繰り返しを繰り返していた。

「・・・罫が明かないな。だったら・・・」

この状況で一番最初に動いたのはルカだった。

「氷符『氷の牢獄』！」

すると、小町の左右・前後・上下に水色の弾幕が設置された。

「へえ、いいね。だったらこれさ!!? 死歌『八重霧の渡し』！」

すると、小町を中心として弾幕が配置され、周り出した。

そのため、数百もあった弾幕は打ち消された。

ルカは特に驚くでもなく小町の銭型弾幕から避け、鬼灯もまた避けた。

勿論、弾幕自体が回っているために回って避ける他無いのだが：

「・・・避けにくいな」

「悠長に言ってる場合じゃないと思うがな」

「それぐらい分かっている！」

この弾幕の迫ってくるスピードが結構早く、しかも密度も狭い。そのため避けるのに苦労しているのだ。

・・・ちなみに、この時、外野はというと、

「・・・あの、なんで少し険悪なんでしょう? あの二人」

「簡単な答えだぜ！」

「鬼灯が炎と自然。ルカが氷。何方も相性が悪いからですね」

「へえ、そうなの。まあ、確かに相性は悪いけれど・・・」

「はい。こういう戦闘では相性は悪くありません。寧ろ相性は良いですよ」

「え? でも・・・」

「まあ、見てれば分かるわよ」

と、こんな話をしていた。

「へえ、全て避けたんだね」

「まあな」

「結構、キツかったがな」

「だらしが無いな」

「うるさい」

「あ、あんたら、仲良くしなよ・・・」

危なく喧嘩しそうになる二人を諫めた小町。

日常では全然喧嘩をしない二人だが、葵が居ないところになってしま  
うのだ。

「さて、次はどうするんだい?」

「・・・スペル」

小町の言葉を聞くと、ルカがスペル宣言をした。

「氷符『氷霧』」

すると小町の周りが霧で覆われてしまった。

「なっ・・・!!??ッ!?」

小町が少しこの霧に驚いていると、弾幕が小町に飛んできた。

小町はその弾幕に気づき、間一髪ではあるが避けた。

・・・だが、避けた所にまた弾幕が飛んできた。

「うわっ!!?」

その時、小町は微かに見ることが出来た。

弾幕の色が『水色』ではなく『赤色』だったのを。

(おいおい、まさかあの子だけじゃなくて狐の方も弾幕を飛ばしてき  
てるのかい!?!?・・・面倒な事をしてくれるね!!?)

小町はそう考えるも、顔はとても楽しそうであった。

・・・そして、弾幕がまた飛んできた為に避けると、

「氷造『氷虎』」

そんな声が聞こえてきたかと思うと、二匹の氷で出来ている虎が小  
町を襲った。

「はあ!?!」

小町はまた避けると・・・

「炎造『炎狼』」

今度は炎で出来た狼が襲ってきた。

「ちよっ!??それは無いだろ!??」

今度は自身が持つていた鎌を使い、何とか対処した。

・・・だが、後ろからは弾幕が飛んできた。

「卑怯は良く無いと思うよ!??」

そしてそれらを全て捌くと、霧が晴れた。

時間が経ったのだ。

「ふう、これで・・・グッ!??」

小町は霧が晴れて、これでルカ達を簡単に見つけられると思ってい  
たら、後ろから襲われ、地面に抑えられた。

小町を後ろから押さえ込んだのは、氷で出来た虎だった。

「・・・さて、これで決着が着いたな」

そんな状態の小町に近付いて来たルカと鬼灯。

余裕そうな顔はしていない。寧ろまだ警戒している。

「それで?まだやるか?弾幕ごっこを」

鬼灯がそう問うと、小町は首を振った。

「いや、流石にこの状態じゃあね〜」

「そうか。なら、私達の勝ちだな」

「はあ、葵の方がもっと楽に出来た」

「それは私の台詞だ」

「あんた達、また喧嘩するのかい?」

そのやり取りを見て苦笑する小町。

最後の最後まで仲が良くないままに終わった弾幕ごっこだった。

〜葵side〜

「小町さん。ご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

「嫌、別に大丈夫さ!!?気にしなくて大丈夫だよ!!?」

私が小町さんに謝ると、小町さんは笑って許してくれました。

「はあく、あんた達、もうちよっと仲良く出来ないわけ?」

「無理だな」

「はは!既に仲が良いんだぜ!!?」

霊夢は二人にそう言ったけど、ルカと鬼灯は同時にそう言い、魔理



沙はそんな二人を笑って見ていました。

「あ、あのく、もう行きませんか？」

私がそんな光景を見ていると、妖夢さんがそう言いました。

「ん？それもそうね。此処にもう用は無いものね」

「それもそうですね。でも、どうやって行きますか？」

「彼岸までには行けなくとも、彼岸の近くまでは行けるだろ。まあ、船に乗らずだと、そこ迄近くに行けるわけでもないがな」

私達がそんな風に話していると・・・

「あら？残念。私は用があるのだけれどね」

「!!?」

私達に話しかけてきた人が居ました。

ですが、その声は『とても聞き覚えのある』声で・・・

私にとつて・・・いえ、魔理沙、咲夜さん、鈴仙さん、妖夢さんは

『聞いたことすらない』声の人が私達に話しかけてきました。

私は直ぐにその人の方向を見ました。

「・・・え？あ

お母さん？」

「久し振りね『葵』」

私達の後ろに立っていたのは、紛れもなく、亡くなった筈の『お母さん』でした。

## 第八十三話

〈葬side〉

「お、お母さん・・・どうしてここに・・・」

私は私の中から必死に声を出して、そう言葉にしました。

だって、全くといって良いほどに姿が変わっていませんから・・・。私と同じ空色の髪の毛のショート、空色の目、同じ巫女服。

どれも生前と変わっていません。まあ、死んだら姿が変わらないのは当たり前なのですが・・・

「どうしてって、死んだからよ？それ意外にあるかしら？『葬』」

・・・あれ？

私が少し頭の中で考えている時に、ルカと鬼灯が私を護るようにして前に出ました。

「おや？久し振りだね『人殺し』」

「・・・久し振りだな。言つとくが、その言葉を口にしたとしても、私は怒らない。事実だからな」

ルカはそう言うのと、母は歪な笑顔を浮かべました。

・・・あの頃にも浮かべていた歪な笑顔を。

「ああ、そうだったね。あんたは事実を否定したりはしない。だって、実際に有ったことだからね。だったら、どうして『真実』を隠したんだい？」

・・・え？ど、どうしてその事を母が知って・・・

「おいルカ。『真実』ってなんだ？何か隠してんのか？」

私が母の言葉に驚いていると、魔理沙がそう言いました。

「ん？ああ、あんたは知らなかったね」

母はそう言うのと、また歪に笑いながら言いました。

「あんたらは、私の死に方はどう聞いたんだい？」

「・・・病死よ」

「だろうね。死んだ人里の奴らも話してたよ。『あんた、病死で死んだって、子供に殺されたのかい？可哀想に・・・』ってね」

「・・・可哀想？どっちがだ!!？どう考えても葬だろ!!？お前は葬を虐

待したんじやないか!!?」

「え、虐待!?!?」

ルカが珍しく激怒して、そう口にしました。  
勿論、そんな事を知らない人達はとても驚いていましたが。

「――」

「?」

母が何か呟いた気がしますが・・・気の所為でしょうか?

「・・・ふん。だが、人里の連中はそう言ってたよ?でも、可笑しいね  
。だって、私が死んだ理由は・・・」

母はそこで一度区切り、ルカを見ながら・・・

「あんたが私を殺したからなのになさ」

く回想く

数年前。ルカが神社に住み始めてから数日後の事。

「・・・葵、大丈夫か?」

ルカは母親からの虐待にその日もあっていた。

今回はお腹を蹴られていた。

この当時、葵は八歳である。

「大丈夫だよ、ルカ。私は大丈夫」

ルカが何度も何度も矯正したお陰で、今ではタメ口である。

「・・・」

「・・・ねえ、ルカ」

「?なんだ?」

葵は夢で見た内容を起こさせないために、ある事を言った。

「・・・お母さんに、何もしないでね?」

「・・・」

ルカは何も言わずに、葵を部屋まで送った。

\*\*\*

その日の夜。

「はあ、はあ、はあ・・・」

葵は神社の廊下を走っていた。

普段なら走ってはいけない廊下だが、そんな事を気にしてはいられ

ない。

「葵！早く行くぞ！！？」

「待って！鬼灯！！？」

葵が予知夢で見た内容は、『ルカが葵の母を殺す夢』。

それを止めるために、昼間にあの言葉を掛けたのだが、全く意味をなしていなかった。

「！葵！！？」

「ど、どうしたの・・・！どうしよう！！？これじゃあ開かないよ！！？」

蒼華の部屋は凍らされ、開けられなくなっていた。

「私が溶かす！！？神社を燃やさないために小さな炎になるが、その分時間が掛かる。だが、神社が燃えないだけマシだ！！？」

鬼灯は能力を使い、氷を溶かす。そして・・・

「これで良い！開けろ！！？」

葵は障子を開けた。

その先の光景は・・・

「・・・あ・・・ああ」

「・・・ッ！・・・葵、どうやって入って・・・。ああ、鬼灯か」

白の服は血で赤く染まり、手に持たれていた氷で出来た剣もまた、赤く染まっている。

・・・そして、蒼華もまた、赤く染められ、死んでいた。

「う、うう・・・うわあああああん！」

葵はそこで、遂に泣いてしまったのだった。

く回想終了く

「・・・」

「・・・お、おい。嘘だよな？ルカ」

霊夢は少しルカを睨み付け、魔理沙は動揺した状態でルカにそう聞いたけど、ルカは何も言わなかった。

「ま、マジかよ・・・」

「それで？どうして私の死因が変わってたんだい？可笑しいよね、これ」

お母さんはルカにそう聞いていますが、ルカは答えようとしてませ

ん。

・・・答えないと、いけませんね。

「・・・それは、私がしたことです」

「！葬!?？」

「何時までも隠してたら駄目だと思つてたから・・・。良いんだよ、これ」

私はルカ達より前にでて、お母さんの質問に答えました。

「私が、紫さんに頼みました」

「・・・」

「私が、自分の為だけに・・・紫さんに頼んだんです・・・」

　　～回想～

お母さんが死んだ翌朝。紫さんが来た。

「・・・貴女が殺したのね。ルカ」

「ああ、私が殺した。幻想郷追放でもなんでもすれば良い。ただ、葬達にだけは迷惑を・・・」

「待つて下さい。紫さん」

私はそこで口を挟みました。

「何かしら？現神無月の巫女さん」

紫さんは私を睨み付けていますが、ここで引くわけにはいきませ  
ん。

・・・自分の満足するこの行動が、どれだけ駄目な行動だとしても。

「・・・ルカには何も罰を与えないで下さい」

「・・・」

「ここに、置かせて下さい」

「葬、お前何を・・・」

「少し黙つておけ、ルカ」

「だがな!!？」

「黙つておけ」

「・・・」

ルカが何か言おうとしましたが、鬼灯が威圧してくれたお陰で静かにしてくれました。

「・・・駄目よ。彼女は巫女を殺した。それは放っておけないわ」

「・・・紫さん。私は貴女の命令には絶対に従います」

「・・・何が言いたいのかしら?」

私はそこで紫さんの目をキチンと見ながら言った。

「私が貴方の言うことに従う代わりに、ルカを此処に置かせてください」

「・・・」

〜回想終了〜

「・・・そして、色々話して、なんとか納得してもらって、今があります」

「・・・道理で、紫の言葉に逆らったことが無い訳ね」

私が話すと、その場の全員が黙り込みました。

「・・・これで良いんです。これで。」

「・・・そうかい。ならもうさっさと行くことにする」

「・・・え?」

私が全て話し終わると、お母さんが急にそう言いました。

「待て。いくらなら葵に謝っていくべきだろ?」

鬼灯がそう言うと、お母さんは嫌そうな顔をして此方を見ました。

「何でだい?私は何も悪いことなんて「嘘付くな」・・・ああ、あんたにはそんな能力があったね。本当に嫌な能力だね」

「・・・やっぱり、違和感の正体は・・・」

「お母さん・・・」

「はあ、分かってたんだよ。本当は。ただ、あの人が死んだ事を認められず、ストレスもあって、吐き出せなくて・・・。そして、あんたに当たっただけって事は・・・」

お母さんは、顔を俯かせながらそう言いました。

「お母さん・・・」

私は、一步一步近寄っていきましたが・・・

「来るんじゃないよー!」

「!!?」

母にそう言われてしまいました。

「あんたはもう私を愛さないでくれ。私はもう死んでるんだ。これ以上、本当に何も出来やしない。あんたに……謝ることだけしか出来ないんだ」

「お母さん……」

「それでも、未練を残したくないから……嫌われようと……敵として認知してもらおうとしたのに……」

母はその言葉の後「なんで何時も思い通りにいかないんだろうね？」つと言っていました。

「……さて、死神。あんたにお客様だよ」

「え？……きやん！」

「全く、何時までも来ないと思ったら……何をしているのですか？小町」

私達は声が出した方を向くと、緑髪のショートで、小町さんよりも小さな身長の子が居ました。

「え、映姫様……」

「全く。どうして真面目に仕事が出来ないのですか。もうちよつと真面目にしないさい。だいたい貴方は何時も何時も……」

そこから長々と始まった説教に、私達は着いていけませんでした。

## 第八十四話

（葬side）

私は今、お母さんのお墓の前に居ます。

お母さんが好きな桔梗の花束を持って此処まで来ました。

・・・今日は私一人だけです。

「・・・お母さん。お母さんの好きな桔梗の花束を持って来たよ」

此処は相変わらず、ずっと桜が咲き続けています。

・・・さて、この前、何があったかの話をしなければなりませんね。

小町さんの説教を終えた緑髪の女の子は此方に目を向けました。

「初めまして、皆さん。私は『四季映姫・ヤマザナドゥ』と言います。

『ヤマザナドゥ』は役職名ですからお気になさらずに結構です」

「え、えっと・・・」

「私がどんな役目を持っているのかは、そこにいる豊穰神に聞けば分かります」

その後、私達は鬼灯に聞いたところ、映姫さん・・・いえ、映姫様は『閻魔様』だった様で、それを聞いた時はかなり驚きました。

それと同時に、今回の『異変』が『異変』ではなく唯の自然現象だったことも聞きました。

「あ、えっと・・・ごめんなさい。小さな女の子だと思ってしまいました」

「いえ、別に構いません。素直に言っただけだ今、許さないという選択は私にはありません。それよりもですね」

・・・その後、私達は全員、映姫様にお叱りを受けました。

私の場合は「貴女は優し過ぎる。いつか悪い人に騙されてしまいますよ?」つと、心配されました。

ルカの場合は「貴女は他人を信用しなさすぎます。そして、人を殺すぎました。どんな理由であれ、それは許されません。これから善行を積まなければ地獄行きが確定しますよ?」

鬼灯の場合は「貴女は知っていないながらこの方達に何も話しませんでしたね?知っていることを伝えないのはいけません。ちゃんと伝え



なさい」

一人一人の有難いお説教が長かったせいなのか、ここに帰って来る頃には辺りが暗くなっていました。

それから、お母さんとの溝も無くなりました！嬉しいです！本当に……

「……うっ……うう……」

私は、お母さんとの蟠りがなくなった分、寂しくなっていました、泣き出してしまいました。

お母さんはあの後、小町さんに連れて行って貰いました。

死んだものが現世にいてはいけない。それは分かっていますが……どうしても……。

「うう……お母さん……ひつく……」

私は本格的に泣きそうになりました。が……

「葬？」

後ろからルカの声が聞こえた為、私は泣くのをやめました。

「……ルカ、どうしたの？」

私はルカの方に顔を向けました。

例えばどんな顔をしていようと、相手の顔を見ずに会話するのは駄目ですからね。

ルカも私の酷い顔を見て察してくれた様で、その顔の事を追求しないでいてくれました。

「……葬、異変解決祝いの宴会があるらしいが、行くか？」

「え？アレ異変じゃないって言われたのに、異変解決したことになつてるの!?!?」

霊夢！そこまでお酒が飲みたいのですか!?!?いえ、霊夢がお酒飲むのが好きなのは分かってましたよ!!?!?でも、まさか異変でもないのに異変解決祝いの宴会を開くとは思っていませんでしたよ!?!?

「ちなみに、鬼灯はもう行ってるぞ?」

「鬼灯……」

……お墓の前なのに騒がしくてごめんなさい、お母さん。でも、叫ばずにはいられなかったので許して下さいね？

その後、私は結局、ルカと一緒に宴会会場に向かいました。

だって、きつと私が行かなかつたら霊夢だけしか宴会後の後片付けをする人がいないのですから。

↳レティシアside↳

「はぁ・・・」

私の隣では、自然現象だと知っていた筈なのに、異変解決に向かった鬼灯がいた。

そして、溜息をついている。これで十七回目。

「クスクス、貴女も馬鹿ね♪タイミングなんて図らずにそのまま言っちゃえば良かったのよ」

「・・・いや、あそこ迄指揮が上がっていたのに『これは異変じゃなくて自然現象だ』つと、言いづらくてな」

「クスクス、貴女らしいわね。私には無理だわ」

「だろうな。お前ならそんなこと気にせずと言っただろうに」

はぁ・・・つと、また鬼灯は溜息を吐いた。これで十八回目ね。

「・・・あら？クスクス、来たわよ、鬼灯」

「・・・そうか。なら、幸多を連れて来ないとな」

鬼灯はそう言うと、黒髪に緑の着物を着た男の子の元へと向かって行った。

幸多・・・。「『幸が多い』と書いて『幸多』・・・ね。

「クスクス、確か鬼灯が言ってたわね。『幸多と出会ってから、葬が少し幸せそうに見える』って」

あの子にも能力があるのかしら？少し興味もあるから『見透かし』てみましょうか。

・・・へえ、『仲の良いものに幸を与える程度の能力』ね。

あの子はこの能力に全く気付いていない。まあ、今のあの子の年でこの能力の事を言ったら・・・きつと、言いふらすのかもしれないわね。

それがどれだけ『悲しい』事かも分からずに。

だから私は『何も言わない』。この能力の事は私の中にだけ残しておきましょう。

私はそんな事を考えながら日本酒を飲んだ。  
やっぱり、美味しいわね♪

（葵side）

私とルカが宴会会場に着くと、鬼灯が誰かと一緒に此方に近づいて来ました。

「というか、あの子は・・・」

「あーお姉ちゃんー！」

「！幸多君！どうして此処に？」

「やっぱり、幸多君でした。でも、何故此処に？」

「・・・おい鬼灯。まさかお酒を飲ませてないよな？」

「失礼な。どれだけ幻想郷が常識が通じない所だとしても、流石に小さな子供に飲ませるほどに常識が無いわけじゃないぞ」

ルカの言葉に鬼灯はそう反論しました。まあ、流石にそれは分かっています。

「ねえねえ！お姉ちゃん！！？」

「ん？どうしました？幸多君」

私は幸多君の目を見るようにして、しやがみ込みました。

「目を瞑ってー！」

「？良いですよ？」

私は幸多君の言う通り、目を瞑りました。一体、何があるのでしょうか？

少しして私の頭に何か乗るような感覚がしたかと思うと、幸多君から目を開けて良いと言われた為、目を開けました。

「一体、何が・・・」

私は乗った『何か』を確かめる為、頭の上を触り、取ってみると・・・

「・・・え？こ、コレ・・・」

「うん！お姉ちゃんに上げる為に作ったんだ！花冠だよ！！？お姉ちゃん！とっても似合ってるよ！！？」

幸多君は笑顔でそう言ってくれました。

それは本心から言ってる事が分かる笑顔で・・・

「？お姉ちゃん？どうして泣いてるの？」

「・・・幸多君。これは嬉しいから泣いてるんだよ。ありがとう、幸多君」

私はまた幸多君を抱きしめてしまいました。

「嬉しいの？良かった！喜んで貰えたよ！」

幸多君は本当に嬉しそうにそう言葉にしました。

ルカと鬼灯はいつの間にか何処かに行ったようで、今は私と幸多君だけです。

「本当に・・・ありがとう、幸多君」

私は、また幸多君にお礼を言いました。

そして、その後、私は幸多君を家まで送りました。

その家の方からは「ありがとう」とお礼を言われました。

どうやら、無事に連れて帰ったからのようです。

私は幸多君の両親に「当然の事をしただけ」と言つて、また宴会会場へと戻りました。

・・・その場の惨状については言わないでおきます。

## 黒竜異変

閑話く幻想入りした少年く

ルカが神社に来る二年前のこと。

一人の男の子が幻想入りをした。

「……!!?だ、大丈夫ですか!?!?」

「うっ……」

「大変!鬼灯!!?ちよつと来て!」

葵は直ぐ様鬼灯を呼び、客間へとその男の子を連れて行った。

「もうちよつと待ってて。直ぐに布団を用意するから」

葵は鬼灯にそう頼むと、その部屋の押入れに近付き、押し入れから布団一式を取り出した。

そして、横にする為に準備を終えた。

「ふう……。鬼灯、ありがとう。後は私が何とかするから、大丈夫だよ」

「しかしだな……」

「大丈夫!私を信用して!!?」

葵は嘘偽り無い笑顔で鬼灯に言うのと、鬼灯は仕方なさそうにしながらも葵に少年を任せ、部屋を出た。

「……さて!看病しなきゃ!」

葵は少年を布団に寝かせると、直ぐに部屋を出て、食事の準備を出した。

少年のは、起きて直ぐはキツイかもしれないと考え、リンゴで作ったウサギになったが。

そして、準備を終えた葵はリンゴを持って行き、少年がいる部屋へと向かった。

\*\*\*

部屋へと入った葵は、少年が目覚めていないのを確認すると、能力を使って癒し始めた。

……まだ、顔を見ていない為、過去を見ることは避けられている。

能力を使い始めて数分後、漸く少年が目覚めた。

「ん……」

「あ、起きましたか？」

葵は少年の顔を見た。その所為で過去を見ることになったが、それを受け止めた。

「……例え、それが自分と似た過去だったとしても。」

「……此処は何処？君は誰なの？」

「すみません。私は此処、神無月神社で巫女をしています、神無月葵と言います。貴方が神社の境内で倒れていんですよ？」

「え？そうなの？」

その少年は布団から体を起こして葵を見た。

「ええ、そして、貴方は多分、外来人ですね」

「え？外来人？何それ？」

葵はその少年にこの幻想郷の事を話した。

「へえ、そうなんだ」

「はい。それで、貴方は元の世界に帰りたいですか？」

「……」

葵がそう聞くと、少年は首を横に振って否定した。

「……そうですか。それもそうですね。分かりました。でしたら、此処に住みませんか？」

「……え？良いんですか？」

「はい！私としても、家族が増えるのは嬉しいので!!？」

葵は笑顔でそう言うと、少年はとても驚いた顔をした。

「……本当に良いの？」

「ええ、良いですよ！ただ、住みにくいかもしれませんが……」

葵はそう言うが、少年は本当に嬉しそうな顔をしていた。

「ありがとう。僕は『幻現 想起』って言うんだ。よろしくね」

「よろしくお願いします。さて、起きたばかりでキツイかと思いで、リンゴを持って来ましたが……食べますか？苦手ではありませんか？」

「あ、大丈夫だよ。うわ、ウサギだ！」

「ええ。ただリングゴを出すのもと思いきまして……。何か食べたいものはありますか？」

「え？いいいや、コレだけやってもらったのに、これ以上、迷惑は……」  
「迷惑とは思ってませんよ。精一杯、甘えて下さい。私に出来ることはやりますから」

葵はそう言うのと、立ち上がった。

「すみません。私はまだ食事の用意をしなければいけないので一度外します。また後で様子を見に来ますね」

「あ、うん」

葵はその返答を聞くと、笑顔を見せてから部屋から出て行った。

「……優しい人だったね」

（どうだかな。ま、助けたってのは本当だけど、恩を着せるためかもしれないぜ？）

「そうかな？僕にはそんな風に思えなかったけど……」

（まあいい。もし敵なら容赦しない）

……葵が立ち去った部屋では、そんな会話がされていたのだった。

## 第八十五話

〈葵side〉

私は、自分の神社の境内を掃きながら考え事をしています。

その内容は、少し前から見る様になった夢。

黒い龍。

博麗神社の崩壊。

最後には幻想郷までも破壊されて終わる夢。

・・・確実に異変の前兆です。しかし、私をもっとも気になっているのはそこではなく、黒い龍に乗っていた人物です。

「・・・なんで、想起さんが・・・」

想起さんは、十一年前、私が六歳の頃（現在十七歳）に幻想郷に幻想入りして来た男の子です。

年は私や霊夢と同じ年です。

幻想入りしてからの一年半、この神社にも住んでいましたが、ある日、忽然と消えました。

理由は分かりません。何も言われずに消えました。

その想起さんが、黒い龍に乗って幻想郷を壊す・・・信じられる夢ではありませんが、予知夢なら確実に当たります。

・・・ですが、想起さんの性格から考えると、あり得ない話です。想起さんはとても心優しい方ですからね。

・・・となると、答えは一つですかね。

「・・・『碎牙』さん。貴方ですか？」

私は、まだ時間がある異変を起こした首謀者であろう人の事を考えた。

〈レティシアside〉

「・・・」

「れ、レティシア様？」

「・・・あら、ごめんなさい、ユニ。一度、下がってもらっても良いかしら？」

「あ・・・はい。分かりました」



私がそう言うと、ユニは頭を下げて私の部屋から出て行った。

「・・・さて、あの見透かした未来は流石に許容出来ないわね」

まあ、大体気付いているでしょうけど、私の能力『見透かす程度の能力』は未来を少しだけ覗くことが出来る。

・・・まあ、あくまでほんの少しだから、随分先迄見透かそうとすると、ボンヤリとしか分からない。

・・・けれど、それは逆に近い未来ならちゃんと分かるということ。

私は今さつき、気分で能力を使ったけれど・・・これはね・・・

「・・・さて、どうしたものか・・・」

紫なら迷わず消すでしょうね。彼女は私よりも幻想郷を愛しているもの。

なら、私は？

「・・・答えなんて、考えなくても出て来るものね」

このままだと、幻想郷は破壊されてしまう。それは、レミイ達の力が落ちてしまうのと同義。

なら、私がやることは・・・

「レミイ達の為に、幻想郷の為に・・・壊すものを消す」

・・・今回の異変、私も『本気』を出すことになるかもしれないわね。

その場合、紫や鬼灯は何処まで許容してくれるかしらね？

（?? side）

「・・・久々に戻って来たな。幻想郷」

（ねえ『碎牙』。やめようよ。僕はこんな事したくなくて・・・）

「はあく、お前はまだそんな甘い事言ってるのかよ『想起』」

俺は、中に居る『想起』にそう言っただけだ。

「お前が今迄、どんなことされてきたのか、忘れたわけじゃ無いよな？」

（忘れては無いけど、でも僕は破壊なんて望んで無い!!?）

はあく、『想起』はまだ甘い事を言っただけだ。

「悪いが俺は辞めるつもりはない。『想起』を傷付けた奴等を全員、殺してやる」

(『碎牙』！)

俺は『想起』との会話を無理矢理終わらせた。全く、本当に甘いな。『想起』は。

「・・・さて、やるぞ『ソロモン』」

『GAYYYYYYYYYY!』

俺は、俺の後ろに居る黒き龍『ソロモン』にそう言った。

さあ！壊れろ!!? 『幻想郷』！

全てを壊せ!!? 『ソロモン』！

く葵 side

「!!?」

私は、何かの声と妙な力を感じて、その方向を向くと・・・

「・・・夢で見た黒い龍・・・。今日の事だったんですか・・・」

・・・今更思えば、分かってても良かったはずです。だって・・・

昨日、内容を全て、ハッキリと見る事が出来たのですから。

ただ、言い訳染みてしまうのですが、なぜ『想起』さんが出てきたのかという方に頭が回っていた為に、この自体になる迄思い出せないでいました。

・・・こんな事で・・・こんな事で、何が『守りの巫女』ですか!!

?何の為の能力ですか!!?

「葵!!?」

「・・・ルカ、鬼灯」

流石に異常事態に気付いたのか、二人はすぐ外に出てきました。

「・・・アレは、前から葵が夢に出てくると言っていた『黒い龍』か?」

「うん。そうだよ」

「まさかの今日か・・・兎に角、博麗神社に行くぞ!」

「うん!」

私達は、自分達が出せる限界のスピードで博麗神社へと向かって飛びました。

## 第八十六話

く葵sideく

神無月神社から急いで来た為、以外と早くに博麗神社に着くことが出来ました。

「霊夢ツ!!?」

「あ!来たぜ!!?霊夢!!?」

「ん?魔理沙も居たのか?」

「そんな事はどうでもいいわ!!?葵!!?あの異変、今日の事だったわけ!??」

「ごめん・・・」

私はそう謝りました。

別の事に気を取られていた為に、この自体になる迄分からなかった。どんな理由であれ、幻想郷が壊される可能性を見逃すなんて・・・許されていいことではありません。

「・・・兎に角、葵。戦う準備は出来てる?」

霊夢が私にそう言いました。・・・ただ、その顔からは厳しさが感じられますが。

私は、少し深呼吸をしてから、返事をしました。

「うん。準備出来てるよ。霊夢」

そして、私が鳥居の方向を向き・・・

「ツ!!?危ない!霊夢!!?」

直ぐに霊夢の方に向き直り、霊夢に飛びつき、一緒に伏せるような行動を取りました。

ルカ達も直ぐに同じ行動を取りました。

それと同時に何かの爆発音が鳴り響き、崩れる音がしました。

私はその音が鳴り止むと、直ぐに音が出た方を見ました。

「!!?」

「痛っ・・・。一体何が・・・!!?」

霊夢も起き上がり、音が出た方を向くと・・・

「嘘・・・、神社が・・・」

私達がよく知る博麗神社が倒壊・・・というよりも、破壊されました。

「・・・」

霊夢はそんな事をしたであろう人物の方を向き直りました。

・・・私は既に分かっています。こんな事が出来る人物は、一人しかいないのですから。

「ん？なんだ、葵もいたのか」

その声を聞き、私も振り返ると、黒い漆の様な髪色に高い背。ただ、見慣れた深い蒼色ではなく、深い紅色をしていました。

・・・これで確実ですね。

「・・・『碎牙』さん。やはり、貴方でしたか」

「あー、やっぱりお前には分かるのか。『葵』」

『幻現 碎牙』

『想起』さんのもう一つの人格。

『想起』さんの事をとても大切に思っている人。

・・・けれど、『想起』さんの事をとても思ってるからなのか、何だか、行動が空回りしている様な気がします。

ちなみに、私の能力は暴露れます。

「ちよつと、葵！あんた、彼奴と知り合いなの！？」

「私もそんな事、一度も聞いたことが無いんだが？」

「あ、あのく、それは今此処で聞くことなの？」

「聞かなきゃ気になるでしょ（だろ）!!？」

「いや、タイミングを考えましようよ!？」

・・・何だか雰囲気がおかしくなった気がするのですが、気の所為でしょうか？

「・・・おい、お前ら。そんな茶番を何時まで続けるつもりだ？」

遂には、碎牙さんも耐えきれずにそんな事を聞いてきました。

「ほ、ほら！霊夢!!？兎に角、異変解決が先ですよ!!？」

「・・・それもそうね。でも、葵は先に聞きたいことがあるんじゃないの？」

・・・やっぱり、霊夢には暴露していましたか。なら、聞きましょう。

私は霊夢達に向けていた顔を碎牙さんの方に向けました。

「碎牙さん。どうして貴方が表に出てるのですか？」

私がそう聞くと、碎牙さんは、

『想起』を傷付けた奴らを殺る為だ」

と言いました。

『想起』さんの、ですか？」

『想起』さんの事を知らない鬼灯以外の全員は首を傾げていますが、今は気にしてはいられません。

「ああ。俺は『想起』を傷付けた奴らを許さない。だから壊すんだ。まあ、彼奴は甘いからそんな事望んで無いがな」

「おい、だったらそんな事しても意味なんて・・・」

魔理沙はそう言いましたが、その言葉は碎牙さんの殺気の籠った睨みで中断させられました。

「言ったろ？それは彼奴が甘いからだ。だが、俺はそうじゃない。だから、壊す。彼奴の為にもな。例え、彼奴を助けたお前が相手だろうとな」

碎牙さんは私に向かってそう言いました。

「・・・そうですか。でしたら、私はこの幻想郷を壊させない為に、そして、『想起』さんの望みの為に、貴方と戦います」

普段なら嫌ですが、今は違います。

何としてでも止めます！碎牙さんを!!？」

「そうね。この幻想郷は絶対に壊させない!!？相手になってあげるわ!!？」

「なら、私も手伝おう」

「お？ルカもか？なら私も参戦するぜ！」

「私も、妖怪賢者の一人として、妖怪の一人として、この大惨事は見過ごせない。私も参加しよう」

「全員掛かって来やがれ!!？」

そして、私達対碎牙さんと黒龍の戦いが始まりました。

## 第八十七話

〈葵side〉

「氷符『氷柱雨』！」

ルカがスペルを宣言すると、黒龍と碎牙さんの頭上に氷柱が出来上がり、それが降り注ぎました。

・・・ですが、黒龍の吹く炎で全て溶けてしまいました。

「ふん。その程度か」

「・・・」

ルカはとても悔しそうな顔をしています。コレばかりは相性が悪いです。

氷と炎。比べれば何方が圧倒的に有利なのか、分かりますよね？

「なら、これはどうだ！魔符『スターダストレヴアリエ』！」

魔理沙を中心として放たれた弾幕は・・・

「ソロモン。やれ」

『ソロモン』と呼ばれた黒き龍が尻尾を一振りしただけで簡単に消し飛ばされました。

「なっ!?？」

「次はこつちからやるぜ！激符『黒龍牙』！」

すると、碎牙さんの周りに牙の形をした弾幕が形成され、此方に飛ばしてきました

「！結界『四重結界』！」

私は、それを結界で防ごうとしました。が、二、三発当たっただけで罅が出来、その罅がどんどんと酷くなっていきます。

そして、最初に当たってからそんなに時間が経っていないにも関わらずに、一枚目の結界が壊れてしまいました。

「ツ!!??」

私は一層、結界の方に意識を集中して維持させました。

その後、少ししてから弾幕は止まりました。

・・・ただ、残った結界も二枚だけで、その二枚目も、あと少し続けば壊れていたでしょう。

そう思うぐらいに罅割れが酷かったです。

「・・・スペル」

今度は鬼灯がスペル宣言をします。

「幻符『幻炎術』！」

すると、鬼灯の周りには数千ぐらいの弾幕が形成され、それが碎牙さん達の方に飛ばされていきました。

「ふん。それぐらいなら、ソロモン!!?」

ソロモンはまた尻尾で落とそうとしましたが、今度は落とされるどころか通り抜けました。

「なっ!!?」

碎牙さんはそれに驚きながらも、避ける事に成功していました。

・・・ソロモンは駄目でしたが。

「おい・・・どう言うことだ?」

「スペルのままなんだがな。もう一度、行け!!?」

鬼灯は再度放ちました。

「・・・そうか。なら、俺でも対処出来るな」

・・・碎牙さんの言葉と同時に、鬼灯の弾幕が消されました。

「・・・能力か」

「ああ。『幻と現を操る程度の能力』。この能力でお前の弾幕を消させてもらった」

「なら! 霊符『夢想封印』!」

霊夢の虹色の弾幕が碎牙さんを襲いかかりますが、ソロモンによって、消し飛ばされました。

「もうっ!!?」

「お前らじゃ俺に勝てねえよ。これで終わりだ!!? 黒龍符『咆哮』!」  
すると、ソロモンが私達に向かって咆哮してきました。

それはただの咆哮の筈なのに、私達の体は傷付きてしまいました。

「きゃああああ!」

「次! 黒符『黒雷』!!?」

私達が体制を立て直す前にスペルが宣言され、私達に黒い雷が襲いかかりました。

「ぎゃああああああ！」

私も、流石に状態が状態だった為に、スペル宣言が出来ずに受けてしまいました。

そして、そのスペルの制限時間が経つと、全員がボロボロになって倒れていました。

「・・・終わりだな。さあ、破壊するぞ。ソロモン」  
「う・・・」

私は、碎牙さんを止めたい。ですが、体が言うことを聞いてくれません。

・・・私は、霊夢達に比べれば、能力の関係上で直ぐに傷が治ります。

ですが、私一人では何も出来ません。

・・・このまま、幻想郷が壊されるのを見る他無いと言うのですか？

・・・嫌です。それだけは、絶対に・・・嫌です!!？

「なら、後は私に任せなさい」

まるで私の考えなどお見通しとでも言うタイミングでそんな声が掛かり、前方を向くと・・・

「れ、レティシアさん・・・」

そこには長い金髪、紅い目、黒いゴスロリを着て、何時もとは違いますがレミリアさんと同じ羽が生えたレティシアさんが居ました。

「・・・お前、誰だ」

碎牙さんもレティシアさんを警戒しながら名前を問いかけてました。

「クスクス、私はレティシア・スカーレット。レミイやフランという吸血鬼の『一応』の姉で、妖怪賢者の一人。最強の吸血鬼と呼ばれてるわ」

レティシアさんは何時もの『クスクス笑い』で話していますが、なんだか、雰囲気違います。

「・・・さて、貴方はこの幻想郷を壊そうとしているのよね？それは流石に見逃すことなんて出来ないわ」

「ほう？なら、どうするん・・・!!？」



砕牙さんが質問の途中で、レテイシアさんの妖力が跳ね上がりました。

「・・・その量は、鬼灯や紫さんと同じか少し上ぐらいです。周りにある石がその妖力だけで全て粉々に壊れていました。」

「今ならまだ許すことも可能よ。幻想郷を破壊するのをやめなさい」

レテイシアさんは最後通達を砕牙さんにしました。

「・・・は、誰がするか。邪魔をするならお前を殺す！」

ですが、砕牙さんはその言葉に耳を貸さずに、そう言いました。

「・・・そう。なら、貴方を消すわ」

レテイシアさんは、今度は妖力ではなく、殺気を放ちました。

その殺気を直接浴びていない私ですら、ピリピリとしたような、もつと言い表すなら薄ら寒いものを感じました。

「・・・余り、此処に長く居たいとは思えません。」

「・・・さて、鬼灯。平気かしら？」

「・・・これで、平気と言えるのか？お前は」

鬼灯はその場に倒れている状態ながらも、レテイシアさんからの質問に答えていました。

「クスクス、話せるならまだ大丈夫でしょう？それで、聞きたいことがあるのだけれど、いいかしら？」

「・・・なんだ」

「クスクス、『本気』を出しちや駄目かしら？」

レテイシアさんは鬼灯にそう問いかけました。

鬼灯は少し考えてから、答えました。

「・・・様子を見て、その状態でもキツそうならな。それなら、紫も許すだろう」

「クスクス、分かったわ。それじゃあ、殺りましようか」

そこでまたレテイシアさんの雰囲気が一変し、弾幕ごっこが始まりました。

## 第八十八話

↳レティシア side↳

「クスクス、さて、この姿になるのも久し振りだから、準備運動はさせてくれるわよね？」

私は裏人格さんにそう言うけれど……

「はあ？誰がそんな事に付き合うかよ!!？ソロモン!!？」

断られた挙句に攻撃された。まあ、避けたけれど。

「クスクス、酷いわね。ちよつとぐらい良いじや無い」

「てめ、巫山戯てんのか？戦いはもう始まってんだ。本気で相手を叩き潰す。それだけだ」

『本気』……ね」

私は一体、何時から『本気』を封じたのだったかしら？えつと……そう。幻想郷が出来る少し前からね。

まあ、封じたとしても別になんの障害にもならなかったし、今だとそれは逆にデメリットになる。だから、今の今まで封じてきたのだけれど、今回はどうなるかしらね？

「クスクス、そう言えば、貴方は弾幕ごつこのルールに則って戦ってるのね♪関心だわ♪」

「本当にそう思ってるのか、怪しいな!!？激符『黒龍牙』!!？」

裏人格さんがスペル宣言をすると、その周りに牙の形をした弾幕が形成され、私に向かってきた。

私はどうと……

「……はあ」

その弾幕を手を一振りするだけで消し飛ばした。

「はあ!!？」

……やっぱり、力加減が難しいわね。暫くたってなかった所為ね。確実に。

となると、『あれ』に戻るとどうなるのかしら？

まあ、今はキツク無いからまだ無理だけれど。

「クスクス、さて、私からもやりましょうか♪」

そして、私は一枚のカードを取り出す。

流石に幽々子の時に使ったスペルカードは使えないわね。鬼灯達も巻き込まれるし。

「クスクス、それじゃあ、魔獣『フェンリル』」

すると、私の手前で緑色の瘴気が集まり、形を作っていた。

その姿を説明するにも形容し難い形をしているとしか言いようがなく、その体からは瘴気を放っている『犬』。

……『ペット』にする動物、間違えたかしら？

「うっ……何よ、この臭い……」

あんなら、後ろにも被害が、まあ、知らないけど。

「クスクス、さて、フェンリル」

私は自分の『ペット』のフェンリルの体に手を乗せた。

……どういふ感触かは、それぞれで考えて頂戴。

「クスクス、食べちゃいなさい♪」

『G A Y Y Y Y Y Y Y Y !』

フェンリルは吠えると、直ぐに黒龍に近付き、黒龍を殺そうとした。

けれど、黒龍は尻尾を使ってフェンリルを飛ばした。

……まあ、その行動は意味が無いのだけけどね。

実際、フェンリルは直ぐに此方に戻ってきたのだから。

「ならー！燃やしてやれ!!？ソロモン！」

黒龍は口から炎をフェンリルに向けて吹いた。

それをフェンリルは交わして、また黒龍に攻撃を仕掛けた。

……アレは時間が掛かりそうね。

「クスクス、裏人格さん。黒龍達は時間が掛かりそうだから私達も殺らないかしら？」

「……ああ、別にいいぜ」

そう言うと、裏人格さんは黒龍の背中から降りて、私の方に近付いて来た。

そして、直ぐに私に向けて弾幕を放ってきた。

私はそれらを全て避けながらも弾幕を放った。

この前の霊夢達みたいに弾幕を放たない、何てことはしない。私は幻想郷を壊そうとしたこいつを『消す』。それだけだ。

「おいおい、どうした？手も足も出ないのかよ？」

「クスクス、あら？弾幕は出してるじゃないの♪」

相手は余裕淡々とした笑みを浮かべている。

私が頭の中を見透かしてみると、どうやら私の『本気』がコレだと思っっているみたい。

……馬鹿じゃないの？この男。私の『本気』がこれなら最強だなんて呼ばれたりしないわよ。

……もう一層の事、この男の為に『本気』を見せた方がいいんじゃないかしら？

私は鬼灯の方をチラッと見てみると、体力が回復したであろう葵から治療を受けているのが見えた。

それでも、私が見たのは分かった様で、考え込んでいる。

……仕方がない。

「(クスクス、紫、そこにいるんでしょう?)」

私が頭の中でそう呟くと……

「(レティシア?どうしたのかしら?)」

ちゃんと返事が返って来た。

「(クスクス、トボけなくても良いんじゃないかしら?本当はそこで全て見ているのでしょうか?)」

私が『そこ』というのは、私達が戦っているすぐ近く。スキマの中で観戦中よ。

「(あら、やっぱり暴露していたのね。それで?何の用かしら?)」

「(クスクス、もうね。まどろっこしいのよ。この戦い。だから、『本気』を出してもいいかしら?正直、まどろっこし過ぎてイライラしてくるのよ)」

私がそう問うと、暫くの沈黙が続いた後、

「(貴方の力で生じた被害をちゃんと直してくれるならね)」  
と答えた。

「(クスクス、ありがとうね♪あ、博麗神社は直さないわよ?私がいっ

たわけでもないんだから」

「(ええ、分かっているわ。それじゃあ、お願いね)」

さて、紫からの許可も出た今、もう私が躊躇する理由も無いわね。

「クスクス、ねえ、貴方」

「あ？なんだよ」

裏人格さんは中々当たらない所為か、苛立っていた様で、とても柄悪く私に問い掛けてきた。

「クスクス、いえね、もしかして……『今の私』の状態が『本気』と思っ  
てないわよね？」

「……は？」

相手は疑問の声を上げるも、その顔はとても驚いていた。

「クスクス、やっぱり、勘違いしていたのね♪なら……その勘違いを正  
してあげる」

そして、私は自分で掛けた封印を解いた。

私の中の妖力が今の姿では収まりきれないぐらいに膨れ上がり、そ  
の妖力をちゃんと収める為に、私の体も変化……いえ、『元に戻った』。  
今の私はレミィ達と同じ様な背ではなく、紫と同じぐらいの背に  
なった。

……この姿も久し振りね。

「……」

相手の顔はポカーンとしている。

周りをよく見れば、鬼灯と黒龍とフェンリル以外の全員が惚けてい  
た。

「あら？戦闘中にブーツとするなんて、駄目よ？」

私は口調も元に戻して、相手に話し掛けた。

「……ハッ……てめ、その仕掛けは何だ？」

その言葉に、私はどうしてか可笑しく思えてしまつて、笑つてし  
まった。

「クスクス、仕掛けね。私の姿を元に戻しただけよ？」

「……元に、戻した」

後ろで葵がそう呟いたのが聞こえた。

「クスクス、その通りよ♪コレが私の本来の姿。あっちは封印してたからなつた姿よ」

ちなみに、この事実を知っているのはレミイ、フラン、パチュリー、私が連れて来た六人、紫、幽香、幽々子、鬼灯、阿求だけね。

「……さて、やっぱり、元の姿になるのも久し振りだから……」

私はそこで、一区切り付けて……

「死んでしまったらごめんなさいね♪」

笑顔でそう言い、膨大な量の妖力を放った。……私の所為で、博麗大結界が危なく壊れそうになっているけれど、紫がどうにかしてくれているみたいね。本当に有難いわ。

相手の様子はどういうと、その量の所為か、さっき迄いた場所から結構後ろに居る。あと一歩下がれば石段から落ちてしまいうぐらい後ろに。その体も強張って、しかも震えている。

「あら？どうしたのかしら？戦う気、あるのかしら？」

私は放出していた妖力を押さえ込んで、聞いて見た。

そのお陰か、相手の震えが止まっていた。

「さて、挨拶のし直しをしましょう。私はレティシア・スカーレット。『スカーレット家』の始祖であり、ブラド・ツェペシュ公と関わりがある吸血鬼。妖怪賢者であり最強の吸血鬼よ。よろしくね♪」

私は、そう挨拶をし直した。

## 第八十八話

くレティシア side)

「さて、結界が危なそうだからさっさと終わらせましょうか」

私がそう言うと、裏人格さんは怒った様な顔をした。

「てめ！舐めてんじやねえぞ!!？」

そう言うと、私に向けて弾幕を放ってきた。

「……鬼灯、貴方の能力、借りるわよ」

私は、鬼灯の能力を借りて、その弾幕を無に返した。

「は!!？」

「これだけかしら?なら、もうやっても良いわよね?」

「まだまだだ!行け!関羽!!？」

すると、外の世界では三国志で有名な関羽が現れ、私に攻撃してきた。

「……」

「これは俺の能力の一つである『あの世とこの世を操る程度の能力』、でしょ?」……どうやって分かった」

「それが私の能力だから。まあ、封印時と違って、今はその能力に制限は無いし、他の能力もまた、元に戻ってるからね」

元の姿での能力は二つ。封印時にされてた能力が強力になったのと、分かれていたのが元に戻った様な能力である。

「貴方も能力を教えてください、私も一つ教えてあげる。今の私の能力を」

そして、私は関羽を『あの世』へと返した。

これには流石に裏人格さんも驚いて……いや、初めから驚きの連続だったわね。

「私の能力の一つ。制限無しになった能力『ありとあらゆるものを見透かし、その全てを自分のモノにする程度の能力』」

「自分の……モノにだど?」

「そうよ。私はありとあらゆるもの、全てを見透かす事が出来る。だから、貴方の能力も使える」

「だが、ソロモンは俺にしか使えない!!?ソロモン!!?」  
すると、フェンリルと戦っていたソロモンが私に近付き、攻撃しようとした。

「……そうね。黒龍を操れるのは貴方しか出来ないでしょう。私がその能力を自分のモノにできたとしても、使えなければ意味が無い」  
そう。この能力の弱点は、『モノ』に出来たとしても自分と相性が合わなければ使えないこと。それがこの能力唯一の弱点。

他にもあるかもしれないけれど、今の所分かっている弱点はそれだけ。

だから、裏人格さんの言葉は間違っていない。けれど……

「その能力の持ち主が『私』でなければね」

私はそう言つて、『もう一つの能力』を使用した。

すると、黒龍は動くのをピタツと辞めた。

「ソロモン?おいどうした!?動け!!?攻撃しろ!!?」

「無駄よ。今その黒龍は私の配下。貴方の言うことは聞かないわ」

「……なん……だと!!?どういうことだ!!?」

これが最後の能力。私が『最強』と呼ばれる由縁。

「結局、最後の能力も言うのね。最後の能力『出来ないことが無い程度の能力』」

「……」

この意味が分かった様で、絶望していた。

なんだ、結局、能力で片付いたじゃない。

「私に出来ないことなんて……無いのよ」

そして、私はソロモンに裏人格さんを踏み潰させ……

「駄目です!!?やらせません!!?」

……様として、葵がその間に入ったことから中断させた。

〈葵 side〉

私は自分の体力が回復し、レイシアさん達の戦いを見て居ると、レイシアさんがソロモンを操りました。

……けれど、私には何と無く理解出来ていました。

レイシアさんが、ソロモンを操つて、碎牙さんを殺そうとしてい



たことに。

だから、私はその間に入って、その攻撃を辞めさせようとしたのですが……、結果的にはレティシアさんから殺気の籠った睨みを受けています。

「……葬、そこを退きなさい」

……レティシアさんの殺気の所為か、木々が全て騒ぎだし、石は全て粉々になって、生き物は全て近寄ろうとしません。

正直に言えば、私も怖いです。頭の中では殺される想像しか出来な  
いでいます。

死にたくないなら、碎牙さんを見捨てて逃げるしかありません。

けれど、それは出来ません！

「嫌です。私は此処を退きません」

「……そいつはこの幻想郷を壊そうとした。それがどう言うことか、  
貴方にも分かっているでしょ？」

「分かっています。ですが、退きません」

「……」

レティシアさんはさらに殺気を強めて私に向けてきます。この殺  
気だけで私は死にそうです。ですが、死ねません。

「例えどんな理由であれ、人を殺すのは、命を散らすのは駄目です」

「……貴方達はその『命を散らす行為』をいつもしているのよ。分かっ  
てるのかしら？」

レティシアさんは私にそう問いかけてきます。

「……分かっています」

「貴女の論だと、その妖怪達も殺してはいけないんじゃないかしら？」  
「……」

私は反論出来ません。それは例外だと、言えません。

……私が、どれだけその行為を嫌っていたとしても、やっているの  
だから理由にはなりません。

「……はあ、お前も意地が悪いな。レティシア」

私がそう考えていると、鬼灯がレティシアさんに話しかけました。

でも、『意地が悪い』ってどう言うことでしょう？

「……」

「お前も本当は分かってるんだろ？ 葵がその妖怪達に対して、何をしてきたのか。その能力で見たんだろ？」

鬼灯はレティシアさんにそう問いかけました。

「……はあ」

レティシアさんがどういう意味で溜息を吐いたのかは知りませんが、どうやらこれ以上何もしない様です。

現に、さつきよりも少なくなり、姿も『大人』から『子供』に戻りました。『クスクス、久し振りの姿だったからちよつと疲れたわ。年は取りたくないものね♪』

レティシアさんは此処に來た時の姿とは違い、いつも通りの羽が無い状態になると、そのまま一度博麗神社の後ろに行き、結界を直してから移動して行きました。

方角は勿論、紅魔館です。

「……さて、あんた。碎牙って言ったかしら？」

「……ああ」

「事情を説明してもらおうわよ」

霊夢は碎牙さんにそう問いかけると、碎牙さんは了承してくれました。

## 第八十九話

（10年前）

葵と想起は人里を歩いていった。

理由は母親から頼まれた御使いを果たしにである。

「……」

「?どうしました?想起さん」

葵は顔を俯かせている想起に話しかけた。

少しして、想起は顔を上げて問いかけた。

「ねえ、葵は平気なの?」

「何がでしようか?」

葵は想起が何に對してそんな事を言ったのか理解出来ていなかったが、想起が視線をズラして、人里の人間達に向けると、その意図を読みとった。

「……大丈夫ですよ。私の能力が原因ですから」

「葵の?」

「ええ。私の能力は、人の『過去』を無断に見る能力ですから……これは当然なんです」

「……」

葵はそう説明すると、想起はまた顔を俯かせてしまった。

その様子に葵は苦笑した。

「想起さん。そんな顔をしないで下さい。これは当然の事なのですから」

「……一人は、寂しくないの?」

想起がそう尋ねると、葵は首を横に振って否定した。

「私は一人じゃないですから、寂しくありません」

「え?」

「私には、鬼灯や想起さん、それに、碎牙さんもいますから。……お母さんも、今は仲が悪いですが、本当はとても優しい人なんです。ですから、寂しくありません」

葵は想起に笑顔を向けてそう話すと、この話は終わりとばかりに歩

き出した。

想起も、何か言いたそうな顔もするも、ついて行つた。

\*\*\*

その数日後、想起は一人で人里に降りた。

そして、ぶらぶらと歩いていると、人里の人達の視線、それから、話も聞こえてきた。

「ねえ、あの子って、この前、あの子と一緒に歩いてた子よね？」

「ええ、間違いないわ。あの子もきつと、気味の悪い能力を持つてるわ」

その言葉の先は、想起が急いでその場を離れたことから聞き取ることは叶わなかった。

直ぐにお団子屋に着くと、お団子を数本食べてから、人里を離れた。

\*\*\*

「……そうですか」

葵は想起からその話を聞くと、その一言だけ返した。

少ししてから、また葵が口を開いた。

「でしたら、今後は余り貴方の側にはいないことにしましょう」

「……え？」

想起はそんな声を上げてしまった。

「ど、どうして？」

「……私と一緒に居たら、想起さんまで巻き込むからです。想起さんまで道連れにする様なことをしたくありません」

「で、でもー！」

「大丈夫です。……少し、怖いですが、明日、私が入里の皆さんに話してきます。それで、全部、解決します」

葵はそう言うと、最後に「お休みなさい」と言って、部屋へと戻つて行つた。

「……だったらー！」

想起はある考えを実行する為に、夜遅くであるにも関わらず、人里へと降りたのだった。

\*\*\*

「お願いします!!? 葵を虐げないで下さい!!?」  
「……」

人里に着いた想起は、近くにあった民家の扉をノックし、その家の住人に頭を下げながら懇願した。

「お願いします!!? 葵を、一人にしないで下さい!!?」

想起はまた頭を下げながらお願いした。しかし……

「……無理だね」

相手から返ってきた答えは無慈悲だった。

「どうしてですか!」

「そんなのも分からないのか? あの子の能力が気味悪いからさ。君も嫌じゃないのか? 自分の過去を勝手に見られるんだぞ? 俺は無理だね」

相手は「それも顔を合わせる度になんて……」と続けた。

……この時の誰も気付いていないことだが、既に葵は能力の制御は完璧で、顔を合わせる度に過去を見ることは無くなっていた。

だが、先程も言った様に、この時は誰一人として、その事に気付いていたものはいない。

「あんたも、虐げられたく無いなら、あの子から離れることをお勧め……うっ!!?」

その人里の人間は、雰囲気が一変した事に気付かず、言葉が続けようとしたが、今は首を締められている所為で話す事すら出来ないでいる。

「……何処の世界も同じか」

今、その人間の前にいた人物の目は、深い蒼色から深い紅色へと変わっていた。

「お前も、お前らも、『想起』を傷付ける奴か。なら、俺はこの人里を壊す」

そして、黒龍を呼び出そうとしたが、別の力により、人間から手を強制的に離され、捕らえられた。

「……貴方は、何をしようとしているのかしら?」

その捕らえた人物は……紫だった。

「……てめえ、誰だ」

「あら？ああ、そう言えば貴方は初対面だったわね。なら、自己紹介しましょう。勿論、私のスキマの中でね」

その言葉と共に、碎牙はスキマの中へとボツシュートされた。

\*\*\*

碎牙はそのスキマのゴールに着くと、周りを見渡した。

このスキマを見たことがあるのだ。

「ようこそ、私のスキマの中へ」

「……成る程な。お前が俺達を幻想入りさせた張本人つてわけか」

碎牙は警戒しながら紫に問い掛けると、紫は肯定した。

「ええ、そうですね。私が貴方を幻想郷に連れてきた本人ですわ。

……しかし、その理由は貴方が能力を持っていたからよ。でも、今はちゃんとコントロールも出来ている様ね」

「……何が言いたい」

「率直に言いますわ。貴方を幻想郷から追放します。今の貴方なら、外の世界で生活しても問題無いでしょう」

「は？巫山戯んな!!？俺は……」

「貴方の都合など知りません。貴方は私の愛する幻想郷を壊そうとした。本当は消す所を、葵と仲良くしてくれた恩もありますし、罪を軽くしたのです。貴方に文句を言う権利などありません」

「だから……!!？」

「それでは、さようなら」

そして、紫は碎牙の足元にスキマを展開し、外の世界へと追い出した。

「……また会う日まで」

紫はそう呟いた。

く葵 side く

……碎牙さんから話を聞いた私は、申し訳ない気持ちと言えば良いのか分からない様な感情が込み上げて来ました。

罪悪感もありますし、悲しくもありますし、何も相談しないで勝手な行動を取った想起さんに怒りたくもなってますし、私の為でもある

行動を取ってくれた想起さんにお礼も言いたくなりました。

「……私の、所為だったのですか」

結局、私の口から出た言葉はそれでした。

「いや、お前の所為じゃないさ。悪いのは全部、人里の連中さ」

碎牙さんは恨めしそうにそう言いました。

……想起さんは、強い人ですね。なら、私もその行動を見習いましょう。

「碎牙さん。想起さんが変わって頂けませんか？」

「ああ、良いぜ」

碎牙さんはそう言って、想起さんの中に戻りました。

今は瞳の色も、紅から蒼に戻ってますからね。

「……葵？」

「ええ、お久しぶりです。『想起』さん」

私は、想起さんに挨拶しました。

「……ねえ、あいつ、本当に戻ったのか？」

「ええ、雰囲気から変わってるし、目の色も違うでしょ？」

「本当だぜ!!？」

後ろで霊夢と魔理沙が話している声が聞こえますが、今は無視しておきましょう。

「想起さん。貴方にお願ひがあります」

「……何かな？」

想起さんは、昔と変わらない笑顔を私に向けてくれました。

私もまた、笑顔で手を差し伸べながら、言いました。

「私の手伝いをしてくれませんか？」

## 第九十話

（葵 side）

私達は人里を歩いていきます。

向かつてる場所は、お団子屋さんです。

「それにしても、驚いたよ。手伝ってくれて、この事だったとは思わなかった」

私の隣では、想起さんが苦笑しながら話しかけてきました。

「一人だと此処に降りるのも怖いので」

私も苦笑しながら返しました。

私の目的は二つ。

一つはお団子屋さんでお団子を買って来ることです。

この後に、異変解決後の宴会が行われます。その時に出すお菓子です  
すね。

ちなみに、お金を出すのは想起さんです。

流星の私も、そこまで手助け出来ません。異変を起こしたのはあくまで碎牙さんで、元の人物は想起さんですから。

……そして、もう一つが人里の皆さんとの仲をやり直す事。

碎牙さんからの話を聞いてようやく分かったことですが、皆さんは私が顔を見る度にその人の過去を見ていると思ひ込んでいる様子なので、その誤解を解かなければいけません。

それから、自分から歩み寄りなかつたので、歩み寄る為に。

これは、この前の異変で、お母さんとの問題が解決した時に決めました。

お母さんとも仲直り出来たのですから、もしかしたらと思ひました。

……それでも、一人で此処に来るのも怖かつたので、今まで先延ばしにしてきてしまいました。

「……やっぱり、変わってないんだね」

想起さんのそんな呟きが聞こえてきました。

「変わってない、ですか。……私が進もうとしてなかつた所為です」



私は、傷付くのが怖かっただけです。怖かったから、自分から前に進もうとしないで人里の皆さんに許してもらおうなんて、勝手な考えを持ってた所為です。

「きつと、時間が経てば……」……なんて、考えを持ってた所為です。私から歩み寄ろうとしなかったのに、そんな望みが叶うわけありません。

「……葵は強くなったね」

「そうですね？余り実感が無いのですが……」

想起さんからの言葉に私はそう返しました。

……さて、先ずは何処から始めましょうかね。

そうですね！慧音さんの手伝いから始めましょう！

私は、そんな風に未来を思い描きながら、想起さんと共にお団子屋さんに向かつて行きました。

\*\*\*

今は、お団子屋さんから博麗神社へと向かっています。

……大量にお団子を買った時のお婆さんの顔は忘れられません。

驚きすぎて失神するのではないかとヒヤヒヤしました。

「霊夢……買って来たよ……」

私がそう呼びかけると、霊夢が現れました。

「来たわね。もう全員集まってるわ。早く行くわよ！」

「……霊夢？もうお酒を飲んだの？」

私は微かに香ったお酒の匂いで霊夢がお酒を飲んだであろうことを察しました。

「え？飲んだわよ？」

「……え？あ、あの。霊夢さんは何才なんですか？」

想起さんは何故か霊夢の年を聞きました。どうしたのでしょうか？

「何才って十七だけど」

「お酒を飲んで良い年じゃないですよね！？それ！？」

「……え？」

えつと、どういうことでしょうか？私達、普通に飲んできましたけども。

「えつと、駄目なんですか？」

「そんな事一度も言われたことないけど？」

「え？え？」

……あ、もしかして。

「想起さん。それ、もしかして外の世界のルールでしょうか？」

私がそう聞くと、想起さんは肯定しました。

「あつそ。なら私達には関係ないわ。此処は幻想郷。外のルールに縛られない世界だもの」

霊夢は想起さんにそう言うと、そのまま宴会会場へと移動して行き  
ました。

「さ、私達も行きましようか」

「あ、うん」

その後を追う様に私達も歩き出しました。

……それにしても、外の世界のルールは私達の年では飲んで駄目  
なですか。勉強になります。今後、想起さんの過去に触れない範囲  
で外の世界の事を少しずつ聞いていきましよう。

↳レテイシア side↳

「……」

私は少しボーツとしている。

……別にボーツとしても良いでしょうか？こうしたい日だってあ  
るのよ。

私が自分の持つてる盃の中を見れば、全く量が減っていない。

……まあ、食欲が無いだけなのだけれど。

「……紫、居るんでしょ？」

「あら、暴露た？……どうしたのよ、レテイシア。何か考え事？口調も  
素に戻ってるわよ？」

……考え事、ね。

「……別に、何も」

「……」

紫から嘘付くなって視線を浴びせられている。……はあ。

「……ただ単に、外の人間も、此処の人間も、あんまり変わってないと

思ってたね」

やっぱり、私は人間が好きで、人間が嫌いだ。

私にとって、人間は『食料』。だから、私は人間を好きでいれる。

……この思考は可笑しいのでしょうか、普通でしょうか？こんな矛盾の一つや二つ。

例えば、動物が好きな人間が、動物を世話する仕事に就いて言うことを強制的に利かせるのと同じよ。

私は、自分の『食料』になってくれる人間を『愛している』。だから、絶滅しないように色々手回ししているけれど、時々、思う時がある。人間なんて消した方が良くはないかと、ね。

まあ、そんな事をすれば、この幻想郷は終わりで、レミイ達も終わっちゃうからしないけれどね。

「……」

「ねえ、紫。人間は私達の存在を認めない。外の世界なんてそれが顕著に出てる」

その証拠に、黒漆さんは自分の異能の所為で人から迫害された。

「……貴女は何が言いたいのかしら？」

「……いえ、ごめんなさい。忘れて頂戴」

私の頭でも、あんまり整頓しきれていない。

……それにしても、あの二人は本当に似てるわね。

生き方も、性格も。

「……さて、私は帰るわ」

「あら？貴女にしては珍しいじゃない。レティシア。貴女の家族を置いて帰るなんて」

「久し振りに力を出した反動よ。歳は本当に取りたくないわね。今は疲れてるから、このまま帰って休むわ。それじゃあね」

私は紫にそう言って紅魔館へと戻ることにした。

……本当に、久し振りすぎて反動が大きかったのかもしれないわね。

こんな考え、何時もの私ならのらりくらりと交して言わなかったはずなのに。

「……はあ」

私はいつの間にか溜息を吐いてしまっていた。

## 葵の日常2 第九十一話

（葵side）

私は、神社の境内を掃いています。

今日はこの後に、寺子屋で子供達に授業を教えることになっていきます……が、少し考えていることがあります。

「……やっぱり、やってもらいましょう」

私はそう決断し、掃き終わると、神社の中へと戻りました。

今は文月ですからとても暑いです。……倒れてなければ良いのですが。

\*\*\*

「ルカ、想起さん知らな……あれ？」

私が想起さんを探している時にルカを見つけた為、居場所を聞こうと思って話しかけると、ルカが黒い毛並みの子猫を抱いていました。

「……ん？葵、どうした？」

「いや、その子猫、どうしたの？」

「ああ、この猫か。いや、さっきこの神社に迷い込んで来たみたいだな、首輪も無いから誰かが飼ってるというわけでもなさそうだ。多分、野良猫だろう。妖力も感じられないからな」

ルカがそう言いながら猫を掲げると、その子猫は「ニャー」と一声鳴きました。

「ふふ、可愛いね、その子猫」

「ああ、そうだな」

ルカはそう言いながら、その子猫を撫でていました。

「何だったら飼う？此処で」

「……え？」

私がルカにそう提案すると、ルカは驚いたような声をあげました。

「良いのか？」

「別に良いよ。私も飼いたいと思ってるからね！」

「……有難う」

私がルカにそう言うと、お礼の声が返ってきました。

「お礼は良いよ！言ったでしょ？私も飼いたいからって！……それで、その子猫の名前はどするの？」

私がルカにそう聞くと、少し悩んだ後……

「……『ノア』にしよう。この猫は雌だからな」

「良い名前だね！……て、あー！」

私は、話が逸れていたことに今気づき、ルカに最初の時に聞こうとした質問をしました。

「想起？……いや、知らないな」

ルカは少し考えてから、そう返してくれました。

「そっか。有難うー！」

「いや……はあ、仕方ない。私も探そう」

「え？いや、でも……」

「迷惑なんて思っていないからな？ただ、何時もの礼をするだけだ」

ルカはそう言うと、探しに行きました。

……お礼は寧ろ、私がしたいのですが。何時も、迷惑を掛けてしまってますからね。

「……って、考えてる暇はない！私も探そう！」

私は、自分一人しかないその場所でそんな事を言ってから離れました。

\*\*\*

その後、想起さんはちゃんと見つかりました。

……ただ、発見したルカから話を聞くと、畑の近くで倒れていたそうです。症状は確実に熱中症ですね。

そのため、今回は私一人で行こうとしましたが、どうしても言われ、結局は私がその熱中症を治して、今は寺子屋へと向かっています。

「お？葵ちゃん、こんにちは」

「あーこんにちはー！」

この前の異変から一ヶ月、私は人里に何度も降りて、まだ全員とは言えませんが、それでも、少し前進出来ました！

本当に、とても嬉しいです！

「本当に、良かったね、葵」

「はい！コレも想起さんが居てくれたからこそ、今はこうやって降りれる様になりましたからね！」

私は笑顔で想起さんにお礼を言いました。

その後、想起さんは謙遜してかこのお礼を素直に受け取ってはくれませんでした。何とか、受け取ってもらうことに成功しました。

そして、話をしながら歩いていると、幸多君に会いました。

「あ！葵お姉ちゃん！」

「幸多君！こんにちは！」

「こんにちはー！……あれ？お兄ちゃんは誰？」

幸多君が、私の隣にいる想起さんに気付き、そう聞いてきました。

「こんにちは、幸多君。僕は想起って言うんだ。よろしくね」

「うん！よろしくね！」

想起さんが幸多君に挨拶をすると、幸多君も挨拶をしました。

その後は幸多君と手を繋いで、寺子屋へと向かい、その日は想起さんに外の世界の話をしてもらいました。

そして、寺子屋での授業が終わり、神社へと帰ると、ルカギノアと一緒に寝ていました。

私としては、その光景を見て、とても癒されました。

## 第九十二話

く葵sideく

まだまだ暑い夏。

そんな中、私達は（主に私は）霊夢の世話をしに博麗神社を訪れてみると……

「……えっと、どうしたの？霊夢？」

「……」

何故か霊夢が白くなっていました。

それも真っ白に。色が全くありません。

「ね、ねえ、葵。霊夢さんはどうなってるの？」

想起さんも聞いてきましたが、私もこの状況を全く飲み込めていません。

私は霊夢に近付いて、呼びかけました。

「霊夢？どうしたの？ねえ！」

私が揺らしてみても、やはり反応がありません。

……ですが、死んではいけないようで、一応、息をしています。

「……あんまり、使いたくはないけど」

私は、霊夢の過去を見ることにしました。

そして、その結果、原因が分かりました。

「……萃香さん」

「え？誰それ？」

「萃香は鬼さ」

「お、鬼!?？」

「そして、この神社に住んでいる」

私はつい溜息をついてしまいました。

霊夢がここまで真っ白になっている理由。それは、萃香さんのお酒の消費量が関係していました。

どうやら、萃香さんが毎日お酒を飲んでいた為、この神社の金銭が全とお酒代として消えていたのです。

それで、霊夢は真っ白になっていたようです。



私はその事をルカ達にも話しました。

「はあ……」

「まあ、萃香らしいと言えば萃香らしいし、鬼らしいと言えば鬼らしいが……」

「お、鬼ってそんなにお酒を飲んだね……」

それぞれがそれぞれの意見を言う中、私は少し考えていました。

この状況を脱出する方法は二つあります。

……ただ、これは霊夢が苦手とする『努力』が必要です。

ですから、この方法を霊夢に話たとして、霊夢が首を縦に振ってくれるかどうか、心配です。

\*\*\*

その後、中々真つ白の状態から戻らない霊夢を、ルカと途中から遊びに来た魔理沙の攻撃で起こそうとすると、その瞬間に霊夢の意識が戻り、直ぐに反撃してきました。

私はそれを確認すると、霊夢に今の神社の金銭状況を知っていると言いました。

「そ、なら話が早いわ。何か良い方法ない？ 葬」

霊夢がそう聞いてきました。……さて、霊夢はこの方法に首を縦に振ってくれるますかね？

「一応、考えたよ。二つ」

「そう！ で？ どんな方法なの？」

「一つは、私みたいに畑を作って、そこで野菜とかを作った後、人里の方でそれを売る方法」

「よし、それにしろ。霊夢」

私がそう話すと、後ろからそんな風に言うルカの声が聞こえてきました。

「いやよ。面倒臭い」

「その面倒臭い事を葬は毎日やってるがな」

「あ、あはは……」

霊夢のその言葉に鬼灯がそんな事を言い、想起さんは苦笑いをしていました。

「それで？二つ目は？」

「二つ目は、自分でお酒を作る事。これなら直ぐに解決するでしょ？」

「……そうね」

「私が最後の提案をすると、霊夢は少し悩んだ後に、そう言つて首を縦に振りました。

「……嘘だろ？」

「あの面倒臭がり屋の巫女が……これは間違いなく異変だ！」

「あんたら、そこを動くな」

「魔理沙とルカのその発言によつて、霊夢が怒つてしまい、弾幕ごっこが始まつてしまいました。

「おー！綺麗だね〜」

「あ、萃香さん」

「私は、後ろから声が聞こえてきたため、そつちに振り向くと、萃香さんが神社の中から出て来ていました。

「え？君が萃香さん？……え？子供じゃないの？」

「いや、身長で決め付けるな。これでも何年も生きてるんだからな」

「え？？」

「萃香さんの年齢（失礼だとは分かっていますが）が自分よりも上だと分かる、とても驚いていた想起さん。

「妖怪なら、見た目とは違い年齢が違うというのは良くあることなのではないでしょうか？」

「その後、霊夢達の弾幕ごっこも終わり、その日は博麗神社で夕食を食べることになりました。

「これからは、お酒の問題がなくなると良いのですが…。」

## 第九十三話

く葵 side へ

文月から葉月に変わる数日前の今日。

時刻は未<sup>ひつし</sup>です。

私は何時も通り博麗神社に来ると、霊夢と魔理沙が何か話し合っていました。

「霊夢？魔理沙？何を話してるの？」

私が話かけると……

「！葵！あんたを待ってたのよ！！？」

「そうだけ！！？面白い話を持って来たんだぜ！！？」

「？面白い話……ですか？」

私は、その面白い話というのを聞きました。

\*\*\*

そして、現在は丑三つ時。

私達はというと、迷いの竹林の近くにいます。

理由はというと……

「さあ！お宝探しに行くわよ！！？準備は良い？」

「良いぜー！」

「……えっと」

霊夢の言う通り、お宝探しです。

でも、迷いの竹林に珍しい物つてあるのでしょうか？

「何よ、葵。やる気ないの？」

「いえ、やる気が無いと言うよりも、この竹林内に珍しい物事態あるのかどうか……」

「探して見なきゃ分からないでしょ？そんなもの」

まあ、霊夢の言う通りですね。

「分かったよ。やろう！霊夢！」

私の今の状況は何方かというと眠いですが、頑張ります！

……寝坊しなければ良いのですが。

「……葵、大丈夫だ」

「……え？」

私が明日（いえ、今日ですね）の心配をしていると、鬼灯が後ろから声を掛けてきたので振り向きしました。

「私は朝早く起きているから、何かあれば起こしてやる。だから、明日ぐらいゆっくり眠れ」

「で、でも……」

「一回ぐらいなら、紫も許すだろ。と言うか、これで許さなかったら切れるな。主に私が」

「あ、あはは……」

その発言を聞いて、つい苦笑いをしてしまいました。

「それにしても、僕、ここに来るの初めてだよ」

「だろうな。だから、注意しておくが、私達と離れたら、ほぼ確実にここで遭難することになる」

「え？」

「まあ、集団で移動してもその可能性は消えないが、二人の幸運の持ち主がいるから少しは大丈夫だろう。ただし、離れたら幸運持ちの兎にでも見つけてもらえ。私達じゃとてもじゃないが無理だ」

「……」

私達の場所とは少し離れた場所で、ルカと想起さんの話が聞こえてきました。

幸運の持ち主の二人と言うのは、霊夢と多分、私でしょうね。

周りの人から何回か言われてたことがあるので。

\*\*\*

それから数分後、竹林の中を歩き回っていますが、今だに珍しい物は見つかっていません。

「それにしても、今日は満月なんだね」

「ん？今頃か？私は随分前から知ってたぞ？」

「それはあんたが妖怪だからよ」

「私も知ってたんだが？」

「あんたも半分、妖怪でしょうが。しかも吸血鬼でしょうが」

私の言葉に鬼灯がそうツツコミました。

霊夢もその後説明して、ルカの発言にも説明しました。

「それにしても、どうして今日しようと思ったんですか？」

「気分よ、気分」

私がそう聞くと、霊夢がそう言いました。

それからまた進み、少しして、その竹林の中に一人だけ見知った人がいました。

ただ、姿は髪の色が青から緑へと変わっており、角と尻尾も生えていました。

「……慧音さん？」

「……葵か」

そこには、人里の寺子屋で教師をしている慧音さんがいました。

どうやら、満月の為、ワーハクタク化しているようですが。

「何でお前達が此処に……」

「珍しい物捜しをしている」

慧音さんの質問にとても簡潔に答えたのは、ルカでした。

「この先にも行くつもりか？」

「ん？そうだが？」

ルカがそう言うと、慧音さんは分かりやすく戦闘態勢に入りました。

「……え？」

「悪いが、この先には行かせる事は出来ない。大人しく帰ってくれないか？」

「……何でだ？」

「何ででもだ」

ルカもまた臨戦体制をとって質問しましたが、解答は同じでした。

「何で何時もこうなるのでしょうか……？」

「……どうする？此処で諦めるか？」

鬼灯が霊夢に聞きましたが、霊夢は首を横に振って否定しました。

「珍しい物も見つかってないのに、帰るわけないじゃない！」

「その目的は叶えるんですね……」

私が少し呆れていると、鬼灯が一步前に出ました。

「分かった。なら私が相手しよう。もし私が勝ったら、先に進ませてもらいな」

そして、鬼灯と慧音さんの弾幕ごっこが始まりました。

## 第九十四話

く鬼灯side

私は慧音と弾幕ごっこをしているのだが……

「くっ……」

さつきから慧音ばかり被弾しているのだが、どういうことなのだろうか？（貴女の弾幕の数が多いだけです by主）

普通になっているつもりなのだが……弾幕の数を何時もより三倍の六百個にして、密度を狭くしているだけなのだが……。

あ、これが原因か。

「これを受けろ!!？火符『鳳仙火』！」

すると、私の周りに弾幕が展開され、その全てが飛び散った。しかし、慧音はそれを普通に避けていた。

まあ、この技は比較的に避けるのが容易い技だから仕方ないか。

「次は私から行くぞ！転世『一条戻り橋』！」

すると、慧音から放たれた米粒型弾幕がまるで壁のようにして飛び散った。

私はそれを避けた……が、私は直ぐに後ろを見て、少し隙間が開いたところまで移動して、弾幕を避けた。

「……成る程。弾幕が『戻っている』な」

やはり、戻り橋の『戻る』はこういうことか。

私は慧音を警戒しつつ、戻っていく弾幕を避けると、放たれた弾幕が全て戻ったのか、もう弾幕が戻ることは無かった。

なら、もう良いだろう。

「さつきと終わらせたいからな。これを受けろ!!？災害『豊穰神の怒り』!!？」

私がスperl宣言をすると、緑の弾幕が飛び散った。

その弾幕の中には慧音自身を狙うものもあるが、慧音はそれを見切り、ちゃんと避けていた。

……ただ、次の瞬間には驚いていた。

「なッ！これは……」

弾幕が竹に当たると、分裂して、片方が慧音に向かって跳ねた。

「ホーミングか!!?」

「慧音、その回答は惜しいな。正解は追尾機能付きのホーミング弾だ。しかも、分裂する」

だから、どんどんと密度が狭くなっていく。避けるのがとても困難になっていくスペル。

これが反則だと思う奴もいるだろうが、それは違う。

分裂もするが、三回分裂すると一個消えるようになっていくから大丈夫だ……多分。

それに、追尾機能が付いているのは分裂した中の一個だけだから大丈夫だろう。

だが、何方にしろ、難しさは変わらない為……

「きゃあ!!?」

慧音は被弾しまくり、倒れた。

↳葵side

弾幕ごつごつが終了すると同時に、私は慧音さんに近付いて治療しました。

「それで?この先に何かあるんだ?」

ルカがそう問うと……

「……私の親友がいるのさ」

慧音さんは答えてくれました。それにしても、親友の方がいるのですか。

「でも、どうして……」

私が聞こうとすると、慧音さんが守っていた竹林の奥から、人が近づいて来ました。

その姿は、髪は白髪、長髪で深紅の瞳の、全体的に白と赤が特徴的な人が居ました。

「慧音!!?大丈夫か!!?」

「妹紅!!?ああ、私は大丈夫だ」

「そうか、良かった……」

妹紅さんという方はホッとすると、直ぐに私達を睨みつけてきまし



た。

「お前達が、慧音を……許さない!!？」

そう言うと、戦闘態勢に入りました。

「……どうしましょう？」

私としてはあまり戦いたくは無いのですが、この状態だと、嫌でも戦わなくてはならないのでしよう。

「……霊夢、どうする？」

私が聞くと、霊夢は、

「私がやるわ。葵は私の補助をして」

と言いました。

「分かったよ。でも、その前に……、私は神無月 葵です。貴女のお名前は？」

私がそう聞くと、大勢はそのままですが、ちゃんと名前を答えてくれました。

「私は『藤原 妹紅』だ」

「分かりました。そして、此方が霊夢です」

お互いに自己紹介を終えました。

とそして、直ぐに私達対妹紅さんの戦いが始まることになりました。

## 第九十五話

（葵 side）

霊夢は妹紅さんに弾幕を撃ちながらも、狙って撃たれる弾幕を回避している。

私はそもそもから弾幕を撃てませんので全部回避しています。

「封魔針！」

霊夢はお札を針に変えて、それを妹紅さんに投げ付けましたが、妹紅さんはそれを容易く避けました。

まあ、当然ですね。あの針は真っ直ぐにしか飛ばせませんから。

「ほらほらー！どうしたの？こんなもの？」

「コレで終わるわけないでしょ？霊符『夢想妙珠』!!？」

霊夢がスペル宣言をすると、夢想封印の時と同じ虹色の弾幕が妹紅さんに向かっていきました。

しかし、夢想封印と違って弾幕をの数が少なく、スピードも遅いので、避けやすくなっています。

現に、妹紅さんは全て避けましたからね。

「私から行くよ!!？不死『火の鳥—鳳翼天翔—』！」

すると、私達の目の前には、とても大きな火の鳥が現れました。

「えっ!!？」

「葵、アレはただの炎弾で作られてる火の鳥よ。弾幕と弾幕の間を潜り抜けて行くわよ」

「！分かったよ!!？」

私は霊夢からの提案に乗り、その弾幕の間を潜り抜けながら避けました。

「だったらコレだ!!？蓬莱『凱風快晴—フジヤマヴォルケイノ—』！」  
今度もまた弾幕が飛ばされてきましたが、なんだか嫌な予感がします。

「！霊夢！その弾幕から離れて!!？」

私は霊夢にそう伝え、自分もまた弾幕から離れました。

すると、私に当たりそうになっていた弾幕が爆発してしまいました

た。

「葵、ありがとう」

「お礼は良いよ。私も嫌な予感がしたただけだから」

私が霊夢と少し話しただけでも、またその弾幕が襲いかかってきました。

「おや？手も足も出せないのかい？」

妹紅さんが挑発してきますが、今は無視です。

少し、隙を伺わなければならぬので。

それから少しして、その弾幕の嵐が止みました。

それを気に、私は一つのスペルカードを宣言します。

「呪術『鬼呪封印』！」

このスペルを邪魔されずに宣言出来ました。

「なっ!!?」

今、妹紅さんは、御札に体を縛られて身動きが取れない状態です。ですから、コレで最後です。

「霊夢！」

「神霊『夢想封印』!!?」

「ぎやあああああー！」

そのまま、妹紅さんは普通の夢想封印より威力が上がっている『夢想封印』に飲み込まれてしまいました。

\*\*\*

「あの、大丈夫ですか？」

弾幕ごっこが終わった後、私は直ぐに妹紅さんに近付き、治療しました。

「いてて……、ああ、別に平気さ。ありがとうな」

妹紅さんはそう言いながらも、起き上がりました。服は煤汚れています。

「それにしても、あんた。あの夢想封印を受けてよく無事でいられたわね」

霊夢が此方に近付きながら妹紅さんに質問しました。

「だな！あの夢想封印の上位版を受けて、なんで無事だったんだ？」

魔理沙も頭の後ろで両手を組んだ状態で、此方に近付いて来ました。

「ん？そりゃあ、私が蓬莱人だからさ」

「蓬莱人？あの輝夜と同じ人種か」

「あいつと一緒にされるのは嫌だけど、それで合ってるよ」

ルカが納得した様にそう言うのと、妹紅さんがそう言いました。

……きつと、仲が悪いのでしょうか。輝夜さんと一緒に言ったら『一緒にされるのは嫌』と言いましたから。

「それで？結局は、あんた達は何の為に来たんだ？」

「実は、この竹林にある珍しいものを探しに……」

私がそう説明すると、妹紅さんは少し考えてから……

「私はこの竹林に長年住んでるけど、そんな珍しいものは無かったよ」と言いました。

「そうか。分かった。ありがとう」

鬼灯が全員を代表してお礼を言いました。

その後は妹紅さんも回復した為、竹林の外まで案内してもらい、解散しました。

もう殆ど夜明けの状態ですが……大丈夫でしょう。多分。眠いですが、きつと……。

私は、目の前が暗くなり、倒れそうになりました。

〈想起 side〉

「……想起、葵はまだ寝てるか？」

ルカさんが僕にそう聞いて来ました。

「はい。まだ気持ち良さそうに寝ていますよ。鬼灯さんの毛がとても暖かいんでしょう」

「そうか？」

鬼灯さんの毛並みはとても綺麗で、いつも手入れされているのがよく分かるほです。

「さて、帰ったら布団を敷かないと、葵が寝れなくなってしまうね」

「ああ、そうだな。今回は私も手伝おう」

ルカさんも、布団を敷く手伝いをしてくれる様です。良かったで

す。

その後は、少し話しただけで、後は無言で神社へと帰ってきました。

## 第九十六話

（葬side）

先月の最後の一週間に、博麗神社の大木に雷が落ちてしまい、その大木が割れてしまっていた。

私はその時に、その場に居たわけではないので、後日その事を聞きました。

そして、文月の今日。私は博麗神社の境内を掃除しています。

「そう言えば、霊夢」

「ん？何よ」

「雷が落ちたという大木をこの前祀ったって言ってたけど、アレからどうしたの？ちゃんと信仰してる？」

私は縁側に座っている霊夢にそう聞くと、霊夢は……

「してないわよ」

と、真顔で言ってきました。

「……え」

「……」

霊夢の隣で寝ている鬼灯も、その言葉を聞くと、目を開けて霊夢を睨みつけています。

「ん？どうしたんだぜ？葵」

「どうした？葵」

「葵？何かあったの？」

そんな時に、洗濯を任していたルカと、神社内の廊下の掃除を任していた想起さん。それから、何時もの様に遊びに来た魔理沙が来ました。

ですが、今の私は、全員が聞いてきた質問に答える程に、心の余裕がありません。

「えっと、どういうこと？霊夢。どうして、信仰するのを辞めたの？」

私は、真面に霊夢を見れない状態のまま霊夢に聞くと、霊夢はそんな私に気付いていないのか話し始めました。

「だって、参拝客が来ないんだもの。それに、私が飽きたし……」

最後の一文字は、私が霊夢に平手打ちした音で掻き消されました。

「……」

「……何すんのよ!!? あお……!」

霊夢が私にした事を怒ろうとしていましたが、私の顔を見て、怒るのを辞めました。

「……葬」

「……なんて……」

私の目から流れる涙を止めず、私は言いました。

「なんて事をしたのですか!!? 霊夢!!? なんてそんな自分勝手な都合で信仰するのを辞めたのですか!!?」

私が何故怒っているのか。それはとても簡単な事です。

『神』という存在は、信仰されれば生まれる存在です。

とても簡単に生まれる存在です。

……ですが、それと同時に消えてしまうのも簡単です。

『神』が信仰されて生まれるならば、その逆に、信仰されなければ消えてしまいます。

霊夢は、その雷が落ちた大木を祀り、信仰しました。

だから、あの大木には神が生まれました。

ですが、途中から霊夢が飽きてしまい、信仰しなくなってしまった所為でその神は消えてしまったのです。

本当にその大木に神が生まれていたのかどうかは流石に定かではありませんが、高確率で生まれていたのでしょう。

それを、霊夢は……。

「貴女は『神』を殺したも同然の事をしたのですよ!!? 霊夢の性格の事を考えなかつた私も悪いですが、大元の原因は貴女です!!? 信仰出来ないなら最初からしないで下さい!!?」

私の涙は、結局、最後の言葉を言っても止まらず、私はその場を急いで離れて、霊夢の過去を頼りに、その大木の元へと移動しました。

〈想起 side〉

「あ、葬が怒ったところを、私は初めて見たぜ」

「だろうな。葵は滅多なことが無い限り怒らない奴だから。ま、もつとも。その『滅多に怒らない奴』を怒らせた本人は此処に居るがな」  
ルカさんはそう言いながら、冷たい目で霊夢さんを見ていた。

僕はというと、若干、放心状態になっている。

だって、僕だって、葵が怒ったところを見たことが無いんだから、仕方ないよね？

「……」

「霊夢。葵が何に対して怒ったのか、分かっているのか？」

霊夢さんもまた放心状態にあるけど、それを無視して、鬼灯さんが話し掛けた。

だけど、その声には何処か怒りもある様に感じられる。

「……」

「彼奴は誰よりも優しい奴だ。だから、滅多なことが無い限り怒ることもない。なら、何で今回は怒ったのか。それは彼奴も言っていたが、お前は『神』を殺したも同然の事をした。『神』にだって命はあるんだ。『神』という存在は強い。だが、死ぬ時は……消えてしまう時は直ぐに消える。誰にも気付かれずに消えてしまうことだってあるんだ。今回の件の様にな」

「……」

「彼奴は『神』を殺しておいて、消しておいて、何とも思っていない様子のお前に怒ったんだ。私も『神』だから、この件に関係ないとは言えない。だから私からも言おう」

そこで鬼灯さんが息を吸うと、霊夢さんに向かって言いました。

「そもそもから信仰する気がなく、自分の利益の為にだけに信仰することを辞めろ。お前が自分の利益の為にだけに信仰したから、今回の様な事態になったんだ」

「……」

「今後は自分の利益の為にだけに『神』を祀るな。信仰するのを途中でやめるなら信仰するな。神からすれば傍迷惑だ」

「……ごめんなさい」

霊夢さんが謝ったけれど、鬼灯さんは首を横に振っている。



「今回は私に謝るべきことじゃないだろ？ 葵に謝ってこい。大木のところにいるだろう」

「!!??分かったわ!!?」

鬼灯さんがそう言うのと、霊夢さんは急いで大木の方へと移動して行った。

「……さて、居るんだろ？ 紫」

鬼灯さんがそう呼びかけると、その後ろから紫さんが出て来た。

「あら？ 何時から気付いていたの？」

「最初からだ。葵が霊夢を怒り始めた頃から居ただろ。紫」

「あら、本当に暴露してたわね。それにしても、あの子が彼処まで怒るなんて、本当に珍しいわね」

「だろうな。まあ、今回は仕方ないだろ。彼奴が怒る原因を作った霊夢が悪い」

「それもそうね。さて、あの子にはお仕置きと勉強が必要ね」

紫さんは最後の最後に僕達に挨拶をすると、帰ってしまった。

「……さて、私達はあの二人が帰ってくるまで待つぞ」

「あ、はい」

〈葵 side〉

大木の元に着いてから、私はずっとその大木を見続けている。

その大木が、雷に打たれても死ななくとも葉っぱは全て散っていたであろう大木は、今はとても大きく成長し、葉っぱも沢山付けていました。

「……やっぱり、『神』は死んでいますね」

大木に手を当てて調べて見ると、やっぱり『神』は居なくなっていました。

「……ごめんなさい。もっと早く気付いていれば……」

私が罪悪感からそんな言葉を呟くと、何処からか『ガサツ』という音が聞こえてきました。

「?」

その音の正体は何なのか知る為に、その音がした方を向くと、少しだけしか見えませんが、赤いスカートと透明な羽です。

「もしかして、アレは……」

私はその存在を何と無く理解したところで……

「葵！」

霊夢のそんな声と、息切れしたであろう吐息が聞こえてきました。

「……」

私はそんな霊夢を見て、心配で駆け寄りそうになりましたが、今さっきの出来事もあって、行動することが出来ませんでした。

「葵……」

「……」

霊夢は私の視線から逃れようとしませんでした。なので、私はその瞳を見続けると、霊夢が頭を下げました。

「ごめん！葵！私が悪かったわ!!？」

「……霊夢、分かってくれただけでいいんです。ただ、謝るなら私ではなく、この大木です。『神』を失ったこの大木にするべきです」

私がそう言うと、霊夢は大木に近付いて、手を当てました。

「ごめんなさい」

小さな声ではありましたが、なんとかその声を拾うことが出来ました。

「さて、それではこの件はこれで終わりです。帰りましょうか」

「ええ、帰りましょう」

霊夢はそう言うと、そのまま歩いて行ってしまいました。

私は最後に妖精がいるであろう場所を見てから、その場を後にしました。

……あの大木が、妖精の住みやすい場所になれば良いのですがね……。

## コラボ企画く第二段く

くレテイシアsideく

この前、紫にスキマにイキナリ落とされてしまった。

まあ、分かったことではあるのだけれどね。

そして、別の幻想郷で色々と過ごしていたわ。

その時にあった『蒼翼 龍』。本来の名前は『博麗 双夢』。名前の

通り、霊夢の弟よ。といっても、双子のだけどね。

まあ、そこで色々あって、今は紅魔館でいつも通りの日常を送ってるわけだけでも……。

「クスクス、それにしても、彼の性格は貴方と似てたわね♪」

私は部屋の中にある一つの写真立てを手にとって、その写真の中に写っている金髪で紅目の男性を見つめていた。

だからなのよね。私が彼に惚れたのは。

でも、私の中で一番好きなのは、やっぱりこの男性で……この吸血鬼なのよね。

だから、心境が複雑な今、あまり呼ばないでほしい所なのだけれど……

「クスクス、空気を詠まずにスキマで此処に送るなんて……後でO☆H A☆N A☆S H Iしないとね♪紫」

私がそう言葉にしたと同時に地下の方で大きな物音がした。

さて、迎えに行かないとね。

くペスsideく

私は、パチュリー様から本の整理を頼まれた為に図書館にいたのだけれど……

「貴方は誰かしら？」

私のすぐ隣でイキナリ宙から落ちてきた男性。

顔を見ればイケメンの類に入るのでしようけど、私の心は動かされない。

だって、どんな理由であれこの人間は不法侵入者。警戒しておくべき相手なのだから。

「いてて……此処は……紅魔館の図書館？」

「あら？よく知ってるわね。貴方」

私が話かけると、相手はキョトンとした顔をしている。

まあ、見知らぬ相手にそんな事を言われれば仕方ないわよね。

「ごめんなさい。私はペス・ランガーと申します」

私は頭を下げながら挨拶した。

すると、それでようやく相手も挨拶をした。

「初めまして、蒼翼龍です。ペスさん、此処は紅魔館……ですよね？」

「ええ、それで合っていますよ」

私はそう答えると龍は「やっぱり……」みたいな顔をしていた。

私達がそんな事をしてしていると……

「クスクス、やっぱり来たのね♪龍」

「……え？レテイシアさん？」

レテイシア様がいらつしやった。

レテイシア side

あの後、私は龍を図書館から自分の部屋へと連れてきた。

意味？来たいっていうからよ。

まあ、後でフラン達と人生ゲームをするつもりだから、それにも参加してもらおうけどね。

「それにしても、此処がレテイシアさんの部屋か」

「クスクス♪そうよ♪此処が私の部屋よ。少し待ってて頂戴。紅茶の用意をしてくるから」

私はそれだけ言うと、部屋を出て、紅茶とクッキーの用意を始めた。

まあ、龍が作ったお弁当よりも美味しくはないけれどね。

それでも、此処のフラン達には絶賛されているけれども。

そして、それらを持って部屋へと戻ると……

「あ、レテイシアさん。ねえ？この人ってレテイシアさんだよね？」

龍がさっきまで私が手に持っていた写真立てを持っていた。

「クスクス、ええ♪そうよ♪そこにいる女性は私よ♪」

私は紅茶を置きながらそう話した。

写真に写っている私の姿は、金髪のロングヘアで、今着てる黒のゴスロリを大きくしたものだ。そして、大きな蝙蝠の羽根がある。

「やっぱり。でも、どうして今は姿が違うんだ？」

「クスクス、そう言えば、貴方には言っていなかったわね♪私のこの姿は力を封印してる状態よ」

「力を……封印？じゃあ、その封印を解いたら、この姿になるの？」

「クスクス、ええ♪但し、力が強過ぎて博麗大結界が壊れるからあんまりその姿にならないけれどね♪」

「え……」

この前の異変の時は、紫が頑張ってくれたから壊れずにすんだだけだよね。

「じ、じゃあ、この隣にいる吸血鬼の男性は？」

「クスクス、その人ね♪」

私は、その人との思い出を思い出しながら答えた。

「ヴラド・ツェペシユ公よ♪」

「え……ええええええええ！」

レミイ達にとっては祖先、私にとっては愛しい吸血鬼。

その写真には、そのヴラド・ツェペシユ公が笑顔で写っていた。

## コラボ企画2 第二段

レティシア side

「え？この人があの有名なヴラドさん？」

「クスクス、ええ。外の世界、そして、吸血鬼の中でも有名な吸血鬼よ」  
私がそう説明するも、どうやらさっきの衝撃が強かった所為で放心しているわね。

はあ……仕方ないわね。

「クスクス、起きなさい。龍」

私は龍の顔に自分の顔を近付けた。それこそ、私がもう少し近づけばキス出来るくらいには近くにね。

「!!うう、うわ!」

その所為で、さっきまで放心状態だった龍がまた驚き、後ろに頭をぶつけてしまった。

え？心配しないのかって？何かあっても問題ないもの♪

「いたた……」

「クスクス、ごめんなさいね♪」

「それ、謝ってますか？」

「クスクス、ええ♪勿論♪」

私は笑ってそう答えたら、呆れたような笑顔を向けられてしまった。

……本当に、あの人によく似てるわね。龍は。

そして、どうやらさっきの大きな物音の所為か、マリアが此方に走って来てるわね。

まあ、時々転けてるみたいだけれど、それは何時ものことだから気にしないわ。

「クスクス、龍。もう直ぐ、この館のメイドが一人来るわよ♪」

「さっきのペスさん？」

「クスクス、別の人物よ。ただ、面白いものが見れるけれどね♪クスクス♪」

「☒」

私がこの後の展開に笑っていると、マリアが勢い良く扉を開けた。「れ、レティシア様!? 大丈夫……って、きやあああああ! ししし、知らない人……!?」

「え、ちよつと、君、落ち着いて……」

「ろろ、狼……!!? ししし、知らない人が、知らない人がいるよ……!!?」

「だから、ちよつと待つて……行っちゃった」

「クスクス、あらあら。人の話も聞かないで行っちゃったわね」

「やっぱり、マリアは期待を裏切らないほどの人見知り度合いね♪面白かったわよ♪」

「えつと、あの子は誰なの? というか、俺、嫌われてるの?」

「クスクス、違うわよ♪単に人見知りか激しいだけ。というか、あの子以上の人見知りはそうは居ないんじゃないかしらね」

「そこまで酷いんだ。人見知り度合い」

「クスクス、ええ♪」

その後、マリアは狼を連れて来て、不法侵入者（龍）を追い出そうとしていたため、私が直ぐに止めに入って事情を説明した。

それから、他の紅魔館メンバーに龍の所にはいない従者達も紹介して、フランとレミイと人生ゲームを少し一緒に遊んで、それから紅魔館を飛んで出た。

その際、龍が「太陽は大丈夫なの?」って聞いてきたから、能力で不老不死となっていることを説明した。

\*\*\*

飛び続けて数分後、目的地である『神無月神社』に着いた。

「此処に葬達が?」

「クスクス、ええ。でも、もしかしたら霊夢の方にいるかもしれないけれど」

「え」

私は少し、家の中を『見透かして』見ると、一応はちゃんと居た。けれど、どうやら鬼灯が想起に剣の稽古を付けてるみたい。

「クスクス、良かったわね。居たわよ、葬達」

「そっか。良かった」

私はその一言を聞くと、龍を連れてそのまま神社内の鬼灯達が稽古をしている場所へと向かった。

〔葵side〕

私とルカは、鬼灯と想起さんの剣の修行風景をお茶を飲みながら見ていた。

私達が霊夢の所に移動しなかった理由は、私が今日、此処にお客さんが来ると言ったからです。

まあ、そのお客さんはレティシアさんと龍さんなんですがね。

「はあああー!」

想起さんは鬼灯を上から斬ろうとしました。

けれど、鬼灯はそれを自分の剣で受け止めました。

「……想起、それで私に傷を負えさせる事が出来ると思うなよ」

鬼灯はそう言うのと剣を押し返し、峰を使って想起さんのお腹に当てました。

「まあ、峰だから大丈夫だろうが……大丈夫か?」

「あ、はい……大丈夫……です」

「……大丈夫じゃないな。今日は此処までだな」

鬼灯はそう言うのと、剣を鞘の中に収めました。

「あ、有難う……ごさいます」

想起さんは途切れ途切れながらもそう言い、同じく鞘の中に収めました。

「お疲れ様。二人とも、怪我はしてない?」

「私は平気だが、想起は打撲の痕が有るかもしれないな。思いつきしてしまったし」

「鬼灯!?」

私が驚いた声を上げながら鬼灯を見ると、顔を背けられてしまいました。

そして、そんなタイミングの時に……

「葵、ルカ。久し振りだね」

「!!?お待ちしておりました。龍さん」



「久し振りだな。龍」

龍さんとレテイシアさんが来ました。

レテイシア side

私と龍は神社の居間に入らせてもらったわ。

あの後、龍が葵に「敬語は要らないってば」って言って、葵が其の後直ぐにタメ口で話していたのだけれど、直ぐにまた敬語に戻ってしまい、龍の方が折れてしまった。

「クスクス、だから言ったじゃない。葵がタメ口で話すまでは時間が掛かるって♪」

「はあ」

兎にも角にも、龍を知らない組と龍が知らない組で挨拶をすることになったわ。

ちなみに、さつきまで人間形態をとってた鬼灯は、いつも通りの九尾形態に戻ってるわ。

「兎に角、自己紹介をしようか。私は孤天みてん 鬼灯ほおずきだ。この神社で神様をやっている。あと、レテイシアと同じく妖怪賢者の一人だ。よろしく」

「よろしく……って、え？レテイシアさんは妖怪賢者だったの？」

「クスクス、ええ、そうよ」

私がそう言い終わると、タイミングを見計らったかのように想起が自己紹介をした。

「僕は幻現うつつ 想起そっきと言います。よろしくね、龍さん」

「……ああ、うん。よろしく。ただ、敬語はやめて欲しいな」

「あ、ごめんね。龍さん。じゃあ、よろしくね」

「うん、よろしくな」

想起と龍はお互い笑みを浮かべた状態で挨拶をした。

さて……。

「クスクス、龍。あつて間もない所だけれど、もうそろそろ時間よ」

「え、時間？」

「クスクス、ええ♪ほら、もう日が暮れ始めてるわ」

私が指をさした方向には、もう既に日が落ちようとしている太陽が

あった。

「クスクス、多分だけれど、向こうでももう夕方……あるいは夜かもしれないわ。でも、貴方は急にスキマに落とされたのだから、あつちの世界の霊夢やレミイ達が知らないという可能性は低いんじゃないかしら？」

私がそう問うと、龍は確かにという顔をしたあと、頷いた。

「そうですか。では、短い再開でしたが、また遊びに来れたら来て下さいね」

葵は笑みを浮かべながらそう言うと、龍もまた笑みを浮かべて挨拶をした。

そして、私達は少し移動した。

「……それで、どうして移動したんだい？レテイシアさん。俺に何か話したい事があるんだろう？」

「クスクス、ええ♪貴方に言っておきたいことがあるの」

「言っておきたいこと？」

「クスクス、ええ♪一つ目は貴方の相棒である、『十六夜 暁』の事よ」  
「!!?ど、どうしてその事を知ってるんだ？」

龍は明らかに驚いているけれど、それでも、表面上は冷静な顔に戻した。

……私の前では意味のない事だけれどね。

「クスクス、私の能力の一つ『見透かす程度の能力』で、貴方の過去をほんの少し覗いたのよ。ポワとのラブラブ具合を見るためだけだったのだけれどね」

「ラッ!!?」

龍がその一言だけ言うと固まってしまった。けれど、今はそれを無視する。

「クスクス、一応言っておくわね。その暁って子……生きてるわよ」

「……本当か？」

「クスクス、ええ♪本当よ♪」

「……そうか」

なんだか、訝しんでるわね。まあ、仕方ないわね。この口調だもの。

なら、元に戻しましょうか。

「言っておくけれど、貴方を唐かかって言ってる訳じゃないわ。ちゃんと生きてるわよ。ただし、今は別の所にいるけれどね」

「……そうか。なら、良かった……」

「ついでに言うなら、そのうち会えるから心配しなくても大丈夫よ」

「……有難う、レティシアさん」

「クスクス、お礼を言われるような事はしてないわよ。それじゃあ、スキマを開くわね」

私はそう言って、紫のスキマを使つて開いた。

「!??これって……スキマ?」

「クスクス、ええ。私は能力を創る事が可能だからね。これぐらいは当たり前出来るわよ♪」

私はそう説明してから、お別れの挨拶をして、スキマを閉じた。

勿論、スキマが開いてる場所は博麗神社。

紅魔館じゃない理由は、まあ、姉を心配させたんだから、叱られるぐらいは当然でしょう♪

それが、例え……

「クスクスクスクス、貴方の所為でもね♪紫」

私はスキマの中から覗いていた紫を引きずり出した。

「え?レ、レティシア。いつから気付いていたのかしら……?」

「クスクスクスクス、最初からよ♪さぞ面白かったでしょうね♪ね♪紫」

私は今までで一番、綺麗な黒い笑みを紫に向けた。

「ひっ!!?」

「クスクスクスクス、さて、O☆H A☆N A☆S H Iを受ける覚悟ぐらい、有るわよね♪紫」

「ち、ちよつと落ち着きましょう?レティシア。そう、此処は話し合いで……」

「クスクスクスクス、良い顔をしてるわね♪紫。その顔を見せてくれたお礼に……何時以上のO☆H A☆N A☆S H Iをしてあげるわ♪」  
「い、いやあああああ!」

紫はスキマを使って逃げようとしたけれど、結局は逃げ切れず、私のO☆H A☆N A☆S H Iを受けた。  
その後の紫の顔は本当に面白かったわね♪クスクス♪

## 第九十七話

（カスサイド）

私と想起さんは人里に降りて、ある家へと向かっています。理由としては、その人からお呼びが掛かったからです。

「あ！葵お姉ちゃんだー！想起お兄ちゃんもいる！」

「こんにちは！幸多君！」

「こんにちはー！」

私達がその人の家へと向かっている途中、幸多君に会いました。幸多君はいつも元気で何よりです！

「いつもニコニコ、貴方の隣に這い○る混沌ニヤル○トホ○プ！」

「？イキナリどうしました？想起さん」

「いや、なんか頭に浮かんだからつい……」

「そうですか、分かりました」

よくは分かりませんが、何と無く、これ以上聞かない方が良いでしょう。気がするので追求しないでおきましょう。

「それでお姉ちゃん達は今からどこに行くの？」

幸多君が首を傾げながら聞いてきたので、答えましょうか。

「私達は、『阿求さん』に呼ばれたので、『阿求さん』の家に行こうとしてるんですよ」

『稗田 阿求』  
ひえだの あきゆう

人里にある『稗田家』の現当主であり、『御阿礼の子』。

この『御阿礼の子』というのは、稗田家の初代当主『稗田 阿礼』さんの転生体だそうです。

……初めて阿求さんと会った時に間違っって顔を見てしまいました。が、その時の『過去』の量が余りにも多すぎて倒れたのは今では良い思い出……にはなりません。が、まあ、そういう人も居る、ということを知る良い機会でした。

「そうなんだ！ねえねえ！僕も行っていい？」

「幸多君、友達と遊ぶ約束があつたんじゃないの？」

「？どうして？」

「だって、外に出てるから……」

私がそう答えると、首を横に振りました。

「あのね！外に出たら、お姉ちゃんに会える気がしたんだ！」

「……幸多君、有難う！その気持ち、すつごく嬉しいよ！」

私は幸多君に笑顔を向け、幸多君も一緒に連れてそのまま稗田家まで行きました。

「阿求さん。頼まれた通り、想起さんを連れてきました」

「そうですか。葵さん、有難うございます」

稗田家に入ると、そこにはオカツパ頭で、若草色の長着に黄色の着物、赤いスカートを着た女性が私に話し掛けてきました。

この女性こそが私に『想起さんを連れてきて欲しい』と頼んだ人、阿求さんです。

「それで、僕に何か御用でしょうか？」

「はい。貴方の事を『幻想郷縁起』に書かせて欲しいのです」

『幻想郷縁起』というのは、この幻想郷に住んでいる人や妖怪の情報が書かれている本です。

まあ、普通に人にも知られてますから秘密情報というわけでもないのですがね。

「それでは、幾つか質問します。よろしいですか？」

「あ、うん。良いよ」

そして、阿求さんと想起さんはそのまま縁起に書くための話を始めました。

その間の私は暇ですので、近くのお団子屋さんに幸多君と一緒に食べに行くことにしましょう。

〈想起side〉

「はい。これで質問は終わりです。ご協力有難うございました」

僕は阿求さんからの質問に答えられる範囲で答えた。

そして、それも終わった。

外を見てみれば、此処に來た時が昼頃だったんだけど、今は少し暮れ始めている。

葵も多分、帰って……

「あ、終わりましたか？ 想起さん」

「え？ 待っててくれたの？ 葵」

葵はこの家にある椅子に腰掛けていた。

阿求さんが何も言わないっていうことは、ちゃんと許可はとっているみたい。

というか、此処で許可を取らないのは葵らしくないね。

それにしても、いつ許可を取ったんだろう？

(目の前の奴がお前に質問してる途中で視線だけ動かしてたから、その時だろ)

「(え!!? 全く気付かなかったよ……)」

というか、碎牙はどうして気付けたんだろ？

まあ、碎牙はそういうの敏感だから、気にしない方が良いのかな？

「……あれ？」

僕は葵と帰ろうとした時に、少し気になる物が視界の端に映った。

アレって、多分……。

「阿求さん、アレって葵の縁起？」

「はい、そうですよ。少し訂正を入れなければいけませんので、修正するために出しています。勝手に見ないで下さいね？ 私が許可を取ってからにして下さい」

「分かっていますよ」

僕はそう言ってから、葵と一緒に稗田家を出た。

……でも、やっぱり少し気になるから、今度、縁起が出た時に読むことにしようっと。

## 第九十八話

（葵 side）

私は、神社の一年中咲く桜達がある縁側に座って、ある方を待っています。

その方と一緒に来ること間違いない人の為にも、お団子を沢山作り、それを近くに置いて待っています。

「葵、どうだ？」

「あ、鬼灯」

私の後ろから声を掛けられ、振り向いてみると鬼灯が立っていました。

「ううん、まだ来ないよ。でも、もうそろそろだよ」

「そうか」

鬼灯はそう言うと、一緒に待っていてくれました。

少しすると、私達の目の前に亀裂が入り、その亀裂が広がり、その中には見覚えのある剣を持った、見覚えのある男性がいました。

「よっ、葵。遊びに来たぞ」

「お待ちしておりました。如月さん」

その剣を持った男性、『如月 翔』さんが遊びに来ました。

\*\*\*

私が今回、如月さんが来ることが分かったのはやはり能力によって予知したからです。

ですから、色々と先に用意出来ていましたが……

「なんで着いた早々に葵が用意してくれた団子を食べてるんだ!!? 凛華!!?」

「き、如月さん、落ち着いてください。凛華さんに食べてもらう為に用意したお団子ですから……」

「モグモグ、この団子も美味しいのうー!」

「はあ、相変わらずで何よりだよ。凛華……」

今の状況を説明しますと、この幻想郷に如月さんが持つ剣、『天羽々斬』で時空を斬って遊びに来た如月さんでしたが、挨拶をした後、如



月さんの後ろから現れるようにして外に出て来た『喰龍』の凜華さんが、お団子にすぐ様近付き、食べ始めたのです。

私は元々から凜華さんに食べてもらおう為にお団子を用意していましたが止めるつもりは微塵もありません。

「たくつ。……それにしても……」

「あ、気付きましたか？如月さん」

如月さんは溜息を吐いた後、すぐ後ろにある桜に目を移しました。

「ああ……この桜、ずっと咲いてるのか？もうすぐ秋になるみたいだしな」

「はい、そうです。不思議ですよ、その桜。でも、此処以外にも咲き続けている桜は有りますよ」

私はそう言いながら、如月さんの隣に立ち、その桜を見上げました。

「そうか。それにしても、どうして……」

如月さんが考えようとした時に、その答えを出してくれたのは凜華さんでした。

「それは『幻想となった』桜じゃろうな」

「？幻想となった？」

「成る程。確かに、それは考えられる話だな。そもそも、幻想郷に常識など皆無に等しいからな。それが違ったとしても、そんなに驚くことでもないだろう」

「それもそうだね」

私がそう納得していると、隣では如月さんが溜息を吐いていました。

「どうしました？如月さん」

「ん？あ、いや。何でもよ。気にしなくて良い」

「……如月さん、話して下さい。幾らでも相談に乗りますから」

私が如月さんに顔を向けながらそう言うと、少ししてから話してくれました。

「……疲れだ」

「え？疲れ……？」

「ああ。そこにいる凜華の食欲の所為で、俺の財布が……それに、修行

がキツくてな」

「……ストレスか？」

「まあ、そんなところだな」

如月さんはそう言うのと、少し笑みを浮かべました。

でも、疲れなら……

「如月さん」

「ん？」

「実は、最近、人里と魔法の森の間に、『香霖堂』とは違う別のお店が出来たのですが、そちらに行ってみませんか？」

「店？その店の名前は？」

お店の名前は……確か、この前、文々。新聞に載ってたお店の名前は……。

「『夢の館』です」

「『夢』？」

\*\*\*

その後、私達は神社から出て、その『夢の館』へと向かっています。

「それにしても、その店はどういう店なんだ？」

「よくは知りませんが、疲れた人には幸せな夢を見せて、悪夢を見た人は、その悪夢を貰い受けるお店だそうです」

「ふむ、『夢』が関係している能力持ちじゃな」

「だろうな」

私達がそう話していると、いつの間にか、そのお店に着いていました。

「あ、此处です。此处」

「……館というだけあって、洋風の館だな」

「紅魔館よりかは小さい館だな」

「そこは比べちゃダメだと思うよ……」

私達はそう話してから、その館の扉をノックしました。

「は〜い、今から開けるね〜」

その声が聞こえてから直ぐその扉が開き、中から出て来たのは……

「……子供？」

「あゝ、お客さんだゝ！ボク、この『夢の館』に住んでる『夢川 獺』ゆめがわ ぼくつて言うんだゝ！よろしくねゝ！」

灰色の短髪に髪の色と同じ灰色の着物を着た、のんびり口調のフランちゃんと同じぐらいの背の男の子がいました。

「あ、はい。よろしくお願いします」

この性格の方を私は見たことがない為、少し驚きましたが、ちゃんと挨拶をしました。

「おい、獺！客なら中に入れろ！」

「あーごめんねゝ、今から入れるよゝ」

獺さんは奥から聞こえたその声の主の指示を聞くと、私達を中に入れてくれました。

「それで、そいつ等が客か？」

「そうだよゝ、『サリア』ゝ」

獺さんは、その声の主である『サリア』さんという方にそう言いました。

その方の姿はというと、金髪の長髪で紅い吊り目、黒を基調とした肩を出し、振袖付きのワンピースを着た、慧音さんより少し高い背をした綺麗な女性でした。

ただ、口調が少々キツイ様です。

「はあ、お前、なんでそんなにのんびりしてるんだ！」

「何でだろゝ？あははゝ！」

「笑うところじゃないだろー！」

私達はその二人の会話を聞いていましたが……

「なあ？仕事はどうした？」

鬼灯の一言により、二人の会話は途切れました。

「あー、すまないね、私は『サリア・モルフイウム』っていうんだ。よろしくな」

サリアさんはそう自己紹介してくれました。

「で？あんた達は何をしに来たんだ？夢を『喰べて』もらいに来たのか？それとも、幸せな夢を『見せて』もらう為に来たのか？」

「え？『喰べる』？『見せる』は分かりますが『喰べる』ってどうい

……」

「……ほう？そこの小僧、お主、名前通り、『獺』だな？」

「うん、そうだよ！ボクの種族は『獺』だよ！」

「成る程な。だから『喰べる』か」

「え、『獺』って、あの『獺』ですか？」

「夢を『喰べる』神話生物の？」

『獺』

この生物に関して私が知っているのは『夢を喰べる生き物』というぐらいです。

帰ってから、鬼灯に教えてもらおうことにしましょう。

「そういうことだ。となると、私の種族も分かっているのか？」

「まあ、あまり自身はないがな。お前、『サキユバス』だろ」

「……正解だ。私は『サキユバス』だ」

「サキユバス？」

「確か、夢魔の一種だ」

「そう。まあ、私達の能力は大体、想像が付くだろうから説明は後だ。さっさと済ませるぞ」

「あ、はい」

サリアさんのその一言により、私達は話すのを一旦辞めることにしました。

「それで？一体誰が受けるんだ？」

「此方の如月さんに夢を見せて頂きたいんです」

「よろしく頼む」

「分かった。じゃあ、着いてこい」

サリアさんと獺さんが部屋の奥へと移動し始めたので、私達も移動することになりました。

そして、その奥の部屋には、ベッドが幾つか有りました。

「……なんでこんなにあるんだ？」

「一応さ。さて、そこのベットに横たわって、目を瞑ってくれ」

「分かった」

如月さんはそう指示を受けると、その通りにベットに横たわり、目

を瞑りました。

「じゃあ、夢を見せるぞ」

サリアさんはそう言うと、如月さんの額に手を翳すと、少ししてから如月さんの寝息が聞こえてきました。

「さて、こいつを起こすわけにはいかないからな。移動するぞ。猯、様子を見てやっててくれ」

「了解」

サリアさんは猯さんからの了承を聞くと、私達を連れて部屋から出ました。

\*\*\*

「それで、何から聞きたい？」

「お前達の能力は何だ？」

「……大体、想像出来てるんだろ？」

「それでも、一応聞いておくべきだろ」

鬼灯の言葉を聞くと、溜息を吐きながらも教えてくれました。

「まず私の能力からだ。私の能力は『夢を操る程度の能力』と『眠らす程度の能力』だ。前者は夢を見せたり、その夢の内容を変えて悪夢を見せたり出来る。後者についてはさつき見ただろ？」

「一つ質問するが、眠らせる時間とかは決めれるのか？」

「ああ、出来る。まあ、永眠させる事は無理でも、それは出来るぞ」

「……今、なにやら物騒な言葉が出た様な気がするのですが？」

「気の所為だな。それで、猯の能力は『夢を喰べる程度の能力』だ。まあ、夢を喰べるのが『猯』の習性だからな。説明はなくて良いよな？」

サリアさんはそれで話が終わりだとばかりに席を立つと、何処かへと言ってしまいました。

……そして、暫く待っていると、お盆を持って戻ってきました。

「ほら、ミルクティーだ。悪いが、この館には紅茶しかないぞ」

「いえ、気にしないでください。有難う御座います」

私と凜華さんはミルクティーを飲みましたが、鬼灯は唸っていました。

……当然ですね。鬼灯は、人の姿になるのがあまり好きではないで

すから。

ですが、結局は人の姿にならなければミルクティーが飲めないの  
で、人の姿になり、ミルクティーを飲みました。

このミルクティー、とても美味しいです！

「のお？団子はないかの〜？」

「団子？ないな」

「そうか、無いのか」

凜華さんはサリアさんに質問しましたが、お団子がないと分かる  
と、落ち込みました。

「まあ、仕方ないだろ。諦めろ」

鬼灯が凜華さんにそう言いました。

そして、それから数分後。

「サリア〜。起きたよ〜」

「分かった。有難うな」

「わ〜い！褒められた〜！」

「こら！客が居る前で跳ねるな!!？どんだけマイペースなんだ、お前  
は!!？」

「てへへ〜！」

「褒めてない!!？」

サリアさんと獺さんはまたそんな会話をしていました。鬼灯が仲  
裁に入り、一旦、話すのをやめてくれました。

そして、如月さんが寝ていた場所に案内してもらい、如月さんの様  
子を見ると、疲れが取れて居る様に見えます。

「如月さん、どんな夢を見たんですか？」

「ん？……内緒だ」

「」

その後、私が代金を払うと、そのまま神社へと戻りました。

そして、今はあの桜が咲き誇っているのが見れる縁側。つまりは、  
如月さん達が次元を斬って訪れた最初の場所です。

「それでは、またお別れですね」

「ああ、そうだな」

「また、遊びに来てください。凜華さんにも、またお団子を用意して待ってますね」

「うむ！よろしく頼むぞ！」

「お前な……」

「まあ、葬もこう言ってるから、別に良いだろう」

その後、如月さん達はまた剣で次元を斬って、元の幻想郷へと戻って行きました。

「……今度は何時、来るのかな？」

「さあな。まあ、来る時は葬が察知出来るだろう？」

「そうだね！その時が楽しみだよ！」

私達はその後、神社の中へと入り、ルカと想起さんに今日の出来事を話しました。

## 第九十九話

〈葵 side〉

私達は、神社内で大人しくしています。

これは仕方ないことなんです。だって、外は大雨ですから。

「それにしても、季節外れの雨だな」

「まあ、夏が終わり始めた今、この嵐は確かに季節外れだな」

ルカの言葉にそう返答した鬼灯。でも、私の耳にはあんまり入ってきません。

だって、この嵐の時には大抵、『アレ』がありますから。

「あ、そう言えば。葵は大丈夫なのか？」

「そう言えばそうだな。大丈夫なのか？葵」

想起さんが聞いた後、ルカがノアを撫でながら、顔を此方に向けて話しかけてきました。

『ノア』とはこの神社で飼い始めた雌の黒猫です。

「あ、うん。大丈夫……だと思っ……」

私は頭の中でひたすら『アレ』がこない事を祈っていました。

……しかし、結局、この天気では免れない様で……

ゴロゴロゴロゴロ……

「ひっ!!？」

その音が聞こえた瞬間、私は耳を塞ぎ、目を瞑りました。

そして、落ちる音が塞いだ耳から聞こえてきてしまいました。

「……落ちたな。『雷』」

「光った時から少し時間がたって音がなったから、結構、遠くに落ちたんだね」

「……葵はやっぱりダメだったか」

「うう……」

私は昔から『雷』が苦手で、音が鳴っただけでも涙目になってしまいます。

それにしても、なんで皆は平気なんですか!?!? 雷ですよ!?!? 自分に落ちたら死んでしまうのですよ!?!?



「いや、そう言われてもな」

「こんな天気の時以外に出ないから、その危険性は少ないんだが……」  
「外の世界の時なら兎も角、此処だと外に出ないから危険がないしね。そもそも、もう慣れたし」

上から鬼灯、ルカ、想起さんの順でそう言葉にしました。

でも、それでも怖いじゃないですか!?!?

私が内心でそう思っているにも雷は止まず、また雷が光ったので耳と目を塞ぎました。

……それでも、少し音が入ってくる為、その度に叫びそうになるのを堪えました。

どんな理由であれ、叫ぶのはルカ達に迷惑が掛かります。

叫ぶ声ほど、煩い音もないですよね？

……と、変なところで気を使っていたら、光った直ぐ後に大きな音が鳴ったのが聞こえてきました。

……お察しの通り、叫んでしまいました。

「おお、近くで落ちたか」

「なんて呑気な……山火事になってなきや良いがな」

「それはない。その時は私がいち早く分かるからな」

「そうか。なら良いんだ」

「……え？葵の叫びは無視なの？」

「今更すぎるだろ」

鬼灯とルカと想起さんのそんな会話が微かに聞こえましたが、私は耳を塞いでいますから、やはり少ししか聞こえてきません。

……その後、何度も何度も雷が鳴り、その度に耳と目を塞いで聞けない様になっていましたが、途中から雷が止み、それを気に、私達は寝ることにしました。

やっぱり、雷は苦手です。

\*\*\*

その次の日、私が何時もの様に早朝に起きてみると……

「……雷は兎も角、嵐や雨の後はやっぱり、これですよね」

私は一人、空に浮かぶ七色の橋を見ました。

## 第百話

（葵side）

私はルカ達と幸多君も一緒に妖怪の山へと足を運んでいます。

理由は、綺麗な紅葉を見る為というのもありますが、今回、香霖堂でキノコを焼いて食べるので、キノコ狩りです。

……魔法の森よりは安全ですし、『豊穰の神』である鬼灯も居ますから、多分、大丈夫でしょう。

「わあ！綺麗だね！お姉ちゃん！」

「そうだね、幸多君。それにしても、すっかり秋だね。鬼灯」

「そうだな。今年も稔の季節がやってきたな」

「本当に綺麗だよね、幻想郷は」

「外の世界は違うのか？」

ルカが素朴な疑問を想起さんにぶつけると、想起さんは「そうだね」と言いました。

「違うと言えば全く違うね。だって、外だとあんまり自然がないから、排気ガスとかで空気が淀んでるしね」

「排気ガス？」

「よくは分からないが、汚い空気で良いのか？」

ルカがまた質問すると、今度は頷いて返事をしてくれました。

「そうか。それなら、此処も悪くはないな。な、ノア」

「ニャー」

ノアはルカに抱っこされた状態で返事をしました。

前までは外に出る時は連れていきませんでした、危険な事が関係してないなら連れて行くことにしました。

ノアが居ないと、ルカも寂しがってましたので。

「さて、それではキノコ狩りを始めますか？」

「そうだな。ということ、そこにいる神達。何もしない様だったら、出来れば手伝ってくれないか？」

鬼灯が私達の後ろにいる神達に話しかけると、少しして、その神達が出てきました。

二人とも、とても容姿が似ていますので、双子か姉妹かの何方かなのでしょうか。

一人は赤色の赤色のワンピースに同色の上着をきた、金髪の短い髪に金眼の女性。

もう一人は秋を思わせる姿をした金髪赤眼の女性で、なんだか甘い気がします。

「あ、貴方達、此処へなににきたの?」

「キノコ狩りだ」

「キノコ狩り……って、豊穰神ですか!?!?」

「……その呼び名、久しぶりに聞いた気がするな」

「豊穰神!?!?早くこの山から降りて下さい!!?此処は烏天狗達の……妖怪達の縄張りですよ!?!?」

金眼の女性が鬼灯にそういうも、鬼灯はその言葉に耳を傾けずに私達に先を急ぐ様に促した。

「豊穰神!?!?」

「私の名前は『孤天 鬼灯』だ。確かに豊穰神である事を否定するつもりはないが、何方かと言うと、名前で頼む」

「あ、はい。分かりました……じゃなくて!鬼灯様は兎も角、他の方達はとても危ないですから!!?特に、その女性と手をつないでいる男の子!!?」

……幸多君の事です。確実に。

「どうしましょう、鬼灯。私としては、幸多君が危ないなら降りたいです。戦闘も起こしたくはないですし……」

「だが、此処で降りると、魔理沙にばかりキノコを取ってもらうことになるからな。……はあ、仕方ない。少し待っている。『天魔』と少しばかり話してくる」

「分かったよ。気を付けてね」

「ああ」

鬼灯はそう言うと、私達から離れていきました。

「ねえ、葵」

「?何でしょう?想起さん」

想起さんが気になることがあるのか、私に話しかけてきました。でも、何か気になることってあったでしょうか？

『天魔』って、何？』

あ、そう言えば、説明してませんでした。

『天魔』というのは、天狗達の一番上の偉い天狗です』

『天狗達の中でも一番強いからな。まあ、あの様子だと、鬼灯の奴はその『天魔』と仲が良いんだろうな』

「へえ〜」

「兎も角、私達は少しこの辺りで食べられるキノコを探しましょうか」  
私がそう言うと、二人は頷いて、キノコを探し始めました。

幸多君は私と一緒に探していますし、先程の姉妹神も一緒にキノコを探してくれています。

キノコ、沢山取れば良いのですが……。

〜鬼灯side〜

葵達から離れた私は、途中で会った白狼天狗に剣を向けられ、山から追い出そうとしていたそいつを逆に倒し、天魔がいる場所まで案内させた。

「此処が、天魔様が居るお部屋です」

「そうか、案内ありがとう。『権』」

私はそうお礼を言うと、扉を叩いてから部屋へと入った。

「失礼するぞ」

扉を開けた先に見えたのは、大量の書類が乗った机で仕事をしている『天魔』

その姿は、肩まで伸びている黒髪に、先程久々に会った『秋姉妹』と同じ紅葉の色をした着物を着た烏天狗だった。

そいつは驚いた様子もなく……

「お久しぶりですね、豊穰神」

と、此方に顔を向けて言った。

「……名前で呼んで欲しいのだが？ 『水蓮』」

『天之里 水蓮』。天魔だが、私の親友の一人だ。

まあ、永年生きていると、必然と仲良くなるものさ。

「それで、どうしました？『貴方がこの山に来たのは最初から』分かっていますでしたが、貴方の関係者でしたら、許可など不要でしたよ？ああ、あの『秋姉妹』から言われて来たのでしたね」

「……流石、お前の能力だな。あの『樫』という白狼天狗も持つてる様だな」

「まあ、あの子よりも私のは『強力』ですがね」

水蓮の能力は『万里先を見通し、伝える程度の能力』と『水と風と雷を操る程度の能力』

前者はさっきの『樫』の能力が強力になったやつで、後者はそのままだ。

「それにしても、よく『樫』は貴方に名前と能力を話しましたね」

「お前の知り合いだと言えば直ぐに信用してくれたぞ」

「……もう少し危機感を持ってもらわなければいけませんね」

水蓮は「はあ……」と溜息を着くと、私に妖怪の山に入る許可を与えると、仕事に戻ってしまった。

……水蓮は真面目なやつだからな。仕方ないか。

私はそのまま、黙って部屋から出ると、葵達の元へと戻った。

〈葵side〉

私達が安全なキノコを探してキノコ狩りを続けている最中に鬼灯が戻って来て、妖怪の山に入っているいい許可をもらえることが出来た。

「私達は既に入ってるがな」

「ま、まあ。許可を取れたし、キノコをもっと取ろうよ」

「そうだね、取ろうか！」

私達はまたキノコ狩りを始めたあと、約束の時間になる少し前にキノコ狩りを終え、手伝ってくれた神達にお礼を伝えてから、妖怪の山を降りました。

そして、今は香霖堂でキノコを食べています。

この時期のキノコは確かに美味しいですね。

「あー！松茸だー！」

「ふふ、幸多君、松茸、食べてみて？美味しから」

「うん！」

幸多君は熱々の松茸を息を吹きかけ、少し冷ましてから食べました。

「美味しいね！お姉ちゃん!!？」

「そうだね！幸多君」

私と幸多君がそんな話をしていると、霖之助さんが動きを止めてしまいました。

箸を持った状態ですから、キノコを食べたのは確かですが……どうしたのでしょうか？

「どうしました？霖之助さん」

「……葵、頼みがある」

「？何でしょう？」

「毒キノコを食べてしまったみたいだから、能力を使って治してくださいか」

「え、えええええ!?？なな、なんで……いや、慌てる場合じゃないですね。分かりました、治します」

私が霖之助さんを治していると、後ろから魔理沙とルカと鬼灯の話し声が聞こえてきました。

「はあ、だから私は『食べるのを待て』と言ったんだ」

「そもそも、毒キノコを持ってきた魔理沙が悪いだろう」

「でも、死ぬ様な毒キノコじゃないんだから良いだろう？」

「良くないからな」

その後、結局その場で解散となり、私達は幸多君を家へと送り届けてから神社へと戻りました。

## 座談会

はい！というこで、百話を記念して、此処で『座談会』をしよう  
と思います！

「でも、何をするのでしようか？」

「主の全く似てないモノマネか？」

「クスクス、全く面白くもないギャグかしら？」

あんたら、そんなに私を傷つけて楽しいか……

「クスクス、事実じゃない♪」

……まあ、やることは単純ですよ

「話を逸らしたな」

うっさい。この前、質問を受け付けましたので、その返答をしよう  
と思います！

「そうか。で？どんな質問がきてるんだ？」

では、まず『のろろま』さんからの質問！

『もし全員が現代入りした時の私服を知りたいです！』

「現代入り……ですか」

「したくはないが興味はあるな」

「クスクス、さて、それじゃあ、主。ちゃんと返答しなさい♪」

アイサー！（某空飛ぶ猫）

・ 葵↓青と白のグラデーシヨンのノースリーブのワンピース、白の  
半袖カーディガン、麦わら帽子

ト  
・ ルカ↓袖が少し膨らんでいる白のカットソー、黒のフレアスカ

・ 鬼灯↓白の半袖Tシャツ、ジーンズ

・ レティシア↓白のワンピースに、日除け帽子（偽物語の忍さんを  
想像して下さい）

・ 想起↓青のパーカー、チノパン

ですかね？私、ファッションセンスゼロですが

「私とレティシアが妙に手抜きな様に感じられるんだが……」

手抜きじゃないです。というか、鬼灯さん。貴方、スカートを履きたいですか？

「……すまん、似合いそうにない」

貴方の性格だと、そう言うと思いましたよ

「クスクス、私は別に文句なんてないわよ♪」

ならいいです。さ、次の方は『零ミア』さんです！ちなみに、二つあります！

一つ目の質問内容は此方！

『葵さんは霖之助のことを『本当に』諦めるのですか？』

この質問に対しての答えは『NO』です。葵さんには霖之助さんとくっ付いてもらいます

「あ、主さん!?!?そそ、それを此処で、いい、言わなくても……／＼／＼だつて、焦つたすぎるんや、あんたらは!!?!?この話題になるといつも『断る』つて言つてるのに、結局は断つてないし、もう人里問題もほぼ問題無しなんだから良いでしょ!?!?異論は認めん!!?!?」

「少しは意見させて下さい!!?!?」

「なら、もうあの問題も解決した今でも『断る』のか?」

「……」

……頭抱えて悩んじゃつたよ

「まあ、未来的には付き合うことは確定してるんだから別に良いんじゃないか?」

「僕も、葵には幸せになつてもらいたいからね。早く付き合つて欲しいよ」

「クスクス、そもそも、その相手の霖之助も鈍感つていうのがネックよね」

(一度、その告白を邪魔したお前が言うな)



「クスクス、あの時邪魔してなかったら絶対に断ってたわよ♪葵は」  
「考えを読むな」

「どうやって気付かせるべきか……私達が直接言うわけにもいかな  
いからな……」

まあ、永夜抄が終わった時に言おうとしてましたから、また機会が  
あれば言うでしょう

「それもそうだな」

「まあ、仕方ないね」

では、二つ目であり、これが最後です！葵さん、次に行きますから  
戻ってきて〜

「あ、すみません……」

よろしい。では、質問内容はこちら！

『葵さんは巫女服しか持って持っていないのですか？』

はい、葵さん。返答して

「はい。私は巫女服以外にも一応、服は持ってます。着物と夏祭りの  
時に着る浴衣と、あと修行の際に着た巫女服とか、寝る際に着る寝間  
着とか」

「服類だとそんなものだが、普通にマフラーもちゃんちゃんこも持っ  
てるぞ」

そこまで聞いてないと思う……

「私が持つてる服はそのぐらいですね」

「クスクス、女の子なんだからもつとオシャレしなきゃ駄目よ♪しよ  
うがないわね。次、外の世界に遊びに行った時にでも何か服を買って  
あげるわ♪」

「え!??い、要りませんよ、レテイシアさんに悪いですし……」

「クスクス、私は貴方にあげたいから買うのよ♪素直に受け取るとき  
なさい♪」

「……分かりました。有難うございます」

さて、これで終了ですね

「次はなんの異変なんだ?」

次は風神録です!ちよつと、この先の予定でこれが先にきます

「?そうか。分かった」

「クスクス、この異変では、私はまた何もすることがないわね♪鬼灯達の行く手でも阻みましようか♪」

「やめろ。お前が相手とかシャレにならん」

「クスクス、残念」

それでは!さようなら!!

## 風神録

### 第一百一話

（葵side）

私は今日もいつも通り、朝早くに起きました。

想起さんが来てからは想起さんも家事を手伝ってくれる様になり、少し楽な生活を送れています。

そんな日の朝ですが……

「はあ……」

私はとても心配事があります。

実は、この前から妖怪の山に新しい神社がこの幻想郷に幻想入りしてきました。

それは別に時々あることですから問題ではありません。

……問題はその後からです。

私は予知夢を見ましたが、その際、その神社の方が霊夢に喧嘩を売りに来ていたのを夢で見ました。

まあ、外から来たのですから、この幻想郷にとって『博麗神社』がどれだけ大切な場所か知らないのは仕方ありません。

ですから、説明すればいいだけなのですが、今妖怪の山に入ろうとすると、天狗達に襲われて、入ることが出来ません。

これでは、此処の事を説明出来ません。

この事は、既に霊夢にも鬼灯達にも話しています。

……しかし、全員の反応が……

『ふん、そんなの、別に問題なんてないわよ。逆にボコボコにしてやるわ！』

と、霊夢が。

『そんな事、放っておけ。何かあれば紫やレティシアが動くし、私も本気で行くさ。それ以前に、そんな相手に霊夢が負けると思えないしな』

と、鬼灯が。

『良い機会だと思うぞ？彼奴、自分の神社の神様の事も知らないんだろ？神というのがどれだけ大切なものか、学ばせる良い機会じゃないか』

と、ルカが。

『葵の役に立ってあげたいけど、あんまり荒事はしたくないんだ。

……ごめんね？』

と、想起さんが言いました。

想起さんは致し方ないとして、他は理由としてどうなんでしょう？……何も言いませんでしたけども。

そんな風に考えていると、いつの間にか着いていたのはルカの部屋。

無断で入るのはマナー違反なので、一度中に呼び掛けてから入りました。

そして、そのまま、まだ気持ち良さそうに……

「……？」

私はルカの寝顔を見て、少しの違和感を感じました。

『いつもとは何か違う』

そんな違和感を。

ですが、その違和感は結局分からず、そのまま起こすことにしました。

ルカの隣にいるノアは既に起こしています。というより、部屋に入った瞬間に起きました。

音を聞いたからなんでしょうね。

「ルカ〜！起きて〜！朝だよ〜！」

何時もの様に、朝に弱いルカをゆさゆさと揺らして起こそうとする私。

期待通り、それで起きてくれるルカ。

「……頼むから、揺らさないでくれ」

「朝なんだから、起きないとダメだよ。朝御飯、要らないの？」

私はルカが起きたのを見ると、揺らすのを辞めて、顔を洗ってから来る様に言うと、また台所へと戻りました。

\*\*\*

全員が朝御飯を食べて、掃除やお昼とお夕の御飯の為の食材を裏庭にある川と畑で取った後、私達は博麗神社へと向かいました。……すると、案の定、霊夢の怒りの声が聞こえてきました。

「……やっぱり、こうなるのですか」

私は少し頭を抱えてから博麗神社の境内に足を着けました。

「霊夢、どうしました？それから、そちらの方は妖怪の山に新しく出来た神社の方ですよね？その方が一体、何の御用でしょうか？」

私は知っていながらも質問しました。

勿論、その聞いた相手である、緑髪の長い髪にカエルと蛇の飾りを付けた女性は私も知ってる答えを言いました。

「私はこの神社を廃社してもらう為に、ここに来ました」

すると、霊夢がその言葉に噛みつきました。

「巫山戯んじやないわよ!?？何で廃社しないといけないわけ!?？」

「この神社は信仰が少ないとお聞きしました。私達は信仰を集める為に幻想入りを果たしました。信仰の少ないこの神社が役に立つのですから別に良いですよね？」

「良い訳ないでしょ!!？」

すると、相手は少し溜息を吐くと、言いました。

「また此処に来ます。その時には此処の神社と……」

くると此方に体を向けると……

「貴方の神社を廃社して頂きます」

その言葉を聞いた鬼灯はすかさず断りました。

「巫山戯ているのか？お前は。葵の神社は『豊穰の神』……つまりは私が祀られている。そんな神社を廃社したらどうなるか……分かるよな？」

鬼灯はそう言葉にして、持っている神力を緑髪の女性だけに向けて少し放出しました。

「ツ!?？で、ですが、私達の神社の為に……廃社して頂きますから!!？」

神力に怯みながらもそう言葉にすると、そのまま妖怪の山へと帰っ

ていきました。

「……」

「?霊夢?」

私は何故か体を震わせている霊夢に疑問を抱き、どうかしたのかと質問してみると……

「上等じゃない!!?そつちから来なくても……こつちから直々に行つてあげるわよ!!?あの緑髪をぶっ飛ばしにね!!?」

「……」

「はあ……」

「まあ、こうなるよな」

「……あ、あはは」

私達はそんな霊夢に、其々の反応を見せるしかありませんでした。

## 第百二話

（葵 side）

緑髪の女性と出会ってから三日後の今日。

此処まで時間が経ったのには理由があります。

最初は、そのまま行こうとした霊夢を私が止め、後日ということになりました。

その次の日、今度こそ行こうとした霊夢でしたが、そんな時に紫さんがやって来て、霊夢に『神降ろし』の練習を強制的にさせてました。私はそもそもから『神降ろし』は習得していたため、霊夢に対してのアドバイス役として近くにいました。

……小さな頃に練習しておいて良かったです。……神を降ろした際、力の消耗が激しかったので直ぐに倒れてしまっていました。

まあ、理由としてはこれが原因です。

そして、その三日間の間に特別なことが二つ。

一つ目は、あの時、ルカに感じた違和感が無くなった事です。

本人に体調の事を聞いてみたところ、「別に何処も悪くなかったが？」と、首を傾げられ、勘違いということになりました。

二つ目は、如月さんが遊びに来たことです。

霊夢と私が博麗神社で練習している間はルカ達が神社に居てくれました。その際、初対面の想起さんと挨拶し、ルカが今の現状を話してしまい、如月さんも一緒に妖怪の山にある神社へ行くことになりました。

どうやら、如月さんの方の幻想郷では、その神社の巫女さんと仲が良い様で、だから、此方の巫女さんにお灸を据えてやると言っていました。

そして、現在はというと、妖怪の山に来ています。

「それで、あんたが別の幻想郷から来た奴ね。葵と仲良くやってるみたいね」

「ああ、それに、最初に此処に来た際に色々世話になったからな」

「世話？」

「如月さん、アレは私がやりたかった事ですから、気にしないでください。それに、お客様にお金を払わせるなんて、それこそ駄目な事です」  
「いや、だがな、凜華が食べた団子の量……見ただろ？」  
「……」

あの時、私は初めて凜華さんがお団子を食べる量を見ましたが、アレは幽々子さんと大食い勝負が出来るほどのです。

何方が勝つか、予想すら出来ません。

と、そんな事を考えてると、その渦中の中心である凜華さんが如月さんの中から出てきました。

「?どうしました?凜華さん」

「いや、葵。気付け」

「?」

私は何に気付かなければならないのか直ぐには分かりませんでした。だが、匂いを嗅いだ時に分かりました。

「この甘い匂い……」

「嗅いだことあるだろう?」

私と鬼灯がそんな話をしていると、凜華さんの目の色が変わりました。

「この匂い……生焼き芋じゃな!!?この近くで焼いておるやもしれん!!?お主達!!?早く行くぞ!!?」

「おい、待て!!?凜華!!?」

「凜華さん、待ってください!!?」

私と如月さんの止める声も聞かず、凜華さんはそのまま匂いの元へと行ってしまいました。

「皆、凜華さんを追おう!!?」

「俺のメンタルが死にそうだ……」

「如月さん、ドンマイ……」

「同情しか出来ないな」

想起さんとルカが如月さんに対して同情する声をあげていました。

私も言葉にはしていませんが、心の中では……

(如月さん、ご愁傷様です)



この通り、同情していました。

少年少女移動中

私達は匂いの元へと辿り着きました。その時に見た光景はというと……

「お主、良い匂いがするの。喰らってみたいのお」

「ひい！た、食べないでえええええ！」

……稔の神の方が凜華さんに食べられそうになってる光景でした。

「凜華、喰うの辞めろ」

「む、如月。遅いぞ」

「いえ、凜華さんが速いだけかと……」

私が苦笑していると、先程の稔の神が私の背中に隠れるようにして、移動して来ました。

「凜華、喰べるなよ。喰べたらもう団子を喰わせないぞ」

「む、それは困るの。分かったのじゃ」

凜華さんがそう言葉にすると、稔の神は安堵の溜息を吐きました。

『穰子』!!?大丈夫!?!」

すると、近くにいた稔の神の姉妹である紅葉の神が近づいて来ました。

「大丈夫だよ!!? 『静葉』!!?」

それを見た稔の神はそう答えました。

「……さて、この二人の安全も確認出来たんだ。先に進むぞ」

鬼灯がそう言って、私達も先に進もうとすると……

「ちよ、ちよつと待っててください!!? 鬼灯様!!? この先に行くつもりですか!!?」

「そうだが?」

「その先には新しくこの幻想郷に来た神達がいいます!!? ですから、危険です!!?」

「危険はない。私や凜華も居る、それに、『博麗の巫女』と『神無月の巫女』もいるんだ。大丈夫だろう」

「それもそうですね」

鬼灯の言葉に直ぐに納得が言った稔の神。

しかし、今度は無邪気な子供の顔をすると、

「でしたら、私達と遊んでください！少々、退屈していたので！」  
と、言いました。

「ふむ、なら、私が行くとするか」

「鬼灯、私もサポートに回るから一緒にする」

「分かった。頼む、葵」

私達の中から弾幕ごっこをやる人は直ぐに決まり、姉妹神の前に出ました。

「それじゃあ、始めましょう！私は『紅葉の神』の『秋あき 静しず葉は』！『穰あき 子みのりこ』！『穰あき 子みのりこ』の姉よ!!?」

「私は『豊穰の神』の『秋あき 穰みのりこ子』！『静しず葉』の妹よ!!?」

「そうか、なら初めようか。神遊びを」

そして、最初の弾幕ごっこが始まりました。

## 第百三話

く葵sideく

私達が弾幕ごっこを始めて約一分。

短いですが、どちらかというところ、此方が不利かもしれない。

……私が弾幕の才能が無いので、鬼灯ばかりに弾幕を撃たせる型になつています。

「葵！」

「!!？」

そんな考え事をしていたために弾幕が来ていることに、鬼灯に呼びかけられる迄気付きませんでした。

でも、それでも何とか避けることには成功しました。

「あ、危なかった……」

「むー！当たると思つたのにな」

「なら、当たってみるか？私の弾幕に！」

「え？」

「火符『狐火』！」

鬼灯の弾幕が秋姉妹に向かって撃たれました。

それを、秋姉妹は叫び声を上げながらも何とか回避出来ていました。

「あ、危なかった……当たる所だった……」

「次は此方からです！葉符『狂いの落葉』!!？」

すると、赤と黄色の米型の弾幕が、まるで落ちるようにしながら、それぞれ別々の方向へと打たれました。

それは、どう見てもランダムな撃たれ方で、私達を狙う弾幕は一つもありません。

けれど、隙間が狭く、中央から離れると、どう考えても弾幕に当たってしまうため、此処で、まだ隙間が広い所を見つけては避けるを繰り返すことになりました。

そして、その弾幕全てを避けることには成功しました。

「あー、避けられちゃいましたか」

「ああ、避けた。次はなんだ？」

「私のスペルです！秋符『秋の空と乙女の心』！」

今度は、静葉さんの弾幕とは色が違い、赤と青の米型の弾幕が円形状に放たれました。

これだけだったら、まだ避けるのは簡単ですが、中には中くらいの大きさの丸型の弾幕が私達を狙って撃たれていました。

私達はそれも避けて、そのスペルをブレイクしました。

「さて、あまり時間も掛けたくないからな。……まあ、あの式神を使うのは今は絶対に嫌だから、これにしておこう。式神『二尾狐』」

すると、くおんさんと同じく二匹の二尾の狐が現れました。……ただ、その狐の口からは涎が垂れている気がするのですが、これは気のせいでしょうか？

「ひっ!!?そ、その狐、涎垂らしてるよ!!?」

「穰子!!?あんたの甘い匂いの所為でお腹を空かせたんだよ!!?きつと!!?」

「えええええー!」

ああ、やっぱり、あの涎は気のせいじゃなかったんですね。

「……なんか、済まん。だが、これも『遊び』。私だって『遊び』で負けたくはない。だから、済まん」

それが合図になったのか、二匹の狐は秋姉妹に口を開けた状態で襲いかかりました。

「きやあああ!嫌あああ!食べないでえええええー!」

秋姉妹は叫び声をまた上げて気逃げ回りました。

その際、「もう負けで良いからこの子達、なんとかしてええええ!」と言う声が聞こえたので、鬼灯が式神を元の場所に返し、弾幕ごっこが終わりました。

……私が参加する意味、無かったですね。

\*\*\*

「はあ、はあ……た、食べられるかと……思った……」

「……すまん」

穰子さんの言葉に、二人に謝罪をする鬼灯。

「え？何故、鬼灯様が謝るのですか？」

「いや、何か罪悪感が……」

「鬼灯様が謝ることではありませんよ。それに、あんな事があつたとはいえ、私達はとても楽しめましたから！」

静葉さんが笑みを浮かべてそう言うのと、鬼灯も笑みを向けました。

「そうだな。確かに、私も楽しめた。ありがとう、二人とも」

「どういたしまして！」

その後、私達はまた先に進むことにしました。

「それにしても、アレには驚いたな……」

「ですね。まさか、襲うとは思ってませんでしたよ……」

私と如月さんがそう話していると、私達の後ろを歩いているルカの足音が止まりました。

「？ルカ、どうし……ルカ!?!？」

私が後ろを向いてみると、目を瞑って、頭を押さえて座り込んでいるルカが目に入りました。

「ルカさん!?!?大丈夫!?!？」

私と私達の前にいた想起さんはルカに近付き、容態を見ました。

「ああ、大丈夫。……ちよつと、目眩がしただけだ」

「それは大丈夫じゃないから!?!?今から治すからじつとしてて!!?」

私が能力を使ってルカの容態を治すと、ルカも普通に立てるようになりました。

「大丈夫か？ルカ」

「ああ、もう平気だ」

「それよりも……体調が悪いなら早く言ってよ!!?何で言ってくれなかったの!?!?」

私がルカを怒鳴ると、ルカは……

「それが、朝までは別に体調は悪くなかったんだ」

と、言いました。

「……え?」

「ただ、今イキナリ目眩がしたんだ。体は怠くなかったのは幸いだな」  
「……あんだ、もう帰った方が良いんじゃない?」

霊夢がルカにそう言うも、ルカは首を振って帰らないという反応をしめました。

ルカが心配ではありませんが、そのルカの言葉を信じ、先に進むと……

「あれ？魔理沙？」

「お？何だ？霊夢達もこの先に行くのか……って、誰だ？お前。なんか、どっかで見た顔だな」

魔理沙がいました。

「魔理沙もちゃんと見てるよ。……紅魔館の図書館で」

「……あ！あの時の奴か!?!？」

魔理沙は思い出したのか、如月さんに指を指しました。

「おい、人に指差すな」

「おっと、悪かったな」

「それで？お前は どうして此処にいるんだ？」

鬼灯がそう聞くと、魔理沙は笑いながら、

「何かお宝があるかもしれないだろ？」

と、言いました。

「お宝……ですか？」

「ああーま、無かったとしても、霊夢が此処にいる時点で私には着いて行く理由が出来たがな！」

魔理沙はその笑いのまま、霊夢を見て言いました。

それを聞いた霊夢は溜息を吐いていましたが。

魔理沙は霊夢にライバル心を燃やしているためか、この様に良く異変解決に乗り出して来ます。

私達はそれを別に咎めたことがないですから、今回も何も言いません。

「と……い……う……こと……で……！……行くぜー！」

魔理沙はそう言いながら作った拳を天に突き上げると、先に歩き始めました。

私達はその後に続く様に歩いていると……

「そここの人間達、止まりなさい」

静止の声が聞こえてきました。

「……あんた誰よ」

(あれ?この人の姿、もしかして……)

私がそう考えていると、その緑髪の巫女さんとはまた違う、どちらかというと暗いのが印象的な服を着ているその女性は、ル力を見ると真っ先に近付き、額に手を翳しました。

「!??!」

「はい、コレで良いわ。それにしても、貴女、この厄、何処で貰ったのよ。今回に関しては、私と会った事は幸運よ?……『厄神』である私が言うべきことでもないけれど」

「え、『厄神』?!?!」

想起さんはその一言に驚いたという様な顔を見せました。

「やっぱりですか……」

『厄神』

八百万の神の一人で、『人間達に厄を降りかからせる神』、またはその逆で『人間達の厄を除く神』とされています。

でも、この方は何方かというと後者であり、『厄神』というよりも『厄神様』なのでしょう。

何方にしろ、神様なのですが、意味合いとしては違います。

『厄神』と呼ばれるよりも、『厄神様』の方が人には好かれるでしょう。「さて、では本題といきましょう。貴女達、この先に行くのは危険よ。今すぐ去りなさい」

「どうしてよ」

「危険だからよ。それに、この先は神の領域。行ってはならないわ」

「私は神なんだが?」

「妾も龍神じゃが?」

厄神様の言葉に反応した鬼灯と、いつの間に出て来たのか分からない凛華さん。

「貴女達はまだ良いわ。でも、他は駄目。神ではないものが立ち入るのは危険よ」

厄神様は私達にそう忠告してきましたが、霊夢と魔理沙の反応は違

いました。

「妖怪なんかに言われたくないわよ。良い？妖怪は全員敵よ。だから、此処で倒させてもらおうわ」

「そうだぜ！此処を通らせてもらうぜ！」

「私は人間達の味方よ」

「なら、えんがちよ！」

魔理沙がまるで本当に縁を切ったかの様な真似をしました。

「ほらー！これで良いだろ？」

「良くないですから!!？」

私はそこでようやく二人にそう言いました。が、その言葉は聞こえてないのか、二人は無視し、厄神様もまた、「なら、仕方ないわ。全力で止めるわよ！」と言いました。

「私は『厄神』である『鍵山 雛』！貴女達を全力で止めるわ！」

そして、雛さん対霊夢と魔理沙の弾幕ごっこが始まりました。



## 第百四話

今から話すのは、葵達が穰子達と対峙していた頃の紅魔館での話。

↳レティシアside↳

「クスクス、はい、チェックメイト♪」

「あく、また負けちゃったわ〜」

私は自分の部屋に遊びに来ていた紫とチェスで遊んでいる。

まあ、結果は私が全勝しているけれどね。

「それにしても、貴方の攻め方、本当に読めないわね」

「クスクス、そうかしら?」

「ええ。だって、何時も最初の一手から違うじゃない」

「クスクス、そうね♪それは考えの違いだけだね」

私が最初にやる攻め方は大きく分けると二つ。

一つ目は、王を先に動かす方法。

二つ目が、犠牲駒を最初に動かす方法。

まあ、やる頻度としては二つ目の方が多いわね。

「貴方、何で最初に王を動かす時があるのかしら?」

「クスクス、前に別次元ではあるけれど、遊びに出た時に会った学生とチェスで遊んだのだけれど、その時に使ってた方法がこれでね♪中々に面白い手だったから真似てみたのよ♪それに、その子が言ってたことにも共感出来たからね」

「?何て言ってたの?」

「クスクス、『王が動かなければ部下は動かない』。ね♪中々に面白い考えでしょう♪」

「……貴女、その学生と戦った時の結果は?」

「クスクス、私が全勝♪」

「面白いと言っておきながらのコレなのね……」

紫は頭を抱えているけれど、何故かしらね♪

「クスクス、さて、もう一戦しながら話しましょうよ」

私は笑いながら紫にそう話し掛けると、紫も「そうね。次は負けないわよ」と言って駒達を元の位置に戻し始めた。

と、そんな時に扉を叩く音がした。

さつき、マリアに頼んだ紅茶ね♪

何故かって？扉の前にマリアが居たら、要件は直ぐに分かるわよ。

「クスクス、入りなさい♪」

「し、失礼しましゅ……うう、噛んだよ」

あらあら、泣きそうね。

私はそう考えると席から立ち上がり、マリアに近付いき、紅茶が乗ったカップを貰った。

「あ」

「クスクス、マリア、有難うね」

私がマリアにお礼を言うと、マリアは勢い良く頭を下げて、部屋から出て行ってしまった。

「クスクス、やっぱり恥ずかしがり屋も健在ね♪」

「あら？あの子、人見知りの上、恥ずかしがり屋なの？」

「クスクス、ええ、そうよ」

私は紫に紅茶を渡すと、席に着き、チェスを始めた。

「クスクス、それにしても、何でまた『こんなタイミング』で『神降ろし』を霊夢に覚えさせたのかしらね？」

私が駒を置いて、紫の番と言う時に聞いてみた。

「……」

「クスクス、黙秘かしら？まあ、別に貴女が何しようかどうか、私にはあんまり関係ないわ」

「……あら？…そうなの？」

紫はようやくそこで言葉を出すと、白の駒を置いた。

「クスクス、ええ。私がこの『妖怪賢者』という役職的なものに着いたのだから、別に幻想郷の事を思っているというわけじゃないわ。幻想郷を守ることはイコールレミイ達の為になる。私にとって得しかないわ」

私は黒の駒を持って、それを空中で揺らしながら話すと、それを置いた。

「まあ、そうね。貴女が賢者になったのだから、他の人には『私から必死に、土下座して頼まれたから』って言ってるみたいだしね」

「クスクス、事実でしょう？ 実際してたんだから♪」

「そ、それでも！ 貴女の性格なら無情に断ることも出来た。というか、あの時は私が土下座しなくても断るつもりなかったでしょ!?!?」

「クスクス、土下座してた時の貴女の姿は面白かったわよ♪」

「レティシア~~~~!?!?」

私が駒を置くと同時に叫び声を上げる紫。クスクス、面白いわね♪

まあ、落ち着かせないと話が進まないから落ち着かせるけどもね。

「クスクス、落ち着きなさいよ、紫」

「落ち着けるわけないでしょ!?!?」

私はいつものカリスマが無くなってしまった紫を落ち着かせることに集中することになった。

……その時に、ちよつと能力を作って霊夢達の姿を見たら、あの『厄神』と対峙していた。

まあ、今の霊夢の状態から考えると、直ぐに終わるわね。

私はそう検討付けると霊夢達を見るのをやめた。

## 第百五話

（霊夢 side）

「厄符『バッドフォーチュン』!!?」

あの雛とかいう妖怪がスペル宣言をすると、彼奴の周りに光源が発生した。

そして、その光源は彼奴の周囲を一周してから飛んでいった。

その光源は幸いにも私達の方には向かって来なかった。

……けど、その後が続く様にして撃たれた赤い米粒弾が配置され、左右に拡散された。

見たところ、そこまで避けるのは難しく感じない。

でも、見つけた隙間を抜けるとまた弾幕が迫って来た。

「……」

まあ、こんな技もあるわよね。だから、一々驚いてはいられない。

私はチラツと隣にいる魔理沙を見ると、楽しそうな笑顔で避けていた。

そして、私達が避けきり、スペルブレイクすると、今度はまた別のスペルを発動させた。

「だったら!!? 疵符『ブロークンアミュレット』!」

すると、今度はまた光源が彼奴の周囲に発生した。

けど、さっきのとは違って一周回らず、そのまま発射された。

「!!?」

私達はそれに当たるのは不味いと考え、その光源を破壊しようとする弾幕を投げてみても、その光源は破壊出来ず、またさっきと同じ型の弾幕がその光源から発射され拡散した。

それも適当に拡散されたからどれが何処に行くのかの予想が付かない。

まあ、でも楽々避けれたんだけど。

というか……、

「私は早くこの先に行つて、あの緑髪をボコボコにしたいのよ!!? だから、ここで時間を取られるわけにはいかないわ! 魔理沙!」

私が魔理沙に声を掛けると、魔理沙は「おう！」と元気に返事してくれた。

「恋心『ダブルスパーク』!!?」

そして、そのままスペル宣言をすると、魔理沙は自分の両手を前に出して、そこから魔理沙の十八番『マスタースパーク』を威力そのままに二つにしたような極太レーザーが発射された。

その二つは、妖怪には当たらなかったけど。というよりも、少し擦れてる。

「あら?どうしたのかしら?誤射?」

「いんや?コレで良いんだ!!?」

魔理沙は笑顔で言った。

その目からは私への不安など無かった。全くと言って良いほどに私に対しての不安が無かった。

だから、私らしくはないかもしれないけど、私はその期待に応えることにした。

「霊符……」

「!??貴女、いつの間に私の後ろに!??」

私はダブルスパークによって左右に避けれなくなっている妖怪の後ろに瞬間移動をしていた。

これで終わりよ!!?」

『夢想封印』!」

「ぎやああああ!」

私の技に避ける事なく（避けられないけど）当たり、倒れ伏した。

〈葵side〉

私は弾幕ごっこが終わると気絶した雛さんに近付き、治そうとしましたが、鬼灯に止められました。

「鬼灯?」

「辞めておけ。彼奴は『厄神』。触ると『厄』が移るぞ」

「ですが……」

「だが、コレばかりは……あ、凛華。お前、食べれるか?」

如月さんが隣にいる凛華さんにそう質問すると「当たり前じゃ」と

いう返答が返ってきました。

「妾が誰か忘れたか？妾は『喰龍』じゃぞ？『厄』ぐらい簡単に喰えるわ」

凜華さんはそう言うと、そのまま雛さんに近付き、雛さんが持っていた『厄』を喰べ始めました。

「ほ、本当に喰べれるんですね……」

「流石は『喰龍』ということか」

私達はその姿を黙って見ていると、凜華さんは喰べ終わった様で、此方に戻ってきました。

「ふん、これだけしかない『厄』では妾は満足出来ぬな」

私は凜華さんのその言葉を聞くと、直ぐに雛さんに近付き、治し始めました。

「ま、まだ喰べられるんだ……」

「まあ、『喰べる龍』と書くしな」

後ろの方では、想起さんとルカがそんな事を話していました。

\*\*\*

雛さんを治したい後、私はまだ気絶している雛さんを近くの木を背もたれに立て掛けました。

そして、そのまま先を急ぐと二人の声が聞こえてきました。

「？誰かいるのでしょうか？」

「ちよっと気になるし、行ってみるか」

如月さんの言葉で、私達は声の方向へと寄り道することになりました。

そして、その方向にいたのは、青色の髪を二つ結びにしている、青色を基調としたワンピースを着ている女の子と、真っ白な髪にちよつと汚れてる様に見える紺色の服を着た男性が話していました。

ただ、女の子の方は何も気になるところはありませんが、男性の方は風呂敷が掛けられている釣り竿を肩に掛けていました。

その女の子の方は、男性に何か見慣れぬ物を見せてとても興奮している様に見えます。

「でねー……ん？ひゅい！！？」

その女の子は此方を見つけると、何故かそんな声をあげて、その男性の後ろに隠れて、私達に姿を見せない様にしていました。

「ん？君達は誰？」

その男性は私達を警戒しながらもそう問いかけてきました。

「そんな事はどうでも」霊夢、どうでも良くないですからね？」……分かったわよ」

霊夢が危なく失礼な事をしようとしたので、私は先回りして止めました。

……けれど、私は少し失念していました。

「そつちこそ誰だ？普通のマナーは相手の名前を聞くときは自分からだ」

ルカがどんな人物なのかを。

「るる、ルカ!?？なんでそんな喧嘩腰で言うの!?？」

今のルカは、相手の方と同じで、警戒した状態で聞いていました。ただ、相手を睨み付けていますが。

ルカが人間不信なのは分かってましたが、何時もはそんな事がないので失念していました。忘れちゃダメでしょ!?？私!!？

「ご、ごめんなさい！ルカが失礼な事を!!？」

私は直ぐに相手の方に頭を下げて謝りました。

「え？い、いや別に謝らなくても……俺は怒ってないから」

「葵、相手もこういつてるし、戸惑ってるから頭を上げた方が良いぞ」隣にいた如月さんがそう言いました。

私も、その相手の方の言葉が聞こえていたので、頭を上げました。

「それに、その子の言うことも一利あるしね。俺の名前は『矢印野歩』。よろしくな」

「わ、私は『川城 にとり』だよ。よろしくね」

二人はそう自己紹介してくれました。

だから、私達もしました。如月さんの中に戻っていなかった凜華さんんです。

「へえ、君達がああ『博麗の巫女』と『神無月の巫女』なのか」

「はい」

「歩は旅人なのか？」

鬼灯は首を傾げながら聞くと、頭を縦に振って肯定してくれました。

「ああ。幻想郷中を歩いてるんだ」

「だから、時々だけどこの妖怪の山にも遊びに来てくれて、こうやって話を聞いてくれるのさ！私にとっては盟友さ!!？」

にとりさんは歩さんの後ろにまだ隠れていますが、そう話してくれました。

「そうか。でも、何時も何処で休んでるんだ？疲れるだろう？」

「え？疲れないよ？それが俺の能力だからね」

「歩さんのですか？」

「そ。俺の能力は『絶対に疲れない程度の能力』。だから、俺は疲れたりせずにつつと歩き続ける事が出来るんだ」

「凄い能力ですね！」

私は本心からの言葉を言うと、歩さんは「そうか？」と、少し照れた顔で言いました。

「あ、ならあんだ。この妖怪の山にあるっていう神社の事、何か知らない？」

霊夢がそう質問すると、知らないと言われました。

「ただ、何か天狗達がピリピリしてるのは知ってる」

「ピリピリ？警戒してるって事か？」

「そう。何時もなら白狼天狗だけが襲ってくるんだが、今回は烏天狗達も一緒に襲ってきたんだ」

「え？天狗全体って言うことですか？でも、どうして……」

私がそれは何故なのか考えようとすると、霊夢が「そんな事、どうでも良いわー！」と言いました。

「私達を襲いかかってくるなら返り討ちにするだけよ!!？」

「お！流石、霊夢だぜ!!？私もその意見に賛成だぜ!!？」

「ふ、二人とも。穏便に済ませようよ……」

私が二人の言葉に対してそう声を掛けるも、どうやら耳には入っていなかったようで、やる気になっていました。



「はあ、これは穩便には濟まないな」

「まあ、いつも通りだな」

すぐ近くでは、鬼灯とルカのそんな声が聞こえてきました。

## 第百六話

〈葵side〉

私達はにとりさんと別れて、また山の神社へと向かっています。歩さんとは別れてません。一緒に神社へと向かっています。

私がどうしてなのか聞いてみると……、

「神社が出来たんなら旅人として一回行ってみたいから  
だそうです。」

そして、そのまま歩いていくと……、

「あれ？今、何か空を通った様な……」

私のその一言で全員が上を見ると、そこには、板が飛んでいました。

「……え」

「何だ？アレは」

私とルカがアレは何なのだろうかと考えていると、想起さんが教えてくれました。

「アレは外の世界では『サーフボード』って呼ばれてるんだ」

『サーフボード』？」

「何だ？それは」

「海は一応、聞いたことがあるよね？そういうところで使うものなんだよ」

私達は一応、海というのが存在していることは知っていますが、実際は見たことはありません。

ですから、想像ではありますが、とても大きくて、広い湖だと考えています。

「その様なものが何で……」

「誰か乗っているのだろうか」

私の疑問に鬼灯が答えてくれました。

「お？『夢幸』……」

すぐ近くにいた魔理沙がそのサーフボードに乗っているであろう人物の名前を呼ぶと、その声に反応して、そのサーフボードは降りてきました。

「なんだ、魔理沙か。こんな所で何をしている？」

そのサーフボードに乗っていた人は、黒髪の男性でした。

「魔理沙、知り合いなの？」

「ああ！こいつは『時雨 夢幸』って言うんだ！」

「どういう知り合いなんだ？」

ルカは、魔理沙が知り合いということに警戒心を薄くした様で、睨み付けずに終わりました。

「よく私の魔法の練習に付き合ってくれる奴さ!!？」

魔理沙は笑顔で、そして、まるで自分の自慢話をするかの様に誇らしげに話してくれました。

「へえ、どうりで今までは毎日の様に遊びに来てたあんたが、時々しか来なくなつた訳ね」

霊夢はそう言いながらも「努力なんて面倒臭いじゃない」と、言いました。

「あれ？でも、前にレティシアさんと戦って負けた時、修行してたよね？」

私が首を傾げながら聞くと、霊夢の顔が赤くなりました。

「なッ!? あ、葵!? それは言わないでよ!!??」

「え? でも……」

「もう絶対に言わないでよ!!? 良いわね!!??」

「わ、分かったよ……」

私が霊夢の勢いに若干引いていると、夢幸さんの声が聞こえたので、向いてみると、

「お前達、天才である俺の名前だけ知って名乗らないとはどういうことだ?」

と言いました。そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。

「失礼しました。私は……」

そこからは歩さんと魔理沙以外の全員名乗りました。

歩さんが何故名乗らかったのかというと、お二人は友人だからです。

歩さんの『記憶』にも、夢幸さんの『記憶』にも、お二人はちゃん

としましたから。

……記憶を見たとは、絶対に言えませんが。

まだ、怖いので……。

「それにしても、自分に余程自信があるのですね、夢幸さんは」

「当然だ。俺は『天才』だからな」

「……そうですか」

私は、自分には才能が無いと思っています。

だって、霊夢の補助をちゃんと出来ているように思えないのです。

……私は霊夢達の役に立てているのでしょうか？足手まといなのではないでしょうか？

弾幕で攻撃出来ない私は……、

「葵？」

「え？あ、ごめん。どうしたの？霊夢」

「いや、どうしたのよ、顔なんか下げて」

「……大丈夫だよ、何も無いから」

「……そう」

霊夢は確実に気付いています。ですが、これは私の問題です。自分に攻撃の才能がないことは前から分かっていたことなのですから、今ここで無い物ねだりしても仕方ないですよね。

「……」

「?どうしました?夢幸さん」

「ふん、お前が気にすることは何もない。それよりもだ、どうして此処に魔理沙と歩がいる?」

「それは……」

　　少女説明中

「つてことさ」

「ふむ、そうか。なら、その新しく出来たという神社に挨拶してやろうではないか」

「おー!ということとは夢幸も来るのか!??何だよ、私の見せ場が少なくなるじゃないか」

「……?凛華さん?」

私は先程からずっと黙っている凜華さんに目を向けると……、  
「!?」

凜華さんの目には、鬼灯やレティシアさんを初めて見た時と同じ、戦いたいと言いたげな目をしていました。

いえ、目だけでなく、口角も嬉しそうに上がっています。

「ほう、お主強そうじゃな。どうじゃ? 妾と一戦交えぬか?」

「やめろ、凜華」

如月さんがそんな凜華さんに辞めるよう声を掛けると、直ぐに夢幸さんからの返答が返ってきました。

「ふん、くだらないな。言っておくが、俺はくだらない事をやるつもりはない」

「ふむ、そうか。残念じゃの」

「おい」

凜華さんは本当に残念そうな顔をしてそう言いました。

「と、兎に角、行きませんか?」

「そうだな。行くか」

私がそう提案すると、歩さんが乗ってください、そのまま歩いて行くことになりました。

\*\*\*

さっきの場所からまた少し歩いた所で、私達の前にまた立ち塞がる人がいました。

その所為で、霊夢のイライラがまた募ってしまいました。

「何であんたがいるわけ? てか、何してんの?」

口調も何時もとは違うように感じます。

「あやや! 侵入者とは貴方方の事でしたか、霊夢さん」

私達の前に居たのは、文さん。そして、白髪の髪から犬耳が出ている女性でした。

「お前は、『椀』じゃないか」

「!!? 鬼灯様!? どうして此処に……いえ、そんな事に今は構ってられません。私は私の仕事をするだけです」

「仕事?」

「私達は侵入者の排除を命じられています」

「……命じられてる？水蓮からか？」

「はい、そうですねよ、鬼灯さん」

「……彼奴がそんな事を。しかし、一体、何故だ？」

鬼灯は『権』さんという方からの言葉で、何故なのかと考え始めてしまいました。

「……おい、そこを通せ。文。じゃないと、氷漬けにするぞ」

ルカはついに耐えきれなくなったのか、少し殺気を出して文さんを脅しました。

「わ、私も本当は仕事を放り出して逃げたい所ですが、し、しかし、コレは天魔様からの命令ですから逆らえないのです！それに、私が此処で通してしまうと、見回り天狗達も納得いかないでしょうからね」

文さんはそういうと、葉団扇を出して、此方に向けました。

「ということですから、すみません。大丈夫ですよ。手加減してあげますから！」

「……」

文さんの言葉を聞いた、霊夢、ルカからは、黒い何かが出ているように見えます。

「れ、霊夢？ルカ？ど、どうしたの？」

「文、手加減してくれるのは有難いけど、それ、私達を舐めてるという事で良いわよね？」

「え？あ、えっと……」

「私も流石に今のはイラツときたんだ。だから、お前を氷漬けにしてやる」

「あ、あの、お二人とも、落ち着きませんか？」

文さんからは冷や汗が流れているように見えます。その隣にいる『権』さんと言う方も同様です。

そして、文さんからの言葉に対して、二人は笑顔で、

「無理」

と言いました。

「あ、あはは……」

ちよつと不味いかもしれませんね。……仕方ありません。私も参加しましょう。

「霊夢、ルカ。私も参加して良い？」

「ん？良いわよ？寧ろ、参加して。彼奴等の動きを止めないといけな  
いから」

「あ、はい」

私は文さんに対して、初めてですが同情してしまいました。

## 第一百七話

葵は、自分の目の前で起こってる事に対してある事を思っていた。  
(私、本格的に要らないんじゃないでしょうか?)

別に何時ものネガティブ発言ではない。ただ、目の前で起こってる  
戦闘の所為で、そう思わざるおえないのである。

「神技『天覇風神脚』!!?」

「ふっ、そんな技、私の速さの前では……って飛べない!?? またですか  
!??」

「誰がお前の自由に行動させると言った? 文。大人しく受けろ」

「そんなのあんまりです!!? ……きゃあ!!?」

「文さん!?? なら……って、私も!??」

「夢符『封魔陣』!!?」

「ちよっ!?? まっ……うわあああ!」

「さて、駄目押し of 攻撃をしておこう。氷符『氷柱雨』!」

「ちよっ!?? それは酷い……きゃあああ!」

霊夢がスペル宣言をして文に攻撃を与えようとするが、文は自身の  
速さで当たらない様にしようとする。しかし、それをルカが能力を  
使って羽を凍らせ、羽ばたけない様にしたことにより断念せざる負え  
なくなり、あえなく撃墜。

それを見た椀は文の仇を打つ為に動こうとするが、それをまたルカ  
の能力により阻まれあえなく撃墜。

そして、最後の駄目押しである。この状況の中、葵という補助は要  
るのであろうか?

私としても、本人と同じ考えになっちゃおう。

「ま、まだ……わ、私の仕事が……」

「あ、葵。その白い天狗が動ける様だから縛って、拘束してくれない  
かしら?」

「えっ……あ、うん。……ごめんなさい。呪術『鬼呪封印』」

……最後の最後で出番はあったが、なんとも嬉しくない出番であ  
る。



\*\*\*

「おい、霊夢、ルカ。これは流石にやり過ぎだ!?!?」

と、如月は言うが、

「そう? 私達の進行を邪魔しようとして、剩え私を侮辱するような事を言ったこいつが悪い」

霊夢に反省の色は無い。

「いや、それは文さんのにも先に進んで欲しいから言っただけで……」

文の心情を代わりに言う想起だが、

「それぐらい、私達も分かっている。しかし、分かっているても、怒りというものは出てくるものだ」

人間の心理とでも言いたいらしい口調で話したルカ。

「ふん。全くもってくだらんな」

「……私、出ない方が良かったかも。今まで以上の居た堪れなさが……」

夢幸と葵の二人の反応は全くの逆であった。

「文、大丈夫か?」

「だ、大丈夫じゃないです」

「ふむ、これは伸びておるな」

「焼いて食べるとか言うなよ?」

「言わんわ!!?」

歩は違いますね文を心配したが、文からの返答は大丈夫じゃなさそうな『大丈夫』であった。

そして、その近くでその様子を見ていた凜華に対して注意した鬼灯。

何なのだろう? この集団。本当に異変解決に来たのだろうか?

「!!?……どうやら、他の天狗が来たようだな」

「そうじゃな。気配がするの」

「そうだな。それも複数居るぜ。……おい!!?そこに居るのは分かっているんだ!!?タネが分かった手品ほど面白くないもんはないぜ?」

魔理沙のその一言により、五、六人ではあるが、烏天狗と白狼天狗が周りを囲んでいた。

「ふーん、新たな仲間ってことね。なら……!?」

霊夢が烏天狗達を蹴散らそうとスペルカードを手に持った時、すぐ近くで音楽が流れ始めた。

「……何? 何処から」

「綺麗……」

霊夢と葵がそれぞれ別の感想を言うも、流れている曲は止まらない。

「この歌声……まさか……」

文はそう言うと同時ぐらいに、上に影が差した。

「なんや? この騒ぎは。皆、少し落ち着きくな」

「小唄!!?」

文は歌っている人物を見つけると、直ぐに抱き付いた。

「文やないか。どうしたん? 大丈夫かいな?」

「ええ! 大丈夫よ!!?」

文はとても嬉しそうな顔で小唄に抱き付いたまま答えた。

「何の騒ぎですか?」

すると、その後ろからもう一人、小唄の後ろから現れた。

「……水蓮」

鬼灯はその相手を見ると、途端に警戒する様子を見せる。

「? どうしました? 鬼灯様。……ああ、もしかしてこの対応でしょうか? 申し訳ありません。ですが、最近、新しく幻想入りした者達のものもあり、この様にするほかありませんでした」

「ちなみに、僕を呼んだのも天魔様なんや」

恩があるから断れへんねん、と、小唄は笑顔を浮かべながらそう言った。

「そういえば、お前は誰だ?」

鬼灯が首を傾げながら聞くと『小唄』と呼ばれた男の烏天狗は自己紹介した。

「初めましてやな。僕ははぐれ天狗の『羽葉滝 小唄』や。敵対する気はない自由主義者なんでよろしゅう。それから、その天魔様には其のことで色々助けてもらつとるんや」

「助けて？」

鬼灯がまた疑問を水蓮に投げかけた。

「私個人の考えですので悪しからず。私は個人の意思を尊重したいのです。烏天狗だって、それぞれの考え、やりたいこと、意思。そういうのは勿論持っています。ですから、私はそれを尊重したいのです。意思や意見を聞かず、自分の意見ばかりで雁字搦めにはしたくありません。だから、私は小唄さんの意思を尊重して、自由にしています。これで話は終わりです。それよりも……」

水蓮はそう言うと、小唄の方を向いて、頭を下げた。

「申し訳ありません、小唄さん。貴方が組織的なものを嫌っているのは承知しておりましたが、しかし、この様な争い事を止めるのは貴方が適任と思いましたが、悪いとは思いましたが呼ばせて頂きました」

烏天狗の社会的頂点に立つ天魔である水蓮は、小唄に頭を下げていた。

「ええねん、ええねん。もう謝らんでも。で？どないするんや？」

「貴方達。この人達の事は通しても構いません。侵入者の追い出すよう指示した私が言うべきことではありませんが、この方達なら大丈夫です」

自分達の上司からの一言により、文と権を残して去って行く烏天狗達。

「……お前の伝え忘れが原因か」

鬼灯が溜息を吐きながらそう言うと、水蓮は頭を下げて謝った。

「申し訳ありませんでした。私の不手際でこの様な事に……」

「気にしないでください。ですから、頭を上げてください」

葵のその一言により頭を上げた水蓮。

「さて、この先に神社があります。本来は私達が解決すべき事なのかもしれませんが、よろしくお願いします」

水蓮がそう言うと、小唄と共に離れようとした……が、

「待て、小唄とか言った奴」

「ん？なんや？どないしたんや？」

「お前、さっきのはお前が弾いてたんだろ？」

「そうや。僕が弾いてたんや」

「ふむ、ならどうせこれが終われば異変解決後の宴会があるんだ。その時に弾いてくれないか？ 葬にも歌わせるつもりだからな」

「ほ、鬼灯!!? ななな、何を言ってるのですか!!? / / /」

「ええよく。その話、受けたるわ」

「助かる」

「勝手に決めないでください!!?」

勝手に宴会で歌を歌うことが決められてしまった葬であった。

## 第百八話

葵達が雛と戦い終わった後の紅魔館。

そこには、正気に戻った紫が、笑顔を浮かべているレティシアとまだチエスをやっていた。

「クスクス、はい♪チェックメイト♪」

「はあく……何で貴方に勝てないのかしら?」

「クスクス、さあね♪」

「……貴方、隠れて能力使ってるわけじゃないわよね?」

紫はレティシアに疑いの眼差しを向ける。

……紫がこう聞くのも無理はない。

何故なら、さつきから一度も紫は勝てていないからだ。

それこそ、まるで自分の思考を『見透かされている』様に……。

「クスクスクスクス、紫。私がこういうゲームの時に、そんな卑怯な真似をすると思ってるのかしら?」

レティシアは疑問系で聞き返したが、その顔には黒い笑みが浮かんでいる。

「まま、まさか。一応の確認よ!!?確認!!?」

紫は慌ててそう言うが、レティシアは益々笑みを深くした。

「クスクスクスクス、そう言えば、紫。貴方、最近ちゃんと特訓してるのかしら?」

「!??」

またまた黒い笑みを浮かべながらレティシアは紫に問いた。

逆に紫は冷や汗をかいているが。

「れ、レティシア?何でそんな怖い笑みを浮かべているのかしら?綺麗な顔がもつたいないわよ?」

紫が引きつった笑顔を向けるが、レティシアの顔は変わらなかった。

「クスクスクスクス、良いのよ♪そのことを言われて気にするとしたら、好きな相手から言われた時だけよ♪……それで、紫」

一度、顔を俯かせ、声のトーンも落としたレティシア。そして、次

に顔を上げた時に浮かべていた表情は、満面の笑みだった。

「クスクスククス、紫。久し振りに『特訓』、しましようか♪」

「い、いやあああああ！」

そんな叫び声が、その日の紅魔館では何回か響いていたとかいかなかったとか。

く少女特訓中く

数分後。

レティシアが紅魔館内に被害が及ばない様張った結界の中には、とても楽しそうな笑みを浮かべているレティシアと、床に倒れている紫の姿があった。

その姿はボロボロだったが、不思議なことに、部屋の中（レティシアの自室）は全く汚れていない。

「クスクス、早く立ちなさい、紫。これぐらいじゃ死んでないでしょ♪」

「……し、死にはしなくても……死にかけたわよ……」

紫はゆつくりとだが立ち上がった。しかし、フラフラしている。

「クスクス、大丈夫かしら？」

「こ、これが大丈夫な様に見えるのかしら？ 弾幕の嵐で私が避ける隙を塞いでおいて……スキマに隠れたらスキマから引き摺り出して、また浴びせて……」

紫は口元をひくつかせている。

「クスクス、前もやったでしょ？ これぐらいじゃ死なないのだから良いじゃない♪ まあ、死んだところで生き返らせることは可能だけれど♪」

レティシアはまた笑ってそう返した。

「クスクス、それにしても、紫も弱くなったわね」

「？」

「クスクス、こんな『偽物』の私にチェスで負けるは、コレでもボロボロにされるわ……散々ね♪」

「……え？」

紫は驚いた。

「え？ちよつと待つて？貴方、まさか、レテイシアが作った『分身』？」  
「クスクス、それ意外に何があるのよ♪」

「……『本物』のレテイシアは？」  
「クスクス♪」

レテイシアはずつと笑みを讃えたまま、答えた。

「もうすぐ『異変』を起こそうとしてる奴の元♪」

\*\*\*

―神無月神社―

「……貴方ね。ルカに『狂気』と『厄』を持たせたのは」

レテイシアは一人、誰も居ないはずの神無月神社に来ていた。

勿論、日傘を差してである。

そして、誰も居ない筈なのに、レテイシアは『誰か』に話し掛けた。

『……へエ、オマエが『レテイシア』か』

そして、誰も居ない筈なのにも関わらず、『誰か』は答えた。

「ええ、私がレテイシアよ。貴方が最初、『操ろう』としてきたね。先を『見透かし』てなかったら、対処も出来ずに貴方にまんまと操られてたかもしれないわね」

『ケケケ!!？よく言うぜ!!？そんなもん、オマエなら簡単に拒絶出来てたんだろ!!？オマエ、面白い冗談を付くな!!？』

「それにしても、また何でそんな姿なのかしら？」

『そんなもん、分かってんだろ？『最強』サン？』

相手はレテイシアを挑発するかの様な言葉を浴びせた。

しかし、レテイシアはその挑発に乗りはしない。決して、戦ったりはしない。

「そうね、とても簡単ね。だって、『不幸』の象徴だもの。『黒猫』は」

今、レテイシアの目の前にいる、先程から話しているのは『黒猫』。

ルカが何時も世話をしているからなのか、毛並みは綺麗だ。

『正解だ。クククツ、『悪魔』である俺にはお似合いだろ？』

「……私の近くに『悪魔』はいるけれど、貴方の様に下品じゃないわ。

『黒猫』が似合うのは否定しないけれどね」

『ケケケツ！違いねえ!!？……ンで？オマエは何の様で来たんだ？ま

さか、この『サタン』様に挑むつもりか?』

「そんな事しないわよ。したら、被害が尋常じゃなくなるわ」

『クククツ! オレとしては『悲鳴』が聞けるからむしろ殺りたいがな!!  
?』

「……」

サタンはレティシアに向かって弾幕を放つが、レティシアはそれを無言で消し飛ばした。

『チツ。余裕淡々と消し飛ばしやがって……気に入らねえな』

「……要件だけ言うわ。さっさと『魔界』に帰ってくれないかしら?」

レティシアはサタンに笑みを向ける。……しかし、その笑みからは冷気が漂っていたが。

『あゝ、そらなら飲んでやるよ。オレは飽きたからな』

「飽きた?」

『だってよく。彼奴、中々に渋といんだぜ? オレは実は短気な方で、早く彼奴の絶望した姿を見たかったんだがナ。自分の親友を殺した時の絶望した姿を……ケケケツ、想像しただけで笑えてくるぜ』

『黒猫』の姿をしたサタンは下品に笑う。猫の前足を口元に当てて。

「……下品な笑い方ね。しかも、悪趣味だわ」

『クククツ、それはオレにとっては褒め言葉だ。なにせ、オレは『悪魔・サタン』様だからナゝ!!?』

「……」

レティシアは無言で睨み付ける。しかし、

『おおー、怖い怖い。怖いから睨みつけるんじゃないよ』

サタンは笑顔でそんな事を言った。全く、怖がってる様に見えるな  
い。

『ンじゃ、オレは帰るわ。あ、オレの正体を看破したプレゼントとして、この猫の命ぐらいは助けてやる』

「……貴方が『力』を得る為に食べた人里の者達の『魂』を返すつもりはないということね」

『ケケケツ!!? オレは誰かさんと違って、人を生き返らせること何て出来ないんでネ!!? ま、やっぱり絶望した時の『魂』は美味だが、そ



れ意外は不味いったらありやしねえ。吐き気がするほど不味かったぜ? 『幸せ』感じてた奴らの『魂』はヨ」

「……貴方、最低ね」

『ケケケツ!!? オレにとっては褒め言葉だ!!? んじやな』

サタンはそれを最後に猫の体から出て行った。

サタンが出て行った後のノアは横になっていたが、寝ているだけの様だ。

「……いつまた来るか、分からないわね。用心しておかないと」

レティシアはそれを言うと、紅魔館の方へと飛んで行った。

\*\*\*

「……そう、そんな奴がいたのね」

「クスクス、気付かなかったのかしら? 紫」

場所は変わって、紅魔館のレティシアの部屋。

そこで、紫とレティシアはまたチェスで遊びながら話していた。

「ええ。力すら感じ取れませんでしたわ」

紫は白の駒を置きながら答えた。

「クスクス、貴方もまだまだだね♪……まあ、私も先を見なかったら気付かなかったから、人の事を言えないけれど」

レティシアは黒の駒を置きながらそう言葉にした。

「そう言えば、珍しいわね。貴方が動くんなんて。言っでは悪いけど、幻想郷の事は二の次な貴方が」

「……」

レティシアはその言葉を聞くと、動きを止めた。

「? レティシ……ッ!?」

紫はどうしたのかと問おうとしたが、レティシアから漏れる殺気に気付き、喋るのを辞めた。

「……紫、本当に分かってないわね」

「な、何がかしら?」

「私が見た未来の幻想郷……絶望したルカの手によって、氷河期のような状態になっていたわよ?」

「なッ!? で、でも、あの子の妖力では……」

「そうね。『今』のあの子じゃね」

レティシアはそんな含みがある様な言い方をした。

「……」

「あの子、半分吸血鬼なだけあって、本来の妖力は結構あるのよ。まあ、それは本人の体を壊すほどの量だから、自分でも知らぬ間に封印してるみたいだけど」

「……」

「で、サタンはその妖力を使って、この幻想郷を氷河期にした。……勿論、そんな事したルカは死んでいたけれどね」

「……」

「私が気付かず、そんな事を放っておけば……被害はどれぐらい出たのかしらね？」

レティシアはそこでようやく黒の駒をチェス盤に置いた。しかも、白のキングの目の前に。

「チェックメイト。この先に待っているのは戦えない王の『死』のみ。王は臣下ばかりに戦わせて、自分は高みの見物。……まるで、今回のサタンのようね」

「……」

「……紫、私は前にも言ったわよね？『私にとって、幻想郷よりも家族の方が大切』だと。だから、敵にならないと言った貴方からの誘いに乗った訳だけれど、もし、貴方達がレミイ達を裏切る様な真似をしたら……」

そこで、紫は自分に向けられていた殺気がまた大きくなったのを感じた。……それこそ、呼吸が難しくなるほどの『殺気』。

そして、それを浴びせているレティシアは、底冷えする様な声で、「殺すわよ」

たった一言。それだけを言った。

「あ……あ……」

紫が中々、声を出せずにいると、その殺気はなりを潜めた。

「クスクス、まあ、貴女がそんな事をするとは思えないけれど、一応、釘さしね♪」

「……」

紫はそんな楽しそうな声でようやく、冷静になることが出来た。

「……冷や汗は止まっていけないが。」

「……敵になるわけじゃないでしょ？」

「クスクス、未来は分からないわよ♪一人の行動だけでも変わる不安定なものだもの」

「……そうね」

「クスクス、今日はもう辞めるかしら？」

「いえ、チェスではなく、オセロをしましょう」

「クスクス、分かったわ♪」

レティシアと紫は、先ほどの事など忘れたかの様にオセロを楽しんだ。

## 第百九話

文達と別れた葵達は、そのまま神社へと向かっていた。その途中、葵の後ろを歩いていた鬼灯が歩みを止めた。

「……」

「?鬼灯?どうしたの?」

「……いや、気にしなくていい」

葵からの質問にそう答えた鬼灯はそのまま歩き出した。

「?いや、鬼灯がそう言うなら気にしないでおこうっと」

葵はそう言うと、そのまま歩き出した。

……鬼灯は気付いていたのだ。『何か』の気配が消えた事を。

この時、裏ではレティシアが『サタン』と会話し、そのまま帰って行った時の事なのだが、鬼灯はそれを感じ取ったのである。

しかし、あくまで『何か』であって、正体までは分かっていないが。

「ふむ、やはりお主は気付いていたか」

「……凜華」

鬼灯が歩いていると、凜華が近くに寄って来て、そんな事を言った。

「やはり、気付いてたのか」

「当たり前じゃ。妾を誰だと思っておる。『龍神』じゃぞ?それぐらい簡単に分かる」

「……正体は分かるか?」

「流石に分からぬ。しかし……」

「?」

そこで凜華は口を一度閉じると、嫌そうな顔をしながら、

「ムカつく気配じゃった」

「……そうだな。それは私も同じだ」

この時、あの『サタン』がいたらどんな反応をしたかは……想像するほかないだろう。

「それにしても、小唄達の情報は本当なのか?」

一行の先頭ら辺いた魔理沙が、全員に聞くようにしてそう言った。「本当だ。実際、あの小唄とか言った天狗が得た情報だからな」

その魔理沙の疑問に答えたのはルカだった。

小唄達が去る前、葵達に『神社の神は二人いる』という様な事を言っていた。

特徴までは話さなかったが。

「それが胡散臭いんだが？」

「私の能力が反応しなかった」

「なら信用出来るな」

なんだか話が噛み合っていないように思えるが、これが実は噛み合っているのだから文句は言えない。

「?なあ、君の能力は何だ？」

「ん?説明してなかったか？」

「説明してないね。私達」

ルカが首を傾げながら歩に問いかけると、葵がルカに対してそう言った。

そんな葵の内心は、『聞かれたら素直に答える』と決めていたらしく、別に焦ってはいなかった。

「私の能力は『氷を創造する程度の能力』、『氷を操る程度の能力』、『嘘を見破る程度の能力』だ」

と、ルカが。

「私の能力は『自然を操る程度の能力』、『超能力を扱う程度の能力』、『ありとあらゆるものを無に返す・再生する程度の能力』だ」

と、鬼灯が。

「私は『癒し、治す程度の能力』、『未来と過去を見る程度の能力』です。付け足しておきますと、後者の能力は初対面だと強制的に過去を見ることになります。すみませんがご容赦下さい」

と、葵は少し笑みを浮かべながら答えた。

「あ、僕もだね。僕は『黒龍を操る程度の能力』、『幻と現を操る程度の能力』、『あの世とこの世を操る程度の能力』だよ」

最後に想起がそう説明した。勿論、この時、『黒龍』という言葉に凜華は反応したが。

「へえ、そうか。だからか」

「ああ、まあ、ある意味では一種の『呪い』と受け取ってもいいがな。もう割り切ったが」

「……」

「言っておくが、人の本音を知りたいなんて考えない方がいい。まあ、知ったとしても私は責任を取らないがな」

「ルカ!!?」

「事実だ。それに、言っておいたほうがいいだろう?……こいつらはそんな事を気にするような奴らでもないだろ。特に夢幸」

「ああ、そうだな。実にくだらなことを聞かせてくれたな」

ルカがそう言った後、本当に気にせず、本当にくだらなという顔をしている夢幸がそう言った。

「それよりも、もうすぐで着くぞ。『守矢神社』」

ルカ達が話していると、一番先頭に居て、全員の案内をしていた如月が声を掛けてきた。

「そう言えば、如月さんは元の世界では『守矢神社』に住んでいたんですね」

「まあな。前は霊夢の所に住んでたがな。それから、沙月と夏希もだ。というか、一度俺達の所にも来ただろ?」

「そうでしたね」

如月からの言葉に笑みを浮かべて答えると、如月は何処か呆れた様な、それでいて優しい顔をしていた。

「?如月さん、もしかして、彼処?」

想起が前を見ながら指差した。

その先には、神社特有の石段があった。

「ああ、彼処だ」

「そう。なら、話が早いわ!!?さっさと行くわよ!!?」

霊夢はそう言うと、誰よりも先に、そして速く移動した。

その速さは間違ったら文よりも早かっただろう。

「れ、霊夢!!?ちち、ちよつと待って下さい!!?」

そんな霊夢の後を追って行く葵。

「ほお?あの霊夢の奴、中々速いではないか」

「感心してる場合か?……大丈夫だろうとは思うが」

「兎に角、行くぞ!!?」

鬼灯の声で夢幸以外の全員が走り出した。

……夢幸は一人だけ歩いていたが。

少年少女移動中

石段を登り切った先に見えたのは、よく見る赤い鳥居と博麗神社よりも綺麗な神社だった。

「綺麗に掃除されてますね」

「これぐらいが普通だ。というか、いつも私達の神社はこれぐらい綺麗だろう?」

「だな。その堕落巫女の神社だけだ。汚いのは」

「なんですつて!!?」

「ハハツ!!?言われてるな!!?霊夢!!?」

「魔理沙、あんた、夢想封印受けたいの?」

鬼灯とルカきらの言葉に怒っていた霊夢だが、魔理沙からの一言により、余計に怒り、冷笑した状態で魔理沙を見た。

「じ、冗談だぜ……」

魔理沙は霊夢に対してそう言ったお陰で、攻撃を受けずに済んだが。

「おや?神社を廃社してくれる気になりましたか?」

すると、神社の奥の方から、極最近見た緑髪の巫女が居た。

「は?誰が廃社するつて?巫山戯てるの?私はあんたをボコボコにしに来たのよ!!?覚悟なさい!!?」

霊夢はそう言ってお札と払い棒を構えると、すぐ近くで、もう一人も戦う大勢をとっていた。

「……やっぱり、戦うんですか?如月さん」

そう、構えていたのは葵達とも仲が良い如月だった。

「ああ。言つたら?『お灸を据える』つてな」

「……ですが、s……いえ、違いますね」

「☒」

葵は何かを言おうとするが、言葉を変えた。

「如月さんからしたら『恩人』……でしたよね？それでもですか？」  
「それでもだ」

葵はそれを聞くと、最後に一言だけ言った。

「如月さん、それから、霊夢もだけど」

「ん？」

「何よ？」

「……怪我だけはしないでね」

「ふっ、当たり前よ」

「そうだな。当たり前のことだな」

葵は本当に心配そうな顔でそう言うが、二人は当然という様な顔をして返答した。

「さて、やるわよ」

霊夢の声を聞いた如月は持っていた『天羽々斬』を構えた。

「ああ」

「どうやら、簡単には廃社してはくれない様ですね。でしたら、実力行使です!!？」

そう言うと、緑髪もまたお祓い棒を構えた。

『風祝』であり『現人神』であるこの私、『東風谷 早苗』が相手になります!!？」

そうして、弾幕ごっこが始まった。



## 第一百十話

まず最初に動いたのは早苗だった。

「秘術『グレイソーマタージ』！」

早苗がスペル宣言をすると、早苗の周りに弾幕が星型に設置され、離れると、そのまま拡散した。

「こんなもの!!?」

「俺は見慣れてるがな!!?」

霊夢と如月はそんな風に言いながら弾幕を避けた。

「見慣れている?どう言うことですか?私と貴方は初対面の筈ですが?」

早苗は首を傾げてそう質問した。

「……それについては後で説明するさ」

如月はそう答えたが、顔は何処か悲しそうに見える。

「……」

「……彼奴、こっちの世界とあっちの世界の早苗とか言った相手が別人なの、分かってる筈じゃないのか?」

如月達が弾幕ごっこをしている後ろでは、ルカと葵がそんな会話をしていた。

「……それは分かってるんだと思うよ。だけど……」

「……?」

「……分かってても、それでも、親しいからこそなんだと思う」

「……」

（……それに、それだけじゃなくて……如月さんを認めてくれた人だから……）

葵は如月を心配しながらも、如月を信じて、弾幕ごっこを中断させる様な事をしなかった。

そして、スペルブレイクした後、霊夢がスペルを発動させた。

「神霊『夢想封印・瞬』！」

宣言されたとほぼ同時に、四方八方に設置された扇に見える弾幕。

それらを初めて見た早苗はどうやってこの一瞬で配置したのか分

かっついていない様で、戸惑っていた。

しかし、それでも避けることには成功していた。

「なら、これはどうですか！開海『海が割れる日』!!?」

「!!? 霊夢!!? 左右に動かず、真ん中に移動してくれ!!?」

「何でよ!!?」

「良いから！早くしろ!!?」

霊夢は葵からの説明で、如月が元の世界で早苗と一緒に住んでいたことを思い出し、如月の言うことに従った。

すると、早苗の横から海を思わせるようにユラユラ動くレーザーが、霊夢達の横を通過した。

「……成る程ね」

「……何故、貴方は私のスペルを知ってるのですか?」

「さあな? 言ったら? 終わったら話すってな!!? 肉体強化『神雷』!!?」

すると、如月の能力、『全ての力の原初を司る程度の能力』を使い、自分の体に雷を纏った。

……勿論、これを見た葵はと言うと、

「ヒツ!!?」

涙目になって、小さく叫び、ルカの後ろにガタガタ震えながら隠れた。

「……なあ、ルカ」

「……なんだ?」

「……葵って、雷苦手なのか?」

「……ああ。ただ、『苦手』じゃなくて『怖い』だな」

「……そうか」

歩とルカが、葵を見てそんな会話をしていたのは余談である。

「それから、龍剣『紫電』!」

すると、また能力を使い、剣に雷を纏わせた。

「……」

「うう……ヒック……」

ルカが無言で葵の様子を見てみると、本当に怖いようで、遂には泣

き出してしまった。

「よしよし。泣くな」

「これぐらいで泣くな。たかが雷だろ。子供か貴様は」

葵の様子を見て、人型になった鬼灯は頭を撫でて慰めている側で、そんな事をいう夢幸であった。

「その構え……居合いですね。でしたら、私は貴方達より離れて避けるまで!!?」

そう言っただけで本当に離れようとした早苗だが、如月はそんな事を関係なしと、肉体強化した脚力を使い、早苗に急接近した。

「なっ!!?」

「これで……終わりだ!!?」

そして、如月は早苗に対して峰を使っただけで、気絶させた。

\*\*\*

「霊夢!!?だめですから!!?」

「離しなさい、葵。私の怒りはまだ収まってないのよ」

「だからって、もう終わってるのですから諦めて下さい!!?」

弾幕ごっこが終わると、勿論、能力は解除され、雷が無くなったことにより泣き止んだ葵は、霊夢が早苗に近付き、まだ何かやろうとしているのを見て、すぐに止めに入った。

「何時もの霊夢らしくありません!!?落ち着いてください!」

「私はこれでも落ち着いてるわよ!」

「……」

葵は霊夢からのその言葉を聞くと、本当かどうか確かめる為に、一度、顔を見た。

……そして、霊夢を解放した。

「ありがとう。それから、彼奴を治してくんない?じゃないと、話が出ないから」

「うん、勿論だよ。最初からそのつもりだったからね」

葵は笑みを浮かべて承諾すると、早苗に近付き、能力を使って治し始めた。

「……それにしても」

「ん？どうした？」

「いや、葬は『雷』が駄目なんだな」

葵が泣くのを辞めたからといって、涙はちゃんと目に溜まっていた為、すぐに泣いていたことは暴露してしまい、理由を聞かれた。

その為、嘘を吐かずに説明した為、如月も理解した。

「まあな。……小さな時から、側で怖さから守ってくれる奴がいなかったからな」

「……」

鬼灯がそう説明すると、如月は悲しそうな顔をしていた。

「……ふああ」

「ん？どうした？凜華」

そんな時、ルカ達の後ろで立ったまま如月達の戦いを見ていた凜華から欠伸が漏れた。

「眠いのか？」

歩もまた、凜華にそう聞くと、凜華は肯定した。

「まあ。妾は長時間は此処に居れんからのお。妾は力の抑えが下手なのじゃ」

「そうか。なら、一旦、如月の中に戻っておいた方が良いんじゃないか？」

鬼灯はそれに納得し、凜華にそんな提案をするが、

「嫌じゃ」

何故か拒否された。

「え？何でだ？疲れてるんだよな？」

歩は驚き過ぎてそう言葉にする。

その質問に対しての答えが、

「妾が戻る時はぐ飯をたららふく食べた後じゃ!!？」

と、言った。

「なんだ、そのくだらない理由は」

「お主にとってはおくだらないかもしれぬが、妾にとってはくだらなかない問題じゃ!!？」

何だか、争いが起きそうな雰囲気醸し出す二人だが、歩と魔理沙

が仲裁に入り、事な気を終えた。

「あ、あはは……」

それを、早苗を治しながら一部始終を見ていた葵は苦笑いをしていった。

「んっ……」

「あ、大丈夫ですか？」

葵は早苗の意識が戻ったのを確認し、大丈夫な事も分かると、霊夢を呼んだ。

「……ようやく起きたのね。あんた」

「……」

早苗は自分が負けたのを自覚すると、泣きそうな顔をした。

「……私、負けたんですね。……このままだと、神奈子様達が……」

「やはり、そう言うことか。」

早苗のその一言で全てに合点がいった鬼灯の顔は、心配そうな素振りには無かった。

何と無くは分かっていた葵もまた同様である。

「早苗……」

すると、神社の中から声がし、出て来たのは、

「えっと、蛙の神様……じゃ無いですね。崇り神ですね」

葵は直ぐにその神の正体を看破した。

葵はそういう事に対しての知識は、賢者達にも劣らない知識量である。

「貴女は？」

「私かい？」

その蛙にも見えなくない姿をしている、小柄な金髪の女の子は名乗った。

「私は『洩矢 諏訪子』さ」

『守矢神社』の神、二柱の内の一柱。『洩矢 諏訪子』だった。

## 第百十一話

葵は神社内から出てきた祟り神、諏訪子を見つめていた。

この状況を見た諏訪子が何か言うかもしれないと思い、話さないようにしているのだ。

「えっと、何で早苗はやられてるわけ？」

諏訪子はそんな疑問を目の前にいた葵に投げ掛けた。

「それは、霊夢と如月さんが早苗さんと弾幕ごっこをした結果と言う他ありません」

「ふーん、となると、早苗は負けたんだね？」

諏訪子はそう言うと、早苗が少し起き上がった。

「すみません、諏訪子様。負けてしまいました」

「ん？何で謝るの？早苗。私は怒ってないよ？」

諏訪子は首を傾げながらそう言うも、早苗からは謝罪の言葉がまた漏れた。

そこから少しの間、沈黙が訪れた。

「……さて」

それを払拭するかのように鬼灯が口を開けると、神社の屋根の方を向いた。

「そこにいる奴……神奈子だろ？出てこい」

すると、本当に屋根にいた者が、飛び降りて、姿を表した。

その姿は、諏訪子とは対照的に身長は高く、背中には大きな注連縄があり、髪の色が青色の女性である。

「神奈子さん、ですか。となると……『軍神』でしょうか」

「ああ、それは少し違うよ」

葵が呟くように言った言葉は、近くにいた神奈子には丸聞こえだったようだ。

「確かに私は『軍神』だけど、どちらかと言うと『神霊』だね」

『『神霊』？』

神奈子の口からでた単語に魔理沙は首を傾げた。

そんな魔理沙を見た霊夢は少し溜息を吐くと、簡単に説明した。

『神霊』って言うのはね、元となった霊がいる神の事よ。まあ、一体、何が元になってるかは知らないけど」

霊夢はそう言うのと、神奈子を見た。

「で？あんたは何しに来たわけ？また戦いに？」

霊夢がそう聞くと、神奈子は少し笑った。

「ハハッ!!？それは確かに面白そうだが、今回はしないさ。で？あんたは何か、私達に説明することがあるみたいだね？」

神奈子が霊夢を見てそう言うのと、霊夢は心底面倒臭そうにしながらも説明し始めた。

葵はそれを見ると、一度その場を離れ、ルカ達の近くに移動した。

「ふう、これで終わりだね」

「だな」

「……？あれ？凜華さんは？」

葵はその場に凜華が居ないことに気付き、如月にそう質問した。

「ああ、凜華なら一度戻ってるんだ。最初は『まだ戻らん!!？』とか駄々こねてたが、想起が宴会の時には呼ぶって言うのと素直に戻ってくれたんだ」

「そうだったんだ。ありがとうございます、想起さん」

葵はそう想起にお礼を言っ、顔を見ると、何故か驚いていた。「？」

葵は周りを見て見ると、歩と夢幸以外のその場にいる全員が驚いている顔をしていた。

「え？」

葵はその様子を見ても全くピンとこず、何事かと思っていると、

「今……葵、タメ口で話したか？」

ルカからのその言葉にハツと思い出し、慌てて訂正し始めた。

「ち、ちちち、違います!!？これは間違いで……いや、間違つてないけど……って、またタメ口で話してしまった!!？ごごご、ごめんなさい!!？」

もう慌てすぎて頭がパニックになったのだろう。謝らなくても良いのに謝った葵を見て、少し笑った如月。

「いや、別に謝らなくても良い。そのままタメ口で頼むな。葵」

如月からそう言われると、少し躊躇いがちではあったが頷いた葵であつた。

「……一歩前進、か。なんだか、離れていく子供を見ている親の様な気持ちだな」

「年寄り臭いぞ。鬼灯」

「少し、黙れ。折角の感動が台無しだ」

鬼灯とルカがちよつとした争いを側で起こしそうになっていたが、それは近くにいた想起によつて諫められた。

\*\*\*

そして、神社抗争から次の日。

葵達はまた『守矢神社』に来ていた。

理由は、此処で宴会が開かれるからである。

ちなみに、宴会の日には何処から聞いていたのか分からないが、文々。新聞に記載されていた。

「それにしても、あの鴉。本当に何処から聞いていたんだ……」

「さあな？まあ気にしない方が良いんだろう」

ルカと鬼灯がそう話していると、想起と如月が近付いてきた。

その側には凛華もいる。

「?どうした?如月。想起」

ルカが首を傾げて聞いて見ると、周りを見てから如月が聞いてきた。

「なあ?葵を知らないか?さつきから見渡して見ても居ないんだが……」

その質問には鬼灯が答えた。

「ああ……葵なら、この前会った夢幸とか言う奴が居ただろ?彼奴に連れられて行つたよ。神社からあまり離れるなど釘を指して置いたから大丈夫だろう」

鬼灯はそう言うと、近くに置いていた日本酒を盃に入れ、飲んだのだつた。

\*\*\*



場面は変わって葵と夢幸。

葵は夢幸の後を追う様にして歩いていると、夢幸が止まったのを見て、歩くのを辞めた。

「あの……何の話でしょうか？」

葵は首を傾げながら聞くと、夢幸は葵の目を見ながら質問した。

「お前、自分に自信が無い人間だろうか？」

「……」

夢幸からの問いに、葵は戸惑わなかった。

何故なら、気付いていたからだ。

夢幸が自分に自信を持っていないと見抜いていたことを。

「沈黙は肯定と取る。だから、俺からの意見を言おう」

夢幸はそう言うと、葵の顔を、目を見ながら言葉に出した。

「自分を卑下するにもほどがある。貴様は自分の力に悪感を感じているようだが、本当にそうなら貴様が人を気遣えるわけがない。貴様はただマイナスに自分を貶めているだけだ。そんなことでは自分も誰も救えないだろう？人を思いやれる貴様の様な優しい者が閉じ籠っている。それが今回の異変の中で一番くだらなかつた」

夢幸は自分が思ったことをそのまま葵に言った。それも、ドストレートに、である。

普通はそんな物言いに對して怒りを覚えるか、または泣き出すかの何方かかもしれない。または、他の選択肢があるかもしれない。

ただ、『微笑む』という行為はしないだろう。

しかし、夢幸の目の前にいる葵は夢幸に對して微笑んでいた。

「……なんだ？」

夢幸はそんな葵に對して怪訝な表情で見ている。

それに對しての葵の解答は、

「いえ、夢幸さんは本当に『優しい方』だと思ひまして」

「はっ。」

流星にそんな解答が来るとは思っていなかった。

一度、魔理沙に言われたことがあるとはいえ、今此処で、この状況で言われるとは思っていなかったのだろう。少し驚いたような顔を

している。

「俺が……優しい？何を馬鹿なことを、「優しくない方は普通、こんな風に人に対して言ったりしませんよ」……」

夢幸は反論しようとしたが、葵からそんな指摘を受け、黙ってしまっただけ。

「他人に対して、人に対して優しくない人は、他人の事には無関心です。他人の駄目な所を指摘しません。でも、夢幸さんは指摘してくれました。もしかまだ優しくないと言うなら言い方を変えて言わせていただきます。夢幸さんはお人好しの方と」

「……」

「でも、私はそうは思えません。私は貴方が認めずとも、私の認識は『優しい方』です。これを変えることはありません。……指摘してくださり、ありがとうございます。また何かありましたら頼らせていただきます。何かアドバイスを頂きたい時もあります。ですが、夢幸さん何かあった時は頼ってくださいね。……何でもかんでも、一人で解決しないでくださいね。一人では解決出来ないこともありますから」

葵は最後に一言、「夢幸さんは分かっている様ですので、あまりその辺の心配はしていませんが……」と言うと、最後に頭を下げ、宴会会場に戻って行った。

「……」

「クスクス、どうだった？葵は」

「!?？」

夢幸が葵が移動した方を見ると、急に後ろからそんな声が聞こえてきた。

それに驚いた夢幸は直ぐに後ろを振り向くと、そこには金髪ロリがいた。

しかし、その雰囲気からはカリスマが感じられるが。

「クスクス、初めまして。私はレティシア・スカーレット。妖怪の賢者をやっているわ。よろしくね♪天才さん」

レティシアはいつもと変わらない笑みを夢幸に向けた。

「……俺が天才なのは認めるが、俺にはちゃんとした名前がある」

「クスクス、そうね。『時雨 夢幸』っていう名前がね♪」  
「!?!?」

夢幸はまた驚いた顔をした。

「クスクス、でも、私は貴方の事を『天才さん』って呼ぶことにするわ」  
「……何故だ?」

「クスクス、別に意味はないわよ。ただ、何と無くね。それから、どうしてそんなに驚いたのかしら?天才さん。もしかして……『気配を感じられなかった』のかしら?」

レティシアは何時もの笑みを向けながら夢幸に質問した。

対して夢幸は、何も答えなかった。

何故なら、

(どういうことだ?何故、俺はこいつの気配を感じられなかった?後ろにいたのから確実に感じられた筈。なのに何故……)

「クスクス、その質問に答えてあげましょう」

レティシアがまるで自分の考えていることなどお見通しと言う様な発言をしたことにたいして、少なからず驚いた夢幸。しかし、それに関しては表に表すことはなかった。

「クスクス、私は吸血鬼なの。吸血鬼は夜を統べる王。気配を完全に消すことなんて容易いわ」

「……お前、本当に唯の吸血鬼か?」

夢幸がそう質問をすると、レティシアは、

「クスクス、さあ?私が唯の吸血鬼かどうかは貴方が考えている通りで良いわ」

と、笑いながら言った。

だからなのだろう。その顔からは何を考えているのか分からない。読み取れないのだ。

「クスクス、それじゃあ、行きましようか、天才さん♪あ、そうそう。私は殆ど、紅魔館にいるのだけど、用があつたら訪ねてね♪」

レティシアは最後にそう言うと、今度は墓が移動して行った方向へと移動して行った。

結局、最後の最後まで笑みしか見せなかったレティシアであった。

「……」

夢幸はそんなレティシアを少し睨みながらも、宴会会場へと移動して行った。

## 第一百十二話

葵が宴会会場に戻ってみると、既に酔い潰れている者が何人かいた。

「は、早いですね……」

その酔い潰れる速さに若干引き気味な葵であったが、直ぐに戻すとそのまま台所の方へと向かった。

……その際、凜華と幽々子が大食い勝負の様なことをしていたのを記載しておこう。

\*\*\*

葵が台所の所までくると、歩が立っていた。

歩は自身の能力のお陰で疲れることが無い。その為、宴会の料理を作る役を引き受けてくれたのだ。

「歩さん」

「あ、葵。どうしたんだ？」

葵が歩に声を掛けると、歩は一度作る手を休め、葵を見た。

「手伝いに来ました。一人だと大変ですので」

「大丈夫だ。だから、葵は宴会の方で楽しんでてくれ」

「しかし、それだと歩さんが楽しめません」

葵は『絶対に意見は変えない』という様な顔で歩を見た。

歩はその顔を見て、少し呆れた顔をするも、その手伝いを受け入れた。

「さて、次は何を作るかな？」

「そう言えば、此処に来る時に凜華さんと幽々子さんが料理を沢山食べてましたけど、お団子が既に無くなってましたね。多分、凜華さんが全て食べたのではないのでしょうか？」

「そうか。なら、団子作るか」

「そうですね」

葵と歩はそう話すとさっそく料理を作り始めた。

……歩は同時進行で別の料理も作っていたが。

く少年少女料理中く

料理を作り終えると、まだ作らなければならぬ歩の代わりに葵が料理を運んできた。

「あら？来たわよ、凜華」

「な!?それは団子ではないか!?早く持って来るのじゃ!!?」

「食べてもらうために持つて来たんですから勿論ですよ」

葵は少し苦笑しながらも団子を凜華達の前に置いた。

すると、不思議な事に、その料理は一瞬にして無くなった。

「……え」

「やはり、団子は良いの。しかし、まだ足りんな」

「そうね。私もまだ食べ足りないわね」

この二人の胃袋はブラックホールか何かなのだろうか？

「葵、小唄達が来たぞ」

「!?」

葵はその名前を聞くと、『遂にこの時が来てしまったのか……』という様な雰囲気醸し出した。

葵からしてみれば来て欲しくない時間。他からしたら来て欲しかった時間である。

「ほら葵!!?私達はあなたの歌を楽しみにしてるんだから歌いなさい  
〜!!?」

「霊夢、もう酔ってるよね?絶対」

「酔ってないわよ!!?」

葵は霊夢からのそんな反応を見て少し溜息を吐くと、また台所へ移動し、作られた料理と共に酔い覚ましの水を持ってきた。

「凜華さん達、どうぞ。それから、はい、霊夢。お水だよ」

「おお!!?来たのじゃ来たのじゃ!!?」

「ありがとう」

そして、葵はもう覚悟を決めると、全員の日(幽々子と凜華以外)が集まったのを期に、歌い出した。

勿論、小唄の演奏で。

「〜♪」

その歌声は、その場にいた者全てを魅了し、全員が聞き惚れるほど

の歌だったのをここに残しておこう。

\*\*\*

場所は変わって守矢神社の屋根。

そこにはレティシアが一人、座っていた。

「……やっぱり、余計な光が無いと、夜空もちゃんと見えるわね」

レティシアはそう言うのと、結界を張り、此方もまた歌い始めた。

勿論、結界を張っているために、誰にも聞かれていないが。

ただ、聞いていたものがいたら、その歌の感想を聞かれるときつと  
言うだろう。

『寂しそうな、それでいて悲しそうな歌声』だったと。

「……クスクス、紫、居るのでしよう？」

レティシアはそう言つて、自分の背後へと声を掛けると、隙間が開  
いた。

中にはお馴染みの紫がいた。

「……貴女、今「忘れなさい」……分かったわ」

それから少しの沈黙の後、紫が口を開いた。

「レティシア。私ね、新しい式を得たのよ」

「クスクス、そうなの？今度、機会があれば会いたいわね♪」

「ふふ、貴女なら何時でも会えるじゃないの」

「クスクス、まあね♪」

紫とレティシアはそんな風に話しながら、何時の間に出したのか日  
本酒を一緒に飲んでいた。

そして、宴会は終了した。

\*\*\*

次の日の神無月神社。

「如月さん、また来てね」

あの後、結局はタメ口になったのはいいが『さん付け』だけはどう  
しようもないらしく、形的にこれで落ち着いた葵。

それでも、まだ固い様に見えるが。

「ああ、また来るな」

「その時には凜華の為に団子でも用意しておこう」

「なんか、ごめんな」

如月は本当にすまなそうな顔をして謝るが、葵が構わないと言った。

「それじゃあ、また来るな」

「うん、待ってるよ」

「待ってるからね。如月さん」

「ああ」

そして、如月は天羽々斬を使って次元を斬り裂き、元の幻想郷へと戻って行った。

「……さて、少し寂しいけど、また会えるから大丈夫だよな」

「ああ」

葵はルカにそう質問し、そんな返答が返って来たのを聞き、そのまま神社内へと帰って行った。

\*\*\*

「……」

「?どうしたの?レティシア」

「……いえ、気にしないで。パチユリー」

「……分かったわ」

紅魔館の図書館。

その中にある椅子に座って少し考え事をしていたレティシア。

その考えて居る内容は、彼女にとっても、そして紫にとっても感化し難い問題であった。

(もし、この先この未来通りになるなら……私、殺しかける事になるかもしれないわね。出来れば、もう一つの方の異変から来て欲しいのだけれど……)

レティシアが見た二つの未来。

一つは、空が緋色に染まる異変。

一つは、地底での異変。

彼女が望む異変は後者だが、このまま行けば先に来るのは前者である。

「……最悪、私が未来を変える必要があるわね」



レティシアはそう呟くと、読書に集中し始めた。  
……この先の未来は、まだ決まらない。

## 想起の日常1 第百十三話

想起が幻想郷に戻って来てそれなりの時間が経っている。

そんな想起の朝は、何時も葵の家事の手伝いから始まっている。

「葵、ほうれん草切ったよ」

「あ、ありがとうございます、想起さん。それをおひたしにするのでお皿に入れた後、だし醤油をかけてくれませんか？そのあとに鰹節もお願います」

「分かったよ」

想起は了承すると、葵の指示通り、切ったほうれん草を器に盛り付け、だし醤油を掛け、最後に鰹節をあしらった。

「葵、次は何をすればいいの?」

「あ、もう大丈夫ですので鬼灯を呼んで来ていただけませんか?」

葵からの言葉にまた了承すると、裏庭の方で剣の練習をしている鬼灯を呼びに行った。

その途中には、ずっと咲き続ける桜がある縁側を通ることになる為、必然的に見ることとなる。

「……やっぱり、この桜はずっと咲き続けてるんだね」

（鬼灯達の考察だと、これは『幻想となった桜』だったな）

「うん。外の世界に『咲き続ける桜』は無いからね」

その桜は、花卉が風によって散ってしまおうが、その度に新しく花卉が咲き、一生散ることのない桜となっている。

だが、その為か庭が少しピンク色に染まり始めている。

「……そう言えば、葵がいつか大掃除するって言ってたよね」

（ああ。確か、三日後だったな）

普段、葵は霊夢の方に行つて境内の掃除をしたり、他の所へ行つたりしているため、此処まで手が回らず、放つたらかしにする結果となっている。

ただ、葵の性格ではそれがあんまり良い気分ではない様で、時々で

はあるが大掃除をすることとなっている。

大掃除の内容が桜の花弁を掃く事だが、それは仕方のないことだ。

「……」

(……おい、想起。葵から頼まれてたことがあるだろ?)

「あー鬼灯を呼んでこないと!!?」

「ん?私はどうかしたのか?」

「!??」

想起が碎牙からの指摘を受け、ようやく目的を思い出した時に、後ろから目的の人物である鬼灯が呼び掛けてきた。

それも急にである。

その所為か、少し鬼灯から離れてしまった想起であった。

「び、吃驚した……驚かせないでよ、鬼灯」

「む?驚かせるつもりはなかったんだが……すまん、今後は気を付けておこう」

鬼灯の今の姿は、修行の所為でかいた汗を洗い流す為にお風呂に入っていた様で、少し頬が赤くなっており、姿もいつもの陰陽服ではなく、白の着物を着ていた。

「あれ?鬼灯も持ってたんだ。着物」

「お前、持っていないと思ってたのか……ちゃんと持っていたさ」

鬼灯は苦笑しながら答えた。

「あ、ごめん。だって、何時もは着てないから……」

「まあ、そうだな。大抵は朝食が出来上がる前に風呂に入って汗を流して、一時だけ着物を着ている状態だからな。あまり見ることもないだろう」

「そうなんだ」

想起は、葵が何故今回、鬼灯が何時もより遅れるのか気付いていたのかという疑問を心にしまった。

何故なら、何と無く分かるからだ。

能力、それから勘だということに。

く少年少女移動中く

「……ようやく来たか」

想起と鬼灯が居間に来ると、そこには既に葵とルカが座って待っていた。

「あ、やっぱり今回は遅めに入ったんだね。鬼灯」

「ああ。ちよつと修行の方に集中しすぎた所為でな」

「そういうえば、何で最近修行をよくしてるの？」

想起が何気ない質問をしてみると、鬼灯は少し嬉しそうにしながら、

「剣で試合をしてみたい奴がいるからだ。この前来ていたが、それ所  
じやなかったからな」

と言った。

「そっか。あ、食べようか」

「そうですね、それじゃあ……頂きます」

全員が揃った所で葵が言うと、全員、食べ物に対して感謝を込めて  
言った。

\*\*\*

「さて、今日はどうしようかな？」

想起はさつきまで、葵の手伝いとして川魚を取っていたが、今はも  
う終わっている。

そして、葵達はそのまま神社の方へと行ってしまったが、今回は何  
と無く一人で行動しようと考えていた想起は着いていかなかった。

「碎牙は何処か行きたい所はある？」

(ない。想起の好きな様にしろ)

想起は碎牙にそう問いかけるが、碎牙からはそんな返事が返ってき  
た。

「そうだな。……それじゃあ、ちよつと行ってみようかな。『紅魔館』」

そして、想起は行き先を決め、紅魔館の方へと飛んで行った。

少年移動中

想起が紅魔館に着くと、いつも通り、美鈴が立った状態で寝ていた。

「あ、相変わらずだね……」

想起が苦笑しながらその光景を見てみると、美鈴の頭にナイフが数  
本刺さった。

「え!?」

流星にその痛みの所為で美鈴は起きたが、状況を把握した所為で、今の美鈴は涙目状態である。

「美鈴? 貴女、またサボりかしら?」

「い、いえ咲夜さん。私はち、ちゃんと起きてましたよ……?」

美鈴は少し引きつった笑みを咲夜に見せながら言うが、咲夜の黒い笑みが解けることはなかった。

「美鈴。貴女には後でお説教よ」

「そ、そんな」

「後になっただけマシと思って欲しい所ね。それよりも……」

咲夜はそういうと、ナイフを自分の脚に着けているナイフホルダーに入れると、想起に対して頭を下げた。

「ようこそ、おいで下さいました。紅魔館へ」

「え?…え?」

「……さて、此処までで良いわね」

さつきまでの瀟洒な姿勢はどこへ行ったのか、イキナリ雰囲気を変えた咲夜。

「それで? 貴方は何の様で今日来たのかしら?」

「あ、今回は図書館の方で本を読もうと……」

「貴方も神無月の巫女も物好きね。此処に来るたびに本を読んでは借りて行ってるわね。まあ、どっかのネズミと違って、返してくれるから文句は言わないけれど」

「あ、あはは……」

想起はそれが誰のことを言ってるのか知っている為に、乾いた笑しか出てこなかった。

「……でも」

しかし、今回は咲夜の雰囲気少し違った。

「今の妹様は狂気状態。入ったら殺されるだけよ」

「え?…で、でも……」

「ダメよ」

咲夜は想起を行かせまいと止めていると、

「クスクス、咲夜。もう大丈夫だから安心しなさい」

「レティシア様」

レティシアが何時もの笑みを浮かべて咲夜の後ろに立っていた。

咲夜は何時ものことなのか対して驚いた様子を見せなかったが、想起は違った。

「うわ!?？」

相当、驚いていた。

それはそうだろう。全く気配がなかったのだから。

想起からしたら、イキナリ声をかけられた時の人間そのものだ。

「もう大丈夫……ということとは、妹様の狂気は……」

「クスクス、ええ。ちゃんと戻ったわ。ついでに狂気も封じたから安心なさい。もう出てこないでしょう」

レティシアがそういうと、咲夜は本当に嬉し涙を流し始めた。

美鈴も同様で、嬉し涙を流していた。

「……」

想起はその光景を咲夜と美鈴より少し後ろで見て、嬉しそうに笑みを浮かべて見ていた。

「あら？レティシア様。もう教えたのですか？」

「クスクス、ええ、もう教えたわよ。マリア」

「……え？」

想起はレティシアから出た意外な名前に、顔を声がした方向に向けると、マリアと同じ白のフワフワな髪をした、不思議の国のアリスの様な少女がいた。

その姿だけを見たらマリアなのだろうが、しかし、雰囲気はマリアとは真逆であった。

「……あら？貴方」

「あ、はは、初めましてー!」

マリアは想起の存在に気付き、声を掛けるが、想起からしたら、雰囲気が変わっているマリアに対してどう接すれば良いのかわからず、結局は戸惑った状態で挨拶してしまった。それも、初対面の時に使う挨拶を。

「……私、貴方と初対面というわけじゃないのだけど？」

「う、ご、ごめんなさい」

「……別に謝らなくて良いわ」

「マリアはそういうと、そのまま背を向けて紅魔館に戻ろうとしたが、

「クスクス、マリア。折角だから想起を図書館に連れて行ってあげてくれないかしら？」

「……分かりました」

「マリアはそれに承諾し、そのまま想起を図書館まで案内することになった。」

\*\*\*

歩き始めて数分経った。

しかし、その間、何方と話すことはなかった。

つまり、気まずい雰囲気なのだ。

「……あ、あの」

「此処で想起が少し勇気を出して質問してみた。」

「本当にマリアさんですか？」

「ええ、私はマリアよ。他に誰がいるというの？」

「え、でも、雰囲気……」

「あつちは私が狼に封印されてる時の『私』よ。本来の『私』は今貴方が話してる私よ」

「……」

「想起は何故封印されているのか聞こうとしたが、マリアから拒絶する雰囲気が出ていることに気づき、聞くのを断念した。」

その後、パチュリーに許可を貰い、本を借りると神社へと戻って行った。

## 第百十四話

想起は人里に一人で降りていた。

理由としては、団子を食べにである。

「はあ、それにしても、葵も来れば良かったのにね」

（仕方ないだろ。今回、客人が来るって事で神社内を少し綺麗にしてるんだからな）

「大掃除の二日前なのにね」

（それも仕方ないだろ。諦めろ）

想起は自分の中にいる碎牙と会話しながら移動していると、思ったよりも早めに着くことが出来た。

「あ、着いた。すみませくん」

「はいはい、いらっしや……おやつ？あんた、もしかして、昔来てた想起君かい？」

「あ、はい。覚えてくれてたんですね」

「あたしや記憶には自信があるんだよ。それで、何を食べたいんだい？」

「うーん、そうだな……」

想起がそうやって悩んでいると、何故か後ろで何かが捨てられる様な音がした。

それが唯のゴミとかの音なら良かったのだが、ゴミではそんなに大きな音はしない。むしろ、大きな荷物が落ちるような音だった。

想起はその音に驚いて後ろを振り向いてみると、見覚えのある姿が居た。

それは、この前、別の幻想郷に行った時に、妹紅の店で働いていた男性だった。

「……え、何でこの人が……」

「おや、驚いた。……外来人かい？」

「いえ、外来人じゃないですよ……元はそうかもしれないですけど」

想起はそう言うと、その男性の元に近付いた。

「大丈夫ですか？」



「うっ……」

その男性がそこで少し起き上がり、周りを見る様な仕草をし、想起を見ると……、

「……」

「ど、どうしたの？」

「……お前、何処かで会った様な……」

「はい、会いましたよ。この前、そちらの幻想郷の妹紅さんのお店で。僕はカルボナーラを食べてましたけど」

「!? お前、カルボナーラ知ってるのか!?」

「そりゃあ、僕も元は外来人ですから」

想起がそう説明すると、岩槻は何かを考え始めた。

「? どうしました?」

そして、考え始めてから数秒後。

「……お前、もしかして、この前俺の大切な木刀を返しに来てくれた水色の髪の女性の連れの一人か?」

「えっ、うん」

想起は「よく覚えてるなく」と、感心した顔で男性を見ると、その男性が立ち上がった。

「そうか。俺は『岩槻 静弥』っていうんだ。お前は?」

「あ、僕は幻現想起だよ。よろしくね、岩槻さん」

「ああ、よろしくな」

岩槻はそうやって挨拶していると、後ろに気配を感じ振り向いてみると、お婆さんがいた。

「何だ、想起くんのお友達かい? それにしても、何であんた、ああやって来たんだい?」

「え?」

「よくは見てなかったけど、多分スキマが開いて、そこから放り投げられたんだと思うよ。じゃないと、あんな音は出ないしね」

「……」

そこで岩槻は少し固まり、

「紫の所為か……!」

と、叫んだのだった。

\*\*\*

岩槻と想起はその後、お団子屋さんで一緒にお団子を食べ（岩槻の分は想起が払った）、岩槻からの要望で『神無月神社』へと帰って来ている。

「此処が葵の神社だよ」

「此処が？……綺麗にされてるな。真面目なのがよく分かるな」

「あ、あはは……」

想起は岩槻の言葉に苦笑いを浮かべたが、そのまま神社内へと入った。

「葵く、ただいま」

しかし、何時もなら返してくれる返事も無く、シーンつとしていた。

「……留守みたいだぞ？」

「あれ？なんで……あ、もしかして急な用事かな？となると、多分、博麗神社の方に移動したんだね」

「そうなのか？」

「うん。葵は霊夢の代わりに色々してるからね。境内とかの掃除とか」

想起がそう説明すると、岩槻も苦笑いをしていた。

そして、直ぐに博麗神社の方へと移動し始めた。

く少年移動中

想起達が神社に着くと、霊夢と魔理沙、葵、ルカ、鬼灯以外にもう

一人、早苗が居た。

「あれ？早苗さん？」

「あ、想起さん……つと、あの時の」

「ん？あんた誰よ？葵の知り合い？」

「霊夢さん。知り合いだからこの反応じゃないんですか？」

霊夢と早苗、そして葵は何かを話し合っていた様だ。

何時もは境内を掃除する為に持っている竹箒を葵は持っていないなかつたのだから。

岩槻は霊夢達に自己紹介をした。

「へえ、別の世界のね」

「ん？驚かないのか？」

「もう既にそんな存在を見てんのよ」

「私もです」

二人は全く驚かずに岩槻の存在を受け入れていた。

「そ、そうか……あ、えっと、葵だったか」

「はい。何でしょう？」

岩槻は葵に頭を下げた。

「えっ!?？」

「この前は俺の木刀を返してくれてありがとうな」

「いえ、そんな、御礼を言われるような事はしていませんから頭を上げてください」

葵からのそんな言葉をうけた岩槻は頭を上げた。

「それでだ。俺は葵に恩返しをしたいんだ」

「お、恩返し……ですか？」

「いや、良いことはするものですね。ね？霊夢さん」

「早苗、何よその嫌味の様な言葉は」

葵のすぐ近くにいる霊夢と早苗が何やら喧嘩をしそうな気配がするが、ノアを撫でているルカが睨み付けた事により収まった。

「恩返しなんて、私、そんな大それたことはしていませんよ。自分が満足する行動を取っただけですから」

「いや、それでもだな……」

葵と岩槻はお互いの意見を譲らず、ずっと平行線を辿っていた。

「あく、これはずつと終わらないわね」

「どうしますか？これだと、分社の件での話し合いが出来ませんよ？」

「そう言われてもな。葵も何か決定的な事を言わないと引かないだろうしな……」

鬼灯がそう話す近くで、岩槻が葵に対して、

「いや、それだと俺の気が収まらないんだ。頼む」

と、また岩槻は葵に対して頭を下げた。

「……」

その言葉に対して葵は口を閉ざし、そして溜息を吐いた。

「……では、二日後、また来ていただけませんか？」

「?二日後?」

「ああ、手伝わせるわけ?大掃除」

「手伝わせるって……まあ、そうなってしまいうんですかね」

葵は苦笑しながらそう言った。

「大掃除って、何でだ?」

「実は、あの神社にはずっと咲き続けている桜があるんです」

「えっ」

「でも、その桜も散らないわけじゃないから、その桜が咲いてる庭がピンク色に染まってきているんだ。ただ葵の神社は広いし、此処にも来たりしてあんまり掃除出来ないからって事で時々大掃除をするんだ」

「なるほど。その手伝いか……分かった。手伝おう」

「!??良いんですか?」

「ああ」

「すみません、ありがとうございます」

葵はそうやって岩槻に対して頭を下げた。

「いや、頭を上げてくれ。御礼もいいから。俺がしたいことだしな」

岩槻がそう言うのと、その背後の方にスキマが開く気配がした。

「あ、スキマが」

「紫が返してくれるみたいね。一旦、帰ったら?」

「ああ、そうする」

岩槻はそう言うって帰ろうとするが、葵が呼び止めた。

「ん?どうした?」

「岩槻さん。そちらの霊夢を大切にしておいて下さいね。岩槻さんの

『奥さん』なんですから」

「……え、なんで知って」

「それはまた次回に説明しますよ」

「というか、あんたとそっちの私は結婚してるわけね?だったら、不幸

にしたら私からの『夢想天生』がくることを覚悟しなさい」

「それは嫌だな。分かってるさ」

岩槻はそう言うのと、そのまま元の世界へと戻って行った。

「それにしても、葵、珍しいね。断らないなんて」

「本当は、そこまでもらう為に返しに行ったわけじゃないんですけど、ああ言われてしまうと、どうしても断りずらくて……」

「成る程」

その後、早苗と分社の件を話し合い、それぞれの分社を建てることに決まったのだった。

## 第百十五話

岩槻が元の場所へと戻ってから二日後。

葵の神社には結構、沢山の人物が来ていた。

「み、皆さん……なんているんでしようか？」

葵の視線の先には、霊夢、魔理沙、早苗、そして霖之助がいる。

ただ、それだけではなく、歩、夢幸、如月、岩槻、そして龍がいた。

しかも、何故かアリス、慧音、妖夢、そして見覚えのある一人と見覚えのない二人がいた。

一人は水色のコートの様に長い服を着て、トランクを持っている少年。

一人は全体的に白い男性。その近くには妖夢と同じ様な相棒がいる（色は金色）。

一人はピンクの髪に二つのお団子し、片方の手を包帯でグルグル巻にしている女性。

「えっと、岩槻さん、歩さん、夢幸さん、『華扇』さんは分かるのですが、他の方はどうやって知ったのですか？」

葵が少し首を傾げながら聞くと、如月と龍は、

「レティシア（さん）から聞いた」

との答えが返ってきた。

「私は魔理沙から聞いたのよ」

と、アリスは答えた。

「私は鬼灯様から頼まれて……」

と、妖夢が説明すると、葵は鬼灯の方に顔を向けた。

「鬼灯……」

「これもいい修行だと思うぞ？まあ、妖夢は普段から白玉楼の掃除をしているから、あまり修行にはならないかもしれないが」

鬼灯が葵に対してそう説明すると、今度は慧音が説明した。

「私は想起からな」

「想起さん……」

「だって、人数が多い方が良いでしょ？」

想起からの答えを聞いた葵は、少し溜息を吐くと、見覚えのない二人を見た。

「それから、そちらの方達は……」

「俺は『カロード・ペインテイク』だ。よろしくな」

「俺は『浄土 永久』だ。よろしくな、葵」

「そうですか、よろしくお願いします」

葵は二人の顔を見て挨拶をした。

それがマナーだと知っているから、顔を、目を見て挨拶した。

その結果、過去を見ることになったが。

「……」

「ん？なんだ？」

葵は永久の顔を見ると、永久は訝しげに見た。

「あ、いえ。……いえ、なんでもなくはないですね」

「……」

葵は苦笑いをしながらそう返した。

「すみません、永久さんの過去を見てしまいました」

「葵……」

葵が永久に対して頭を下げて謝る姿を見た如月は、アレから成長していたことに対して嬉しく感じていた。

「……葵の能力の所為、だったよね」

「ああ、そうだけ」

「……何で……」

「香霖……」

霖之助は、葵の悩みを見抜けなかった自分の不甲斐なさから自分を責めたが、

「霖之助。貴様、自分を責めて何になる？」

「……夢幸」

「お前は確かに、今まで葵の事を知ろうとしていなかったかもしれない。しかし、それは葵が巧みに隠していたからだ。それにお前が気付けなかっただけだ。なら、今後は気付ける努力をするべきだろう？こんな事にも気付けないのか？」

「……」

霖之助は一旦黙ると、夢幸に礼を言った。

「すまない、目が覚めたよ。ありがとう、夢幸」

「ふん、礼を言われることはしていない。あまりにもくだらな過ぎて見ていられなかつただけだ」

夢幸はそう言うと、黙ってしまった。

それに対して魔理沙は「照れてるんだろうな」とか、考えていたりする。

「私の事を知らない人もいますね。私は『茨木 華扇』と言います。今回はよろしくお願いします」

その後、それぞれ知らない相手と挨拶した後、大掃除へと移行した。

↳それぞれの部屋↳

「うーん、やっぱり皆さんが来る前にやっておくべきでしたね……」

葵は自分の部屋を片付けていたが、意外と知らないものがあつた為に悩んでいた。

ちなみに、大体は大きくなってしまった為に着れなくなった服が多い。

だが、言っておこう。この部屋は比較的少ない方であると。

何せ、いらぬものが服しかないのだから。

ルカの部屋も同様で、小さくなつてしまった服を捨てようとしていた……が、

「……」

ルカはある服を手にとつてじつと見ていた。

その手に持っている服には、大量の血が着いている。ただ、時間が経過している為に、血の色は赤から黒に変わつてしまっているが。

「……これは捨てれないな。自分の『罪』を忘れない為にも」

ルカはそう言うと、その服をまた箆笥の中にしまいこんだ。

鬼灯の場合はそれこそ無かつた。

捨てるものが全くなかつた。

せめてあるとしても、鍛錬の為に使つていて、壊れてしまった竹刀だけである。



「……これだけならまだマシか。どっかの魔法使いと比べると」

そして、想起の部屋はサッパリとしていた。

布団、机、筆筒と一通りの必需品が揃っている状態で、その他に本棚もあったりする。

「うーん、別に捨てるものはないね。葵達の部屋には入れないから、他の所を……」

想起が移動しようとする、魔理沙とバツタリと会った。

「……あ」

「?どうしたの?魔理沙。掃除場所、違うよ?」

「あ、えつとだな……」

魔理沙はそう言いながら、手を後ろにして何かを隠す仕草をしている。

「……魔理沙」

「な、何だぜ?」

「一体、何を隠してるの?」

「!?そ、それはだな……」

魔理沙はしどろもどろになりながら誤魔化そうとしているが、その所為で注意を怠った。

想起は魔理沙が持っているものが何かを直ぐに分かった。

それは、この神社にある鬼灯が読んでいた本である。

「……それ、鬼灯のだよ。なんで、その本を魔理沙が持つてるのかな?」

「……」

想起は黒い笑みを魔理沙に向けながら問い詰めた。……すると、

「……にっ」

「にっ?」

「逃げるが勝ちだぜエエエエエ!」

「あ!??こら、待て!!?」

想起はそう魔理沙が盗んだ本を取り返す為に魔理沙を追い掛けた。まだまだ大掃除は終わらない。

## 第一百十六話

く桜がある縁側付近く

魔理沙の叫び声はこの場にいた夢幸、龍、慧音、如月の所にも届いていた。

その叫び声から魔理沙が何をしたのか大体想像出来た夢幸と如月は嘆息した。

「はあ、またか」

「また彼奴はくだらないことをしたのか」

「？魔理沙は何かしたのか？」

「今の声からして、したんだろうね」

慧音と龍が何事かと首を傾げていると、その問題である魔理沙が丁度、縁側を通った。

その時に、慧音は目敏くも見つけることが出来た。

魔理沙が持つてる本を。

「……成る程な。そういうことか」

「え？け、慧音先生？」

龍は隣にいる慧音から怒りオーラが出ていることに気付き、少し焦り出した。

しかし、もっと焦るべきことが出来た。

夢幸が自分の物であるはずのサーフボードを魔理沙に投げたのだ。

「……………え？」

「うおっ!? やべえ!!?」

魔理沙は全速力で逃げ……様とするが、魔理沙の進行方向の反対からルカが現れ、逃げ切れることは叶わず、サーフボードが後頭部に当たることとなった。

\*\*\*

あの後、魔理沙を追っていた想起は、魔理沙の現状を見て少し同情した。

何故なら、現在、魔理沙はというと、

「……………」

ガクガクと震えながら正座をさせられているからだ。庭で。

そして、その脚の上には氷塊が乗せられている。

そんな魔理沙の周りにいるのは4人の鬼。

「魔理沙、貴様はまたくだらないことをしたのか」

一人は時雨夢幸。

「魔理沙。お前にはまだO☆H A☆N A☆S H Iが足りない様だな」

一人は如月翔。

「魔理沙。それが鬼灯の物だと分かっているながら盗んだだろ」

一人は霜月ルカ。

そして、最後の人物は魔理沙の頭を両手で固定した。

「……へ？」

「魔理沙、お前にはお仕置きが必要だな」

「ちよっ!??まつ……」

「問答無用だ!!?」

その人物は魔理沙の頭に頭突きを食らわせた。

その結果、魔理沙は気絶してしまったが。

「……相変わらずの威力か。慧音の頭突きは」

「これぐらい当然だな」

最後の一人、上白沢慧音は腕を組みながらそう言った。

「しかし、どうするべきか……」

「ん?何がだ?」

「魔理沙の掃除区域の事さ。確か、道場の方を任せてたはずなんだが

……これだと、向こうも大変だろうしな」

ちなみに、道場を掃除することになっているのは岩槻、妖夢、永久、

鬼灯である。

「ふむ、どうするべきか……ん?」

如月は境界が開く気配を感じ、自分の後ろを見た。

「ん?どうした?如月」

「いや、境界が開く気配が……」

その言葉とほぼ同時に境界が開き、その中から現れたメイド服を着た二人の人物は、如月とルカの見知った人物だった。

「!!? 沙月!!? 夏希!!?」

「沙月、久しぶりだな!!?」

如月とルカは直ぐに二人に近寄った。

「如月様、レティシア様の言う通り、本当に此処にいらっしやっただのですね」

「翔様〜! 私達も手伝うよ〜!」

「そうか。ありがとう二人とも」

「頼むな、二人とも」

「ええ、勿論。ルカ」

ルカは沙月の登場によって、少しテンションが上がった様だ。

現に、普段からあまり見せない笑顔を沙月に見せている。

「……珍しい。ルカが笑うなんて」

「何を言っている。人であるのだから笑うのは当然だろう」

「そうだよ。それが普通だよ」

「まあ、そうなんだが、ルカの場合、普段から笑顔を見せることは少ないんだ。だから、珍しいんだよ。それに、アレだけ心を開いているのも、葵を除外して考えてもいるかどうか……」

「……そこまで信用出来ないんだね。他人を」

「……」

龍は少し悲しそうだが、夢幸は変わらずであった。

「それで、私達は何をすれば?」

「あ、それなんだが……今丁度、魔理沙が気絶しててな。だから、夏希は道場の方を、沙月は私と一緒に蔵の方の掃除をして欲しいんだ。良いか?」

ルカはそう頼むと、二人は了承した。

そして、夏希は道場がある方向を聞くと、その方向へと歩いて向かった。

「それじゃあ、沙月。行くか」

「うん、そうですね。それでは、如月様。お互いに掃除を頑張りましょう」

「ああ」

沙月は如月にそう言うと、ルカと共に蔵の方に向かった。

そして、その場に残った者達は落ちている沢山の桜の花弁を掻き集めてはビニール袋に入れる作業を続けていた。

## 第百十七話

ルカが沙月と共に蔵の方へと向かっている途中、沙月に呼び止められ、歩くのを辞めたルカ。

「?どうした?沙月」

「いえ、ルカに着てもらいたい服がありました」

「着てもらいたい服?」

この時、ルカは多少なりとも嫌な予感がしていたが、それをあえて無視した。

それがルカにとっては仇となった。

「掃除をするのですからコレを着てください!!?」

そう言つて、沙月が取り出したものは……、

「……おい、ちよつと待て。それは何だ?」

「何つて、メイド服ですよ?」

「絶対に着ないぞ!!?／＼／」

ルカに対してサラツと言つてのけた沙月。

メイド服を着るように言われて顔が真っ赤になっているルカ。

コレがもし、沙月や葵以外の者だったなら確実に能力で氷漬けにしようとしていただろう。

しかし、今回の相手は沙月である。残念ながら、そんな事は出来ない。

「問答無用です!」

「ちよつ?!!?着せようとするなああああ!!?／＼／」

こうして、ルカはあえなくメイド服を着せられることとなった。

\*\*\*

く神無月神社の蔵く

そこで掃除をしているのはアリス、カロード、霖之助である。

「それにしても、ルカ、遅いわね」

「そうだな」

「何かあったんだろうか?」

アリス、カロード、霖之助がそんな事を言っていると、蔵の扉から

足音が聞こえてきた。

ただ、一人分多いが。

「どうやら来たみたいね……何故か一人分多いけど」

アリスはそう言いながら扉の方へ向かった。

「ちよつと、ルカ。遅かったじゃない。何かあった……の……」

「？アリス？」

「どうしたんだい？」

カロードと霖之助は何故か黙ったアリスを不審に思い、扉に近付いてみると、

「……」

「ルカ。お前は今まで何をしてたんだ？」

霖之助だけが固まってしまった。

今、三人の目に映っているのは間違いなくルカであるが、その姿に問題があった。

「……た、頼むから、その、見るな／＼／＼」

ルカは顔を赤くしながら自分の姿を隠そうとしている。

いつものどこか冷たいルカの姿は無い。

そこにいるのは、恥ずかしがっているメイドである。

「ふふ、驚きましたか？」

「!!？あ、貴女、誰？」

その声によってアリスと霖之助は意識を戻し、その人物を見ると、此方もまたメイド服を着ている人物であった。

「失礼しました。私、如月様のメイドをしております『奈々瀬 沙月』と申します。よろしくお願います」

「よろしく。私はアリス・マーガトロイドよ」

「俺はカロード・ペインテイクだ。よろしくな」

「僕は森近霖之助だよ。よろしくね、沙月さん」

「はい、よろしくお願います。アリス様、カロード様、霖之助様」

全員がそう挨拶をすると、三人とも何処か微妙そうな顔をしている。

「？どうなされましたか？」

「いや……『様』はやめないか？慣れていないんだが」

「分かりました。でしたら、よろしく願います。アリス、カロード、霖之助さん」

沙月が訂正して挨拶すると、それで自己紹介を終え、問題のルカメイドの事に移った。

「それで……何でルカはメイド服を着てるの？」

「それは、沙月に着せられてだな……」

「似合いますよ、ルカ」

「やめてくれ!!？この姿は恥ずかし過ぎる……／＼／＼」

ルカと沙月はそんな風に会話していた。

「……珍しいわね。ルカが心を開いてるなんて」

「そんなに珍しいのか？」

「そうだね。珍しいよ。僕の前でも見せない姿だからね」

「……そうなのか」

この中で今日初めて会ったカロードは、アリスと霖之助の話を聞くと少し黙って見てからそう言った。

「と、兎に角だ。掃除をしよう、そうしよう」

「ルカが遅れたんでしょ？」

「……それは悪かったと思ってるさ」

「なら、罰として今日は一日その姿ね」

「なっ!?／＼／＼」

アリスの言葉にルカは反対しようとするが、自分が遅れたのも事実な為に、結局は反論出来ず、その姿のまま蔵掃除を始めた。



## 第一百十八話

（道場）

此処で掃除をしている筈の岩槻、妖夢、鬼灯、永久。掃除をしている音は確かにするが、それと同時に話し声も聞こえてくる。

「……岩槻と言ったか」

「ん？何だ？」

永久は岩槻が持っている黒い木刀を見てから、岩槻を見て言った。

「……お前も剣士か？」

「え？あ、ああ、そう言うことか。俺は確かにこの木刀を使って戦うけど、剣士と言われたら違うぞ。流派とかあるわけじゃないし、俺は我流だからな」

「それを言うなら私も我流だがな」

岩槻の言葉に鬼灯も自分もだと言った。

「ふむ、そうか……」

「そう言えば、如月も剣を使う者だから、今度、手合わせしてみれば良い。私も機会があればしようと思ってるからな」

「……ほう？あの男も剣士か」

「ああ、そう言えば永久は彼奴が此方に移動して来た瞬間を見ていなかったな。彼奴は自分が持つてる『天羽々斬』を使って次元を移動して来るんだ。まあ、岩槻と同じだな」

「へえ、じゃあ、この前霊夢達が言っていたのは……」

「間違いなく如月だな」

鬼灯はそう話終わると、自分が持っていた雑巾を水でまた濡らし直し、床を拭き始めた。

「鬼灯様、如月さんは剣士と言いましたが、流派とかあるのですか？」

「本人に直接聞いた事がないから何とも言えんが、多分、我流だろう」

妖夢からの質問に鬼灯は答えた。

「そうやって考えると、流派があるのは妖夢と永久だけか」

「そのようだな。……ふっ、如月とも戦ってみたいな」

「そうですね。私も修行の一環になりますので、是非とも戦ってみたいです」

「……戦闘狂だ」

「二違うぞ（違います）」

そんな会話をしながらも掃除をしていると、入り口の方から足音が聞こえてきた。

「ん？誰だ？」

全員が入り口の方に顔を向けて警戒していると、鬼灯にとっては見慣れた人物がいた。

「なんだ、夏希か……いつの間に来たんだ？」

「ついさっきだよ！鬼灯様！」

鬼灯が「そうか」と言つて、自分の後ろにいる妖夢達を見ると、明らかに誰か分かつていない為に困惑していた。

……永久だけは観察するような目だが。

「ああ、すまない。こいつは……」

「初めまして!!？如月様のメイドをやっている『奈々瀬 夏希』です!!  
?よろしくね!!?」

夏希は元気に自己紹介をした。

「ああ、よろしくな。俺は岩槻静弥だ」

「私は魂魄妖夢です」

「俺は浄土永久だ」

「よろしくね!!?」

「それじゃあ、掃除の続きを始めるか」

「と言つても、大体しましたよ?」

「ああ、此処はな」

「……ああ、外か」

「そういうことだ」

この道場付近にも、年中咲き続ける桜達がある為、庭と同じようにその桜を掃かなければならないのだ。

「それじゃあ、私が竹箒を人数分持つてこよう。その間、話しておけば良い」

そう言うと、鬼灯は一人で竹箒を取りに行った。

夏希も手伝おうとしたが、それは鬼灯が大丈夫だと言って断った。

「……それにしても、何を話しましょう?」

「ねえねえ? 妖夢さんと永久さんの関係ってなんなの?」

「えっ!!? / / /」

「あ、それは俺も聞きたいと思ってたんだ。あと、ついでに永久の種族」

「ん? 俺の種族か?」

「ああ。だって、妖夢と似たような半霊が居るけど色が違うだろ? 何だよ、金って。神々しいな」

「……俺の種族は妖夢と同じだ。しかし、俺の半霊は『神霊』だがな」

「え!!?」

「神霊?」

夏希は驚き、岩槻は少し首を傾げていると、

「『神霊』と言うのは『元となった霊がいる神』だな。まあ、永久が言う『神霊』はそれとは違うが」

後ろから鬼灯の声が聞こえてきた。

「鬼灯様!」

鬼灯は全員分の竹箒を一旦置くと、全員に向き直った。

「永久の半霊である『神霊』は先程の意味合いとは違って『神に近い霊』なんだ」

「神に近い……霊」

「ああ。まあ、私と妖夢もそのことを知った時は多少なりとも驚いたがな」

「あれ? でも、神力は感じられないよ?」

夏希は首を傾げながら永久を見た。

「それはそうだろ。あくまで近いだけで神じゃない。如月とは違って神力はないさ」

「……成る程。通りであの男から神に等しい力を感じられた訳だ」

永久はそう言うが、まだ疑問を感じている。

まあ、その理由としては凜華の存在を知らないからなのだが。

「それにしても、鬼灯といい、妖夢といい、永久とはどう出会ったんだ？」

岩槻は首を傾げながらそう聞いた。

「永久と出会ったのは早苗達と会う前に起こった異変の後だな」

「あの時は驚きましたよ。冥界に倒れていましたから」

「た、倒れてたのか……お前」

岩槻はそう言っただけで永久の方を見ると、言葉は無かったものの頷いたのが見えた。

「その時は私が妖夢を指導してた時だから、偶然居合わせたんだ。……それから、妖夢の指導を私がする時は毎回の様に剣で戦っているよ。何時も引き分けて終わっているが」

「そ、そんなに強いんだ……」

夏希も多少驚いた顔をしている。

「ああ。だから、私が来ない時の妖夢の指導を永久に任せている。……本当はあまり良い方法ではないがな」

「ですが、色々と学べるので私は構いません」

鬼灯の言葉に妖夢はフォローするかの様に言った。

「ちなみに、妖夢と永久の関係は恋人同士だ。「ほ、鬼灯様!?!?!」／＼／＼／＼／＼／＼」

「さして、話は終わりだ。まだ話したいなら掃除を終わらせてからにしよう」

鬼灯の言葉に全員が了承すると、掃除が再開された。

……他の所と違って無言でやった為に本当に早めに終わり、話し始めたのは言うまでもない。

## 第百十九話

く桜の並木道・墓地く

此処で掃除をしている者達は歩、霊夢、早苗、葵、華扇である。旗からみたら歩はハーレム主であるが、そんな事はない。

そして、墓の前なのだから静かに掃除をするべきなのだが、そんな事もない。

女三人寄れば姦しいとはよく言うもので、

「霊夢さん！もうそろそろ白状してください!!?」

「そうよ、霊夢。もうそろそろ白状なさい!!?」

「嫌よ!!?誰があんたらに言うもんですか!!?」

「だったら、誰に言うというのですか!!?」

「葵とかによ」

霊夢、早苗、華扇が墓地があるこの場所で大きな声で話をしていた。

一体、何の話をしているのかと言うと、

「一体、誰なんですか!!?霊夢さんが好きな人は!!?」

「私達に話さない!!?」

「だから話すわけないでしょ」

そう、恋バナである。

恋バナをし始めると、女性というのはすぐ食いつく。

今回、この話を最初に切り出したのは華扇だが、今ではコレだけヒートアップしている。

ちなみに、葵と歩はというと、

「……」↑自分に被害がこない様に黙って掃除している

「……」↑気になるけど聞いちゃダメだと思いつながら掃除している

こんな状態である。

「というか、あんたはどうなのよ。早苗」

「……え?」

「だーかーら！あんたに好きな人はいないわけ?」

「そ、それはですね……／／／」

その様子で悟った霊夢と華扇は早苗に詰め寄った。

……霊夢に関しては逆襲もあるかもしれないが。

「早苗、あんた誰の事が気になってんのよ。さあ、言いなさい」

「私達が貴女の力になりますよ」

「葵もだけど。そうよね？葵」

「!?も、勿論ですよ」

イキナリ自分に振られて驚いた葵は吃りながらも返した。

「ほら、今すぐ言いなさい。歩だつて言わないでいてくれるわよ」

「それは一体何の根拠ですか？ハッ！もしかして、すk「変なこと言ったら夢想封印ぶつ放すわよ」す、すみません……」

早苗は霊夢の剣幕に押され、結局話すことになった。

「わ、私が気になる人はですね……」

「うん、うん」

「……きさんです」

「……?」

「早苗、悪いけど聞き取れなかったからもう一回言つて」

「は、恥ずかしいんですよ!?これ言うの!?／／／」

「それを言わそうとしたあんたが言うな」

霊夢からの正論にぐうの音も出ない早苗は勇気を振り絞つて言うことにした。

「……そ、想起……さん／／／」

「え!??本当ですか!??」

これについては流石の葵も食いついた様で、驚いた顔をして早苗に近付いた。

「え?でも、あんたあんまり彼奴と接点ない筈でしょ?」

「その、この前の宴会の時間にお話をしたのですが、想起さんの優しい所に惹かれました……／／／」

早苗は好調させた頬を自分の両手に挟んでモジモジし始めた。

「まさかのそこですか」

「想起さんは優しい方ですからね」

「……それに」

「「☒」」

「私、外の世界ではこの緑髪が他の人とは違ったので、虐められてたんです」

「……」

「でも、想起さんはこの緑髪を褒めてくれました。私、どれだけ虐められても、この緑髪が自慢だったんです。だから、それが嬉しくて……」

「……もしかして、この幻想郷に来た理由は……」

「……はい。信仰だけが理由ではありません。私は彼方から逃げ出したんです」

「……早苗さん」

そこで一度、沈黙が訪れた。

……すると、

「……あのさ」

歩が此処で口を開いた。

「外の世界の事は、俺はよく分からないけど、その緑髪って変なのか？」

「……え？」

「……そうですね。私達はずっとこの幻想郷で生きてきましたから、緑髪がどれだけ可笑しいのかとかよく分かりませんね。現に、私の髪の色は早苗さんとは色違いではありませんが空色です。でも、此処ではそれが理由で一人になる事なんてありませんよ」

「……」

「外の世界での出来事を忘れろ、なんて事は流石に言えないが、でも此処は幻想郷だ。外の世界とは違う。だから、此処にいる間はそんな事を気にすることはないよ」

「歩さん……」

「それに、俺が知ってる早苗は『今』の早苗だからね」

「そうね。私知ってる早苗は『時々突っかかってくるけど奴』だけだ、あんたの『過去』とか興味無いわね」

「霊夢さん……」

「私は今回初めて会ったからちゃんとは言えないけれど、それでも、貴女が巫女として真面目なのは今見ても分かります。それに、一人の

女の子であることも」

「華扇さん……」

「早苗さん。此処は幻想郷。『全てを受け入れる』場所です。だから、私達は『今』の貴女も受け入れます。それはつまり、『過去』も受け入れることになります」

「……どういうことですか？」

「今までの『過去』があるから『今』の早苗さんがあるんです。『今』の早苗さんを全てを受け入れることはつまり、早苗さんの『過去』も受け入れるということです。だって、誰しも色々な『過去』があるのですから」

「……ルカがそうだったように

葵は頭の中でそんな事を考えた。

葵はどうしても、ルカの過去を忘れることは出来なかった。いや、出来る筈がないのだ。

葵にとっては、その『過去』はあまりにも衝撃的だったのだから。そして、想起の『過去』もそうだ。

想起の『過去』は葵とよく似ている。

いや、早苗ともよく似ている……理由は違うが。

想起は自身が持つその能力から外の世界の者達に忌み嫌われてきた。

外の世界の者達からしたら、その能力は異常だったのだ。

だから、想起は外の世界の者達虐げられ、最終的には幻想入りを果たした。

……一度、問題を碎牙が起こしたことにより、幻想郷から追放されたが。

早苗はそれが自分の身形にあったのだ。

「だから、早苗さん。もう大丈夫です。私達は貴女を虐げることはありません」

葵は微笑みながら早苗を優しく抱きしめた。

「……う、うう……」

「泣きたい時は泣いていいんです。今まで我慢してきたものを、今此



処で吐き出してください。私が……いえ、私達がそれを受け止めますから」

葵がそう言うと、早苗は貯めていたものを本当に全て吐き出した。

……その後、一度空気がアレだったが、また桃色空間に戻って女子の恋バナが再開されたのはまた別の話である。

## 第二百二十話

全ての場所の掃除が終わり、全員が想起達が掃除した場所である、桜が咲いている庭で宴会をし始めた。

ただし、掃除に参加していない部外者達は参加をしていない。此処で宴会をしていると知らないのだから仕方ない。

「それにしても、頑張った後のお酒ほど美味しいものはないわよね〜!!?」

「そ、そうだね」

霊夢はお酒を普通の速さで飲みながら話しているが、葵はお酒が苦手な為、ちよびちよび飲んでいる。

「ははっ!!? 霊夢が真面目に掃除したとは思えないけどな!!?」

「魔理沙、あんた一変ピチュツとく?」

「え、遠慮しとくぜ……」

魔理沙は霊夢をからかっただけなのだが、結果がこれである。

「葵」

「あ、如月さん。どうしたの?」

「いや、最近、ゆっくりと話すことがなかったからさ、話さないか?」

「そうだね。良いよ。それじゃあ、話s「絶対に着ないぞ!!?」／／／

この声、鬼灯?」

葵が如月と話そうとした時、離れた所から鬼灯の叫び声にも似た大きな声が聞こえた。

「……もしかして」

「ああ、だろうな」

霊夢達もそこでようやく鬼灯の方を見てみると、沙月が鬼灯にメイド服を渡しているのが見えた。

……葵達の間違えでなければそのメイド服はミニスカである。

「……（あれ? なんだか嫌な予感がする。自分の身の危険に関して嫌な予感がする）」

葵は持ち前の勘の良さから、自分も巻きこまれる事に気付いていたが、逃げるには少し遅かった。

何故なら、

「何で私まで!!? / / /」

「大丈夫です!!? 葵様のもありますから!!?」

(そ、そんな!??)

葵が自分まで着ることになりそうな展開に若干絶望していると、沙月が近付き、葵の手を握った。

もう片方の手も、鬼灯の手を握っている。

「さあ！葵様!!? 貴女の分もありますから、着ましょう!!?」

「そ、そんな〜!!? / / /」

そのままズルズルと神社の方へと引き摺られ、少しした後、また戻ってきた。

勿論、二人ともメイド服である。

鬼灯のメイド服は先ほど述べた通りで、葵のはフリルが一杯ついたものである。

「ああ、葵!?? そ、その服はなんだい!?? / / /」

「り、霖之助さん……その、見ないでください!!? 恥ずかしいですから!!? / / /」

両想い同士のこの二人は二人して顔を真っ赤にした状態であった。

この二人の表情では、二人の関係を知らない者からしてもよく分かかってしまうほどである。

と、そんな二人に対して夢幸は、

「霖之助と葵」

「二な、何かな（何でしょう）？」

二人の名前を呼んで、その二人が顔を向けるのを見てから、口を開いた。

「お前達、さっさとこk（ガンツ）……」

夢幸の言葉は、頭上から落とされたタライによって中断された。

「い、今のって……」

「紫じゃないとすると……」

「……居るのは分かっている。さっさと出てこい。レティシア」

夢幸は怒りのこもった声でレティシアを呼ぶと、それに応えるよう

にしてスキマが開き、中からレティシアが出てきた。

「クスクス、私、何も悪いことしてないと思うけれど?」

レティシアは全く詫びれもせず、いつもの笑みを向けながら夢幸に對してそう言った。

「巫山戯るな。貴様、俺に對して何をした?」

「クスクス、貴女がタイミングも考えずに発言しようとしたからタライを落として止めただけよ♪」

「それが俺を怒らせた要因だと分かってるだろ。貴様」

夢幸が今にも弾幕ごっこを始めてしまうような雰囲気醸し出している。

「ふふ、お主。ならば妾とやってみぬか?」

如月の中から出てきた凜華がこの時を待っていたかのように出てきた。

「貴様はあの時居た……」

「レティシアもようやく出てきた事だし……」

「!? お前」

夢幸は凜華の発言から実は最初から居たと分かり、自分とは違い、レティシアの存在に気付いていた凜華に驚いた。

勿論、葵やルカ、鬼灯、それから如月、沙月、夏希は違うが。

レティシアが居たのに気付いていたわけではないが、凜華が気付いていたことに対しては驚く事じゃないと分かっていた。

「それで? どのようなじゃ? やるのか?」

「い……おい」

夢幸は了承しようとしたが、レティシアが夢幸の手を取って強制的に移動させた事によって言葉を続けられなかった。

「……おい」

「貴方、彼女の実力を分かって言ってるのかしら?」

「……分かってる」

レティシアが何時もの笑みを消して、真面目な顔で話し始めた事に多少驚いたが、それを表に出すことは無かった夢幸はそう答えた。

「……そう。なら、もう止めないわ。頑張りなさい……そして、彼女が

どんな存在なのか、その目で確かめればいいわ」

レティシアはそう言うと、手を離した。

それによって自由に動けるようになった夢幸は凜華の元へと戻って行った。

「……」

そして、その後ろ姿を見てから、レティシアはスキマの中へと戻って行った。

\*\*\*

夢幸達の弾幕ごっこが始まってから少しして、ルカは移動した。

一人になれる場所に。

ルカはあまりこうやって大勢でいることを好まない方だ。

警戒心が高く、人間不信である彼女だから仕方のないことなのかもしれないが。

「……沙月、いるんだろ？」

「やはり暴露しましたか」

ルカは自分の後ろの木に隠れていた沙月を呼んだ。

「別に隠れなくてもいいだろ」

「ルカが一人になりたがっている気がしたから」

「……何を聞きたいんだ？私の過去か？」

「……そうですね。少し気になっていたので。どうしてそこまで警戒心が高いのかとか」

「……分かった。話す。だから、龍も出てきたらいい」

すると、また別の木に隠れていた龍を呼んだルカ。

そして、龍も隠してる意味がないと分かると出てきた。

「……良いの？」

「何がだ？」

「俺が君の過去を聞いても」

「私はお前の存在に気付いていながら沙月に話すと言ったんだ。別に構わない」

「……そっか」

そして、ルカが座った木とは反対の方の木に体を預けた二人は、ル

カの過去を聞くことにした。

「……お前達はどう思う?」

「何がですか?」

「私殺人殺しだと言ったら、どうする?」

「!?」

二人はルカの発言に驚くが何も言うことは無かった。最後まで聞くつもりだからだ。

そして、ルカは過去を思い出すように顔を上に向けて、目を瞑りながら話した。

「……私がまだ幼い頃、両親が私の目の前で殺された。父親が吸血鬼だというだけでな。父親は別に人間に迷惑を掛けていなかった。

……母親に会う前はそうだったかもしれないがな」

「……」

「ただ、父親を目の前で殺され、母親も吸血鬼と結婚したからという理由だけで殺され、私も殺されそうになった。ただ、私は目の前で両親を殺されたことに対して憎しみがあつたんだ……人間に。だから、そいつらを私の能力で虐殺した。その後に移動した人里でもそうだった。私が化け物というだけで殺されそうになったから、私の逃げ道を塞いでいた奴らだけ殺した。これに関しては正当防衛だ。そして、その後も私を襲おうとした奴らを殺してきた。……そして、最終的には葵の母親も殺した。葵を虐待していた事に関して許せなかったからだ」

「……」

「……これで話は終わりだ。お前達だったらこの状況に陥るとどうなる?人間不信にならずにいられるか?私は無理だった。だから、今でも警戒するんだ」

ルカは顔を元の位置に戻し、目を開いて二人の顔を見ながらそう聞いた。

「……私はそんな状況に陥ってないから何とも言えないけど、私はそれでも、ルカの友達だと……親友だと思ってる」

「……親友か」

ルカはその言葉に対して嬉しそうに笑った。  
ただ、頭の中では、

(まだ会って間もないはずなんだがな……嫌な気持ちはないから良いが。それに、私もそう思ってる訳だしな)

そして、龍は、

「俺も沙月さんと同じだよ。だから……」

「はあ、分かったよ。私の能力も出ていないから別にその先を言わなくても大丈夫だ。……ただ、私はもう少しだけ此処にいることにする」

「分かったよ」

龍がそう言うのと、沙月と共に戻って行った。

「……自分のしたことに對して、後悔はしてない。この過去があつたからこそ、今があるんだからな」

ルカは一人そう言うのと、持っていたお酒を少しだけ飲んだ。

\*\*\*

またまた場所は変わって宴会会場。

夢幸は凜華に負けてしまっていた。

だが、それでも宴会は終わらない。

そんな皆が楽しんでいる場所で、カロードは絵を書いていた。  
持っている虹色の鉛筆で書いている筈なのに、何故か別の色が出て  
いる。

「うん?……え?これ、お前の能力?しかも、絵上手いな!!?」

「……うん?ああ、岩槻か」

岩槻はカロードの絵を横から見るとような形で覗いている。

「ああ、そうだな。これが俺の能力『色を操る程度の能力』だ」

「へえ、だから虹色の鉛筆の筈なのに別の色が出てるわけか」

「……そうだな。だが、俺が一番美しいと思えるのは自然にできた色だ」

「自然って、桜の色とかってことか?」

「そういうことだ」

カロードは少し嬉しそうに話した。

「へえ」

「お前の能力は何なんだ？」

「あれ？話してなかったっけ？」

「話してないな。というよりも、俺とお前が話したのも今回が初めてだな」

「ああ、そっか。俺の能力は『周囲を護る程度の能力』と『見たものを生成する程度の能力』だ」

「……後者は理解できたが前者は何だ？どういう能力なんだ？」

「コレはな、まあ、周囲の攻撃を全て俺が受ける能力だよ」

「……何か不憫な気がしたが気の所為なのか？」

「まあ、不憫かもしれないが、俺の大切な人達が護れるなら俺はそれで良いさ」

「……そうか」

そして、カロードはまた絵を描くことに戻ろうとしたが、岩槻が最後に、

「なあ？その絵、完成したら俺にも見せてくれよ」

と言った為に、了承してから書き始めた。

\*\*\*

場所は変わっていないが如月の方では、永久と話していた。

「鬼灯から聞いた。お前も剣士だと」

「そうだな。それがどうしたんだ？」

「……俺はお前と戦ってみたい」

そう言うと、永久は自分が持っていた剣に手を掛けた。

「……俺もそれには同意するが、それはせめて人に被害がない所ではないか？」

如月はそう言いながら周りを見渡した。

永久もそれに釣られて周りを見てから、それに了承した。

「……そうだな。なら、次に会った時を楽しみにしておこう」

「そうだな。俺も楽しみだ」

如月の言葉を聞いた永久はそのまま妖夢の元へと戻って行った。

「おい、如月」



「……凜華か。どうだった？夢幸との弾幕ごっこは」

「それなりには楽しかったがレティシアとの奴と比べればまだまだじゃな。……早くあやつと死合いを試してみたいの〜」

「おい。レティシアを喰う気か？辞めろよ、喰べるの」

「分かっておるわ」

凜華はそう言いながらも少し残念そうなのはどういふことなのだろうか？

「はあ、というか、レティシアと戦うのもう辞めてくれよ。この前戦ったとき幻想郷が危なかっただろ」

「仕方なからう？楽しかったのじゃから」

「お前、帰ったら飯抜きな」

「なっ!?!それは酷すぎるぞ!!?如月!!?」

凜華は如月の発言に物申すが、何時もの暴食を考えるとこれは仕方がないのではないかと私（作者）は思う。

\*\*\*

それから、メイド服の葵の歌を所望する人が多く、龍が紫のスキマで持つてきてもらったグランドピアノを使って結局は歌った。

そして、時は過ぎて、如月、岩槻、龍が帰るとき。

葵達も見送りに来ていた。勿論、服は戻っている。

「如月さん、岩槻さん、龍さん、手伝ってくださりありがとうございます」  
「した」

「いや、別に構わないさ。というか、大人数だったから早めに終わったしな」

「そうだね。本当に早めに終われて良かったよ」

「そうだな。というか、葵の歌を初めて聞いたが、綺麗過ぎて聞き惚れたな」

「もう歌いませぬ!!?／＼／」

「そう言いながら歌うのが葵よね」

「……」

霊夢からの言葉に反論できない葵は黙ってしまった。

「……?あの、何故凜華さん出てるのですか?」

「居るのじやろう？レティシア」

凜華がそう言うと、スキマが開き、そこからレティシアが現れた。

「クスクス、やっぱり暴露していたのね♪」

「ふっ、当たり前じゃ」

お互い笑いあいながらも何故か戦いたいというような雰囲気醸し出している二人。

「……おい、二人とも戦うなよ？」

「分かっておるわ（分かってるわよ）」

そう二人とも言うが、やはり何処か残念そうである。

「鬼灯様く！また会った時は楽しいお話聞かせてねく!!？」

「ああ、まあ、面白いかどうかは分からないがな」

夏希からの提案に鬼灯は苦笑いしながら返した。

「ルカ。また会ったらメイド服を「絶対に着ないからな!!？」残念です」

そんな会話をした後、レティシアが龍と岩槻のそれぞれ帰る場所へとスキマを開いた。

「クスクス、如月は自分で帰れるでしょう？なんなら開くわよ？」

「いや、大丈夫だ」

如月はそう言うと『天羽々斬』を取り出し、次元を開いた。

「え!?？」

「それどうなってるんだよ!?？」

「ん？次元を開いただけだが？」

「それが何で出来るんだよ!?？」

「この剣の力だな」

そんな会話をした後、龍と岩槻、そして如月達は戻って行った。

それを見送った後、葵達は自分達の住む場所へと戻ったのだった。

## コラボ企画く第三段く

別の幻想郷でのこと。

その幻想郷にある博麗神社に巫女の姿はなく、たった一人の男性の姿だけがあった。

彼の名前は『一夢 命』。その容姿は Fate のセイバーで、つまりは男の娘である。

そして、ミコトは一人神社内で霊夢が帰ってくるのをお茶を飲みながら待っていた。

……しかし、何故かお茶が二つ分あるが。

「クスクス、そのお茶は紫の分？それとも私の分かしたら？」

「何方でもだな」

と、そこで一人の金髪ロリが現れた。

まあ、レティシアなのだが。

それをミコトは驚いた様子もなく返した。

それに対してはレティシアも分かっていたことなので追求しない。

「……それで？お前は誰だ？レミリア達とよく似た『命』だが……姉妹か？」

「クスクス、それについてはまあ、半分正解、半分不正解かしらね。私が嘘言っても貴方、どうせ私の命で分かるでしょうから嘘は言わないけど、はぐらかすぐらいはするわよ」

「いや、俺にそんな万能センサーはないんだが……」

「クスクス、そうね♪」

レティシアはそんな風に話しながら、ミコトが入れたお茶を飲んだ。

「……それで？紫まで待機した状態で俺に何の用なんだ？」

ミコトはレティシアにそう聞くと、レティシアは少し嬉しそうにしながら答えた。

「クスクス、いえね。私は貴方に会ってもらいたい人がいるから貴方を呼びに来たのよ」

「悪いが、俺の帰る場所は……」

「クスクス、此処でしょ？大丈夫よ。別にずっとその場所に居て欲しい、なんて頼みはしないから。今若干ヤンデレ染みてて恐ろしいからね、彼女は」

レテイシアはいつも通りの笑みを浮かべながらミコトにそう言った。

「ヤンデレ？霊夢が？それは無いだろ」

ミコトはあり得ないと言う様な顔をして、お茶を飲んだ。

「……本当に貴方、今はその方面に疎いのね」

「？」

「はあ、これは心配だわ」

レテイシアは少し頭を抱えたように振舞ってから話を戻した。

「クスクス、まあ、兎も角そう言うこと。会った後は別に何をしてもいいわ。観光なりなんなり。帰るなら言ってくれて構わないわ。その時はちゃんと帰してあげるから」

「……霊夢に相談してからじゃだめか？」

「クスクス、霊夢については私が話して置いたわ。まあ、怒り狂ってたけど弾幕ごっこで私が勝利したから渋々だけど了承してくれたわ」

「霊夢に勝ったのか？」

「クスクス、伊達に向こうで妖怪賢者なんて呼ばれてないわよ」

レテイシアは笑いながらそう言った。

「クスクス、それで？貴方の答えを聞かせてくれるかしら？」

レテイシアはミコトの顔を見ながらそう聞くと、ミコトは……、

「……そうか、なら分かった。その人物に会わせてくれ」

了承した。

「クスクス、有難う、ミコト。それじゃあ、紫」

レテイシアがスキマの中にいる紫にそう頼むと、紫はミコト達の目の前にスキマを開いた。

「クスクス、そのスキマの向こうが私が住んでる幻想郷よ。ちなみに、繋がってる場所は人里よ」

「人里にその子がいるのか？」

「クスクス、いえ、人里の近くに神社があるの。その神社に住んでる

わ

「……じゃあ、何で人里なんだ？」

ミコトは訝しむような目でレティシアを見る。

「クスクス、それはね。もしかしたら、その子のお気に入りの子と会えるかもしれないからよ」

「……よくは分からないが、まあ、分かった。……あ、最後にお前の名前はなんだ？」

「クスクス、私はレティシア・スカーレット。向こうではレミリア達の姉兼スカーレット家の始祖よ」

「……そうか。それじゃあ行くな」

「クスクス、よろしくね♪」

そうして、ミコトは別の幻想郷へと移動した。

\*\*\*

「……此処が、こっちの人里。そんなに此方の人里と変わらないな」

ミコトは周りを見渡しながら最初の感想を漏らした。

そんなミコトを、人里の人達は物珍し気に見ていた。

「……さて、レティシアが言っていた神社は一体どこにあるんだ？」

流石に人が多い為に、彼の能力を使えば彼自身の気分が悪くなってしまう。

その為、自分の能力を使うのは最終手段なのだ。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

「……」

ミコトは『お姉ちゃん』と呼ばれ、危なくO☆H A☆N A☆S H I しそうになったが、相手は自分の事を知らぬ人間。それも子供だ。叱るに叱れない。

「……君」

「？」

「俺は男だ」

「え!?? そうだったの!??」

その子供は本当に驚いた様子を見せたが、次にその子はじーっとミコトを見始めた。

「……なんだ？」

「えつとね、だったらなんで『葵お姉ちゃん』みたいに長髪にしてポニーテールにしているのかなっと思っ」

「『葵お姉ちゃん』？」

ミコトを少年の言葉を若干スルーしてその聞きなれない名前に反応した。

（もしかして、レティシアが会ってほしいと言っていた人物はその子か？）

ミコトはそう予想すると、目の前の子供に道案内を頼むことにした。

「なあ、君」

「？なあに？」

「その子の所まで案内してくれないか？」

「うん！良いよ!!？」

その男の子は全くの警戒心無しでミコトを案内すると言った。

（この男の子、なんでこんなに警戒心が無いんだ？）

ミコトは自分の疑問を頭の片隅に置いて、その少年について行くことにした。

「あ！そういえばお兄ちゃんの名前は？」

「ん？俺か？俺はミコトだ。よろしくな。それで、君は？」

「僕は幸多だよ!!？よろしくね!!？お兄ちゃん!!？」

そして、ミコトは幸多に連れられて行ったのだった。

### コラボ企画く第三段く

ミコトは幸多に連れられて神無月神社へとやって来た。

「はい！此処が葵お姉ちゃんが住んでる所だよ！」

「そうか。ありがとうな、幸多」

ミコトは幸多の頭を撫でながらお礼を言うと、幸多は嬉しそうにしながら帰って行った。

それをミコトが見送っていると、後ろから気配を感じた。

ミコト自体は自分に近づく『命』を感じていた為驚くことはなかった。

そして、その『命』から強く出ている警戒心と困惑も。

「……おい」

ミコトは声がした方に体ごと向けると、そこには金髪紅眼の少女がいた。

「……お前は？」

「……ルカだ」

その少女はやはり困惑しながらも答えた。

ミコトはその少女が困惑しているのは分かったが、なぜこんなに困惑しているのかまでは分からなかった。

ルカが困惑している理由、それはミコトの雰囲気や葵と似ている事にある。

だから、ルカは困惑している。まるで葵の二人目を見ている気がして。

だからなのだろう。何時もは警戒して相手から名乗らせるルカが自分から名乗ったのは。

「……そうか。それで、俺は会いたい奴がいるんだが……」

「あ、ああ。それで、会いたい奴と言うのは誰だ？」

「いや、名前まではちゃんと聞いてないんだ。『会って欲しい人がいる』って言われただけだからな。……すまない」

嘘は言っていない。ルカはそれがすぐに分かった。

「……そうか。……まあ、何と無く分かった気がするが」

「ん？そうなのか？」

「ああ。多分、葵だろうな」

「……」

「着いてくると良い。案内してやる」

ミコトはルカに案内してもらって神社へと入った。

少年少女移動中

ルカが案内したのは桜が無い方の縁側だった。

そこには狐姿で昼寝をしている鬼灯と、その横に座ってぼーっとしている想起、本を読んでいる葵がいた。

「おい、鬼灯、想起。しっかりしろ」

「……んっ？……!?？」

「?どうしたの？鬼灯……えっ」

その二人もまた、ミコトを見て困惑した。

やはり雰囲気からすぐ近くにいる葵を連想させたのだろう。

……その本人は本に集中してしまっているが。

「……何で俺はこんなに驚かれてるんだ？」

対してミコトはよく分かっておらず、首を傾げていた。

「……すまない。お前と雰囲気似てる奴がそこにいてな。それで驚いたのさ。私は此処『神無月神社』の神の鬼灯だ。そして、こっちが……」

「想起です。この神社に居候しています」

「……そうか」

ミコトは想起達と自己紹介をし、次に葵の方を見た。

(もしかして、この子か?)

ミコトは葵を見ると、まだ本を読んでいた。

「あ、葵。本に集中するのは良いけど、お客さんだよ」

「……あ、すみません」

葵はそう謝ると、縁側から立ち上がり、

「初めまして、葵と言います。どうぞよろしくお願いします」  
頭を下げてそう挨拶した。

そして、顔を上げた時に、ミコトの顔……と言うよりも目を見た為



にミコトの過去を見た。

その内容は余りにも自分の昔の環境と『似ていた』。ただ、『似ていた』だけで、少し違う。

何故なら、ある時までミコトに味方をしてくれる者はおらず、ミコトにとつて自分の味方になってくれた愛しい人は亡くなっていた。ちやんとまだ他に味方がいるのも見えていたが、そこは今は問題ではない。

その過去を見た葵はというと……、

「……………」

「!? お、おい……葵?」

「葵、どうした?」

目から涙を流していた。

「……葵」

「……ひつく……うう……」

葵は鬼灯から名前を呼ばれたのにも気付かず、ただ泣くばかり。

ミコトはこの時、葵がどれだけ『優しい子』なのか理解した。

葵の『命』から感じ取れるものにも理解できた。

普通は誰もそうではないだろう。他人の過去を聞いて泣くのは、それだけ親しくなった間柄だけだ。

だが、ミコトと葵は今が初対面だ。ミコトの過去を考えると同情して終わりだろう。

しかし、そんな相手に葵は泣いていた。

ミコトの過去を悲しんでいた。

それは葵が『優しい』から。

「……ひつく……ひつく……」

「……葵、泣かないでくれ」

ミコトは葵の頭に手を載せて、落ち着かせる為に撫でながらそう言った。

「……ひつく……でも……でも、ミコトさんはっ!!?」

葵はまだ泣きながらミコトを見た。

「葵は優しいんだな。俺の為に泣いてくれる。……でも、泣かないで

くれ」

「ですがっ!!?」

「俺はもう大丈夫だ。『過去』を見たなら分かるだろ?俺は俺を受け入れてくれる人に出会えたんだ……それに、周りを見てみる」

「……」

葵は涙を少し拭いて周りを見てみると、全員が心配そうな、そして葵が泣いているのを見たからなのか、悲しそうな顔をしていた。

「……」

それを見た葵は顔を俯かせてしまった。

ミコトはまだ葵の『命』から感じる悲しみをどうにかしたいと考えていた。

自分の為に泣いて欲しくない。そうミコトは思っているのだ。

(……レティシアが会って欲しいと言っていた子は絶対に葵の事だ。

……何を考えているんだ?)

「……兎に角、一旦神社に入ろうよ」

想起がこの空気を払拭する為なのか、はたまた葵を落ち着かせる時間が欲しいだけなのか、その両方か、そう提案した。

\*\*\*

ルカと想起が一旦、葵を部屋へ送っている間、ミコトは鬼灯と対面していた。

ただし、鬼灯は狐の姿ではなく、人型になっているが。

「……それにしても、何か聞きたそうだな?」

鬼灯はミコトに対してそう投げ掛けた。

そして、ミコトは兼ねてよりの疑問を此処で投げ掛けた。

「……鬼灯の『命』はどうなっているんだ?」

「……」

鬼灯は黙ったままミコトの言葉を待っている。

そして、ミコトも言葉を続けた。

「俺は『命を理解する程度の能力』を持っている。だから、鬼灯。お前の能力も理解できる」

「……なるほど。だから、葵の能力も知っていたわけか」

鬼灯の言うとおり、ミコトは葵の『命』から、能力の性質を大まかにだが読み取っていた。

だから、葵が自分の『過去』を見たのも分かっていたのだ。

「だから、言わせてもらう。お前の『命』は普通の命と比べて何かがおかしい」

ミコトは鬼灯を訝しげに見ている。

「……レティシアから何か聞いたか？」

対して鬼灯はミコトに対してそう返した。

「いや、聞いていない。……そのレティシアもそうだ。レティシアの『命』も普通の『命』と何処かおかしい。……説明してくれないか？」

ミコトは鬼灯の目を見ながらそう聞いた。

その目からは嘘を言うなど言うような目だ。

「……お前はこの幻想郷の紅魔館には行ったか？この幻想郷にある『夢の館』には？」

「いや、行ってないが……それが何か関係するのか？」

「……私の『命』は私の能力と繋がっている」

「!?」

ミコトはそこでようやく違和感が払拭された。

だから、鬼灯の『命』が何かと繋がれているように感じられたのかと。

「……」

「私もつい最近気付いた……という訳でもないが、まあ、大分前から気付いてはいたんだ。それが確実に変わったのはある異変での事だ」

「……」

「『人石異変』……この幻想郷で起こった異変だ。起こした本人の動機は復讐だ」

「復讐……」

ミコトはその単語に反応した。

別に本人がそうしようとか考えていたわけではない。ただ、その単語は、彼が愛した人が死んだ動機でもあるのだ。

「……私はお前の過去を知らないから何も言わず、話を続けさせて

もらう。その時の異変を起こしたのはメデューサだが……ミコト、前はメデューサがどんな存在か知っているか？」

「……ああ」

「なら話が早い。そのメデューサは何時もある従者に能力を封じられていたんだ……と言っても二つのうちの一つだが」

「……」

「そのメデューサは一つの能力を封じられただけで……自分の本来の人格と記憶を失った」

「……それは……本当か？」

ミコトからの問いに、鬼灯は頷いて返した。

「これはその本人も言っていたが、『能力との結び付きが強い。だから、封じられた』と。まあ、そんな感じの事をな。それで私は納得したんだ。もしそのメデューサの能力を二つとも……繋がりが強い能力二つを封じるとどうなるか……そうなるかと待っているのは『死』だ」

「……」

「私ともつとも繋がりが強い能力は私が持っている能力全てだ。『自然を操る程度の能力』を封じられると、私は記憶を失くし、ただの妖怪九尾となって暴れることになる。そして、全部を封じられれば……分かるだろう？」

「……なら、レティシアはどうなるんだ？」

「レティシアも同様だ。両方の能力を封じられれば待っているのは『死』だ。……まあ、彼奴は私以上に『死』と隣り合わせだが」

「……どういうことだ？」

ミコトはそう言うと、鬼灯は目を瞑った。自分を少し落ち着かせる為だ。

……そして、その状態で話し始めた。

「……彼奴は本来の姿の能力のお陰で生きていられるんだ。彼奴がいつから生きていると思う？月の民……まあ、つまりは永琳達が地上にいた時からだ……そういえば、永琳が誰か分かるか？」

「ああ。輝夜の事を大切に思ってる人だ。……俺もお世話になったな」

ミコトは自分の左手を見ながらそう言った。

「……何があったのかは聞かないでおこう。まあ、葵はその辺も見ただろうから分かってるんだだろうが」

「別にこれぐらいなら良いんだが……」

「話がずれても良いなら聞くが？」

「……なら、いい」

ミコトがそう言うと、鬼灯は本題に戻した。

「本来なら例え吸血鬼といえどそこまで生きていられない。……彼奴は既に寿命を迎えていてもおかしくないんだ」

「……」

「さっきの説明からしておそらくレティシアが不老不死なのは分かってるだろ？アレはレティシアの本来の姿での能力のお陰だ。……つまり、その能力が消えたり、封じられたりすればレティシアは死ぬ」

「……」

「レティシアにももう一つ能力があるが、そっちの方を封印すると記憶を失うだけで済む。私とかだとそれも大問題だが、彼奴は自分の能力で何とでもなるから問題ない」

「……なるほど。それじゃあ、葵とルカ、想起は記憶を失うのか」

「……ルカは違うが、葵と想起はそれだけで済むんだ」

鬼灯はそう言うと、黙った。

「……そのことを、葵達は知ってるのか？」

ミコトはそう問うと、鬼灯は頷いた。

「ああ、私から教えておいた。葵の場合は治す能力が、ルカは氷系の能力が、想起の場合は黒龍の能力が失われると記憶を失くすと、そう話してある」

「……霊夢は、どうなるんだ？」

ミコトはこれが一番心配だった。

例え違う霊夢だとしても、自分を受け入れてくれた存在だから心配なのだ。

ただ、本人は気付いていないが、実はそれだけじゃなかったりするが。

「……霊夢は、命を失うことになるだろう。魔理沙は記憶を失うだけだが」

「……………」

「……魔理沙は、彼奴は確かに魔法使いだが、種族はまだ人間だ。しかし、これで本当の魔女になったら、その時は……………」

「……………」

ミコトは黙ったままだ。

しかし、それは余りのショックからだろう。

「……………ミコト」

「……………」

「……………ミコト、お前はそっちの霊夢を大事にしろ。こっちの霊夢はそう簡単に死にはしない。補助特化の葵がいるんだ。早々な事が無い限り死なないさ」

「……………頼む、霊夢の事を」

「分かっているさ」

そこで話を終え、葵がいる部屋へと向かった。

### コラボ企画く第三段く

ミコトは鬼灯に葵の部屋まで連れて行ってもらうっていた。

ミコトは自分の能力で何とでもなるが、今は他人の家であるので、そんな勝手に歩き回ることはしない。

「……此処だ」

「そうか。鬼灯、ありがとう」

「礼を言われるほどの事はしていない。私は案内をしたただけだ。それじゃあな」

鬼灯はそう言うのと、そのまま去って行った。

ミコトは鬼灯がいなくなるまで見て、それから部屋の中にいるであろう葵に声を掛けた。

「……葵」

「……ミコトさんですか？」

「ああ。葵、入れてもらえないか？」

ミコトがそう言うのと、少しして障子が開いた。

「はい、どうぞ」

葵からの許可が下り、ミコトは部屋の中へと入った。

「……」

「?どうしました？」

「いや、やっぱり葵は真面目なんだな」

「?そうでしょうか？」

「ああ。境内の方もそうだが、この部屋もキッチンと整頓されている」

「それは多分、この前大掃除をしたからですね」

「ん? そうなのか？」

「はい……座布団を出しますので、少々お待ちください」

「別に気にしなくてもいい」

「いえ、私が気になりますので」

葵はミコトに微笑みながらそう言った為、ミコトもそれ以上は何も言わなかった。

そして、ミコトが座った事により、本当の話が始まった。

「……ミコトさんはもう能力で知ってますよね？私がどんな能力を持っているのかを」

「……ああ、分かっている」

「……すみません」

葵はミコトに対してそう謝るが、ミコトは全く気にしていないと言った。

「ですが、私は……」

「別に葵も見たくてみたわけじゃないんだろ？」

「……はい……あの……」

「？」

「……すみません、やっぱり気にしないでください」

「……分かった」

葵が聞こうとした事を辞めた理由。それは至極単純な事である。

『辛くなかったのか？』

これを聞こうとして、辛くないわけがないと考え直したのだ。

今は幻想郷で確かにミコトを受け入れてくれる人がいる。

外でも少数ではあるが受け入れてくれる人がいた。

……それでも、葵もそうだが、例え受け入れてくれる人がいたとしても、辛くなかった訳がないのだ。

「……葵」

「……」

「葵は本当に優しい子だな」

「……私は優しくありません」

「優しくなかったら、今日初めて会った俺の過去を見て泣くなんてことはしない。だが、葵は俺の為に泣いてくれた」

「……」

「……葵、俺は今は幸せだ。だから、葵が悲しむことはないんだ」

「……そう、ですね」

ミコトがそう言うのと、歯切れは悪いが葵もそう言って笑顔を見せた。

「ミコトさんの過去を見ても、確かに幸せそうでしたね。……すみま



せん、みつともない所をお見せしてしまつて」

「いや、みつともなくなんかない。それは葵の良い所だ」

「そうですか？そう言つて頂けると嬉しいです」

葵はそう言つと、笑顔を向けた。

何処にも悲しみの見えない笑顔を。

「……さて、もう行くか」

「元の幻想郷にですね」

「いや、違う」

「？」

「ちよつと、確かめる事があるんだ」

「確かめる事……ですか？」

「ああ。紅魔館にな」

\*\*\*

そして、葵から一応紅魔館がある場所を聞き、場所が変わつてないことを知ると、ミコトは一人で紅魔館までやつて来た。

「……さて、鬼灯が言つていた『メデューサ』の子は……」

ミコトはそう言つて、門から入ろうとするが、門には立った状態で寝ている美鈴が居た。

「……此処の美鈴もか」

ミコトはそう言つて溜息を吐くと、美鈴を起こそうとした。

……しかし、それはどうやら遅かつたらしく、

「美鈴？貴女、また寝てるのね」

その声が聞こえたと同時にナイフが美鈴の頭に刺さつたのだつた。

勿論、そんな事されれば誰でも起きるわけで（人間だと死んでるが）、

「さ、咲夜さん？あの、私は別に寝ては……」

美鈴はそう弁明しようとするが、そんな弁明は意味がない。

誰がどう見ても美鈴は寝ていたのだから仕方がない。

「美鈴。少しお仕置きが必要のようね？」

「さ、咲夜さん！こ、此処は落ち着いてですね……あ！ほら！お客様もいらつしやる訳ですし……」

美鈴はそこでようやくミコトの存在に気付き、そらを利用して逃れようとした。

「……美鈴」

「は、はい」

美鈴は少しの期待を持って咲夜を見ると……とても綺麗な笑みを見せていた。

そして、判決を下した。

「問答無用よ♪」

「……」

しかし、この時にミコトは（一応）止めようとしたが、結局は止めることは出来ず、咲夜に許可を貰い、紅魔館に入った。

そして、入ってすぐに見慣れぬ人物に会うこととなった。

「ん？お前は誰だ？」

「俺は一夢 命だ。ミコトと呼んでくれ」

「そうか。私は柩木 朱鳥だ。どう呼んでもらっても構わない」

朱鳥は玄関ホールの掃除をしていたようで、掃除道具を持っていた。

「そうか。なあ、一つ聞いていいか？」

「ん？何だ？」

「……お前は不老不死か？」

「……なんで分かった」

朱鳥は明らかに警戒心をミコトに向けた。

ミコトもそれは分かっていたことだった為、説明した。

「そうか、成る程な。そうだ。私は不老不死だ。で？本当に聞きたいことは違うんじゃないか？」

朱鳥はミコトに対してそう言った。

「……鋭いな」

「長年、生きてると勘は鋭くなるんだよ。……まあ、どっかの巫女達とは違うがな」

「それは霊夢と葵のことか？」

「なんだ、あの二人を知ってるのか。ああ、そうだ。あの二人の勘の良

さは寧ろ神レベルじゃないのか？」

朱鳥は笑いながらそう言った。

「で？何を聞きたいんだ？ミコトは」

朱鳥はそう言った。

「ああ、実は『メデューサ』の子を探しているんだ」

「ああ、マリアを探しているのか。だったら、図書館かフラン様の部屋……って、別に私に聞かなくても能力を使えば良いじゃないか」

朱鳥はそう言うが、ミコトは首を振った。

「いや、それは最終手段だ。人が多過ぎて、な」

「……ああ、そういうことか。ミコトも大変だな」

朱鳥はそう言うのと、頑張れと言ってから掃除を再開した。

そして、ミコトはまずは図書館の方へと向かったのだった。

く青年移動中く

図書館の中に入って見ると、そこにはパチュリー、小悪魔の他に、白髪の少女、黒髪の執事、そして青髪の執事がいた。

「ん〜と、届かないよ〜！狼〜!!？」

「あ、やっぱり届かなかったか。ほら、やってやるから貸してみろ」

「あ、ありがとう！狼!!?……ひっ」

そこでマリアはようやくミコトの存在に気付き、

「嫌ああああ！ししし、知らない人おおお!!？」

図書館内だというのに大声を上げて狼を壁にしてミコトから見えないようにした。

「貴女はどちら様でしょうか？」

「……ミコトはこの時、何と無くだが間違えられていると分かった。

「……ミコトだ」

『光冥』。多分だが不法侵入者じゃないと思うぞ」

「……それもそうですね。不法侵入者でしたら朱鳥さんとの戦闘が行われてもおかしくありませんね」

光冥は狼の言葉を聞いて、冷静に考えると、それが正しいと分かったのだった。

そして、光冥はミコトに対して頭を下げて謝った。

「失礼しました。お客様と知らなかったとはいえこのような態度をとってしまいました。自分は『黒漆 光冥』と言います。どうぞよろしくお願いします」

「俺は狼だ。……で、今俺の後ろに隠れているのが……ほら、マリア」  
狼はそう言ってマリアに自己紹介を促した。

「まま、マリア・ドロワーズです……」

マリアは自己紹介をすると、また狼の後ろに隠れてしまった。

(……あの子が鬼灯の言っていた……成る程。本当に封印されてるみたいだな……)

ミコトは葵とまた話す前に、一度マリアの事を鬼灯から聞いていた。

そして、実際に見てそれが本当だと分かった。

「それで？実際、何が目的で来たんだ？ミコトは」

「いや、もう目的は終わった。俺はもう帰ることにする」

「？そうか。それじゃあな」

ミコトはそう言うのと、図書館から出て行き、紅魔館からも出た。

そして、暫く歩いてから、

「レティシア、いるんだろ？」

レティシアを呼んだ。

すると、直ぐにレティシアが出てきた。

「クスクス、帰るのね」

「ああ、……なあ？一つ良いか？」

「クスクス、何かしら？」

ミコトはそこで、前からの疑問をぶつけてみた。

「……何で俺と葵を会わせたかったんだ？」

ミコトからの質問にレティシアはいつも通り笑いながら、

「クスクス、ただ単に、似てる二人を会わせただけだよ♪」  
と言ったのだった。

「……そうか」

「クスクス、もう良いわね♪スキマを開くわよ」

レティシアはそう言うのとスキマを開いた。

「……」

ミコトはそのままスキマの中に入ったが、その時、葵と話した時の事を思い出した。

〈回想〉

神無月神社の境内。

「ミコトさん」

「ん？なんだ？葵」

葵はミコトを見送る為についてきたが、そこで葵はミコトに声を掛けた。

「ミコトさんは私は優しいと言いましたね」

「ああ、言ったが……」

「私が優しいなら、ミコトさんも優しい方ですよ」

「……」

葵はミコトの顔を見ながら微笑みを見せた。

「……いや、俺は優しくはない」

「それだと私も優しくくないですね」

「いや、葵は……」

「……ミコトさんは私以上に優しい方です。もし優しくない方なら、フランさんの狂気を取り除いたりしません」

「……」

「優しくない方なら業を背負うような、リスクが付くような事はしません」

「……」

「優しくなければ……レミリアさん達に心配をかけさせない為に、自分のリスクを隠したりしません」

「……」

「……私でもそこまでの事は出来ません。だから、ミコトさんは優しい方です」

「……」

「そちらのレミリアさんは、ミコトさんが優しいと認めさせると言っていますよね？」

「……ああ」

葵はそれを聞くと笑みを浮かべながら、

「だったら、私はレミアアさんを応援します。いえ、ミコトさんの周りの人を応援します。誰かがきつと、ミコトさんに認めさせる事が出来ると、私は信じています」

く回想終了く

「……俺が優しい、ね。それはないな」

ミコトは独り言を呟くように言うと、少し早歩きでスキマの中を移動したのだった。

## 第二百一十一話

想起は一人で紅魔館へと来ていた。

理由は本を返す事と、魔法の練習である。

実は、前にパチュリーから魔術の素養があると言われ、それ以来、魔法を教わっていたのだ。

そして、今日この日がパチュリーから魔術を教わる日だったのだ。

「……それにしても、此処でいつつも広いよね？何でだろ」

想起は独り言の様に呟くと、

「それは私の能力が関係してるわ」

後ろから咲夜に声を掛けられた。

「あ、咲夜さん……あの、咲夜さんの能力って……」

「あら？言ったことはなかったかしら？」

「僕は聞いたことないですね」

「そう。私は『時間を操る程度の能力』よ。この能力の応用でこの館の中を広くしているのよ」

「へへ、でも、広くする意味ってあるのかな？」

想起が頭を傾げていると、咲夜の後ろから何時もの笑いが聞こえてきた。

「クスクス、それはね、レミイが言ったからよ」

「あ、レティシアさん……レミアさんが何を言ったんですか？」

「クスクス、『館の広さがそのまま主人の心の広さ』だったかしらね？

そんな事を言っていたわよ♪」

レティシアは何時も通りの笑みを想起に向けた。

「へへ、そうだったんだ……でも、これは広過ぎない？咲夜さん、掃除大変ですよね？」

「いえ？別に大変でもないわよ。私がこの館に始めて来た時だったならそう言っていたかもしれないけど、今はマリアや狼、ユニにペスにくおんに朱鳥。そして、最近だけに入った光冥がいるもの。だから、別に大変ではないわね」

咲夜はそう想起に言うとかスリと笑った。

「まあ、マリアはドジが多いから、館内の備品を壊したり、なんて事は何時もの事だけどね」

「クスクス、そうね♪ほぼ毎日ね♪」

「そ、そんなになんだ……」

「クスクス、確か、少し前にレミイに紅茶を持って行った時に転けてしまつて、レミイに紅茶が掛かる……なんて事件もあったわね♪」

「レティシア様。あの時は大変だったんですよ」

「クスクス、お疲れ様、咲夜」

そんな風に談笑していると、レティシアがふと思いついた様な顔をした。

「クスクス、想起、確か貴方、今日はパチュリーの所で練習だったわよね？」

「え？あ、はい。そうですけど……」

「クスクス、だったら、私、もうそろそろフラン達に上げるケーキを作ろうと考えていたのよ。丁度良いから貴方にも上げるわね♪」

「え？良いんですか？」

「クスクス、別に構わないわよ♪それに……」

「？」

「クスクス、これよりもっとお楽しみなものに会えるかもしれないからね♪」

レティシアは何時もの笑みよりも五割り増し楽しそうな笑みを浮かべている。

（え？何があるの？）

想起は一抹の不安を抱えながらも図書館の方へと向かった。

↳少年移動中↳

図書館に着いて、パチュリーに挨拶をしてから練習が始まった。

練習をし始めた期間は短い、それでもそれなりに魔法を使える様になってきている想起。

そして、修行を終えて今は図書館内でリラックスをしていると、誰かぎ図書館に入ってきた。

（誰だろ？）



想起は好奇心から扉の方へ向かい、その人の顔を見てみると、

「あれ？早苗？」

「!?？そ、想起さんですか？」

そこにいたのは早苗だった。

「何で早苗が此処に……あ、本を借りに来たの？」

「はい！そうなんです!!？想起さんはどうして此処に？」

「僕はパチュリーさんに魔法を教わってるんだ。なんか、素質があるらしくてね。それに、僕にとっても葵の力になれるから良いことだしね」

「……そうですか」

早苗は先程のテンションが嘘の様に雰囲気が悪くなってしまった。

「あ、その、ごめん」

「あ、気にしないで下さい!!？想起さんの所為ではないですから!!？

……嫉妬ですし」

「？何か言ったの？」

早苗の最後の言葉は呟く様に言った為に、想起は何を言ったのかは分からなかった。

「何も言ってませんよ？それよりもです！此処の図書館は凄いですよね!!？外の色んな本があるのですから!!？」

「そうだよ。それに、何故か漫画まであるし……」

「そうですね！ガ○ダムとかマ○ロス○ロンティアとか○ケモンとかそれからそれから……」

「……早苗って、アニメとか好きなの？」

「もう大好きですよ!!？特にロボット系ですね!!？」

「ロボットって男の浪漫だよね!!？」

「男性だけでなく女性にとっても浪漫ですよ!!？」

と、そんな事を図書館内で語り合っていると、メイドが図書館に入ってきた。

しかし、想起はそのメイドに見覚えがあった。

「……え」

「？どうしました？想起さん」

「……なんで、あの人があの格好で此処に……」

「想起さん？」

「早苗！ちよつと此処にいて！すぐ戻るから!!？」

「想起さん!?!？」

そして、想起はそのまま駆け足でそのメイドに近付き、大きな声で名前を呼んだ。

「龍さん!!？」

「!?!?……」

何故か『龍』と呼ばれたメイドはそこで石の様に固まってしまった。そして、まるで人形の様 ゆっくりと想起の方に顔を向けた。

「……」

「……」

そして、本当に想起である事を確認すると、

「……」

「龍さん!?!？」

イキナリ地面に手を着いてorz状態になってしまった。

ちなみに、ミニではなくロングだからこそ、遠慮なく出来ているのである。

「想起さん、イキナリどうしたんですか?……って、あれ?この人何処かで……」

早苗はそう言つて考え、そして思い出す。

この前、大掃除の時にいたあの『男性』であると。

「……えつと、何故男性なのにこの格好なんでしょう?」

「いや、それは分からないよ。けど、レティシアさんが言つてた『面白い事』がこの事つてなのは分かった」

想起がレティシアの名前を出した時に少し耳が動いた気がするが、気の所為と言うことにおこう。

「それで、何で龍さんはその格好なんですか?」

「……いや、それが……」

そして、龍が説明し始めた。

くメイド(?) 説明中く

「……何と言うか、ご愁傷様です」

龍から聞いた事を簡単に言うと、フランからのおねだりに敵わなかった。ただそれだけである。

普通のおねだりなら別に龍も揺らがなかっただろうが、そのおねだりが抱き着きと上目遣いだったのだ。

それでもなんとか勇気を振り絞って断ろうとしたが、なんだか泣きそうな雰囲気もあった為に結局断ることが出来ず、そのままこの状態になったのだった。

「……これも黒歴史に入るよ」

「……本当に、ご愁傷様です」

想起が龍を慰めていると、その近くでパシヤツと写真を撮る時に出る音が図書館内に鳴り響いた。

「「……え？」」

その場にいた三人は誰が撮ったのかと音が鳴った方に顔を向けてみると、

「おやおや、もしかして新しいメイドさんですかね？これは良いネタになりそうです！」

文がとても嬉しそうな顔をして撮った写真を見ていた。

幸い、文は龍が女性だと勘違いしているようだが、撮られた本人はそれを気にする余裕が、今、無くなった。

「……ちよつと、文」

「？はい、何でしょ……ひっ!!？」

文は龍の方に顔を向けてみると、龍は黒い笑みを浮かべていた。

「その写真を今すぐ消してくれるよね？じゃないと、O☆HA☆NA☆SHIだよ」

そう黒い笑みを浮かべたまま言うと、文は怯えながらも写真を消し終えた。

「しし、写真はちゃんと消しましたので!!？で、ではく!!？」

文はそう言うと、そのまま入り口まで飛んで行ったのだった。

「……危なかった」

「クスクス、良かったわね♪幻想郷中には撒かれなくて」

そんな声が聞こえてきた為、図書館の入り口の方に顔を向けると、レティシアが紅茶とケーキが載ったお皿を持って立っていた。

「あ、レティシアさん」

「クスクス、どう？ 想起。ちよつとしたサプライズは」

「……確かに驚きましたけど……これは、同情します」

「クスクス、まあ同じく男性だものね♪それは仕方ないわね」

レティシアはそう言いながらも近くにあった机に紅茶などを置いた。

ちなみに、ケーキの種類はシフォンケーキだった。

「クスクス、ちよつと作ってみたのよ♪食べてくれるかしら？」

「勿論、食べさせてもらうね」

龍はそう言うのと、早速シフォンケーキを食べてみた。

「!!? 美味しい!!? 外で作られるモノよりこっちの方が断然美味しいよ!!?」

「そうですね！ 本当に美味しいです!!?」

「レティシアさんって料理も出来たの!!?」

想起がそう聞くと、レティシアはまた笑いながら言った。

「クスクス、ええ。昔からよくレミイやフランとかに作ってあげていたからね。自然と上手くなったのよ」

「へ〜」

「クスクス、さて。パチュリー達にも渡してこないとね。それじゃあね」

レティシアはそう言うとその場から離れて、パチュリー達の方へと向かった。

その後、ケーキを食べ終えた想起と早苗は本（早苗は漫画だが）を借りると紅魔館から去って行ったのだった。

## 地霊殿

### 第二百二十二話

ある日の博麗神社でのこと。

「双方、用意は良いですか？」

「ああ（勿論だ）」

葵は如月と鬼灯の間に立ち、審判の役目をしていた。

何の試合をしようとしているのか？それは、『剣』である。

鬼灯は自身の愛刀『小狐丸』を、如月は『天羽々斬』を構えている。

「もう一度言いますが、スペルカードの使用禁止、弾幕の使用禁止、飛行禁止、能力の使用禁止、これで良いですね？」

「ああ、それで良い。鬼灯もだよな？」

「ああ、それで文句はない」

「分かりました。それでは……」

葵が片方の手を上に掲げると、如月と鬼灯は構えた。

そして……、

「いぎ、尋常に……始め!!？」

手を振り下ろすと同時に、鬼灯と如月の剣がぶつかった。

「くっ!!？」

「ほお？やはり、如月は強いな」

「それは鬼灯もだろ？」

二人はとても楽しそうな、それでいて嬉しそうな笑顔を浮かべている。

「……そ、それにしても、驚いたぜ」

神社内でそんな二人を見ているのは霊夢、魔理沙、歩、夢幸、妖夢、永久、ルカ、レティシアだった。

そんな中で魔理沙が何かに驚いた様な声を上げた。

「？何にだ？」

ルカがそう質問すると、魔理沙は答えた。

「いや、鬼灯が戦闘狂だったことにさ」

「戦闘狂……?」

「いや、だつてさ、アレだけ嬉々として戦つてるの初めて見たぜ?」

魔理沙は鬼灯を指差してそう言うが、ルカは「それは少し違う」と言つて否定した。

「彼奴が戦闘狂になるのは『剣』が関係してくる時だけだ」

「剣?」

「ああ、ほら。丁度、如月も持つてるだろ? 『剣』」

ルカがそう言つてお茶を飲むのを見たあと、魔理沙は少し考えて、分かつた。

「確かに……つまりは鬼灯も『剣士』っていうわけか!」

「はい! 鬼灯様は剣士ですよ!!?」

妖夢は魔理沙にそう言つた後、また視線を鬼灯達の方に向けると、鬼灯が如月に袈裟斬りをしようとしているのが見えた。

しかし、それは真つ正面からであつた為に避ける事は容易かつた。

「まあ、避けるよな」

「なあ? 今、本気で斬り掛かりにこなかつたか?」

「む? いや、してるつもりはないんだが……自信がないな」

「おいちよつと待て。これ竹刀じゃないんだから。分かつてるか?」

「アレだ。凛華が食べるのに夢中になって周りが見えなくなるのと同じ感じだ」

「それはタチが悪いからな!!?」

そう良いながらも鬼灯からの攻撃を簡単に防ぐ如月。

「まあ、少しは自重するが、楽しいからな。また戻るかもしれん」

「……それは俺も同じだな!!?」

二人はまた楽しそうな笑みを見せながら一旦離れ、また剣同士がぶつかる。

「……如月」

「?なんだ?」

「私流の闘い方をやっても良いだろうか?」

「いや、別に良いが、何で聞くんだ?」

「剣以外も使うからだ」

「ッ!!?」

鬼灯はその瞬間、自身の力を抜いた。

そして、不意をくらった為に体制を立て直せずにいる如月に鬼灯は容赦なく腹に蹴りを入れた。

「ぐっ!!?」

そして、そのまま如月は飛ばされ、地に伏している状態である。

「私は確かに剣士だが、剣だけで戦うわけじゃない。……本当は使うつもりはなかったが、まあ、違和感があったんだ。すまないな、如月」  
鬼灯はそう言いながらも警戒を解かず如月を見ていると、如月は少し痛そうにしながら立ち上がった。

「痛っ……いや、謝らなくてもいいさ。それよりもだ、まさか辞めるつもりはないよな?」

如月はそう言うのと、また剣を構えた。

「ああ、勿論だ」

鬼灯もまた笑みを讃えながら剣を構え、そして、お互いにぶつかるうとしていた時、

『ッ!??』

全員の耳に何かの大きな音が聞こえた。

その音の所為で、如月と鬼灯の剣での試合は止まってしまった。

「今のは……」

「ああ、もしかして葵が言ってたやつ?」

霊夢が葵に聞くと、葵は肯定した。

「となると、異変かな?」

歩がそう言うのと、魔理沙は目を輝かせた。

「異変!?? だったら解決しないといけないとな!!?」

「落ち着け、魔理沙」

そんな興奮した状態の魔理沙の頭を撫でて落ち着かせる夢幸。

「焦るとミスするぞ? 魔理沙は優秀だからな。こんな事で失敗しては駄目だ」

「あ、ありがとうなんだぜ……ただ、頭撫でるのは子供みたいだから辞めてくれって言うてるじゃないか……!!?」

魔理沙は顔を紅くした状態で言うが、それは寧ろ可愛い。

「はは、悪いな。だが、落ち着いただろ？」

「うう……／＼／＼」

「なあ？アレって本当に夢幸か？俺の印象とは全然違うんだが……」

「魔理沙と一緒に居る時は何時もあんな感じだよ」

こんな夢幸を初めて見た如月は驚いてそんな事を言ったが、葬からの言葉により、印象を変えることとなった。

「クスクス、まあ、異変みたいだけれど、今の所は害はないわけだから、ちよつと様子見を試してみたら良いんじゃないかしら？」

レティシアからのそんな言葉に全員は一応だか頷いた。

レティシアもこの反応は予測していた様で、別にツツコむことは無かった。

「……これは流石に試合どころじゃないな。如月、この勝負はまたの機会だ」

「ああ、そうだな」

「レティシア、行くぞ」

「クスクス、勿論よ」

鬼灯とレティシアはスキマを使って何処かへと移動して行った。

「？鬼灯様は何処へ行かれるのでしょうか？」

「多分、紫の処でしょ」

「……そうだな」

霊夢がそう言うと、永久も少し考えてから肯定した。

「……永久」

「？なんだ？妖夢」

「闘いたかったのは分かりますが、もう終わりですので闘志を収めてください」

「……すまん」

実はずっと如月と闘いたがっていた永久であった。



## 第二百二十三話

スキマの出口に辿り着いた鬼灯とレティシアは、そのまま躊躇もなく、スキマから出た。

その先に見えた光景は、何処かの屋敷だった。

「……はあ、何で此処に来る時はお前か紫のスキマを使わないと行けないんだ……」

鬼灯が溜息を吐きながらそう言うと、隣に立っているレティシアはクスクスと笑ってその状態の鬼灯を見ていた。

「クスクス、背的にも、歳の的にも、貴女の方が私達の中で一番年上なのにね♪」

「それは関係ないがな」

鬼灯は片手で目を抑えるようにして溜息を吐いていると、誰かの足音が聞こえてきた。

「お待ちしておりました」

「クスクス、少し遅れたみたいね。鬼灯」

「そのようだな。で？お前は誰だ？」

今、レティシア達の目の前に立っているのは、真っ赤な耳と獣の尻尾を持つ男。

まあ、誰と聞かずとも二人ともこの存在が紫の『式神』なのは気付いているのだが、名前は知らない為、こう聞いたのである。

「すみません、我は紫様の式神の『八雲 茜』という者です」

「そうか。紫から聞いているかは知らないが名乗っておくか。私は鬼灯だ。そして、こっちは……」

「クスクス、レティシアよ。よろしくね♪」

レティシアはまた笑いながら自己紹介をした。

「そうですね。それでは案内します」

そう言って、紫の元へと案内する為に歩き出した茜の後ろから、鬼灯達もまたついて行くのだった。

少年少女移動中

「此処です」

茜はそう言うと、中へと声を掛けた。

すると、開けて良いとの声が返って来た為に障子を開けた。

その障子の向こうには、紫が正座をして待っていた。

「あら？遅かったわね」

「クスクス、そうかもしれないわね。だって、今の所は害はないもの……一応ね」

レティシアはそう言いながらも屋敷内を見渡す。

いや、レティシアが見ているのは屋敷内ではなく、屋敷外……博麗神社辺りだが。

「……クスクス、やっぱりね」

「はあ、怨霊か」

「となると……あ、茜。貴方は下がって良いわ」

「承知しました」

茜はそう言うと、とても綺麗に部屋から出て行き、残ったのは紫、鬼灯、レティシアだけとなった。

「……となると、『地底』が関係してくることになるわね」

「クスクス、なら、私達『妖怪』は動けないわね♪」

「……これは霊夢達の仕事になるな」

「まあ、私達が霊夢達の補助をすれば良いだけなのだけれどね」

「おいおい、どう補助するつもりだ」

鬼灯がそう聞くと、待ってました！とでも言うように嬉しそうな顔を浮かべ、近くに置いてあった陰陽玉を見せた。

「……陰陽玉？」

「クスクス、まあそうだとしても、何か違和感を感じるけれどね」

「そうだな。普通の陰陽玉とは違うような……」

その陰陽玉をじつと観察している二人に、紫はドヤ顔をしながら説明した。

「その陰陽玉はね、持つてる相手と連絡が取れる使用になったのよ」

「ほお？外の世界で言うところの『けーたいでんわ』だったか？まあ、それと同じものか？」

「そうね。あと、鬼灯。『けーたいでんわ』ではなくて『携帯電話』よ」

「仕方ないだろ？外の知識は乏しいんだ」

「クスクス、兎も角、携帯電話の様な機能を果たす陰陽玉ということね。まあ、メールとかは出来ないから本当に連絡用だけみたいだけれど」

「める？」

「クスクス、遠い場所にいる相手と簡単に連絡を取り合える機能よ。まあ、とても遠くに居る相手と一瞬で挨拶出来る手紙と思ってもらったら構わないわ」

「ほお？外の物は便利なものが多いな……その分、科学が発達しているということか」

「……地震や祟りも、神の仕業ではなく『自然』と解明され、妖怪という存在は否定された。これは時代の進化。誰も止めることなど出来ませんわ」

紫が少し悲しそうな顔でそう言うと、鬼灯もレティシアも空気を詠んで何も言わなかった。

そして、少ししてからレティシアが話を戻した。

「クスクス、それで？私達は彼女達を支援する、って事で良いのよね？」

「ええ、それで良いわ。私達はそれぐらいでなければ手出しが出来ませんもの」

「なら、私は迷わず葵の補助だな」

「クスクス、補助の巫女が補助される側になるなんてね♪」

「笑うところでもないがな」

そんな会話を最後の最後にした鬼灯とレティシアであった。

## 第二百二十四話

間欠泉が噴き出した為か、温泉が出来た幻想郷。

その湯を確かめる為か、殆どの幻想郷住民が温泉に入りに来たのだった。

「へえ、丁度良い湯加減ね」

「そうだね」

霊夢と葵がお湯に手をつけ、温度を測ってみた。

「どうやら、二人にとつては良い湯加減だった様だ。」

「じゃあ、入ってみるか!!?」

その温泉に入った人達は、葵達が知る人達で全員であった。

勿論、男性連中にはいないが。

「……それにしても」

「?どうしたの?霊夢」

霊夢は葵のある一点をじっと見ている。

その視線の後ろを追ってみると……、

「!!?れ、霊夢!!?どこを見てるのですか!!?／／／」

葵は胸をタオルで隠す様にした。

「いや、その胸を少し分けてほしいものだわ」

「そうだな。分けてほしいぜ」

「まま、魔理沙まで!!?わ、私よりも早苗さんの方が……／／／」

「え?」

イキナリ話のネタにされた事に驚いた早苗の方を素早く見た霊夢はじっと見ると、また葵を見て、

「どっちも同じ大きさよ!!?」

と、言った。

「え、ええええ!!?／／／」

「というか、どうしたんだ?霊夢。イキナリ胸の大きさを気にしだして……」

「そ、それは……」

「……成る程な」

「ですね……」

ルカは少しニヤニヤしながら、葬は何かを悟ったらしく、それ以上の事は聞かなかった。

「う、うう……」

「ま、気になるよな。仕方ないよな、恋する乙m」それ以上、言うなああああ！」はいはい」

少し紅い顔をしながら叫ぶ霊夢。しかし、全く怖くない。

「……てか、あんた、悔しくないわけ？」

「?何にだ?」

「だから……」

その反応で理解したルカは悔しそうな顔をせずと言った。

「別に悔しくないな。私は霊夢達よりかは大きいわけだしな」

「くつ、事実だから否定出来ないツ!!?」

そんな霊夢の近くに居る葬はレミリアに話し掛けた。

「……そういえば、レミリアさん達は平気なんですか?」

「ん?何がよ」

「お風呂ですよ。鬼灯から聞きましたけど、水が駄目って……」

「私達は『流水』が駄目なだけであって、流れてなかったら水は平気なのよ」

「そうなんですか?良かったです」

そんなレミリアの近くには、日傘を差している咲夜が居た。

流星に日光は駄目な様だ。

そのすぐ近くに居るフランもまた然りである。

そんな女性陣とは裏腹に、お風呂に入れない男性組は、それぞれの場所待機中である。

「……なあ?霊夢」

「何よ」

「本当にこれ、放つといて良いのか?」

「……そうね。もうそろそろ、動いた方が良いかもしれないわね」  
「ですね」

そう言つて上を見てみれば、怨霊達が居た。

「……葵」

「明日からですか？」

「ええ、動くわよ」

「はい」

そうして、栄気を養う霊夢達であった。

少し追記をしておく、冬だからとはしゃいでいたのか、温泉の中にチルノが入ってくる事件もあったりしたのだった。

勿論、チルノは溶けてしまっていたが。

\*\*\*

その日の翌日、博麗神社では、霊夢、魔理沙、葵、ルカ、想起の他に、歩と夢幸と如月が加わった。

「なんか、最近あんたが居ることが普通になってきたわ」

霊夢は如月の方を見ながらそう言う、如月は少し苦笑した。

「それで？何処に行けば良いんだ？」

「私について来れば良いのよ。さ、行くわよ」

「何時もの霊夢の勘頼りだぜ」

「勘だけで良いのかな？」

「それが彼奴のデフォだろ。諦めろ」

「俺としては心配だけどね」

そう言いながらも一行は霊夢について行き、地面に大穴があいている場所を見つけた。

「此処ね」

「よし！行くぜ!!？」

「あまり気を背負い過ぎるなよ。魔理沙」

そう言いながら魔理沙の頭を撫でる夢幸。

「分かってるぜ!!？というか、私を子供扱いするなって言ってるだろ————！」

「でも、魔理沙の力は抜けてる様だから、効果はあるよね？」

「うっ／＼／」

「……何か、初めて見た当初からそんなに期間は空いてないのに、もう慣れたな」

「僕はもう何回も見てるから『何時も通り』としか感じないけどね」  
「それは私達もだがな」

「……そう言えば、鬼灯が渡してくれたこの陰陽玉の事だけ……」  
「そう言っただけが歩が出したのはポケットサイズの陰陽玉だった。」

「あ、確か、『通信型』とか言ってたわね」

「コレで彼方と通信が出来ると言っていましたけど……」

葵がそう言っていると、その陰陽玉が少し光出した。

『!??!』

『……聞こえるか?』

陰陽玉から聞こえてきた声は鬼灯だった。

「あ、うん、聞こえるよ」

「というか、紫はコレをどうやって製作したのよ」

「それを私を知るわけないだろ? まあ、便利アイテムなんだから損はないだろ。でだ、あまりサポートすることは無いが、何かあったら連絡をしてくれ。良いな?」

「分かってるわよ」

『なら良い。……あ、一つ言い忘れていた』

そこで鬼灯は地底にいる妖怪達の事を話した。

『地底にいる妖怪達は、地上に嫌気が差した者達の集会場だ』

「それがどうしたのよ」

『その者達の中にはな……鬼もいるんだ』

「……鬼」

「……あまり当たりたくない種族だな」

『だろうな。その鬼の頭領……いや、一番上に立つ『鬼子母神』という存在がいるんだが、そいつも地底にいる筈だ』

「それは……強いのか?」

想起が聞いてみると、鬼灯は、

『ああ、強い』

「そう即答で返してきた。」

『彼奴と接近戦で戦っても勝てないだろうな……遠距離でもどうかと思うが』

「そ、そんなに強いのか?」

魔理沙が少し冷や汗を流している。

『ああ、強い。私でも勝てない。レティシアは接近戦だと負けるが、遠距離戦だと勝つぐらいの強さだな』

「はあ!? マジかよ!?」

「というか、あんた、戦ったことがあるわけ?」

『あるに決まってるだろう? 私は鬼達が地上にいた時から生きてるんだぞ? その鬼とも仲が良いんだ。……まあ、鬼だから戦闘狂ではあるんだが……』

「? どうしたんだ?」

『……いや、まあ、これについては本人に会えば分かると思うぞ……多分』

「?」

『兎に角だ、地底は何時もの異変と比べても危険だ。気を付けろよ』

それだけを言うと、通信は切れてしまった。

「……何が言いたかったのかしらね?」

「兎に角、行きましょう」

葵からの促しに先に行くことにした全員であった。



## 第二百二十五話

葵達が大穴の中へとドンドン進んで行っている途中、全員がイキナリ止まった。

「……今」

「ええ、何かの気配がしたわね」

「でも、そこまで気にする程でもなさそうだな。先へ進むか」

「この程度の気配で止まるなど、時間の無駄だったな」

夢幸のその言葉でまた先へ行こうとした全員……だが、

「いたっ」

「葵？」

葵のそんな声が聞こえたのだった。

別に暗くもない為、直ぐに葵の場所へと近寄ったルカはどうしたのかと葵に問いかけた。

「いえ……いま、何か頭に当たったような……」

「?だが、何も無い……確かに何か当たったな」

ルカもまたその何かに当たった感触を覚えた。

「どうした?二人とも」

そんな二人の元へ今度は如月が近寄ってきた。

「いや、どうやら地味な攻撃をしてくる妖怪がいるんだ。此処に」

そう言っつて、いつの間にも捕まえたのか桶に入っている緑髪の妖怪がいた。

「……もしかして、キスメか?」

その小人妖怪は知り合いなのか、歩がその妖怪の名前を呼んだ。

「!!?もしかして……歩さん!!?た、助けてください!!?この人からの殺気が怖いです!!?」

「うるさい。地味に痛くて妙にイライラしたんだ。覚悟しろ」

「えく!!?っつて、やばいやばい!!?凍っちゃおうよ!!?」

「る、ルカ、落ち着いて、ね?」

「辞めてあげなよ」

「……はあ」

「おお、小人が危なく凍らされる所だったな」

そんな会話をしている四人組から離れた所では、

「……いつまであんなくだらないことをしているつもりなんだ」

「まあ、アレが何時もの事でしょ」

「だな！」

「そうだね。霊夢が何時も異変を勘頼りで解決することぐらいにデフォだよ」

「……あんた、それ馬鹿にしてない？」

「え？し、してないよ!?!？」

「まあ、何方にしろピチュらせるけどね!?!？」

「酷いよ!?!? って、本当に弾幕を撃たないでよ!?!?」

「……此処もか」

「何時ものことだぜ!?!?」

……此方も此方で騒がしくなっていた。

\*\*\*

「……それで？結局こいつは何の妖怪なんだ？」

ルカはさつきまで自分が捕まえていた小人妖怪をジト目で見ている。

「ひっ!!?」

「ルカ」

「……はいはい」

葵からのちよつと厳しめな声で呼ばれた為に、ジト目をやめたルカは普通の目を見た。

「この子はキスメっていう子なんだ。種族は『釣瓶落とし』だ」

「へ?釣瓶落とし?」

その種族を聞いた想起は驚いた。

想起は元々は外から幻想入りを果たして来た人間である為、外の知識もまた持っている。

その外の知識の中には勿論、妖怪の種族とかも一応入っている為、この小人……キスメが『釣瓶落とし』なのが信じられなかったのだ。

「こ、こんなに小さいの?本物の『釣瓶落とし』って……」

「?外の世界じゃ違うのか?」

魔理沙が首を傾げながら聞くと、想起は頷いた。

「うん、外の世界での『釣瓶落とし』はこんなに小さくないんだ」

「小さい言うな!!?」

キスメからのそんな言葉をスルーして、外での『釣瓶落とし』を説明し始めた。

「外で『釣瓶落とし』って言うと、顔がとても大きい妖怪の事を言うんだ。ただ、それには身体は無く、大きな人間の生首だけなんだ。で、その生首が木から突然落ちて、人間を食べる。その妖怪の事を外では『釣瓶落とし』って呼ばれてるんだ」

「そうなんですか!とても勉強になります!!?」

「へへ、こいつとは全然真逆なのね」

葵は今さっきの話を目に聞いていた為にそんな反応を示し、霊夢はテキトーに流していたのかは分からないが、そんな反応をした。「でも、確か、『釣瓶落とし』は『釣瓶火』と同一視されてるから……この子が火の系統を使えるなら分かるんだけど……」

想起がそう言った事により、キスメは何かを思いついた様な顔をした。

「はいはい!だったら、私と簡単な弾幕ごっこをやろうよ!!?」

「簡単な……」

「弾幕ごっこ?」

葵と想起が首を傾げて聞くと、キスメは少し胸を張りながら言った。

「そ!使うスペルはたった一枚!勿論、能力はアリだけどね!!?で、それで弾幕ごっこをやろうってこと。相手はもう決まってるわ!!?」

「え?誰だ?」

如月がそう聞くと、キスメはル力を指差した。

「あんたよあんた!!?さっきは良くも凍らせてくれようとしたわね!!?覚悟しなさい!!?」

「はあ、面倒臭いな……良いだろ」

そうして、とても簡単な弾幕ごっこが始まった。

\*\*\*

まず最初にスペルを使ったのはキスメだった。

「いっくよー！スペルカード!!？怪奇『釣瓶落としの怪』!!？」

キスメはルカの正面の辺をうろつきながら、丸型弾幕を設置していた。

しかし、それは直ぐに襲ってくることはなかった。

「？」

ルカはそれに少し疑問を持ったが、直ぐに回避行動をとった。

何故か？それは、その弾幕が時間差で襲って来たからだ。

ただし、襲って来たのは丸型弾幕だけでなく、巨大な楕円形のレーザーも一緒にだが。

ルカはそれに当たることなく全てを回避することに成功していた。

「あくあ、私はスペルを使えないよ、だったら！」

そう言うと、今度はキスメは手を挙げた。

「？……!!？」

一体、なんの仕草なのかと考えていると、頭上から熱気を感じ、直ぐに別の場所へと移動したルカ。そして、自分がいた場所に何が落ちたのかと確認して見ると……、

「……鬼火」

「そー！これが私の能力『鬼火を落とす程度の能力』だよ!!？」

キスメは少し嬉しそうにしながらそう言った。

「……想起さん、アレが？」

「うん、そうだろうね。確かにキスメちゃんは『釣瓶落とし』だよ」

「まあ、大きさは違うけどな」

如月もまた外の世界から幻想入りを果たした一人の為、そして、『退治屋』の家に産まれたからなのか、その辺の知識は持っている。それも多分、想起よりも多く。

「……」

「貴女の能力は氷系統でしょ？だったら、私の鬼火には敵わないよ？」

「……どうかな」

ルカのその一言は……何時も以上に冷たかった。

「ツ!??そ、そんな強がり、私には効かないんだから!!?喰らえ!!?」  
そう言つて、またルカの頭上から鬼火が落とされた。

ルカは……回避行動をとろうとしていない。

「ルカ!早く避ける!??」

「……大丈夫です」

「何処がだ!??葵……」

魔理沙はまだ少し葵に対して反論しようとしたが、辞めた。何故なら、そこには、ルカは本当に大丈夫なのだ、確信している顔をした葵の顔があつたからだ。

だから、ルカの方を見た。すると、

「な!??」

ルカの頭上にあつた鬼火は全て『凍らされていた』。

「え!??あ、あんた、どうやって、凍らせて……」

ルカはその質問に答えることなく、凍らされた鬼火を操り、キスメに当てた。

「ふぎや!??」

「これで終わりだ。良いな?」

「あ、ああ」

こうして、弾幕ごっこ（キスメのみ）は終わった。

\*\*\*

「なあ!??どうやって鬼火を凍らせたんだよ!!?」

「あ、うるさい。教えるわけないだろ」

「良いだろ?気になるんだから!!?」

「説明が面倒臭い」

「何時もはそんな事、言わないじゃないか!!?」

魔理沙がルカにさっきの説明を要求するが、ルカは説明が面倒臭いらしく、しようとしなない。

そんな光景を後ろから見ていた葵の横に、如月が近付いて来た。

「で、アレは何で出来たんだ?」

如月は葵にそう質問した。

本人に聞けば良いことを葵に聞いたのは、先程の事もあるのだろう

が、葵も知ってると思っただけならなのだろう。

まあ、確かに知っているのだが。

「ルカの『氷を創造する程度の能力』は、ルカの心の冷たさと比例します」

「……」

「つまり、ルカの心が冷たければ冷たい程、氷もまた冷たくなります。だから、あの時、ルカはワザと自分の心を冷たくして、火を凍らせたんだと思います」

「……それは、ルカから聞いたのか？」

「そうです。本人から聞きました」

「そうか……というか、敬語に戻ったな」

「違和感がありましたので」

苦笑しながらそう答える葵を見てから、視線をルカの方に向けた。

「葵、ちよつと良いかな？」

と、そんな葵の後ろから歩が声を掛けてきた。どうやら、如月との会話を聞いていた様だ。

「はい、何でしょう？」

「その氷って何処まで冷たくできるんだ？」

歩からの質問を聞いて、思い出すような仕草をしてから答えた。

「本人からは『一番冷たい時は絶対零度の氷を創れる』と言っていました」

「そうなのか。って、絶対零度って一番低い温度じゃないか!?!？」

「そうですね。ただ、今は本人は使いませんから安心してください」

「なら良かった」

そんな会話を終えると、移動することに集中し始めた。

## 第二百二十六話

キスメとの戦闘からそのまま進んで行くと、また誰かがいた。

その姿は金髪のを髪をお団子にした状態でのポニーテールをしており、茶色の大きなリボンをしている。

その姿を見ただけなら、何方かというところ可愛らしい女の子だ。

「ッ!?」

「?ルカ?どうしたの?」

その女の子の姿を見たルカは途端に距離を開けた。

それに不信感を持った葵がルカに聞いてみた。

「い、いや……何か、ち、ちよつとな……」

そのルカの顔はその女の子の顔を見ようとしていない。

そのお陰か、葵は何かを悟った。

「……あゝ」

「ん?どうしたんだ?」

その様子を見て、今度は歩が近付いて来た。

「いえ、何でもありませんよ。それで、歩さん」

「ん?何だ?」

「彼処にいる女性とは知り合いですか?」

葵はその女性を見ながら聞くと、歩は頷き、その女性の元に近付いた。

「ヤマメ!」

「!?……あ!歩じゃん!!?ヤツホー!!?」

最初こそイキナリ呼ばれたからか驚いた様子を見せたその少女、ヤマメはその声の主を見て、元気良く挨拶を交わした。

「……本当に歩は誰とでも仲が良いわね」

「お?霊夢、もしかしてヤキモチ……あつぶね!?」

「魔理沙……あんた、此処に来て余計な事を言い過ぎじゃないかしら?」

「いやいや、照れなくても……だから危ないっての!?」

「二人とも!!?落ち着いてください!!?」

魔理沙が霊夢をからかっていると、霊夢から弾幕を放たれ、またからかったら放たれの繰り返しをされそうになったが、葵が仲裁に入ったため、それは中断された。

「それで、今回はどうして来たの？」

「ああ、実はな……」

　少年説明中

「ふむふむ、成る程成る程……」

ヤマメは歩からの説明を受け、少し考え出した。

「まあ、そういうことだから、通してくれない？」

　霊夢はヤマメに対してそう言った。

実際、誰が異変主かは既に葵が知っているため、此処でヒントなどを聞くことはないのだ。

……しかし、相手側はそれでは満足することはない。

「えー！それじゃあ私がつまんないじゃん!!?……あ!!?そくだ!!?」

そう言つて、ヤマメが両手の掌を合わせて何か楽しい事を思いついたかの様な顔をした。

「ねえねえ！歩!!?私と遊ぼうよ!!?」

「え?ヤマメと?」

「そ!!?だつて、私、ずーつと退屈だったしき!!?ね?良いでしょ?」

ヤマメは歩にそう頼み込む。しかし、歩は先に異変を解決する事が優先かと考えていた。

　そんな歩の考えはお見通しな様で、

「じゃないと、私、此処を通さないから!!?」

そう言くと、ヤマメは背後に糸を飛ばし、蜘蛛の巣を作つて誰も通さない様にした。

　それを見たルカは遂に確信してしまう。

「な、なあ?お前……もしかして……」

「そっ!!?私は『土蜘蛛』つて「うわああ!!?」……え?何々!!?なんなの!!?」

　ヤマメの種族を聞いたルカは大きな叫び声を上げながら、一向の一



番最後にいる如月の背に隠れてしまった。

「な、ルカ？」

「……」

ルカは如月の背に隠れた状態で、今度は姿を見せない様に隠れてしまった。

「な、なあ？ 葵。頼むから状況説明を……」

「まあ、ルカがああいう風に反応した時点で何と無くは気付いてたのですが……」

葵は苦笑しながら説明した。

「ルカは『蜘蛛』が大っ嫌いなんですよ」

「!?？」

葵がそう説明する後ろでは、ヤマメが効果音としては『ガビーン』と付きそうな顔をしていた。

「え？ 何で蜘蛛？」

「昔に自分の顔に蜘蛛の巣が当たったことがあって、その巣を取ろうとしたら、蜘蛛に触ってしまった様です。まあ、元々見た目から駄目だった様で、それが原因でもっと嫌いになった様ですね」

「うう……私、何も悪いことしてないじゃん……」

「よしよし、ヤマメ、これは仕方ないさ。人には其々、好き嫌いがあるからな」

「うう……歩く」

そう言いながら、泣きながら歩に抱き着くヤマメ。

その姿を見た霊夢からは少し黒いのがあったが、ヤマメの姿を見て、仕方ないかという様な顔をしていた。

「……この雰囲気、どうすればいいの？」

そんな風に困惑する想起と、蜘蛛の巣を壊して先に進もうとしている夢幸を止める魔理沙の姿もあった。

\*\*\*

それから、ヤマメが落ち着くのを待ち、落ち着いたのを見ると、今度はルカの方に近付いた歩。

「なあ、ルカ」

「何だ」

どうやら、会話は普通に出来る様である。

「姿ぐらいは……駄目か？」

「……」

歩の言葉に逡巡すると、少し如月の背から顔を出した。

「ありがとうな、ルカ」

そうお礼を言うと、ルカは「まだ姿がマシだからだ」と言った。

「もし虫の姿での蜘蛛だったら……」

「だったら？」

「凍らせた」

「……あはは」

そんな会話をしてからヤマメの前へと戻ってきた。

「じゃあ、ヤマメ。やろうか、弾幕ごっこ」

「うん！お互い、楽しもうよ!!っ」

ヤマメの笑顔が合図となり、弾幕ごっこが始まった。

## 第二百二十七話

ヤママと歩は弾幕を打ち合っていたが、どうやら歩はその弾幕を撃つのが苦手な様で、ヤママに押し負けている。

「やっぱり歩は弾幕は苦手なんだね!!? ほらほら!!?」

「くっ!!?」

ヤママはそう言いながらもどんどんと歩に弾幕を打っていく。

その数は徐々に増えていく。

「でも、コレだと面白くないよね? そう思わない? 歩」

ヤママはそう質問すると同時に、少し弾幕の量を減らした。

「そうかな? 俺は面白いと思うよ」

対して歩は本当に面白いのか、笑みを浮かべている。

「そう? なら良いけど。じゃあ、一枚目、行くよ!!?」

そう言うのと、ヤママはスペルを宣言した。

「罨符『キャプチャーウェブ』!!?」

すると、ヤママを中心として八本の蜘蛛の巣の様な形をして、放射線状に弾幕が広がった。

その後、一度ヤママに収束したかと思えば、今度は全体的にばら撒かれた。

「これぐらいなら避けるのも簡単だね」

歩はそう言うのと、自分の方に飛んできた弾幕を全て避けた。

「むく、もうちよつと多くしても余裕そうだね」

「そうかな? じゃあ、次は俺からだ!!?」

そして、今度はお返しとばかりに歩もスペル宣言をした。

「同行『一本釣りヒッチハイク』!!?」

その後、歩はヤママに釣り針を引つ掛けることに成功した。

「あ! しまった!!?」

「そくれ!!?」

その掛け声と共に歩はヤママを釣り上げる様な形で自分の方へと引き寄せた。

しかし、ヤママもただやられるわけじゃない。

「よつと!!?」

歩がヤマメを釣竿で突き刺す直前にヤマメは身体を捻り、それを回避し、それから歩に向けて弾幕を撃ち放った。

その距離は殆ど間近だったにも関わらず歩は反射とも取れる速度で後ろへと後退し、それを回避した。

勿論、ヤマメに対して付けていた釣り針は既に回収している。

「今のは当たると思ったのにな」

「いや、結構危なかったよ……ふう」

そんな安堵の溜息を漏らした歩に対して楽しそうな笑みを向けるヤマメ。

彼女はこの弾幕ごっこを本気で楽しんでいる様子である。

「じゃあ、次行くよ」

「ねえ?休ませてくれても良くない?」

「良くない!スperl!!?」

そんな会話をし終わると、歩は何が来ても良い様に構えた。

「瘴符『ファイルドミアズマ』!!?」

すると、針型の弾幕が渦巻き状に設置され、そのままそれが全体へと拡散された。

しかし、歩はまたまたそれを簡単に避けてみせた。

「あちやく、これも避けられたか」

「それじゃあ、俺達も早く進まないといけないから、良いね?」

「良いよ!但し、当てれたらだけどね!!?」

「それじゃあ行くよ!!?旅符『流れ三つ又別れ道』!!?」

そう言うと、歩の釣竿から三方向に槍型の弾幕が飛んでいった。

その三方向の丁度中心にヤマメは居るため、ヤマメはそれを避ける様に上へと回避した。

しかし、今回に関してはそれは愚策である。

「同行『スピリット流れ星シュート』!!?」

そんな宣言の後、釣竿がヤマメに向けて投げられた。

それは見事にヤマメの服に命中した。それも狙って投げたのか、はたまた偶然なのか、それはヤマメの振袖に刺さっていた。

それも、簡単に抜けるとは思えないほど深くに。

「しまった!?!?」

「これで……終わりだ!!?」

そう宣言する歩はそのまま空中に地面でもあるかの様に跳躍すると、ヤマメに対してジャンプキックをお見舞いした。

\*\*\*

「痛た……最後のアレは痛かった」

「ごめんごめん。でも、アレは弾幕ごっこだったから……」

「私からしたら弾幕ごっこに見えたのは二枚目だけだったがな」

「ルカ……それを如月さんの後ろから言われても……」

「まあ、蜘蛛が駄目だから仕方が無いのかな……」

「うう……」

「よしよし、ヤマメ。これは仕方ないよ、うん」

ルカの蜘蛛嫌いに対して涙目なヤマメである。

「おい、何時迄もそんな事を続けているつもりだ。さっさと行くぞ」

「それもそうね。その土蜘蛛」

「何? 赤白巫女」

「あの糸なんとかしなさい」

霊夢はヤマメが先へと続く道を阻害するために設置した蜘蛛の巣を指差しながらそう指示した。

「あ、ごめんごめん。ちょっと待ってて」

ヤマメはそう言うのと、自分が設置したその糸を切り、先へ通れる様にした。

「さ、どうぞ。この先が旧地獄へと続く道だよ」

ヤマメのそんな言葉を聞くと、全員そのまま先へと進んだ。

ただ、歩だけはヤマメから、

「歩! また遊んでよ!!?」

「良いよ、また会った時に遊ぼう!」

そんな約束を取り付けられていたが。

\*\*\*

霊夢達は地底へと続く大穴を進んでいると、ようやく地面へと降り

立つことが出来た。

「此処が旧地獄……」

「?ねえ、橋の先に誰か居るよ?」

想起が指を指した先にいたのは、金髪のショートボブで緑目、そしてエルフ耳の少女であった。

その少女は橋の欄干に肘を立てて立っていた。

「……これは、橋を通って良いのか?」

「良いんじゃないか?というか、通らないと異変を解決出来ないわけだしな」

ルカが首を傾げてそう言うと、それに応える様にして如月がそう言った。

「そんな事を気にする必要はない。さっさと行くぞ」

そんな一行に夢幸はそう言うと、さっさと橋を渡ってしまった。

「お?何も言わないみたいだから私達も行こうぜ!」

魔理沙はそれを確認してから夢幸の後に続く様にして橋を渡った。

「え?でも、許可は取った方が……」

「ほら、さっさと行くわよ。葵」

「れ、霊夢!?!?」

葵は霊夢に引き摺られる形で橋を渡った。

「……何も言われない様だから行くか」

「そうだな」

如月のそんな言葉から、残っていた全員が橋を渡った。

「さて、行くぞ」

「なあ?私達の目的の場所は何処なんだ?」

「あ、そういえば場所を聞いてなかったね」

「葵、此処はお前が頼りだ。案内を頼む」

「あ、うん」

葵は苦笑しながら了承した。と、そんな時に後ろから、

「妬ましいわね」

そんな声が聞こえてきた。

「……え?」

葵はその声がした方向……金髪ボブの少女の方へと顔を向けた。

その少女は少し葵達を睨みつけるようにして見ている。

「あ、えつと……」

「貴方達、地上から来たんでしょ？」

「そうだが？」

夢幸が本当に迷惑そうな顔をしながら受け答えた。

「そう、本当に妬ましいわね。地底だと光は届かない。何時でも光が届いてる所から来た貴方達が妬ましいわ。だから、私は貴方達を討つわ」

そう言うのと、その少女は欄干から手を外し、戦える様な体制を取った。

「ふん、そんな事で貴様は俺達の行く道を妨げたのか。愚かだな」

「は？」

夢幸のそんな言葉に対して明らかに苛立った様子を見せるその少女は夢幸を睨み付けた。

「……決めたわ。貴方を相手に指名するわ。負けたらさっさと帰りなさい。私が負けたらもう邪魔はしないわ」

「……良いだろう。先へと進もうとしていた俺と魔理沙を妨げただ。それ相応の返しをしてもらわないとな。それで、貴様の名前は何かだ」

夢幸がそう問いかけると、相手はそれに返した。

「私は『水橋パルスィ』よ。種族は橋姫。妬ましいから貴方を討つわ!!」

その言葉と共に、弾幕ごっこは始まった。

## 第二百二十八話

弾幕ごっこ一発目のスペルは直ぐに宣言された。

「恨符『丑の刻参り』!」

その宣言後、パルスイは夢幸が居る場所に小型弾幕を撃った。

しかし、夢幸はそれを簡単に避けた。

まあ、避けたと言うよりもサーフボードに乗って空中へと移動したと言うのが正確なのだが。

「……なんだ、そのスペルは俺狙いの筈なのにずっとその場を打ち続けるつもりか?」

「うっさいわね。これがスペルなんだから仕方ないでしょう?」

それを言うのと、弾幕を撃つのを一度辞め、今夢幸がいる空中へと再度放った。

しかし、これまた少し位置を変えるだけで避けることに成功していた。

「簡単過ぎてつまらないな」

「貴方、本当にムカつくわね」

「ふっ、そんな言葉は俺に勝ってから言え。まあ、お前では俺に勝てはしないがな」

それだけを言うと、夢幸はパルスイの横へと移動し、ゼロ距離で弾幕を撃った。

「きゃあ!!?」

勿論、スペル発動中のパルスイは避けることは叶わず、あえなく当たった。

しかし、地面に一度倒れたパルスイは直ぐにまた起き上がった。

「くっ!!?まだ私は負けてないわよ」

「それが何時まで続くか、見ものだな」

夢幸はそれを言うと、一度距離を取った。

「次行くわよ!!?嫉妬『緑色の目をした見えない怪物』!!?」

すると、緑色の弾幕がパルスイの近くに現れ、そのまま夢幸がいる方へと向かっていった。



その動きは蛇を沸騰させる動きであった。

「まるで蛇の様に俺を追ってくるスペル……成る程、意味としてはこれは『嫉妬』を表しているわけか」

『感情』というものは表に出てくるものが多数である。

『楽しい』『嬉しい』などと言ったものは笑顔を見せ、『悲しい』『苦しい』などと言った感情は涙を出す。

しかし、『嫉妬』と言った感情は表に出ない。いや、出にくい。それが例え表に出ていても気付くものは少ない。

そんな『嫉妬』を怪物として例えたスペルだと夢幸は解釈したようだ。

「さあ、これはどうするのかしら？」

パルスイは笑みを浮かべてはいるものの、油断なく構えている。

夢幸が自分より実力が上なのはどうか分かってはいるようだ。

「ふん、こんなものは薙ぎ払ってやる。光天『ジャツジライトセイバー』」

夢幸が此処でスペル宣言をすると、超巨大な光の剣を二つ持ち、その片方ではあるが振り下ろし、弾幕を消し飛ばした。

「嘘ツッ？………だったら、これよ!!？舌切雀『謙虚なる富者への片恨!!？』」

すると、パルスイがイキナリ二人に増え、片方が大型弾幕を、もう片方が小型弾幕を撃ってきた。

(舌切雀と言ったか………となると、『彼方』は偽物か。しかし、邪魔だな………)

夢幸は何故かスペル名でどんなスペルなのかを予測して行動を考えていた。

考えてる最中でも弾幕を避けているが。

そして、夢幸は『わざと』大型弾幕を撃っている方のパルスイへと弾幕を放った。

そして、一定以上与へ続けているとそのパルスイは消え、それと同時に打ち返し弾が夢幸を襲う。

しかし、それさえも持っていた光の剣を薙ぎ払うようにして動か

し、弾幕を消し飛ばした。

「……消えたか」

だが、そこでその剣は消えてしまったようだ。

「スペル！」

パルスィはそんな夢幸を待つことはせず、次のスペルを放った。

「花咲爺『シロの灰』!!?」

すると、夢幸の方へと大玉弾幕が放たれた。

その軌道上には六つの桜の花のような形をした弾幕が設置されていた。

夢幸はそれを黙ってよけようとしたが、その桜があるためか、避けるのを妨害してくる。

「……仕方ないな」

そう小さく零すと、サーフボードを持ち、パルスィの方へと向けた。

「? 貴方、何をする気?」

「こうするのさ。スペル……」

そう言うと、夢幸のサーフボードの中心に魔力が集まり始めた。

そして……、

「魔砲『カイザースパーク』」

まるで魔理沙のスペル『マスタースパーク』の様なスペルを放った。

此処で違いを言うなら、それは魔理沙のよりも威力があり、その分、燃費が悪い事だろう。

その砲撃はそのまま弾幕達を飲み込み、遂にはパルスィさえも飲み込んだ。

\*\*\*

「大丈夫ですか!?!?」

弾幕ごっこが終わると、直ぐに葵はパルスィの方へと向かった。

夢幸からではなくパルスィなのは、外見的にはパルスィの方が酷いからである。

「夢幸がアレを使うなんて珍しいな。燃費が悪いって言う癖に」

「ああ。もし一枚目のスペルが残っていたのなら、アレを使うことはなかったんだがな。まあ良いだろう。魔理沙、ちゃんと見ていたか

？」

「ああ、勿論だ！良い勉強にもなったしな!!？それに、夢幸のカッコ良い所も見れたから私としてはプラスな事ばかりだ!!？」

「ふっ、そうか」

「そう言うと、また魔理沙の頭を撫で始めた。」

「……アレ、今日何回目？」

「いや、二回目だよ」

「霊夢の言葉に対してそんな事を言う想起である。」

「……で？燃費が悪いのを使っただが、魔力は大丈夫なのか？」

「ふん、心配される事などない」

ルカの言葉に対してそんな返しをする夢幸に、ルカは溜息を吐くと、夢幸の肩に手を置いた。

「おい、何をするつもりだ」

「多分、この先私が戦うことはないかもしれないのでな、力の受け渡しさ……種類は全然違うが」

ルカはそう言いながらも力を流し、夢幸は燃費の悪さからきていた怠さが和らいだ。

「……礼は言わないぞ」

「礼を言ってもらうためにやってないからそれで良い。というか、そこで言ってもらっても私が困る」

そんな会話をしていると、パルスイへの治療が終わった様で、今度は夢幸への治療に入ろうとしたが、それは夢幸本人に断られた。

「さて！じゃあ行くぜ!!？」

「といっても、何処へ行けば良いのよ」

「そこは霊夢の勘で……」

「私の勘が万能だと思ふな」

「え？違うの？」

「違うわいわよ」

そんな風に話していると、

「待ちなさい」

またパルスイが話し掛けてきた。

「……邪魔はしないんじゃないかなかったか？」

如月がそう問うと、パルスィは肯定した。

「ええ、そうね。邪魔はしないわ。……で、何処へ行こうというのかしら？」

「……地上で異変が起こってるんだ。イキナリ間欠泉が噴き出すは怨霊が蔓延るはで……」

歩がそう説明すると、パルスィは少し逡巡した後、口を開いた。

「多分だけど、それは『地霊殿』で起こってる異変だと思うわよ……そういうえば、なんか彼処、最近忙しなかった様な……」

「忙しなかった？」

「ええ、地霊殿で飼われてる『鹿』と『猫』がなんか慌ててたのを一度目撃したことがあるわ。だから、多分彼処で……」

「案内を頼めませんか？」

パルスィがそんな事を言っていると、葵がそう頼んだ。

「は？なんで私が……」

「お願いします」

パルスィからそんな言葉を受けながらも、葵は頼むのをやめず、頭を下げた。

それを見たパルスィは少しばかり沈黙すると、溜息を吐いた。

「はあ、分かったわよ。案内すれば良いんでしょ？すれば」

「!!?ありがとうございます!!?」

葵からの笑顔を見て、パルスィは少し驚いた様な顔をしたが、少し頬を染めた後、顔を横に逸らした。

「べ、別に……これ以上頼み込まれても迷惑だったからよ」

「パルスィさんは優しいんですね」

「だから違うわよ!!?」

そう反論した後、そそくさと歩き出した為に全員がパルスィについて行った。

## 第二百二十九話

パルスイの案内で異変場所である『地霊殿』へと向かう葵達一向。そして、『地霊殿』と思われる場所が見えて来た。

「彼処が貴方達が探してた異変場所と思われる場所、『地霊殿』よ」

「……なんというか」

「名前的には東洋風だが、外見的には西洋みたいだな」

ルカがそんな感想を言うと、また歩みを進めるが、少し歩いた所で一向は歩みを止める。

一向の目の前に居た四人。うち二人は角がある為鬼だと直ぐに分かる。

そして、その場に居ただ一人の男性。

姿は黒いツナギを着て、ウニの様なツンツンしている髪、そこから生えている鹿の角。

そして、その姿を見た葵は……、

「ひっ!!?」

涙目になった。

それは無理もない話である。何故なら、その男性の角を中心として帯電しているのだ。

『雷』が苦手な葵にとっては苦手なタイプである。

「葵、大丈夫?」

「……」

想起が心配そうにそう声を掛けるが、葵は涙目のまま声を出さずにフルフルと首を横に振るだけである。

「……駄目そうだな」

前回の異変で葵が『雷』が苦手と知った如月は心配そうな顔をしている。

「……仕方ないだろ。うん」

何時もなら弄るルカも、蜘蛛の事もあってか少し同情していた。

「おい、さっさと進むぞ」

そんな事など意にかえすことなく先へと進もうとする夢幸。

「いやいや、葵がこんなだし、少し待とう。な?」  
「……そうだな」

しかし、それも魔理沙からの説得により意見を変えることとなった。

実は夢幸は優しかったりする……本人は否定しているが。

そんな会話をしていた所為か、黒い猫耳が生えて、二本の黒い猫の尻尾が生えている赤髪の少女が此方の方に顔を向け、近付いて来た。

「お姉さん達、もしかして異変を解決しに来てくれたのかい!?!」

「え、あ、はい……」

葵はそんな風に曖昧な返事をした。

曖昧になってしまったのは、見た目的には『猫又』だと思っていたが、近付いて来たおかげで、人間と同じ位置にも耳が有ることが分かり、それに少し困惑したのだ。

(この子……猫又じゃない。猫又に似てるけど違う……この子の種族は何?)

そんな風に考えていると、霊夢が葵の代わりに聞いた。

「あんた、姿は何方かという猫又に似てるけど、違うわね。種族は何?」

「アタイは……おっと、先に名乗らないとね。アタイは『火焰猫 燐』。

『お燐』って呼んでよ。種族は『火車』さ」

そんな会話をしていると、後ろから残り三人がやって来た。

勿論、『雷』が駄目な葵は再び涙目状態に戻ったが。

「燐〜! どうしたんすか?」

「あ! 角!!? この人達が『お空』を止めてくれるかもしれないよ!!?」

「ほう?」

「へえ〜」

『角』と呼ばれた男性は嬉しそうな顔をし、二人の鬼は戦いたそうな顔をしている。

一人は一本の角を頭から生えている。もう片方は二つの小さな角が頭から生えている。

「で? あんた達は誰なのよ」

霊夢が警戒しながら聞くと、角はまた笑顔でそれに答えた。

「俺は『稲光 角』つす!!?よろしくつす!!?」

そして、残った鬼二人はやはり好戦的な笑みを浮かべている。そのうちの一人、角が一本の体操服の様なものを着た鬼が自己紹介を始めた。

「私は『星熊 勇儀』さ。あんたら、私と一戦交えないかい?」

「待て、勇儀。まだ私の紹介が終わっていない」

勇儀は今まさに戦おうとしたが、それは小さな角が二本の、黒髪の美少女と呼ばれても遜色がない鬼が肩に手を置いて止めた。

「ああ、悪いね」

「いや、大丈夫だ。……さて、私は『月詠 陽炎』。鬼の種族は酒呑童子だが、鬼子母神だ。よろしくな」

鬼の頭領である陽炎はそう言った。

それを気に、葵達も全員自分の名前を言うと、陽炎の顔にまた好戦的な笑みが浮かんだ。

勿論、その隣にいる勇儀も同様だ。

「さて……お前達は鬼がどんな種族かは知ってるな?」

「……え」

「まさか……」

そこで陽炎は一層楽しそうな顔をし、

「さあ! 私達と力比べを『クスクス、カゲちゃん、それは駄目よ♪』……レティシアか? 何処から……」

そう言つて、周りを見た陽炎。

しかし、それは歩がポケットにしまっていた陰陽玉を見て、直ぐに解決された。

「……成る程、これでか」

『クスクス、ええ♪これで連絡出来る様になつてるの。それで、もう一度言うけれど、カゲちゃんは戦闘したら駄目よ』

「何故だ」

陽炎は不満そうにそう言うと、レティシアは何時も通り笑いながら言う。

『クスクス、だって、貴女は強過ぎてそこに葬達じゃ相手にならないじゃない。……貴方の目の前にいる如月の中にいる凜華は大丈夫でしようけど、それ以外だとコテンパンにされるじゃない』  
「しかしだな……」

まだそれでも渋る陽炎に対して、レティシアは、  
『クスクス、それならカゲちゃん。取引しないかしら？』  
そう持ち掛けた。

「取り引き？」

『クスクス、ええ♪貴女は此処で戦わない。その代わりに、私は貴女の好物である『抹茶』を用意するわ♪』

「!??それは本当か!??」

『抹茶』という言葉に食いついた陽炎。

その目はとても輝いている。

「その言葉に嘘偽りは無いな!??」

『クスクス、鬼である貴女に何で嘘を付かないといけないのよ』

レティシアはまた笑いながら言うが、言葉尻からは呆れを感じることが出来る。

多分、陰陽玉の向こうでは「仕方ないか」と言う様な顔をしていると予測出来る。

そして、陽炎はその提案に……、

「分かった。戦わない」

簡単に乗った。

(あれ?こいつチヨロい?)

(チヨロ過ぎるな)

此処で何故か思考が一致した霊夢と夢幸であった。

「はあ、本当に陽炎は『抹茶』に弱いね」

「あ、あはは……」

コレには流石に苦笑いな葵である。

「……これで鬼子母神?本当に大丈夫なのかしら……というか、美人過ぎて妬ましいわね」

そんな葵の近くでパルスィは陽炎の事を心配しつつも妬みを出し



た。

「でも、それで私が辞める理由にはならないね」

そして、陽炎の事で多少心配になるが、それでは自分が辞める理由にならないという勇儀。

それに対して、レティシアは勿論答えた。

『クスクス、ええ。私は貴女を止めるつもりは無いわよ、勇儀。だから、貴女は戦って良いわ』

「お？良いのかい？」

それを聞くと、先程の事で消えていた獰猛な笑みを浮かべた勇儀。

『クスクス、ええ。ただし、貴女の相手はその子達じゃないわよ』

「だろうね。さつきからずっと闘志を私に向けてる奴がいるからね」

そう言いながら、勇儀は如月を……いや、如月の中にいる『凜華』を見据えた。

その言葉を受け、如月の中から凜華が出てきた。

勿論、此方も楽しみと言わんばかりの笑みを浮かべている。

「ふふ、妾はずつと退屈しておったのじゃ。じゃから、勇儀を見た時から早く戦いたいとウズウズしておったぞ」

「だろうね。なんせ、最初っから私に……いや、私だけじゃなくて陽炎にもその闘志を向けてたんだからね……それじゃあ、お互いの意思も確認したからね」

「そうじゃな……やるぞ」

そう言うと、全員がいる場所から結構離れた場所へと一気に移動した二人。

そのスピードはその場にいた陽炎以外の全員には見えることは叶わなかった。

「あ、あいつら……どれだけ戦いたかったんだよ……」

如月はそれに対して溜息を吐くと、その近くにはさつき離れた筈の凜華が立っていた。

「……え？」

「如月、流石に妾達がぶつかるこの地底が危ないからの、結界を張つてもらおうぞ」

「ちよ!?？」

「ああ、葬にもじゃ」

「ええ!?？」

凜華はそう言うのと、直ぐに二人の襟首を掴み、また勇儀がいる場所へと戻っていった。

「……何だったのよ、アレ」

「いや、誰も分からないよ……」

「あ、ねえねえ、お姉さん達……ちよつとお願ひ聞いてもらえる?」

そんな中、意外と早めに正常に戻ったお燐。

「ん?何かあるのか?お燐」

それに対してお燐と知り合いで、勇儀達とも勿論知り合いである歩はお燐にそう言った。

やはり、知り合いというのは他の人達よりも耐性があるようで、さほど驚きは無かった。……さっきのは別だが。

「アタイはこの異変を解決して欲しい。けど、お姉さん達が本当に解決出来るか、知りたいんだ」

「遠回しね。もっと簡単に言いなさい」

霊夢がそう言うのと、角が言った。

「つまりは、俺達に実力を見せて欲しいんすよ」

「お?良いぜ!!?見せてやるぜ!!?」

魔理沙はとてもやる気である。

「……なあ、丁度良いから、タツグでやれば良いんじゃないか?その方が早く終わると思うぞ」

「タツグ?」

ルカのそんな提案に歩は聞き返した。

「ああ。霊夢と歩がお燐を、魔理沙と夢幸が角を相手にすれば良い。そうすれば早く終わると思わないか?」

ルカは別段、嘗めてこんな事を言ったわけではない。ただ、勝つにしても負けるにしても、早めに終わるなら……と、そんな考えで言ったのだ。

しかし、それは相手には分からない。

「あれ？アタイ達嘗められてる？」

「なら、俺達の実力をお見せするっす!!？」

お燐と角はルカのそんな言葉を受け、余計にやる気になった。

「ふ、魔理沙とか。なら、負けはないな」

「だぜ！夢幸となら負けはないな!!？」

角を相手にする魔理沙と夢幸は互いを信頼している為か、そう言葉にした。

「霊夢」

「何？歩」

そして、霊夢と歩はお互いの目を合わせた。

「俺が霊夢を守るよ」

「そう、有難いわ。じゃあ、私が歩を守るわ」

「うん、有難う」

お互いに笑みを浮かべると、真剣な顔をしてお燐の方を向いた。

そして、此処から三つの戦いが始まるのだった。

## 第三百三十話

如月と葵を連れて勇儀の元へと戻ってきた凜華は、葵達に早く結界を張るように急かしていた。

「如月!!?早く結界を張るのじゃ!!?」

「だあ!!?もう、分かったよ!!?葵も頼む」

「わ、分かりました」

凜華の執念に苦笑気味な葵も如月と一緒に結界を張った。

それを確認した凜華と勇儀はお互いを見据え、凜猛な笑みを浮かべた。

「ふふ、ようやく妾も戦えるの。本当に久し振りにじゃ……くくく」

「あんた、強そうだね。私も楽しみだよ」

そうして、お互いを見ることだった数秒、二人は同時にぶつかり合った。

その勢いからなのか、結界が震えた。

「凜華のやつ……やり過ぎないと良いが……」

「うう、私も戦いたい……」

「……え!??」

葵は自分の後ろから急に声がしたことに驚き、直ぐに振り向くと、そこには陽炎が立っていた。

しかし、その陽炎自身は本当に戦いたい様で、ソワソワとしている。

だが、そこは鬼。約束事は破らない。戦いたくとも、どれだけ羨ましくとも見ているだけに留まっている。

「か、陽炎さん……何時の間に?」

「ん?勇儀達がぶつかり合った瞬間にだが?」

「あ、そうだったのですか……」

そんな会話をしていると、またもや結界が震えた。しかし、壊れる様子は見えない。

二人が張った結界は強固の様だ。

そして、勇儀と凜華の様子を見ると……お互いの拳をぶつけ合っていた。

どうやら、お互いに殴ろうとした結果、拳同士が当たった様だ。  
そして、そのまま一度距離を取る両名。

「ふふふ、勇儀との戦闘は本当に楽しいの♪妾はずっとこの時を待っていたのじゃ!!?」

「そうかい。私も嬉しいよ。陽炎と同じぐらい……いや、それ以上かもしれないね。これ程強い奴と戦えるのは!!?」

そう言うと、勇儀は足に力を込め、踏み込み、凜華の方へと一直線に向かっている。

その手は勿論、拳の形を作っている。

それに対して、凜華は避けもせず、かと言って引もせず、またもや拳をぶつけ合った。

それによってまたもや震える結界。それはまだ壊れる様子を見せない。

「結構強固に出来たな。結界」

「……」

「?葵?」

如月は結界が割れる心配をしていたのか、安堵した顔をしているが、葵は訝しげな顔をしてその結界を見ている。

そして、何を思ったのかその結界に近付いた。

「お、おい!!?結界が有るからって危ないぞ!!?」

如月のそんな声は聞こえていないのか、歩みを止めずに近づく葵。

そして、結界に手の平を合わせると、目を閉じて集中し始めた。

「……葵?」

そして数秒経つと、目を開け、元の位置へと戻り、陽炎の方へと顔を向けた。

その顔は先程の訝しげな顔とは違い、寧ろ尊敬に近い顔をしている。

「?」

「結界を張るの……陽炎さんも手伝って下さったのですよね?」

(あ、成る程)

如月は多少なりとも気付いていたことであるため、そこまで驚きは

なかった。

「……まあ、な。あの二人が戦うと本当に地底が危ないと思ったからな。私も力を使ったんだ」

「凄いですね!!? 私、結界とか補助が得意……と言うよりもそれに特化してるのですが、彼処まで強固な物は出来ないんです。陽炎さんは本当に凄いですね!!?」

「なっ!!? わ、私はす、凄くなんかないぞ!!? / / /」

そんな事を言うと、赤い顔をそっぽに向ける陽炎。しかし、褒められた事に嫌な気分はない様で、何方かと言うと照れているようだ。

「如月さんも凄いです!!? 私もまだまだと言うことですね」

そして、如月の事も褒めると、自分はこの二人に結界の事で負けていると思ったのか、負けないように努力を怠らないことを心に決めた葵。

対して如月はというと、

「いや、俺よりも葵の方が……これ、聞いてないな」

若干、苦笑いしていた。

そんな会話をしていると、一際大きな音が鳴り、何事かと全員が音がした方……凜華達の方に顔を向け直すと、そこにはお互いの顔を殴った状態の二人がいた。

しかし、その二人はその状態でも笑みを消さず、また殴り合いになっっていた。

お互い、全く防御をしていない。本当にただの殴り合いを。

「……」

これを見た葵は心配より先に、こんな光景を初めて見たからなのか、ポカーンとして見ている。

口も半開きである。

そんな時、ピシツと言うような音が鳴った。

「あ、結界が……」

「!!? な、直しましょう!!?」

葵のその言葉に陽炎は待ったを掛けた。

「大丈夫だ。もうすぐ終わる」

「え?」

そして、陽炎の言葉は直ぐに分かる事となった。

結界の罅がドンドンと酷くなつていく。

それでも、凜華と勇儀は殴り合いを辞めない。

……しかし、途中で勇儀の足が少し崩れてしまった。

「なっ!!?」

「妾の勝ちじゃ!!?」

「……そうだね。私も久し振りに楽しかったよ」

凜華の楽しめたと言うような顔に、勇儀もまた笑みを浮かべて見ると、凜華からの強烈な一撃（思いつきり殴っている）を喰らい、そのまま飛ばされた。

そして、勇儀はそのままボロボロな結界に当たり、結界は割れてしまった。

「だ、大丈夫ですか!!?」

葵はそれを見ると勇儀の方に駆け寄ると、能力を使い、治し始めた。

「あく、有難うね、お嬢ちゃん。……あんた、凜華つて言ったね?」

「ん?そうじゃ」

「久々に楽しい勝負が出来たよ。またやりあおうじゃないか」

勇儀は先程負けたと言うのに、まだ好戦的な笑みを向ける。

対して凜華も好戦的な笑みを浮かべた。

「ああ、勿論じゃ」

そこで二人は互いの拳をぶつけた。

「……ふう、これで一応終わり」……何ですか?先程の大きな音は」

「……(やばっ!!?)」

如月はその声を聞くと、ギクつと肩を震わせた。

そして、まるでブリキの人形の様にくっくりと振り向くと、そこには薄紫の髪と三つ目な目が特徴的な少女が立っていた。

\*\*\*

魔理沙と夢幸は少し手こずっていた。

相手が魔理沙達より強いのか?と問われると、それは違うと答える事になる。

なら、何故手こずっているのか？それは、相手の『素早さ』にである。

「あー！こいつ、速すぎて当たらん!!?」

さつきから角に弾幕を当てようと頑張っている魔理沙はそんな事を大声で言った。

「それはそうつすよ!!? なんだって俺は『雷獣』なんすから!!?」

対して角は、魔理沙達に自分の種族を明かした。

『雷獣』

この種族は日本の伝承の中でも有名は方だろう。

漢字の通り、『雷の獣』なのだ。

その体からは何時も雷が帯電しており、その雷には毒があると言われている。

……角には毒は無さそうだが。

「魔理沙、落ち着け」

「でもなく、夢幸。これだと全然当てられないぜ?」

「魔理沙、俺達はタツグを組んで相手をしているんだ。一人でやっているわけじゃない。言いたいことは分かるな?」

夢幸が魔理沙に対してそう言うと、魔理沙も意味が分かった様だ。

「!!? そうだな!!? よっし!!? やるぜ!!?」

「その息だ。手加減はするなよ、魔理沙」

「私が手加減? そんな事はあり得ないぜ!!?」

魔理沙はそう言うと、箒に跨り、角を後ろから追いかけてながらも弾幕を撃った。

「うわ！危ないっすね!!?」

角は後ろからの攻撃に対してそんな事を言うと、電気を帯びた弾幕を魔理沙の方へと撃った。

それに関して、魔理沙は特に何もせず避けた。

「うわ、当たったら痺れるな。アレは。だったら、当たらなかつたら良い話だぜ!!?」

「そんな上手く「光天『ジャツジライトセイバー』」ツ!?」

角はその先の言葉を言わず、右へと避けた。



すると、その逆に左から光の剣が振り下ろされた。

「危なかったつす……」

「あー！惜しい!!?」

「……避けられたか」

角は今の攻撃に冷や汗を流し、魔理沙は夢幸の攻撃が当たらなかったことに対して悔しがっていた。

「ならお返しつす!!? スペル!!? 抗符『アブリユートブレット』!!?」

そう宣言すると、角の周りに弾幕が十個現れ、そのまま魔理沙と夢幸の方へと撃たれた。

魔理沙と夢幸は一度その場を離れるが、それぞれ五個の弾幕が二人の後を追った。

「追尾弾幕か!!?」

「言っておくつすけど、それからは逃げれないつすよ!!?」

「そんなのこれ見たら分かるぜ!!?」

魔理沙はそう言うのと、星型の弾幕をその弾幕に当て、撃ち落そうとした。

しかし……、

「げ!??」

撃ち落とすことは出来なかった。

「……撃ち落とすことは不可能と言うことか。なら……魔理沙!!?」

「!!?」

魔理沙は夢幸の目を見ると、何を言いたいのか分かった様で、夢幸がいる方へと向かった。

(?何をやる気つすか?)

角のそんな疑問は直ぐに晴れることとなる。

魔理沙と夢幸の後を追っている弾幕全てが集まったのを見計らい、夢幸はその場に立ち止まり、サーフボードの中心を弾幕の方へと向けた。

その中心には段々と魔力が集まっていく。

「魔砲『カイザースパーク』」

夢幸は本日二度目の『カイザースパーク』を撃った。

普通はそう何度も何度も撃てるものではないのだが、この前にルカからの力の受け渡しによって、また撃つ事が出来たのだ。

そして、その砲撃の結果は……、

「やはりな」

見事、撃ち消す事に成功した。

まあ、この場合、撃ち消すと言うよりも消滅の方が正しいのかもしれないが。

「あく、やられたつすね」

「凄いぜ!!? 夢幸!!?」

「当たり前だ。俺は天才だぞ」

夢幸はそんな自画自賛をする。

しかし、そんなのを相手が待ってくれるはずがなく、

「じゃあ、次行くつすよ!!?」

そう言うのと、最初から持っていた刃が付いているランス二つを強く握ると、

「帯電『サンダーバズーカー』!!?」

スペル宣言をした。

すると、角の角に雷が落ちた。

……遠くから音に反応して小さな悲鳴が聞こえた気がするが気の所為だろう。

そして、そのままランスの方へと電気を流し、それを纏わせた。

その状態を確認し終わると、角は魔理沙達の方へと突進していった。回転しながら。

勿論、ただの突進と言うわけでもなく、結構速いのだが、魔理沙と夢幸はそれを回避した。

「さて、決めさせてもらう。スペル、風車『トルネード乱舞』」

そう宣言した後、夢幸はサーフボードを角がいる方へと蹴り飛ばした。

それも、ただ蹴り飛ばしたわけではなく、回転させる様に工夫をして。

すると、そのサーフボードの回転は段々と早まり、対には竜巻が発生した。

「ええ!!?」

外だとこんな事は出来ないが此処は幻想郷。常識など通じない。

角はその竜巻に飲み込まれてしまった。

実はこのサーフボードには鋭利な刃が付いており、その刃が角を襲う形になっている。

「これぐらいじゃ、俺は倒せないっすよ!!?」

しかし、角はまだ倒れていない。

それに対して、夢幸は返した。

「いや、魔理沙が終わらせる」

「え?」

角は少し惚けたが、直ぐに自分の真上から力を感じ、上を向いて見ると、魔理沙がミニ八卦路を角の方へと構えていた。

「魔砲『ファイナルスパーク』!!?」

そして、そのまま極太レーザーを撃った。

その極太レーザーと竜巻が収まると、そこにはボロボロとなった角が倒れていた。

「やったな!夢幸!!?」

「だから言っただろ。魔理沙となら負けはないと」

二人はそんな会話をしていた。

\*\*\*

霊夢は弾幕を撃つのが苦手な歩に変わり、お燐に対して弾幕を撃っていた。

それに対してお燐もまた弾幕を放ち、撃ち落としていた。

そして、最初に動いたのは……お燐であった。

「スペル!!?呪精『ゾンビフェアリー』!!?」

すると、何体か青白い妖精が召喚された。

数としてはそこまで多くはない。

「何?あれ」

「死んだ妖精?妖精は死なないわよ?」

「いやいや、お姉さん、そこはツツコんだら駄目だよ」

お燐は霊夢の発言に苦笑いを浮かべる。

そして、そのまま弾幕を時計回りに乱射し始めた。

霊夢と歩はその弾幕を回避するために動くが、

「うわ!?？危なかった……」

ゾンビ妖精が接近してきた。

歩は襲われるかと思いい回避行動を取ったが、どうやらただ接近して来るだけの様で、それ意外には別段襲って来る様子を見せない。

「……これ、どうすればいいの?」

このゾンビ妖精の対応をどうするべきかと悩んでいる歩。

歩は旧地獄に何回か足を運んだ事があるが、その時はキスメやヤマメ、そしてもう一人の妖怪と弾幕ごっこで遊ぶ意外には弾幕ごっこをしたことがない。

勇儀に関しては数えれない。何故なら、弾幕ごっこではなく肉弾戦をしようと言うからだ。

陽炎との関係も結構友好である。

## 閑話休題

霊夢はゾンビ妖精に対して少し苛立ち始めてきた。

このゾンビ妖精、接近してくる事もあるが、弾幕から回避する時にとてつもなく邪魔なのである。

「こんな奴!!?」

霊夢は遂にそのゾンビ妖精に弾幕を当ててしまった。

その瞬間、ゾンビ妖精は後ろへと後退すると同時に打ち返してきた。

「しまった!??」

「霊夢!!?」

霊夢はそう言いながらも出来るだけ撃ち落として、スキマを作り、そこへと逃げ込んだ。

「……成る程ね、これは厄介ね」

霊夢の先程の様子をちゃんと見ていた歩は何事も無かったことに安堵の溜息を零した。

その後、先程の事でゾンビ妖精を撃つのは危ないと判断した二人は結局回避に専念し、ようやく時間切れとなった。

「あー、終わっちゃった」

「そうね……さて、あんた」

「ん？何？お姉さ……ひっ!?？」

お燐は霊夢の方へと顔を向けるとそこには……修羅の顔をした霊夢が立っていた。

「あんた……よくもまあ、こんな面倒臭いスペルをしてくれたわね？」  
「れ、霊夢……落ち着こう。な？」

歩は霊夢の顔を見て冷や汗を流しながらも止めるが、霊夢は止まらない。

「さっきのお礼に……私のラストスペルを撃ってあげるわ♪」

「お、お姉さん……怖いよ？」

「あんなスペルをやったあんたが悪い!!？スペル!!？『夢想天生』」

「うわあ!?？」

霊夢はお燐に対して、お情けなど一切出さず、結局は最強技を撃つたのだった。

……結果？言わずともお分かりになるでしょう？

\*\*\*

「うわああん!!？角〜!!？怖かったよ〜!!？」

「ど、どうしたんすか？お燐……」

弾幕ごっこが終わり、意識を取り戻したお燐は直ぐに角に抱き着き大泣きし始めた。

何時もなら嬉しいと思う角だが、今回ばかりはお燐がこんなな為にその感情は後回しとなっている。

「霊夢、お前、何したんだ？」

「魔理沙……そんなに気になるなら受けてみる？」

「遠慮しとくぜ」

魔理沙は霊夢に何があったのかと聞くが、その霊夢からの黒い笑み

を見ると、直ぐに断った。

「……それで、さつきからそこにいる薄紫の髪は誰だ」

夢幸はこのままだと話が進まないと思座に判断し、如月の隣に立っている薄紫の髪をした少女に話し掛けた。

そして、少女もそれに対して自己紹介をした。

「初めまして。私は『古明地 さとり』。種族は『覚』です。『地霊殿』の主をしております」

そう言っ、さとりは礼儀正しく頭を下げるのだった。

## 第三百三十一話

さとり連れられ、葵達は地霊殿へと入っていく。

その際、パルスイ達とは別れていた。

パルスイは橋の方へと帰り、陽炎は自身の能力を使って地上へと向かった。

ちなみに、陽炎の能力はレイシア並みにチートである。

さて、地霊殿のさとの部屋へと連れて来られた葵達。

その葵達の他にも、その部屋には居た。

漆黒の髪に蛇皮のロングコートを着た男性。

しかし、雰囲気から他の存在と異なる何かを感じることが出来る。

勿論、この雰囲気を受けて凜華はまた戦いたそうにウズウズし始めたが、それは如月が止めた。

歩以外の全員が誰なのかと考えていると、さとりはその心を読み、答えた。

「彼は『流竜泉 蜷局』。この地霊殿の裏手にある『龍眠湖』と呼ばれる湖に住んでいます。貴方方が来る一日前に地上に出て来ました」

「我が主から紹介があつた蜷局だ。よろしく頼む」

「さて、それでは「あ、ねえ？さとり」何でしょうか？歩さん……ああ、こいしですか？それが分からなくて……」

さとりが話し始めようとしたが、それを歩が止め、歩の心を読み、それにそう答えた。

『こいし』という存在はさとの妹だが、さとりとは違い心を読む為の瞳を閉じ、心を閉ざしてしまった少女である。

その能力は元はさとりと同じ『心を読む程度の能力』だったのだが、その瞳を閉じた為にその能力は封印され、『無意識を操る程度の能力』となった。

もしかしたら、部屋の中に居るのかもしれないが、その能力の所為か認知が出来ない。

さとの能力でも心を閉ざしてしまったこいしの心を読むことが出来ない。

だから、部屋の中にいるという証明が出来ないのだ。

「本当に、あの子は一体何処に……」

「そんな子がいるのね」

「うん。俺とも結構仲が良いよ」

霊夢の言葉にそう返した歩。

そして、さとりはタイミングを測り、説明を再開した。

「……さて、一応確認を致します。貴方は異変解決に来た、合つてますね？分かりました。……その異変主は紛れも無く私のペットです」

「え？ペット？」

魔理沙はその言葉に素っ頓狂な声を上げた。

「……やっぱり、お空だったんだね」

「はい。何故かは分かりませんが、ある日を境にお空に力が宿り、今はその能力を使って異変を起こしています」

「理由は？」

「『自分が貰ったこの力を使って地上を破壊して、灼熱地獄を生まれさせる』との事です」

「は？何その理由。巫山戯てるんじゃないの？そいつ」

流石の霊夢もキレた。しかし、それは歩が宥めて何とか抑え込むことが出来た。

「すみません、私の監督不行きが原因です」

「我が主、それは私が言うことだ。私はお空の一番近くに居るはずなのに、止めることが出来なかった」

蜷局は今の今まで寝ていた。

しかし、ある熱気を感じ始め、そして一日前に漸く地上に出てきたのだ。

蜷局は湖の主。そんな主が湖を放つといて湖から出ると、湖が干上がってしまう。その為、今までの中で一番に考え、そして行動に出た。

……この異変が始まったのもそこまで経っていないのだから、止めるなら今だろう。

そう考え付くと、全員がさとり達を説得（直ぐに承諾されたが）し、灼熱地獄跡の方へと向かった。



「そういえば、如月さんの近くにいた女性が勇儀と暴れていましたよね?」

「うっ、す、すまなかつた!!?俺が変わりに何かする!!?だから許してくれ!!?」

「でしたら、一週間。この地霊殿の使用人として働いてください。ついでに、勇儀達が戦った結果として残った地面も直して下さい」

「え?」

\*\*\*

「此処がお空がいる『灼熱地獄跡』です」

さとりに連れられやって来た所はその名前が嘘ではないと直ぐに納得させられる程に熱かった。

それも、猛暑日の時の暑さよりも熱い。

「お空!!?」

蜷局が大きな声でお空を呼ぶと、少ししてから黒い羽を生やし、黒髪の長髪に白のブラウスを着た女性がやって来た。

「あ〜・蜷局だ!!?ヤッホー!!?」

「お空、私はお空のやることを受け入れるが、これは流石に駄目だ。何でこんな事をした」

蜷局は確認のつもりでそう聞くと、さとりから聞いた事と似た様なことを言った。

しかし、その話の中にはさとりからは聞いていない『能力を与えた相手』の事も聞くことが出来た。

「……あの山の神達の所為か!!?」

霊夢はその話を聞き、利き手である左手に拳を作り、絶対にボロボロにすると決めたのだった。

「お空さん!!?この異変を今すぐ辞めて下さい!!?このままだと、地上が大変な事に……」

葵が説得するつもりでそう言うが、お空は、

「それは無理だよ。貴方達が来るのが遅かった。私が力を使うと間欠

泉が湧くのがから、無理だよ」

「なら、倒せば良いんだ。お前を」

と、そこで如月がそう言った。

「そうだね。僕も流石に地上を灼熱地獄に生まれ変わらせる訳にはいかない。だから、全力で止める」

「ふくん、じゃあ、止めれるものなら止めてみなさい!!?」

お空のその言葉を聞き、自分達が相手となる事を決めた如月と想起と相対する位置へと飛んだ。

「なら、始めようか」

「そうだね」

「やろうか」

## 第三百三十二話

お空からの弾幕をずっと避けている如月と想起。

時たま、弾幕で撃ち落としたりもするが、殆ど避けてばかりである。しかし、此処は灼熱地獄跡。跡とはいえ、したには残ったままの灼熱地獄。

その熱は想像していたよりも遥かに熱いのだ。

「如月さん、これだと僕達の方が……」

「……そうだな。早々に決着をつけないといけないな」

二人はそうやって相談すると、早く決着をつける為に、動こうとした。

しかし、それはお空がスペル宣言をする形で制限された。

「早く撃墜されちゃえ!!?核熱『ニュークリアフュージョン』!!?」

すると、お空が力を溜め出した。

お空のスペルを知ってる蜷局は、二人に対してアドバイスしなかった。いや、出来なかった。

この弾幕ごっこに蜷局が参加をしていたのなら、蜷局はアドバイスをしていただろう。しかし、今は蜷局は参加をしていない。

だから、助言をしてしまうと、この弾幕ごっこの邪魔をする事になってしまう。

声を出してしまえば、集中が途切れてしまう可能性があるのだ。

お空が力を溜め終えたと同時に何かが爆発した様な音がした。

その直ぐ後、超巨大な丸型弾幕が如月達に狙いを定めながらも放射状に飛ばされた。

「うっわ、避けにくい」

想起のその言葉は如月の内心にもある言葉だ。

しかし、それでも避けることに成功した二人に待っていたのは……、

「大量の弾幕かよ……」

お空が放った大量の青色の丸型弾幕。それも先程と比べると結構な小型だ。

それは流石の二人も手間取らずに避けていたが、またお空から放たれた超巨大弾幕が襲って、その小型の弾幕もあるのだから、避けるに若干苦勞している。

しかも、それに加えて熱さもある。二人の体力は大幅に削られていった。

「はあ……はあ……」

「あれ？どうしたの？もう限界？」

「これぐらい……凜華の修行と比べたら……」

そう言いながら思い浮かぶは凜華との地獄の特訓。

如月にとつて、それと比べるとこれはまだまだ楽な様だ。

「ど、どんな特訓をさせられてたんだろ……」

そんな如月に若干同情の視線を向けた想起は直ぐにお空に視線を戻した。

想起は自分がまだまだ未熟なのは分かっている事だ。

となると、弾幕ぶっこを自分より経験している如月にお空を倒してもらった方が良い。

想起はそう考えると、一つだけ作戦を思い付いた。

「如月さん」

「ん？何だ？」

「僕に一つだけ考えがあります。それが出来たら、もしかしたら……」

「分かった。で、どんな方法だ？」

如月はそう承諾すると、想起は如月の耳に手を当て、お空に聞こえない様に気を付けながら説明した。

それを聞くと、如月は、

「……それ、他の奴にも被害が出ないか？」

と、心配した。

しかし、それは想起が首を横に振って否定した。

「まあ、確かに出るかもしれませんが、そこは大丈夫です。ちゃんと加減をしますから」

「……分かった。なら、頼む」

如月はそう言うのと、天羽々斬を構えた。

「ん〜？何をするかは知らないけど、やらせない!!？」

お空はそう言うと、二枚目のスペルを宣言した。

「焰星『十凶星』!!？」

すると、またお空から超巨大な弾幕が十個飛ばされた。

如月と想起は勿論、それを避けようとするが、

「おっと」

「これ……時計回りに回ってるね」

今二人がいる場所にもその超巨大弾幕はあるが、それらは時計回りに回っていた。

それもよく見ると、その数は五個だけで、残り五個はお空の近くで反時計回りに回っている。

そして、まだそれだけではなく、二人にはまた小型の弾幕が襲ってきた。

まあ、二人は前へ前へと進みながらも横を気にしながら避けるだけなので、そこまで難しいスペルでもないと感じていた。

そして、結局そのスペルは二人に当たらず、スペルブレイクされてしまった。

「あく、結局当たらなかったよ〜」

「さて、それじゃあ……」

「反撃させてもらうよ」

そこで想起はチラツと後ろを見てみると、全員が自分の耳を塞いでいるのが見えた。

葵はそれプラス目も瞑っているが。

どうやら、さとりが想起の心を読んだ結果を後ろの全員に伝えた様だ。

そして、それを見て少し安心した想起は、加減をする事も考えながらスペルを宣言した。

「まずこれ!!？破壊符『黒竜』!!？」

すると、召喚術の様なものが空中に浮かび上がり、そこから出てきたのは……、

「へ？」

「ち、チビ竜?」

子竜だった。

如月は想起自身がやると思っていた様で、少し惚けたが、直ぐに意識を戻した。

そして、子竜の姿は想起の望んだ姿なので、想起は別段文句を言うことをしなかった。

「久し振りの戦いだけど、大丈夫? ソロモン」

「キュクル〜」

想起が準備は大丈夫なのかと確認すると、そんな鳴き声で返事をした。

「そっか。なら良かった。力を貸してね、ソロモン」

「キュルル〜!!?」

そして、そこで想起は二枚目のスペルを宣言した。

「黒竜符『咆哮』!!?」

そして直ぐ様自分の耳を抑えると、次の瞬間。

「G y a a a a a a !!?」

黒竜が咆哮した。

しかし、それにはあまり威力はなく、お空も怯んだだけだった。

ただ、それのお陰で勝ちは決定した。

「スペル!!?」

「え!!?」

お空の後ろにはいつの間にか如月が居た。

如月に関しては、想起から既に言われていたこともあってか怯みも直ぐに収まり、行動に移ったのだ。

「肉体強化『神雷』!!?」

そう宣言すると、如月は雷を纏った。

そして、直ぐに二枚目の宣言をした。

「龍剣『紫電』!!?」

それは丁度、如月の方に体を向けたお空のお腹に入り、お空はそのまま気絶してしまった。

\*\*\*

「蜷局さん、お空さんの様子は……」

あの弾幕ごっこでお空が気絶した瞬間、蜷局は直ぐにお空を抱え、助けることに成功していた。

如月も気絶させるつもりは毛頭なかったために、やり過ぎたと蜷局に謝り、その謝罪を蜷局は受け入れた。

「ああ、大丈夫なようだ」

「そうですね、良かった」

葵はそれを聞くと、安堵した様子を見せた。

「さて、それでは何時迄も此処に居続けるのは不味いでしょう。直ぐに出ましよう」

さとりのそんな声が合図となり、全員が灼熱地獄跡から出ると、陽炎が待つていた。

「あ、陽炎さん」

「その様子だと、異変は終了の様だな。良かった」

陽炎は蜷局に抱えられているお空を見て、微笑んだ。

その笑みは、普通の一般男性なら惚れてもおおかしくないほどの綺麗な笑みだったが、生憎と此処には普通の一般男性はいないので、それも無かった。

「……そういえば、陽炎さん。貴女に聞きたいことがあるのですが、宜しいでしょうか？」

「ん？何だ？さとり」

「妹のこいしを知りませんか？」

さとりからのそんな質問に驚きの顔を見せた陽炎。

「さとり……何を言ってるんだ？」

「……え？」

「そこにいるだろ」

陽炎がそう言っ指を指した場所は……歩の隣だった。

「え？」

その場の全員が驚き、その場所に視線を向けると、いつの間にか知らない人物が立っていた。

その子はさとりと似た様な顔をしており、髪の色は薄く緑がかった

灰色のセミロング、そして鴉羽色の帽子を被り、一番の特徴はさとりと似たようなものが有ることである。

しかし、その第三の瞳は閉じられているが。

「あゝ、やっぱり暴露ちやつてたんだね」

その子はそう言つて楽しそうに笑うと、全員の前に現れ、自己紹介し始めた。

「私は古明地こいしだよ!!?よろしくね!!?」



## 第三百三十三話

地底から出た葵達、それから地底で戦った一行。

本当は蜷局は湖からそんなに離れることは出来ないが、そこは夢幸が何とかしてくれた。

そして、現在その一行が向かっているのは、こんな事態を発生させた元々の原因である山に移住した神の「柱」『八坂神奈子』の元である。

「巫女って、私から聞いた容姿を簡単に信じるんだね」

「信じちゃ悪いわけ？」

「悪いわけじゃないけどさ、嘘ついてるかもしれないよ？」

お空からのそんな質問に、霊夢は即答した。

「あんたが嘘付いてたらルカが分かるし、その時は葵にでも聞いてたわよ」

「おい、私を嘘発見機みたいな使い方するな」

「あ、あはは……」

だが実際、そういう能力なのだから仕方ないと割り切っているルカである。

「お？霊夢！見えてきたぜ!!？」

他の皆とは違い、箒に乗って飛んでいた魔理沙がそう言った。

「ようやくか。これでようやく愚かな神達に制裁を下せるわけか」

「この場合、神『達』じゃなくて神だけで良いと思う気がするな。ね

?ソロモン」

「キュルル〜！」

想起がそう言うのと、その直ぐ近くを飛んでいたソロモンが返事をした。

あの弾幕ごつこの後、ソロモンを帰らせ様としたが、ソロモンが寂しそうな顔をしたのを見て帰せなくなり、今現在に至っているのである。

だが、帰らされなくなったからなのか、とても嬉しそうに、それできて楽しそうな反応をしてくれているので、想起としてはこれでも良いかと割り切ることにした。

常に力を使い続けることにはなるが、今の姿なら微量の力だけで済むため問題はないのだ。

そして、守矢神社に着いて最初に出会ったのは、境内を掃除している早苗だった。

「あれ？皆さん、どうしました？」

「早苗、今すぐ神奈子を呼んで来なさい」

「命令形!?？な、何するつもりですか!!？霊夢さん!!？」

「いや、神奈子がね、ちよつと問題を起こしたからそれを叱りに……」  
歩がそう言うと、早苗は「神奈子様、何をしたんですか」と少し泣きながら霊夢達を案内した。

その後、広間に着くと、一度、全員をそこに待たせ、早苗は一人、神奈子を呼びに行った。

それから少しして、足音が聞こえてきた。

その足音は部屋の襖で止まると、襖を開き、目的の神である神奈子が立っていた。

「あんた達、私に何か用かい？」

「あんた、よくもまあそんな白々しい事が言えたもんね」

地底の者と葵以外の全員は霊夢のそんな声と共にその場を立ち上がった。

しかし、雰囲気は何時もとは全く違う。

それには流石に気付き、霊夢達の直ぐ近くにいたお空を見て、何を言いたいかを瞬時に判断すると、自分の身の危険を察知した。

だからこそ、その場から飛んで逃げようとしたのだが、逃げられなかった。

「こ、氷!?？」

そう、神奈子の足は既に凍らされていた。

「お前が理解したら逃げることなんてお見通しだ」

怒気を含んだルカの声は何時もよりも声音が低い。

「さあ、私達のスペカを受けなさい!!？」

その後、守矢神社では花火の様に綺麗な光が光っていたらしいが、詳細を知るものはその場に居た者しか分からない。

\*\*\*

そして、現在は夜。

何時もなら異変解決祝いは博麗神社でやるのだが、霊夢が「異変を起こした元凶がいる此処で宴会を開く!!?」というか開かせる!!?」と言った事により、宴会は守矢神社でやることとなった。

「……」

そして、宴会だというのに一部静かな場所がある。

その場所は如月と守矢一家がいる場所である。

しかし、その周りは何故か騒ぎ、あるものを見ていた。

何を見ているのかと言うと……、

「モグモグ……あら?もうなくなっちゃったわよ?お代わりは?」

「妾のもじや!!?早く次を出すのじや!!?」

何故か大食い競争をしている幽々子と凜華。

この二人が守矢神社の食料をドンドンと消費していつているのだ。そんな二人の周りにはもう数えるのも億劫な程に積み上げられた皿。それも綺麗に積み上げられている。

「ああ、うちの食べ物達が……」

「早苗く、これどうするの?」

早苗は嘆き始め、諏訪子は口元を引くつかせながらもそう聞いた。しかし、その質問にそんな状態の早苗が答えられる筈がなく、ましてや周りの連中も答えれない。

しかし、凜華達の食欲は止まらない。

歩が作っては持つて来るを繰り返す。そして、作られた料理を全て平らげる。さつきからこの繰り返しである。

しかし、誰も止めれない。只々、楽しみ、そして嘆くだけである。

そんな場所から離れて、霊夢達の方はと言うと、

「ほらく!!?誰か酒を持って来なさい!!?」

「れ、霊夢、飲み過ぎだよ?もう酔ってるから水を飲んだ方が……」

「私はまだ飲めるわよ!!?」

葵が既に出来上がっている霊夢を宥め、

「はは！まだまだ飲めるそうだから飲ませとけって、葵!!？」

魔理沙はそれを面白がって見ている。

その近くでは夢幸が静かにお酒を飲んでいいるが。

「とうか、葵!!？あんた全然飲んでないじゃない!!？」

「私はお酒が苦手だから、あんまり飲めなくて……」

「そんな遠慮なんてせずに飲みなさいよ!!？」

「む、無理です!!？飲めないから……むぐつ!!？」

葵は必死で飲みたくないと懇願するが、霊夢は持っていた杯で飲ませた。

完璧な酔っ払いである。

「うう、だからお酒は苦手って言ったのに……」

葵は結構お酒に強い様で、直ぐに酔い潰れることは無かった様だ。

「しっかし、何でそんなに葵は酒が苦手なんだ？」

魔理沙からの素朴な疑問に葵はちゃんと答えた。

「昔に鬼灯と月見酒をしたことがあって、それでお酒を飲んだんだけど、その時に間違つて度数が高いのを飲んでちゃって、それ以来苦手に……」

「へ〜？酔ったのか？」

「倒れてたぞ」

魔理沙がまたそう聞くと、丁度移動しようとしていた鬼灯がそう答えた。

「え？倒れたのか？」

「はい」

葵はお酒を飲んで倒れたから苦手となったのだ。

「だから、お前はそんなチビチビと飲んでるのか、酒を」

「まあ、そうですね」

夢幸からのそんな質問に、苦笑しながら答えた葵。

正直、喉が焼けるかの様な感じも苦手となった原因の一つなのだが、それは今回、言わないでおいた。

「そういえば、鬼灯は何処に移動するの？」

「如月の元だ。彼奴に以前、『稲荷寿司を用意したらもふもふさせてや

る』って言ったたら、本当に用意して来たんだ。だから、約束は守らなければならぬだろ」

「そう言葉にする鬼灯は仕方がないという様な顔をしていた。」

「あはは……」

「そんなに嫌なら最初から約束しなければ良いだろ。馬鹿かお前は」  
「本当に嫌な相手にならんこんな事も言わなかったさ」

「鬼灯はそう言うのと、そのまま如月の元へと行ってしまった。」

「そう言えば、葵。まだ歌ってなかったよな？」

「!?」

「葵は魔理沙からの言葉にギクツと肩を揺らした。」

「そう言えばそうだな」

と、葵の近くで静かに飲んでいたルカがそう言った。

「ほらほら!!?葵の歌は宴会での楽しみの一つでもあるんだから歌ってくれよ!!?な?」

そんな魔理沙からの必死の頼みに葵は断ることが出来ず、結局歌うこととなったのだった。

\*\*\*

時刻は少し戻って、宴会が始まり始めて序盤の頃。

霊夢達が入っていた温泉に、二人の人物が入っていた。

一人は八雲藍。もう一人は八雲紫である。

その紫の手には、宴会の方からスキマを使って盗んだのだろう。お酒が会った。

この二人は今回の異変の事で話し合っているのである。

「……以上が調べた結果です」

「そう、ありがとう藍」

「それにしても、今回のこの一件から地底との交流がまた始まってしまいましたね」

「ふふ、良いと思うわよ」

「ですが、地底からまたいつか有望な妖怪が出てくるかもしれません。暫くの間、私が監視を続けます」

「あら?貴女だけじゃなくて茜もでしょ?」

「そ、それはそうですが……」

「それに、私としては時々はデートをして来て欲しいのよね」

「デ、デート!?? / /」

その言葉に動揺を隠しきれない藍。そして、その様子を楽しんでいる紫。

そんな二人の後ろから、また別の人物が現れた。

「……あら? 元の姿で来たの? レティシア」

「クスクス、ええ。あの時、入れてなかったからね。それに、貴女とも大事な話があるし」

そう言うと、温泉の湯に浸かったレティシア。

藍はその光景を目にして、本当にこの二人は体型が瓜二つだなと考えていた。

「……それで、貴女は何を話しに来たの?」

「……それはね」

そして、レティシアは話し始め、話し終わると、紫と少しの間、話す事を楽しんだのだった。

\*\*\*

そして、現在。葵が宴会場で歌い始めた頃。

レティシアは姿を何時ものにして、守矢神社の屋根に座り、夜空を見ていた。

邪魔な光も無い、夜空を。

「……」

「お前は何かを悩んでいると、何時も一人に成りたがるよな、レティシア」

「……鬼灯」

そんなレティシアの後ろから鬼灯は声を掛けた。

「……凜華は?」

「此処におるぞ、レティシア」

そう言うと、鬼灯の後ろから出てきた凜華。

その顔は少し不機嫌そうだ。

「クスクス、何でそんなに不機嫌そうなのかしら? 凜華」

「当たり前じゃ。食べていた所を邪魔されたのじゃぞ」

本当はそれだけでないことを、鬼灯も、そしてレティシアも気付いているが、それはあえて言わなかった。

「……それで、結界まで張って私達に何を話したいんだ？」

「まあ、隣に座ってよ。それから話すから」

レティシアからそう促され、レティシアから見て左に凜華、右に鬼灯が座った。

「……それで、話とは？」

鬼灯がそう振ると、レティシアは話し始めた。

「鬼灯は知ってるわよね？本来、この異変がもうちよつと先にあった異変だって」

「ああ、お前から聞かされたからな。『運命を変えて、起こる異変を逆にした』と」

「ええ」

「しかし、前から思ってたんだが、だったらお前が先延ばしにした異変を起こさせない様にすれば良かったんじゃないか？」

鬼灯からの素朴な疑問に、レティシアは笑みを浮かべた。

「それでも良かったのだけど、それだと霊夢と葵は成長しないわ。それに、新たな出会いも起こらない」

「……」

「まあ、私が今から話すのはその異変にも関係する事よ」

「？何かあるのか？」

鬼灯からのそんな言葉で少し沈黙してしまったレティシア。

しかし、その目にはまだ迷いがある様だ。

だが、その迷いも直ぐに消え、決意した目となった。

「……私はその異変が起こると、激怒することになるわ」  
「……」

「そして、多分、理性がない」

「……私か凜華にそれを止めると？凜華なら兎も角、私は無理だぞ」

「凜華じゃなくて、貴女に頼んでるのよ。鬼灯」

「……お前、私を殺す気か？」

「殺さないわよ。まあ、止めて欲しいのは本当だけどね。けど、鬼灯が止めに入っても私の理性が戻らず、もう駄目だと思っただら……」

そこでレティシアは凜華の方に顔を向け、言った。

「私を喰らってくれないかしら？・凜華」

「……」

「……良いのか？レティシア」

鬼灯はレティシアの言葉に少し驚き、凜華は冷静な声でそう問い掛けた。

「ええ、お願いするわ」

「その判断は妾がするのか？」

「いえ、紫がやってくれるわ。その辺の境界は彼女の方が分かるでしょう」

レティシアはそう言うのと、もう説明は無いとでも言う様に、その場を立ち上がった。

「……ふう、まあ、こう言うことで私の戒めにもなるでしょ。理性を失ったら私の死と直結するわけだし、レミイ達やこの先、生まれてくるであろう子孫の事もあるから私は早々には死ねないしね」

「……これぐらいやらなければならぬと言うことか」

「そう言うこと。あ、凜華。その時は貴女はスキマの中で待機しててくれないかしら？」

「うむ、分かった」

「それじゃあ、その時はお願いね。さて、私はもう帰るわ」

レティシアはそう言うのと、結界を解き、そのまま本当に帰ることにした。

「……さて、これで私がどれだけ理性的に動けるか……理性を失ったら、それこそ幻想郷が終わりかねないしね」

唯一の光源が月の光だけと言う夜の中、レティシアはそう呟いたのだった。



## レティシアの日常2 第三百三十四話

あの宴会から二日後、レティシアはフランの部屋へと行こうとしていた。

フランの部屋は相も変わらず地下なのだが、今はレティシアやフランの友達の一人であるマリアの他にも、レミリアや魔理沙も遊びに行くことがあるのでフランが寂しがる様子は無い。

「……それでも、出来れば地下はやめてあげて欲しいわね」

レティシアはそう呟くも、それ以外に部屋も無いため、何も言えないのだった。

そして、曲がり角を曲がろうとした時、レティシアは足を止めた。

「……何の様? 『サタン』」

『ククツ、何の用も何も、楽しみに来た以外に何があるんだ?』

サタンはまた黒猫の姿でレティシアの前に現れた。

そして、また下品な笑い方をしながら言葉にした。

「……何をするつもり?」

『ククツ、「何をするつもり」よりも「何をした」の方が合ってるな』

「……どういふこと」

レティシアはサタンの考えを能力で読もうとしたが、読めなかった。

「……」

『ケケケツ!!? 無駄無駄。オレに能力が効くと思うなよ? オレはコレでも地獄の支配者、サタン様だぜ? 舐められちゃ困るな』

サタンがそう笑うと、その瞬間、何処が崩壊する様な音が聞こえた。

「!??」

『ククツ、始まったな。オレからのサプライズが』

「……今の方向……フランの部屋へと続く道から……まさか!??」

『ククツ、そういうことさ。オレがお前が施した封印を解いて、狂気を増幅させたのさ。コレで彼奴は暴れ放題だ!!?』

そう言うサタンの顔は、楽しそうに歪んでいる。

「……フラン!!?」

『おおっと、待てよ』

サタンがそう言葉にしかただけで、レティシアは動けなくなってしまうった。

「くっ!!?」

『お前に少し聞きたいことがあったんだよ。だから、面倒な気持ちを抑えて会いに来てやったんだ。有難く思えよ』

そんな事を言うサタンはやはり歪んだ笑みを浮かべている。

『お前よく、以前、オレと会ったことがあるだろ。あの神社以外で』

「……」

サタンがそれを言うと、レティシアから殺気が漏れた。

それも、殺気だけで一人を殺せる程の量だ。

しかし、サタンはそれを感じない。まるで風と同じ様に受け流している。

『……あく、やっぱりか。お前、ヴラドとか言うオレに操られた馬鹿な吸血鬼と一緒に居た吸血鬼だな?』

「……」

『ギャハハ!!?あの時の事を今思い出しても笑えるぜ!!?特にお前のあの時の顔は本当に最高……』

そこでレティシアが弾幕を撃ち、サタンはそれを消滅させた。

『……へへ、まあ、オレの全力でお前を止めてるわけでもないから、動けて当然、撃てて当然か』

サタンはそう言うと、レティシアの束縛を解いた。

レティシアは解放感を得ると、サタンを睨んだ。

「……貴方、まさかまだ諦めてないのかしら?」

『いんや?誰かに暴露した時点でオレの計画は大失敗さ。今回はお前に暴露ちまったがな』

「……」

『おっと、そう言えば、こんな風に長話してるが、お前の妹さんは無事かな?』

サタンは口元を歪めてそう言うと、レテイシアは今の状況を思い出し、自分が冷静さを掛けていた事に自分を責めながら、その場を離れ、フランの元へと急いだ。

『……さて、退屈凌ぎに起こしたイタズラだが、もう興味も失せたり、何よりもこれ以上面白い事も起こりそうにないな。さくで、ゼウスに怒られるのも面倒だ。さっさと帰るとするか』

そう言つて、その黒猫の体から抜け出たサタン。

その場に残つたのは、黒猫の死体だけだった。

\*\*\*

「「「あははははは!!?」「」」

「フランちゃん!!?やめて!!?」

「マリア!!?」

「!?レテイシア様」

フランの元に着いて見たのは、怪我をしたマリアとマリアを守る様に立っていた狼だった。

「……貴方達は離れなさい。そして、レミイと霊夢を呼んで来て」

「分かりました」

二人はそう言うと、マリアがレミイを、狼が霊夢を呼びに行った。

「……さて」

「「レテイシアお姉様!!?フランと一緒に遊びましょう!!?」「」」

「そうね、久々に遊びましょうか。それで、どんな遊びかしら?」

レテイシアがそう聞くと、四人のフラン全員が答えた。

「「先に壊れた方の負け!!?」「」」

そう言うと、全員が手を突き出した。

「「「キュツとして……」「」」

そう言いながら手を握る仕草をし、

「「「ドツカーン!!?」「」」

その言葉で手を開いた。

すると、レテイシアが居た場所は爆発した。

ただ、『居た』と言うだけで今は居ない。

「スペルカード」

そんな言葉が部屋の何処かから響き、そして、

「真月『満月の下の真実』」

すると、四つの月と同じ色をした弾幕が四人のフランを襲った。しかし、フラン一人に対して一つ。それも、全く威力が無いものだ。

「二「あれあれ？レティシアお姉様。全く痛くないよ」」

弾幕が撃たれた方向……フラン達の後ろにフラン達は振り向き、そう言った。

そこにはレティシアが立っていた。

「クスクス、そうね。だって、そのスペルはまだまだ終わってないもの」

「一体どういう……きやああああ!!？」

「二「フラン!?!」」

四人のフランのうち、立った一人に無限とも呼べる程の弾幕が撃たれた。

それも、最初の弾幕とは違い、とても威力の高い弾幕。

なんの力もない人間ならそれだけで死に、能力などがある人間ならそれだけで気絶してしまう程に威力のある弾幕。

それを本物のフランは受けた。それも無数に。

当然、フランはそれで気絶し、『フォーオブアカインド』で増えていたフランは全て消えた。

「……さて、フランにまた封印を施さないかね」

レティシアはそう言うと、フランに近付き、狂気を封印したのだった。

その後、霊夢とレミリアが来て、後処理をしたりして、その日を終えたのだった。

## 第三百三十五話

フランが暴走したその翌日。レティシアはというと……、

「……何故、地上の妖怪である貴女が来てるのですか？昔の約束は？」  
「クスクス、紫だつて時々来てるのだから別に私が来ても構わないでしょう。さとり」

地霊殿へ訪れていた。

「確かに別に構いませんが……はあ、また何をやるつもりですか？」

「クスクス、酷いわね。何時も何かを企んでるみたいな言い方。まあ、今回は確かに企んでるけど」

「やはり企んでるのですね」

さとりはそれを聞いてまた溜息を吐いた。

妖怪覚であるさとりは相手の心を読む妖怪だが、今日の前にいるのは何でも出来てしまう吸血鬼。心の中を覗かせない様にと能力できとりに心の内を読まれない様にしている。

だから、さとりも口で会話をしているのだ。

「……それで、何をするつもりで？」

「クスクス、それはね。『持久走』って言えば良いのかしらね？」

「……持久走？」

「クスクス、ええ。それに貴女達地底の妖怪にも手伝って欲しいのよ」

「……すみません、理解が追いつきません」

さとりはレティシアの言葉から何を言いたいのかがよく分かっている。ただ、さとりも『持久走』という競技は知っているので、走る事は分かった。

「……それを幻想郷住民全員でやるのですか？」

さとりはそう聞いてみると、レティシアは表情を変えず、笑みを讃えて言った。

「クスクス、いえ、たった一人よ」

「貴女は鬼ですか」

「クスクス、吸血鬼だからあながち間違つてはないわね」

レティシアからのそんな言葉にまたさとりは溜息を吐いた。

「大体貴女の考えが読めました。そのたった一人に幻想郷中を回ってもらおう。そして、私達はその相手をする。貴女はそう言いたいのですね?」

「クスクス、ええ、それで合ってるわ。因みに、貴女達には弾幕ごっこか何かのお題を出してもらおうわ」

「……それで、私達を相手する人は誰でしようか?」

「クスクス、それはね♪」

レティシアから聞いた相手の名前を知ると、また溜息を吐くのだった。

\*\*\*

レティシアが帰ってからすぐ後、さとりは如月の心の声を頼りに探し出した。

「あ、さとり」

「あーお姉ちゃんだ!!?」

如月の元へと来てみれば、丁度如月はこいしと遊ぼうとしていた。

「……」

「あ、いや、これはだな……」

さとりから感情の無い目で見つめられ、若干たじろぐ如月。

しかし、それに助け舟が入った。

「お姉ちゃん!!?このお兄ちゃんは私が遊びたいって言ったから遊んでくれるんだ!!?ねえねえ!お姉ちゃんも一緒に遊ぼうよ!!?」

「こいし……」

妹のこいしからそんな事を言われれば、納得せざるおえないさとりは、仕方ないとばかりに嘆息した。

「こいし、遊ぶのは良いけど、先に如月さんと話があるから、後で良い?」

「うん!!?後で遊ぼうよ!!?」

こいしから許可を得ると、如月を連れて場所を移動するさとり。

「な、なあ?さとり。怒ってるのか?」

「怒っていません。貴方も嘘を付いていないのですから怒る理由はある

りませんよ」

「そうか……なら、何かあるのか？」

「ええ」

そこでさとりは如月の目を見ていった。

「貴方との約束を今日限りで破棄します」

「……え？」

「ただし、明日には帰って良いと言うわけではありません」

「？何かするの？」

「それは直ぐに分かりますが、私から一言だけ」

「？」

如月は頭に疑問符を浮かべるが、さとりは少し沈黙してから言っ  
た。

「頑張ってください」

「……え？」

\*\*\*

そしてその二日後。

如月はパルスイがいる橋の所に立っていた。

その目の前には笑みを浮かべているレティシア。

「……なあ」

「クスクス、何かしら？」

「帰って良い「駄目♪」ダヨナー」

レティシアからの良い笑顔から、嫌な予感しかしない如月。

「クスクス、大丈夫よ。今からやる事は貴方にとつても損はないわ。

私にとつては遊び。貴方にとつては修行。ね？お互い損はないで  
しょ？」

しかし、そのレティシアはやはり笑顔でそう言うのだった。

「……で？今から何をするんだ？」

もう諦めた如月は頭を掻きながら言うと、レティシアは説明し始め  
た。

「クスクス、今から貴方には幻想郷式持久走をしてもらおうわ」

「持久走？」

「クスクス、ええ。貴方には幻想郷中を走り回ってもらおうわ。あ、天羽々斬で時空を斬つての移動は禁止。元の幻想郷へ帰ろうとするのも禁止。移動中に空を飛ぶのも駄目。もしそんな事したら……」  
「……したら？」

如月がレティシアにそう聞くと、レティシアは楽しそうに言った。  
「クスクス、今後の凜華との修行の時に私も追加で修行してあげる。貴方が死にかけるまで、みっちり、しつかり、キツチリとね♪」  
(絶対に破らないでおこう。主に俺の命の為に)

レティシアからの言葉に如月はそう思いながら絶対に破らないと誓った。

「クスクス、話を続けるわね♪きつきも言った様に貴方には幻想郷中を走って移動してもらおうわ。あ、別に歩きでも良いわよ♪で、貴方が出会った人達からきつと弾幕ごっこやお題を出されるから、それを請け負って、勝ちなさい。勝ったら先へ進んで良いわ」

「質問良いか？」

「クスクス、何かしら？」

「まあ、お題は兎も角、弾幕ごっここのルールはそのまま適応か？それからその時は飛んでも良いか？時空を斬って避けたりは？」

「クスクス、弾幕ごっここのルールは少し変えるわ。貴方は何枚でも使って良いけど、相手はスペル二枚まで使うわ。最後二つは構わないわ。ただ、その時に帰るなんて選択は駄目よ」

「そうか。俺の負けは何と無くわかるが、俺の勝ちは？」

「クスクス、相手をダウンさせること。それだけ。相手がスペルを使えなくなつたとしても弾幕を撃つてはいけないわけじゃないからね」  
それを聞くと、如月はそれ以上の質問は無い様で、黙った。

「クスクス、じゃあ、説明の続きね。貴方が相手をする中には、きつと貴方じゃ勝てない相手も存在する。その時には……凜華、出て来てくれないかしら？」

レティシアのその声と共に、如月の中から凜華が出てきた。

その表情は何かを期待している表情をしている。

そして、レティシアは凜華の期待に応える答えをした。



「クスクス、その時は凜華が戦ってくれて構わないわ」

「やったのじゃああああああ!!?」

「凜華!!?地底が壊れる!!?旧地獄が崩壊する!!?」

凜華の喜びの叫びは、地底を震わせ、崩れそうだった。

現に、地面に転がっていた石はその声だけで粉碎された。

そして、凜華が落ち着くのを待ち、それから如月が質問した。

「なあ?さっきのルールは凜華にも適応されるのか?」

「クスクス、いえ。アレは如月にだけ適応されるルールよ。凜華には適応されないわ。だから、凜華が戦う時は普通の弾幕ごっこでしょうね」

「むく、弾幕ごっこは不満じゃ」

「クスクス、諦めなさい。とりあえず、凜華に手伝ってもらうのは貴方が自分じゃ負けると思った相手にだけ。凜華が戦わせて欲しいと言った際には貴方が決めて良いわ」

「そうか」

「クスクス、それから、これ」

レティシアがそう言っただけで如月に渡したのは、この前の異変の時に使っていたコンパクトサイズの陰陽玉。

「これ、何に使うんだ?」

「クスクス、貴方はスペルを無制限に使うことが出来る。つまりは自分の力を使い続ける事になる。それじゃあいつかは力が尽きるわ」

「そうだな」

「クスクス、だからね、私がそれを通して貴方に力を送り続けてあげる」

「……!!?」

「クスクス、それなら、ずっとスペルを使うことが出来るでしょ」

「ああ、そうだな……あ、同じスペルは使ったら駄目か?」

「クスクス、弾幕ごっこの相手が変わる旅にリセットよ」

「それはスペルカードルールと同じか」

「クスクス、他に質問があったらその度にその陰陽玉で連絡してきてね♪それじゃあ、合図はその橋姫さんがやってくれることになって

るから、私は別の所で見学させてもらおうわね♪」

「ああ、分かった」

如月がそう返事をする、レティシアは闇へ溶け込む様に消えてしまった。

「……それじゃあ、頼む、パルスィ」

「分かってるわよ。それじゃあ、位置に着いて」

それと共に、如月は走る用意をした。

「よいい……ドン!!?」

その合図と共に如月は走り始めた。

今此処で、レティシア考案の幻想郷式持久走が始まった。

\*\*\*

如月が走り出して直ぐに相手が現れた。

「あんたの最初の相手は……」

「私達よ!!?」

そう言っただけ姿を現したのはキスメとヤマメだった。

「そうか。で?何をやるんだ?」

「決まってるでしょ?」

「楽しい楽しい、弾幕ごっこよ!!?」

最初の弾幕ごっこが始まった。

\*\*\*

「一枚目!!?怪奇『釣瓶落としの怪』!!?」

そのスペルは前にルカに使っていたスペルと同じである。

如月もそれは見ていた為に、簡単に避けてしまった。

「あくあ、避けられちゃった」

「一度見たからな。もうそう簡単には当たらないぞ」

「じゃあ、私だよ!!?蜘蛛『石窟の蜘蛛の巣』!!?」

そう宣言したのちに出してきたのは、以前、歩に対して出した『キヤプチャーウェブ』と似た様なスペルだった。

しかし違いはある。その違いはと言うと……、

「蜘蛛の巣の本数が増えた!?!」

そう、その本数である。

その本数は16本。その本数が増えた分、勿論弾幕も増えている。だからこそ、如月は天羽々斬を使って弾幕を斬り裂き、スキマを作ってそこへ逃げ込む。それを繰り返していた。

それからそのスペルを凌ぐと、ヤマメは次のスペルを出してきた。

「細綱『カンダタロープ』!!?」

すると、ヤマメから輝いく糸が出てきた。

如月は何をするのかと構えていると、その糸は如月へと向かってきたのだった。

勿論、それは蜘蛛の糸。当たれば取ることは容易ではない。斬れば問題はないが。

如月は右へと避けたが、その糸は如月が避けた方へと方向転換してきた。

「追尾か!!?」

如月はそれから逃れようとするが、その糸は幾らでも追いかけてくる。

と、そんな時に、キスメから二枚目のスペルが宣言された。

「釣瓶『飛んで井の中』!!?」

すると、キスメが落下したその瞬間に、赤いクナイ型弾幕が如月に向かって行った。

「うわ、俺狙いのが増えたよ」

少しげっそりした雰囲気醸し出した如月に向けて、今度は低速ではあるが青い丸弾がばら撒かれた。

赤いクナイ弾幕は如月が少し避けるとそのまま真っ直ぐに飛んで、消えていった。

「……あんまり時間もかけてられないからな。もう決めさせてもらおう!!?」

如月はそう言うのと、自分の目の前を剣で斬り、時空へと入っていった。

「一体何処に……うわっ!!?」

「ヤマメ!!?きやあ!!?」

ヤマメとキスメが如月を探そうとしたその時、二人の後ろから弾幕

が当てられ、二人はダウンしてしまった。

「これで俺の勝ちか。……先へ進むか」

そして、如月はまた走り出し、次へと進んだ。

\*\*\*

走り出して約五分後。如月は口元を引くつかせた。

今彼の前に居るのは二人の鬼。

勇儀と陽炎である。

もう正直、これで肉弾戦を持ち込まれたら直ぐに凜華に頼もうと考  
えている如月である。

しかし、それは杞憂に終わる。

「私達からお前にお題を出そう」

「……お題で良いのか？」

如月はそう聞くのも仕方が無い。

鬼というのは他の種族と比べて戦闘狂が多いのだ。

勿論、この二人も戦闘狂なのだが、そんな二人が『戦闘』ではなく  
『お題』と言ったのだから驚くのも無理はないだろう。

そんな二人の顔は少し不満そうだが。

「良くはないけど、これを決めたのは陽炎さ」

「私はレティシアから頼まれたから仕方なく。……べ、別に抹茶を貰  
えるからと言われて、それに釣られたわけじゃないからな!!? / /

／

どうやら抹茶に釣られた様である。

これには如月も苦笑していた。

「で、陽炎達からのお題はなんだ？」

「お前の力の一端を見せて欲しい。それだけだ」

陽炎からのお題を聞いた如月は少し考える素振りをすると、地面の  
方に手を向けた。

すると、その地面から土の剣を作り出した。

陽炎達が見たと分かると、その剣を直ぐに崩したが。

「これが俺の能力『全ての力の原初を司る程度の能力』の一端だ。これ  
でお題はクリアか？」

如月がそう聞くと、陽炎も勇儀も肯定した。

如月はそれを見ると、直ぐにその場を立ち去った。

……立ち去らなければ、陽炎は兎も角、勇儀が挑みかかってかるのを雰囲気から察した如月であった。

その場を後にして地霊殿の前まで来てみると、角とお燐に出会った。

「お？来たね、お兄さん。私達からはお題を出させてもらおうよ」

「そうか。で？何をすれば良いんだ？」

「お燐が持つてるこの猫車を運んで欲しいっす!!？」

角が出してきたそのお題。

お燐が持っている猫車。

つまり、角達が言うのは……、

「……俺にその死体を運べってか」

如月はその猫車の中に入っている死体を見た時から嫌な予感はしていたのだ。

そして、その予感は見事的中。如月の気は重くなってしまった。

「まあまあ、で、お兄さん、どうする？私達はお題を変えるつもりはないよっ。」

お燐は良い笑顔でそう言うと、如月は猫車をお燐から貰った。

「ああ、もうヤケだ!!？」

「頑張れっす!!？俺達も着いて行くっすから!!？」

そして、お燐達の案内で連れて来られたのは灼熱地獄跡。

お燐は如月から猫車を返してもらおうと、その死体をそのまま灼熱地獄の中へと落とす。

「……良い気分はしないな」

「ごめんね、お兄さん。でも、考えてもこれしか思い浮かばなくて」

お燐は本当に悪い事をしたと思っっている様で、如月に謝罪をした。それに対して、如月は怒らず、そのまま許した。

「さて、じゃあ移動を「あ、お兄さんは此処に居てよ」……何でだ？」

如月はお燐からのその言葉に質問すると、お燐は答えた。

「だって、此処でお兄さんはお空とまた弾幕ごっこをしてもらおうから

だよ」

「……マジか」

如月はそれに対して溜息を吐いた。

お燐と角はその様子を見てから灼熱地獄から出て行った。

その後、空中からは羽ばたく音が聞こえ、見てみると、お燐が言った通り、お空が居た。

「お兄さん!!?この前のリベンジマッチ、受けてよ!!?」

「ああ、分かった。やってやるよ!!?」

\*\*\*

「それじゃあ一枚目!!?爆符『ペタフレア』!!?」

お空がそう宣言すると、赤みを帯びた白い超特大弾幕を撃ってきた。

如月はそれを後ろへと退いて回避したが、勿論、後ろに退いた所で弾幕は迫ってくる。

……しかし、その弾幕は如月の方へと行くと共に徐々に小さくなっていく。

そのお陰で気付いたが、その弾幕の後ろからは小さな弾幕が撃たれていた。

「だったら……」

既に空を飛んでいた如月はその大きかった弾幕と弾幕の間に移動し、その弾幕に当たらない様にしながらも小型弾幕を回避していた。

そして、それも時間がきたのか、もう弾幕が撃たれることはなかった。

「はい!じゃあ次ね!!?焰星『十凶星』!!?」

そのスペルはこの前、自分に使われた為に、この前と同じ様な避け方をした。

「はい、じゃあスペルブレイクな」

「残念、今回は勝てると思ったのにな」

お空はそう言って残念がる様子を見せるが、顔を上げると、弾幕を撃ってきた。

「けど、スペルが使えなくなっても、私は弾幕を撃てるからね!!?」

「それは俺も聞いてたからな。分かったたさ!!?」  
そう言うと、如月は天羽々斬を手に持ち、構えた。

『桜舞連斬』!!?」

如月がそう宣言すると、素早くお空の周りを舞う様に飛んだ。

そして、神力を利用し、桜の花弁がヒラヒラと舞う幻影をお空に見せた。

「これ……桜の花弁? いや、これは幻影……きゃあ!!?」

お空がそんな風に考えていると、如月からの16連撃を受けた。

お空はそれに耐えることは叶わなかった様で、ダウンした。

と言っても、意識はあるので灼熱地獄には落ちる事はなく、ちゃんと地面がある所まで飛び、そこでダウンした。

「ふう、お空の奴、大丈夫か? 心配だし、見てみるか」

そう言う如月の背後には桜が見えた気がした。

\*\*\*

お空の状態を見て、地霊殿へと連れて来た如月は、さとりと運良く出会うことが出来た。

「さとり、お空を休ませたいんだが……」

「それでしたら此方に。着いて来て下さい」

如月はさとりの後を追い、ある部屋の一室まで案内されると、ベツトに横たえた。

「ごめんな、さとり。案内して貰って」

「いえ、構いませんよ。こうなる事は予想済みですから」

「本当はキスメとヤマメも連れて来たかったんだが……」

「……成る程、パルスイさんが」

「ああ、あの二人を引っ張っていった」

地霊殿方面へと走って居る最中に、キスメ達の様子が気になり、後ろを向いてみると、丁度パルスイが二人を引き摺って行くのが見えたのだ。

「まあ、彼女はアレで優しい性格ですから問題はないですね」

「ああ、分かっている。……あ、さとりからは何か出すのか?」

如月がそう聞くと、さとりは首を縦に振った。

「私からはお題です。蜷局とこいしとの弾幕ごっこに勝って下さい。それだけです」

「……分かった」

如月はそれを聞くと、お空の状態を少し見て、さとりに任せした後、蜷局が居る場所へと向かった。

\*\*\*

異変の際、さとりが蜷局の場所を言っていたのを如月は覚えていた。

地霊殿の裏に湧き出る地底湖『龍眠泉』

如月は今、さとりから出たお題の為に、此処に来た。

「蜷局、出て来てくれないか？」

如月のその言葉が聞こえた様で、蜷局は湖から姿を表した。

「……此処まで来たか。しかし、お前が私に勝てるのか？」

蜷局のそんな言葉に、如月は首を横に振った。

「いや、俺はまだまだ弱い。だから、俺じゃお前に勝てないよ」

「……」

「だから、凜華に頼む」

そんな如月の言葉と共に、如月の背後から凜華が現れた。

「……そうか。なら、私も本気で相手をしよう」

「本気と言っても弾幕ごっこでの本気じゃろ？妾は死合いをしたいが、まあ仕方が無い。良いじゃろう。但し、妾は肉弾戦じゃ。良いな？」

「良いだろう。ならば、来い」

\*\*\*

龍眠湖から離れた場所で、二人は戦うこととなった。

蜷局は最初、相手の力を見る為に弾幕を数個、凜華に向けて撃ったが、それは凜華が殴っただけで消された。

「ふむ、簡単に消えたな」

「……なら、これならどうだ？スペル」

そして、一枚目のスペルを宣言する蜷局。

「暴風『バーサークストリーム』」



すると、竜巻を十個生み出し、凜華はその竜巻に飲み込まれた。

「凜華!!?」

如月がその声を上げる。

ある意味、心配からの声だったが、杞憂に終わる。

「洒落歳のじゃ!!?」

そんな声が聞こえたかと思えば、竜巻が消された。

「……出鱈目か」

「妾は喰龍、龍神の中でも異質の存在じゃ。そう簡単には負けんぞ。さあ、もつと妾を楽しませるのじゃ!!?」

そんな凜華の期待に答えるかの様に、次のスペルを宣言した蜷局。

「噴火『ボルケーノドラゴン』」

すると、地面がイキナリ噴火した。

凜華と如月はそれに伴い飛ぶが、凜華にだけは溶岩の弾幕が降り注ぐ。

「……なんじゃ、これぐらいしか出来ぬのか」

凜華が若干、不満な声を上げると、その弾幕が凜華に触れたかと思つた瞬間に無くなった。

「……出鱈目過ぎる」

「さあ、これで終わりじゃ!!?」

凜華はそう言うのと、一瞬で距離を詰め、蜷局を殴つたのだった。

\*\*\*

蜷局と凜華の弾幕ごつこと肉弾戦が交わつた戦いは、凜華が勝利を収めた。

そもそも、弾幕を喰べるという時点で勝敗は決まっていたのかもしれないが。

そして、凜華が如月の中に戻り、蜷局も龍眠湖へと戻るのを確認した如月。

「……で、こいしちゃんを探さないといけないが」

「お兄ちゃん!遊ぼうよ!!?」

「イキナリ目の前に現れたら驚くな……」

地霊殿の中を探し回り、本当に何処にいるのかと思つていた所での

こいしの登場である。

狙って登場したのではないかと少し疑う如月だが、それはないとそんな考えを消した。

「そうだな。で、やるとしたら弾幕ごっこか？」

「うん！そうだよー！」

「それじゃあ、楽しもうか、こいしちゃん」

そして、また弾幕ごっこが地霊殿の玄関ホールで始まった。

\*\*\*

弾幕ごっこの最初はお互い弾幕の撃ち合いだったのだが、それはこいしがスペルを使うことによって変わった。

「表象『弾幕パラノイア』!!?」

こいしは楽しそうな笑顔で宣言すると、如月を取り囲む様にしてクナイ型弾幕が設置された。

「行動が制限されたな」

そう呟く様にしていった如月は直ぐに目の前を見た。

その目の前の光景は、放射線状にはあるが、遅いスピードで数多くの丸弾は撃たれた。

その数は本当に多く、数えることは困難なほどだ。

そして、避けれるスキマも狭い。まあ、スキマがある時点でルール違反にはなっていないのでこれ以上の追求はしないが、避けるのがそれなりに難しい。

しかし、それも大きく避けたらの話。

如月はその弾幕を少し体を避けるだけで回避した。

「やっぱり。大きく避けなきや当たらない」

それが分かると、少しでもだけ体を動かしては避けを繰り返し、こいしのスペルはブレイクされた。

「お兄ちゃん、凄いな!!?じゃあ次ね!!?」

「なあ、休ませ「復燃『恋の埋火』!!?」話を聞いてくれないか!!?」

そんな如月の嘆きなどこいしには届かない。

そのままスペルは発動し、こいしからハート型の弾幕が撃たれた。

その弾幕はその場に残像を残しつつも、ゆっくりと壁や床に当た

り、跳ね返っていた。

すると、いつの間にやら辺り一面ハート型弾幕で埋め尽くされていた。

「……わあ、これマジでどうするか」

如月はそう嘆きながらもどうするべきかと悩む。

そして、如月は一つの賭けに出た。

「?お兄ちゃん、何してるの?」

「うくん、教えられないな」

そう言いながら、如月は天羽々斬でまた時空を斬った。そして、

「偽装『グングニル』」

そう宣言してから、本物とは及ばないグングニルを時空の中へと勢いをつけて投げた。

「?……きやあ!!?」

こいしは最初、首を傾げたが、その投げたグングニルが自分の後ろから現れ、自分に当たったのを見て、驚いた。

こいしはどういうことかと考えようとするが、無意識そのものであるこいしでは考える事は出来ない。

そして、流星に後ろからの強襲で、全く予期も出来ていない状態なので、そのまま地面へと倒れた。

勿論、ダウンである。

それと同時に弾幕も消え、弾幕ごっこは終了となった。

\*\*\*

「お兄ちゃん、強いね!!?」

「いや、俺は強くはないよ。俺はまだまだ未熟さ」

如月はこいしと話しながら、さとりを探していた。

さとりにお題をクリアしたことを報告する為である。

そして、如月はさとりの部屋へと着くと、さとりは紅茶を飲みながら待っていた。

「お待ちしていました。如月さん、お題クリアです。……ということ  
で、コレを」

「?なんだ、コレ。鈴?」

如月がさとりから手渡されたのは、鈴。

それも、普通の鈴よりも音が綺麗なものである。

「レティシアさんから、貴方がその場所のお題をクリアした時に渡す様にと言われていましたので」

「そうか、さて、それじゃあ次の場所へ……」

「?どうしました?」

此処で如月は重大な事を思い出した。

「……なあ?俺、今飛ぶ事を制限されてるんだが……どうやって地上に行けば良いんだ?」

今は弾幕ごっこ中でもない為、空を飛ぶ事は不可能である。

故に、地上に出ようとするのはとても困難である。

しかし、それをさとりは少し笑みを浮かべながら答えた。

「大丈夫ですよ。レティシアさんがこの屋敷の何処かに幾つかスキマを用意しています。貴方はそれを潜って次の場所へと移動して下さい」

「よ、良かった。なら、ちょっと探してくる!!?あ、またな!・さとり」

如月はそう言つてさとりの部屋から出た。

「……さて、彼の次の行き先は何処でしょうね?」

\*\*\*

八雲邸の一室。

そこではレティシアが如月の様子を見ていた。

「クスクス、地霊殿はクリアね。さて、彼が次行く場所は何処かしら?」

レティシアは楽しそうな様子で如月の様子を見ていた。

そして、地霊殿の玄関ホールの隅にあるスキマを発見した如月はそこを潜って行った。

「クスクス、あらあら♪これはまた引きが良いわね。如月」

そして、如月が出た場所は……、

「まさか紫達がいるマヨヒガへと続くスキマを潜るなんて」

そう言いながら、先程如月が潜ったスキマを閉じるレティシア。

その顔には、やはり楽しそうな笑顔が浮かんでいた。

## 第三百三十六話

スキマを潜り抜けた先に着いた如月は、直ぐに何処なのか分かった。

「……マヨヒガか」

そう言つて、先程通つたスキマを見てみると、もうその場にスキマは無かつた。

「……先へ進めつてことだよな。確実に」

如月は嘆息すると、また走り出した。

\*\*\*

走り出して数分。太陽は如月の真上に登っている。この持久走が始まつてそれなりに経っている様だ。

如月は始まつてから移動する際、こいしとの時を除けばずっと走り続けている。

勿論、そんな事をすれば息は切れ始める。

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

レティシアは如月に霊力及び神力は送り続けているが、如月の体力は回復させていない。

しかも、此処の幻想郷の季節は未だ冬。寒い中である。

それでも走るのを辞めずに進んでみると、一人の妖狼を見つけた。

「ぜえ…ぜえ…お前、誰だ…?」

息を切らしながらも相手に尋ねる如月。

それに対して、相手も素性を明かした。

「我は八雲茜と言うものだ。紫様の式の一人だ」

「ゆ、紫の式は、藍じゃないのか…?」

「藍姉と共に紫様の式をしているのだ」

「そ、そうか…」

この会話のお陰で多少の休憩を取れた如月。

「それで、何をすれば良いんだ?」

「我と弾幕ごっこをしてもらう」

「分かつた」

マヨヒガでの最初の弾幕ごっこが始まった。

\*\*\*

弾幕ごっこは始まったが、互いにずっと弾幕を撃ち続けている。

これでは切りが無いと考え、如月はスペルを宣言した。

「偽装『グングニル』!!?」

すると、如月の手に、こいしの時にも使ったグングニルが創造された。

如月はそのグングニルを、そのまま茜へと投げた。

勿論、それは一直線へと進んだだけなので、茜は簡単に避けてしまった。

「それでは、次は私の番だ。スペル!!?」

すると、茜はそれに触発されたのか、スペル宣言をした。

「存在『絶滅狼空虚な狩り』!!?」

すると、茜の存在感がイキナリ無くなった。

今は如月の目の前でスペルを宣言した為に、如月にも見えているし、一応は認識出来ている状態だが、一度でも目を逸らしたりしたら、もう認識出来なくなるだろう。

「『軍狼今宵の遠吠え』!!?」

そして、また茜がそう宣言すると、上空へと跳躍し、狼の形をした弾幕が十個放った。

「ついで!!?」

如月はその狼型弾幕を天羽々斬で斬り、弾幕を消したり、自分の弾幕で撃ち落としたりと行動した。

しかし、全て無くなつたかと思えば、また同じ狼型の弾幕が、同じ数で撃たれたのだった。

「またか!!?」

如月はそう言つてまた撃ち落そうとしたが、目を離れた所為で何処にいるのか分からなくなっていた茜に後ろから攻撃され、飛ばされた。

「くっ!!?」

如月は地面に着く直前に何とか受け身を取ったが、それでも痛みは

ある。

それでも直ぐに立った如月は、また茜の居場所が分からなくなつた。

それでも、狼型の弾幕が無くなっているわけでも無い為、まずはそれを消そうとした。

が、今度は真つ正面から攻撃され、またもや吹っ飛ばされた。

そんな状態の如月に意思を持っている狼達は、そのまま如月を襲つた。

が、それは如月が弾幕で対処し、その時に時間がきた様で、弾幕は消えてしまった。

「……危なかつた」

如月がそう言葉にした所で茜は存在感を戻し、如月の前に現れた。

「さて、我はもう二枚使ってしまったからな。此処からは弾幕と能力で何とかせねばならなくなったな」

「お前の能力つて何だよ」

「私の能力は『存在を掌握する程度の能力』。存在している限り、この能力からは逃れられない能力だ!!?」

茜はそう言うのと、脚に力をいれ、如月との距離を詰めた。

「くっ!!?」

痺れが多少取れた如月は、茜が振るう斧の威力はマズイと判断し、右へと避けた。

「スperl!!?」

そして、その時にスperlを宣言した。

「肉体強化『神雷』!!? 『桜舞連斬』!!?」

すると、如月の身体は雷を纏い、天羽々斬には神力を纏わせた。

如月はその状態で、茜へと攻撃したのだった。

\*\*\*

結果を言えば、如月の勝ちである。

茜はダウンしたのだから仕方が無い。が、気絶はしていない為、今は紫達が居る所まで案内してもらっている。

「……此処だ」

「そうか、ありがとうな、茜」

「礼はいらん。さて、呼ぶぞ……紫様、如月が参りました」

茜のその言葉が響くと、すぐ目の前からスキマが開き、中から紫と藍、それから橙が現れた。

これに対して、如月は驚かなかった。

そもそも、スキマが開く気配を察知していたのだから驚く事は出来ないのだ。

「ありがとう、茜。で、どうだった？彼の實力は」

「はい。レティシア様の言う通り、まだ伸び代が御座います」

「そう、分かったわ。茜、貴方は下がりなさい」

「御意」

紫からそう言われた茜は、言われた通りに下がって行った。

「……さてつと、それでは始めましょうか？」

「なあ？紫は冬には冬眠してるんだろ？なのに、何で今は起きてるんだ？」

如月からのそんな質問に、紫は遠い目をしながら答えた。

「……レティシアに、無理矢理起こされたのよ……」

「……何をされたかは聞かないでおく」

「そうして頂戴」

そんな会話を終えると、藍と橙が紫の前に出てきた。

「それでは、紫様の前に……」

「私達からのお題だよ!!？」

「お題……なんだ？」

如月は二人にそう聞くと、藍はニヤリと笑った。

「如月、お前は此処、マヨヒガに猫が沢山居るのは知ってるか？」

「ん？勿論知ってるが、それがどうした？」

「私はその猫の数を知っている。故に、何匹居るか数えて来い」  
「……え？」

「数えて来い。これが私達からのお題だ」

二度聞くと、もう何処にも間違え様はない。

故に、如月はマヨヒガに居る猫の数を数え始めた。



しかし、似た様な猫も居る為に、どうしても正確な数が分からない。  
「……どうするべきか……!!?よし、試してみる価値はあるな」

如月は何かを思い付くと、早速、準備を始めた。

\*\*\*

それから数分後、如月は藍の元へと戻って来た。

だが、その場には橙が居ない。

「あ、如月。橙を知らないか?イキナリ何処かへと走って行ったんだが……」

「その前にお題の答えを言っていないか?」

「む?数えられたのか?」

「ああ。答えは『30匹』だ」

「……正解だ。しかし、どうやって数えた?此処には似た様な猫が沢山いた筈だが……」

そんな藍からの疑問に、如月は答えた。

「ちよつと難しかったんだが、まずは猫用の檻を能力で造ったんだ。いや、本当に苦労した。まだ慣れてないからな……おつと、話が逸れたな。で、その中に猫が大好きなマタタビを入れたんだ」

「……成る程、その匂いに釣られて猫が集まって来た。しかし、それだと全部が来ることはない」

「ああ、そうだな。だから、風を使って匂いを蔓延させたのさ」

「だから途中で風が吹いたのか。しかし、それだと今度はマヨヒガ以外の所からも猫が集まるが?」

「それも俺の頑張りからだな。このマヨヒガにだけ結界を張った。これで、マヨヒガの中にいる猫にしかマタタビの匂いは気付けない」

「……ふつ、そうか。成る程。だから、先程から頭上に結界があったわけか。納得した」

「いや、藍なら聞かなくても分かってただろ?」

如月は藍にそう言った。

それに対して、藍は頷いて肯定した。

「……ん?と言うことは……橙は……」

「ああ、マタタビが有る所に居るぞ。橙の妖怪とはいえ猫だからな。

やっぱりマタタビは好きな様だな」

藍はそれを聞くと、直ぐに橙の元へと駆け出して行った。

「……で？紫。どうするんだ？」

「ふふ、弾幕ごっこをするわよ♪」

「はあく、分かった」

そうして、紫との弾幕ごっこが始まった。

\*\*\*

「初手は貰いますわ。スペル!!？」

弾幕ごっこが始まって早々に、紫はスキマに腰掛け、足を組んだ状態でスペルを宣言した。

「幻巢『飛光虫ネスト』!!？」

すると、幾つものスキマが開き、其処から大量の高速弾幕が撃たれる。

それらは如月を狙っているわけでは無い様だが、それでも、避ける事は難しい様に感じている如月。

何故なら……、

「何で……俺の世界の紫のスペルよりも弾幕の数が多くて速いんだ!？」

その弾幕の数と、迫ってくるスピードの所為である。

如月が知ってる紫のこのスペルと、今日の前にいる紫のスペルの弾幕の数と速さは、約三倍だろう。

「っ!?っ!？」

「それはそうですわ。私は修行をレティシアに付けてもらった身です。そちらの私と一緒にしてもらっては困りますわ」

紫は手に持っていた扇子で口元を隠す様な仕草をしている。

そんな話をしながらも時間は経過し、スペルは終わってしまった。

「あら？当たり前ませんでしたわね」

「はあ……はあ……」

紫に疲れた様子は全くない。

結構な数の弾幕を撃っていた筈なのに、それで疲弊しきった様子は無い。

逆に如月は弾幕で幾つか撃ち落そうとしたものの、撃ち落とす事が出来ず、それ故に避け続ける事となってしまうていた。

「……これで最後ですわ」

紫はそう言うのと、またスペルを宣言した。

「魍魎『二重黒死蝶』!!?」

すると、青と赤の蝶々弾幕が、お互い交差する様にして回転している。

如月はその弾幕を撃ち落そうとしなかった。

もう、見ただけで分かるのだ。その弾幕に込められた妖力の量。そして、精密さを。

その弾幕の何処にも粗はなく、繊細で精密で。

やはり、蝶々弾幕の数も多く、速さもある。

(時間を掛け過ぎると俺が不利になる!!?……なら!!?)

そして、如月は紫のスペルが終わったと同時に、肉体強化し、紫に攻撃しようとした。

「甘い!!?」

が、紫がそう言うのと、紫はスキマへと入り、如月の後ろからスキマが開く気配がした。

「くっ!!?」

如月は咄嗟に後ろの方に剣を振ると、数多くの弾幕が如月に襲いかかろうとしていた。

「……なんてな」

そう言いながら、振った勢いを殺さず、そのまま、先程まで紫がいた場所へと剣を振るった。

すると、丁度其処にスキマが開き、中から紫が弾幕を飛ばそうとしていた。

しかし、紫は如月のそんな状態を見て、弾幕を消した。

「……私の、負けね」

そうして、マヨヒガでの弾幕ごっこは終わった。

\*\*\*

その後、紫はダウンしたが、直ぐに立ち上がり、フラフラとしては

いるが、縁側に座った状態で如月を見た。

「……なあ？もう終わりだろう？鈴は渡してくれないのか？」

如月は当然の質問をすると、紫は胡散臭い笑みを浮かべた。

「あら？誰が弾幕ごっこ『だけ』と言いました？」

「……え？」

「まだ終わっておりませんよ」

「……嘘だろ？一つだけじゃないのか？」

「あら？レティシアはそんな説明をしたの？」

紫はキョトンとした顔で如月を見ている。

如月は如月で、ポケットから陰陽玉を取り出し、レティシアに質問した。

「なあ？レティシア。出されるのはお題か弾幕ごっここのどちらかだよな？何方か一つだよな？」

如月は少しの希望を持ってそう質問をした。

しかし、その希望は見事に打ち砕かれる。

『クスクス、誰も「何方か一つ」とは言っていないわよ♪私はただ「弾幕ごっこやお題を出されるからそれを請け負いなさい」と言ったのであって、「弾幕ごっこかお題を請け負いなさい」とは一言も言っていないわよ♪』

「……」

『クスクス、そう言うことだから、紫からのお題、頑張りなさい♪』

レティシアはそう言うと、連絡を切った。

「さて、レティシアにも確認は取れたでしょ？と言うことだから……」

そこで一度言葉を区切り、紫は笑顔で言った。

「私からのお題よ♪」

\*\*\*

「クスクス、貴女も鬼ね♪まさかコレをやらすなんて」

「私も貴女からやらされたからね。一度、やってみるべきなのよ」

レティシアと紫は八雲邸でお茶を飲みながら会話をしていた。

その両者の近くには、如月を映したスキマがあった。

如月はどうやらまだマヨヒガを走っている様だ。

「クスクス、そうね。でも、これは結構、キツイわよ。何せ、『走ったままの状態で力を出したままマヨヒガを出ること』だものね。それも、私からの供給は無しで」

「走る事だけに集中したら、霊力が途絶え、霊力を出す事だけに集中すれば、足が止まる。さて、如月。貴女はこの『答え』を出す事は出来るかしら?」

紫は胡散臭い笑顔でそう言うと、お茶を一口口に含んだのだった。

\*\*\*

一方の如月は走り続けたことによる疲労と、霊力を多大に失っていることによる怠さが一身にきたために、一旦、立ち止まって休んでいる。

「はあ……はあ……キツツ……はあ……」

如月はそう言いながら、どうするべきかと考えていた。

マヨヒガはそもそも、迷った者が辿り着く場所である。

しかし、如月は迷った覚えもなく、迷っている事も無い。

しかし、マヨヒガから抜け出す事が出来ないでいるのだ。

こうなると、紫かレティシアが何かをしたと考えるのが妥当である。

実際はレティシアが紫が出した『お題』の『答え』に辿り着いていないという理由から、マヨヒガから出さない様になっているのだ。

如月はこのままでは一生出る事は出来ないと思い、この『お題』の『答え』を考え始めた。

……が、その答えは案外あっさりと分かった。

如月は先程まで出していた霊力をコントロールし、ほんの少しの霊力を外へと放出した。

その状態で如月はまた走り始めた。

足にも意識を配り、霊力の方のコントロールにも意識を傾ける。

それを二分間、伽らせることなくなり続けると、漸く、マヨヒガから出る事に成功した。

「ふう……なんとか、出れた」

そこで霊力の放出をやめると、頭上にスキマが開く気配を察し、そ

の直ぐ後、鈴が掌に落ち、レテイシアから消費された霊力を供給された。

現に、大幅に霊力を失った事による怠さはもう何処にもなくなっていた。

今ある怠さは、疲れからの怠さだけである。

如月は次の場所を何処にするかと悩んだ。

そして、決めた。

その際、レテイシアに確認を取ることにした。

『クスクス、何かしら？如月』

「なあ？今回って小町も参加してるのか？」

『クスクス、ええ、小町も参加してるわよ』

「そうか、有難うな、教えてくれて」

『クスクス、お礼を言われる事はしてないわよ。頑張りなさいね♪』

レテイシアはそれだけを言うと、また連絡を切った。

如月は陰陽玉をまたポケットへと入れると、三途の川方面へと向かって行ったのだった。

\*\*\*

「……レテイシア、貴女、本当に意地が悪いわね」

「クスクス、だって、『答え』を言ったら意味がないでしょ？」

紫はレテイシアが如月からの質問の際、『ある事』を隠していたのを知っている。

それは……、

「あの死神達が待機しているのが三途の川じゃなくて無縁塚で、しかも其処には四季映姫も居ることを隠すなんて……如月に少し同情し始めたわよ」

そう、『場所』と『いる人物』である。

「クスクス、だからちゃんと言ったじゃない。『お礼を言われる事はしてないわよ』ってね♪」

「はあ……」

レテイシアのそんな楽しそうな顔に、紫は溜息を吐いたのだった。

\*\*\*

三途の川に向かっていく途中、如月は三つ分の影を見つけた為、空中を見てみると、レティとチルノと大妖精が居た。

「……お前達もコレに参加してるのか?」

「ええ、あの吸血鬼から脅s……コホンツ、頼まれたからね」

「やいお前!!?最強のアタイと勝負よ!!?」

「チルノちゃん、危ないよ」

チルノの言葉を軽くスルーし、レティの言葉に対しては苦笑した如月であった。

「それじゃあ、何をするんだ?」

「それは、やっぱり……」

「弾幕ごっこ!!?」

\*\*\*

最初に仕掛けたのは、やはりと言うべきか氷妖精のチルノである。

「霜符『フロストコラムス』!!?」

すると、青と白の棘型弾幕が如月を襲った。

しかし、如月は慌てない。

そもそも、スペルの内容を知っているのだから慌てる必要性は無いのだ。

如月は狭いスキマに入らない様に気を付けながら、弾幕を避け、そのままスペルブレイクとなった。

「当たり前なさいよ!!?」

「理不尽な」

如月はそう言うと、チルノに向けて弾幕を撃った。

霊夢や魔理沙と言った、普通の人間とも言いきくい人間とかなら簡単に避けれるが、相手は妖精。避けれずにそのまま終わってしまった。

「チルノ!!?……チルノの仇を撃たせてもらおうよ!!?」

「いや、仇って……死んでないだろ」

そんな如月の言葉は届かない。レティはそのままスペルを宣言した。

「寒符『リングリングゴールド』!!?」

すると、鳥の形をした大量の弾幕が如月を襲おうとするが、ひらりと避けてしまった。

「ならー怪符『テールブルターニング』!!?」

すると、大量の鱗型弾幕が飛ばされ、レティの周りにはレーザーが回っていた。

如月は広いスキマを見付けてはそこへと避難する事を繰り返し、レーザーも避け、スペルをブレイクした。

「……これで私は弾幕だけでの攻撃しか出来ないわね」

「そう言うことだ。通してくれないか?」

如月がそう言うが、レティは首を縦に振らず、返事の代わりに弾幕を撃った。

「私はダウンしてないわ。だから、弾幕ごっこは終わってない」

レティのその言葉に嘆息すると、足に力を入れ、跳躍し、レティへと攻撃した。

その攻撃は見事に当たり、レティはそのまま気絶した。

\*\*\*

その後、レティを別の場所で休ませ、三途の川付近まで走ってきた如月は、直ぐに周りを見渡してみた。

「……ん?小町の奴、いないな」

小町も参加すると分かった今、此処に居ると思っていた如月は何処にいるのか可能性が高いかを考え始めた。

「人里の団子屋か?いや、でも、彼奴からしたらコレは面白い事に入るだろうからそれは無い筈……となると……まあ、適当に行ってみるか」

如月はそう決めると、また走り出した。

それも、運良く、無縁塚方面へ。

少年移動中

「……で、適当に走って、無縁塚まで来てみたら……」

「お?遅かったね。あんたがこの持久走の挑戦者だろ?あの吸血鬼から顔を見せてもらったから覚えてるよ!」

「此処に居るのかよ。しかも、映姫まで……」



「全く。私は忙しい身ですから早々に終わらせる事にしましょう」

如月はそれを聞いて溜息を吐き、全く見慣れない人物の方に視線を向けた。

「で？お前は誰なんだ？」

如月が見ている人物は、フーセンガムを噛んでる男性を見た。

「ん？俺は『滋賀井 奈落』。小町と同じ死神さ。担当は違うがな」

「そうか。で、何をすれば良いんだ？」

如月がそう問うと、奈落が口を開いた。

「なら、まず初めに俺からのお題だ。俺は『寿命がきた者の命を狩る』死神なんだが、その俺が狩った為に死んだ霊からたった一つで良い。話を聞いてこい」

「……重そうなお題だが、分かった」

如月はそれを承諾すると、周りを見渡し始めた。

そして、その場に漂っていた霊を見付け、奈落を指差しながら聞いてみると、どうやら奈落によって狩られた霊だったようだ。

「なあ？何でも良いんだ。話をしてくれないか？」

『そうじゃなく、俺は死ぬ前な、病院でただただ死を待つだけの存在じゃったんじや。そんな俺にも勿論、家族はおったんじや。その家族を残して逝った事が、俺の心残りなんじや。じゃが、あの死神さんはの、死神さんらしくないんじや』

「……え？」

『人を殺す事に対して嫌な気分を持つとるんじや。そんな死神さんがおると知った時は、いや、たまげたの』

「……そうか、ありがとう」

如月はそれを聞くと、そのお爺ちゃんの霊に挨拶をしてから奈落の元へと戻り、聞いた話を話した。

「……そうか。あの爺さん、聡いな」

「……それで？小町からは何かあるのか？」

如月は今の空気を払拭する為に小町にそう聞くと、小町は笑みを浮かべて答えた。

「弾幕(ぶつ)っ(っ)や」

「……今日何回目の弾幕ごっこなんだろうな？」

\*\*\*

「古雨『黄泉中有の旅の雨』!!?」

小町がスペルを宣言すると、青の粒弾と緑の粒弾が撃たれた。

青の粒弾は普通に撃たただけだが、緑の粒弾は如月を狙って撃たれた。

これに対して如月は緑の粒弾を少し意識しながらも、青の粒弾の動きも見て、避けていた。

それから少しすると、銭弾幕を如月に向かって撃った。

が、それを避けた如月。しかし、少し辛そうである。

それからまた少し経つと、今度は銭弾幕が三つとなり、如月だけでなく、その進行方向にも撃った。

「ツッ?」

如月はそれに当たらない様に飛び、上へ避けたり、下へ避けたり、その銭型弾幕に当たらない様に避けた。

それからまた少しすると、今度は紫の粒弾まで増えて、如月を襲った。

「弾幕が多過ぎる!!?」

「ルールに抵触はしてないよ!!?」

小町のその言葉は実際本当だ。

この弾幕にもちゃんとスキマがある為、ルール違反にはなっていないのだ。

その後、そのスペルは時間がきたのか消滅した。

「一枚目はスペルブレイクされちゃったか」

「はあ…はあ…はあ……」

此処まで走って来た疲れもあり、息切れしている如月を労わる様子もなく、小町は次のスペルを宣言しようとした。

「小町…ちよつと…休ませてくれ……」

「いや、私も休ませてあげたいけど、これは弾幕ごっこだからね。諦めな」

小町からは無慈悲な言葉を言われ肩を落とした如月は、直ぐに小町

を見据え、何が来ても良い様に集中した。

「これが最後だよ!!? 死歌『八重霧の渡し』!!?」

すると、小町を中心として銭型の弾幕が配置され、周り始めた。

如月はそれを疲れた状態ながらも避け、スperlブレイクした。

「あちやく」

「はあ、はあ……悪いが……さっさと終わらせる!!?」

如月はそう言うと、『神雷』と『紫電』のコンボを使い、小町を倒した。

\*\*\*

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「小町、大丈夫か?」

「私は大丈夫さ……あく、疲れた」

「はあ、全く貴女は……」

如月はやはり息切れを起こしており、あまり話せる状態ではなく、奈落は小町の状態を気にしていた。

「さて、次は私と行きたいですが……もう暫く休ませましょう」

「す、すまない……」

映姫からの慈悲により、如月は少し休む事が出来た。

\*\*\*

如月が休んだ事により、少し楽になった。

それを見てとった映姫は、弾幕ごっこを所望した。

「だから、もうこれ何回目の弾幕ごっこだよ」

「さあ? 何回目でしょうね? ですが、貴方が勝っても負けても、説教はありますからね」

「……嘘だろ」

映姫からのその言葉に気を重くしながらも弾幕ごっこが始まった。

\*\*\*

如月は映姫と弾幕を撃ちあっていたが、映姫の弾幕に込められた力が如月が込めた力よりも多く、厚い為に撃ち落とせず、映姫からの弾幕を避ける事に切り替えた。

「避けてばかりでは私に勝てませんよ?」

「分かつてるさ!!? 偽装『グングニル』!!?」

如月はグングニルを持ち、それを映姫へと投げた。

映姫はそれを少し身体を傾けるだけで避け、如月の方に視線を戻すが、もうその場に如月はいなかった。

「龍け「甘い!!?」 ツ!!?」

如月は映姫の後ろから現れたが、それを映姫は先読みしていた様で、如月に向けて大量の弾幕を放った。

「うっ」

それを直ぐには避けきれず、如月は一度倒れ伏したが、直ぐに立ち上がった。

「攻撃が甘過ぎます。私が貴方のその行動を予測していなかったと思っていたのですか? ……舐められたものですね」

映姫はそう言うと、スペルを宣言した。

「審判『十王裁判』」

すると、映姫を中心として緑の粒弾が放たれた。

ただ、三つだけ如月に向けて撃たれた楕円形の弾幕があり、如月はそれを転がる様にして避けた。

その次に、弾幕の色が緑から紫に変わり、如月に向かっていた楕円形の弾幕の性質に、少しランダムな性質が加わった。

如月はその頃には立ち上がっており、その弾幕に当たらない様に弾幕を見ながら避けると、今度は如月を追う様にして赤色のレーザーや少しの粒弾が撃たれた。

如月はレーザーとレーザーの間に逃げ込もうとしたが、弾幕がやはり狙って来た為に、天羽々斬を使って避ける事にした。

その後、今度は赤から黄色に変わり、一つ前の様な弾幕が撃たれた。しかし、粒弾と楕円の弾幕に避ける場所はない。

が、その楕円の弾幕の一目目と二列目の間に逃げ込み、避けた。そして最後に、赤色の丸弾と粒弾が撃たれた。

しかし、如月はコレを見て思う。

(この最後のが一番簡単に避けれそうだな)

如月はゆっくりと移動し、弾幕を避けた。

「おや、疲れているのに全てを避けきりましたか」

「思いつきり疲れた。疲労感が半端ない」

「頑張ってください。あと一枚です」

「もうそれで終わりにしようぜ」

「私がダウンしてないのでから無理でしょう」

映姫がそう言うと、また宣言した。

「審判『ギルティ・オワ・ノットギルティ』」

すると、赤と青の大弾幕が映姫から撃たれ、それとほぼ同時にレーザーも撃たれた。

如月がその場から動く、如月がいた場所に向けて撃たれたレーザーのみが極太レーザーに変わった。

「……鬼か」

『鬼』と言う言葉が似合うのは吸血鬼の賢者だけですよ」

その言葉の後に撃たれた大弾幕は先程の量よりも増えていた。

如月が避ければ、また弾幕の数が増え、避ければ増え……何時の間にやら避ける場所が少なくなっていた。

しかし、そこでスペルが終わってしまった。

「……さて、此処から私は弾幕だけですか」

「俺は疲れたからさっさと終わらせる!!?」

そして、如月は『神雷』と『桜舞連斬』のコンボを使った。

それに対して、映姫は避けることなく、受けたのだった。

\*\*\*

レティシアは一人で如月の様子を見ていた。

紫は少し経ってから、冬眠してしまった。

そして現在、見ている如月の様子は……、

「クスクス、あらあら、可哀想に♪」

映姫に正座をさせられ、説教をされている如月であった。

レティシアはその様子を面白がって見ている。

それから如月が解放され、鈴を貰い、また移動し始めたのを見て、レティシアは外の様子に目を向けた。

「……もう日が暮れ始めたわね。これは次の場所で今日は終わりにさ

せましよう。さて、次の場所は……あら、丁度良いわね♪」  
レテイシアはそう言うと、その場を立ち上がって、何処かへと移動した。

如月が向かっている方向には……紅魔館があった。

## 第三百三十七話

無縁塚から紅魔館まで走って移動して来た如月は、肩で息をしており、汗も尋常じゃない量を流していた。

「はあ、はあ……冬なのに……こんなに汗出るとは……風呂入りたい……」

如月は口からそんな言葉を出して、前を見据えた。

今彼の前に見えているのは紅い悪魔の館『紅魔館』。

その館はもう目と鼻の先である。

「……だけど、そう簡単には入れてくれなさそうだな……」

「さあ！私達からの!!?」

「お題を受けやがれ!!?」

紅魔館の門番の美鈴と、中華風の袴にボサボサな髪をした誰とも分からない男がいた。

「いや、美鈴は分かるけど、お前誰だよ」

「俺は『劉 リュウ ファンヨウ 風陽』だ!!?」

劉は闘気を収めぬまま、そう名乗った。

「……で?何をするんだ?弾幕ごっこか?」

もう諦めの雰囲気を醸し出している。また弾幕ごっこだと思っっている様だが、それは違う。

「俺達からのお題は『俺達を肉弾戦で連続で相手すること』だ!!?」

「……俺は肉弾戦は何方かと言うと苦手だから、凜華、頼む」

「しようがない奴じやの〜」

如月からの頼みで出てきた凜華。しかし、やはり闘気は出ていた。

「……へ〜?面白そうな奴が出て来たな?美鈴」

「そうですね。ですが、最初は私からですので、手を出さないでくださいね?風陽」

「誰が出すかよ……全力で行け、美鈴」

「はい!!?」

美鈴はそう言うと、凜華と対峙した。

\*\*\*

凜華が美鈴と戦っている間、如月は近くの湖畔で体を休めていた。勿論、動くのを辞めれば寒さは感じるもので……、

「……寒っ」

現在進行形で寒さを感じていた。

しかも、汗も流していた所為で余計に寒さを感じている。

「おう、大丈夫か？」

「あ、ああ、大丈夫だ。問題ない」

「問題あるんだな」

風陽は如月にそう話し掛けながらも、美鈴の様子を見た。

そこには、互いに互いを殴り合っている凜華と美鈴がいた。

美鈴の場合は蹴りもあるが。

「くっ！凜華さん!!？貴女の拳は中々に重いですね!!？」

「それはお主もじゃろ!!？レティシアにでも鍛えられたか？」

「紅魔館に住むものは全員レティシア様から鍛えられますよ!!？」

「そうか！ならば妾をもっと楽しませてみるのじゃ!!？」

そんな話をしている中でも殴り合いをやめていなかった二人。

しかし、それは唐突として終わった。

「なっ!!？」

美鈴は突如として脚を崩し、崩れ落ちた。

「え……ち、力が……入らない？」

「美鈴!!？」

「ふむ、これで終いか。なら、次はお主か？」

「ああ、そうだぜ。ただ、先に美鈴を移動させる」

「良かろう」

凜華からの言葉を聞くと、美鈴をお姫様抱っこの形の形で如月の元に移動させた。

「なっ!!？ふ、風陽!!？／／／」

「美鈴、休んどけ。こっからは俺のターンだ」

美鈴をその場に降ろすと、今度は劉が対峙した。

「『劉』か……『龍』と同じ名か……」

「ん？誰だ？そいつ」



「お主が気にする事ではない。さあ！やるぞ!!？」  
そうして第二回戦が始まった。

劉は美鈴と同じ様に、殴り、蹴りを繰り返す。  
しかし、その際に劉が感じ取っていた。

(俺の力が……此奴に『吸い取られてる』だと!?!?)

実際は『吸い取る』ではなく『喰う』という言葉が凜華の種族には合ってるのだが、劉は凜華の種族を知っている訳ではない為、この言葉しか出てこない。

「闘いの時に思考するとは余裕じゃな!!？」

「へ!!?まだまだ行けるぜ!!？」

劉はそう言葉にするも、ドンドンと力を喰われ、一瞬でも気を抜けば足が崩れてしまう。

今の今まで勇儀や美鈴が足を崩して負けたのは、そもそもコレが原因だ。

凜華は喰龍として、無意識のうちに相手の『力』を喰っているのだ。  
そして、遂に劉は足を崩してしまった。

「チツ!!？」

「コレで終いじゃ!!？」

そんな劉に対して最後に拳を入れ、劉は思いっきり飛ばされてしまった。

その勢いは止まらず、湖へと落とされてしまった。

「ふう、二戦は流石にキツイの〜」

「嘘付け。堪えてる様子がどこにも無いぞ」

「中々に楽しかったの〜♪」

凜華はその言葉を最後に、如月の中に戻って行った。

「……さて、劉を引き上げてから入るか」

如月はそう言葉にすると、湖の中へと入って行った。

\*\*\*

劉を湖から引き上げた如月は、そのまま紅魔館へと入っていくと、  
玄関ホールにはペスとユニが居た。

「ようこそ、紅魔館へ」

「先ずは私からのお題だよ!!?」

「……何方かじゃないのか?」

如月はそう聞いてみると、ペスが答えた。

「私達も最初は一緒のお題を出そうと考えておりましたが、二人の意見が噛み合いませんでしたので別々に出すことにしました」

「そうか……それで、ユニのお題は何だ?」

「お饅頭!!?」

「……は?」

ユニからのお題を聞いた如月は惚けてしまった。

だが、これは仕方が無いだろう。

何かキツイお題が来るかと思ったら饅頭を請求されたのだから。

「……饅頭がどうした?」

「お饅頭を作って私に please すれば良い!!? それだけ!!? た・だ・し!!? 私が満足したものを作れなきゃもう一回作ってもらうからね!!?」

「はあ……ペス。キッチン借りて良いか?」

「……それよりも先に私のお題から解決してください。この子のは後でも解決出来ますから」

「そうするか。で、お題は?」

「アレ? 私のお題は放置?」

「当たり前でしょ」

ペスからのそんな言葉を聞き、少し落ち込んでいるユニ。

しかし、それを見て見ぬ振りをしてペスはお題を出した。

「私からのお題は『星座を正確に説明すること』です」

「……星座なら何でも良いのか?」

「そう言う様でしたら私が指定しても良いのですよ?」

「辞めてくれ」

如月はそう言葉にした後、何の星座の説明をするかを考え始めた。

「……『いっかくじゅう座』」

そして、如月は冬の星座の一つを出した。

それに対して、ペスは頷いて続きを促した。

「由来から説明すれば、旧約聖書に出てくる『一角獣』……まあ、この場合はユニの事と捉えても良いと思う。それをモチーフとしている星座で……」

そこからはとても長い説明だったが、ペスは止める事をせず、聞いていた。

そして、如月の説明を聞き終えたペスは拍手した。

「お見事。よく知ってらっしゃいますね」

「まあな」

「それにしても、その星座は何方かと言うとマニアックな星座です。それを本当によく知っていましたね。私は嬉しいです」

「喜んでくれたなら良かったよ」

如月は本当に嬉しそうな顔をしているペスを見てから、キッチンへと走って向かった。

ユニからのお題である『お饅頭』を作りに行ったのだ。

それからキッチンへと着くと、お饅頭を作り始めた。

「少年料理中」

「ほら、出来たぞ」

如月はお饅頭を作り終え、ユニ達がいる玄関ホールへと戻ってきた。

「わ〜い♪」

「ユニ、貴女実はタダで食べたかっただけでしょ」

「そ、そんな事はないよ〜?」

ユニはそう言うが、目が思いつきり泳いでいる。

「……後で掃除追加ね」

「メイド長じゃないからその権限は使えない!!?」

「後で咲夜に言っておくから安心しなさい」

「辞めてよ〜」

ユニはそう言った後にお饅頭を食べると満足がいく味だった様で、合格を言い渡した。

その後、如月は図書館の方へと向かった。

が、その途中でマリアと狼に会った。

「あ！如月だ!!？」

マリアはもう既に何回か会っている為に慣れていた。

狼も警戒している様子は無い。

「となると、俺達からもお題を出さないとな」

「ああ、頼む」

「狼、どうしよつか？」

マリアがそう言うと、狼は如月に向かって言った。

「今から図書館に行こうとしてたんだ。其処でお題を出す」

この言葉で大体どんなお題を出されるかを察した如月は、狼達に着いて行った。

\*\*\*

図書館に着くと、狼は早速如月にお題を出した。

「今この図書館、其処ら辺に本が散らかってるだろ？」

「そうだな。何でこんなに散らかってるんだ？」

「パチュリー様が本を読む事に熱中して、其の後魔法の実験をしたりしてて、小悪魔もそれに付き合ってる所為か中々片付かないんだ。光冥やシユロム様も時々やってくれるんだが、それでも中々終わらないという現状だ」

「……俺にその全てを片付けろと？」

如月がげっそりとした顔でそう問い掛けるが、狼は首を振って否定した。

「全てじゃなくて良い。そうだな……目標三十冊。それぐらいは片付けろ」

「分かった」

如月はそれを聞くと、早速片付け始めた。

先ずは本の題名を見て、それを正しい位置へと戻した。

別にイカサマをしても良いのだが、如月はそんな人物では無いし、そもそも出来ない。

如月の近くにはマリアが着いていた。

時折、転けたりもしているが、それを除けば立派な監視役だ。

……如月と世間話もしているが、それは除いておこう。

それから約三十分後、如月は目標の数の本を片付け終えた。

……普通は其処まで掛らないかもしれないが、コレだけ掛かったのは主にマリアが何回も転けた所為である。

「さて、パチュリーは何処に「パチュリー様達の所へ案内しましょうか？」「こあ」

如月がパチュリーを探そうと移動し様としたその時に、小悪魔が如月の後ろから声を掛けた。

「ああ、頼む」

如月は小悪魔に頼むと、小悪魔は移動し始めた。

如月も黙って着いていく。マリアはもう既に居ない。

そうして移動していると、パチュリーと、その近くに男性が座っていた。

その男性は何故か片目に眼帯をしている。

「パチュリーと……誰だ？」

如月は首を傾げながら聞くと、相手は名乗ってくれた。

「俺は『シユロム・ロマニクス』。宜しくな」

シユロムはそう名乗ると、早速お題の話をし出した。

「レテイシアからは聞いているよね？という事で、俺からはお題を」

「私からは弾幕ごっこを出させてもらおうわ」

如月はそれを聞くと、お題から片付けようと決めた。

「じゃあ、シユロム。お題を出してくれないか？」

「分かった。俺からのお題は『俺が知らない外界の物を詳しく説明すること』だよ」

「ふむ……」

如月はそれを聞くと、少し悩んだ。

外界……つまりは外の物。それを詳しく説明するというなら、自分が説明しやすいものを考えた。

「……なあ？此処に『テレビ』ってあるか？」

「てれび？何かしら？それ」

「あれじゃないかな？外界の式神」

「それは確か『ばそこん』とかいう物じゃなかったかしら？」

如月は二人のこの様子で知らない事を知ると、説明し出した。

「『テレビ』っていうのは、薄い箱に風景を映すことが出来る物なんだ」

「映す？何でも映せるの？」

「まあ、何でもかな。と言っても、カメラとかで撮った物やアニメの様に創作物とかじゃないといけないが……あ、生放送とかも……」

「如月、話が逸れてるぞ」

如月の話が逸れているのが何と無く分かったのか、狼がそう言った。

その近くには先程まで居なかったマリアもいた。その手には紅茶一式があるが。

「あ、マリア、有難う」

「マリアの入れた紅茶は美味しいからね!!？」

「えへへ、有難う」

二人が紅茶を受け取るのを見て、如月は説明を再開した。

\*\*\*

「……それがテレビっていう物さ」

「へく、そうなんだ」

如月が説明し終わると、シユロムの顔は少し輝いている様に見えるた。

「……それで、パチュリーの弾幕ごっこだが「あ、ちよつと待って。俺のお題はまだ残ってるよ」え？そうなのか？」

如月はシユロムにそう聞くと、シユロムは頷いた。

「うん、俺からの最後のお題は『光冥を捜して弾幕ごっこを挑む』こと。あ、光冥が誰か知ってる？」

「……誰か教えてくれ」

如月のその言葉を受け、狼とシユロムが特徴を話した。

光冥の髪は水色で、中性的な顔をしていること。

そんな説明をした。

「……それ、女装させられてたら見付けにくい気がするんだが？」

「その時は頑張ってよ」

「マジかよ」

如月は溜息を吐くと、パチュリィの方に視線を戻した。

「じゃあ、シユロムのお題を解決する前に、弾幕ごっこをするか。パチュリィ」

「ええ、そうね。やりましょう」

パチュリィはそう言うのと、椅子から立ち上がり、少し場所を移動した。

\*\*\*

先に動いたのはパチュリィである。

「日符『ロイヤルフレア』!!?」

すると、パチュリィが手を上に上げると、そこから巨大な火球が出現した。

普通は本のこととも考えてコレを使うべきじゃないのだろうか、パチュリィが既に魔法で傷付かない様に施してある為、そんな心配はしなくて良いのだ。

パチュリィはその火球を如月に向けて投げた。

勿論、如月はそれを避けなければ終わりとも言える大惨事になるが、その火球の直ぐそばを避けようとすれば間違いなく火が移る。

なので、如月は時空を斬り、其処へ一度避難した。

そして、スペルブレイクしたと同時に如月は戻ってきた。

「危なかったな。というかパチュリィ、お前、嘆息の筈だろ? 何でそんな元気一杯に動けてるんだよ」

如月がそう聞くと、パチュリィは律儀に答えた。

「昨日、葵が本を返して、また借りに来た時に嘆息を一時的にだけど治してもらったのよ。だから、今の私は元気になれるのよ!!?」

「葵……タイミングを考えてくれ……」

流星の葵も、未来を見ていなければ何が起こるか分からない普通の女の子。その次の日には元気になったパチュリィと戦うなんて誰が思うのだろうか。

「次のスペル行くわよ!!? 火水木金土符『賢者の石』!!?」

すると、パチュリィの周りに五色の結晶が現れ、そこから五色の結晶弾幕が撃たれた。

それは全てランダムに動いているが、弾幕の量が途轍もなく多い。如月は幾つか撃ち落そうと試みるが、レティシアに鍛えられている所為なのか、撃ち落とせなかった。

「……だったら」

そう言葉にすると、如月は時空を開き、その中へと入って行ってしまった。

「……」

パチュリーはそれに対して警戒した状態で有りながらも弾幕を飛ばしている、何者かが自分の肩に手を置いた感触がした。

その時に、後ろから声が聞こえた。

「喰龍『ドラゴンイロウシエン』」

それと同時に少しだが感じる倦怠感。それによって、自分の力が吸い取られてるのを悟り、持っていた本で後ろに居た如月に対して打撃攻撃を食らわせ様とした。

しかし、如月は既に距離を取っていた為に当たらなかった。

「はあ……はあ……ケホツ……何をしたの……」

「パチュリーの力を喰らった。で、俺の力にした。コレをする為に」

如月はそう言う、天羽々斬を構えた。

「龍剣『喰流天牙』」

そう宣言すると、天羽々斬の刀身から漆黒の刀身が生まれた。

そして、そのままパチュリーの方に跳躍し、そのままパチュリーへと攻撃した。

怠さを感じていたパチュリーは避けるのが遅れた為、如月の攻撃をそのまま受けてしまった。

\*\*\*

パチュリーをシュロムに預けると、シュロムのもう一つのお題を解決する為に館内を走って探し始めた。

それから少しすると、

「やめてよミコちゃん!!?・俺にそんな対応しないでよおおおおおおおお!!?」

「……ん?」



そんな叫び声が聞こえてきた。

如月は何事かと思い、その叫び声が聞こえた方へと向かってみた。そして、ある曲がり角を曲がると、其処には何故か発狂しかけている黒髪の男性と、とてもニコニコと……というか、黒髪の男性の反応を楽しんでいる様子の黒髪のポニテをした中性的な顔の男性がいた。

「……何だ？この状況」

如月のそんな言葉が耳に入った様で、若干発狂している男性は如月の方に顔を向けると、如月に助けを求める様な顔をした。

「……」

しかし、如月はそれを無視して戻って来た道を帰ろうとした。

「ちよっ!??お願いだから俺を助けてよ!!?」

黒髪の男性の必死の呼び掛けに対して、如月は後ろ向きながらも必死に笑いを堪えるのだった。

\*\*\*

アレから結局は間に入った如月は、二人の名前を聞いた。

「お初にお目に掛かります。私、この紅魔館で執事しておりますミコトと申します」

(あれ?狼達、此奴の名前を言ってたっけ?)

狼達はミコトの名前は言っていない。理由としては省いた訳では無いのだが、此処に住んでいる訳でも無い為、紹介しなかったのだ。

「……で、お前は?」

「俺は『紫黒 竜希』です!!?よろしくね如月くん!!?」

「あゝ、はい」

如月は何故か曖昧な返事を返した。

「それで、何でさっきの状態に?」

「それがね、聞いてよ!如月くん!!?」

竜希は如月に対して、自分の経緯を話し出した。

く回想く

ミコトと竜希が住んでいる幻想郷。

其処にある白玉楼に住んでいる竜希は、縁側に座っていた。

「それで?何でさっきから俺を監視してるのかな?紫ちゃん」

竜希がそう問い掛けると、直ぐ近くから紫が出て来た。

「監視とは違うわね。貴方に行ってもらいたい所があるから、貴方が気付くまで隠れてたのよ」

「だったら最初から出て来てくれれば良いのに」

「それで、貴方に行ってもらいたい場所の事だけどね」

「アレ？無視？俺の言葉は無視なの？」

竜希は紫に対してその言葉にするが、紫はスルーして話を続ける。

「貴方には私の知り合いが住んでる幻想郷に行ってもらおうわ」

「あ、俺嫌な予感がするからパスで……」

「いってらっしゃい♪」

紫はそう言つて竜希を落とそうとするが、竜希は落ちなかった。

足場にスキマが開くほんの数秒でその場から移動した。

「ちよっ!??嫌だよ!??今回ばかりは本当に嫌な予感がするから絶対に行かないよ!??」

「う〜ん、どうしましょうか?」

竜希が落ちてくれないと分かるとどうすれば良いのかと悩む紫。

其処へ丁度良く妖夢と幽々子がやって来た。

「あ!よくむちゃん!!?幽々子さん!!?俺を助けてよ!!?」

「え?」

「あら?」

其処で竜希が妖夢と幽々子に事情説明をすると、幽々子が言った。

「いってらっしゃい♪」

……その言葉を聞くと、妖夢は竜希を助ける事はせず、結局はスキマで移動して来た竜希。

そして、落ちたその場所が……、

「おや?竜希さん。どうしていらつしやるのですか?」

「嫌な予感の中しちやったよおおお!!?」

ミコトが執事姿で掃除をしている所だった。

〜回想終了〜

「……竜希、ドンマイ」

「如月くん……笑うなら盛大に笑ってよ」

如月は笑いを堪えてそう言うと、竜希からそんな言葉を受けた。その言葉を聞くと、如月は盛大に笑い出した。

そして、笑いを収めると、今度は自分の事情を説明し出した。

「へ〜？何だか面白そうな事をしてるね〜」

「いや、これ結構キツイから」

「……」

如月から事情を聞くと、何故かミコトは考え事を始めた。

（あれ？この流れはもしかして……）

「でしたら、私からもちよつとしたお題を出しましょう」

「あ、やっぱりなのね」

「頑張れ!!？如月くん!!？」

竜希のそんな声援は若干スルーして、如月はミコトを見据えた。

そして、ミコトは執事服のポケットに手を入れると、コインを取り出した。

「……コイン？」

「ええ、私がこれからこのコインを投げます。如月さんはそのコインの裏表を当ててください」

「あく、よくあるコインゲームか」

「ええ。それでは、いきますよ」

ミコトはそう言うと、コインを上へと投げ、落ちてきた所でコインを隠した。

「それでは何方でしょうか？」

「二表」

何故かこの時、竜希も答えた。

そして、答えは……、

「表……お見事です」

「よっしや!!？」

「おお！凄いね〜!!？如月くん!!？」

「あ、そうだ。なあ？光冥が何処にいるか知らないか？」

如月がミコトに対してそう聞くと、ミコトは若干同情した目をした。

「？」

「……光冥さんはこの先に居ますよ」

「？有難う。それじゃあ行つて来るな」

如月はそう言うと、その場を離れた。

……離れた途端、何故かまた竜希の悲鳴が聞こえた気がするが、気の所為だろうと勝手に思った如月だった。

\*\*\*

如月は光冥を漸く見つけることが出来たが……、

「……」

「み、見ないで下さい!!?／＼／＼」

何故かメイド服を着せられている光冥がいた。

「……何してるんだ?お前」

「レティシア様に無理矢理……／＼／＼」

「……そうか。……ドンマイ」

それから如月は一旦光冥に着替えて来る様に言うと、その場で待つ事とした。

……そんな時に、後ろから声を掛けられた。

「お前、如月か?」

「あ、朱鳥とくおん」

其処には朱鳥とくおんが立っていた。

「あ、なあ?お前達からもお題はあるのか?」

「ああ、勿論だ……ただ、くおんのはちよつと此処じゃ無理だな。私の出来るが」

「?何をすれば良いんだ?」

如月がそう聞くと、朱鳥の体が光だし、其処には朱い小鳥が飛んでいた。

「……え?」

『本来の姿は小鳥じゃないんだが……まあ、私のお題はこの方が好都合だからな』

「え?お前、朱鳥か?」

『そうだ。私は朱鳥だ。さて、私からのお題だが……競争だ』

「競争？」

『ああ、今現在のこの場所から、真つ直ぐ進んだ所にある壁に早く辿り着いた方の勝ち。それだけだ』

「……分かった」

如月は此処まで走ってきた為なのか、それぐらいもう苦でもないと感じ、それを受けた。

「それじゃあ、私が合図を出す。良いな？」

くおんのそんな言葉と共に、二人は位置に着く。

「それじゃあ……始め!!？」

その合図と共に走り出した如月と朱鳥。

最初こそ朱鳥の方が早かったが、このお題にスペルを使っただけではないというルールはない。

よって、如月はスペルを使った。

「肉体強化『神雷』!!？」

『!?!!?』

その結果、朱鳥よりも速く走る事が出来、朱鳥よりも先に辿り着いた。

「俺の勝ちだな」

『……スペルか。確かに規制していなかったからな』

朱鳥はそう言うと、光だし、元の姿に戻った。

「あれ？如月君は？」

「……丁度来た様だな」

そんな所に丁度光冥が帰って来た様で、如月と共に戻っていった。

「それで、光冥からは何を出すんだ？」

「自分との弾幕ごっこです」

「……分かった」

\*\*\*

如月と光冥は弾幕を撃ちあっていた。

最初こそは避けていたのだが、自分の力を調整し、もうそう簡単には撃ち落とせない様になった。

「複製『イリユージョンエリア』!!？」

すると、光冥が何故か八人に増え、その全員が如月に対して弾幕を撃った。

「ッ!!?」

如月は自分の弾幕で撃ち落としながらも、撃ち落とせなかった弾幕は、神力を纏わせた天羽々斬で斬り裂いた。

と、弾幕が止んだかと思ったら、今度は八人の光冥が突撃して来た。

「偽装『グングニル』!!?」

如月はグングニルを出すと、それを薙ぎ払う様な動きをし、光冥の攻撃を防いだ。

それによつて、光冥は少し飛ばされ、それによりスペルブレイクされた。

「……スペルブレイクされてしまいましたか」

「ああ、だが、それと同時に俺のグングニルも壊れたが」

如月が使っているこのグングニルは所詮は偽物。本物には到底及ばない。だから、簡単に壊れてしまうのだ。

「それでは次です!!? 破裂『ディメンションストライク』!!?」

すると、如月は自分の前に何かが出来た事を感じ取った。

「なんだ?」

それを確かめようとしたが、それは出来なかった。

光冥が『何か』を割りながら此方に飛び蹴りを仕掛けているのだ。

それを見た如月は、天羽々斬を構えて、宣言した。

「龍剣『焰』!!?」

如月は天羽々斬に神力を纏わせ、光冥の攻撃を右に避けると、その力を利用して回り、光冥の腹にダイレクトに当たったのだった。

\*\*\*

「光冥!!?」

光冥との弾幕ごっこが終わると、咲夜が来た。

咲夜は光冥の状態を見た。

「大丈夫? 光冥」

「ん、だ、大丈夫だよ、咲夜」

「そう、良かった」

咲夜はホツとした様子を見せた。

「あく、咲夜……その、済まなかった」

如月は咲夜に対して謝ると、咲夜は首を横に振った。

「良いのよ、光冥が弾幕ごっこで負けたのでしょ？仕方ないわ」

「そうか……それで、この空気の時に悪いんだが……」

「私からのお題は『光冥との弾幕ごっこ』。だから、私のお題も終わってるわ」

「そ、そうか。それじゃあ、後は……」

「くおんとフラン様。あ、レミリア様からのお題は『全員のお題を済ませること』だから問題ない」

「分かった。それじゃあ、頼む。くおん」

「ああ……と、行きたいんだが、先にフラン様の所に行け」

「？何でだ？」

「何ででもだ」

くおんからそう言われた如月は、フランの部屋へと向かって行った。

\*\*\*

如月はフランの部屋へと着くと、一度ノックした。

「？誰？」

「如月だ」

「!!？もしかして、持久走の挑戦者!!？」

フランのその声に肯定すると、フランが部屋から出てきた。

「じゃあ、お兄ちゃん、行こうよ!!？」

「え？ちよつと待ってくれ!!？フランのお題は……」

「私のお題は『私と一緒に何かのお題を解決すること』だよ!!？」

フランは笑顔でそう言うと、如月には何が残ってるのかを聞き、急いでくおんがいる場所へと向かった。

\*\*\*

「……来たか」

「くおん！私もこのお兄ちゃんと一緒にお題を解決するよ!!？」

「ええ、分かっていますよ。その為に如月を先にフラン様の元へと行か

せたのですから」

くおんが今いる部屋は、まるで植物園の様な部屋だった。

と言っても、あるのは青薔薇のみだが、それが部屋一面にあるのだ。

「私からのお題は『私の攻撃を全て避け切り、私に触ること』だ」

「……俺に弾幕を撃つなという事か?」

「ああ、そうだ。というか、これは弾幕ごっこじゃないんだ。私はスペルを使わない」

くおんはワザと『如月も使うな』と言わなかった。

これはくおんの温情だ。

此処まで頑張ってきた如月に対しての。

「それじゃあ、フラン様も頑張ってください」

「うん!!?」

くおんはそれを聞くと、青薔薇を操り、まるで鞭の様な感じで如月とフランに攻撃を仕掛けた。

「棘が危ない!!?」

「あはは!楽しいね!!?お兄ちゃん!!?」

青薔薇の鞭は上から、下から、右から、左からと、色んな方向から来る。

「くっ!!?」

『神雷』を使っても良いが、傷付く事なくというのは無理そうだ。

「!!?」

しかし、其処で如月はあることを思い付いた。

如月は原初の能力を使ってみた。

すると、植物が攻撃するのを辞めてしまった。

「……所有権を奪われてしまったか」

くおんが少し笑みを浮かべてそう言うと、如月がくおんの肩に手を置いた。

「コレでお題は終了……で良いよな?」

「ああ、それと同時にフラン様のお題も終了だ」

「楽しかったよ!!?お兄ちゃん!!?」

如月はフランの頭を撫でてから、レミリアがいる場所を聞き、其処



へと向かった。

\*\*\*

レミリアが居た部屋は紅霧異変の時にも使っていた部屋で、その奥にある椅子に、レミリアは座っていた。

レミリアは如月の姿を見て取ると、如月の元に近付いた。

「私からのお題はクリア済みよ。だから、はい、コレ」

レミリアは如月に鈴を渡した。

と、それと同時に、如月の後ろの扉が開き、其処から、私服を着たミコトと竜希、そしてレティシアが居た。

「クスクス、これで持久走は一旦終了よ」

「え？何でだ？」

如月がそう聞くと、レティシアは答えた。

「クスクス、外はもう暗いわよ♪」

「……成る程。となると、何処で寝るんだ？俺」

如月はそう聞くと、レティシアは笑みを浮かべて答えた。

「クスクス、貴方だけでなくミコト達もそうだけど、貴方達が泊まる所は……『神無月神社』よ♪」

レティシアはそう言うと、『神無月神社』行きスキマを開いたのだった。

## 第三百三十八話

レティシアが開いたスキマを潜り抜け、神無月神社の境内に着いた如月、ミコト、竜希の三人。

「……此処は本当に綺麗だな」

「そうだね、綺麗に掃除されてる。掃除してる人の性格がよく分かるね」

「葵は真面目で、優しいからな」

「そうだな」

「アレ？二人はその人に会って、俺だけ会った事無いって事!?俺省かれてる!?」

「如月、此奴は放つといてさっさと行くぞ」

「分かった」

「二人して俺をスルーしないでよ〜!」

この短時間で竜希の扱いを何と無く察した如月だった。

と、先に行こうとした時、ミコトが足を止めた。

「?どうした?ミコト」

「いや、葵が来てくれてる様だ。すれ違いになるのも嫌だしな」

「お?そうなの?」

竜希がそう言うってから少しして、黄色のマフラーをした葵がやって来た。

「如月さん、ミコトさん、竜希さんお待ちしておりました」

葵は笑顔を浮かべて挨拶をした。

「あれ?俺は君とは初対面だよ?」

竜希がそう言うと、葵は苦笑しながら答えた。

「以前、ミコトさんの『過去』を見てしまった時に、竜希さんの姿と名前も知りましたから」

この時、既に竜希の『過去』も見ている為、それも関係しているのだが、今は関係ない。

「へ、それが葵ちゃん能力なのね」

「ち、ちゃん……?」

今まで『ちゃん』付けで呼ばれたことが無い為、少し反応に困る葵。  
「おい竜希、葵を困らせるな」

「大丈夫ですよミコトさん。心配してくださり、有難う御座います。  
さ、今の季節は冬ですから外は寒いですので上がって下さい」

葵がそう言うのと、全員中に入って行った。

\*\*\*

中に入ってみると、如月が驚いた顔をした。

「龍?!? 何で此処に……てか、其処にいる人は誰なんだ?!?」

「如月君、俺も参加してるんだ。お題を出す側としてね」

「それで、此方の方が……」

「よっ!!? 俺は『木更津 帝』だ! お前やミコト達と同じ様に、別の幻想郷から此処に遊びに来たんだ!!? よろしくな!!?」

「あ、ああ、よろしくな」

「よろしくな、帝」

「よろしくね〜! 帝くん!!?」

如月達が挨拶をすると、家の中へと入れられた。

「もう食事の準備は出来ていますので、沢山食べて下さいね!」

葵は茶の間へと案内し、そのの襖を開くと、卓の上にはお鍋が置かれていた。

「お〜! お鍋だ!!?」

「あれ? 外の物は無かったんじゃ……」

如月がそう聞くのも仕方ない。

鍋が置かれているのには、良く外で使われている卓上コンロがあったのだから。

「レティシアさんから貸して頂いた物です。大人数で食べるならお鍋の方が良いですし、これなら温かいままで食べれますからね」

葵がそう説明すると、如月達に座る様に促した。

「それでは、頂きます」

その挨拶と共に始まった争奪戦。

「肉は貰った〜!〜!〜!」

「あ〜!〜! やばい!!? 肉が帝に取られた!!?」

「モグモグ」

「お前は何時その肉を取ったんだ」

「帝に隠れてだ」

「俺も鶏肉もくらい!!?」

「僕も……あ！龍さん!!?それは僕の!!?」

「早い者勝ちだから諦めて」

「騒がしいな」

「ふふ、でも暖かいですよ、ミコトさん」

「……そうだな。ん？葵は鶏肉食べないのか?」

「……お肉類は少し苦手」

「そうか」

そんな騒がしさも有りながら食事は進んでいく。

……途中で凜華も出て来て、お鍋を全て取られそうになるという事態も発生しそうになったが、如月が若干脅したことにより普通の量しか食べなかった。

\*\*\*

如月がお風呂から上がると、桜がある方の縁側に葵が座っていた。

「葵、次入れるぞ」

「あ、如月さん。いえ、ミコトさん達を優先的に入れてあげて下さい。

私は最後に構いませんので」

「分かった。……そういえば、前から気になってたんだが、その淡いピンクのリボン……霖之助からのか?」

「え?あ、はい、そうです。……異変の時にもこのリボンを付けていましたから汚してしまいましたが、捨てるというのも……嫌ですから」

葵はそう言うと、苦笑した。

「……霖之助からは何て?」

「……何も言われてはいませんが、嬉しそうに笑ってくれていました」

「……そうか」

如月はそう言うと、少し黙ってしまった。

「そういえば如月さん、何か私に用があったのですか?」

葵はそう言うと、如月は思い出したかの様にポケットから何かの箱

を取り出した。

「?それは?」

「俺からの贈り物だ。きつと、葵の力になってくれる」

葵は如月からその箱を受け取った。

その中身は、銀色のブレスレットだった。

「……えつと、失礼と知っていながら聞きますが、何でしょう?これ」

しかし、葵は『ブレスレット』という物を知らなかった。

「それは腕に付ける飾りだな」

如月は簡単にそう説明した。

それを聞くと葵はお礼を言い、腕に付けてみた。

「……こうですか?」

「そうそう。似合ってるぞ」

「有難う御座います!」

葵がそう言うのを聞くと、如月はミコトを呼びに行った。

\*\*\*

その次の日の朝。

「……まさかの葵達からお題があるとは」

「すみません、でも、レティシアさんから頼まれましたから……」

葵は本当にすまなそうに謝った。

「いや、葵が謝ることじゃないさ。……それで、先ずは誰からのをやれば良いんだ?」

如月がそう言葉にすると、

「俺から……」

龍と帝が同時に言葉にした。

「二人のお題は何なんだ?」

ミコトがそう聞くと、龍が先に答えた。

「俺のお題は簡単だよ。『俺との勝負』。それだけ」

「俺のお題は『俺の一撃を受け切れ』ってお題だ」

「……なら、凜華と分かれてやるか」

如月はその言葉の後、凜華が外に出て来た。その顔は多少、不満そうだったが。

「……妾が龍の相手をするのか？」

「ああ。俺が帝の相手をする」

「……仕方ないの〜」

凜華はそう言うと、龍と対峙した。

「……凜華さん、この前は手を抜かれての勝負だったけど、今度は本気で来て下さい」

「それを決めるのは妾じゃ。お主ではない」

「……そうですね」

龍は残念そうにそう言うと、剣を構えた。

「それじゃあ、向こうも始める様だし、俺達も始めるぞ」

「ああ、頼む」

「あ、良いか？避けるなよ」

「お題の内容に『受け切れ』って入ってる時点で避けるって選択は無くなってるさ」

「それもそうだなー！」

帝はそう言うと、手を上に上げると、超巨大な弾幕を作った。

それをそのまま如月に向かって投げると、如月は喰龍の力を使つて、弾幕の力を喰い始めた。

「……葵から聞いてたが……マジかよ」

帝は最初、自分と似た能力かと思つたが、それは違った。

蓄積しているわけではない。かと言って収集している訳でもない。

本当の意味で『喰べている』と分かった。

そして、その弾幕は食べられてしまった。

「……うっ」

「如月さん!?!?」

葵は如月の様子を見て直ぐに近付いた。

ミコトも如月の『命』からその能力を大体だが理解していた為、直ぐに近寄った。

「大丈夫ですか？如月さん」

「あ、ああ……この能力使うと本当に疲れる」

「その様だな」

葵は直ぐに如月に能力を使った。

そのお陰で、怠さが少しずつ無くなっていった。

「……そういえば、凜華は」

如月はそう言っつて、凜華の方を見ると、

「……」

「……」

まだ決着が着いていなかった。

「……凜華さん、そろそろ本気を出して下さい」

龍はまたそう言うが、凜華は頷かない。

「嫌じゃ。出すわけがなからう」

龍がそれに対して嘆息すると、凜華に近付き、剣を奮った。

すると凜華はそれを避け、龍の胸倉を掴み、投げ飛ばした。

普通なら凜華と長時間戦えば力を喰われ、今まで通り足に力を入れる事が出来なくなり、それで終わってしまう。

しかし、龍は何故か凜華から力を食われない。凜華も何故か喰えない。だから、そう簡単には倒れないのだ。

「……」

「ん？何かな？鬼灯ちゃん」

『「ちゃん」を付けるな。私はそんな歳じゃない』

「えく？それで、本当になんで見てたの？」

「お前はこの勝負を見てどう思う？」

「そもそも凜華ちゃんが本気を出してないんだから何とも言えないよ？」

「……それもそうだな。凜華が本気を出しかけたのはレティシアと戦った時だったかな？」

鬼灯がそんな風に考えながらも凜華と龍の様子を見た。

龍は凜華に対して攻撃を仕掛け続けているが、凜華はそれを避け続ける。他から見ても分かるがまるで相手にしていない。

「……お前だったら勝てるか？凜華に」

「どうかな？」

「……まあ、『最強』のお前なら勝てるか」

「あれ？それ誰から聞いたの？」

「この場に一人しかいないだろ」

「ミコちゃんか？」

竜希はそう言うと、溜息を吐いた。

「そもそも、俺は戦いが嫌いだからその話は間違ってるよ」

「それもそうだな。まあ、聞いてみただけだ」

鬼灯はまたそう言うと、すぐ近くの木に背を預けた。

「凜華さん、何で反撃もしてこないの？」

龍がそう言うと、凜華は答えた。

「この勝負に乗り気じゃないからじゃ」

龍はそれを聞くと、剣を強く握った。

「……なら」

と、その時。

「クスクス、二人とも、其処でストップよ」

レティシアが二人の間に入ってきた。

ミコトと竜希、それからこの登場の仕方に慣れている人達以外は全員驚いた。

因みに、慣れていないのは帝、如月である。

「む？レティシア」

「レティシアさん!!？」

二人は其処で構えを解いた。

「クスクス、二人とも、これ以上続けてもある意味不毛よ？如月を拘束し続けても良いなら続けても良いけどね」

レティシアのその言葉に、龍は溜息を吐いた。

「……それは流石に」

「クスクス、ということ、悪いけどこの勝負は引き分け。凜華も全然相手をしてなかったし、それで良いでしょ？」

「別に良い。ただし、レティシア。いつかはお主とまた闘いたいの。」

それから、其処における剣士とも」

凜華が好戦的な笑みを浮かべると、

「そんな事したらもう団子屋の団子を買わないぞ」



如月が脅した。

「む、それは困るの。分かったのじゃ」

凜華は残念そうな顔をしながらもそう言った。

「だから、俺は戦うのが嫌いなの」

「『最強』なのにな」

「強くても戦いが好きだとは限らないさ」

鬼灯の言葉にミコトがそう言った。

レティシアは二人が勝負をしないと分かると、口を開いた。

「クスクス、それから龍のお題もクリアよ」

「……え？マジで？」

「レティシアさん……」

龍は不満そうな顔をするが、レティシアは言った。

「クスクス、龍のお題は『勝負をすること』でしょ？『勝負をして自分に勝つこと』とは言っていないわ」

『勝負』という漢字には『勝ち』と『負け』がある」

「クスクス、勝負の中には引き分けもある。そうでしょ？龍」

「……そう、ですね」

龍はやはり納得していない顔をするが、頷いた。

レティシアはそれを見て、気持的な問題なのだろうと考えた。

「クスクス、なら龍。凜華に相手をしてもらえる様に強くなるしかないわよ」

「……そうですね」

龍のその言葉を聞くと、レティシアは戻っていった。

「……さて、それじゃあ私からのお題だが」

「この空気で行うのか？」

鬼灯に対してツッコむ如月だった。

\*\*\*

鬼灯のお題は『化け狐探し』。

この前の決着を付けたかった如月からすれば、コレは凄く納得がいかない。

しかし、鬼灯が、

「如月……お前、この持久走で一度でも負けたら罰ゲームが有ることを知ってるか？」

「……え？何だそれ？知らないぞ」

「……彼奴、ワザと黙ってたな」

鬼灯はその罰ゲームの内容をレティシアから聞いている。

そして、大体だが如月の実力も想像がついている。

如月が負ける要因を作りたく無いための処置なのだ。

因みに言っておくと、別に危ない罰ゲームではない。……精神的にはキツイが。

「……それで、妖怪の狐を探せば良いのか？」

「ああ。と言つても、この神社内にいる。それを見つけてこい」

「……分かった」

「あ、ヒントを与えておくか」

鬼灯はやはり罰ゲームを受けさせたくないがためにヒントを与えた。

「部屋と部屋を見比べろ。それから、私達の部屋には居ない」  
「分かった」

如月はそれを聞くと、神無月神社の中へと入って行った。

\*\*\*

如月は自分達が止まった部屋を見比べた。

しかし、どの部屋も同じ様になっていた。

（藁が誰が泊まっても不自由がない様にある程度の家具は揃ってるんだよな。……さて、『化けた』って事は何かが増えてる筈だ）

如月はそう考え、部屋を見比べ始めるが、よく分からなかった。

「何処も同じ気がする……でも、鬼灯のあのヒントは俺達が泊まらせてもらった部屋の事を示唆してた。なら、此処で合ってる筈なんだ」

如月はそう言いながらまた探し始めた。

……すると、

「ん？この枕……こんな柄だったか？」

其処は帝が泊まっていた部屋。

その枕の柄が微妙に違う気がしている如月。

如月は一度部屋から離れ、他の部屋の枕の柄を見比べ始めた。

「……やっぱり、アレだけ少し違う。となると、アレが……」

如月は違いがある枕を持ち、鬼灯に渡した。

「鬼灯、コレだろ？」

「ああ、正解だ」

鬼灯のその言葉と同時にその枕が狐へと戻ると、鬼灯の肩へと登った。

「しかし、多少の柄の違いでよく分かったな」

「というか、そうする様に鬼灯が指示したんだろ？」

「そうだ。流石に高難易度過ぎるのはな……」

鬼灯の言葉を聞くと、如月は葵達の方に顔を向けた。

「それで、次は誰？」

「いや、私達が出す」

「え？三人で？」

如月が驚いた顔を見ると、三人とも頷いた。

そして、葵が両の掌を合わせると、結界の迷路が出来た。

「迷路？」

「はい。想起さんから教えてもらったもので再現してみました」

葵のその言葉の後、ルカがその迷路に氷の屋根を作った。

「で、こうやって迷路内を冷やす」

「ルカ、それは酷い。今の季節でそれは正に地獄だ」

「安心しろ。時間を掛ける度にドンドンと気温が低くなっていくからな」

「何も安心出来ないからな!?!？」

「因みに、この迷路の中には英霊がいるよ。見つかったら確実に勝負を仕掛ける様に設定してるからね」

「マジかよ……」

「ほら、つべこべ言わずにさっさと入れ」

「はあ……」

如月はルカに背中を強引に押されながら迷路に入っていった。

「……如月くん、ドンマイ」

竜希がその後ろ姿を見ながら、そんな言葉を言うが、誰の耳にも入っていないかった。

\*\*\*

「さて、早く出ないとな」

如月は言いながら迷路を進む。

このルールには『迷路の壁を壊してはいけない』という規制がある為、如月は壁を壊す事が出来ない。

「……そういえば、こういう迷路の攻略方があった様な……何だっけ？」

如月は少し考え込むと、思い出した。

「確か、右手か左手を壁に当てて、それに沿って歩くんだっとな」

如月はそう言いながら、右手を壁に当て、歩き出した。

すると、直ぐに曲がり角に当たった。

如月はそのまま曲がると、直ぐに何かが近付いて来る音が聞こえた。

如月は音がする左側に顔を向けると、想起が用意したであろう関羽が居た。

「アレが想起の言っていた英霊か!!?」

如月は天羽々斬で横一線すると、英霊が消え去った。

どうやら、攻撃を受けただけで消える様に設定されている様だ。

「……進むか」

如月は壁に手を当てながら進んだ。

時々、行き止まりに入ってしまったたり、英霊との勝負もあつたりしたが、迷路から何とか抜け出せた。

「如月さん、迷路からの脱出、おめでとう御座います!!?」

「ああ……本当にドンドンと気温が下がっていったからから急ぎ足でやったしな」

「私はそうは嘘を吐かないさ」

そんな会話の後、如月は葵から鈴とお腹が空いた時様におにぎりを貰い、人里の方に降りて行った。

ミコトと竜希、それから帝はそれを見た後、レテイシアが開いたス

キマで其々の世界へと帰って行ったのだった。

## 第三百二十九話

もう一度言っておくが、此処の幻想郷の季節は冬である。

文明が発達し、除雪機と言ったもので雪を退かす事が出来る外の世界とは違い、文明の発達が途絶えた幻想郷は、人が労働して雪を退かすか、炎の能力を扱える者が雪を溶かす他ない。

神無月神社にも雪は積もっていたが、お題を出すことを考えると、人が雪掻きをするのは非効率であった。

その為、今回に限り鬼灯に雪を溶かしてもらったのだ。

ならば、火の能力も持たぬ『人間』が住む里である『人里』の現状はどうなのか？

考えるまでもないだろう。

「雪が積もってるな……たった一日でこんなに積もるものなんだな」

人里には雪が積もっていた。

\*\*\*

人里にある寺子屋。如月は其処に来ていた。

理由は、途中出会った慧音から呼び止められ、お題を出されることとなっているのだ。

「それで？慧音からのお題は何なんだ？」

如月は首を傾げながら聞くと、慧音は笑顔を浮かべて子供達を呼んだ。

そして、寺子屋で学んでいる全生徒が集まったのを確認すると、慧音は如月の顔を見て告げた。

「私からのお題。それは、『子供達と隠れんぼをする』事だ」

「か、隠れんぼ？」

隠れんぼという遊びは皆さん、一度くらいはやったことがあるでしょう。慧音は子供達と一緒に隠れんぼを如月にやらせようとしているのだ。

しかも、こんな冬にである。

「ルールは至って単純だ。隠れている子供達を全員探す事だ。但し、制限を設ける」

「どんな制限だ？」

「能力を使つてはいけない。スペルカードを使つてはいけない。空を飛んではいけない。時空を斬って移動しながら探してはいけない。詰まる所、自力で探せ」

「自分の体力と気配察知だけが頼りか……」

「遊びをしているのに簡単に終わつてはつまらないだろ？隠れんぼのルールを違反する事は許さないからな」

慧音はそう言いながら、とても嬉しそうな顔をしていた。

子供達が遊ぶその姿を見るのも、慧音にとっては楽しみの様だ。

如月はそれに気付くと、笑みを浮かべた。

「……分かった。隠れんぼ、始めようか」

「あ、範囲は人里内だけだ。それから、人里の人達も協力してくれる事になっているから、子供達は家屋の中にも隠れるだろうから、探してみると良い」

「分かった。じゃあ、今度こそ始めるぞ」

如月はそう言うのと、子供の頃やった様に自分の目を隠し、十秒数え始めた。

「1、2、3………8、9、10!!?よし、探し切つてやる!!?」

如月はそう言いながら子供達を探し始めた。

因みに、子供が全員見つけられた場合は、慧音がちゃんと言うので心配はない。

\*\*\*

如月が探し始めて数分経った。

如月が見付けた子供達の数はまだ五人。

「他に何処にいるんだ？」

如月はそう言いながらも探していると、背中に何か当たった。

「冷たッ?!?な、雪玉か!!?」

如月の背中に当たった物体は雪玉だった。

直ぐに後ろを振り向くが、姿は見えなかった。

しかし、子供の足である。直ぐに移動は出来ない。その上、今は雪も積もっているのだ。余計に身動きが取れないだろう。

如月は余裕を持って雪玉が投げられた方向に行くと、女の子が二人、男の子が三人居た。

「見付けたぞ」

「あくあ、見つかつちやった!!?」

「雪玉を投げたらダメじゃないか」

「えへへ、ごめんなさい」

女の子がそう謝ると、男の子が一人、雪を掻き集め、固め始めた。

「ん?何をして(ドシヤ!!?.....」

「あはは!お兄さん、引つ掛かった!!?引つ掛かった!!?」

男の子は固めていた雪玉を、如月の顔目掛けてそのまま投げると、直撃。

周りの子供達もその様子が面白かったのか、笑い始めた。

「.....はあ、まあ、子供のやる事だしな」

如月はその様子を見て怒る気を無くし、その子供達を寺子屋へと連れて行った。

\*\*\*

先程の子供達を寺子屋へと連れて行った後、如月はまた探し始め、一通り見て回ったが、何処にも居なかった。

「ん、コレだけ探していないなら、後は全員家屋内か」

如月はそう言いながら家屋内を探し始めた。

その結果。お団子屋さんを経営しているお婆さんの家の襖の中に女の子が二人。布団の中に寝ていた男の子が一人。魚屋さんの卓の下に男の子が一人。お肉屋さんのお風呂場に男の子が一人。医者のお爺さんと何故か食事をしている男の子が一人と女の子が二人。蕎麦屋を経営している所の机の下に男の子が二人と女の子二人。

如月は他の所も探してみたが、何処にもいなかった。しかし、慧音からはお題の合格を貰っていない。

つまりは、まだ居るのだ。

「なあ?後何人なんだ?」

「後二人だ」

如月はそれを聞くと、再び探し始めた。



すると、如月は直ぐに二人のうちの一人を見つけたが、その女の子は木の上に居た。

「おい!!?何をしてるんだ!!?」

「冬なのに猫ちゃんやんが木の上に居て、凍えてて……寒そうだし……怖がつてた……グスツ……から、たすけ、グスツ、ようと、グスツ、して……」

「降りられなくなったわけか……よし」

その女の子から話を聞いた如月は、木を登り始めた。そして、その女の子の元へと辿り着くと、恐怖を和らげる為か優しく抱き締めた。

「よしよし。お兄ちゃんが直ぐに降ろしてやる。けど、ちよつと危ないから、お兄ちゃんにしっかりと捕まるんだ。出来る?」

如月がそう聞くと、まだ少し震えながらも如月にしっかりと捕まった。

「よし、なら、降りるよ!!?」

如月は其処から飛び降りると、制限を破った。

能力を使つて風を操り、衝撃を無くし、地面へと降り立った。

「……よし、大丈夫か?」

「お兄さん……私の所為で……」

「ああ、気にするな。君の所為じゃないから。それから、怖かつただろ?ほら、もう大丈夫だから、安心して良いよ」

「……うう」

女の子はまた涙を貯めると、如月に勢い良く抱き付き、泣き始めた。「うわくん!!?怖かつたよ!!?うえくん!!?」

「よしよし、もう大丈夫だから」

如月は泣き始めてしまった女の子を宥めるのだった。

\*\*\*

その後、慧音に能力を使つてしまった事を話す事に決めた如月。「あ、慧音。俺「どうした?後一人だぞ」あ、いや、それが「ほら、探して来たらどうだ?」……ああ、分かった」

しかし、慧音に自分の言葉を区切られ、結局は探し始めた如月。しかし、如月はある程度の場所はもう付いている。

寺子屋の直ぐ近くの物置小屋。如月はその扉を開いた。すると、幸多が隠れていた。

「ほら、見付けたぞ」

「見つかっちゃった!??自信あったのにな」

幸多は残念そうにそう言うと、直ぐに顔を上げ、楽しそうな顔になった。

「楽しかったね!!?お兄ちゃん!!?」

「ああ、そうだな」

如月はそう言うと、幸多を慧音の元まで連れて来た。

「よし、全員見付けたな。私からのお題は合格だ。さあ、次に行くと良い」

「……なあ、慧音。俺」

「お兄ちゃん!!?次のお題も頑張つてね!!?」

「僕達、応援してるから!!?」

如月は再び伝えようとしたが、今度は助けた女の子と幸多が間に入って来た。

「ほら、子供達からも応援されているんだ。全てちゃんとこなさない子供達から怒られるぞ?」

「……そうだな。分かった。それじゃあ、お兄ちゃん、頑張つてくるな!」

『頑張つてね!!?お兄ちゃん!!?』

如月はそんな子供達の言葉を聞くと、妖怪の山方面へと走り始めた。

\*\*\*

如月が居なくなつた後の人里。

如月の後ろ姿を見送つた後、子供達は自分達の家へと帰って行った。

慧音は既に寺子屋の自室に居た。

すると、扉をノックする音がその場に響いた。

「ん?」

慧音はその音を聞くと、玄関の扉を開いた。

すると、其処にはレテイシアが立っていた。

「何だ？もう私の仕事はないだろ？」

「クスクス、ええ、もう無いわ。けれど、お話をしたかったのよ」

「……今回の如月のルール違反の事か」

慧音は如月が自分が制限したルールを破った事に既に気付いていた。

気付いていながら、合格を出したのだ。

「クスクス、何故かしらと思ってね」

「話さなくても、お前には分かっているだろ？」

「クスクス、本人から直接聞きたいのよ」

レテイシアがそう言うのと、慧音は肩を竦めた。

「簡単な事だ。如月がルール違反をしてまであの子を助けてくれたからだ。だから、今回のルール違反に目を瞑ったんだ」

慧音は笑みを浮かべてそう話すと、レテイシアはその答えに満足した様に笑った。

「クスクス、貴女は本当に良い先生ね。きっと、貴女が育てているあの子供達も、良い子に育つでしょうね」

「そうだと良いがな」

慧音はその言葉を聞くと、嬉しそうな顔をしながらもそう言った。

「クスクス、それじゃあ、私はまた如月の様子見に戻るわ」

「ああ、またな」

レテイシアは慧音からのその言葉を聞くと、後ろ手ではあるが振り、開けたスキマの中を潜って行ってしまった。

慧音はそれを見届けると、また自室へと戻って行ったのだった。

\*\*\*

妖怪の山に辿り着いた如月を最初に出迎えたのは、権と見知ってる天狗一名と見知らぬ天狗二名だった。

「はたてもやるのか……何れだけの協力者がいるんだ？この持久走」

如月が見知ってる鴉天狗『姫海棠 はたて』の名前を呼んでから肩を落とすと、はたては口を開いた。

「さあね？何れだけかしら？それにしても、あんたの世界の私とも

会った事があるのね」

「まあな……それで、其処の二人は誰なんだ？」

如月が視線を動かして見た二人は両方男性の天狗である。

一人は白長髪に狼耳。そして長柄の薙を持つている。

もう一人は少し逆立った茶髪に烏天狗の羽が生えている。

「俺は白狼天狗の『戌亥 楓』と言います」

「俺は『鹿鳴館 キリク』だ。よろしくな!!? 如月!!?」

「ああ、よろしくな」

如月にそう言うと、権が本題を話しだした。

「さて、私達から……というよりも、天狗全員からのお題ですが」

「天狗全員？」

「水蓮様からの提案です」

楓のその言葉の後に、権は再度話し始めた。

「そのお題は『私達からの追跡から逃れながら、小唄さんを探すこと』、つまりは『鬼づっこ』です」

「制限を言うと、私達から逃れる為とはいえ弾幕とかで攻撃しないこと。あんたが出来るのは逃げる事だけ。あ、飛んでの移動とか、あんたがよく使うっていう剣を使つての移動も禁止。良い? 分かった？」

「……それ難易度高過ぎないか？」

如月に出来ることを此処で上げると、能力やスペルを使つての移動だけである。

「何処がよ」

「そつちには権の能力があるじゃないか」

権の能力『千里先まで見通す程度の能力』は、その名前の通り、遠くにあるものを見ることが出来る能力である。

この能力の上位版を水蓮も持っているが、しかし如月は知らない。

その上、その如月の目の前にいるキリク有能力『情報を収集する程度の能力』もあるので、如月の難易度は更に上がっている。

「それに、妖怪の山には他にもいるだろ? 静葉達や雛達。多分、その全員が俺にお題を出すはずだろ? その時はどうなるんだ? お題を解決してる間に追い付かれるじゃないか」

如月がそう問うと、楓が答えた。

「その心配はありません。貴方がにとり達のお題を解決してる間、俺達はその場を動きませんから」

「あ、そうなのか。なら良かった」

如月はホツとした様子で溜息を吐いた。

「それから、小唄の居場所は『守矢神社の境内』だからな」

キリクがそう言うと、如月は驚いた顔をした。

「え？それ言つて良いのか？それ言つてそこへ向けて行くぞ？俺」

如月がそう言うと、キリクは笑顔で答えた。

「大丈夫だ！そう簡単には通さないからな!!？」（笑）

その言葉が本当の事だと何と無くだが察した如月は気を引き締めることにした。

「説明は以上です。質問はありませんか？」

「ない」

「分かりました。それでは、私が合図をします。その一分後に、私達は貴方を探し始めます」

権のその言葉に頷くだけの返事をした如月。

「それでは……始め!!？」

その合図と同時に木に登り、其処からまるでターザンの様に枝から枝へと移動する如月。

「……まるで猿ね」

「はたてさん、それは言つては駄目だと思います」

はたての一言に権はそう言うのだった。

\*\*\*

如月がターザンの様に移動している理由。それはやはり積雪の所為である。

妖怪の山も他の場所と同じ様に雪が積もっている為、走るのは困難どころか無理である。

その為、如月はこの移動方法を取ったのだ。

木から木へと移動すれば、手を痛めるのは当然だが、今は靈力で手をコーティングしている為、怪我をすることは早々無い。

「……!!?もう見つかったか」

如月はそんな移動方法をしていると、何かの気配を後ろから感じた。

その気配はドンドン自分に近付いて来ている為、天狗の誰かだと推測出来る。

そして、その推測は当たる事となった。

「見付けたぞ!!?」

その鴉天狗は如月も見覚えの無い奴だった。

その天狗は愚かにも声を上げて仲間を呼んだ。

今は如月が姿を見る為に後ろを向いたが、これだと姿を見なくても何処にいるのかが分かってしまう。

如月はその天狗から逃げ切る為、風を操り、移動速度を上げた。

文の能力を参考にした移動方法である。

そのお陰で、如月はその天狗を撒く事が出来た。

(これからまだ出て来るんだよな……憂鬱過ぎる)

如月がそんな事を考え、溜息を吐くと、その前に静葉と穰子が出てきた。

「あ、やっぱり参戦するのか……秋じゃなくて冬だけだ」

「私達だってこんな季節に参戦したくなかったわよ!!?」

「早く秋になって欲しいよ!!?」

二人は寒さから若干震えながらもそう言った。

と、その時、凜華が如月の中から出て来た。

それを見ると、穰子が震え出した。

「ひえええ!私を食べないでえええええ!!?」

「おい、トラウマになってるようだが?凜華」

「む、食べるわけがなからう」

「前科者だろお前!!?」

如月のそんな言葉を聞くと、残念そうな顔をしながら戻って行った。

どうやら、穰子から出る甘い匂いに釣られて出て来た様だ。

「それで?穰子達からお題を出すんだろ?」

如月のその言葉を肯定した静葉。

「私達からのお題は『しりとり』よ」

「いや、何でしりとりなんだよ」

「お題が無かったんだから仕方ないでしょ!!?」

実際、レティシアはお題が無かったら参加しなくても良いと二人にちゃんと saying していたのだが、二人は省かれるのが嫌だったのか、参加したのだ。

「はい！始めるわよ!!? 『しりとり』！」

『『リンゴ』！』

『『本当にやるのかよ…… 『ゴリラ』』

静葉、穰子、如月の順に始まるしりとり。

これが家の中ならまだ良かったのだが、山の中でのこの光景はあまりにもシュールである。

『『落羽松』！』

『『梅干し』！』

『『四国』』

『『山梔子』！』

『『四季』！』

『『清水寺』』

『『羅生門蔓』！』

『『落花生』！』

『『糸屑』』

『『堇』！』

『『レモン』……あ』

「穰子が終わらせたか……じゃあ、この課題はクリアだな」

如月の言葉にガツクリと肩を落とす静葉と穰子だった。

\*\*\*

静葉達と別れた後、また鴉天狗達から逃げ始めた如月。

その途中、滝が流れる音が聞こえてくると、如月はその方面へと移動した。

「あ、やっぱりな」

其処にはにとりと雛が居た。その上、そこにはまた見知らぬ者も居た。

一人は青っぽい髪で水色のツナギを着ている。

もう一人は赤いブレザーを着ている。そして、何故か雛に膝枕をして貰っている。

「……あら？ 貴方、秋に会った人間ね」

雛は如月の気配を感じると、顔を上げた。

「あ！ 本当だ!!？ となると、あの吸血鬼が言っていた挑戦者つてのは盟友の事だったんだね!!？」

にとりのそんな声も聞こえてきた。

「ああ、そうだ。それで、其処にいる人達は誰なんだ？」

如月は頭を傾げながら聞くと、自己紹介が始まった。

「俺は『河野 ひとり』だ」

「一人？」

『ひとり』だ」

「ああ、あの芸人か」

「それが誰だか分からないけど違うぞ」

如月のボケにそんな風にツッコむひとり。

「ふわあ〜……真、それだけ……眠い……」

真はそう言うのと、目をゆったりと擦った。

「真、眠いのか？」

「ふわあ……眠……い……」

「これなら真のお題からやるべきね。真が寝る前に」

雛からのその提案に如月は賛成すると、真のお題を受けることにした。

「それで、真のお題は何なんだ？」

「僕のお題、は……ふわあ……『十分間、僕を見て眠る事を耐えて』……それだけ……」

如月はそのお題に頭を傾げる。まあ、無理も無いだろう。

普通、誰かを見て眠りそうになることは、それこそ睡眠不足過ぎる人だけだろう。



しかし、如月は至って健康体。そんな事が起こり得ることは無い。  
如月はそれを考えると、結論が出た。

(真の能力か……眠りを誘う系の能力か……)

如月はそう答えを出すと、了承した。

そして、如月は暫く真を見ていると、眠気が襲い始めた。

(想像通りか……)

如月は眠らない様に耐えるが、ドンドンと眠りの淵へと落とされそうになる。

が、如月は有る事を思い出した。

それは、凜華との修行の光景。

それを思い出すと一気に眠気が吹き飛び、逆に寒気が襲ってきた。

(一つでも失敗したら、凜華の修行量が増えるかもしれない……そんな事になったら俺死ぬかも……)

別に修行量が増えればその分、如月は強くなる。が、死に掛ける量も増えるのだ。

普通の修行方法ならそんな事も無いだろう。

しかし、凜華との修行の際、如月は凜華に何十回、何百回と投げ飛ばされている。

如月はそれと今のこの状況を比べ、何方の方がキツイのかは体と精神が分かっている様だ。

結果として、如月は十分間、眠る事は無かった。凜華との修行の方が勝ったのである。

「あら？真を長時間見てたのに寝なかつたのね。貴方、凄いわね」

「……それ以上にキツイ事を俺はやらされてきたんだよ」

「……何をやらされてきたのかは分からないけど、ご愁傷様」

雛は如月に同情してしまった。

「それで？雛のお題は何だ？」

「私のお題は、そうね……真のお題で一回も眠らなかつた事に敬意を評して無しにしてあげるわ」

「そうか、それじゃあ、にとりは？」

如月がにとりの方を向くと、にとりは少しムツとした。

「私一人じゃなくて、私とひとりのお題だよ!!?」

「す、すまない。それで、二人のお題は?」

「俺達からのお題は……はい、これ」

そう言っただけでひとりが出したのは、テレビなどでよく見かける水をジェット噴射して飛ばすやつだった。

「……まさか、これを使いこなせと?」

「お! 正解だよ盟友!!?」

「これ使いこなすの大変だからな!!?」

如月はそう言いながらもお題だからと準備をしたのだった。

「じゃあ、行くよ!!?」

ひとりのその声掛けと共にスイッチを押すと、水が噴射した。

「うわああああ!!?」

如月はそう叫びながらも何とかコントロールしようと四苦八苦する。

右へと行こうとしたり、左へと行こうとしたり……大変ではあるが、なんとかコントロールしようとする。

「うん! お題クリアだよ!!?」

にとりからのその言葉を最後に、ジェット噴射が止まった。

そして、如月はそのまま落下し、幸いにも湖の中に落ちた。

「く、空中でスイッチを切るな!!?」

「ご、ごめん……」

「これは俺の不注意だからにとりは謝らなくて良い。ごめんな」

「いや、今後は気を付けてくれたら良いさ。それに、俺も楽しめたしな」

「! なら、また今度機会があったら乗ってくれる!!?」

「ああ、乗らせてもらうよ」

如月はそれを言うと、雛達にも挨拶をして、その場を去って行った。

\*\*\*

如月が守矢神社へと向かって、石段が見えてきた頃に、如月はある気配を感じた。

そして、如月は後ろを向き、直ぐに左へと避けた。

如月が居た場所には、弾幕が通って行った。

「ああ！惜しい!!？」

「椛、惜しかったよ」

「当たると思ってたのですが……残念です」

「はは！鍛錬するしかないな!!？」

そこには、妖怪の山入り口で会ったあの四人がいた。

如月はその四人を警戒しながら、後ろを少し見た。

後ろには雪が積もっていない石段。きっと、早苗が雪掻きをしたのだらう。その石段を普通に走れば、白狼天狗と鴉天狗の組み合わせのこの四人に追いつかれてしまうだらう。

如月はそれを考えると、スペルを使おうとした……しかし、

「如月さんがスペルを使おうとしている。気を付けて」

「分かったわ」

「!?!?何で分かった」

如月のその問いに、楓は答えた。

「俺の能力は『心の目で見える程度の能力』。普通の目では見ることが出来ないものを見ることが出来る能力さ。例えば気の流れだったり、例えば人の心理だったりね」

「……成る程な。さどりの能力の上位版みたいなものか」

如月はそう言うのと、そんな事は関係ないとばかりにスペルを宣言しようとした。

「させない!!？」

しかし、心理を読み取った楓が如月に掴みかかろうとする。

その楓の後を続く様に、椛達も如月に襲いかかった。

しかし、如月はそれを後退して避け、そのまま木から落ちた。

その時にスペルを宣言した。

「肉体強化『神雷』!!？」

「しまった!?!？」

如月が落ちた地面は、凹んでしまった。

しかし、今の如月はそれを気にしない。

如月はそのままの勢いで石段を駆け上がり始めた。

椀達もその後を追い、如月を捕まえようと己が出せるトップスピードで飛ぶが、追い付けず、結局は如月は境内に到着してしまった。

「あやや！椀達に勝ちましたか」

「おう、凄いな、如月君」

如月がスペルを解いている途中にそんな風に話し掛けてくる文と小唄。

如月がその場所で辺りを見渡してみれば、神奈子、諏訪子、早苗の守矢一家の他に、華扇とその隣に黒髪の長髪にアホ毛が一本跳ねている、ジャケツトを着た男性がいた。

如月がその男性を見て首を傾げていると、その男性が気付いて近付いて来た。

「君が如月君だね。僕は『夜行 羅刹』。よろしくね」

羅刹はそう挨拶をすると、手を出した。

「あ、ああ、よろしく」

如月は少し戸惑いながらもその手を取り、握手をした。

「それじゃあ、先ずは誰からお題を出す？」

諏訪子がまるで進行役の様にそう言うと、文が手を挙げた。

「私からのお題。『小唄との弾幕ごっこで勝利すること』。それをやってもらいます!!?」

「分かった」

「なら、僕も頑張らないとなく」

小唄はそう言うと、刃が付いたギターを構えた。

\*\*\*

如月と小唄の最初は、如月が押していた。

小唄が弾幕を使っていないからそう見えるだけなのかもしれない。

しかし、如月もこの持久走の中で成長しているのだ。例え弾幕の撃ち合いをしても、そう簡単に弾幕は撃ち落とされないだろう。

「なら、僕から行こか!!? スペル!!?」

小唄が先手必勝なのか、スペルを先に宣言した。

「振符『ディセイブ鎮魂歌』!!?」

すると、小唄の足に妖力が凝縮され始め、その状態のまま飛翔した。

そして、そのまま如月に向かって飛び蹴りをした。  
しかし、その飛び蹴りは空気を震わせながらであるが。

その震えに驚いた如月は避ける行動が遅くなってしまう、腕で防御の形をとった。

「ぐっ!!?」

しかし、その威力が強過ぎた様で、如月の腕は痺れてしまった。

小唄はその後、空中で一回転して、そのまま体制を立て直し、空中に留まった。

「次行くで!!?高揚『ロスタイム前奏曲』!!?」

すると、小唄が持っているギターに付いたその刃に振動のエネルギーが凝縮し、小唄が地面に向けてそのまま放出した。

それが地面に当たったその瞬間、地震が起こった。

「なっ!!?」

「僕の勝ちや!!?」

小唄がそう言いながら如月に攻撃を仕掛けた。

しかし、如月はニヤリと笑う。

「勝負の時に慢心するのは御法度だ!!?偽装『グングニル』!!?」

如月はそう言うと、グングニルを創り出し、そのまま小唄に投げ飛ばした。

当然、飛んでいる状態の小唄はそれを簡単に避けるが、如月が居た場所に視線を戻すと、その場には既に如月は居なかった。

「!??一体何処に『桜舞連斬』!!?」うわあ!??」

小唄が如月を探そうとしたその時、その如月の声の小唄の上から聞こえ、スペルが発動された。

そのまま小唄は如月の連撃の攻撃を受け、地面へと倒れ伏した。

\*\*\*

「いや、負けたわ!!?」

「小唄、大丈夫?」

「大丈夫や、文。いや、それにしても如月君は強いんやなく」

「いや、俺はまだまだ未熟さ」

「またまた、謙遜せんでもええて、ええて」

「いや、これ事実なんだけど……」

如月は小唄の言葉に苦笑しながら言葉にした。

「それでは、次は私からお題を出しましょう」

小唄がまだ話そうとするが、華扇がそれを強行手段で止めた。

「私からのお題。それは『動物の妖怪を一匹説明すること』です」

如月はそれを聞くと、妖怪の情報を頭にある辞書を捲り、説明する妖怪を決めた。

「それじゃあ、『野鉄砲』を説明するな」

「野鉄砲？」

早苗はそれに少し首を捻った。どうやら、聞いたことが無い妖怪だった様だ。

『野鉄砲』

この妖怪は年老いた『ママ』という動物が変化する妖怪である。

この野鉄砲は、出会った者に対して目つぶしをまるで鉄砲の様に発射して攻撃する。その時にやはり鉄砲で撃った時の様な音がする。その様子から、そんな妖怪名が付けられた。

「……これで良いか？」

「ええ、合格です」

華扇は微笑みながら如月に対して合格を与えた。

「それじゃあ、僕からのお題だ」

羅刹はタイミングを測ったかのようにお題を出した。

『僕の使う槍と刀を十分間、受け切ったりせずには回避し続けること』  
受け流しとかも駄目だ」

「受け流しも駄目なのか」

如月はそれを聞くと、集中する為に少し深呼吸をした。

「……よし、始めてくれ」

「分かった。じゃあ、行くぞ!!？」

すると、羅刹は右手に赤色の刀を、左手に青色の槍を持った。そして、その腕も武器と同じ色に変わった。

「え？何で腕まで……」

「おいおい、集中しなくて良いのか？」

「!?？」

羅刹はそう言葉にすると同時に、槍で突きの攻撃をした。

如月は集中を乱していたが、持ち前の身体能力のお陰なのか、ギリではあるが当たるとは無かった。

「あ、危なかった……」

「ほら、次の攻撃行くぞ!!？」

次に羅刹は刀で攻撃を仕掛け始めたが、如月も剣士である。その攻撃を捌き切っていた。

それから十分後。如月は羅刹の攻撃を全て捌き切った。

「ふう、これで僕からのお題も合格だ」

「何とか捌き切れた」

如月は脱力するが、まだ終わらない。

「おいおい」

「まだ私達が居ること、忘れてないかい？」

「うげ」

如月はもう沢山という顔をするが、まだまだ終わらない。

「まあ、私達のお題は本当は弾幕ごっこにしようと思ったんだけど……」

「諏訪子様、流石に可哀想ですし、変えませんか？」

早苗のその言葉に諏訪子は頷き、神奈子も賛成した。

「それじゃあ……如月と言ったね、あんた」

「ああ、そうだ」

「私達からのお題は『人里で私達の宣伝をすること』。それに変えてあげよう。此処まで頑張ったからね。まあ、それは簡単だから先に鈴を渡してあげよう」

神奈子はそう言うと、如月に鈴を渡した。

「いや、でもな……」

「ほらほら！行って来てくださいー！」

早苗に背中から押された如月は、複雑な思いを抱くも、一度人里へと戻るのだった。

\*\*\*

レテイシアは八雲屋敷で一部始終を見ていた。

如月がまだ終わってもいないお題があるのに鈴を渡された所をみたレテイシアだが、如月を責める事はせず、寧ろ楽しんでいた。

「クスクス、ここのう事があっても仕方ないわね♪」

その後、如月は人里に着き、慧音の元へと一度訪れ、その後、守矢神社の宣伝をすると、慧音が渡し忘れていた鈴を貰い、そのまま魔法の森へと向かって行ったのも見ると、また笑みを浮かべるのだった。



## 第四百四十話

魔法の森へと向かう途中、如月は意外かもしれない出会いを果たした。

「あれ？ルーミア？」

「誰なのだー？」

如月はとても目立つ暗闇を見付けた為、それを作り出せる妖怪の名前を上げた。

すると、相手も返事をしてくれた。勿論、如月の知ってるルーミアではない為、名前は知らないが。

「俺は『如月 翔』だ」

「如月なのかー。如月は食べても良い人間なのかー？」

「いや、食べたなら駄目な人間だ」

「そうなのかー。でも、お腹空いたのだー」

「そうか。なら、これ食べるか？」

如月が懐から出したのは、神無月神社で貰っていたおにぎりである。

因みに、二つつ貰っていた為、一つ無くなっていたとしても一応は大丈夫である。

「頂くのだー!!？」

ルーミアはそう言うと、如月の手からおにぎりを貰い、食べ始めた。

「美味しいのだー!!？」

「だろうな。それは葵が作ってくれたやつだからな」

「葵が作ったのかー？」

「そうだ」

如月は微笑みながらルーミアのその姿を見ていた。

そして、ルーミアはそのおにぎりを食べ終わると、如月を真っ直ぐ見て、言った。

「私からのお題なのだー！」

「え？ルーミアも参加してるのか？」

「勿論なのだー！私は『弾幕ごっこ』なのだー！」

「分かった」

如月は少し息を吐くと、そう言った。

\*\*\*

最初はルーミアは弾幕をばら撒き始め、如月はそれを避ける事に集中していた。

自分狙いの弾幕でもない為、撃ち合う様な事をしなかったのだ。

そして、ルーミアはそれが焦ったかったのか、スペルを宣言した。

「月符『ムーンナイトレイ』!!?」

すると、ルーミアは弾幕を周りにばら撒き始めた。

如月はそれを避けようとするが、ルーミアからの二本のレーザーが如月を挟み、動きを制限した。

如月はそれでも諦めず、弾幕を撃ち落として、避ける事を続けた。

そして、時間が来たのか、そのレーザーも、弾幕も消えてしまった。

「むく、当たらなかったのかー。悔しいのだー!」

「はは、次は当たるさ」

「当てて見せるのだー!闇符『ダークサイドオブザムーン』!!?」

ルーミアはそう宣言すると、その周りを闇に染め、自分も闇の中へと溶け込んでしまった。

「ルーミアは何処にッ!?」

如月はルーミアを探そうとするが、赤弾幕が迫って来ていたのに気付くと、直ぐに避けた。

「全体に拡散されてるのか……」

如月はそう言いながらもその赤弾幕をばら撒いている所を見ている。そして、その場所に近付こうと動き出した。

弾幕に当たらない様にしながら避けていると、ルーミアが現れた。

其処に如月は弾幕を放つが、ルーミアは全体に黄色の弾幕を撃つと、また闇の中に溶け込んでしまった。

如月は自分を襲う弾幕をひたすら避け、ルーミアの近くへと辿り着く。そして、其処でルーミアが現れるのを待った。

その場所で待つこと数分、ルーミアは闇の中から再び現れた。

如月はそのチャンスを逃さず、スペルを宣言した。

「龍剣『焰』!!?」

如月は神力を天羽々斬に纏わせると、そのままルーミアに攻撃したのだった。

\*\*\*

弾幕ごっこ終了後、如月はルーミアの様子をみた。

そのルーミアの顔は、良くアニメでも見られるやられた時の顔をしていた。

(現実でこんな顔をする事があるんだな……)

如月はそんな呑気な事を考えた後、ルーミアを近くの休める所に移動させ、また移動し始めた。

\*\*\*

如月は歩いて移動していると、『夢の館』を発見した。

「……きつと、参加してるんだろうな」

如月はそう言うと、その館の中へと入って行った。

「ん?お、いらっしやい!」

「あ!久し振り!如月くん」

「ああ、久し振りだな」

その館の中には、ちゃんとサリアと獺が居た。

「二人も参加してるのか?この持久走」

「僕はしてないよ。見物人」

「で、私はしてる」

「そうなのか」

如月はそれを聞くと、サリアに顔を向けた。

「それで、サリアからのお題は何だ?」

「私からのお題はね、『選択ゲーム』さ」

「『選択ゲーム』?」

如月のその言葉を聞くと、サリアは一度、奥へと行き、水晶玉を二つ持って戻ってきた。

「?その水晶玉二つは何なんだ?」

「これはちよつと特殊な水晶玉さ」

サリアは笑顔を浮かべながらそう言うと、テーブルの上に二つの水

水晶玉を置いた。

そして、その水晶玉に手を置くと、水晶玉の色がドンドンと変わっていった。

片方はピンク色に、片方は黒色に変わっていく。

そして、全体的に色が変わったのを見て、サリアは手を退けた。

「説明しちゃうとね、これは『夢』さ」

「夢？」

「そ、夢」

「この水晶玉にはね、夢を入れることが出来るんだ。それを枕元に置いて寝ると、その夢をずっと見続ける事が出来るんだ」

「ほら、誰にだって一回ぐらいはあるだろう？ 続きが気になるのに見れない夢が。コレはそれを解消してくれるアイテムさ」

「へ、そうなのか」

如月がそれに納得したのを見て、サリアはお題を出した。

「さて、私からのお題の説明だ。今、私はこの水晶玉に『夢』を入れた訳だけど、あんたには『幸せ』の夢を当ててもらおう」

「『幸せ』の夢……」

如月は最初こそ、簡単だと思った。

何故なら、色で分かかってしまうから。

しかし、そんな簡単な訳がないと如月は考える。

「結構簡単なゲームだろう？」

しかし、サリアは笑いながらそう言った。

ただ、その笑顔には裏がある様な気がしてならない。

「……」

如月はそれを思うと、真剣に考え始めた。

ピンクの水晶玉と黒の水晶玉。

色から考えるなら間違いなくピンクである。しかし、それは早計だ。

如月は少し考えるが、中々分からない。

其処でサリアをチラッと見た。

『サリア・モルフィウム』

彼女は夢魔『サキユバス』である。

種族は葵から一度聞いたことがあるから知っていた。

それに、如月本人も一度だけだが、夢を見せてもらう為に訪れ、そして会っている。それは最初の会話で分かるだろう。

そして、如月は悪魔の事を考え始めた。

悪魔というのは、比較的残酷で残忍、しかし約束事はキツチリと守ってくれる種族である。

それは『サキユバス』でも変わりはないだろう。『夢魔』であろうと悪魔の一種なのだから。

その悪魔が入れた夢。悪魔からしたら何方が『幸せ』なのか。

「……まさか」

如月は少し考えると、『両方の水晶玉』を手を取った。

「ん？その二つ共が『幸せ』の水晶玉だって言いたいのか？」

「ああ、そうだ」

如月のその答えを聞くと、サリアは一度黙り、そこから大声で笑い始めた。

「あははは！あんた最高だよ！！？あはは！！？」

「え……」

如月は間違ったのかと思ったが、サリアは其処で如月の目を見ながら答えた。

「あはは！！？はあく、あんたの答えは大正解さ。それにしても、なんで分かったの？」

サリアは目に浮かんだ涙を拭き取りながら質問して来た。

「この黒色、俺の仮説だけど、色んな『幸せ』を混ぜたんじゃないか？」

「……」

「で、こっちがピンクな理由。それは、サリアからしたらこっちが『幸せ』だから。でも、今回のお題は『幸せ』を当ててるゲーム。つまりはこの両方を選ばなければ正解じゃない。そうじゃないか？サリア」

如月の答えにサリアは答えた。

「いんや、少し勘違いしてるね」

「勘違い？」

「そ、このゲームにとっての不正解は『両方を選ばない』事さ」

「……そんな奴、いるのか？」

「それが居るんだよね。私が『悪魔』だからって疑って、両方共選らず、自分の夢が正解だとか言う奴。ま、それも正解って言えば正解だけど、私は『水晶玉』を選ぶ様に促した筈なんだけどね」

サリアは少しだけ悲しそうな笑顔を浮かべた。

「……」

「人はね、悪魔が約束事には厳しい事をあんまり知らないからね。知ってる部分はきつと、残酷で残忍で、人の不幸を嘲笑う所だけだらうね。だから、私を疑う。悪魔を疑う。私は正解しか出してない筈なんだけどなく」

サリアはそれを言うのと、軌道修正をした。

「で、話を戻すと、この『幸せ』の水晶玉が黒い理由はね、色んな『幸せ』を混ぜて入れたからさ。夢にだって、一様だが色がある。自然豊かな夢なら緑。水が主な夢なら青色とかね。それらをごちゃ混ぜに入れれば黒になるのは当然さ。で、こつちがピンクなのは如月が言ったとおり、私にとつては『幸せ』だからだ。あ、私にとつての幸せがどんなのかは考えなくて良いよ。あんたには関係ないからね」

サリアは如月に向かって笑顔でそう言った。

しかし、その笑顔は氷の様に冷たい笑顔だ。

つまり、これ以上は近付いて来るなど言っているのである。

「……分かった」

「ん、よろしい。その方があんたにとつても幸せさ」

「二人ともく、紅茶が出来たよ……って、あれ？もう終わったの？」

と、そんな二人に獺の声が聞こえた。

一切声を発さないと思っていたら、どうやら紅茶を淹れて居た様だ。

「獺、お前何で何時も何時も行動が遅いんだよ!!？」

「えく？僕、コレでも急いだんだよく？」

「常人から見たら普通に遅いから!!？」

「はい、サリア、紅茶」

「あ、有難う……じゃなくてだな!?!?」

「はい、如月くんも」

「あ、ああ、有難う」

「えへへ、褒められた」

「はあ」

獺はとても緩い笑顔を浮かべ、サリアはそれを見ると怒る気を無くした様で、軽くだが頭を小突くだけにしていた。

「あう、サリアに怒られた」

「いや、そんな頭を抑える程に強くしてないからな!!?!?」

そんな二人の顔は、とても楽しそうに見える。

このコミュニケーションを両方共、楽しんでいるのだ。

如月はそれを見ると、とても嬉しい気持ちになったのだった。

\*\*\*

サリア達と別れた如月は、香霖堂へと向かった。

そして、香霖堂の扉を叩いてから入って行った。

「いらっしやい」

「霖之助はこれに参加してるのか?」

「ああ、勿論だよ」

「珍しいな。こういう事には参加しそうにないのに」

如月はそう言うと、霖之助は答えた。

「最初は僕も参加するつもりはなかったけど、レティシアから、この持久走の挑戦者が元は外に住んでた人間と聞いてね、気が変わったんだ」

「あ、成る程」

如月は何と無くだが意図を察した。そのため、事実確認をすることにした。

「じゃあ、霖之助からのお題は『外の世界の道具の使用方法』か?」

「そう言うことだ。じゃあ、今から持ってくる物の使用方法を頼む」

「分かった」

如月が了承したのを見てから、霖之助は奥へと引っ込んで行った。

その少し後で戻ってきた霖之助が持っていた物は、白く細いものであり、その先が二つに分かれて、そこには大きな耳当てがある物だった。

「コレは『ヘッドフォン』。音を流す物だ。これだけなら僕も耳に当てる物だつて分かる。けど、耳に当ててみても音が流れないんだ。どういうことだい？」

如月はそれを聞くと、説明を始めた。

「そのヘッドフォンっていうのは確かに音を聞く物だけど、音を聞くためにはもう一つ必要な物があるんだ」

「必要な物？」

そして、説明をすると、霖之助は納得した様で、頷いた。

「それじゃあ、次だね」

「まだあるのか!?!」

「勿論だよ」

霖之助が次に出して来たのは、全体的に灰色で、羽が三個付いており、それを外に出さない様にする為の蓋の様な物があり、上下左右に首を動かせる道具だった。

「これは『扇風機』さ。用途は夏みたいに暑い時に涼しくする物だけど、どうやったら良いんだい?」

「それにはコンセントが必要だ」

「コンセント?」

如月はまた説明をすると、霖之助は頷き、理解したと言うと、溜息を吐いた。

「これがもし使えたのなら、夏の熱い時に使おうと思っただけだね……その説明だと、無理な様だね」

「まあ、幻想郷に電気は通ってないからな」

霖之助はそれを聞くと、また溜息を吐いた。

「あ、僕からのお題はこれで全てさ。有難う、色々と教えてくれて」「いや、気にしなくて良いさ」

如月はそれを言うと、挨拶をしてから香霖堂を出て行った。

\*\*\*



魔法の森に入ってみると、やはりキノコ達が出す瘴気が見えた。

「これの所為で普通の人間は幻覚作用が出たり、死んでしまったりするんだろうな」

如月はそう言いながら進むと、魔理沙の家が見えてきた。

そして、魔理沙の家の扉をノックすると、夢幸が出て来た。

「あれ？夢幸もこの家に住んでるのか？」

「いや、俺は別の所に住んでいる」

「？じゃあ何で……」

如月はそう言つて、少し視線を外して中を見ると、納得した。

「……此処の魔理沙もか」

魔理沙の家は全くと言つて良い程に片付いていなかった。

そこから察するに、夢幸も手伝っていたのだろう。

但し、これはあくまで如月の推測であり本当の所はどのようなかは、本人と魔理沙しか知り得ない。

「魔理沙、如月が来たぞ」

夢幸が中へとそう声を掛けると、中からドタバタする様な音が聞こえた。

それから少しすると、魔理沙が出て来た。

「やっと来たのか!!？楽しみにしてたぜ!!？」

魔理沙が出て来た為、一行は外の開けた場所に移動した。

「さて、それじゃあ、先ずは俺からのお題だ」

「ああ、頼む」

如月は少し警戒しながら夢幸のお題を待った。

「俺からのお題は『俺が出すスペルを避けるな』。分かったな？」  
「分かった」

如月のその言葉を聞くと、夢幸はサーフボードの中心を如月に向けた。

(カイザースパークか?)

如月はそう考えると、やはり身構えた。

しかし、如月の考えは半分外れである。

確かに、今から来るのは砲撃だ。極太レーザーだ。

しかし、スペル名が違うのだ。

まあ、如月は『カイザースパーク』しか知らないのだから当然なのだ。

そして、中心に魔力が集まった後、夢幸は宣言した。

「魔砲『レジェンドスパーク』」

すると、サーフボードか『カイザースパーク』よりも威力が高い極太レーザーが如月のスレスレを通った。

如月はそれに対して冷や汗を流すが、避ける事はしていなかった。そして、守る事も。

「ほお？避けなかったか」

「……いや、これ間違ったら当たるよな？」

「この俺がそんなヘマをしでかすわけがないだろ」

「はいはい、左様で」

如月は夢幸の変わらない対応のお陰か、平常に戻った。

「それで、魔理沙のおd「弾幕ごっこだ!!？」」「ゲスヨネー」

如月は魔理沙にも聞こうと言葉にすれば、最後まで聞かずに返ってきたのだった。

\*\*\*

魔理沙と如月は弾幕を撃ちあっていた。

ただ、魔理沙は時々撃つのを辞めて移動したりもしているが。

「くっ!!？」

魔理沙が移動した後は、直ぐには如月も反撃出来ない。その為、星型の弾幕が当たらない様に避けるのだ。

「魔符『スターダストレヴァリエ』!!？」

魔理沙はそう宣言したのち、箒に立つと、そのまま移動しながら星型弾幕をばら撒き始めた。

如月はそれから避けるばかりだが、避けきれなかったものは弾幕で撃ち落とした。

「やっぱり弾幕ごっこは楽しいぜ!!？」

「楽しんでる様で何よりだ!!？」

その会話の後、何故か弾幕の量が増えた。

その増えた数十分後にはスペルは終わってしまった。

「く〜！当たらなかつたか!!？」

「途中で増えたのが驚いた」

「そりや増やしたからな!!？」

「じゃなかつたら増えないしな」

その会話の後、魔理沙は箒に乗ってまた星型弾幕をばら撒き始めた。

ただ、如月はそれに違和感を持つ。

その弾幕は、自分の動きを制限する為だけのものには見えない。

それはまるで、自分を何処かへと誘い込んでいる様な……。

「ツ!??!?しまった!!？」

そんな事を考えていると、如月は自分の犯した失敗に気付いた。

今の如月の周りには弾幕だらけ。つまりは、移動出来ない様な場所にいる。

移動出来なくはないが、しかし、それだと弾幕が確実に自分に当たってしまう。

「弾幕ごっここの時に考えてて良いのか？」

魔理沙のそんな声の上から聞こえる。

如月は上を見上げて見ると、魔理沙がミニ八卦炉を構えていた。

「魔砲『ファイナルマスタースパーク』!!？」

如月は素早く時空を斬り、場所を移動した。

「あー！それは卑怯だろー！」

「いや、卑怯じゃないだろ」

「弾幕ごっこはもつと真摯にやるべきだ!!？」

「魔理沙は本当に真っ直ぐだな」

如月はそんな魔理沙の真っ直ぐさに少し笑みを浮かべた。

「なら、俺の全力を持って魔理沙の相手をしてやる」

「お？本当か？よっしゃ来い!!？」

魔理沙のそれを聞くと、如月はまた時空を斬り、魔理沙の後ろに現れた。

そして、魔理沙の肩に手を置くと、

「喰龍『ドラゴンイロウシエン』」

力を喰い始めた。

「うっ、ヤバッ!!?」

魔理沙は直ぐに移動し、それ以上、魔力を喰われる事は無かった。

そして、その後、如月はもう一つスペルを宣言した。

「肉体強化『神雷』」

そして、如月が雷を纏うと、最後にもう一つ宣言した。

「龍剣『紫電』!!?」

そのまま如月は魔理沙の方へと突撃する。

勿論、魔理沙も避けようとするが、その行動が少し遅れ、如月の攻撃に当たってしまった。

\*\*\*

「あー！負けた!!?悔しいぜ!!?」

魔理沙は地面に転がった状態でそう言った。

「あんまり力を取らなかつたが、それでも少し疲れたな……」

如月もまた地面に座った。

「魔理沙、地面に転がると服が汚れるぞ」

夢幸は如月の事は放っておき、魔理沙の方に手を差し伸ばした。

魔理沙は少し頬を赤く染めながらも、その手を取り、お礼を言った。

「……なあ?俺には?」

「魔理沙は俺にとって特別だ。それ以外の奴に特別扱いする意味はない。自分で立て」

「酷くないか!?!?」

如月はそう文句を言いながらも、自分で立ち上がった。

「自分で立ち上がれるなら、元から俺に言うな」

「お前、本当に酷いな」

如月はそう言いながらも、仕方無いかと割り切った。

そして、その場を離れ、アリスの家へと向かって行ったのだった。

\*\*\*

アリスの家へと着くと、やはり扉をノックした。

それから少しすると、アリスが出てきた。

「あら？漸く来たのね。いらっしやい」

「ああ、漸く来た」

「さ、入って頂戴。外は雪だらけで寒いから」

アリスのその言葉を聞くと、如月は家に上がった。

「あ、カロード、久し振りだな」

「……久し振りだな、如月」

カロードも如月に挨拶をした。

「如月、少し待っててくれるかしら？冷えたでしょうし、紅茶を出すわ」

「あ、気を使わせて悪いな、有難う」

「気にしなくて良いわ」

アリスが紅茶を淹れに奥へと入って行った。

「……」

「……」

勿論、その場に残っているのは如月とカロードだけなのだが、二人が話したことは一度もない。

確かに大掃除の時にあったことはあるが、話してはいないのだ。

と、如月はカロードが持っているスケッチブックを見た。

「あ、なあ？そのスケッチブック、見ても良いか？」

「ん？ああ、良いぞ」

カロードからスケッチブックを貰い、開いて見た。

「うわあ……凄いな」

如月はその絵を見て、感嘆の声を上げた。

その絵は、如月が今まで見てきた絵の中でも一番上手い。それも、今まで見てきた絵が記憶から霞む程に。

如月はその絵の上手さに引き込まれた。

「ふふ、どう？カロードの絵は」

アリスは紅茶を淹れ、戻って来て見ると、如月がカロードが書いた絵を見ているのを発見した。

だから、感想を聞いてみたのだ。

「いや、凄いな、この絵。俺、絵とかそんなに詳しくないけど、これが

凄いのはよく分かるよ」

今如月が見ているのはアリスが書かれている絵である。

まだそれは完成していないのだが、それでも芸術に値することが分かる程に上手い。

「ふふ、カロード。褒めてもらってるわよ」

「ああ、有難うな、如月」

「いや、俺は思ったことを言っただけさ」

如月は少し照れた様に言った。

その後、アリスが淹れてくれた紅茶を飲み終えた三人は、早速お題の話に入った。

「さて、それじゃあ、えっと、どっちからだ？」

如月がそう聞くと、カロードが手を上げた。

「先ずは俺からだ。俺からのお題は『俺が出す絵の場所を当てること』だ。出す問題の数は三問だ」

「分かった」

如月からの返事を聞くと、カロードがまず出したのは、竹ばかりの場所に、一つの屋敷がある場所である。

「永遠亭」

「正解だ」

次の場所は湖があり、その先に紅い館がある場所だった。

「霧の湖と紅魔館だな」

「正解だ。紅魔館だけでも正解だったがな」

「そうだな」

最後の場所は何処かの場所で、沢山の人間妖怪が酒を飲んだり食べたりしている場所だった。

「博麗神社だな」

「ああ、そうだ。全問正解だ」

カロードは笑顔を浮かべてそう言った。

「それにしても、本当にカロードの絵は上手いな……いや、本当に。外だと展覧会ものだぞ」

「そうか？」

と、そんな話をしている二人に、アリスが声を掛けた。

「もう私のお題を出しても良いかしら？」

「あ、ごめんな」

「いえ、気にしてないわ。それで、私からのお題だけど」

アリスがそう言っつて、出して来たのは、糸の塊だった。

「？糸？」

「そうよ、『この糸に、貴方の神力を入れて欲しいの』。これが私からのお題」

「え？何で？」

「頑丈になるでしょ？」

「ああ、弾幕ごっここの時にも人形を使うから、直ぐに壊れちゃうのか」

「そう言うこと」

如月はそれを聞くと、糸を貰い、雑にはなくちやんと糸に神力を流し始めた。

しかし、この作業はとてもキツイのだ。

神力を切らさず、だからと言っつて雑に流せば糸はその力に負け、切れてしまう。

少しでも乱すと頑丈な糸は出来ない。

本当にとても慎重な作業が必要なのだ。

如月はそれをしてる為、汗が流れ始めた。

集中からくる汗が。

そして、それから一体どれくらいの間が流れたのか分からないが、糸に神力を流し終える事に成功した。

「な、何とかなった……」

如月は神力を止めると、息さからソファに身を預けた。

「はい、お疲れ様。有難うね。お礼の紅茶よ」

アリスが如月にお礼を言っつて、カップに紅茶を再び淹れた。

如月はそれを飲むと、すっかり落ち着くことが出来た。

「……」

「ん？カロード？」

如月がふとカロードの方を見てみると、カロードはスケッチブック

に何かを書いているのが見えた。

「今は描いてるのに集中してるから、邪魔してあげないでね」

アリスからのその言葉を聞くと、如月は見たいという衝動を抑えた。

「もしかして、今カロードが描いてる絵は……」

「ええ、貴方の絵よ」

アリスは笑みを浮かべてそう言った。

如月はカロードの絵を完成させて上げたいが、此処にずっと居るとは出来ない。今だって持久走が終わっていないのだ。

だから、どうしようかと考え始めていると、カロードが虹色の鉛筆を置いた。

「?カロード?」

「まだ絵は完成してないが、如月を縛るつもりもない。だから、持久走を頑張ってくれ」

カロードからの声援の言葉を貰った。

如月はそれを聞くと済まなそうな顔をするも、アリスの屋敷から出ようとした。

が、あることを思い出し、アリスの方に顔を向けた。

「あ、なあ?鈴を誰が持つてるか知らないか?」

如月のその言葉に、アリスは首を傾げた。

「え?サリアだけど……」

「……」

如月はそれを聞くと、サリアの顔を思い浮かべた。

その顔は……爆笑中のサリアだった。

\*\*\*

レテイシアは如月のそんな様子を見て、少し笑っていた。

「クスクス、ご愁傷様、如月。でも、相手は悪魔。貴方が聞いていたら、きっと結果は変わってたわよ♪」

如月は満面の笑顔のサリアから鈴を受け取り、猥からはクッキーを貰うと、そのまま移動して行った。

その先にあるのは……、



「クスクス、あらあら、自分から強者の元へ行くとは、成長したわね。  
如月」

幽香とメデイスンがいる『太陽の花畑』だった。

## 第四百四十一話

太陽の花畑に来るまでに妖精達に弾幕を撃たれていたが、それを全て躲して辿り着く事が出来た如月。

「ふう、流石にキツかった……数で攻めて来られたらキツイ」

如月はそう言いながら右肩を回す。すると、コキコキツと音がした。

気付かぬうちに肩が凝っていた様である。

「さてと、太陽の花畑に着いたが……やっぱり季節が季節だけに、向日葵は咲いてないか」

今如月の目に映っている光景は、何も無い地面であった。

その遠くには誰か……というか、幽香の家が見える。

「季節関係なく咲いてるのは、お前が生きるための鈴蘭ぐらいなんだな。メデイスン」

「ええ、そうね。スーさんぐらいよ」

如月に近付いて来たのは、メデイスンだった。

しかし、余り鈴蘭から離れない様にそれなりに距離は空いているが。

「というか、鈴蘭達をビニールハウスの中に住まわせてるのか」

「幽香みたいに上位の妖怪なら害はないけど、妖精だとそうでも無いのよ。あと、普通の人間とか」

「なあ？それ何気に俺は普通の人間じゃないって貶めてないか？」

「あら？気付いたの？」

如月はそれを聞くと、若干落ち込んでしまった。

が、それから直ぐに立ち直り、メデイスンを見据えた。

「それで、メデイスンからは何が出されるんだ？」

「弾幕ごっこを所望するわ。最近、遊んでなかったしね」

「幽香とはしてなかったのか？」

「花の知識を披露してくれたり、花言葉教えてくれたり、花の名前だけでしりとりしたぐらいね」

「しりとりについては直ぐに終わりそうな気が……」

「所がどっこい、コレが中々終わらないのよね。まあ、私だって幽香か

ら色々学んでるから、それなりに花の知識は入ってる。だから、やる回数が増える度に長くなるのよね」

「それでも物足りないっ？」

「やっぱり弾幕ごっこは楽しいからね。流星、この世で一番無駄なゲーム。楽しませてくれるわ」

メデイスンはそう言うと、臨戦態勢に入った。

如月もそれを見てとると、天羽々斬を構えた。

「それじゃあ、始めるよ!!？」

\*\*\*

メデイスンからの弾幕を如月は避ける。

一度、弾幕で撃ち落とされたのだが、その弾幕には毒が付属されていた様で、結構危険だった。

そのため、今は撃ち落とさずに飛んで避けるだけに留まっているのだ。

「は〜い、じゃあ一枚目!!？霧符『ガシングガーデン』!!？」

すると、大量の米粒弾がばら撒かれ、それと同時に毒霧が如月に向かって来た。

如月はそれを避けようとするが、毒霧に当たると別段何処が痛いとかはないが、動きが鈍くなった。

直ぐに毒霧から離れるが、丁度其処に弾幕が飛んで来て、如月に当たり、毒霧へと押し戻された。

まあ、押し戻されても、関係なく出て来るのが如月なのだが。

如月が弾幕を避け、時には毒霧に入ってしまったし、避けづらくなったり、弾幕をグレイズしたりしていると時間は経ち、弾幕と毒霧は消えてしまった。

「はあ、不注意で毒霧に入ってしまった。まあ、何とかあったけど」

「貴方、普通の毒霧でも生きていけそうね」

「いや、流星にそれは死ぬからな!!？」

喰龍の力さえ使えばそれも容易いが、本人への負担が計り知れない。

「じゃあ、次ね!!？譚妄『イントユデリリウム』!!？」

メデイスンが宣言した後、そのメデイスンは大弾幕と丸弾、それに加えて先程の毒霧を全方位に向けて放って来た。

(弾幕は兎も角、毒霧を避けるのは無理だな)

如月はそう考えると、毒霧に当たることに対しての躊躇を消し、弾幕だけを躲す事に集中した。

そのまま時間が来た為、メデイスンの弾幕が止んだ。

「さて、じゃあ反撃に……」

「あ、しなくて良いよ」

「……は？」

如月は惚けた顔でメデイスンを見た。

そのメデイスンはと言うと、まるで空中に地面でもあるかの様な態勢で手で支えながらも座っていた。

「私、毒の使い過ぎで疲れたから私の負けで良いよ」

「……え？どういふこと？」

「冬だからんだけど、最近、スーさんの毒の量が少ないんだよね。冬以外なら年中無休で平気何だけど、冬だとも……」

メデイスンはそう言うのと、本当に疲れがピークな様で、欠伸をした。

「ふああ……まあ、そう言うこと。あ、でも、幽香には気を付けてね。

彼女が好きなの向日葵が枯れるこの季節、荒れてるから」

まあ、私は初体験だけど、とメデイスンは言った。

彼女が此処に移り住む様になったのはあの幽霊大量発生の変の時からだ。

まだ一年も経っていない。だから、幽香のそんな状態を見たのは初なのだ。

「……ああ、うん。分かった」

如月はなんとも言えない気持ちを抱えながらも、幽香の元へと移動するのだった。

\*\*\*

そのまま幽香の家まで歩いて来た。

現在の居場所はその家のドア前だ。

「さて、ノックするか」

如月が二回ノックする。つまりは来客の合図だ。

が、ノックして秒も経たずに何かの砲撃が放たれた。

それは速過ぎたのだが、一応は何とか避けられた如月。

その右頬が若干焦げてる気がしないでもないが気にしないでおう。

そして、家の中からはのっそり、ゆつくりと、しかし黒いオーラを発しながら出て来る幽香が見れた。

「ゆ、幽香……？」

「貴方ね？こんな不機嫌極まりない時に訪れた哀れな来客は」

幽香は黒い笑みを浮かべながら如月の方に傘を向けた。

「えっと、何かあったのか？」

「あったわよ。今もあり続けているわよ。私の大好きな花達が枯れるこの季節そのものが、私にとっては苛立つ原因よ!!？」

「いや待て!!？それは仕方が無いことだろ!!？」

「ええ、そうね。仕方がないことだわ」

如月はその言葉にホッと一息吐く。

しかし、そんな如月の右真横を光線が通って行った。

「……」

「けど、それでも、私の大事な花達が居ないのもまた事実。四季の花の所へと行きたい所だけど、それをあのスキマ妖怪が何度も邪魔してくる始末」

今の所、この幻想郷では冬の花は一応は確認されている。

しかし、其処へと移動しようとした幽香を、紫は止めた。

まあ、本来は止めなくても別に問題はないし、何時もは止めてくる事もなかった。

しかし、今回はこの競技があることを紫はレティシアから以前から聞いていた。

それが何時になるとも限らないからと言われ、抑える他無かったのだ。

まあ、聡明な紫が本来する筈が無いことをしている最もな理由としては、レティシアからの今年の修行課題の中に『幽香を自分が言う時

期まで移動させないこと』というのがあった所為なのだが、しかし、この場の誰もそんな事実を知る者はいない。

如月も頭を捻るだけである。

「と言うわけだから、貴方。私の憂さ晴らしの為に弾幕ごっこを付き合いなさい!!?。」

「まあ、元から其のつもりだったから別に良いぞ」

如月は幽香に向けて好戦的な笑みを向けた。

対して幽香もまた、獰猛な笑みを浮かべるのだった。

\*\*\*

「……とまあ、ああは言ったけど、実際、私の持つてるスペルカードって少ないのよね〜」

「ああ、そっか。そう言えばそうだったな」

二人して空中で相手の出方を伺いながらもそんな会話をしている。

戦闘において一番大事な最初の攻撃。ファーストアタックそれを二人はちゃんと当てる為にも伺っているのだ。

「じゃあ、どうするんだ?。」

「殺り合いましょうか」

「冗談でもそれは辞めてくれ」

「本気なのだけれど?。」

幽香は真顔でそう言った。

「……」

そこで如月は思考を走らせ、一つの提案をした。

「ならば、先に相手に一撃与えた方の勝ちで良いんじゃないか?。」

「それもそうね。とつても分かりやすいルールだわ」

幽香はそう言うと、自身の妖力を外に少しだが放出した。

対して如月も霊力を放出した。

その力のぶつけ合いに、近くにいた妖精は離れ、如月が離れた後、寝ていたメデイスンも強制的に起こされた。

そんな状態ながらも二人は動かない。

しかし、その緊張状態から少し経った後、幽香が痺れを切らした様で弾幕を撃ってきた。

如月はそれを避けるも数が多く、左に避けたり、弾幕を弾幕で撃ち落としたり、グレイズしたりして何とか当たらずに済んだ。

しかし、如月が避けた為に、幽香の弾幕が当たった後ろの地面は抉れてしまっていた。

「どれだけ妖力注ぎ込んでるんだ……」

「あら？そこまで注ぎ込んでないわよ？一割か二割ぐらいよ」

「……レティシアの特訓、受けたのか？」

「彼女との勝負で、勝った方の言うことを聞くって言う命令権を掛けたことがあってね。その時に負け、無理矢理だけど特訓させられたわ」

「……」

自分が今受けてるこれも特訓の一つだと分かっている如月は、自分がこれでどれだけ強化されたのかと少し気になった。

「……それで、幽香はどんな特訓をさせられたんだ？」

「力のコントロール、能力の使い過ぎは御法度と言われて能力禁止にされ、拳句は飛ぶの禁止、避けるの禁止、打ち消すの禁止、反撃禁止……まあ、動きを全て封じられて、果ては体や足を縛られて絶対に避けられないそんな状態での弾幕の嵐を浴びたわね」

「彼奴、悪魔だろ」

「それは合ってるじゃない。まあ、お陰で打たれ強くなったわけだけど」

あと、武術とかの特訓もさせられたわね、と幽香は少し思い返す様に言った。

「まあ、そんな特訓を受けても彼女に勝てたことは一度として無いのだけどね」

「そんな特訓させられてもか……」

「真偽がどうかは知らないけど、あのスキマ妖怪も彼女に何回も投げ飛ばされたり、海に何故か沈められたりしたとか言ってたわね」

（紫も投げ飛ばされたのか……と言うか、よく生きてたな）

若干、紫に同情する如月であった。

「そんな立ち話は終わりにして、さ、続きをやりましょう？」

「そうだな!!? 肉体強化『神雷』!!?」

如月はスペルを宣言すると、そのまま幽香に近付いた。

普通の人間なら追うのも無理なスピードだが、幽香は如月の動きが見えていた様で、如月からの素早い攻撃を止めていた。

「そんなスピード、彼女と比べたら遅過ぎるわ!!?」

「此処で最強と呼ばれる所以が今日で分かった気がする!!?」

如月はそう叫ぶと、一度後ろへと下がった。

しかし、幽香もそう簡単には逃がさない。

そのまま如月に近付き、妖力込みの回転蹴りを浴びせようとするが、それは如月が降度を落とすことによつて当たることは無かった。

それを見てとつた幽香は直ぐ様弾幕を作り、如月へと放つたが、それは後ろへと下がられ、回避された。

如月は一度と幽香と同じ高さまで戻ると、素早い動きで幽香へと攻撃を入れ様とした。

しかし、やはりと言うべきか幽香は如月の進路を邪魔するかの如く弾幕を撃つてくる。

今や如月の目の前は弾幕の壁である。

(これで終わり……な訳無いわよね? 如月)

幽香がそう思った。そして、如月もまた、幽香の期待に答えるかの様に時空を斬り、幽香の後ろへと移動し、そのまま剣(鞘からは抜いてない)で攻撃しようとするが、幽香はそれを後ろすら振り向かずには傘で防いだ。

「くっ!!?」

「貴方達みたいな剣士なら、ちゃんと相手の姿を見てしろとか良いそうだけど、生憎と私は剣士じゃなくて一妖怪。関係無いわ!!?」

そのまま傘に力を入れ、如月を押し返し、其処へと向けて弾幕を撃つ。

しかし、如月も体制を立て直し、また避ける為に時空を使つて場所を移動した。

「はぁ……はぁ……」

如月の居場所を見てとつた幽香は、何故か真上に弾幕を一つ撃つ



た。

「？」

如月も最初こそ分からなかったが、それは空中で暴発し、まるで花火の様な鮮やかさを持ちながらも弾幕がばら撒かれ、それが如月を襲った。

「くっ!!？」

如月はそれから避けようとするが、そこに幽香が外からの射撃。余計に避けづらくなってしまった。

如月はそれを紫のスキマ宜しく時空を斬り、その中に弾幕を入れ、幽香の後ろにお返しした。

幽香もそれに気付くと、射撃を辞め、避ける事に専念する。

が、その所為で如月への意識がなくなり、結果。

「終わりだ!!？」

「しまった!?!？」

如月からの攻撃を避けられなくなってしまった。

\*\*\*

「はあく、悔しいわね」

「いや、思いつきり疲れた」

如月と幽香は雪の上に座り込んでいた。幽香に至っては寝転がっているが。

如月達がいる場所は、被害があまり無いが、少し見渡せば直ぐに被害の酷い所が分かる様な場所に居た。

一番酷い所は、地面が抉れ、もうその場所で自然は育たないのでは無いかと思われるような悲惨さだった。

「なあ?あの場所、どうするんだ?」

如月はそう聞いて見た。

対して幽香はその場所を見ながら質問に答えた。

「鬼灯に頼むわ。彼女なら、この場所の再生ぐらいお手の物よ。私もその再生を手伝うつもりだけど、何処まで力添えが出来るかしらね?」

幽香はそう言うと、立ち上がり、如月に手を差し出した。

「ほら、立てるかしら?」

「ああ、でも、有難うな」

如月はそう言うと、幽香の手を借りて立ち上がった。

幽香は先ほどまでの獰猛な笑みとはまた違う、普通の少女らしい笑みを浮かべると、自身のポケットを探り始めた。

「えっと、確か此処に……あ、あったわ」

幽香はそう言うと、掌を如月に出した。

その掌の上には、鈴が乗っていた。

「私とメデイスンからのお題をクリアしたら、貴方に渡す様にレテイシアから言われてね。別に言うこと聞く理由も無いけど、戦いも楽しかったから良しとするわ」

「じゃあ、楽しく無かったら?」

「貴方にあげると言いながら鈴を壊してたわ」

「辞めてくれないか!?!?」

「壊すつもりはないから安心しなさい」

如月はそれを聞くと、幽香から鈴を受け取ったのだった。

\*\*\*

レテイシアは二人の光景を見ながら何時も通り、クスクスと笑っていた。

そして、今は二人を映し出しているスキマでは、二人が話していた。

『ねえ? 貴方、次は何処に行くつもり?』

『そうだな……残ってるのは白玉楼、永遠亭、博麗神社だしな……』

レテイシアは幽香にだけ一つ言っていた。

この太陽の花畑の何処かに、白玉楼への行ける場所があることを。

幽香は勿論、如月にその事を伝え、如月は早速探し始めた。

今は既に太陽が真上に向いている。しかも、雪も降り始めている。

しかし、如月はそれを気にせず探し、スキマを見付け、その中へと入って行った。

「クスクス、さて、刀が折れし剣士の炎、貴方は灯すことが出来るかしら?」

レテイシアはそう言うと、すぐ側に置いていた暖かい紅茶を飲み始

めた。

## 第四百四十二話

スキマを潜り、白玉楼へと辿り着いた如月は、先ず妖夢と永久、幽々子を探し始めた。

この三人が居なければお題をクリア出来なくなってしまう。

妖夢がよく居る庭の方へと来てみると、妖夢と永久が修行をしていた。

「はああああ!!?」

妖夢は上段斬りをしようとするが、それは永久の剣で止められ、押し返され、態勢を崩されてしまった。

例え半人半霊だろうと性別は女性。相手は性別は男性で、しかも上位の半人半霊だ。

何方の力が強いか、分かり切っている。

妖夢はそのまま尻餅を着いてしまい、永久はそんな妖夢の首に剣を向けた。

「……これで俺の勝ちだな」

「そうですね。まだ私は、永久に勝てませんね」

「だが、それでも強くなっていつている」

「鬼灯様には勝てたことは無いですがね」

「……今まではあの人も修行していなかった所為で腕が訛っていたらしいが、修行しだした今の実力、知りたいものだ」

「そう言えば、最近戦っていませんでしたね」

「まあな。……それで、何時まで其処にいる気だ? 如月」

と、永久は如月の方へと顔を向けた。

別段、如月は気配を消していなかったもので、気付かれるのは当然である。

「なあ? 鬼灯は修行してなかったのか?」

如月が素朴な疑問を永久にぶつけてみた。

そして、その質問には妖夢が答えた。

「はい、そうですね。修行しなくても強い方というわけでは無いのですが、随分昔は剣士としての実力は上位……というか、最強クラスで

したから」

「唯、あの人は妖夢のお爺さんから妖夢の修行を頼まれ、それが修行の一環になっていたらしい。だが、それでも剣士としての炎は消えたままだったらしいが」

「それが最近になって、如月さん、龍さん、永久に岩槻さん、その上、竜希さんという自分よりも強い剣士達と出会って、それで火が着いたようで、修行をしだしたんです」

「修行をしていなかった分、私の実力も落ちてしまった。だから、修行をして力を戻し、あの時以上に強くなってみせる!!? 如月達と肩を並べ、最終的には追い抜いてみせる!!?」 鬼灯はそう言っていたぞ  
「鬼灯が……」

「それにしても、その竜希とか言う剣士の事はレテイシアからしか聞いていないが、決闘してみたいな」

永久はそれを考えただけで闘志を湧き上がらせている。

「おいおい、永久。今の相手は俺じゃないのか? 俺はガン無視か?」

如月の言葉を聞くと、永久は如月に顔を向けた。

「いや? お前とも戦ってみたかったんだ。俺からのお題は『決闘』!!? 純粋な剣だけでの勝負だ。弾幕もスペルも一切無しの真剣勝負。勿論、受けてくれるよな?」

永久からのその言葉を聞いた如月は、笑みを浮かべた。

「ああ、勿論だ!!?」

其処で如月は剣を構えた。

「ふっ」

対して永久もまた笑みを浮かべ、剣を構える。

……まあ、剣と言っても木刀なのだが。

\*\*\*

木刀を構えてる二人の中心に、妖夢は手を掲げた状態で立っていた。

「両者、構え……始め!!?」

その合図により、始まる決闘。先ず最初に攻撃したのは如月だった。

如月は足に力を入れ、一気に永久との距離を詰めた。

永久は如月からの攻撃を自分が持つ木刀で防いだ。

そして、そのまま木刀の押し合い、お互い後ろへと下がった。

今度は永久が如月に近付き、上段斬りをするが、如月はそれを左に避け、永久の首に突き付け様とするが、永久はそのまま振り向き、如月の木刀を飛ばした。

「くっ!!?」

如月は急ぎ木刀を取り、もう一度構えた。

今度は、そう簡単に落とさぬ様に力を入れてだ。

「そう簡単に落とせなくなったな」

「そんな事したら、永久が楽しめなくなる。そして、何より俺も楽しめなくなる」

「ふっ、そうだな!!?」

そして、永久のその言葉が合図にでもなったのか、二人は同時に跳躍し、距離を詰め、お互いの木刀をぶつけ合った。

互いに一步も引かないこの現状。

しかし、其処で如月は何故か力を抜く。

「なっ!!?」

それは不意の行動で、永久も急には対処出来ず、そのまま態勢が崩れてしまう。

一方、力を抜いた如月は、既に永久の後ろに回っており、永久へと攻撃しようとした。が、

「其処まで!!?」

妖夢のそんな声が聞こえ、攻撃を中断したのだった。

\*\*\*

「如月のあのやり方……鬼灯と似たやり方だな」

「ほら、この前、鬼灯と剣での試合をしただろ?あの時に盗んでおいたんだ」

如月のその言葉を聞くと、永久は更に笑みを浮かべた。

「成る程……鬼灯がお前に勝ちたいと思う気持ち分かるな」

「鬼灯って、俺のことライバル視してるのか?」

「ああ、鬼灯はお前の方が自分よりも強いと思ってるぞ」

如月はそれを聞くと、嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「妖夢く？永久く？ご飯にしましよ……あら？貴方、レティシアが言ってた挑戦者かしら？」

と、そんな時に幽々子がやって来て、如月の顔を見てそう言った。

「ああ。まあ最初は強制的だったけど、今はそう思っていない挑戦者だ」  
「ふふ♪さて、貴方も入って頂戴。其処で私からのお題と妖夢からのお題をこなしましよ」

幽々子からのその言葉を聞くと、そう言えばと思い出し、妖夢を見た。  
た。

「なあ？妖夢のお題って……」

「如月さん、私からのお題はですね……」

其処で妖夢は申し訳なさそうな顔で言うのだった。

「『大量の料理を作る事』です」

\*\*\*

結果として、如月は本当に大量の料理を作らされた。

その時の如月は若干窶れていたとかいらないとか。

しかし、如月を更に窶れさせる発言を幽々子はした。

「は〜い！それじゃあ、私からのお題ね♪私からのお題は〜、『大食い競争で私に勝つ事』よ!!?」

「……駄目だ、勝てない」

如月は幽々子の食べる速さを知っている。

幾ら普通の人とは違った能力を持っているとはいえ、食べるスピードは普通だ。つまり、如月では幽々子に勝てる道理はない。

なら、如月以外に任せれば良いのだ。

「……凜華」

如月のそんな呼び掛けに答え、如月の中から出て来た凜華。

その凜華は目の前に置かれている大量の料理を目にし、嬉しそうな顔をした。

「如月、これら全てを食べても良いのか!?」

「いや、全てじゃないからな!??今から始めるのは幽々子との大食い

競争。先に食べ終わった方の勝ちだ。凜華にはこの勝負、勝ってもらわないといけないんだ!!? 頑張ってくれ!!?»

「ふっ、如月、妾を誰だと思っておるのじゃ? 妾は『喰龍』!!? そのぐらい簡単な事なのじゃ!!?»

凜華はそう言うのと、幽々子の隣に座った。

「凜華、貴女とは良い友人になれると思うわ。けれど、今はライバル同士。お互い悔いの無い様に頑張りましょう」

「お主も、妾に負けぬ様に頑張るのじゃな!!?»

「それでは! 始め!!?»

妖夢からの始めの合図を聞くと、二人の暴食王は自分の目の前に置かれている料理を一気に食べ切った!!?»

「なっ!!? あの幽々子様になげず劣らずに一瞬で食べ切るだ!!? あの凜華とか言う者、只者ではない!!?»

「永久!!? なんかキャラが崩れてるぞ!!?»

如月のツツコミは唯のBGMとでも言う様に気にせず食べ続ける二人。

もはや、この二人に見えるのは目の前の料理だけの様だ。

「ああ、食費が……」

「妖夢!!? しつかりしろ!!?»

「葵さんにも分けてもらって浮かして来た食べ物達が、一気に失われしていく……」

「妖夢!!? 頼むからしつかりしてくれ!!?»

如月が若干現実逃避し始めた妖夢の肩を揺する。

しかし、やはり気にしない。

現在、沢山の料理が乗せられていた机の上には、もう料理が殆どなく、数を数えればお互い三つしか残っていなかった。

しかし、その三つ目もあつという間にお腹の中に入れる二人。

それはさながらブラックホールである。

「!!? もう残り一つしかない!!?»

如月のその言葉が聞こえた永久と妖夢は、机の上を見た。すると、互いに最後の料理に手を付けようとしていた。



「……凜華。もうお互い、これが最後の料理。なら、同時に食べて決着を付けましょう」

「……望む所じゃ!!?」

幽々子は一度、妖夢を見た。

妖夢にもう一度、開戦の合図をする様に促したのだ。

それを察した妖夢はもう一度「始め!!?」と言った。

それと同時に最後の料理に手を付けた二人。

その結果は……。

「ふっ、妾の……勝ちじゃ!!?」

凜華は最後の一口を口の中に入れ、勝利を宣言した。

そして、一足遅くではあるが幽々子も最後の一口を口の中に入れ

た。

「あら、負けちゃったわ〜」

幽々子はそう言いながらも、何処か嬉しそうである。

まあ、大量の料理を食べたのだから嬉しいのだろう。

……しかし、まだ終わらない。

「妖夢、勝負は私の負けだけど、まだ私も凜華も満足してないわよ〜

?」

「如月!!?早く料理を持ってくるのじゃ!!?」

その言葉に妖夢と如月はお互い、遠い目をするのだった。

勿論、この後、鈴は貰い受けた。

\*\*\*

白玉楼でのこのやり取りを見ていたレティシアは、白玉楼に大量の食材を寄贈することを決めた。

幾らDSのレティシアでも、流石に可哀想になる気持ちはあるのだ。

「クスクス、さて、またスキマ探しを始めた様だけど、次は何処に……あら?」

如月は白玉楼の一つの部屋の襖を開け、其処に設置されていたスキマを潜って行った。

「クスクス、次は永遠亭の様ね。さて、どうなるかしら♪」

レティシアはそう言った後、大量の食材を『物を創造する程度の能力』を使って創造し、寄贈するのだった。

\*\*\*

スキマを潜り抜け、やって来たのは迷いの竹林。

しかし、今の迷いの竹林はおかしいのである。

「……あれ？おかしいな……。白玉楼に行く前は昼だったのに、何でもう夜に……」

今のこの場所は何故か夜となっていた。

時間的にもまだ昼なのである。

「これはあの吸血鬼がやったんだよ」

「あ、てる」

如月が頭を捻っていると、てるが答えてくれた。

「というか、レティシアはもう何でもアリか……」

「何か不思議な事が起こってもそれがあの吸血鬼の仕業なら、『あの吸血鬼だから仕方ない』で終わるぐらいのチートだよね」

「今その言葉で納得してしまった」

彼女は最早、チートという名のバグである。

「まあ、これ唯の幻覚らしいけどね」

「へえ、そうなのか」

如月はその言葉に納得したように頷いていた。

「さって、私がここに居るのはこの説明と、後はお題を出す為に居るわけだけでも……」

てるのその言葉に、如月の雰囲気は変わった。

てるもそれに気付き、楽しそうな笑みを浮かべて言った。

「まあ、そう身構えずにさ、気楽になりなよ。今から出すお題は姫様が過去に出した無理難題よりも簡単なんだからさ」

「……そうだな」

如月はその言葉を聞くと肩の力を抜き、てるを見据えた。

「じゃあ、私からのお題ね。私からのお題は……『この迷いの竹林を抜ける』こと。只それだけ」

「……え？それで良いのか？」

「ああ、勿論良いよ。ま、精々私達の罾に引つかからない様に気を付けなよ」

てゐはそれだけを言うと、近くの竹に背中を預け、如月から目を離さないようにしていた。

「てゐの罾があるんだったな。まあ、引つかからない様に頑張るとするか」

如月はそう言うと、進んで行った。

如月が去ったその場には、残った因幡の兔が楽しそうな笑みを浮かべただけだった。

\*\*\*

迷いの竹林を歩いている如月だが、中々に難易度が高くなっている。

理由は二つ。

一つは、今現在、暗い所為で足元にある罾に直前まで気付かなかつたりというような事が度々起こっていること。

そして、もう一つは……、

「何で何時もより罾の数が多いんだよ!?!?しかも、物騒なものが多い……危なツ!?!?」

迷いの竹林に設置されている罾の数である。

しかも、増えた分の罾には、クナイ、手裏剣、ブーメラン、カッター、投槍、短鎌 e t c ……。

つまりは、殺傷能力抜群の武器ばかりなのである。

(てゐの罾はこんな人の命を刈り取る可能性のあるものは全くない。となると……別の『誰か』の罾?)

如月がそう考えていると、進行方向から一人の男性の姿を留めた。髪が白髪で、何処かの世界で、周り全員から『バカ』と決定されている少年の様な顔をしている男性。

「お前は?」

「僕は『菅原 貴岳』。よろしくね、如月君」

「ああ、よろしく。それで、貴岳も出すのか?お題」  
「勿論だよ」

貴岳はそう言うと、如月に向かって笑みを浮かべながらお題を出した。

『僕を殺して』

「……は？」

そんな言葉を言う貴岳は未だ笑みを消さない。

今の如月から見たら、何処か異常である。

「だから、『僕を殺して』。それがお題をだよ。こんなお題、クリアは簡単でしょ？」

「……」

如月は貴岳の真意を測りかねていた。

その為、彼は自身の意思に従う事を選んだ。

「……殺さない」

「……何で？」

「何でって……」

「僕と君は初対面だ。つまり、戸惑う理由がない。そうでしょ？」

「……俺は人殺しをするつもりはない」

「ふくん。なら、君にとっての大切な人がどうなっても良いって事で良いのかな？」

「いや、お題一つで何故そうなる」

如月は少しゲツソリした様な顔を見せるが、しかし、目の前の異様な人物からは目を離さない。

「大体、さつきもお前が言ったように、俺とお前は初対面だ。なのに、俺にとつての大事な奴が分かるのか？」

「分からないよ？だから、幻想郷に住んでる人全員を殺せばその問題も晴れて無くなる。違う？」

「……」

如月はその言葉に一瞬目に動揺が浮かぶが、天羽々斬を出さない所を見るに、殺すつもりは無いようだ。

「で？どうするの？僕を殺す？それとも、殺さない？さあ、どっち？」

「……殺さない。そもそも殺せない。俺はそんな事を、したくはない」

「……そっか。なら、仕方ないね」

貴岳はそう言うのと、自身の力を外に放出し始めた。

「さて、僕は自分の能力を何時でも使える準備に入るとするよ。止めるなら今しかない。止める方法はさつきも言ったように僕を殺す事だけだ。さあ、僕を殺せ!!？」

貴岳のその脅しの言葉を聞いても、如月は頑として頭を縦に振らなかった。

「……どうして?」

「俺は自分の手を汚したくないし、それ以前に、そんな時が来たとしても、俺は自分の身に変えても守る。それだけだ」

「……ははっ」

と、急に貴岳は笑い始め、力も収めた。

「……え?」

「ははっ、如月君、君は本当に優しいね。でも、その思想は危険だよ」  
「まあ、そうだな。けど、俺が傷付いただけで守れるなら安いものだろう?」

「守られた人からしたら安くないけどね」

「それに、今の幻想郷じゃあ、争い事は弾幕ごっこで決めるから、そんな時は当分来ない筈。違うか?」

「今、僕がしようとしたけどね」

「本当にするつもりなら、レテシヤや葵に霊夢が来る筈だろ?なのに来てない。なら、そんな事をするつもりは無かったってことだろ」

「まあ、お題だからね」

貴岳は肩を竦めた。

「でも、俺にそう言う前にそれはお前にも言えることだろ?」

「ん?何が?」

「だから、俺がもし本気で殺そうとしたとして、それでお前が殺されたとして、お前はそれで終わりじゃないか。人の事言えないぞ」

如月が厳しい顔でそう言うが、貴岳は苦笑しながら答えた。

「それは無いよ。だって、僕は不老不死だからね」

「……え?マジで?」

「マジのマジだよ」

「……俺の心配は一体？」

「無意味にする様で御免けど、意味なかったね」

「キツイこと言ってきたなオイ!!?」

「あはは!!?それじゃあ、妹紅の所に行こうか」

貴岳のその言葉に、如月は頷き付いていくのだった。

\*\*\*

「……なあ?お題は?」

「無いよ?せめて言うなら焼き鳥食べるぐらいかな」

如月は、本人の目の前でいつも通り、焼き鳥を焼いている妹紅にその話し掛けたが、返ってきた言葉はそれだった。

「つまりはお題が無いってことか?なら、嬉しいけど……」

「あく、無い無い。此処はあんたにとっては休憩所みたいな所さ。ま

あ、ゆっくり休んで行ったらいい」

「あ、それじゃあ遠慮なく……」

「お酒飲むかい?」

「俺が今何してるか分かってて言ってるよな?」

「あ、代金は後で頂戴するからね」

「此処で商売魂を出さなくても良いだろう!!?」

「無理無理。だってこれ、商売だし」

そんな会話をしながらも、焼き鳥を食べる如月だった。

\*\*\*

迷いの竹林で色々な罨が如月を襲うが、しかし如月はそれを避け(危なく当たりそうなのもあったが)、なんとか永遠亭にたどり着いた。

「な、何で竹林にカッターとかも仕掛けるんだよ……。拳句に投げナイフにトマホークって……殺す気満々じゃないか……」

如月が自分の身の危険に身震いしていると、その場所に二人ほど近付いてくる音が聞こえた。

如月は顔を上げ、それが誰なのかと確かめて見れば、鈴仙ともう一人、黒髪学ラン、しかし問題児そうな顔をした男が立っていた。

しかし、その男は鈴仙と同じ兎耳があるが……。

「……コスプレか?」

「違うからな」

真つ先に出た言葉にツツコむ兔耳男。

「俺は『雷羅・沈丁花式・カケル』だ。よろしくな!!?」

「なんか、鈴仙みたいに長いな……よろしくな、雷羅」

如月は雷羅に手を差し出し、雷羅もその意味が分かると、握手を交わした。

「それじゃあ早速、俺からのお題だが……俺との弾幕ごっこだ」  
「分かった」

そして、永遠亭での第一戦、雷羅との弾幕ごっこが始まった。

\*\*\*

如月は弾幕ごっこが始まってからずっと撃ち続けているが、それを相手はブーメランを手に持ち、弾幕を消していた。

それを見て取ると、紫達がしていた様に自分の力を粗くではなく丁寧に練り、弾幕を作る。すると途端に弾幕を消す事が出来なくなり、それに雷羅は驚いていた。

「おいおい、マジかよ……だったらちよつと早いがスペルを一枚使う事にするか!!?」

雷羅はそう言うのと、スペルを宣言した。

「泰平『曲舞』!!?」

その後、雷羅はブーメランを如月に向かって投げた。

勿論、如月はそれを避け、戻ってきたブーメランをまた避けた。

それで終わったと思っただが、それだとスペルにする意味が無いと考え、少し観察してみると……ブーメランは雷羅の元に戻らず、また自分の方に向かってきた。

「な!!?」

如月は体ごと左に避け、自分の右を通っていったブーメランを見た。

「おら!!?俺も忘れるんじゃないやねえ!!?」

「!!?!!?!!?」

ブーメランに集中していた所為だろう。雷羅からの拳の一撃を諸

に受けてしまった如月は、そのまま後ろにあつた竹に背中を打つてしまつた。

「うっ……」

「それ…もう一丁!!?」

雷羅は追加攻撃とばかりにそう言うと、ブーメランが如月を襲おうとした。

しかし、そこは流石に如月も避け、何とか免れた。

「……ブーメランを操るって……本当に常識が通じないよな、幻想郷って」

「今頃かよ。てか、気付いてたのか」

「まあな……驚きはしたが、よくよく考えればそれが一番納得いくしな」

如月はそう言いながら、天羽々斬を持ち、構えた。

「それは流石にキツイが、まだスペルは続いてるからな。行くぜ!!?」

雷羅はそう言いながらブーメランを操り、如月に攻撃を仕掛け始めた。

しかし、如月はそれを左右に避けたり、剣で弾いたり、軌道を変えたりとして、当たらないようにした。

しかし、そのブーメランだけの攻撃の所為で無意識にブーメランに集中し、雷羅が近付いて来ていたことに直前まで気付かなかつた。

「滑走『月光』!!?」

「!??!?」

その声で漸く雷羅の存在を思い出すが、少し遅かつた。

既に雷羅はスライディングの要領で如月に近付いており、如月の目の前で飛び上がり、延髄蹴りを仕掛けてきた。

だが、そこは今の今まで弾幕ごっこやお題で経験が付いたであろう如月。

如月はその場でしゃがんだのだった。

「?……!??!?」

最初こそはその意味を理解できなかった雷羅だが、如月が退いたことにより、自分の視界に映ることとなつた。



それは……自分が操っているブーメラン。

既にスペルの制限時間は過ぎており、そのブーメランは丁度返って  
こようとしていた瞬間。

操る事も出来ず、かといって急な事であり硬直してしまう体。避け  
ることはもう叶わない。

そのまま自分の武器であるブーメランに攻撃され、ダウンしてし  
まった。

\*\*\*

雷羅が倒れたのを見た鈴仙はすぐ様駆け寄り、今現在、雷羅は鈴仙  
の膝枕を堪能している。

その本人はブーメランの勢いが強かったのか、気絶しているが。

「葬がいたら良かったんだが……」

「無い物ねだりはしたりしませんよ。この場合、『物』ではなく『者』で  
すが」

鈴仙はそう言葉にすると、雷羅の頭を優しい顔で撫で始めた。

「……（やばい……居ずらい）」

如月は空気を読み、鈴仙にお題の話を出さないようにしているが、  
しかし、この空気に耐え難いのか、早く立ち去りたい衝動に駆られて  
いた。

「あ、如月さんにお題を出さなければいけませんでしたね」

と、そんな如月を察したわけでは無いようだが、それでも鈴仙から  
その言葉を聞いたことにより、一息吐く事が出来た如月。

しかし、心優しい如月は雷羅を心配そうに見ながら鈴仙に聞いてみ  
た。

「雷羅の事もあるし、別に後でも良いんだぞ？」

「いえ、雷羅は少し休めば起きると思いますから大丈夫ですよ。それ  
で、お題の話に戻りますが……」

鈴仙は如月の顔を見ながら、質問してきた。

「如月さんは『高草郡』たかくさのこおりという物を知っていますか？」

如月はそれを聞くと一度記憶を辿り、頭を縦に振った。

『高草郡』というのは、因幡国に昔あったと言われる郡であるが、此処

でのこれはそんな意味ではなく、因幡国風土記に書かれている生い茂った草や竹藪の事である。

そして、この高草郡が迷いの竹林が出来た理由なのだが、それでも、普通の竹林の方が多いだらう。

まあ、詰まる所……。

「俺に探して来いと。この罫だらけの竹林から、高草郡を……」

「そういう事よ。まあ、雷羅をこんな風にした訳だし、これぐらいの難易度が丁度良いでしょ？」

実際の所、永琳からの頼まれ事を丁度良く現れた如月にやらせようとしているだけなのだが、それを知っているのはこの場にただ一人、鈴仙本人だけなのだ。

つまり、彼女が『真実』さえ話さなければ、この事は誰にも暴露ない。

永琳からのお使いもこなす事が出来、雷羅を膝枕出来ているこの状況、一石二鳥である。

「まあ、頑張つてきてね」

鈴仙は良い笑顔で如月を送り出したのだった。

\*\*\*

その後、数々のデストラップや落とし穴を潜り抜け、高草郡をなんとか見つけ、鈴仙に渡した後の今現在の如月は、その鈴仙の案内により永琳の元へと移動中である。

理由はやはり、お題を出してもらいにである。

「お師匠様、如月さんが到着しました」

鈴仙はある部屋で止まり、扉をノックし、中にいるであろう永琳にそう言った。

その後、許可の言葉が返ってきたため、如月は中へと入っていった。すると、丁度永琳が薬を作っている所だった。

「それで、永琳。忙しい所悪いんだが……」

「お題でしょ？ 私からのお題は『姫様の相手』。姫様は姫様でちよつと退屈そうですから、貴方が来てくれて丁度良かったわ。姫様の部屋は分かる？」

「ああ、大丈夫だ」

「そう。なら、頑張って頂戴」

「☒ああ、頑張るさ」

如月は永琳からのその声援の意味が何となく違う事を察しながらも、そう返した。

その後、輝夜を探して屋敷内を散策していると、丁度月が見える縁側に座っていた。

「……あらっ？いらっしやい」

輝夜は後ろに気配を感じ、振り返った。

その一挙一動でも、元は絶世の美女と謳われた事だけはあり、芸術にも似た美しさを感じる。

満月の光さえ、彼女の美しさを際立たせる演出でしかない様に感じるのは何故なのだろうか？

「……」

「あらっ？どうしたの？そんな風にポーツとして」

輝夜は裾で口元を隠し、目を細め、笑みを湛えた。

「あ、いや……」

「ふふ、初心ね〜」

「今その言葉で何か色々台無しだ」

「それは流石に酷いわよ」

輝夜は姫としてのカリスマを脱ぎ捨て、普段通りの雰囲気醸し出しました。

「それで？輝夜からのお題は何だ？」

「ふふっ、貴方は果たして、私の『お題』を叶えることは出来るかしら？」

「あ、用事思い出したから帰るな」

「こらこら、待ちなさい」

如月はなんとも言えない嫌な予感を感じ、すぐ様その場を去ろうとするが、輝夜は自身の能力を使った様で、それなりに合った距離など無かったかのように、一瞬で如月の襟首を掴んでいた。

「くっ、逃げきれなかった」

「そもそも逃げるといふ選択肢があると本気で思ってるわけ？」  
「思ってるわけないだろ」

その回答を聞いた輝夜は呆れたとでも言うように溜息を吐き、襟首を離さずにお題を話始めた。

「私からのお題は、『私に月を献上することよ』」

「無理に決まってるだろ!!?」

如月の悲鳴にも似た避難など何処吹く風で受け流し、カリスマ性溢れる笑みを湛えた。

「あら？ 私からの無理難題を答えられないと？ なら、貴方はこの持久走のクリアを諦め、罰ゲームを受け入れることね」

輝夜は楽しそうな声音でそう言った。

如月はその『罰ゲーム』が何なのかを知らないが、背中が何故かゾワゾワとし、自分の頭で赤いサイレンが鳴り響き始めた。

「……分かった。だが、考えさせてくれ」

「ええ、勿論良いわよ。昔、私に求婚してきた五人の貴族の男達の時の様に、何か切羽詰まった理由も無いもの。ゆっくり考えると良いわ」

如月はそれを聞くと、頭の中で考え始めた。

そもそも、月を献上すること自体が無理難題過ぎるのだ。

月は宇宙にあり、月そのものを献上するなら宇宙まで行き、取って来なければならぬ。

しかし、それでは自分が宇宙空間で死んでしまうし、第一ロケットでもない限り宇宙に行くなど無理である。

なら、別の方法をと考えるが、しかし思い付かない。

どうしたものかと考えている時、ふと、ある妖精を思い出した。

光を屈折させる事が出来る妖精を……、

(あ、もしかしたらいけるか?)

如月は少し不安を持ちながらも、一度辺りを見渡した。

しかし、其処には求めたものはなかった。

「なあ？ 輝夜」

「？ 何よ」

「桶かなんか無いか？ あと、水がある場所を教えて欲しいんだが……」

「桶？何処だったかしら……鈴仙か雷羅に聞けば分かるでしょうけど。あ、水は調理場よ」

「有難うな」

如月はお礼を言うと、行動を起こした。

「……何か思い付いた様ね。どんな内容かしら？楽しみね」

輝夜はそう言うと、幻の満月を見上げるのだった。

\*\*\*

輝夜の部屋から出た如月は鈴仙と雷羅を探し始めた。

と、そんな途中に永琳とばったり会った。

「あ、なあ、永琳。鈴仙か雷羅を知らないか？」

「知ってるわよ。でも、あの二人に聞かずとも私が教えてあげるわよ」

「え？本当か？」

「ええ、勿論」

如月は永琳から場所を聞くと、風呂場の方へと向かった。

其処には丁度誰も居らず、お風呂に入っている人も居なかった。

「桶はつと……これか。うん、大きさも良いかな」

それはよく言う『風呂桶』で、如月はその後、庭に出て、その桶に水を入れ始めた。

そして、水を零さない様に移動し、輝夜が待ってる縁側まで来た。

「待ってたわよ、如月。さあ、私に月を献上出来るかしら？」

「ああ、出来るよ。ほら」

如月は水が入った桶を輝夜に出した。

「……え？」

この行動に輝夜は疑問を持ちながらもその桶を受け取った。

そして、視線を桶の中の水に移してみると……。

「ああ、そういう事」

水面に十五夜の満月が映っていた。

「輝夜は別に『本物』を求めていた訳じゃない様だからな。何せ、お題の内容の中に『本物の』なんて言葉は何処にも入ってなかった訳だしな」

「それって揚げ足取りじゃない」

輝夜は如月の説明を聞くと、呆れた様な、それでいて何処か楽しそうな微笑を浮かべている。

「良いんだよ、揚げ足取りでも。『本物の月』なんて献上しようにも無理だしな」

凜華とかレティシアとかなら何か出来そうで怖いけど、とか内心考えている如月であった。

「それにしても、これ、どうやって映してるわけ？この場所だと映らないと思うけど？」

輝夜のそんな疑問に如月は答えた。

「俺の知ってる奴の中に光を屈折出来る妖精がいるんだが、其奴を参照に、満月の光を屈折させてみたんだ。普通の湖に満月が映るのは、光が反射してるからだろ？だから、光を桶の方に屈折させて、反射させてるわけさ」

「成る程ね〜」

輝夜は納得した風に相槌を打つと、水の中に人差し指を入れた。

勿論、そうすると水面が波打ち、満月の姿が歪んだが、暫くするとその波も収まり、満月は元の形に戻った。

「うん、まあ、今回はコレで許してあげるわ。けど、次回も許すとは思わないでね」

「次回とかあつて欲しくないけどな」

如月のその言葉に、輝夜は笑うのだった。

\*\*\*

レティシアはその光景を見たのち、迷いの竹林、及び永遠亭を覆っていた幻覚を見せる幕を取り払った。

すると、スキマに映る如月は久々の太陽の光に当たった為か目を細め、暫くして、輝夜から鈴を貰い、最後の場所である博麗神社へと向かって行った。

「クスクス、さて、彼女達はどんな戦いを見せてくれるのかしら？」

レティシアは博麗の巫女と喰龍の使い手の戦いを想像し、楽しそうな笑みを浮かべるのだった。

## 第四百四十三話

積雪もいつの間にかやら全て溶け、如月は博麗神社まで走ってくることが出来た。

そして、石段の目の前まで来ると、其処からはゆっくりと登って行った。

此処が最後の場所とあってか、若干、緊張している様だ。

そして、石段を全て登り切り、目の前にある光景を見てみると……、

「……あれ？ 葵？ 何で此処に？」

「あの、何と言いますか……あ、あはは……」

神無月神社で既にお題を出し、もう相手をする事はないと思っていた葵がその場にいた。

そして、もう一人。歩と顔が似ている女の子が居た。

髪の色も同じで、しかし、歩とは違い小柄だが。

「？ 歩、その子は？」

「ああ、この子は俺の妹だよ」

「初めまして!!? 『矢印野 未来』です!!? よろしくお願いしますね!!?」

「ああ、よろしく」

如月はその元気をを見て微笑ましいものでも感じたのか、笑みを浮かべた。

「あんたがレティシアが言ってた『喰龍の使い手』かい？」

と、賽銭箱の上で胡座を掻いた状態で瓢箪の中に入っているお酒を呑んでいる萃香が話しかけてきた。

もう既に頬が赤い所を見るに、大分前から呑んでいたようだ。

「……萃香、もう酔ってないか？」

「私はまだ酔ってないよ。あんたと戦うまで酔いつぶれたりなんかするもんか!!?」

「鬼と戦って、俺は生きれるんだろうか？」

「大丈夫よ。私達が生き残ったんだから」

実際は、萃香が起こした時の異変での初戦闘。霊夢、葵に加えて、魔

理沙とルカもいての弾幕ごっこだったけど。

「さて、話もこれぐらいにしましょう」

と、其処で霊夢は二回手を叩き、終わりを告げた後、如月を見据えながら言葉にした。

「それじゃあ……私達のお題をクリアしてみなさい」

霊夢のその言葉により、その一帯の空気は変わった。

少し、緊張感が漂っている。

「……それでは、私から先にお題を出しますね」

一番手は未来になった。

「ああ、頼むな。それで、未来のお題はどんな内容なんだ？」

「私からのお題は……『貴方が今まで会った人数と、弾幕ごっこ及びお題を何回したか』。それを答えて欲しいの」

「……………」

如月はこのお題を聞いて、思考がフリーズした。

如月にとって、このお題が今までの中で一番難しいお題だと思ったからだ。

人の記憶はとても大量の情報を覚える事は出来ない。

寝ている間に頭は記憶を整理するのだが、その時整理出来なかったものは『無くなる』わけではなく、頭の奥の片隅に追いやられ、そう簡単には思い出せなくなるのだ。

今の如月はまさしくそれであり、しかも人数や回数となると思考をフルに使う事となる。

まあ、その前に……。

「……マジかよ」

如月は既に膝をついてorz状態なのだが。

「あ、あの……これは流石に……難し過ぎるのでは？」

葵が側にいた霊夢の耳元で、小さな声でそう話した。

丁度近くにいた歩にもその言葉は聞こえていた為、霊夢ではなく歩が答えた。

「まあ、未来は意外と鬼畜と言えがいいのか？つまりは厳しいからな」  
「あのフランみたいよね。まあ、彼方は普通に気付いてるけど、気付い



てないこっちはその分タチが悪いわね」

「……如月さん、クリア出来るんでしょうか？」

「……」

葵からの素朴な疑問は、二人を黙らせるのに効果的であった。

そして、如月はorz状態から何とか復活し、今現在は昨晚の記憶から今日までの記憶を遡っている。

「……出会った人数なんだから、弾幕ごっこをしてない奴らも入る筈だ……えつと……」

先ず最初に思い出すは地底からである。

そこからどんどんと遡っていき、数え終わると数え間違いがないかともう一度遡り、間違え……。

これを何度も何度も繰り返し返していた。

そして、一応は漸く数え終えた如月だが、その顔には不安そうな色があった。

(人数……これで合ってるのか?)

もしかしたら数え間違いをしてるかもしれない。その時はそれで終わってしまうかもしれない。

それがどうしても不安な様だ。

(……ええい!!?間違ってたら素直に受けてやるさ!!?)

如月の心には不安がまだ残っているが、それを何とか押し退け、答えを提示した。

「俺が出会った人数は104人!!?子供達とかも入れた数だ!!?」

「……うん、人数は正解だよ」

未来のその言葉に如月は胸を撫で下ろすが、まだ終わっていない。今度は弾幕ごっこの数とお題の数、其々を言わなければいけないのだ。

これは同時進行で行っていたわけではない為、また数え直しである。

「えつとだな……」

「ゆっくり考えて大丈夫だよ」

未来からのその言葉に如月の焦っていた心は落ち着いていくの

だっ。

(俺はどれだけ焦ってるんだよ……全く。ゴール目前だからなんだろうがな)

自分のその焦り具合に苦笑する如月であった。

そして、焦らず慌てず、ちゃんと数え、もう一度数えを繰り返し、答えを出した。

「弾幕ごっこが16回、お題が53回。合計69だな」

如月の不安そうな顔から出された答えに、未来は笑顔を向けた。

「うん!!? 正解だよ!!?」

「ほっ」

如月は胸を撫で下ろした。

「おめでどう御座います!!? 如月さん!!?」

「ああ、本当に良かったよ……」

葵がまるで自分の事のように喜ぶその姿を見ながら、微笑を向けてそう言った如月。

「それじゃあ、次は俺からの弾幕ごっこだ」

「……何でだろうな? 何時もなら歩に対して寒気なんて感じないのに、今は思いつきり感じるんだが……」

「? 気の所為だと思っぞ?」

「だよなく、あはは……」

如月はそう言いながら、乾いた笑いをするのだった。

\*\*\*

如月の嫌な予感は的中していた。

今現在、如月の目の前には大量の弾幕が襲いかかってきていた。

これは歩のスペル『人は誰しも永遠の旅人』の効果である。

最初、釣竿を自分ごと超高速で振り回し、限界まで力を溜め、溜まったと同時に激流の様な弾幕を打ち出してきたのだ。

如月はその弾幕を避け、避けきれないものは剣で斬り裂き、スキマを作る為に弾幕で撃ち落したりとしながら何とか凌いだ。

その弾幕が全て消えると、如月は安心からの溜息を吐く。

しかし、これはまだ一枚目。まだ一枚あるのだ。

「如月!!? まだ終わってないよ!!?」

「あ……」

「果たしてお前はこれを凌げるか? スペル!!?」

歩はそう言うのと、スペルの宣言をした。

自身にとつて、もつとも最強ともとれるスペルを。

『無限道理』!!?」

その宣言の後、歩はクラウドニングスタートの体制を取る。その状態の歩からは、何故かエンジン音が聞こえているが。

そして、そのまま「スタート!!?」と、未来の声が出たかと思えば、歩はその声と同時に本当にスタートした。

しかし、この言い方ではまるで徒競走でもすると思えるが、しかし、如月が見ているのはそれらが『お遊び』にも思えるものだった。

「……ッ!!?」

如月は歩がスタートした瞬間が『見えなかった』。

クラウドニングスタートの姿をした所まで見えたが、未来の声と同時に姿が見えなくなってしまった。

と、同時に自分にダメージが加えられる。

此処までできれば誰でも分かる。

今、自分は、『目で追えないスピードで走っている』歩にダメージを与えられたのだと。

「くっ!!?」

如月は何とか後ろへと後退しようとしたが……、

「がっ!!?」

その背後から攻撃を受けてしまい、飛ばされる。

「ぐっ!!?」

かと思えば、その前方から攻撃され、また飛ばされる。

如月は直ぐに立ち上がろうとするが、また攻撃を受ける。

「……ッ」

今の如月は、意識がブラックアウトしてもおかしくない状態にある。

しかし、このスペルはまだ続く。

如月が警戒しているからか、如月から少し離れた距離で、その周りを走り続けているのか、攻撃をしなくなった。

(どうする? 相手は俺じゃ目視も出来ないスピードで走っている。気を抜けば何時、何処からでも攻撃が出来るほどのスピードだ)

人が目視出来ないということは、今現在の歩のスピードは音速か高速に近いスピードという事になる。

現実の物で例えるなら、『新幹線』だろうか。それぐらい、もしくはそれ以上に速いのだ。

(……目に見えないなら)

如月は其処で目を瞑ってしまった。

それを見た歩は一段と警戒レベルを上げた。

(……何をやる気なんだ? 如月)

歩はそう考えながらも如月に近付き、攻撃を与えようとする。

……が、何故かそれは防がれてしまった。

「え!?」

「目で終えないなら……お前が出すスピードの所為で起こる『風』や『音』で判断すれば良いだけだ!!」

「!?」

新幹線が自分の目の前を通る時に起こる『風』。どれだけ速くとも、それは確実に起こってしまう。

『音』もた同じだ。

如月はそれで来る場所を推測し、判断し、今は歩からの蹴りを天羽々斬で防いだのだ。

「!!」

その後、如月が作った弾幕が歩に当たり、歩はそのまま吹き飛ばされてしまった。

「はあ、はあ、漸く……一撃を与えられた……」

如月はそう言いながら歩を見据えた。

逆に歩はと言うと、もう既に立ち上がっていた。

普通なら人間には出せないスピード出したなら当然、息切れをする所かぶつ倒れたまま起き上がらないぐらいに疲れる所だが、そこは歩

の能力、歩は疲れていないようだった。

「あはは……風って……」

「まあ、風じゃなくとも他に判断材料はあったがな。例えば気配とか」

「如月は人外だよな」

「お前もな」

そんな言葉を交わした後、歩はまた目視出来ないスピードで走り出した。

其処からは如月は歩からの攻撃を度々防ぎ始めた。

攻撃される方向が分かるとはいえ、所詮は人間の身である。目視出来ない人間からの攻撃を連続で防ぐ事は出来ない。

防いでは当たり、防いでは当たりの繰り返しである。

その後、スペルの制限時間が来たように歩は走るのを止め、如月の方を見てみれば、如月はボロボロながらも何とか立っていた。

「はあ……はあ……」

「如月、これで俺はもうスペルを使えない。けど、弾幕ごっこは終わってない!!?」

「あはは……やっぱり疲れないんだな……」

「当たり前さ。それが俺の能力だからな」

歩はそう言って笑みを浮かべた。

「……それじゃあ、悪いがさっさと終わらせてもらおう!!? 肉体強化『神雷』!!? 龍剣『焰』!!?」

「そう簡単にやられつもりはないぞ!!?」

如月はそう言いなが剣に焰を纏わせ、肉体強化もした状態で歩との距離を縮める。

歩はそれを避けたが、如月が地面に手を向け、土の剣を創り出し、それを歩に向けて投げ付けた。

歩はそれを左の方へと移動し避けたが、如月はそれを予測していた様で、もう既に歩でも避けきれない場所に居た。

如月にとっての間合いだ。

そのまま如月は剣で攻撃し、歩はそのまま倒れ伏してしまった。

\*\*\*

「痛た……」

「大丈夫ですか？お二人とも、直ぐに治療しますから」

葵はそう言つて、先ずは一番酷い状態の如月を治した。

「凄いな……一瞬で痛みも、傷口も無くなった……」

「体力も回復は出来るには出来るのですが、それは霊夢に止められて  
いまして……」

「当たり前でしょ？アレはあなたの体力及び精神力を相手に明け渡し  
てるんでしょ？傷口とか治してるだけで霊力を擦り減らさてる状態  
で、そんな事をさせるわけないでしょ」

「あの、私の体力は直ぐに能力で回復されますから問題はないかと  
……」

「問題大アリよ!!？あんたが無茶して倒れたら、その周りの私達がど  
んな気持ちか、考えてみなさいよ!!？」

「ご、ごめんね？」

「謝るなら最初からしようとしないの!!？」

如月はそんな二人の姿を見てみると、微笑ましく思えてきた。

「……二人は本当に仲が良いんだな」

「それはそうだよ」

と、其処に歩が近付いて来た。

「……さっきまで倒れてなかったか？」

「疲れてるわけじゃないからな。というか、俺は疲れとは無縁だし」

「それもそうだったな。……それで、さっきの話はどういう事なんだ  
？」

「霊夢から聞いたんだけど、葵とは幼い頃からの友達なんだってさ。  
幼い頃から毎日此処で遊んでたらしいよ」

「へえ、だから『親友』なんだな……」

「……如月、気付いてるだろうけど、霊夢からは『弾幕ごっこ』が出さ  
れる。それも、何時もと同じルールのね」

「……枚数制限無しのか」

「そう。レティシアさんはその時には、如月に供給し続けていた霊力  
及び神力のパイプを切るとも言っていた。つまりは、最後の最後で本

当に全力を出さないといけない。俺は如月の事も応援してるから、頑張れよ」

歩はそう言うと、如月の肩に手を置いた。

「あ、それから、如月」

「ん？」

と、歩は如月に笑顔を向けて言った。

「如月、俺と友達になってくれるか？」

「……」

その言葉を聞いた如月はポカーンとした顔を見せた。

「え？」

「いや、その声を上げたいのは寧ろ俺だからな？それって、つまり……今まで俺達は『友達』じゃなかったと？」

「え？……あつ」

「つまり、『友達』と思ってたのは俺だけだったのか……結構なシヨツクだぞ……」

「あ、い、いや。俺も友達だと思ってたけどさ、如月がどう思ってるのか分からなかったから……」

「ああ、そういう事か……」

如月はそう言うと、その場で立ち上がって、歩の手を取った。

「それじゃあ、改めて……『友達』になるよ、歩」

「!!?ああ!!?よろしくな!!?」

如月からのその言葉を聞いた歩は、嬉しそうな笑顔を浮かべるのだった。

\*\*\*

葵と霊夢の話も終わってから、次に萃香がお題を出してきた。

「私からのお題はね、『飲み比べ』さ!!?」

それを聞いた如月は直ぐに凜華を呼んだ。

「なんじゃ?お主はやらんのか?如月」

「俺は今から霊夢達との弾幕ごっこだ。なのに、それをする前に酔うなんて駄目だろ?」

「成る程の。分かったのじゃ。こっちは任せるのじゃ!!?その代わ

り、負けることは許さんぞ？！良いな？！

「ああ、勿論だ!!？」

それを言うと、凜華は萃香の方に近寄り、如月は葵と霊夢の方に近寄った。

「……歩から説明は聞いたかしら？」

「ああ、聞いたよ」

「それでは、よろしくお願いしますね、如月さん」

葵は悲しそうな顔をした。

知り合いと戦う様な事はしたくないようだ。

「……葵、気にしなくて良い」

「……ですが」

「これはあくまで『遊び』だ。それなのに、気にしてたら楽しめないだろう？」

如月はそう言って、安心させる為に笑顔を見せると、葵は少し思案したのち、笑みを浮かべて頷いたのだった。

\*\*\*

最初は霊夢と如月が弾幕を撃ち合い続けていたが、それは平行線を辿っていた。

「罅が明かないわね……仕方ないわね、私からやってあげるわよ!!？  
スペル!!？」

と、霊夢はそう言くと、スペルを宣言した。

「夢符『封魔陣』!!？」

すると、霊夢から撃たれた数個のお札型の弾幕が途中から枝分かれし、弾幕それぞれ交差しながら、如月を襲う。

如月はそんな中でも弾幕を撃ち、当てようとするが、それはお札型の弾幕に当たり、相殺される。

それを見て取ると、取り敢えずスペルの制限時間一杯まで避ける事に専念する事とした。

そして、スペルが終わると同時に、

「肉体強化『神雷』!!？ 龍剣『紫電』!!？」

スペルを宣言し、そのまま霊夢に一撃を入れるために近付いた。



如月は葵の弱点を知っている。

雷を怖い葵なら、この状態の時にも手を出せない。

そんな考えを持っていたのだ。

しかし、それは葵の事を何も分かっていない証だ。

「結果『三重結界』!!?」

「!?」

如月の攻撃は、霊夢と如月の間に入ってきた葵によって防がれてしまった。

「な!?」

「霊夢!!?」

「分かってる!!?」

「ツ!!?」

如月はその場から咄嗟に後退してみると、霊夢から封魔針で攻撃されそうになっていた。

「……葵、雷が怖くないのか?」

如月は葵に素朴な疑問を聞いてみると、葵はその疑問に答えた。

「いえ、如月さんの言う通り、今でも怖いです。それは確かです。けれど、私には私の『務め』があります。

自分が怖いからと言うだけで仕事を放棄する程に、私は無責任ではありません!!?」

葵が如月に向けてそう言った。

「……そうだったな。葵はそう言う奴だったな」

如月は自分の中の最低な考えを捨て去った。

(さて、それならどうするべきか……)

しかし、これで少し手が無くなってしまった。

如月もよく分かっているし、霊夢も分かっていることだが、戦いにおいて『補助』という役割を担う者ほど厄介なものはない。

実際、補助がいる霊夢は攻撃する事だけに集中する事が出来るのだから。

次の一手を考えながらも如月は弾幕を撃ち始めた。

霊夢と葵はその弾幕から避ける事を選択し、今現在、避け続けてい

る。

「……スペル」

と、其処で良い手を思い付いたのか弾幕を撃つのを辞め、宣言をした如月。

それによつて二人も身構えている。

「偽装『グングニル』!!?」

如月はそう宣言すると、右手にグングニルを持ち、霊夢に向かって投げ付けた。

「結界『二重結界』!!?」

勿論、葵は霊夢を守る為にスペルを宣言したが、その時には既に如月は霊夢の後ろにいた。

「え!!?」

「!!?」

「『桜舞連斬』!!?」

そう宣言し、霊夢を攻撃しようとした……が、

「結界『反射結界』!!?」

「な!!?」

葵がまた宣言し、霊夢の背後に一枚の結界が如月の連撃を受け止める。

そして、全てを受け止めると、それが全て如月に返ってきた。

それも、威力もそのままにである。

「うっ……」

如月は呻きながら地面に一度倒れ、また立ち上がった。

「はあ……はあ……」

「ふう、危なかつた。有難う、葵」

「いえ、御礼は良いですよ。それにしても、危なかつたですね……霊夢」

「まあ、葵が守ってくれることは分かっていたから、不安は無かつたけどね」

「私が守れない時もある事は分かってく下さいね?」

霊夢の言葉に苦笑しながらそう言う葵。

二人には今の所、ダメージは無い。

(今の……『カウンター』?)

如月はそう答えを出した。

如月も、葵が持つてるスペルを全て把握しているわけでもない。

このスペルも、今日初めて見たスペルである。

「……ちよつと、気を付けないとな」

如月はそう言つて剣を構えた……が、

「呪術『鬼呪封印』!!?」

その宣言が聞こえたかと思えば、お札が如月の体を締め付け、動けなくされてしまった。

「ッ!??」

「すみません、まだ攻撃されるようでしたので、動きを封じさせて頂きました」

「くっ!!?」

如月がそこから抜け出そうと必死になるが、どうしても抜け出せない。

この状態ではスペルも使えない……と、考えていると、葵の隣にいた霊夢がスペルを宣言した。

「本当はラストスペルだけど……今までの頑張りに敬意を評して使つてあげる!!? 『夢想天生』!!?」

すると、虹色の弾幕がそのまま如月を襲った。

勿論、今現在身動きが取れなくなっている如月は避ける事は出来ない。

剣で斬り裂こうとしても、そもそも手を動かす事が出来ない程に強く締め付けられているので到底無理である。

結局、如月はそのままダイレクトに当たってしまった。

\*\*\*

如月が目を覚ましてみれば、周りが一面紅い部屋だった。

「……此処は……紅魔館か?」

「そうですね、此処は紅魔館です」

「え……」

如月は、此処には住んでいないはずの者の声が聞こえ、顔を其方に向けた。

そこにいたのは、水を持っていた葵だった。

「……えっと、何で俺こうなったんだ？」

「霊夢からの『夢想天生』を諸に受けたからだとは思いますが、そのまま気絶したので……此処に」

「いや、それなら神社の方で休ませてくれても良かったんじゃないか？」

如月からの疑問は最もで、勿論、葵もそれに答えた。

「いえ、この紅魔館のお庭の方で、今回の宴会をする様ですよ？それを聞いて霊夢が『此処で休ませた如月も楽が出来る』って言って、私達もそれに賛成して、此処に連れてきました」

「そうか……有難うな」

如月からの御礼を葵は「気絶させてしまったのは私達の方ですから」と言って、受け取らなかつたら。

「如月さん、お水飲みますか？一応、喉が渴いてるかと思つて持ってきたのですが……」

「あ、有難う。頂くな」

如月はそう言って水を貰い、喉を潤した。

「はあく。なんか、水を美味しく感じたのは初めてかもしれない」

「お疲れ様です」

葵からの労いの言葉が胸に響く如月であった。

\*\*\*

如月はそのまま葵と共に宴会が開かれているという庭に来てみれば、今回の持久走に参加した人達だけに収まらず、参加していない者達もいた。

「あ、夜だったのか……」

「私達が弾幕ごっこした頃には既に夕方になりかけの時でしたね」

「そう言えばそうだったな」

と、そんな話をしていると、近付いてくる者の気配を感じ、顔を向けてみると、沙月と夏希がいた。

「二人とも、何で此処に?」

「レテイシアさんから『宴会をするから来る?』とお誘いを受けましたので……」

「それに、如月様にも会いたかったからね!!?」

夏希はそう言うのと、如月にイキナリ抱き着いた。

「うわつと」

「夏希!!? 如月様は先程起床されたばかりですよ!!?」

「ごめんなさい、如月様」

「いや、怒ってないから大丈夫だ」

如月は二人とそう話しながらも、後ろにいた葵を見てみると、もうその場に葵は居なかった。

「……此処にいたのか、如月」

と、其処にカロードがやって来た。

「どうやら如月を探していたようである。」

「カロード、俺に何か用があるのか?」

「時給を頑張ったお前へのプレゼントだ」

「プレゼント?」

そう言われ、カロードから貰ったものを見れば、それは持久走の時に描いていた如月の絵だった。

「!!?これ、あの時に描いてた……もう完成したのか!??早いな」

「これは……とても上手いですね」

「芸術品に入るほどだよ!!?」

と、如月が見ていた絵を、隣から沙月と夏希が覗き込んできた。

「それにしても、本当に上手いよな……カロードの絵」

そうやってカロードの絵を見続けていると、また近付いてくる者の気配を感じ、右方向に顔を向ければ、夢幸が魔理沙と共に近付いて来ていた。

「夢幸じゃないか、どうした?」

「……まあ、あの喰龍の使い手なのだから、やり遂げて当然だな」

「うぐつ」

「だが、音を上げなかったのは褒めるに値するな」

「なあ？これ俺は褒められてるのか？」

「ちやんと褒めてるんだぜ!!？ただ、ちよつと恥ずかしいからつてぶつきら棒な言い方になってるがな」

「そうなのか……ありがとう、夢幸」

「ふん」

夢幸は照れたのかは分からないが、直ぐに場所を移動していった。カロードもまた、居なくなっていたが。

\*\*\*

如月達がいる場所から離れ、葵はある場所に来ていた。

それは、レティシアから『用があるから来るように』と指定された場所である。

その周りには木が生えており、紅魔館とはそれなりに近い場所である。

葵がレティシアがするのを待っていると、足音が聞こえてきた。

その音の方向に顔を向けてみると……、

「……え、り、霖之助さん？何故此処に？」

「え？あ、あ、葵!!？え、だって、レティシアさんから……」

「……嵌められましたね、私達」

「……その様だね」

二人はそう言いながら笑みを浮かべた。

……が、しかし、

「……／／／／」

二人きりだと知れば、純粋な二人は顔を紅くして、俯いてしまった。

「……あ、葵／／／／」

「は、はい!!？」

葵は霖之助からイキナリ名前を呼ばれ、驚きながらも霖之助の方に顔を向けてみれば、霖之助が顔を紅くした状態ながらも真剣な顔をして見ている。

「……」

葵はそれを見ると、霖之助の方に体ごと向いた。

「……その、葵。ぼ、僕は……」

「……」

「僕は……葵の事が……」

『好きなんだ』

霖之助からの告白を聞くと、葵は顔を紅くした。

葵自身は霖之助の気持ちが分かっていて。

そして、自分も同じ気持ちである事も分かっていて。

しかし、少しの恐怖もあったのだ。

『こんな自分と霖之助が釣り合うのか？』

そう思っていたからこそ、自分から告白しようとしなかった。

それは、やはり恐怖から言葉が出てこなかったからだ。

分かっているも今まで見て見ぬ振りをしてきた葵。

しかし、もうこれでは見て見ぬ振りなど出来はしない。

「……霖之助さん」

「……」

「……わ、私も……霖之助さんの事が……す、好きです……／＼／＼」

「!!？」

葵からの告白を聞いた霖之助は、つい葵を抱きしめてしまった。

「!!？」、霖之助さん……あ、あの……／＼／＼」

「葵……これからも、宜しくね」

「はい、勿論」

二人はお互い顔を紅くした状態で、しかも抱き合いながらそう言うのだった。

そして、その光景を一部始終見ていたものが一人。

「クスクス、これでよしね♪」

レティシアは小さな声でそう言うと、一人紅魔館の庭の方へと戻るのだった。

\*\*\*

葵が霖之助と会った頃。

「それにしても、一度戻ったのにまたお呼ばれしちやったね、ミコちゃん」

「そうだな」

そう話しながら用意されたワインを飲む二人。

「ああ、あの!!?」

「?マリア、どうした?」

流石に大人数の為、能力の制限していたミコトは、しかし自分に近付いてきたマリアの『命』を感じ取っていた為、驚きはなかった。

「そ、その、わわ、ワインのお代わりを持ってきましようか?あの、その、もう、無いみたいですから……」

マリアはそう言いながらワイングラスを見た。

「いや、だが……」

「……」

「……頼む」

「!!?はい!!?」

マリアは嬉しそうな笑顔を向けると、ワインを取りに行った。

「あれ?ミコちゃん、珍しいね。どうしたの?」

「……お前は断れるのか?泣きそうな顔をしている相手を」

「うん、ごめん無理だね」

大事な時なら竜希も断るのだろうが、そんな時じゃないなら断れないのだ。

そんな話をしている二人にワインを持って走って近付いてくるマリア。

すると、何も無い所でマリアは何故か転けてしまい、ワインは丁度二人の方に放り投げられてしまった。

「よつと」

竜希はそう言いながら、放り投げられて来たワインをキャッチした。

「うう」

「大丈夫か?」

「え?」

声が聞こえた為、顔を上げてみると、ミコトがマリアに手を差し出していた。

「立てるか?」



それも見たマリアはデジャブを感じた。

(あれ？私……昔にもこんな事があったのかな？)

マリアは『能力』を狼に封じられている影響から記憶も無くしている状態にある。

記憶を失う前のマリアの頃に、確かに一度、これと似た様な光景に会った。

それは、自分を裏切った男の子からの行動だが。

「マリア？」

「!!？あ、はい、ありがとうございます」

マリアは少し考え事をしていた所為で、ミコトの存在を少し忘れていた。

そして、ミコトの手を借り、立ち上がると、お礼を言った。

「その、ありがとうございます」

「いや、お礼は言わなくて大丈夫だ」

「それから、竜希さんも」

「どう致しまして」

竜希はいつも通り笑いながら返すと、マリアはクスリと笑った。

「あ、ワインをお入れしますね」

「あれ？さつき迄の吃りは？」

「竜希」

「もう大丈夫ですよ……どうぞ」

「ありがとう」

「此処のメイドですから当然ですよ」

マリアは笑みを浮かべながらそう言うと、今度は竜希のグラスにもワインを入れ、次の場所へと向かって行った。

「……」

「ねえ？あんたがミコト？」

「そうだが」

次にミコトに声を掛けてきたのはこの幻想郷に住んでいる霊夢だった。

その霊夢はミコトの顔に自分の顔をイキナリ近付けてきた。

ちよつとでも動けば唇と唇が当たってしまうほどに。

「なっ!!?」

「……」

そんな状態から数分経つと、霊夢は顔を離した。

「ふくん、成る程ね。確かにル力たちが言った通り、雰囲気似てるわね。それに、何となく分かるわね、そっちの私の考えも」

「??」

「まあ、私は私だし、彼方の私とは違うから別に良いけどね」

ミコトは今自分の目の前にいる霊夢が何の事を言っているのか全く分かっておらず、頭にハテナマークが幾つも乗っていた。

「あ、あんたは気にしなくて良いわよ。まあ、別の所で気にした方が良  
いけど」

霊夢はそう言いながらミコトの反応を伺った。

「?何の事だ?」

しかし、全く分かっていなかった。

「……はあく、これは彼方の私も大変ね」

「でしよ?」

「??」

この場において置いてけぼり状態のミコトにおいて、霊夢と竜希は少し話した。

その後、霊夢はそのまま離れ、その場に二人は残されてしまったのだった。

\*\*\*

それから暫くして、霖之助と共に戻ってきた葵はというと……、

「葵く!!?良かったじゃない!!?」

「あの、霊夢?自分の事のように嬉しがってくれるのは本当にうれしいのですが……お酒臭いです」

霊夢に抱き着かれていた。

しかも、若干酔っている

「お前が此処の葵の相手の霖之助か」

「?君は?」

霖之助は急に隣から話しかけられ、顔を向けてみると帝がいた。

「俺は帝だ。別の幻想郷に住んでるんだ」

「そうか……それにしても、さっきの言い方は……」

「お？察しが良いな。そういう事だ。だから、俺から言わせてもらおうが、葵を大切にしろよ？良いな？」

「ああ、勿論だよ」

霖之助がそう言った後、二人は葵達から離れ、何故か葵の好きな所は何処かと言う話に発展していった。

そして、霊夢と共にその場に残された葵はと言うと、龍に誘われ、歌を歌うこととなった。

龍とプリズムリバー三姉妹が演奏し、葵が歌った。

その曲は、その場にいたもの全てを魅了する歌となった。

因みに、葵の機嫌もあつてか、今回は二曲だった。

\*\*\*

「クスクス、ペス」

「レテイシア様、何でしょう？」

レテイシアはペスにある事を頼む為に、話し掛けた。

その頼み事を聞くと、ペスは了承し、全員に上を向く様に大声を上げた。

それと同時にレテイシアはスキマを開いた。

それは、ミコト達の世界から霊夢と妖夢が。

帝の世界からは葵が呼ばれた。

この三人は最初こそ混乱していたが、霊夢は紫の仕業かと思いを顔上げてみれば、自分の想い人が直ぐ隣に居たことに驚き、顔を紅くした。

レテイシアはそれを見ると、クスツと笑い、その場を離れた。

その離れた場所では、ペスの能力により、流星群を見る大量の人達が居たのだった。

\*\*\*

レテイシアは一人、紅魔館から離れた場所にある木に登り、その枝に座って、ワインを飲みながらその流星群を見ていた。

「……それで？さつきからこんなに綺麗な流星群も見ずに私を見続けている貴方は誰かしら？」

と、其処でレティシアは自分にずっと視線を送り続けていた者に声を掛けた。

そして、その者はレティシアが座っている木の下に現れた。

体全体に鎖を巻きつけている男は今まで会った事のない人物ではあったが、しかし、レティシアはその能力により知っている。

「クスクス、『天界』から来た人が何の用かしら？」

レティシアはいつも通りクスクスと笑いながら問いかけると、相手はそれに返してきた。

「……お前がレティシアか？」

「クスクス、そうよ？茜の友人さん」

「……聞いたのか？茜から」

「クスクス、まさか。聞いたことすらないわ♪」

「……本当か？」

「クスクス、信じて欲しいわね♪」

「どうにも胡散臭いんだ」

「クスクス♪」

レティシアは天人からそう言われても全く動揺しておらず、いつも通りの雰囲気だった。

……しかし、その空気は一変する事となる。

「……それで？私達に『異変』が始まってる事を伝えに来たんでしょうけど、それはもう知ってるわよ」

「……」

イキナリ雰囲気が変化したことに普通の者なら驚くが、その男は驚かなかった。

「……知っていながら放っているのか？」

「放っているというのは少し語弊があるわね。それがまだ顕著に出ないから、全員動こうとしないだけよ」

「お前が伝えることも出来るだろう」

「そうね、出来るわね。けど、それでは駄目。何時だって『異変』とい

うのは退屈な時を生きている『妖怪』達にとつての大切な時。それを奪うと、この幻想郷は崩壊しかけるわ。それは、貴方も望む所ではないでしょう?」

「……」

「この幻想郷では、人よりも妖怪の方が数が多いのよ?妖怪が一度暴れれば、幻想郷は崩壊する。だから、私達はそれを止めたりしない。

……実際、私達も退屈な時を生きてるわけだからね」

「……」

「まあ、今現在、貴方の友人である茜がちゃんと調べてくれるから安心なさい。それに、流石にまぶしくなったらちゃんと『博麗の巫女』と『神無月の巫女』を駆り出すわ。まあ、あの二人が動かなかつたら、その時は私が動くけれど。……今回はそれ程に大きな異変だからね」

「……」

「……貴方に一つ言っておくわ」

と、此処でまたレイシアは雰囲気を変えた。

それはさつき迄の真面目な雰囲気から、とても重い……殺気に。

「……」

「貴方も分かっている通り、もうすぐ起こるは幻想郷が崩壊するかもしれない異変。だから悪いけれど、場合によっては……貴方達天人全てを滅ぼしてでも私は止めるわよ?」

「……」

「この意思は私だけが持つてるわけじゃないわ。紫も、そして鬼灯も持つてる意思よ。」

『幻想郷を壊そうとするものに容赦は無し』

これが私達の意思。分かったわね?」

最後にレイシアは天人を殺意の籠った瞳で睨み付けた。

しかし、男はそれに怯まず、自分に着けていた鎖を少し外した状態で言い返してきた。

鎖を外した影響なのか、覇気を持ちながら。

「……そうなつたら、俺達はお前達の敵になる。勝つ事は到底不可能だろうが、それでも死なせたくない奴がいるんだ。だから、その時は

俺は俺なりの仁義を通させてもらう」

「……」

「それでも俺はお前達に彼奴を止めて欲しいんだ。弟の為にも……だから、頼む」

「……そう」

その一言だけを言うと、レティシアは雰囲気を元に戻した。

「クスクス、まあ、今は大丈夫だから存分に楽しみましょう♪茜の友人さん♪」

レティシアのその言葉は届いてはいたのだろうが、相手はどうやら堅物だった様で、去って行ってしまった。

「クスクス、残念ね♪」

レティシアは然程残念そう見えない状態でそう言うと、また何処か真剣顔をして、呟いた。

「なら、貴方達は私と戦う事になるわね。加減はしてあげましょう。けれど、結果がどうなるかは貴方達次第よ」

その後、雰囲気に戻してまた夜空を見上げた。

その夜空には未だに流れ星が流れていた。

## 第四百四十四話

持久走から数日後の事。

レティシアは鬼灯と将棋をする為に神無月神社へと訪れた。

石段を全て登り切ると、想起が境内を掃除していた。

「クスクス、あら？ 葬がしてるんじゃないかなかったのね」

「あ、レティシアさん。そうですよ？ だって、僕達が此処でする事は何時もローテーションだからね」

「クスクス、じゃあ、今日は葬は何処なのかしら？」

「葬なら今日はルカと一緒に畑仕事だよ。人里の人と和解したとはいえ、長年の習慣はそう簡単には無くならないって言って……」

「クスクス、つまりは意外と楽しいから辞めないって？」

「そういう事です」

想起からその説明を聞いた後、そのまま鬼灯の居場所を聞き、川が流れている方へと向かっていった。

\*\*\*

鬼灯と合流し、将棋を勝負を五戦した。

この五戦の勝者はレティシアだが。

そうして、もう一勝負しようとした時に、慣れた気配を感じ取った。

「……はあ、あの鴉か」

「クスクス、そんなに毛嫌いする程に嫌なの？ あの鴉が」

「焼き鳥にして焼いたら美味しいのだろうか？」

「クスクス、鴉は不味いと思うけど、味付け次第かしら？」

レティシアと鬼灯がそんな物騒な話をしながら境内の方へと向かってみると、葵と文が丁度何かを話していた。

その近くには小唄は居ない様だったが。

「えっと、そんな妖怪は聞いたことが無いのですが……」

「ですが、実際に居るのですよ、これが……ですから、少し気になりますよとして確認に来たのですよ」

二人が何の話をしているかは全く分からないが、鬼灯は変な入れ知恵でもされていると思ったようで、割って入っていった。

「おい鴉。貴様、葵に変な入れ知恵をしているわけではなからうな?」  
鬼灯は黒い笑みを文に向けると、文は鬼灯の顔を見ると、震え始めてしまった。

「あ、あややく! 鬼灯さんではないですか! 変な入れ知恵ですか? 私は清く正しい射命丸文ですよ? そんな事、する訳が……」

「クスクス、此処にルカが居なくてよかったわね。そんな嘘、あの子の前で吐いたら今頃氷鴉の出来上がりだったわよ♪」

「き、吸血鬼の賢者!?」

「クスクス♪」

レティシアはとても楽しそうな笑みを浮かべ、クスクスと笑っている。

「え? う、嘘……?」

「クスクス、其処の鴉の記憶を『見透かして』見たけど、

貴女、『紙舞』という妖怪がいるって吹き込まれてたのでしょうか?」

「ふ、吹き込まれるって……まあ、確かにそう聞いていましたが……」

「クスクス、悪いけどそんな妖怪は居ないわよ」

「いえ、分かってはいたのですが……可能性が無きにしも非ずでしたので……」

「クスクス、こんな詐欺鴉は無視が一番よ♪」

「詐欺鴉って何ですか?」

「クスクス、貴女にピッタリのあだ名だと思うけれど♪」

「不名誉です!!?」

文からの批判の声など何処吹く風で受け流すレティシア。

「クスクス、貴女、これで葵が慌てたら新聞のネタにするつもりだったのではありませんか?」

「まあ……けれど、その目論見も初めから潰えてましたけど」

「クスクス、そうね♪ 良かったわね、葵が『定期読者』で」

「私は読まなくて良いとも言ってるんだがな……」

「え? だって、文さんの新聞はとても面白いですよ?」

「あ、葵さん!!?」

文は少し涙目になっていた。



レテイシアはそれを見ると、次に桜を咲かせるための準備に入っている木に座っているイタズラ妖精三人組が居る方に視線を向けた。

そして、鬼灯の能力を作り、テレパシーを送った。

「クスクス、残念だったわね♪ 葵はそう簡単には怖がらないようよ♪」

「「(?!?)」」

レテイシアはその三妖精の反応に少し満足すると、その三妖精に告げた。

「クスクス、この鴉を連れて博麗神社に行きなさい。彼処ならこの鴉の新聞を全く読んでないでしょうから、怖がらしいがあるわよ。この鴉の提案も絶対に成功するわ。まあ、成功しなかったら次は私も手伝ってあげるわ♪だから、頑張りなさい♪」

レテイシアはそう伝えると、視線を文に戻した。

「クスクス、それで？ 結局は彼処にいる三妖精と手を組んで葵を怖がらせ様としていたようだけど、残念ね♪」

「え?!?」

「むく、今度はどんな手を使いましょうか？」

「何かしてみる。焼き鳥にするぞ」

「クスクス、その時はこの鴉の彼氏が黙ってないでしょうから一緒に焼き鳥にしてあげて頂戴ね♪」

「いや、私は流石に無闇な殺生は……」

「クスクス、分かっているわよ♪ 唯の冗談だから」

「冗談の加減を考えろ」

「クスクス、まあ、兎も角何方にしろその時は、この鴉は焼き鳥決定ねを鴉って美味しいのかしら？」

「えー……?!?」

そんな事を話しながらも、結局は三妖精は文と共に博麗神社の方へと向かって行った。

その日は少し鬼灯と談笑すると、レテイシアは帰って行った。

後日、文々。新聞には、博麗の巫女が慌てて新聞を読んでいる姿が載ったとか。

## 緋想天

### 第四百四十五話

冬が終わり、春が訪れ、そして去り、今現在の幻想郷は水無月の後半。初夏である。

そんなある日の博麗神社では、葵達が霊夢と何かを話していた。

「はあ？博麗神社が倒壊？」

「うん。予知夢を見た時に此処が地震で倒壊してたから間違いないよ」

「ふくん、それは厄介ね。間違えば幻想郷が崩壊するわ」

「でも、葵は全て見たわけじゃないんだろう？」

「丁度その場にいた魔理沙が葵にそう聞いてみれば、葵もそれに頷いて返した。」

「そうだね。私も全部見たわけじゃなくて、所々だったよ」

「それだとまだ起こってないってことだろ？早慶過ぎないか？」

「魔理沙、これが早慶な訳がないだろう。タイミングを間違えば幻想郷が壊れる可能性が高い。お前はその時、責任を負えるのか？」

「うぐっ」

「外に出てしまえば、力の弱い妖怪達は消えてしまうだろう。力の強い妖怪でさえ、もしかしたら自分の存在を保たせることで精一杯になっってしまう可能性がある」

「魔理沙の場合は、魔法が使えなくなったりか？」

「そうだな、その可能性も……」

「そんなの嫌だぜ!!？霊夢!!？今直ぐ解決に動くぞ!!？」

魔理沙のその言葉を聞いた霊夢は流石に真剣な顔をして頷いた。

「そうね。けど、今はまだ準備が整ってないわ。早くて明日、遅くても明後日にしましょう」

「そうだね、それならまだ異変も起こらないと思うよ」

葵のちよつと不穏を混ぜたような言葉の後、歩と想起がお茶と冷えた西瓜を持って戻ってきた。

「はい、お茶を持って来たよ。それから西瓜も」

「ねえねえ！何だったらこれで西瓜割りしようよ!!?」

「西瓜割りってアレ？目隠した状態で西瓜を割る遊び」

「そうそう!!?なんか夏って感じがするでしょ?」

「まあ、一応は初夏って言えば初夏だけど……まあいいわ。やりましょうか」

「私が一番最初にやってやるぜ!!?」

「此処でやる前提はやめて!!?せめて外で……」

「よっしゃ、やるぜー!!?」

「魔理沙は話を聞いてよ!!?」

「はあ……」

「あんた達は本当に息がピッタリよね」

「誰が此奴と」

「否定出来ない材料を増やしながら否定しないでよ」

霊夢からの冷静のツツコミを受けた後、お互い少し見合い、外へと出て行くのだった。

\*\*\*

その翌日。

「よっしゃ！準備万端だよな?」

「ええ、勿論。準備万端、妖怪が出たなら確実に倒せるわ」

「妖怪が出ても、害が無いなら攻撃は止めた方が……」

「そう言えば、萃香は何処に行ったんだ?」

鬼灯からのそんな疑問に霊夢は首を傾げた。

「さあ?昨日、あんた達と話した辺りから居なくなってたけど……」

「居なくなってたけどって、それはちよつと無責任な……」

「彼奴は犬じゃないんだから自由に動くのは当たり前でしょ?一々何処行く、何するって聞いてたらキリがないわよ」

「その例えはちよつと酷い気もするけど、的を得てる気もするなく」

歩が若干、苦笑気味でそう言った。

「で……何であんた達まで居るわけ?早苗?龍?」

霊夢がジト目で想起の隣に居る早苗と、鬼灯の近くに居る龍を見

た。

その早苗はと言うと、少し胸を張って答えた。

「だって、私はあなた達と同業者である巫女ですから!!? 異変解決をお手伝いするのは当然!!?そして、そんな合間に信仰をして貰うために宣伝する為に!!?」

「というか、誰よ。この馬鹿に教えた奴は」

「馬鹿とは何ですか馬鹿とは」

「あ、それは僕だよ」

霊夢からの質問に手を少し上げて答えた。

「早苗に前から頼まれてたんだよ。『異変があった時は教えて欲しい』って」

「まあ、異変の前兆らしいものも出てない異変だがな」

「せめて出てるのは葵の『予知夢』だけだな」

「葵さんの能力は流石ですね!!?」

「そ、そうですか?」

早苗から褒められた葵は少し反応に困る様子を見せた。

「というか、それを許したわけ? 鬼灯」

「ん? どういう事だ? 霊夢」

鬼灯は霊夢が言いたい事が伝わっていなかったようで、首を傾げて聞き返した。

「だーかーら!!? 想起は葵の神社で居候してる身でしょう? それってつまり、あんたを信仰してるって事じゃないの?」

「ああ、そういう事か……」

鬼灯はそれを聞くと、少しちゃんと返答を返した。

「別に構わないさ。そもそも、どの神を信仰するかは人間次第だ。私達が強要するものではない。まあ、信仰しなかった所に神は恩恵は与えないがな。だが、私はそんな事をするつもりもないし、想起がどうするかは想起次第さ」

鬼灯はそう言うと、少し木の方を見た。

「? どうしました? 鬼灯」

「……いや、何でもない。気にするな」

鬼灯はそう言うと、今度は龍の方をチラッと見て視線を戻した。

「……龍は、その様子だと鬼灯が教えたのね」

「まあ、そう取ってもらって構わないさ」

「龍、よろしくな」

と、霊夢と鬼灯が話してるのを他所に、歩は龍に手を差し出して握手を求めた。

「うん、よろしくね。歩君」

龍もそう言うと、手を差し出し握手した。

そんな風に一度顔合わせをすると、イマイチ先が分からない状態での異変解決に乗り出していった。

## 第四百四十六話

紅魔館・第図書館内。

レティシアは其処で紅茶を飲みながらいつも通り読書をしていた。そのレティシアから離れた場所では、夢幸がシユロムと魔法の研究をしている。

霊夢達が異変解決に出ていることに気付いていない訳ではない。葵なら異変の予知を見て、それを霊夢に伝える事ぐらい既に見通していた。

だから、今の所は全て予想通りなのである。

(それでも、予知と少しでも違う事をすれば、もしかしたら異変の流れは変わってしまうかもしれない……)

レティシアはそんな事を考えながらその場を立ち上がり、本を直してから図書館を出て行った。

(未来はとても不安定。いつ何処で先が変わるかは誰にも分からない。私はしようと思えば幾らでも出来るけれど、この姿ではそんな事も出来ない)

そう考えながらレティシアは歩き、一度自室まで赴いた。

(だから……)

「もしかしたら、博麗神社の倒壊も、免れる事なく起こるかもしれないわね。ヴラド」

レティシアは写真の中にいるヴラドを見ながらそう呟いた。

\*\*\*

霊夢達が一番最初に向かっているのは紅魔館である。

「それにしても、何故紅魔館のですか？」

「ほら、パチュリーなら簡単でしょ？倒壊ぐらい」

「まあ、魔法次第だとは思いますが……」

「それは早計すぎる気が……」

葵と歩がそんな事を言っていると、何故か急に雨が降り出した。

「あら？さつきまで雨が降るような天気じゃなかった気が……」

「……どうやら、此処だけの様だな。見ろ」

「え？」

鬼灯の言葉を受け、後ろを振り向いて見ると、

「え……」

「キチンと綺麗に天気が分かれてるね」

先程までいた場所は未だに晴れており、今現在の霊夢達の場所には雨が降っている。

一歩でも戻れば直ぐに晴れた場所に戻れるぐらいにキチンと分かれていた。

「……これは、どんな魔法使いでも出来ないような気が……」

「パチュリーでもこれは無理だと思うぜ？」

魔理沙からの言葉により、霊夢は考え始めた。

「あと紅魔館で有力なのは、何でも願いが叶えられる『ユニ』と、何でも出来てしまう『レティシア』ぐらいかしら？」

「シユロムさんもやろうと思えば出来るとは思いますが、それだと代償が必要なので候補外ですからね……」

「それから、今のレティシアにもこれは無理だ。これが出来る時はせめて始祖の姿の時だけだ。だが、強大な妖力は感じないだろ？」

「そうね。となると、残った『ユニ』ね」

「決定事項なのですか？」

「まあ、ちよつと話を聞きに行く程度だけどね」

葵が苦笑しながら聞くと、霊夢は肩を竦めながら返した。

そして、一行が進もうとした時、霧の湖からあのチルノがやって来た。

「やいお前ら!!?サイキョーのアタイと勝負しろ!!?」

「さあ、こんな奴無視して行くわよ」

霊夢の言葉に全員チルノを素通りすることに決めた。

葵一人は罪悪感を持ち、済まなそうな顔をしながらだが。

しかし、それで終わるチルノではない。

「お前ら!!?サイキョーのアタイが怖いんだね?だから逃げるんだろ!!?」

「違うっての。一々妖精に構ってやるほど、私達は暇じゃないのよ。」

分かった？」

「全く、怖いなら怖いって言えば良いんだよ!!？」

「って、話なんか聞いてないし」

霊夢が少し溜息を吐くとお札を取り出し、それを針に変え、投げ付けた。

「封魔針」

すると、チルノはそれに気付かず、当たってしまった。

どうやら、自分が最強だと証明されたと勘違いしたままだった様で、無い胸を張った状態で当たっていた。

「あの、流石にアレは不意打ちでは……」

「不意打ち上等。だってアレは弾幕ごっこじゃなかったもの。それに、今は異変解決が先決なんだから」

霊夢はそれだけ言うと、紅魔館の方に向かって行った。

「れ、霊夢さん、性格変わりました？」

「いんや？単に進む道を邪魔されてイラつときたんだろ」

「俺もそう思うよ」

魔理沙と龍からの言葉を受け、早苗は納得したようだった。

\*\*\*

紅魔館の門まで来てみると、其処には傘を挿している状態の美鈴が居た。

「美鈴さん、こんにちは。入らせていただいても宜しいでしょうか？」

「あ、葵さんこんにちは!!？ええ、どうぞどうぞ!!？」

美鈴は快く入らせてくれて、そのまま紅魔館に入ると、イキナリタオルを投げ付けられた。

「そんなずぶ濡れの状態で入るな。せつかく掃除した床が汚れるだろう」

「これは仕方ないでしょ？」

「仕方ないからタオルを投げたんだろ」

「一応、お客様なだけど？」

「レミリア様は招待してない」

狼は全員にタオルを渡すと、そのまま大きな（狼にも見える）犬に



なり、何処かへと行ってしまった。

「彼奴、アレで何で執事なんて出来てるのかしらね？」

「レティシアから以前聞いたが、普通に執事としての仕事は熟しているらしいぞ？ただ、お客じゃない相手で、それが顔見知りならあの対応の様だな」

「いや、変えた方が良い気がするがな」

ルカのその言葉に、頷く者が多数居た。

と、そこにユニがやって来た。

「ん？アレ？どうしたの？こんな雨の中、しかもずぶ濡れの状態で」

「あんたに用があつて来たのよ」

「私に？」

霊夢が理由を話すと、ユニは驚いた顔をした。

「え？マジで？レティシア様が居るから食料調達しに人里まで行かなくて済んでるから知らなかったよ……雨がこれだけ降ってるの、此処だけなんだ……」

ユニはそう言うと、感心した様に「へ〜」と言った。

「それで？これはあんたがやったわけ？まあ、やってないんでしょうけど」

「うん、やってないよ」

「え？あの、何でやってないと断言出来るんですか？」

早苗からの質問に心底面倒臭そうな顔をして返す霊夢。

「あのね、彼奴は今、『雨がこれだけ降ってるの、此処だけなんだ……』って言ったのよ？それって知らなかったって事じゃないの」

「それは嘘を吐いている可能性も……」

「それなら、何でルカは氷柱を彼奴に投げ付けなかったわけ？」

「え？」

早苗は霊夢からのその言葉に驚いた様子を見せ、ルカの顔を見た。

その様子にルカも気付き、頭を傾げた。

「早苗には私の能力の事を話してなかったか？」

「今初めて聞きましたよ!!？」

「そうか、遅れたがそう言うことだ」

早苗はそれを聞くと、頭を抱えた。

そんな早苗を励ますかの様に背中を摩る想起であった。

「まあ、つまりはそういう事よ。ルカが一番嫌っているのは『嘘』だからね。まあ、嫌っている筈なのに本人も時々吐くけど」

「私は確かに嘘を嫌っているが、誰かを傷付ける様な嘘じゃない限り攻撃したりしないさ」

ルカはそう言うと、ユニの方に顔を戻した。

そして、霊夢は溜息を吐いた。

「はあ、此処に犯人は居ないってことね。じゃあ、次に行きましようか」

霊夢のその声で紅魔館から出ようとする一向の背中から声が掛けられた。

「クスクス、それなら、私達も連れて行ってもらえないかしら？」

「!?？」

「……レティシア」

早苗以外の全員は驚きの表情も見せずにレティシアの方に顔を向けた。

どうやら、もう慣れた様だ。

「クスクス、まあ、私だけじゃないけれどね」

「自分も付いて行きます」

レティシアの直ぐ側には光冥も居た。

「……あれ？あのメイドは？」

霊夢はその場に咲夜がいない事言うと、レティシアは笑いながら答えた。

「クスクス、咲夜は別の事を調査中よ。光冥にもそっちの方の手伝いで良いって言ったのだけれど……」

「レティシア様一人で行かせるわけにはいきません」

「こうだからね」

レティシアは肩を竦める様子を見せながらそう言った。

と、何かの視線を感じた様でその視線の方に顔を向けてみれば、龍が居た。

「クスクス、あら？どうしたのかしら？龍」

「……いや、何でもないよ、レティシアさん」

「クスクス、そう♪」

レティシアのその何時も通りな様子を見て、少し安心した様な様子を見せる龍。

しかし、直ぐに鬼灯が小声で、龍にだけ聞こえるぐらいの声で言った。

「龍、忘れてるわけではないだろうが、彼奴は『演技』が得意だ。惑わされるなよ」

それを聞くと、先程の安心を消した龍。

レティシアはその様子に気付いたのか、はまたま気付いてないのか分からないが、全く動揺した様子を見せずに霊夢達の元に近付いた。

「クスクス、さあ、行きましようか♪」

レティシアはそう言いながら全員分の傘を創り、それを渡した。

それを素直に受け取ってから霊夢達は頷き、紅魔館から出て行ったのだった。

## 第四百四十七話

霊夢達が次に向かっていているのは冥界だった。

「冥界って……大丈夫なんですか？」

「何がよ？」

早苗の不安そうな声に霊夢が訝しみながら聞き返した。

「で、ですから、死んだりしないのですか？」

「それなら私達は既に此処には居ないわよ」

「特に私がな!!？」

霊夢の言葉の後に、何故か胸を張りながら言った魔理沙。

その少し後ろでは葵が苦笑している。

そこからまた後ろでは……、

「……」

「クスクス、何かしら？龍」

龍がレティシアの事を見続けていた。

レティシアは相変わらず笑っているが。

「……レティシアさん、俺に何か隠してませんか？」

「クスクス、隠すも何も、もう全部鬼灯から聞いてるんでしよう？隠す

ことは言う前に全て暴露てるじゃない」

「……そうだけど」

龍が少し不機嫌そうな顔をするが、それさえもレティシアは気にしていないようだった。

「クスクス、大丈夫よ。凜華に喰われるとしてもそれは最終手段。貴方は手を出さなくて良いわ」

「だけど」「これは私が決めたこと。龍が口を出して良いわけじゃないわ」……」

龍がまだ言おうとしたが、レティシアは頑固な様で、言葉を被せてその先を言わせないようにした。

「……レティシアさんは、怖くないの？」

「クスクス、何かかしら？」

「死ぬ事だよ」

龍のその言葉に対して、レテイシアは唯々笑う。

「クスクス、私は自分が死ぬ事には何の思いもないわ」

「……周りが悲しみますよ。俺とか、レテイシアさんの親友である鬼灯さんとか、レミリアとか」

「クスクス、そうね。でも、私の考えは変わらない。だって、それは私が死なない様にすれば良いもの。それに、私にとって一番怖いことは死ぬ事じゃないの」

「？」

龍はよく分かっているように首を傾げた。

それに対してレテイシアは、真剣な顔で答えた。

「私にとつての怖い事は、私が私の大切な者達を傷付けること、大切な者達を殺す事。それと比べれば自分が死ぬのなんて怖くないのよ」

レテイシアはそう言うのと、少し飛ぶスピードを上げて龍よりも先に行った。

「……俺は、貴女を失いたくない。だから、俺が貴女を守ります」

龍のその言葉が聞こえたのは、レテイシアと鬼灯だけだった。

\*\*\*

冥界へと着いてみれば、寒気がした。

「うう、怖いです……」

「早苗？大丈夫？」

想起が震えている早苗に声を掛けると、早苗は無理してますと分かるような笑顔を向けた。

「だ、大丈夫ですよ」

「いや、大丈夫じゃないよね？」

早苗のその言葉を聞くと、苦笑してから早苗の隣に移動し、手を繋いだ。

「え？」

「こうしてれば、少しは安心出来るかな？」つと思つて……駄目だった？

想起が首を傾げてそう聞くと、早苗は顔を紅くしながらも首を横に振った。

「そっか、良かった。あ、葵達が先に行っちゃったから僕達も急ごう!!」

想起はそう言うってから早苗の手を引き、葵達と合流した。

早苗は終始、顔を紅くした状態だったが、想起はその様子に気付いていなかった。

\*\*\*

葵達は白玉楼の屋敷前で妖夢と永久に会った。

「あれ?どうしました?」

「どうしました?じゃないのよ。今、現世が異変中だからその調査中よ」

「此処には異変の兆候は無いようですね」

「?どんな異変で……ハッ!!?幽霊の数が減る異変ですか!?!」

「妖夢、それは確実に此処だけだ」

妖夢の言葉に的確にツッコむ永久。

そして、妖夢の言葉を聞いて眉を寄せた霊夢。

「幽霊の数が?」

「はい、そうなのです。此処の幽霊達の数が減ってて……」

「成仏とか?」

「幽霊が現世に留まってるならそれも分かりますが、此処で成仏は違う気が……」

葵は苦笑しながらそう言った。

しかし、霊夢にはそれは聞こえていない。

「まあ、兎も角それも私達がついでに調べておいてあげるわ」

「本当ですか?有難うございます。何時も手が離せる訳ではないので……」

「クスクス、それから、妖夢。咲夜が此処に来なかったかしら?」

レティシアからのその質問に妖夢は肯定した。

「はい、仰る通り来ましたよ。けれど、私達を少し見てから早々に帰って行きましたが……」

「クスクス、そう」

「咲夜が此処に……」

「彼奴は本当に何を調べてるわけ？」

霊夢はレティシアにそう聞くと、レティシアは秘密と言って先を言わなかった。

そして霊夢達は妖夢達に挨拶をしてから冥界から出て行った。

「……霊夢さんのあの言葉では信用なりません。やはり、調べましょう!!? 永久!!?」

「そうだな。なら、幽々子様に許可を貰いに行くぞ」

「はい!!?」

妖夢と永久もまた、異変解決に動き出したのだった。

## 第四百四十八話

次にやって来たのは魔法の森。

「そういえば、魔理沙」

「ん？なんだぜ？」

「此処で天気変わったりしないわけ？」

霊夢からの質問に対して、魔理沙は笑顔を浮かべて答えた。

「いんや、変わるぜ？」

その言葉に、おもわずため息を吐いた霊夢。

「……じゃあ、なんで紅魔館の天気に驚いてたのよ」

「彼処で漸く気付いたんだ。仕方ないだろ？」

「結構、重大な事をあんたは見逃したのよ!!」

「れ、霊夢、落ち着いて……」

魔理沙に対して怒る霊夢を宥めに入った葵。

「それで？どんな天気変わるんだ？」

話が進まないと思っただのか、鬼灯がそう質問した。

「あく、雨だ」

「服が湿るじゃない」

「洗濯物が乾せないね」

「霊夢も葵も、感想がずれてるよ……」

二人の感想に苦笑を漏らす歩。

そこから少し経つと、雨が降り始めた。

「あら、本当に降り始めたわね」

「嘘は言っていないぜ」

「でも、これは雨と言うよりも……」

「ああ、霧雨だな」

葵の言葉に続くように、ルカが言った。

「クスクス、魔理沙の first nameと同じ天気ね♪」

「ネイティブで言わなくても……」

レティシアの言葉にそんな言葉で返す想起。

「ふあーすとねいむ？」



「つまりは苗字ってことだよ」

霊夢は首を傾げて繰り返すと、歩が教えた。

「そういえば、夢幸さんは家に居るの？魔理沙」

葵が魔理沙にそう聞くと、魔理沙は首を横に振って否定した。

「いや、夢幸は私達とは別視点から調べてる。何か分かるかもしれないからな」

魔理沙はどこか誇らしげにそう言った。

「夢幸なら紅魔館の図書館でシユロムと何かしてましたよ？」

「クスクス、もしかしたら、調べてる最中だったのかもしれないわね」  
レティシアは夢幸がシユロムと一緒にしているのを知っていてし  
らばくれている。

理由は無いが、しらばくれている。

「あと、此処に住んでいる人は……」

「アリスとカロードだな」

「よし、行こう」

早苗からの質問に魔理沙が答え、龍が進む合図を出すと、皆アリス  
の家へと向かって行った。

\*\*\*

アリスの家の前。

其処には今から丁度出掛けようとしていた。

「あ、待ってーアリス!!」

葵の声はちゃんと届いたようで、アリスは葵達の方に顔を向けた。

カロードもまた、顔を向けた。

「あら？葵、この雹が降りしきる中、どうしたの？」

「は？雹？」

霊夢が「何を言ってるの？」と問いかけようとした時、頭に何か  
当たった。

「痛っ!？」

「ほらね？」

「霊夢、大丈夫か!？」

「霊夢、大丈夫……」

歩が最初に霊夢に近寄り、葵も遅れはしたが近づこうとし、止めた。  
何故なら……、

「霊夢、本当に大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ」

「そうか、良かった……」

「歩も葵みたいに関心ね」

「それは、霊夢の事が大事だから……」

「え……／＼／＼」

「あ……／＼／＼」

良い雰囲気だからである。

「……彼処は放って、話し合いをしましょうか」

「そうだな」

「クスクス、初々しいわね」

「レティシアさん、楽しんでますね」

「クスクス、何時見ても恋愛は良いものね」  
「わ〜♪」  
二人の後ろでは、そんな会話がなされていた。

\*\*\*

「……で？何で雷が降ってるのよ」

少ししてから何時も通りに戻った霊夢がアリスにそう問い掛けてみるが、アリスは「分からない」と答えた。

「カロードはどうだ？」

「俺も同じだ」

「ふむ……」

鬼灯が前足を顎に当てて考える。

思い当たる節があったが、それは無いだと否定した。

「あ、そうそう霊夢」

「？何よ」

「貴女の神社は無事なの？」

「無事って何が？」

「だから、地震で倒壊したりしてないの？」

アリスのその言葉に、眉間に皺を寄せた霊夢。

しかし、アリスでは出来ない事はちやんと分かっており、カロードもしてないと直感し、疑うのを辞めた。

「で、何でそんな事聞くのよ」

「上の雲を見なさい」

アリスに促され、全員上に顔を向けてみると、緋色の雲が見えた。

「緋色の雲……」

「アレがなんだって言うのよ」

霊夢がそう言うのと、アリスは説明を始めた。

「この大粒の雹とあの緋色の雲はね、地震の前兆を知らせるものなのよ」

「神社は快晴だったわよ?」

「そういえば、私達の神社では蒼天でしたね」

「私一人になると、何故かダイヤモンドダストが起こってたがな」

「何でそれを言わないのよ!!」

霊夢が勢いよく葵とルカの方に顔を向けた。

「その、伝え忘れてました……」

「聞かれなかったからな」

二人の全く逆の答えに思わず溜息を吐いた霊夢。

と、そんな時にイキナリ天気が雹から風雨に変わり、其処に文が焦った様子でやって来た。

「あら?文、どうしたのよ。風雨まで一緒に連れて来て」

霊夢のそんな言葉など、今の文は気にしていられないようで、イキナリ霊夢に詰め寄った。

「霊夢さん!大変なんです!!」

「な、何がよ?」

文の気迫に押されながらも聞き返した霊夢に文は伝えた。

「私の鴉からの情報ですが、神社が倒壊、したそうです」

その言葉を聞いた霊夢達は、その場に文だけを残して博麗神社へと戻って行った。

## 第四百四十九話

博麗神社はものの見事に倒壊していた。

屋根が落ちており、住居としての機能は無くなっていた。その変わり果てた姿の神社を見た霊夢は呆然としていた。

「……」

「あくあ、こりや住めないな」

「やっぱり、私の予想は当たったわね」

「あの……何でそんなに呑気なんですか？」

葵は魔理沙とアリスの様子を見て苦笑した。

「…そういえば、アリスは『地震が起こる』と言ってたよな？」

「ええ、そうね。そう言ったわ」

「…うちとノアは大丈夫なのか？」

「「!」」

ルカの不安を煽るその言葉に葵、鬼灯、想起の顔はみるみる青くなっていく。

「れ、霊夢……その、あの……」

葵は一度家の様子を見に行くために霊夢に承諾してもらおうとしたが、しかし霊夢の様子を見ると、言いにくいようだ。

しかし、葵が何を言いたいのかを直ぐに理解した霊夢は、頷いた。

それを見た葵はルカ達と共に一度戻って行った。

そして、その場では、

「霊夢……」

「……」

「俺も建て直すの手伝うから。それに、こんな事した元凶にも立て直させたら良いよ」

「……それもそうね」

と、そんな会話が霊夢と歩の間にあっただのは、その場にいた者には分からない。

\*\*\*

結果から言うと、神無月神社は倒壊していなかった。

何処にも可笑しな点もなかった。

そう、『なかった』のだ。

博麗神社が倒壊するほどの地震でありながら、何一つ倒れてもおらず、壊れてもいなかった。

神社から出た時のままである。

「……これは、どういう事なのでしょう?」

「地震があったのなら、此処も倒壊しているか、または箆筒などが倒れている筈なのだが……」

「何時も通り……だね」

安心よりも訝しむ葵達。

しかし、一人何かを探すルカ。

「ルカ、ノアはいた?」

「いや、それが何処にも……」

と、言葉にした時、何処かから猫の鳴き声が聞こえてきた。

「!ノア!?何処だ!」

「ルカ!!台所からだよ!!」

「分かった!!」

直ぐに台所に向かってみると、其処には魚を銜えたノアが居た。

そのノアはルカ達の様子を見て首を傾げた。

まるで、『何でそんなに慌てるの?』と言っているように。

「……よ、良かった。居た……」

ルカは安心した様子を見せると、ノアに近付き、その頭を優しく撫でた。

ノアはそれが気持ち良かった様で喉を鳴らしている。

「……お前が無事で良かったよ」

ルカは葵にも良く向ける笑顔をノアにも向けたのだった。

\*\*\*

葵達が博麗神社に戻って来てみると、その場に二人ほど増えている。た。

一人は、紫の式である茜。

もう一人は、体全体に鎖を巻きつけている男だった。

しかし、その男は何故か地面に頭をつけて霊夢に土下座をしていたが。

「ん？あら、お帰り、葵」

「あの……これは一体、どんな状況なんですか？」

葵が若干混乱していると、その鎖を巻きつけた男は葵の方に顔を向けた。

そして、その男は葵にも土下座した。

「頼む!!あの馬鹿を止めてくれ!!」

「え？」

更に混乱する事となった葵だった。

\*\*\*

混乱が収まったのを確認した茜はその鎖の男を先に紹介した。

「此奴は『東雲 不知火』。天人であり我の友だ」

「よろしく頼む」

「初めまして。神無月葵と申します」

不知火の挨拶を聞くと頭を下げて自分の紹介をした葵。

「それで？あんたがうちの神社を倒壊させたわけ？」

「いや、違う。此処を倒壊させたのは俺の知り合いの馬鹿だ」

『比那名居 天子』という天人。其奴がこの地震を起こした張本人だ

「へ〜。で？其奴は何処に居るわけ？」

「あの、霊夢？その……怖いです」

葵は霊夢の怒気を含んだ笑みに怯えるが、其れに対して配慮出来るほどに今の霊夢の心中は穏やかではない。

そんな霊夢の様子など気にせず、茜は上空を指差した。

「あの緋色の雲を突き進めば元凶の元に辿りつく筈だ」

「分かったわ」

霊夢はそれを聞きさっそく行こうとしたが、龍が「そういえば……」  
と言い、葵に顔を向け、質問した。

「なあ？葵の神社は平気だったのか？」

「倒壊してませんでした。それに、箆笥とかも倒れてませんでしたか

ら、地震があつたのは此処だけの様です」

「え？・そうなの？」

それを聞いた霊夢もまた驚きの顔を見せた。

「はい。だって、私たちが話していた時でさえ、揺れを感じなかったんですよ？なのに、博麗神社だけ倒壊している。つまりは此処だけ揺れたって事ですよね？」

それに対して頷いたのは不知火だった。

「ああ、恐らくは試し打ちだろう。そして、次に来るのは大地震だ」

「試し打ちで倒壊させられたのは腹立つけど、幻想郷の平和を崩そうとするのも許す訳にはいかないわ。急ぎましよう!!」

霊夢のその合図と共に上空の雲へと向かい始めた霊夢達。

……対して、其処に残った一人もいた。

「……一つ、聞くわよ」

「……何だ？」

「もしその娘が危なくなったら、貴方は間に入っても強制的に止めようとするのかしら？」

レティシアからの質問に、不知火は否定した。

「いや、彼奴は一度痛い目を見た方がいい。だが、俺の弟は違うがな」

「……そう、分かったわ」

レティシアはそれを聞くと、霊夢達の後を追って行った。

その少し後に不知火も行き、その場には茜一人が残されたのだった。

## 第百五十話

雲の中を進むこと約八分、広い場所に出た為、目的地に着いたのかと辺りを見渡そうとすると……、

「きゃあああああああああ!?!」

と叫ぶ葵の声が聞こえてきた。

「葵!?!どうしたの……!?!」

霊夢は直ぐに葵の方に顔を向けると、其処には耳を塞ぎ、目を瞑つて、座り込んでしまっている葵がいた。

「……あく、これは」

「アレだな」

「アレですね」

「アレだぜ」

「アレか〜」

「クスクス、アレね♪」

霊夢から始まり、ルカ、早苗、魔理沙、歩、レティシアが続けて言った。

アリスとカロード、龍も分かっている様で苦笑していた。

その場で唯一何のことか知らなかった光冥は呆然としていた。

「え?あの、レティシア様?葵さんは一体……」

「クスクス、葵はね、雷が怖いのよ♪」

「ああ、成る程……」

光冥は隣にいたレティシアに聞いて、其処で漸く納得がいった。と、そんな一向より離れた場所で、何かが光っていた。

一向（葵を除く）はその方向に目を向けて見れば、咲夜と妖夢が共闘して相手を倒している所が見えた。

その人が誰なのか唯一分かった不知火は直ぐに駆け寄り、抱き上げた。

その抱き上げられた人は、衣を羽織った女性だった。

「う……し、不知火?ど、どうして此処に……」

「あの馬鹿を懲らしめてもらうために博麗の巫女と神無月の巫女を連



れてきたんだ」

「あれ？私達はついでか？」

「……ついでかもね」

「クスクス、それは流石に無いから安心なさい♪」

魔理沙とアリスがそんな会話をしていたため、それを止めるようにレティシアが言った。

「で？あんた達二人は何で此奴と弾幕ごっこしてたのよ。あと、葵もいい加減耳から手を放しなさい」

霊夢はそう言うと、葵の手を無理矢理外そうとした。

「!?無理無理無理無理!!」

しかし、葵はその体からどうやって出しているのかも分からない強い力で抵抗した。

その所為で霊夢は悪戦苦闘。結局、大丈夫だと説得し、何とか耳から手を退けさせ、目を開かせ、立たせ（ただし霊夢の片腕をホールドしている）、話しを聞ける体勢にさせた。

「霊夢……貴女、そんな事もする時があるのね」

「こうでもしないと話が進まないじゃない。それで？なんであんた達は其奴と弾幕ごっこしてたのよ」

「この人が『此処から先は人間が入っていない場所じゃない』とか言うから……」

「私はてつきりこの人が犯人なのだ……」

「だから止めただろ、妖夢」

と、此処ですつと黙っていた永久が口を開いた。

「うつ……」

「まあ、今後気を付ければいいだろう」

永久はそう言うと妖夢の頭を撫でた。

撫でられている妖夢は少し顔が紅いが。

「と、兎も角、其処の傷付いている人を治しても、良いですか？」

葵は二人のその空気を壊してしまった事に対しての罪悪感と、傷付いている人の心配が混ざった顔をしてそう言った。

その申し出に頷いて返した不知火だった。

く少女治癒中く

「すみません、治して頂き有難う御座います」

「いえ、御礼は要りませんよ。私は自分のやるべき事をしただけです  
ので。お怪我も治って良かったです」

「元気になったその女性は直ぐに葵に礼を言うが、葵はやはりと言う  
べきか素直に御礼を受け取らなかった。」

「それで? あんた誰よ」

「霊夢がそう聞くと、その女性も頭を下げて答えた。」

「私は『永江 衣玖』と申します。どうぞよろしくお願いします」

「そう、私は霊夢よ」

「葵と申します。よろしくお願いします」

「ルカだ」

「鬼灯だ」

「想起と言います」

「早苗と言います!!」

「こんにちは! 俺は歩、よろしくな!!」

「咲夜よ」

「光冥と言います」

「妖夢です」

「……永久だ、よろしく頼む」

「アリスよ」

「……カロードだ、よろしくな」

「龍だよ、よろしくね」

「クスクス、レティシアよ♪」

「全員が自己紹介を終えると、霊夢は咲夜と妖夢達に顔を向けた。」

「次に、あんた達は何の目的で此処にいるのよ」

「霊夢、貴女は自分から出てる緋色の霧に気付いてないの?」

「は? 何の事よ」

「葵は?」

「一応は……何なのかは分かっています」

「何で言ってくれなかったのよ」

「一番重大な事は伝えました。それに、何なのか分かってもしないのに不安を煽る様な事をしたくなかったので……」

「不安になった事なんて少ないけどね……で？あんた達は幽霊の事を調べてるわけ？」

「あ、覚えてたのですね。はい、そうです。その調べている途中で紫様と会いまして……」

「……紫に？」

「……ああ。それで幽霊……気質を追って此処まで来た」

「気質……つまり、私達の天気がばらばらだったのも、私達の気質の所為？」

「でも、そんな事をする理由は一体……」

「……まもなく、幻想郷は目覚めます」

「?」

「目覚める？」

「はい。まもなく幻想郷を大地震が襲います」

「!？」

「……それを起こすのが元凶、で良いのよね？」

「はい」

「それは困るわね」

「幽霊を減らした後はに増やすなんて許しません!!」

「さっさ行くわよ!!」

『はい（おう・勿論・よ）!!』

霊夢の言葉の後、不知火と衣玖だけをその場に残して行くのだった。

そしてその場に残された不知火と衣玖。

「……あの方を止めれますかね？」

「大丈夫だろう。……俺達も一休みしてから向かうぞ」

「……私は大丈夫です」

「駄目だ。……心配なんだ」

「……分かりました。なら、一休みしてからにしましょう」

二人はそんな会話をしていた。

\*\*\*

雲を突き抜けると、其処には何故か地面があった。

「……え、天に地面？」

「そこは気にしなくても良いんじゃないかしら？」

「それよりも、元凶は一体どこに……」

霊夢がそう言いながら周りを見渡す。

すると……。

『天にして大地を制し、地にして要を除き……』

そんな声がかから聞こえてきた。

そして、この後に決め台詞を言いながら現れる筈の所で……レティシアが上空に遠慮無用に弾幕の嵐を浴びせた。

『ぐへっ!?!』

そんなうめき声をあげながら天から落ち、着地に失敗した人は、青髪のロングヘアーに紅い目、頭の帽子に桃の実と葉が付いた物を被っている女性だった。

「あの……大丈夫ですか？」

葵は相手を心配するが、相手は「平気よ」と言葉にしてから立ち上がった。

「あんたが『比那名居 天子』？」

「ええ、そうよ」

「どうして霊夢の神社を倒壊させたのですか？」

葵がそう聞いてみると、天子は嬉しそうに笑みを浮かべながら言った。

「私ね、天界の生活に飽き飽きしてたの。でも、地上では中々に面白いことしてるじゃない。だから、私もそれに参加したくて、起こしちゃった♪異変」

それを聞いて青筋を額に浮かべる霊夢。

「あんた、そんな理由で……」

「さあ、早く異変解決ごっこをしましょう!!私を楽しませてよ!!」

天子のその言葉を聞いた霊夢は葵に目を向けた。

「葵」

「分かっています。天子さんが私達を指名していますね」

「ええ……という事だから、あんた達に出番は無いから大人しくそこで見ていなさい」

霊夢のその言葉を聞いた魔理沙は一気に不機嫌な顔になった。

「なんだよ、私にもさせろよ」

「私は貴女じゃなくて、其処の異変解決の専門家を指名してるのよ」

魔理沙の言葉が聞こえていた様で、天子が魔理沙に向かってそう言った。

魔理沙はそれを聞くと、しゅしゅながら引き下がった。

「さあ、始めましょう!!異変解決ごっこ!!」

天子のその言葉によって弾幕ごっこが始まった。

## 第百五十一話

弾幕ごっこが始まったのは良いが、しかしずっと霊夢が撃ち続けているだけで天子は余裕そうな顔でずっと避け続けている。

「あんたも攻撃してきなさいよ!!?」

「嫌よ!!?まだまだ楽しみたいもの!!?」

「つまりあんたは私を簡単に倒せる自信があるってことね……?」

「私は天人よ?そう簡単に負けないわ!!?」

天子は余裕たつぷりな笑みを浮かべると、次の言葉を発した。

「それに、私なら貴女を簡単に倒してしまえるのだから余裕なのは仕方ないでしょう?」

これは天子なりの挑発で、普通はそんな挑発に乗ったりする事はないだろう。

しかし、霊夢は裏表がない性格。つまり、若干挑発に乗り易いタイプである。

まあ、言いたいことは……。

「何ですって?……私を怒らせた事、後悔しないですよ!!?」  
怒ったのである。額に怒りのマークを浮かばせ怒ったのである。

「れ、霊夢?アレは天子さんの挑発……」

葵が霊夢を少しでも落ち着かそうとそういうが、それは逆効果であつた。

「挑発出来る程に余裕なら、その余裕を無くしてやるわ!!?」

霊夢の怒りに油を注いだ結果に終わってしまった。

霊夢は弾幕を撃つのを止めると、スペルを宣言した。

「神霊『夢想封印』!!?」

「ええ!?!」

霊夢はイキナリ自分の得意技を使い、葵もそれには流石に驚いた。

そして、七色に光る弾幕を、天子は苦渋の色は浮かべず、楽しそうな笑みを浮かべながら避けていた。

「そうよ!!?これよこれ!!?私はこれをしたかったのよ!!?」

「なら、彼処のメイドと半霊が倒した衣玖とかいう奴とやんなさいよ

!!?」

「あれ？衣玖に会ったの？」

天子は霊夢の口から出た意外な人物の名前に少し驚いていた。

「というか、彼処の人間と半霊が、あの衣玖を……ね」

天子はそう言いながらチラツと何かを見定めるような目で咲夜と妖夢の方を見た。

しかし、直ぐに視線は前に戻された。

「嫌よ。衣玖とやろうとしても彼方が乗ってくれないんだもの」

「なら、あんたが異変主だつて教えてくれた不知火とかいうあんたと同じ天人にでも……」

「彼奴はもつとダメ。だつて、絶対断るもの。眼に見えてるわ。だからー、起こしたんじゃない、異変」

「だからつてうちの神社を倒壊させるな!!?」

霊夢がそう叫んだ後、今までよりも多くの弾幕が天子を襲ったが、しかし天子はとても簡単そうに隙間が空いてる場所にスルスル入り込み、華麗に避けるばかり。

その後、スペルの制限時間が来たため、弾幕は消滅した。

それを見ると、天子は次のスペルを見たいからなのか、また挑発してきた。

それも、今度は冗談にしてはタチの悪い冗談を。

「なら、其処の空色の髪の子の神社も壊してあげましょうか？」

「境界『二重弾幕結界』!!?」

霊夢は直ぐに二枚目のスペルを宣言した。

すると、結界が天子を覆い、その結界内で赤と白の弾幕が天子を襲う。

しかし天子はそれに焦らず、楽しそうな笑みをやはり浮かべたままで時間まで避け続けた。

そして弾幕が消えた後、天子は少しニヤニヤした顔で霊夢に問い掛けた。

「あら？きつっきの怒った時みたいに弾幕の量が多かったけど、そんなにその子が大切なのかしら？」

それに対して霊夢は少し深呼吸したあと、口に出した。

「……大切よ」

「霊夢？」

「私にとつて、葵は大切な存在なのよ」

「……それは、補助要員だから？」

天子が真面目な顔でそう聞くと、霊夢は首を振った。

「違う。幼い頃、お母さんから紹介された時はなんとも思ってたんだけど、会った時からずっと接し続けて、葵の優しさに触れて、気持ちが変わったの」

「……」

「お母さんが巫女を引退して、私が引き継いで、時間的には一人の方が長かったのかもしれないけど、それでも葵は殆ど毎日私の所に来てくれた。そのお陰で、寂しい想いを持つことは殆ど無かった。色々な世話もしてくれて、感謝の気持ちが強いけど、それよりも私にとっては葵は私の親友。私の気持ちをお母さんと同じ位察してくれる大切な親友なの!!？」

「霊夢……」

「だから……」

霊夢はそう言うのと、お祓い棒を天子に向けた。

「冗談だろうとその発言を、私は許す訳にはいかない!!？」

霊夢の言葉に天子は少し間を空けてから、笑みを浮かべた。

「ふくん、分かったわ。でも今は弾幕ごっこ中。私もちよつと心境が変わったし、良いわ。私のスペルを一つ見せてあげる」

天子はそう言うのと、スペルを宣言した。

「乾坤『荒々しくも母なる大地よ』」

すると天子の近くの近くの地面から注連縄がされた石が飛び出てきた。

「アレって……」

「要石ですね」

霊夢と葵がそんな言葉を交わしたのを見ると、天子は少しニヤツとしました。

それから要石を宙に投げ、自分も跳躍した後はその要石に乗った。



「☒」

二人の頭には疑問符が付いたが、しかし天子が説明などする訳もなく、要石と共に加速を付けて落ちて来た。

そして、二人とは違う場所に要石を打ち込むと、天子がいる場所以外の地面が持ち上がった。

当然、二人がいる場所もそうで、当たってしまった。

「うっ」

「っ……」

「ほら？そんな風に地面に横にならないの。次行くんだか、ら!!？」

その声と共にまた要石に乗って飛び上がった天子。

それを見ると、葵は霊夢と視線を交わした。

そして、葵はスペルを宣言した。

「未来『分読み』!!？」

これは本人が良い思いを持っていなかった能力、『未来と過去を見る程度の能力』を使用する為のスペルである。

未来を見る能力を持つ葵は、もし制限など無しで弾幕ごっこに参加すると、殆どの確率で勝ってしまう。

何故なら、当たらなくなってしまうからだ。

だからこそ、それをせずに、しかし能力を使う為に作られたスペルである。

このスペルの他にも未来を見るスペルは少なからずあるが、葵はこのスペルを選択した。

理由としては……二人はこのスペルの攻略法が分かったからとだけ言っておこう。

そして葵は能力が予知した『一分先』の未来を見た。

それから霊夢と視線だけ合わせると、霊夢と葵は別々に動いた。

葵は飛び上がり、霊夢は天子が落ちようとした場所に移動した。

それには流石に驚いた様子を浮かべる天子。

「え!!？」

そしてそのまま要石を打ち込むと、地面が持ち上げられた。

しかし、今度は霊夢にも葵にも当たっていない。

霊夢は天子のすぐ近くに居た為に、当たらなかったのだ。  
そうしてそのまま蹴りを入れた。

「ぐえっ!?」

天子はまるで蛙が潰れたような声を上げるが、しかし直ぐに要石に乗り、また宙に浮かんだ。

そして、思考する。

(彼奴、今私の着地点が分かったの? いや、あの巫女はそんな能力は持っていないしそんなスペルも持っていない筈。なら……あの空色の巫女が宣言したスペルの所為か)

天子はチラツと葵を見ると、葵は天子を見ていた。

お互い、相手の腹の探り合い状態だが、しかし天子はスペル発動中。直ぐに視線を外し、要石を落とした。

しかし、やはりと言うべきか霊夢には当たらず蹴られ、また打ち込むが当たらず攻撃されをスペルがブレイクされるまでの間続けられ、スペルが終わった瞬間、強い蹴りを腹に一発お見舞いされ、そのまま少し離れたところに飛ばされた。

「くっ!!」

もう天子に余裕の笑みは無かったが、しかし、楽しそうな笑みは相変わらず浮かんでいた。

そして、天子は起き上がり、もう一枚スペルを使おうとするが……。

「呪術『鬼呪封印』!!」

葵のスペルにより縛られてしまう。

「!?しまった!?」

天子は直ぐに脱出しようとするが、中々脱出出来ない。

そんな状態の天子にも容赦せず、霊夢はスペルを宣言した。

「宝具『陰陽鬼神玉』!!」

その宣言後、大きな陰陽玉が天子に向かって行き、当たった。

「痛っ!?とてつもなく痛いんだけど!?」

天子は少し涙目で訴えるが、しかし霊夢はそれを無視し、また陰陽玉を投げた。

それを数回繰り返すと投げるのを止めた。

そして、霊夢は天子に対して背中を向けた。  
その天子はと言うと、もう既に気を失って倒れていた。

\*\*\*

葵が天子の治療を始めて直ぐに、誰かが走って近づいて来た。  
それは歩達ではなく、見知らぬ人物。

不知火と顔立ちが似ており、しかし服はサンバイザーに袖を切り落とした上着を着ている男だった。

「天子!!?」

その男は葵を押し退け、天子の容態を確認した後、一度葵に頭を下げてから、後ろにいた霊夢達に顔を向けた。

「……天子にこんな事をしたのは、誰?」

その言葉からは覇気の様なものを感じられたが、霊夢は前に出て手を上げた。

「其奴をそんな風にしたのは私よ」

「……そっかー」

と、イキナリ口調がノンビリした感じの口調に変わったが、雰囲気は変わっておらず、ピリピリとした雰囲気だった。

「なら、君には僕とも闘ってもらおうかなー? 天子をこんな風にした事に対してのお返しをしないとねー」

それを聞いた霊夢は了承の返事をしようとしたが、しかし、霊夢の前に歩が出てきたことにより、それは遮られた。

「歩?」

「悪いけど、お前の相手は霊夢の代わりに俺がやる」

「君が?」

「ああ、そうだ」

すると、アリスの隣にいたカロードもまた前に出てきた。

「?カロード?」

「俺も参加しよう。全然動いてなかったからな」

「え、アリスは良いのか?」

歩はアリスの方に顔を向けると、アリスは頷いた。

「ええ、だって、カロードは負けないもの」

「……有難うな、アリス」

カロードはそう言うと、一度アリスの近くに行き、優しく撫でた。それに対してアリスは顔を紅くするも、しかし嬉しそうな顔で満喫していた。

そして、カロードが撫で終わり、また前に出てきたのを見てからその男は口を開いた。

「分かったよー、なら、君達が僕の相手だねー。それじゃあ、始めよつかー」

歩とカロードはそれを聞くと、霊夢達に被害が降り掛からないように離れようとした。

しかし、歩の袖を霊夢が引つ張ったことにより、歩だけは歩みを止めざるおえなくなった。

「？霊夢？どうしたんだ？」

歩は当然の疑問を霊夢に投げ掛けると、霊夢は目に心配そうな、しかし強い輝きを持った目で歩を見ながら言った。

「……絶対に、怪我しないこと。それから負けない事。良いわね？」

霊夢からのその言葉は、霊夢なりの応援。

それを分かっている歩は笑みを浮かべて、霊夢の抱き締めた。

「!?？」

「……大丈夫、俺は怪我もしないし、勝つよ。霊夢からの応援を貰ったんだからな」

「……約束よ」

「ああ」

歩は霊夢とのそんな会話を終わらせると、霊夢の頭を優しく撫でてからカロードの元へと向かって行った。

そして、カロードと共に男と対峙する。

「あ、そうだー。自己紹介はしとかないとねー。僕は『東雲 蜃気楼』だよー、よろしくねー!」

そして、歩とカロードも自己紹介を終えると、弾幕ごっこが始まった。

## 第百五十二話

カロードと歩は同じ方向からの攻撃はせず、カロードは蜃気楼の前から弾幕を、歩は蜃気楼の横からカロードよりも数が少ない弾幕で攻撃をしている。

しかし、蜃気楼に全く当たっていないなかった。

「カロード……」

「ああ、当たっていないな」

そんな二人に対して蜃気楼は……、

「天子にあんな事してくれた彼女の代わりに闘ってるんだよねー？  
なら、僕もそれ相応に闘わなとねー」

そう言うと、スペルの宣言をした。

「金星『ヴィーナスマメル』!!」

すると、カロードと歩の周りに金色の弾幕が取り囲んだ。

「!？」

「……スペル」

歩は驚いたが、しかしカロードは冷静にスペル宣言をした。

「白符『ホワイトペガサス』」

カロードは直ぐに手に持っていて鉛筆で魔法陣を弾幕の数分描き、それを飛ばした。

その飛ばされた魔法陣に当たった弾幕は凍り付いた。

しかし、歩の所まではどうにもならず、歩は弾幕に襲われそうになるが、

「山道『登頂下山ハイウェイ』!!」

上空に跳躍し、難を逃れた。

そして、蜃気楼の頭上からレーザー状の弾幕を飛ばした。

しかし、蜃気楼は余裕を持って後退した。

「そんなんじゃないよ〜?」

歩がカロードの近くに降り立つのを見た蜃気楼は、次のスペルを宣言をした。

「水星『マーキュリーマイル』!!」

すると、大きな水の球が二人を閉じ込めた。

「ああ、パチュリーの逆バージョンか」

「そうだな」

観戦している方から「なんでそんな呑気な会話してるの!?!」みたいな声があったが、しかし二人はそれを無視した。

そして、そのまま水の球体は破裂した。

「ぐっ!?!」

「二歩（カロード）!!」

後ろから二人を心配する声が聞こえてきた。

「だ、大丈夫だよ。霊夢」

「俺も大丈夫だ、アリス」

二人は霊夢とアリスに笑顔を向けると、すぐに戻し、蜃気楼の方に顔を向けた。

「緑符『グリーンゴーレム』」

カロードがそう宣言すると地面を緑色に染めた。

すると、歩とカロードは受けたダメージが回復した。

「回復出来るだ、なら……えっ!?!」

蜃気楼はスペルを宣言しようと手を動かし、カードを取ろうとしたが、腕が動かなかった。

試しに足を動かそうとしたが、しかし足も動かなかった。

「……君のスペルの効果?」

蜃気楼はカロードにそう聞くと、カロードは頷き、肯定した。

そして、その隙を逃す歩ではない。

「洞窟『ゲートリングトンネル』!!」

歩はそう宣言すると、釣竿を正面に構え、蜃気楼に突進していった。

そして、そのまま釣竿を突き刺した。

「うっ!!」

勿論、蜃気楼はその痛みから顔を顰めた。

その時に足も腕も動くようになり、蜃気楼は上空に飛び上がった。

「さして、もうそろそろお返ししないとね」

そして、蜃気楼は宣言した。

「地球『アース……』」

しかし、その宣言中に極太レーザーが飛んできて、蜃気楼を呑み込んだ。

「……は？」

これは普通に予想外な歩とカロードは驚きの声を上げた。

しかし、二人は……いや、後ろで見ていた多数がその極太レーザーに見覚えがあった。

「ねえ？ 葵、あのレーザー……」

「……うん、凄く、見覚えがあるね」

「あれって……」

「ああ!!」

「夢幸のレジエンドスパークだ!! (な……)」

そこで歩と魔理沙の声が重なった。

しかし、魔理沙の嬉しそうな声とは逆に歩はどこか呆れたような声だった……。

と、その時に声が聞こえてきた。

「む？ 雑魚を落としたようだな」

「つーか、いい加減離せ!!？」

全員そちらの方を見ると、夢幸とシユロムが居た。

「夢幸……それにシユロムも。どうしたんだよ？」

カロードからの質問に二人は答えた。

「お前達と同じだ」

「此奴が無理矢理……」

「シユロムさん、御愁傷様です」

シユロムに対してそう言葉を投げ掛けた葵だった。

\*\*\*

蜃気楼は夢幸のレーザーに当たった後、気絶してしまった。

その代りの様に起きた天子はと言うと……。

「ごめんなさい!!」

頭を下げて謝っていた。

「いえ、良いですよ。でも、もうしないで下さいね？」

「あと、うちの神社を立て直しなさい。それで許したげるわ」

葵と霊夢のその言葉を聞くと、天子は頷いた。

しかし、ルカはずっと天子を睨み続けている。

「？ルカ？どうしたの？」

それに気付いた葵はルカにそう問い掛けると、ルカは天子に問いかけた。

「おい、本当に反省してるんだな？」

その問い掛けに対して天子は「ええ！本当よ!!」と返した。

それを聞いたルカは氷柱を創り出し、それを天子に向けて投げようとしたが、しかし、其れよりも、そして誰よりも素早く行動に移した者がいた。

「レティシアさん!!」

龍のその声と同時に天子ははるか遠くに飛ばされていた。

「其処をどいて下さい!!鬼灯さん!!」

龍は今、自分の前に阻むように立っている鬼灯にそう怒鳴るような声で言うが、しかし鬼灯は怯まない。

「龍、落ち着け」

鬼灯はそう声を掛けた。

\*\*\*

スキマ内では、紫と凜華が見ていた。

「あらら、レティシアの琴線に触れたはね、あの天人」

「それはお主もだろう。それにしても、龍は落ち着きを失くしている所為で周りが見えてないようだな」

「そうね。あの子が理性を失う程に激怒したのなら、あの天人が無事なわけないじゃない」

「それに、鬼灯も龍の行動を止める訳なからう。あのレティシアを止めに入るじゃろう」

スキマに映っているのは、大人の姿となったレティシアと、ボロボロながらも立ち上がり、レティシアを睨みつけている天子だった。

別のスキマには、鬼灯が龍を説得している姿が映し出されていた。

「それに、貴女も飛び出していたわよね？」



「あの小童を失う訳にはいかんからの」  
その言葉を聞いて、苦笑した顔をする紫だった。

\*\*\*

別の場所では、見かけない女と少年がいた。  
「へく、此処があんたが生まれた幻想郷ねく。全然変化あるじゃない!!」

女は目を輝かせ、嬉しそうな声を上げた。

「そうだな。あっちよりかは……ん？」

少年の方は何かの力を感じ、上を見上げた。

「あ、何か変化が有ったわね!!」

女の方も嬉しそうな声を上げながら空を見上げた。

「はく、お前のそれは治らないのか？」

「無理、変化のない日常なんてつままないだけよ」

「それを言うなら『異変解決』に参加したらどうだ？」

「いやよ、面倒臭い」

「はあ……」

少年は深い溜息を吐いたのだった。

(この力……間違いない……姉上?)

溜息の裏でそんな事を考えていた。

\*\*\*

天子は未だレティシアを睨みつけていた。

まあ、思いつき蹴り飛ばされたのだから当然と言えば当然だが、やはり自業自得である。

「貴女……何するのよ!!」

「何するのと聞きたいのは私よ。貴女、倒壊した博麗神社を自分の住む場所にしようとしてるみたいだからね……キレたのよ」

そう言葉にするレティシアの顔は、ただただ無表情。能面のように無表情。感情どころか考えも、心境も読み取れない。

そんなレティシアに対して天子は笑いながら言った。

「それぐらい良いじゃない。それがなんだって……」

そう言葉にした天子の顔スレスレに、弾幕が目に見えない速さで通

過した。

此れには流石に青ざめた顔をする天子。

それに対して、レティシアは漸く無表情を崩した。

今浮かんでいるのは、笑顔である。

「そう、反省の色は無しの様ね。なら……」

そこでレティシアは般若の様な顔を表に出した。

「美しく、残酷に……この場から住ね!!」

そう声を荒げると、天子との弾幕ごっこが再び始まった。

## 第百五十三話

レティシアと天子の弾幕(ぶ)っことは、もう結果さえ決まってるかのような状態だった。何故なら……。

「スperl!!? 乾坤 『雷神 『ツール神の雷』』 キャアアアア!!?」

天子がスperlを宣言しようとする、レティシアが宣言してそれを遮り、

「このっ……きやあ!!?」

立ち上がろうとすれば蹴りで飛ばされる。その繰り返しだった。

「くっ……私は負けないわよ!!? 絶対に!!?」

「その負けないと思う気持ちは大事だけど、理由が不愉快よ」

レティシアはそう言う、スperlを宣言した。

「神符 『神々の怒り』」

すると、レティシアの周りに弾幕が形成された。

その数、およそ千個以上。

それが全て天子の方へととても速いスピード……音速ぐらいには出てるスピードで天子に向かった。それも全て真正面からではなく、上からも、左右からも、そして天子の後ろからも、全部向かって行った。

「!!?」

天子はそれを避けようとしたが、しかし避けれずに終わった。

一度当たれば連鎖する。天子は結局、時間一杯まで当たり、最終的にはボロボロの姿で立っていた。しかも、意識もある。

その一部始終を無表情で見続けたレティシアは口を開いた。

「……まだ立てるのね。まあ、別に良いのだけど。神弓 『アポロンの弓』」

レティシアが宣言すると、彼女の手に何処か神々しい弓があった。その弓を構え、天子を狙って射った。

勿論、天子は避けることは叶わず、そのまま気絶してしまった。

レティシアはそれを見ると何時も通りの姿に戻り、顔には何時もの笑顔を浮かべ、戻って行ったのだった。

\*\*\*

レティシアと天子の弾幕ごっこ中に来たのであろう、不知火と衣玖が葵達の中に混ざっていた。

「あの……」

「クスクス、あの子は死んでないわよ。最後のあのスペルも、強制的に気絶させる為のものだからね♪」

レティシアは衣玖が言いたい事を先に言うと、衣玖は頭を下げた。

「この度は申し訳ありませんでした」

「すまなかった」

衣玖と共に不知火もまた頭を下げると、レティシアは頭を上げるように言った。

「クスクス、それよりも、葵達と一緒に介抱してあげたらどうかしら？」

衣玖と不知火はそれを聞くと天子の方に顔を向けた。

其処には既に葵と蜃気楼が天子の介抱を始めている姿が目に入った。

「すみません!!? 私も手伝います!!?」

「俺も手伝おう」

「クスクス、それから光冥、咲夜」

「「はい、レティシア様」」

「クスクス、貴方達も本当は私を止めたかったんでしょ? 龍もただど」

「「……」」

「クスクス、ごめんなさいね、私の命令で縛ってしまつて」

レティシアは此処で本当に済まなそうな顔をした。何時もの笑顔は消えている。

「いえ、レティシア様なら大丈夫だと信じておりましたので」

「私も、光冥と同じ気持ちです」

「それでもよ。本当に、ごめんなさいね」

レティシアはそう言つて光冥に頭を下げた。

流星にこれには慌てた光冥と咲夜で、直ぐに自分の主人に頭を上げ

るように促した。

頭を上げたレティシアは次に龍に近付いた。

「龍」

「……」

龍はレティシアの姿を目に収めると、直ぐに抱き締めた。

「!!?」

「……心配、したんですよ?レティシアさん」

「クスクス、ごめんなさいね?でも、理性を失わなかったでしょう?凜華も『私が理性を失った時は』だったからね。後で彼女にも何かお詫びをしないとね」

「……」

「クスクス、大丈夫よ。もう私がこんな事をする事は無いわ。絶対とは言えないけど」

「約束してください」

「クスクス、無理よ。葵も分かっていることだけど、『未来はとても不安定』。分かっているても何処かで変わる事があるのよ。もしかしたら、また私がこうなる事もあるかもしれない。でも、その時は……」

レティシアは其処で龍の顔を見ながら、笑顔で言った。

何時もの笑顔ではなく、優しい笑顔を。

「その時は、頼りにするはね♪龍」

「!!?……勿論、頼りにして下さいね?レティシアさん」

二人の空間は桃色空間と化しており、誰も其処を邪魔しないようにしていたとか。

\*\*\*

博麗神社の何時もの宴会場では、何時も通りの宴会が開かれていた。

そう、異変に関係していない者も入り混じる宴会である。

「ああもう!!?これ片付けするの本当に私と歩と葵達だけなんだから散らかすの止めなさいよ!!?」

「これは何言っても散らかしそうですね……」

霊夢はお酒の力も入ってそう叫び、その隣では葵が苦笑していた。

その離れた所では、結構な数の宴会客が集まる所があった。

其処には凜華がおり、目の前に有った大量の料理を一瞬にして食べ終わっていた。

「次の料理はまだかの〜？」

「凜華様」

「む？衣玖か」

「はい。凜華様、お食事で御座います」

「そうか!!？なら頂こう!!？」

凜華は衣玖が持つてきた料理をまた一瞬にして食べ、衣玖が持つて来てのを食べるのループが発生していた。

そして別の所では……………

「え？貴女の気質？う〜ん……………うん、雪ね」

「あら♪道理で白玉楼には雪が積もつていたのね♪」

天子が幽々子の気質を見ており、その近くでは妖夢とルカ、そして永久が話していた。

「あの、それにしても、神社直さずに宴会して良いんでしょうか？」

「良いんだろう。霊夢が早く宴会したいと言っていたしな」

「……………確かに」

「それに、要石も埋め込まれたらしいし、後は建設だけだ。心配するな」

「それにも心配が……………あの天人に任せても大丈夫なんでしょうか？」

心配そうな妖夢に対して、ルカは天子を見ながら言った。

「それも大丈夫だ。それに付いてもう一度聞いたら、私の能力が反応しなかったんだ。彼奴はちゃんと真面目に直してくれるようだ」

「……………そうですか、なら良かった」

妖夢が安心した顔をし、永久はそんな妖夢の頭を撫でたのだった。

\*\*\*

宴会場からそんなに離れていないところでは、レティシアが一人、なぜか飲まずに立っていた。

先程までは龍も居たが、少しの間だけ外してもらったのだ。

「クスクス、居るのでしょうか？『アルカ』」

レティシアがその名前を呼ぶと、レティシアの後ろから一人の少年が出てきた。

その背からは同じく蝙蝠の羽根が生えており、顔立ちもレミリア達に似ていた。

「……姉上。天界であの天人と戦ったのか？それも、本気の姿で」

彼は『アルカディア・スカーレット』。レティシアの弟でありレミリアとフランの兄である。

「クスクス、ええ、そうよ。でも、それは聞かなくても離れたところで見ていた貴方なら分かるでしょう？」

「離れているからこそ、確認をしたんだ」

「クスクス、なら、もう確認し終えたわね？」

「ああ」

レティシアはそれを聞くとアルカに向き直り、直ぐに優しく抱き締めめた。

「!!？あ、姉上？」

「……心配したのよ？アルカ。急に行方不明になって……探したのよ？」

レティシアは今にも泣きそうな声でそう言葉にした。

それに対してアルカはレティシアの背に手を回して、優しく抱き締めめた。

「心配を掛けてすまない、姉上……」

「……此処に無事な姿で戻って来て、その姿を見せてくれたのだから、許すわ」

レティシアはアルカから離れ、目に浮かんだ涙を指で拭いながらそう言った。

そして、そのアルカの後ろに目を向けて、聞いた。

「クスクス、それで？さつきから邪魔しないでくれたのは有り難いんだけど、其処にいる雪女さんは誰かしら♪」

レティシアのそんな声が聞こえたからなのか、木の後ろから出てきた者がいた。

白の振袖に雪の結晶が描かれており、長い髪を鈴が付いた髪飾りで

結んでいる女性が出てきた。

「まあ、アルカから聞いてたし驚きはしないけどさ。やっぱり暴露たか」

その女性は楽しそうな笑顔でそう言うのとアルカの隣まで移動し、アルカの頭に手を置いた。

「おい……」

「どうも、異世界の幻想郷からアルカと共に遙々引越して来ました!!? 『小倉 雪華』です!!? アルカの友達だよ!!? よろしくね!!?」

雪華はそう言いながらまるでボールを叩くようにアルカの頭を叩いている。

アルカも流石に限界だったのか……。

「叩くの止めろー!!?」

怒ったのだった。

しかし雪華は面白そうに笑っていた。

「わくわく!!? アルカが怒ったく!!? 怖くわい」

……全く怖がっていない様子である。むしろ楽しんでいる感じである。

「クスクス、アルカに友達が出来てくれて、私は嬉しいわ♪」

そんな二人に対してレティシアは笑みを浮かべてそう言うのと、アルカは動きを止めた。

「ほれ? 嬉しいって言ってもらってるよ? アルカ」

そんな感じという雪華をジト目で見てから、アルカはレティシアに顔を戻した。

「姉上。俺は今日から家に帰る」

「クスクス、ええ。お帰りなさい、アルカ」

「ただいま、姉上」

二人はまた抱き締めあった。雪華も流石に空気を読んだ様で、その場から居なくなっていた。



## 霊夢の日常 第百五十四話

現在の時間は夜。霊夢達はレティシアに呼ばれ、紅魔館にやって来た。

「で、本当にタダ酒していいのよね？」

霊夢はレティシアに片手にワインを持った状態で嬉しそうな笑顔でそう聞くと、レティシアもまた笑顔で返した。

「クスクス、どうぞ♪今日はパーティーだからね♪」

「よし！なら遠慮なく飲むわよー!!」

「霊夢、飲みすぎないように……って、聞いてない」

葵は霊夢にそう忠告するが霊夢は聞いておらず、そのまま何処かへと消えていった。

葵が溜息一つ吐く後ろで、ルカもまた溜息を吐いた。

「はあ……歩、彼奴を頼むな」

「勿論！」

歩は直ぐに霊夢の後を追って行ったのだった。

\*\*\*

霊夢と歩は目的もなくホール内をぶらぶら歩いていると咲夜と光冥を見つけた。

「あ、メイドと執事」

「何よ、その呼び方」

「執事は自分以外にも先輩がいますよ」

二人は呆れた顔をして見返した。

「ねえ？日本酒ない？ワインも良いけど日本酒飲みたいのよ」

「あ、俺も頼む」

霊夢と歩はそう聞くと、咲夜がそれに答えた。

「日本酒ならマリアが……」

その言葉と共に、何か割れるが会場内に響き渡った。

それと同時に何度も謝る声と聞き覚えがある声が聞こえてきた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「いや、気にしていない。だからもう謝らなくとも……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

「話を聞け!!」

「ひい!?!」

少し大きな声を上げると、割った方は涙目になってしまった。

「あ、いや、わ、悪かった。大きな声を出して……」

「い、いえ、私が悪いので……ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「ごめんなさい!!」

「またなのか……」

さつき大声を出した方は頭を抱えるようにして溜息を吐いた。

その隣には苦笑い気味の知り合いの男と執事もいた。

「……はあ、またあの子は」

「マリアさんですから仕方ないですね」

「あれ?あいつ等……」

「鬼灯と想起だね」

四人は鬼灯達の方に近寄った。

「鬼灯!想起!」

「ん?」

「あ、歩さん!霊夢さん!」

想起のその声に反応して狼も顔を向けた。

「お、咲夜と光冥もか。まあ、あの音に反応しない奴はいないか」

「ええ、そうね」

咲夜はそう言うのと、ちらつとマリアを見た。

マリアはそれを見るとビクツツと肩を震わすと、狼の背中に隠れてしまった。

「咲夜にも光冥にももう慣れただろ?」

狼はそう言いながら頭を撫でると、マリアは少し心配そうな目で狼を見てから顔を出すと、数人の足音が聞こえてきた。

「マリアく!!またなんか割ったの?」

「ユニ、足元」

「ん？これ……」

「日本酒の酒瓶が割れてるな……」

「つまり、これを割ったのか……」

ペス、ユニ、朱鳥、くおんが下を見て状況を把握すると、ペスが咲夜から箒を貰い、破片を掃き始めた。

霊夢はそれを見た後、鬼灯の方を見ると、その後ろにレティシアがいるのが見えた。

「あ、鬼灯。後ろ……」

「ん？……レティシアか。どうした？」

鬼灯は振り返ってみると、レティシアがいたことに全く驚く様子はなく、いつもの通りの対応で返した。

しかし、そのレティシアはというと、いつも以上にニコニコとした笑顔を浮かべていた。

そう、まるで何かを企んでいる笑みである。

霊夢はそれを見て、鬼灯に若干同情の目を向けたのだった。

「クスクス、鬼灯。貴女、マリアを泣かせたわね♪」

「泣かせたわけじゃ……」

「クスクス、これはちよつとお仕置きが必要ね♪」

「おい、話を聞け。しかもお仕置きって何を……」

鬼灯がそう言っている途中にレティシアは鬼灯に触った。

すると、『ポフンツ』となったと同時に煙が上がった。

流石にこれには驚いた様子を浮かべるその場の全員。

そして煙が晴れると、鬼灯に怪我は無かった。

そう、『怪我』は。

「おい……何でこの姿に強制的にした!?随分昔に嫌だと言ったよな!?

／／／

鬼灯は何故か子供の姿となっていた。

ちなみに、九本の尻尾の太さは変わっていないが、小さくなっていた。

「ほ、鬼灯、様……?」

くおんもこの姿の鬼灯を見て、口元を引くつかせている。

その言葉が聞こえると、鬼灯は一度周りを見てから自分の尻尾で恥ずかしそうに顔を隠した。

「み、見るな……／＼／＼」

それを見て、周りが癒されたのは言うまでもなかった。

\*\*\*

離れた所でほんわかしているなか、葵とルカは帝と見知らぬ相手と対面していた。

その男は普通に見ても種族が全く推測出来ない姿だった。

二本の鬼の角、鴉天狗の羽、妖獣の尻尾、口から見える吸血鬼の牙……全ての種族が混ざり合った姿をしていた。

「よっ!!葵!!」

「こんにちは、帝さん。持久走以来ですね」

帝からの挨拶を受けると、葵もそう返した。

ルカはそれを見てからもう一人の方に視線を向けた。

すると、相手と視線が合わさった。

「……」

「……何だ？」

ルカは少し鋭い目つきで見ると、相手は沈んでしまった。

「……は？」

こんな反応は今まで一度もされた事がないため、ルカは驚きの声を上げてしまった。

それを見た葵と帝。

帝は「あく……」と苦笑い気味に言い、葵はルカに何があったのか聞くと、その男に近寄った。

「あの、大丈夫……」

「!？」

男は葵から声を掛けられると、すぐに離れてしまった。

「え……」

「あく、まずは此奴の紹介だな……『スバル』」

帝から促されるが、なかなか自己紹介をしようとしなかった。

ルカはそれに首を傾げるが、葵は何かに納得がいった様子の顔をす

ると、ルカの耳に顔を寄せ、こう言った。

「ルカが促してあげて」

「……は？何で私が」

ルカが訝しげな顔で葵を見るが、葵は笑顔を浮かべるだけだった。

「……はあ」

ルカは溜息を一つ吐くと、促すことにした。

「……で、名前は？」

「……『水無月 スバル』」

「そうか」

ルカのその言葉で一時沈黙が訪れた。

「あ、えっと、スバルさん！よろしくお願いしますね!!」

葵はその空気を払拭するためにそう言うが、スバルからの返事は返ってこなかった。

「あ、あの……」

「……」

葵は困った表情を浮かべている。

しかし、スバルは顔を背けたままだった。

葵がどうしようかと悩み始めていると、スバルのワイングラスに目が留まった。

「あの、スバルさん……ワインが無くなってますよ？」

「……」

スバルは無言でグラスを見ると、確かに無くなっていた。

「あの、私のをどうぞ。まだ飲んでませんから大丈夫かと……」

「……」

スバルが無言を貫き通していると、それを葵はもう飲み飽きたと勘違いしたのか……、

「あ、もういいませんか？」

そう質問した。

それに対しても無言のスバルにどうしたものかと頭を悩ませていると、スバルが口を開いた。

「……やめて……くれ」

「……え？」

「お前は不気味……怖い……好意を向けるな……俺を構うな」

スバルはそう言うと、死んだ目をしてその場を去って行ってしまった。

「……」

「ルカ、落ち着いて。私は気にしてないから、ね？」

ルカがスバルの行動、そして葵への態度から怒気を放っているが、葵が宥めた事によりそれを収めた。

「……で、葵と帝。あの行動はどういう事だ？葵は過去を見たんだろ？」

「……」

葵は悲しそうな顔をした。

それを見た帝は変わって説明をする事にした。

「……ルカは、彼奴のあの容姿をどう思う？」

「……種族がごちゃ混ぜで歪だな」

「そう。その所為で、彼奴は今で誰からも受け入れられなかったんだ。例え誰かを助けたとしても、その容姿の所為で襲われてると勘違いもされてたらしい」

「……」

「だから、彼奴は裏の無い純粋な好意や優しさを拒むんだ」

「……そうか」

ルカはそう言うと、スバルが去って行った方に顔を向けた。

その表情は至って変わっていないが、目からは同情と怒りが読み取れる。

スバルへの同情と、差別した奴らへの怒りが。

「それから、こっちの世界じゃルカとスバルは仲が良いぞ」

帝のその言葉に、ルカは固まった。

しかし、一秒と経たずに顔を素早く帝に向けた。

「はあ？？嘘だろ！！？」

「いや、それはお前が一番分かる事だろ。能力反応してないだろ」  
「いや、確かに反応してないが……何でそうなった……」

ルカが頭痛でもするかの様に頭を抑え、近くのテーブルに手を付き、溜息を吐いた。

「……嘘だと信じたかった。頼むから能力、反応してくれ……」  
「諦めろ」

帝のその言葉にまた溜息を吐くルカ。

「……あ、すみません、この後少し用事があるので、一度失礼しますね」  
ルカと帝の後半の会話を苦笑して見ていた葵はそう言って頭を下げると、その場を一度去って行った。

ルカと帝はそれを見届けると、その場に居続けたのだった。

\*\*\*

霊夢と歩は魔理沙と夢幸と合流と言う名の偶然を果たすと、会話を楽しんでいた。

その途中、紫がチビ鬼灯をすりすりしている姿を見たが、まるで施しものでも見るように楽しそうな笑顔を浮かべている。

「どうやら酔いが回っているようだ。」

と、そんな四人の所にレミリアとフランがやって来た。

「あれ？あんだ達、何か用？」

霊夢がそう聞くと、レミリアが質問してきた。

「ねえ？お姉様を知らない？」

「レティシアなら、鬼灯をあの姿にした後、どっかに消えたわよ？」

「そう……貴方達は？」

レミリアは歩と魔理沙と夢幸にそう聞くが、同じような回答が返ってきただけだった。

「そう……」

「レティシアお姉様、本当に何処に行ったのかしら？」

レミリアとフランが頭を悩ませ始めたその時、

「クスクス、お呼びかしら♪」

レティシアの声が急に聞こえてきた。

しかし、その場の誰もがもう慣れた様で、驚きの様子はなかった。

「お姉様、今まで何処に？」

「クスクス、今回のメインを呼びにね♪」

「メイン？」

霊夢はそう言いながらレミリアに説明を求める視線を向けたが、しかしそのレミリア本人も、その妹のフランも困惑するというと分かる。レティシアに聞いただそうとした。

しかし、それを見透かしていた様で、レティシアは言った。

「クスクス、すぐに分かるわよ♪」

と、その時、周りがかかを歓迎する拍手を始めた。

霊夢達もその方向に視線を向けると、葵と、その近くにプリズムリバー三姉妹、そして吸血鬼姉妹に似た顔の少年がヴァイオリンを持って立っていた。

「アルカお兄様!」

レミリアとフランのそんな様子を見て、レティシアは面白そうにクスクス笑い、アルカは再会出来た事が嬉しい様で、笑みを向けていた。レミリアとフランは今すぐにでも抱き着きたい衝動を抑え、何が起ころうとしているのか、見届ける事にした。

葵達は一度周りをみて、それからお互いの顔を見てから歌い始めた。

\*\*\*

雪華は歌を聞いているとき、自分が此処まで聞き惚れるほどの歌を初めて聞き、感動していた。

そして、拍手をしていると、アルカの元に吸血鬼姉妹が飛びつき、再会出来た事に対して、お互い涙を流しているのを見た。

それを見た雪華は、演奏終わりに遊ぶ計画を止め、どうしようかと考え始めた。

と、急に彼女は視線を別の方向に向けると、咲夜に声を掛けた。

「咲夜」

「?誰かしら?」

「あ、そっか。こっちの咲夜と私は面識ないんだっけ……」

雪華はそう呟くと、自己紹介をしてから要件を言った。

「あのさ、あんたから見て右後ろの三妖精、それから左斜め前の半人半霊……まあ、妖夢だけ……あと、あの想起とかいう男と話してる早



苗。もうすぐ酔っ払い状態になるから早めに対処した方が良いでしょう？  
あと、霊夢と魔理沙も」

「……」

咲夜は訝しげに雪華を見た。

それに気付いた雪華はニコニコ笑顔を向けて言った。

「まあ、信用しなくても良いよ。どうせなるから。んじや、アルカによろしく」

雪華は最後にそう言うと、紅魔館から出て行ったのだった。

そして、結果的に言えば、雪華の言う通り、名前を挙げられてた人たちは本当に酔っ払い状態になっていた。

## 第百五十五話

霊夢は葵とルカと共に夕食の食材を買いに来た。

ちなみに、鬼灯は神無月神社に、想起は萃香と新しい居候の雪華と共に留守番である。

「はあく、あの雪華とかいう奴、面倒臭がつてなんの手伝いもしてくれないのよ？酷いと思わない？葵」

「そんなに面倒臭がつてるの？」

「ええ。何か頼めば最初に出てくる言葉が面倒臭いよ？」

「あらら……」

葵は苦笑いを浮かべているが、その隣のルカはジト目で霊夢を見ていた。

「？何よ」

「いや、お前も大概だろ」

「はっ？」

霊夢はルカのその言葉を聞くと、ルカを睨んだ。

対してルカも、霊夢を睨み返していた。

「二人とも、やめて下さい!!」

そんな二人の間に葵が入り、喧嘩を強制終了させた。

「……で、目当ての魚とお肉、あと人形を作るために必要な糸は何処に売ってるの？」

「彼処です!!」

霊夢のその質問に笑顔で場所を示した葵。

その笑顔が見て嬉しそうな顔の霊夢は、葵の後ろからそーつと近寄る見慣れた男の子に気付いた。

その男の子もまた霊夢の視線に気付いたようで、指を一本口に当てて霊夢を見た。

その意味に気付いた霊夢は視線を外し、葵の方に戻した。

近くのルカをチラッと見れば、ルカも気付いていた様で、視線だけでそう語っていた。

葵を見れば、二人の様子に違和感を感じた様で、首を傾げて心配そ

うな顔をしていた。

「あの、二人とも、どうしたの?」

「ん?何が?」

「いや、だって明らかに何か隠してるよね?」

「いや、隠してないが?」

ルカは真顔でそう言った。

それに対して全く納得していない様子の葵。

「……わっ!!」

「!!きやあ!」

と、その後ろから幸多が葵を脅かし、葵はそれに驚き、軽く飛び跳ねてしまった。

対して、驚かした側の幸多は笑っていた。

「あははっ!!葵お姉ちゃん面白いね!!」

「もうっ!!幸多君、吃驚したじゃないですか!!」

「あはは!!ごめんね?葵お姉ちゃん。でも、驚かしたくて……」

「反省しているなら良いですよ」

葵は幸多に笑顔を見せながらそう言うと、幸多も笑顔になった。

「あ、お姉ちゃん達はもしかして、お買い物?」

「はい、そうですよ」

幸多はそれを聞くと、笑顔になり、葵の袖を引つ張った。

「僕が案内するね!!何処のお店に様があるの?」

「お魚屋さん……」

霊夢はそのやり取りの途中、ルカの雰囲気が変わったことに敏感に感じ取り見てみると、ルカがある方向を睨んでいた。

その方向には、井戸端会議をしているオバちゃん達がいた。

何を言ってるかは流石に聞き取れなかったが、分かることはあった。

「……ルカ、あんた帰った方が良いんじゃない?」

「……は?」

近くに葵と幸多は居ない。どうやら買いに行った様だ。

「あの人たち、何を言ってるかは流石に分からないけど、あんたの悪口

を言ってるのは分かるのよ」

「別に何時もの事だろ？ 気にするほどの事でもない」

「……」

霊夢の勘は、嘘を言っていないと言っていた。

「……あなたが気にしなくても、周りが気にするの。いい加減分かったら？」

「……」

それを聞いたルカは、驚いた表情をしていた。

「何よ、その表情」

「……いや、お前からそんな言葉が出るとは思ってたくなってな」

「弾幕撃ってあげましょうか？」

「人里でそれは禁止だ」

二人していい笑顔である。

そんな雰囲気の中かで幸多と共に帰ってきた葵は首を傾げたのだった。

そして、幸多と別れ、その帰り道。

「……霊夢」

「何よ」

ルカが急に話しかけてきたのに多少の驚きを顔に出しながら言う  
と、

「さつきは、有難うな」

いきなりのお礼。

その言葉に一瞬目を見開いた霊夢は、ルカに詰め寄った。

「あ、あんた、今なんて!?!」

「二度言うつもりはない」

「はあ!?! ちよ、あと一回だけ……」

「知らん」

ルカはそう言うのと霊夢より先に歩き、霊夢はそれを追って歩いていく。

そんな二人を後ろから見ている葵は、優しげな微笑みを浮かべていたのだった。

## 第百五十六話

夏といえば人は何と答えるのだろうか？

色々と解答はあるが、これだけは夏の風物詩と言えるものはあるだろう。

そう、浴衣である。

そして現在、霊夢達はその浴衣を着て、夜の神無月神社へとやって来ていた。

「まあ、夏だから祭りは分かるけどね。うちと違って人が多すぎない？」

霊夢は赤と白のブロックチェック柄の浴衣を着て、髪を上げ、うなじが見えるその姿の状態で、ちよつと不満そうな顔をしながら綿菓子を食べていた。

その隣にいる歩は藍色の吉原つなぎ柄の浴衣を着ていた。

「まあ、あんな妖怪神社に来る人里の連中の方が珍しいけどな」

夢幸の近くにいた魔理沙が、唐かう様な笑顔でそう言った。

因みに魔理沙もまた、黒色の生地之星が描かれている浴衣を着て、りんご飴を舐めている。

何時もの帽子は流石に被ってはいなかった。

その隣の夢幸は暗い緑のかすれ縞柄の浴衣を着て、魔理沙を見ながら立っていた。

「それに、神様のいない神社に来る奴はいないだろ」

「うっ」

魔理沙の言葉に、霊夢は言葉を詰まらせる。

「でも、霊夢さんの為に神社の宣伝をしてる歩さんは人里では人気のようですよ？」

と、そんな四人の後ろから早苗がそんな風な声を掛けた。

四人が振り向いてみると、早苗もまた若葉色の生地に流水と紅葉が描かれた浴衣を着て、団扇で扇いで立っていた。

「あ、早苗も来たんだね」

歩がそう声を掛けると、頬を紅く染めて答えた。

「はい、歩さんに声を掛けてもらった時はちよつと躊躇いましたが、その後には想起さんが来て……」

「即答したわけか」

夢幸がそう言うのと、思いつきり頭を縦に振った。

「早苗は想起が好きだからなく」

歩がそう言葉にすると……。

「僕が何？歩さん」

そんな声が後ろから聞こえてきた。

直ぐに神社側の方に振り向くと、想起がいつも通りの私服で立っていた。

「いや、何でも……って、想起は浴衣を着ないの？」

実際、歩も夢幸も浴衣を着ているが、想起はいつも通りの私服を着ている。

周りのお祭りにやって来た人里の人達も浴衣を着ているため、この場合は浴衣を着ていない想起が逆に目立っていた。

「外の世界だと、男はあんまり浴衣を着ないんだ。僕も着てなかったからね」

想起はそう言って苦笑いを浮かべている。

が、歩はそんな想起を肩を強く掴んだ。

「え、歩さん？」

「想起……俺が手伝うから浴衣を着るんだ。今すぐに」  
「え？え？」

想起は歩のこと行動に若干混乱していた。

歩がこう言うのは、早苗の為である。

好きな人の浴衣姿、普通は喜ぶものである。

実際、歩も霊夢の浴衣姿を最初に見たとき、頬を紅くして直視出来ていなかったのだ。

だからこそ、歩は想起に浴衣を着せ、早苗を喜ばせたいのだ。

そのまま強引に想起を神社内に連れて行き、少ししてから一緒に戻ってきた。

着替えさせられた想起の浴衣は、黒と白の格子柄のものだった。

「おかえり、歩」

「ただいま、霊夢。で、早苗。どう?」

歩は早苗の方に視線を向けると、想起を見ながらブーツとしている状態の早苗がいた。

それには流石に気付いた想起は頭を傾げ、早苗の肩を持ち、優しく揺らした。

「早苗?」

「!?」

すぐ近くで聞こえてきた想起の声に益々顔を紅くしてしまった早苗。

それを見た想起は心配そうな顔をした。

「えっと、早苗?大丈夫?」

「な、何がですか?」

「いや、顔が赤いから熱でもあるのかな? って思っ……」

「ねね、熱はないですよ!?」

「そ、そう?なら良いけど……あ、そうだ。歩さんが選んでくれたこの浴衣、どう思う?」

想起はそう言いながら自分を指差して聞くと、早苗は素早く何度も何度も頭を縦に振った。

「似合います!!? 似合います!!?」

その言葉を何度も言いながら。

これを聞いた想起は、そんな状態の早苗に苦笑を浮かばせるしかなかった。

「有難う。だけど、早苗は落ち着いて」

そう言っって肩に触れると、ビクツと顔を紅くし震えた早苗。

「で、どうする? 此処からは別行動と行くか?」

魔理沙は霊夢にそう提案すると、霊夢はチラツと早苗達を見てから合意した。

そして、其々のペアで祭りを楽しむ事にした。

\*\*\*

「それにしても、本当に想起の奴は鈍感ね。何でアレだけ分かりやす

く出てるのに気付かないのかしら」

「本当にね。早苗が可哀想に思えるよ」

霊夢と歩はお互い苦笑を浮かべながらそう言いながら前を向くと、見知った人達を見付けた。

「あれ？彼奴ら……吸血鬼達と幽霊達じゃない」

「そうだね」

霊夢達はその軍団に近付くと、光冥と永久が妖夢と咲夜の近くに居ないのが目に止まった。

「あんた達、何してんのよ？」

「あ、霊夢さんじゃないですか」

霊夢が声を掛けると、白に鈴蘭が描かれた浴衣を着ている妖夢がそれに対応した。

しかし、その表情は苦笑を浮かべていた。

「？何であんた苦笑いを浮かべてるのよ」

霊夢がそう質問すると、妖夢は「アレですよ」と言いながら指を指す。

その指差された先には、黒の亀甲柄の浴衣を着た光冥と、肌色に笹柄の浴衣を着た永久が的当てをしているのが見えた。

しかし、霊夢も歩もそれを見て悟った。

「楽し酷的当て……してないわね」

「そうだな。公冥は笑みを浮かべてるけどなんか黒いし、永久に至っては無表情だ。どう考えても楽しそうに見えない」

二人がそう感想を言うと、白に撫子柄の浴衣を着た咲夜が近付いて言った。

「あの二人……犬猿の仲なのよ。春雪異変の時の事を話したらあんな風にね……」

「なるほどね」

霊夢が納得している側で、一度撃つのを止めた二人が会話をし始めた。

「なかなかやるじゃないですか。唯の剣術馬鹿ではないようですね」

「お前こそな。あまりに神経を使っているからまるで女子だ」



「は、は、は、今すぐ貴方の目玉を撃ち抜きますよ?。」

「喧嘩なら買うぞ?今なら銃と剣の二重舞を見せてやる」

「やめなさい!!?。」

二人が本当に喧嘩を起こしそうなその雰囲気は素早く察知し、二人の間に入り止める咲夜と妖夢。

霊夢は的当て自体を止めさせようと動こうとしたが、近くから聞き覚えのあるクスクス笑いが聞こえてきた為、そちらを見ると、レティシアとその近くにレミリア達、そして幽々子がいた。

其々の柄はレティシアが黒に牡丹と鯉、アルカが同じく黒に波と龍が描かれた浴衣、レミリアが淡い水色に丸く収められた鳳凰、フランは紅色に桔梗格子柄。幽々子はいつも通りの服装である。

「クスクス、これを止め様だなんて言わないでね、霊夢、歩。面白い光景なんだから♪」

「そうね♪だから、止めたら駄目よ?。」

そんな二人の言葉にレミリアとアルカは隠れて溜息を吐いた。

フランはフランで光冥を応援している。

「おー、まだやってるんだ」

と、近くから白の生地に青い雪花絞りの浴衣を着た雪華が沢山の焼きそばを持ってやって来た。

「ほれ、頼まれた焼きそばな」

「クスクス、有難う♪」

そう言いながら霊夢と歩を退けた人数分の焼きそばを其々に渡していく雪華。

光冥と永久の分はそれぞれ咲夜と妖夢に渡した。

「あんだ、いつも着物着てるのに浴衣も着るのね」

霊夢がそう聞くと、嬉しそうな笑顔を浮かべる雪華。

「ああ、私、浴衣とか着物が好きなんだ。それに、この浴衣を作ってくれたのは元の世界の幻想郷に住んでる友達が作ってくれたもの。こういう時に着なきや、その友達に会わせる顔が無いよ」

そう言いながら「どう?いい浴衣だと思わない?。」と言いながら見せびらかす雪華。

霊夢と歩はそう言われ改めて見ると、直ぐに分かるほどに出来が良  
い浴衣だった。

「へく。あんたの友達は何時か作ってる奴なの？」

「仕立て屋をしてるよ。何時も出来上がりを最初に見せてくれる奴な  
んだ」

雪華は其処からその友達の自慢話を始めたい様子だが、霊夢と歩は  
話すように言わない。

というより、アルカが雪華のそれを見て溜息を吐いた様子を見て、  
面倒臭くなるのが分かった為に話を促さないのだ。

「それじゃ、私達はもうそろそろ別の所に行くから」

霊夢がそう言うのと、歩も挨拶をしてからその場を去っていった。

\*\*\*

そこからまた歩き続けると、くじ引きの近くに葵と霖之助、ルカと  
鬼灯、そして何故かアリスとカロードがいるのが見えた。

「葵!!？」

「!!？霊夢、それに歩さん!!？来てくださったんですね!!？」

葵はそう言っただけで近付いてきた。

その姿はいつも通り姿……ではなく、袴が水色以外は現代の巫女服  
そのままの姿だった。

「あれ？髪型変えたのね」

霊夢がそう聞くと、葵は苦笑した。

「はい。実は紫さんが『試しに外の世界と同じ感じにしてみましょ  
うよ♪』と言いながらこんな感じに……」

「彼奴のせいか……」

霊夢はそう言いながらもチラッと霖之助を見た。

霖之助の姿は何時もの姿ではなく、紺色に刺子縞の浴衣を着てい  
た。

そして、その霖之助は苦笑いを浮かべている。

それに疑問を抱き首を傾げていると、ルカが近くにやってきて、小  
さな声でこう伝えられた。

「最初、葵のあの姿を見たときは驚いて、その後に顔を紅くしてたん

だ。で、そこから時間も経ってるし……」

「なるほど、慣れたって訳ね」

そう言うと、ルカは小さく頷いた。

そのルカの姿もまた、いつも通りであった。

「で、何でアリスとカロードがいるんだ？」

歩は首を傾げてそう聞くと、アリスが答えた。

「葵に誘われたのよ。『今度夏祭りがあるから遊びに来て!!?』って」

「だから、言葉に甘えて遊びに来たんだ」

カロードはそう言いながら、いつも通り絵を描いていた。

「へ〜」

歩が納得したその声を出したその直ぐ後、二人の後ろから大きな音が聞こえてきた。

それに驚き、直ぐに後ろを向くと、花火が上がっているのが見えた。

「綺麗な花火が上がってるね、霊夢」

「ええ、そうね。歩」

二人がそう言うと、何処かから『玉屋〜!!?』という声が聞こえてきた。

それを誰が言ったのか分からないが、しかし二人は今は花火に見惚れており、聞こえていなかったのだった。

## 第百五十七話

博麗神社内で蝉が鳴いている昼、霊夢、魔理沙、夢幸、歩は西瓜を食べながら賽銭箱の前で話していた。

葵はその直ぐ近くで幸多と一緒に虫取りに行く準備をしている。

「はあ、相変わらず暇ね〜」

「暇は良い事じゃないか。暇も無くて何も出来ないよりは」

「そうだな。俺も暇な時は良いと思うよ」

歩も魔理沙の意見に賛成し、夢幸も魔理沙の隣で静かに頷いていた。

しかし、霊夢は不満気である。

「暇は確かに良いけど、流石にこれはね……」

霊夢はそう言いながら、参拝客のいない境内を見渡す。

歩もこれには流石に苦笑い気味である。

「……あ、そういうえば」

と、ここで魔理沙は何かを思い出したような顔をして、霊夢の顔を見た。

「なあ？ 霊夢は里で繁盛しだした蕎麦屋を知ってるか？」

「蕎麦屋……あか、何やら評判が良いらしいわね。でも、行ったことはないわ。美味しいの？」

「いや、彼処はそんなに特筆する程じゃないけど美味しいよ。今度一緒に食べに行く？」

歩が霊夢をそう誘うと、霊夢も笑顔で頷いた。

「で、そこが何だって言うのよ」

霊夢は先を促す様にそう言うと、麦藁帽子を被り、虫取り網を持った幸多が笑顔で言った。

「僕、その話知ってるよ!!? そのお蕎麦屋さんに福の神様がやって来たんだって!!?」

「福の神? 大黒様とかその類の?」

「いや、そつちじゃなくて實在する福の神だそうだ」

魔理沙は幸多の頭を麦藁帽子越しで撫でながらそう言うと、霊夢は

溜息を吐いた。

「つまり、妖怪の仕業だろうから退治しろと?」

「何でそうなったの?」

霊夢のその言葉に麦藁帽子を被った葵が苦笑しながら言った。

「つまり、参拝客が来なくて暇なんだから、その福の神に来てもらって、泡よくば神様として祀って仕舞えば……」

「魔理沙」

魔理沙のその先の言葉を夢幸が止めた。

「何だ? 夢幸」

「後ろを見ろ」

そう促され、後ろを見てみると……笑顔の華仙が居た。

その笑顔からは何やらプレッシャーを感じる。

「……じ、神社にいてもらえば商売繁盛出来ると思うぜ」

(言葉を変えた)

霊夢は歩と同じ事を心の中で呟くと、華仙を見た。

「あんた、いつの間に来ていたのよ」

「今、来たばかりですわ。それで? 何の話をしていたの?」

「神社に誰も来ないから商売上がったって話よ」

その後、華仙が来るまでの話を一部始終話すと、華仙は頭にハテナを浮かべた。

「福の神?」

「そ。と言っても、私もよく分からないけど」

霊夢はそう言うと、魔理沙に顔を向けた。

「ああ、最近、福の神が里を徘徊しているらしいんだ。そいつが訪れた店は必ず商売繁盛するらしいぜ」

「ふーん……」

華仙がそう返してから少し考えている後ろで、魔理沙は葵を見た。

「なあ? 葵のところに福の神、来たことないのか?」

「うくん、来てないと思うよ。多分」

「多分?」

「うん。人はそんなにずっと過去を覚えていられからね。魔理沙も、

一週間前、自分が何をしていたのかとか、覚えてる？」

「いや、それは流石に……」

「それと同じ。覚えてないって事」

葵はそう言うと、幸多と一緒に虫取りに行ってしまった。

「……まあ、葵の能力は阿求とは違うからね。仕方ないか」

霊夢はそう言うと、一度立ち上がり、家の中へと戻ると、今度は人数分の麦茶を持って出てきたのだった。

\*\*\*

次の日。霊夢は水桶と竹箒を境内に準備していた。

「あれ？霊夢、何してるんだ？」

と、其処に歩がやって来てそう声を掛けると、霊夢は顔を上げて答えた。

「福の神捕獲作戦の為の準備中」

「え、本当に捕まえるつもりなの？それ、罰当たりじゃないか？」

歩がそう言うと、霊夢はそんなの気にしていないかのように準備を終え、歩の手を掴んだ。

「え？／＼／＼」

「さ、隠れるわよ!!？」

そう言葉にしてから、霊夢は歩を強引に引っ張り、一緒に隠れた。

「……本当にやるの？」

「やるわよ。絶対に捕まえるんだから」

霊夢のやる気に満ちた目を見た歩は苦笑するしかなかった。

と、其処に丁度、足音が聞こえ始めた。

「え、本当に来たの？」

「まだ分からないわ。覗き見ましょう」

その言葉で二人は隠れてる場所からそつと水桶などがある場所を見ると、早苗が竹箒で掃いていた。それも、ブツブツと何かを呟きながら。

「彼奴、何ブツブツ呟いてるのかしら」

「さあ？」

と、其処で竹箒を強く握りしめると、二人にも聞こえる声で言葉を

発した。

「これは事件の匂いがするわ!!?」

「……」

二人が一層視線を強めると、其処でようやく後ろを向いた早苗。

そして、誤魔化し笑いを浮かべた。

「あははは、いたのですか、お二人とも」

「はあ、ほらあんた。そんな所に立っていないで……」

霊夢はそう言うと、歩の時と同様に早苗の手を引いた。

「何やってるんですか?こんなコソコソと……」

「しっ、アレは罨よ」

「え、罨?」

早苗は困惑した顔を浮かべると、霊夢は説明をし始めた。

「そ、福の神はね、竹箒を置いてあると勝手に庭を掃いたり、水桶を用意しておくとき水を撒いたりしてくれるそうなの」

霊夢が披露したこの知識の元は、葵である。

葵が帰ってきた後に聞いたのだ。

因みに、葵は福の神を捕まえようとしている事を知らない。

「だから、ああして罨を張ってるのよ」

「福の神って言いました?」

「うん、言ったね」

「つまり?」

「福の神捕獲作戦よ!!?」

「福の神を捕まえたいのですか?」

早苗がそう質問すると、霊夢はコクコクと頷く。

それに対して何とも残念な顔をする早苗。

「……もはや、巫女さんが神様を捕まえる時代なのね。なんと世知辛い……」

それに対してジト目で返す霊夢。

「あんたの所の崇り神に脅された人間が参拝する時代の方が世知辛い気がするけど?」

「崇り神は確かに脅して信仰を得るけど、それだけじゃないんだよ?」

「霊夢」

と、三人の後ろから良く聞きなれた声が聞こえてきた。

三人同時に早苗の後ろを向くと、其処には葵がいた。

「え、違うの?」

「うん、違うよ。確かに信仰しないと祟られるけど、それと同時に強力な守護神でもあるの。諏訪子さんの場合は多分、守護と豊穰が約束されてたんだと思うよ」

「ふくん、でも、結局の所、彼奴は脅しで信仰を得ていた訳でしょ?」

「まあ、本質的には祟り神だから、ね」

葵はそういうと、今度は首を傾げた。

「それで、霊夢達は何をしてるの?」

「福の神捕獲作戦」

「……」

霊夢がそう言うと、葵は頭にハテナマークを浮かばせた。

そして、目を瞑り少し考えると、青褪めた顔を霊夢に向けた。

「あの、霊夢?福の神を捕まえるって、まさか本気で……」

「本気で捕まえるのよ」

「ええ!?」

葵は大きな声で驚きの声を上げると、素早く霊夢がその口を手で塞いだ。

「むぐっ!?」

「しーっ!!?福の神に気付かれたら終わりなんだから!!?」

と、そこに新たな足音が聞こえてきた。

「!!?誰か来たわ」

全員がそつと境内の方を見ると……、

「よっ!!?その様子だとまだ現れていないようだな」

魔理沙だった。

「はあく、魔理沙か。で、そっちは何か掴めたわけ?」

「ああ、バッチリだぜ」

魔理沙はそう言うと、石段に座り込んだ。

「福の神を見たという人を探して聞いて回ってきた。……結論から言



うと、今回の福の神というのは実は人間らしい」

「人間？」

魔理沙が言う福の神と言われた人間の特徴は、常に笑顔。しかし、非常に無口。

里を徘徊し、呼び込みには一切応じず、店を選んで回っており、気に入った店を見つけると勝手に掃除をしたりしてくれる、との事。

其処で葵が何かを思い出した顔をした。

「あ……そう言えば」

「?どうしたのよ、葵」

「いえ、以前、私の神社の方で、誰もまだ手に付けてなかった境内が綺麗だった時があって……」

「え、本当ですか？」

「はい」

「その後って、神社はどんな状況になったんだ？」

「参拝客の方々の人数がいつもより多かった気がします」

葵はそう言うと、「その時に現れてたのですか……」と、呟いた。

「おおい、まだ一応特徴があるけど、聞くか？」

「勿論、聞くわよ」

「まあ、その福の神、神出鬼没で普段どこに住んでいるのか全くの不明。突如として現れたり消えたりする所を見ると……」

「外の人間……」

「その可能性が高いつて事ね。目的があってやってきたのか、それとも迷い込んだのか。もしくはわ……」

「もう人間ではなくて本当に神様となったか、だな。いやしかし、今の人間で神様になる事なんて……」

「え、早苗は現人神だった筈だろ?なら、その可能性は無きにしも非ずだろ」

歩のその言葉に頷く早苗。

しかし、その言葉はどうやら二人には届いていなかった。

「何にせよ、幻想郷の人間じゃ無さそうだから捕まえるのは難しいかもな」

「うゝむ、人間だと拉致して……」  
「拉致？」

其処で葵が柔かな笑顔を浮かべた。

しかし、それを見た霊夢は冷や汗を流し、一つ咳払いをしてから言い直した。

「コホンツ、招いて神様に祀るのはちよつと抵抗があるわね」

「そもそも、人を祀るのもどうかと……」

葵は溜息を吐きながらそう言葉にした。

「でも、どんな人間なのかなあ……」

「噂では福助人形みたいな人間だそうだけ。お店の人は福助人形が歩いて店に来たみたいだって言ってたぜ」

「福助人形みたいな人間……確かに福を呼びそうだな」

「そうね。そんな客が来たら驚くわね。本当に福の神のような……」

三人がそう話している後ろでそわそわし始めた早苗。

しかし、その様子に気付いているのは葵だけである。

と、其処で早苗は恐る恐るながらも声を掛けた。

「あのお、私、その人が誰なのか分かる気がするのですが……」

その声は聞こえたようで思いつきり顔を向ける三人。

「あ、いえ、違いかもしれないですけど……その福助に似ている人間ってもしかしたら仙台四郎じゃないかな……」

「……「せんだいしろう？」」」

「え、葵さんも知りませんか？」

「はい、ちよつと聞いたことがないです」

それを聞くと、早苗は『仙台四郎という人物は明治頃の人間で、東北地方で福の神と呼ばれた人間』と、こう説明した。

しかし、やはりピンときていない四人。

「その人は殆ど喋らなかつたそうですが、気に入った店にしか立ち寄ることはなくて、立ち寄った店は必ず商売繁盛した、という話です」

「それって、魔理沙が話してくれた特徴とそっくりですね」

「でしょう？それからお店にはその仙台四郎を象った人形や写真、イラストなんかを飾る風習が始まりました。商売繁盛のお守りみたい

に」

「へく。想起さんも知ってるのでしょわか……」

「外の世界だとよく知られてる話なので知ってると思いますよ。想起さんとは良く、外の世界のことで盛り上がったたりしてますので」

「そのようですね。早苗さんの所へ行く時の想起さん、何時も楽しそうな、それでいて嬉しそうな笑顔を浮かべていますから」

「え、本当ですか!?!?」

「はい!?!?」

葵からそれを聞いた早苗は、頬を紅くした。

「……はあ、本当、どうしてコレだけ分かりやすいのに彼奴は分からないのかしら」

「鈍感だから仕方ないと思うよ。まあ、恋が成就するように、それなく手助けしていこうよ、霊夢」

「勿論よ……って、話が逸れてる」

霊夢がそう言うと、早苗は深呼吸をして落ち着くと、仙台四郎と言う人がどう言う人なのか話し、本当の神様になっているという事もいと、霊夢の目が輝いた。

「!!?そんな偶像が作られる位の神様になっているのなら、勝手に神社に祀るのも……」

「それはどうかしら?」

と、其処に丁度良い時に帰って来た華仙。

霊夢にお土産の団子を渡すと、話し始めた。

「福の神は店を繁盛させる為に立ち寄ってる訳じゃないと思うの」「ほえ?」

「そうなのか?」

霊夢と魔理沙のその言葉に頷く華仙。

「ええ。さつき里に行つて福の神の本当の姿を見てきたわ」

「!!?本当か!?!?」

その反応をみた華仙は面白そうにクスクス笑う。

「ええ。でも、貴方の思っているような福の神ではないかも知れないけど」

「？」

それを聞いて霊夢は首を傾げた。

華仙はそれには反応をせず、続けた。

「福の神は最初から繁盛するような店にしか立ち寄らないのです。下心丸出しで福の神を呼ぼうとしたり、他店の繁盛を妬む余りに店の雰囲気害するような所には立ち寄らないでしょう」

華仙はそういうと、霊夢に渡したお土産の団子を一つ掴み、口に持っていていった。

「つまり、福の神は繁盛が約束された店の最後の後押しをするだけで事です」

それをいうと団子を口の中に放り込んだ華仙。

対して、その言葉に頷く早苗。

しかし、霊夢は不満そうである。

「つまり、結局はお店の努力じゃん」

「それが全てって事だよ、霊夢」

「……あのさあ、努力なんて当たり前なの。うちだって精一杯努力してるのに今の現状よ？これ以上、努力なんて……」

「葵や私に掃除洗濯といった家事諸々を任せてる馬鹿は誰だっけ？」

と、霊夢の後ろから雪華そう声を掛けた。

「？あら？貴女は？」

「うん？あゝ、そうだったね。初めまして〜！別の幻想郷から引越してきた雪華だよ〜!!？よろしくね〜!!？」

そう言いながら雪華は華仙に近付き、その耳元で何かを呟いた。

しかし、霊夢にはその言葉は聞こえていない。

ただ、分かるのは華仙が驚愕した事だけである。

その後、早苗が仙台四郎の人形を探して持ってくると言ってくれて、それに嬉しそうな顔をして約束した霊夢だった。

## 第百五十八話

雨が降りしきるお昼の事、博麗神社では珍しく霊夢が一人でお茶を居間で飲んでいた。

「……たった一人の日って、本当に久し振りね。何時もなら葵がいたり、時々帰ってくる歩がいたり、魔理沙とかがいたり……幼い頃以来かしらね」

霊夢はブーツと天井を見ている。

昔を懐かしんでいるのだ。

初めて葵と会った日から始めて今までを振り返る霊夢。

と、そんな時にすぐ近くから水の音が聞こえ始めた。

霊夢は部屋の中を見渡してみると、天井から水が滴り落ちていた。どうやら、雨漏りの様だ。

「……はあ、仕方ない」

霊夢はそう呟くと、その場から立ち上がり、修理道具を取りに行った。

\*\*\*

翌日、霊夢は帰って来た歩に看病されていた。

霊夢と歩の側には鈴仙と雷羅もいる。

「うう……頭痛い」

「霊夢、大丈夫か？」

「あゝ、これは夏風邪だな」

「貴女、昨日何したのよ」

鈴仙が薬鞆から薬を出しながら聞くと、霊夢は答えた。

「昨日……居間の屋根が雨漏りして……修理してた」

「あの雨の中、修理してたのか……それは夏風邪も引くな」

「俺が早めに帰って来れば良かった……」

雷羅はそれを聞くと溜息を吐いた。

「歩の所為じゃないわよ……」

霊夢はそう言うと、咳をした。

歩は額に載せてる布を濡らしなおした。

鈴仙は薬袍から風邪薬を出しながら、一つの質問をした。

「あの、別に私達呼ばなくても葵さんに治して貰えば良かったんじゃない……」

「葵は今日、人里で慧音の手伝いをしてる」

歩が答えると同時に部屋の障子戸が開き、雪華が片手にお粥と林檎が乗ったお盆、もう片手に水桶を持って来た。

雪華は置いてあった水桶のすぐ隣に持ってきた水桶を置き、歩にはお盆を渡した。

「ほら、お粥を作ってきたから食べさせてあげて。あと、林檎も持って来たからコレをすり潰して食べさせてあげる事……って、言わなくても良いか」

雪華はそう言うのと水桶を見て、その上に掌を向けた。  
すると、水は氷となった。

「あ、そっか。雪華さんは雪女だったわね」

『さん』付けなくて良いよ。言いにくいなら渾名で呼んで」

「ううん、じゃあ雪華。でも、雪華はルカさんの様には出来ないんですね」

「ん？別に出来るよ？けど、面倒うだから嫌だ」

「え……」

「ルカがどうかは知らないけど、私の場合、アレするならまず場所の計算をしないといけないからね。少しズレたって別段問題ないけど、その計算が面倒だからしたくない」

「……雪華、あんたもしかして面倒臭がり屋？」

「今さら？」

霊夢からの言葉をさらりと流し、イキナリ立ち上がった。

「？何処に行くんだ？雪華」

「人里。葵を連れてくるわけじゃないけど、食材とかは取ってこないとね……あ、そうそう」

雪華は何かを思い出した様にして歩に近付き、風邪薬を取った。

「!?？返せ!!？」

「返せって……これはある意味必要は無いんだけど……気付いてない

か

雪華は最後の一言だけ本当に小さく、それこそ鈴仙達以外に聞こえないぐらいに小さくそう呟くと、風邪薬を歩に返した。

「!!?」

「んじや、私は食材買ってくるよ。あ、鈴仙達はもう帰る?それなら途中まで送るけど?」

「そうだな。鈴仙、そうするか」

「そうね……それじゃあ、お大事に」

鈴仙達はそう言うと、雪華の後に続いて出て行った。

「……雪華は一体、何がしたかったんだ?」

「さあ?……ケホッ」

「霊夢、大丈夫か?」

歩は一度布を濡らし、氷を砕くと袋に詰め、霊夢の頭の下に置いた。

「うん……ありがとう」

「御礼は治ってから貰うよ。さて……じゃあ、雪華が作ってくれたお粥を食べさせるぞ?」

「ええ……ん?『食べさせる?』」

霊夢は歩の言葉に一瞬首を傾げるが、しかし歩が持っているレンゲを見て何をしようとしているのかを知った霊夢は朴を紅く染めた。

(おおおお落ち着きなさい霊夢!!?そう、これはただただの看病なのよ!!?看病!!?あっちもそんな心は……あれ、そう思ったら何だか悲しく……)

頭の中でそう考え、そして自分にダメージを与える霊夢である。

歩は歩で、何故か落ち込んでいる霊夢に首を傾げるばかりである。

「霊夢?」

「……」

「おーい?霊夢ー?」

「……え、何?歩」

「いや、お粥を食べさせよう……」

「あ、うん……ありがとう」

霊夢は歩からレンゲを受け取ろうとしたが……しかし、歩は渡さな

かった。

「?歩?」

「あ、いや……お、俺が食べさせてあげるよ」

「……」

それを聞いた霊夢はまたまた頬を紅く染めた。

(やつぱりー!!?)

霊夢の予想は的中し、歩は霊夢の口の近くまでレンゲを寄せた。

「ほ、ほら……あ、あくん……」

歩は顔を紅くしながらそう言った。

対して霊夢ももう何も考えられず、言う事を従い、口を開けた。

「あ、あくん……」

歩は霊夢にお粥を食べさせると、また食べさせる為にお粥を掬った。

その作業の間、終始二人は顔を紅く染めていた。

\*\*\*

お粥を食べ、林檎も食べ、薬も飲んだ霊夢は横になっていた。

「霊夢、体調はどうだ?」

「全く良くなった感じがしない……」

「まあ、そう簡単には治らないか……」

歩はそう言いながらまた布を濡らし直し、額に載せた。

「今日は絶対安静だからな?」

「分かって……」

霊夢は歩の言葉に同意しようとしたが、しかし、何者かの気配を感じ、口を閉ざした。

歩もどうやら感じたようで、障子戸の方を険しい顔で見ている。

霊夢はそれを見ると、静かに立ち上がろうとしたが、しかし、歩がそれを止めた。

「……」

「……今安静にしとく様に言ったばかりだろ」

歩は溜息を吐きながらそう言うと、無理矢理寝かせ、静かに障子戸に近付いた。



そして、取っ手を掴むと、勢い良く扉を開けた。

「誰だ!!?……って、魔理沙?」

開けて直ぐに見えたのは、魔理沙だった。

しかし、少し姿は違った。

服装は何時もの容姿だが、しかし何処かの鼠小僧のようにも見え  
た。

「……魔理沙、お前、変な宗教にでも入ったのか?」

「違う!!?」

「もしかしてそのほっかむりも……」

「だから違うって言ってるだろ!!?」

と、其処にフラフラとやって来た霊夢は魔理沙のその姿を見て……  
引いた。

「ちよつと、魔理沙……変な宗教に入ったの?」

「何でお前も同じこと言うんだよ!!?……って、違う!!?」

魔理沙は霊夢に対して指を指した。

「私はな!!?お前のその風邪を治しに来たんだ!!?」

「え、治しに?」

魔理沙のその言葉に二人して訝しむ。

何故なら、治すための道具もない。かと言って、病気そのもの（重  
病は一時的に）治せる薬もない。

これで訝しまない者はいないだろう。

「なあ?魔理沙。一応聞くけど、どうやって治すんだ?」

「霊夢……お前のそれは治らない」

「今治すって言った奴からまさかの『治らない』発言されたわ」

霊夢のその言葉に対して、しかし魔理沙はチツチツと指を振った。

「そういう意味じゃなくてな。放っておいたら治らない。寧ろ悪化す  
る一方だって意味だ」

「はあ?」

霊夢と歩は魔理沙の言っている意味が分からなかった。

普通、風邪というのは安静にしていれば治るものである。

それを魔理沙は治らないと言ったのだから仕方がないだろう。

しかも、姿が泥棒の様だ。益々信じ難くもなるだろう。と、此処で歩が一つ質問をした。

「なあ？魔理沙はどうやって霊夢が風邪を引いてる事を知ったんだ？鈴仙と雷羅から聞いたのか？」

その言葉に首を横に振って否定する魔理沙。

「いや、私が霊夢の病気を知ったのは、そして言い当てたのは……」  
そう言いながら持っていた帽子の中を探り、一匹の白蛇を手掴みで出した。

「この白蛇のお陰なんだ」

霊夢はその白蛇を受け取り、見てから、やはり引いた。

「……やっぱり変な宗教……」

魔理沙はその言葉を聞くと、額に怒りマークを浮かばせるが、しかし耐えて言い始めた。

「……昨日、お前、雨漏りで屋根の修理してただらろ？」

「！なんでその事を？」

霊夢は驚き、魔理沙に対してそう聞くと、魔理沙は少し嬉しそうに言った。

『その時に屋根裏に棲んでいた蛇を閉じ込めてしまったんだ。その蛇の無念が溢れ出て、霊夢が病になった』……そう、白蛇が言ってる。信じれないなら、ちよつくら紅魔館に言つてマリア連れてくるぜ？」「すごい自信だな……」

歩は驚いた顔でそう言うと、ますます嬉しそうな顔をする魔理沙。

「まあ、信じるも信じないも、本当は私は構わないが……なあ？梯子は何処だ？」

「霊夢、梯子は？」

「納屋に……」

すると、魔理沙は霊夢に指を指し、片目を瞑って言った。

「待ってるよ!!？すぐ治してやるからな!!？」

そう言うと、魔理沙は納屋の方へと走って行った。

「あ、魔理沙!!？俺がやるから!!？ごめん、霊夢。ちよつと行ってくる!!？」

「ええ、分かってるわ。いつてらっしやい」

歩は霊夢のその言葉に後押しされ、魔理沙の後を追って行った。それを見届けた霊夢は、部屋の中で待機するのだった。

\*\*\*

魔理沙と歩が戻って来た頃には、霊夢は何時もの服に着替えており、今は居間で魔理沙の話を聞いていた。

魔理沙の話では、昨日、里をフラフラ一人で歩いていたら、小さな祠の前で白蛇を見つけ、縁起が良いからお稲荷さんの近くに落ちていた布で白蛇を包み、持ち帰った。

しかし、家に着いたら蛇の様子がおかしくて、蛇の言う通りに布を耳に当ててみると蛇の話が聞けた、という訳らしい。

因みに、魔理沙曰く、屋根に閉じ込められていたのはその蛇の仲間らしい。

「へく。っていうか魔理沙、普通に罰当たりよ、それ」

「ん？何でだ？」

「だって、神の使いかもしれないじゃないの」

「あのなく。チャンスを確実にするのが私のモットーだ」

「だからってそんな事したら、それこそマリアが起ころんじや……」

「間違ったらまた石像ね。その後はマリアが夢幸にボコられるんだろうけど」

そんな想像をする霊夢。しかし、その後はレティシアが出てくることも予想が出来る三人であった。

「……まっ、兎に角、このマジックアイテムはあげないが、代わりに私がお金を稼ぐ役をやってやる」

「え？」

「どういうことだ？魔理沙」

二人が首を傾げてそう聞くと、魔理沙はニヤリと笑みを浮かべた。「此奴が『良い金になる話がある』って言ってるんだぜ」

魔理沙はその言葉を言うと、「鈴奈庵に行ってくるぜ」と行って、神社ないから出て行き、しかしその夜にはまたやって来て成果を話した。

その蛇は鈴奈庵の中にある『百鬼夜行絵巻』の中に封じられている自分の魔力を取り戻すために、魔理沙を利用していただけだったのだ。

しかし、自分を信用してくれたからと言う事で後で褒美を送ると言ったらしい。

その時、百鬼夜行絵巻を使用したからその使用代として何かくれと、その場に立ち会った『本居 小鈴』が言ったことにより、小鈴にもまた褒美が送られるらしい。

「結局、あんたの言った通り、風邪じゃ無かったわけね？雪華」

「だから言ったじゃん。でも、良い思いは出来たし、霊夢にとっては良かったでしょ？」

霊夢は雪華が買って来てた具材からすき焼きにする事に決め、今現在、お肉を食べながらそんな会話を二人はしていた。

葵はそれを聞いて、苦笑しながら野菜を取っていた。

「まあ、でも、本当の風邪になったらまた俺が看病するよ、霊夢」

「!!..その時はお願いな？歩」

歩と霊夢はそう言うと、互いに笑顔を交わしたのだった。

## 第百五十九話

真夏が終わり、今は夏から秋へと移り変わろうとしている時期の中、霊夢は早苗に呼ばれた為、集合場所の守矢神社の石段に向かっていた。

「変な所を集合場所に指定したもんね、早苗は……何かあったのかしら」

そんな言葉を言いながら移動しているその前方にチルノがいた。

その近くには珍しく大妖精がいない。

「チルノ、何してるのよ」

「あたい達と一緒に遊ぶんだ!!? 霊夢!!?」

チルノは大きな声で霊夢に指を差しながら何故か命令形でそんな事を言ってきた。

「はあ……悪いけど、私はこれから都合があるから一緒に遊べないわよ」

「そつかく、なら、仕方がないね!!? 今日諦めるよ!!?」

チルノはそう言うと、そのまま降りていった。

霊夢はそれを見届けると、移動を再開した。

\*\*\*

守矢神社の石段には、早苗ともう一人いた。

「想起、あんたまで何でいるわけ?」

「早苗に呼ばれたんだ。霊夢も?」

「そうよ」

二人はそんな会話をすると、早苗の方にはほぼ同時に顔を向けた。

「で、用って何よ。私、コレでも忙しいのよ?」

その言葉に早苗は苦笑を浮かべたが、要件を言った。

「実は、うちにお客さんが来たのですが……」

「お客さん? 参拝客?」

想起は首を傾げながらそう言うと、早苗は肯定した。

それを見た霊夢は訝しみ、質問した。

「別に可笑しな所なんて無いじゃないの」

「まあ、そうですねど……何というか、違うんです」  
「？違う？」

「はい。その、雰囲気幻想郷に昔から住んでいる人と違うんです。私や想起さんに雰囲気似ていて……」

「……幻想入りね」

霊夢はそう結論を出すと、石段を一段登った。

「分かったわ。後は何とかするから其奴と会わせなさい」

「はい!!？」

早苗はそれを聞くと、石段を登り、全員を先導するように歩き始めた。

そして、全員が石段を登り切りるとそのまま本殿に入り、客間の障子戸を開けると、其処に座って待っている黄色の目に腰に銃剣を差した青年がいた。

「……あんたが幻想入りしてきた奴ね」

霊夢がそう聞くと、青年は首を横に振った。

「え、違うの？」

想起がそう聞くと、今度は首を縦に振って肯定した。

「早苗、どういうことよ」

「いえ、私も幻想入りした人だと思ってたので……」

早苗は本当に困惑している様で、顔が困った顔をしていた。

それを見たからなのか、青年は口を開いた。

「僕は『五十嵐 月日』って言うんだ。よろしくね」

月日という青年が自己紹介をした為、早苗達もしようとしたら、それを月日が止めた。

「大丈夫だよ。知ってるから」

三人は知られている事に驚いた様子を見せていなかった。

寧ろ、その言葉のお陰で合点がいった。

この月日という青年が帝達と同じ、別の幻想郷から来た人間であることに。

早苗はその後、霊夢達に座る様に促した。

その促しを受け、全員が座布団の上に座ると、話を始めた。

「で、あんたは何処の幻想郷から来たわけ？如月？龍？岩槻？ミコト？帝？それともその何処にも属さない別の所かしら？」

「帝達の所の幻想郷から来たんだ。それから僕も住んでるその幻想郷には如月や龍もいるよ」

霊夢の質問にそんな風に答えた月日。

「帝さん達の……」

「そう。住んでいる幻想郷では、僕は早苗と一緒に守矢神社の方に住んでいて、『今』は神奈子様を信仰してるんだ」

「『今』は？それは『前』があつたってこと？」

「違うよ。つまりは……」

月日のその言葉の途中で何かがグルンツと回った。

すると、月日の目の色が黄色から緑色に変わった。

「こういう事だ」

「!?？あんた、口調が……それに目の色も」

と、イキナリ口調も変わった月日。

「……僕と同じ、二重人格」

「そういう事だ。因みに、俺達は一つの人格に一つの能力がある。俺は『-』の概念を司る程度の能力』だ」

「それなら月日さんは『+の概念を司る程度の能力』ですか？」

早苗がそう聞くと「ああ、そうだ」と言っただけで肯定した月日とは違う人格。

「……えっと、名前は？」

「『五十嵐 明』だ。こっちの俺は諏訪子様を信仰してる」

「二人とも別々の神様を信仰してるってわけね。本当に真逆なのね」  
想起が質問し、それに答えた明。その明の言葉に霊夢はそう言葉にしたのだった。

「で、あんたは何の用事で此処に来たわけ？」

霊夢がそう聞くと、明は一度、早苗とその隣にいる想起を見てから言葉にした。

「唯の興味本位だ。遊びに来ただけだ」

と、其処でまたグルンツと回り、

「後はこっちの早苗の様子を知りたくてね」

月日に戻ると、そう言葉にした。

「?私の?」

「そうだよ。あっちだと僕と早苗は付き合ってたからね」

それに三人とも衝撃を受けた顔をした。

「え……本当に?」

「本当だよ」

「そ、そうなのですか!?!?」

「そうだよ」

「……」

「想起?どうしたんだ?」

霊夢と早苗がそう言う中、一人だけ何も言葉を発さず、顔を下に向けている想起に心配で声を掛けた月日。

その声が聞こえたようで、ビクツと驚いた様子を見せると、顔を元の位置に戻した。

「いや、何でもないよ」

(……なるほど)

想起のその様子に霊夢と月日は何かに納得がいった様子だった。

「……さて、それじゃあ僕はもう帰るよ。此方の神奈子様にも信仰したし、明も諏訪子に信仰したようだし、それに、早苗達とも話せたからね」

「そう、分かったわ」

そして、全員が一度境内に出ると、何処からともなくスキマが出てきた。

「それじゃあね」

月日がそう挨拶すると、またグルンツと回り、明が出てきた。

「じゃあな」

それに対して気にした様子もない霊夢達は、

「ええ、そうね」

「また会いましょう!!?」

「そっちの早苗と霊夢、それから帝さん達にもよろしくね!!?」



三人のその言葉を聞くと、明はそのままスキマへと入り、帰って行ったのだった。

「……それにしても、彼方の私と月日さんが」

早苗はそう言うと、隣にいた想起に視線を移した。

それに気付いた想起は首を傾げる。

そして、早苗は早苗で顔を紅潮させ、顔を背けた。

それを始終見ていた霊夢は、呆れたからなのか、はたまた想起の鈍感さへなのか、溜息を吐いたのだった。

## 儚月抄 第一百六十話

博麗神社の境内には、霊夢と葵が紫の前に立っている光景があった。

葵はとても真剣な顔で、霊夢はとても面倒臭そうな顔で立っていた。

その境内が見える縁側では、ルカ、鬼灯、想起、雪華が座っていた。ルカと想起の膝の上にはそれぞれ、ノアとソロモンが気持ち良さそうに寝ている。

「さて、貴女達があの時からちゃんと怠けず、怠らず、ちゃんと『神降ろし』の練習をしていたか見るわよ。二人とも、大丈夫？緊張してないかしら？」

「はい、大丈夫です!!？」

「緊張なんてしてないから大丈夫よ」

二人とも自然体で立っている事を目で見て確信すると、紫は葵達から少し離れ、殺気をぶつけた。

「!?？」

「二人とも……私を殺す覚悟でやりなさい。今の貴女達は其れぐらいじゃないと私には勝てないわよ?」

「で、ですが……」

葵がそれは無理だと一言断りを入れようとすると、葵の左頬スレスレに弾幕が通った。

それはとても素早く、葵の左頬が少し焦げた。

「無理という言葉は受け付けない。もしまた言えば、今度は分かるわね?」

紫は怒った顔でそう言うと、葵はへたり込んでしまった。

と、それと同時に葵達の後ろから爆発音と誰かの悲鳴が上がった。

「☒☒」

その近くにいた三人が石段の方を見ると……其処には歩が倒れて

いた。

「あ……」

「歩……！！？」

「や、やっちゃった……」

霊夢と葵は直様、歩に近付き、容態の確認をした。

一応は怪我は無いようだった。

対して、紫は冷や汗を流して硬直している。

ただ葵を脅かす為の弾幕。それももう誰も来ないと思った時にこれなのだ。

紫の心中は罪悪感で一杯である。

と、其処にもう一人のお客さんが見えた。

「こんにちは〜!!? 霊夢はいる……え、何で歩が倒れてるの!?!」

ユニは石段上がってすぐに倒れてる歩を発見し、驚いた。

「ん? 珍しいな。咲夜が来るなら兎も角、ユニが来るなんて……」

ルカがそう聞くと、ユニは驚きのあまりに硬直している。

「あくあ、硬直してるよ、これ」

雪華がそう言いながらユニの目の前で手を振る。

しかし、やはり反応は無い。

「……歩を運ぶついでに其奴も連れてくわよ」

霊夢のその言葉にその場の全員が賛同した。

\*\*\*

その頃の紅魔館では、ユニ以外の全員が図書館の中にある本を移動させていた。

「あく、その本はもつとそっちに寄せて頂戴」

「コレぐらいでしようか?」

「そうそう」

レミリアがペスにそう指示し、ペスはそれに従う。

「うんしょ、うんしょ……わ、わわ!?!? わわわ!?!?」

「つと、危ない危ない。大丈夫か? マリア」

「う、うん。大丈夫だよ、狼」

別の所ではマリアが沢山の本を運んで、転けそうになった所を狼が

素早く助ける光景が見れた。

今は全員でロケットを置く場所の確保を行っている。

この紅魔館で一番広いのは実の所、図書館であり、だからこそ、ロケットを置く所も此処に決定したのだ。

「ふう……それにしても、お姉様は本当に行かないのですか？」

レミリアは自分が運んだ本をその場に置くと、同じく本を運んでい  
るレティシアにそう聞いた。

すると、レティシアは何時もの通りに笑いながら答えた。

「クスクス、ええ。行きたいけれど、今回はパスしておくわ。貴女の考  
え通りなら、鬼灯達も付いて行くでしょうしね。でも、私が行けない  
分、レミイ達が楽しんできて頂戴♪私はフラン達と此処に残って貴女  
達の帰りを待つて置くわ」

レティシアはレミリアと少し離れた場所にいるアルカを見てそう  
言うと、また本を運ぶ為に、本の山の方へと向かっていった。

「……」

レミリアが残念そうな顔をしていると、アルカがポントと頭に手を  
乗せてきた。

そして、そのままレミリアの頭を撫で始める。

「……お兄様」

「レミイ、姉上達が楽しめない分、俺達が楽しんでこよう。そして、  
帰ってきたら思い出を話そう。姉上達もそれを楽しみにしてくれる  
筈だ。な？」

アルカがレミリアを安心させるために笑顔を向けると、レミリアも  
それに安心した様で、アルカに抱き着いた。

「……そうですね、お兄様」

それを遠目で見ていたレティシアは、とても嬉しそうな目でレミリ  
ア達を見ていたのだった。

\*\*\*

歩が倒れてから数分後、歩は目を覚ました。

「歩、起きた？大丈夫？何所か怪我とかしてない？」

その歩の隣には霊夢がとても心配そうな顔で歩の顔を覗き込んで

いる。

「あ、うん。大丈夫だ。……それよりも、何で俺、倒れたんだっけ？」

「紫の弾幕に当たって気絶したのよ」

「霊夢はそう言うのと、「水飲む？」と聞いた。」

「それに対して頷いて返すと、霊夢は歩に水を渡した。」

「……そっか、紫が」

歩は一口飲むと、そう呟いた。

「そう、紫がね。あ、安心して頂戴。紫にはちゃんと制裁を加えておいたから」

「霊夢は笑顔でそう言った。」

しかし、その笑顔は黒かった。

「あ、そうなのか。俺も制裁を入れたかったのにな」

対して、歩はそれを気にせず、むしろ仕返しする気満々でそう言葉にした。

と、其処で障子戸が開き、葵とユニが入ってきた。

「あ、歩さん、起きたのですか？もう大丈夫ですか？」

葵がそう心配すると、歩は大丈夫だと笑顔で答えた。

そして、そのまま歩と霊夢は視線を葵からユニに移した。

「で、紅魔館でメイドをしてる筈のあんたが何をしに来たわけ？」

「いや、実は……」

と、其処で本題に入ろうとすると、今度は雪華が入ってきた。

「あ、起きたのか。無事それで何より。で、霊夢」

「何よ、雪華」

「霊夢が少し不満気な顔をするが、雪華はそれを気にせずに言った。」

「境内にお客さんが来てた。参拝客ではないけど、倒れてたから他の客間に寝かせてる。別に良いよな？」

「そう、分かったわ。……歩、悪いけど」

「霊夢は申し訳なさそうな顔をする、歩はそれ頷いて返した。」

「ありがとう」

「霊夢はそう言うのと、その場を立ち上がり、雪華に付いて部屋から出た。」

そして、雪華が別の客間の部屋を開けると、そこには兎耳が付いた女性が布団で寝かされていた。

## 第百六十一話

兎を見つけたその日の夜、霊夢と葵と歩は永遠亭へとやって来ていた。

その兎は姿からして竹林に住む妖怪兎。そう考えたからこそ、此処にやって来たのだ。

歩の検査は葵が治したのもあり、歩自身も能力が能力な為に、その辺の心配はしていないのだ。

そして、永遠亭へと到着すると、霊夢は扉も叩かずに勢いよく扉を開けた。

「ちよつ、霊夢!!? 流石にそれはダメ……」

「宇宙人!!? いるんでしょ? 話があるから出て来なさい!!?」

「霊夢、落ち着けて……」

葵と歩が二人して霊夢を落ち付けようとしていると、其処に鈴仙と雷羅がやって来た。

「何だよこんな満月の、しかもこっちは例月祭が終わった所で……」

「普通、夜中に大声は出さないわよ?」

二人は呆れた顔をして霊夢達を出迎えた。

それに対して霊夢は腰に両腕を当て、仁王立ちし、怒った状態で要件を言った。

「あの赤青服の宇宙人を呼んで頂戴。あんた達の仲間が怪我してうちの神社を占領してる事を言いに来たのよ!」

それを聞いた二人は一度互いに顔を見合わせると、鈴仙だけが永琳を呼びに行った。

「……それで? 俺達の仲間がお前の所にいるって本当か?」

「そうよ。ねえ? 二人とも」

霊夢は葵と歩に同意を求めると、二人は曖昧に頷いた。

「まあ、そうだね」

「服はてる達と同じだったし、兎耳も有ったからな……」

それを聞くと、雷羅は顔を顰めた。

「いや、そうだとっても俺達の仲間は誰一人として怪我は……」

その言葉の途中に「雷羅」と呼ぶ声が聞こえてきた。

全員が雷羅の後ろを見てみると、其処には幻想郷随一の名医である永琳がいた。

「あ、やっと出てきたわね、宇宙人。あんた達の仲間が怪我してるって神社を占拠して困っているの！何とかしてよ!!？」

と、霊夢はやはり怒った状態で言うと、永琳は首を傾げた。

「私達の仲間？怪我？」

「そう、傷付いてた妖怪兔がうちで寝ているの。怪我の方は葵が治したけど、それでもまだ気絶してるんだから、引き取るなり何なりしてよ」

「ちよつと待って。雷羅、例月祭は……」

「無事に終わりましたよ。誰一人として怪我人は出てません」

雷羅は永琳の言葉の途中でそう言った。

「じゃあ、もしかして、てるかしら？」

「怪我人なんて知らないよ。こうやって話を聞いていたけど、私の知る限り妖怪兔は一匹も減っていない」

と、今度は霊夢の背中からてゐが上半身だけ出して声でそう言うと、霊夢と葵は驚いた表情をした。

歩はこの中で唯一、てゐが来てたのを知っていた為、驚いてはいなかった。

「お、てゐ。どこ行ってたんだ？鈴仙が怒ってたぞ？」

雷羅がそうてゐに言うが、しかしてゐは相手にしなかった。

「ふあああ。祭りが終わると何故か兎達が陽気になるからね。少し散歩して酔いを覚ましてただけ」

てゐは『何故か』の部分強調して言ったが、葵達は全く分かっていなかった。

その話に付いていけるのは永遠亭の住民だけなのだから仕方がないのかもしれないが。

「まあ、そういう訳だからわたしや疲れたよ。奥で休む」

そう言って玄閔を上がり、家の奥へと行こうとするてゐを、

「あ、ちよつと待って。てゐ」



永琳が止めた。

「ん〜？何だい？」

「祭りの最中、神社の方で気になることは無かったかしら？」

そう聞かれたてゐは少し考えると「……ああ、そう言えば、なんか爆発してたね」と言い、永遠亭の廊下を走って行った。

「ば、爆発？」

永琳が驚いた顔をした後、直ぐに霊夢達の方を見た。

対して霊夢達三人は、顔を逸らしたのだった。

\*\*\*

霊夢達は永琳に客間に案内された。

雷羅は永琳にお茶の用意をお願いされたので今は居ない。

「あのね〜、そっちが知らないって言っても、うちに傷付いた妖怪兎が眠ってるのは事実なの!!？今は傷付いてないけど!!？」

「怪我は治しましたがけど、確かに兎がいるのは本当です」

葵がそう言うと、永琳は頭をまた傾げた。

「う〜ん。妖怪兎って言ったってね〜」

「まあ、あのとゐが知らない妖怪兎はいないだろうしな……」

歩のその言葉に永琳は頷いた。

「一匹くらい知らない妖怪兎が湧いて出てきたって不思議じゃないでしょ？妖怪なんてボウフラみたいなもんだし」

「いや、ボウフラじゃないからね？霊夢。寧ろ、妖怪は人間よりも生まれにくいから」

葵のその言葉に、永琳は頭の中で賛同した。

「それで？その妖怪兎は何か言ってなかったの？」

「今の所は唸っているだけです。けれど、誰にやられたとかは話そうとしないのです」

「あ、そう言えば、雪華が綺麗な衣を持ってたわね。私も見せてもらつたし、彼奴がそんなのを持ってたら絶対に自慢してくるでしょうから確実にあの兎のよ」

それを聞いた永琳は、瞬きを一度だけした。

「う〜んとね。その妖怪兎は気を付けた方が良いわ。私の想像では、

大方狸に化かされているんだと思う」

「何ですって？」

「てゐるが知らない妖怪兎が居ないってのは本当よ。てゐるが全員無事だつて言うのなら、神社にいる妖怪兎は偽物の筈」

「なるほど、確かにそうですね」

その言葉に納得がいった葵と霊夢。

「でも、それなら私が治した怪我は治らない筈なのですが……」

「それは能力か何かでしょう。それなら納得もいくでしょう？・さて、結論も出たわけだし……貴方達は早く帰った方が良いわよ？」

「「？」」

永琳からそんな言葉を聞いた三人は、意味が分からずに頭にハテナを浮かべた。

それに苦笑を漏らしながら永琳は続ける。

「今頃、神社の食べ物を食べられているわよ？その雪華という子がいたとしても四六時中見張れるわけでもない筈。早く帰らないと無くなっちゃうわよ？」

「!!?そ、そうね。急いで帰らないと!」

それを聞いた霊夢は急いで立ち上がると、慌てて客間を出て行った。

「あ、霊夢!待って!」

「あ、こんな夜分にお邪魔して悪かったな!じゃ!!?」

それを言うと、葵も歩も客間から急いで出て行ったのだった。

\*\*\*

「……どうしてそんな嘘を?それに、化ける妖怪なら狐も入れていいのでは?」

霊夢達が帰った永遠亭では、永琳が霊夢達との話を鈴仙と雷羅に話していた。

そして、それを聞いた後に鈴仙からそんな質問が返ってきた。

「あの葵がいたという事は、近くにはあの狐の祖である鬼灯もいた筈。狐だと言ったなら即座に葵が嘘だと分かるわ。例え嘘を信じ易いぐらいに純粋な葵でも、身内がどんな立場なのかぐらい忘れないわ。な

ら、『狐』という選択肢は最初から消えるでしょう?」

「まあ、そうですね」

「それに……鈴仙、雷羅、驚かないで聞いてくれるかしら?」

それに対して鈴仙と雷羅は「はい」と返事をする、永琳はその兎が妖怪兎ではなく、恐らく月の兎だと教えた。

それに対してなぜ分かるのかと鈴仙が質問すると、永琳はこう答えた。

「貴方達には話していなかったけど、例月祭の時、神社の方に月の羽衣が降りていくのを見たの」

その言葉に驚いた表情をした鈴仙と雷羅だった。

\*\*\*

その翌日。霊夢が朝の掃除をしていると、兎が寝ている部屋から物音が聞こえてきた。

「あく、どうやら起きたようね」

霊夢はそう言うと、羽衣を持った。

と、同時にその部屋が開き、兎が慌てた顔をしているのが見えた。

「何を探しているのかしら?」

霊夢のその声に最初こそ警戒して少し離れた兎だが、しかし霊夢の持っている羽衣を見ると、見る見るうちに明るい顔になった。

「!それそれ。それ私の羽衣!」

「言われなくても返すつもりはないわ」

霊夢がとても柔かな顔でそう言うと、兎は「意地悪」と一言言うと、一瞬にして霊夢の前から消えた。

「!?」

それに対して驚いていると、霊夢の隣から小さな叫び声が聞こえた。

「!?あ、何だ。雪華か……」

「全く。気を付けてよ、霊夢」

そう言いながら、雪華は兎の片腕を掴んでいる手を霊夢に見せた。

「な、何で……」

その兎の質問に対して、雪華は意地悪い顔で、

「内緒♪」

そう言ったのだった。

## 第百六十二話

「え？ 兎さんが居なくなつた？」

お昼頃、葵がいつも通りにやって来て、境内を履いていると、霊夢からそう聞かされた。

「そうなのよ。今朝は起き上がって私と雪華の前に姿を現したんだけど、私がちよつと寝た間にね」

霊夢はそう言いながら縁側に座り、煎餅を齧った。

「何処に行つたのでしょね？ 心配です……」

「妖怪を心配したって意味ないでしょうに。彼奴ら治療能力高いんだから」

葵の言葉に霊夢はそう言うと、煎餅の近くに置いていたお茶を一口飲んだ。

「怪我してたのだから、心配するのは当たり前だよ、霊夢」

葵はそう言うも、霊夢は「葵はね」と言うだけだった。

「……さて、それじゃあ」

『神降ろし』の練習、ですね」

「ええ、するわよ、葵」

「はい!!？」

そして、二人は少し距離を離すと、神を降ろす練習に入った。

\*\*\*

二人が練習をしている途中、ルカ達がやって来た。

そして、二人の練習風景を見ていると、次に魔理沙と夢幸がやって来た。

「おう、今日もやってるのか」

「……ほう？ 俺のような『天才』とは無縁の努力をしているな」

二人は葵と霊夢の練習を見ると、そんな事を言った。

「……？ お前は誰だ？」

「？」

と、此処で夢幸は縁側に居た見慣れぬ女（雪華）を見て、そう聞いた。

対して雪華もまた、誰か分かっていないような顔をしていた。

「あく、そっか。夢幸と雪華は初対面だったな」

「あれ？そうだったっけ？」

魔理沙のその言葉に歩はそう聞き返した。

それを聞いた夢幸は、

「別にどうでもいいがな」

そう言った。

対して雪華は面倒そうな顔をして頭を掻いた。

「あく、自己紹介とか面倒いな……まあ、いいや。アルカに『自己紹介ぐらい面倒臭がるな』って前に言われたしな。私は雪華。此処の居候。以上」

「……短いよ!?？」

雪華の自己紹介に対してツツコむ想起。

「そうか。俺は夢幸だ」

「ああ、よろしく」

二人はそう言うと、顔を『神降ろし』練習中の葵達に向けた。

それ以上、話すことが無いからだろう。

そして少しすると、雪華が立ち上がり、外に出た。

「ん？どうしたんだ？雪華」

魔理沙がそう聞くと、雪華は振り向き、答えた。

「前に住んでた幻想郷でも同じ光景を見たから飽きた。アルカからかってくる」

「お、おう」

魔理沙の反応を見ると、そのまま紅魔館の方へと移動して行った。

「……ここ最近、彼奴と接して分かったけど、あのレミア達の兄をからかう時だけはやる気出すよな」

「いや、アルカだけじゃなく、誰かをからかう時には彼奴、やる気を出すぞ」

魔理沙の言葉に、鬼灯はそう付け加えると、溜息を吐いた。

\*\*\*

紅魔館では、ペスが玄関ホールを掃除していた。

すると、玄関扉が急に開いた。

「……あら？貴女」

「ねえ？アルカ何処にいるか知らない？」

雪華の要件を聞いたペスは教えるかどうか悩んだ。

理由は一つ。全く見たことが無い怪しい人物だからだ。

初対面なのだから怪しむのは当然である。

と、そこに左から誰かの気配を感じたペスと雪華。

その気配の方向を見ると、丁度良くアルカがやって来た。

「ペス、掃除は順調か？」

「アルカ様？どうして此処に……」

「いや、手伝いに……ん？」

と、此処でアルカは雪華の存在に気付くと、苦笑いを浮かべた。

「せ、雪華。どうして此処にいるんだ？」

その質問に、雪華はニコニコ笑顔で答えた。

「どうしてって、決まってるでしょ？私がここにいる理由なんて」

「いや、分かりたくないんだが……」

「じゃあ、強制的に分からせてあげよう!!？アルカで遊びに来た!!？」

その言葉を聞いたアルカは、来た廊下を全速力で駆け抜けた。

「あーこら!!？私の遊び相手になってよ!!？暇だから!!？」

雪華はそう言うと、アルカの後を追って行った。

「……何だったのかしら？」

残されたペスはどうも、そう言葉にして、ボー然としていた。

\*\*\*

其処から少し時間が経った頃には、紅魔館のテラステーブルに、グツタリした様子アルカと、満面の笑顔の雪華。そして、レミリアが居た。

「いや、やっぱりアルカ弄りは面白いね♪」

「止めてくれ。俺が疲れる。主に精神の方で」

「妖怪の弱点である精神を攻撃されたの!!？アルカ!!？そんな事した奴は絶対に許さない!!？私が仇を討ってくるから特徴を教えて!!？」

「青毛だが毛先に連れて黒になってる髪、それをポニテにした着物の

雪女だ」

「分かった!!? そいつ見つけて懲らしめてくる!!?」

「どう考えてもお前なのにどうして自分の所為じゃない様な反応をするんだ!!?」

「え? 私? そんな事した覚えがありません」

「雪華……!!?」

そう叫ぶと再びグツタリとなるアルカ。

対して、またニコニコ笑顔になる雪華。

「……アルカお兄様、大変な友達をお持ちで」

「……はあ」

遂にはレミリアから慰められてしまったアルカであった。

「……で? アルカはさ、また月に行くつもりなわけ?」

雪華が紅茶を飲みながらそう質問すると、アルカは姿勢を正して真面目な顔をして、答えた。

「ああ。レミリア達が心配だからな」

「アルカお兄様……」

「ふくん……」

アルカの答えに、雪華はそんな反応を返した。

「二度も行つて何が楽しいのかね」

「楽しい楽しくないはこの件に関係してない」

「分かっている分かってる。アルカ君はシスコンでおチビなヴァンパイアだからね」

「チビは余計だ!!?」

「私に身長で負けてるのに?」

「身長のをそれ以上言うな!!?」

ニヤリとした顔でそう言う雪華に対して、アルカは顔を真っ赤にして怒った。

「……あ、そうだ。アルカ、私今度、一度も戻ろうと思ってるんだけど」

「ん? そうなのか?」

「? 何処にかしら?」

アルカは雪華の言葉が何を意味しているのか分かったが、レミリアは



何の事な分かっていない。

「レミイ、俺が此処に再び戻ってくる前は雪華と同じ幻想郷に居ただろ？雪華はその幻想郷の事を指してるんだ」

「成る程、そうですね……ん？なら、もしかして」

「そうだ。雪華は久し振りに会いに行かないか？と言いたいんだろう。そうだろう？雪華」

「殆ど正解」

雪華はそう言うのと、紅茶を一口飲んだ。

「まあ、其れもあるけど、彼方にいるあんたの従者、こつちに連れて来なくていいの？」

「アルカお兄様の……」

「……そうだな。あの二人も連れて来るか。それで？雪華。それはいつ行くんだ？」

「一週間後ぐらいだよ」

「早いな」

「急に決めたからね、当然だよ」

雪華はそう言うのと、空を見上げた。

「……お、逆流星」

「あら？本当ね」

雪華のその言葉に吊られるようにして空を見上げたレミリアとアルカ。

その目には、確かに宙へと登っていく光が写っていた。

## 第百六十三話

時間は進み、今の月は長月のお月見の日である。

そんな日の夜。神無月神社では、葵手作りの団子を月が見える縁側で鬼灯以外の全員が食べていた。

……しかし、月が見えるといっても、生憎と雨が降っているが。

「……それにしても、雨だね。去年も雨が降ってなかつたっけ？それとも僕の記憶違い？」

想起が団子を食べながらそう言った。

対してルカはトマトジュースを飲みながら答えた。

「いや、去年も雨が降ってたから記憶違いじゃない。というか、この時期は殆ど、雨が降ってる気がするな」

「……そっか」

想起はその答えを聞いてそう返すと、微妙な顔をしてルカを見た。

「……僕も此処に来て、住むようになってそれなりに経つけど、こういう日にも飲んでると違和感が……」

「仕方ないだろ？満月の日は妖怪の力が一番強くなる。私も半分妖怪。今の私は吸血鬼の方に近いんだ。違和感があるのは私自身もそうなんだ。仕方ないと思つてそつとしとけ」

「それなら、霖之助さんもそうなの？葵」

想起がそう聞くと、葵は頷いた。

「はい、そうですね。霖之助さんですよ」

それを聞くと、想起はなら仕方がないと思い、未だ雨が降っている空を見上げた。

\*\*\*

一方の白玉楼では、やはり雨が降っている中での月見を縁側で行っていた。

その縁側には、妖夢、幽々子、永久、鬼灯の他に、新たに雇われた二人の半人半霊『天津 桔梗』と『輪廻 必』がいた。

そして、全員がお月見をしている途中で、鬼灯がある事を聞いてきた。

「……なあ？さつき台所での話が聞こえてきたが、『どうしてこの時期に月見をするのか？』という質問。なら、妖夢達はどうか考える？」

それに対して妖夢達四人は一度考えると、桔梗が答えた。

「それはやっぱり、お団子を食べるためじゃないのですか？豊穰神様」

「……それは幽々子みたいに食い意地が張った奴だけだろうな」

「ふふっ♪」

鬼灯の言葉を、幽々子は笑って受け流した。

「まあ、そうだよな。他に理由なんてあるのかよ？孤天殿？」

「……やはりその呼び方にはなれないな」

鬼灯は必からの呼び名に溜息を一つ吐くと、答えを教えた。

「……『雨月』と言ってな、特に雨が長引きやすい中秋の名月の名月は、雨が降って隠れても、あの雨雲の上にある名月を想像して月見を楽しんでたんだ」

「苦し紛れの楽しみ方ですね」

妖夢のその一言に、幽々子と鬼灯が同時に否定した。

「あのね？妖夢。その方が風流なのよ」

「風流なのか？」

幽々子のその言葉に、永久は首を傾げた。

「ええ。昔からね、名月そのものを見るより、この団子のように丸い物を見て名月を想像する事が風流とされたの」

そう言いながら、幽々子は団子を一つ、摘んだ。

「昔の人は実物より想像の方が何倍も大きく何倍も美しい事を経験から知ってたいたのね。料理にお団子一つついてるだけで名月を想像できたんだから、簡単で良いでしょう？」

そう言うと、今度は団子を天に掲げた。

「そして、その究極の形が、そこにある筈の名月を想像する『雨月』というわけ」

幽々子はその説明をした後、その摘んでいた団子を食べた。

妖夢達はその説明を聞き、そして理解すると、『なるほど』と言い、首を縦に振っていた。

そして、一度中に入ると、桔梗が何かを思い出し、幽々子の方に顔

を向けた。

「満月と言えば、二月前のスキマ妖怪様の話は何だったのでしょようね〜?」

「ん? 話?」

「ああ、忘れていたわ。何やら良からぬ話を持ちかけてきていたわね」

幽々子のその言葉に、妖夢は首を傾げた。

「?何を話されたんだ?」

鬼灯は近くにいた永久にそう聞くと、永久は説明を始めた。

その話を簡単に言えば、『吸血鬼の監視』。それを伝えに来た藍と茜が言っていたらしい。

しかし、幽々子はその内容を聞くと何かを理解し、請け負わないと言ったらしい。

「……成る程な」

そして、永久からのその説明に、鬼灯もまた何かを理解した。

「……まあ、それは私には関係ないみたいだな。というか、私はどうやら自由に行動していいようだしな」

鬼灯はそう言うと、机の上に置かれていたお茶を一口飲み、そして立ち上がると、障子戸を開けた。

外は既に雨が降っておらず、綺麗な『名月』が雲から現れていた。

「……幽々子、折角の『雨月』が『名月』になってしまったようだぞ」

「あら、そう。……そろそろ、私達も動いたほうがいいのかももしれないわね」

「私は自由行動だけだな」

「ふふっ、私も自由に行動したいわね〜」

鬼灯と幽々子は互いに笑いあうと、また空を見上げた。

……その後、妖夢と永久からの報告を受けると、妖夢と永久に何かを耳打ちしていた幽々子。それを見て、鬼灯は密かに溜息を吐いたのだった。

## 第百六十四話

お月見の時から時間は進み、寒さが目立ち始めた幻想郷。

そんな幻想郷でも目立つ館、『紅魔館』に、悪魔とその従者達以外の余所者が浸入していた。

永遠亭の医者である永琳、そしてその永遠亭に住む月の玉兎である鈴仙、その彼氏の地球の玉兎である雷羅だ。

三人は図書館に浸入し、そこにある窓が何故か付いている三段ロケットを観察していた。

永琳はジツと観察し、鈴仙はピョンピョン跳ねながらの観察、雷羅はロケットの外周を一周しながらの観察と、三者三様である。

そして、観察を終えた全員が集まると、鈴仙は堪えていたのか爆笑し始めた。

「あはは!!?こんなロケットで月に辿り着く筈がないわ!!?ねえ?雷羅」

「まあ、コレで辿り着けるとは思えねえが……」

そう言いながら永琳の顔を見ると、永琳は、

「……ほぼ完璧ね」

と、感心したように呟いた。

「え!??こ、コレでほとんど完璧なんですか?」

「ええ。一体、誰の入れ知恵かしら?あの吸血鬼賢者かしら?」

「クスクス、私はなんの入れ知恵もしてないわよ♪」

と、永琳達の後ろから声が急に聞こえ、鈴仙と雷羅は驚いた。

それもそうだろう。何故なら、気配がなかったのだから。

対して、永琳は驚いた様子を見せず、クルリと振り向き、その声の

主……レティシアを見た。

「クスクス、あら、貴女は驚いてくれないのね。其処の月兎さんと玉兎さんは欲しい反応をしてくれたのに♪」

「いつも貴女の思い通りになるわけではありません」

「クスクス、知ってるわ♪」

レティシアはそう言うのと、永琳の横に歩いて移動した。

「クスクス、それで何か聞きたそうだけど、何かしら？」

「……『住吉三神』のご加護があるなら余程のことがない限り月に辿り着けるでしょう……だからこそ、貴女に問います。本当に貴女の入れ知恵ではないのですか？」

永琳が目を細め、レティシアを少し睨みながら聞くと、レティシアはいつも通りのニコニコ笑顔で答えた。

「クスクス、ええ。『私』は入れ知恵してないわ♪」

「……そうですか」

その言葉を聞いた永琳は、不信感を捨てた。

直感的に嘘は言っていないと思っただの。

(……まさか、直感なんて物に頼る時が来るなんてね)

永琳はそう頭の中で思うとクスリと笑う。

そして、ロケットに体を向け直した。

「……なら、誰の入れ知恵なのかしら？」

「……今の内に壊しておきます？」

鈴仙の問い掛けに、永琳は首を横に振った。

「いえ、直しておきましょう」

そう言うと、掌に布を乗せ、それを操り、ロケットの天辺に貼り付けた。

「……『月の羽衣』、ですか」

「ええ。これで、このロケットは余程のことがあっても月に辿り着けます。あの布が月まで導いてくれるでしょう」

その言葉を聞いた鈴仙と雷羅は、永琳の考えてる事が分からず、頭にハテナを浮かばせた。

「クスクス、用事は終わったのかしら？なら、パチエとシユロムが此処に帰ってくる前に退散するのをお勧めするわ。今回の事は誰にも言うつもりもないからね」

「ええ、そうさせてもらいます」

レティシアとそんな会話をした永琳は、鈴仙達を連れて紅魔館を後にした。

「……クスクス、さてさて、『第二次月面戦争』。中々に面白い事になり

「そうね♪」

残ったレテイシアはそう口にする、闇に掻き消えたのだった。

\*\*\*

其処からまた数日経つと、遂には雪が降り始めた。

「雪も降ってきて……寒くなってきたな」

博麗神社では、魔理沙が暖かそうな服を着て空を見上げていた。

その隣には同じく暖かそうな服装の夢幸がいる。

「もう秋も終わりね。落ち葉を掃除しなくてすむわ。葵が」

「そうだな。しなくてすむな、葵が」

「あ、あはは……」

霊夢の言葉に嫌味を混ぜて言うルカに葵は苦笑いである。

この三人もまた、魔理沙と夢幸程ではないが防寒の服装をしていた。

葵と霊夢は脇出しの巫女服のままだが、葵は黄色いちゃんこ  
とマフラーを、霊夢は緑のマフラーを巻いて、帽子もかぶった状態  
でいた。

ルカは黒のコートを羽織り、黒の中折れ帽子を被っている。

「まあ、兎も角……もうそろそろ時間だし、行こうか？」

霊夢の近くにいた防寒バツチリの姿である歩が言うが、しかし霊夢  
が周りを見て、待ったをかけた。

「ちよつと待って。雪華がまだ……」

「お待たせ〜」

と、其処に丁度良くやってきた雪華。

その姿は何時もの雪の結晶の着物の上に、魔理沙と同じようなモフ  
モフカーディガンを着ていた。

「……あんまり変わってないわね。上着着ただけじゃない」

「まあね。それでも悩んだけどね。冬だからやっぱり雪の結晶だけ  
どね」

と、その近くに二匹の動物がやって来た。

一匹は真っ白の狼。もう一匹は真っ白の狐である。

「……あら、雪華のペット。連れてくの？」

「ええ、勿論。冬はこの子達の季節でもあるからね」

「?えっと、妖怪ですか?」

葵が首を傾げて聞くと、雪華は微妙な顔をした。

「まあ、冬の間は殆どずっと一緒にいるから否定しづらいけど、この子達はまだ妖怪じゃないよ。コツチの狼はホツキヨクオオカミの『トウヤ』。で、こつちがホツキヨクギツネの『コガネ』。はい、二匹とも挨拶」

雪華の言葉を理解したようで、二匹は吠えて挨拶をした。

「この子達も許されたならパーティ会場に入れるつもりだよ」

「ふくん。それじゃあ行きましようか」

そうして、一同は歩みを始めた。

「それにしても、普通に紅魔館にお呼ばれされるのは珍しいわね」

「よつぽど嬉しかったんだと思うよ? ロケットの完成が」

霊夢のその言葉に歩はそう言った。

「……彼処は普段から何かと騒がしい気がするのは私の気のせいかな?」

「まあ、無駄に長く生きてるもんだから、新しい楽しみがなくなってるんじゃない?」

「え? うくん、そうかな?」

葵が霊夢のその言葉にレミリア達は本当に退屈してるのかと考えた。

「走尸行肉」

と、そんな事を考えていると、そんな言葉が聞こえてきた。

直ぐに右側を見ると、其処には幽々子と妖夢、永久、桔梗、必がいた。

「……えっと、どういう意味でしょうか?」

葵がそう聞くと、幽々子は柔か笑顔でその意味を教えた。

「毎日はいやいでいるのも結構だけど……どうでもいいことばかりしてるのなら、走る屍、動く肉と何の違いもないの」

「動く屍のお前がいうな」

魔理沙はもつもとなツツコミを入れると、霊夢は少し珍しそうな顔



で幽々子達に言った。

「珍しいじゃないの。五人お揃いで」

「そろそろロケット完成パーティの時間なので……」

「迎えに来たっていうの？珍しいじゃない」

その言葉に首を振ると、幽々子は言う。

「今から神社で宴会をしようかなあと」

『……』

その言葉にその場が一度シーンっと静まり返る。

「……そんな時間はない」

と、夢幸の言葉でその場は元の雰囲気に戻ると、幽々子達と共に紅魔館へと向かうのだった。

## 第百六十五話

紅魔館へと着くと、門にはいつも通り美鈴が門前にいた。  
しかし、珍しく寝ていない。

「あら？あんた、珍しく寝てないわね」

「いつも寝てるわけじゃないですよ」

霊夢は美鈴とそんな会話を少しした後、そのまま中へと入っていった。

そして前を見ると、大勢の招待されたであろう客達がいた。

「これはまた大勢呼んだんだな」

魔理沙は周りをキョロキョロみながらそんな感想を言うと、幽々子はクスツと笑った。

「まさか、あの吸血鬼が月に行く時代が来るなんて、思ってもいなかったわ。本当、困った動く肉ねえ……妖夢？何か？」

幽々子は妖夢の視線に気付きそう聞くと、妖夢は首を横に振った。  
「あ、でも、レミリア達のロケットが完成したので妖夢が『航海の神様』ってヒントを持ってきたからじゃない？」

以前、咲夜からロケットの相談を受けた事があつた霊夢は、その時、咲夜から『三段の筒状の魔力を持った物』と言われ、最初こそピンときていなかった。

しかし、その時に丁度良く妖夢が永久と共に現れ、『ロケットは宇宙を飛ぶ船だから、推進力を探すなら航海に関する物を探さないといけない』とヒントを与えていた。

余談だが、その時に咲夜と共に一緒に来ていた光冥と喧嘩になりかけていたりする。

「私はてつきり、あんたが吹き込んだと思っていたけど？妖夢じゃ思いつきもしないだろうしね」

「いいえ？とんでもない。私がなんでそんな事しなきゃいけないのかしら」

霊夢の言葉に幽々子はそう言った。

「お前も紫やレティシアと同種だからだろ」

ルカのその言葉については幽々子はスルーを決め込んでいたが。

と、霊夢達の前の扉が急に開き、そこから霊夢達が見た事がない金髪執事が出てきた。

「お？最後の客か？……って、雪華じゃねえか」

「やつほく！『ギル』！こっちの紅魔館には慣れた？」

「ああ、まあな」

そう雪華と親しそうに話す青年『ギル』。そんな二人の外野は全員、首を傾げていた。

「あの、雪華さん……」

「ん？何？葵」

「この方は誰ですか？」

「ああ、そうだったね。お互い、初対面だったね」

雪華はそう言うのと、先ずは『ギル』という青年の紹介を始めた。

「此奴は『ギル・デイザスター』。私の生まれ故郷の幻想郷でも紅魔館の執事をしてた奴よ」

「紹介に預かった『ギル・デイザスター』だ。よろしくな」

その後、葵達も自分の紹介をすると、そのまま中に入れてもらう事が出来た。

勿論、雪華のペット達もだ。

そして、中に入ると、もう既に多くの客達がお酒を飲んだり、食べ物を食べたり、談笑したりと好きな事をしていた。

「さくで、アルカからかってこよくと♪」

「言っても効果ないだろうけど、やり過ぎるなよ」

「やり過ぎるぐらいにからかってくる！トウヤ、コガネ。行くよ！」

「ワオン！」「コン！」

雪華のその言葉に一吠えして答えると、雪華の後について行った。

「……彼奴、元の幻想郷でもあの男吸血鬼弄ってたわけ？」

「殆ど日常と化してた」

「……アルカさん、御愁傷様です」

葵がそんな風に同情していると、何処からともなく「弄るのやめろおおお！」と、アルカの声が聞こえてきた。

どうやら、もう既に雪華の弄りが始まったらしい。

「……彼奴、絶対に生き生きしてるぞ。顔が」

魔理沙は頬を引きつらせながらそう言った。

と、そんな時に、今度は何かが割れる音と何度も謝る声会場内に響き渡った。

「ひゃああああ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!？」

「ああ、いや、気にしていない。だから、謝らなくとも……」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!？」

「藍姉、これはずっと謝り続けるパターンだぞ」

「ど、どうすれば……」

それを遠目から見ていたギルは少し頭が痛そうな顔をした。

「またマリアか……」

「いつもの事だね」

ギルは歩のそんな言葉を後ろに、そのままマリアの元まで向かって行く。

そして、ギルが藍達に謝る声が聞こえると、別の足音が聞こえてきて、今度はペスの謝罪の声も聞こえてきた。

「……結構、大事になり始めたわね」

「今回の被害者は藍達か」

「鬼灯、その言い方は駄目だよ」

葵のその言葉の後、霊夢は溜息を吐いた。

「?霊夢?どうしたんだ?」

歩はそれに気付き、聞いてみると、霊夢は何時の間にか持っていたお酒を見せながら答えた。

「いえ、立って呑むのは落ち着かないなくつと……莫塵でも持つてくれば良かったわね」

「え、こんな所で莫塵しいて座ったら異様だ……」

そう言っている途中で、その歩の視界の中、何かが動いた。

気になって其方の方に顔を向けてみると、幽々子が床に正座して食

べ物を食べていた。

「幽々子様!?!?」

「あら、周りの目なんて気にする必要はないわ」

そう言ってから持っている食べ物を口に入れると、「それもそうね」と霊夢も習って座った。

それに魔理沙は面白そうに笑い、葵は苦笑し、鬼灯とルカは溜息を吐いた。

其処に近付く影が一つ。

「どうしたの?そこの重力が強くなったのかしら?」

その声の方に霊夢は顔を向けると永琳がいた。

「永琳さんも来てたのですね」

「ええ、まあ、招待されたので」

葵に笑顔を向けた後、今度はまた霊夢達の方に顔を向けた。

「……地上では月の六倍、体が重いのです」

「へー、そうなの。……あ、そうそう。今度、私達もあんた達の故郷に行くけど、何かお土産でも欲しい?」

霊夢のその質問に永琳はワインを飲みながら答えた。

「じゃあ、イルメナイトを……」

「イルメナイト?」

葵は首を傾げるが、しかし説明は無かった。

「でも、私の故郷は地上だけどね」

「それは月に行く前の故郷だろ?」

鬼灯がそう言うと、「そうですね」と永琳は言った。

その会話が一段落すると、見計らったかのようにマイクを持ったレミリアの声が壇上から聞こえてきた。

「……そこで、このロケットの愛称を募集したいと思うんだけどー!」

「……ロケットの愛称募集か」

夢幸の言葉に魔理沙は面白そうにニヤニヤ笑い始めた。

「彼奴らには分からない様な言葉で変な名前つけてやろうぜ」

「……私達はそれに乗るのよ?」

「愛称って……ペットか何かみたいですね」

「ペット感覚というより、自分達が作った物に愛着があるがゆえなんだろう」

鬼灯のその言葉に納得した様子を見せる妖夢と桔梗。

その近くにいた永琳は困った顔をしていた。

「愛称……ね。あのロケットは住吉三神のご加護ざあるというのに。下手な名前をつけてしまえば、月に辿り着けないかもしれないというのに」

「……え？永琳さん、何で住吉三神の事を知ってるのですか？」

葵の言葉に永琳は少し焦った様子を浮かばせる。

鬼灯はそれを気にせず、静かに会場から出て行く幽々子達を見ていた。

「貴方達は全く話を聞いていなかったみたいだけど、さつき事細かに説明していました「嘘だな」……」

ルカのジト目を受けた永琳は顔を背けた。

……何処かから聞こえる『クスクス』という笑い声は気の所為だと思いつながら。

「……だが、月に辿り着けないかもしれないという点は嘘を言ってない。もしかしたら、其処は可能性があるかもしれないな」

ルカのその言葉に魔理沙は困った顔をした。

「月に辿り着けないのは困るな」

その言葉に永琳は顔を戻し、話に入ってきた。

「吸血鬼は『スミヨシ』って和風の名前が気に入っていないのでしよう。もし月に辿り着きたいのなら、私の愛称を提案してもらえないかしら？」

「良い愛称があるのなら自分で提案してよ」

永琳の頼みに霊夢はそう言うが、その頼みを魔理沙が受け、その後、その三段ロケットの愛称は永琳の提案通り、上から『ミンタカ』『アルニタク』『アルニラム』となったのだった。

\*\*\*

紅魔館から出てきた幽々子達は家に帰ろうとしていた。

「幽々子様。どうしてパーティの途中で抜け出したのですか？」

「そうですよ。何で抜け出したのですか？」

幽々子は妖夢と桔梗の顔を見た後、永久と必の顔も見た。

「どうしてって……彼処にスパイがいたじゃないの」

「あの月の民の事ですか？」

「まあ、確かに吸血鬼の月侵略計画を妨害するかもしれないが、俺達とは何の関係もないんじゃないですか？」

「それどころか、元々吸血鬼の計画を阻止するのが私達の目的……」

上から永久、必、桔梗がそう言うが、幽々子は目をパチクリとさせた。

「あの狡猾な月の民が吸血鬼の月侵略を阻止する？」

そういうと、急に笑い出し、扇子を四人に向けた。

「私はあの月の民をスパイと言ったのよ。永久達は別段心配は無かったけど、妖夢が余計な事を言わないように出てきたの」

その言葉に妖夢は顔を少し下に向けた。

「余計なこと何も……私には何も判らないのですが。何か説明していただけませんか？」

妖夢のその言葉に幽々子は答えず、

「紫の月計画は動き始めたばかり。敵を騙すにはまず味方から」

そう言うだけ。

その後、服の中から『鬼ごろし』をだすと、家に帰ってパーティの続きをと言うのだった。

## 第百六十六話

パーティから二日後。紅魔館ではロケット発射する為の準備に入っていた。

「マリア、その本は其方よ」

「こつちですね？よいしょ、よいしょ」

「……皆さん、忙しそうですね」

図書館に置いてある椅子に座っている葵は忙しなく動いてるマリア達を見て、そんな感想を口に出した。

その図書館内には紅魔館に住む者達を除けば他に霊夢、ルカ、鬼灯、想起、歩、夢幸である。

「ロケット発射前ですからね。パチュリー様しか出来ない仕事があるのでしょうか」

「……やっぱり、手伝います！」

「気にせず発射の時間まで待て、葵」

葵がマリア達の手伝いをしようと立ち上がるが、しかし鬼灯が葵の袖を掴んだことにより、その行動は出来なくなってしまった。

「で、でも、何もしないでいるなんて、失礼な気が……」

「此処は紅魔館だ。此処のメイド達の仕事を取るべきじゃない」  
「……」

鬼灯の言葉を聞いた葵は渋々といった表情で座っていた椅子に座り直した。

「ん？……この赤い線は何なんだ？」

魔理沙はそう言いながら、ロケットの下に敷かれている赤い絨毯を見ながらそう質問すると、本を移動しているユニがそれに答えた。

「ロケットは赤道近くで打ち上げた方がエネルギーが少なくてすむんだってさ」

「それで足元に赤い道を書いたのか。どういう理屈なんだか」

「どういう理屈なんだろうね」

そう言いながらユニは笑うと、仕事に戻っていった。

「文句を言わないの。大体、魔理沙がロケットに乗れるのはただの才



マケなんだからね」

「ロケットの愛称を決めたのは私なんだから、私が乗る権利はあるだろう?」

「霊夢にトラブルが起こったら、葵が代わり。でも、その葵までトラブルが起これたら魔理沙が代わりになるかもしれないから」

その言葉に霊夢と咲夜、ルカと鬼灯は吹き出した。

「私は平気ですよ?」

「病気とかはでしよ? 気力や体力は?」

「大丈夫です」

パチュリーへの心配に対して、葵は微笑んで返したのだった。

「……さて、ちよつとロケットの中を見てみましょうかね」

霊夢のその言葉に全員が椅子から立ち上がり、ロケットの中へと入ってみると、其処には普通に生活が出来る程のスペースがあった。

「……結構広いんだね」

「結構な長旅になりますからね」

歩が部屋の感想を言うとき咲夜がそう言った。

それが聞こえた様で、霊夢は直ぐに咲夜の方に振り向いた。

「長旅って……もしかして泊まりになるの?」

「お前は地上から月までどのくらい遠いと思ってるんだ。まさか、日帰りで帰ってこれると思っていたのか? 馬鹿なのか?」

夢幸の言葉に霊夢は少しムツとした顔をする。

「……だって、昼になったら月は見えなくなるじゃないの。夜のうちに月に辿り着かないとおかしくない?」

「うくん、それは……」

「おかしくないだろ」

葵はそれに苦笑し、ルカは霊夢の顔すら見ずにそう言った。

「宇宙に行ったら夜も昼もないそうですが……大体往復で半月から一月くらいかかるそうですよ」

「あら、光冥」

霊夢の疑問にちゃんと答えたのは、ロケット内に入って来た光冥だった。

「光冥、お前も乗るのか？」

「そうだよ、歩君。他にもユニやペス、ギルと『シファ』も乗るよ」

その光冥の言葉に続くように、名前を挙げられた人物が入ってきた。

その中には、図書館で既に挨拶を済ませた青髪の執事『シファ・ディザスター』の姿もある。

「何でお前も乗るんだ？」

「このロケット、月に向かうとドンドンと狭くなっていくんだ。その問題を解決する為にね」

「ふくん」

霊夢がそれに納得すると、外が急にざわつき始めた。

「?何でしょうか？」

「多分、レミリアとアルカが来たんじゃない？」

葵の言葉に霊夢が答えると、ロケットの扉が開き、レミリアとアルカが入って来た。

「待たせた」

「お待たせ。早速だけど出発するわよ！」

「……って、此処から出発するのですか!?!?」

葵の驚いた様な声を上げるが、レミリアからは『住吉三神』を呼べばもう飛び出せるよ!』と言うだけだった。

その答えに葵は心配そうな顔をするも、それ以上何も言わなかった。

そして、外が鎖で雁字搦めにされ、パチユリーとシユロムが手を叩き、礼をすると、ロケットから一歩下がった。

そして、外からは何故か小銭を投げ付ける妖精達が見える。

「……お賽銭は神社ですもんじゃないのか？」

「……魔理沙は何か思い違いをしているようだから説明をするが、『神社』というのはお前がよく見慣れたあの建物じゃなくても良い。同時に何箇所も存在しても問題ないんだ」

魔理沙の最も疑問に答えたのは、狐状態ではなく、人型状態の鬼灯だった。

「お、何時もの狐状態じゃないのか」

「さすがに邪魔だろ？」

鬼灯は仕方なさそうに言うのと、用意している霊夢を見ながら説明を続けた。

「神棚だけでも十分神社と同じ役割を持つんだ。いや……神棚もただの飾りで、神の宿る『器』さえあれば十分なんだ」

「『器』って、霊夢の事か？」

「ああ、そうだ。つまり……」

其処で一旦区切ると、鬼灯は魔理沙に目を戻した。

「このロケットは『空飛ぶ神社』になるんだ」

その言葉と同時にロケットがグラつき、外を見てみると、景色が徐々に動き始め、遂には本だらけの空間から外が見えるようになったのだった。

\*\*\*

「おう、打ち上がったな」

博麗神社では雪華が一人、縁側から打ち上がったロケットを見ていた。

「……全く、あのシスコン。私の生まれ故郷でも月に行ってたし……あれだけシスコンなら、残されるフランの事も考えてやればいいのに」

私はベビーシッターか、としないアルカに対して言う雪華。

「いや、フランは赤ちゃんじゃないからベビーシッターじゃないか。チャイルドシッター？……まあ、如何でもいいか。こつちにはアルカの姉もいるわけだし、フランや姉を信じてなんだろうし……あ、そう言えば」

そう言うのと雪華は首を傾げた。

「何でこんな面白そうな事、あのアルカの姉のレティシアが参加しないの？私みたいにもう一回行ったからとかなら分かるけど」

そう言うのと、少しの間考え……後ろに倒れた。

「分からないこと考えても仕方がないか。考えるのやくめた」

そう言うのと立ち上がり、寝る準備をし始めたのだった。

## 第百六十七話

葵達がロケットに乗り込んで早五日目。漸く、下段のロケットが切り離された。

「いや、光冥が空間を広くしてくれてるから下段と同じくらい広いな」

魔理沙は笑顔を浮かべて、光冥にそう言うと、光冥はアルカに奉仕した後に少し頭を下げた。

「それにしても……今日で五日目だ。宇宙旅行って言ってもずっと同じ景色でつまらんな」

「ずっと青い空のままですからねえ」

「でも、少しずつは色が薄くなってるみたいだよ？ねえ、シファ」

「そ、そうですね、ユニ」

魔理沙の言葉の後、咲夜も感じてた事は同じだった様でそう言い、ユニはシファに同調してもらっていた。

「……」

「？鬼灯？どうしたの？」

葵は外が見える窓の近くで、鬼灯が頭を抱えて溜息を吐いてるのが目に入り、何かあったのかと思い近付いた。

それに対して鬼灯は首を振ると、答えた。

「いや、私は平気だ。……今は、ただ後悔中だ」

☒

葵は鬼灯が言ってることの意味が分からずに首を傾げていると、近くから咲夜の困ったような声が聞こえてきた。

「どうしました？咲夜さん」

「あら、葵。実は、下段のロケットに油のストックを残したまま切り離してしまっただけなのよ」

「え……」

それを聞いた葵も困った様な顔をすると、ユニがやって来た。

「油が無いの？なら、戻そうか？」

「え、出来るのですか？」

「あつたりまえだよ!!? 私の能力を忘れたの? 『願い事』を叶えられるのが私の能力だよ!!?」

ユニはそう言うのと台所に近付き、其処で掌を床に向けると、油が現れた。

「おお! 凄いな!」

「ユニ、ありがとう。貴女は休んでて良いわよ」

咲夜はそう言つてユニに視線を移すと、其処には床に座り込んでいるユニがいた。

「あの、ユニさん。大丈夫ですか?」

「あく、大丈夫だよ。ただ、ちよつと疲れただけだからね」

「ユニ、お饅頭なのですっ」

「あ! 有難う!!? シファ!!?」

シファは手作りのお饅頭をユニに持つてくると、ユニはとても嬉しそうな顔で喜んでいた。

もし疲れていなかったのなら、嬉しさのあまりに抱き着いていただろう。

「……さて、ユニの分は私が頑張らしましょう」

「俺も手伝う」

「あら、有難う。ギル」

ユニとシファのやり取りを微笑ましく見ていたペスとギルは、ユニが抜けた分までお互いに支え合いながら埋める事にしたのだった。

\*\*\*

月旅行十二日目。

遂に上段しかなかったロケットは、まだ月に向かっていている状態であった。

そして、そんな中、レミアは遂にストレスが爆発した様で、蝙蝠の羽をばたつかせ始めた。

「うわっ!!? レミア、危ないって!!?」

歩の言葉など聞こえていないようで、羽を未だにバツサバツサと羽ばたかせている。

そんな妹にアルカは近付き、優しく頭を撫でた。

「!!?アルカお兄様……」

「レミイ、少し落ち着け。もう直ぐで着くはずだ」

「どうしてそう思えるのですか?」

「葵に少し未来を見てもらった」

それを聞いたレミリアは葵を見ると、葵はペコツと頭を下げた。

と、その時に光冥は明るくなったことに気付き、外を見てみた。

「!?レミリア様!!?アルカ様!!?外を!!?」

その言葉に従い、外を見てみると、下には月があった。

「……はあ、着いてしまったか」

全員が喜んでいる中、ただ一人、鬼灯だけは喜ばずにまた溜息を吐いていた。

と、そんな全員に向けて、霊夢は勢い良く立ち上がると、叫んだ。

「さあ、最後の仕上げよ!!?」

「最後の仕上げ?」

「何かが起こるわ!」

ルカの質問に答えずに霊夢はそう叫ぶと、ロケットがガクンと飛ぶ勢いを無くし、そのまま下にあった海に落ち、難破してしまったのだった。

\*\*\*

葵達は月に辿り着くと、先ずは海から上がり、その後は自由行動となったが、霊夢、魔理沙、葵、ルカ、鬼灯、夢幸はその場に留まり、海を見ていた。

レミリア達と歩と想起は直ぐ近くにあった桃が成っている木へと向かって行ってしまった。

「……海だな」

「……海だねえ」

「海だな」

「これが海ねえ」

「その様ですね……ですが」

葵はそう言いながら立ち上がると、海の中に少し入り、水を掬った。  
「……魚がいる感じがしない。それどころか、棲んでる感じが……し

ない」

そう言つて海の向こうまで見ると、後ろを振り向き……剣を持ったポニテの少女が目に入った。

鬼灯と夢幸もその者の気配に気付き、後ろを向くと、それと同時に剣が向けられた。

「残念ね。豊かの海には何も棲んでいないわ。……いえ、豊かの海だけではない。月の海には生き物は棲んでいない。生命の海は穢れの海なのです」

そう言いながら未だに剣を向けている少女に、夢幸は睨み付けた。

しかし、相手はそれに竦んだ様子はなく、チラツと魔理沙、夢幸、ルカを見た後、鬼灯を見て驚きを少し見せ、霊夢と海から上がってきた葵を見ると、其方の方に剣を向けた。

「……住吉三神を呼び出していたのは、お前達」

「……ええ。正確には私よ」

ポニテ少女の問い掛けに霊夢はそう答えた後、座り込んだ。

それに対してポニテ少女はふつと笑うと、持っていた剣を地面に突き刺した。

すると、霊夢達の周りを地面から生えた剣が取り囲んだ。

『!??!』

「……祇園の神の力か」

「正解です。流石、豊穰神様ですね」

鬼灯は自身も剣に囲まれた状態にいるのに、焦った様子もなく正解を言い当てる。

そしてポニテ少女は鬼灯の解答を聞いた後、腕を組んで霊夢達を見る。

「女神を閉じ込める祇園様の力。人間相手に祇園様の力を借りるまでもなかったか。住吉様を呼び出せるというからどれ程のものかと思っただけど……」

「依姫様!!?!」

依姫と呼ばれたポニテ少女の言葉の途中に、月の兎がやって来て、何かを報告すると依姫は驚いた表情を浮かばせる。

「なっ!!?なんですつて!!?あんな小娘と小僧相手に貴女達は何をやってい「誰が小娘よ(小僧だ)」……」

その言葉が聞こえた方に依姫は顔を向けると、少し殺気を出している歩と想起以外の全員がいた。

「――殺されたいのか?」

「……月の兎達はどうかしら?」

依姫は少し警戒しながら聞くと、レミリアは少し自慢げに答える。

「全部のしてきたよ。後はお前だけだ」

その言葉にユニはシファの耳に顔を寄せて、小声で聞く。

「ねえ?アレって、のしたって事で良いのかな?」

「違うと思うのです」

シファも小声で答えてる他所で、依姫も月の兎から真相を聞き、レミリアの方に掌を向けた。

しかし、次の瞬間には咲夜に捕らえられていた。

「……ぐっ!いつの間に!?!?」

「貴方、手癖が悪そうだったから」

咲夜はそう言うと、後ろで地面に刺さっている刀を足で抜く。

すると、霊夢達を捉えていた剣は全て地面の中へと消え、霊夢達は晴れて自由の身となった。

「霊夢!大丈夫か!?!?」

「魔理沙、平気か?」

「葵!ルカ!鬼灯!大丈夫!?!?」

「想起さん、私は大丈夫です!それよりも、皆さん、大丈夫ですか!?!?」

歩は霊夢を心配し、夢幸は魔理沙を心配し、想起は葵達を心配し、葵は他の全員が心配した。

それにより全員怪我一つ無いことが分かると、ホツとした様子を見せた。

「貴方達の目的は何かしら?」

依姫の質問に全員、目的は何だったのかと頭を捻る。

その様子を見てレミリアは笑い出し、言う。

「咲夜、忘れたの?私達の目的は月の都の乗っ取りだ!?!?」



その宣言を聞いた依姫は、少し笑顔を浮かべた。

「……八意様の言っていたとおりね。増長した幼い妖怪が海に落ちてくると」

その言葉にレミリアは頭にハテナマークを浮かばせる。

依姫はそれを気にせず、今度は自分を捕まえている咲夜に話し掛ける。

「貴方、さつき私の手癖が悪いと言ったわね？」

その言葉のすぐ後、依姫の腕がイキナリ炎の塊へと変わった。

それに驚いた咲夜は依姫を離し、直ぐに距離を取る。

「気がつくとも桃に手を伸ばしているお姉様ほどじゃないと思うけどね」

「咲夜、大丈夫かい!?!」

「ええ、大丈夫よ、光冥」

光冥は直ぐに咲夜の側に寄り心配からそう聞く。

対して、咲夜は光冥にそう言いながらも冷や汗を流している。

「……その火、愛宕の神の火か」

「そうです。よくお分かりで」

「殆どの神とは知り合いだ。神無月の日には、出雲に赴いてるからな」  
霊夢と葵はその会話に出てきた神様の名前に驚いた様子を浮かべる。

「え……愛宕様の火ですか!?!」

「さつきは祇園様の剣って……もしかして、あんたも私達と同じ!?!」

「そう、私は神々をその身に降ろして力を借りる事が出来る」

そう言い終わると、依姫は剣を拾い、持ち直した。

「奇遇ね。私達も最近、その力の修行をし直したばかりなの」

「分かっているわ。住吉三神が貴女に呼び出されていたんだから。貴女達が色々な神様を呼ぶと私が疑われるのよね。謀反を企んでるんじゃないかって」

「そんなの知らないわよ。稽古はやらさてたんだもん」

「いえ、私達にも非はありますよ? 霊夢」

葵が霊夢の言葉に苦笑を漏らしていると、依姫がまた剣を地面に突

き刺し、今度は鬼灯以外の全員が閉じ込められた。

「でも、その疑いも今日晴れる」

依姫はとても嬉しそうな顔でそう言うと、同時に月の兎達が霊夢達を取り囲んだ。

「……なあ？なんで私は自由なんだ？」

鬼灯は自身の身のみ自由な理由を、気付いていながらあえて聞くと、依姫は溜息を吐いた。

「……『ツクヨミ』様が豊穰神様に会いたがっているのです」

「……お前も大変だな。穢れを持つてる私を月の都内に入れるとでも言われたのか？」

「いえ、流石にそれについてはツクヨミ様も考えていました。ちゃんと月の都内には入らず、話し合える場所を設けております」

「……道を教えてくれ」

鬼灯はその後、依姫から場所を聞き、葵達を少し心配そうに見てから向かって行った。

そして数分の沈黙の後、魔理沙が口を開いた。

「こ、降参だ。降参！今のままじゃこっちに勝ち目がないし、お互い大きな被害を被るだろうし……」

「あら、あつけない」

「ただな、幻想郷には知的で美しい決闘ルールがあるんだ。力の強い妖怪が多い幻想郷だからこそ生まれたルールだ。それで少しの間、楽しまないか？」

「……何かしら？」

依姫は警戒心を解かずに魔理沙に問い返すと、魔理沙は言う。

「人間も妖怪もオケラも皆、平等に楽しめるこの世で最も無駄なゲーム……スペルカード戦だ!!？」

「スペルカード戦？」

それに首を傾げて聞き返すと、魔理沙は少し説明をしたあと、実践を見る方が良いと言い、一度自由の身にさせてもらった後、兎三匹と、紅魔館組の誰か三人で戦うこととなった。

「……と、言うことだから、頼む!!？ユニ!!？」

「え〜……」

ユニも聞いていたとはいえ、自主的にやりたいと思っていない。他の誰かに任せようかという時に魔理沙からのこの頼みである。

ユニはその頼みに少し逡巡すると……溜息を吐いた。

「分かったよ。良いよ、やるよ」

「ゆ、ユニ!!? 頑張って下さいっ!!?」

「うん!!? 頑張ってくるよ!!? シファ!!?」

そう言いながら、兎の前まで移動すると、少し笑みを浮かばせる。

「さて、じゃあ始めようか、月の兎さん。お話を知っていなければ貴女はきつと、私に勝てないけどね」

ユニはそう言って、月の兎を挑発したのだった。

## 第百六十八話

鬼灯が依姫達の所から歩いて数十分。月の都が見える所に、少し高い建物が建っていた。

鬼灯がその前に立つと、扉は自動で開き、歓迎してくれた。

「……はあ」

其処で一つ溜息を吐くと少し長めの廊下を歩き、そしてその奥にあった扉の前から少し距離を取ったところで一度立ち止まり、身構えながら扉の前まで来ると、自動で扉が開き、

「ほーーちゃんーーん!!?」

勢いよく飛び付いて来る者に抱き締められ、その勢いのままに後ろと一緒に転がっていく鬼灯。

そして、漸く勢いがなくなり、止まると、その者は鬼灯の尻尾をモフモフし、すりすりしながら話し掛けてきた。

「いやー!!?久しぶりだね!!?ほーちゃん!!?会いたかったよ愛しのほーちゃん!!?さあ、僕にそのモフモフな尻尾を堪能させてくれ!!?いや、もういつそ、一緒に月の都に住んで、僕にずっとモフモフさせてくれ!!?ああ、このモフモフ感、最っ高!!?」

その相手に対して鬼灯はその人の服を掴み、思いつき投げ飛ばした。

勿論、その相手はそのまま飛ばされ、地面に何度もバウンドした。

「いい加減にしろ、『ツクヨミ』!!?お前のそれにはいつもいつも迷惑してるんだ!!?」

鬼灯が投げ飛ばしたその相手は、月を思わせる綺麗な金色のポニテ、蒼眼、中性的な顔立ちで、声は女性の様に高いのに体格は男。

「……月の神『ツクヨミ』であった。」

\*\*\*

ユニと月兎の戦いは、平行線を辿っている。

というのも、誰がどう見てもユニからやる気が見えないのだ。

まあ、当の本人の所為なのだが。

(これ、私達が十割悪いのに、やる気が起きないよ)

ユニはそう思いながら兎からの突きや銃弾を避けていた。

レミリアもそのやる気のなさをどうやってやる気にさせようかと思ひ、考え、そしてある事を言う。

「ユニ、この勝負に勝ったらお饅頭を50個ぐらい用意してあげるわ!!?。」

それを聞いたユニの目が輝いた。

「え!!?本当ですか!!?。」

「ええ、本当よ。約束を破るつもりは無いわ。破ったらお姉様に怒られるもの」

「わかりました!!?頑張らせてもらいます!!?。」

そしてその月兎に向き直り、一つのスペルを宣言する。

「童話『オオカミと七匹の子ヤギ』!!?。」

すると、月兎を足に七匹の子ヤギが現れ、其々がその小さな手で月兎の両足を捕まえ始めた。

(あ、可愛い!!?)

そう思ってるのも束の間、月兎の前から低い唸り声が聞こえた。

其方の方に目を向けて見れば、オオカミが一匹、月兎の方を見て唸っているのだ。

「ひっ!!?。」

勿論、月兎とて兎である。オオカミを見て食べられるかもしれないという恐怖はあるのだ。

そして、そのままオオカミが走って月兎に近付いてきた為、逃げようとするがヤギに掴まれて動けない。

「い、嫌……来ないでー!!?食べないでー!!?。」

そう叫びながら兎はオオカミを撃ち、オオカミもその銃弾に当たって、消えてしまった。

それと同時に足を捕まえていた仔山羊達もまた、消えてしまった。

「うわあ、酷い。動物は大切にしようよ」

「ひっぐ、えっぐ、怖かったよ」

「え?あつ、えつと……ごめん」

ユニは少し責めるような声で月兎に言うが、しかし恐怖から泣いて

る月兎を見て罪悪感が生まれ、謝罪したのだった。

「……これ、どうしよう？ スペルを宣言し難い」

「あの、少し中止にしませんか？ 月兎さんも泣いてますし……」

ユニが困った顔で全員に意見を求め、葵も中止にしようと言うが、そこに霊夢も意見を言う。

「別にそのままやれば良いんじゃない？ 決闘なんだから、決着付かないままは駄目でしょ」

霊夢のその無慈悲な言葉に依姫も頷いた。

「そうですね。戦場の場でも、泣いたからといって相手は止まってくれませんし見逃してもくれません」

その言葉を聞いたユニは月兎を見て一言「ごめん」と謝ると、スペルを宣言した。

「童話『白雪姫』」

すると、ユニの周りに林檎型の弾幕が現れ、そのまま月兎に飛んでいき、月兎に当たると、そのまま倒れ、寝てしまった。

「白雪姫は毒リンゴを食べて死んでしまう。でも、死ぬのなんて駄目だから睡眠を付与させてもらったよ」

そう言うのと魔理沙を見て、勝ちだと分かると月兎に寄り、背負うと、依姫の元まで連れて行った。

「この子、寝てるから休ませてあげて？」

「分かりました」

依姫は別の月兎に休ませる様に言うと、その月兎を連れて行かせた。

「さて、それじゃあ次は……ペス、頼めるか？」

「分かったわ」

魔理沙からの指名に何の文句も言わずに前に出ると、次の相手の月兎が出て来た。

「さて、月では星座を観れるのかは分かりませんが、目の前で見せてあげましょう。星座を」

ペスはそう言うと、自身の周りに弾幕を出したのだった。

## 第百六十九話

「……で？ツクヨミ。私を呼んだ訳は何だ？」

鬼灯と対極に座っている神、ツクヨミにそう聞くと、ツクヨミはニコニコ笑顔を浮かべながら理由を言う。

「ほーちゃんの尻尾をモフモフしたくて「冗談は聞き飽きた」冗談なんて酷いなく、ほーちゃん」

「はあ……確かにお前のその理由は冗談じゃないだろうな。だが、それが理由なら、態々私を呼ぶ事はない。いつも通り、神無月……いや、神有月の日にモフモフすれば良いだろ」

「えー、久々に会いに来てくれた僕のほーちゃんにモフモフする事は許されないというのかい!!？」

「許すわけないだろ巫山戯るな」

「僕、悲しい……」

遂にはシクシクと泣く仕草をするツクヨミに冷たい目を向ける鬼灯。

そして少しした後、ツクヨミは泣く仕草をやめ、頬杖をついた。

「まあ、ほーちゃんの言う通りだよ。用があつたから呼んだ。それだけ」

「……で？その用とは何だ？」

「これ」

そう言つて手を横に向けると、出てきたのは鏡だった。

「……」

鬼灯はその鏡を少しの間見つめると、突然、その鏡に映像が映った。

「……幻想郷が凍りついてるな」

「そ、コレが君達の『可能性』。どうしてこうなるか、分かるかな？」

ツクヨミは頬杖を止め、鬼灯に真面目な顔でそう問いた。

対して、鬼灯もまたその質問に答えた。

「……選択を間違えたから、だろ？」

「そう、正解。ほーちゃんの仲間にいる吸血鬼。あの子が早々に蹴りをつけてくれたからいい様なものだけど、まだこうなる可能性は残つ

てる」

「……何が言いたいかわかった。『選択を間違えるな』……だろ？ ツクヨミン」

「正解。僕の『ありとあらゆる可能性を見る程度の能力』は只の『可能性』だ。『if』だ。君に仕える巫女ちゃん程じゃない。君達が選択した道を見れるわけではないんだ」

「……」

「……ああ、そうだ。その巫女ちゃんの事も話そうと思ってたんだ」

と、其処でまた頬杖をし、笑顔を浮かべて言葉にした。

「君のこの巫女ちゃん」

「……………」気持ち悪いね」

「……………」

\*\*\*

ペスの勝負はユニとは違い、ペスの方が優勢であった。

まあ、戦闘経験が違うのだから、当たり前なのだが。

「うわあ!? うわっ、うわわわ!!?」

月兔に容赦なく襲う弾幕。

それを見ても何の様子も顔に出さないペスだったが、其処で一枚のスペルを宣言した。

「スペルカード、星座『ペガサス』」

すると、現れたのはペガサスの形をした弾幕。



そのペガサスはそのまま上空に羽ばたき、其処から白い弾幕を撃ち始めた。

「うわあ!!?上からとか酷いですー!!?」

「酷くないと思うのだけど?」

月兔の涙ながらの言葉に、ペスは溜息を吐きながら言った。

そして、兎は弾幕から逃げながらも、そのペガサスに銃弾を当てようとした。

しかし、飛んでる相手はそれに当たらず、ペガサスは弾幕を適当に、ただ、少数は狙いながら打ち続けている。

しかし、其処で時間が来たようで、ペガサスは消えてしまった。

「時間ね。さて、じゃあ二枚目」

「えええ!!?」

「十二星座『獅子』」

すると、今度はライオン型の弾幕が現れ、月兔をその鋭い目で睨みつけていた。

「ひい!!?」

当然、其処で涙目になり、ガクガクと震えだす月兔。

そんな月兔に容赦も慈悲もなく、ライオンは飛び掛かる。

「イヤアアア!!?来ないでええええ!!?」

堪らず月兔は銃を乱射するが、目を瞑った状態で当たる訳も無く、そのままライオンに押さえつけられた。

そして、ライオンは月兔の顔に口を見せ、鋭い牙を見せ、そのまま前脚を上げ、攻撃をしようとした瞬間、月兔は恐怖からなのか失神してしまった。

「……はい、終わり」

ペスもそれで終わりと分かったようで、ライオンを消すと、そのままレミリア達の方に戻って行った。

「姉さん!!?やったね!!?」

帰って来ると、其処にはユニが笑顔で片手を上げ、掌を見せていた。

その意味を理解したペスはクスリと笑い、同じ様にすると、その掌に叩いた。

「ええ」

\*\*\*

「で、最後だが……誰がする？」

魔理沙はそうレミリアとアルカに問い掛けると、アルカはギルに顔を向けた。

「？アルカ様、俺ですか？」

「ああ、そうだ。ギルにとってはこの世界での初戦だ。頑張れ。勝つと信じてるぞ」

「!!？分かりました!!？」

ギルはそう言うと、そのまま前へと進み、月兔の前に立った。

「最後の相手は俺だ。紅魔館の誇りを賭けて……俺はお前に勝つ!!？」

ギルは相手に杖を向けながらそう宣言したのだった。

## 第七百七十話

鬼灯とツクヨミがいる部屋には、緊張の糸が張り巡らされてるかのよう重い空気だった。

それもそうだろう。笑顔のツクヨミに対して、鬼灯は睨んでいるのだから。

しかし、その眼に、雰囲気、怒りはない。

「……一応聞こうか。どうしてそう思った？ ツクヨミ」

「ああ、『気持ち悪い』と思った理由ね」

ツクヨミはそう言うと言顔を崩し、奥にいる誰かに紅茶を二つ分頼んでから話し始めた。

「『気持ち悪い』は言い過ぎたよ。まあ、それもあるけど、一番は『怖い』かな？」

「……」

「そう睨まないでくれよ、ほーちゃん。僕だって別に最初に彼女を見た時から思ってたわけじゃないよ？ そう思うようになった理由はちゃんとある」

そう言うと、月の民が淹れてくれた紅茶を貰い、一口飲んだから言った。

「ほーちゃんの現在の状態を見たくて見た時に、僕は彼女の存在を知った。その時の第一印象は『優しい子』だ。それはまあ、今も変わってないよ。優しく、純粋で、気持ち悪いとか恐怖とか、そんなものは見てて一度たりとも感じなかった……ある『可能性』を見るまでは、ね」

「ある『可能性』……か」

「……ほーちゃん。僕としては、出来れば見て欲しくない。君まで僕と同じものを抱く可能性がある以上、見るのはオススメしないよ」

ツクヨミは心配そうな顔で鬼灯にそう言うが、鬼灯は首を横に振った。

「心配は有難いが、見せてくれ。お前が見たという『可能性』を」

「……分かったよ」

ツクヨミは了承すると、先程の鏡を出した。

「……その鏡で見てたのか？私を」

「うん、そうだよ。これは僕が見たいと思ったものを映してくれる鏡だからね。……で、僕がその『可能性』を見た経緯はね、単純に僕の好奇心さ」

「……」

「見る前はこんな風に感じるとは思わなかったけどね。まあ、ほーちゃんがみるって言ったんだ。覚悟はしておいてね？」

ツクヨミはそう言うと、鏡に目を向けた。

すると、鏡に映ったシーンは……血みどろの部屋、其処に横たわっている葵と同じ髪色で同じ服装の女性、その近くにいる返り血を浴びてその女性を冷たく見ているルカ。

「……葵の母親がルカに殺された所か」

「そうだよ。で、この後、ほーちゃん達が来るんだけど……」

すると、ツクヨミの言った通りに葵達が部屋に入り、部屋の惨状を見て、鬼灯は驚き、葵は泣き始めた。

そして、少しした後、葵は涙を流しながらルカに近寄り、その服を掴んだ。

「何で……何でお母さんを殺したの!!?」

「……此奴が葵を虐待していたからだ」

「だから殺したの!!?私、そんな事一つも頼んでない!!?」

「……」

「……許さない」

「……」

「私は絶対にルカを許さない!!?」

「……葵」

「出て行って」

「葵、落ちつ……」

「出て行け!!?」

「ッ……」

「許さない……私は絶対に……ルカを許さない!!?」

其処でその映像は消えた。

「……これが僕が好奇心から見た『可能性』さ」

「……」

「……ほーちゃん。僕はね、これを見るまでは巫女ちゃんは『正常』だと思つてた。でもね、これを見てからはどうしようもなく『異常』に見えてしまうんだ。だって、普通はそうじゃないかな？自分の大事な親を殺されたんだ。普通、親を殺した相手を怒ったり、酷ければ憎んだりする。でも、巫女ちゃんはどうか？今見た可能性の巫女ちゃんじゃなく、ほーちゃんの所の巫女ちゃんはどうか？彼女は自分の親を殺した相手を憎んでる様子が無い」

「……」

「別にそれが悪いと言う訳じゃないよ？でも、他にもおかしいところはあるんだ。普通、理由が分かつていたとしても、差別されてたら怒るんじゃないかな？自分の友達の家をふざけた理由で壊されたら、その後も許せないものじゃないかな？」

「……」

「……彼女はもしかしたら、『憎しみ』という感情を分かつてないかもしれないよ」

「……かもな」

其処で漸く鬼灯は一言言った。

「ただ、葵は分かつてないわけじゃないと思う……ただ、その感情は薄いんだろう」

「……負の感情が出にくいって事かい？」

ツクヨミは首を傾げると、鬼灯は頷いた。

「……ほーちゃん。一つ問い掛けていいかい？」

「何だ？ツクヨミ」

其処でツクヨミは真面目な顔で問い掛けた。

「今見た映像で、君はどう思った？もし、僕と同じ様なものを抱いたなら……離れないかい？あの神社から。ここに住まないかい？ほーちゃん」

その問い掛けに対して鬼灯は答え、その少し後から部屋を出て行っ

た。

\*\*\*

ギルと月兎の勝負はやはり、ギルが優勢だった。それもそうだろう。勝負の始めから月兎は逃げ腰だったのだから。そんな震える様子の月兎を見て溜息を吐くも、一つのスペルを宣言する。

「心空『フォトンクロウド』」

すると、ギルはその場から動き始めたが、その動きはとても奇妙で、月兎は目で追いかけているが追い付れていない。

ギルはそんな月兎を見ながら、その月兎の死角から攻撃をした。

「ツ!!?」

月兎は其方に銃口を向けるが、しかしもう其処には誰もいない。

「ど、ど!!?」

そうやって目で追い掛けようとするもやはり分からず、そのまま何度も攻撃を与えられ、遂には月兎は目を回しながら倒れてしまった。

「初めての割にはよく頑張りました……的なの？」

ギルは月兎のそんな状態を見ながらそう言葉にし、戻って行く。

すると、シファアが近付いて来た。

「!!?シファア……」

「お兄さん!!?流石ですね!!?」

「ふっ、当たり前だろ?お前の兄貴だぞ?」

ギルはシファアにそう言って笑うのだった。

\*\*\*

葵が月兎達の怪我を治している間、魔理沙は依姫と何かの相談をし、他はその光景を見ていた。

そんな所に鬼灯は帰って来た。

「……帰って来たのか、鬼灯」

「ああ」

「話は終わったの?」

「ああ、終わった。……というか、彼奴にモフモフされるのだけは嫌だ」

「も、モフモフされたんだね……」

想起は鬼灯のゲツソリした顔を見てそう言った。

それから依姫達の方を向くと、どうやら今度は依姫と咲夜が戦う事になったようだ。

「……これ、もしかして僕達も戦う事に？」

「なるかもな」

「……はあ、雪華じゃないが、面倒臭い」

三人して溜息を吐いていると、咲夜の声が聞こえてきた。

「さあ、始めましょう。私の美しいナイフ捌き。残念ながら誰にも見えないかもしれないけど」

その言葉に依姫はニツと笑う。

「……そう。それでは私も月の使者のリーダーとして、最大限、美しく……」

そして、依姫と咲夜の戦闘が始まった。

## 第七百七十一話

依姫と咲夜の戦いは、依姫が咲夜に剣を向けてから一向に動いていなかった。

「どうしました？ 貴方から掛かってこなければ無限に待ちますよ？」

「……本当に出来そうで怖いな、彼奴」

「いや、彼奴が無限に待ってたら私達が帰還するのも無限になるんだが……」

ふっと笑みを浮かべている咲夜の言葉に、ルカと鬼灯が其々そんな事をその背中越しに言っていた。

しかし、二人の葵以外への対応はいつもこんなものであり、別に誰一人として気にしていなかった。

そして、咲夜と相對している依姫は剣を右手だけで持ち、もう片方は上に翳した。

「貴女、きつき私のことを手癖が悪いと言ったわよね」

その言葉と同時に急に降り出した雨。それも、雷雨である。

そして、雷が落ちた後に現れたのは、七本の尻尾を持った、龍にも似た炎の塊だった。

「……『火雷神』か」

鬼灯は眩くように神の名を当てる。

『火雷神』よ。七柱の兄弟を従え、この地に来たことを後悔させよ！ 依姫の言葉が合図となり、火雷神は咲夜を炎の渦の中へと閉じ込めた。

しかし、依姫はその時には後ろに気配を感じた。

それに驚いきもせず、依姫は後ろで自分にナイフを向けている咲夜を見た。

「……貴女は不思議な術を使うのね」

依姫はそう言いながら、視線だけを咲夜の方に向けた。

「きつきも見せたでしょ。瞬間移動のイリユージョン。……あと、おまけ」

咲夜のその言葉のすぐ後に、上からナイフの雨が降り注いできた。



それに驚く外野の月兎達。

そんな兎達の様子など気にする様子もなく、咲夜はナイフをもう一本持った。

「も一つおまけの『ルミネスリコシエ』」

そう宣言すると同時にその雨の中にナイフを投じた。

そのナイフは数個のナイフに当たり、当たったナイフは向きを変え、幾つかが依姫へと向かっていく。

『『金山彦命』よ。私の周りを飛ぶうるさい蠅を砂に返せ！』

しかし、依姫がまた神をその身に下ろしたことにより、ナイフは当たるところか砂へと変わってしまった。

「なっ!?」

「……鉄が砂に」

魔理沙と想起がその光景に驚いた表情を見せた。

咲夜もまた、その光景に少し焦りを覚えた。

そんな咲夜にまた剣を向けると、依姫は続けた。

「そして、持ち主の元へ返しなさい」

すると、剣先に砂が集まりだし、砂が元のナイフへと戻っていった。

「咲夜!!」

「……っ!!」

それには流石に驚いた咲夜。

「ま、まさか、自分のナイフを避ける羽目になるとはね!」

そう言いながら右に行ったり、左に行ったり、飛び跳ねたりしながら返ってくるナイフを避け続ける。

「避けにくいのは当然ね。しようがない……」

依姫はその言葉で何かを感じ取り、また雨を降らした。

「っ!!?……いざ!!? 『私の世界』へ!」

そして、時を止めた咲夜は前を見て、左右を見て、少し考えると、脳内で白旗を揚げたのだった。

\*\*\*

「咲夜、大丈夫ですか?」

「大丈夫よ、光冥。それに、葵も治療をしてくれてるから……」

「有難ございます、葵さん」

「いえ、大したことはしてませんから」

葵は光冥の感謝の言葉に、いつも通りの返答をした。

「……………」

「……………鬼灯、どうした？」

「……………少し気になることがあったただけだ」

遠くから葵達を見ていた鬼灯だが、ルカからの問いに、嘘は吐かずに答えた。

(……………本当に、どうしたものか)

鬼灯の頭に浮かぶのは、話の後のツクヨミの言葉。

『あの子をどうにかしないと、彼女は一生『異常』のままだよ？ほーちゃん』

(……………)

そう考えながらまた葵がいる方に顔を向ければ、レミアアが咲夜に何かを言ったようで、周りにいたアルカ、咲夜、光冥、葵が微笑ましいものを見るように笑顔を浮かべていた。

その葵達から少し離れた場所では、依姫の周りに月兔達が集まっていた。

「流石です依姫様！」

依姫にそう言ったのは、他の月兔達と比べて特徴的な垂れ耳の月兔。

その月兔は以前、博麗神社に倒れていた兎である。

そんな兎達に笑みを浮かべる依姫。

「私には八百万の技があるからね」

「……………ところで、何故あの人間は最後、雷に囲まれた時に移動しなかったのでしょうか？」

垂れ耳兎は依姫にそう問うと、依姫は咲夜を少し見てから答えた。「あの者は瞬間移動など出来ないってことよ。移動したい場所までに身体を通せる隙間がある場合のみ移動できる。私は最初の火雷神の時に気付いたわ。スカートの裾が焦げてるって……………」

そう、依姫が咲夜を視線だけで見たとき、気付いたのだ。

咲夜が時を止め、炎の攻撃から逃げた時に焦げてしまったスカートの裾に。

それにより、依姫は『瞬間移動』という答えを頭の中から消したのだ。

(……でも、あの時は焦げてたから分かったけど、それが無かったら……)

依姫は月兎達には余裕そうな顔を向ける裏で、心の中ではそんな風に考えていたのだった。

\*\*\*

そこからほんのすこし時間が経ち、全員が落ち着いたところを見て、依姫が先を進める様に言った。

「さあ、次は誰かしら?」

その言葉にレミリアは自分の横にいる者達を見た。

霊夢は寝ており、葵は一人では戦えないから論外。

ルカと鬼灯、想起は『絶対にやらない』と言うように視線を合わせない。

そして魔理沙を見ると、レミリアが顔を向けた事に気付きすぐ様顔を背ける魔理沙を見て、ニヤツと笑った。

「そうだねえ……魔理沙、次頑張つて」

「ええ〜!?」

「ほら、夢幸に自分の力を見せるチャンスだよ!!?」

レミリアのその言葉に魔理沙の耳がピクツと動いた。

そして数分後、服を叩きながら立ち上がる。

「ふふ、次は言い出しっぺの貴女ね」

「ああ、そうだ。……まあ、いくら力の差があろうと、スペルカード戦なら負ける気がしないがな」

魔理沙は依姫に対して、笑顔でそう言うのだった。

## 第一百七十二話

依姫が構えたのを見た魔理沙は、始めからスペルを宣言した。

「先手必勝！『スターダストレヴァリエ』!!?」

魔理沙の宣言の後に星型弾幕が現れ、その星型弾幕は色々な所にはら撒かれていた。

其の所為で、被害は依姫だけでなく、月兎や霊夢達にもあったが。

「うわわ!!?だ、弾幕が!!?」

「彼奴、もうちよつとこつちにも気をむけろ……」

葵は札で、ルカは薄い氷の盾で、それぞれその弾幕を防いでいた。

鬼灯はその弾幕を能力で消し去り、想起はその近くにいた為に被害がなかった。

歩達も其々の方法でその弾幕を防ぎきった。

しかし、依姫の周りの弾幕は何故か止まっている。

「月の都で見える星は瞬いていないらしいな」

魔理沙は箒から地面に降りながらそう言った。

その言葉を聞いていたペスも同じ事を思っていたのか、残念そうである。

「……」

そんなペスに気付いたギルは近くに寄り、頭に手を乗せた。

「ペス、地上に戻ったら星空鑑賞すればいい。だろ?」

「!そうね、ギル」

その言葉に嬉しかったようで、笑顔を向けるペス。

「……星が瞬いて見えるのは大気の揺らぎなのです」

そんなペス達を他所に、星が瞬いて見える理由を説明しだした依姫。

「大気の少ない月の都では、星はほとんど瞬かない」

そう言いながら依姫は自分の周りで止まっている弾幕を掴み、口に含んだ。

「え!!?だ、弾幕を食べたの!!?」

(甘……)

周りからのそんな反応など気にせずになんか感想を抱くと、その弾幕を捨て、止まってる弾幕を避けながら近付き始めた。

「瞬かない星の光の軌道は完全な直線です。」

等速度の攻撃は加速度系において止まっているに等しい。止まっている弾幕なら、誰にでも避けられるでしょう?」

「あ、頭が痛くなる……」

「同じく……」

依姫の説明に想起とユニは少し、頭を抱え始めた。

「ゆ、ユニ!!?後でちゃんと僕が教えます!!?想起さんにも!!?」

「え!?!?本当に?有難うシファ!!?」

「有難う御座います、シファさん!!?」

しかし、シファの言葉に二人して嬉しそうな顔をし、ユニに至ってはシファに抱き着いて、嬉しさを表した。

「!?!?／／／」

そのユニに抱き着かれてるシファは顔を紅くしている。

(あれ?これはもしかして……)

そんなシファを見て何かを察知した想起は、少し口元をニヤけさせた。

しかし、想起は知らないだけで、この二人はちゃんと恋人同士である。

魔理沙はそれを見て笑顔を浮かばせてから、その笑顔のまま依姫に顔を向け直した。

「よく判らんが、確かにお前の周りは止まっているな。」

「じゃあ、これならどうだ?『イベントホライゾン』!」

すると、星型弾幕はまたばら撒かれ、依姫を囲むようにして、また星型弾幕は止まっていた。

これには流石に依姫も避けるどころか移動も出来ない為に剣を抜き、弾幕を斬り裂いた。

それを見た魔理沙はゆっくり地面に降り立つと、依姫がその間近まで近付いてきた。

「貴女のプラネタリウムは密度が薄いのです。地上から見る星空はそ

んなに寂しいものかしら」

「寂しくはないです。とても輝いてて、綺麗なものですよ」

依姫のその言葉に、ペスはムツとした表情で言い返す。

「そうでしたか。それは申し訳ないですね。ですが……『天津甕星』よ、大気に遮られない本来の輝きを、この者達に見せつけよ！」

すると、その剣の先が輝き出し、ヤバイと思つた魔理沙は後ろに勢い良く後退した。

そんな魔理沙を霊夢にあたる前に夢幸が優しく抱きとめた。

「夢幸！有難うだぜ！」

「気にするな」

夢幸に笑顔で礼を言うと、依姫の前にもう一度立った。

「魔理沙。お前はいつ本気を出すつもりだ？まさか、今までののがお前の『本気』ではないだろう？」

そんな魔理沙に夢幸がそう言葉を投げ掛けると、魔理沙はニツと笑い、帽子を取りながら返す。

「勿論、此処から本気を出さず!!？」

そして、三角帽子の中から取り出したのは、何時も持っているミニ八卦炉。

それを依姫の方向に向けた。

「この世に光の速さより速いものは存在しない。どんな加速度を持つと、究極的には直線になるんだよ！」

出でよ、『ファイナルスパーク！』

魔理沙のミニ八卦炉から放たれた極太レーザーはそのまま依姫に直線に向う。

しかし、そんなレーザーを依姫は剣で斬り裂いた。

「ふん、これだけじゃ勝てないと思つたがな」

「光を斬るのは水を斬るよりずっと容易いこと」

「でもな、私の光は一つとは限らないぜ！」

そう言いながら、魔理沙はミニ八卦炉をまた向け、そこから極太レーザーを放つと移動し、その隣でもう一つの極太レーザーを放つた。

『ダブルスパーク!』

それを見た依姫は、神を降ろす。

『石凝姥命』よ、三種の神器の一つ、八咫鏡の靈威を今再び見せよ!』  
すると、依姫の後ろに鏡を持った女性が現れ、その鏡の表を魔理沙に向けると、レーザーの片方を依姫が斬り裂き、もう一つは石凝姥命が返した。

それに驚きながらも魔理沙は避けると、そのレーザーは地球のある方向に向かつていった。

「あちゃー、今頃、地球は大騒ぎだな」

「月からのレーザーくらい、なんとも思わないでしょう。表の月には人間が置いていった大きな鏡があります。月との距離を測るために、地上からレーザーを飛ばしていますからね。」

……靈験も何もない鏡で、心ない兎達が、よく位置をずらしたりして遊んでいるようですが……」

そう言いながら、月の兎達を厳しい目で見ると、月の兎達はその視線から目を逸らした。

そんな依姫を見た魔理沙は、溜息を吐いて降参したのだった。

\*\*\*

地上の博麗神社では、雪華が縁側で、トウヤの体に頭を乗せて寝ている姿があつた。

と、トウヤが何かを感じたのか耳を少し動かすと、顔を起こした。

「……んっ、どうしたの?トウヤ」

「ウオ……」

目を摩りながら起きた雪華は、トウヤに吊られて顔を空に向けると、月の近くで何かが光った。

「……あゝ、アレは多分、魔理沙のダブルスパークの片方が跳ね返された時のだな。向こうでも跳ね返されてたし……前はお菓子を食べながら観戦してたな。」

……あ、心配はしなくて良いよ、トウヤ。こっちには来ないから」  
雪華は、トウヤにそう声を掛けながら、その頭を優しく撫でたのだった。

\*\*\*

一方、霧の湖の方でもその光に気付いた者達がいた。

「あれ？今、月が光りませんか？」

「月はいつだって光ってるわよ」

妖夢の言葉に幽々子は笑っていた。

「……桔梗達にも、今のは見せられたら良かったな、妖夢」

「ですね。流石に全員が留守となると、冥界に何が起こるか分かりませんからね……。ところで、私達は何処に向かっているのです？」

永久の言葉に同意した後、妖夢は幽々子にそんな質問をした。

「吸血鬼はお手製ロケットで、紫は予定通り、幻の月と本物の月の境界から月へ行ってしまった。としたら、私達がやることは一つしかないでしょ？」

幽々子からの言葉に永久は納得したが、妖夢は頭にはてなマークを浮かべた。

「家捜しですかね、紅魔館の」

「あら、空き巣？そもそも、家捜ししたらレティシアにコテンパンにされるわよ♪」

妖夢の言葉に、幽々子は楽しげにそう返したのだった。

\*\*\*

魔理沙が帰ってくると、夢幸からの説教（と言う名の講義）が始まった。

「さて、魔理沙。お前が今回使ったスペルカードを言ってみろ」

「えつとだな……」

そんな二人をチラッと見てから、依姫は霊夢達を見た。

「さて、次は誰が相手かしら？」

依姫の言葉を聞くと、今度はレミリアが前に出た。

「次は私が相手をしてやるよ。お兄様にも、行方不明の時から成長した事を証明しないとね」

「お兄様？……ああ、其処にいる者ですか」

「言っておくけど、お兄様は貴女より強いし、私のお姉様はそれ以上に強いわよ」



「……そう」

依姫はそれだけを言うと、剣を静かに構えたのだった。

## 第七十三話

レミリアが依姫と戦い始めて数分間、依姫はずっとレミリアの突進に当たり続けている。

「……あなた、何時まで遊んでるつもりだい？魔理沙の時なんて、アレだけ動いていたのに」

レミリアは油断なく構えながらも、依姫を鋭い目で睨んでいる。

相手にされなければ、それは誰だって怒るだろう。

「あなたが遊んでるから、こんなちっぽけな天体を一周してきちやったじゃないか」

レミリアのその言葉に依姫は一息つきながら立ち上がる。

そして、そのレミリアを見ながら一言言った。

「貴女……羽から煙が出てるわよ？」

「ん？……うわっ!?!?」

「お嬢様!!?」

煙に気付いたレミリアは日傘を貰おうと後ろを向くと、咲夜が傘を投げ渡した。

それを掴み、すぐさま開いて目を遮る……が、しかし、少し出ている羽からまだ煙が出ている。

しかし、それには気付いていないレミリア。

「危ないところだった。日光の下では長く生きられないのだよ。強すぎるから」

「……その傘、全然カバーしきれてないみたいだけど」

その言葉を聞くと、サツと光を傘でちゃんと遮った。

「……それで?どうしてちゃんと戦わないのかしら?もしかして、スタミナ切れ?」

レミリアは再度、睨みを利かしながら問うと、依姫は少し余裕そうな顔をした。

「私が攻撃すれば、貴女は必ず一撃で負けるでしょう。だから、貴女の技を全て見てからでも遅くはない。

貴女も体当たりばかりじゃなくて、スペルカードを使ってみたら?

——美しいスペルカードを」

その言葉に怒りを覚えたレミリアは両手を前に突き出してスペルを宣言した。

『クイーン・オブ・ミッドナイト』！永遠に明けない弾幕の夜を、悪夢のたびに思い出せ！」

その宣言後、何故か周りは夜へと変わってしまった。

レミリアが出した弾幕は一度、そのレミリアの周りで回っていたかと思えば、その全てが依姫の元へと向かっていく。

それを見ると、依姫は目を瞑って集中しながらも、避けていた。

「大御神はお隠れになった。夜の支配する世界は決して浄土になり得ない。『天宇受売命』よ。我が身に降り立ち、夜の侵食を食い止める舞を見せよ」

すると、天宇受売命の思われる神様が依姫に降り、依姫の体は発光しだした。

「なんだ？ただ光ってるだけじゃないか」

「……いや、違うな」

レミリアの言葉に鬼灯はある確信を抱いた。

（成る程。依姫の言葉はそういう事か……確かに、レミリアは負けるな。一発で）

そんな鬼灯の考えなど分からないレミリアはそのまま依姫に向けて弾幕を放つが、しかし依姫はまるで舞を踊るようにして、その全ての弾幕を避けている。

「……弾幕は当たらないってわけか。なら!!？」

そう言うと、足に力を入れ、依姫へとまた突進をする。

それを見た依姫は、レミリアには必ず勝てる神様を降ろした。

「女神の舞に大御神は満足された。天岩戸は開き、夜の侵食はここで終わる」

「……アルカ、日傘を依姫の方に向けておけ。お前も吸血鬼だろ」

「……ああ」

その鬼灯の言葉に一応従い、アルカは日傘を依姫の方に向けた。

『天照大御神』よ！圧倒的な光でこの世から夜をなくせ」

すると、依姫の背後に天照大御神が降り、その光で夜を侵食し、暗闇は消えてしまっていた。

その後に残ったのは、やられたレミリアと、まだ背後に残っていた天照大御神。

その天照大御神は鬼灯の方を一度見ると、ニコツと綺麗に笑って帰っていった。

\*\*\*

「……」

「レミイ、大丈夫か？」

アルカがレミリアの元に近づくと、レミリアはそのアルカに勢いよく抱き着くと、負けた悔しさから泣き始めた。

「ぐすつ……お兄様あ……うわああん!!？」

「よしよし、レミイ、お前はよく頑張った」

その二人を依姫は見ると、少し言葉を零した。

「……あの子の上も、しつかり者なのね」

「?どういう事よ」

霊夢の言葉に依姫は少し呆れたような、しかし嬉しそうな笑みを浮かべた。

「私にも姉がいるのだけど、何時も姉は自由でね。見てない隙に、いつの間にか庭に出来てる桃を取ってたりするのよ。もう、本当に手がかる」

その言葉に霊夢はただ「ふくん」と言うだけだった。

「……それで?次は誰かしら?」

「お兄様……」

依姫の言葉でレミリアはアルカを見た。

アルカはそれを聞き、依姫の顔を睨み付けると、それに気付いた依姫も睨み付けた。

互いの威圧のぶつかり合いで、月の地面に亀裂が入り始める。

しかし、その沈黙の睨みあいには数秒で終わりを告げる。

「……俺でもいいが、それだとお互い損をするだけだ」

「そうですね。貴方は強い。この場の誰よりも。それだと、お互い、流

したくもない血を流すことになってしまう」

「そうだ。だから、ここは最後にはやはり、幻想郷の代表である博麗の巫女がやったら良いと俺は思う」

「……は？」

そのアルカの言葉に嫌そうな顔をする霊夢。

「嫌よ。今回はこつちが100%悪いじゃない。しかも、戦闘なんて面倒」

「お前は雪華か」

「彼奴よりかは面倒臭がりじゃないと断言出来る」

くくく

「クシユンツ!!？」

博麗神社では、雪華がくしゃみをしていた。

そんな雪華を心配そうに見るトウヤと、いつの間に来たのか分からないコガネ。

「あ、大丈夫だ、トウヤ、コガネ。多分、誰かが噂をしたんだろ。……しつかし、私の噂をする奴なんて誰だ？」

実は月で噂をしていたなどとは知りもしないのであった。

くくく

「兎も角、悪い立場は私達じゃない。悪い奴は必ず負けるのよ」  
「やってみなければ分からないだろ？」

未だに駄々を捏ねる霊夢を見かねたのか、鬼灯がアルカの加勢に入る。

それに対して歩に加勢してもらおうと顔を向けた。

「……確かに、霊夢の言う通りだしな」

「でしょ？」

「だが、勝負をしなければ、一生地上に帰れないぞ？」

その鬼灯からの脅しとも取れる言葉に霊夢は折れた。  
帰れないのは嫌なのである。

「……じゃあ、仕方ないからやるわよ。はあ、悪いのはこつちなのにな」

そう言いながらも立ち上がり、お札を構えるの霊夢だった。

## 第七十四話

靈夢達が依姫と戦闘を繰り広げている裏では、紫、藍、茜が、晴れた海の『晴れの海』、雨が降りしきる『雨の海』、風が吹き荒び、大波など当たり前の『嵐の大洋』、其れ等を越えた先にある『賢者の海』という所に辿り着いていた。

「……此処が月の賢者の住処、ですか」

「そうよ、茜。此処が賢者の住処」

紫はそう言うのと、指を下から上になぞり、隙間を開けると、そこから中を覗いた。

「ちようど留守みたい♪」

紫は上機嫌にそう言うが、今一紫の考えが分かっていない藍は、『賢者が帰ってくるまで待つ』という提案をする。

「千年前の雪辱なら、留守では……」

「藍姉、紫様の考えてる事は違うぞ」

「え？」

「そうよ、藍。何を言ってるの？絶好のチャンスじゃない」

「え？え？一体何を？」

藍は三人の中では置いてけぼり状態にされているが、しかし次の紫の言葉で、今から何をしようとしているのかを把握した。

「月の賢者の家に忍び込んで、めばしいお宝を奪うのよ」

「空き巣ですか」

「ああ、空き巣だ」

そんな二人を他所に、紫は開けていた隙間に自分の長手袋を置いた。

「？それは「お宝を探しに行くのは貴女よ、藍」……え、ああ、はい。分かりました。でも、そんな留守の家を漁るだけで良いのですか？それで満足するのでしょうか？」

「うふふ、良いのよ。どうせ地上の者は一部を除いて月の民に敵わないもの。力では」

藍からの問いに、紫は笑いながら返すのだった。

\*\*\*

依姫と霊夢の戦闘はもう決着が着く寸前であった。

何故なら、現在、霊夢はボロボロな状態で依姫の前に倒れているのだから。

「おいおい、おまえらしくないな、霊夢」

「仕方ないでしょ、妖怪とかならまだしも、相手が人間だから調子狂うのよ」

「確かに、霊夢は妖怪退治専門だからな……」

霊夢の言葉に、歩は心配そうな顔をしながらも納得したように頷いていた。

「貴女は力の使い方を間違っている。修行が足りない」

「……大体ねえ、さつきも言ったように私は妖怪退治の専門家なの。相手が神様だとか、人間だとも勝手が違うのよね。もつとこころ、倒して然るべき相手が……」

そう言いながらレミリアを見ると、アルカの膝に顔を乗せて寝ているレミリアが見えた。

そんな二人に陽が当たらないように傘を差している咲夜がそれに気付くと、笑顔で答える。

「もう飽きて寝ていますわ」

それに対して怒った霊夢。

「あーあ！もつと妖怪らしい妖怪を退治したいわねえ！」

そう言いながら、八つ当たり気味に依姫に札を投げる。

しかし、その札からは、黒い靄のようなものが出ている。

依姫はそれを避ける事もせずに剣で切り裂くと、気付いた。

「……！これは」

『大禍津日』。あんた達の弱点は分かっているわ。穢れなきこの浄土に穢れを持ち込まれるのを極端に嫌うこと」

「なんですって？じゃあ、さつき投げた物は……」

「大禍津日神がその身に溜めた厄災よ。放っておけば月に寿命をもたらすわ。弾を一つ一つ潰さないと、月は地上と変わらなくなる。

これであんたは私の弾を避けるわけにはいかないでしょ？」

これを聞いた葵は少し焦った顔をする。

流石に此処までしなくとも……と思っっているのだ。

しかし、その隣にいたルカは少し笑みを浮かべながら霊夢に言う。

「凄いな。まるでお前が倒して然るべき妖怪みたいだな」

「あんたね〜」

そんなルカに、霊夢は頬を引きつらせた顔で見るのだった。

\*\*\*

「紫様は賢者の家が留守だということを最初から知っていたようですね。もしかして……」

「そうよ。何のために霊夢と葵の稽古をつけさせ、レティシアに頼んでレミリア達を月に向かわせるように促したと思ってるのよ」

「でも、吸血鬼達の月ロケットは私達が指示した物ではないのでは？レティシア様も、ロケット造りの知恵は貸していないようでしたし……」

「あんなもん、その気になれば誰だって作れるのよ。人間だって作っただなもの。私はレティシアに頼んでその気にさせてもらっただけ。表面だけが周りに影響されて動き回っただけよ」

藍への言葉を其処で区切ると、紫は藍から背を向けた。

「……それは、大気が海の表面を波立たせるようになってことですか？」  
「賢者ではなく、言うなれば愚者の海」

そう言いながらまた指で下から上へと線を引くと、今度は人一人入るぐらいの大きさの隙間が開いた。

「さあ！藍。最後の命令よ。中に入って、私を満足させる素敵な物を盗んできなさい！」

「分かりました」

藍は紫の指示通り、隙間の中へと入って行く。

それを見届けると、隙間を背にして、紫は笑い始めた。

「クッククック、プツ、あーはっはっはっは!!？」

紫は笑い終えると、そのままもう片方の長手袋を取り、空中へと投げると、それが鴉の姿を取り、何処かへと飛んで行ってしまった。

と、その時、藍の叫び声が聞こえてきた為に気になって入ってみる



と、その先は竹林だった。

「あ！紫様！何か変なんです」

「だから、何が変なのかしら？」

紫はそう言いながら周りを見渡すと、気付いた。

「――建物らしき物が見当たらない暗い夜

「――月であまり見かけなかった竹林

「――穢れ多き、動物の咆哮

そして、一番の決定打となったのは……。

「満月……それも少し欠けた」

「此処って……幻想郷、ですよ？」

「ツ!??! いけない！満月が閉じてしまう」

その言葉とほぼ同時に閉じた境界。

そして、能力により茜は気付く。

自分達に近付いて来る存在に。

「ツ!??! 紫様!!?!」

「そう、公転周期の僅かな乱れ。それは完全な数であるはずの二十八を僅かに欠いたトラップ」

その声のした方に顔を向けた紫、藍、茜。

その視線の先にいたのは、依姫と同じ様な服を着た女性。

その隣には以前、霊夢達が見た月兎もいる。

そして、その女性は紫を見て、少し笑う。

「もう貴女は月に戻れない。師匠が千年以上も前に仕掛けたトラップでね」

迷いの竹林には、月の民二人に敗北した三人の妖怪、月の民と月兎。そして、竹の枝に器用に座って、面白そうに静かに笑う影だけがその場にあった。

\*\*\*

霊夢は空中で厄災の塊を掲げ、それを依姫の方に向けると、その塊から小型の弾幕を飛ばしたが、しかし、その全てを依姫は斬り裂き、消していく。

その為に、お互い体力・気力・精神力を消耗し続けていた。

「ああもう、キリがないわ。私が負けようかしら」

霊夢は口で息をしながらそう言うと、依姫もそれは同じだったようで、終わらす為に最後の神を呼んだ。

『伊豆能売』よ、私に代わって穢れを祓えー！」

すると、依姫の後ろには巫女姿の神様が現れた。

「巫女姿の神様!? 誰それ? 聞いたことない神様だわ。葵は知ってる?」

「うん、知ってるよ。勉強したから」

「神・妖怪の種族当てで霊夢が葵に勝てるとは思えないな」

「彼奴は勉強しないから仕方ない」

「あんた達ね〜」

ルカと鬼灯の皮肉にまた頬を引き吊らせて言う霊夢。

その裏で、巫女姿の神様は霊夢が撃った厄弾幕を一つ一つ浄化していつていた。

それを見た霊夢は空中から地面へと降り立つと、直ぐに葵が近寄り、霊夢を癒し始めた。

「はあ、あんな神様もいるのね。葵、地上に帰ったら教えてくれない?」

「うん! 良いよ!」

そんな二人に対して、依姫は笑顔ながらに無慈悲なことを言う。

「残念ながら、貴方達二人とそこの釣竿を持った人は直ぐには帰れないわよ」

「……」

依姫のその言葉に、霊夢は嫌そうな顔をするのだった。

## 第七百七十五話

霊夢が破れたのち、レミリア達は地球へと帰っていった。

そして、月から帰ってきてから早数日、未だに博麗神社には雪華しか住んでいない。

「こんにちは〜！雪華さん!!? 清く正しい射命丸です!!?」

「ん? あ、文か!!? いつも通りのゴシップ記事探しか? 此処にはゴシップ記事になる様なネタは転がってないぞ?」

「何でゴシップネタって決め付けるんですか!!? 私は事実しか書いてません!!?」

雪華はそれを聞くと肩を竦め、トウヤとコガネを奥から呼ぶと、餌をやり始めた。

「巫女二人と歩さんが消えてから早二十五日。雪華さん、あの吸血鬼達から何か聞いてませんか?」

「あく、聞いたけど面白みなかったから途中から聞き流してた。その所為で内容忘れた」

雪華は耳に髪を掛けながらそう答えた。

「覚えてて下さいいよ〜!」

「メンゴメンゴ」

「心から謝る気0ですよね!!?」

「何で分かった!?!?」

「誰でも分かりますよ……」

雪華の反応に疲れたのか、文は肩を落とした。

「……でも、此処まで留守にするとなると、もうそろそろ新しい巫女を探さないとイケませんか? でも、神無月の巫女の代わりは……」

「いや、あの二人は歩と一緒に帰ってくるよ」

文の言葉に、雪華はトウヤ達の食べてる姿を見ながらそう言った。

「……何故、そう断定出来るのですか? 根拠か何かがありますか?」

「ああ、あるよ。私の故郷の方の幻想郷でも月に行ったが、帰って来たからね、彼奴は」

「そうですか」

文はそう言つてメモを取ると、何処かへと飛び立っていったのだつた。

\*\*\*

その日からまた数日が経ち、漸く霊夢達が帰つて来た。

「少し留守にしただけで、随分と寂れた感じになるもんだな」

「やっぱりこの日に帰つて来たか、霊夢。葵達もおかえり」

「おう、ただいま！」

「はい、ただいま帰りました」

「帰つたか、葵」

「うん!!?ただいま!ルカ!想起さん!霖之助さん!」

「おかえり、葵」

博麗神社には、何時もよりも大勢の人が其処で葵達を出迎えていた。

「とうか、ブーツとしてるなら掃除してくれたら良いのに」

「掃除なら雪華がしてたんだ。なあ?夢幸」

「ああ、そうだ。大体、俺が此処を掃除など、する訳がないだろ」

「あー、ハイハイ。とうか、雪華。してくれてたのね」

「私以外いないのに『しない』という選択肢はないだろ。だから、仕方なく。本当に仕方なくやってたんだ。面倒だと思いつながら」

「あー、ハイハイ。分かった分かった。本当にアリガトウゴザイマシタ」

「うわあ、誠心誠意が全く感じ取れないわ〜」

「それで?月では何をしてたんだ?」

「この時を待つてました!!?」

と、其処で上から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

その声が聞こえた方に顔を向けてみれば、神社の屋根に文と小唄がいた。

「お、文じゃないか。懲りずにきたのか」

「あそこで懲りてては新聞記者にはなれません!!?ということまで!!?月での出来事を聞かせてください!!?」

「そうね……まあ、良いわ」

「そうですね……では、残った後からの事を話しましょうか」  
そして、葵達は話し出した。

\*\*\*

月に残された葵達はまず綿月姉妹の屋敷へと連れて行かれた。  
そして、何故か接待を受けていた。

「……え、えっと」

「あら、食べないのかしら?」

「あ、いえ! 食べます!」

「そう、良かったわ」

依姫の嬉しそうな顔を見た葵は、自分の前に出されている桃を見た。  
た。

(……食べるとは言いましたけど、凶々しくないでしょうか?)

葵がそんな風に悩んでいる横では、霊夢が躊躇なく桃を食べていた。  
た。

「え!? ?れ、霊夢!? ?」

「?何よ。食べていいって言うから食べてるんじゃない」

「そ、そうですが……」

葵は霊夢にまた言おうとするが、霊夢の様子を見て、言うのを諦めた。  
た。

「……歩さん、少しお話があります」

「うん、知ってた。じゃないと、俺をここに留まらせる理由が分からないしね」

「御理解ありがとうございます。一度、廊下に出て話しましょう」

歩は依姫に続いて出て行くと、霊夢達のいる部屋から少し離れた場所  
所で、依姫が振り向き、訪ねてきた。

「……貴方はここに戻って来るつもりは有りませんか?」

「あく、やっぱり気付いてた?」

「勿論です。貴方の先祖を、私もお姉様も知ってますから。貴方の先祖が、月の民であったことを」

歩はそう言うと、返事を返した。

「悪いけど断るよ。俺は、地上の方が楽しいし、何より地上の事を見下

すお前達の所に戻りたいとは思えない」

「……そうですか」

「でも、依姫。俺はお前と友達になりたいと思ってるんだ」

「!!? 私と?」

「ああ!」

歩が笑顔を依姫に向けると、依姫はそれに驚き、落ち着くために目を瞑ると、答えた。

「……考えておきます」

「分かった」

「さあ、戻りましょう。あの二人にも残した理由を話さないといけませんからね」

「そう言えば、霊夢達を残した理由ってなんなんだ?」

その歩のもつともな質問に、依姫は少し顔を顰めていった。

「貴方達が月に攻めてくる前、月の都で争いが起きるといふ噂が起りました。その時、神達が勝手に呼び出されるという問題が発生し、私とその反逆のリーダーという疑いが掛かったのです」

「……つまり、自分の疑いを晴らすためっていうことか」

「そういう事です。この事を、あの二人にも話さなければいけませんね」

依姫はそれだけを説明すると、歩を連れて霊夢達がいる部屋へと戻っていった。

\*\*\*

その頃、紫、藍、茜、鬼灯、レティシアは白玉楼を訪れていた。

「はあ、彼処でレティシアが助けてくれなかったらどうなってたか……」

「クスクス、何もなかったと思うわよ? 私が出なくても」

「いや、あっただろ。彼方に失うものがあつたかなかつたかの話になるだろ」

「クスクス、あんな脅しをしてきたもの。だから、一つ失わせてあげただけよ!」

そんな会話を部屋でしているが、しかし藍は何処か困惑している顔

をしていた。

それに気付いた茜は藍に話し掛けた。

「どうした？ 藍姉」

「いや、今回の月面戦争は私達の負けのはずなのに、何故、紫様は笑っているのかと思つてな……」

「それは、今回の月面戦争。我等の勝ちだからだ」

「？ どういう事だ？」

「つまり、吸血鬼達が『おとり』だったように、我等もまた『おとり』だったのだ」

その茜の説明に、紫は笑顔を浮かべた。

「そう、茜の言う通り、私達もまた『おとり』。月の使者のリーダーは二人」

「……実力派と援護要因。その二人を騙すには二種類のおとりが必要だった、という事ですか？」

「そういう事よ。地上には月の頭脳と呼ばれていたあの薬剤師がいる。スパイであるその薬剤師を騙すにはまず、私が罠にはまる必要があったのよ」

「クスクス、そして、私達の中では一番何も考えてなさそうな幽々子に、紫が協力要請を出したのよ。と言つても、直接的な指示は無かつたけれど♪」

「藍が気になったスキマがあつたでしょう？ 幽々子にはそのスキマの中に入れてもらつて、ガラ空きになった賢者の屋敷に侵入してもらつてたの」

紫その説明に、お茶を用意していた妖夢は疑問などが晴れた事によつて、少し安心した顔をしていた。

「そういう事だったのですか。私と永久も同行しましたが、幽々子様は何にも説明してくれないので本当に困りましたよ。」

侵入してから一ヶ月間も月の都に忍び込んでいたのですから」

「幽々子を選んだ理由はそれもあるわ。」

私が再び月と地上を結ぶことが出来る次の満月まで、月の都に忍び込んでも目立たないから」

その言葉に、妖夢は首を傾げる。

「どういう事ですか？幽々子様は結構目立ってましたが……」

妖夢がその時に思い浮かべたのは、月の都にやってきた時に、月の兎達に話し掛け、その月の兎達に囲まれて談笑している幽々子だった。

「月の都は穢れを嫌うけど、貴方達は既に浄土の住人だからね」

その説明の後に幽々子が入ってきて、賢者の屋敷で盗んだお酒を見せると、レティシアと紫は大いに笑い始めたのだった。

\*\*\*

一方の月の都では、綿月姉妹がツクヨミの前にいた。

「さて……君達は負けちゃったね。地上人に」

「申し訳ありませんでした」

「特に豊姫ちゃんは月の技術で作った扇子まで壊された」

「……すみませんでした」

\*\*\*

紫が豊姫に捕まった時のこと。

「さて、この者たちは一度このまま放置を……」

そうして一度月へと帰ろうとした時、紫の後ろに影を見つけた。

その影は手を上に振り上げ、そのまま下に下ろすと、紫達を縛っていた縄が切れてしまった。

「え!?」

「な!? 須臾の組紐が!?」

「クスクス、組紐の一本一本が須臾であるなら、その僅かな時間を認識できるようにして仕舞えばいい。須臾で無くして仕舞えばいい」

「ツ!? 何者!?」

紫達の後ろに立っていた者が紫達の前に立つと、その姿がよく見えるようになった。

黒のゴスロリを着て、綺麗な金髪紅眼の吸血鬼。

レティシアである。

「……」

豊姫はレティシアの行動で只者では無いと分かると、扇子を構え



た。

しかし、その次の瞬間にはその扇子はレティシアの手の中にあつた。

「えっ!?？」

「ツ!!?返しなさい!!?」

「クスクス、返す?こんな森を一瞬で素粒子化出来る危険物、貴女に持たせる方が危険じゃない。コレは……」

そう言うと、レティシアは手に力を入れ、扇子を粉々にしてしまつた。

「……破壊よ」

「ああ!!?扇子が!!?」

「くっ!!?」

豊姫が悔しそうな顔を見ると、またいつの間にか居なくなつていった。

「!??何処に……」

「クスクス、貴方達、これ以上この幻想郷を脅かすようなら」

その言葉の後に、豊姫の肩に重みが掛かると同時に耳に当たる息と言葉。

しかし……、

「月の住人全ての命を賭けることね」

その言葉に背筋にゾツと寒気が走つた。

そして、足に力が入らなくなり、地べたに座り込んでしまったのだつた。

\*\*\*

その報告を受けると、ツクヨミは溜息を吐いた。

「……はあ、君達さく、地上の生命達を舐めすぎだよ?だから今回、嵌められたんだから」

「……はい」

ツクヨミの言葉に未だにショゲてる豊姫はそんな反応しか返せない。

それを見たツクヨミは少し真面目な顔で話し出した。

「……月の住人達は確かに地上人よりも優れてるよ。技術でも、力でも、寿命でもね。」

「……でも、全てが優れてるわけじゃない」

「……何処か、優れてない部分があるということですか？」

「うん。僕から見たら、月の住人は地上人に心の強さで負けてる」

「心の、強さ？」

「そう。君達は技術とかで優れてるからって地上の人達を見下していた。同じ人間で、少し違うだけなのにもかかわらずに、ね」

「……」

「だからこそ、見下していたからこそ、今回は嵌められた。次は嵌められないように、見下すことを止めることだよ」

「分かっていきます。それで、失礼します」

依姫はツクヨミの言葉を聞くと、豊姫と共に出て行った。

「……はあ、疲れた」

「お疲れ様、ツクヨミ」

「あ、姉さん!!？」

ツクヨミは後ろから聞こえてきた自分の姉『天照大御神』の声を聞くと、そちらの方に嬉しそうな顔で向けた。

「緑茶入ったわ♪」

「ありがとう!!？それと、今回は依姫を手伝ってくれてありがとうね」「どういたしまして」

アマテラスは優しい笑顔をツクヨミに見せると、一口緑茶を飲んで、話し出した。

「そういえば、ツクヨミは鬼灯と話したのよね？」

「そうだよ!!？ほーちゃんと一緒に住もうって提案したのに、断られたんだよ!!？分かったとはいえ断られたんだよ!!？僕、悲しいよおおお!!？」

ツクヨミはそんな風に叫びながら、机に突っ伏して泣き始めてしまった。

それに驚いたアマテラスはツクヨミを宥め始めると、ツクヨミを少しずつ落ち着いてきたようで、なんとか言葉を続けた。

「ぐすつ、それに、ほーちゃんは僕の事が苦手だって……僕の『能力』が苦手だって……」

「まあ、ツクヨミの能力は仕方ないわよ。だって、貴女の能力である『真実を曝け出す程度の能力』は、私も貴女も『嘘』が吐けないもの」  
ツクヨミの『真実を曝け出す程度の能力』は、ツクヨミと、そのツクヨミの周りにいる者全ての『真実』が表に出てくるのだ。

それは言葉・感情・表情・行動全て関係なく表に出て来るために、ツクヨミは信仰されると同時に苦手視されているのだ。

「僕だって……好きでこの能力持ったわけじゃないよ。言っちゃダメだと思つて別の事を言おうとしても、本心が強制的に出て来る。僕だって〜!!?」

「ツクヨミ、私はツクヨミの能力関係なく、ツクヨミの事が大好きよ」  
♪

「姉さん〜!!?」

ツクヨミは嬉しさから、アマテラスに勢い良く抱き着いたのだつた。

その状態でアマテラスはツクヨミを宥めながらも視線をそのツクヨミの後ろにやった。

そのツクヨミの後ろには、ツクヨミが良く使う鏡があり、その鏡には丁度、葵達が真冬にも関わらず水着姿であり、幽々子が持ってきた依姫達のお酒を飲んでる所が映っていたのだつた。

## 咲夜の日常

### コラボ企画〈第四段〉

葵は何時もなら博麗神社にいる時間帯にも関わらず、今日は神無月神社の桜が咲き続ける縁側に座っていた。

葵が博麗神社に行かずに神無月神社にいる時は、大抵が予知夢を見たときである。

それも、人が来る時の。

(如月さん、龍さん、岩槻さん、ミコトさんに続いて、今回も紫さんに連れてこられる方が……紫さん、人に迷惑を掛けるのは……まあ、言っても止めないのが紫さんなのですがね)

葵はそんな風に考えて、溜息を吐いた。

紫が誰かを勝手に連れて来るということを止めることは無いと、分かっているからだ。

(……でも、今回は誰と会えるのでしょうか？夢の中では見慣れない方でしたし……楽しみです)

葵は本当に心から楽しみにしているようで、顔に笑みが浮かんでいた。

「葵、客は来たか？」

そんな葵の後ろから緑茶を三人分運んで来たルカは、葵にそう尋ねた。

「あ、ルカ。ううん、まだ来てないよ」

「そうか。まあ、葵が楽しみにしてるからまだ良いが、葵に何かすれば……」

「ルカ、落ち着いて。私は大丈夫だから!!？夢でも殺されてないから!!？」

「……なら良いが」

葵のこの言葉に納得したと言うような言葉を言いながら、しかし警戒は全く解いていないルカ。

それに少し溜息を吐いた葵。

と、その時にスキマが開き、その中から一人の人物が放り投げられた。

この登場には流石に驚いた葵とルカに対し、黒髪の青年はそのまま地面へとダイブしてしまった。

「痛ッ!?!?」

「!!?!?だ、大丈夫ですか?!?!?」

葵がその青年に近付くと同時にその青年は手を地面につけ、起き上がる。

「痛た……あ、大丈夫大丈夫!!?!?全然平気だから!!?!?」

「で、ですが……」

「葵、其奴が平気というなら平気なんだろう。気にするな」

「でも、あんな落ち方を……」

「……はあ」

葵のこの優しさに、ルカは溜息を吐かざる終えなかった。

「それに、膝を擦りむいてますか……ら……」

葵はそう言いながら、また失敗してしまった。

また顔を見てしまったのだ。

だが、葵はよく話す時に相手の顔を見て話す癖がある為、これほどうにも避けきれなかった事である。

しかし、その青年の過去は……悲惨だった。

この青年は如月達と同じ様に元は外来人であったようで、外の風景が見える。

しかし、彼はミコトや自分と同じで周りから嫌われていた。嫌悪さ  
れていた。

殴られ、蹴られは当たり前前にされている様子もあった。

そして、彼と似た老人が死んでいる映像も映った。

その老人はどうやら、誰かに殺された様で、それ以降から目の前の  
青年は変わってしまった様子も……。

「?!?!?ど、どうしたんだ?!?!?」

「……」

葵は気付くと、また涙を流していた。

理由は簡単。この青年もまた、虐げられていた事に悲しくなったのだ。

本当はとても優しい、この青年が。

「お前……」

「ま、待て待て!??俺は何もしてないから!??な、泣かないでくれ、な?」

「ひつく……ぐすつ……ごめん、なさい……」

「いや、謝罪して欲しいんじゃない……」

「貴方の、過去を……ひつく……無断で……見てしまったんです……ひつく……」

「え……」

青年はそれを聞いて、驚いた顔をしたが、しかし直ぐに葵の能力が関係してると理解する事が出来た。

普通の人間に、他人の過去を見る能力などないのだから当たり前である。

「……泣かないでくれ」

「ひつく、ぐす……」

その後、どうやらルカが鬼灯達を呼んでくれたようで、一度葵を部屋に帰らせ、青年は客間でルカと対峙していた。

そのルカはというと、青年を睨んでいた。

「……何で俺、睨まれてるんだ?」

「見知らぬ奴の何処を信用出来ると?」

「あ、うん……」

ルカの何処までも冷たい言葉に、少し悲しくなってきた青年。

「……はあ、お前、名前は?」

「俺は『星出 晴夜』。晴夜って呼んでくれ」

「……霜月ルカ。ルカで良い。で、泣いてたのがこの神社の巫女の葵だ」

「へく、霊夢や早苗の他にもいるんだな、此処の幻想郷には」

「……そうだな」

「……」

晴夜は何とか会話を続けようとしたが、ルカは未だに警戒心を解いておらず、続ける事が出来ない。

それに内心、溜息を吐くと、客間の障子戸が開き、想起が入ってきた。

「お茶を持ってきたよ」

「……ああ、ありがとう」

「ルカはやっぱ警戒を解いてないか……あ、初めましてだね。僕は此処、『神無月神社』の居候の幻現想起だよ!!? 想起って呼んでね!!?」

「分かった。俺は晴夜。晴夜って呼んでくれ。星出は呼び慣れてないんだ」

「うん!!? 良いよ!!? よろしくね晴夜!!?」

想起はそう言つて手を出した。

それを見た晴夜もまた、手を出して握手をした。

それを見たルカは静かにその場を立ち上がると、想起の近くまで歩いてから言つた。

「……想起、ここは任せた」

「え?」

「この役目は私には合わない。大体、見ず知らずの奴を信用出来るわけがないだろ」

ルカはそう言いながら晴夜を睨む。

「だから、頼む」

「え、ちよつと!!? ルカ!!?」

想起はそれでもルカを止めようとしたが、しかしルカは止まらず、そのままその場から去って行ってしまった。

「……あゝつと、御免ね、ルカが」

「あ、いや、気にしなくて大丈夫大丈夫……」

「……僕も詳しく知ってるわけじゃ無いんだけど、ルカは昔の事が原因で、人を信用出来ないんだ」

「……人を」

「だから、許してとまだは言わないけど、その、気にしないでくれたら

有難いかな？」

想起は困った様な顔でそう頼むと、晴夜はそれに頷いたのだった。



## コラボ企画く第四段く

アレから想起と晴夜は同じ外来人同士だからなのか話が合い、想起の趣味から晴夜のいる幻想郷の話に発展していった。

「へく、晴夜は今は早苗と同じ所に住んでるんだ!!?」

「ああ。ただ、宴会の時には色々ヤバい事に……」

「……聞かないでおくことにするよ、其処は」

「で?その想起は何で此処に住んでるんだ?」

「僕は葵の友達だからね。それに、人里に家を建ててないし、ここ暮らしが幸せだからね」

想起は本当に幸せそうな顔でそう言ったからなのか、晴夜も満面の笑顔を浮かばせた。

「そうか!!?」

二人して笑っていると、そこに猫がやって来た。

「にゃく」

「あ、ノア。ルカなら此処にはいないよ?」

「?この黒猫は?」

「この子はノアって名前前で、ルカのペットなんだ」

「へく」

晴夜は それで納得した様子を見せていると、ノアが晴夜に近寄り、ゴロゴロと喉を鳴らしながら撫でるのを急かして来た。

「ノアが撫でろって言うてるね」

「確かに仕草でそう言うてるな」

晴夜はノアの毛黒い毛を優しく撫でると、気持ち良さそうに目を瞑ってゴロゴロと喉を鳴らした。

「ノア?何処にいる?」

と、そのノアを探しているルカの声が近くから聞こえてきた。

「ルカく!此処にノアがいるよく!!?」

「……」

想起がルカを呼ぶ声を出して少しすると、障子戸が開き、ルカがやって来た。

そして、ノアを撫でている晴夜を少し見ると、静かにその場に座った。

「信じてみる気になった？」

「動物に優しいだけなら誰でも同じだろう」

「外の世界だと、虐待する人も居るけどね」

想起のその言葉に不機嫌さを露わにするルカ。

ノアはそんなご主人様を見つけると、晴夜から離れてルカに近寄り、その膝の上に乗った。

「……」

「……あく、え〜つと」

しかし、ルカから言葉もなく、話してみたい晴夜としては話しかけずらく、如何したものかと思ひ、気まづくなっていると、其処に今度は鬼灯と葵も入って来た。

そして、雰囲気を感じ取った鬼灯は顰めっ面でルカを見やっ  
た。

葵もこの空気に苦笑を漏らすと、晴夜の前に座った。

「自己紹介から先にしますね。私は此処、『神無月神社』の巫女をして  
おります、神無月葵と申します。先程は過去を見てしまつて。そし  
て、急に泣いて困らせてしまつてすみませんでした。

「気にしなくて大丈夫大丈夫。俺は晴夜だ。それにしても、過去を見  
るって、それはお前の能力？」

「……はい。本当にすみません」

「だーから、気にしてないって」

葵が顔を俯かせて謝ると、晴夜は気にしてないと言った。

しかし、空気は重いまま。

その空気が耐えられなくなった想起は、話題を晴夜に振った。

「そういえば気になってたんだけど……晴夜の能力ってなんなの？」

その言葉を聞いて、ビクツと震えた葵。

それに気付いたのは葵と長年一緒に住んでいるルカと鬼灯のみで、  
想起と晴夜は気付いておらず、話は続けられた。

「俺の能力は『雷電を操る程度の能力』だ。俺の感覚を麻痺させたり、

相手の能力も麻痺したり出来る。他にも用途はあるけどな」

晴夜はそう説明すると、ルカ、鬼灯、想起が葵に同情の視線を向けた。

「?何で三人とも葵に同情の視線を向けてるんだ?」

「……あく、その、だな」

「えっと、ね……」

「……雷を外に出せば理由がすぐに分かる」

「鬼灯!?!」

「……えっと、お前は?」

晴夜は鬼灯を見ると、鬼灯は「そうだったな。まだしてなかったな」と言うのと、顔を晴夜に向けた。

「自己紹介が遅れたな。私は孤天鬼灯だ。此処の神様をしている」

「へく、神奈子様や諏訪子様と同じ……」

「ああ。まあ、彼方は戦神と崇り神に対して、私は豊穰神だがな。……話が逸れたな。兎も角、雷を外に放出すれば、私達の視線の理由がすぐに分かるさ」

「ほ、鬼灯!!?それを言わなくても……」

「?理由が分かるなら……」

「や、やめて下さい!!?」

「……って、葵は言ってるけど?」

「気にせずやってみろ。その方が手っ取り早い」

鬼灯の言葉に背中を押され、微量の雷電を放出すると、

「ヒイツ!?!」

葵はそんな叫びを上げると、部屋の隅っこに素早く移動し、耳を塞いで縮こまった。

「……え?これ、もしかして」

「ああ、葵は『雷』が怖いんだ。晴夜とは相性が悪いな」

「そんなく……」

晴夜はガツクリと項垂れると、想起がその肩に手を置いた。

「大丈夫だよ晴夜!!?雷さえ外に出さなかつたら良いんだから!!?」

「そういう問題か?」

「そういう問題なんだよ!!?」

想起の言葉を信じて雷電の放出を止めると、葵は顔をゆつくりと向けた。

その目には涙が溜まっている。

「……えつと、ごめん」

「い、いえ、大丈夫……です」

すると、その部屋の後ろにスキマがタイミングよく現れ、中から紫が出てきた。

「晴夜く、迎えに来たわよ」

「……紫、なんでこんな事をした?」

「面白そうだったから♪」

その言葉に晴夜は頭を抱えた仕草をすると、その晴夜の足元にスキマが開いた。

「……兎も角、お別れみたいだな」

「ですね……晴夜さん。いつでも遊びに来てくださいね。幻想郷は、そして私達は、待ってますから」

「!!?・ああ!!?」

最後に晴夜は満面の笑顔を向けると、そのままスキマの中へと入っていった。

「……待ってるとは言ったが、雷、大丈夫か?」

「……だ、大丈夫。きつと、うん」

ルカの心配する問いに、葵は笑顔を引きつらせて答えたのだった。

## コラボ企画〜第五段〜

地霊殿には珍しい客が来ていた。

地上の妖怪で、妖怪の賢者の一人。レティシアである。

そのレティシアはさとりに呼び出された為に地霊殿へとやって来ていた。

そして、さとりの部屋前まで来ると、扉をノックして来客の合図をした。

そして、部屋の中から許可が出た為に入ると、さとりが本を閉じている姿が見えた。

「クスクス、さとり、来たわよ」

「でしょうね。来客が来たのに心が読めないなんて、貴女や陽炎ぐらいのものでしょう」

「クスクス、それで、用って何かしら♪」

「……分かってますよね？その反応と顔は」

「クスクス、何のことかしら♪」

レティシアはあいも変わらずクスクスと笑い続けている。

それに溜息を吐くと、椅子に座るように促し、要件に入る事にしたさとり。

「……結構前に蜷局とお空が別の世界へと遊びに行きました。これは貴女も気付いていましたよね？」

「クスクス、ええ。私だけじゃなくて紫も気付いてるわ。気付かない賢者は鬼灯ぐらいでしょう。彼女は結界と無関係の能力だからね」

「そうですね。彼女なら仕方ありませんね。……それで、その事なのですが……貴女に蜷局達の様子を見て来ていただきたいのです」

「クスクス、それは貴女が行けばいいじゃないの、さとり。何故私なのか、理由が分からないわ♪」

「……」

「クスクス、心を読もうとしても無駄よ♪」

レティシアが変わらない表情で言うと、溜息をまた吐いた。

「……分かってますよね？私はあまり、此処から離れる事が出来ませ

ん。私は此処の主ですから」

「クスクス、そうね。だから、私に頼んだと。なら、それこそ紫に頼めばいいじゃないの♪」

「……彼女は境界の維持などで忙しい身……だと思いたいです」

「クスクス、今頃お昼寝真つ最中じゃないかしら♪」

レティシアが楽しそうに笑いながら言った言葉に、さとりは頭を抱えた。

賢者がそれで良いのか、と。

「クスクス、それが賢者で良いのよ。幻想郷を想う心、その幻想郷を守る力、幻想郷を良くしようと考えられる思考と知識があればね」

しかし、さとりの思考を見透かしたレティシアの答えに、さとりは納得した様子を見せた。

「……兎も角、貴女にその役目を頼みたいのです。お願いできますか？」

「クスクス、そうね……私はやる事があるから、信用出来る人にその役目を任せましょう♪」

「……貴女、まさか覗き見「クスクス、人間きが悪いわね。面白観察と言って欲しいわ♪」どちらも意味は変わらないと思いますが」

さとりの言葉にレティシアは変わらず笑い、さとりは三度目の溜息を吐いたのだった。

\*\*\*

神無月神社では葵、ルカ、鬼灯、想起がレティシアからその話（覗き見以外）を聞き、ルカと鬼灯は至極面倒そうな顔をしたが、葵は苦笑いを浮かべ、想起は真逆に目を輝かせていた。

「つ、つまり？外に……それも異世界に遊びに行けるの!?!?」

「クスクス、勿論♪」

想起はそれが嬉しかったのか、体を後ろに向けて隠れてガツツポーズをした。

「ですが、私も仕事が……」

「クスクス、大丈夫よ♪貴女達に言う前に霊夢に説明したから。

霊夢も言ってたわよ?』「いつも任せつきりだから体休めに満喫して

こい』ってね♪」

「は、はあ……それなら」

「了承するのは早いぞ、葵」

葵が了承しようとする、鬼灯がそれに待ったを掛けた。

「……お前、何を企んでる？」

「クスクス、鬼灯酷いわね。まるで何時も企んでるみたいじゃない

♪」

「お前と紫ほど胡散臭い奴はいないだろ」

「クスクス、やっぱり酷いわね♪」

「嘘付け。酷いと思ってるないだろ」

鬼灯の言葉にルカも頷いていた。

「どうやら、本当に酷いと思ってるじゃないようだ。」

「クスクス、兎も角、葵を休ませると思ってる、行って来たら？」

「……私が断れない言葉を言ってきたな、お前」

「クスクス、勿論♪断らせない為に言ったんですもの♪」

「……はあ、お前と話すドツと疲れる」

「クスクス、まあ、日帰りなのだから……準備とかは要らないわね♪」

「え、れ、レティシアさん？その、少しは準備を……」

葵のその言葉の返答は、満面の笑顔だった。

「クスクス、いつてらっしやい♪」

そして葵達の座ってる所に、スキマが開いたのだった。

葵達は重力に逆らえず、そのままスキマに落ちていった。

「キャー……!!？」

「レティシア……!!？」

「クスクス、必要になったら送ってあげるから安心しなさい♪」

鬼灯の怒声に、レティシアはそう返したのだった。

\*\*\*

その頃のお空はというと、蜷局と十六夜達の修行を外から見ていた。

「一旦休憩にするぞ」

「ああ……」

「そうね。そうしましょう」

「……うん」

その言葉が聞こえた為、お空は蜷局に近寄り、抱き着いた。

「蜷局〜!!?」

「どうした?..お空」

そんなお空を抱き留めると、蜷局はお空の頭を優しく撫でる。

それに対して嬉しそうな顔を浮かべるお空。

いつもの二人の空間が出来上がってしまった。

しかし、その空間は直ぐに壊される事になる。

「……ん?」

「……この気配は」

「……上?」

十六夜、蜷局、お空が気配がした上に顔を向けると、段々と叫び声が聞こえ始めた。

「キャー……!!?」

「!!?この声……葵?」

お空が驚きの声を上げる横で、蜷局は冷静に見ていた。

「おい、まずいぞアレは……」

「いや、大丈夫だ」

蜷局のその言葉の通り、直ぐにスカイダイビングをしていた四人は冷静になり、浮遊した。

そして、四人はゆっくり降りてきて、地面に着地した。

「さ、流星にあれば怖いですよ……」

「スカイダイビング……この生の間はする事はないと思ってたけど……まさかする事になるなんて、僕は思わなかったよ」

「まあ、普段から移動時に飛んでるから、死なずに済んだな」

「……今回は賛同だ」

上から葵、想起、鬼灯、ルカの順で話していると、直ぐに人の気配を感じて其方を見た。

すると、其処にはレティシアに頼まれた蜷局とお空、そして見知らぬ三人組がいた。



「……貴女達は誰かしら？」

そのうちの一人、黒髪のロングの少女が警戒しながら問いかけた。「あ、すみません!!? 私は葵と言います!!? 其方にいるお空さんと蜷局さんと同じ所からやって来ました」

葵は敏感に警戒心を感じ取ると、自己紹介と敵ではないと分かってもらう為にそんな自己紹介をした。

「あら? お空さん達の知り合い?」

「ああ、そうだ。俺達の世界で葵は巫女をしている」

その少女は蜷局にそう聞くと、そう返ってきた為に、警戒心を解いた。

それに気付くと、葵は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「それで? 青巫女の後ろにいる奴らは?」

すると、その少女の近くにいた雷羅に似た青年が自己紹介を急かした。

それにルカは目を細める。

しかし、それに気付いた想起が勝手に始めた。

「僕は想起つて言うんだ!!? よろしくね!!? で、こっちの金髪の子がルカ!!?」

「おい、想起、勝手に……」

「で!!? こっちの九尾の狐が鬼灯!!?」

「宜しくな」

「……」

想起が自己紹介を終わらせると、ルカがその後ろ姿を睨む。

しかし、想起はそれに気付かぬ振りをした。

「自己紹介有難う。私は『久遠 飛鳥』よ」

『朱鳥』さん?」

「ええ、『飛鳥』よ」

「そうですか!!? よろしくお願ひしますね!!? 『朱鳥』さん!!?」

「ええ、よろしく」

葵と飛鳥は互いに挨拶を交わした。

しかし、この二人は『漢字』が違うことに気付いていない。

「……『春日部 耀』」

「よろしくお願ひしますね!!? 耀さん!!?」

「……うん、よろしく」

耀も自己紹介し、葵から宜しくされると、嬉しそうな顔をした。

「俺は『逆廻 十六夜』だ。宜しくな、青巫女」

「あ、はい……（青巫女?）」

十六夜も葵と自己紹介したが、しかし、葵は呼ばれ方に少し首を傾げた。

その様子を後ろから見ていた鬼灯は、しかし、別の視線に気付き其方に向けてると、耀が目をキラキラさせて、鬼灯の尻尾を重視していた。

「……」

「……」

鬼灯は尻尾を右に動かすと、耀はその尻尾を視線で追った。

今度は左に動かすと、また其方に動かした。

「……触るか?」

「!!? うん」

鬼灯は耀の方に尻尾を向けると、耀は近付き、その尻尾を触りだした。

「……珍しいな、お前が触らせるなんて」

「……あんな綺麗な目で見られて、断れると思うのか?」

鬼灯のその言葉に、ルカは少し納得したような顔をしたのだった。

## コラボ企画く第五段く

葵達は十六夜達の案内のもと、ノーネームの本拠地の中へと入っていった。

「それにしても、本当にいつの間に来たのここに来てたのですか？ 蜷局さん達は」

そんな案内の時、葵は歩きながらも前にいた蜷局に質問を投げかけた。

「結構前としか言えない」

「そうですか。……今は、楽しいですか？」

葵がそんな質問をする理由に意味はあまり含まれていないが、強いて言えば、気になるからだ。

そして、その問いに対して、蜷局は少し笑みを浮かべた。

それを見て答えが分かり、葵は笑顔を浮かべて安心した。

「あ!!? 皆さんお帰りなさい!!?」

そんな一行の前から、鈴仙の様に兔耳が生えている女性が笑顔でやって来た。

そして、その女性は後ろの葵達を見ると首を傾げた。

「?十六夜さん、その方達はどなた様でしょうか？」

「此奴らは蜷局の世界からやって来た奴らだ」

十六夜のその言葉の後、葵はその女性の前に出て、頭を下げた挨拶をした。

「初めまして。蜷局さんと同じ世界から来ました、葵と言います。よろしくお願ひします」

「!!?よ、よろしくお願ひします!!?葵さん!!?黒ウサギは『黒ウサギ』と言います!!?よろしくお願ひします!!?」

黒ウサギはこの時、感動した。

マトモな人が来た。

「……」

「ルカ、珍しいね。警戒心を出さないなんて」

一行の後ろにいたルカに、想起は近寄ってそう話し掛けると、ルカ

はルカは可哀想なものを見る目で黒うさぎを見ながら言った。

「……あの様子を見て、警戒する意味が無くなった。……苦労してるんだな、彼奴」

「……みたいだね。葵の行動でアレだけ感動する人……じゃなかった、月兎は早々いないよ。寧ろ、今まで十六夜さん達はあの黒ウサギさんだっけ?に、何してたの?」

ルカと話していた想起は十六夜達に顔を向けてそう言うと、十六夜、飛鳥、耀の三人は答えた。

「何って、黒ウサギで遊んでたんだよ」

「そうね。黒ウサギは私達の愛玩動物だもの」

「……うん」

「……黒ウサギさん、僕達の予想より斜め上で苦労してたんだろうね」  
三人の答えを聞いた想起、答えが聞こえたルカと鬼灯は一層、同情の色を深めたのだった。

\*\*\*

黒ウサギの案内で広間まで行くと、其処には『白雪姫』と『レティシア・ドラクレア』がいた。

そのレティシア・ドラクレアを見ると、葵、ルカ、想起は驚いた。

「え!?」

「え、何でレティシアさんが此処に!?」

「……嘘だろ」

鬼灯は驚きを示さなかったが、レティシアを奇妙なものを見るような目で見ていた。

それはそうだろう。メイド服を着ているだけで、他は悪友と呼べるレティシアと同じなのだから。

「?どうしてお前達はそんなに驚いている?お前に至っては何故私を奇妙なものを見る目で見ている?」

「……いや、お前と名前も姿も同じ奴を知っているだけだ」

「そうなのか?」

「う、うん」

「……だが、多分、性格は違うな」

「……一体、どんな性格をしているんだ？お前達が知っているレティシアは」

その質問に四人は目を合わせると、答えた。

「『ドSだ（です）』」

「そ、そうか」

その答えに、レティシア・ドラクレアは引き攣った顔を浮かべることができた。

\*\*\*

その後、一通り話すと、お空以外の女性陣は外に出かけて行った。

その際、ノーネームの傷跡を見て、葵が泣きそうな顔になり、ルカは顔を顰め、鬼灯は自然がこんな状態にされた事による怒りを露わにしていた。

そして、そのまま人や人以外の人達が集まっている所まで来ると、葵は楽しそうな笑顔を浮かべた。

「わあ!!？すごい!!？」

そんな葵の正反対に、ルカは居心地が悪そうにしていた。

人見知りどころか人嫌いなルカに、人が集まるこの場所は今すぐ離れたくなるほどに嫌なものなのだろう。

葵がいなければ行くことすら拒むだろう。

「本当に凄いですね!!？此処!!？」

「此処で驚いていたなら、別の所でははしゃぐ事になるわね、葵さんは」  
そんな葵を見て、何だか微笑ましくなり、微笑を浮かべる飛鳥。

「ですが、人里でもここ迄、人が賑わう事は早々ないので……鬼灯もそう思わない？」

「……あれ？」

「?どうした?葵」

葵は鬼灯に賛同してもらおうと呼んだが、しかし周辺を見て、焦ったように言葉にした。

「……鬼灯は何処？」

\*\*\*

一方、鬼灯は葵達に何も言わずに離れ、路地裏に来ていた。

その理由は、誰かの視線を感じたからだ。

「……私を見ていた者よ。降りてきたらどうだ？」

鬼灯は視線と気配を上から感じ、上を睨みつけながらそう言うのと、本当に降りてきた者が一人いた。

その者は以前、蜷局と戦ったヒュドラの『ヘイズル・ハイドラグル』だった。

「……蜷局と同じ種族の者か」

「ああ。だが、俺は彼奴を憎んでいるがな」

「……何があつたかは知らないし、それはお前達、いや、種族間の問題だ。私が手を出す問題じゃない」

「……何が言いたい？」

その問いに、鬼灯はヘイズルの目を見ながら言った。

「……私は、蜷局の強さを知っている。だから敢えて言おう。蜷局が負けるとは思えない」

「……例えそうだとしても、俺は彼奴を喰い殺す」

「……そうか。やはり、お前達二人、もしくは種族間で解決すべき問題だな」

それを言うと、鬼灯はヘイズルの横を通って大通りに出て行った。

その後、鬼灯は葵達と合流したが、葵に黙って何処に行っていたのかと問い詰められたのは仕方がないだろう。

\*\*\*

葵達は黒うさぎの案内で大通りを歩いていると、葵はある場所に目を向けた。

「……黒ウサギさん、ちょっと寄って行っても宜しいですか？」

「？何方にでしょうか？」

「彼処です。あのお店です」

葵は黒ウサギの問いに視線で示した。

その視線の先には、玩具屋さんの様なお店があった。

「はい、大丈夫ですよ!!？行きましょう!!？」

黒ウサギの了承を得て、そのお店に近寄ると、優しそうなお姉さんが出てきた。

「いらつしやいませ!!?お客様!!?どの商品をお望みで御座いますしやうか?」

「いえ、今回は覗きに……」

葵はお店を目だけで見ていると、其処で気になるものを見つけた。その視線の先には、テディベアが目を瞑って眠っている姿があった。

しかも、落ちそうになると其処で黒いつぶらな瞳を開き、元の体勢に戻してまた寝始める光景があった。

「……あの、あの熊さんは」

「ああ、あのお人形さんはお手伝いが出来るテディベアです。因みに、商品で御座います。如何でしょうか?」

「あ、それなら、二つほど……ありますか?」

「はい御座います!!?……それにしても、貴女は見かけないお客様ですが、もしかして、箱庭に来たばかりで?」

その質問に葵は驚いた顔をしながらも、縦に首を振った。

その反応を見ると、その女性は微笑を浮かべた。

「でしたら、今回はギフトゲームにしませんか?」

「え……良いのですか?」

「はい♪但し、今回だけ特別ですよ?」

そう言うと、葵の上から降ってきたのは契約書類。

「?これは?」

「それはギフトゲームの契約書類です。このプレイヤー欄にほら、貴女のお名前が……」

「!!?本当です!!?」

その契約書類が気になったのか、黒ウサギ達も覗き込む。

そのルールは的当てなのだが、しかし、的の数は三十個。その内の二十九個はハズレの的。しかもその的も小さく(握り拳ぐらいの大きさ)、廻っている。

つまり、当てるのは難しい。

「これは……難しいわね。しかも、チャレンジが一回だけって……」

「ですね。このギフトゲームに有利なギフト持ちでないと……」

黒うさぎはそう言いながらもギフトゲームが行われる場所に移動した。

と言っても、大通りから見える所なのだが。

「それでは！ギフトゲーム開始です!!？」

すると、用意されていた的はそのまま廻りだし、葵も貸してもらった弓を構えた。

「葵さん、大丈夫かしら……」

「大丈夫だ」

飛鳥はそんな葵を見ながら心配そうにしていたが、しかし隣でルカは自信満々でそう返した。

「?どうしてそう言えるのかしら?」

「それは……まあ、終わった後に答えるさ」

ルカはそう言いながら葵を見ていた。

飛鳥はそれに納得がいった顔はしてないが、見ることにした。

その中心人物である葵は弓を構えながら当たりの的を待っていた。

そして、視界の端に当たりの的が見えると弦をしっかりと引き、その的を狙って、射った。

すると、その矢はそのまま的にまるで吸い込まれるように真っ直ぐに行き、射抜いた。

「おお!!? 大当たり!!?」

その声が葵の耳にも入り、葵は嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「……ルカさん? 説明は? アレは葵さんのギフトかしら?」

飛鳥はその様子を見て、ルカに説明を急かした。

ルカも先程、『後で』と言ったので、説明を始めた。

「いや、アレは彼奴のギフトじゃない。実力だ」

「じ、実力だけでですか!!?」

「ああ。彼奴は小さな頃、弓道をしてたんだ。で、今も暇が出来たら時々、練習をしていたんだ」

「その長年の練習の成果……という事ね」

「……凄い」

飛鳥と耀は葵を見た。



その視線の先には、葵がテディベア二体を貰っていた。

そして、そのまま黒ウサギ達の元まで戻ってくると、黒ウサギの前に一体差し出した。

「……えっと、これは？」

「いえ、この子の説明だと、お手伝いが出来るそうなので……黒ウサギさんの所には、子供達が沢山いましたから」

葵が思い出すのは、歩いていると時々見かけた子供達。

「それに、私達の案内を買って出てくれましたよね？そのお礼に……」

「!!？いい、良いのですか？本当に？」

「はい!!？」

黒ウサギはそれを聞くと、テディベア一体を受け取り、抱き締めた。

「ありがとうございます!!？」

「いえ。大したことは……それでその子、店員さんの話だと話せないのですが、ちゃんと此方の言葉は理解しているそうなので……」

「そうなのですか、分かりました!!？」

「……ねえ、葵。もう一体は？」

耀は黒うさぎの様子を少し見てから、葵がもう一体頼んだ理由を聞くと、葵は少し嬉しそうに言った。

「この子は、人形好きで私の友達に。お土産、ですかね」

「ああ、アリスにか」

「うん!!？アリスが喜びそうだなって思って……」

その葵の言葉に、ルカは少し笑みを浮かべた。

その後、黒ウサギの案内で大通りにあるお店を一通り見て回ると、

そのままノーネームの元へと戻って行ったのだった。

## コラボ企画〜第五段〜

ノーネーム本拠地まで帰ってくると、子供達と十六夜達が出迎えてくれた。

子供達は黒ウサギが持っているテディベアに目ざとく気づき、それは何なのかと直ぐに聞いてきたので、黒ウサギはそれに答えることにした。

「この子はですね、此方の葵さんがギフトゲームで勝ってくれたので貰えた景品です。言葉は話せませんが、意思を持っており、感情も出ます。それに、皆の言葉も理解出来ます。だから、この子を虐めたり、嫌がる事をしないように。良いですね？」

『はい!!?』

それを聞いた十六夜は、葵に顔を向けた。

「へく、アレはお前が手に入れたのか……」

「え、あ、はい」

「おい、飛鳥。どんなギフトゲームだったんだ？」

「的当てが主体だったのだけれど、的は握り拳ぐらいの大きさ、ハズレの的も多くて、しかも動く。中々に難しいわよ……弓道経験者でなければ」

「つまり、お前は弓道経験者ってわけか。しかも、相当の実力者」

十六夜はそう言いながら、ニヤリと笑う。

それに対して、葵は少し困った顔をしていた。

「いえ、確かに弓道はしています。今も。けれど、そこまで実力がある訳では……。現に、人に当てようとしても、当たりませんから」

「……当たらない?」

その言葉に今度は顔を顰めた十六夜。

その理由を言おうとした葵だが、その説明をしだしたのは、何処から聞いていたのか分からない鬼灯だった。

「葵に攻撃の才能が無いのと、葵の『優しさ』の反動だ。生物に弓を放とうとしても当たらない。万が一にも当たってしまったら、手が震え、その先以降、当たらない。もしそれでも当たってしまったら、今度は弓

自体が手から滑り落ちる。

だから、葵の弓は生物に当たらないんだ」

その説明に、十六夜は楽しくなさそうな顔をしながら、「……そうかよ」と言うだけだった。

「十六夜さん、もしかしてギフトゲームがしたかったの?」

そんな十六夜達の言葉が聞こえてきたようで、想起、ルカ、蜷局、お空、耀がやって来た。

「ああ……蜷局達の世界から来たっていうお前らの実力を見たかったからな」

十六夜は想起にそう言うと、それにルカは溜息を吐いた。

「成る程、お前は私達の世界のレティシアや、剣が関係した時の鬼灯と同じで戦闘狂か」

「ヤハハ!!?褒め言葉をどうもアリガトウ、吸血鬼」

その単語に、ルカの耳が少し動いた。

「……何時から私が吸血鬼と分かった?想起は其処まで説明してないはずだが?」

「いや?お前らが案内されてる間に想起に聞いたぜ?」

それを聞くとルカは想起を睨み、想起は想起で顔を逸らした。

「……なら、私が半分しかその血が無いことも知ってるんだろ?なのに、何故吸血鬼何だ?」

『半吸血鬼』っていうのが呼びにくいだけだ」

「……そうか」

其処でルカは問い質すのを止めた。

すると、今度は想起が口を開いた。

「それで、十六夜さんもギフトゲームがしたいらしいけど、僕もギフトゲームっていうのをしたいんだけど……駄目かな?」

その言葉に、葵は頷いた。

それを見ると、大いに喜ぶ想起だが、鬼灯は難しそうな顔をする。

「別にするのは良いが……なら、誰がギフトゲームを提案するんだ?」

「なら、私から一つ、案があります!!?」

そんな風に話していた葵達に向かって、子供達と話していた黒ウサ

ギがそう叫んだ。

そして、葵達に近寄り、皆んなの意思を確認して承諾を得ると、上からギフトゲームを開始する時特有の契約書類が落ちてきた。

「これが、十六夜さんが言ってた契約書類……確かに、僕達の名前が入ってるね」

「……ギフトゲームは『白黒合戦』か」

「ルールのにはオセロだな」

「オセロ？」

この場で唯一、オセロを知らない葵は首を傾げている。

そんな葵に、オセロでも何時もレティシアに全敗している鬼灯が説明をする。

「オセロというのはだな、白と黒の石を使って遊ぶゲームだ。そして、自分の石の色が多い方が勝ちというゲームだな」

「?どうやって色を増やすのですか?」

「相手の石を自分の石で挟むと、その石は自分の色の石に変わるんだ」  
「まあ、このギフトゲームから察するに、その石は俺達自身らしいがな」

「え……」

葵はもう一度契約書類を見ると、確かに自分達が石代わりになる旨が書かれていた。

そして、その契約書類には、チームの人も書かれていた。

\*\*\*

鬼灯の力で地面を隆起させてゲーム盤を作り、黒チームと白チームが準備し終えるのを見た黒ウサギは、参加しない蜷局とお空を見ると、片手を掲げた。

「それでは始めますね!!?」

「始めるのは良いが……凄い偏りだな、これは」

「確かに。ランダムとは思えない程の偏りだよな、これ……」

鬼灯と想起は、逆の位置から黒ウサギをジト目で見ると、

しかし、黒ウサギは困った顔をして返した。

「それは黒ウサギも思いますが、事実これはランダムですから……」

その顔で黒ウサギも予想してなかったのが分かると、溜息を吐いて相手を見る鬼灯と想起。

「それでは始めます!!?ギフトゲーム、開始!!?」

その合図と共に、十六夜が脚力だけで一気に鬼灯に近付き、殴ろうとした。

しかし、鬼灯は風を操り、避けるスピードを加速させ、何とか避けきった。

「イキナリ本気が、彼奴は」

「……十六夜はギフトゲームの時は何時も本気だよ」

鬼灯は耀の言葉を聞き、溜息を吐くと、ルカを見た。

ルカはそれに顔を顰めながらも頷き、幾つか氷柱を作ると、それを全て十六夜に放った。

「おつと!!?」

それを十六夜は壊さず、避けた。

このゲームは、二度連続で攻撃に当たると自身の色が変わるのだ。

つまり、十六夜、飛鳥、想起達『白チーム』は、葵の様な補助役がない限り、殆どの攻撃を避け続けるほか無いのだ。

「おい想起、葵は確か補助特化だったな?」

「うん、そうだよ」

「なら、厄介な葵をこつちに引き込むぞ!!?お嬢様!!?」

「分かったわ!!?行きなさいディーン!!?」

飛鳥はディーンに指示を出すと、ディーンは真っ直ぐ葵に向かっていく。

しかし、それを阻むのは、豊穰神である鬼灯。

「葵が居なくなると困るのは此方も同じだ!!?」

鬼灯はまた風を操り、足止めしようとしたが、全く意味を成していなかった。

「……なら!!?炎符『豪炎の渦』!!?」

すると、ディーンの周りに炎が巻き起こり、それは激しく豪炎となると、渦となって立ち上り、ディーンを進ませなくさせた。

「ハッ!!?流石は神サマだな!!?コレぐらいはお手の物つてか!!?」

そんな十六夜はそう叫ぶと、その場から後退した。

そして、十六夜が先程まで居た場所には、耀とルカがダブルかかと落としをした。

「ちっ、やはり当たらないか」

「ヤハハ!!? お前らの狙いは俺って事か!!?」

「……うん。十六夜は強いから」

「だが、当たらないと意味ないからな……悪いが手段を変えさせもらう!!?」

そう言うと、ルカは宣言する。

「氷符『氷の牢獄』」

すると、十六夜の周りに弾幕が設置された。

「これで足止め出来ると思うなよ!!?」

十六夜はそう言うと、自身の後ろの弾幕の一つを殴った。

すると、その拳圧だけで、その周りの弾幕までもが消えてしまった。

「……お前は化け物か」

その言葉を言うルカだが、しかし、直後にニヤリと笑う。

それに気付いた十六夜は顔を顰める。

『何故、笑っているのか?』

そう考え、思考する。そして、直ぐに飛鳥を見た。

「お嬢様!!? 其処から移動しろ!!?」

「え?」

飛鳥は突然の事に流石に一瞬動けなかった。

しかし、その一瞬が仇となる。

「式神『二尾狐』!!?」

その宣言とともに現れた二匹の白い二尾は、そのまま飛鳥へと攻撃するために近付き、鬼灯もその補助として弾幕を放った。

飛鳥はデインを呼ぼうとしたが、しかし未だに豪炎の渦の中にいた。

時折、その渦が形を崩すが、しかし直ぐに元に戻るのを見るに、まだまだ脱出には時間が掛かりそうである。

ならばと飛鳥は二尾の狐二匹に向かって『威光』を使う。

『止まりなさい!!?』

しかし、その二尾狐は止まらない。

それはそうだろう。この二匹は鬼灯に支えているような状態。

今の状態では、霊格は然程低くないのだ。

それが分かると、目を瞑る。

『破壊符『黒竜』!!?・黒符『黒焰』!!?』

その宣言の後にソロモン（子竜）が現れ、二尾狐の周りには黒い焰が現れた。

その焰を避けようとジャンプしようとしたが、その二尾狐達の上から焰が降り注ぎ、それに当たった二尾狐はその場に倒れこんでしまった。

「二尾!!?」

「有難う、助かったわ。想起君」

「どう致しまして」

そう言って互いに笑い合う。

しかし、その笑顔は直ぐに焦りへと変わった。

葵がスペルを宣言をした為に。

「呪術『鬼呪封印』!!?」

その宣言の後、十六夜達は沢山のお札でその場に縛られた。

「ハッ!!?・しゃらくせえ!!?」

しかし、十六夜はそんな状態であるにも関わらず、腕に力を入れ縛りを解いた。

ただ、そんな事が出来ない飛鳥と想起。

想起はソロモンに助けてもらおうとしたが、そのソロモンも想起と同じ状態となっていた。

それを見逃さないのが鬼灯とルカ。

二人はそんな飛鳥と想起に大漁の弾幕で攻撃した。

その攻撃は飛鳥達に当たり、飛鳥と想起はもれなく『黒チーム』となった。

「よし、残りは十六夜……!!?・葵!!?」

鬼灯が葵の方に顔を向けると、其処には葵に攻撃を入れようとして

いる十六夜がいた。

葵も其れには気付いていたようで、宣言をする。

「結界『六重結界』!!?」

その攻撃を結界で防ぐが、その結界は直ぐに壊れた。

そして、十六夜は攻撃を入れるが、その場には葵は居らず、そのまま地面に打ち付けた。

その地面はそのまま陥没し、巨大なクレーターが出来ていた。

そして、攻撃を受けそうになっていた葵はというと、チーターの力を使った耀が葵をあの場合からお姫様抱っこで助け出した。

「あ、有難う御座います!!?・耀さん!」

「……うん」

耀はお礼を言われて少し照れた様子を見せると、葵を降ろそうとした。

……しかし、そんな二人と他全員に十六夜は既に攻撃を仕掛けていた。

「オラア!!?」

十六夜は、自分が壊した盤上の欠片で他全員に投げ付けていた。

それも、一人に対して二つずつ当たるように。

葵は結界を張ろうとしたが間に合わず、葵と耀は黒から白チームへと変わった。

飛鳥と想起、ルカは鬼灯が操った風と炎、植物で豪速球を何とか止めた為に、当たる事は無かった。

と、その瞬間に、黒ウサギからゲーム終了の声が聞こえて来たのだった。

\*\*\*

「あゝ!!?・悔しいぜ!!?」

「悔しいってお前……自然を同時に私に操らせたお前が言うことか? 普通の人間ならそんな事もさせれないぞ」

十六夜が本当に悔しそうに言うと、鬼灯は嘆息しながらそう言葉にした。

「けど、お前に『三つ』しか同時に操れさせれなかった。本当はまだま



だ同時に操れるんだろ？豊穰神さま？」

「……」

「黙りは肯定だぜ？」

鬼灯はその言葉の後に、ただ溜息を吐いた。

「はあ……お前はまだ成長出来る。それを思うと、今度会った時は負ける気がするよ、お前に」

「ヤハハ!!？次会う時は覚悟しとけよ？豊穰神さま？」

それを聞いた鬼灯はまた溜息を吐いた。

その後ろでは、葵達が黒ウサギ達に別れる前の会話をしていた。

「黒ウサギさん、あの熊の人形を大切にしておいてあげて下さいね？」

「勿論です!!？あの子も私達の仲間ですから!!？」

「ルカ!!？さとり様に宜しくね!!？」

「俺からも宜しく頼む。主に元気になっていると」

「……元はこれはレティシアの頼みだから、それを伝えるのは多分、レティシアだ。」

「……まあ、私達だった場合は伝えておく」

「そうだね!!？僕達から伝える事になったら伝えておくよ!!？今日の事全て!!？」

「ああ」

その言葉の後、直ぐ近くでスキマが開いた。

「……入れっと言ってるな、彼奴」

「みたいですね……」

葵はスキマを見た後、また顔を黒ウサギ達に戻した。

「それでは、これで……」

「また遊びに来てちょうだい。その時は歓迎するわ」

「……またね、葵」

「!!？はい!!？」

飛鳥と耀からのその言葉に葵は嬉しそうな顔を浮かばせると、ルカ達と一緒に帰って行った。

\*\*\*

その後、そのスキマはそのまま地霊殿に繋がっていた為に、さとり

にその事を伝えたと、お礼を言われて帰っていった葵達。

「……コレは貴女のシナリオ通りですか？レティシア」

「クスクス、何のことかしら♪」

さとりは今、自分の目の前で優雅に紅茶を飲んでいるレティシアにそう聞くが、レティシアは只々楽しそうにそう言うだけ。

それに嘆息するが、その後、安心した様子を見せた。

「それにしても、蜷局達が楽しそうで何よりです」

「クスクス、これで貴女も暫くは安心出来るわね♪」

「……ふふっ、そうですね」

さとりはそう言って笑うと、紅茶を一口飲んで、また笑みを浮かばせるのだった。

## コラボ企画く第六段く

葵はこの日、紫に連れてこられるだろう相手を待とうとしていたのだが、巫女服が少し汚れていたために、新しい巫女服を貰うために『香霖堂』へとやって来ていた。

「霖之助さんには悪いですが、話していただきたいのですが、早めに帰って、来るのであろう方を神社で待たなければ……」

そう言いながらも『香霖堂』へと移動して、到着したために扉をノックしてから入る。

すると、霖之助は葵を見ると、とても嬉しそうな顔をした。

「いらっしやい。葵」

それを見ると、頬を紅くしながらも嬉しそうに笑みを浮かべた葵。

「来ました、霖之助さん」

そして、中へ一步踏み入れた瞬間、狙ったかのように葵の後ろでスキマが開き、男が出てきた。

「……此処か、紫が適当に選んだ幻想郷は」

葵は其処で後ろを振り向き、霖之助も中から出て来た。

その葵の後ろにいた男も前を見ると、葵を見てギョツとした。

「あ、葵?!?なんでお前が此処に?!?」

「え……」

「まさか、お前が住んでる幻想郷って此処なのか?」

「あ、はい……」

葵は驚き過ぎて固まっている。

それもそうだろう、誰しも、『見知らぬ相手』に名前を知られていたら、驚くだろう。

「葵、知り合い?」

そんな葵に後ろから霖之助が声を掛けると、その男は霖之助を見て、此処が『香霖堂』である事を知った。

「おお、此処の霖之助か。なら、お前とは初対面だな。俺は『新藤武楽』だ。其処の葵とは知り合いだ」

「……知り合いなの?葵」

其処でようやくハツと我に返った葵は首を横に振って否定した。それに次に驚いたのは武楽。

「は？葵、冗談だよな？」

「いえ、私は本当に武楽さんとは……あ」

葵は其処で何か考えに至り、確信を得る為に武楽の顔を見る。

すると、武楽は焦ったような顔をした。

「俺の過去を見るな!!？」

しかし、少し遅かった。

葵は過去を見て……そして確信した。

「武楽さん」

「……」

「武楽さんが会ったという『私』は私ではありません」

「……え？」

「……………ああ、そういう事か」

武楽は葵の言葉に納得した様子を見せる。

武楽は葵の言葉で分かったのだ。

此処にいる葵は、自分が会った『葵』の平行なのだと。

「……と、兎も角、中に入って話さないかい？」

霖之助は長話になりそうだと察したのか、中に入るように言うと、

武楽も葵も中に入っていった。

\*\*\*

霖之助は二人を中に入れると、まず二人分の椅子を用意して、其処に座らせた。

勿論、葵は霖之助の隣に座っている。

それに霖之助は頬を紅くし、武楽は少し顔を顰めた。

そんな武楽を見た葵は内心、不思議に思った。

葵はどちらかというところの機敏には鋭い方だが、しかし、理由が分からなければ、どうして武楽が顔を顰めてるかなど、分かるわけがないのだ。

「それで、武楽さんは私と会ったのですよね？」

「ああ、そうだな」

「それは、紫さんが私を？」

「そうだな……何でかは見たか？」

「はい。紫さんが面白いから行かせた、ですよ。過去を見ましたから、分かります」

それに益々顔を顰める武楽。

それを見て、葵は首を傾げた。

「あの、何か、違いましたか？」

「いや、気にするな……」

武楽はそれ以上、追求しない様に少し強めに言うのと、葵も納得はしていない顔ではあるが「分かりました」と言って引き下がった。

「それにしても、パラレルっていうのは本当に幾つもあるんだな」

「そうですね……その色々な世界には、色々な人が住んでいて、私もこれまで色々な方と会ってきました。その度に世界の多さに驚きますが……それと同時にいつも楽しみになります」

「？楽しみに？」

「はい」

そこで葵は胸に手を当て、笑顔を浮かべて言葉にした。

「今度は誰に会えるのか？どんな方と会えるのか？どんな話が出るのか？会えると分かると、私は何時も楽しみに思っています」

「……」

「最初に別の世界の方と会った時は、それはもう驚きました。ですが、その方とは今はもう、良く会えるようになって……友人が増える事が、とても嬉しいんです」

「友人……俺もか？」

「はい！あ、武楽さんが宜しければですが……」

「……ああ、勿論だ」

武楽は嬉しそうな、それでいて何処か悲しげな笑顔で葵を見ると、手を差し出した。

「よろしくな、葵」

「はい、よろしくお願ひします！武楽さん!!？」

葵は武楽とは違い、良い笑顔でその手を取って、握手をした。

そんな葵を見て、霖之助も嬉しそうに笑う。

「良かったね、葵」

霖之助がそう葵に言うと、葵も嬉しそうな笑顔を向けた。

「はい!!？」

そんな葵の反応を見ると、霖之助は頭を優しく撫で始めた。

葵はそれに頬を紅くしながらも、気持ちよさそうにしていた。

それに武楽はそれ以上見たくなかったのか、目を逸らした。

それを見て、漸く葵は察した。

(武楽さんはもしかして……パラレルの『私』の事が……)

葵はそう考えながらも、霖之助に撫でられ続けていたのだった。

## コラボ企画く第六段く

葵、霖之助と話をしていた武楽はその後、葵がお昼ご飯を出すという事で、霖之助と一緒に手伝おうとしたが、しかしそれは二人に『お客様だから』という理由で出来なくなってしまうた。

そして、暇となり、霖之助達に一言言つて、外に立つて、目を瞑っていた。

魔法の森の風を浴び、空気を吸う。

そんな中、武楽は懐かしの気配を感じた。

「……出てきたらどうだ？レティシア」

「クスクス、葵同様、私も知り合いなのね」

そう笑いながらスキマから現れたレティシア。

そんなレティシアに「やっぱりか」的な顔で溜息を吐く武楽。

「お前もパラレルなんだな」

「クスクス、貴方が知ってる『私』は、私からしたらパラレルだけどね♪」

そんなクスクス笑っているレティシアに対して、武楽は気になっていた事を聞いた。

「お前が葵に『偽の過去』を見せたのか？」

それに笑顔を称えた状態で頷くレティシア。

「クスクス、ええ、そうよ。あの子に『偽の過去』を見せたのは私よ」

「……俺の『秘密』を知っているのか？」

「クスクス、いいえ、知らないわ♪」

「本当か？」

「クスクス、本当のことしか言っていないのにね♪」

レティシアは未だに表情を崩さずにその言葉にする。

それが一層、胡散臭さを強調している。

「……なら、知らないのに、どうして葵に『偽の過去』を見せた？」

武楽は顔を顰めて問うと、レティシアも軽く答えた。

「クスクス、貴方が心の底から願ったから、私は行動しただけよ♪」

「それだけか？」

「クスクス、それだけ。まあ、願いを叶えるのは私のメイドの能力だけどね♪」

「お前のメイドにそんな能力を持つてる奴がいるのか」

「クスクス、ええ♪」

レティシアはそれだけを言うと、『香霖堂』を少し見てから、スキマを開けた。

「クスクス、もうそろそろ葵が呼びに来るから、私は此処でね♪」

「ああ、じゃあな」

「クスクス、それじゃあね♪」

それだけを言うと、レティシアはスキマに入って消えていった。

それと同時に『香霖堂』の扉が開き、葵は周りを見て武楽を見つけると、笑顔を浮かべた。

「武楽さん、お昼ご飯が出来ましたよ!!?」

「ん?ああ、有難うな!!?葵!!?」

そのお札に対して、嬉しそうな顔を浮かべる葵であった。

\*\*\*

お昼ご飯として出された白米、味噌汁、焼き鮭、ほうれん草の胡麻和えを全部食べ終えると、話を再開させた葵達。

と、そんな時に来客が来た。

「霖之助く!!?桃を持ってきてやってたぞく!!?」

「霖之助さくん!遊びに来たよく……痛いく。サリア、何で殴るのく」

「私達は遊びに来たんじゃなくて商売しに来たの忘れたのか猥!!?」

「あ、忘れてたく!ごめんねく、サリアく」

「ごめんねじゃないからな!?!?」

サリアは猥ののんびりさに溜息を吐いて、持っていた籠を近くに置いてから顔を上げると、見掛けぬ人間を見て驚いた顔をする。

「誰だお前?幻想入りしてきた奴か?」

「いや、別の幻想郷から紫に連れてこられたんだ」

「ふくん、あのスキマ妖怪にねく」

サリアはそう言いながら、武楽を興味深そうにジロジロと見る。

それに対して嫌な気分となったのか、武楽は顔を顰め、注意しよう



とする。

しかし、それを遮るようにして武楽に声を掛けた獺。

「ねえ、お兄さんは誰？僕は夢川獺だよ！よろしくね！」

獺はそう言いながら嬉しそうな顔で武楽に挨拶をする。

その言葉の中には悪意も疑心も一切ない。

知らない相手に対しての警戒心すらない獺に対して、武楽は少し焦った。

「獺？!!？」

そんな獺の襟を後ろから思いつきり引っ張り、武楽から引き離して持ち上げたサリア。

「うわわ？？どうしたの？サリア？」

『どうしたの？』じゃない!!？何で知らない相手に警戒心を持たずに近寄るんだお前は!？」

「だって、良い人だから」

「なんでそう決めつけれるんだよ……」

サリアは頭が痛そうな顔で溜息を吐くと、そんなサリアを心配そうな顔で見る獺。

「大丈夫？サリア？」

「ああ。ただ、頭が痛いだけだから心配するな」

「それは大丈夫じゃないよ？」

「いや、大丈夫だから。頭が痛い原因を作ってるお前にはそれを言われたくない」

「何だ此奴ら、現れた瞬間にコント始めたぞ!？」

「いや、これがいつもの彼らのやり取りだから」

のんびり屋でマイペースな獺に、せっかちで比較的常識人なサリア。

そんな二人の会話を初めてみたら、コントのように思うのは仕方がないのかもしれない。

「それでサリア、さっき商売しに来たって言ってたけど……」

その言葉が聞こえたサリアは「そうそう」と言いながら獺を下に降ろして、置いた籠の中から桃を取り出した。

「ほら、お前以前、悪夢を見たからと店にやって来た時に言ってただろ？ 『幸せな夢を限定的に見れるような物はないか？』 って」

「ああ、言ったね、確かに」

「それを聞いて作ってみたんだ。幸せな夢のみが見れる『桃』。食べればその日の夜に見る夢は必ず幸せな夢になる……予定」

「ちよつと待って。予定ってなにさ予定って」

霖之助は疑いの目をサリアに向けると、サリアはその目から顔を逸らした。

「いやホラ、試す相手がいないしさ」

「獺君には試してないのかい？」

「獺の奴は見た夢自体を食べちやうから意味ないし、そもそも見た夢を此奴忘れるんだよ」

そう言いながらサリアは獺をジト目でみると、獺は何故か照れた。

「なに照れてんだ？ 褒めてないからな」

「そうなの〜？」

「そーなのー!!？ で、その後人里の賢者がいるじゃん？」

「ああ」

「その人に試してもらったんだよ。そしたら、見事に見れたって言って……でも、たった一人だからまだ『予定』段階。で、霖之助にも試してもらおうと……勿論、報酬は弾むし」

「商売に来たのに報酬を弾むっておかしくねそれ？」

武楽の言葉に「成功したら商売になるから良いんだよ」と言うサリア。

「……はあ、分かったよ。試してみるから」

「お、有難う!!？」

そう言って『桃』を渡すサリア。

それを武楽は興味深そうにみると、手を挙げた。

「なあ？ 俺にもそれを一つくれ。試験者になってやる」

「お？ マジ？」

「おお、マジだ」

そういう武楽に嬉しそうに桃を渡すサリア。

その桃を貰った武楽に向かって一つ疑問を持った様で、獺は言葉に  
してました。

「でも、お兄さんは別の幻想郷から来たんだよね〜？どうやって感想  
をくれるの〜？」

「それは紫にでも頼むさ。あと、『お兄さん』じゃなくて武楽だ!!?よ  
ろしくな!!?獺!!?」

「うん〜！よろしくね〜！武楽さん！」

そんな二人の会話の間に、葵もその桃を貰っていた。

「夢を見た後にどんな夢だったかとかの感想を言ってくれ。あと、改  
善点とか」

「はい、分かりました」

そんな会話をした後、武楽は外を見た。

すると、既に外は暗くなり始めていた。

「おっと、もうそろそろ帰らないとな」

「それでしたら武楽さん。これを」

「ん？」

武楽は葵の方を見ると、葵の手にはお萩が五つ皿の上に乗ってい  
た。

「帰ってから皆さんで食べて下さいね」

「ああ、有難うな！」

「どう致しまして」

そして、武楽はそのお萩を貰うと『香霖堂』から出て、スキマが開  
いたのを見ると、そこへと入って帰っていった。

それを見てからサリア達はその場で解散して、葵は一度家に戻って  
から、その後は『香霖堂』で泊まったのだった。

## 第七百七十六話

咲夜はメイドの中では一番メイド歴が長い人間だ。

そして、メイドだけでなく、この館で過ごした時間も美鈴やパチユリー達に続いて長い人間だ。

だがしかし、そんな咲夜でも、知らない事がある。

例えるなら、マリアの二重人格である。

これは以前、異変があったからこそ知ったことだ。

だが、異変が無かった以前は、マリア達のことを知っている気がしていた。

全てではなく、ある程度知っていたつもりだった。

しかしあの異変は、咲夜にマリア達の事を『何も知らない』と認識させた異変だった。

だからこそ、何とか知ろうと試みた事があるが、やはり、今以上の事を知る事は出来なかった。

(……そういえば、私はあの子達の『過去』を聞いたことが無かったわね……いえ、其処まで踏み込むのもどうなのかしら?)

そう考えながら歩いていると、別の人と打つかってしまった。

「!?」

咲夜は直ぐにぶつかった相手を見ると、其処には朱鳥がいた。

「ごめんなさい、朱鳥」

「いや、大丈夫だ」

そう言いながら直ぐに立ち上がると、朱鳥は首を傾げた。

「しかし珍しいな、お前が考え事をしながら歩くなんて……どうしたんだ?何かあったのか?」

朱鳥のその言葉に少し言うのを躊躇した咲夜。

(まさか『貴方達の事を考えていたの』なんて……)

咲夜のその戸惑う様子にますます疑問に思う朱鳥。

そんな二人に近付くもう一つの影。

「咲夜〜!!」

そう叫びながら咲夜に突撃を仕掛けた小さな影は、咲夜は吹っ飛ば

される事は無く、抱き止めた。

「どうしました？妹様」

「えへへ、咲夜を見つけたから突撃したの!!？」

「そうでしたか」

咲夜は笑みを浮かべてそう言った。

フランはそれを聞いた後で、その後ろに朱鳥がいる事に気が付いた。

「あ!!？朱鳥もいる～!!？」

「こんにちは、フラン様」

朱鳥はフランに挨拶をする。

其処で、フランの先程の叫び声が聞こえたようで、近くにあった一室の扉が開き、其処から人が出てきた。

「フラン、どうした？……ああ、咲夜達を見つけたから突撃したのか」

「お兄様!!？」

フランは嬉しそうな顔で今度はアルカに走って近付き、抱き着いた。

勿論、アルカもフランを抱き留めた。

「どうした？フラン」

「お兄様に甘えたかったの」

「そうか。なら、甘えていいぞ」

「本当!!？やった～!!？」

二人は抱き着いた状態のままに会話していると、フランはアルカの部屋のテーブルに手紙が大量に置いてあるのが目に入った。

「？お兄様、お手紙を読んでいたの？」

「ん？ああ、そうだ。あのスキマ妖怪が持ってきてくれたんだ。向こうの皆んなからの手紙を」

その言葉を聞いたフランは目を輝かせて興味津々といった顔をした。

それに気付いたアルカは少し笑顔を浮かべる。

「フラン、見てみるか？」

「え、良いの？」

「ああ。咲夜達もどうだ？」

「……本当によろしいのですか？」

「構わん」

それを聞くと、咲夜と朱鳥は頭を下げてから、フランと共に入室し、手紙を少し見せてもらった。

「……この手紙は、レミリアお嬢様からのですね。筆跡が同じです」

「これは咲夜、これはフラン様……紅魔館の住人以外からも……」

「その手紙を出してくれたのは、俺の家族と友人達だからな」

其処で何かを思い出した様で、フランはアルカに顔を向けた。

「そういえば以前、お兄様が戻った事があるよね？」

「ああ。あの時は雪華と一緒に。友人達と会う為と、俺に仕えてくれていたギル達を連れて帰るために」

「私、その時のお話を聞きた〜い!!？」

フランはアルカにそう話す様に促すと、アルカは「良いだろう」といって、話し始めた。

\*\*\*

雪華と共にスキマを通って戻って来た幻想郷。

「どうせ最初に着くのは博麗神社だろうから、日傘を差しといた方が良いと思うよ？」

雪華のその言葉を聞いて、スキマから出る直前で日傘を差したアルカ。

そして、外に出てみれば、まだお昼の時間帯の幻想郷で、着いた場所は博麗神社の裏だった。

「お前の予想通りだな」

「まあね〜」

そう言って雪華達は歩き出し、境内の方まで歩くと、薄いピンク色で桜が描かれた着物を着て市女笠を被っている少女が此方に顔を向けた。

そして、雪華達を見るや否や、まるで花が咲いたように綺麗な笑顔を浮かべて雪華達に近寄って、抱き付いた。

「せつちゃん!!？アルくん!!？おかえりなさい!!？」

「ああ、ただいま！『織姫』」

「ただいま、『織姫』」

彼女、『衣帯 織姫』は二人のその言葉を聞くと、本当に嬉しそうにしていた。

「本当に帰ってきてくれて良かった！またせつちゃんとアルくと会えて、私、本当に嬉しいよ！！？」

「私もまた織姫と会えて嬉しいよ！！？」

雪華もまた、本当に嬉しいようで、笑顔を浮かべていた。

「本当に帰って来たんだな、お前ら」

『彦星』、今帰ってきた」

「ああ、おかえり」

彼、『牽牛 彦星』は顔を背けてそう言った。

しかし、頬は少し紅い。

「おやおやく？彦星坊やは嬉しい気持ちを見せない様に顔を背けたな？やっぱり彦星は彦星坊やだね」

そんな彦星を目ざとく見ていた雪華はニヤニヤしながら彦星に言う、彦星は顔を益々紅くして、今度は叫んだ。

「バツ、だ、誰が『坊や』だ！！？俺はもう『坊や』って年じゃない！！？」

「そんな照れ隠しで顔を背ける奴は、私から見たらまだまだ『坊や』だよ。しかも年が13歳の奴がない言ってるの？彦星ボ・ウ・ヤ？」

「雪華ー！ー！！？」

彦星が叫ぶその姿を見て、よく雪華から弄られるアルカは少し同情し始めた。

「……おかえり、小倉雪華、アルカディア・スカーレット」

そんな彦星の後ろから、抑揚は無いものの、帰ってきたことを歓迎する声が聞こえてきた。

その少女は、暗いピンク色の短い髪をツインテールにして纏めており、暗い赤色のゴスロリを着て、手にはフランス人形を大事そうに持っていた。

しかし、その顔に嬉しそうな表情はなく、無表情であった。

「お、ただいま！『フィール』！！？」

『フィール』と呼ばれた少女、『フィール・マリオネット』は無言で頭を下げた。

「ん？フィール、そのフランス人形の服、見覚えのない服だが……」  
「……お姉ちゃんが『フィリア』の服を新しく作ってくれたの。その服を着せてきた。アルカディア・スカーレット達を迎える為に」

その顔に嬉しそうな表情は無く、声も抑揚は無いものの、嬉しそうだと何と無くだが分かった。

「……そうか」

「それで、アルカディア・スカーレット。貴方は帰らなくて良いの？」  
フィールは首を傾げて問うと、アルカは首を振った。

「いや、今から帰るさ。それじゃあ、織姫達。また後で会おう」

「あ、うん!!?また後でね!!?アルくん!!?」

織姫は笑顔で去っていくアルカを見送るのだった。

\*\*\*

紅魔館へと向かっている途中、霧の湖の辺りまで来た時、見覚えのある妖精に見えた。

(?……アレは)

その妖精はクリーム色の長髪で、袖のみが半透明な若葉色のワンピースを着ている。

その妖精もアルカに気付くと、嬉しさ一色の笑顔を浮かべて近づいて来た。

「アルカさくん!!?お久しぶりです!!?帰ってきたのですか?」

「ああ、そうだ」

「そうですね、良かったです!!?」

その妖精、『フウノ・ウィンディ』は嬉しそうな顔でそういったあと、何かを思い出した様に手をポンつとさせた。

「そうだ!!?この前、大ちゃんから文字を教わったので、手紙、書いて送りますね!!?」

「ああ、有難うな、フウノ」

「いえいえ!!?それでは、チルノちゃんに気を付けて。勝負を仕掛けてくるでしょうから」



「ああ、精々気をつけておくさ」

フウノはそれを聞くと、そのまま去っていった。

そして、フウノの言った通り、チルノがアルカに勝負を挑み、コネパンに負かした後、紅魔館へと辿り着いた。

「……帰ってきたな。懐かしの我が家……まあ、あつちで既に帰って来たんだが……」

アルカはそう言って、紅魔館の扉を開くと、中でレミリア達が全員揃って迎えてくれていた。

「おかえりなさい、お兄様」

「ああ、ただいま。レミィ、皆んな」

レミリアはアルカのその言葉の後、堪えきれずに抱き着いたのだった。

\*\*\*

アルカがその話を一通りすると、フランはとても満足気な顔をしていた。

「有難う、お兄様!!?聞けてよかったわ!」

「彼方にも個性的な方が沢山いらっしやいますね……」

朱鳥もそんな感想を言うと、アルカは笑みを浮かべた。

「ああ。だが、そんな友人達からの手紙は、やはり嬉しいものだな」

アルカはその手紙の中から一つ、レミリアの手紙を手にとると、愛おしそうに見ていた。

「……この度は大変貴重なお話を聞かせていただき、有難うございました」

「其処まででもないがな」

咲夜の言葉にアルカは苦笑する。

「それでは、私達は仕事に戻りますので」

「ああ、頑張ってくれ」

「それでは、失礼いたします」

咲夜に続いて朱鳥もそう言うと、部屋から出た。

そして、楽しい話が聞けた事で少し笑みを浮かべると、咲夜と朱鳥は仕事に戻っていったのだった。

## 第七十七話

咲夜はいつも通り、紅魔館でのメイド仕事をしていると、目の前からアルカが全力疾走をしながらこちらに向かって来ていた。

それに首を傾げつつ観察していると、その後ろからは雪華が追い掛けている姿が見えた。

それだけで如何してアルカが全力疾走をしているのかが分かる。

(……アルカ様、ご愁傷様です)

心の底からアルカに同情の気持ちを向けてから、仕事を再開させた。

既にこれが日常の一部となっている以上、おかしな事はないと考えてしまっている咲夜であった。

そんな咲夜にいつも通りクスクスと笑いながらレティシアは近付いて来た。

「クスクス、アルカも大変ね。雪華との毎日の鬼ごっこわ♪」

「鬼ごっこで良いんでしょうか？アレは」

「クスクス、実際に鬼ごっこよ♪捕まれば弄られるんだから♪」

それを聞いて確かに、と納得する咲夜。

そして掃除をしようとした時、ふと思った。

(そういえば、私はレティシア様の『過去』を知らないわね……)

そう思っただけに、それは駄目だと首を振る。

(あまり踏み込むのも……それに、過去を聞かれて嫌な人だって……)

「クスクス、私は別に構わないわよ♪」

咲夜はそう考えていたが、しかしレティシアにはその全てが筒抜けであったようで、面白そうにクスクスと笑っていた。

それに少し恥ずかしくなったようで少し顔を赤くすると、その顔を隠すために頭を下げた。

そんな考えも全て筒抜けなのだが、今の咲夜は少しパニック状態にあるので、其処までは考えがいかなかった。

\*\*\*

レティシアの部屋に咲夜が入ると、レティシアは椅子に座り、咲夜

にも座るように促す。

しかし、そこはメイドだからと言って座ろうとしない咲夜に、レティシアは少し溜息を吐いた。

「クスクス、別に構わないのよ？」

「いえ、失礼に当たりますので……」

「クスクス、私が言ってる事を拒否してる方が失礼な気がするのだけど♪」

そう言われて反論出来なくなり、咲夜はレティシアとは対になる方に座ると、レティシアが紅茶を差し出した。

「クスクス、それで、私の『過去』だったわね♪」

「はい」

「クスクス、そうね。面白は何処にもないけれど……そう言えば、紅魔館の住民には誰にも話した事は無かったわね」

まあ、聞かれなかったからなのだけど……と、小声で呟くと、話し始めた。

\*\*\*

昔の、それこそ月人が行く前、地上が外の様に栄えていた頃、レティシアは西洋で子供の姿で存在した。

『産まれた』というよりは、『存在した』。

レティシアはどうして自分が存在しているのかの理由が分からず、しかし自身が吸血鬼である事、人の血を吸って生きる者であること。

そして、自身の能力をハッキリと理解していたため、そこまで困った事は起きていなかった。

しかし、レティシア自身も分かっていることだが、本人の能力は危険過ぎる能力だ。

何でも『出来る』という事は、世界の破滅など最も容易い。

そんな事をする事が無いよう、レティシアは修行した。

自身の能力をコントロール出来るように。

しかし、強力故に、コントロールも難しかった。

最初は手に林檎を創ることから始めたが、しかし其処から既に失敗してしまっただ。

林檎を創ろうとしたら、どうしてか林檎の一欠片しか出来なかった。

しかも、たったそれだけであるはずなのだが、レティシアは精神疲労が相当あった。

それはもう、レティシアがその場に座り込むほどに。

(これは……長い道程になるわね)

そう考えて、日頃から練習をしていたレティシア。

お陰で、コピーの能力はコントロール出来るようになっていた。

人の考えをずっと知る事も無くなった。

しかし、出来る能力だけは、どうしてか出来なかった。

その能力自身を使い、コントロール出来るようにしようとすれば、その場に倒れて気絶し、能力も効いていないようで、直ぐにコントロール出来るようになるのは不可能。

だからこそ、練習を続けた。

暫く続けていると、林檎や木といった無生物を創れるようにはなったが、しかしそれ以外はまだ不可能。

しかも、時々ではあるが能力の暴走もあり、非常に出るのが危険になってしまった。

(まあ、人の血ぐらいなら能力で創れるけれど……暴走してる時は……)

そう思って、自身がいる部屋の中で溜息を吐く。

そんな日からまた何年も過ぎた。

姿は子供から大人になるも、能力の暴走はまだ健在していた。

そんなレティシアが住んでいる館に一人の男がやって来た。

その者はレティシアと同じように背中から蝙蝠の翼を背中に持ち、金髪紅眼の男であった。

「此処に……噂に聞いた我よりも早く存在した吸血鬼の住む館……さて、何処にいるのだ!!? 我が同族よ!!?」

その大声は館中に響き渡る。

勿論、それはレティシアにも聞こえた。

レティシアはそのお客人の声を聞くと、追り返す為に腰を上げた。

\*\*\*

「その男吸血鬼というのが……」

「クスクス、想像通り、ヴラドよ」

レティシアは嬉しそうに顔を綻ばせる。

咲夜はそれに驚いた様子も無く、やっぱりかと思うと、言った。

「そして、ヴラド公はその時、レティシア様に負けたのですね」

「クスクス、いえ、私が負けたわ」

「……え」

咲夜はレティシアの口から有り得ない単語が聞こえてきたことに驚いた。

「え、レティシア様が、負けたのですか？」

「クスクス、ええ。そもそも、その頃の私は能力がコントロール出来ずに暴走気味。挙句、力まで強力過ぎて真面に戦えず、その場で負かされたわ」

レティシアは咲夜の顔が面白かったようで、何時ものクスクス笑いが何時もより二割り増しだった。

しかし、咲夜は未だ、あり得ない単語を聞いたことにより呆然気味。

それに気付くと、咲夜の顔の前に両手を持って行き、顔の前でその両手を叩いた。

その音で漸く正気に戻ると、紅茶を一口飲んで自身を落ち着かせた。

「……その後は？」

「クスクス、その後、ヴラドから負けたのだから言う事を聞けと言われて、悔しいながらも私はそれに承諾。そして、彼の能力で私のコントロールの補助をしてもらい、其処で漸く能力、力のコントロールが出来るようになった」

「……龍と何処が似てるのでしょうか？」

「クスクス、ヴラドは傲慢不遜な性格をしていると思っただけけれど、それは自身にカリスマを持たせるため。本来はとても心根が優しい人だったの」

「なるほど……」

「……けれど、ヴラドはその後、串刺しにされて死んだわ」

「……はい」

そのヴラドが亡くなる理由の裏には、あのゲスイ悪魔が関係しているのだが、それをレティシアは言わなかった。

咲夜はその悪魔を知らず、そしてその悪魔も現在は手出しを出す事をしなくなった。

そういう理由で、レティシアは咲夜にはその事を話さなかったのだ。

「クスクス、そして、私はその後、私の家である『紅魔館』に紫から誘われるまでの間、引きこもっていたの。ヴラドとの間に出来た子供の世話とかがあったからね♪」

其処からは想像が出来たようで、咲夜はお礼を言ってからその場を立ち上がり、部屋を出て行った。

それを見ると、レティシアは頬杖をついた状態で、窓の外を見た。

「……きつと、あの時ヴラドと会わなかったら、今の私は無かったのかもしれないわね……」

そう言いながら、笑みを浮かべた状態で。

## 第七十八話

レティシアの過去を聞いた数日後。

その数日間の間、ずっと光冥が隠し事をしている事に気付いていた  
咲夜はその日、光冥に聞いてみると、答えてくれた。

「……実は、咲夜がレティシア様の過去を聞いていたのと同じ時、自分  
もドアの前で聞いてたんです……」

「……そう。でも、それは別に隠さなくても……」

「咲夜は許されて聞いて聞きましたが、自分は違いますから……」

「レティシア様はそんな事を気にされる方ではないから大丈夫よ」

「……有難う、咲夜」

敬語から急に元の口調に戻り、咲夜はそれで光冥がもう大丈夫なの  
だと判断すると、掃除に戻ろうとした。

……が、戻れなかった。

咲夜に身に覚えのある寒気がしたからだ。

「……」

「……？咲夜？どうしました？」

「……そう、今日だったのね」

「……まさか」

その眩きで、近くに誰がいるかを知ると、確認のために後ろを振り  
向いた。

そこには、いつもの雰囲気とは真逆の雰囲気を醸し出し、その上、不  
機嫌そうな顔を隠さず歩いているマリアがいた。

「……あら、咲夜達じゃない」

そのマリアは咲夜と光冥を見付けると、立ち止まった。

しかし、不機嫌そうな顔はまだ隠れていないが。

「……マリア、担当となった場所は？」

「狼に頼んでるわ。私はちょっと出掛ける用事があるから出るわ」  
光冥の問いにそう答えると、また歩き出そうとした。

しかし、それを次は咲夜が止めた。

「用事って何かしら？」

「……この前の三馬鹿妖精に引き続いて別の妖精が蛇を虐めてるらしくてね。そのお仕置きに行くのよ。……蛇の怖さを思い知らせにね」

そう言うのと、今度こそ歩き出した。

すると、咲夜と光冥の後ろから、複数の声が話し始めた。

「あくあ、また一人の妖精がマリアの犠牲になったね〜」

「妖精が蛇を虐めたりしなければこんな事はないのよ」

「無理だろ。彼奴等は馬鹿だから」

「お、お兄さん……」

咲夜と光冥はまた後ろを振り返ると、ランガー姉妹とディザスター兄弟がいた。

「……貴方達まで離れたのね……」

「そりや、マリアが不機嫌そうな顔で歩いていくのを見たらね〜」

咲夜が溜息を吐く横で、ユニが苦笑いをしながら言った。

と、そこで何かを思い出したかのようにハツとすると、ユニは咲夜に質問した。

「そういえば、咲夜は私達の『過去』を知りたいの？」

「!?なんでそれを……」

「レテイシア様が言ってたよ？咲夜が知りたがってるって」

「ちなみに、私達だけじゃなくて、朱鳥達も知ってるわよ？」

ユニとペスの言葉に内心で叫ぶと、項垂れた。

「……ええ、そうよ。だから、出来れば教えてくれるかしら？」

「ええ、良いわよ。ギル達も聞かかしら」

ペスは振り返りながらそう聞くと、ギル達は頷いたのだった。

\*\*\*

南ヨーロッパにあるギリシャ共和国。その国の領土であるケファリアニア島で二人は産まれた。

産まれた時は森におり、そこから進めば綺麗な地底湖があった。

今は観光地となっている『メリツサーニ洞窟』である。

二人のその時の姿は『人間』ではなく、伝承通りの姿である。

産まれてから数年経つと、ユニがその島から出たいと言いだし、ペ



スはそのユニに着いていく形で島から出た。

そこから、問題が起きた。

島から出て暫く経った。

ヨーロッパ州の国々を重点的に巡っている時、ユニの能力が人に暴露してしまった。

そこから先は表立って旅が出来なくなり、人から隠れて過ごす日々。

しかし、人の間ではすぐに噂が経つ。

その噂がユニ達の耳に入れば、逃げた。

国を渡り、ペスの背に乗って海も渡ったったりもした。

その繰り返しの日々の中、ある森に辿り着き、その森にひっそりと建つ家を見付けた。

その家を見付けた時には二人の精神は既にすり減っており、人がいる可能性を考えずにその家に入り、倒れてしまった。

「だ、だ、だ、大丈夫!?!」

その声が聞こえたのを最後に、二人の意識は遠のいた。

\*\*\*

そこまで話し終わると、辺りはしーんと静まりかえっていた。

「……それで、そのあとは?」

咲夜がその先を促すと、ユニは笑顔で答えた。

「そのあと、目覚めたのはベッドの上。で、近くにはマリアがいたの」

「マリアが?」

ギルが首を傾げながら聞くと、ペスは頷いた。

「ええ。マリアはそこで私達が起きた事に気付くと直ぐに部屋から出ていったの。その後に来たのが狼よ」

「いや、あの怯えっぷりはちよつと面白かったよ」

「……そう」

過去を聞き、咲夜はその事で礼を言おうとすると、足音が此方に近づいている事に気付いた。

「……侵入者かしら?」

その一言でその場の全員が警戒を高めると、来ていたのはマリア

だった。

「なんだ、マリアかく。お帰り〜」

「ええ、ただいま」

「よ、妖精達はどうになりました？」

シファがマリアにそう聞くと、マリアはニコツと綺麗に笑って答えた。

「石像にした後、粉々に砕いたわ。妖精に死の概念は無いから大丈夫でしょ」

マリアの笑顔ながら零した言葉に、その場にいた者は全員、ゾツとしたのだった。

## 第七十九話

咲夜はメイドの仕事を一通り済ますと、他の担当の手伝いに行く事にした。

その歩いている最中、紅魔館の住人以外で何度も会うこととなってしまった客と顔合わせをした。

「……またアルカ様を弄りに来たの？雪華」

咲夜は溜息を吐いてから問いかけると、雪華は意外にも首を横に振って否定した。

「いや、違うよ。今回は遊びに来たんじゃなくて、相談」

「？相談？」

「そ。私とアルカ、そしてギルとシファの知り合いのな」

その言葉と共に雪華の後ろから現れたのは、雪華の世界の住人であるフィールだった。

\*\*\*

咲夜は雪華達をアルカの元に連れて行き、雪華が相談をしたいと言うと、日の光が差さない所でお茶会となった。

咲夜は一緒にいるレミリアの斜め後ろに光冥と待機している。

「……で、雪華の相談はフィールに係しているのか？」

アルカが確認の為にそう聞くと、雪華は頷いた。

「ああ。まあ、お前が書いた手紙が原因なんだけどね」

「？俺が？」

アルカは少し目を見開き、フィールを見ると、相変わらずの無表情で紅茶を一口飲んでから口を開いた。

「……カロード・ペインテイクという人に会いたいの」

「カロード……お兄様、なんて手紙を返したのですか？」

レミリアがアルカに顔を向けて聞くと、アルカは少し考え、何かを思い出した顔をした。

「ああ、この前の手紙で『お前のお姉ちゃんに彼氏が出来てるぞ』って書いたな、そっぴいえば」

「私はそのカロード・ペインテイクに興味を持って、八雲紫に頼んで

連れてきてもらったの。フィリアと一緒に」

フィールはそう言いながら、エメラルドグリーン色の服を着たフィリアを見せた。

「カロード……ということとは、貴女の『お姉ちゃん』というのは……」

「咲夜の察している通り、アリスだ」

その言葉にフィールは頷くと、フィリアを抱き締めた。

「私、今日はそのカロード・ペインテイクという人に会うまで、帰らない」

「帰らないって、向こうのアリスが心配するぞ？」

「大丈夫。お姉ちゃんには言ったから」

「でも、泊まる場所はどするの？」

「……アルカディア・スカーレット。会えなかった時はお願いします」

フィールはそう言うと、頭を下げた。

「……つまり、会うまで帰る気はないと……」

「原因お前だからそこは泊めてやれよ」

「博麗神社は？」

「そこまで養えない」

「それもそうか……」

アルカはそれに納得すると、咲夜と光冥に顔を向けた。

「咲夜、光冥。フィールをカロードに会わせてやってくれ」

「分かりました」

其処で咲夜と光冥にフィールは近付き、顔を見た。

「十六夜咲夜、それと……」

「黒漆光冥です。よろしくね、フィールちゃん」

「そう。黒漆光冥、よろしくお願いします」

そう言って頭を下げ、また上げる。

その顔は相変わらずの無表情であった。

\*\*\*

咲夜と光冥はフィールをカロードに合わせるために、魔法の森へとやって来ていた。

「……お姉ちゃんの彼氏はどんな人なの？十六夜咲夜」

「どんな人ね……とても素晴らしい絵を描く魔法使いね」

「お姉ちゃんと同族？」

「そうだね。彼の魔法は『色』だけど、そこは七色の魔法使いの異名を持つ彼女と相性が良いね」

「……そう。なら、とても楽しみだね、フィリア」

フィリアはそう言うと、フィリアの顔を見た。

それを見ると、光冥は咲夜と小声で会話をし始めた。

「……咲夜」

「分かってる。あの子、会った当初から顔に表情が無いわね。……まるで、感情が無いみたいに」

「でも、言葉では『楽しい』って言っているから、そんな感情が無いわけじゃないさそうだね」

「……感情が出にくいタイプなのかしら？」

「そこはなんとも言えないね」

其処で話をやめてフィールを見ると、其処には未だに話すことが出来ない人形と無表情で会話をしているフィールがいた。

しかし、二人の視線に気付くと、フィールは2二人に近づき、首を傾げた。

「?どうしたの?十六夜咲夜。黒漆光冥」

「いえ、何でもないわ。さあ、行きましょう」

そうしてまた歩き始めると、辿り着いたのはアリスの家。

「……着いた。此処にカロード・ペインテイクがいるの？」

「うん。出掛けてなかったらいるはずだよ」

そうして光冥が扉をノックすると、扉を開けて出て来たのは――。

「……珍しいな。お前達二人が来るとは……?その子は？」

「君に会いたいと遙々やって来た子だよ、『カロード』」

件のカロード・ペインテイクであった。

\*\*\*

カロードは三人を中へと入れると、今度はアリスがやって来た。

「あら、本当に珍しいお客さんね。どうしたのかしら？」

「この子がね……」

光冥はそう言つてフィールを見ると、フィールはアリスに近寄り、抱き着いた。

「!? え、な、何?」

「……この世界のお姉ちゃんも、変わらない……良かった」

フィールはそう言葉にすると、すぐに離れた。

しかし、その言葉と表情を見ただけで、アリスもカロードも直ぐに気付く。

フィールに『表情』が無い事に。

(感情は持つているのに、表情に出ていない?)

(感情が出にくいのか? いや、それでもお姉ちゃんと言うほどに親しい気持ちを持つているアリス相手に、表情が出ない可能性は薄い……)

(なら、どうして?)

そんな疑問を持つも、答えは一向に出ない。

しかし、フィールが首を傾げている姿を見て、直ぐに考え事を止める二人。

「? お姉ちゃんも、カロード・ペインテイクも、大丈夫? 顔色が悪いけど……」

「大丈夫よ」

「俺もだ」

「なら、良かった。ね、フィリア」

そう言つてまたフィリアに安心した様子を浮かべないで話し掛けるフィール。

「それで、俺に会いたいと言つてくれたのは、フィールか?」

「そうだよ、カロード・ペインテイク」

アリスはその呼び方を聞き、カロードの顔をチラツツと見てから、フィールに目線を合わせるようにしてしやがみ、話し掛けた。

「……ねえ、フィール」

「? 何? お姉ちゃん」

「彼の事を、私と同じ様に呼んであげて?」

「……良いの？」

フィールはカロードに顔を向けて問うと、カロードは頷いた。

「……分かった。『お兄ちゃん』」

その呼び名を聞くと、カロードの顔が緩み、嬉しそうな笑顔を浮かべたのだ。

「さて、もうお昼だけど、貴方達はお昼を食べたのかしら？」

「私達は食べたけれど……」

「フィールが来たのはその後だったからね」

「そう。なら、食べる？ フィール」

アリスはまた目を合わせて問うと、フィールは頷いた。

「なら、待っていてね。直ぐに用意をするから」

そう言っただけでキッチンの方に去っていくアリスを見ると、フィールはカロードに近寄り、服の裾を引っ張る。

「？ どうした？ フィール」

今度はカロードがフィールの視線に合わせてしゃがむと、フィールは問い掛けた。

「黒漆光冥が言っていたの。お兄ちゃんは絵が上手いって。……その絵を見たい。ダメ？」

フィールはこてんと擬音が付きそうな感じで首を傾げる。

それを見てカロードはまた少し笑みを浮かべると、フィールの頭を優しく撫でた。

「ああ、良いぞ」

「有難う、お兄ちゃん」

そう言っただけで、ソファと一緒に座ると、カロードの絵を見始めた。

「……何だか、本当の家族みたいね」

『『みたい』じゃく、本当の家族だと自分は思います』

咲夜と光冥はそんな三人の様子を隅から見ていて、そんな感想を漏らすのだった。

## 第百八十話

空の色が茜色になり始めると、咲夜はフィールと光冥を連れて紅魔館へと帰ろうとしたが、アリスからフィールにだけ「泊まっていいか?」という提案を受けた。

しかし、フィールはそれを断った。

「今回、紅魔館に泊まらせてと言ってるから……」

そう理由を言っつて。

その帰り道。

「……あの時は会えなかったらじゃなかったかしら?」

「……そうだけど、向こうのお姉ちゃんには『泊まり込み』って言って来ちゃったから……」

「成る程。それで、泊まる場所が無いと。分かりました。帰ったら準備をしましょう」

「ありがとう、黒漆光冥」

そんな会話をしながら魔法の森から出るところで、サリアが誰かと会話をしているのが見えた。

「?誰かしら?」

「さあ?見かけない人だけど……」

「……外来人?」

三人は首を傾げながらそう言うと、サリアが其処で三人に気付いた。

「あれ?お前ら、珍しいな。魔法の森付近まで来る……違うか、そっち方向なら出てきたのか。魔法の森に用があつたなんて珍しいな」

「貴方も、こんな外で人と会話をしてるなんて珍しいわね」

「まあ、知り合いだしな」

「?知り合い?」

咲夜は其処でもう一度その相手を見る。

その相手もまた咲夜を見ると、少し嬉しそうな顔をする。

「へへ、こっちの咲夜か……でも、その二人は知らないな……誰だ?」



その男・武楽に自己紹介を済ませると、武楽は嬉しそうな顔をする。  
「咲夜に彼氏がいるのか!!? いや、良かったな!!?」

「……彼氏?」

フィールは光冥に顔を向けて問うと、光冥は笑顔で頷いた。

「それで? 今から紅魔館に帰るのか? お前達二人は」

「ええ、そうよ。あと、『二人』じゃなくて『三人』よ。この子も泊まる事になってるの」

「あ、フィールもなのか」

武楽はそう言うってからフィールに顔を向けると、フィールは頷いた。  
「……あ、なら一つ聞いていいか?」

「?何かしら?」

咲夜は武楽に問い返すと、武楽は口を開いて聞いてきた。

「レティシアはいるか? ちょっと話したいんだが……」

それに咲夜と光冥は二人同時に首を横に振った。

「……いないのか?」

「ええ、いないわ。今は外に出かけてらっしゃるの」

「時々、外に遊びに行く方だから不思議ではない無いけどね」

そう言うて互いの顔を見ながら苦笑を漏らす。

「そうか……残念だ」

「ま、いないんならしょうがないな」

武楽の近くにいたサリアはそんな武楽を少し慰めるのだった。

「それで? 貴方達はどんな会話をしてたの?」

咲夜がそう聞くと、サリアは少し嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「いや、この前、幸せな夢が見れると桃の試作品を渡したんだが、どうにも最悪だったらしくてね。その改良版をまた試してもらおうと……」

「……それ大丈夫なの?」

「大丈夫!!? 武楽の前にも葵と霖之助に頼んだら、今度は大丈夫だったって言うてくれたしな!!?」

その言葉に、疑わしそうな顔を浮かべていた武楽は安堵の溜息を漏

らしたのだった。

\*\*\*

サリア達との会話を終えて紅魔館に戻ると、咲夜と光冥は通常業務に戻り、フィールは図書館に向かつて行った。

「向こうじゃなくて、こっちはある本があるかもしれないから」

咲夜はフィールに理由を聞いた時、そう返されたので、止める理由は何処にもない。

そうして夕食も食べ終わると、咲夜は紅魔館内の様子を見ていた。時々、サボる者がいるのでこうするしかないのだ。

その歩いている最中、一つの部屋の扉が半開きなのに気付いた。雇われメイド達が休む為の部屋である。

「……誰が休んでるのかしら？」

少しだけ気になり部屋を覗くと、本を読んでいる朱鳥が見えた。

その朱鳥はというと、咲夜の視線に気付いたようで、扉の方に顔を向けると、首を傾げた。

「？咲夜、休まないのか？」

「いえ、扉が半開きだったから気になっただけよ」

「そうか」

そうして朱鳥はまた本に顔を戻すが、咲夜が部屋の中に入って来たのに気付くと、また顔を咲夜に戻した。

「？どうした？」

「いえ、ちよつと、朱鳥の過去を教えてくださいなと思って……嫌なら良いのだけど」

「私の過去？……別段面白くもないぞ？他の奴らよりも酷くないしな」

朱鳥は苦笑を漏らしながらそう言うと、本を閉じた。

\*\*\*

朱鳥の種族は『不死鳥』ではあるが、朱鳥は後天的にそうなったのだ。

元はただの一匹の小鳥として、朱鳥は産まれてきた。

しかし、その時は餌を取るのが下手で、余り食べれていなかった。

その為、直ぐに身体は痩せ細り、飛ぶのがやっとの状態となっていた。

そしてある時、朱鳥は遂に疲れて落ちてしまった。

それは火山の火口ギリギリで、あとちよつと飛んでいたなら落ちていただろう。

しかし、それは死ぬのが早いか遅いかの違いのみ。

朱鳥は既に餓死で死ぬ直前であった。

(……このまま、無様に死ぬのは……嫌だ……)

朱鳥は目が閉じる前にそう願ひ、火口から誰かが出てきたのを見て、目を瞑った。

\*\*\*

「その後、何故か体が熱いのに気付き、目を開けてみればマグマの中。普通なら死ぬ筈、というか死んだ私が何故そんな場所にいるのか、そもそもどうして平気なのか、それを考えて頭がパニック状態に陥ったな」

「……」

しかし咲夜はというと、それを聞き、目を見開いて固まっていた。

(朱鳥が一度死んでる? ならどうしてこうして生きてるの? その火口から出て来た人が原因?)

朱鳥はそんな咲夜の考えが分かったのか、「まあ、そうなるよな」とだけ言うと、話を進めた。

「今まで何故私は不死鳥になれたのか。出て来た奴は誰なのかを知る事は出来なかったが、此処に来てようやく知る事が出来た。

私が死にそうになった場所はな、『八ヶ岳』なんだ」

「『八ヶ岳』……?」

朱鳥の口から出たその名前に咲夜は頭にハテナマークを浮かばせる。

「小鳥の時に人間の話を聞いたりしてたんだが、死ぬ直前で聞いた会話に出ていた単語はそれだ。そして、『八ヶ岳』には『石長姫命』という神様がいらっしゃる」

「その神様と貴女が生きてる理由にどんな理由が……」

『石長姫命』という神様は『不死・不変』の神様だ。多分、私が余りにも惨めな死に方だったから同情したんだろ。本当の理由は知らないが」

「……そう」

咲夜はそれを聞くと、お礼を言っつてその場を立ち上がる。

「……咲夜」

「?何かしら?」

「私からのアドバイスだ。……不死にだけはなるな」

「……分かつてるわよ」

朱鳥のその言葉を聞くと、その部屋を出て行ったのだった。

## 第百八十一話

外が珍しく曇っているこの日、咲夜は光冥、マリア、狼、フランと共に地下へと続く階段を降りていた。

フランの部屋以上に地下深いわけではないが、その手前ほどにある部屋に向かっているのだ。

「マリア〜！早く早く〜！」

「ま、待って〜！」

「マリア、フラン様と仲が良いのは良いが、相手の方が地位的に上だからな？」

フランはマリアを急がせる為にそう声を掛け、マリアもそれに応えるようにそう早くもない足で廊下を走り、それを見た狼が呆れた様子で注意を促している。

「……狼の言う通り、フラン様と仲が良いのはいいけど、雇い主の妹様って忘れてないよね？マリアは」

「あの子は忘れてないと思うわよ……ただ、友達みたいな関係であるのは否定できないけれど」

そんな三人の後ろからその光景を見て、そんな事を話す咲夜と光冥。

そうして歩いている間にいつの間にもやらの目的地に到着していた。

代表して狼がその扉を開けると、その先にあったのは、薔薇園だった。

「……本当、いつも思うのだけど、よく此処まで育てられたわね、くん」

「まあ、それでも大変ではあるが、その手間さえも愛おしい」

「その自然愛には感服するよ」

咲夜と光冥が先に来て薔薇の手入れをしていたくおんと話している横で、フランとマリアは既に薔薇の中へと入っていた。

「まあだが……光冥には礼を言うよ。空間を広くしてくれたからこそ、此処まで出来た。有難う」

「どう致しまして。他の草花達の様子はどうだい？」

「他も順調に元気に育ってる。咲夜から頼まれた薬草もな」

「本当に有難う、くおん」

「どう致しましてだが、アレは何に使うんだ？」

「お嬢様の紅茶」

「……それは止めてやれ」

くおんは咲夜の答えを聞き、それを飲んでるレミリアに少し哀れみの念を抱いてしまった。

そんな会話をしていると、遠くからフランがくおんを呼ぶ声が聞こえた為、その場に向かうと、フランとマリアがある薔薇の前に立っていた。

「ねえ、くおん。この薔薇の種類は何？」

そのフランが指差した薔薇は、青い薔薇だが、よく見る薔薇とは少し違う。

それを見ると、くおんは和かになる。

「それは『オンディーナ』という薔薇の一種です。とてもデリケートで、花が傷みやすい種類の薔薇ですよ」

「なら、これは？」

次に指差した薔薇は、淡いピンク色の薔薇。

「それは『桜貝』。名前の通り桜貝と同じ色をした薔薇です。この薔薇の特徴は、他の薔薇よりも棘の数が少ない事ですね」

「へ〜。なら、これは？」

次に指したのは薄紫色の薔薇。

「それは『ブルームーン』です」

「え、薄紫なの？」

「はい。この薔薇は薄紫色ですが、青薔薇系特有のとても甘く、繊細な香りを有してるのです」

「へ〜」

「薔薇だけでもこんなに種類が……」

光冥が其処でブルームーンに近付き、花卉を優しく触る。

それを見てからくおんはフラン達の方に顔を向けて、注意する。

「……さて、それでは、フラン様達は好きなようにしてただけで構い

ません。ただし、折ったり、傷付けたりしてはいけませんよ？とても  
繊細ですからね？」

「はい!!？」

「う、うん!!？あ、でも、くおん。ローズティーとかは駄目？」

「今回は私が既に作ってるから、また今度な」

「うん、分かった」

それだけを言うと、フランとマリアはそのまままた薔薇園探検に行  
き、狼もまたそれを追っていった。

「……さて、私達は其処で話そうか」

くおんがそう言って向かうのは、石造りの東屋。

今日の咲夜の目的は、過去を知らない最後の一人であるくおんの  
『過去』を聞くことである。

咲夜と光冥はその東屋にある石造りの椅子に座ると、くおんがロ  
ズティーを入れ、それを差し出してきた。

「折角来たんだ。おもてなしだ」

「そう。有難う、頂くわ」

咲夜はその紅茶を一口飲むと、少しだけ体の力が抜けた。

「……美味しいわね」

「……この薔薇を使ったからな。これで美味しくないって言ったら、そ  
の薔薇に申し訳が立たない」

くおんはそう言いながら紅茶を一口飲むと、その顔に少し笑みを浮  
かばせた。

しかし、直ぐに笑みを消して、咲夜と光冥の目を真っ直ぐに見つめ  
る。

「……さて、過去話だったな。言いにくい過去でもないし、話そうか」  
そう一言を言うと、また紅茶を一口飲むのだった。

\*\*\*

くおんが産まれたのは山だった。

その頃は一尾の妖狐として生きていたくおんだったが、時が経てば  
力は強くなり、尻尾の数も増える。

そうして三尾になった時、くおんは山に囲まれた村へと降り立つ

た。

……しかし、その村でくおんは迫害を受けた。

『妖怪』だからという理由ではない。『狐』だからだ。

その村ではとても特殊な言い伝えあつた。

『猫』は死を招き入れ、『狐』は地獄へと連れて行く死神の遣い。

その村ではそんな言い伝えがされていたのだ。

だからこそ、『狐』と『猫』と言うだけでその村で迫害を受ける。例えば、人に対して無害でも、村へと降りれば石を投げられ、物を投げられ、人から逃げられ、畏れられていた。

その村でそんな言い伝えがされた理由は、その昔、その村である妖狐が『力』を手に入れるために人を殺し、その魂を食べていたのが始まりである。

猫はその狐の使いで、狙う獲物を決め、その狐を招き入れた。

それが、恐れられるようになった始まりの原因。

しかし、それをくおんが知る由も無く、『妖怪』だから迫害を受けたと思ひ込み、それ以降から村へと降りる事はなくなり、移住地も変え、最終的にはマリアの家で住むようになった。

その頃には朱鳥もマリアの家に居り、マリアの家は賑やかな家となっていた。

\*\*\*

その話を終えると、くおんは紅茶のお代わりを自分のカップに入れた。

「……くおんは、その思ひ込みが間違いだったって、どうやって知ったのですか？」

くおんは光冥のその質問に対して、簡単に答えた。

「レティシア様からだ。能力で私の過去を知り、調べてきてくれたんだ。結果、本当の理由を知れたから良かったよ」

「……それは良かったと言えるの？ 理不尽と言うのよ、それは」

「……理不尽、ね」

くおんはカップの側面を撫でながらそう呟く。

「……その村は閉鎖的で外の情報は入りにくい。いや、そもそも入っ



ていなかったのかもしれない。まあ、どんな理由であれ、言い伝えが理由なら、どうしようもない。私が『人』ならしていたかもしれないが、妖狐である私の意見を聞くとは思えない。その村でも狐が化かすのは普通に知ってたしな。

それに、そもそもその頃の私は『妖怪だから迫害された』と思い込んでいたんだ。そんな事情があるなんて思ってもいなかったんだ。何かを言えるわけもない」

「……それを訂正してくれる様な存在はいなかったの？」

「いなかった。そもそも、そんな事を知りたいというもの好きな妖怪はそういないだろう」

「……そうね」

咲夜はもう起こった事を変えられない。その思い込みを訂正してくれる存在がいなかったのなら、どうしようもない。

そう頭の中で納得すると、息を一つ吐いた。

「さて、過去話も終わったし……咲夜、ちよつと頼みたいんだが」

「?何かしら?」

「ローズティーを作ってくれないか?咲夜が作る紅茶を飲んでみたいんだ」

くおんはそう言ってティーポットの中身を見せると、その中には既にローズティーが無くなっていた。

それに少し笑みを浮かばせると、咲夜はローズティーを入れに立ち上がったのだった。

## 第百八十二話

ある日の紅魔館では、住人全員が広間に集められていた。

「レティシア様、一体何の用で呼んだんだろうね〜？姉さん」

「それを私が知ってると思うの？」

「全く思っていないよ。でも、レミリア様達は知らないんですか？」

ユニがレミリア達に顔を向けながらそう問うが、しかし知らないと否定した。

「まあ、何の用であれ、待つ他無いな……」

「そうだな」

対して、くおんと朱鳥はそう言うと同じと腰を据えて待つ事に決めた。

狼も目を瞑ってその場に待つが、その横に座っているマリアは本を読んでいる。

そんな六人を見ながら、先日その 全員の過去を知った咲夜はもう一つ気になることを聞きたくて狼を見ていた。

そんな咲夜の視線に気付いた狼は、目を開けて咲夜をじっと見た。

「……何だ？俺の顔に何か付いてるか？」

「あ、いえ、そういう訳じゃないのだけど……」

「？じゃあ、どうした？」

狼は訝しげな表情で聞くと、咲夜は狼の目を見ながら言葉にした。

「……貴方達の過去を聞いて、六人は此処に来る前に一緒の所に住んでいたのは分かったわ。でも、ならレティシア様とはどう会ったの？其処が少し気になって……」

その言葉にその場にいた者は全員興味津々とばかりに狼に目を向ける。

その目の意味に気付かないほど鈍くない狼は「レティシア様との出会いか……」と呟くと、天井を仰ぐようにして顔を上に向けた。

「レティシア様との出会いって、特別な事は何も無かったよね？」

「まあ、レティシア様が私達が住んでいた森に来たのが全ての始まりってぐらいだしな……」

ユニとくおんがそんな会話する横で、マリアは首を傾げる。

「咲夜はどうしてそれを知りたいの？」

「率直に言えば唯の興味よ。だって、気になるじゃない。どうやって出会ったのかとか……」

「確かに。俺もそれは知りたいな……」

その咲夜の言葉に同意したのは、レティシアの弟であるアルカ。

「是非、聞かせて欲しい」

その言葉を聞いて六人は一度顔を見合わせると、頷いたのだった。

\*\*\*

西洋にある森の中、奥深い場所でマリア達は出会い、暫くはその家で一緒に住んでいた。

マリアはその時からドジをし、そのドジで泣くマリアを狼が慰め、ペス達はその行動を終えた二人と共にドジの後片付けをする。

それが、その家の日常。変わる事がないと思っていた日常であった。

しかし、それが突然終わりを告げた。レティシアが現れた事により。

レティシアはその時、ただただ旅をしていたのだが、その森に来て偶然マリア達の住む家を見付け、興味が出た為にその家を訪れた。

その家の扉を礼儀正しくノックする。

その音を聞いたマリア達は警戒し、最初こそ扉を開けるつもりは無かったのだが、そのノックの音が止むことが無かった為に狼が代表で扉を開けた。

それが六人とレティシアの初会合である。

狼は警戒心を盛大に出しながら現れたレティシアを見て、レティシアは何時ものニコニコ顔を向けて狼に話しかける。

「クスクス、こんにちは、八房さん♪」

「……どうして俺の正体を……」

「クスクス、さて、何故でしょう♪部屋に入れてくれたなら話してあげるわ♪」

「……」

狼の頭の中ではこの時、『ストーカー』『不審者』という言葉が浮かんだ。

だからこそ、中に入れずに追い返そうとしたのだが、ユニがそんな狼を押しつけ、扉を全開に開いた。

「入りたいならどうぞどうぞ！」

「クスクス、ありがとう、ユニコーンさん♪」

「あ、私も分かるんだ！凄いな!!？」

「クスクス、お褒めに預かり光栄よ♪」

ユニとの会話を其処で切り上げると、レティシアはそのまま家へと入っていった。

その後ろ姿を見てから狼はユニを睨み付けた。

「……」

「まあ言いたいことは分かるよ?『怪しい人物を家に上げるな』でしょ?でもさ、狼も本当は分かってるよね?私達があの人を追い返して、その上で戦いになっても、勝てない事ぐらい」

「……ああ」

狼が警戒心を持って接している事に、レティシアが気付いていたこと。

その上でアレだけニコニコと笑って話していたこと。

狼はそれをちゃんと知っている。理解している。

「でもさ、それと同時に、『悪い人』じゃないのも理解してるよね?」

「……」

「……まあ、そんな不確定要素で家に上げるなって言いたいだろうけど、私の直感を信じてよ。ね?」

ユニが笑みを浮かべてそう言うと、少ししてから狼の肩の力が抜けた。

\*\*\*

その話を終わると、レミリアが口を開く。

「貴方達が来たのは私が紅い霧の異変を起こす少し前。つまり、その時から来るまでに空白の時間があるのだけど?その間は何があったの?」

それに答えたのはユニだった。

「その間はレティシア様を加わった状態で日常が暫く続いた後、レティシア様が行く旅について行ったりしてたよ〜！いや〜、中々に面白かった♪」

「そうね。私達もそれなりに旅をしてきた方だけど、それ以上に得たものが多かったわ」

「ああ。私も色々見れて良かった」

「自然も沢山見れたしな」

「せ、世界一周も出来たよね、狼！」

「世界一周もしたが、色んな異世界にも行ったな……懐かしい」

そうして思い出に浸かっていると広間の扉が開き、レティシアが入って来た。

「姉上、漸くいらっしやったのですね」

「クスクス、お待たせしてごめんなさいね？ちよつと人と話してたから」

「人と……八雲紫ですか？」

レミリアがそう聞くと、レティシアは首を振って否定する。

「クスクス、違うわ。新しくここで働く新人さん♪」

『……え!??』

全員が声を揃えて驚くが、それを気にも止めずにまた扉を開き、外に待機させていた二人を中に入れた。

中に入ってきたのは、何事にも関心が薄そうな男と楽しそうに笑っている眼鏡の青年である。

「クスクス、はい、二人とも自己紹介♪」

「……『我樹牙 絶月』」

「僕は『雛罌粟 紅葉』だよ。よろしくね」

二人が自己紹介を聞くと、アルカとレミリアはその場を立ち上がって二人に近付くと、代表してアルカが手を差し出した。

「よろしくな、二人とも」

二人はその手を見て、顔を見てからその手を順番に握った。

そんな四人を見たレティシアは一度其処から咲夜の方へと移動し、

その耳元で話し出した。

「貴方、最近過去を知りたがる傾向があるから先に話しておくわね。まず絶月からだけど、彼はね、無限に転生が出来るんだけど、転生をする度に何処かで必ず悲劇が起こって、その度に人生をやり直していたのだけど、最近はやる事もやりたい事も無くなつて朦朧と今まで生きてきたの」

「……無限に転生……朱鳥と似てる能力ですか?」

「いえ、違うわ。似てもない。ちゃんと彼にも寿命があるから。ただ、無限に転生をする能力持ちだから、何度でも生き返ることが出来るっという点では似てると言えなくもないかもしれないわね……」

次に紅葉。彼はね、自然の精霊なのだけど、彼が住んでいた森の近くにある村に他所の人間が来て、その人間がその村を近代化させると言つて自然開拓が始まり、その所為で死ぬ寸前だったのよ」

「……其処をレティシア様が救った、という事ですね」

「運良く見つけたとも言えるのだけどね」

そして話し終わると、レティシアは咲夜から離れ、全員が見渡せる所に立つと、両手を叩いて、自分に目を向けさせた。

「クスクス、さて。先ずは二人の執事服を作る所からだけど……」

「それもそうだな。さて、どうしたものか……」

「クスクス、大丈夫。その心配はしなくて良いわ♪」

「……え?」

アルカは何故と言いたげな顔でレティシアを見ると、レティシアはまた広間の扉を開き、ある人物を招き入れた。

「!??織姫!??」

「アルくんのお姉さんに頼まれたから来たの。私のお仕事だからね」

「クスクス、そういう事だから、この子に任せるわ。良いわね♪」

レティシアが全員の反応を見ると、全員頷いて返した。

\*\*\*

織姫が絶月達の寸法を測り終わると、部屋を借りて執事服を作り始めた。

しかし、その部屋にはもう一人、アルカもいる。

「しかし驚いた。お前が来るなんて予想外だった」

「私もアルくんのお姉さんに頼まれるなんて予想外だったよ。でも、アルくんとちゃんと話せる時間もこうしてもらえて良かったとも思う。この前、遊びに来た時もあんまり話せなかったから……」

「すまないな、織姫」

「ううん、怒ってないから大丈夫だよ。ただ、ちよつと寂しかったかな？友達と久しぶりに会えたのにちよつとしか話せなかったからね……」

「……本当にすまない」

「だから謝らないで？こうして話せてるからもう大丈夫だよ」

織姫は一度手を止めてから安心させる為に笑顔をアルカに向けると、アルカはそれを見て少しホツとした。

その様子を見てから織姫はまた仕事を再開する。

そんな織姫にまた話し掛けるアルカ。

「……そうだ。織姫」

「ん？どうしたの？」

「彦星の様子はどうか？」

「ひこくん？うん、元気だよ。私の仕事も手伝ってくれたりしてくれるからとても有り難いし……」

「……なあ？織姫は彦星の事をどう思ってるんだ？」

「？友達だよ？」

アルカは織姫のその回答を聞くと、大きく溜息を吐いた。

「？どうしたの？」

「……いや、気にするな」

「うくん、気になるけど分かったよ」

織姫はそう言うと、また別の事をアルカに聞いた。

「アルくん、せつちゃんとはどうなの？」

「……俺にはレミイがいるが？」

「そうじゃなくって。せつちゃんと喧嘩したりしてない？」

「雪華と喧嘩な……してはないぞ。俺を弄りに来るのは勘弁願いたいが」

「あはは、せつちゃんはワザと人を怒らせて、その様子を楽しむのが好きだからね。でも、せつちゃんが迷惑を掛けてごめんね？」

「前から思ってたが、お前は雪華の世話女房みたいだな」

「それならせつちゃんは私の夫？」

「いや、迷惑を掛ける子供だ」

「あはは、それは確かに言ってるかも……でも」

其処で織姫はまた手を止めて、アルカを見る。

その顔には、笑顔があった。

「仲が良さそうで良かった」

「……前から思うが、そう見えるのか？」

「少なくとも、せつちゃんはアルくんの事を『友達』と思ってるよ。じゃなかったら、そもそもアルくんをワザと怒らせるような行動や言動をしないよ。そして、アルくんの頼みとかを聞いたり、アルくんに相談事を持ち掛けたりしないよ」

「……それもそうだな」

「だからね、アルくん」

其処で織姫は穏やかな笑顔を消し、真面目な顔になる。

「せつちゃんのそんな性格を利用しようとか考えないでね？」

「……お前には俺がそんな風に見えるのか？」

「違うよ。一応の確認」

「……大丈夫だ。俺はそんな事をしたりしない。俺を信じてくれ」

その言葉を聞くと、織姫はまた穏やかな笑顔を浮かべる。

「良かった。アルくんがそういう時は絶対に破らない時だから……私もこれでちゃんと安心が出来るよ」

「それは良かった」

「これからの世話女房はアルくんだね！」

「それは勘弁してくれ」

「ふふっ」

織姫は楽しそうに笑うと、自身の仕事に戻ったのだった。



## 星蓮船

### 第百八十三話

季節はもうすぐ春と移り変わる幻想郷。

博麗神社に残る雪も、木陰を残してあと僅かとなった。

そんな日の博麗神社にいの一番に声をあげたのは、その巫女である  
霊夢であった。

「はああああ!!?」

そんな叫び声をあげる霊夢に気付き、近づいて来たのは、最近何処  
かに行方を眩ませていた萃香。

「どうしたんだい?急にそんな叫び声なんかあげて」

「これを見てよ!!?」

そう言つて霊夢が萃香に見せたのは一枚の紙。

それは『今日は夜まで帰つてこないから』とだけ書かれた置き手紙。

霊夢もいて、萃香もいる以上、誰が書いたかなど明白である。

「彼奴〜!」

「霊夢〜?どうしたんだ?大声なんて出して……外にまで聞こえたぞ  
?」

「どうしました?霊夢」

そんな時にやって来たのは、歩と葵達である。

霊夢は直ぐにその紙を見せると、全員溜息を吐いた。

「これだけって……」

「まあ、雪華さんにも何かしらの事情があるのでしょうか……」

「ま、それもそうかもしれないわね……って、そういえば、歩。あんた、  
釣竿を二つも持つてたっけ?」

霊夢は歩が持つている二本の釣竿を見ながら問うと、歩はちよつと  
嬉しそうに答えた。

「いや、もう一本は霖之助の所で買ったんだ。新品でしかも丈夫そう  
だろ!」

「ええ。まあ、釣竿の知識なんて私にないのだけでも……」

そんな会話をしている所にやって来た次のお客は、魔理沙と夢幸、そして珍しく早苗も来た。

「よっ！遊びに来たぜ！」

「あらそう。いらっしやい。お茶は出せないわよ？」

「別に構わないぜ！……ん？歩、お前何で釣竿を二本も持つてるんだ？」

「ああ、これは……」

そうしてもう一度説明している横で、葵と霊夢は早苗に話しかけた。

「で？何であんたは此処に来たわけ？何か用があるんでしょ？」

「ええ、まあ……葵さんはもしかしたら知ってることかもしれないませんが……」

「？」

「実は最近、人里にある噂が飛び交ってるんです。『空を飛ぶ船』があるって噂が」

「たかが噂でしょ？」

「それが、何人かは実際に見たという人がいて、その人達が嘘を吐いてるとも思えませんし……」

「……空飛ぶ船か……円盤か何かか？」

「UFOだったら私はめっちゃくちゃ喜びますよ!!？」

ルカの言葉に早苗はそう返した。

しかも、その目はとても輝いている。

そして、もう一人それに食いつく人物が出てきた。

「だよね!!？UFOなら嬉しいよね!!？」

同じ外から来た想起である。

「ですよねですよね!!？いやはや、想起さんとは本当に話が合いますね!!？」

「だね！」

「おい、話が逸れかけてるから軌道修正するために意識を戻せ」

そんな興奮状態の二人を落ち着かせるために冷静に声を掛けた鬼灯は、少し呆れた表情を浮かばせる。

そして、そんな全員にイキナリ影が射した。

「?なんで影が……」

「……もしかして……」

その声で一斉に上に顔を向けると、先程早苗が話していた『空飛ぶ船』が上を通りかかっていた。

「……本当にあったな」

「嘘じゃなかったのか……」

「これはやっぱりUFO!!?」

「その可能性はこれ見て失せなさいよ。どう見ても船じゃない」

「どうします?霊夢」

葵が一番冷静な霊夢に話し掛けると、霊夢は一度中に入り、お札とお祓い棒を手に持って帰ってきた。

「どうするかなんて、簡単よ。乗り込むわよ!!?」

その声で全員がその船に向かっていった。

\*\*\*

紅魔館でもまた、その船の事を知り、アルカが朱鳥と絶月を呼び寄せた。

「何の御用でしょうか?アルカ様」

朱鳥は絶月の顔を一度チラツツと見てからアルカにそう問い掛けると、アルカは早速本題に入った。

「お前達を呼んだのは他でもない。新人研修だ」

「……新人」

「研修……」

「ああ。朱鳥は此処に来て大分経っているから戦えるし、実力も知ってる。が、絶月は最近来て、その実力も知らない。今回、『空飛ぶ船』の噂が人里を中心に立っている。お前達二人はその船を探し出して、解決する。その際、もし戦うことがあったなら、絶月が戦い、朱鳥はその補助に回ってくれ」

「分かりました」

「……了解しましたよ」

「それじゃあ、行ってこい」

アルカのその声の後に朱鳥と絶月は部屋を出て行き、その部屋にはアルカ一人となった。

しかし、それは直ぐに終わりを告げる。

その部屋の扉をノックする音が聞こえ、アルカは中に入るよう促す。

そして、扉を開けて入ってきたのは。

「……やっほ〜」

「……」

何時もの元気が何処にもない状態の雪華だった。

## 第百八十四話

雪華が紅魔館にやって来きた後、アルカと雪華は場所をテラスへと変えて話をする事にした。

勿論、吸血鬼であるアルカに太陽の陽は毒なので、パラソル付きのテーブルに座っている。

そしてそこに座って数分後。

アルカは黙々と何かを書き、雪華に至っては机に突っ伏して溜息をついている。

それに対してアルカは溜息を吐くと、一度書くのをやめて聞き出すことにした。

「おまえがそんな状態なんて珍しいな。何があつた？」

「……今異変が起こってるの、知ってるよな？空飛ぶ船の」

「ああ、『聖 白蓮』の仲間達の……知っている。実際、絶月達を新人研修として向かわせた」

「……まあ、それは良いんだよ。問題は、私の心境」

「……お前の？」

其処で頷くと少し起き上がり、頭をくしゃくしゃと掻き始めた。

「あつちの幻想郷でも同じ異変が起こった時、霊夢は直ぐさま出て行って私は居残り。それが余りにも暇だったからお前で少し弄ろうとしてた時に霊夢が帰って来て、私を無理矢理異変に巻き込んだんだよ」

「巻き込んだって、お前を巻き込んで何の得になるんだ？」

「私の能力を知ってるでしょ？」

「……成る程な。確かに、お前は適任だな」

「次いでに言うなら人員補充。早めに終わらせたかったからって後から言ってた」

「……で、それでお前の心境とどう関係するんだ？」

「……正直、複雑なのよ」

雪華はそう言うと、空を見上げるようにして顔を上に向けた。実際はパラソルしか見えないのだが。

「あの時は正直、面倒毎に巻き込まれたと思ってたけど、白蓮の性格を知って、ちよつとは手伝えて良かったって思えた……でも、今回の異変が始まって、また探し物に付き合わされるかも？って考えたら……最初に出了たのが面倒。手伝えたい。やりたくない。助けたい……矛盾ばかりの考え」

「……」

「それを悶々と考えて、自分らしくなるなら面倒事から逃げる手を今回取ったの。だから、此処に来た」

「だが、後悔してる部分があると」

「そういう事。多分、何方にしても後悔する」

「……だから、アレだけ元気がなかったわけか」

雪華の元気のなさは、自身の矛盾した考えに疲れたためだろう。

「……正直、こんな事を考えるようになったなんて自分でも吃驚だよ」

「安心しろ。俺も驚いた」

「わあ、アルカが成長した。悪い方向で」

「お前の所為だな」

「私、何も、してませーん」

雪華が少し調子を取り戻したのを見るとアルカは少しだけ安心した。

（弄られるのは嫌だが、何時もの調子がないと俺の調子も狂うな……）  
アルカは内心でそう考える。勿論、表ではそんな表情を出していない。

「……で、結局此処まで来たお前だが、どうするつもりだ？」

「……霊夢が仮に此処に来たなら、その時は手伝う。まあ、こつちには捜索隊の人数は多いし、何より此処の執事とメイドが駆り出されたんだから、私は必要ないでしょ」

「そうか」

それを聞くとアルカはまた何かを書き始めた。

それを少しだけ見ると、雪華は漸く気付いた。

アルカが『手紙』を書いている事に。

「それ、返信の手紙？」

「ああ。月一の手紙だが、レミイ達からの手紙だ。親しき仲にも礼儀あり。手紙をくれたならその返しをしないとな」

「……それもそうね」

「……お前、まさか返してないわけじゃないよな？」

「勿論、ちゃんと返してるよ。私が返さないタイプに見えてる？」

「いや、そんな事はない。だが、反応がおかしかったならその考えに至るのも仕方ないと思うが？」

「……まあ、それもそうか」

それを言うと、雪華は一度溜息を吐いた。

「……私もアルカみたいにちゃんと返信してるよ？でもさ……書く内容、思いつかなくなっちゃった……」

「……」

「……いや、書きたい内容が『無い』から書けないんじゃないかと、書きたい内容が『あり過ぎる』から書けないでいるの」

「なんだ。それなら簡単じゃないか」

「……？」

雪華は首を傾げると、アルカは少しだけ手を止めて雪華の顔を見ながら言う。

「書きたい内容があり過ぎるなら、書きたいだけ書けばいい。織姫達はそれを望んでるはずだろ？」

「……そう？」

「書いた内容が多いければ多いほど、『それほど楽しんでるんだ』『それほど嬉しいんだ』って分かるだろ？」

「……」

雪華は少し目を瞑って、自分がそうならどう思うかを考える。

そして、その後少し笑みを浮かべて頷く。

「なら、書けばいい。お前が満足するだけ。というか、寧ろその手のこととお前の方がよく分かってるはずだろ？得に織姫の事は」

「……それもそうだね!!？」

その言葉に漸く雪華は元気を取り戻し、笑顔を浮かべた。

「あ、そうだ!!？此処で手紙を書こう!!？アルカ!!？紙をもらって良

い？」

「ああ、良いぞ。紙は机の上だ」

「有難う、アルカ!!？」

雪華は嬉しそうにそう言うと、早速向かっていった。

それを見て少しだけ笑みを浮かべると、続きを書き始めるアルカだった。

\*\*\*

船の下まで飛んできた霊夢達は、早速侵入する手を考える。

「此処はやっぱり、突撃？」

「人がいる可能性があるのに、それは……」

「そもそも、船が動いてる時点でいるだろ」

「兎も角、船のデッキに行きませんか？」

「夢幸、デッキって何処だ？」

「船の前方にある所だ」

早苗の単語を聞いて、魔理沙は夢幸にそう質問し、夢幸はそれに普通に答えた。

これが魔理沙以外なら言葉の前方に『バカが』と付いたかもしれない。

そうして船の前方デッキに降り立つと、周りが雲に囲まれていた。

「やっぱり、空を飛んでるだけに雲に近くにあるな……」

「そうね。さて、兎に角中に入りましょう」

そうして中へと入ろうと前へと向く霊夢。しかし、

「侵入者、発見。排除する」

そんな言葉とともに銃弾が霊夢に迫る。

が、それをギリギリで顔を少しだけ傾けて回避する霊夢。

「……死ぬかと思っただわ」

「失敗。しかし、任務続行。侵入者排除。最優先」

そうして全員に迫る銃弾の嵐。

それをそれぞれで避け、時々協力して回避すると、銃弾の嵐が止まった。

「……もしかして、玉切れ？」



「……からのリロード中か？」

歩と鬼灯が自分の考察を口に出していると、相手の準備がまた終わったようで、銃弾を浴びせてきた。

それを見てまた全員回避をすると、また銃弾が止んだ。

「もしかして、ずっと続くとか無いわよね？」

「それはマズイですね……どうしましょう？」

霊夢と葵がそう話すと、歩が全員の一步前に入る。

「？歩？」

「此処は俺に任せて」

そう言って顔を前に向けて相手の姿をちゃんと見る。

相手は青年だが、しかしその右腕や左足は機械と化している。

(ロボット……？いや、体は生身だから、自分の体を改造したのか？！)

歩はその考えに至り、驚きの表情を表に出すが、しかし首を横に振って集中する。

「……なあ？お前」

「侵入者。排除。これ、最優先」

「……話を聞こうよ。此処は幻想郷だ。なら、そのルールに則って勝負をしよう。お前が勝ったなら俺達は大人しく退散する。勝ったら通してもらおう。いいな？」

しかし、相手は聞く耳を持たなかったのか、銃弾をまた浴びせてきた。

ただし、先程までとは違い、狙いが『全員』から『歩のみ』となっている。

「……俺との弾幕ごっこに乗ってくれたと考えさせてもらう!!？」

歩はそう言うと、二本の釣竿を構え、ながらも相手の銃弾を避けるのだった。

## 第百八十五話

弾幕ごっこが始まってすぐ、歩は様子を見るためにスペルを宣言した。

「旅符『流れ三つ叉別れ道』！」

そして釣竿を相手に向け、そこから槍型の弾幕を相手に撃つと、相手はライフルとなっていている右手を向けてそれを撃ち落とす。

「やっぱり実弾かよ……」

弾幕とは違い実弾となると、どこを撃たれようと致命傷になり兼ねない。

足に当たれば足は使えなくなり、手に当たれば何も持てなくなる。心臓や頭に当たれば即死だ。

ならば、死ぬ気で避けるしかない。

「なら、洞窟『ゲートリングトンネル』！」

そうして釣竿を真正面に構えた状態で相手に向かって突進して行く。

が、今度は足先を溶断ブレードに変えた。

それを見てやろうとしている事を察した歩は急停止し、後ろに後退する。

その相手は、歩が後退した為に溶断ブレードで宙を斬っていた。しかし、直ぐにその溶断ブレードを戻してその場に立つ。

(……彼奴、まさか……)

「……お前、体全体がサイボーグと化してるのか!?」  
「答える、義理は、ない」

そう言うのと今度は肩にあるバズーカを展開し、そのまま歩に向けて撃った。

歩は直ぐさまその場から移動し、なんとか避ける。

が、ロケット弾が着弾した場所はその場で爆発し、後に残ったのは大穴だった。

その爆風も強く。足で踏ん張ってその場に留まろうとする歩に男は素早く接近し、船から突き落とした。

「うわあ!?!?」

「!歩ううう!!?!?」

\*\*\*

歩はそのまま船から地面に落下する直前で上手く受け身を取り、痛みを最小限に抑えると、また船に向かおうとする。

しかし、其処で聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ?歩さんじゃないっすか」

「!!?!?角!!?!?」

歩は角がいる事にまず驚いた表情を浮かばせた。

それに対して少し笑みを浮かべる角は自分がいる理由を簡単に答えた。

「ただの散歩っすよ。その散歩してる所に歩さんが空から落ちてきて……何があつたんすか?」

角が今度は真剣な表情でそう聞くと、その角の肩を掴んだ歩。

「頼む!!?!?力を貸してくれ!!?!?角!!?!?」

その肩を掴んでいる手に力を入れて頼む歩。

それに対して角は少しだけ驚く表情を浮かべると了承した。

するとその体が光だし、その光が収まると、その場には一匹の鹿がいた。

その鹿は身を屈めて歩が乗りやすいようにすると、歩はその背に乗って、釣竿を二本とも構えた。

そうして船に向かって駆け上ると、見えたのは全員にライフル銃を向けている男。

その男に突撃すると、相手はそこで歩達二人に気づくが、遅い。

男はそのまま当たり、数メートル飛ばされた。

葵は安心した表情を浮かべるが、角の雷を見ると、霊夢の後ろに隠れる。

それを視界の隅に納めてから再度突撃しようとするが、起き上がった相手が一枚の紙を持った事を見やすくには突撃せず、攻撃を凌いでからと決める歩と角。

しかし、相手の容赦の無さはそんな二人の考えを一掃する。

「掃滅『全砲一斉射撃』」

すると、相手のすべての武装がその場で展開された。

右手はライフル、左手は拳銃、左腕はビームブレード、肩からはバズーカ砲、腹部からキャノン砲、背中からジェットウイング、足先に溶断ブレード、腰にレーザー砲。

それら全てを同時に展開し、拳銃、ライフルでまずは歩達に狙いを定めて撃つ。

それを歩達が避けたのを見ると、それに加えてバズーカ砲を使ってきた。

それもなんとか避けると、最後にキャノン砲とレーザー砲も加えて攻撃してくる。

角がその二つの砲撃を避けようとする、近くに撃たれていた実弾に歩が当たってしまった。

「！歩！！？」

「歩さん！！？」

霊夢と葵が叫ぶと、歩は何か体の体制を戻す。

しかし、その横腹からは出血している。

「歩さん！！？」

「大丈夫だ！！？」

そう角に言うと、また全力で避けてもらい始めた。

その度に頬に傷が付く、足も怪我をするが、横腹以上の重度の怪我は出なかった。

それをスコープとなっている目で見た相手は次のスペルを宣言する。

「殲滅『滞空近接攻撃』」

すると、すべての武装が一度全て収納されたかと思えば、腕と脚からドリルとビームブレードが展開され、滑空する様に歩に向かってくる。

それを角が見ると、左に全力で避ける。

その後、直ぐ体勢を立て直すと、歩が一枚のスペルを宣言する。

「十字『クロスワードロード』！！？」

そう宣言すると、二本の釣竿を構え、角に相手に突撃する様に頼む。それに了承すると、男に向かって突撃していく角と歩。

それに対して相手もジェットウィングを使って滑空しながら歩に近付く。

そして、すれ違う瞬間、歩は二本の釣竿で相手を切り裂いた。

「!?？」

その攻撃の威力が予想以上に強く、相手はそれだけで倒れ伏した。

\*\*\*

弾幕ごっこが終わると、直ぐに歩と角、そして男の治療をし始めた葵。

しかし、歩と角はともかく、サイボーグと化しているその体に自身の治療の力が効くのか不安になる葵。

しかし、直ぐに能力を使い、治し始める。

と、其処に一人の尼の格好をした女性と白い塊がやって来た。

「貴方達!!? 『鉄幹』に何をしたの!!?」

「あ、えつと……」

「ご、ごめん、その、攻撃されたからこっちも……」

「何を謝ってるんだ。正当防衛だろ」

「ルカ、正当防衛ではなく、侵入しようとした私達が明から様に悪いです」

想起、歩、ルカ、葵が順にそう言葉にする。

と、其処でその女性は鉄幹に手を当てている葵を見ると、顔を険しくさせる。

「貴方、鉄幹に何をしてるの……?」

「治療です。先程まで歩さんと角さんと激戦していたので……」

「そういえば、その角は何処に行ったんだ?」

「先に帰って行ったよ」

葵の説明する後ろで魔理沙と歩がそんな会話をする。

しかし、女性はその葵の言葉を聞いて少し驚いた後、申し訳なさそうな顔をする。

「そう、ごめんなさい。善意の行動に対して先程の対応をして……」

「いえ、大丈夫ですよ」

「私は『雲居 一輪』。そして、この白い塊が私の相棒の『雲山』。雲の妖怪よ」

「……妖怪を使役する尼か」

「そして、今貴女が治療してくれているのが『鎧 鉄幹』。私達の仲間なの」

「そうでしたか……すみません、侵入してきた私達が悪いのに……」

「良いのよ！」

一輪と葵がそんな会話をしているが、そこに霊夢が割って入る。

「は〜い、話はお終い。ねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど、良いかしら？」

「良いけど、それは中に入ってからにしましょう。雲山、鉄幹をお願い」

一輪は雲山に顔を向けてそう頼むと、雲山は無言で鉄幹を持ち上げたのだった。

\*\*\*

一方、霊夢達とは別ルートで侵入をした朱鳥と絶月はというと、船の中を彷徨っていた。

「……上の方からの爆発音が消えたな」

「……そうだな」

その後には会話が続き、静寂が辺りを包み込む。

しかし、其処に一つの足音が近付いて来るのが聞こえてきた。

その音に二人して警戒すると、直ぐその角からその音の正体が見えた。

その角から現れたのは、大剣を背に背負った男であった。

「お前ら、侵入者か？」

「……まあ、確かに侵入してきたが……」

「……」

朱鳥は警戒心を解かず、そう答えると、相手はその背にある大剣に手を掛ける。

それを見ると、朱鳥と絶月は警戒心を最大限まであげ、いつでも戦

える様に構えを取る。

「今は侵入者は排除するって俺達の中で決まってる事なんだ。だから……排除だ」

「……せめて追い返すとかはないのか」

「ああ、勿論追い返す為に俺は今からお前達と戦うんだよ」

そう言うのと、大剣を抜き、それを構えて戦う体勢を取る男。

「此処のルールはちゃんと知ってるから安心しろ」

「なら、一つだけ聞かせてくれ」

「?何だ?」

男は顔を顰めて朱鳥を見ると、朱鳥は体勢を解いて質問する。

「名前だ。お前の名前。戦う前にお互いの名前も知らないのはな……」

「それぐらいなら良いだろう。俺は『獅子宮 凱火』だ」

「枢木 朱鳥だ」

「……我樹牙 絶月だ」

「そうか。さて、これで何も気にしないで戦えるぜ!!?」

朱鳥達の相手となる男、凱火はそう言うのと、剣を構え直した。

## 第百八十六話

凱火はその両手で持つ大剣を朱鳥達目掛けて振りかざすと、それを朱鳥達は左右に分かれて回避する。

そして其処で朱鳥が一枚目のスペルを宣言する。

「炎符『ファイヤー・ロード』！」

ゼロ距離から炎のレーザーを放つ朱鳥だが、相手はその大剣でそのレーザーを消し払った。

そして、一度距離を取ってから今度は凱火が宣言する。

「熱符『バーニングライオン』!!?」

するとその大剣から熱が発せられる。

そしてその大剣を一振りすると、そこからライオンを象った炎が出て、朱鳥達を襲おうとする。

……が、それに対して朱鳥は笑う。

「……お前は私とは相性が悪いかもな」

そのライオンは絶月を食らおうとして、止まる。

「?どうした?」

「……」

そして、そのライオンは口を閉じ、向きを変え、凱火の方へと襲いかかった。

「はあ!?」

「それが炎なら、私が操れるということさ」

「……お前」

「ああ、能力を言ってなかったな、絶月。私は炎を操る事が出来る能力を持っている」

朱鳥の説明の後ろでは、未だライオンに襲われている凱火がいる。

しかし、その大剣でそのライオンを消すと、楽しそうに笑う。

「へへ、お前は炎を操れるのか」

「……お前、さては戦闘狂か?」

「さあな?それは戦えば分かることだ!!?」

凱火はそう言うときまた朱鳥達を斬り裂こうとするが、それを避ける



二人。

「……死なないとはいえ、痛いのは御免被る」

朱鳥が冷静にそう言葉にすると、また一つのスペルを宣言する。

「この前ちよつと改良したスペルだ。炎符『炎舞神楽』!!?」

すると、炎の弾幕が一度バラバラに拡散する。

それを凱火は避けるが、その弾幕の全てが、今度は向きを変える。

左に行った弾幕は右へ、右に行った弾幕は上へという風に滑らかに移動する。

それに多少驚きながらも避けると、また向きを変える。

上に行った弾幕は下に落ち、他の弾幕は全て凱火を取り囲む。

「……成る程な」

「この前はただ拡散するだけのスペルだったが、それだと『神楽』じゃないからな」

「……『神楽』は踊りの一種だからこそ、踊る様に滑らかに移動し、その動きもまた踊りの様につてか」

「まあな……それよりもだ」

絶月の言葉に朱鳥はそう言ってから絶月に視線を向ける。

その視線の意味を理解すると、絶月は舌打ちをしながらもスペルを宣言する。

「四ノ罪『嫉妬の束縛』」

すると、鎖の形をした緑色の弾幕が凱火に向かって行き、凱火に当たる。

「うお!!? 動けねえ!!?」

しかし、絶月の攻撃はまだ終わらない。

「三ノ罪『色欲の妄想』」

今度は桃色のレーザーが凱火に当たる。

それを見てから朱鳥は手を動かすと、凱火の周りを舞っていた炎が全て凱火に向かっていく。

しかし凱火は動くことが出来ない状態なのでどうしようも出来ず、その弾幕全てに当たることとなった。

当たるぐらいなら少しとは言わずとも大ダメージにはならないだ

ろうと考えていた凱火だが、結果、その予想は外れる事となる。

「!??・ぐあああ!!?」

凱火に襲ったのは尋常じゃない程の苦痛。

それこそ、一歩間違えば気を失いそうになる。

その後、その弾幕が全て当たり終わると、縛りも取れた。

凱火は少しの間は立っていたが、しかしその大剣を床に刺し、体を支える様な状態となった。

だが、それを見ても朱鳥達は警戒を緩めない。

なぜなら、未だに凱火の表情には笑みが潰えてあるからだ。

「熱符『クラッシュイクスプロージョン』!!?」

その宣言後、朱鳥は自身の足元に熱がある事を感じた。

そして、何が起るのかを予測すると、絶月に飛びかかる。

「危ない!!?」

「!??」

そうして押し倒す形で先程までいた場所から離れると、その床が大爆発した。

それを目で見て理解すると、朱鳥と絶月は立ち上がった。

「……礼は言わねえぞ」

「いらぬから安心しろ。それと、今は戦闘に集中しろ」

その会話の後に凱火を見据えると、既にその足で立っていた。

「あく、避けられたか」

「炎を操るからこそ、熱感知は得意だな」

「やっぱり、戦闘だと相性が悪いな、お前と俺は」

「そうだな」

そう言うと、またスペルカードを持つ。

そしてチラッとだけ絶月を見てから、宣言する。

「炎符『炎の踊り子』」

すると、凱火の周りにまたもや炎の弾幕が現れると、凱火の周りを回り始める。

それにより、自分が閉じ込められたと知ると、その弾幕を消し去ろうと一振りする。

勿論、その弾幕は消えたが、素早く新たな炎が現れた。それに対して力を込めて一掃する事を決めた凱火だが、一足遅かった。

「二ノ罪『傲慢の処罰』」

絶月が宣言すると、その周りに金と銀の帯状弾幕が現れ、それを凱火に向けて攻撃する。

そして当たると、凱火はまるで肉を斬られた様な痛みを感じた。

「があ!?？」

そして、暫くしてからその弾幕も消え、炎も消えると、其処には凱火が倒れていた。

\*\*\*

朱鳥と絶月は凱火の側で如何するかを話し合おうとするが、意見が一致した為にすぐ決まった。

「放ってさっさと行くぞ」

「……ああ」

そうして先を急ごうとしたが、その進む先から二本足で歩くネズミと、赤いリボンを付けた短い金髪の女性が、凱火が現れた方向から現れたら。

「!!? 凱火!!?」

「……なんともタイミングが悪いな」

そのタイミングの悪さに対して、少しばかり溜息を吐く朱鳥であった。

## 第百八十七話

葵達が一輪に連れられて広い部屋まで案内されると、一輪は『仲間を呼んでくる』からと鉄幹を雲山に持ってもらいながら奥へと入っていった。

そして数分経つと、一輪と起きたらしい鉄幹と共に何人かも一緒になつて帰ってきた。

ただ、鉄幹を見た葵達側は流石に先ほどのこともあつた為に警戒をしていると、鉄幹が頭を下げた。

「先ほどは、すまない、事をした。『警備モード』だったから、侵入者、排除、優先だった」

「……『警備モード』？」

「この船の警備を鉄幹に任せてたの。だから、アレだけ攻撃的だったのよ。でも、今は平気だから安心して頂戴。今の鉄幹は『生活モード』だから大丈夫よ」

「そうですか……良かった」

それを聞いて安堵の溜息を吐く葵。

「それで？ 貴方達は何が目的で此処に入つて来たの？」

しかし、一輪はまだ警戒した状態でそう質問してきた。

それにはちゃんと答えないといけないと分かっている葵は答えた。

「私達はその、船が飛んでいたの何故だろうと思つて……」

「つまりは興味本位ね……」

「だが、アレだけの洗礼を受けたんだ。この俺と魔理沙に。そのお詫びぐらいはしてもらうぞ？」

一輪が葵の言葉に納得していると、夢幸が険しい顔で言葉にする。

「いや、お前と魔理沙だけかよ。俺達は？」

「問題は何処にもないと思うが？」

「あー、ハイハイ」

先程の言葉に歩が口を開いて言うが、その後の夢幸の言葉にいつも通りだと考えて言うのを止めた歩であった。

「あ、あの、一輪さん、気にしないで下さいね？」

「え、ええ」

しかし、葵がフォローの様に一輪にそう言ったことで、お詫びは無くなった。

「で、結局、あんた達は何がしたくてこの船を飛ばしてるわけ？」

霊夢の問いに一輪が答えようとすると、部屋の扉が開く音がした。

其方の方に全員が顔を向けると、ネズミと赤いリボンを付けた女性、そしてその後ろから絶月と朱鳥、凱火がやって来た。

「あれ？あんた、紅魔館のメイドの一人じゃない。何？此処で暮らすことにしたわけ？」

「そんな訳ないだろ。絶月の新人研修に付き合ってるんだ」

「……」

「そつちの絶月とかいう男は不満そうな顔だけど？」

「文句は言ってもいいがどうしようもないぞ。アルカ様のご命令だ」

「……チツ」

絶月が舌打ちするが、それを朱鳥はまるで風でも吹いたかのように流す。

その二人の様子を見て、葵は苦笑いを浮かべている。

「で、なんかお仲間が三人も増えたわけだけでも……結局、あんた達誰？名前紹介されてないけど？」

「霊夢さん、それは私達ですよ」

霊夢はそう口にして自己紹介するように促すが、早苗のその言葉で自分達もだという事を思い出す。

しかし、どうやら相手からしてくれるようで、先ほど入って来たネズミから始まった。

「私は『ナズーリン』。そこのご主人様の部下だよ。そして、そこご主人様である……」

『寅丸 星』です。『毘沙門天』様の弟子でナズーリンの主人です。そして、そのこの貴方達二人が倒したのが凱火です」

そう言って、赤いリボンを付けた女性――『寅丸 星』は自己紹介すると、また視線を別の方に向けた。

その向けられた人物の船長帽を被った少女が一步前に出て敬礼し

て挨拶をする。

「初めまして！私、この船の船長をしている『村沙 水蜜』です。よろしくお願ひします！」

その挨拶の後に一歩下がると、それに吊られたかの様に隣の船乗りのガウンを着た男性も自己紹介を始める。

「俺は『荒風 大洋』だ！よろしくな！」

そうして船側の全員が自己紹介をした為、葵達も自己紹介をした。そして、漸く本題に入る。

「で、結局の所はどうしてこの船を動かしてたわけ？」

「……実は、私達はこの前まで、地底に封印されていたのです」

「地底に？」

「ええ。ですが、ある時その封印が解けたのですが、それと同時に大事な物が外に出て行きました……」

「？その大事な物とは？」

葵が首を傾げて聞くと、全員が一度目を合わせ、頷くと、星が続けて話をする。

『飛倉の破片』と言い、私達にとっての『大事な人物』を封印から呼び起こす為に必要な物です」

「？封印？」

今度は想起が首を傾げると、星が一度頷いて続ける。

「封印されている人の名前は『聖 白蓮』。私達はその人を助けたい。封印から解放したい。それが目的で船を浮かばせ、探しているのです  
が……」

「成果は出ずに未だに見つからないと……ならさ、俺達も手伝おうか？」

歩が星にそんな提案を持ちかけると、星どころか葵以外の全員が驚いた顔をする。

葵は葵で嬉しそうな顔だが。

しかし、霊夢は違って、歩にちよつと文句を言う。

「ちよつと！私達はあくまで興味で此処に來ただけで、それ以上は……」

「もしかしたら、コレが機で宣伝になるかも……」

「その手伝い、やらせてもらおうわ!!?」

しかし、歩の言葉により180度反対の言葉を言う霊夢。

それに若干苦笑いながらも、早苗も頷き、魔理沙は魔理沙でその封印された人物が誰なのか興味があるようで、その欠片探しを手伝うことにした。

勿論、魔理沙が手伝うとなれば夢幸も同様で、朱鳥達もアルカの言葉があつて拒否はしなかった。

「で?その『飛倉の破片』ってどんな形をしてるのよ」

全員が協力すると分かると、まずは形を知らなければどうにもならない。

故に霊夢が星に向けてそう質問すると、ちゃんと星はそれに答えた。

そして、形を知ると、『飛倉の破片』探しを始めたのだった。

「あ、ルカ」

その探し始める前に葵は霊夢と歩と一緒に探すことを決めてから、ルカも誘う為にその声を掛ける。

そして、声を掛けた旨を伝えると、珍しくルカはそれに対して首を振った。

「悪いが、今回は私一人で探す。ごめんな、葵」

「あ、ううん!大丈夫だよ。頑張つてね、ルカ」

「ああ」

そう言つて去っていくルカの後ろ姿を葵は少し疑問に思いながらも霊夢達の元へと戻っていくのだった。

\*\*\*

葵に一度一緒に探そうと言われ、しかしそれを断つたそのルカはと言うと、一度魔法の森に降り立ち、歩き出した。

そんなルカの後ろから、木に隠れる人物が一人。

その人物はルカを睨みつけるように見て、その手に持つ銃をルカに向け、狙い撃った。

その銃から撃たれた銃弾はそのままルカの頭に吸い込まれるよう

にして向かっていく。

が、それを頭をずらす様にして避けるルカ。

「ッ!?？」

「……お前か、三日前から私にのみ殺気を向けてた奴は。最初から暴露てるんだ。出てこい」

対してルカも相手に対して殺気を向けてそう言うと、相手は殺気を隠さないまま出てきた。

出てきたのは黒髪で長髪のシスターである。

しかし、その容貌とは違って、目は未だにルカを睨みつけ、手には銃を構えている。

「……お前、私にどれだけ怨みがあるんだ。今お前が私に向かって撃った銃弾。アレは銀だ……半吸血鬼の私にもそれなりに効く奴だ。……だが、お前みたいな若い奴に恨みを抱かれるような事はしてない筈だが？」

ルカはそう言いながらシスターを睨みつけると、シスターは銃を強く握った状態で言う。

「煩い化け物が」

その一言により、ルカの足元が凍った。

しかし、シスターの言葉は続く。

「私はヴァンパイアハンターを生業としていてね。確かに、私にはお前に恨みなどない。けど、理由がある」

「……」

「お前の所為で、私達の一族が無残にも一度殺された。しかも、男だけ……これだけ言えば、私がお前なのか、分かるはずでしょう？」

それに対してのルカの答えは明確に外に出た。

先程は足元にしか凍っていなかったが、しかし先程の言葉を聞くと、今度は周りが凍ってしまった。

木も、土も、花も、すべて関係なく凍らされる。

シスターの足元も例外なくだ。

そして、ルカの目の色が変わる。

先程までが疑問とあらぬ恨みをかけられた怒りなら、今は怒り、憎



悪の目である。

しかし、その顔は無表情。目にしか感情は浮かんでいない状態である。

「……お前、私の母と父を殺した一族の生き残り……」

「ええ、そうよ。貴方があの時殺した男達の中には家族もいてね、男達が死んだと聞いてから、その家族では何代にも渡って『貴方を殺せ』と伝えられてきた。私もそう。そしてヴァンパイアハンターとなって今まで貴方を見つけれなかったけれど、運良く見つけられた」

「……成る程、元は外来人……」

「さて、霜月ルカ。悪いけど、私は貴方に何の恨みもないけど、一族に遺恨を残したのだから、今すぐ死になさい!!?」

そうして女性はまた銃を撃つと、ルカはその銃弾に手を向ける。

すると、その銃弾は氷となってしまい、ルカに操られてあらぬ方向へと向かっていった。

「くっ、なら!!?」

今度は聖水を手にとろうとしたが、ルカが一気にシスターの方まで距離を詰め、そのシスターを蹴り倒した。

その勢いが強かった為にシスターは背中を強く打ち、肺から空気が全て出されて息苦しくなる。

が、そんなの御構い無しにルカはシスターに近付くと、その手から聖水を取り上げ、手に持ち、銃は凍らせてから砕いた。

そしてシスターの上に乗ると、憎悪を隠さないまま質問を投げかける。

「もう一度聞くんが、お前は私達を退治しようとして父と母を殺した一族の生き残りだな」

「くっ、え、ええ、そうよ……」

「……そうか」

それを聞くと、聖水をその場で割ったルカ。

それを見て益々ルカを睨みつけるシスターだが……その顔は一瞬して無くなる。

「……良かった……探す手間が省けた」

その一言と共にルカは手に氷の剣を創造し、瞬時に首を斬り落とす。

そしてその顔が氷の地面に落ちるのを見てからルカは座っていたシスターの体から離れると、その体の下から氷の棘が現れ、その体に無数の穴が開く。

対してルカは飛んだシスターの顔の近くまで行き、それを無表情ながら見つめると、足を持ち上げる。

そして、履いているブーツの裏に小さな氷の棘を作り、その顔に振り下ろす。

すると、その顔は『グチャツ』と音を立てながら潰れた。

「……」

ルカは無表情で服に手を当てる。

勿論、返り血を浴びているのだが、いつの間に作ったのか、その返り血を浴びていたのは服ではなく、薄い膜の氷。

その氷を壊すと、服には血が一滴も付いていなかった。

「……この氷達もなんとかしたいが……私には無理だな……お前の所為で心の冷たさが最低温度（絶対零度）まで下がったからな……そうそう処理は難しいだろう……まあ、お前の体はちゃんと他の妖怪達が処理してくれるだろうから、そこは安心だな」

ルカは無数の穴が開いているシスターに向けてそう言い放つと、その場を離れていった。

しかし、ルカが離れてから現れたのは、レティシアである。

そのレティシアは溜息をその場で一つ吐いた。

「……正当防衛……じゃないわね。これは過剰防衛ね……はあ」

そう言いながらレティシアはその遺体を消し去った。

「……本当の所は紅魔館でも良いのだけど……私達は血しか飲まないから、消し去る以外はどうしようもないわね……」

そんな事を言ってから、レティシアは周りの凍らされた場所を元に戻し、離れたのだった。

\*\*\*

別の場所では、朱鳥と絶月が破片探しをしている。

「……」

「……」

しかも、双方ともに無言で。

そんな二人の後ろからコソコソと近付く一つの影。

そして、二人がまた歩き出したのを見て、その影は後ろから出る。

「恨めしや〜！」

その出てきた相手の声に、二人は驚きもせず後ろを向く。

その驚かしてきた相手は全体的に青いのが特徴で、那須色の一つ目傘を持っているのは赤と青のオッドアイの少女。

その少女は二人が振り返ったのを見て、嬉しそうな顔をしている。

「ねえ、驚いた？ねえねえ、驚いた？」

「いや呆れた」

「え!?？」

少女の嬉しそうな顔は、しかし朱鳥の一言により驚きの顔へと変わる。

「いや、お前、驚かせるならもつと気配を消せ。気配がダダ漏れで、寧ろ何をしたいのかと思っただぞ、私は」

「……どうでも良い」

「こっちは気にしてなかったようだが」

そんな朱鳥の言葉にその少女は落ち込む。

しかし、イキナリ立ち上がると、今度は好戦的な笑みを浮かべて朱鳥を見る。

「まあ、驚かせなかったのは残念だけど、その分興味が出た!!？だから、弾幕ごっこを貴女とする!!？」

「……すまない、私の理解力が足りないのか分からないか……何故この流れでそうなった？」

「主に私の八つ当たり!!？」

「やっぱりか……」

朱鳥は溜息を吐くと、直ぐに真剣な顔に変えて、絶月を見る。

「絶月、相手は私を指名してきたからな。私がやる」

「……ああ」

絶月はそれだけを言う和下がる。

それを見てから朱鳥は相手を見据えると、その相手は嬉しそうな顔でその場をびよんぴよん跳ねると、構えた。

「じゃあ、始めよう!!? 私、『多々良 小傘』!!? よろしくね!!?」  
そうして、不死鳥対唐傘お化けの弾幕ごっこが始まるのだった。

## 第百八十八話

小傘と朱鳥は互いに弾幕をぶつけ合っている。

この状態は始まった時から続いており、小傘は何処か不満気な顔をしている。

「むく……」

「……不満か？」

「この状態飽きたー!!？」

小傘はそう叫ぶと、弾幕を全部消し、スペル宣言をした。

「大輪『からかさ後光』!!？」

小傘は直ぐに自身が持つ那須色の傘を開くと、それを振り回し始めた。

そして、其処から虹色の米粒弾を全方位に撃ち始めた。

それを全て見極めて回避し続ける朱鳥に対し、楽しそうな小傘が喋り始める。

「やっぱり、こうした方が楽しいね！」

「……まあ、否定しないが……あの状態は嫌いだったのか？」

「ずっと均衡状態だと飽きちゃうよ」

「……まあ、それもそうだな」

「でしょでしょ!!？だから、貴方もスペルを宣言してよ!!？一緒に楽しもうよ!!？」

小傘が期待の目で朱鳥を見る。

その小傘の視線の意味に気付いた朱鳥は片手だけを腰に手を当て、少しだけ困った表情の笑みを浮かべる。

「別に良いが……お前のこのスペルが終わった後でな」

「分かった!!？」

小傘はそう言いながらもスペルを止めようとしなない。

此処でやめれば相手が怒るのは分かっているのだ。

そうして時間が経ち、小傘のスペルは終わった。

「はい、次は貴女！」

「……分かった。炎海『炎渦地獄』」

朱鳥はそう宣言すると、炎の弾幕を小傘の足元に撃つ。

「何処撃ってるの？ちゃんと狙わないと当たらないよ〜？」

「いや、其処でいい」

その言葉に小傘は首を傾げるが、先程の炎の塊が小傘を中心として円を描き、渦となって小傘を捕まえる。

「熱い!!？」

「炎だからな」

小傘の当たり前の反応に朱鳥も当たり前の答えを返す。

直ぐに小傘は上から脱出したが、下を見て驚愕した。

下はその渦を中心として半径約3mぐらいが炎の海と化していたのだ。

その渦の周りを回っているのは十個ほどある炎の弾幕。

その弾幕は一個ずつ小傘が先程までいた場所に向かっていくと、渦が消えた。

「次は〜……」

小傘がウキウキ気分で次のスペルを宣言しようとするが、朱鳥がスperlカードを手に持つのを見て、動きを止める。

「……え？」

「……すまないが、あまり遊んでられないんだ。だから……さつさとケリを着けさせてもらおう」

朱鳥はそう言うと、宣言する。

「赤炎『赤き不死鳥』」

すると、先程まで炎の海となっていたものが、そのまま大きな鳥の形を作っていく。

その赤い鳥はそのまま一度羽ばたくと、小傘へと向かっていく。

「ええ!?？」

小傘は直ぐに其処から飛び退くが、不死鳥にある七本の尻尾から赤の炎が数少ないが拡散されていく。

「これぐらいなら……」

小傘は少しそう油断したが、直ぐにその油断は消される。

小傘が避けたその後ろで、その炎は爆発した。

「え……」

小傘はそつちに視線を向けたが、今度は前から赤い数多くの大きな炎と数少ない小さな炎の弾幕が撃たれる。

大きな炎はそのままバラバラに飛んでいくが、小さな弾幕は小傘を狙って撃たれている。

それを避けようと考えるも、赤いレーザーも撃たれて動きを制限し、結局、数多くの弾幕に当たってしまった小傘。

そのまま落ちそうだったのを不死鳥が受け止め、地面に下ろすと、朱鳥達にお辞儀をした。

それに対して朱鳥もお辞儀をすると、不死鳥はその場から消え去った。

「……不死鳥」

「アレは私の仲間だ。今回は私の炎で形を取って出てきてくれた」

朱鳥はそう言いながら小傘を近くの木に背中を預けさせる。

「……よし。それじゃあ、飛倉探しを再開するぞ」

朱鳥はそう言って絶月の方に振り向く。

「……ああ」

対して絶月はそれだけの返事を返した。

こうして朱鳥と絶月は飛倉探しを再開するのだった。

\*\*\*

早苗と想起は二人で飛倉探しをしていたが、成果は芳しくない様子であった。

それもその筈。二人して飛倉探しに集中出来てないからだ。

（うう、想起さんと二人きり……どうしましょう？胸がバクバク言ってる!!？こ、この状況の所為でバクバク言ってる!!？）

早苗は想起に紅くなっている顔が見えないように背を向けて探している。

対して想起もまた、早苗に背中を向けて飛倉を探していた。

（何でだろう？さっきからずっと顔が熱い……僕、もしかして熱が……急に出たのかな？でも、それとは違う気が……それに、この感覚は何処かで……）

そうして考えて、漸く思い当たるものに辿り着いた想起。

(……思い出した。随分前、僕が一度幻想郷追放になる前に葵に対して抱いていた気持ちと同じ……だよな？・碎牙)

想起はもう一人の自分に問い掛けると、もう一人の自分である碎牙はその問いに答える。

(ああ。確かに、お前のその気持ちは『恋心』だな)

(……ど、どうしよう!?!?・僕今後真正面から早苗の顔が見れなくなるよ!?!?)

(落ち着け、想起)

そんな会話を自身の心でしていると、「あつ！」と何かに驚いたような早苗の声が聞こえてきた。

「ど、どうしたの？・早苗」

想起は先程の事もあり早苗の顔を見ないように問い掛けると、早苗はそんな想起の腕を引っ張った。

「?!?!?」

想起はその行動に顔を更に赤らめる。

自身の中にある碎牙が若干ニヤニヤしてる気がするのは気のせいと考えながら。

「想起さん!!?・想起さん!!?・アレ見てください!!?・アレ!!?」

「さ、早苗?・あの、まずは腕を……」

「そんな事よりもあれ見てください!!?」

「そ、そんな事なんだ……」

それに若干ガツカリしながらも早苗が指差す方に顔を向け、驚きの表情を浮かべる。

二人の目に映ったのは、小さなUFOだった。



## 第百八十九話

想起と早苗がUFOを見つけた一方で、魔理沙と夢幸もまたUFOを見つけていた。

「なんだ？あれ。空飛ぶ船？」

「違うな。アレはUFOだ。宇宙船だな」

「なんか面白そうだな!!？取って観察してみよう!!？」

魔理沙はそう言うとすぐに箒を跨ぎ、UFOの近くまで飛んでいくと、手で掴んだ。

「よっし!!？夢幸く！取ったぞく！」

「そうか。良かったな、魔理沙」

魔理沙はその一言を聞いて嬉しそうな顔になり、下へと降り立つと、夢幸にもUFOを見せた。

「それにしても、コレ、小さいな」

魔理沙はそう言いながら、掌に普通に乘ってしまう大きさのUFOを観察している。

その横では夢幸もまた観察していた。

理由としては、何かの『違和感』を感じているからだ。

「ま、これが何なのかは後で全員が集まった時にでも言えばいいか！」  
「彼奴らが役に立つとは思わないが、仕方ない」

夢幸のその言葉を聞くと、魔理沙はそのUFOを帽子の中に入れ、飛倉探しを続けるのだった。

\*\*\*

残りの葵、鬼灯、歩、霊夢はというと、UFOではなくナズーリンと会っていた。

「あれ？あんた、何してるの？」

霊夢がまずナズーリンがその手に持っている二本の大きな鉄の棒の事を聞くと、ナズーリンはその棒を見せながら答える。

「ああ、コレ？コレは『ダウジングロット』って言って、モノ探しをする時に私がよく使う道具なんだ」

「へく、モノ探しにねく……お金とか見つけれられるの？」

「え？」

霊夢が目を輝かせてナズーリンにそう聞くと、ナズーリンは目を点にして霊夢を見返している。

そんな二人の間に入る葵は話を一旦そこで終える為に別の話題を振る事にした。

「あ、あのっ!!? ナズーリンさんは何を探してるのですか? 飛倉の破片ですか?」

それに対してナズーリンは渋い顔をする。

「……まあ、飛倉の破片もそうなんだけど……実はご主人様がとつても大事な物を落としちゃってね……それを探してるんだよ」

「? 大事なもの?」

「そう。封印を解く為に大事な二つ目のアイテム、『宝塔』。これが無いと封印が解けないし、悪用されると大変だからね……」

『宝塔』といえば、確か、『毘沙門天』様が持つてる道具の一つですよね?」

「そう。私のご主人様はその毘沙門天様の弟子で、私はその毘沙門天様の使いなのさ!!?」

ナズーリンは星と自分の事についてそう説明した。

ただし、自分の時は若干胸を張りながら。

しかし、それに対して何の興味ももって無い様子の霊夢は喋り始める。

「そんな事どうでも良いから、さっさとその『宝塔』を探しましょう。何処にあるわけ?」

「霊夢……」

「はあ……」

そんな霊夢の反応に葵は苦笑し、鬼灯は溜息を零す。

「宝塔は多分、こっちに……」

しかしナズーリンはそれを気にせずに棒が示す方向に歩き始める。その後ろを葵達も着いて歩くと、どうしてか香霖堂に着いてしまった。

「ちよつと、本当にここにある訳?」

「このロットが示すにはだけどね……」

「そう……なら」

霊夢はそういうとイキナリ扉を開ける。

その音に反応して、その店の店主である霖之助は扉の方に顔を向けると、霊夢を見て溜息を吐く。

「はあ、また君か。少しは扉を叩くとか無いのかい？」

「そんな事より、ちよつと聞きたいことがあるのよ」

「……はあ、なんだい？」

霖之助はまだ言葉を続けようとしたが、少しだけ真剣な雰囲気を感じてか溜息一つ吐いて話を進めると、ナズーリンが話し出した。

「ねえ、最近、何か珍しい物を見つけれなかったかい？」

「珍しい物？……ああ、アレかな？」

霖之助はそう言うてから一度奥に入ると、直ぐにまた戻ってきた。

その手には小さな水晶に傘が付いたような物体があった。

「ナズーリンさん、コレですか？」

葵がそう聞くと、ナズーリンは本当に嬉しそうな顔で宝塔を手にとった。

「そうだよ!!?これだよこれ!!?見つけてくれて有難う!!?」

「どう致しまして。で、お返しだけど……」

「……え、御返し？」

ナズーリンは霖之助の言葉に疑問で返すと、霖之助は頷く。

「それはそうだろう？僕は別に無償でそれをあげる訳じゃない。僕だって商人だ」

「そうだが……」

「あの……それなら、後日、霖之助さんのお店の手伝いをする、という事では駄目ですか？」

葵のその頼みに、霖之助が断るわけがなく……。

「それで良いよ」

霖之助は笑顔を浮かべて了承するのだった。

## 第百九十話

葵達はナズーリンと別れ、飛倉探しを再開した。

「ありませんね……飛倉の破片」

「だな……こんなに見つからないものなんだな」

「霊夢、いつもの勘はどうした？」

「私の勘を万能だと思わないでよ」

「異変主の居場所を勘だけで見つけられたら、それは万能だと思うぞ」

霊夢と鬼灯の会話を他所に葵と歩は真面目に飛倉を探す。

そんな時に、四人は此方に来る人物の気配を感じ、一旦動きを止める。

その人物は着実に葵達に近付き、葵達の前に現れた。

「！ルカ！」

葵達の前に現れたルカは葵の声が聞こえた瞬間、顔を上げた。

「！葵……」

「ルカ、一人で探すのは大変だよ？やっぱり一緒に……？」

其処で葵はルカの姿を見て、ある事に気付いた。

「……ルカ、その髪、どうしたの？」

「？髪？」

「毛先に赤いのが付着してる……」

それを言われてルカは漸く前髪の手を確認すると、確かに赤いのが付着していた。

「……もしかして、それ……血？」

葵が少し震声でルカに聞く。

信じたくはない葵だが、しかし赤いのが付着する理由など、誰かの返り血しかない。

そう考えてる葵の問いに、ルカは頷いて返した。

その答えを聞き、葵は顔を青ざめさせる。

対して、他三人は険しい顔である。

「……まさか、幻想郷の住人を殺したの？」

「いや、外来人。しかも私に恨みがある奴で、私の復讐相手だ」

「……そうか」

鬼灯はそれだけを聞くと、霊夢に視線を送る。

その意味を理解した霊夢は頷くと、鬼灯は青ざめた顔をしている葵を連れて、奥に行った。

「……だから知られないようにしてたのに……甘かったか」

「俺達の前に現れた時、何時もよりも冷たい雰囲気、目にも光が無いと思っただら……そういうことだったのか」

歩はそれに納得した顔をした。

それを見てからルカは葵が行った方に顔を向ける。

「……」

「……どうしたのよ？」

ルカの何処か悲しそうな表情を見て霊夢が聞くと、ルカはポツリと零す。

「……葵を、悲しませてしまったな、と」

「……葵だって、あんたの復讐心は理解してた筈よ。というか、過去見た事があるから、それぐらい知ってるわよ」

「……そうだが」

「今は少し悲しんでるけど、ちゃんと元気になるわよ」

「……そうか」

ルカはそれだけを言うと、霊夢と歩に背を向けて歩き出す。

「何処行くのよ」

「飛倉探しだ。それ以外に何かあるか？」

「それは俺達と一緒にでも良いんじゃないか？離れた理由はその復讐相手に気付いてたからだろ？」

「まあな。だが、離れると最初に言ったのは私だ。だから、一人で探す」

「……そう」

霊夢はルカの言葉にそれだけを言う。

ルカはその反応を見てから、その場を去っていった。

霊夢と歩はそんなルカの背を見ていたが、自分達の上に何かの影が指したことに気づき、上を見てみれば、小さなUFOがあった。

「……何あれ」

霊夢と歩は同時に反応すると、歩が釣竿を使ってUFOを手に入れたのだった。

\*\*\*

朱鳥と絶月もまた、そのUFOを手に入れていた。

「これは本当に何だろうな」

「……UFOだろ？」

「……本当にそう思ってるのか？」

朱鳥は絶月の顔を見ながら言うと、絶月はそれに舌打ちで返す。

と、何かに気付いた顔をして、真正面を睨み付ける。

朱鳥もその顔に気付き、顔を向けてみると、其処には黒いショートボブで真紅の目、背中には赤い鎌のようなのが三枚、青い矢印の様なのが三枚という特徴的な羽があった。

「……テメエ、誰だ」

絶月はその人物を睨み付けるが、相手はとても余裕そうな笑みを浮かべている。

「ふふっ、私は『封獣 ぬえ』。『鶴』よ」

ぬえのその紹介に朱鳥と絶月は警戒の色を強くする。

「……」

「なんで鶴であるお前が現れた？」

朱鳥はそう問うと、ぬえは朱鳥達が持っているUFOを指差した。

「？これが何だ？」

「貴方達がそれを見ても怯えないから興味が出たのよ。まあ、そののあんたは妖怪だから分かるけどね」

ぬえはそう言うが、しかし絶月を見て首を傾げる。

「貴方は人間……なのよね？」

「……」

その問いに対して絶月は何も言わない。

その反応に少し興味を持ったのか、ぬえは笑顔を浮かべる。

しかし、朱鳥が其処に割り込む。

「やつスキの言葉、どういふことだ？」

朱鳥が割り込んできたことで一気に顔が不機嫌そうになるが、しかし律儀に答えるぬえ。

「それはね、貴方達が探してる『飛倉の破片』に私が『正体不明の種』を付けて、『正体不明』にしたの。彼奴らを困らせるためにね」

「彼奴ら……村沙達か？」

「そうよ。妖怪の癖に人間を助けようとするから……だからしたんだけど……」

「霊夢達が怯えないから興味が出たという事か……」

「そういう事……ということで、賭けをしましょう」

「？賭け？」

ぬえの言葉に朱鳥は訝しげな顔を見ると、ぬえはまた笑顔を浮かべ、絶月を見る。

「そう。弾幕ごっこで貴方が勝ったらその種を取り除いてあげる。私が勝ったら、そうね……私の下僕になりなさい」

「……は？」

ぬえに相手として指名された絶月は、その賭けの内容に顔を顰める。

「私ね、人間に恨みがあるの。私を地底に封印した恨みがね。だから……多分、人間の貴方を下僕にして、その心に恐怖を植え込んであげる」

そんな絶月に対してぬえはそんな賭けを言った理由をちゃんと説明する。

「ということだから、弾幕ごっこ、始めましょう」

ぬえはそう言うと、容赦なく弾幕を撃つのだった。

## 第百九十一話

ぬえの最初の弾幕を絶月は容易くかわし、朱鳥もまたそれに当たらずに後ろに下がり、絶月とぬえの弾幕ごつこを傍観する事にした。

そして互いに弾幕をぶつけ合っていたが、最初に弾幕を消したのはぬえだった。

「それじゃあまずは小手調べ。妖雲『平安のダーククラウド』」

そう宣言すると黒い雲を放出し、その雲から光源が現れた。

その光源からレーザーと霰弾が撃たれるが、絶月はレーザーに気を付けながら霰弾を避ける。

「……なんだ、こんなもんか。大妖怪様も大したことないな」

「あら、それは挑発のつもり？ 悪いけど、その挑発に乗るつもりはないわよ?」

ぬえは余裕そうな笑顔を浮かべ、手でその口元を隠し、優雅に笑う。

その姿は、レティシアがクスクス笑ってる時にする仕草である。

「……」

「あら? どうしたの?」

「……テメエに関係ねえよ」

「なら下僕になった時に教えてもらおうわ!」

すると、今度は赤い弾幕を絶月に向かい撃つが、それを絶月は掻い潜り、ぬえとの距離を縮める。

「一ノ罪『憤怒の怒号』」

そして殆ど距離が無いような所でスペルを宣言し、赤い色をした砲撃を放つが、ぬえはそれを体を逸らして躲す。

「ふふっ、残念当たらない」

そう言ってから左足を軸として右回転し、右脚で絶月の腹に蹴りをお見舞いする。

その蹴りの威力が予想以上にあり、絶月はそのまま受身も取れずに地面に背中を打つける。

「ぐっ……」



「絶月！」

これには流石に心配そうな声を上げる朱鳥だが、絶月が立ち上がったのを見て胸をなでおろす。

「あら？まだやられないの？人間にしては頑丈ね……というか、本当に人間？まあ良いわ。さっさと決めて私の下僕にさせてあげる」

ぬえは余裕そうな笑みを浮かべてそう言うと、終わらせるためのスぺルを宣言する。

「恨弓『源三位頼政の弓』」

その後大量のレーザーをまず上に放つと、そのレーザー達は下に落ちる。

その落ちる所を予測して絶月は移動するが、その落ちる途中でレーザー達は米粒弾へと変化する。

「チツ」

絶月は舌打ちしてその米粒弾を避けるが、しかしレーザーを未だに上に撃っているぬえの姿から、まだスぺルは終わらないと分かる。

いつ終わるかも分からないがまず避けるに専念し、避けれなさそうなのは自身が持つてる十文字槍で叩き落とすを繰り返していると、その放たれた弾幕の幾つかが朱鳥の方に行ってるのも目にする。

「朱鳥！！？」

「分かってる！！？」

朱鳥もそれに気付いていたようで避けるが、その最中、自分の足を絡ませてしまい転けてしまう。

「ッ！」

流石にもう避けれないと悟ると、くるであろう痛みに耐えるために目を強く瞑る。

しかし、その瞬間に誰かに抱き締められる感触と、その人物の呻き声が耳に入った。

その人物が誰なのか、流石に分かった朱鳥は直ぐに目を開ける。

「！絶月！！？」

その朱鳥の盾となった絶月はというと、足や腕といった軽傷な所もあれば、肩や腹といった重傷な所もあり、大量出血で死んでもおかし

くない状態である。

そもそも、未だに朱鳥に当たる弾幕を自分の体を盾にして守っているのだから、軽傷だけで済むわけがない。

そうしてスペルが終わると、絶月は倒れた。

「あく、間違つて殺しちゃったわね……残念」

ぬえは本当に残念そうな顔をするが、その顔は直ぐに驚愕へと変わる。

突如として絶月の体がイキナリ割れたのだ。

物で例えるならステンドグラス。それが割れた瞬間と同じである。

そしてその割れた欠片達が集まりだし、絶月の体がある場で創られた。

「えっ!??ど、どういうこと!??」

ぬえもこれには流石に吃驚だという顔をする。

それもそうだろう。

ぬえは絶月のことを『普通』の人間だと思っていたのだから。

その『普通』の人間がこうして復活すれば、驚きもするだろう。

「……絶月」

「……なんだ」

その絶月に助けられた朱鳥はというと、絶月の行動の意味が分からないというような顔で絶月に問い質す。

「……さっきの行動はなんだ? 何故私を助けた? ……私が不死身なのはお前も知ってる事だろ」

絶月はそんな朱鳥に背を向けた状態で話す。

「関係ねえよ。俺はな……背中を守るもんがいる限りは誰も傷つけさせねえって誓ってたんだよ」

絶月はそう言うと、未だに持っている十文字槍を強く握りしめる。

「……結局、俺が守れた人間なんて一人もない。どうあがいても全員死んじまってるんだからな」

「……絶月」

朱鳥はそんな絶月を見つめると、絶月は振り返り、片膝をついて朱鳥と視線を合わせる。

「だが柩木。……いや、朱鳥。お前は俺と同じ、俺と決して別れたりすることがない初めての存在だ。俺はお前と生きることを決めた。だから俺はお前を守る。……お前に傷は決して負わせねえ」  
「ッ!!?」

その言葉を聞いて朱鳥は頬を紅くして絶月を見つめるが、その後ろからそんな二人をずっと見ていたぬえは叫ぶ。

「私を無視して良い雰囲気を出すなんて……良い度胸ね!!? 正体不明『忿怒のレッドUFO襲来』!!?」

すると赤色のUFOが八つ現れ、ぬえを中心として螺旋軌道を描きながら、その描いた所に赤い弾幕を置いていく。

その弾幕は少しの間その場で止まっていると、絶月に向かって飛んでいく。

「二ノ罪『傲慢の処罰』」

しかし、絶月が金と銀と帯状の弾幕を操り、その弾幕達を撃ち落とし、UFO全て破壊すると別のスペルを宣言する。

「六ノ罪『暴食の贅沢』」

絶月はその後に黄色の弾幕を大量に撃ち出すと、ぬえはその弾幕をぬらりくらりとかわし始める。

「これぐらい……」

そんな余裕で躲しながらも絶月との距離を詰めていると、一つだけ当たってしまった。

その瞬間、打ち出された全ての弾幕がぬえへと向かう。

「なっ!!?」

ぬえはその場から離れるために一度後退するが、その弾幕達もそのぬえの後を追っていく。

「追尾弾幕ね……厄介ね!!?」

ぬえはそう叫んで弾幕と三つ又の槍で弾幕を撃ち落としていると、絶月は朱鳥の近くから跳躍し、ぬえの背後へと降り立つ。

「!!?しまっ……」

「……あの時の蹴りのお返しだ」

絶月のその言葉通り、左足を軸にして右回転、からの右蹴りを腹に

入れると、ぬえは膝をつき、その首に十文字槍の刃先を向けた。

「……終わりだ」

「……はあ、そうみたいね」

ぬえは溜息を吐いてから負けを認めると、絶月の弾幕は全て消え去った。

「貴方の勝ち。約束通り、種を取り除いてあげる」

ぬえはそう言って指を鳴らすと、UFOは何かの木片へと姿を変えた。

「これが……」

「そう。それが貴方達が探してた『飛倉の破片』。他に散らばったのもちやんと元に戻ってる筈よ」

「……そうかよ」

絶月はそう言うのと十文字槍をぬえの首から離す。

そんなぬえに朱鳥は近付くと、手を差し出した。

「……何？」

「立たせるためだ。お前も十分傷付いてるだろう？」

朱鳥はそう言いながらぬえの姿を見る。

その服は所々汚れていたり、破れていたりしている。

ぬえはその手を暫く見てからその手を取り、立ち上がる。

「……有難う」

「どう致しまして。さ、飛倉探しを再開するぞ、絶月」

「……ああ」

朱鳥は絶月とそう離すと、ぬえから離れるのだった。

## 第百九十二話

ぬえが飛倉の破片を正体不明から分かるようにした後は飛倉の破片は楽に見つけられるようになった。

そうして全員が順調に集め、暫くすると船へと戻ってきた。

「……これで、全部ですか？星さん」

「少し待ってください。数えてみます」

葵からの質問に星はそう答えて早速数えると、確かに全てが集まっていた。

「はい、全部集まっています」

「良かった……これで封印されているという人を解放できるのですね!!？」

葵が嬉しそうな笑顔を浮かべるが、逆にルカは目を細めて村紗を見る。

それに気付くと、村紗は首を傾げて聞く。

「貴女、どうしてそんな顔をしてるわけ？」

「……いや、気にしなくていい」

「すっごい気になるんだけど」

「しよぼい事しか出来ない舟幽霊には話す事は無いってことだろう？」

「はあ?」

そんな村紗の後ろで大洋はそう言うと、村紗は勢いよく後ろを振り返った。

「……何だろ?今、頭の中でゴングが鳴った気がする」

「ゴングですか?」

想起の言葉に早苗は訳が分からないと言った表情をするが、想起の言ったことは間違っていない。

現に、痴話喧嘩の幕は切って落とされたのだから。

「何がしよぼいですって!??私は船を沈める事が出来るんだから!!? 貴方なんて『船を守る精霊』とか何?安全祈願でもするわけ?うっわ、男なのに女々しい奴!」

「テメエなんて船沈ませるって言っても、小さな船しか沈ませれないんだろ？お前、柄杓使って水いれてくんだろ？そんなので大きな船沈ませれるわけないだろ！」

「何よ!!？私の凄さを貴方が知らないだけで、昔はちゃんと沈めてました〜」

『昔』だろ？『今』じゃ出来ねえんだろ？うわダツセ」

「はあ!!？もう良いわ!!？絶対許さない!!？もう怒ったんだから!!？」

「今ならケンカを安く買ってやる！持ってけ荒波女!!？」

「後悔しないことね!!？」

そんな二人は遂にスペカまで構えるが、喧嘩してる二人に静かに近寄る雲山。

葵はその雲山を見ると、止めに出ようとした動きを止め、終わりを見ることにした。

そしてその雲山はと言うと、まずは大洋に拳骨を入れた。

「痛つてえ!!？」

「ははは！私を馬鹿にした罰が下ったわね!!？」

村紗はそんな風には大洋の事を笑ったが、しかし雲山が今度は自分に近づいて来てるのを見て、こうちよくする。

「え、ちよつと。もしかして私も!!？」

「二人とも喧嘩するのが悪いのです。反省しなさい」

「いやあ!!？」

そんな村紗の叫びも虚しく、雲山に拳骨を入れられ、その場に頭を叩いて座り込んだ。

「すみません、お見苦しい所をお見せして」

「い、いえ……気にしないで下さい」

「本当だ。くだらない時間を食わせるな」

星からの謝罪に葵は苦笑いで対応するが、その後ろから夢幸がそう付け加える。

そんな夢幸の言葉にはすでに慣れてしまった葵はただただ苦笑するだけである。

そんな後ろでは、先程の事でルカは鬼灯から問いただされた。で、結局、お前は どうして警戒しているんだ？」

「……此奴らが本心で言ってるのは分かる。嘘なら分かるしな。ただ、此奴らの親玉が本当に『敵』じゃないとは言えないだろ？」

「……なるほど」

ルカのその言葉に、鬼灯は納得しながらも呆れた顔をするのだった。

\*\*\*

その後、村紗と大洋の頭に来たたんこぶは葵が治し、船は村紗の運転で移動し始めた。

そうして船はスムーズに目的の場所である『魔界』の一角、『法界』へとやって来た。

「……えっと、今更なようですが、私達が此処にいて良いんでしょうか？此処、法界ですよ？」

「法界ですが大丈夫ですよ。立ち入っても」

「そ、そうですか？なら、良いのですが……」

葵は星からその言葉をもらいながらも、緊張してるようで、動きが何処と無くぎこちない。

そんな葵を見て霊夢は溜息を吐く。

「葵、あんた緊張し過ぎよ。もつとリラックスしなさい」

「そういう霊夢は少しは緊張した方が良い気もするのですが……」

「何だよ」

「いえ、だって此処は法界ですよ？」

「だから何よ」

「……もう、良いです」

葵は霊夢との其処で切ると、少しだけだが緊張が解れた。

しかし、その後は会話も無く歩いていると、星達の歩みが止まった。着きました」

「此処にいるのか？お前達が慕ってるその封印された奴が」

「は？」

魔理沙からの問いに星は答えると、魔理沙を始め、霊夢達を見渡し

た。

「皆さんが集めてくれた飛倉の破片を私に渡してください。封印を解きます」

それに全員が頷いて飛倉の破片を渡すと、星が封印を解き始める。「この封印を解く作業は少しばかり時間が掛かるから、なんなら話すかい？」

「そうですね……でしたら、質問をして良いですか？」

ナズーリンからお喋りタイムの時間を貰うと、葵はそのナズーリンに質問をする。

「ん？良いよ、何でも聞いて」

「でしたら、星さんが宝塔を持って、そしてあんな風に扱えるという事は、星さんは『毘沙門天』様なのですか？」

「まあ、半分当たりで半分間違いだな」

その質問にそう答えたのは凱火。

「確かに星は『毘沙門天』だが、本物の『毘沙門天』様の弟子だ」「弟子、ですか」

「そうです。そして、私は本物の『毘沙門天』様の使いです!!？」

対してナズーリンはそう言うと、少しかだけ胸を張るような仕草をする。

しかし、それに反応を示したのは葵だけで、後の全員は興味がないのかスルーした。

反応を示した葵はというと、目を輝かせている。

そしてまた少しかだけ会話をすると、星の声が掛かった。

「皆さん!!？聖の封印が解けましたよ!!？」

それが聞こえた為、全員で封印されていた人物を見ようと立ち上がり、星の下まで向かう。

そして近付けば、確かに星以外に見たことない人物が一人。

金髪のロングウェーブに紫のグラデーションが入っている髪。金色の瞳と黒のゴスロリ風のドレスを着て、表が黒で裏が赤色のマントを羽織った女性。

この女性こそ、数千年前に封印された尼、『聖 白蓮』なのだった。



## 第百九十三話

聖の復活したその姿を見ると、一輪と村紗が嬉し涙を流し、抱き着いた。

「聖！」

「姐さん！」

「お二人とも……それに、皆さんも……」

聖は最初、驚いた表情をしたが、しかし直ぐに嬉しそうな顔へと変わった。

それを見ていた葵もまた嬉しそうな表情をし、ルカも警戒度を下げたその様子を見ていた。

その空気を暫く見ていると、聖が葵達に気付いたようで、一輪達から離れると近づいてきた。

「貴方方が、星達の手伝いをしてくれた方ですか？」

「あ、はい……」

葵が恐縮そうに答えると、聖は綺麗な微笑みを浮かべた。

「有難うございます。星達の手伝いをして下さって、そして、私を助けて下さって」

「そんな……お礼を言われるほどでも」

葵がそういうと、鬼灯は後ろで溜息を吐く。

「で、もう用事は終わったんだろ？帰るぞ」

ルカがそう言って来た道を戻ろうとして瞬間、霊夢の驚く声が聞こえた。

何事かと思い振り向いてみれば、そこには驚きの光景があった。

なんと、あの夢幸がどうしてか聖に頭を下げているのだ。

これにはルカも驚いた表情をする。

いや、ルカだけでなく、夢幸のことを知っている全員が驚いてる表情をしている。

それもそうだろう。

あの夢幸が頭を下げる姿など、想像出来なかつたのだ。

その夢幸が頭を下げている。これほど貴重なことはそうそう起き

ないだろう。

「む、夢幸、さん……？」

葵も戸惑った様子を見せながらも名前を呼ぶが、反応はない。

そんな夢幸は、聖に一つの頼みごとをした。

「貴方に一つ頼みがあります」

「？何でしょうか？」

「俺と魔理沙と、戦ってくれませんか？」

それに対して、聖は少しだけ考える仕草をすると、頷くのだった。

\*\*\*

夢幸と魔理沙、聖が戦闘態勢をとってる場所から離れた場所では、葵達が見守っていた。

「それにしても、彼奴のあんな対応初めて見たわ」

「同じくです……いつもの夢幸さんとは違いますね」

霊夢と葵の言葉にルカと歩が頷くと、朱鳥が言う。

「つまり、彼奴がああ聖という尼の実力が分かったということだろう」

「実力ね、そんなに強いわけ？彼奴」

その言葉に対して、一輪が嬉しそうに言う。

「勿論。姐さんは強いよ」

その言葉を聞いた葵達は、聖を見つめる。

それから少しすると、聖が夢幸と魔理沙に声をかけた。

「貴方方との戦い、とても楽しみです。お互いに頑張りましょう」

「おう！頑張りましょう！」

魔理沙の返事を聞いて嬉しそうな顔をする、直ぐに真剣な顔をし、弾幕を生成する。

それを見て、魔理沙と夢幸も弾幕を生成すると、両者ともに打ち合いを始めた。

最初こそ互角かと思われたが、直ぐに聖が優勢となった。

「……夢幸さんと魔理沙が、押されてる？」

葵の呟くその声に、言葉を返す者はいない。

霊夢達は驚き、朱鳥と絶月は真剣にその勝負を見ており、一輪達は聖を応援していた。

最初に一枚目を宣言したのは夢幸だった。

「天符『スピニングシザール』」

夢幸は自分の持つサーフボードを回転させはじめ、竜巻を起こすとそれに乗る。

そこから聖に跳び蹴りをするが、聖は軽く避けてしまう。

そんな避けている処に魔理沙は自分のよく使うスペルを宣言する。

「恋符『マスタースパーク』！」

その砲撃は真つ直ぐ聖に向かう。

聖はその砲撃に対して驚いた様子を見せるとそのまま飲み込まれる。

……が、砲撃が消えた時、その場に聖はいなかった。

「!?彼奴、どこに……」

魔理沙が聖を探していると、スペルを宣言する声が聞こえてきた。

「光魔『スターメールシュトロム』」

そのすぐ後に、魔理沙と夢幸の左右から曲がりながら進んでいるレーザーが魔法陣から現れた。

魔理沙も夢幸もそれを避けていると、何か地面に着地する音が聞こえると同時に、自分達を狙う弾幕が増えた。

「これぐらいー！」

しかし、魔理沙も夢幸もそれを避ける。

その姿を見ている聖の顔は、どうしてか嬉しそうな顔をしている。

そのスペルが終わると、魔理沙はスペルカードを持って叫ぶ。

「今のが避けられたなら、それより高威力の砲撃ならどうだ！魔砲『ファイナルマスタースパーク』！」

魔理沙はミニ八卦炉を構えて、そこからマスタースパークよりも更に威力が上がっている砲撃を撃つが、聖は今度は左に避けてから次のスペルを宣言する。

「大魔法『魔神復誦』」

すると、聖の近くに魔法陣が四つ現れ、パワーを貯めきると、それをレーザーとして撃つ。

それと同時に網目状のウィンダー弾幕も放たれる。

魔理沙はそれに驚いた表情をするが、直ぐに楽しそうな顔で聖から上に放たれ、下に降り注ぐ中玉弾幕と、三方向に向かつて放たれている赤い大玉弾幕を避け始めた。

しかし、この弾幕から逃れるために隙間を探すが、量が量だけに見付けにくく、いくつか当たってしまったている。

そんな状態から暫くすると、先ほどのレーザーが再び放たれ、今度は左右に振られ始める。

そこからなんとか避けていると、今度は聖から直接、中玉弾も撃ち始めた。

魔理沙達は増えた弾幕も避けなければならなくなり、苦しそうな顔になる。

そこからまた時間が経つと、今度は全方位に小型弾幕を撃ちはじめる。

これを見ていた霊夢もさすがに魔理沙に同情の視線を向ける。

そんな中でも、魔理沙達はいくつか当たりながらも避け続け、ようやくスペルが終わる頃にはすでに疲れ切っていた。

そんな二人に聖は油断せずに見据えてると、夢幸が近付いてきた。

聖はいつでも避けることが出来るように、自身の魔法で身体強化を施す。

対して夢幸はというと、聖の前で跪いた。

『…………え』

そんな夢幸を見て、いつもの様子を知っている者達は驚いた。

あの夢幸が、誰かに跪く日が来るとは、誰が予想できただろうか？

その夢幸はと言うと、その状態で聖に話しかけた。

「貴方の魔法の実力、魅力共に見事。敬服致しました。自分の負けです」

その言葉を聞いたことでようやく魔理沙の意識が現実に戻り、夢幸に問い詰めはじめた。

「おい！夢幸！まだ弾幕ごっこは終わってない！まだ私達は負けてないだろ！」

その言葉に冷静に言葉を返す夢幸。

「俺達は魔術師、そして魔法使いだ。幾ら勝負で勝てようと、真っ向からの魔法で勝てなければ意義はないだろう」

その言葉に納得してしまった魔理沙は、渋々といった感じでミニ八卦炉を構えるのを止めた。

この聖と夢幸、魔理沙との勝負は、夢幸が降参したことにより聖の勝ちとなったのだった。

## 第百九十四話

結局、いつも通りに博麗神社で宴会をする事になり、葵達はその準備をしていた。

「それにしても……今回は異変らしい異変は無かったですね」

「そう？船が浮かんでるって時点ですでに異変だけどね」

「それもそうですね……」

鬼灯とルカから離れた所で葵と霊夢がそんな話をしている所に、歩が近付いてきた。

「なあ？後は何を運ばいいんだ？」

「あ、歩さん。お疲れ様です」

「いや、疲れてないけどな、俺」

葵の言葉に歩は苦笑いしながら返す。

そして、葵と霊夢は周りを見てから、歩に返した。

「今の所は無さそうですね……あとは多分、料理ぐらいでしょうか？」

「どうか、なんで歩が働いて居候の奴らが働かないのよ」

「せ、雪華さんは向こうの友人達をつれて来るそうですから無理なのは……」

「……はあ」

霊夢がそれを考えて溜息を吐くと、お札を一枚出した。

「で？さつきからそこに隠れてる奴、さつきと出て来なさい。じやないとお札を投げるわよ」

霊夢はそう言つて、後ろにある木々を睨み付けながら言うと、音を立てながらその木々から出て来た人物がいた。

「？えつと、どちら様でしょうか？」

「……」

葵の質問に、相手は俯いてだんまりを決め込んでいる。

しかし、少しすると、口を開いて答えた。

「……ぬえ」

「ぬえさんですか。それで、何のご用件で此処に？……あ！宴会に参加する方ですか？」

葵が少し嬉しそうな顔で言うが、しかしぬえは動かなかった。それに少し首を傾げる葵だが、ぬえは途端に頭を下げた。葵はその行動に驚き、霊夢は冷静にぬえを見据えていると、ぬえは喋り始めた。

「……今回、飛倉探しを邪魔して……ごめんなさい」

「……え、邪魔……されてましたか？」

葵は首を傾げると、ぬえは頷く。

「……ええ、邪魔してたわ。私、貴方達が探してた飛倉を正体不明にして、邪魔してたのよ」

「……じゃあ、あのUFOに見えてたのは……」

「そういう事でしょうね。で、それをあんたは謝りに来たよ」

「ええ、そうよ」

霊夢はそれを聞いて溜息を吐くと、ぬえに指を指す。

「なら、行動で示してよ」

「……え」

「あんた、私達は今、宴会の準備をしてるのよ。だから、手伝いなさい。なら、許してあげる」

「……わ、分かったわ」

ぬえは霊夢の言葉に一瞬戸惑ったが、最終的にそれを承諾した。

「あ、歩さん。お料理は……」

「今回も俺が担当するよ。あ、ぬえも手伝いで来て」

「わ、分かったわ」

ぬえはそのまま歩に付いて行き、残された葵と霊夢はそのまま準備の続きをしていたのだった。

\*\*\*

その日の夜、予定通りに皆んな集まったの宴会が始まった。

「アルくん！」

「……久しぶり」

「！……織姫と彦星……と、雪華」

「何？私は嫌い？酷いなく……しくしく」

「嘘泣きするな」

アルカが雪華の頭を叩くと、織姫が嬉しそうに笑顔を浮かべ、彦星は雪華に対して笑っていた。

それを見た雪華がその彦星を弄り始め、織姫はアルカ達と一緒に飲み始めた。

そこから離れた場所では、フィールがアリス達と一緒にいた。

「……此奴が、あっちのお前の妹か」

「実際には、近所の親しい友達みたいなものみたいよ。背的にも年的にも私の方が上だから、姉妹みたいな感覚らしいけどね」

「……フィール・マリオネットです。よろしく」

「よろしくな！私は霧雨魔理沙だ！」

「時雨夢幸だ」

「よろしく、霧雨魔理沙、時雨夢幸」

フィールはそういうと、人形の様にお辞儀をした。

見た目が既に人形の様なので、間違えば自律人形である。

それを見ながら朱鳥は一度周りを見ると、一人でその場から離れたのだった。

\*\*\*

絶月は一人、宴会から離れた所場所でお酒を飲んでいた。

彼は騒がしい所を苦手としているため、この行動はおかしくないのだ。

そんな彼に近付く足音。

朱鳥は絶月を見つけると、その隣に立った。

「……隣、良いか？絶月」

「……ああ」

絶月の了承を貰った朱鳥はその絶月の隣に座ると、一緒に飲み始めた。

「……良いのかよ。あっちにいらなくて」

「ああ、構わないさ。今はお前と一緒にいたいさ」

「……そうかよ」

そうして暫く静かに一緒に飲む二人だったが、そこで朱鳥が口を開いた。



「……お前に、言いたい事がある」

「……」

「お前はぬえと戦ったあの時、私を守ると言ってくれたな。あの言葉、正直嬉しかった。だがな、私としてもお前には傷ついて欲しくない。だから、お前が私を守るといふなら、私もお前を守ろう。お前に傷を付けさせる訳にはいかない」

「……」

朱鳥はそれだけを言うと立ち上がろうとする。

しかし、その腕を絶月は掴んだ。

「？絶月？」

「……なあ？それは……俺への告白か？」

「……は？」

朱鳥は一瞬理解に遅れたが、理解すると顔を赤く染め、顔を背けた。

「……おい、答えろ。朱鳥。今さっきの言葉、俺への告白か？」

「……なら逆に聞くんが、お前があの時私に言ったあの言葉は私への告白か？」

朱鳥はそう聞くと、絶月は少し考えた素振りを見せると、

「……ああ、そうだ」

そう答えた。

朱鳥はそれを聞いて更に顔を赤くすると、絶月の問いに答えた。

「……ああ、もう。告白と捉えてくれて構わない。それで？返事をもらいたいんだが……」

「返事ならお前の前に言っただろ」

絶月はそう言うのと、一度朱鳥を引き寄せ、自分の腕の中でその唇を奪った。

「!？」

「……俺もお前が好きだ。愛してる」

「……絶月」

二人はその後、そのままキスを続けたのだった。

\*\*\*

宴会から離れた別の所では、早苗と想起が一緒にいた。

この二人は別段騒がしい所は苦手ではないのだが、早苗から誘われて宴会から離れた所にいるのだ。

「……早苗？僕に何の用があるの？」

想起は自分の胸が物凄くドキドキしているのを必死に隠そうと冷静を保つてフリをする。

対して早苗は二、三度深呼吸をすると、想起の方に顔を向けた。

その顔は赤くなっており、想起はそれを見てますますドキドキしてしまっている。

沈黙がその場を支配するが、少しすると、早苗と想起が同時に口を開いた。

「あ、あの！」

二人同時に言葉が被ってしまった、一瞬戸惑うと、二人して相手を優先して言わせようとする。

「あ、先にどうぞ……」

そんな被りに一度、体が止まると、二人して吹き出した。

「ど、どうして、こんなに被るの……」

「わ、分かりません……」

二人とも少しの間笑い続けると、早苗は目に浮かんだ涙を拭いながら提案する。

「あの、でしたらもう、一緒に言いましょうか」

「え、でも……」

「何となく、私と想起さんが言いたい事が一緒な気がするんです。だから……」

「……早苗」

想起は早苗を少しの間見つめると、頷く。

そうして、同時に合図をして、言葉にする。

「貴方（君）の事が、好きでした！付き合ってください！」

二人はその言葉言ってから頭を下げる。

それから頭を上げると、お互いの顔は既に真っ赤になっている。しかし、少しの間見つめ合うと、また吹き出して笑い始めた。

「あはは！なんだ、両想いだったんだ」

「ふふつ、ですね。良かった。これでも物凄く心配してたんですよ？私」

「僕もだよ。『これで振られたらどうしよう？』って思ってたし……」

「もう、本当に想起さんは鈍感ですね」

「え？」

想起は早苗の言葉に驚いたような顔をして早苗を見ると、早苗は笑顔を浮かべて想起に言う。

「私は、想起さんが気付くよりももっと前から、貴方の事が好きだったんですよ？」

「あ……ごめん、早苗」

想起は申し訳なさそうに顔を伏せるが、そんな想起に対して早苗は一番綺麗な笑顔を浮かべる。

「気にしないでください。だって、今はもう、お互い気持ちを知り合えました。それだけでも嬉しいんですから！」

「……うん！」

想起もまた嬉しそうな笑顔を浮かべると、早苗の手を取って宴会の場所に戻り始めた。

「葵の歌は聞かなきゃ損だからね！」

「ですね！早く戻りましょう！」

そんな風に笑顔で笑い合いながら。

\*\*\*

雪華は彦星弄りを一旦やめると、宴会から遠く離れた、宴会の光さえ届かないような場所に歩く。

そして、ある木の下で止まると、上に向かって叫んだ。

「おーいー！あんたはまたそんな所にいるつもりかー！ー！」

その叫びは確実に伝わったはずなのだが、相手からの返事はない。雪華はやっぱりかとても言いたそうな顔をすると、その木を登った。

そして、暗闇にまるで紛れ込むようにして枝に座ってる者がいた。

その者は全体的に黒い。

顔を覆ってる布は白なのだが、着物も、髪も、瞳も、その背から生

えてる羽さえも黒。

その座つてゐる者は雪華に気付くと、俯いた。

「……私に触るのは、不味いから……間違つても触つたら……だから」  
「そんな心配しなくてもいいと思うけどね、私は……」

「……雪華は良いよ。触らないように出来るから。……でも、他は？  
他はきつと……」

「それも多分大丈夫じゃないかな？この世界にはそれを治せる奴もいれば、そもそも効かない奴がいる。だから、そんなに心配なら、そいつらと話せば良い。仲良くなれば良い。それなら、あんたの心配もなくなるでしょ？」

「……」

その女性はまた顔を俯かせる。

それに対して溜息を吐く雪華。

「それに、それを防ぐ為にあんたはそんな素肌を出さないような格好をしてるんでしょ？」

「……羽は出てる」

「あ、そっか……さて、どうするかね」

雪華は空を見上げるような格好で考え込むと、顔を戻した。

「……いるじゃん。そんな問題を解決してくれる奴」

「……？」

「ちよつと待つて！」

雪華はそう言うてから木から降り、暫くしてからある人物を連れてきた。

「お待ちせ！『鳩蘭』！」

「おい、俺に何をさせるつもりだ？雪華」

雪華に強引に連れてこられた狼は雪華に文句を言うと、雪華は真面目な顔で狼に頼みごとをした。

「お願いがある。この子の『能力』を封じて！」

「……別に良いが、良いのか？お前は」

「……雪華」

「此奴の能力は『能力を封じる程度の能力』。だから、お前の能力を封

じて問題を解決させる！そうすれば、人に普通に触れるし、近づけるでしょ？」

雪華は少しだけドヤ顔をしてそう言うと、鳩蘭は少しだけ惚け、次の瞬間にはプツと笑い始めた。

「……有難う、雪華。狼さんでしたっけ？……お願い、封印して」  
「……分かった」

狼は言われた通り鳩蘭の能力を封じると、鳩蘭は嬉しそうに狼と宴会に向かっていった。

「……まあ、私達の世界は此処とは違って能力と命は繋がってないし、あれぐらいじゃ問題ない。ということであんたのこの執事に手伝ってもらったけど、別に構わないよね？」

雪華はそう言って後ろを見ると、其処にはいつの間にもやらレティシアがいた。

「クスクス、やっぱり、貴女は普通の雪女じゃないわね」

「私自身自覚してるよ、それぐらい。で？良かった？」

「クスクス、別に構わないわよ？それで、貴女は宴会場に行かないのかしら？もう直ぐ葵の歌が始まるけれど？」

「おっと、それはまずいーじゃあ、おっさきにー！」

雪華はそう言って木を降りて去っていく。

レティシアはそれを見てから、また笑い出す。

「クスクス、本当に面白い子ね。アレでどうして『弾幕ごっこ』が弱いのかしらね？」

レティシアはそう言うと、木の枝に座った。

「クスクス、さて、もう直ぐ『アレ』が目覚める頃だし……どうなるかしらね？」

レティシアはそう呟くと、持ってきていたワインを飲むのだった。

## 魔理沙の日常 第百九十五話

現在、魔理沙と夢幸は珍しく神無月神社にやって来ていた。

しかし、気分的にこちらに来たのではなく、強制的にこちらに来させられたのである。

その強制的に連れてこられた人物はというと……。

「魔理沙〜！歩が〜！」

泣きながら魔理沙に縋り付いてる霊夢である。

そんな霊夢の様子を葵は戸惑った表情で見ている。

どうして霊夢がこうなっているのか、過去を覗いてない葵には分かるわけもないのだ。

しかし、縋り付かれてる魔理沙ですら、そんな事は分からない。

いつも通りに博麗神社に行ったら、強引に腕を引かれてここまで連れてこられただけなのだから。

「な、なあ？霊夢。お前、何があつたんだ？」

魔理沙は霊夢にそう聞いてみると、霊夢は泣きながら答えた。

「グスツ、歩が……歩が他の女の子と、仲よさそうに話してたのよ〜！」

「え、歩さんが？」

それに葵は驚いた顔をするが、夢幸は目を瞑って話を密かに聞いていた。

「あの歩が？いや、まあ、彼奴友達多いから、別に不思議な事じゃ……」

「その『友達』と話すとき以上に仲が良さそうだったの〜！」

「え……」

それを聞いて流石に驚いた顔をする葵。

『友達』以上となると、その関係は殆ど明白である。

『親友』か、『恋人』か……。

しかし、この様子から、どう見ても『親友』ではないと分かる。

(……これは、確かめてみないと)

魔理沙はそう考えると、直ぐに行動に移る為にまずは霊夢を葵に預けるのだった。

\*\*\*

神無月神社から出る途中、葵と仲が良い幸多と出会い、少しだけ話してから魔理沙は博麗神社へと向かって行く。

博麗神社に着いてみると、最初に出迎えたのは雪華だった。

「お、来たんだな。霊夢の様子は？」

「泣いてるぜ。だから、まずは歩に説教をだな……」

「いや、なんで説教すんの」

雪華が若干、呆れた風に言うと、魔理沙達の間をすり抜けて進み始めた。

「あ、おい！何処に……」

「歩に聞きたい事があるんだろ？だから、居場所に案内してあげるの。さつき人里に行つて団子を食べるつて言つてたから、人里に行つてみる？」

その問いに対して、魔理沙は頷くと、雪華はまた歩き始めた。

\*\*\*

「それにしても、今回、お前は巫山戯ないんだな？」

「ん？何でそんな事聞くわけ？」

イキナリの魔理沙の質問に雪華は驚いた表情で見返すと、魔理沙は少しニヤケて返した。

「いや、何時ものお前なら霊夢か歩を弄つてそうなのに、今回に限つてはマトモだからな。聞いてみたくなつたんだ」

「……」

それに対して雪華は顔を進んでる方に顔を向けると、少ししてから答えた。

「……後悔して欲しくないんだよ。私のように」

「……お前、後悔した事があるつて事か？」

それに対して、雪華はニヤニヤした顔を向ける。

「なくんてね！そんな事あるわけないだろ？実際はただ、霊夢のあんな姿を見れて既に十分楽しめたから、もうさつさと終わらせてやろう

「思ってたね」

「ま、そんな事だろうと思っただぜ」

雪華が耳に掛けながら言うと、魔理沙もやっぴりか的な表情をして言う。

それに対して夢幸は何も言わない。そもそも、夢幸は魔理沙の側にいるだけで、何かをするつもりはないのである。

そんな話をしながらもお団子屋に辿り着くが、既に其処に歩達はいなかった。

「あく、これは食べた後にどっか行っただな？」

「そうみたいだな。なら、聞くしかないな」

雪華はそう言ってお店のおばあさんに聞いてみると、博麗神社に戻って行ったとのこと。

「あく、入れ違いになったか……」

雪華は心底面倒臭そうな顔をしてそう呟くと、魔理沙達にそう言うってから博麗神社へと戻っていく。

\*\*\*

博麗神社に戻してみると、境内に歩ともう一人、黒髪のポニーテールの女性がいた。

「ほら、お前達が探してた女がああのポニーテールの女だよ」

「彼奴が……」

「……確かに、他の奴と話している時と空気が違うな」

魔理沙と夢幸が其々そんな感想を言っていると、その女性が歩にかを差し出した。

それを見た魔理沙がすぐ様二人に近付き、それを奪う。

すると、二人は驚いた様子を見せて、魔理沙を見る。

「ま、魔理沙!？」

「ちよつと。それを返してよ!」

「返して欲しかったら、まずはこいつの事を説明しろ!歩!」

魔理沙はそう言って怒鳴る後ろで、雪華は少し笑みが浮かんでいる。

しかし、そんな事に気付いていない三人は、そのままの状態が進む。



「魔理沙、何か勘違いしてないか？此奴は『時原 栞』って言って、帝と同じ世界から来た人だ」

「因みに、こっちの歩君と話していたのは、彼の思い出話と貴女が奪ったその説明をしたのよ」

「……え？説明？」

魔理沙はラブレターだと思つて奪つた紙を再度見てみると、それはスペルカードの様なカードだった。

\*\*\*

栞という女性と共に霊夢の下に戻つた彼らは詳しい事情を聞くことになつた。

「私は別の世界で歩君の従姉妹なのよ。まあ義理だけどね。帝君からこの世界の歩君の事を聞いてね。どうしても気になつたから紫さんに来させて貰つたの」

「なるほど。じゃあ浮気じゃなかったんだな!!」

「単なる博麗の勘違いか。ふん。時間を無駄にしたな」

笑顔で言う魔理沙といつも通りな夢幸に苦笑した栞は霊夢に近づいた。

「誤解されるような真似をしてごめんなさい。彼とは色々話したいことがあつたものだから……」

「栞。それは俺が霊夢に説明しなかつたからで」

「いいの。私が勝手に勘違いしただけだから……」

霊夢が自分の勘違いに顔を赤くしてそう言うと、栞は売れしそうに笑つて言う。

「そう言つてくれると嬉しいわ。私にはちゃんと別に恋人がいるから安心してね」

「そうなんですか。どんな方なんですか？」

栞が問いかけると歩が笑いながら言う。

「葵も知ってる人だぞ？」

「え？」

「ええ。こっちの世界にいる如月翔君よ」

「へえ〜！ 如月さんの恋人なんですかね！」

驚きつつ笑顔でそう言う葵に葉は微笑む。

「ところで葉？ さつき歩に渡したカードってなんなんだ？」

と、魔理沙が歩の持つているカードを指差して話に入ってきた。

「それはあっちの歩君が使っているのと同じだよ。こっちの歩君も使えるかもしれないからもう一つのを持つてきたの。ただ使えるようになるには結構苦勞するけど……」

「出来るさ。そっちの俺に出来たんだからな」

グツと握り拳を作る歩に葉は笑い、現れたスキマに向かっていく。

「じゃあ私はそろそろ行くわ。達者でね歩君」

「ああ、ありがとう葉」

「ふふ、それと頑張つてね霊夢」

「！」

最後に霊夢に向かってそう言うと、葉はスキマに入り、元の世界に帰って行った。

\*\*\*

霊夢と歩はその後、博麗神社に戻った。

その頃には既に夜になっており、二人は縁側で月を見ながらお酒を飲んでいた。

そうして暫く無言でお酒を飲んでいると、歩が切り出した。

「……なあ？ 霊夢」

「何？」

「何であんなに悲しんでたんだ？」

「……それは」

霊夢は其処で口を閉じる。

その顔は何処か赤くなっており、歩は密かに期待を寄せた。

（まさか、霊夢……）

それを考えると、歩の鼓動も早まり、段々とその期待は大きくなっていく。

そんな間も静かな時間が流れる。

霊夢はそれを少し心地良いと感じながらも、二、三回ほど深呼吸をすると歩と向き直る。

「……歩、私があんなに悲しんだ理由はね……」

「……ああ」

「……歩の事を好きだからよ……」

それを聞くと、歩は嬉しそうに笑い、霊夢を抱き締めた。

霊夢も一瞬驚いた表情をしたが、しかしその抱擁を受け入れる様にして抱きしめ返す。

暫くずつとその態勢を取っていたが、歩は霊夢から体を離れた。

「……霊夢」

「……何？歩」

「俺も霊夢の事が好きだ」

そう言うと、二人はまた抱き締め合う。

暫くそうしていると、

「霊夢……」

歩が霊夢の名を呼んだ。

それに対して、霊夢はちゃんと返事を返す。

「何かしら？」

「俺。強くなってくるよ。霊夢を守れるように、この力を使えるように」

栞から貰ったカードを取り出す歩。

それを握りしめて言う。

「だから……必ず此処に帰ってくるから、待っていてくれるかな？」

「ええ。私は待ってるわ。だから頑張ってるね。歩」

「ありがとう。霊夢」

そして二人は、短い口付けを交わした。

それを密かに見ていた雪華は、静かにその場を離れたのだった。

## 第百九十六話

魔理沙はこの日、珍しくレティシアに呼ばれた為、夢幸と共に紅魔館へと向かって飛んでいた。

魔理沙は、どうして自分が呼び出されたのか分からずに首を傾げたが、好奇心に勝てなかったのだ。

あのレティシアが、自分になんの様なのか？

それは、魔理沙の好奇心を掻き立てるのに十分である。

そうして、紅魔館へとやって来てみると、どうしてか中が騒がしい。

「なんだ？雪華でも来てるのか？」

「……さあな。しかし、この爆発音からさっして、彼奴が来てるということでは無さそうだな……」

夢幸はそんな風に魔理沙に言うと、聞きなれたクスクス笑いが聞こえてきた。

夢幸は直ぐに後ろを見るが、何時もの様に後ろにはおらず、周りを見渡すが何処にもいない。

「彼奴、いったい何処に……」

そんな風に魔理沙が顔を正面に戻すと、レティシアが目の前にいた。

その為に、一瞬思考が停止する。

そして……。

「わあああああ!?!」

驚きで叫びをあげながら後ろに下がる。

それを見て、レティシアは何処か愉快そうに笑う。

「クスクス、期待通りの反応を返してくれてありがとうね♪魔理沙」

「……呼びつけておいてこんな事をするなら、帰る」

「クスクス、あら、まずは話を聞いて、その返答をしてからよ♪」

レティシアはそう言つて、一瞬で玄関を塞ぐ様に立つ。

それには流石に驚かなかった様で、魔理沙はレティシアの前に出た。

「で、私に何の様なんだ？」

魔理沙はそう聞くと、レティシアは嬉しそうに笑ったのだった。

\*\*\*

魔理沙達はレティシアの案内で移動した。

現在の居場所はレミアアとも戦った広間である。

其処では歩と光冥、絶月が弾幕ごっこをしていた。

「……成る程な。あの爆発音の正体はこれか」

「クスクス、そうよ。イキナリ来たかと思ったら、絶月と光冥に戦って欲しいってお願いしてきてね。戦闘経験は多いに越した事はないから、戦わせてるのよ」

「いいなく！私もしたいぜ！」

「クスクス、それは、後でにしてくれるかしら？」

レティシアはそう言うのとテーブルと椅子を創造し、その一つに腰掛けた。

魔理沙と夢幸もそれに習って座ると、いつの間に行ったのか咲夜がレティシアの側におり、全員分の紅茶を用意してから、その側に控えた。「それで？私に様って何なんだ？」

魔理沙はその紅茶を飲みながらレティシアに問うと、レティシアはそれに答える。

「クスクス、まずは質問だけど、この紅魔館に働いている狼とマリア、知ってるわよね？」

「ああ、知ってるぜ」

「当たり前だ」

「クスクス、なら話が早いわね♪あの二人をくっ付けてほしいのよ」

その頼み事に、魔理沙は笑みを浮かべる。

「ちよつと、詳しく聞かせてくれ」

「クスクス、あの二人、仲が良過ぎると思わないかしら？」

「……成る程な」

それだけで夢幸は察した様で、紅茶を飲みながら静観モードに入っていた。

「まあ、確かにあの二人は普通より仲が良いとは思うが……それはマリアの方が人見知りか激しいからだろ？だから、一番長く一緒にいる

狼にくっ付いてるんじゃない……」

「クスクス、それを考慮しても、仲が良過ぎるのよね、私から見たら」

「……だから、くっ付けるって?」

「クスクス、そうよ。やってくれるかしら?」

「別に良いが、報酬とかは?」

魔理沙がそう聞くと、レティシアは指を鳴らす。

すると、一つの本がその場に現れる。

「?……!?!?こ、これ……」

「クスクス、魔道書よ。といっても、これはあくまで一つの例よ」

そう言って手を翳すと、その本が消えた。

「あ!魔道書が……」

「クスクス、私からの報酬は、貴方が望む事を、一つだけ、叶えてあげる。……といっても、不老不死とかは自力で頑張っつてとしか言えないけれどね」

レティシアは、自分から魔理沙を不老不死にするつもりはないため、そんな制約を他にも幾つか設けた。

「クスクス、これでどうかしら?」

「……それ、本当に約束、守ってくれるんだろうな?」

「クスクス、悪魔はね、約束や契約には煩いのよ?」

魔理沙から投げかけられた言葉に、レティシアはそう返す。

それで魔理沙はその頼みを聞くことにした。

それと同時に、壁に何かが当たって崩壊する音が聞こえ、其方に顔を向けると、光冥と絶月が其処で倒れていた。

それを見て咲夜は直ぐに光冥に近寄り、其処にやって来た朱鳥もそれに気付いて、絶月の側に走って、状態を見る。

そんな二人から離れた場所で、歩は嬉しそうにガッツポーズをしてから寄って来た。

「なあ?俺が戦ってる間、何を話してたんだ?」

歩からのその問いに、魔理沙が答えると、歩はそんな二人に応援の言葉を投げかけた後、紅魔館から出て行った。

それを見送ってから、魔理沙と夢幸は狼とマリアをくっ付ける作戦

を考え始めたのだった。

## 第百九十七話

レティシアから頼み事をされた次の日、魔理沙と夢幸は紅魔館へと入ったのだが……。

「なんで、お前らがいるんだ？桔梗、必」

その二人の隣には、どうしてか冥界に住んでる半人半霊の二人、桔梗と必がいた。

「実はね、昨日、歩が来たんだけどね……」

「その時に、あのマリアと狼をくっ付ける作戦をお前らがやるって聞いたんだ」

「彼奴、冥界まで行ったのかよ……」

魔理沙はそう言いながらも桔梗達がいる理由に納得し、二人を加えて先ずは如何するかの話をする事にした。

「まず第一に、あの二人がお互いを如何思ってるかの確認からするべきだよな、やっぱり」

「そうだね。なら、やっぱり同性同士の方が話しやすいだろうから、私と魔理沙がマリアに話を聞いてみよう！」

「なら、俺と夢幸は狼だな！」

「其処から如何するかは、また話し合って決めるって事で良いよな？」

「……説得する方が良いだろう」

「よし！なら、説得で！」

そんな話し合いを終えてから分かれ、自分達の目的の相手を探す事にした。

\*\*\*

魔理沙と桔梗が紅魔館の中を歩いて探していると、雪華とマリア、そして二人は見た事がない人物が話をしているのが見えた。

その人物は白に近い薄黄色で、タンポポが描かれた着物を着た女性。

その女性とマリアが話している内容はわからないが、表情を見ると、どうやら話が盛り上がっているようだ。

それを見て少しだけ待とうと思っただけ待機している二人に雪華は気



付いた。

「二人とも、話は一旦中止だ」

「え？」

「多分、マリアに用があるお客さんだよ」

「え？」

マリアは不思議そうな顔で魔理沙達がいる方を向くと、二人の組み合わせを見て、一層不思議に思い、首を傾げていた。

\*\*\*

雪華と話していた女性の織姫が帰つたのを見た後、魔理沙と桔梗はマリアの部屋に訪れた。

その部屋はとても女の子らしい部屋で、ピンクのふかふかベット、その上には熊や兎などの動物達の人形が置かれ、部屋の真ん中にある木のテーブルには自分用の白いティーセット、窓の近くには本棚がある。その窓にあるカーテンもまた、無地のピンクと白い花が描かれている。

ある程度その部屋を観察して、マリアに許可を貰って椅子に座ると、マリアは三人分の紅茶を淹れ始めた。

「あ、あの……くおんから貰った薔薇で作った、ローズティー、どうぞ」マリアはそう言つて二人の方に紅茶を滑らせるように移動させる。

流星に此処で紅茶をこぼす事は無かった。

魔理沙はまず其処に安堵すると、話の本題を振る事にした。

「なあ？マリア。一つ質問いいか？」

「？良いよ」

「なら、聞くが……お前、狼の事をどう思ってるんだ？」

「狼のこと？」

魔理沙からの質問にマリアはキョトンとした顔で首を傾げる。

「そう、狼の事。教えて欲しいんだけど……」

桔梗もそう言つと、マリアは花が咲いたような笑顔で語り出した。

「えっとね！狼はね、とってもカッコ良いんだよ！あのね！あのね！この前もね、私が本を沢山落としちゃった時も抱きしめるようにして守ってくれてね！狼の方が痛かったはずなのに、『大丈夫か？』って、

私の心配をしてくれる程に優しいんだ！それからね！私が転けそうな時、隣にいてくれる時は何時も助けてくれて！それで……」

「も、もう良いぜ。十分に分かったから」

マリアの狼自慢がまだまだ続くのだと悟った魔理沙は直ぐに話を戻す。

「つまり、マリアは狼の事が好きなんだよな？」

「うん！大好き！」

とても綺麗な笑顔でそう言うが、しかし魔理沙と桔梗は分かった。

この『大好き』の意味が、『LOVE』の方ではなく、『LIKE』の方であると。

「……えっと、マリアは此処に来るまで狼と何してきたの？」

桔梗のその質問に、マリアはまた嬉しそうに答えた。

「えっとね！一緒にデートしてくれたり、寝てくれたり、お風呂も入って、私が眠れない時は読み聞かせもしてくれたり、手を繋いでくれたり、お話もしてくれたり、泣いてる時は優しく抱き締めてくれたり、頭を撫でてくれたり……」

「それで何で付き合ってるの（んだよ）!?!」

「え!?!」

魔理沙と桔梗からのそんなツッコミに、マリアは驚いた顔をした。

「え、えっと……普通の事じゃ、ないの？」

「普通じゃないからな!?!まず一番最初に聞くけど、デートしてるのかお前ら!?!」

「う、うん、一緒に出掛けて、欲しいものを買ってくれて、一緒に遊んで、ピクニックに行って……」

「本当のデートじゃないかそれ!?!」

「ふ、普通の事だよ？皆んな、してないの……?」

マリアが不安そうにそう聞くと、魔理沙と桔梗は勢いよく頭を縦に振った。

「で、でも、私と狼はいつもしてる事だよ……?」

「何時もしてるのかよ……」

「どうしてこれで付き合ってるのよ……」

マリアの答えに、魔理沙と桔梗は頭を抱え始める。

「……なあ？桔梗」

「……なに？魔理沙」

「……私の人生の中で、これが一番、難解な壁な気がしてきた」

「……奇遇だね。私も、そんな気がしてきたよ」

二人はそう言うと、同時に溜息を吐く。

そんな二人を、マリアは心配そうに見つめているのだった。

## 第百九十八話

魔理沙と桔梗は、今初めてマリアの鈍感さを体験し、精神的に疲れきっていた。

その証拠に、二人して机に突っ伏している。

「え、えっと……ご、ごめんなさい?」

「いや、謝らなくて良いから……寧ろ、謝ってほしいのは別のやつだから」

この事を教えてくれなかったレイシシアに少しだけ怒りたくなつたが、きつと怒ってもどこ吹く風で聞き流すだろうと予測し、溜息を吐いただけに終わらせた魔理沙。

そして、体を起こしてから、説得を始めた。

「なあ?マリアがどれだけ狼の事が好きなのかは分かったけど……狼の事、『LOVE』の意味で好きなのか?」

「?ラブ……『LOVE』?えっと……好き、だよ?大好き……違うの?」

マリアが困惑の表情で聞き返してきたのを、今度は桔梗が返す。

「えっとね、違うよ。『LIKE』は友人や家族としての『好き』だけど、『LOVE』は恋人、恋愛としての好きなんだよ。ねえ?マリア。貴女はどっち?」

そうマリアに聞くと、マリアは悩み始めた。

「……………どっちの…………」

そうして約十分間、たつぷり悩んだ結果、いきなり泣き始めたマリア。

それに驚いた魔理沙と桔梗に、マリアは泣きながら言う。

「うえくん!分かんないよ!魔理沙!桔梗!」

「お、落ち着けて……ゆっくり、ゆっくり考えれば良いから……な?」

マリアを落ち着かせるために魔理沙はそう言うが、マリアはなかなか泣き止まない。

「うう……だつてえ……!」

「マリア……ねえ？貴女の本当の気持ちはどう？」

桔梗が落ち着いた声でそう問い掛けると、そのお陰か、マリアも少し落ち着きを取り戻した状態で返した。

「えっと……好き、大好き……狼のこと……」

「そう……ねえ？マリア。私達はね、マリアと狼に、恋人同士になつてほしいなつて、思つてるの」

「……恋人同士？」

「そうだぜ！そうすれば、一緒にいられるしな！」

「そう。ずつとね」

桔梗と魔理沙が笑顔で言うのと、マリアは涙目でありながらもその目を真っ直ぐに見返して言う。

「……でも、狼はずつと一緒に来てくれるつて、言つてくれたよ？ずつと側にいるつて……」

それに魔理沙は苦笑を浮かべた。

「あのなく、それは『従者』としてだろ？私達から見たら、それは普通に見えて少し違うんだ。お前達の関係つて」

「そうね。似てる関係で言えば、永久と妖夢ね」

「永久と妖夢が、私と狼の関係？」

それを言われてまた悩み始めたマリア。

「そう。それにね、マリア。恋人同士になるとね、相手から離れなくなるの。だから、マリア。狼の事が大好きなら、私達は付き合つてほしいつて、思つてるの」

「……うん」

マリアはそれに頷く。

それを見て、魔理沙と桔梗はお互いに笑顔を向ける。

……が

「……でも、恋人同士つて、何をすれば良いの？」

まだまだ、問題は山積みだった。

\*\*\*

あの後から時間が経ち、既に時刻は夕方となつていた。

マリアに説得をしていた魔理沙と桔梗は清々しい笑顔を浮かべて

いたが、どこか疲れている様に感じられた。

その反対に、夢幸と必は全く疲れた様子が無く、マリアの説得よりも楽に終わったのだと分かる。

「はあ、本当に疲れたぜ……まさか、キスすらしてたとはな……」

「まあ、そのキスも『挨拶』の意味らしいから、キスには含まれないでしよ……多分」

魔理沙と桔梗は互いに一度顔を見合わせ、お互いに深い溜息を吐いた。

「お疲れさん。相手古摺ったみたいだな」

必が桔梗に労いの言葉を投げ掛けて直ぐ、マリアが部屋から出て来た。

それを見て、魔理沙達は直ぐに壁に隠れて、マリアの後を追った。

「……なあ？尾行する意味、あるのか？」

「あるぜ！成功するかどうか、気になるじゃないか！」

「ふん、成功は必ずする」

「それでも気になるのよ」

そんな風にひそひそ声で話していると、マリアが狼を見つけ、走って近寄る。

狼もそれに気付き、マリアに注意した。

「マリア、走ると転ぶ……」

そんな注意をした直後、マリアは本当に転けてしまい、倒れそうになる。

それを狼は素早く受け止め、マリアを心配そうに見つめた。

「マリア、大丈夫か？」

その狼の声に、マリアは耳まで赤くさせる。

それだけで、緊張している事、狼を意識している事が伺えた。

「だ、大丈夫！」

「そうか。走ると転ぶから、あまり走ったらダメだぞ？」

「わ、わかった！」

マリアがそう言うと、狼は抱き締めている今の態勢を解こうとするが、マリアはその腕を掴んで止めさせた。

それを見て、魔理沙と桔梗は自分達の努力が報われていると実感出来、嬉しそうに笑顔を浮かべて様子を見続けた。

「……マリア、どうした？何か用があるのか？」

対して、狼は未だ抱き締めている態勢にも関わらず、何処も焦った様子がなく、マリアに落ち着いた声でそう問い掛ける。

それにマリアは少しの寂しさを感じながらも、口を開いた。

「あ、あのね！狼！その……えっと……」

そして、一番の要件を言おうとしたマリアだが、緊張のし過ぎで言葉が出てこない。

それを察した狼は、マリアにある提案をする。

「……マリア、何処かに一緒に出掛けるか」

「！デート？」

「そうだ。デートだ」

その言葉を聞き、魔理沙は頭を抱えながら小さな声で呟いた。

「デートって……絶対意味違うだろ……」

ただ、小さな声だったために、それはマリアには届かず、二人は何処かへと移動し始めた。

その際、狼はマリアの後ろで二人を覗き見していた魔理沙達をちらりと一瞥すると、そのまま歩いて行った。

「……あく、やっぱり暴露してたか」

「当たり前だ。犬は嗅覚、聴覚共に人よりも鋭い。俺達の話など、全部筒抜けだったはずだ」

「あく……となると、これは尾行はやめた方が良くもな。近くにいたら暴露するだろうし」

「だね。結果はまた今度、マリアにでも聞こっか」

桔梗の提案にその場の全員が賛成し、その日は元の場所へと帰って行った。

\*\*\*

魔理沙は夢幸と帰ってる道中、狼との説得の様子を夢幸に聞き始めた。

「なあ？そっちはどんな風な説得をしたんだ？」

「簡単なことだ。あの執事は自分の気持ち、あのメイドの気持ちに気付けていた。だから、その気持ちに伝えてやれと言ったんだ……あの半霊が」

「必が言ったのか……というか、狼の奴、全部気付いてたのかよ……」  
「ああ。ただ最後に、『応えはするが、それはマリアの様子を見てから決める』と言っていたからな」

「あ、だからあの時、『成功は必ずする』って言ったのか……」  
「そう言うことだ」

それで魔理沙は納得し、マリアと狼の結果も知れて、一安心してその夜は眠りについた。

その翌日、一応マリアに結果を聞き、やはり付き合うこととなった事を知り、レティシアから報酬の魔導書を貰えて、とても嬉しそうにしている魔理沙が紅魔館で見られたのだった。



## 第百九十九話

季節が夏へと変わったこの日、魔理沙は拝殿の中で探し物をしていった。

外では葵が幸多と掃除をし、それを近くから鬼灯が見ており、賽銭箱の前には光の三妖精がいるのにも気付いていたが、それでも探し物を止める様子がない。

すると、霊夢が葵と話す声が聞こえてきた。

「あら、葵。いつも有難う」

「いえ、仕事ですから」

「あ、そうだ。ねえ？歩が今どうしてるとか、聞いて無い？」

「歩さんですか？……そういえば、この前、鈴仙さんから雷羅さんと戦って歩さんが勝ったという話を聞きましたよ？」

「あ、そうなの？順調みたいね」

「そうみたいですわ……」

其処で話が途切れると、今度は三妖精と話す声が魔理沙の耳に入ってきた。

「妖精が参拝なんて、どういう風の吹き回しかしら」

「神社で祈ればなんでも願いが叶うって聞いて」

「涼しい夜が欲しい」

「涼しい昼が欲しい」

「あ、あはは……」

三人の妖精の答えに葵が苦笑した声が聞こえてきた。

そんな三妖精に霊夢と鬼灯が溜息を吐くと、鬼灯が話しました。

「神様はそんな無尽蔵に願いを叶えないぞ。同じ神様である私からの言葉だ。あと、ここに神様は宿っていない」

「一言余計よ。でも、鬼灯の言う通り、ただ祈ってるだけで願いが叶うなんて、そんな虫のいい話があるわけ無いし」

鬼灯の言葉に続いて霊夢が言うと、三人はお互いに顔を見合わせた。

そして、蟬の声が鳴いている中、代表して金髪縦ロールで帽子を

被った妖精『ルナチャイルド』が質問した。

「そういえば、その箱って何か意味があるのですか？」

これには幸多と魔理沙以外の三人がまるで芸人の様に転けた。

「え、えっとですね？その箱は神様とお話するための大切なものなんです」

「え？狐さんも神様だよ？」

「確かに日常会話程度なら話す事もするが、大事な話に関しては賽銭箱に賽銭を入れないと聞かないさ」

「そうなんだ〜」

幸多がそれに納得していると、今度はルナの隣にいた『サニーミルク』が質問した。

「神様って、神社に住んでいるんですよね？」

「一応そうね。あんた達には見えないだろうけど」

「あの、見えてますよ？」

「鬼灯は姿を見せてんのよ」

其処で魔理沙は探し物を止め、扉を開けて出様とすると、三妖精が気づき、警戒心を剥き出しにした。

そんな三妖精の様子に気づき、霊夢、葵、鬼灯、幸多が拜殿の方に顔を向ける。

そんな様子を全く気にせず、魔理沙は扉を開けて、元気に挨拶をした。

「よっー！」

そんな魔理沙に、霊夢、葵、鬼灯が再度ズッコケたのは言うまでも無い。

\*\*\*

その日の夜、魔理沙は集められるだけのメンバーを博麗神社に集め、肝試しに参加する人達を眺める。

「さて、こんなもんか？暇な奴は」

「こんなもんだろ、暇な奴は」

魔理沙の問いに雪華が楽しそうな顔で答えると、妖夢が周りの全員の様子に気づき、疑問の声を上げる。

「?皆さん、その荷物は……?」

「肝試しやるんだろ?」

「よね?」

「ええ、そう聞いたのですが……もしかして、皆んなお化け役をやるつもりですか?」

それに対して笑顔で返す魔理沙。

「ああ、肝試しと言ったら脅かす側だろ?」

そんな魔理沙に冷静に指摘するのは夢幸。

「魔理沙、全員が脅かす側だったら、誰が驚かされる側になるんだ?」

その指摘を受けて、もう一度周りを見てから唸るように考えると、ある名案を思い付いた。

「お前がいるじゃん々」

その答えに嫌そうな顔をする妖夢。

「やっぱりそうですか。そんな気もしてたんですよー」

「大丈夫だって!永久も一緒でいいから!」

「あの、私も良いですか?」

魔理沙と妖夢の会話に葵が手を上げながら提案すると、魔理沙は頷くが、心配そうな顔をする。

「だけど、大丈夫なのか?此処はまだ月明かりがあつて明るいが入ると真つ暗闇だぞ?」

「……」

葵はそれを聞いてビクリと震えると、其処に幸多が葵の手を取つた。

「大丈夫だよ!お姉ちゃん!僕もついてるから!」

「幸多君……うん、そうだね。有難う」

幸多の言葉に勇気をもたらした葵は幸多の頭を撫でると、幸多は嬉しそうに笑う。

「というか、よく幸多の親が許してくれたな?」

魔理沙が葵にそう言うと、葵は苦笑いで答える。

「いえ、実は結構反対されてたみたいで、私も危ないからと参加反対してたんですが……幸多君が泣きながら頼み込んで……」

「親が折れたか」

「そういうことです。私は幸多君の警護役です」

夢幸の言葉に葵は頷く。

それに納得すると、早速魔理沙は肝試しの最終準備を始めるために、全員に声を掛けたのだった。

\*\*\*

全員が博麗神社からいなくなってから数分後、妖夢達は指定されたルートを歩き始めた。

「……」

「大丈夫？お姉ちゃん。怖い？」

「う、うん、大丈夫だよ、幸多君」

幸多が心配そうに葵を心配すると、葵はそれに作り笑いで返す。

実際は確かに怖がっている。この暗闇に。

月は雲隠れしており、光も無い状態。幸多の手の温度が無ければ泣き叫んでいただろう。

「ま、まあ、たかが肝試し。怖いことなんてないわよね」

そんな葵達の前で、妖夢が震える声で強がっており、永久はそんな妖夢を心配そうに見ている。

「……妖夢、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですよ。それに、いざとなればこの楼観剣で……」

「それは流石にやめろ」

永久が注意するその瞬間、

「うらめしや〜」

恐ろしい声が聞こえた。

「ひゃー！」

その声で思わず妖夢は剣を落とし、葵は誰がその声を発したのか見当がついたのか、様子を見守ることにした。

その声の主は木からゆっくりと現れ始める。

「永らく生きてうらめしや……」

「死してなおうらめしい……」

「いざ覚悟ー！」

そんな風に脅かして現れたのは、お化け姿の霊夢と落ち武者の格好をした歩。

それを見た妖夢は大声で叫び、幸多は好奇心旺盛に歩の頭に刺さっていた剣を触っていた。

「あはは！落ち武者なのに矢じゃないー！変なのー！」

「あ、おい、触るなって……っっていうか、幸多、怖くないのか？」

「怖くないよ！歩お兄ちゃん！」

「そ、そうか……」

幸多にあつさりと正体を見破られ、軽くショックを受ける歩を放つたらかし、葵は幸多を連れて妖夢達の後を追って行った。

すると、今度は泣き叫びながら魔女姿の魔理沙と人魂から逃げている妖夢が見えた。

その辺りは如何してか、霧となっていた。

「魔理沙が脅かしてるってことは……」

「……この人魂と霧は夢幸だ」

葵と永久が冷静に見ている間、幸多は魔理沙から帽子を奪って追いかけられていた。

\*\*\*

冷静になれない妖夢を連れて次に進むと、如何してか永久が刀の柄に手を掛けた。

「？永久さん？」

葵の声を聞かずにその状態でいると、急に出てきたのは悪霊姿の光冥。

「うらめしや〜！」

「キヤアアアア！」

妖夢がまた泣きながら叫ぶと、光冥はそのまま妖夢を襲わず、永久を襲おうとしていた。

それに思わず驚く葵だが、そのまま二人は自身の獲物で受け止めあっていた。

「どうですか？腰が抜けるぐらい怖がってくれました？」

「お前に怖がるなんて、そんな日が来るわけないだろ？女顔」

「あつはっは、良いでしょう。望み通り、切り刻んであげましょう！」  
「やれるものならやってみろ！」

永久と光冥はそう言うと、ナイフと剣で遂に戦い始めてしまった。  
そんな騒ぎに咲夜も気付き、草陰からミイラ男ならぬミイラ女状態で出てきた。

「光冥！やめて！」

そんな咲夜の姿を見て、怖がりの妖夢が叫ばないわけもなく、大きな声で叫んでいた。

「お二人とも！やめて下さい！」

「お姉ちゃん……」

葵は止めるように叫び、幸多は怖がってそんな葵の服の裾を震える小さな手で強く握りしめている。

しかし、そんなのは今の二人に見えるはずもなく、戦闘は止まらなかった。

それに流石に葵も体が震え始め……。

「……良い加減に……してく下さい！」

葵は怒りの声で叫ぶと、二人を結界の中に閉じ込める。

その二人は結界を壊そうとするが、そんな二人の頭に拳骨を入れる人物が一人。

最初ら変で妖夢達を脅かした歩である。

「お前ら！良い加減にしろ！」

「そうですねよ！子供の前で見つともない喧嘩しないでください！それとも何ですか？子供を泣かせる趣味でもあるのですか!？」

歩と葵が説教をするが、歩の拳骨の威力が強かったのか、光冥は気絶していた。

しかし、永久はその説教を受けて幸多を見ると、幸多はビクリと震え、葵の後ろに震えながら隠れた。

そんな所に現れたのは二人。

吸血鬼の姿をした絶月と、化け猫姿の朱鳥である。

騒ぎに気付き、やって来てみれば光冥と永久が揃っており、何があつたのかを察すると、絶月は光冥の襟首を掴んで黙って引きずって

行った。

朱鳥は震える幸多の姿を見付けると、優しく幸多の頭を撫でてからその後を追って行った。

歩もそれを見てから去って行き、肝試しはそのまま再開となった。

\*\*\*

肝試しを再開した妖夢達だったが、その妖夢が限界となり、降参という形で肝試しを終えることとなった。

最後に妖夢が見たお化けは、ゾンビ姿の必と死神姿の桔梗で、二人の驚かしで限界となった妖夢は全速力で博麗神社へと戻って来て終わった。

その降参であると聞き付けると、お化け役の全員が現れ、魔理沙から「良いものがある」と言われ全員が着替え終わり、皆んなでワイワイしている、其処に妖精三人組が現れた。

「出たー！」

三人の妖精は焦った様子で現れるが、魔理沙は全く気にせずにお酒を飲みながら喋り出す。

「あ、すまんすまん。もう肝試しは終わってたんだ。お前らが隠れていたのか知らなかったもんでな。悪い悪い」

「魔理沙、悪いと思ってませんよね？」

葵がジト目で魔理沙を見るが、それに気付かない魔理沙と妖精。

妖精三人の一人のルナが、焦ったような声で話し出した。

「そ、それより、出たんです！大量にー！」

「で、出たって……何がです？」

妖夢が震えながら問い返すと、青ざめた顔で答えた妖精三人組。

「大量の幽霊がー！」

その後の妖精の説明を簡単に言うと、妖夢を驚かすために隠れていると、雲隠れしていた

月が現れると同時に柳の下にあった石が光、その石を動かしてみると、その下から幽霊の大群が現れたのだという。

それに少しだけ眉を顰める咲夜。

「幽霊って言ったって、こっちも幽霊ですけどね」

「半分幽霊が四人いるけどね」

「でも、神社の近くで幽霊？」

雪華と織姫がそう話す横で、霊夢と歩が何かに気付いた顔をする。「柳の下の石って、人里に向かう道の途中のよね？」

「ああ。俺も旅してるから何度も見てるし、それは間違いないだろ」すると、幽々子が楽しそうな顔で幽霊らしい雰囲気を出しながら会話に混ざる。

「うふふ、幽霊が集まる石なんて決まってるわ。お墓でしょ？素敵なお・は・か」

それを聞いて霊夢も、歩も、そして葵までも首を傾げる。

普通は神社の近くに墓地は置かないのだ。

しかし、魔理沙は何かに気付いたのか、その三人妖精に質問した。「ん？柳の木の下の墓石だって？お前ら、その石を蹴飛ばしてきたのか？」

「あ、はい」

「……何か知ってるのか？魔理沙」

ルカが聞くと、魔理沙はあつけらかんと答える。

「いや、その墓石は私が持ってきたものだ」

その言葉に、霊夢と葵が「え？」と驚いたような声を上げる。

それを気にせずに、魔理沙は説明を始めた。

「いやな？此処に来る前、幽霊が集まる墓石があったんでね。こりや都合がいいと思って神社の近くに置いたんだ」

「……罰当たりが」

魔理沙の説明を聞いて、鬼灯がそう小さく呟く。

普通は墓石を動かすなんて、恐ろしくて出来るものではない。

『都合がいい』って何よ」

霊夢は魔理沙に質問すると、魔理沙は笑みを浮かべて答えた。

「いや、この後出すつもりだったんだがな。幽霊の冷たさを使って西瓜を冷やしていたんだよ。みんなで食べようと思って……」

それを聞いて、みんなが嬉しそうな顔をした。

「幽霊が集まる石の下を埋めておいたんだ。きつと冷えると思って



な」

「幽霊の有効活用ね」

「それを許していいのか……幽々子」

友人である幽々子の樂觀さに、鬼灯は肩を項垂れた。

その後、肝試し参加者で西瓜を掘り出し、冷たい西瓜を幽霊が集まっている柳の下で食べたのだった。

## 第二百話

この日、珍しく魔理沙は神無月神社へと遊びに来ていた。

その神無月神社では、朝から葵が野菜を収穫していた。

「なあ？鬼灯とルカ、想起は何してるんだ？」

魔理沙は木陰から葵に問い掛けると、律儀に返してくれる葵。

「鬼灯は境内の掃除、ルカは洗濯物とか干してくれて、想起さんは魚釣りをしますよ」

「いつもそんな風に役割担当してるよなく、ここ。葵がしろって言ったのか？」

「ううん、違うよ。最初の頃は私一人でやってたんだけど、自然と鬼灯、ルカ、想起さんが手伝ってくれるようになったんです。……最初の頃はしなくて良いと言ったのですが……」

「大体分かった。彼奴ら、強引にして結局、葵が折れたんだろ？」  
「うん」

葵は其処で一つ溜息を吐くが、しかし、何処か嬉しそうだった。  
手伝ってくれる人がいるのが嬉しいようだ。

そこで収穫を再開すると、葵がふと思ったことを魔理沙に聞いた。

「そういえば、今、歩さんって何処で何してるんでしょうね？」

そんな事を聞くと、答えるのは勿論、魔理沙。

「あく、なんか聞いた話だと、奈落と天人の……誰だっけ？あの、鎖をぐるぐる巻いた奴」

「不知火さん？」

「そう、不知火。そいつと戦ったらしいぞ。彼奴、なにやってんだか」

「あはは……」

魔理沙に質問した方の葵はその返答を聞いて思わず苦笑いを浮かべる。

その後にもたまた収穫に戻ろうとしたが、それを遮ったのは魔理沙。

「なあ、一つ聞いて良いか？」

「？何？」

葵は魔理沙に顔を向けてみれば、何処か真面目な顔をした魔理沙がそこにいた。

「お前、どうして未だに家庭菜園してるんだ？……もしかして、まだ……」

魔理沙の心配を含んだ声音に、葵は笑みを浮かべる。

「違うよ。確かに、最初の頃は人里に降りないようにと思ってたけど野菜を作り始めたけど……」

そう言つて、春菊を手に取り、優しい目をしながら答えた。

「今は、楽しいからしてるの。それに、折角此処まで育てたのに、途中で放つたからすなんて……出来ないよ」

「……そっか」

魔理沙はそれを聞くと、笑顔を浮かべた。

葵は言い終えると、今度こそ収穫を始めた。

魔理沙はそれを見ると、空を見上げた。

葵の髪と目の色と同じ、空色の天を。

「……葵も変わってきたんだな」

そう呟く魔理沙の頭に浮かんだのは、初めて会った時の事。

あの時はお互い敵同士だったが、戦い終わった後、葵はすぐ魔理沙とその師匠の魅魔の回復を始めた。

それに驚いた魔理沙と魅魔は少し硬直してしまつたが、怪我が治ると、お礼を言つて博麗神社から離れた。

その魅魔から離れ、今度は友人として博麗神社へと訪れれば、快く向かい入れ、笑顔を浮かべて喜んでくれた葵。

しかし、だからこそ不満もある。

ルカ達のように葵を助ける事が出来ない事にたいして。

一番の不満は、普通に無茶する葵に対して。

しかし、それを魔理沙は言わない。

その事を伝えるのは、葵の『相棒』の役目だと考えているからだ。  
「……なら」

魔理沙は其処で木陰から飛び出し、無理矢理にも葵の手伝いを始めたのだった。

## 神霊廟

### 第二百一話

時間が経ち、日が何日も過ぎた幻想郷には、また春が来た。彼方此方で鼻が咲き誇り、とても綺麗な世界となっていた。

――！その世界に、『神霊』が漂っていなければだが。

「……最近、多いな」

今現在、神無月神社に泊まり込んでいる異世界の幻想郷の住人であり、想起と早苗と同じ外の世界出身の一人、一夢命は空を見ながら縁側でお茶を飲んでいると、其処を通りかかったルカ。

「……お前、こんな所にいたのか」

「ああ……どこに行くんだ？」

「……お前には関係ない」

ルカはそれだけ言うときさつきと去っていく。

ミコトはルカに未だに警戒されている事に嘆息すると、鬼灯がやって来た。

「彼奴は未だにお前を警戒しているのか……」

「ああ……仕方ない事だが」

「……自分が嫌われる存在だから、とか思っていないだろうか？」

「大丈夫だ。それは思っていない」

「なら良い」

鬼灯はそう言うと、縁側にある桜に目を向けた。

その桜は永久的に咲き続ける桜だが、やはり花は散っている。

それを嫌そうな顔で見ているミコトに鬼灯は顔を向けずにまに聞く。

「桜は嫌いか？」

「ああ」

「どうしてか聞いても良いか？」

「……鬼灯、豊穰神としてのお前に一つ聞きたい」

「……なんだ？」

ミコトからそう言われ、鬼灯の雰囲気は『神聖』なものへと早変わりする。

それをミコトも感じながらも質問を投げかける。

「花に取つての『死』はなんだと思う？」

「花に取つての『死』は枯れる事だ」

「……まあ、そうだな」

ミコトはそれが当然という風にとるが、今度は自分の考えを言う。

「俺の考えは、『散る』時が『死』だと思ってるんだ」

「……なるほど。貴様らしいな」

鬼灯はそれだけでミコトの考えを理解する。

ミコトが『死』ぬ方が『綺麗』なのが許せない考えなど、すべてお見通しであった。

「……人の考えは様々だ。それは神とて同じ。皆が皆、同意する考えなどありはしない。だからこそ、その考えもアリだと我は思うぞ」

「……そうか」

ミコトは鬼灯の言葉にそれだけを返すと、鬼灯を見やる。

その目は真摯にミコトを見ており、真面目に答えたのがうかがえた。

「……『命』を理解出来るミコトにとっては二度目の確認では無く、顔を見るための行為だが。」

「それにしても、口調が変わったな」

「『豊穰神』としてと言っただろ。普段の『私』ではなく」

「両方、鬼灯だ」

「そうだな」

鬼灯はそれだけ言うとミコトを見やる。

そのミコトは鬼灯から見たら、どこか眠そうに見えた。

「なんだ？眠いのか？」

「この陽気だからな……」

「なるほど……あっちの霊夢に殺られそうだが……まあ良い。その時はその時だ」

鬼灯はそう言うと、ミコトの後ろに回り、座った。

それに首をかしげるミコトに対して鬼灯は言う。

「今回だけだ。私の尻尾を貸してやるからそれで眠れば良い。お礼は勿論、稲荷寿司だ」

「数は？」

「三十個お願いしよう」

「……ありがとう」

「どういたしましてだ」

ミコトはお礼を言うと、鬼灯の尻尾に顔を埋めた。

その尻尾はどこか暖かく、ミコトは眠りについた。

鬼灯はそのミコトを、母親のように優しい目で見っていたのだった。

\*\*\*

葵は博麗神社へと来ると、早速、霊夢と話し合っていた。

その場には他にも魔理沙、夢幸、想起、早苗がいる。

「霊夢、これはどう考えても異変です！直ぐに解決に行きましょう！」

「そうだぜ！霊夢！早く行こうぜ！」

魔理沙と葵が霊夢にそう言うと、霊夢は頷いた。

「そうね……明らかにこの『神霊』の数はおかしいわね……面倒だけど仕方ない。異変解決に乗り出しましょう」

霊夢の言葉に葵達は立ち上がる。

その話し合いをしていた部屋の扉を勢いよく開く音が聞こえた。

直ぐに入口の方に目を向けると、其処には笑顔の歩がいた。

「！歩！」

「よう！霊夢！約束通り、無事に帰って来たぞ！」

歩は元気よく笑顔で、そう部屋に響かせるように言い、帰って来た歩に思わず霊夢は抱き着いた。

その数分後、霊夢からの説明を受け、異変解決組に入った。

その異変解決はどうしてか夜出発となり、昼間の間は十全な準備をする事になったのだった。

## 第二百二話

葵が神社へと帰ってきた後、異変解決は夜だと聞かされたルカ達は勿論、葵を心配した。

それに葵は作り笑いで返したあと、人里へと降りていった。それから時間が経ち、妖怪の時間となった。

神無月神社の住人全員準備をし終えたが、その中にミコトが何の違和感もなく入っていた。

「……本当に、すみません。ついて来ていただいて」

「いや、構わない。葵がどんな風に解決しているのか気になってたしな」

「……そう、ですか」

葵はそれに作り笑いで返すと、先に飛んだ。

それをミコトは見つめると、鬼灯に顔を向けた。

「……一つ聞いていいか」

「……なんだ？」

「どうして、葵は怯えている？」

そのミコトからの質問は当然くるだろうと予想していた鬼灯は、考えることなく答える。

「彼奴の『トラウマ』だ。真っ暗闇が苦手なんだ。だから、彼奴の部屋は月の光が当たりやすい部屋になってるだろ？」

「……確かに」

「というか、それは命から感じられるんじゃないのか？」

「そうだが、ちよつと気になったのさ」

「そうか」

二人がそんな会話をしている間に既にルカと想起も飛んでおり、あとはミコトと鬼灯のみとなっていた。

「……私達もいくぞ」

「……ああ」

「……ミコト」

そうして飛ばうとしたミコトを、しかしそうやって鬼灯が止める。

止められたミコトは鬼灯の方に顔を向けてみると、とても真剣な顔をした鬼灯がそこにいた。

「……葵の事を、頼む。一番信頼できる者が隣にいた方が安心出来るだろう」

「……それはこっちの霊夢やルカ、それに鬼灯や想起の方が……」

「頼む」

鬼灯が頭を下げてミコトに頼むと、ミコトは慌てた。

まさか、神様から、いや鬼灯から頭を下げられるとは思っていなかったのだ。

「あ、頭を上げてくれ。分かった。異変の間は側にいるから……」

「……ありがとう」

鬼灯がお礼を言ったあと、二人は今度こそ飛び立ち、集合場所である博麗神社へと向かって行った。

\*\*\*

博麗神社に全員が集まると、そのまま異変解決組御一行は飛び去っていく。

「それにしても……歩く、昼頃には聞けなかったけど、お前、帰ってくる前までは何処に行ってたんだ？」

その飛んでいる最中、魔理沙が歩にそう質問すると、歩は笑顔で答えた。

「地霊殿と命蓮寺だ！地霊殿で角と戦って、命蓮寺では凱火と戦ったんだ！……だけど」

「？だけど？何かあったのか？」

魔理沙が歩の困ったような表情を見て聞くと、葉から貰ったカードの一枚を魔理沙に見せた。

そのカードは未だ空白で、それが意味するところはつまり、まだ『完全』には習得出来ていないということ。

「おい……それで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。問題ない」

「歩さん、それ外の世界だと『フラグ』って言うんだよ」

「それも、『死亡フラグ』です……」



「大丈夫だ！そんなフラグは折ってやる！」

想起と早苗が歩に外の世界での事を伝えると、歩は自信満々に『折る』と言った。

それを見て、二人は思う。

(確かに……歩さんは普通じゃないからね)

二人のそんな思いは、歩には暴露していなかった。

その後ろでは、霊夢が心配そうに葵を見ていた。

「……葵、大丈夫？」

「……うん、大丈夫だよ。霊夢」

霊夢が葵にそう声を掛けるが、しかし葵はやはり作り笑いで返すだけ。

ミコトはそんな葵を見ると、葵の横に並び、その手を握る。

「!?」

葵はまるで予想出来なかったように驚いた顔をミコトに向けるが、

ミコトはそれは気にしていなかった。

気にしていたのは別のところである。

握ったその手が、密かに震えているのだ。

「……怖いか？葵」

「……大丈夫です。確かに、怖いですけど……一人じゃないですから……」

葵はもう何度目かもわからない作り笑いで答えるが、ミコトはそれに悲しそうな目で見つめた。

「……俺は、そんなに信用ならないか？」

「!?ち、違います！信用してます！」

「なら、なんで……そんな作り笑いを浮かべてる？」

「それは……」

葵はそれに答えられずにいた。

理由など、葵も、そして葵によく似たミコトも分かっている。

ただ、相手に心配を掛けたくないだけなのだ。

葵はそれを口に出さず、顔を俯かせた。

ミコトは覗き込むように葵の顔を見ると、口を開いた。

「……葵。本当に信用してくれてるなら……ちゃんと気持ちを書いてくれ。俺は命から感じ取れるけど、霊夢は違うだろ？」

それを聞いた葵は一度ミコトの目を見る。

それは同時にミコトも葵の目を見る事ができる事になるのだが、その目には涙が溜まっていた。

「……葵、大丈夫だ。安心していい」

「葵、本当に大丈夫？」

「……」

左にいる霊夢が声を掛けてきたため其方に顔を向けてみれば、其処には霊夢と同じく心配そうな顔をしているルカがいた。

葵はその二人を見た後、一度周りを見渡し、深呼吸をする。

その一連を見ていたミコトは直ぐに感じ取ることができた。

命からはまだ恐怖は残っていたが、しかし手はすでに震えていない。

それなりに安心できた証拠でもある。

「ごめんね、二人とも。心配させて。ミコトさんにも……心配させてすみません」

「大丈夫だ。気にしなくていい」

「ミコトと同じだ。気にしなくても大丈夫だ」

「ええ！そうね！大丈夫！……もう、こういう事はちゃんと言う。誤魔化さないの。じゃないと、余計に心配になるんだから……」

「うん……ありがとう、霊夢」

葵が笑顔で霊夢を見れば、霊夢もまた笑顔で返す。

それを見てミコトはもう大丈夫だと判断したのか離れようとするが、しかし葵が離さなかった。

「？葵？」

「……その、もうちょっと、お願いしても良いですか？……まだ、その……」

葵が不安そうな目でミコトを見つめると、それで理解したのかミコトは離れるのを止めた。

それに安心した葵はホッと吐息を吐く。

(……兄妹がいたら……こんな感じだったのかな?)  
そんな事を考えながら。

\*\*\*

霊夢の勘を頼りに、まず最初に来たのは冥界。

「いや、なんで冥界なんですか?また肝試しでもするのですか?」

「いや、しないから。というか、未だに冥界は苦手なわけ?」

「霊夢さんとは違いますから!そんなしよっちゅう来ませんし、まして此処は死者の園のような場所ですよ?呪われたりしたら……」

「ふくん……で?」

「……もう、良いです」

早苗はいつも通りの霊夢の反応に少し項垂れる。

何時迄も早苗はこの中の『常識』である。

その会話を終わると、直ぐに階段を登り、白玉楼に黙って侵入する  
霊夢。

すると、その霊夢の頭を狙った弾幕が来たが、それを葵が結界で防ぐ。

霊夢は霊夢で狙ってきた張本人である妖夢を睨むと、妖夢は剣を構え、霊夢達に対して敵意剥き出しのまま話しかける。

「侵入者!此処は白玉楼!冥界だ!一体なんの用があつて……」

「妖夢、落ち着いて周りを見ろ」

どうやら周りがちゃんと見えていないらしい妖夢に鬼灯が呆れ混じりに話かけると、その声で鬼灯がいる事を察し、言われた通りに周りを見た。

「……!ご、ごめんなさい!まさか、貴方達だったとは……」

「夢想封印一回で許してあげる」

「ええ!?!」

「霊夢!」

「冗談よ、冗談」

葵が霊夢を叱るような声を上げるが、霊夢はまるで風のように受け流す。

言葉は『冗談』といっているが、しかし霊夢の事を知っている者な

ら分かる。

さつきのは葵が間に入らなければ本当に撃っていたことを。

「それで、此処になんの御用でしょう?」

「ああ。実は幽々子に聞きたいことがあるんだ……入ってもいいか?」

鬼灯が妖夢にそう問いかけると、妖夢はそれに頷いて返し、全員を中へと入れた。

\*\*\*

「……此処にこんな風に集まったのはいつでしたっけ?」

葵がふと、前にもこんな感じで異変解決のために白玉楼に来た覚えがあると、全員にそう問いかけた。

しかし、その時のことをまずミコトは知らないし、その時に会ってすらいなかった歩も夢幸も、想起も早苗も知るはずがない。

その時のことに覚えがある一人の魔理沙が答えた。

「あゝ……!あの時の異変だ!ほら、いろんな季節の花が咲き乱れた異変!」

「……ああ。そんなのも有ったわね……」

「あの時か……」

「……確かに、あの時以来ですね。異変解決のために来たのは」

その時の事を思い出すと同時に、葵は死んだ母との事も思い出す。

暫く思い耽っていると、永久が部屋の中に入ってきた。

その後ろから入って来たのは、妖夢と、一番に用事がある幽々子。

「こんばんは、こんな綺麗な三日月が浮かんでいるのに月見もさせたくないなんて、悲しいわね」

「お前は365日中、月見をしてるだろ」

「あら?月見酒もしてるわよ?」

「殆どは団子を食べてるだろ」

「幽霊はお腹が常人より空きやすいのよ。困るわね」

「この屋敷の食費と妖夢達がな」

幽々子と鬼灯のそんな掛け合いを、葵は楽しそうに笑って見ている。

その掛け合いが一通り終わると、幽々子は背を正して座り、扇を開いて口元を隠しながら言った。

「それで？私に何の用？」

「この神霊大量発生について、お前の意見を聞きに来た」

「幽霊だから？」

「冥界の管理人であり亡霊だからだ」

幽々子は鬼灯の答えを聞いて少しだけ考える素振りを見せると、口を開く。

「そうね。ちゃんとした理由までは私も分からないけど、最近、新入りが出来たでしょ？其処が怪しいと思うわよ」

「新入り？」

「命蓮寺の皆さんの事ですかね？」

「いや……命蓮寺の連中は関係ないだろう」

「……」

其処で全員が一度思考するが、それを断ち切ったのはやはりと言うべきか霊夢だった。

「あくもう！ウジウジ考えるのは性に合わないわ！さっさと行動する！ほら、行くわよ！」

霊夢はいきなり立ち上がると、全員を立たせるように腕を掴んだりした。

「ほら！全員立つ！早く！素早く！」

「ちよっ!? 霊夢!？」

「分かった！分かったから！」

「俺に指示を出すな」

「なら立つ！早く！私はさっさと終わらせて寝たいのよ！」

「え、なら何で夜に……」

「お茶飲むのに忙しかった」

「ダメだこの巫女……」

そんな会話をした後ろで、ミコトは何処か暖かい目を向けていた。

「? どうしました? ミコトさん」

「いや……こっちの皆さんも賑やかだなと思ってな」

「……いつもこうですよ。だから、とても楽しいです！」

葵は笑顔を浮かべてミコトに言うと、ミコトも笑顔を向ける。

それを見ていた妖夢と永久は、お互いに顔を見合わせ、幽々子に向かい合う。

「あの、幽々子様……」

「良いわよ？一緒に行動しても」

「……え」

妖夢と永久は幽々子からの言葉に少し目を見開いた。

まだ何も言っていないかったのに、幽々子は了承した。

既に何を言うか、予想がついていたという事である。

「ふふっ、何年貴方達と一緒にいると思ってるのよ。二人とも、私にとっては掛け替えのない家族で、大切な従者よ。二人の願いは極力聞いわ」

「幽々子様……」

「……ありがとうございます」

妖夢と永久は幽々子に頭を下げると、葵達の輪の中に入ったのだった。

## 第二百三話

冥界で何時ものやり取りを終えた後、直ぐに冥界から出て行った。「……ねえ？なんでシレッと私達の仲間に入ってるわけ？」

霊夢は後ろで仲良く並んで飛んでいる妖夢と永久にジト目を向けながら言うと、妖夢は少し頬を膨らませた。

「何ですか？良いじゃないですか。私達は冥界の管理をしているのですよ？この神霊大量発生している異変で動かないわけにはいきません」

「それだったら私達が代わりに解決してあげるから、帰ったら？」

「それは遠回しに『邪魔』だと言ってませんか？」

「この人数見なさいよ。異変解決するにしても多過ぎよ！」

霊夢がそう叫ぶのを、同じく後ろにいた葵が苦笑しながら見ている。

「でも、人数が多いと直ぐに終わると思うよ？霊夢」

「その駄目巫女がもつと真面目にしたらそれこそ早く終わるのにな」

「誰が駄目巫女ですって？」

「葵でも早苗以外の奴だが？」

「それつまり私の事じゃない！」

ルカの悪態に霊夢は激怒する。

その原因のルカはそれをスルーして前だけを見ている。

それを見ていたミコトは、なんとも言えない顔をしていた。

「?どうしました？ミコトさん」

「いや……いつもこんな感じなのか？」

「そうですね。いつもこんな風に賑やかに移動してますね」

「ルカが悪態をつき、それに霊夢が反応し、此処から本来は葵が止めに入るところだが……」

葵とミコトの間に入ってきた鬼灯が言うと直ぐにその間に入ってくる者がいた。

「まあまあ、二人とも。喧嘩はそこまでだよ？」

ルカと霊夢の間に入ったのは想起。

葵が入れないのに気付いた想起がその代わりに仲裁役を買って出たのだ。

霊夢とルカは一度互いに顔を見合わせると、静かに顔を外に向けた。

それを見ていた外野の反応は様々だった。

魔理沙は楽しんでおり、夢幸と永久は我関せずで無視。早苗と妖夢はホッと安心した様子だった。

「……俺達とは違う道中のやり取りだな」

「そうですね。でも、ミコトさん達もとても賑やかそうだと思いますよ？ 私はい」

葵はミコトの過去を見たからこそその感想を言うと、少しだけ笑みを浮かべるミコト。

「まあだが、ミコトは私達の異変解決方法を見るのは初めてだな。だからこそ、先に言っておく」

「？」

鬼灯は一つ間を空けると、言う。

「この幻想郷の奴らは案外容赦なんてない奴らばかりだ。だからこそ、不憫な奴らも出てくる……」

そう話している間にも命蓮寺が見えてきた。

その門の前には掃き終わったばかりのようで、今から門の中に戻ろうとしている犬耳の様な物が頭にある少女がいる。

それを目にした霊夢はすかさずお札を、ルカは氷を作ると、宣言する。

「霊符『夢想封印』！」

「氷符『氷針』」

そのまま大量の弾幕が何もしていない妖怪少女に当たり、少女は気絶し、門は壊れた。

「れ……霊夢……！ ルカ……！」

葵は叫びながら二人に迫り、叱り始めるが、二人は聞いてない。

「……こんな風に、何の罪もない妖怪がやられるんだ」



鬼灯は頭を片手で抑えながら言う。

「……いや、うちの霊夢も容赦ないからあまり変わらない。ただ、其処にルカも加わるのは知らなかった」

「ただ、納得は出来るだろう？」

「……ああ」

ミコトは頷きながらもルカを見る。

そのルカは葵から叱られたのが少し答えている様子だったが、直ぐに戻った。

能力で少し心を冷やしたのだ。

「まあ、これが私達のいつもの道中だ。……この前の異変の時にはもっと驚くことがあったがな」

この時に鬼灯の頭の中に浮かんだのは聖に頭を下げる夢幸の姿。

暫くは忘れられない光景となると鬼灯は予想する。

「ちよつと。あんた達なにしているの？早く行くわよ」

「ちよつと待つて霊夢。せめて、この人を癒してから……」

「お前は本当に……」

「此奴倒したのは私だけじゃなくてあんたもでしょうが」

ミコトと鬼灯が話してる間、葵達はそんな事をしていたりした。

\*\*\*

妖怪の怪我を治した後、直ぐに移動を始める。

向かっているのは墓地である。

理由は単純に霊夢の勘が告げているからである。

「お前の勘は楽だな」

「うっさい」

そんな会話をしていると、また目の前に妖怪が現れた。

全体的に青色で、舌が出ている傘を持った赤と青のオッドアイの少女、小傘である。

しかし、その少女を知らない霊夢達は勿論、容赦も慈悲もないわけ  
で……。

「なんで今日は邪魔な奴らが多いのかしら？霊符『夢想封印・集』！」  
「本当にな。氷符『氷柱雨』」

「え？ちよつと!？」

問答無用でスペカを撃ち、小傘はその場に倒れて気絶した。

「またですか!？」

葵は再び二人を叱ろうとしたが、その小傘の後ろから別の人物が近づいて来た。

半袖の中華風の服装、暗い藤色の髪を肩辺りまで伸ばしており、ハチンチング帽を被っている。

その顔の前には何かのお札が貼られており、手は両手共に前に突き出している状態のままである。

葵はその顔を見てしまったが、頭を捻る事になった。

相手の過去はつい最近から始まった様で、自分と同じ髪色の女性から此処を守る様に言われている姿が見えたのだが、それ以前の『過去』がない。

それを考えて出た答えは一つ。

「……キョンシーか」

ミコトの呟きに葵は頷く。

「そうみたいですな……『過去』がちゃんとは見れませんでしたから」

「あれ？じゃあ、どこから見たの？」

「この方が青髪の女性から此処を守る様に言われていた辺りからです」

葵はそんな風に説明していると、キョンシーの少女は口を開いた。

「お、お前達、誰だー?」

「誰でもいいでしょ？私達はこの先に用があるのよ。痛い目見たくなかつたら其処どきなさい」

霊夢が答えた直後、少女から殺気が溢れ出す。

「私は此処を守る使命があるんだー。だから、通すわけにはいかないんだー」

「なんでよ?」

「なんでって……此処を守らないといけない気になったからだー」

「……ねえ？誰か、彼奴が言ってる事を理解できた奴いる?」

「いや、全く……」

「……理解出来ないな」

「ふん。元より理解など必要ない。邪魔をするなら倒すだけだ」

夢幸の言葉に霊夢は納得するように頷くと、前に出ようとした。

しかし、それよりも先に前に出たのは鬼灯だった。

「？鬼灯？」

「此処は私が相手をする。最近、戦う事がなかったから運動不足気味なんだ」

「毎朝、剣の素振りをしているのにか？」

「それとこれとは話が別だ」

鬼灯はルカに対してそう言うと、一步前が出る。

「そう言う事だから私が相手をしよう。良いな？キョンシー」

「いつでもかかってこいー」

「そうか……なら、遠慮なく行かせてもらおう」

鬼灯はそう言うと、人型になり、剣を構えてキョンシーを見据える。

こうして、豊穰神とキョンシーの戦いが始まるのだった。

## 第二百四話

鬼灯は愛刀『小狐丸』を構え、相手を見据えていると、相手の方から襲い掛かってきた。

そのキョンシーは弾幕を適当に打ちながら飛び掛かり、鬼灯を殴ろうとする。

といつても、関節が曲がらないようで、腕を伸ばしたままの威力が無さそうなぱんちだが、弾幕はそんななんの計算もされずに撃たれたようで、鬼灯は最小限の動きで裁き、キョンシーからの攻撃も右に避けるとそのまま右足を軸にして一度周り、左足で腹部にカウンターを入れる。

その威力は誰が見ても手を抜いていると分かる。

鬼灯が手を抜く理由として、単純に相手の力量を図るため、最初だけそうする事が多い。

初見の相手には特にそうしており、それでどれだけの實力があるのかをある程度予測するのである。

その蹴られたキョンシーはそのまま2、30m?程飛ばされると、地面に勢いよくダイブした。

が、直ぐに其処から立ち直り、また同じ方法で襲い掛かってきた。

(キョンシーだから考える脳が無いのか?)

鬼灯はそんな風に考えながらもキョンシーが何かしてこないか観察している、そのキョンシーが口を開けて近づいて来た。

「ッ!」

鬼灯はその攻撃の意味を直ぐに理解し、素早くジャンプし避けると、其処を狙ったかのようにスペルを宣言するキョンシー。

「毒爪『ポイズンマーダー』!」

その墓場に紫と青のクナイ型の弾幕が、まるで爪で引っ搔かれた傷跡の様な軌道で撃たれ始める。

それを飛んでいる鬼灯は避けられない、なんて事は無い。

「……私が飛べないと思ったら大違いだ」

鬼灯はそのまま飛び始め、弾幕の隙間を掻い潜り、時間一杯まで避

け続けた。

その後、キヨンシーのスペルが終わると同時に今度は鬼灯がスペルを宣言する。

「災害『豊穰神の怒り』！」

すると、今度は葉の形をした緑の弾幕が周りに飛ばされた。

それはキヨンシーを狙う物と適当に撃たれた弾幕に分かれて飛び交うが、しかしキヨンシーはそれを避けずに突進してきた。

といつても、関節が曲がらないので両足ジャンプのような感じで突進している。

「おい、弾幕ごっこの意味を考えろ……」

鬼灯はそう言うが相手には関係ないようで突進は止まらない。

しかし、次には大量の葉の弾幕に被弾する事となる。

この葉の弾幕はホーミング性能がついており、しかも地面や墓石などの物体に当たれば三つに分裂している。

よく見ればその三つのうちの一つには追尾性能まで付いているのが分かる。

「……あのスペル、やっぱり鬼畜だろ」

「弾幕の量も多いからね……確か、この前何個って言ってましたっけ？ 想起さん」

「えつと……ごめん、覚えてないや。でも、結構沢山あるって言ったのは覚えてるよ」

「量の問題はやっぱり改善すべきだろ。三回分裂したら一個減るからって……本当に彼奴は神か？」

「ま、まあまあ……」

神無月組はそんな会話をしているながらも弾幕ごっこを見ていた。

因みに、この弾幕を見て霊夢が独り言のように呟いた一言がある。

「こんなの、『夢想天生』使ったら終わるじゃない」

この一言にツツコミを入れる者は、残念ながいなかった。

そのスペルも少しすると時間となり、弾幕そのものが消えた。

「ふむ、やっぱりキヨンシーというのは身体が丈夫なんだな……」

鬼灯は砂煙りが晴れた所に立っているキヨンシーを見て言うが、相

手は既にフラフラしており、真面に話せそうにない。

元から真面には話せないが。

キョンシーは鬼灯の話など耳に入らない様で、一つのカードを取り出すと、宣言した。

「回復『ビールバイデザイン』」

「!？」

そのスペルを聞き、驚きの表情を浮かべるのはルカと想起。

それもそうだろう。葵と人生経験豊富な鬼灯は兎も角、この二人は葵以外に回復出来るスペル持ちがいるなど、予想出来ていなかったのだから。

そして、鬼灯は密かに目を細めた。

相手のキョンシーは自分の左右に幽霊を発生させ、青と赤の丸弾を撃ちながら『神霊』を食べているのだ。

別にそれに対して怒っているのではないが、鬼灯は少し疑問に思うことがあった。

そして、それは後ろの想起以外の全員が感じたことでもある。

「……おかしい」

「……そうだな。おかしい」

「え、何が？」

全員思っている疑問を想起は分かっていないので、ミコトが説明をする役目を請け負った。

「相手はキョンシーだ。そのキョンシーは何方かという『神』とは真逆の位置にいる妖怪だ。それが例え『神霊』でも、食べたなら普通は何かしらの障害か何か出るはずなんだが……それが無い」

「え……み、見える範囲以外に出てるんじゃない……」

「いや、『命』からも痛みを感じてる様子は見られない。となると、本当になんの障害も出ていないことになる」

「……もしかして、それが相手の能力？」

「そういうことになるだろうな」

その会話の間にも鬼灯は弾幕を避けていたが、その間ずっとキョンシーは回復をし続けていた。

(……さて、どうしたものか)

鬼灯は今の状況に困っていた。勿論、表情にはおくびにも出していない。

(別にこの状況をなんとかするスペルは一つある……が、もう美しさの欠片もないスペルなんだがな……)

鬼灯が使うかどうか迷っている間にもキョンシーは回復をし続ける。

それを見て、鬼灯は決断した。

「……回復され続けるのは厄介だ。だから、強制的に止めてもらう」  
そうキョンシーに向かって言うと、あるスペルを宣言した。

「吸引『ブラックホール』」

すると、鬼灯の横に少し小さな黒い入り口が出来た。

その入り口を見て少し傾げたキョンシーだったが、その周りにいた『神霊』達はその黒い入り口に吸い込まれ始め、自身も吸い込まれそうになる状態になると驚愕の表情へと変わった。

「悪いな。お前の能力とスペルの併用と同じで、これは私の能力とスペルの併用だ。……もつとも、お前との違いは、このスペルには『美しさ』が欠片もないことだが」

鬼灯はキョンシーを油断なく見据えながらそんな説明をするが、しかしそれはキョンシーに届いておらず、キョンシーの周りの神霊は全て黒い入り口へと吸い込まれてしまった。

そのままキョンシーと鬼灯のスペルはブレイクされ、その場には荒れに荒れてしまった墓石と地面、そして霊夢達とキョンシーだけとなった。

「さて、もう終わらせるとするか」

鬼灯はそう宣言すると、一度剣を収め、宣言した。

「災害『自然の反逆』」

すると、まず辺りが揺れ始め、全員が立つことが難しくなると飛んで地震から逃げた。

それはキョンシーも同じだが、しかしそれは地面から生え、急成長した木々に絡まれ、大木となった時にはその大木に捕まってしまっ

た。

そして、其処からどんどん力を吸収されていき、キョンシーはそのまま動かなくなってしまうた。

鬼灯はそれを見るもスペルを止め、キョンシーを解放した。

\*\*\*

弾幕ごつこの後、葵とミコトはキョンシーを治そうと直ぐに近づき始めたが、それを鬼灯が止めていた。

「どうして止めるの!?!鬼灯!」

「簡単なことだ。お前やミコトが治さなくとも、別の奴が治してくれるからだ」

「別の人?」

葵と鬼灯の会話を聞いていた想起が首を傾げると、その説明を鬼灯に変わって始める夢幸。

「お前はあの『キョンシー』が自分の『力』だけで蘇ったと思っているのか?」

「……あ」

「ふん、遅すぎる理解だな」

その会話をしている間に永久と妖夢も鬼灯の手伝いをしていた。

「……そういう事だ。それは、お前達も分かっていることだろ」

永久の一言に反論出来ない二人。

確かに、二人とも理解は出来ている。しかし、『理解』はしていても、『優しさ』の塊の二人は『回復しない』という選択肢はそもそも無かった。

そんな会話をしている間に、後ろから別の二人分の足音が聞こえ始めた。

それが全員の耳に入り、鬼灯達の背後を見ると、葵と同じ髪色の違う髪型、そしてその髪には簪がわりの鑿が挿してあり、服装も葵と同じように水色が特徴となつている半袖ワンピースを着ている青目の女性がいた。

その後ろからは黒色が特徴的な男がやって来た。

「あら〜。この子、負けちゃったのね〜」



青の女性は笑みを少し浮かべると、そのキョンシーの身体に触れた。

すると、そのキョンシーは直ぐに立ち上がり、元気になった姿をその場の全員に見せた。

「……やっぱり、操る奴がいたんだな」

「うわあ……面倒」

「霊夢、雪華みたいになってるぞ」

後ろで、魔理沙、霊夢、歩がそんな会話をしていたが、しかしその会話は直ぐに止められる。

その青の女性から溢れ出した怒気によって。

「貴方達がこの子をいじめた人達ね……その事に関して私はとても怒ってるのよ」

青の女性はニコニコ笑顔で霊夢達の前に一歩出ると、可愛らしく首を傾げて続ける。

「そういうことだから、私の怨みを晴らす為に、付き合ってもらおうわよ」

「……上等よ」

霊夢もまた好戦的な笑みを浮かべると、青い女性の前に出た。

「いいわ。私と葵が相手してあげる。そっちもどうせ二人でするんでしょ？」

霊夢はそう言っただけで女と男を見るが、男の方は首を振った。

「……いや、私は弾幕ごっこは今回参加しない。君達の相手は『青ちゃん』達だよ」

「あ、この二人ね。分かったわ……そういうことだから、葵」

「うん、分かった」

葵は霊夢の言葉に頷き、一歩後ろに移動しようとしたが、その肩をミコトが掴んで止めた。

「？ミコトさん？どうしました？」

「いや、弾幕ごっこの前に、一言、激励をな。……頑張れ、葵。俺はお前がどう戦うのか、楽しみにしてる」

ミコトのその言葉に葵は少し目を見開くと、直ぐに嬉しそうな笑顔に変わった。

「……はい！楽しみにしててくださいー！」

そう言って今度こそ移動しようとしたところを今度は魔理沙に捕まり、何かを耳元で囁かれると頬を赤らめた。

「え!?!いい、いやいや!だ、だって、それはミコトさんに迷惑……」

「良いから言ってみろよく。案外、嬉しがるかもだぜ?」

「う〜……」

其処で頭を抱え出す葵とニヤニヤ顔の魔理沙を首を傾げている状態で見るミコト。

そのミコトをチラツと見て、また恥ずかしがる様子を見せる葵。

その後ろから遂に霊夢が現れ、その葵を強引に立ち上げらせ、背中を押した。

「ほら、言うならさっさと言う。さっさと弾幕ごっこを始めて早く終わらせたいのよ」

「……わ、分かりました」

葵は霊夢と魔理沙にそう言うと、ミコトに近づく。

そのミコトはやはり話が見えていなかったようで首を傾げているが、葵はそれを気にせずに喋り始める。

「そ、その、い、嫌なら、後で言ってください……取り敢えず、これだけ。」

……が、頑張るから、見ててね?ミコト『お兄ちゃん』

「……!」

その言葉を聞いてミコトは少し固まる。

その間に葵はミコトから離れて霊夢の隣に移動し、弾幕ごっこを始める体制を取る。

「……よかったね、ミコト。『お兄ちゃん』って呼ばれて」

「どうだ?『妹』が出来た感想は」

「私からのサプライズだぜ?どうだ?嬉しかったか?」

固まっているミコトに想起、歩、魔理沙が近寄りそう感想を聞いてきた。

「……ああ、うん」

ミコトは感想を濁したが、その本当の感情は嬉しそうな表情から察することが出来た。

## 第二百五話

青い女性とキョンシーのコンビに牽制として霊夢が弾幕を放っている間、葵は動かず状況を冷静に観察している。

そうしなければ、相手の隙を狙って捕縛したりなど出来ない。焦れば失敗する。

だからこそ、焦らず冷静に霊夢の行動も見て行動するのが葵の何時ものやり方である。

しかし、だからこそ相手に不信感を抱かせるのだ。

「あら？ 貴女からは攻撃しないのかしら？ 私達、舐められてるわけ？？」

「いえ、舐めているわけではありません。私は霊夢の補助を担っていますから」

「あら、そうなの」

青い女性はそれを聞くと、ニヤリと笑う。

「つまり、貴女は其処の巫女の『足手纏い』ね」

「ッ！」

「あんた！」

青い女性から放たれたその言葉に葵は反応し、霊夢は激怒し弾幕を増やして青い女性に集中攻撃する。

この青い女性は、葵の一番気にしていることを的確に突いてきたのだ。

「あら、その貴女はどうしてそんなに怒ってるの？ 事実じゃない？」

「誰が事実よ！ 私はそんな事、一度だって思った事ないわよ！」

「霊夢……」

しかし、その霊夢の言葉に感動し、涙を浮かべる葵だが、しかし青い女性は未だに笑ったままでいる。

「あら？？ それなら、今回、初めて『そう思う日』になるわね？」

「どういふことよ？」

「教えなくい。それよりも、私ばかりに集中してて良いの？」

「結界『四重結界』！」

葵はそう宣言しながら自分と霊夢に四枚の結界を張る。

その行動に驚いた霊夢が葵を見ようとするが、その行動の意味を直ぐに知ることになる。

「毒爪『ポイズンレイズ』！」

後ろからその宣言とともに弾幕が襲いかかってきたのだ。

葵は宣言しようとしていたそのキョンシーに気付き、先に結界を張ることに成功した。

そして、そのスペルがブレイクされた後、もう一度青い女性を見ると、やはり笑っていた。

しかし、その笑みは先程の嫌な笑みではなく、余裕そうな笑みだった。

「何よ、その笑みは」

霊夢が顔を顰めながらその女性に聞くが、相手は答えない。

それにムツときたのか、霊夢は一つのスペルを宣言した。

「境界『二重弾幕結界』！」

そのまま青い女性を結界の中に捕らえ、弾幕を女性に向かって撃ち始める。

これなら余裕の笑みを湛えてられないと考えた霊夢だが、しかし直ぐに何かを感じ取った。

「……葵」

「分かっています。今、結界を一部壊されました」

葵と霊夢がそれを感じ取り、警戒度を上げると、前方から声が聞こえてきた。

「邪符『ヤンシャオグイ』」

その声の後に青い光弾が複数、霊夢と葵の前に表れた。

「これぐらい簡単よ！」

霊夢は余裕そうに避け、葵は油断せずに避けると、その光弾は二人の後を追ってきた。

「嘘!?!追尾!?!」

「結界『二重結界』！」

霊夢が驚いている間に葵が結界を張ると、その弾幕は消えずに何度も攻撃してきた。

それを見ていた青い女性は次にレーザーを飛ばしてきたが、それは結界に罅を入れることなく霧散した。

「あら、貴女の結界は強固なのね」

「褒めていただくのは有り難いのですが、私はまだまだ褒めていただけるレベルにはいってませんので」

「本当にね」

青い女性はそんな風に言うと、その結界に近付き、髪の毛を外して結界に当てる。

「？何を……」

葵はその行動に首を傾げていると、その結界の一部がまるでくり抜かれたかのように穴が開いた。

「！さっきのはそれで！」

「あら、暴露てたのね。でも、残念」

青い女性は笑顔を浮かべながら最後の一枚の結界に穴を開けると、光弾を出した。

「貴女達じゃ、避けれないわ♪」

「!!」

葵は直ぐに自分の作った結界に手で触ると、その結界を壊し、霊夢を突き飛ばした。

その結果として霊夢に光弾は当たらなかったが、葵はレーザーと光弾に直撃してしまった。

「っ！葵！」

「うっ！」

葵はそのまま飛ばされ、飛ばされたところにあつた墓石に強く背中をぶつけてしまい、肺から空気を全て出してしまった。

「うっ！ゲホッ！」

「葵！大丈夫!？」

霊夢は直ぐに葵に近寄り、葵の状態を見る。

その葵は霊夢の様子を見ると、安心した様に笑顔を浮かべた。

「良かった……霊夢に怪我は無さそうですね……」

「馬鹿！あんたにあるじゃない！」

「私の怪我は直ぐに治りますから……」

そんな説明をしている間にも葵の怪我は確かに治っていつている。それを見ても青い女性から笑顔は消えずに、その様子をずっと見ていた。

「……霊夢、一つ、良いですか？」

「な、何？葵」

「……いつも通りに行きましょう」

葵のその言葉に霊夢は最初は理解出来なかったが、何かを察して頷いた。

「作戦会議は終わった？なら、次行くわよ？入魔『ゾウフオルウモオ』」

そのスperl宣言の後、キョンシーから速さが遅いクナイ型弾幕が撃たれ、青い女性からはそれよりも速いクナイ型弾幕が撃たれ始めた。

「あの作戦は、これを使い切った後よ！」

「はい！補助『疾風鳥』！」

葵はその宣言後に鳥型の弾幕を二つ出すと、自分と霊夢に撃った。それはそのまま二人に溶け込む様に消えたが、それを受けた霊夢は少しニヤリと笑う。

「これで、あんた達の弾幕には当たらないわ！」

「あら〜？なら、やってみたらどうかしら〜？」

青い女性は少し訝しげに眉を寄せながらも霊夢に向かってそう言うのと、弾幕を再度撃ち始める。

それを霊夢と葵は避けるために動くが、その速さが先程と違った。

その速さを例えるなら、名前通りの『疾風』。

つまり、姿が一瞬で見えなくなつた。

「ッ！何処に……」

青い女性は直ぐに霊夢達の姿を探したが、その居場所は相手から教えられないこととなる。

「此処よ！」

「なっ!?!」

青い女性が振り向くと、其処には霊夢が一枚のカードを掲げていた。

「神技『天覇風神脚』!」

その宣言後に霊夢は青い女性に容赦なくサマーソルトを浴びせると、青い女性はそのまま飛ばされ、直ぐにキョンシーにも蹴りを浴びせ、飛ばした。

その青い女性はそのまま起き上がろうとしたが、

「呪術『鬼呪封印』!」

葵のスペルで縛られてしまった。

「くっ!」

「これで貴女は動けません」

「さあ!覚悟しなさい!神霊『夢想封印』!」

青い女性はそのまま霊夢の弾幕を浴びてしまい、スペルが終わった頃には気絶してしまっていたのだった。

\*\*\*

葵は弾幕ごっこの後、ミコトと共に青い女性を治し始めた。

その近くには青い女性と一緒に来た男もいる。

「あんた達ね。其奴は放つといてさっさと行きましょうよ」

「ですが、怪我をされている方を放って行けませんよ……」

「そうだな。流石に放って置くことは出来ない」

「はあく。この、お人好し……」

霊夢が頭を抑えながら深い溜息を吐きながらその様子を見ていると、その青い女性は目を覚ました。

「あ!気が付きましたか?」

「……貴女、さっきの……貴方も、向こうで見てた人ね……」

「ああ」

葵とミコトは二人して安心した笑みを浮かべていると、青い女性は起き上がった。

「……一応、お礼を言うわ。……ありがとう」

「いえ、お礼を言うほどの事は……」



「していないな……葵はしていたが」

「いえ、ミコトさんの方が……」

いきなりお互い謙遜し始めた二人を見て、驚いた様子の青い女性  
は、直ぐに笑い始めた。

「あつはっは！あ、貴方達、お礼を素直に受け取れないなんて！おかし  
いんじゃない？」

「え、そ、そうですか？ですが、事実ですから……」

「そうだな……そんなに凄いことはしてないんだが」

葵とミコトがお互い困った顔で見合っている様子を見ると、その女  
性はまた笑い始め、その笑いが収まると、目元に浮かんだ涙を拭いな  
がら話し始める。

「あく、おかしかった。自己紹介が遅れたわね。私は『霍 青娥』、『仙  
人』よさつき結界を通り抜けたのは私のこの蓑の能力で、『壁をすり抜  
ける程度の能力』。それと、彼処でまだ伸びているのが『宮古 芳香』。  
知っての通りの『キョンシー』なの。可愛いでしょ？」

「は、はあ……」

最後のキョンシー可愛い発言には流石に同意しかねた葵が曖昧に  
返事をする、今度は直ぐ近くにいた男の紹介を始める青娥。

「そして、この人が『よつちゃん』こと『黒世 条』。私と同じ『仙人』  
よ」

「紹介に預かった黒世条だ。よろしくね」

「あーよろしくお願いますー！」

葵は条と青娥からの挨拶に頭を下げ、挨拶を返すと、その腕を後ろ  
から強引に引っ張る者がいた。

ルカである。

「……治し終わったんだろ？早く行くぞ」

「わ、分かったよ……ミコトさん。行きましよう」

「ああ」

葵は再度、頭を下げ、歩き始めると、その隣にミコトが来て、先ほ  
どの事を話し始めた。

「……葵、結界を壊した後に霊夢の身代わりの様に攻撃を受けていた

が……」

「……言いたいことはわかります。ですが、それはミコトさんもするのでは？」

「……」

「……すみません。でも、多分、これは私の性分ですから……変わりますせん」

「……あまり、しないでくれ。頼むから」

「……善処します」

「……だが、それ以外は良く頑張ったな」

ミコトは最後にそう褒めると、葵の頭を撫で始めた。

葵はそれに少し驚いた表情を浮かべるが、直ぐに気持ち良さそうな表情になった。

そんな二人の後ろ姿を見ていた青娥は、糸にだけ聞こえるような声量で話した。

「あの二人、やっぱり歪ね〜」

「……そうだな。とても簡単に自分を犠牲にしていたからな。あのミコトという者は分からないが、葵という子と似たような雰囲気を感じる」

「そうね〜。あの二人は今後も自己犠牲に走ると思う？よつちゃん」

「……走るだろうね、青ちゃん。自分を犠牲にする事で、周りが悲しむ事を本当の意味で知らない限りは」

その話は、やはり葵達には届く事はなく、空へと消えていったのだった。

## 第二百六話

目的地を目指す道中ですら、この異変解決組一行が静かになる事はない。

「うう……それにしても、なんで墓地なんですかあ……」

「あんた、さつきまで怖がる素振りすら無かったじゃない」

「アレは緊張状態だったからですよ！戦闘終わって解いたら途端に怖くなったんですよ！」

「……前から思ってたけど……あんた、半霊でしようが」

「それと同時に半人です！」

「それでも半分幽霊なのに、怖がる意味が分からないわよ……」

そこで霊夢は溜息を吐くが、その間も妖夢は体を震わせながら永久の後ろを歩く。

お陰で前からでは永久の後ろに妖夢がいるなど見えない形となった。

それを見ていた想起は苦笑いを浮かべるが、ふと思いついたかのように話し始めた。

「そういうえば、僕、一つ面白い話を知ってるんだ」

「何よ急に。というか、ほんとうに面白い話？」

「うん。この場所にはとつても合ってる話だよ」

それを聞いて、妖夢の体が微かに震えたが、それを想起は見ないフリして続ける。

「これはね、僕の友達が体験したことなんだけどね……」

「わああああ！話し始めないでくださいよー！ー！」

しかし、その冒頭で直ぐに妖夢は叫んで遮り、想起は予想通りの反応にニヤニヤした顔を浮かべていた。

「あはは！妖夢は本当に怖がりなんだね。あ、面白い……」

「……おい」

と、そこで永久が想起に声を掛け、想起が振り向いてみると、その首元からたった1cm離れたところに剣先があった。

それは勿論、永久が向けているものだった。

「……これ以上、妖夢に対しての悪ふざけは、寛容出来ないぞ?」

「……うん、ごめんなさい。やり過ぎました」

想起は冷や汗をかきながら謝ると、永久はその刃を消し去り、元の柄だけの状態にした。

「……想起さん。今後は気をつけましょうね」

「うん、そうする。僕も命は惜しいから……というか、一瞬、本気で死ぬかと思った……」

「私も、想起さんが死んでしまうかもしれないと思いましたよ……」

二人して安堵の溜息を吐いている間に、涙目の妖夢を葵とミコトが代わりに慰めている。

そんな一向にたいして、先に進んでいた魔理沙が大きな声をあげて連絡をした。

「おくい!こつちになんか入口があつたぞ〜!」

「お!ナイス!魔理沙!ほら、皆んな行くわよ!」

「あ、霊夢!待て!」

魔理沙の言葉を聞いた霊夢は笑顔でそこへと向かって走り、その後を歩が追っていく。

それに他の全員も付いていくが、唯一付いて行かなかつた人物がいた。

葵である。

葵は一人、この『神霊』達の事を考察する。

(あの時、芳香さんは平気でこの『神霊』達を食べてた……例えそれが能力だとしても、何かしらの反動があるはず……どういうこと?)

「葵?」

葵が思考の海に浸かっていると、ミコトが声を掛けた事でその海から出た葵。

「……え、あ、えっと、どうしました?ミコトさん」

葵がそう言っ呼ぶと、ミコトが悲しそうな顔をし、葵は首を傾げる。

「……えっと、どうしました?」

「……いや、なんでもない。気にしなくて良い」

そう答えたミコトだが、しかし変わらず悲しそうに見え、その理由を考えると、あることに辿り着く。

そして、それを試してみることにした葵。

「……み、ミコトお兄ちゃん？」

「……！」

その一言でミコトの顔が嬉しそうな表情に変わったのを見ると、葵は安堵と嬉しさから笑顔を浮かべ、続ける。

「心配してくれて、ありがとう。ミコトお兄ちゃん。それじゃあ、行くう？」

「……ああ」

ミコトと葵はお互いに笑みを浮かべると、そのまま中へと入っていった。

まるで、洞窟にも見えるその穴の中へと。

\*\*\*

洞窟の中にあつたのは、何かの巨大な建築物。

ただ、その建築物が巨大過ぎるのと、その場が少し暗い所為で、その建築物の屋根がちやんと見えなかった。

「す、凄く、高いですね……この建物」

「ああ……そうだな」

「二人して何そこで突っ立ってんのよ。早く入るわよ」

「え、でも入口は……」

「もう見つけたぜ！」

「は、早い……」

葵はその仕事の早さに少し呆然としたが、自分達が遅れたただけだと分かっているの、そのまま中へと入っていく。

その入つてすぐの所で永久達と合流し、そのまま歩いていると、その一向の前に二人の人物が立ち塞がった。

一人は銀色の髪をポニーテールにし、烏帽子を被って、白装束を着たデイープブルーの瞳を持つ女性。

もう一人は、とても薄い緑色のボブの髪をウェーブにした、全体的に緑が特徴の女性。

しかし、その女性の一番の特徴を言えば、その女性の足が人の脚ではない事だろう。

それを見て、妖夢はやはりと言うべきか、怖がって永久の後ろに隠れてしまった。

そんな妖夢に葵が少し苦笑していると、白装束の女性の方が笑顔を向けながら声を掛けてきた。

「おおーこれはこれは！もしかしくともお主達、我等の復活を祝福しに来た者達だなー！」

「……え？」

その女性の勘違いに葵が呆然としている間にも、女性節は続く。

「ふふふつ、隠さなくともよい。我には分かる……分かるぞ！お主達が、我等の復活の時に気付き、祝いに来てくれた者達なのだ！さあさあ、上がるがよい！もう直ぐ太子様も起きる……！」

「止めなさいー！」

其処で漸く緑の亡霊の女性が白装束の女性を叩いて止め、白装束の女性は恨めしそうにその亡霊を見やった。

「なんなのだ。この者達は大事なお客様だろう？」

「違うから。どう考えても敵襲だから」

「な、なんだと？むむ……私の勘違いか」

（あ、あの白装束の方はとても心優しい方なのでですね）

葵が心の中で白装束の女性をそう褒めるが、他は別の様に捉えた。

（あ、此奴はアホの子だ）

（いや、お人好しだろ、アレ。人を疑うって事を知らないだけだろ）

（うくん、葵さんの様な方なのでしょうか）

（ちよつと。葵をあんなのと一緒にしないでよ）

早苗、魔理沙、霊夢の三人が小声でそう話すも、白装束の女性には聞こえていなかった様で、何も言われなかった。

「……仕方ない。お主達！敵襲なら我等は此处でお主達を強制的に返すのみ！さあ、勝負じゃー！」

白装束の女性は葵達に指を指しながら大声でそう叫ぶと、霊夢が一步前に出ようとした。

しかし、それよりも先に前に出たのは、妖夢と永久だった。

「ちよつと。何前に出てんのよ。私が戦うから、あんた達は下がってなさい」

霊夢が永久と妖夢に対してそう言うが、妖夢は首を横に振って拒否する。

「嫌です。だって、ここを逃したらもう戦えなさそうじゃないですか！」

その妖夢の目が輝いているのを見て、妖夢の戦闘狂の部分を出すと、霊夢は素直に引いた。

それに感謝しながら白装束の二人に向き直ると、永久と妖夢は剣を構えた。

「それでは、勝負をする前にお互い、名乗り合いしましょう。私は魂魄妖夢！半人半霊の剣士だ！」

「……同じく半人半霊の浄土永久。剣士だ」

「む、ならば我等も名乗らなければな！我は『物部 布都』！戸解仙だ！」

「私は『蘇我 屠自古』。亡霊だけど戸解仙よ」

「それでは、始めましょう。この幻想郷でのルールに則って……弾幕ごっこを！」

妖夢のその言葉で、その場に弾幕が生成されたのだった。

## 第二百七話

妖夢、永久と布都、屠自古の弾幕ごっこは均衡していた。

お互いがお互いの弾幕に当てては撃ち落とし、撃ち落とせなかった弾幕には剣でぶった斬ったり、避けたりをしていた。

それを繰り返していると、まず最初にスペルを宣言したのは妖夢だった。

「幽鬼剣『妖童餓鬼の断食』！」

その宣言後、妖夢が右に移動しながら斬撃を飛ばし、その剣閃から楔の弾幕を放射状に撃ち出し、攻撃する。

それを布都も屠自古も簡単そうに避けた。

布都に関してはスペルが終わると笑顔でピースをしながらアピールまでした。

「なんででしょう？無性にムカつきます」

「……煽られてるな」

妖夢が剣を握る力を強くし、永久は冷静に答えた。

その布都事態には煽ったつもりは無かったようで、首を傾げていた。

「む？お主、どうして怒っておるのだ？」

「いえ……気にしなくて良いですよ。とにかく、続けましょう」

「そ、そうじゃの。それじゃあ、次は我だ！天符『雨の磐船』！」

すると、何処から来たのか船が現れ、その船の上に乗ると、そこから白と黄色の小さな弾幕を飛ばし始めた。

それはとてもとても避けやすく、永久と妖夢は余裕を持って避ける。

そのスペルが終わり、布都が船から降りるとほぼ同時に、永久がスペルを宣言する。

「蒼燕『車軸の雨』」

刀を構え、刃を伸ばし、正面へと突く。

その正面にいたのは……布都。

「!?ぎゃっ！」



そのまま布都は壁に激突するまで刃を伸ばされ、壁に激突すると、そのまま気絶した。

「布都……このっ！」

屠自古は布都がやられたのを見て自分のスペルも宣言した。

「雷矢『ガゴウジサイクロン』！」

その宣言後、自分を中心に雷の矢を作ると、落雷の様な形で妖夢達を襲う。

「きゃあああ！」

……が、被害が一番大きかったのは妖夢でも永久でもなく、外野の葵だった。

「……葵、大丈夫か？」

ミコトは急に叫んで耳と目を塞いで蹲る葵に心配そうな顔をしながら聞く。

その命からも感じ取ることが出来る恐怖に怖がっているのだと分かったからだ。

「うう……ぐすつ……うう……」

「……」

葵はミコトの声が聞こえてはいるが、やはり怖いのか泣き止まず、蹲ったまま泣いている。

その葵の状態を見て、ミコトは優しく抱き締め、頭を撫でる。

（あら……霖之助が見たら焼くわね……）

そんな光景を冷静に見ていた霊夢がそんな事を考えている間に屠自古のスペルは終わっており、今度は能力で妖夢達に雷を落とそうとしていた。

それを妖夢は冷静な目で見て、剣を構え、目を瞑る。

思い返すのは、鬼灯との修行の事――。

\*\*\*

数年前……永久とまだ会ってなかった頃の事。

「妖夢……お前は どうして 剣を握る？」

「……え？」

妖夢が剣の素振りをしている時、鬼灯はそんな事を聞いた。

それに少しだけキョトンとしたが、妖夢はそれに答える。

「それは……強く、なりたいからです」

「どうして強くなりたい？」

「どうして……」

「剣や刀は、所詮は人斬りの道具……命を傷付ける道具だ。それは、お前が今持っている迷いを斬る剣とて同じ事……どうしてだ？」

「……鬼灯様はどうして、ですか？」

妖夢がそう聞くと、鬼灯は空を見上げて答える。

「……私も同様に、強くなりたいからだな。弱いままでは、護りたいものも守れない」

「……人斬りの道具なのに……ですか？」

「……妖夢。一つ課題を出そうか。期限はそうだな……私かお前が消えるまで」

鬼灯はそう言うと、小狐丸を向けた。

「妖夢……どうして、私が守りたいにも関わらず剣を使うか……所詮は人斬りの道具なのに、どうして強くなりたいのか。どうしてなのか……私とお前の違いを、考えてみる」

鬼灯はそのまま空を見上げる。

その空は曇天で、雷の音までし始めていた。

そして、少し光ると、そのまま雷が落ちる。

妖夢は思わず目を細めるが、鬼灯は刀を構えると、その雷を真つ二つにした。

「!?」

それに驚いた妖夢がその場に固まっていると、鬼灯はその目を見つめながら言う。

「……お前は何処か私に似ている……だから、いつか分かるだろう。なぜ、人斬りの道具なのにも関わらず、私がこれを使い続けるのかを……」

\*\*\*

(……何と無くですが、分かった気がします)

妖夢は目を少し開けると、剣を握る自分の手が見えた。

(貴女が剣を握り、戦う理由。どうして剣なのか……)

次に天を見れば雷が生成され始めていた。

(所詮は人斬りの道具。しかし、誰かを守るには、誰かを傷付けるしかない)

妖夢は息を一つ吐くと、肩の力を抜いた。

(私には……そんな覚悟は無かった。どこか、甘えていたんだ……この弾幕ごっこが制定されてから。……鬼灯様がいたから)

妖夢は刀を振り上げる。それと同時に雷も落ちる。

そのスピードは、しかし妖夢からはゆっくりに見えた。

(誰かを守る為には誰かを傷つける……その覚悟を決めなくては……幽々子様を、永久を、大切な人達を……守る為にも！)

「やあああああ！」

妖夢が剣を振り下ろすと、その雷は真つ二つにぶつた斬られた。

「な?!無茶苦茶な!」

屠自古が妖夢の無茶苦茶な行動に驚いている間に妖夢は剣を構え、スペルを宣言する。

「奥義『西行春風斬』!」

そのスペル宣言後、その場から高速で屠自古の元へと走ると、そのまま通り抜けた。

そのすれ違いざまに屠自古に斬撃を浴びせる。

それを二往復すると、屠自古は倒れた。

が、まだ起き上がる様子を見ると、妖夢はその近くまで歩き、首元に剣を当てる。

「動くな。この剣は迷いを斬る剣……例え戸解仙だろうと、亡霊であるのならそのまま成仏してしまうかもしれないが……どうします?」

屠自古はその妖夢の目を見て、本気であると理解すると、降参したのだった。

\*\*\*

葵復活後、直ぐに布都の治療をし始めたので、一行はその間に休憩を取ることとなった。

「しかし……妖夢、お前、遂に雷を斬れるようになったか」

「はい……それで、鬼灯様」

「ん？なんだ？」

妖夢は鬼灯を真剣な顔で見つめると、鬼灯もまたその顔を真剣な目で見た。

「……随分前に、貴女から出された課題。分かりました……私には足りなかったのです。覚悟が」

「……」

「刀は所詮は人斬りの道具。それを使って誰かを守るのならば、誰かを傷付けるしかない。……私は何処かで甘えがありました。しかし……それが分かっても、守る人がいます。守りたい人がいます……だから、今後は覚悟を持ちます。誰かを傷つけてしまう覚悟を」

「……その事で、その誰かから恨みを持たれる事もあるのだぞ？」

「分かっています……それらを全て、ちゃんと頭に入れた上で、今後も剣を握っていきます。……今後も、お願いいたします。師匠」

「……分かった」

鬼灯はそれだけ言うと、葵の近くに移動した。

（刀は所詮は人斬り道具……それで誰かを守るなら……その覚悟は必ずいるんだ。そして……誰かを殺してしまう覚悟も、な）

鬼灯は頭の中でそう考えながらも葵の様子を近くから見ていた。

……が、其処で誰かの殺気を感じ、周りを見渡し始める。

他の全員もまた周りを見渡していると、鬼灯が人の姿に変わり、小狐丸を出し、布都の前で構えた。

すると、その剣に同じく剣が当たり、その場に音が鳴り響いた。

「……貴様、何者だ？」

その問いの答えを言おうとした男は、しかしその場を飛んで離れた。

その男がいた場所には氷柱が飛ばされたので、ルカからのその攻撃に気付いた男が飛んで避けたようだ。

「……儂は『大伴 富彦』。物部家に復讐をする者ぜよ」

「復讐……な」

其処で鬼灯は同じく復讐を誓っているルカを見ると、ルカは頷いた。

それで確かであると理解すると、鬼灯は刀を富彦に向けた。

「……悪いが、それはさせてやれない。何時もならやるなら勝手にしろと言いたいところだが、生憎と葵がいるのでな……やらせるわけにはいかない」

鬼灯は其処まで言い、富彦と戦おうとしたが、それを想起が手で制止した。

「鬼灯……此処は僕にやらせて？」

「……想起。やれるか？」

「……大丈夫。出来る……ソロモン」

「キュルル〜！」

想起は其処で他の人達より一步前に出ると、富彦と顔を合わせた。

「ごめんけど、相手は鬼灯から僕に変更って事で……この弾幕ごっこに負けたら、素直に復讐を諦めてくれる？」

「……約束は出来んぜよ」

「うくん、弾幕ごっこはお互いに遺恨を残さないのが条件なんだけど……」

「ふむ……ならば、儂が勝ったら復讐をさせてもらうぜよ。負けた時にも素直に諦める……つまり、本気で行かせてもらうぜよ」

「うん……僕も、本気で行くよー！」

想起と富彦。二人の男の弾幕ごっこが、始まった。

## 第二百八話

富彦と想起は互いに獲物を出して構えていた。

想起は模造刀を、富彦は剣から鏡に変えている。

「……ねえ？なんで鏡？」

想起が素朴な疑問を聞くと、富彦は律儀に答えてくれた。

「これが儂の依り代だからぜよ」

「よ、依り代？え？尸解仙って依り代がいるの？」

「そこからか……」

想起の言葉に鬼灯は痛む頭を抑えるように手を置くと、想起に聞こえるように説明する。

「尸解仙というのは、元々人間だったものが仙人になる為に死後、その死体を尸解し、肉体を消滅させ、仙人になったものを指す言葉だ。その際に何か別のものを依り代としなければ、尸解仙にはなれはしない。その男が鏡を使うなら、その男が依り代にしたのは『鏡』ということになる」

「その狐の説明通り、儂の依り代は鏡。だからこそ、武器も鏡ということぜよ」

「へ〜……じゃあ、屠自古さん達は？」

想起がつい気になって屠自古に聞くと、屠自古は目をつぶって答える。

「私は壺にしたわ……だけど、このアホの所為で私の壺が割れて、こんな風に亡霊になってしまったわけよ……」

「……御愁傷様、だな」

「まあ、別に良いのよ。人間の体よりもこっちの方が自由が利くしね。あと、このアホは皿よ」

「そ、そうなんだ……（布都さん気絶してるから言いたい放題なのかな？）」

想起は言葉の裏でそんな事を考えていると、相手が弾幕を撃ってきただことに気付き、転がるようにして避けると、立ち上がって膝の砂を払い落とし始めた。

「酷いなく。不意打ちとか……」

「酷いも何もない。戦は常に不意打ち上等。真正面からくる馬鹿はおらんぜよ」

「あの、これ殺し合いじゃないからね？そこ分かってるよね!？」

「分かっておるから安心するぜよ。儂が殺したいのはその物部家の生き残りだけに、他の犠牲は出したくないぜよ」

「……そっか。だけど、布都さんだって殺らせない。だから、僕は負けない!」

そうして互いに剣と鏡の打ち合い発展し始めると、富彦が一枚目を宣言した。

「呪法『レグリスピア』!」

その宣言後、鏡を想起に向けると、そこから光線が放たれる。

それを難なく回避するが、二度目が直ぐに向かってきた。

「!黒竜符『衝撃』!」

それを見て、想起はソロモンを近くに呼ぶと、その口からレーザーを放たせた。

鏡と竜のレーザーの押し合いは意外にも拮抗し、遂には爆発した。

「ツ!ソロモン!」

ソロモンに指示し、その爆風を退かしてもらおうとした瞬間、またレーザーが飛んできた。

それには反応出来ずに当たりそうになるが、それはソロモンが庇って難を逃れる。

しかし、ソロモンはそれを背中から食らったこともあり、倒れてしまった。

異変を起こした時のような大きさならまだしも、今の小さなサイズのソロモンでは衝撃が大き過ぎたようだ。

「ツ!癒符『想祈』」

想祈はそのスペルを宣言すると、まるで祈るように手を組むと、ソロモンの体が優しげな若葉色に包まれた。

すると、ソロモンの体から傷がなくなっていく。

葵と同じ、治癒のスペルである。

「……彼奴も、葵と同じような事が出来たのか」

「まあ、あの一枚だけらしいがな」

鬼灯は想起の戦いを見ながらルカの言葉に返すと、ルカは「……そうか」とだけ言って顔を戻す。

ソロモン復活後、想起と富彦は弾幕の撃ち合いに発展していた。

それを鬼灯は少しの間見ていたが、途中からルカに問い掛けた。

「……お前は、あの富彦という男を見て、どう思う?」

「……どうしてそれを聞く?」

「お前と同じ、復讐が全てとなった夜叉だからだ」

「……」

ルカはそれを聞くと、少しの間、目を瞑る。

そして振り返る。

今までの憎き相手を。

この前、幻想郷まで追いかけてきたヴァンパイアハンターの復讐シスターを。

そこでルカは、強く歯を噛み締めた。

そこから『ギリツ』と音が出る程に強く。

その所為で周りが冷気に包まれ、ルカの足元は凍り、今日は三日月で血の力的には人間の方が強い筈なのに、どうしてか口から吸血鬼の牙まで出る始末。

思い返しただけでこの状態、夜叉と呼ばれても仕方ない。

「……正直、私としては彼奴の復讐がどうなろうが関係ない。こういう事は安易に私が言うべき事でもない」

「……そうか」

鬼灯はそれに納得する様に頷いているのを見ると、後ろに下がった。

その間、ミコトはルカを見続ける。

なぜなら、命からも感じ取ることが出来たからだ。

その、ルカの中にある強い『憎しみ』を……。

(……ルカの過去を、俺は知らない。……だが、どうにか、してやりたい。どうにか、助けてやりたい。じゃないとルカは……)



「本当に、独りになってしまおう」

ミコトはそう考えるが、ミコトに出来ることはあまりにも少なすぎる。

そして、ルカも葬程には信用していない。何が出来ると言うのだろうか？

ミコトもそれが分かるからこそ、悲しそうな目でルカを見ると、視線を弾幕ごっこに戻した。

鬼灯達が話している間に状況は変わっており、何やら一面、蟲だらけとなっていた。

これは富彦のスペルの一つである「術式『蟲の毒災』」。

持っている鏡から蟲を出し、その蟲達に攻撃させる術である。それを回避するために想起は空を飛ぶが、富彦もまた飛び、また剣と鏡の打ち合いとなった。

……が、それは直ぐに決着が付いた。

想起の剣に遂に罅が入ってしまったのだ。

「しまっ!？」

「これで獲物は……0ぜよー!」

富彦はそう言った瞬間、剣がついに折れてしまい、もう一度、鏡を振り上げ、攻撃する。

それは誰もが当たると思った……鬼灯以外は。

その鏡が想起の頭まできた瞬間、別のものに阻まれてしまった。

「!?そ、それは何処から出した!？」

「これ?これは僕の腰にずっとあったよ……まあ、服で隠してたけど……さー!」

想起はその武器で鏡を力を入れて押し返し、左手を握り、富彦の腹に拳を一発入れた。

「ぐいっ!？」

富彦はそれを浴びせられ、そのまま後ずさる。

想起はそれを見て、また構え直す。

しかし、今持っているのは剣ではない為、その武器を使い易いように腰を低くし、逆手に握る。

その、『ダガーナイフ』を。

「さて、どつかのアニメキャラのを模範とした感じだから、構え毛方がこれで合ってるのかは知らないし、鬼灯に聞いてもちゃんとは知らないようだったから、僕は僕のやり方で、これで行かせてもらおうよ！」

想起はそう言つて一度近付くと、今度は蹴りを入れる。

それを富彦は腕を交差し、防御するが、想起は続けてスペルを宣言する。

「パチュリーから学んだ魔法の一つ、使わせてもらおうよ！水符『波紋』！」

そこから想起は水の弾幕を撃ち、下に水が溜まるとそこから波を生み出し、富彦を攻撃する。

それを富彦は避け続けるが、どんどんとその服がびしょ濡れになっていく。

それを見ると、想起は申し訳なさそうな顔をしながら、最後のスペルを宣言する。

「……これで終わらせるよ。雷符『雷鳴』」

すると、頭上から雷の音がし始め、富彦が顔を上にあげた瞬間、蒼い雷が富彦の真上から落ちた。

「ギヤアアア！」

勿論、水浸しの所為で雷の通りは良くなっており、例え尸解仙となり体が丈夫になったといえど、これは大ダメージだったようで、富彦はそのまま地面へと落ちてしまった。

想起は富彦の姿を見た後、外野の方に申し訳なさそうな視線を向ける。

その視線の先には、先程の雷の所為で耳を抑え、目を瞑り、涙目と成ってガタガタと震えて座り込んでいる葵の姿があった。

その隣では、ミコトが葵を慰めている。

「……だから、あんまり使いたくなかったんだけどな」

想起はそう一人呟くと、小さく溜息を吐くのだった。

## 第二百九話

富彦を想起が打倒したあと、葵が雷から復活し、ミコトと共に二人の治療をし終えた後、布都と屠自古に連れられて、二人が言う『太子様』という人の元へと連れられていく。

富彦に関しては歩がおんぶの様な状態で一緒に連れて行く事になった。

「うん……」

「?どうしました?想起さん」

一行の後ろで何かを考えるように唸っている想起に、早苗が様子が気になり聞いてみると、教えてくれた。

「いや、さつきからどうにも頭の中で引つかかるものがあるんだよね……主に『太子』って言葉に」

「確かに……ですが、考えてもよく分かりませんね……ヒントが無すぎますから」

そう言つて唸る二人を不思議そうに見る葵と魔理沙。

「何か、気になることでもあるのでしょうか?」

「さあな? 私らには分からん事だと思っぞ? あの二人が話すつて事は、大抵は外の事関係だろうし」

魔理沙のその言葉は確かな事で、二人が話す時の内容は大抵は外の事。なので、今回もそうなのだろうという事で葵も納得すると、前を向いた。

その間も想起と早苗は唸りながらも考えていると、全員歩みが止まったのに気付いき、考えるのを一旦止めて、前を見た。

「さあ……ここに我らが太子様がおられる筈じゃ! 付いてくるのじゃ!」

布都はそう言つてまた歩こうとしたが、それは別の声が止めた。

「布都に屠自古。探さなくとも私はここに居ますよ」

その声の主を見るために全員が布都から視線を外して前を見ると、其処にはヘッドフォンを付けた女性がいた。

「太子様!」

「……へ？太子って言うから男かと思ってたけど……」

想起のその言葉が聞こえたのかは分からないが、いきなり布都が振り返り、全員に威圧的な言葉を発する。

「ええい！皆の者！頭を下げよ！この方を誰と心得るか！」

「いや知らないわよ。誰とも分かんないし、頭下げる意味が分からないわ」

「俺が頭を下げるのは魅魔さんや白蓮さんぐらいだ。その他に下げる頭などない」

布都の言葉に霊夢はジト目で、夢幸は睨みで返すが、布都には何のダメージもない。

「この方はかの時代において民の幸せを考え、行動した方！『聖徳太子様』であられるぞ！頭が高い！控えおろう！」

「あの、それは某時代劇の言葉で……って、え？」

「し、聖徳太子ー!?!」

「……あの有名な聖徳太子までもが、此処では女性なのか……」

布都の言葉に外出身の三人は其々、そんな風に言った。

しかし、外出身の者ではない者達はそんな事は知らないので、首をかしげるばかり。

「いや、だから誰よ。そんなに有名なやつな訳？」

「有名だよ！聖徳太子っていうえば、有名な事を言えば、『十人の声を同時に聞ける』とか……」

「へ、相当耳が良い方なのですね」

妖夢が感心した様に声を上げると、その聖徳太子は苦笑した。

「正確には『耳が良すぎる』のです。ですから、私は普段からこの様に耳を塞ぎ、外界の音をあまり拾わない様になっているのですが、それでも聞こえてしまうぐらいには」

「……相当な耳の良さの様だ」

永久のその言葉に聖徳太子が頷くと、其処で何かを思い出しかな様な顔をした。

「申し訳ありません。まだ己の紹介もしておりませんでしたね。私は『豊聡耳 神子』と申します。よろしく願います」

神子がそう言つて頭を下げると、それに慌てて頭を下げる葵と想起、早苗、ミコト。

「初めまして。神無月葵と申します」

「幻現想起です！」

「東風谷早苗です！」

「一夢ミコトと言います」

「ええ、よろしく願います」

四人が挨拶をし終わると同時に霊夢が神子に近づき、お祓い棒を向けた。

「さ、ということ、早くこの神霊達をなんとかして頂戴」

「貴女は彼女達と同じ巫女ね？名前は何？」

「博麗霊夢。素敵な楽園の巫女とは私の事よ」

「そう、覚えておくわ。それと、ちよつと訂正」

神子はそう言うと、霊夢に笑顔を向けた。

「これは『神霊』ではなく『欲霊』と言います。この霊達に関してはちやんと私が解決しますから、貴女に仕事はありませんよ？帰つて怠けていたらどうですか？今後は私がこの世界を平和にするように頑張りますから」

神子は少し霊夢を煽る為にそう言った。

理由として、今後、自身の商売敵になるであろう相手の实力を知りたかつたからだ。

そして、その目論見は楽に達成される。

「……良いわ。その言い方、なんかものすごくむかつくから、相手してあげる。此処で生き残りたかつたら私を怒らせるべきじゃないって事を徹底的に教えてあげるわ！」

霊夢はそう言つて全員より一歩前に出ると、その隣にもう一人、立つ者が見えた。

魔理沙である。

「……ちよつと魔理沙。あんたは下がつてなさい」

「嫌だぜ！此処最近、暴れれなかつたんだ！此処で暴れれなかつたらいつ出来るか分かんない！だから強引に参加させてもらうからな！」

その魔理沙の強引さに、霊夢は溜息を吐くと前を向く。

「……ちゃんと合わせなさいよ？魔理沙」

「こっちの台詞だぜ？霊夢」

霊夢がお祓い棒を、魔理沙が箒を向けると、神子は優しげな笑顔を見せる。

「……貴女達は仲が良いみたいね。良いでしょう。本当は巫女一人と戦いたかったのですが、それはまたの機会としましょう。今回は……純粹に私も楽しませてもらいます！」

神子はそう言うと、自身の腰に差していた剣を抜いたのだった。

## 第二百十話

戦い始めて早々に、神子がスペルカードを構えた。

「先ずは小手調べと行きましよう。名誉『十二階の冠位』！」

その宣言後、自身の頭上に白い大型弾幕を設置すると、それを分裂させ、魔理沙と霊夢の外側に四つずつ、白い丸型弾幕を飛ばし、地面に付けた。

「これで何するつもり？」

「見ていれば分かりますよ」

神子が『ニコツ』と笑うとほぼ同時に、その白弾幕から真上に向けて白いレーザーが撃たれると、それが次の瞬間には赤、青、黄、紫、黒、白の六色の鱗弾がばら撒かれた。

それも、『弾幕の壁』と言えるほどには大量に。

「……はあ、面倒くさい」

「お前、本当に雪華に似てきたな。面倒くさがり度が増してるぞ」  
「……今度、葵か鬼灯、もしくは歩とかレティシアとか紫に稽古を付けてもらおうかしら。面倒だけど」

「葵は無理だろうけどな。結界の強度を上げるとかの修行ぐらいだろ」

そんな風に何気ない会話をし終わると、同時に回避行動に移る両者。

魔理沙は楽しそうに。霊夢は面倒そうに。

両者の表情は違えど、神子のスペルカードを楽々避けているのには変わらない。

(これぐらいは簡単に避けられるようですね……)

神子はそう思考すると、弾幕を消した。

「あら？もう終わりでいいの？」

「良いのです。どうせ唯の小手調べですから」

「つまり、本気じゃないんだな？なら、本気で来いよ！」

「そうですね……流石に本気で行くのは大人気ないので、本気ではない  
きませんが、宣言させていただきましよう」

神子はそう言うと、次のスペルカードを構えた。

「光符『グセフラツシュ』！」

すると、神子は青、黄、緑、紫の四色の弾幕を放射状にばら撒かれた。

その量は一枚目と同じ様に弾幕の壁が厚く、その上でスピードも速く、避けにくい様になっていた。

が、そんなの二人には関係ない様で、霊夢はヒヨイヒヨイと無駄な力を抜いて避け、魔理沙はスペルカードを宣言する。

「彗星『ブレイジングスター』！」

そのスピードを使って、身軽にどんどんと避けていく二人に、神子は楽しそうな笑顔を浮かべ始める。

（ああ……この弾幕ごっこというのは、此処まで楽しい『遊び』だったのね……）

神子がそう思っていると、それを見て不思議そうな顔を浮かべる外野にいる屠自古。

「……太子様は、どうしてあんなに楽しそうなのでしょうか？」

その言葉を聞いたミコト、葵、歩は互いに顔を見合わせると、少し笑みを浮かべる。

「……霊夢や魔理沙といると、自然とそうなるんだ」

「そうですね。霊夢や魔理沙だけでなく、弾幕ごっこをしていると、自然とそうなるものです」

「まあ、それでもあの二人としての方が、楽しさは倍になるかな」

「二人とも、弾幕ごっこをしている時などに生き生きとしていますからね」

その三人の言葉に屠自古は少し目を瞬かせていたが、直ぐに柔らかな表情を浮かべて神子達の弾幕ごっこを見る。

その会話の間に神子のスペルカードはブレイクされており、魔理沙がスペルカードを宣言しようとしていた。

「恋符『ノンディレクションナルレーザー』！」

すると、魔理沙を中心として、赤、青、黄、緑、紫の五色のレーザーが時計回りに回り始め、それと同時に色鮮やかな星型弾幕が放射状に



ばら撒かれ始めた。

それを神子は勿論、避け始めるが、そのレーザーが二つずつに分かれたと思えば今度は反時計回りに回り始める。

それに驚きつつもその回っている通りに移動していると、ふと気付く。

霊夢がいない事に。

しかし、気付くのがほんの数秒遅かった。

既に霊夢は神子の真後ろにいた。

「これで終わりね」

「……もう少し、続けたかったわ」

「そんなの、この幻想郷にいればいつでも出来るのよ。霊符『夢想封印

集』！」

その虹色の光は瞬く間に神子を飲み込み、終わる頃には神子は膝を着いていたのだった。

\*\*\*

弾幕ごっこが終わると直ぐに、屠自古と布都は直ぐに神子の元へ行き、容体の確認を始める。

「太子様！……無事ですか!？」

「お怪我をなされております！速く治さなければ……」

それをミコトと葵は治そうと近付き始める。

……が、それは突然の地震により、阻まれる事になった。

「!？」

「じ、地震!？」

「あのクソ天人！また地震を起こしたの!?!面倒事を増やさないで全く!」

「……いえ、霊夢。これは、天子さんの仕業ではありません」

「……葵がそう言う、てことは……」

「……別の原因」

そんな風に全員が話している中、鬼灯と永久、ミコト、そして葵だけが険しい顔をしていた。

それは、これから訪れる事を、現れる者を感じているからだ。

そして、地割れが起きた瞬間、そこから斬撃が飛ばされる。  
その斬撃が飛ばされた方向は……妖夢。

「……え？」

妖夢があまりに突然な出来事に身動きが取れずにいると、遂にそれは妖夢にの目前まで来た。

——しかし、それは鬼灯と永久が互いの剣で消し飛ばした。

「……どうやら、厄介な奴が復活したようだ」

鬼灯がそう呟きながら見据える先には、一人の男がいた。

苛烈な装飾が付けられた麻の服、カラフルな勾玉を幾つも付けたネックレス、それらを付けた男は不機嫌そうな顔を隠さずに言葉を放つ。

「人が気持ちよく寝ているその上で、ギャアギャア騒いでた奴は何処のどいつだ？」

その獣にも似た鋭い眼光に睨まれ、想起と早苗の普通に近いコンビは怯むが、他は怯まずにその男を見据えている。

そして、騒いでいた霊夢は全員よりも一歩前に出て、言う。

「それは私よ。それが何？あんたがいるなんて知らないし、そんなとこに寝てるあんたが悪いわ」

霊夢のその返答を何処まで真剣に聞いたかは分からないが、男は不気味な笑みを浮かべ、ケタケタ笑い始めた。

「ああ、そうかい。なら……消えな！」

その一言が全員の耳に届いた瞬間には斬撃が飛ばされており、既に霊夢との距離は約30cm。

霊夢も驚きすぎて身動き取れずに立ったままだったが、その霊夢の前には葵が立ち、結界を張る。

が、その結界はまるで紙の様にいとも容易く斬られ、霊夢と葵は後ろの壁まで吹っ飛ばされてしまった。

「葵！」

「霊夢！」

「……お前！」

ミコトと歩が直ぐに二人に駆け寄り、ルカはまるで親の仇を見る様

な憎悪の目で男を睨みつける。

そして、氷柱を創り、投げ飛ばそうとすると、それを鬼灯が制した。

「……久しいな、『日本武尊』」ヤマトタケルノミコト

「ああ？……あゝ、なんか見た事あんなく、お前」

「一応は会っている。私とお前は。まあ、お前は忘れていても、私としてはなかなか忘れられなかったただけだ……その、あまりにも強大で暴力的な力をな」

そんな二人の会話を聞いた外の世界出身の三人は驚いた様な表情をしていた。

「え!？」

「……あの、『日本武尊』!？」

「……」

その三人など気にしていない様子で欠伸をしていると、男の前に額に青筋を浮かべた歩が立った。

「……お前、霊夢にあんな理由だけで……」

その後ろでは、既に怪我が治っている葵が怒りから体を小刻みに震わせているが、それは男には見えていない。

男はまたケタケタ笑いながら喋り始める。

「人の寝ている所を邪魔した彼奴が悪い。というより、彼奴はもう既に気絶してんのかよ。全く。人を起こしておくながら喧嘩にも付き合えねえのかよ。弱い奴だな」

その一言は、歩の怒り度合いを更に上げるものとなった。

「……俺は、お前を許さない!俺が相手をしてやる!」

その後ろから、葵もやって来ると少し後ろに立つ。

「……歩さん。何処までサポート出来るか分かりませんが、私も参加します。良いですね?」

その物言いは葵を知ってるものからすれば中々に珍しいのだが、それはつまり、葵の怒りもまた強いということを表している。

そして、それに歩は頷くと、『日本武尊』を見据えた。

そんな二人を見ながら『日本武尊』はケタケタ笑い、言い放つ。

「良いだろ。この『日本武尊』こと『天叢雲 白斗』を知った上でのその行動。何処まで俺に通用するか、見てやるよ！」

白斗はその場の全員にプレッシャーを掛けながら、そう言ったのだった。

## 第二百一十一話

戦い開始直後、白斗が自身の持つてる剣を下に勢いよく振り下ろす。

すると、普通の人では目視すら出来ない速さの斬撃が飛ばされたが、それを歩と葵は分かれて回避した。

そこから歩は直接、蹴りを入れようとしたが、それは蹴りを入れた方の足を掴まれた事により失敗し、そのまま歩は葵の方へと投げ飛ばされた。

「うわあー！」

「!?きやあー！」

葵は投げ飛ばされてきた歩とぶつかり、そのまま壁まで飛ばされる。

「っ……大丈夫ですか?歩さん」

「ああ、俺は大丈夫だ……」

葵は歩の怪我の心配をすると、歩からその返事をもらい、安堵の息を吐いた。

が、直ぐに前を見ると、拳を構えている白斗が目の前まで来ていることに気づき、歩を右へと突き飛ばし、自身はその勢いそのまま地面に倒れる様にして回避すると、その頭上を白斗の腕が通り、そのまま壁へと貫通する。

「葵!早く移動しろー！」

「遅いー！」

「っ!？」

歩の言葉に移動をしようとした葵だが、既に腕を引き抜いていた白斗に腹部目掛けて蹴りを入れられ、歩の意図とは違う移動をさせられる事となった。

「ゴホッ！」

「葵ー！」

葵がそのまま四つん這いになり、血反吐も吐いている姿を見て、白斗は首を傾げた。

「ん〜？おかしいな。今の蹴りは軽くても内臓破裂は楽にしてたはずの威力だったんだがな……」

葵はその疑問に返答出来ない重傷を負っている状態で、答えることはしなかったが、警戒した目で白斗を見ていた。

「おいおい、答えることも出来ないのかよー！」

白斗はそう言っつて、其処から足に力を入れ、葵の方へと飛ぶと、葵はそれを見てスペルカードを宣言する。

「っ呪術『鬼呪封印』！」

その宣言で白斗を札が縛るが、

「しやらくせえー！」

それは白斗の無茶苦茶な力だけで破られてしまった。

「なんだ？ただの紙切れで俺を縛れると思うなよ？」

「……いえ、一瞬だけでも良いんです」

「は？」

白斗は呆れた様な様子を見せる。

その後ろでは歩が丁度、釣竿を構えながらスペルカードを出していた。

「同行『スピリット流れ星シュート』！」

そのまま釣竿は白斗に真っ直ぐ投げられ、当たる直前で白斗がその手で釣竿を掴んだ。

「おいおい、こんな『遊び』で……」

白斗はそう言いながらも釣竿をまるで槍を持つように構える。

「俺に勝てると思うなよーほらー！返してやるよー！」

そして、叫びながら丁度跳躍していた歩に向けて投げ返す。

「っ!？」

歩はその状態ながらも急遽、飛行する事にし、その釣竿を回避し、結果として壁に突き刺さった釣竿を引っこ抜くと、臨戦態勢を取った。

変わって白斗は何処かつまらなそうな顔をしていた。

「おいおい、さっきから変な紙構えて、技の名前を唱えてよ……そんなつまんねえ『遊び』で俺に勝てると思っつてんのか？もつと俺を愉しませろよー！」

白斗はそう言って歩に向かって跳んでいくと、構えていた拳で歩を殴る。

歩は防御の構えを取っていたにもかかわらず、その威力に耐えきれずに、また壁に向かって飛ばされるが、その一歩手前で膝について止まった。

「歩さん！治癒『太陽鳥』！」

葵は橙色の鳥型弾幕を歩に向けて撃ち、それが歩に当たると歩の傷が治った。

それを見て、白斗は納得したように頷き始めた。

「あく、なるほど。さつき、内臓破裂の威力を受けておきながら平気だったのはそういう事か」

白斗はそう言って今度は葵の方へと近付くと、後ろへと移動しようとする葵を即座に掴み、首に手を掛けるとそのまま空中に上げた。

「ぐっっ！」

「俺を捕まえる事もできない弱い奴だが、補助なんて面倒だからな……此処で退場してもらおうじゃねえか」

そう言って、手に力を入れ始め、逆に葵はどんどんと苦しみ始める。

「ぐっ……うっ……」

「葵！」

「貴様っ！」

霊夢を治しているミコトとルカが外野から今にも参加せんとする気迫を出し始めるが、その二人を止めたのは、その霊夢と鬼灯だった。

「鬼灯！どうして止める！葵が！葵が！」

「落ち着け！ルカ！ミコトもだ！」

「だが！葵が今にも……」

「歩を見る！」

その言葉に従い、怒りを奥に仕舞いながらも歩を見ると、歩は一枚のカードと釣竿を手に持っていた。

その手は怒っているからなのか、震えている。

「その手を……離せ！」

歩がそう言って釣竿を投げるが、それは白斗に片手で容易く払われ

てしまう。

それで効かないと知ると、直ぐにカードを宣言する。

「極彩……『極限天生』！」

その宣言後、歩が虹色に輝き、その勢いのまま白斗に近付くと、そのまま殴る。

白斗はその威力が強過ぎたせいなのか、葵を離してしまい、壁にまで飛ばされ、激突する。

「ぐっ！」

壁がその威力を物語るようで壊れ、瓦礫が白斗の上から降り注ぐが、白斗はそれを気にしていないかのように前を見る。

そこには、虹色に輝く歩がいた。

「白斗、お前はやり過ぎた……だから、俺はお前を、許さない！皆んなの力でお前を倒す！」

その言葉と同時に光が増し、その部屋一面が光に覆われた。

そして、光が消えると、そこにいたのは、虹色のマントをはためかせた歩がいた。

\*\*\*

同時刻。

紅魔館では光冥がいつも通りに掃除をしていた。

「うん、此処も綺麗になってきましたね。あと少し、頑張りましょう」

そして、掃除を再開しようとする、急に自身の武器が青く輝き始めた。

「え!?!」

光冥がその光に驚いている間に、その武器は消えてしまった。

\*\*\*

それは神霊廟にいる永久にも起こっていた。

「なっ!?!」

永久の武器が白く輝くと、球体となって歩に向かっていく。

「え、永久の刀が……」

隣にいた妖夢も驚いているが、時は驚いている時間を与えない。

白斗もまたそれは同じ。驚いている時間など、ありはしない。



歩の周りに幾つかの色の球体が集まると、それは全て歩の中に入っていく。

そして、歩は自身の釣竿を構えると、それをまずは投げ付けた。

それは白斗に払われてしまったが、その白斗が前を向く頃には、二つのブーメランが目前に迫っていた。

「なっ!?……がっ!」

それは白斗に当たるとその身に傷を付け、投げた本人へと戻っていく。

想起はそのブーメランに身を覚えがあつた。

「アレは……雷羅さんのブーメランだ!」

「テメエ!」

白斗が剣を持ち、歩に向かって飛ぶと、次に歩は永久の刀を出し、それを受け止める。

「次は永久の刀!」

「凄いです!想起さん!今の歩さんが凄すぎます!」

「うん!まるで、仮面○イダーみたいだね!早苗!」

「はい!まさか現実で、しかもリアルで見れるなんて!」

「お前ら、緊迫感を持って……」

早苗と想起の興奮状態を鬼灯は呆れたように注意する。

そして、その視線を今度は想起の隣にいる黒龍に移す。

そこにいる黒龍もまた興奮しているのか、はたまた何かに反応しているのか、想起の周りを飛び回りながらも鳴き声をあげている。

(……アレに反応しているのか?ソロモンは)

鬼灯はそう思考しながら視線を戻すと、そこには永久の剣といつ出したのかも分からないが、絶月の槍を出して白斗を押している歩の姿が見れた。

「くっ!この野郎!」

白斗が剣を大きく振り上げ攻撃しようとするが、それはどう考えても間違いである。

その大きな隙を歩は見逃さずに、その腹部に向けて全力の蹴りを放つと、またもや飛ばされるが白斗。

白斗はその腹部を抑え、息を荒くしながらも歩を見ると、既に剣と槍を消し、凱火の大剣を持つ歩が目に入った。

歩はそんな白斗の姿を見ながら大剣を地面に突き刺すと、その地面が割れはじめ、割れたところから火柱が立ち始めた。

そして、その火柱に飲み込まれるかという直前で白斗は避けるが、其処には既に歩が虹色に輝く釣竿をまるで剣の様にして持ち、振り上げていた。

「これで、終わりだ！」

その言葉を最後に歩は釣竿を振り下ろし、白斗を一刀両断した。

「ぐあああ！」

白斗はそれを諸に受け、大ダメージを受けた為か、その場に倒れ込んだ。

「……はあ、はあ……ちっ、俺の……負けだ」

白斗のその言葉により、今、この勝負は決着を迎えたのだった。

## 第二百十二話

神靈廟での異変解決後の翌日、いつも通りに博麗神社で宴会が行われた。

「……また、うちで……」

「ま、まあまあ！片付けとか、ちゃんと手伝うから！」

「俺も手伝うから、元気を出せ」

宴会代でお金が消えていくことに嘆く霊夢を、葵とミコトの二人で慰める。

その三人以外は既に飲んでおり、もう呑み倒れている者までいた。そんな宴会の中にも、今回の異変主である神靈廟組は混じって飲んでおり、布都以外はまだ酔ってすらいなかった。

その布都だけは既に酔っ払い、その場で寝始めている。

「もう、布都は相変わらずお酒に弱いのですね……」

「全く。これぐらいで酔うとは……」

神子がちよつと楽しそうに笑っている横では、屠自古が少し呆れたような口調でそう言いながら、盃にお酒を汲み、飲んでいた。

神子は神子で白斗にお酒を汲みながら自分にも入れ、呑んでいた。

その神靈廟組に近付く影が一つ。

雪華だ。

「……ふくん」

「……おい雪女。何こつちジロジロ見てるんだ？」

白斗が雪華のその視線に対して文句を言うと、雪華は笑顔を浮かべた。

「いや？あんたの事を『付喪神』かなとか思ってたけど、違うみたいだね」

「俺が付喪神なわけないだろ？」

「日本武尊だっけ？霊夢とかから聞いたけども……うくん、でも……」

雪華はそこで唸りながらも一度白斗を見て、嬉しそうな笑顔で言った。

「何だろうね、気が合いそうな気がするよ！あんたとは！」

それには白斗も同じなのか、何も言わずに立ち上がり、何故か互いに手を握った。

「……何故でしょう？今、厄介なタッグが出来た気がします」

その間に挟まれるようにして座っている神子はそんな事を呟いていた。

そんな時に、雪華の後ろからアルカが少しニヤニヤした様な表情でやって来た。

それに雪華は訝しげな表情をすると、問い掛けた。

「あんた、なにニヤニヤしてんの？」

「いや？雪華。実はお前にサプライズがあつてな……」

「サプライズ？」

「そうだ。どうしても久しぶりに会いたい、と言っていたから連れて来たんだ」

「へへ、一体誰を……」

雪華が最後まで言う前にアルカは体を横にズラすと、その後ろにいたのは、さとりやこいしの様な目玉が二つ浮いているサトリ妖怪『古明地 ひかり』だった。

「久しぶり。それで早速質問が……」

「にくげるんだよ〜！」

ひかりが久し振りの出会いから早々に質問をしようとすると、雪華はその場から脱兎の如く逃げ出した。

「待ってー！どうして会って早々の人と、直ぐに気が合いそうだと分かったのー？」

そのひかりはアルカにおぶられた状態で雪華の後ろを追っている。ひかりをおぶっている方であるアルカは何処か楽しそうにニヤニヤと笑っていた。

「質問に答えてよー！」

「面倒くさいから付いてくんなー！あと、アルカもそいつ降ろせー！」

「だが断る！」

「お前覚えてろよー！」

そんな三人のやり取りについつい笑ってしまう周りに、何処か微笑ましく見ているミコト。

「ミコトお兄ちゃん、今回の宴会、楽しめていますか？」

葵がミコトに対して何処か心配そうに問い掛けてきた為、笑顔で頷くと、ホッと一安心した様で一息吐いた。

「……そういえば、葵は飲まないのか？」

「えっと、私はお酒が苦手なので……」

「そうか……」

「あ、でも、ほんのちよつとなら大丈夫ですから！」

葵がミコトに気を遣ってか、一緒に飲みたいからか、そう言うと、ミコトは逆に心配そうな顔を向けた。

「大丈夫なのか？無理はしない方が……」

「大丈夫です。苦手なだけで、飲めないわけではないですから」

「……分かった」

ミコトはそう言つて盃に少量のお酒を入れると、それを葵に渡した。

「それじゃあ……お疲れ様、葵」

「はい、お疲れ様でした、ミコトお兄ちゃん」

二人はそれで乾杯しあつた。

\*\*\*

騒がしい宴会の様子を、レティシアは少し離れた木の上で見ながら酒を飲んでいた。

その全員の表情を見て、レティシアは何処か安心した様に笑顔を浮かべている。

「……さてと、今回もひと段落したけど……直ぐに異変がまた起こるわね」

レティシアがそう呟いた理由は、直ぐ先の未来を能力で『見透かし』た結果である。

レティシアが見た未来……それは、人々から『希望』が失われてしまう異変。

(あのクソ悪魔が喜びそうな異変だけど……まあ、こんな小規模なも

のじや彼奴が出張る事はないわね)

レテイシアはそう考えてまた飲もうとする時、急にある事を閃いた。

「クスクス、そうだわ♪ちよつと肩の力を抜いてもらう為にも、前々から考えてた『アレ』でも開催しましょうかしらね♪」

レテイシアはそう言うのと、想像しただけでも愉快なのか、楽しげに笑って飲んだ。

「クスクス、面白いことは、やっぱり皆んなでやらないとね♪」

レテイシアは其処で飲みながら、やる事の内容を事細かに考え始めた。

それが、参加者にしてみれば『地獄』であると分かっているが……考え、飲み続けるのだった。

## 日常

### 第二百十三話

幻想郷の夜。それは、妖怪達が活発に動き出す時間でもある。

それは、妖怪だらけの紅魔館でも例外ではない。

いや、此処ほど妖怪が多い所で、妖怪達が活発に動かないわけもない。

そう、満月でもあるこの日に。

「というわけで！私達がまだ眠たくないから話をしようよ！」

「いや、唐突過ぎるだろ。ユニ」

従者達の休憩室では、ユニのイキナリの発言にペスの左隣にいるギルがツツコミを入れていた。

「まあ、確かに私や朱鳥、くおんとかは眠くはないけれど……」

「……一人、寝そうだがな」

ユニの左隣にいるペスと、紅葉の右隣にいるくおんがそう言いながらその右隣に目を向けると、こつくりこつくりと寝そうになっているマリアがいた。

その右隣にいる狼はその様子をしっかりと知っていた為に少し厳しい視線をユニに向けると、ユニは申し訳なさそうに椅子に座った。

「えく……折角紅魔館での主要な従者達が集まったのに、何も話さないとかないよく……眠くもないし」

ユニが少し頬を膨らませて言うが、それでマリアの眼が覚めるわけでもなく、ドンドンと眠りの淵へと落ちていく一方である。

「……仕方ない。なら、マリアを寝かせるか、もしくは……」

「封印を解くか？」

狼の言葉に続けて光冥の右隣にいる紅葉がいつも通りの笑顔で言うとうと、狼は頷く。

それにユニが心配そうな目で真向かいにいる光冥とその左隣にいる咲夜を見ると、二人とも頷いた。

「私達は大丈夫よ。以前の様に油断しないし、今のマリアなら何もし

てこないでしょう」

「自分もそう思うよ」

「ありがとう！二人とも！」

ユニがお礼を言つて狼に視線を向けると、狼はそれに頷いた。

そして封印を解き、本当のマリアが出てくると、今度は狼の向かい側にいる筈の絶月の方に目を向けると、既にいなかった。

「ちよっ!?!何処に行ったの!?!」

「彼処だ」

朱鳥が顔を向けた所には、既に出て行こうとしている絶月がいた。

「待つて待つて待つて待つて！」

「……ちっ」

ユニが必死に止めると、それに舌打ちが返ってきた。

絶月は不機嫌そうな表情を隠さずに顔を向けると、ユニが必死な顔で懇願を始める。

「お願い！付き合つて！従者同士の話に！」

「断る。誰がそんな面倒くせえ事に……」

「バナラアイス出してあげるから！」

「デメエら何ボサツとしてやがる。さっさと話を始めるぞ」

ユニが絶月の大好物を取引の条件として出すと、絶月は直ぐに席に座りなおした。

「……お前、本当にちよろいな」

「うっせえ。何か悪いか？」

「いや、別に。お前らしいなと思っただけだ」

朱鳥と絶月が会話している間にユニはバナラアイスと自分の饅頭を能力で出し、食べ始めた。

其処で会話が始まる。

「それにしても、会話と言つても何をするの？ユニ」

ユニの右隣にいるシファがユニに問いかけると、ユニは少し考えて思いついた様に顔を輝かせた。

「それじゃあ！互いに聞いてみたい事とか！」

『ない』



「え〜！」

ユニの案は、シファ以外の全員が同時に否定した事で却下となった。

「当たり前だと思うわよ？全員が此処にずっと住んでるのだから」

ペスの発言は確かに正論で、それに意見を返す事が出来ないユニはそのまましょんぼり状態で座ると、ギルが狼とマリアに顔を向けた。

「そういうえば、以前に告白して付き合い始めた二人だが、アレ以来、なんか進展してんのか？」

それに互いに見合うマリアと狼。

「進展……」

「……あつたかしら？」

「……いや、今まで通りだな」

「そうよね。それ以上もそれ以下もないわね」

「だな」

「いやいや！キスとかぐらいはしろよ！」

ギルが二人にツツコミを入れるが、狼もマリアも訝しげにするだけである。

「いや、必要か？」

「別に、今まで通りがそもそもそういう関係みたいだったのに？」

「いや、そうだけど……つて、自覚あつたのかよマリア!？」

ギルが今度はマリアに驚きの顔を向けると、マリアは鬱陶しそうな顔を向けた。

「当たり前よ。表の方の私は気付いてなかったようだけどね。……気持ちの悪いぐらい純粹だから。ああ、自分の事ながら吐き気がするわ……」

マリアがこめかみを指で抑えている姿を、狼は済まなそうな顔で見つめていた。

「……すまない。だが……」

「別に、謝らなくていいわよ。貴方の方がきつと正しいから。……まあ、私は許しはしないけどね。彼奴らの事も……人間の事も」

マリアはそう言って咲夜と光冥、絶月を睨み付けるが、咲夜と光冥

は動じず、絶月は逆に睨み返した。

「……殺れるものならやってみる。俺は何度でも復活するがな」

「本当に厄介よね、その能力。……まあ良いけど。だからあの朱鳥と結ばれたんだろうし……」

「マリアが今度は朱鳥に向けると、朱鳥は一人茶を静かに飲んでいった。

「死なない者同士だから良かったわね。ずっと好きな人と一緒に居られるわよ？……まあ、貴方は厳密的には死なないわけでもないようだけれど」

「だが、俺は朱鳥を一人残して逝く事は一生ねえよ」

「……ふくん」

「マリアは髪をいじりながら納得したように言うと、そのまま続ける。

「だけど、人の心も気持ちも、時間が過ぎれば薄れていくものだけ？妖怪は結構執着する所があるから朱鳥は問題無いとして、それが貴方に可能かしらね？見ものだわ」

「マリアが試すような笑みを向けると、絶月はマリアを睨み付けながら返す。

「……俺が朱鳥を嫌う事なんて一生ねえよ。この魂に賭けても良い。こんな良い女、何処にでもいる訳でもないのに俺から捨てる訳もないだろ」

「お、おい絶月！流石に恥ずかしいからそこで止めろ！マリアもだ！」  
朱鳥は顔を赤くして二人の間に入るが、絶月の睨みとマリアの笑みは消えない。

「……予想した通りの事が起こったな」

「あはは、そうだね、くおんちゃん」

「そのやり取りを近くで、紅葉とくおんはそう話している。

「その間にペスは咲夜にある一つの質問をした。

「そういうえば、私達は咲夜や光冥の現在より前は知らないわね。どんな感じだったの？」

「自分は……復讐鬼でしたね……」

「……あのルカみたいに？」

「いえ、それ以上ですよ。そこからレティシア様に拾われ、勝負に負け、今に至ります」

「……レティシア様と戦ったんだ」

「ええまあ。あっさり負けましたけど……今でも不思議なんですよね。自分が攻撃したと思った筈なのに、既に組み敷かれてましたから……」

「……本当にチートだよねえ、レティシア様」

ユニが乾いた笑いを浮かべて、光冥もそれには苦笑するしかなかった。

「それで？ 咲夜は？」

ペスが聞くと、咲夜は肩を竦めた。

「別に面白いものでもないし、面白くもないわよ？ だって、孤児院出身で、そこから出て、それでレミリアお嬢様に拾われ今に至ってるだけだもの」

「へ〜！」

「まあ、あの孤児院も此処みたいな所で、離れると決めた時には少し寂しいものもあったわね……」

咲夜のその発言で過去が少し気になったのか聞く事にしたユニ。

「ねえねえ？ その孤児院ってどんな名前？」

「言ってもわからないから名前は言わないけれど、そうね……私みたいに少し異常な子達が多かったわ……特に異常だったのもいたし……」

「特に異常な奴？」

「ええ。人殴っただけで壁三個分以上壊すし、石投げただけで普通に地面が陥没するし……同じ名前を持った奴だったけど、私以上に異常ね……」

「なにそれ本当に人間？」

ユニが冷や汗を垂らしている隣では、シファもまた冷や汗をかいていた。

「いや、寧ろ……」

「人外、もしくは怪物じゃないの……」

ギルとペスも冷や汗をかいていると、ようやくマリアと絶月のらみ合いが終わったのか、聞いてなかった組が首を傾げていた。

ユニはそれで一度話を区切るために両手を打ち合わせると、話題を振った。

「そういえばさ、レティシア様がまたなんか計画立ててるみたいだけど、みんな知ってる?」

「内容の事なら俺もペスも知らねえ……他は?」

ギルの問いに全員が知らないと返ってきた。

「まあ、そうだよね。前の『幻想郷式持久走』だって、当日の一週間前に伝えられたし……」

「それ以前のイベントの紅魔館勢だけでの『札取り合戦』だと、本番一日前に伝えられたものね……今度は何時に伝えられる事になるのかしらね……」

「いや、札取り合戦ってなんだよ。俺達、その時にいなかったからやってねえんだが?」

そのイベントに狼を除いた男勢が興味津々に聞くが、他は何処か遠い目をしていた。

「……聞かない方がいいし、やらない方がいいよ……アレは」

「そうね……ただの『遊び』で済む話じゃなかったわ」

「妖精達が何人犠牲になったか……」

「ギブアップも認められないから疲れても休めなかったな……」

「負傷者も出たしな……レティシア様がその後すぐに治してくれたが」

「貴方達は負傷しただけで良いじゃない。表の私なんて転けて、その先にあつた壺を頭突きで壊した拳句に気絶したのよ? 私、お笑い芸人じゃないんだけど?」

「本当に……血で血を洗うイベントだったわ……」

上からユニ、ペス、くおん、朱鳥、狼、マリア、咲夜が言うと、話を聞いていた何人かは同情の視線を向けた。

「……本当に『遊び』じゃねえな、それ……」

「もはや『修行』ですよ……」

「レテイシア様の考えるイベントは、実は全部『修行』なんだろうね……次はどんなイベントなのか、色んな意味で楽しみだよ……はあ」

ギル、シファ、光冥が三人して溜息を吐いた頃には、既に全員に眠気がやって来ており、そこで漸くお開きになったのだった。

## 第二百十四話

ある日の幻想郷では、珍しく博麗神社に人が賑わっていた。  
……いや、人というよりも大半は妖怪なのだが。

それでも、この幻想郷では見慣れない人までいる。

例えば、如月の世界にいるメイド二人。

例えば、武楽の世界にいる、元はフランドールの狂気の塊。今は人が一人。

例えば龍と話しているもう一人の男。

その元達は大半が客として呼ばれたのだが、龍とそ話している男は『参加者』として呼ばれた。

そう、今から始まる『遊び』の参加者として。

「クスクス、皆んな、集まったわね」

レティシアはマイク越しでもいつも通りに笑うと、それに気付いた全員が前を見る。

「クスクス、それじゃあ、今から『遊び』を始めるわね♪」

「あの、レティシアさん？私もルカも、そして他の皆さんも、何をするのかを聞いていないのですが……」

葵がレティシアに質問すると、レティシアはやはり何処か楽しそうに答える。

「クスクス、そういえばそうね。まあ、『参加者』に教えたら確実に断れるだろうと思って言わなかったのだけどね♪」

「は、はあ……」

葵が首を傾げているが、レティシアはそれを気にせず続ける。

「クスクス、それじゃあ、第一回『双六大会』を始めましょうか♪」

『断る！』

そのレティシアの一言に、如月、竜希、そして龍と話していた青年、『十六夜 暁』が断りを入れる。

「クスクス、あらあら、始める前から断らないで♪絶対に楽しいから♪」

「いやいや、そう言われても、俺まだ覚えてるからな!?!この前のあの地

獄をー！」

「俺なんてさつきから嫌な予感しかしてないからね!?嫌だよ!?しないよ!」

「俺もこの男と同感だ!さつきから嫌な予感しかしない!」

その三人が必死に嫌だと懇願するが、レティシアは綺麗な笑顔で真実を言う。

「クスクス、残念だけど、強制参加♪」

その言葉に如月は何とか次元を渡ろうとするが、其処にレティシアが言う。

「クスクス、昨夜、凜華に貴方が今からするのが終わるまでに帰ろうとするのを邪魔してくれたら、幾らでも食べたいものをあげると交渉したから無理よ♪」

「くっそー!」

確かに、今は凜華が外に出てきて如月の首根っこを捕まえているために、動けなくなっている。

渋々といった様子で参加することにした三人を見て、レティシアは続ける。

「クスクス、それじゃあまずルール説明ね♪ルールはいたって単純。あの正月に遊ぶ双六と大差ないわ。そして、止まったマスの指示通りにする。しない場合にはペナルティね♪」

「ペナルティって何するの?」

「クスクス、その人が嫌うことを強制的にやらせる♪」

竜希の質問にレティシアが答えると、竜希は本当に嫌そうな顔をする。

「クスクス、悪いけど、私だって心が痛んでるのよ?けれど、こうでもないしと貴方達、しないでしょ?」

「俺はしてもいいんだけど……」

晴夜の答えにレティシアは嬉しそうに笑うと、続ける。

「クスクス、マスは50マス。勿論、マスを進めるマスとか戻るマス、休みマスもあるわ。ね?そんなに双六と大差はないでしょう?」

「……一つ質問があるんだけど」

其処で、この中ではまだ幼さが残る少年、『立花 火冬』が手を挙げると、レティシアは笑顔を向ける。

「クスクス、何かしら？紫の家族さん？」

「火冬って呼んで」

「クスクス、分かったわ、火冬。それで、どうしたの？」

「能力は使用していいの？」

その質問にレティシアは首を横に振る。

「クスクス、それは無し。使用出来たら面白くないでしょ？」

「うん、分かった」

火冬はそれに納得すると下がる。

レティシアは他に質問する人がいないか確認すると、綺麗な笑顔を浮かべる。

「クスクス、質問は随時受け付けるわ。勿論、始まった後でもね♪それじゃあ……あ、取り敢えず司会を紹介しましょうか。私は今日は司会はしないからね」

レティシアがそう言つて顔を斜め後ろに向けると、其処には三人の姿があつた。

「クスクス、はい、自己紹介♪」

「はい！どうも！皆さんも知ってる、清く正しい射命丸です！よろしくお願いしますー！」

「僕は小唄や。よろしゅうな」

「初めましての方が多くですね。私は天之里水蓮と言います。烏天狗であり、天魔をさせていただいています」

三人の挨拶を終えると、レティシアはその手からクジとサイコロを出す。

「クスクス、さて、司会も揃ったから……まずは順番決めを始めましょうか♪」

その言葉を受け、参加者13名がレティシアの近くに集まり、一斉にクジを引いたのだった。

\*\*\*

「それでは！双六大会、スタートですよ！」



文のその声を合図に双六大会が始まる。

双六大会が行われているこの博麗神社では、マスが付け加えられた状態で、他は何も変わっていない。

そんな博麗神社を見れば、必ず怒るのが霊夢なのだが、今日の霊夢は何処か嬉しそうである。

「何で霊夢はあんなに嬉しそうにしているんだ？」

「さあな？」

岩槻の言葉に如月が分からないというように首を傾げていると、一番手である帝がサイコロを振った。

「さあ、どんな数字が出る！」

帝の期待した眼差しは、残念ながら敗れた。

最初に出たのは数字の1。

『おーっ?!?!一番手である帝さん、またもや同じ1番だー!』

『これは運が悪いな〜』

『ですが、まだまだ序盤です。まだまだ挽回は出来ますよ』

文、小唄、水蓮の言葉をよそに一マス進むと、赤いマスから文字と、それを読み上げる機械音が聞こえ始めた。

《一しか出せなかった貴方。可哀想なので6マス進む》

『おや、マスに馬鹿にされてますね〜』

『文、そんなことを言っではいけませんよ?』

司会の話など知らぬとばかりに帝は六マス先を進み、黄色いマスで立ち止まると、また機械音が聞こえてきた。

《女性は男装、男性は女装する》

「はあ?」

帝の驚きの声はなど御構い無しに状況は進む。

帝が光ったかと思えば、帝の服が男装ものから女性用の白いワンピースになっていた。

『おっとお?!?!帝選手、そんなマスに止まってしまったせいで、男性にもかわららずに女性ものを着てしまっているぞ?!?!その気持ちは如何に!』

『文、いいネタが手に入ったからってカメラ撮りながら実況戦でも。』

僕らが実況するのにな〜』

『そうですね。文、何でしたら貴女は撮ることに集中しますか?』

『いえー私も実況しますよ!あ!それから、その姿は一時のものなので、同じ内容のマスに止まったり、この双六自体が終われば戻るそうですよ!』

文の言葉を聞いても、誰も嬉しくない。

何故なら、その間ば女装、または男装を強いられるのだから。

「はあ、次は俺か……すっごいやりたくないな……」

二番手である如月がサイコロを振ると、出た数字は5。

その数字に従い、五マス進む。

「さて、何が出るんだ……」

そう言つて顔を上げれば、文字と機械音が聞こえる。

《腰が急に痛くなる。一回休み》

「地味な嫌がらせが来たな!」

如月がツツコミを入れたその直後、本当に腰に激痛がやって来た所為で動けなくなつてしまった。

『彼はまだまだ若いのに、此処でまさかの腰痛に悩まされる展開が来ましたよ!』

『腰痛は本当に痛いです……』

『天魔様も腰痛持つてるんですか?』

『ええ。さすがの私も良い歳ですからね……時々、腰が痛くなります』  
そんな会話をしている間に三番手のルカが片手で適当に投げると、

出た数字は1。

そして言われた通りに一マス進んだ。

《一しか出せない貴方。可哀想なので6マス進む》

そして今度は六マス進むと、また帝と同じ内容が出てきた。

《女性は男装、男性は女装する》

その言葉通り、ルカが光り、収まると、その姿はいつもの姿ではなく、紅魔館の執事服を着ていた。

「……いや、何で執事服なんだ。しかも、メガネのおまけ付き。動きやすいからまだ良いが」

ルカは腰に手を当てて溜息を吐いている間、文は実況を忘れてカメラを撮っていた。

そして四番手、武楽がサイコロを振れば、出てきた数字は3。

「おっと。何が出るんだ？」

武楽が三マスすすみ、青いマスに止まると、文字と機械音が聞こえた。

《心地よい風が吹いて爽やかに気持ちになる。五マス進む》

『おや、まともなマスですね。面白くないです』

『レテイシアにしては、確かにまともなマスですね』

司会がそんなことを言ってる間にも、武楽には爽やかな風が吹き、五マス進む。

そして、緑のマスに止まると、聞こえてきた。

《猫が集まり動けなくなる。一回休み》

「初っ端からかよ!?!」

武楽が叫んでいると、その足元に何かが頬擦りしてくる感触が……。

下を向いてみると、とても小さな三毛の子猫。

「……可愛いな、お前」

「ニャー」

武楽がつい、その子猫を抱き上げている間にも猫はどんどん集まってきており、遂にはその周りは猫ばかり。

その猫達を武楽は見渡し、一匹一匹撫でてやろうと考えたその瞬間、猫達が一斉に武楽に飛びついた。

「うわあ!」

それに驚いた武楽は思わず座り込んでしまい、猫達の下敷きになってしまった。

つまり、猫饅頭状態である。

『おっと、これは癒しですね〜』

『癒しやなく』

『まあ、彼にとっては癒しどころではないですが……』

まだまだ双六大会は始まったばかり。

一体何が起こるかは、レティシアにしか知り得ないのだった……。

## 第二百十五話

武楽が一回休みとなることが決定した後、順番は龍へと変わる。

「それっ！」

龍はそのサイコロを何の恐怖も持たずに投げると、出てきた数字は3である。

「あ、これ……」

『あの武楽さんと同じ結末になる事が、今！決定しましたー！』

『まあ、猫やけんまだマシや』

『そうですね……腰痛や果ては女装じゃないだけマシですね』

その解説の間にまずは3マス進んだ。

《心地よい風が吹いて爽やかに気持ちになる。五マス進む》

そしてまた5マス進むと、猫マスについた。

《猫が集まり動けなくなる。一回休み》

その機械の声の後に猫が集まりだし、結構な量が集まると一斉に龍に飛び掛る。

それに龍は耐えきれなくなり、猫達の中に埋もれてしまった。

『そういえば、今思いましたが、二人はあの猫達がどれぐらいいると思いますか？』

『そうですね、見た感じやと3〜500ちやいます？』

『私は700ぐらいかと……天魔様はどれぐらいいると思います？』

『そうですね……子猫もいる様ですからそれも合わせて少なくとも3000ですかね』

『私たちの倍ですか……』

そんな会話の間に次の順番がやってくる。

その次に振るのは晴夜である。

「せめてせめて猫マスにしてくれよ……」

そう願いながら振ると、出た数字は1。

その瞬間、膝を付く晴夜。

実況席では文が大興奮。

『おっとー……ここでまたも女装の犠牲者がー！』

『可哀想に……』

『男には……辛いもんや』

その間に晴夜は1マス進むと、機械音が響く。

《一しか出せない。可哀想なので6マス進む》

その指示に従い泣く泣く6マス進むと、遂に判決が言い渡される。

《女性は男装、男性は女装する》

其処で晴夜が光り、それが収まると姿が変わっていた。

その姿は、あの早苗が着ている巫女服へと変わっていた。

『おや？あの守矢の現人神と同じ服に……』

『前情報によると、彼は彼の世界で早苗さんと恋人だそうです！』

『そうなん？つまり、あの吸血鬼はんが気を利かせてくれたんやなく』

『気を使うところが違いますよ……』

その意見に、その場の全員が同時に頷いたのは間違いないことだろう。

「ぐっ……これじゃあ、お嫁にいけない……」

晴夜のその一言に、何処か同情しそうになる全員であるが、そんな事よりも早く終わらせなければと全員が決意し、再開する。

次の順番は岩槻である。

「それじゃあ、次は俺か……ああ、憂鬱だ」

そう言いながらもサイコロを振れば、出てきた数字は6。

「ん？まだ出てない数字だな……」

そう言いながらも6マス進む。

それが、地獄のマスである事も知らずに。

6マス目にある赤いマスに止まると、機械音がか聞こえてきた。

《蓬莱汁を飲む。一気に飲めたら6マス進む。吐いたり飲めなかったら強制的に罰ゲーム》

「蓬莱汁？なんだそれ？蓬莱の薬の亜種か？」

そんな疑問には誰も答える事は出来ない。

なぜなら、その場の誰も、そんな物を知らないのだから。

其処に岩槻の前に出されたジュース。

それを岩槻は見て、固まる。

そのジュースは、何処ぞのテニスアニメに出てきそうな色合いの重苦しい灰色のジュースだったのだから。

「おい待って待って待って待って！俺死ぬ！これ飲んだら死ぬ！いや、蓬萊の菓飲んだから死なないけど、精神的に死ぬ！」

その否定の言葉に文はニコリと笑って無慈悲な言葉を伝える。

『それでは、飲めないということでも罰ゲームを受けますか？それでしたらあの吸血鬼賢者も快く出てきてくれますか？』

「いや飲む。なんかそっちの方が嫌な予感するから飲んでやる！」

『その意気です！』

『終わったな……』

『ご冥福をお祈りします……』

その解説を聞き流しながら、グレーのジュースと向き合う岩槻。

その警戒度は数々の戦いのときと同じぐらい、いや、それ以上の警戒度でジュースを見つめ、それを一気に飲む。

しかし、直ぐにジュースを口から離してしまう。

『おっと、どうした岩槻選手！一気に飲もうとしたその手が止まってしまいましたよ！』

『なあ？天魔様……あの目、死んでへんか？』

『そうですね……』

その解説を聞き、全員が岩槻の方を見ると、死んだ様な目をしてそのジュースを持っている岩槻が。

「い、岩槻さん!？」

「岩槻!?!ぬおお！腰痛い！けど、岩槻よりもマシな気がしてきた！おい！平気か！岩槻！」

「なあ、あの男、大丈夫なのか？俺の能力で回復させたほうが……」

岩槻の後ろで葵、如月、ミコトが其々心配そうな声を上げるが、其処で岩槻の手が動く。

そして、その手はジュースを口元まで運び、一気に流し込んだ。

『岩槻さん！あの地獄のジュースを飲み始めた！あれだけの量を一気に飲んで、彼は果たして最後に生きれるのか!?!』

「縁起でもない事を言わないでください！文さん！」

文の実況に葵がそう突っ込んでいる間に岩槻はジュースを飲み干した様で、空の紙コップは手を離され、そのまま重力に従い下へと落ちた。

そして、岩槻もまた、その場に倒れた。

「岩槻さん!!」

「岩槻が死んだ!」

「この人でなし!」

「誰だそのネタ叫んだの!?!」

葵の後に間髪入れずにネタが叫ばれ、それに如月がツツコミを入れる。

その場は大パニックが起き、事態收拾はそれから暫く(約一時間)経った後であった。

まだまだ、この双六は終わらない。



## 第二百十六話

岩槻が蓬莱汁の脅威により気絶した後、葵とミコトが何度か介抱を望んだがそれは聞き届けられず、双六は無情にも進んでいく。

「次は誰だっけ？」

「……私ね」

火冬の問い掛けから葉が答え、スタート地点にいる者達より一步前に出ると、サイコロを手に持つ。

「あんた、気を付けろよ？この双六の鬼畜さに……」

「分かってるわ。ありがとう。あんな蓬莱汁とかいう毒物の犠牲者にならないように、祈りながら慎重に振らないと……」

暁の応援に葉は頷き、一度息を吸い込む。

そして数秒開け、覚悟を決めると、双六を振った。

そして出た数字は……。

「……4？」

『おつと？まだ誰も出していないマスですね』

『これは可哀想な目にあうマスなんか、それとも救済の道となるマスなんか……』

『レテイシアの事です。前者でしよう』

『お願い。希望ぐらいは持たせてよ……』

葉が溜息をつきながら4マス進む。そして、ピンク色のマスに止まると、文字と機械音声が聞こえてきた。

《告白チャンス！貴方が好きな人を暴露しよう！》

「え、ええええええ！」

葉の叫びに全員が同情する。

葉はこの幻想郷とは違う世界で、その世界にいる如月と恋仲にあるのだが、その関係はその世界では周知の事実となっている。

……が、此処では限られた者しか知らず、その如月はその事実を知らない。

つまり、一から大勢いるこの場で、叫ばなければならないのである。「せ、せめて、マイクぐらい……」

『レティシアさんが大声でしないと軽い罰ゲームをすると……』

「ならせめて本人だけとか!」

『それもそれで行動でバレるやないか』

『どちらにしろ、レティシアはそれを望んでないので、軽い罰ゲームが来るでしょう』

「というか、その『軽い』って、どの程度なんだ?」

暁の質問に実況者三人がアイコンタクトを交わすと、代表で水蓮が答える。

『そうですね……今この場にいる誰かと魂を交換したり、でしょうかね?』

「それが軽いの基準か?なら別に平気な気がするんだが……」

『それが、この場で誰よりも運が悪い人と変えたりしたとしてもですか?』

『その変えられた後、双六が何度もなんども蓬莱汁のあるところに当たっても、でしょうかね?』

「よし分かった。何も軽くないことが!」

暁のツツコミの間、栞は自分自身の精神と戦い、なんとか羞恥心に勝つと、言葉にする。

「……………よ」

『おや?聞こえませんかね……もう一度!』

「だ、から!如月、君よ!」

「……………え、俺!?!」

栞が顔を紅くして告白した相手は如月で、如月はそれに驚愕の顔をした。

『如月さーん。誤解を今のうちに解きますが、彼女が好いてる『如月』さんは、彼女の世界にいる貴方ですから、今いる貴方ではありませんよ?』

「わ、分かった……何だろう?この虚しさ」

如月が腰痛に耐えながら何かに負けた様な顔をしている間、栞は栞で顔を手で覆い、座り込んでしまっていた。

『さてさて、次は……ミコトさん!貴方だ!』

「俺か……遂に、来てしまったのか……」

文の言葉にミコトは空を見上げ、遠くを見る様な顔をしたながら青い空を見上げる。

「……み、ミコトお兄ちゃん。酷い結果にならない事を祈っておきます」

「……ありがとう、葵。俺の運が悪くなければ、そんな悪い結果にはならないだろう……多分」

ミコトは葵に答え、サイコロを振ると、出た数字はその場の全員が望む数字、3である。

それが出た瞬間、ミコトは無意識にガッツポーズをした。

「よし！女装回避！」

『……チッ』

「文、お前今舌打ちしただろ」

『ナンノコトデスカネー？取り敢えず、ゲームが進まないのだから早く3マス進んでくださいー』

「一気にやる気をなくしたな……」

ミコトは文の態度に溜息を吐くと、3マス進む。

《心地良い風が吹くいて爽やかな気持ちになる。5マス進む》

その指示が出て5マス進むと緑のマスに止まり、機械の音声と文字が出てくる。

《猫が集まり動けなくなる。一回休み》

その後、武楽と龍と同じ様に猫が集まり、それは段々と数を増やし、遂には猫の大群は一斉にミコトに飛び掛かり、体全体を舐め始めた。

「こ、こらー！そこはくすぐったいから舐め……！」

『さて、彼処でアニマルセラピーが起こっています、そんな面白さの欠片もないものは無視です！次です次！』

『文、本音を言いましたね……』

『文としてはネタが欲しいんやろなー』

『私にネタを下さい！新聞に載せさせてくださいー！』

文のその切実な願いは、しかし誰も領くことが出来ない。

領けば最後、この幻想郷で自身の失態とハジがバラされることにな

るのだから。

「じゃあ、次は僕だね」

ミコトの次に火冬がサイコロを振ると、出たマスは2。

『おっと。またもや出てないマスですね』

『今度はいつたい、どんな悲劇が……』

『悲劇じゃない可能性もありますよ、天魔様』

実況の声を無視し、2マス進むと、黄色のマスに辿り着く。

其処から文字と機械音声が聞こえてきた。

《お気に入りの茶碗が割れてしまう》

「……何これ。地味に悲しい」

火冬が何とも言えぬ顔でそう言っていた時、火冬の世界で火冬の茶碗が割れていたなど、この時の誰も知らぬことである。

## 第二百十七話

火冬が地味な嫌がらせマスに当たったあと、次の出番は竜希だ。

「イヤイヤ！俺、やりたくない！」

『なら罰ゲームしますか？私としてはそれもネタになるので嬉しい限りですが！』

『というか、あの竜希に罰ゲームしても、意味ないように思うんは僕だけなんかな？』

『いえ、多分、竜希さんには……他の皆さんと違い、精神的な御冥福を祈るような罰ゲームになるのではないかと……』

「それどんな罰ゲーム!？」

水蓮の言葉に竜希は反応し、その反応を見て、水蓮は少し考えるようにしてから答える。

『これはあくまで例えですが……蓬莱汁Lv3を10本、一気飲みとか、あるいはミコトさんの協力のもと、執事ミコトさんが一週間対応とか……』

「無理無理無理無理！それしたら俺本当に死んじゃう!!精神的な意味でも死んじゃう!!」

「がんばれ、竜希。安心しろ、お前の事は少ししたら忘れてやる」

「ミコちゃん酷くね!？」

『ホラ早く振ってくださいいよく?そしてネタを私に下さい!!』

「本心を隠す努力しようよ文ちゃん!!」

竜希が一通りツツコミを入れた後、仕方なさそうにサイコロを転がすと、そこに出た目は……6。

「ホラやっぱりー!」

『キターー!ー!ー!!ネタが来ました!!さあさあ!早く進んで下さい!!』

「文ちゃん一気に元気になったね!？」

竜希がツツコミを入れるが現実是不変変わらない。泣く泣くマスを進み、6マス目に止まるといつもの文字が現れる。

《蓬莱汁を飲む。一気に飲めたら6マス進む。吐いたり飲めなかった

ら5マス戻る》

そしてその場に用意されたのは、岩槻も飲んだあの凶悪汁。

「うわあ、飲みたくね〜」

『のーんーでーくーだーさーい!!そして私にネタ提供をーーー!』

「文ちゃん本当に素直だね?!隠す気0じゃん!」

『ほら早く飲みましょう!実際、早く飲まないとその双六、永遠に終わりませんよ?』

『竜希、ここは男として潔く飲むんや。腹決めい』

『しかし、少し楽しみですね。あの最強と呼ばれる方と最凶と呼ばれるその汁、果たしてどちらが強いのでしょうか?』

「それ漢字違いだからね?!真面目そうな水蓮ちゃんが珍しくボケないで?!俺でもこれに勝つことなんて無理だから!」

『おっと、まさかのあの最強が負けを認めましたよ?』

「俺の『最強』は戦闘で発揮されるもんなの!飲み物には発揮されません!てか、こういう時には確かに働いて欲しいけどね!主に俺の命の危機的な意味で!」

『もう本当にグダグダ言っていないで腹決めて一気に飲んでください!さあさあさあ!!』

文のその急かす様な声に、竜希は溜息を吐き、目の前に置かれているその凶悪汁を見る。そして、一つ唾を飲み込み、勢いよく掴むと、そのまま飲み始めた。その勢いはしかし、一度止まってしまった。

『おっと!やはりあの最強でも一気飲みはダメだったかー!』

「竜希さん!大丈夫ですか!」

「ああ、なんだか綺麗な光景が目の前にあるよ……綺麗な小川の向こうに花畑が……」

「それ渡つちやダメなやつだ!」

葵と如月の声が聞こえたのか、竜希はその幻覚から辛くも意識を戻し、もう一度、その真っ白になった顔で蓬菜汁を見据え、今度こそ、飲み干した。

『ついに、あの最強が……飲み干したー!』

竜希はしかし、そんな文の実況にツツコミすら入れず、そのまま静かに、ぶつ倒れた。

「た、竜希さー！ーん!!」

『ここでもさかの判明した事実！あの最強対最凶の戦いは、最凶の勝ちです！さあ！次行きましよう！次！』

文が次に目を向けたのは、葵である。

「……はい」

葵は一度、心配そうな視線を竜希に向け、その視線をサイコロに戻すと、それを両手で軽く振った。そのサイコロが地面に落ち、少し転がり、止まった時に出た目は……2。

「……そんな……」

『葵さん、これは神の遊びです。さあ、神様には従いましょう』

「いやこれ神様が考えついた遊びじゃないからな!!思いついたのあの吸血鬼だからな!!むしろ悪魔の卓上ゲームだろ!!」

暁のそのツツコミは、しかし文に聞き流される。

葵もまた、泣きそうな顔でニマス目に足を踏み入れると、いつもの様に文字が表れる。

《お気に入りの茶碗が割れてしまう》

それは勿論、この場にいる誰もが割れる場面など目撃できない。しかし、この幻想郷にいる住民、そしてレティシアを知っているものならばわかる事実がある。

「ああ……私の、茶碗が……あの金盞花が描かれたお茶碗が……」

『……御愁傷様です』

水蓮が同情するような視線を向けている間に、最後の出番である暁がサイコロを振った。そして、出たのは3。

『……面白みも何もないですねー』

「俺にとつては救われたような気持ちだよ……」

暁はホッとした顔でそのままニマス目まで進み、文字を見る。

《心地よい風が吹いて爽やかな気持ちになる。ニマス進む》

そして、文字通りにニマス進むと、また文字が現れた。

《猫が集まり動けなくなる。一回休み》

その文字が現れた時、猫が一匹、二匹と暁に近付き始め、最終的な数分からないまま、猫達は一齐に飛びかかり、暁を埋もれさせてしまった。

\*\*\*

双六大会は続き、中には神社に持つてるお金全部再選として寄付される竜希と岩槻の姿があったが、最終的な結果を言えば、一番を取ったのはミコトだった。

「クスクス、おめでとう、ミコト♪予想通りね♪」

「……予想通りでもなんでもいいけど、もう、疲れた……精神的な意味で」

「クスクス、あら、とつてもお似合いよ♪」

「……やめてくれ」

今のミコトは精神的な意味で体力が消費されている。しかし、その理由は、今のミコトが、着物を着せられているからだ。

「クスクス、仕方ないでしょう？ 貴方が女装マスに当たったんだから♪」

「……」

「クスクス、ちなみに、文は既にその写真を撮ってホッコリ中よ♪」

「文……後で絶対に追いかけるからな。それから、レティシアも、写真は消してくれ」

「クスクス、あらあら、暴露てるのね♪でも、私が消すと思ってる？」

「……はあ。ならせめて、ばら撒くのはやめてくれよ」

「クスクス、悪魔は容易く約束はしないわよ？ 守れない約束ならなおさらね♪まあ、善処はするわ♪」

「……はあ」

ミコトは遂に溜息を出した。それもそのはず、こんな風に言われては、もう疲れがピークなミコトには、反論するほどの余裕もない。

「クスクス、それから……あの屍はどうするのかしら？」

レティシアがそう言ってミコトの後ろに視線を向ける。それに合わせてミコトも後ろを振り向けば、其処には岩槻と竜希の屍がある。

この屍の経緯を簡単に説明すれば、この二人だけ、蓬莱汁マス全て



に当たったのだ。しかも、L v. 1だけに飽き足らず、L v. 2（蓬菜汁＋某テニス漫画汁）とL v. 3（L v. 2＋ゲテモノ料理入り）にもだ。

「クスクス、今は葵と如月がなんとかしてくれてるけれど、二人がいない貴方の世界では、どうするのかしら？」

「妖夢に返すさ。大丈夫、なんとかしてくれるはずだ」

「クスクス、そうね♪最強さんにとっては一番、癒しになるわね♪」

レティシアはそう言って終始クスクス笑っているが、その笑みを今度はまたミコトに向けた。

「クスクス、さて、一位にたどり着いた貴方には、贈り物を渡さないかね。はい、これ♪」

そう言ってレティシアが差し出した掌には、五つの宝石が綺麗に輝くネックレス。

「……カーネリアン、ジルコン、セレストライト、ダイヤモンド、ファイブプロライトか？」

「クスクス、ええそうよ♪」

「……本物なのか？」

「クスクス、ええ。といっても、創り出したのは私よ♪」

「……レティシアの能力は本当に規格外だな……」

「クスクス、貴方もね♪」

レティシアはミコトの言葉に面白そうにそう返した。

「それで？これにはどんな性能がつけられてるんだ？レティシアのことだ。ただのネックレスじゃないんだろう？」

「クスクス、ええ♪そのネックレスはね、それぞれの宝石言葉になぞらえた力が付与されてるわ。と言っても、ダイヤモンドは少し違うのだから」

「……というと？」

「クスクス、ダイヤモンドだけはね。宝石言葉の他に、もう一つ、貴方の身代わりになる役目があるの」

「……悪いが、レティシア。俺は……」

「クスクス、超越しちゃって死なないんでしょう？知ってるわ。……」

でもね、それでも、死ぬことはあると思わない?」

「……どういふことだ?」

ミコトは少し眉を顰め、レティシアを見据える。そのレティシアは、やはり笑顔のままである。

「クスクス、私が不老不死であるにも関わらず、貴方なら殺せるように、その逆も然りつてこと。まあ、私じや貴方は倒せても、殺すことは出来ない。けれど……貴方と相対する相手が、もし貴方と同じような力を持つていれば、話は別でしょう?」

「……レティシア、どこまで先を見据えてるんだ?」

「クスクス、さあね?でも、可能性がないわけじゃないはずよ?現に、貴方という例がある。例が一つでもあるのなら、そんな可能性だって否定は出来ないでしょう?」

「なるほど……その可能性を潰した結果、これか……」

「クスクス、まあ、気休め程度だけれどね。あ、因みに、ファイブライトに関して言えば、警告時には少し光って熱を持つから、気付く筈よ」

「……分かった。ありがとう、レティシア」

「クスクス、恩人であり友人だと思ってる相手に死なれたら、私も夢見が悪いもの♪」

レティシアのその言葉に、ミコトは少し驚いた表情をし、嬉しそうに微笑んだ。

「……本当に、ありがとう、レティシア」

ミコトのそのお礼の言葉に、レティシアは微笑みを返した。

こうして、悪魔が施した双六大会は、幕を下ろしたのだった。

## 第二百十八話

人が全力で走る時とは、一体どういう時か、どう答えるかはそれぞれである。それは約束に遅れそうになるとき、特売セールが始まる前、電車に乗り遅れそうなとき、そして――。

「はあ、はあ、はあ！」

――何かから、逃げるとき。

葵はこの日、黄昏時のこの時間、人里の裏小路を全力で駆けていた。先ほども述べた『何か』、葵を追っているのは黒く燃えるような赤い目を持つ大きな犬に、追われている。当然、追われるだけなら空を飛べる葵は有利で、いくらでも逃げる事ができる。にも関わらず、それをせずに逃げているのは、何も犬にハンデを与えているからではなく、『飛べない』からである。

今現在、葵は理由もわからず、飛べない状態にある。ハンデを与えるどころか、葵に不利な状況である。そして、今は葵の側にいつもいるルカや鬼灯、想起はいない。葵としては、絶体絶命な状態にあった。

\*\*\*

そもそもの始まりは夏真っ盛りなこの日、葵が慧音の頼みを受け、寺子屋で先生をし、その後貸本屋へと行った際、小鈴に誘われ阿求の家へと遊びに行った事から始まった。

勿論、慧音の頼みは役に立つならという思いで行い、小鈴の誘いには「私が急に行ったら迷惑なのでは……」と断るも小鈴に押し切られる形で行ったのだが、そこはなにもおかしな事はない、葵にとってのいつもの極々普通な日常である。少し違うといっても阿求の家に遊びにいただけなのだ。そして、話に夢中になりすぎて、帰りの時間が黄昏時になってしまっただけだった。

「葵さん、今は黄昏時ですから、帰りは気をつけてください」

阿求からの忠告も聞き、早く帰ろうと人通りが多い道を通り、神社へと帰る道を通っていた。そんな時、葵の耳に密かに聞こえる獣の唸り声。思わずその声の聞こえる後ろへと振り向けば、漆黒の毛に燃える赤い瞳を持つ大きな犬が、葵を見つめて唸りを上げていた。

初め、葵は人里を襲う為に訪れた妖怪か、もしくは餌をもらう為に来た野犬かと考えたが、しかし人里の人々は、まるでそんな犬などいないように見向きもしない。いや、それどころか、中にはその犬の体を通り抜ける人もいる。しかし、通り抜けたその瞬間、その人々の顔は青白くなり、巫女である葵から見れば、その犬が、通った人の生気を見境なく吸い取っていることがわかった。

その瞬間、葵は自分を狙っているのだとわかっていているからこそ、人が逆にならない路地裏へと走り、犬をおびき寄せた。

葵の狙いとしては、まず人のいない場所までおびき寄せたあと、结界と鬼呪封印を使って拘束し、その状態のまま妖怪の山へと返す算段だった。それが、自ら『罨』へと飛び込むことになることも知らずに。

少し走り、そして人がいないことを確認し、その場で结界と鬼呪封印で犬を拘束する。そこまでは葵の作戦通りだった。しかし、そこから一度飛ばうとしたが、葵は飛ぶことができなくなっていた。

「え!? な、なんで……」

もう一度と、今度は昔、初めて飛んだ時のように、自身が鳥となって飛びイメージを頭に浮かべながら霊力を流せば、しかし飛ぶことが出来なかった。

「なんで……どういふこと?」

葵は混乱した頭のまま考えようとするが、さらに葵にとって不利な状況が起こる。

黒犬が、黒色の弾幕を作り、それを飛ばした。そしてその弾幕が结界に触れたその瞬間、葵の结界がいつも容易く粉々に割れてしまったのである。

「!?」

葵はそれに目を見開いて驚きながら、四重结界を自身の周りに張り、頭の抱えるようにして座る。结界はやはり触れた瞬間に粉々に割れ、葵の頭上を真っ直ぐに飛んでいった。それを確認し、今度は黒犬をみれば、犬を縛っていた札が黒く染められ、地面へと全て落ちており、それに縛られていたはずの黒犬は、不気味で歪な笑みを浮かべながら、葵を見ていた。

それを視認した途端、葵は背筋がゾツと泡立ち、まるで跳ぶようにしてその場から走り出した。犬もその後を追う。そうして出来たのが初めの状況である。

葵も追われ始めて時間が経ち、少し頭が冷静になりましたが、だからこそ、不可解に思うことがあるのである。

(この裏小路、こんなに出口が見つからないものでしたっけ……?)

今の状況は葵にとっても好ましくなく、このままでは一方的にやられる状況にある。葵も反撃が出来るのであればしているのだが、生憎と彼女に攻撃の才能は皆無、反撃だろうが妖怪だろうが敵意ある獣だろうが、それが相手に怪我を負わせる行為は、カウンター効果のある結界以外、葵には出来ないことである。あの弾幕でさえ、補助効果をつけなければ打てないし、ましてそれで相手にダメージを与えられるわけでもない。そして、相手の能力を下げるような効果付き弾幕は、あの犬には効果がないことは実は実証済みである。

だからこそ、葵は迷惑をかけることを頭の中で謝りながら慧音の住む家へと向かうため、裏小路を出ようと必死に走っているのだが、いくら走れど出口は見えて来ず、葵の体力が減るばかりである。

それを理解したからなのか、黒犬はそこで後ろからあの黒弾幕を撃ち始めた。それも、葵にはもつとも効く、穢れが大量に詰め込まれた弾幕である。

葵自身も、巫女としてこの耐性のなさは駄目だろうと考え、なんとか耐性を付けようとしたが、結局それらは失敗し、そして現在の結界で防ぐ戦法が出来ていたのだが、今の相手はその結界さえいとも容易く壊す。葵を防ぐ壁は、防御の役割も果たせない紙も同じである。そんな状態だからこそ、葵はその弾幕に当たらないように避けながら走り続ける。そうして、ようやく目の前に出口が見えた。

(早く、早く出ないと！)

葵はそこからまた力を振り絞り、全力で駆け出す。それを弾幕を撃ちながら追う犬。その弾幕は、葵が出口を出る直前、葵の肩を擦ったが外れてしまい、葵も無事、裏小路から出ることが出来た。

\*\*\*

まず結果から言えば、裏小路を出たと思ったその場所は、葵が犬に追われて入った入り口で、結構な追いかけてこをした事を考えればすでに夜になっていてもおかしくないのだが、時間は黄昏時のまま、過ぎていなかった。

それに驚愕するも、葵の頭はすでに疲れから働かず、重い体を引きずって神社へと帰った。そんな葵を見れば、ルカも鬼灯も想起も心配し、普段の葵の仕事を率先してやり、葵は休むことになった。そして、その夜、神無月神社での縁側では、鬼灯がレティシアにその事を話していた。

「……なるほど。そんなことがあったのね」

「……珍しく真面目だな、レティシア」

月見酒をしながら話していたが、いつもはクスクスと胡散臭い笑顔を向けるレティシアが真面目に答え、鬼灯はそれに少しだけ茶化しを混ぜながらしかし同じく真面目な態度で返した。

「……レティシア、お前、人里で起こったこと、認識していなかったのか？」

「それは貴女もでしょう？……でも、そうね。人里でそんなことがあれば、ある程度は私も知る事が出来るけれど、今回はそれを認知出来なかったわ」

「私もだ。そして、お前が出来なかった以上、紫の奴もだろうな」

「もしかしたら、あの茜にも出来なかったかもしれないわね。というか、出来てないわね。存在を認識出来ていれば、まず間違いなく紫に連絡が行くはずなもの」

「……今、何が起こっているんだ？」

「……明日、その場所を調べましょう」

「……そうだな」

その次の朝、鬼灯とレティシア、そして紫は、葵が通ったという裏小路を調べに人里まだ来ていた。が、しかし三人はその入り口手前で足を止めて路地を見つめた。その先にあるのは、黒い毛並みの大きな犬の死体。

「……アレが、葵を襲ったという犬だろうか……死んでいるな」

「ええ。とても分かりやすく腐敗臭がしますもの。むしろ、これがどうやって葵を追ったのか、知りたいものですわ」

「……」

レティシアは犬に近付き、見つめ、情報を読み取り始める。

「……死んだのは外ね。いつかは分からないけれど……山の中、野犬ね。そこで寿命がくるまで生きてみたい」

「やはり、この犬がどうやって葵を襲ったのか、謎ね」

紫は珍しく真面目な顔で考え出した。

「……鬼灯から聞いたときは、『ブラックドッグ』かとも思ったけれど、その場合、そもそも死体は残らないし、何より葵を裏小路にずっと閉じ込めておくことも、ましてあの結界を紙同然に壊すことも出来ないわ」

「それが能力の可能性は？」

「否定はしないけれど、『ブラックドッグ』の能力の中に、『犬に憑依する』なんて意味の分からない能力があるかしら？」

「犬限定じゃなくて、他の動物も可能かもしれないわよ？」

「それもそうね。けれど、『ブラックドッグ』は妖精の一種。死ぬことはないし、消されれば少しの間出てくるのが出来なくなる。そんなリスクを負うようなこと、やはりするとは思えないわね」

「……レティシアはどう考えているんだ？」

鬼灯がずつと背を向けて犬を見続けているレティシアに問えば、真剣な声が返される。

「……そうね。私は、これは『ブラックドッグ』もどきだと思うわ」

「ブラックドッグ『もどき』？」

「ええ。正確に言えば、誰か、第三者にこの死体は使われ、操られ、その上で第三者は葵を閉じ込め、飛べなくし、逃げられないようにした。とても悪質な計画的犯行ね」

「……それ、葵の力の方が上だった場合、閉じ込めることも出来なかったぞ」

「ええ。けれど、戸惑いがなかったようね。つまり、相手は自分の方が葵の力より強いことを知っていた……まず、人里の人達のせいじゃな

いわね」

「可能性はあるが、しかし確かに、難しいな」

「となると……妖怪？」

「……」

紫の言葉に、レティシアは答えなかった。それは否定も出来なかったが肯定もできなかった。何より、レティシアの中で、何かが語りかけているのである。『これはお前も知ってるやつの犯行だ』と。

(……もしかして、『アレ』の所為？けれど、『アレ』が葵を狙う理由は何？)

レティシアは頭の中でぐるぐると回り続ける思考を止めずに、鬼灯に伝える。

「……鬼灯」

「なんだ？」

「……暫く、葵をちゃんと見ておいて」

「……分かった」

鬼灯はレティシアが何故そういったのか、その理由は聞かなかった。何故なら、この場で何より、レティシアが信用出来るからである。あのレティシアが、理由もなしに身内を疑わせるような行動を取らせる筈はないと。そして、身内である鬼灯にそれを言うのであれば、それは遠回りに紫にも手伝うようにとの達しでもある。

鬼灯と紫は互いに頷きあう。そして、その日は此処で解散となった。

その姿を、黒猫が見ていたことも知らずに。



## 第二百十九話

夏のとある日、レティシアは一人、日焼け傘もささず、パラソルの下にも入らず、紅茶を優雅に飲んでいた。

「クスクス、少し、雲の層が厚くなってきたわね……雨が降るのかしらね」

空を見上げ、雨が降るかもと予想するも、自身でパラソルを創れるレティシアは、何の準備もなしにまた紅茶を飲み出す。そこから少し時間が経ち、太陽の光が少しずつ減りだした頃、猫の鳴き声がレティシアのすぐ側から聞こえた。

「クスクス、猫？珍しいわね。普段ならこんなところに猫は来ないのだけれど……扉が開いた隙にでも入ってきたのかしら？」

少し嬉しそうに笑いながら、そのくらい毛並みの猫に手を伸ばし、触ろうとする……が、あと少し触れるというところで、その手は止まった。猫が不思議そうな顔で小首を傾げ見上げれば、そこには心底不愉快そうな表情を浮かべているレティシアがいた。

そのレティシアは、憎憎しげな顔で、猫に向かって声を掛けた。

「……その姿、不愉快だからやめてくれないかしら？……サタン」

『ククク、バレちゃったか』

二人の上の雲は、遂に日が差さなくなるほどに雲行きが怪しくなりだした。

\*\*\*

神無月神社では、丁度、洗濯物を干そうとしていた頃だった。

「……あ、天気か」

「これは、一雨来るな」

ルカと葵は空の天候を予測すると、干そうとしていた洗濯物を直し、干していた洗濯物も直しだした。

「夏はすぐに天候が崩れちゃうね」

「毎年のことだ。特に、今は梅雨に入り始める頃だしな」

「確か、外では空梅雨になる年もあるって、聞いたんだけどな……」

「それ、誰情報だ？」

「想起さんと早苗さんだよ？」

「なら、嘘はないだろうな」

二人はそう話しながらも、着々と洗濯物をたたみ、中に入れていくのだった。

\*\*\*

「……それで？手を出さないとやっていったのに手を出すという契約違反をした、悪魔界最低の悪魔が、何をしにきたのかしら？」

『ケケケ！何言ってるやがんだか。アレは契約でも、約束でもないだろう？俺様は一言も、約束するとも、契約するとも言ってないぜ？ただの予定だ、予定。予定が狂うことなんて、普通にあることだ』

レテイシアは紅茶を飲みながらサタンに問いかければ、サタンはそれを嘲笑しながら答えた。その反応はもちろんレテイシアにとつては不愉快極まりないものであり、今すぐにでも槍を突き立て、その身を刻み、チリ一つ残さない姿にしてやりたいという衝動を抑え込んでいる状態である。

（こいつには一つ、確認しないといけない事項がある……何より、こいつに私が何したって、意味がない）

レテイシアはそう思うことで一度冷静を取り戻し、一口だけ、すでに味がわからない紅茶を飲み、サタンに話しかけた。

「……葬をあの犬の死骸で襲ったのは、貴方かしら？」

『ククク、正解だ。ただ、俺自身があの死骸に入って襲ったような言い回しはやめてもらいたいなく。それを取りやめて、俺の力のほんの一部を入れてやったことに、もうちよつと感謝すべきだぜ？俺が入っていたら終わった物語が、もう少し続くことになったんだからな——そう、お前の大事な大事な旦那様、みたいにナア！』

レテイシアは、それを感情のない顔で聞いていた。  
いつもの楽しげな笑顔など、どこにもない。

——雨がポツリ、ポツリと、降り出した。

## 第二百二十話

雨が少しずつ降り出す中、レティシアとサタンはその雨を避けるように移動することもなく、その場で互いに見合い、話をしていた……レティシアは無表情で、サタンは嘲笑しながら。

「……………」

『ククク、最初、あの神社出会った時は思い出せなかったが、今じゃハッキリ思い出せるぜ？あの時のお前の顔。クククッ』

「……不愉快極まりないわね……そして悪趣味よ。人の……いえ、吸血鬼のトラウマに踏み込むだなんて。まあ、そのトラウマを作らせた張本人に何言ったって変わらないのかもしれないけれど」

レティシアは目を瞑り、紅茶を飲み、自信を落ち着かせようとする。しかし、それはサタンを更に楽しませる要因にしかならない。

『クククッ、だろ？うアア？なにせ、あの時、ヴラドとかいう吸血鬼を操ったのは俺で、そのまま人間を襲わせ虐殺したのも俺だ……が、最終的にそのヴラドを殺して止めたのは、お前自身だものなあ？』

「っ!!」

サタンの最後の一言に、カップの取っ手に罅が入る。

「ククク、今でも傑作だぜえ！あの時も雨が降ってたよなあ？」

\*\*\*

それは、遙か昔の話。幻想郷の外での話。

とある地域にて、人間虐殺が起きた。

「……起こしたのはヴラド卿。」

「さあ！血の雨を降らせ、私の欲求を満たせ！」

「……止めたのはレティシア・スカーレット。」

「やめて！もうやめてちょうだい！……ヴラドをこれ以上、貶めないで!!」

「……全ての元凶は、サタン。」

『……クククッ、やめろだあ？……こんな楽しいこと、そうそうやめれるわけねえだろ？見ろよ、あの人間共の恐怖の目を!!自身の大切なものを殺された怒りを!!そうだ、怒ればいい。俺に殺意を向ければいい

「!全ての負の感情を出しながら、死んでいけ!!」

「つ!!……ごめんなさい、ヴラド!」

「……殺したのは、レティシア・スカーレット。」

「……ごめんなさい……ごめんなさい、ヴラド」

「…………。…………。…………。…………。」

「…………」

\*\*\*

『そもそも、お前らは分かってなかったなあ? 何故、あんな事が起こったのか……クククツ』

「…………」

『ケケツ、それにしても、俺の蒔いた種が咲くのはまだまだ先だ。その間暇だなあ……そうだなあ』

サタンはそこで、ニヤリと笑う。そして、レティシアに向けて、それはもういい笑顔で、放った。

『お前の子孫、また殺そうか』

その瞬間、サタンは黒猫の体のまま空中へと蹴り上げられ、そして今度は魔法の森に向けて、横腹を思いつきり蹴られた。蹴った本人であるレティシアは、紅魔館の屋根に足をつけ、力を入れ、思いつきり魔法の森に向けて飛び、サタンの体まで追いつくと、踵落としてサタンの体を叩き落とし、地面にめり込む黒猫の体にゲイボルグの槍を突き立てた。

「……貴様……貴様だけは……絶対に許さない!!絶対だ!!」

レティシアの姿はいつの間にか本来の姿に戻っていた。その姿はつまり、全力で叩き潰すことの証。今、サタンはレティシアに倒され、殺された……はずだった。

『クククツ、ケケケツ、アツハハハハ!』

黒猫の体は槍を貫通し、普通は死ぬ。死ぬのが当たり前。しかし、

サタンはそれでも血反吐さえ吐かず、余裕淡々と笑い、嘲笑し、舐めた態度を崩さない。

『アハハハ！お前、意味がないと分かっているながらこれかよ!!無駄無駄!!あの頃の俺と、今の俺は違うぜ？昔ならまだお前にも俺を消せるチャンスはあった。だが、今はもうそんなものないぜ!どこの誰でもだ!!』

サタンは笑いながら続ける。

『サタン』である俺は、伝承通りの悪魔の側面も持ち、その上で、七つの大罪の側面も持つてる!そして何より、テメー等が必ず持つ負の感情の塊が俺だ。この俺様だ!そして、テメー等が見つけてくれたパラレルの世界。アレが繋がったおかげで、さらに俺は強化され、今じゃ他の俺が消えない限り、やはり俺は消えやしない!幾らでも俺は生き返る。お前等下等生物が、負の感情を持つ限り、永遠になあ!』  
槍に突き立てられた黒猫の姿は霞始め、一度消えると今度はレティシアと同じ背丈の男性――金髪、紅目の、レティシアにとっては見ええがあまりすぎる姿が、そこに現れ、レティシアの腕を掴み、木へと押さえつけた。

「……離しなさい」

『ハッ、嫌だね!テメーの絶望顔を間近で見たいんでなあ』

「なら今すぐその姿をやめなさい!!」

『クククツ、良いじゃねえか。お前にとってはもう二度と、お目見えできない素敵な殿方の姿だぜ?喜べ!絶望しなくとも良いぜ?何せ、今の俺は気分が良い』

「……貴方、外の世界で何人の人間の魂を食らったの」

『さてなあ?外の世界の人間は簡単に絶望してくれる。お陰で俺にとっては食料の宝庫だ。幾ら死んだところで、急に死ねば病気だ自然死だで片付けてくれる。クククツ、愉快だよなあ』

「っ!貴様っ!!」

そこで蹴りを勢い良く入れようとしたが、そこで姿は掻き消え、今度は離れたところに黒猫姿でレティシアを嘲笑いながら見つめている。

『クククツ、安心しろよ。お前の子孫はまだ殺さない。一番絶望が美味しいのは、幸せが最高潮の時、そこから落としてこそ、一番の旨味が出るんだ』

「……………」

『クククツ、お前、不思議だろ？この俺が、どうしてお前に付きまとうのか。その答えは至ってシンプル、かつ簡単な答えだ。——この世界での最強がお前だからだ』

「……………」

レティシアはそこで、大雨となっていた天候の中、グツと顔を顰め、サタンを睨みつける。

『クククツ、忘れんなよ？俺はお前が幸せを味わい続け、それが一番に到達したその時に、その幸せを奪ってお前の魂も貰ってやるよ。——せいぜい、油断しないことだなあ！アツハハハハ！』

雨が強く降り注ぐ中、黒猫の姿は消える。それを見届けたレティシアは、いつもの姿に戻ると、黒い雨空しか見えない空を見上げた。

「——姉上！」

背後から、いつもの男の声が聞こえる。レティシアを呼ぶ、弟の声が。

「…………クスクス、アルカ、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもない！雨の中、傘も差さずに…………それに、何故本来の姿にもなった？なにかいたのか？」

「クスクス、何でもないわ。ただ、ちよつと最悪の出会いをしただけよ」

レティシアはいつも通りそう笑う。しかし、アルカは空に顔をしかめると、一度その腕を強く引き、傘も手放さなのまま、今は小さな姉を抱き締める。

「…………クスクス、アルカ。どうしたの？急に甘えたくなつたとか？クスクス、それなら私は嬉しいのだけどね♪」

「姉上…………俺たちは家族だ。だから…………頼ってくれ」

「…………」

「姉上が強いの俺たちがよく知っている。だが、それでも、そんな貴

女が泣くほどに辛い事なら……俺たちも共に背負おう。そして、強くなる。姉上を守れるほどに、強く……」

レティシアは、その抱擁を甘んじて受ける。勿論、そこに甘い感情はない。しかし、それでも、救われる心があるのだと、レティシアは知っている。

「……ありがとう」

雨は未だに止まないまま、振り続ける。

\*\*\*

雨が降り注ぐ中、レティシアが突き刺した槍からも、赤い血が地面に注がれる。

「ごめんなさい……ごめんなさい、ヴラド……こうするほか……もう……」

その言葉が遠くに聞こえ始める中、ヴラドは、レティシアの耳の横に顔を持って行き、肩に預けるようにしながら、最期の言葉を、掛ける。

「……これで、いい。……お前は、正しい事をした。……幸せに、なれ。……我が愛しき妻よ」

雨の音が聞こえ続ける中、ヴラドは最期に、穏やかな顔で目を瞑ったのだった。

## 第二百二十一話

神社に遊びに来た幸多に手を引つ張られ、人里まで降りて来た葵。昔ならば人里の人間もいい顔をしなかったが、今は笑顔で向かい入れてくれるようになった。

「おや、おはようございます巫女様」

「あ、はい！おはようございますー！」

「お姉ちゃん！早く早く！一緒にお団子食べよう!!」

「はいはい、分かっていますから！そんなに手を引つ張られると、転けてしまいますー！」

葵は足がもつれそうになるのを必死になって防ぼうとしているが、幸多はそれを気にしておらず、元氣よく引つ張っていく。そんな時、幸多が目の前から歩いて来た白い着物の人とぶつかった。

「わっ!?!」

「おっと」

「幸多くん!?!」

幸多は勢いがつきすぎていたようだそのまま後ろに倒れそうになったが、それを前から腕を掴んで止める着物の人と、後ろから支えようと腕を出していた葵。もちろん、前方の方が動きが良かった為に尻餅をつかずにすみ、葵はホッと安堵の息を吐き出し、腕を掴んだ人物を見て目を丸くする。

「雪華さん!?!」

「ん?……あれ、葵じゃん。どうしたの?こんな人里の中で。買い物?」

雪華が首を傾げてそう問えば、葵は苦笑しながらも答える。

「えっと、実は幸多くんに誘われてお団子屋さんまで……」

「……幸多?」

雪華がその名前に珍しく目を丸くすると、腕を掴んでいた子供を見つめる。

「?……どうしたの?白い着物のお姉ちゃん」

幸多は首を傾げながら雪華を見ると、雪華は幸多の目線に合わせる



ように膝を折る。

「……上の名前は？」

「え？」

「あんたの上の名前。お姉ちゃんに教えてくれない？」

雪華のその問いに幸多も葵も首を傾げ、互いに目を見合わせると幸多は首を傾げながらも答える。

『春風』。僕の上の名前は『春風』だよ？」

「っ……そっか」

幸多のその名前を聞き、雪華はその顔に分かりやすい動揺を浮かばせ、直ぐにその顔を下に向け、顔を隠すように手で覆う。

「……えっと、お姉ちゃん、どうしたの？」

「いや、なんでもない。ちよつと、知り合いと同じ名字だったから、動揺しただけだよ……心配かけちゃってごめんね」

幸多が心配そうに雪華を見れば、雪華は笑顔を浮かべたままその幸多の頭を優しく撫でる。その瞳には優しい気な色が浮かんでいた。

(……雪華さん)

葵は雪華の過去も知っている。だからこそ、幸多に会えばこうなると、予想はついたはずなのだ。けれど、今まで会う事はなかった為、油断していた。油断しなければ良かったと思えどもう遅い。

「あのっ！雪華さん、私……」

「あんたの所為じゃないから気にすんな。というか、こんなことまで自分の所為にして自分を責めなくていいよ。こんなのただの偶然なんだから」

「けど……」

「気にしないでいいって。悪いけど、そういうの……」

其処で雪華は口を止め、息を一つ吐き出す。

「……ダメだな。人に当たろうとするなんて、私も冷静になれてない」  
「雪華さん？」

「……悪い。何時迄もこんな気にしてたらいけないのに……あの選択をしたのは私なんだから」

葵はそれで雪華が葵に『悪い』と思うような『なにか』を言おうと

したのだと理解した。

「……言ってくださって大丈夫です。私は気にしませんから」

「……じゃあ言うけど、そういうの、ウザいよ」

「……………」

「勿論、それがあんたの良いところだった理解はしてる。其処が好かれてる点だつてね。私だつてそういうあんたを好いてるけど、こつちが気にしてないっていうんだから、気にしなくていいんだよ。それを言われたら引くことを覚えな」

「……すみません」

葵はちゃんと覚悟の上で言うように言っただけだつたのだが、どうやら予想以上に傷ついたらしい。悲し気に目を伏せてしまい、雪華は溜息をつく。

「……だから言いたくなかつたんだよ。こんなの、ただの私の八つ当たりなんだから」

「いえ、でも……」

其処で幸多が雪華の腕を引いた。

「?どうした?」

雪華が幸多を見れば、幸多は頬を膨らませていた。

「葵お姉ちゃんを虐めないで!」

「……幸多くん?」

「葵お姉ちゃんは僕の友達で僕のお姉ちゃんなんだから!お姉ちゃんを虐めるなら僕も相手をする!」

そう言つて雪華をポカポカと叩き出したが、雪華には全く聞いてない。しかし、その行動を見ていた雪華はポカンと見つめていた後、クスリと笑い、幸多の頭を撫でる。

「ふふ、ごめんね。そうだね、私が悪かったよ……葵もごめんな?酷いこと言つた。とか言い過ぎた」

「あ、いえ。私は全然気にしてないですから!」

それに雪華は肩を竦めながら笑うと、葵と幸多の手を取った。

「まあ、お詫びといっちゃなんだけど……お団子屋さんに行くつもりだつたんでしょ?奢るよ」

「いいの!? やったー!」

「え? でも、ご迷惑じゃ……」

「気にしないでいいって。それじゃあ、行こっか!」

そう言っつて引つ張る雪華。その顔はとても嬉しそうな幸せそうな顔で、葵から見てもその顔は彼女が浮かべるにはとても珍しい表情だった。勿論、理由を知っている葵はそれに一人、嬉しそうに笑っていた。

(彼女が今度こそ、後悔をしないような選択を出来ますように……)

葵一人、そう願いながら雪華に腕を引かれ、団子屋へと向かって行くのだった。

## 第二百二十二話

全てが白銀に染まった世界となった12月。そこに、幻想郷では珍しい、茶色のダツフルコートと白いマフラー、青いジーンズを着た男性が、神無月神社の階段を上がっている。この男、服から考えても分かる通り、元は外の世界に住んでいたのだが、先程、この幻想郷に迷い込んでしまった。その為、ここがどんな所なのかさえ、把握していない。

階段を上りきった先、神社を見つけ、彼は数少ない財布の中の小銭を一枚入れ、元の世界に帰りたいと願った。しかし、そんな事で帰れるわけもなく、また、鬼灯は豊穰神であるため、豊穰祈願ならば兎も角、帰還の願いは彼女には届かない。どころか、この願った男は、神なんてものを信じていない。願ったところで、叶えられた事など一度もないからだ。

最後に溜息を吐いて踵を返したその時、視界の端で何かが動いた。それが何かと確認するために右側を見れば、白い兎がいた。その兎は鼻をヒクヒクとさせると、そのまま右側側へと跳ねていった。男はそんな兎がなんとなく気になり、その後をついて行く。そして、右の角を曲がったその先には、ピンクの花弁がひらり、ひらりと舞い落ち、そんな中で、白い兎達に餌を与えている、優しい笑みを浮かべた黒がよく似合う美しい金髪を持つ美しい少女がいた。

黒いコートに黒の中折れ帽子、黒いロングスカート。全て黒一色であるのに、それが自然と似合っている。彼からしたら、『黒』という色は、彼女のためにあるのではないかと錯覚する程に――そんな彼女に、見惚れていた。

此方を見てほしい。兎ではなく、自分に気づいて欲しい。

その願いは、彼が一步、積もった雪を踏みしめた事で、叶うこととなった。音に気付き、兎は草叢に逃げ隠れ、少女は男へと警戒心を持った目を向け、ゆっくりと、立ち上がる。

「……誰だ？お前は」

その少女の声さえ、男には心地がいい音色で、男はそんな彼女に、既

に一目惚れしていた。周りの美しい銀色世界さえ、その少女には見劣りする。

だからこそ、彼は、警戒していることに気付き、その場で彼女へと跪き、驚いた表情をした彼女へと、男、『犬山 総司』は言った――。

「――俺と、付き合ってください!!」

「――おい、なんども断っているのに、なんで何度も来るんだこいつは」

現在、此処は博麗神社の敷地内にて、ルカがうんざり顔で、数日前に出会った男から告白を受けていた。この男、どうやら初対面のあの日からルカへの恋心は薄れておらず、なんども跪き、告白し、そしてルカから振られる毎日が続けており、それを見ていた霊夢は大爆笑、魔理沙はニヤニヤ顔、葵はオロオロ、早苗は乙女な顔でキヤーキヤー叫んでいる。現在、男はこの告白している人物一人である。

「大体、なんで私が此処にいると知っているんだ」

「神無月神社の想起さんから教えていただきました!!」

「想起、今回ばかりは恨むぞ……」

ルカは額を抑えて溜息を吐く。

「大体、なんで私なんだ？葵……は霖之助がいるから兎も角、鬼灯だっているだろ……」

「鬼灯さんよりも貴方の方が美しい!!全ての美が詰まっているのは貴方です!!それに、神様というのもあって、畏れ多いというか、威厳ありすぎて近寄れません!!」

「あれ、こいつの話だと、ちよつと前まで神を信じてなかったんじゃないか?」

「それが、私が此処の説明をして、妖怪の存在さえ否定しかけていたから、隠れていてもらっていた鬼灯に姿を現してもらって、狐の状態から人になってもらったら、信じてくれました」

「凄い簡単に信じたわね」

葵と霊夢の会話の間にも、ルカと総司の会話は続いている。それも、総司からの一方的な愛の告白を、ルカが全て一蹴している。

「はあ……もう、誰か助けてくれ……私は疲れた」

「いやよ、面白いんだから続けなさいよ」

「そうだぜ！それに、一回付き合うのも良いかもだぜ？もしかしたら、ルカがこいつの魅力に気付く可能性だって……」

「ない」

「一刀両断ですか!?!」

「それでも、僕は、諦めません!!」

総司は拳をグツと作り、ルカに向けて宣言すれば、ルカは嫌そうな顔をする。

「なんなんだこいつ……想起と早苗以外は皆、こんな感じなのか？」

「別の幻想郷だと、ミコトさんとか、あとは如月さんとか、色んな人がいますから……」

「竜希みたいな道化師みたいなの？」

「竜希みたいなロリコンシヨタコン変態紳士みたいなのか？」

「悪意ある言い方やめませんか？あと、『ろりこん』と『しよたこん』ってなんですか？」

「……おい、霊夢、魔理沙。そこになおれ」

「そうですね！お二人共、純粋な葵さんに何を言ってるんですか!?!」

葵が首を傾げて二人の言葉の意味を聞けば、二人はマズイといった顔をし、ルカは般若の顔で、早苗は怒り顔で二人を叱りつける。そんなルカと早苗を見て、霊夢と魔理沙は互いに顔を見合わせると、飛んで逃げていった。

「あっ!?!逃げました!!」

「待てお前達……!!!」

その後をそんな叫びを上げながら飛んでいくルカと早苗。葵は首を傾げつつ、共に取り残された総司を見る。

「すみません、総司さん。結局、こんな事になってしまつて……」

「いやいや、俺は別に良いよ。いつだって、俺はあの人に告白出来るし。……それにしても、妖怪って本当にいたんだな……」

「……」

総司が感慨深げにルカ達が消えていった方を見る。それに、葵は顔を俯かせる。彼女は、ルカと、総司の過去を見たからこそ、理解して

しまった。この二人が、結ばれることはない事を。

(昨日、ルカからは総司さんをどう思っているかは聞いた。総司さんも、嘘を言っていない。言ったら、ルカが反応するし……。ルカは、無意識に分かってるんだ……。総司さんの血筋が)

ルカは葵に言っていた。総司のことを、気に入らないと。近付かれるだけで、声を聞くだけで、嫌悪感しか抱かない。殺意が湧く、と。そして――時折、無意識に、氷のナイフを、小さいながらに作ってしまっている、と。

「俺、生まれは田舎だったけど、大人達は皆、子供に言っただけで聞かせるんだぜ? 『吸血鬼は実在する。見つけたら殺せ。特に、氷を操る吸血鬼は祖先の仇』って。ズーッとそんな大人達を馬鹿にしてきたけど、妖怪がいるなら本当にそんな吸血鬼、いるのかもな」

「……もし、本当にいたとしたら」

そこで、葵は問う。彼は知らない。ルカが、彼の祖先の仇である事を。ルカが、氷を操れる事を。だからこそ、もし、それを知ったら、彼はどうするのか。それを葵は知りたかった。

――彼女は願う。

「ん、本当にいたら……」

――ルカが昔に願い、そして諦めた事を。

「やっぱり、会ってみたいなく。そして、話してみたい。どうして、俺達の先祖を襲ったのか。こつちとしては敵だって認識みたいだけど、もしかしたら、こつちが何かして、それで襲うしかなかっただけかもしれないしさ」

――彼が、言ってくれることを。

## 特別編くクリスマスく

聖夜の夜、と言われるクリスマスの日。

そんな日の当日の夜、紅魔館でパーティーが行われていた。

「それでは！今宵のパーティーを楽しみなさい！」

レミアアの宣誓を合図に、そこかしこに並ぶ豪華絢爛な食事達に人間も妖怪も関係なしに駆け寄って行った。

「……あそこは養豚場か？」

「せっかくの聖夜の夜というのに、その言葉で全てがぶち壊しだぞ。ルカ」

パーティーが行われている大広間の片隅に、ドレスを着た葵、ルカ、鬼灯が集まってその様子を眺めていた。

想起はスーツを着て早苗達の所にいる。

「ルカ、養豚場という言い方はダメだよ。というより、人や妖怪を貶めるような言い方は……」

「……はあ。聞こえてないから良いと思うがな」

「そういう問題じゃ……」

空色のワンピース型のミニドレスを着た葵はルカに尚も言い募ろうとするが、其処に、赤いワンピース型の同じくミニドレスを着て髪を纏めて上げている霊夢がやって来た。

「葵、あんたも食べて……ないわね」

「あ！霊夢！とつても綺麗だよ！」

「ありがとう、葵。そんな葵もね」

「いえ、私は霊夢や鬼灯、ルカにも劣ってますよ……」

葵は少し照れながらそう言った。

霊夢はそれを見てからルカの方に顔を向けると、その姿は漆黒のシンプルなドレスを着て、その長い金髪を珍しく一つにして、お団子に上げていた。腰のあたりには黒いリボンが一つついている。

「……あんた、案外、楽しみにしてたのね」

「何を勘違いしているんだ。お前の所の居候と、その友人がいきなりやって来たかと思ったら、急にこんな服と髪にさせられたんだ！」



「なら解けば良いじゃないの、髪ぐらい」

「……私は、こんな髪型にしたことなんてないから、解き方なんて解らないんだ。髪を切りたいと思っっているわけでもないから切れないしな……」

ルカはため息一つ吐いた。その顔には何処となく疲労が見える。

「……あんたも被害にあったわけか……鬼灯は？」

「レティシアに手伝って貰ったんだ。私は別に、こいつの様に抵抗があるわけではないからな」

そう言った鬼灯は人型の状態である。

その状態で着ている服が、白緑色のスレンダーなドレスを着ていた。こちらは団子にされてはいないが、まとめられた髪を編み込みみされていた。

「ふーん……」

「そういうお前のそのドレスは、やっぱり雪華の友人が作ったものか？」

「そうよ。織姫が作ってくれたものよ……あの付喪神、着物とかしか作れないかと思っただけど、そうじゃなかったみたいで驚いたわ」

「だな……正直、私も着物しか作れないのかと思っただけ……」

そんな話をしているとところに、独特の笑い声を携えて、白い甘口リの服を着たレティシアがやって来た。

「クスクス、大切に使われた付喪神ならあり得ないことではないでしょうね♪」

「レティシア……あんたまでいつもと違う服装なのね」

「クスクス、まあね♪今夜ぐらいは良いでしょう？」

レティシアはそう言うと、その場で綺麗に回った。

「まあ、服が変わったことに対して何か言うことはないけど、その服でその口調にすごい違和感が……」

「そうですね……」

霊夢の言葉に葵もちよっと同調すると、レティシアは少し考えてからニコリと笑う。

「それじゃあ、このパーティーの間は、この口調でいくね！お姉ちゃん

たち！」

「「!?」」」

その、いつもの口調と180度違う子供らしい口調に、その場の四人が何かおかしなものを見る目でレティシアを見るが、それに意を返した様子もなく、レティシアはその場を離れていった。

「……ああ、これは何処かで何か、問題が起こりそうな気がしてきたな……」

「……同感だ」

その鬼灯の言葉にルカも同調する。

そして、その言葉は現実とな。子供らしい口調で子供らしい振る舞いをするレティシアに、スカーレット兄妹以外の使用人達（絶月と朱鳥と紅葉を除く）一同は、激しくうろたえていたのであった。

## 特別編く元旦く

大晦日の日、鐘の音を108回聴き終えた日の朝。

遂に新たな年が始まるのである。

「クスクス、さてさて、今年の博麗神社はまあまあ人が来ているのね♪」

空を飛んで鳥居を潜ってやって来たレティシアは、新年の挨拶と初詣をしに、紅魔館一同を連れてやって来た。

そんなレティシア達は何時もの洋風の服とは違い、振袖である。

「本当ですね、お姉様。人間達がまあまあいますね。ですが、これも進歩です」

そう言つて日傘を差して直射日光に当たらないようにしているレミアは、梅と鶴の柄が描かれた紅い振袖を着ている。

「すごいすごい！お兄様！人間つて、こんなにいるのね！凄いわー！」  
「そうだな。だが、本当はもっとこれ以上にいるんだぞ、フラン」

レミアの近くでは、アルカとフランが仲良く話していた。アルカはいつも通りの服だが、フランは白百合が描かれた紅い振袖を着ている。

「クスクス、さて、初詣なのだから、早く行きましようか」

そう言つてレミア達に手を差し出したレティシアは芍薬柄の漆黒の振袖を着て、長いその金髪の髪を上で纏めており、その所為か、うなじが見えている。

もしレティシアのうなじに見とれている者がいれば、レティシアの年齢がその見た目相応だった場合、確実にロリコン認定されていただろう。

「……あの、お姉様？この手は何でしょうか？」

レミアが純粹な疑問をぶつけると、レティシアはそれにニコツと笑つて答える。

「クスクス、迷子防止♪この人数だもの。私達は身長的に小さいから、迷子にならないとも限らないじゃない？」

「お姉様！わ、私もお兄様ももう子供じゃありません！」

「そうです姉上！俺達は子供じゃ……！」

「クスクス、私からしたらいつまで経っても可愛い愛子だけれどね♪」

「う〜！」

レテイシアの言葉に少し照れ、そして恥ずかしくなったレミリアは、振袖を着たままその場に蹲ってしまふ。

「私、お姉様と手を繋ぎたい！」

「クスクス、良いわよ、フラン。手を繋いで一緒に行きましようか♪」  
「うん！」

そして、アルカとレミリアを余所に、フランとレテイシアはお互いに手を繋ぎ、嬉しそうに笑いあっていた。

「あくらら、レミリア様もアルカ様も素直じゃないな〜」

「それなら、ユニ、私とも手を繋ぐかしら？」

「迷子になっても見つけられる自信あるけど、姉さんと手を繋ぐのも嬉しいから繋いでいいなら繋ぐよ〜！」

「……すごく純粹に喜ばれて私も嬉しい限りだけど、ごめんなさい。罪悪感も凄いわ」

レテイシア達の後ろでは、ユニとペスがレテイシア達を見ながら話をしていた。ちなみに、ユニは百合の周りに金粉で縁取りされた、白い振袖。ペスは菖蒲柄の白い振袖を着ている。

因みに、その後ろにいたシファとギルはいつも通りの執事服である。

「……別に振袖を着るのは構わないのだが、如何にも慣れないな……」  
「そうか？随分と似合ってるが？朱鳥は。流石は一番近くで見ている絶月が柄を決めただけあるな」

「……チツ」

「あはは。くおんちゃんのは僕が決めたけど、嫌だったのかい？」

「え、い、いや！そんな、嫌だったわけじゃ……な、いさ」

「そっか！なら嬉しいよ〜！」

（振り回されてるな……）

そんなユニ達の後ろでは、絶月達が話をしていた。

因みに、絶月と紅葉はやはり執事服だが、朱鳥は鳳凰柄の朱い振袖。くおんは藤柄の薄黄色の振袖を着ている。

「それにしても、新年早々から咲夜達は残念ですね……仕事で立て込むとは」

「本来は私達もしないといけない事だったのに、すごく申し訳ない……」

「クスクス、貴方達が付いてきてくれたのは、私の我儘に付き合ってくれたから、でしよう？それに、咲夜達は、明日二人でデートついでの初詣に来るそうだからね。明日は私も今回のお返しとして手伝うわ」  
レティシアの言葉に従者一同がダメというように首を横に振ると、次の話題に移る。

「あと、マリアも残念だよね。熱出しちゃったし」

「しよがないでしょ。蛇は冬の間は冬眠してるけど、冬眠は逆に体に負担が掛かって、寿命が短くなる。それを本人も分かっているから、冬の間、部屋を暖かくして過ごしやすくしているんだから」  
「それでも、体が弱い点は如何しようもないからな……」

アルカの言葉に一同がもう一度頷き、話を終わると参拝の列に並んだ。

と、其処で近づく者が一人。

「よっ！おチビ！」

「チビじゃないと何度言えば分かるんだ雪華！」

現在、博麗神社に居候している雪華である。

「せつちゃん、いきなり移動して如何したの……あ、アルくん！久しぶりだね！」

「ああ、織姫か……本当に、此奴の親友であるお前が真面で良かった……」

「ごめんね？せつちゃんがまた意地悪したみたいで……」

「意地悪じゃない！これは弄りだ！」

「俺を弄って遊ぶな！……で、今日はいつもの着物じゃなくて、振袖なんだな」

「あつたりまえ！今日は元旦だよ？着物でもいいけど、やっぱり振袖

でしょ！」

そう言つて雪華が見せびらかしているのは、自身が着ている露草の色をした蝶々柄の白い振袖である。

「それはやっぱり織姫が作ったのか？」

「まあね？これを作つてくれたから、お金渡して買ったの」

「私は贈り物として渡したつもりだったのに……」

「そんな織姫は撫子柄の淡いピンクの振袖か……似合っているな。お前らしい」

「ふふ、ありがとう、アルくん。でも、それ以上に似合っている子がアルくんの隣にいるから、その子も褒めてあげてね？」

「大丈夫だ。来る前にすでにベタ褒めだ」

「お、お兄様!!」

アルカの言葉にレミリアは顔を紅くして声を上げるが、アルカと織姫からは生暖かい目を向けられるだけだった。

それでカリスマブレイクしたレミリアは少し『うー』と唸っていたが、ふと気付いたように周りを見た。

「そういえば、霊夢と葵は何処にいるのかしら？」

「ああ、霊夢は御守り販売。珍しく巫女の仕事の一つをしてるね。あの青い方はここ以上に参拝客来てるんだろうから、向こうで巫女の仕事をしてんじやない？」

「ああ、成る程ね……」

「というか、お前はいい加減にあの青い方の名前を言ったら如何だ？」

「それ人の事言えないじゃん、あんた」

雪華はまるで如何でもいいと言うように欠伸を一つすると、アルカ達にあるものを見せ始めた。

「アルカ達は参拝したら帰んの？」

「いや、このあと、人里にでも行つて甘味でも食べようかと考えている所だ」

「クスクス、ちなみに提案元は私ね♪」

「ふくん。ならさ、余興の一つとしておみくじ引いてみたら？」

「おみくじ？今年の運勢がうんたらかんたらつて書いてあるあの紙

？」

「そうそう。因みに私は中吉」

「私は大吉だけど、商売繁盛が上手くいかなそうなこと書いてあって、本当に大吉と捉えていいのか分からない……」

「ああ、あるよね、そういうおみくじ」

其処でさも分かるように頷くユニを呆れたように横から見るペス。

「まあ、余興としてさ、やってみたら？案外良いこと書いてあるかもよ？……アルカの場合は特に恋愛の部分とかさ♪」

「……」

雪華はそう言ってアルカの方に顔を向け、ウインク一つすると、アルカは考えるように顎に手を当てる。

「……ちよつと待つて。ねえ？雪女。その発言、まるでお兄様に好きな人がいるみたいに聞こえ……」

「さつてと！織姫！私達は先に甘味を食べに行こつか！もち割り勘で！」

「うん！良いよ！行こつか！」

雪華の発言とアルカの反応から、レミリアは予測を口に出していると、それを阻まれ、雪華と織姫は人里の方へと飛んで行ってしまった。

「……さて、行くか」

「クスクス、そうね♪子孫繁栄でも願おうかしら♪あ、でも先に恋愛成就ね♪」

「……姉上、俺をからかわないでくれ……」

「クスクス、ごめんなさいね♪さ、順番だから参拝するわよ♪」

「待つてください！さっきのは如何いうことかの説明を……！」

レティシアの言葉を受け、全員が歩き出すのを見たレミリアは、渋々ついて行き、参拝を終え、おみくじを引いた。

「クスクス、皆んなどうかしら？私は大吉よ♪」

「あ！お姉様！私も大吉！」

「私は末吉く……末吉って良いの？悪いの？どっち？」

「私は中吉ね……ギルとシファは？」

「俺も末吉だな。シファは……シファ？」

ギルが其処でシファの方に顔を向けると、さめざめと泣いているシファの姿が。

「え、何で泣いてるのシファ!？」

「ど、どうしたシファ!?!何があった!?!」

「うう……僕、凶です……」

それで理解した三人は、シファを慰め始める。

「……お前は良いのか?朱鳥」

「私は別に良いさ。運勢が良かろうが悪かろうが、結局は私自身の行動の問題だ」

「……そうか」

「くおんちゃんもしくなくていいの?」

「私も別に。あんまり興味が無いんだ、こういうのに対して」

「ふくん、そつかく。アルカ様達はとうですか?」

紅葉の言葉を聞き、まだ開いていなかった二人が紙を開き、結果を見る。

「……大吉!」

「クスクス、つまり、私達兄妹は大吉だったわけね♪それで?くじの内容は?」

「えつとですね……」

「……」

くじの内容を読んでいた二人はそれぞれ固まってしまった。

しかし、アルカに何かしら変化はなかったが、レミアアに関しては顔を真っ赤にして、紙とアルカを見比べていた。

「……クスクス、大体は内容は分かったわ♪さて、大吉組であんまり良くないことが書いてあるとかじゃないなら、そのくじは持って帰りましょうか。それから、シファ達は其処に結んできたなら良いわ」

「あ、はい。少々お待ちください」

「ほらシファ!くじ結んでこよう!」

「……そうですね、結びましょう!」

「よっし!」

四人がくじを結びに行くのを見ると、レティシアは二人のくじを盗



み見て、優しい笑みを浮かべた。

(……このくじが、叶うと嬉しいわね)

そんなレティシアの目に見えた内容は、二人とも一緒であった。

『恋愛……勇気を出し、行動すれば成就する』